

栃木県埋蔵文化財調査報告第 360 集

東谷・中島地区遺跡群 14

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

権現山遺跡南部・磯岡遺跡

(SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) (SG9 区)

(第 1 分冊)

2013. 3

栃木県教育委員会
財)とちぎ未来づくり財団

とう や なかじま
東谷・中島地区遺跡群 14

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

ごんげんやま いそおか
権現山遺跡南部・磯岡遺跡

(SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) (SG9 区)

(第1分冊)

2013.3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ未来づくり財団

序

東谷・中島地区遺跡群は、栃木県の中央部、宇都宮市南部から上三川町北部に位置しています。この地域は、なだらかに広がる低台地と肥沃な沖積地に恵まれているため、杉村遺跡・立野遺跡・西刑部西原遺跡・砂田遺跡などの原始・古代の集落跡と、東谷古墳群・中島笹塚古墳群・磯岡北古墳群・琴平塚古墳群をはじめとする多くの古墳群が所在します。

このたび、独立行政法人都市再生機構による土地区画整理事業に先立ち、事業地区内に所在する12遺跡の取り扱いについて、関係機関と協議の上、平成6年度から記録保存を目的とした発掘調査を行ってきました。

このうち、権現山遺跡及び磯岡遺跡の発掘調査では、古墳時代の集落跡や権力者の居館跡が発見され、遺跡周辺に所在する古墳築造の背景を考える上で貴重な発見となりました。さらに、集落跡や居館跡などから見つかった特殊な須恵器^{すえき}、陶質土器^{とうしつどき}や鍛冶遺構^{かじ}は貴重な出土例といえるものです。

本報告書は、権現山遺跡及び磯岡遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が、県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助となるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました、独立行政法人都市再生機構、宇都宮市教育委員会、上三川町教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

栃木県教育委員会

教育長 古澤 利通

総目次

〔第1分冊〕

序

目次・検索表・例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

第2節 調査の方法

第3節 調査の経過

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

第2節 歴史的環境

第3章 調査区の配置と標準土層

第1節 磯岡遺跡における調査区の配置と概要

第3節 権現山遺跡・磯岡遺跡と周辺の土層

第2節 権現山遺跡における調査区の配置と概要

第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物

第1節 縄文時代遺構外出土遺物の追加報告

第2節 東谷・中島地区遺跡群発掘調査に係る石器石材鑑定
- 権現山遺跡 -

第5章 権現山遺跡 SG10 区

第1節 縄文時代の竪穴建物跡

第2節 縄文時代の土坑

第3節 弥生時代の土坑

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

第5節 古墳時代の竪穴鍛冶遺構

第6節 古墳時代の鉄関連遺物

第7節 古墳時代の居館外郭の溝状遺構

第8節 古墳時代の溝状遺構

第9節 古墳時代の井戸

第10節 古墳時代の円筒形土坑

第11節 古墳時代の土坑

第12節 古墳時代の低地遺物包含層

第13節 古墳時代の柱穴状土坑

第14節 古墳時代の遺構外遺物

第15節 平安時代の竪穴建物跡

第16節 平安時代の土坑

第17節 古代の道路跡

第18節 中世の井戸

第19節 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 で出土
した曲物桶の材質と付着物

第20節 中世の柱穴状土坑と中央部・北部柱
穴群

第21節 中世の土坑

第22節 遺構外出土の中世遺物

第23節 中世～近世の溝状遺構

第24節 近世の溝状遺構

第25節 近世の土坑

第26節 時期不明の掘立柱建物跡

第27節 時期不明の井戸

第28節 時期不明の溝状遺構

第29節 時期不明の柱穴状土坑

第30節 時期不明の土坑

第31節 時期・性格不明の遺構

〔第2分冊〕

第6章 権現山遺跡 SG2 区

第1節 古墳時代の土坑

第2節 古墳時代の自然流路および周辺遺物

第3節 時期不明の溝・集石遺構

第4節 時期不明の土坑

第7章 権現山遺跡南部 SG2 区・SG10 区・SG15 区周辺の古環境

第1節 分析結果の概要と考古学的評価

第2節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区のテフラ分析

第3節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の植物珪酸体分析

第4節 権現山遺跡 SG2 区・SG15 区の花粉分析

第8章 権現山遺跡 SG5 区

第1節 古墳時代の居館（居宅）関連施設

第2節 古墳時代遺構とテフラとの関係

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

第4節 古墳時代の遺物集中地点
（祭祀遺構）

第5節 古墳時代の性格不明遺構

第6節 古墳時代の溝

第7節 古墳時代の土坑

第8節 低地部の古墳時代遺物包含層

第9節 遺構外出土の古墳時代遺物

第10節 権現山遺跡 SG5 区低地部の指標テ
フラと古環境

第11節 平安時代の土坑

第12節 中世～近世の土坑

第13節 中世～近世の溝状遺構

第14節 時期不明の掘立柱建物跡

第15節 時期不明の柵列

第16節 時期不明の溝状遺構

第17節 時期不明の井戸

第18節 時期不明の土坑

第19節 時期不明の柱穴状土坑

第9章 権現山遺跡 SG9 区

第1節 古墳時代の土坑

第2節 時期・性格不明の遺構

第3節 時期不明の溝

第4節 時期不明の土坑

第5節 低地堆積層の調査

第6節 西区の遺構外出土遺物

第10章 権現山遺跡 SG15 区

第1節 古墳時代以降の自然流路

第2節 時期不明の土坑

第3節 時期不明の溝

第11章 磯岡遺跡 SG9 区

第1節 古墳時代の竪穴建物跡

第2節 時期不明の溝状遺構

第3節 時期不明の焼土集中地点

第4節 時期不明の土坑

第12章 まとめ

第1節 縄文・弥生時代

第2節 古墳時代

第3節 奈良・平安時代

第4節 中世

第5節 近世

参考文献・写真図版

第1分冊 目次

序	iii
目次	v
権現山遺跡南部 遺構一覧・検索表 (第1分冊)	xi
例言	xvi
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	3
第3節 調査の経過	5
第2章 遺跡の環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	13
第3章 調査区の配置と標準土層	28
第1節 権現山遺跡における調査区の配置と概要	28
第2節 磯岡遺跡における調査区の配置と概要	31
第3節 権現山遺跡・磯岡遺跡と周辺の土層	33
第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物	35
第1節 縄文時代遺構外出土遺物の追加報告	35
第2節 東谷・中島地区遺跡群発掘調査に係る石器石材鑑定 - 権現山遺跡 - パリノ・サーヴェイ株式会社	37
第5章 権現山遺跡 SG10 区	43
第1節 縄文時代の竪穴建物跡	43
第2節 縄文時代の土坑	49
第3節 弥生時代の土坑	52
第4節 古墳時代の竪穴建物跡	53
第5節 古墳時代の竪穴鍛冶遺構	294
第6節 権現山遺跡の鉄関連遺物と自然科学分析	301
5.6.1. 鉄関連遺物の追加報告	301
5.6.2. 中性子放射化分析および自然科学分析結果の概要と考古学的評価	302
5.6.3. 権現山遺跡から出土の鍛冶関連遺物及び鉄製品の自然科学的分析 平井昭司 (東京都市大学)	303
第7節 古墳時代の居館外郭の溝状遺構	311
第8節 古墳時代の溝状遺構	317
第9節 古墳時代の井戸	345
第10節 古墳時代の円筒形土坑	345

第 11 節	古墳時代の土坑	348
第 12 節	古墳時代の低地遺物包含層	362
第 13 節	古墳時代の柱穴状土坑	366
第 14 節	古墳時代の遺構外遺物	368
第 15 節	平安時代の竪穴建物跡	370
第 16 節	平安時代の土坑	372
第 17 節	古代の道路跡	373
第 18 節	中世の井戸	374
第 19 節	権現山遺跡 SG10 区 SE-569 で出土した曲物桶の材質と付着物 パリノ・サーヴェイ株式会社	383
第 20 節	中世の柱穴状土坑と中央部・北部柱穴群	387
第 21 節	中世の土坑	395
第 22 節	遺構外出土の中世遺物	396
第 23 節	中世～近世の溝状遺構	397
第 24 節	近世の溝状遺構	398
第 25 節	近世の土坑	405
第 26 節	時期不明の掘立柱建物跡	407
第 27 節	時期不明の井戸	409
第 28 節	時期不明の溝状遺構	412
第 29 節	時期不明の柱穴状土坑	420
第 30 節	時期不明の土坑	427
第 31 節	時期・性格不明の遺構	441

挿図目次

第1図	東谷・中島地区位置図(1/10万).....	2	第71図	権現山遺跡 SG10区 SI-40(1) 遺構.....	154
第2図	東谷・中島地区遺跡群遺跡位置図.....	4	第72図	権現山遺跡 SG10区 SI-40(2) 遺物.....	155
第3図	遺跡の位置(1/60万).....	10	第73図	権現山遺跡 SG10区 SI-45(1) 遺構.....	157
第4図	周辺地形分類図(1/10万).....	11	第74図	権現山遺跡 SG10区 SI-45(2) 遺物.....	158
第5図	周辺の遺跡分布図.....	14	第75図	権現山遺跡 SG10区 SI-47(1) 遺構.....	160
第6図	磯岡遺跡・権現山遺跡とその周辺(1/10,000).....	18	第76図	権現山遺跡 SG10区 SI-47(2) 遺物.....	162
第7図	東谷・中島地区遺跡群と磯岡・権現山・百目鬼遺跡(1/10,000).....	19	第77図	権現山遺跡 SG10区 SI-48 遺構・遺物.....	164
第8図	磯岡遺跡・権現山遺跡および周辺遺跡(1/2,500).....	29・30	第78図	権現山遺跡 SG10区 SI-49 遺構・遺物.....	165
第9図	権現山遺跡南部・磯岡遺跡の標準土層.....	32	第79図	権現山遺跡 SG10区 SI-50(1) 遺構.....	167
第10図	権現山遺跡 縄文時代の遺構外出土遺物.....	35	第80図	権現山遺跡 SG10区 SI-50(2) 遺構.....	168
第11図	権現山遺跡 SG10区 全体図(1/600).....	41・42	第81図	権現山遺跡 SG10区 SI-50(3) 遺構.....	169
第12図	権現山遺跡 SG10区 北半部拡大図(1/400・等高線主曲線20cm).....	44	第82図	権現山遺跡 SG10区 SI-50(4) 遺物.....	171
第13図	権現山遺跡 SG10区 南半部拡大図(1/400・等高線主曲線20cm).....	45	第83図	権現山遺跡 SG10区 SI-50(5) 遺物.....	174
第14図	権現山遺跡 SG10区 SI-63(1) 遺構・遺物.....	46	第84図	権現山遺跡 SG10区 SI-50(6) 遺物.....	176
第15図	権現山遺跡 SG10区 SI-63(2) 遺物.....	47	第85図	権現山遺跡 SG10区 SI-51a 遺構・遺物.....	177
第16図	権現山遺跡 SG10区 縄文時代の土坑(1) SK-219・265・307・443 遺構・遺物.....	50	第86図	権現山遺跡 SG10区 SI-51b・c 遺構・遺物.....	179
第17図	権現山遺跡 SG10区 縄文時代の土坑(2) SK-697・699 遺構・遺物.....	51	第87図	権現山遺跡 SG10区 SI-53 遺構・遺物.....	182
第18図	権現山遺跡 SG10区 SK-544 遺構・遺物.....	52	第88図	権現山遺跡 SG10区 SI-55(1) 遺構.....	184
第19図	権現山遺跡 SG10区 SI-2(1) 遺構.....	54	第89図	権現山遺跡 SG10区 SI-55(2) 遺物.....	185
第20図	権現山遺跡 SG10区 SI-2(2) 遺物.....	55	第90図	権現山遺跡 SG10区 SI-56 遺構・遺物.....	187
第21図	権現山遺跡 SG10区 SI-6(1) 遺構.....	58	第91図	権現山遺跡 SG10区 SI-57 遺構・遺物.....	188
第22図	権現山遺跡 SG10区 SI-6(2) 遺物.....	60	第92図	権現山遺跡 SG10区 SI-58 遺構・遺物.....	190
第23図	権現山遺跡 SG10区 SI-6(3) 遺物.....	62	第93図	権現山遺跡 SG10区 SI-59(1) 遺構.....	192
第24図	権現山遺跡 SG10区 SI-9 遺構・遺物.....	64	第94図	権現山遺跡 SG10区 SI-59(2) 遺物.....	193
第25図	権現山遺跡 SG10区 SI-10(1) 遺構・遺物.....	66	第95図	権現山遺跡 SG10区 SI-60(1) 遺構.....	195
第26図	権現山遺跡 SG10区 SI-10(2) 遺物.....	68	第96図	権現山遺跡 SG10区 SI-60(2) 遺物.....	196
第27図	権現山遺跡 SG10区 SI-12 遺構・遺物.....	70	第97図	権現山遺跡 SG10区 SI-61(1) 遺構.....	198
第28図	権現山遺跡 SG10区 SI-13 遺構・遺物.....	72	第98図	権現山遺跡 SG10区 SI-61(2) 遺物.....	199
第29図	権現山遺跡 SG10区 SI-14 遺構・遺物.....	73	第99図	権現山遺跡 SG10区 SI-64a(1) 遺構.....	202
第30図	権現山遺跡 SG10区 SI-15 遺構・遺物.....	75	第100図	権現山遺跡 SG10区 SI-64a(2) 遺物.....	204
第31図	権現山遺跡 SG10区 SI-16(1) 遺構.....	78	第101図	権現山遺跡 SG10区 SI-64a(3) 遺物.....	207
第32図	権現山遺跡 SG10区 SI-16(2) 遺物.....	80	第102図	権現山遺跡 SG10区 SI-64b(1) 遺構.....	208
第33図	権現山遺跡 SG10区 SI-16(3) 遺物.....	83	第103図	権現山遺跡 SG10区 SI-64b(2) 遺物.....	209
第34図	権現山遺跡 SG10区 SI-18a・b・c(1) 遺構.....	84	第104図	権現山遺跡 SG10区 SI-65(1) 遺構.....	210
第35図	権現山遺跡 SG10区 SI-18a・b・c(2) a・c期遺物.....	85	第105図	権現山遺跡 SG10区 SI-65(2) 遺物.....	211
第36図	権現山遺跡 SG10区 SI-19a・b(1) 遺構.....	88	第106図	権現山遺跡 SG10区 SI-66(1) 遺構・遺物.....	213
第37図	権現山遺跡 SG10区 SI-19a・b(2) 遺物.....	89	第107図	権現山遺跡 SG10区 SI-66(2) 遺物.....	215
第38図	権現山遺跡 SG10区 SI-20(1) 遺構.....	92	第108図	権現山遺跡 SG10区 SI-67 遺構・遺物.....	218
第39図	権現山遺跡 SG10区 SI-20(2) 遺物.....	94	第109図	権現山遺跡 SG10区 SI-69 遺構・遺物.....	221
第40図	権現山遺跡 SG10区 SI-21a・b(1) 遺構.....	96	第110図	権現山遺跡 SG10区 SI-70(1) 遺構.....	223
第41図	権現山遺跡 SG10区 SI-21a・b(2) a期遺物.....	98	第111図	権現山遺跡 SG10区 SI-70(2) 遺物.....	224
第42図	権現山遺跡 SG10区 SI-22(1) 遺構.....	100	第112図	権現山遺跡 SG10区 SI-72(1) 遺構・遺物.....	227
第43図	権現山遺跡 SG10区 SI-22(2) 遺物.....	101	第113図	権現山遺跡 SG10区 SI-72(2) 遺物.....	228
第44図	権現山遺跡 SG10区 SI-23(1) 遺構.....	103	第114図	権現山遺跡 SG10区 SI-73 遺構・遺物.....	231
第45図	権現山遺跡 SG10区 SI-23(2) 遺物.....	104	第115図	権現山遺跡 SG10区 SI-74(1) 遺構.....	233
第46図	権現山遺跡 SG10区 SI-23(3) 遺物.....	106	第116図	権現山遺跡 SG10区 SI-74(2) 遺物.....	234
第47図	権現山遺跡 SG10区 SI-23(4) 遺物.....	109	第117図	権現山遺跡 SG10区 SI-75 遺構・遺物.....	237
第48図	権現山遺跡 SG10区 SI-23(5) 遺物.....	110	第118図	権現山遺跡 SG10区 SI-76 遺構・遺物.....	239
第49図	権現山遺跡 SG10区 SI-24 遺構・遺物.....	111	第119図	権現山遺跡 SG10区 SI-78(1) 遺構.....	240
第50図	権現山遺跡 SG10区 SI-25(1) 遺構.....	113	第120図	権現山遺跡 SG10区 SI-78(2) 遺物.....	241
第51図	権現山遺跡 SG10区 SI-25(2) 遺物.....	114	第121図	権現山遺跡 SG10区 SI-79 遺構・遺物.....	243
第52図	権現山遺跡 SG10区 SI-25(3) 遺物.....	115	第122図	権現山遺跡 SG10区 SI-80 遺構・遺物.....	245
第53図	権現山遺跡 SG10区 SI-25(4) 遺物.....	116	第123図	権現山遺跡 SG10区 SI-81 遺構・遺物.....	247
第54図	権現山遺跡 SG10区 SI-28(1) 遺構.....	123	第124図	権現山遺跡 SG10区 SI-82 遺構・遺物.....	249
第55図	権現山遺跡 SG10区 SI-28(2) 遺物.....	124	第125図	権現山遺跡 SG10区 SI-83 遺構・遺物.....	250
第56図	権現山遺跡 SG10区 SI-30(1) 遺構.....	126	第126図	権現山遺跡 SG10区 SI-84 遺構・遺物.....	252
第57図	権現山遺跡 SG10区 SI-30(2) 遺物.....	127	第127図	権現山遺跡 SG10区 SI-85(1) 遺構.....	254
第58図	権現山遺跡 SG10区 SI-32(1) 遺構.....	130	第128図	権現山遺跡 SG10区 SI-85(2) 遺物.....	255
第59図	権現山遺跡 SG10区 SI-32(2) 遺物.....	131	第129図	権現山遺跡 SG10区 SI-86(1) 遺構.....	257
第60図	権現山遺跡 SG10区 SI-33 遺構・遺物.....	133	第130図	権現山遺跡 SG10区 SI-86(2) 遺物.....	258
第61図	権現山遺跡 SG10区 SI-34a・b・c(1) 遺構.....	135	第131図	権現山遺跡 SG10区 SI-87 遺構・遺物.....	260
第62図	権現山遺跡 SG10区 SI-34a・b・c(2) 遺構.....	137	第132図	権現山遺跡 SG10区 SI-88(1) 遺構・遺物.....	262
第63図	権現山遺跡 SG10区 SI-34a・b・c(3) a期遺物.....	139	第133図	権現山遺跡 SG10区 SI-88(2) 遺物.....	263
第64図	権現山遺跡 SG10区 SI-34a・b・c(4) a・c期遺物.....	140	第134図	権現山遺跡 SG10区 SI-89a・b(1) 遺構.....	266
第65図	権現山遺跡 SG10区 SI-34a・b・c(5) 遺構.....	141	第135図	権現山遺跡 SG10区 SI-89a・b(2) 遺物.....	267
第66図	権現山遺跡 SG10区 SI-35 遺構・遺物.....	147	第136図	権現山遺跡 SG10区 SI-101(1) 遺構.....	270
第67図	権現山遺跡 SG10区 SI-37(1) 遺構.....	148	第137図	権現山遺跡 SG10区 SI-101(2) 遺物.....	271
第68図	権現山遺跡 SG10区 SI-37(2) 遺物.....	149	第138図	権現山遺跡 SG10区 SI-104 遺構・遺物.....	274
第69図	権現山遺跡 SG10区 SI-38 遺構・遺物.....	151	第139図	権現山遺跡 SG10区 SI-105 遺構・遺物.....	275
第70図	権現山遺跡 SG10区 SI-39 遺構・遺物.....	152	第140図	権現山遺跡 SG10区 SI-106 遺構・遺物.....	277
			第141図	権現山遺跡 SG10区 SI-108 遺構・遺物.....	279
			第142図	権現山遺跡 SG10区 SI-110(1) 遺構.....	281
			第143図	権現山遺跡 SG10区 SI-110(2) 遺物.....	282
			第144図	権現山遺跡 SG10区 SI-110(3) 遺物.....	283
			第145図	権現山遺跡 SG10区 SI-111(1) 遺構.....	286

第146図	権現山遺跡 SG10 区 SI-111 (2) 遺物	287	第192図	権現山遺跡 SG10 区 SI-90 遺構・遺物	371
第147図	権現山遺跡 SG10 区 SI-113a 遺構・遺物	289	第193図	権現山遺跡 SG10 区 SK-235 遺構・遺物	372
第148図	権現山遺跡 SG10 区 SI-113b 遺構	290	第194図	権現山遺跡 SG10 区 SD-250a+b 遺構	373
第149図	権現山遺跡 SG10 区 SI-114 遺構・遺物	291	第195図	権現山遺跡 SG10 区 SE-232 遺構・遺物	375
第150図	権現山遺跡 SG10 区 SI-115 遺構	293	第196図	権現山遺跡 SG10 区 SE-237 遺構・遺物	377
第151図	権現山遺跡 SG10 区 SI-36 (1) 遺構・遺物	295	第197図	権現山遺跡 SG10 区 SE-252 遺構・遺物	377
第152図	権現山遺跡 SG10 区 SI-36 (2) 遺物	300	第198図	権現山遺跡 SG10 区 SE-344 遺構・遺物	379
第153図	権現山遺跡南部の鉄関連遺物 (追加報告分)	301	第199図	権現山遺跡 SG10 区 SE-377 遺構・遺物	379
第154図	権現山遺跡の放射化分析・自然科学分析試料 (SG10 区 SI-33・36・71)	304	第200図	権現山遺跡 SG10 区 SE-569 遺構・遺物	381
第155図	GON-2 鉄製品の光学顕微鏡観察像 (a)、(b) 及び EPMA 解析像 (c)	305	第201図	権現山遺跡 SG10 区 SE-569 曲物桶の底板・側板・補強材の組織	384
第156図	GON-5 椀形鍛冶滓の光学顕微鏡観察像 (a) 及び EPMA 解析像 (b)	306	第202図	権現山遺跡 SG10 区 SE-569 曲物桶底板の漆塗膜	386
第157図	GON-7 椀形鍛冶滓の光学顕微鏡観察像 (a)、(b) 及び EPMA 解析像 (c)、(d)	307	第203図	権現山遺跡 SG10 区 北部柱穴群 P-565 ~ 693	389
第158図	GON-9 鉄製品の光学顕微鏡観察像 (a) 及び EPMA 解析像 (b)	308	第204図	権現山遺跡 SG10 区 中央部柱穴群 (1) P-309 ~ 466	390
第159図	権現山遺跡 SG10 区 SD-43 (1) 遺構	312	第205図	権現山遺跡 SG10 区 中央部柱穴群 (2) P-270 ~ 468	391
第160図	権現山遺跡 SG10 区 SD-43 (2) 遺物	314	第206図	権現山遺跡 SG10 区 中世の柱穴状土坑 (1) 遺構	392
第161図	権現山遺跡 SG10 区 SD-221 遺構・遺物	316	第207図	権現山遺跡 SG10 区 中世の柱穴状土坑 (2) 遺構	394
第162図	権現山遺跡 SG10 区 SD-41・42 (1) 遺構	318	第208図	権現山遺跡 SG10 区 中世の柱穴状土坑 (3) 遺物	394
第163図	権現山遺跡 SG10 区 SD-41・42 (2) 遺物	320	第209図	権現山遺跡 SG10 区 SK-92・251 遺構・遺物	395
第164図	権現山遺跡 SG10 区 SD-41・42 (3) 遺物	324	第210図	権現山遺跡 SG10 区 中世の遺構外出土遺物	396
第165図	権現山遺跡 SG10 区 SD-304a 遺構・遺物 SD-304b (1) 北半部遺構	327	第211図	権現山遺跡 SG10 区 SD-201a・201b・204・263 (1) SD-263 平面図	397
第166図	権現山遺跡 SG10 区 SD-304b (2) 南半部遺構	328	第212図	権現山遺跡 SG10 区 SD-263 遺物	398
第167図	権現山遺跡 SG10 区 SD-304b (3) 遺物	330	第213図	権現山遺跡 SG10 区 SD-201a・201b・204・263 (2) 平面図	399
第168図	権現山遺跡 SG10 区 SD-304b (4) 古墳後期の遺物	332	第214図	権現山遺跡 SG10 区 SD-201a・201b・204・263 (3) 断面図	400
第169図	権現山遺跡 SG10 区 SD-305 遺構	332	第215図	権現山遺跡 SG10 区 SD-201a・204 遺物	401
第170図	権現山遺跡 SG10 区 SD-319 遺構・遺物	333	第216図	権現山遺跡 SG10 区 SD-503 (1) 平面図	403
第171図	権現山遺跡 SG10 区 SD-509 遺構	334	第217図	権現山遺跡 SG10 区 SD-503 (2) 断面図	404
第172図	権現山遺跡 SG10 区 SD-527 (1) 遺構	335	第218図	権現山遺跡 SG10 区 SD-503 (3) 遺物	405
第173図	権現山遺跡 SG10 区 SD-527 (2) 遺物	337	第219図	権現山遺跡 SG10 区 SK-71 遺構・遺物	406
第174図	権現山遺跡 SG10 区 SD-533・534・535 遺構 SD-535 遺物	339	第220図	権現山遺跡 SG10 区 SB-603 遺構	407
第175図	権現山遺跡 SG10 区 SD-540 遺構	341	第221図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の井戸 (1) SE-236・316・345 遺構 SE-345 遺物	408
第176図	権現山遺跡 SG10 区 SD-594 遺構・遺物	342	第222図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の井戸 (2) SE-352 遺構・遺物 SE-455 遺構	411
第177図	権現山遺跡 SG10 区 SD-696・711 遺構 SD-821 遺構・遺物	344	第223図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構 (1) 平面図	413
第178図	権現山遺跡 SG10 区 SE-552 遺構	345	第224図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構 (2) 断面図	414
第179図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の円筒形土坑 (1) 遺構	346	第225図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構 (3) 遺物	417
第180図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の円筒形土坑 (2) 遺物	347	第226図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の柱穴状土坑 (1) 遺構	421
第181図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (1) 遺構	349	第227図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の柱穴状土坑 (2) 遺構	423
第182図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (2) 遺構	350	第228図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の柱穴状土坑 (3) 遺構	425
第183図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (3) 遺構	351	第229図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (1) 遺構	428
第184図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (4) 遺物	354	第230図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (2) 遺構	429
第185図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (5) 遺物	357	第231図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (3) 遺構	430
第186図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (6) 遺物	359	第232図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (4) 遺構	432
第187図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (7) 遺物	361	第233図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (5) 遺構	434
第188図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の低地遺物包含層調査区と SK-901 ~ 910	363	第234図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (6) 遺構	436
第189図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の低地遺物包含層遺物	364	第235図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (7) 遺構	437
第190図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の柱穴状土坑 遺構・遺物	367	第236図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (8) 遺構	438
第191図	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の遺構外出土遺物	369	第237図	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (9) 遺物	439
			第238図	権現山遺跡 SG10 区 SX-218 遺構 SX-308 遺構・遺物	441

表 目 次

第1表	東谷・中島地区遺跡群遺跡一覧表	5	第15表	権現山遺跡 SG10 区 SI-10 出土遺物	67 ~ 69
第2表	東谷・中島地区周辺の遺跡	15	第16表	権現山遺跡 SG10 区 SI-12 出土遺物	71
第3表	権現山遺跡各地区の縄文時代遺物	36	第17表	権現山遺跡 SG10 区 SI-13 出土遺物	72
第4表	『東谷・中島地区遺跡群』10 掲載、縄文・弥生時代の遺構外出土石器の石質	38	第18表	権現山遺跡 SG10 区 SI-14 出土遺物	74
第5表	縄文晩期居住跡 SG10 区 SI-63 出土石器の石質	38	第19表	権現山遺跡 SG10 区 SI-15 出土遺物	76・77
第6表	『東谷・中島地区遺跡群』14 掲載、縄文時代遺構外出土石器の石質	38	第20表	権現山遺跡 SG10 区 SI-16 出土遺物	79 ~ 83
第7表	弥生時代後半の土坑 SG10 区 SK-544 出土石器の石質	38	第21表	権現山遺跡 SG10 区 SI-18a 出土遺物	86
第8表	時代・出土場所別の器種別石材組成	39	第22表	権現山遺跡 SG10 区 SI-18c 出土遺物	86・87
第9表	権現山遺跡 SG10 区 SI-63 出土遺物	48	第23表	権現山遺跡 SG10 区 SI-19a・b 出土遺物	90・91
第10表	権現山遺跡 SG10 区 縄文時代の土坑	51	第24表	権現山遺跡 SG10 区 SI-20 出土遺物	93 ~ 95
第11表	権現山遺跡 SG10 区 SK-544 出土遺物	52	第25表	権現山遺跡 SG10 区 SI-21a 出土遺物	98・99
第12表	権現山遺跡 SG10 区 SI-2 出土遺物	55 ~ 57	第26表	権現山遺跡 SG10 区 SI-22 出土遺物	101・102
第13表	権現山遺跡 SG10 区 SI-6 出土遺物	59 ~ 63	第27表	権現山遺跡 SG10 区 SI-23 出土遺物	105 ~ 110
第14表	権現山遺跡 SG10 区 SI-9 出土遺物	64・65	第28表	権現山遺跡 SG10 区 SI-24 出土遺物	112
			第29表	権現山遺跡 SG10 区 SI-25 出土遺物	117 ~ 122
			第30表	権現山遺跡 SG10 区 SI-28 出土遺物	124・125
			第31表	権現山遺跡 SG10 区 SI-30 出土遺物	128・129

第 32 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-32	出土遺物	131・132	第 90 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-36	出土遺物	296 ~ 299
第 33 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-33	出土遺物	134	第 91 表	分析試料一覧		303
第 34 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-34a	出土遺物	142 ~ 146	第 92 表	中性子照射条件及び γ 線測定条件		304
第 35 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-34c	出土遺物	146	第 93 表	測定に使用した核データ		304
第 36 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-35	出土遺物	147	第 94 表	中性子放射化分析の結果		309
第 37 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-37	出土遺物	150	第 95 表	標準鉄鉱石における分析値と文献値との比較		310
第 38 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-38	出土遺物	151	第 96 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-43	出土遺物	311 ~ 315
第 39 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-39	出土遺物	153	第 97 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-221	出土遺物	317
第 40 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-40	出土遺物	156	第 98 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-41・42	出土遺物	319 ~ 325
第 41 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-45	出土遺物	159	第 99 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-304a	出土遺物	327
第 42 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-47	出土遺物	161 ~ 163	第 100 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-304b	出土遺物	329 ~ 332
第 43 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-48	出土遺物	164	第 101 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-319	出土遺物	333
第 44 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-49	出土遺物	166	第 102 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-527	出土遺物	336 ~ 338
第 45 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-50	出土遺物	170 ~ 176	第 103 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-535	出土遺物	340
第 46 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-51a	出土遺物	178	第 104 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-594	出土遺物	341・342
第 47 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-51b	出土遺物	179	第 105 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-821	出土遺物	344
第 48 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-53	出土遺物	181 ~ 183	第 106 表	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の円筒形土坑		345・346
第 49 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-55	出土遺物	185・186	第 107 表	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の円筒形土坑 出土遺物		347・348
第 50 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-56	出土遺物	187	第 108 表	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑		351 ~ 353
第 51 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-57	出土遺物	189	第 109 表	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 出土遺物		353 ~ 361
第 52 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-58	出土遺物	191	第 110 表	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の低地遺物包含層 出土遺物		362 ~ 365
第 53 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-59		193・194	第 111 表	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の柱穴状土坑 P-322 出土遺物		366
第 54 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-60	出土遺物	197・198	第 112 表	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の柱穴状土坑		367
第 55 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-61	出土遺物	200・201	第 113 表	権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の遺構外出土遺物 368		370
第 56 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-64a	出土遺物	203 ~ 207	第 114 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-90	出土遺物	371
第 57 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-64b	出土遺物	209	第 115 表	権現山遺跡 SG10 区 SK-235	出土遺物	373
第 58 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-65	出土遺物	210 ~ 212	第 116 表	権現山遺跡 SG10 区 SE-232	出土遺物	374 ~ 376
第 59 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-66	出土遺物	214 ~ 217	第 117 表	権現山遺跡 SG10 区 SE-237	出土遺物	376
第 60 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-67	出土遺物	219・220	第 118 表	権現山遺跡 SG10 区 SE-252	出土遺物	378
第 61 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-69	出土遺物	222	第 119 表	権現山遺跡 SG10 区 SE-344	出土遺物	378
第 62 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-70	出土遺物	225	第 120 表	権現山遺跡 SG10 区 SE-377	出土遺物	380
第 63 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-72	出土遺物	226 ~ 229	第 121 表	権現山遺跡 SG10 区 SE-569	出土遺物	382・383
第 64 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-73	出土遺物	230 ~ 232	第 122 表	権現山遺跡 SG10 区 SE-569	分析対象資料一覧	383
第 65 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-74	出土遺物	235	第 123 表	権現山遺跡 SG10 区 SE-569	樹種同定結果	385
第 66 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-75	出土遺物	236 ~ 238	第 124 表	権現山遺跡 SG10 区 中世の柱穴状土坑		387 ~ 393
第 67 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-76	出土遺物	239	第 125 表	権現山遺跡 SG10 区 中世の柱穴状土坑 出土遺物		393
第 68 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-78	出土遺物	242	第 126 表	権現山遺跡 SG10 区 SK-92	出土遺物	395
第 69 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-79	出土遺物	244	第 127 表	権現山遺跡 SG10 区 中世の遺構外出土遺物		396
第 70 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-80	出土遺物	245	第 128 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-263	出土遺物	398
第 71 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-81	出土遺物	246 ~ 248	第 129 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-201a	出土遺物	401
第 72 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-82	出土遺物	248・249	第 130 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-204	出土遺物	402
第 73 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-83	出土遺物	251	第 131 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-503	出土遺物	405
第 74 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-84	出土遺物	253	第 132 表	権現山遺跡 SG10 区 SK-71	出土遺物	406
第 75 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-85	出土遺物	255・256	第 133 表	権現山遺跡 SG10 区 SE-345	出土遺物	410
第 76 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-86	出土遺物	257 ~ 259	第 134 表	権現山遺跡 SG10 区 SE-352	出土遺物	410
第 77 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-87	出土遺物	261	第 135 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-224	出土遺物	412
第 78 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-88	出土遺物	264・265	第 136 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-506	出土遺物	415
第 79 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-89a・b	出土遺物	268・269	第 137 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-510	出土遺物	416
第 80 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-101	出土遺物	272・273	第 138 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-521a	出土遺物	416
第 81 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-104	出土遺物	275	第 139 表	権現山遺跡 SG10 区 SD-814	出土遺物	418
第 82 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-105	出土遺物	276	第 140 表	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の柱穴状土坑		420 ~ 426
第 83 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-106	出土遺物	278・279	第 141 表	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑		427 ~ 438
第 84 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-108	出土遺物	280	第 142 表	権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 出土遺物		439・440
第 85 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-110	出土遺物	284・285	第 143 表	権現山遺跡 SG10 区 SX-308	出土遺物	442
第 86 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-111	出土遺物	287・288				
第 87 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-113a	出土遺物	290				
第 88 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-114	出土遺物	292				
第 89 表	権現山遺跡 SG10 区 SI-36	床面採取土と鍛造剥片・ 粒状滓の量	294				

権現山遺跡南部 遺構一覧・検索表 (第1分冊)

権現山遺跡 SG10 区

縄文時代の竪穴建物跡

	グリッド	規模 (m)	重複関係	火処	付属施設	掲載ページ
SI-63	20-19, 21-19	北東-南西 3.88 × 南東-北西 3.86	SD-304 より古	炉 1 (南)		43 ~ 49

縄文時代の土坑 6 基 (SK-219・265・307・443・697・699) は第 10 表 (p.51) を参照。

弥生時代の土坑

	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SK-544	22.0-19.0	円形	SK-543 より古	長径 1.82 × 短径 1.66	0.34	52

古墳時代の竪穴建物跡

	グリッド	規模 (m)	重複関係	火処	付属施設	掲載ページ
SI-2	17-17・18	東西 7.04 × 南北 6.92	SK-210 → SI-2 → SD-41・42	炉 1 (南東)	貯蔵穴 1	53 ~ 57
SI-6	17-17	東西 5.36 × 南北 5.50	SI-89b → SI-89a → SI-30 → SI-6	カマド 1 (北)	貯蔵穴 2	57 ~ 63
SI-9	17-17, 18-17	東西 3.40 × 南北 4.62		不明	貯蔵穴 1?	63 ~ 65
SI-10	18-17	東西 4.56 × 南北 4.77	SK-11 → SI-88 → SK-211 → SI-10 → SE-352	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	65 ~ 69
SI-12	18-17	東西 (推定) 4.76 × 南北 4.68	SI-12 → SK-229 → SK-228 SD-201a より古	カマド 1 (北)		69 ~ 71
SI-13	17-16・17	東西 (推定) 6.30 × 南北 5.69	SI-85・SD-201a より古	不明	貯蔵穴 1	71 ~ 72
SI-14	18-16・17	東西 4.62 × 南北 4.50	SI-16 より新	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	73 ~ 74
SI-15	18-16・17	東西 2.28 ~ 2.30 × 南北 2.50 ~ 2.54	SI-16 より新	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	75 ~ 77
SI-16	18-17	東西 5.82 × 南北 6.04	SI-14・15・SD-201a より古	炉 2 (北)	貯蔵穴 2	77 ~ 83
SI-18a	18-16	東西 5.20 × 南北 5.80	SI-18c → SI-18b → SI-18a → SI-4 → SI-21b → SI-21a	不明	貯蔵穴 1 ~ 2	84 ~ 86
SI-18b	同上	一辺 4.70m 前後	同上	不明	貯蔵穴 1 ~ 2	84 ~ 86
SI-18c	同上	一辺 3.9 ~ 4.0m 前後	同上	不明	貯蔵穴 1	84 ~ 87
SI-19a	17-16, 18-16	東西 6.68 × 南北 7.16	SK-94・95・456・P-445 より古、 P-469・470 → SI-19b → SI-19a → SI-20 → SI-21b → SI-21a	炉 1 (北)	貯蔵穴 1	87 ~ 91
SI-19b	同上	同上	同上	炉 2 (東)	貯蔵穴 1	87 ~ 91
SI-20	18-16	東西 5.24 × 南北 4.96	SK-286 より新 SI-19b → SI-19a → SI-20 → SI-21b → SI-21a	カマド 1 (東)	貯蔵穴 1	92 ~ 95
SI-21a	18-16	(推定) 東西 5.86 × 南北 5.90	SI-18c → SI-18b → SI-18a → SI-4 → SI-21b → SI-21a、 SI-19b → SI-19a → SI-20 → SI-21b → SI-21a	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	96 ~ 99
SI-21b	同上	同上	同上		貯蔵穴 1	96 ~ 98
SI-22	18-16	東西 4.62 × 南北 4.78	SI-105 より新、SI-21a・b と P-406 より古	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	99 ~ 102
SI-23	18-16, 18-17	東西 6.05 × 南北 6.04	SI-25 → SI-24 → SI-23 → SI-90 → SE-236、SI-105 → SI-23 → SI-90、 P-325・326・330・331 より新	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	102 ~ 110
SI-24	18-16, 19-16	東西 4.58 × 南北 (残) 2.26	SI-25 → SI-24 → SI-23 → SI-90 → SE-236	カマド 1 (北)		111 ~ 112
SI-25	18-16, 19-16・17	東西 7.40 × 南北 7.26	SD-283 より古、SI-25 → SI-28・ SI-38、SI-25 → SI-24 → SI-23 → SI-90 → SE-236	炉 1 (中央)	貯蔵穴 1、入口施設	112 ~ 122
SI-28	19-17	東西 5.48 × 南北 5.27	SI-25 → SI-28 → SK-911	カマド 1 (東)	貯蔵穴 1	122 ~ 125
SI-30	17-17	東西 7.00 × 南北 7.02	SI-89b → SI-89a → SI-30 → SI-6 → SK-235、SK-212・226 より古	炉 1 (中央)	貯蔵穴 1、入口施設	125 ~ 129
SI-32	18-18	東西 (推定) 4.50 × 南北 4.58	SI-33 → SI-32 → SD-204、 SK-215 より古	カマド 1 (東)	貯蔵穴 1	130 ~ 132
SI-33	18-18	東西 7.38 × 南北 7.22	SI-32・34a・34b・SD-204・ SE-316 より古	炉 2 (北)	貯蔵穴 1、入口施設	132 ~ 134

SG5 区と重複する SI-4 は第 2 分冊の SG5 区 SI-4 を参照。

SI-34a	19-17・18	東西 7.14 × 南北 7.44	SI-101 → SI-34c → SI-34b → SI-34a → SD-263 → SD-201a・b → SK-214、SI-33 より新	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1、入口施設	134 ~ 146
SI-34b	同上	同上	同上	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1、入口施設	134 ~ 141
SI-34c	同上	(推定) 東西 5.70 × 南北 5.70	同上	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1、入口施設	134 ~ 146
SI-35	19-17、20-17	東西 4.21 × 南北 4.22	SD-263 より古	カマド 1 (北)		146 ~ 147
SI-37	19-16・17	東西 4.68 × 南北 4.62	SI-38 → SI-37 → P-323 → SD-283	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	148 ~ 150
SI-38	18-16、19-16	東西 (推定) 6.60 × 南北 6.90	SI-25 → SI-38 → SI-37、SD-283・SK-439 より古	不明	貯蔵穴 1	151 ~ 152
SI-39	19-17	東西 4.31 × 南北 4.27	SK-209 より古	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1、入口施設	152 ~ 153
SI-40	19-17	東西 5.56 × 南北 5.96	SK-219 → SK-220 → SI-40 → SD-201a	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1 ~ 27、入口施設	153 ~ 155
SI-45	20-17	東西 5.34 × 南北 6.00	SI-48 → SI-45 → SK-243、SK-92・SK-271 より古	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	157 ~ 159
SI-47	18-17、19-17	東西 6.36 × 南北 6.08	SK-339・P-335 より新、SI-47 → SK-276 → SK-92 → SK-264、SI-101 → SI-47 → SD-263 → SD-201a	不明	貯蔵穴 1	160 ~ 163
SI-48	20-17	東西 5.12 × 南北 5.08	SI-48 → SI-45 → SK-243、P-303 → SI-48 → P-302	炬 1 (北)	貯蔵穴 1、入口施設	163 ~ 164
SI-49	20-17	東西 4.32 × 南北 4.00	SI-49 → SK-242 → P-245・246、SI-49 → SK-241・SE-232、SI-49 → P-257・258	不明		165 ~ 166
SI-50	20-17、21-17	東西 8.60 × 南北 8.72	SD-224 より古	炬 6 (南東 5・中央 1)	貯蔵穴 1	166 ~ 176
SI-51a	19-18	(推定) 東西 5.80 × 南北 7.10	SI-51c → SI-51b → SI-51a、SI-53・104・P-436・437 より新、SX-308・SE-345・P-429・432・433 より古	不明	貯蔵穴 1	176 ~ 178
SI-51b	同上	東西 4.90 × 南北 5.16	同上	不明	貯蔵穴 1	178 ~ 180
SI-51c	同上	正確な規模は不明	P-436・437 → SI-51c → P-429・431・432・433・SX-308	不明	貯蔵穴 1	179 ~ 180
SI-53	19-18	東西 4.10 × 南北 4.16	SK-443 → SK-265 → SI-53 → P-467・468、SI-53 → P-441・442	炬 1 (北北東)		181 ~ 183
SI-55	19-18	東西 4.36 × 南北 5.20	SD-204 より古	炬 1 (東)	貯蔵穴 1	183 ~ 186
SI-56	19-20	東西 4.92 × 南北 4.73	SK-287 より古	不明	貯蔵穴 1	186 ~ 187
SI-57	20-19	東西 4.68 × 南北 4.36		炬 1 (東)	貯蔵穴 1、入口施設	187 ~ 189
SI-58	20-18	東西 (残) 2.90 × 南北 4.92	P-375・376・383・403・404 より古	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	190 ~ 191
SI-59	20-18・19	東西 (推定) 6.20 × 南北 5.96	SI-59 → SK-301 → SK-300、SI-59 → SK-288・289 → SD-201a	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	191 ~ 194
SI-60	20-17、21-17	東西 7.68 × 南北 7.46	SD-224 より古	炬 1 (南東)	貯蔵穴 1、入口施設	194 ~ 198
SI-61	21-18	東西 5.94 × 南北 6.00	SI-61 → SD-304b → P-407	炬 1 (北)	貯蔵穴 1、入口施設	198 ~ 201
SI-64a	21-17・18、22-17・18	東西 9.24 × 南北 9.32	SD-304a・304b・SD-503・SK-511・P-515・548 より古、SI-64b より新	炬 1 (中央)	貯蔵穴 1	201 ~ 207
SI-64b	同上	東西 8.10 × 南北 8.38	SI-64a・SD-304a・304b・SD-503 より古	不明	貯蔵穴 1	207 ~ 209
SI-65	22-17	(残) 東西 5.06 × 南北 5.52	SI-65 → SD-503・SK-517	カマド 1 (北)		209 ~ 212
SI-66	22-17	東西 6.78 × 南北 4.54	SD-304a・304b・SD-503・SK-523・524・536・537 より古、SI-66 → SK-524 → SK-523	不明	貯蔵穴 1、入口施設	212 ~ 217
SI-67	22-17	東西 5.40 × 南北 5.24	SD-503 より古	不明	貯蔵穴 1、入口施設	217 ~ 220
SI-69	23-17	東西 5.60 × 南北 5.60	SK-68・P-574・P-580 より古	カマド 2 (東)	貯蔵穴 1、入口施設	220 ~ 222
SI-70	23-17	東西 5.20 × 南北 5.32	P-584・587・588・589・593 より古	カマド 1 (東)	貯蔵穴 1	222 ~ 225
SI-72	22-18、23-18	東西 5.78 × 南北 5.48	SK-582・583 より古	カマド 1 (南)	貯蔵穴 1 (張出土坑)、入口施設	226 ~ 229
SI-73	22-18	東西 5.26 × 南北 5.26		カマド 1 (東)	貯蔵穴 1、入口施設	230 ~ 232
SI-74	22-18・19	東西 4.02 × 南北 3.90	SI-113b → SI-113a → SI-74	カマド 1 (東)	貯蔵穴 1、入口施設	232 ~ 235
SI-75	22-19、23-19	東西 5.78 × 南北 6.14	SD-503・SK-545・P-579 より古	不明	貯蔵穴 1 (張出土坑)	236 ~ 238
SI-76	21-19	東西 3.94 × 南北 3.28	SD-503・508・518・SK-519 より古	不明	入口施設	238 ~ 239
SI-78	23-18・19	東西 4.66 × 南北 5.34	SI-79 より新	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	239 ~ 242
SI-79	23-18・19	東西 4.17 × 南北 3.78	SI-78 より古、P-702 より古?	炬 1 (東)		243 ~ 244
SI-80	23-18・19、24-18・19	東西 3.48 × 南北 3.82	SK-555 より古	炬 1 (南)	貯蔵穴 1	244 ~ 245
SI-81	23-19	東西 4.46 × 南北 4.57	SD-503・SK-613 より古	カマド 1 (北)	入口施設	246 ~ 248
SI-82	23-19	東西 (残) 3.60 × 南北 3.62		不明		248 ~ 249
SI-83	23-19、24-19	東西 3.76 × 南北 4.91	SI-115 と SK-571・674 より新	カマド 1 (東)		250 ~ 251
SI-84	24-19	東西 5.26 × 南北 4.52	SD-503 より古	不明	貯蔵穴 1	251 ~ 253
SI-85	17-16	東西 4.29 × 南北 4.52	SI-13 より新	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1、入口施設	253 ~ 256
SI-86	24-19	東西 4.94 × 南北 3.60	SD-503・SK-564 より古	炬 2 (南東)	貯蔵穴 3	256 ~ 259

SI-36 は古墳時代の竪穴鍛冶遺構 (次項) を参照。

SI-87	16-18	東西 3.32 × 南北 3.15		カマド 1 (北)		260 ~ 261
SI-88	18-17	東西 5.92 × 南北 4.28	SK-11 → SI-88 → SK-211 → SI-10 → SE-352、SD-205 より古	炉 1 (北)	貯蔵穴 1	261 ~ 265
SI-89a	17-17	東西 5.70 × 南北 5.94	SI-89b → SI-89a → SI-30 → SI-6、SI-89b → SI-89a → SI-30 → SK-235	炉 1 (北)	貯蔵穴 2、入口施設	265 ~ 269
SI-89b	同上	(推定) 東西 4.70 × 南北 4.40	同上	炉 1 (北)	貯蔵穴 1	265 ~ 269
SI-101	19-17・18	(推定) 東西 6.90 × 南北 6.50	SI-101 → SI-34c → SI-34b → SI-34a、SI-101 → SI-47 → SD-263 → SD-201a → SK-214	不明	貯蔵穴 1	270 ~ 273
SI-104	19-18	東西 (残) 3.14 × 南北 4.46	SI-104 → SI-51c → SI-51b → SI-51a → P-428?・429・SE-345 → SX-308、SK-328・329 より古	不明	貯蔵穴 2	273 ~ 275
SI-105	18-16・17	東西 4.20 × 南北 (残) 2.46	SI-105 → SI-22 → P-406 (?), SI-105 → SI-23 → SI-90 → SE-236	不明	貯蔵穴 1	275 ~ 276
SI-106	20-17・18	東西 6.84 × 南北 5.00	SI-110・SK-355・SK-405・P-409 ~ 413 より古	炉 1 (中央)	貯蔵穴 1	276 ~ 279
SI-108	20-18	東西 4.08 × 南北 3.30	P-465・466・SI-108 → SI-110 → SK-347・P-425	炉 1 (中央)	貯蔵穴 2	279 ~ 280
SI-110	20-18、21-18	(推定) 東西 8.80 × 南北 9.00	P-465・466・SI-108 → SI-110 → SK-347・P-425、P-414 ~ 418 より古	不明	貯蔵穴 1 (張出土坑 1)	280 ~ 285
SI-111	18-18・19	東西 4.11 × 南北 3.44		炉 1 (北)	貯蔵穴 2、入口施設	285 ~ 288
SI-113a	22-18・19	東西 2.61 × 南北 2.78	SI-113b → SI-113a → SI-74、SI-113b → SI-113a → SK-562・563・682、P-700・701 より古	不明	貯蔵穴 1	288 ~ 290
SI-113b	同上	東西 5.02 × 南北 4.96	同上、P-700・701 と新旧不明	不明	貯蔵穴 1	290 ~ 291
SI-114	23-18・19	東西 3.98 × 南北 3.09	SK-683 より新	不明		291 ~ 293
SI-115	23-19、24-19	東西 3.64 × 南北 3.99	SI-83 より古	不明		293

SG5 区と重複する SI-100 は第 2 分冊の SG5 区 SI-100 を参照。

古墳時代の竪穴鍛冶遺構

	グリッド	規模 (m)	重複関係	火処	付属施設	掲載ページ
SI-36	20-17	(残) 東西 2.38 × 南北 4.35		不明		294 ~ 300

古墳時代の居館外郭の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-43	16-16・17	SI-100 → SD-43 → SD-44	1.70 ~ 2.50	0.10 ~ 0.45	SG5 区に連続 北辺溝の西部	311 ~ 315
SD-221	16-17、16-18	SD-41・42 より古	0.92 ~ 1.48	0.10 ~ 0.58	北辺溝の東部	315 ~ 317

古墳時代の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-41・42	16-17・18、17-18、18-18	SI-2・SD-221・SK-210・216 → SD-42 → SD-41 → SD-201a・201b・204	0.20 ~ 3.20	0.10 ~ 0.60	SG5 区 SD-41・42 に連続	317 ~ 325
SD-304a	20 ~ 23-17 ~ 20	SI-64a・64b・66 → SD-304a → SD-304b、SK-526 → SD-304a → SD-304b → SK-525・566	0.80 ~ 1.18	0.33 ~ 0.49	掘り直して SD-304b になる	326 ~ 327
SD-304b	同上	SI-63 → SI-61・64a・64b・66 → SD-304b → SD-204・501・503、SK-526 → SD-304a → SD-304b → SK-525・566	0.50 ~ 1.50	0.10 ~ 0.39	SD-304a から掘り直す SD-305 と同時存在か	326 ~ 332
SD-305	20-19		0.42 ~ 0.64	0.03 ~ 0.10	SD-304b と同時存在か	332
SD-319	19-18	SD-204・263 より古	1.17 ~ 1.70	0.13 ~ 0.20	SK-372 との新旧が不明	333
SD-509	20-20、21-19・20		0.34 ~ 0.59	0.04 ~ 0.12	SD-510・527 と関連?	334
SD-527	21-19 ~ 24-20	SK-697・699 → SD-527 → SD-535・540・696・711 → SD-503	0.70 ~ 1.40	0.20 ~ 0.50		334 ~ 338
SD-533	21-19		0.26 ~ 0.37	0.04 ~ 0.05		338
SD-534	21.5-19.5		0.41 ~ 0.92	0.06 ~ 0.46		339 ~ 340
SD-535	21-19	SD-527 より新	1.70 ~ 2.80	0.32 ~ 0.54		339 ~ 340
SD-540	22-19	SD-527 → SD-535・540	0.55 ~ 2.10	0.08 ~ 0.41		340 ~ 341
SD-594	22-19・20		1.00 ~ 3.40	0.12 ~ 0.51		341 ~ 342
SD-696	23-20	SD-527 より新	0.45 ~ 0.74	0.25 ~ 0.41		343 ~ 344
SD-711	23.5-20.0	SK-697 → SD-527 → SD-711	0.10 ~ 0.47	0.29 ~ 0.44		343 ~ 344
SD-821	19-20		0.99 ~ 1.60	0.16 ~ 0.20		343 ~ 344

SG5 区と連続する SD-44 は第 2 分冊の SG5 区 SD-44 を参照。

古墳時代の井戸跡

	グリッド	形状	重複関係	口径 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SE-552	24.0-19.5	不整五角形	SE-552・SK-553a → SK-553b	長径 0.92 × 短径 0.67	1.10	345

古墳時代の円筒形土坑 9 基 (SK-210・216・217・550・551・561・571・621・674) は第 106 表 (p.345 ~ 346) を参照。

古墳時代の土坑 46 基 (SK-11・29・46・91・94・95・207・208・211・220・222・233・261a・261b・266・274・275・286・292・293・339・343・346・439・449・456・543・553a・553b・570・600・683・801・803・819・820a・820b・901 ~ 904・906・908 ~ 911) は第 108 表 (p.351 ~ 353) を参照。

古墳時代の柱穴状土坑 17 基 (P-303・314・315・322・325・326・330・331・335・436・437・464 ~ 466・469・470・472) は第 112 表 (p.367) を参照。

平安時代の竪穴建物跡

	グリッド	規模 (m)	重複関係	火処	付属施設	掲載ページ
SI-90	18-16-17	東西 4.48 × 南北 3.20	SI-105 → SI-23 → SI-90 → SE-236	カマド 1 (北)		370 ~ 371

平安時代の土坑

	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SK-235	17.5-17.5	長楕円形	SI-89a・b → SI-30 → SK-235	長径 (推定) 2.40 × 短径 0.54	0.33 ~ 0.38	372 ~ 373

古代の道路跡 (推定東山道側溝)

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-250a	21-15	SD-250a → SD-250b	0.96 ~ 1.12	0.16 ~ 0.21	推定東山道側溝	373 ~ 374
SD-250b	同上	同上	0.56 ~ 0.62	0.30 ~ 0.43	同上	373 ~ 374

中世の井戸跡

	グリッド	形状	重複関係	口径 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SE-232	20.0-17.0-17.5	円形	SI-49 より新	長径 2.73 × 短径 2.52	3.18	374 ~ 375
SE-237	18.5-17.0	円形	SK-353 より新	長径 2.65 × 短径 2.27	3.16	376 ~ 377
SE-252	19.5-18.5	円形		長径 1.76 × 短径 1.70	2.36	376 ~ 378
SE-344	20.0-18.0	不整形	SX-308 より古	長径 1.82 × 短径 1.70	2.40	378 ~ 379
SE-377	21.0-18.0	楕円形		長径 2.96 × 短径 2.24	3.35	378 ~ 380
SE-569	22.0-18.0	楕円形		長径 2.74 × 短径 2.35	3.15	380 ~ 387

中世の柱穴状土坑 82 基 (P-425・565・574・575・577・578・580・584・587 ~ 591・593・602・622 ~ 629・633a ~ 633d・635a・635b・636 ~ 638・640・641・642a ~ 642d・643・644・646・647a・647b・648a ~ 648c・649 ~ 655・658・659・660a ~ 660c・661 ~ 672・676 ~ 679・681・687 ~ 693) は第 124 表 (p.387 ~ 393) を参照。

中世の土坑

	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SK-92	19-17	不整形	SI-45・47・SK-46・276 → SK-92・251 → SK-264・297 → SD-263	長径 9.50 × 短径 8.30	0.15 ~ 0.20	395 ~ 396
SK-251	19-17	不整形	SK-92 に付属 (同時存在)	長径 3.00 × 短径 1.94	0.23	395 ~ 396

中世～近世の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-263	19-17、19-18	SK-339 → SI-47 → SD-263、SI-34a・34b・35・101・SD-319・P-324・472・SK-92・297・341 → SD-263 → SD-201a → SK-214	0.70 ~ 1.40	0.12 ~ 0.24	SK-372 との新旧が不明 SK-321 と P-291・320 より新しい可能性あり	397 ~ 400

近世の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-201a	16 ~ 21-17 ~ 21	SI-12・13・16・40・47・59・101 → SD-201a、SK-208・292・343・SD-41・42・SK-92・SD-263・SK-1・288・289 → SD-201a → SK-202・214	0.29 ~ 2.10	0.14 ~ 0.60	SD-204 と連結	398 ~ 402
SD-201b	同上	SK-207 → SD-201b → SD-201a	0.68 ~ 0.90	0.09 ~ 0.15	同上	398 ~ 402
SD-204	18 ~ 21-17 ~ 21	SI-32・33・55・SD-41・42・304a・304b・319 より新	0.60 ~ 2.60	0.10 ~ 0.30		399 ~ 402
SD-503	21 ~ 25-17 ~ 20	SI-64a・64b・65・66・67・75・76・81・84・86・SD-304a・304b・527・SK-551・561・570・600・SD-505・506・508・510・518 → SD-503 → SK-502・513・612・P-704・709	0.40 ~ 3.00	0.25 ~ 0.47		403 ~ 405

近世の土坑

	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SK-71	22-18	不整楕円形	SD-560 より新	長径 5.67 × 短径 5.05	0.62	405 ~ 406

時期不明の掘立柱建物跡

	グリッド	形状	重複関係	長さ	幅	掲載ページ
SB-603	23-18	長方形	SK-604 より新	桁行 4 間 (7.06 ~ 7.20m)	梁行 3 間 (5.52m)	407 ~ 409

時期不明の井戸跡

	グリッド	形状	重複関係	口径 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SE-236	18.5-17.0	円形	SI-105 → SI-23 → SI-90 → SE-236	1.48	2.83	408 ~ 409
SE-316	18.5-18.0	円形	SI-33 より新	長径 0.52 × 短径 0.47	1.20	408 ~ 409
SE-345	19.5-18.5	円形	SI-104 → SI-51a → SE-345	長径 1.66 × 短径 1.14	2.97	408 ~ 410
SE-352	18.5-17.5	円形	SI-10 より新	長径 0.98 × 短径 0.92	2.66	410 ~ 411
SE-455	20.5-20.0	円形		長径 1.05 × 短径 1.03	2.12	410 ~ 411

時期不明の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-205	18-17	SI-88 → SD-205 → SK-5	0.42 ~ 0.60	0.09 ~ 0.16	近世の SD-201a と関連?	412 ~ 414
SD-224	21-17・18	SI-50・60 より新	0.36 ~ 0.54	0.05 ~ 0.14		412 ~ 414・417
SD-283	18-16、19-16・17	SI-25 → SI-38 → SI-37 → P-323 → SD-283	0.44 ~ 0.74	0.03 ~ 0.15		412 ~ 415
SD-505	21-19	SD-506 → SD-505 → SD-503	0.26 ~ 0.39	0.04 ~ 0.10		413 ~ 415
SD-506	21-18・19、20-19	SD-506 → SD-505 → SD-503	0.34 ~ 0.76	0.05 ~ 0.17		413 ~ 415・417
SD-508	21-19	SI-76 → SD-508 → SD-503	0.34 ~ 0.50	0.02 ~ 0.09	SD-541・542 と関連?	413 ~ 415
SD-510	20-19・20	SD-204 と重複	0.26 ~ 0.45	0.03 ~ 0.12	古墳時代の SD-509 と関連?	413 ~ 417
SD-518	21-19	SI-76 → SD-518 → SK-519	0.32 ~ 0.59	0.04 ~ 0.16		413 ~ 414・416
SD-521a	21-20	SD-521b → SD-521a	0.28 ~ 0.54	0.28	SD-522 と関連?	413 ~ 414・416 ~ 417
SD-521b	同上	同上	1.30 以上	0.30		413 ~ 414・416 ~ 417
SD-522	21-20	SD-535 と重複	0.40 ~ 0.44	0.03 ~ 0.10	SD-521a と関連?	413 ~ 414・416 ~ 417
SD-541	21-19		0.25 ~ 0.29	0.02 ~ 0.05	SD-508 と関連?	413 ~ 414・417
SD-542	21-19		0.58 ~ 0.99	0.16 ~ 0.23	SD-508 と関連?	413 ~ 414・417
SD-560	22-18	SK-71 より古	0.19 ~ 0.58	0.08 ~ 0.13	SD-686 と関連?	413 ~ 414・417 ~ 418
SD-686	22-18	SK-572 と重複	0.46 ~ 0.58	0.03 ~ 0.06	SD-560 と関連?	413 ~ 414・418
SD-814	19-20	SD-823 と重複	1.10 ~ 1.74	0.12 ~ 0.15		413 ~ 414・417 ~ 418
SD-815	19-19、 20-19・20		0.42 ~ 0.69	0.04 ~ 0.16	古墳時代の SD-41・42 と関連?	413 ~ 414・ 418 ~ 419
SD-816	18-19、19-20		0.28 ~ 0.63	0.14 ~ 0.30	SD-818 と連続?	413 ~ 414・419
SD-817	17-19		0.18 ~ 0.43	0.02 ~ 0.10	SD-818・826 と関連?	413 ~ 414・419
SD-818	17-19	SK-813 より古、SK-819 と重複	0.25 ~ 0.52	0.06 ~ 0.19	SD-816・817・826 と関連?	413 ~ 414・419
SD-823	19-20	SD-814 と重複	0.36 ~ 0.41	0.08		413 ~ 414・419 ~ 420
SD-826	17-19		0.52 ~ 0.58	0.02 ~ 0.09	SD-817・818 と関連?	413 ~ 414・420

時期不明の柱穴状土坑 132 基 (P-240・244 ~ 249・255 ~ 260・268 ~ 270・285・291・296・302・309 ~ 313・320・323・324・332 ~ 334・340・356 ~ 370・375・376・378 ~ 392・394 ~ 404・406・407・409 ~ 418・420 ~ 422・428・429・431 ~ 433・440 ~ 442・445・453・458 ~ 463・467・468・515・548・549・579・607 ~ 611・617・618・695・700 ~ 702・704 ~ 710・805) は第 140 表 (p.420 ~ 426) を参照。

時期不明の土坑 142 基 (SK-1・5・68・77・202・203・209・212 ~ 215・223・225・226・228 ~ 231・234・238・239・241 ~ 243・253・254・262・264・267・271 ~ 273・276 ~ 278・287 ~ 290・294・297 ~ 301・306・317・318・321・327 ~ 329・336 ~ 338・341・347 ~ 349・351・353 ~ 355・372・393・405・408・435・447・450 ~ 452・454・457・502・511 ~ 514・517・519・523 ~ 526・528・532・536・537・545・554・555・557 ~ 559・562 ~ 564・566 ~ 568・572・576・581 ~ 583・585・592・595 ~ 597・604 ~ 606・612 ~ 616・619・620・630 ~ 632・639・656・657・673・675・680・682・685・694・804・806・808・810 ~ 813・822) は第 141 表 (p.427 ~ 438) を参照。

時期・性格不明の遺構 (SX-218 は焼土、SX-308 は攪乱の可能性が高い掘り込み)

	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ・厚さ (m)	掲載ページ
SX-218	19.0-17.0			径 0.17 × 0.24	厚さ 0.02	441
SX-308	19-18、20-18	長楕円形	SI-51・SI-104・SK-436・SE-344・P-428 より新	東西 4.36 × 南北 7.94	深さ 0.20 ~ 0.30	441 ~ 442

例 言

1. 本書は、独立行政法人都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴い発掘調査を実施した東谷・中島地区遺跡群の内、権現山遺跡の SG2 区・SG5 区・SG9 区・SG10 区・SG15 区（宇都宮市東谷町字立野・字杉村、同市砂田町字吉原・字原田および河内郡上三川町大字磯岡字西谷に所在）と、磯岡遺跡 SG9 区（河内郡上三川町大字磯岡字西谷所在）の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、財団法人とちぎ未来づくり財団が独立行政法人都市再生機構と受託契約を締結し、埋蔵文化財センターが実施している。区画整理事業地内各遺跡の発掘調査は平成 6 年度（1994 年度）から平成 19 年度（2007 年度）まで実施した。

各遺跡周辺の確認調査は、平成 6・7 年度（1994・1995 年度）に実施した。権現山遺跡の本調査は、平成 7 年度（1995 年度）に SG2 区、平成 8 年度に SG1 区、平成 9 年度に 2 区、平成 10 年度に 3 区と SG5 区、平成 11 年度に 4 区と SG9 区・SG10 区、平成 12 年度に SG15 区の調査を実施した。磯岡遺跡 SG9 区の本調査は、権現山遺跡 SG9 区と一緒に平成 11 年度（1999 年度）に実施した。また、平成 17～24 年度に、上記各地区の整理事業を実施した。

今回の報告書では磯岡遺跡 SG9 区と権現山遺跡南半部（SG2 区・SG5 区・SG9 区・SG10 区・SG15 区）を報告する。権現山遺跡の北部は『東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』（2010）で報告し、各地区の旧石器～弥生時代遺物もそこで掲載した。磯岡遺跡は、SG9 区以外を『東谷・中島地区遺跡群 No.1 磯岡遺跡（I 区）』（1999）と『東谷・中島地区遺跡群 6 磯岡遺跡（2～7 区）』（2005）で報告済みである。

3. 東谷・中島地区遺跡群の発掘調査は以下の担当者により実施した。

平成 6 年度 菅谷 豊、塚本師也、塚原孝一

平成 7 年度 中山 晋、稲木 実、関口正明、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、安永真一、藤田直也

平成 8 年度 中山 晋、稲木 実、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、石川幸弘、藤田直也

平成 9 年度 初山孝行、小島昭寿、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、石川幸弘、高野瑞枝、藤田直也

平成 10 年度 初山孝行、松本 敏、名越侍郎、岡部正晴、小島昭寿、増山孝之、山本訓志、中村享史、塚原孝一、内山敏行、石川幸弘、高野瑞枝、柿沼利幸、藤田直也、大島美智子、田中裕子

平成 11 年度 田代 隆、松本 敏、名越侍郎、岡部正晴、小島昭寿、後藤信祐、中村享史、塚原孝一、内山敏行、高野瑞枝、柿沼利幸、上原康子、藤田直也、大島美智子、田中裕子、（発掘補助員）佐藤 斉

平成 12 年度 田代 隆、名越侍郎、江頭 進、中村享史、内山敏行、上原康子、藤田直也、矢野里織、（発掘補助員）佐藤 斉、田崎真理

平成 13 年度 田代 隆、江頭 進、中村享史、内山敏行、谷中 隆、江原 英、藤田直也、矢野里織、（発掘補助員）田崎真理

平成 14 年度 田代 隆、江頭 進、馬場秀典、中村享史、内山敏行、谷中 隆、藤田直也、矢野里織、（発掘補助員）田崎真理

平成 15 年度 田代 隆、小出功一、馬場秀典、中村享史、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、塚田浩久、（発掘補助員）岡田 圭、田崎真理

平成 16 年度 田代 隆、津野 仁、小出功一、馬場秀典、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、（発掘補助員）田崎真理

平成 17 年度 田代 隆、津野 仁、小出功一、馬場秀典、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、

(発掘補助員) 田村雅樹

平成 18 年度 田代 隆、津野 仁、篠原浩恵、内山敏行、谷中 隆、中山真理、(発掘補助員) 津野田陽介

平成 19 年度 後藤信祐、大瀧貴史、石田善成、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、宮田宜浩、峰崎武昭、田村雅樹、(発掘補助員) 津野田陽介

平成 20 年度 後藤信祐、内山敏行、今平昌子、亀田幸久

平成 21 年度 塚原孝一、内山敏行、今平昌子、亀田幸久

平成 22 年度 内山敏行、今平昌子、亀田幸久、藤田直也

平成 23 年度 内山敏行、今平昌子、亀田幸久

平成 24 年度 初山孝行、内山敏行、中村享史、亀田幸久

4. 各調査区の発掘調査は以下の担当者により実施した。

平成 7 年度 (権現山遺跡 SG2 区) 関口正明・藤田直也

平成 10 年度 (権現山遺跡 SG5 区) 山本訓志・石川幸弘・高野瑞枝・柿沼利幸・大島美智子・田中裕子

平成 11 年度 (権現山遺跡 SG9 区) 後藤信祐・松本 敏・塚原孝一・大島美智子

平成 11 年度 (磯岡遺跡 SG9 区) 後藤信祐・松本 敏・塚原孝一・大島美智子

平成 11 年度 (権現山遺跡 SG10 区) 内山敏行・柿沼利幸・田中裕子・佐藤 斉

平成 12 年度 (権現山遺跡 SG15 区) 江頭 進・名越侍郎

5. 本文の執筆は後藤信祐・塚原孝一・谷中隆・内山敏行、編集は内山敏行が行った。第 1 章第 1・2 節と第 2 章第 1 節は、既刊の報告書 13 冊(『東谷・中島地区遺跡群』1～13)の記述をもとに、権現山遺跡・磯岡遺跡にかかわる部分等を加除修正した。これ以外の執筆分担は、遺構が後藤・谷中・塚原・内山、遺物は谷中・内山、まとめは内山が担当した。鍛冶関連遺物の記述は穴澤義功氏(たたら研究会)の御指導をいただいた。自然科学分析結果は平井昭司氏(東京都市大学名誉教授)・株式会社古環境研究所およびパリノ・サーヴェイ株式会社による。

6. 鍛冶関連遺物の分類と観察を穴澤義功氏、鍛冶関連遺物の中性子放射化分析を平井昭司氏、古環境関係の自然科学分析を株式会社古環境研究所、縄文時代石器石材鑑定を石岡智武氏(パリノ・サーヴェイ株式会社)、中世井戸出土桶の樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社、この桶の保存処理を東都文化財研究所、基準点測量・航空写真撮影・航空写真測量と遺跡周辺全体図デジタルトレースを中央航業株式会社、SG5 区と SG10 区航空写真のデジタル接合作業を株式会社パスコにそれぞれ委託した。

7. 遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は内山が撮影した。遺物の X 線写真は車塚哲久、航空写真は中央航業株式会社が撮影した。

8. 発掘調査から報告書作成まで、次の諸機関及び諸氏に御協力、御指導を頂いた。記して謝意を表したい。都市再生機構栃木開発事務所、宇都宮市教育委員会、上三川町教育委員会

金武重・朴升圭・趙晟元・亀田修一・齋藤瑞穂・田中清美・橋本博文(五十音順、敬称略)

9. 各地区の調査成果は、栃木県教育委員会『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』20 平成 8 年度(1996)～『同年報』23 平成 11 年度(1999)、『埋蔵文化財センター年報』第 7 号(平成 9 年度)～第 10 号(平成 12 年度版)、宇都宮市教育委員会文化課『宇都宮市文化財年報』第 13 号〔平成 8 年度〕～第 16 号〔平成 11 年度〕で一部概要が公表されているが、本書をもって正報告とする。

10. 本報告書名は遺跡名ではなく、業務名である。

11. 本遺跡の遺物・図面・写真等は財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが保管している。

12. 発掘調査(確認調査・本調査)には次の方々の御協力を得た。

会沢嘉明、青木良人、青柳 茂、阿久津正代子、阿久津フミ、阿久津昌子、鮎澤賢三、新井みや子、荒井光美、飯田国松、石井けい子、石川晶子、石川東司、石川てる子、石崎富美子、石崎幸子、石塚洋太郎、石渡ヨシ

イ、磯崎恵子、石濱ふみ子、伊東祐子、稲垣 節、稲川洋子、稲葉るみ子、猪瀬岩夫、今井光子、入江キイ、入江文子、入江タカ子、入江 徹、入江つや子、入江通子、岩本文子、上野久子、白井ツヤ、榎本健夫、大垣カツ、大垣一子、太田勝雄、太田リエ子、大塚スガ、大塚三代子、大塚サダ、岡田紀子、岡田イセ、岡田 満、小澤一雄、尾島サキ、片山重子、加藤マツエ、川島利子、川島 昭、川畑忠久、木村昭絵、工藤英子、黒川法子、毛塚雪子、郷間和子、小島清子、小高真理子、小林マス、小林ミツエ、斉藤みつ、斎藤幸子、斎藤近由、坂井原弓子、坂入廣子、坂入厚子、坂本キミ子、笹崎剛夫、佐藤武尚、佐藤ヨシ、佐藤つや子、佐藤ミサ子、下谷文男、篠原信子、柴タミ子、清水タネ、椎貝フヂエ、椎貝祥子、白井チセ子、杉山 巧、鈴木恒正、鈴木ヨシ子、高木ハマ、高嶋絹子、高嶋勝征、高嶋典子、高嶋ミヨ子、高嶋キヨノ、高島秀子、高嶋一平、高田滋子、高野ヨシ子、高橋平次、高橋松男、高橋洋子、高秀ハツエ、高松美和子、高松米子、高山シツ江、田崎真理、田崎照明、田崎信夫、田仲静男、田仲ヤス、田仲コト、田中征子、対馬順子、鶴見世及、寺内千代子、寺内 尉、寺内キヌ、寺内ミツエ、寺内キイ、寺内千代子、豊田孝子、直井房一、直井清之、中山伸子、野口忠士郎、野口コウ、野崎久美子、野澤 守、野沢トミ、野沢トシ、野沢伸嘉、野澤 充、野沢トシ、橋本フヂ、畠山 弘、馬場キワ、林 孝行、伴 三千子、平井克美、平井待子、平石キヨノ、広田愛子、深澤光一、福田ツヤ、福田林蔵、福田純子、藤原美枝、古谷安司、細野重信、本田 衛、本牧キン、増淵キミ、増淵皓三、増淵三男、増淵フミ、増淵正弘、増山晃広、真分フキ、宮本スミエ、宮本俊明、宮本恒雄、室井キン、茂垣 栄、李保美枝、望月シズイ、百瀬洋子、森田幸江、谷田部キヨ子、柳田加子、柳田悦子、梁嶋ヨシ、山崎洋子、山崎千代子、吉沢千代、吉田みつえ、渡辺洋子、渡辺四郎、渡辺フミ。

13. 整理・報告書作成作業には次の方々の御協力を得た。

天野崇弘・荒川（篠原）知美・石下泰枝・石田静枝・石濱有希子・出井百合子・伊藤恵美子・市川貴子・稲葉順子・沖田有孝・太田由美・生内千春・尾見 愛・蒲生光子・川瀬晶子・齋藤久美子・篠原彩子・芝田恵美・菅野路子・鈴木実花・角田（飯塚）織絵・関 和美・高橋（赤荻）久美子・高松美和子・田崎 望・鶴見里子・斗沢史子・豊原あき子・中山（田崎）真理・根本明美・野沢茂子・比嘉睦美・福田春美・藤原真弓・松崎和子・松本恵子・丸茂智子・本橋敬子・茂呂由実・横田通子・米野裕子・和田恵美・渡辺都

14. 遺跡・遺構・遺物の記載方針は下記のとおりである。

〔遺跡〕

公共座標 各調査区の全体図には、国土調査法による平面直角座標第 IX 系の座標値を記入した。日本測地系による座標値の他に、2002 年 4 月から使用されている世界測地系の座標値もあわせて表示した。緯度・経度の表示は世界測地系による。

遺跡略号 権現山遺跡南部各地区と磯岡遺跡 SG9 区の略号は、調査区周辺を代表する小字名に対応して UT-SG（宇都宮市 - 杉村）を用いた。権現山遺跡北部では UT-GN（宇都宮市 - 権現山）の略号を用いた地区もある。

権現山遺跡各地区の略号は UT-GN-II（権現山遺跡 2 区）、UT-GN-III（権現山遺跡 3 区）、UT-GN-IV（権現山遺跡 4 区）、UT-SG- I（権現山遺跡 SG1 区）、UT-SG-II（権現山遺跡 SG2 区）、UT-SG- V（権現山遺跡 SG5 区）、UT-SG-IX（権現山遺跡 SG9 区）、UT-SG- X（権現山遺跡 SG10 区）、UT-SG-XV（権現山遺跡 SG15 区）である。

磯岡遺跡 SG9 区の略号は UT-SG-IX である。権現山遺跡 SG9 区と一括して調査したので、同一の略号を

遺跡名・地区名新旧対応表

報告書掲載遺跡名	遺跡略号	（発掘調査時点の旧遺跡名）	報告書・参考事項
権現山遺跡 2 区	UT-GN-II	（権現山遺跡 II）	『東谷・中島地区遺跡群 10』
権現山遺跡 3 区	UT-GN-III	（権現山遺跡 III 区）	『東谷・中島地区遺跡群 10』
権現山遺跡 4 区	UT-GN-IV	（権現山遺跡 IV 区）	『東谷・中島地区遺跡群 10』
権現山遺跡 SG1 区	UT-SG- I	（杉村遺跡 I）	『東谷・中島地区遺跡群 10』 ※杉村遺跡 SG1 区と一緒に調査し略号も同じ
権現山遺跡 SG2 区	UT-SG-II	（杉村遺跡 II）	本書
権現山遺跡 SG5 区	UT-SG- V	（杉村遺跡 V）	本書
権現山遺跡 SG9 区	UT-SG-IX	（杉村遺跡 IX 区）	本書 ※磯岡遺跡 SG9 区と一緒に調査し略号も同じ
権現山遺跡 SG10 区	UT-SG- X	（杉村遺跡 X 区）	本書
権現山遺跡 SG15 区	UT-SG-XV	（杉村遺跡 XV 区）	本書
磯岡遺跡 SG9 区	UT-SG-IX	（杉村遺跡 IX 区）	本書 ※権現山遺跡 SG9 区と一緒に調査し略号も同じ

使用している。現地調査時名称の「杉村遺跡 IX 区 東区」が磯岡遺跡 SG9 区に相当する。

東谷・中島地区の確認調査を実施した部分の略号は UT-TN（宇都宮市 - 東谷・中島地区）で、権現山遺跡南部および磯岡遺跡 SG9 区の確認調査出土遺物には UT-TN-SG（宇都宮市 - 東谷・中島地区 - 杉村）と注記した。

発掘調査時には、地区番号をローマ数字（I 区～X 区）で表記した。また、「杉村遺跡 V」以前と「権現山遺跡 II」以前は「区」の文字が付いていない。本書では「アラビア数字+区」（1 区～15 区）に統一した。

〔遺構〕

遺構名 略号は、竪穴建物跡を SI、溝状遺構を SD、土坑を SK、柵列を SA、掘立柱建物跡を SB、井戸を SE、その他（周溝遺構・集石遺構・道路状遺構・遺物出土地点）を SX とした。土坑は SK で、柱穴状土坑は略号を P とした場合もある。原則として現地調査時の遺構番号を使用し、遺構の性格認定に伴って記号を変更した場合はある（例：旧名称 SG10 区 SK-428 → SG10 区 P-428）。また、以下の遺構は、現地で使用した旧番号から変更・統一を行った。（ ）内が旧遺構名である。

SG2 区 SX-47（← SG2 区 C 区石積）	SG10 区 SI-51b（← SG10 区 SI-109 新期）
SG5 区 SI-4 の張出ピット（← SG5 区 SK-48）	SG10 区 SI-51c（← SG10 区 SI-109 古期）
SG5 区 SD-44 の東部（← SG5 区 SI-102 に連続する北東部）	SG10 区 SI-51b の南東主柱穴 P4（← SG10 区 SK-438）
SG9 区 SX-54（← SG9 区 SK-54・55・56）	SG10 区 SI-51c の北東主柱穴 P1（← SG10 区 SK-430）
SG10 区 SI-18 の貯蔵穴（← SG10 区 SK-295）	SG10 区 SK-94・95（← SG10 区 SI-94・95 貯蔵穴）
SG10 区 SI-19a・b の一部（← SG10 区 SI-93・96）	SG10 区 SI-105 の主柱穴 P1～P4（← SG10 区 SK-279・280・281・282）
SG10 区 SI-21 掘方の一部（← SG10 区 SK-284）	
SG10 区 SI-34a（← SG10 区 SI-103）	SG10 区 SI-113a（← SG10 区 SI-113）
SG10 区 SI-38 の貯蔵穴（← SG10 区 SK-434）	SG10 区 SI-113b（← SG10 区 SI-116）
SG10 区 SI-47 の貯蔵穴（← SG10 区 S-98）	SG10 区 SK-286（← SG10 区 SI-97 の一部）
SG10 区 SI-51b・c（← SG10 区 SI-109）	SG15 区 流路 1・流路 2（← SG15 区 旧河道 A・旧河道 B）
SG10 区 SI-64b（← SG10 区 SI-112）	磯岡遺跡 SG9 区 SI-49 の付属施設（← SG9 区 SK-45・46・51）
SG10 区 SI-75 の張出ピット（← SG10 区 SK-586）	
SG10 区 SI-51a（← SG10 区 SI-51）	

縮尺 遺構図の縮尺は、竪穴建物跡を 1/80、カマドを 1/40、掘立柱建物跡・遺物集中地点・井戸を 1/80（古墳時代井戸は 1/40）で示した。SG2 区の集石遺構は 1/20、流路跡は平面図 1/200 である。土坑は、小形土坑や遺物の多い場合が 1/40 で、それ以外の土坑および柱穴状土坑が 1/80。柵列と柱穴群は 1/80 または 1/100 で方形柵列全体図が 1/300。その他の遺構は、各図中にスケールで示した。

土層・柱穴等の番号 遺構内外の土層や、竪穴建物跡・掘立柱建物跡に伴う柱穴・土坑などに対して現地で与えた P1・P2・P3…などの番号は、整理作業時に番号を変更しないように心がけた。一部においてやむをえず整理・変更したものがある。

方位 図示した方位は、小縮尺の地形図（第 1 図）が真北、他の図は座標北（平面直角座標第 IX 系の X 軸方向）である。遺構の主軸方位は座標北に対する振れを示す。竪穴建物跡の主軸方位は、縦横 2 軸のうち、入口施設を通る方の軸で示し、入口が不明の場合は竪穴の長軸方向で示した。

標高 断面図基準線の値は海拔標高で、水系記号または縮尺の脇に示した。

〔遺物〕

計測値 「口」・「頸」・「底」はそれぞれの径、「高」は器高、「大」は最大径、「復」は復原値、「残」は残存値、「推」は推定値を表す。

縮尺 遺物図の縮尺は、次のとおりである。土師器・須恵器・中近世土器は 1/4、土師質小皿（かわらけ）・土製品・焼粘土塊・石製品・鍛冶関連遺物は 1/2 または 1/4、鉄製品と玉類は 1/2、小形の玉は 1/1。石器

類は編物石・自然礫・金床石を 1/8（金床石剥片は 1/4）、縄文時代土器・土製品と礫器・スタンプ形石器・石斧・磨石を 1/4、スクレイパー・石鏃を 2/3 とした。これらは原則で、例外もある。

破片の拓影図 縄文土器は外面 - 断面または外面 - 内面 - 断面、土師器・須恵器などは内面 - 断面 - 外面の順序で配置した。

器質 須恵器は断面を黒塗り、金属製品は斜線、その他の遺物は白抜きにして示した。

器面調整と施釉 古墳時代以降の土器は、ナデの範囲を破線、ケズリの範囲を実線、ケズリ方向を矢印、漆仕上げと施釉の範囲を一点鎖線で示した。

色調 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1967『新版 標準土色帖』の 18 版（1996）により表示する。土器・土製品は焼成当時の色調に近い部分で観察し、黒斑や二次的なスス・オコゲ・被熱変色・塗彩は別の特徴として扱う。

胎土 混和材の多少を基準に、「粗い／やや粗い／やや緻密／緻密」とする。

・混和材の種類：径 0.2mm 未満は「微粒」、0.2～0.5mm は「細粒」、0.5～2.0mm は「粗粒」、2.0mm 以上は「礫」とする。

・混和材の色は「灰色・白・黒・赤・褐色・透明」とする。透明と白の中間的なものは「半透明」とした。雲母は「白」・「黒」または「金色」とする。

焼成 「硬質／やや硬質／やや軟質／軟質」とする。特別に示す必要がある場合は「良好」などと記す。

不掲載遺物の出土量 各遺構から出土した遺物のうち、実測図を掲載しなかった破片の数と重量を計量して記述した。別時代の遺物は除外したが、同時代で異なる時期の混入遺物は除外していない。

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

宇都宮テクノポリス計画は、「高度な技術を持つ産業の集積、産・学・官の共同研究と技術交流による頭脳ネットワークの形成、そして自然と都市機能が調和した快適な生活環境づくり」を目標に栃木県が昭和58年7月に栃木新時代創造計画で開発計画を策定し、翌年5月に高度技術工業集積地域開発促進法（テクノポリス法）に基づき通商産業省（当時）の開発計画の承認を受けた。

この計画を受け、昭和60年度より県企画部と県教育委員会（以下「県教委」という）は開発区域内遺跡の取り扱いについて協議を開始した。平成元年度には栃木県と宇都宮市が住宅・都市整備公団（以下「公団」という）に開発の要請を行った。公団はこれを了承し、平成2年度より開発区域の用地取得に入った。

公団が事業主体となるテクノポリス計画は、宇都宮テクノポリスセンター土地区画整理事業と東谷・中島土地区画整理事業の2地区である。前者事業区域は、宇都宮市野高谷町・刈沼町・板戸町にまたがる地区（以下「センター地区」という）の177.2haに及び、「住宅」を核に県工業技術センター、産業支援施設、商業施設、民間研究施設、小・中学校などを整備したニュータウン計画で、テクノポリスが目指す「産・学・住・遊」の拠点整備をも担う。後者事業区域は、宇都宮市東谷町・中島町・砂田町・平塚町・屋板町・上横田町・西刑部町と上三川町磯岡・西汗にまたがる地区（以下「東谷・中島地区」という）の137.5haに及び、北関東自動車道路や新4号国道などの広域交通網と結び付いた利便性を生かし流通業務施設や先端技術、高度技術産業の研究所・工場などの整備を図ることにある。

平成2年7月には公団から県教委へ事業地区内の埋蔵文化財の有無について照会がなされた。県教委は、東谷・中島地区について「周知されている遺跡6か所と遺跡の可能性のある区域を含め、約90haの確認調査が必要」と回答した。その後、開発と埋蔵文化財調査のスケジュールを調整する協議が継続された。

平成6年8月、埋蔵文化財保護と開発事業の円滑な推進を図るため、県教委・宇都宮市・公団・埋蔵文化財センターの四者が事業区域内の分布調査を実施した。その結果、センター地区では周知の遺跡8か所・面積267,000㎡、試掘が必要な地点7か所・面積95,500㎡、東谷・中島地区では周知の遺跡12か所・面積490,400㎡、試掘が必要な地点8か所・面積340,600㎡であった。この結果を基に発掘調査を開始する協議が行われ、同年9月1日付けで県教委の調整のもと、公団と（財）栃木県文化振興事業団は「東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」の受託契約を締結し、確認調査を開始した。平成7年4月からは、周知の遺跡の本調査と確認調査を継続中である。センター地区については、平成7年9月1日付けで公団と（財）栃木県文化振興事業団が「宇都宮テクノポリスセンター地区埋蔵文化財発掘調査」の受託契約を締結し、確認調査を開始した。翌年からは、調査規模の拡大に伴い宇都宮市が同地区の発掘調査を担当している。

平成8年12月には東谷・中島地区、翌年4月にはセンター地区の区画整理事業が建設大臣の認可を受け、開発事業が開始された。公団・県文化財課・宇都宮市・埋文センターは、年数回の綿密な協議を重ねつつ開発事業計画に沿った発掘調査を行っている。なお、開発事業は平成11年から都市基盤整備公団、平成16年7月からは都市再生機構に継承された。（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センターは外郭団体の統合再編により平成12年度から（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、平成23年度から（財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターとして業務を継承している。

第1章 調査の経緯



第1図 東谷・中島地区位置図 (1/10万)

第2節 調査の方法

独立行政法人都市再生機構（旧住宅・都市整備公団および都市基盤整備公団）による東谷・中島土地区画整理事業の事業区域は、東西約1.0km、南北約2.5kmの137.5haに及ぶ。

調査対象地区は、周知の遺跡範囲及び平成6年8月に県教育委員会事務局文化課（現文化財課）が事業予定地を踏査した成果に基づいて決定された。この結果、10地区12遺跡、調査対象面積831,000㎡が把握された。対象面積が膨大なため、これらの遺跡範囲の確定及び調査事業量の把握が急務とされた。よって、住宅・都市整備公団による用地取得の完了した部分より確認調査を実施し、その結果に基づき概ね公団の示す調査優先地区について順次本調査を行った。確認調査の結果によっては遺構外とされる地区もあり、随時本調査地区より除外した。また、平成9年には発掘調査の進展に伴い調査対象地区の見直しを行った。この結果、調査対象地区は確認調査により遺跡外とした地区も含め10地区12遺跡、896,800㎡となった。さらに2006（平成18）年度に面積の見直しがなされ、総面積887,600㎡となった。

確認調査

本調査に先行する確認調査は、遺跡範囲を確定して遺構全体量を把握することを目的とした。調査にあたっては調査対象範囲内にトレンチを設け、概ねローム層上面まで掘削することにより遺構・遺物の有無、また、その遺存状況の把握に努めた。調査対象面積に対するトレンチ総面積は5～10%を目安とした。

グリッド設定 調査対象地区の南西外を原点（ $X=0, Y=0$ ）とする局地座標を定めた。原点は、日本測地系による平面直角座標第IX系 $X=52,800, Y=6,400$ （世界測地系では $X=53154.1623, Y=6107.0425$ ）の位置である。この座標は調査対象地区全体を覆い、20m単位に南から北へ $X=0 \sim 130$ 、西から東へ $Y=0 \sim 60$ と展開する。また、20m×20mのグリッドをその南西隅の座標値で呼ぶ。一グリッド内の細分は小数点以下の座標値を用い、同様の方法で行う。以上のグリッドは、本調査時においても踏襲した。

トレンチの設定 トレンチは幅約2mで、グリッドラインの北側に沿って、20ないし40mに一本の割合で東西方向に設けることを基本とした。これは、地形が概ね南北に伸びる低地部とその東西の低台地部により形成されていることによる。記号'TX'にX軸の座標値を添えてトレンチの名称とし、必要に応じてY軸の座標値（ $Y=0 \sim 60$ ）を添える。なお、対象地区の微地形の相違等状況の変化によっては柔軟に対応した。

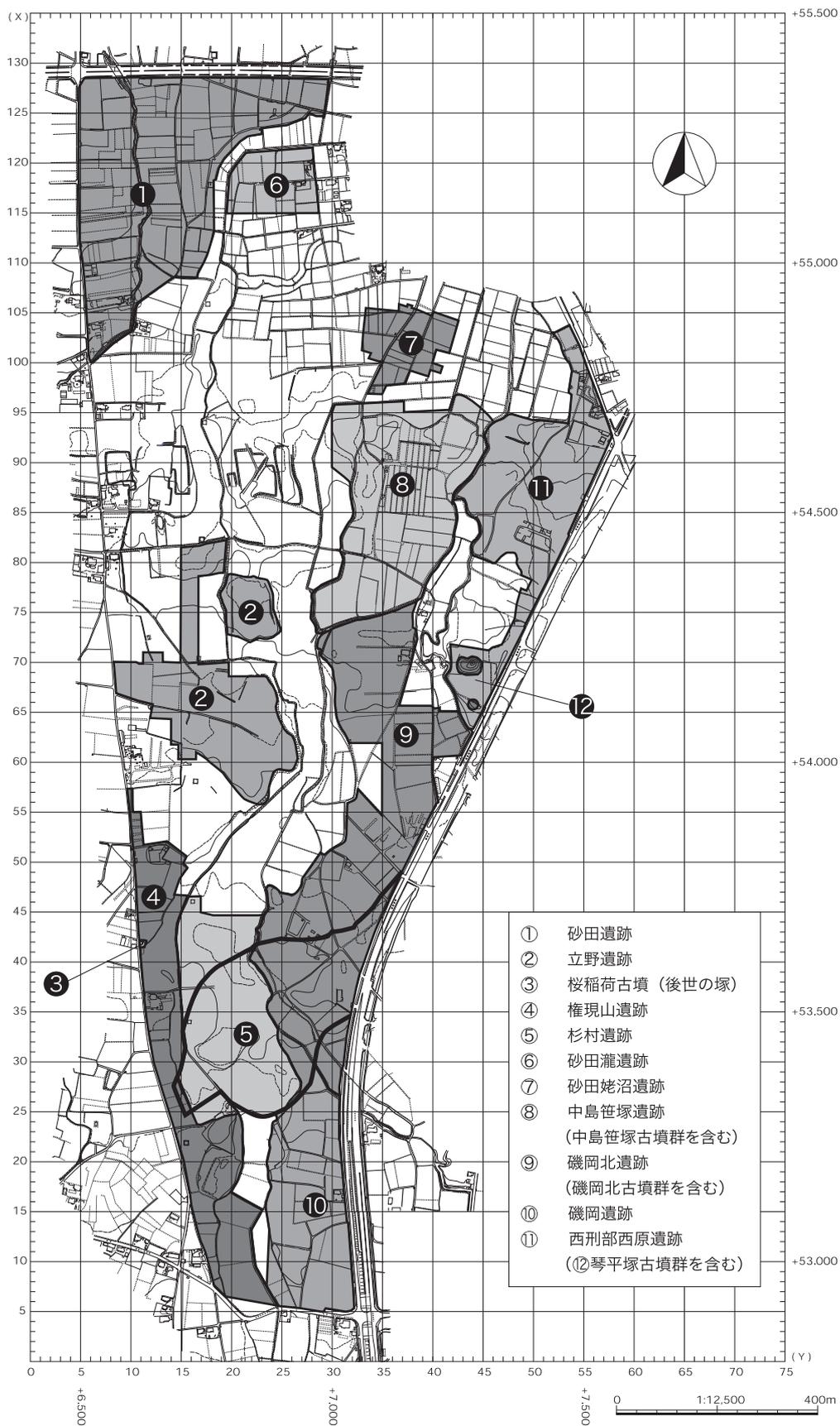
トレンチの発掘 重機を用い、精査の後、図面と写真による記録を行い、遺物を取り上げた。また、必要に応じ、一部遺構の精査、自然科学分析を実施した地区もある。権現山SG2区北東部・SG10区北側と東側・SG15区周辺では、1994年度確認調査トレンチの土層試料でテフラ検出と古環境復原のための分析を行った（第7章）。

本調査

公団の示す地区とその優先順位に従って実施した。これは公団の用地取得状況と工事展開に従ったものである。よって、調査時にはこれを10地区12遺跡における調査地区とし、遺跡名に算用数字を付して調査地区名とした。2000（平成12）年度までは算用数字ではなくローマ数字（I区, II区, III区…）を使用していたが、この報告書ではすべて算用数字を用いる。遺構の管理は各調査区で行い、種別によらず原則として通し番号とした。遺物は出土遺構単位で管理し、種別によらず通し番号とした。

現地調査は、重機による表土除去、基準杭設定、遺構確認、各遺構精査、航空写真撮影・測量、遺物洗浄、必要に応じ自然科学分析等の手順で概ね実施した。調査方法は担当者間で統一を図り、図面・写真等の等質な記録作成に努めた。表土除去、基準点測量、航空写真撮影・測量等は外部委託して効率化を図った。遺構が少ない権現山遺跡SG2区・SG15区および遺構がない権現山遺跡3区以外は、各地区の航空写真を撮影し、調査区の遺構配置と等高線を図化した。

第1章 調査の経緯



第2図 東谷・中島地区遺跡群遺跡位置図

第1表 東谷・中島地区遺跡群遺跡一覧表

No. 遺跡名	略号	所在地	面積 (㎡)	時代・種別	調査前の状況
1 砂田遺跡	UT-SN	宇都宮市砂田町字瀧、同市 屋板町字赤沢・字赤沢向、 同市中島町字十里木他	145,200	旧石器剥片、縄文時代陥穴、 古墳～平安集落、方形周溝、 近世墓、近世以降の炭窯	田畑等
2 立野遺跡	UT-TT	宇都宮市東谷町字立野、 同市中島町字小路谷田	122,800	縄文・古墳時代と中世の集落、 弥生時代土坑、終末期方墳、 奈良時代竪穴建物、近世の溝	田畑・林
4 権現山遺跡 (3枚稲荷古墳を含む)	UT-GN UT-SG	宇都宮市東谷町字立野・ 字杉村・字下原、 同市砂田町字吉原・字原田、 上三川町磯岡字西谷	92,000	古墳時代集落・豪族居館、 縄文・平安時代竪穴建物、 奈良・平安時代の推定東山道、 中世集落、旧石器(尖頭器)	畑地等
5 杉村遺跡	UT-SG UT-GN	宇都宮市砂田町字原田他 上三川町磯岡字コムナセゴ	22,000	縄文～古墳・奈良時代集落、 奈良・平安時代の推定東山道	田畑・林等
6 砂田瀧遺跡	UT-ST	宇都宮市砂田町字瀧	60,000	縄文土器・中近世集落	田畑等
7 砂田姥沼遺跡	UT-SU	宇都宮市砂田町字姥沼	16,400	古墳～平安時代集落 中世の井戸・溝・土坑	田等
8 中島笹塚遺跡 (中島笹塚古墳群を含む)	UT-NK	宇都宮市砂田町 字笹塚・吉原・姥沼	91,100	旧石器剥片、縄文土坑、弥生 土器、古墳群 16基と土壇墓、 古墳～奈良時代と中世の集落	畑・林
9 磯岡北遺跡 (磯岡北古墳群を含む)	UT-SG	宇都宮市砂田町字笹塚、 上三川町磯岡字笹塚、 同町磯岡字コムナセゴ	128,100	縄文～奈良時代・中世集落、 古墳群 10基と土壇墓等、 奈良・平安時代の推定東山道	田等
10 磯岡遺跡	KM-IS	上三川町磯岡字中原・ 同町磯岡字屋敷西浦	72,000	縄文・古墳～平安時代集落、 弥生時代土坑	田畑等
11 西刑部西原遺跡 (12琴平塚古墳群を含む)	UT-NS	宇都宮市平塚町西原、 同市西刑部町西原、 上三川町西汗字西赤堀	138,000	縄文時代陥穴、旧石器・古墳～ 平安時代集落、古墳群 14基、 奈良・平安時代の推定東山道	田畑等

・4・9・10の各遺跡は5杉村遺跡とは別遺跡だが、現地調査時に「杉村遺跡」(UT-SG)の名称や略号を用いた部分がある。
・確認調査の略号はUT-TNとし、本遺跡群内における位置はトレンチ及びグリッド番号で示した。

第3節 調査の経過

【確認調査】平成6・7年度(1994・1995年度)

関係各機関との協議、事務処理、調査方針の策定を経て、本書で報告する権現山遺跡南部と磯岡遺跡の確認調査を1994～95(平成6・7)年度に実施した。作業の手順は前節の通りである。基本的には重機によるトレンチ発掘を先行させ、トレンチ内精査、次いで遺構確認状況等の写真撮影、実測等記録の順序で行った。

1994(平成6)年度には、1995年2月28日から3月末まで、磯岡遺跡の台地上および低地で確認調査を行った。権現山遺跡SG2区・SG15区およびその北側に続く低地部にはTX11～TX23を設定し、Hr-FA、As-BおよびAs-Cテフラ層を含む低地堆積層や土器片などを確認した。古墳時代のAs-C・Hr-FAと古代のAs-Bテフラがごく薄い層として認められる部分が多い。水田遺構などは確認されなかった。

1995(平成7)年度には、1996年1月8日から2月14日まで、権現山SG5区・SG9区・SG10区と磯岡遺跡SG9区の確認調査を行った。権現山SG5区に試掘トレンチTX11～TX16、権現山SG10区北半部に試掘トレンチTX22～TX24、権現山SG9区の中央区に試掘トレンチTX6～TX8、磯岡SG9区に試掘トレンチTX7、磯岡SG9区の南北隣接地に試掘トレンチTX6～TX10を設定して、遺構の有無や密度を確認した。

以上のうち、権現山遺跡SG2区からSG15区にかけて(12-21、13-21、14-20グリッド)とSG10区周辺(16-19、18-22グリッド)では、低地堆積土層に対するテフラ検出分析とプラント・オパール分析を実施し、うち2地点では花粉分析も実施した(第7章)。

【本調査】平成8～10年度(1995～2000年度)

磯岡遺跡全体では、県調査区(区画整理分と高速道路分)に町調査区を合計するとこれまでに46,620㎡の調査を実施している。そのうち磯岡遺跡SG9区は600㎡の調査を実施した小地区である。また、権現山遺跡は2・3・4・SG1・SG2・SG5・SG9・SG10・SG15区の9地区に分けて合計71,900㎡の調査を実施し

第1章 調査の経緯

た。これらのうち、本書で報告する権現山遺跡南部（SG2区・SG5区・SG9区・SG10区・SG15区）と磯岡遺跡SG9区の本調査実施経過を以下に示す。

【権現山遺跡南部】

以下に示す各調査区の地名と番地は、開発以前のものを示した。区画整理終了後は、SG5区西半部とSG10区西端部は宇都宮市東谷町地内の都市計画道路（無番地）になり、それ以外の権現山遺跡南部は栃木県河内郡上三川町大字磯岡421-1番地に変更されて大形商業施設およびその敷地・駐車場になっている。

権現山遺跡 SG2区 上三川町大字磯岡字西谷407-1・407-2・408-1・408-2・408-5・409-1・409-2・410-1 7,000㎡ 溝1条、土坑51基、集石遺構1基、自然流路7条

平成7年度（1995年12月4日～1996年3月18日）

調査担当者：関口正明・藤田直也

1994（平成6）年度の確認調査で設定した3本の試掘トレンチ（TX11～TX13）を、12月4日から5日まで重機で再掘削した。続いて、12月6日と7日にはTX9とTX10を新規設定して掘り下げた。各トレンチの土層堆積状況を観察した後に、12月11～14日にA区とB区の表土除去、1月8～17日にC～F区の表土除去を重機で行なった。各小地区ごとに直線状の攪乱溝（後世の暗渠）を掘り下げ、また必要に応じてサブトレンチも設けて、12世紀初頭に降下したAs-Bテフラと、古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラの降下面を断面で確認した。テフラ層を参考にして古墳時代水田遺構の確認を目指したが、水田は認められなかった。群馬県域のように厚いテフラは降下しないので、耕作地ではすぐに攪乱されることが予想できる。したがって、Hr-FAの薄層が残るSG2区は水田に利用しなかったと考えられる。各小地区で認められた旧流路跡7箇所と、F区の中洲状微高地にある土坑群を調査した。3月18日にはSG2区の全景写真を撮影して現地作業を終了し、航空写真撮影は実施しなかった。区画整理の造成工事に伴う仮設の調整池として使用することが決定していたので、調査区の埋め戻しは行わなかった。現地調査時には小字西谷（にしや）を参考にして「西谷遺跡」（略号KM-NS）の呼称も使用し、調査終了後に「杉村遺跡II」（略号UT-SG-II）と呼び変え、最終的には遺跡名称を「権現山遺跡SG2区」（略号UT-SG-II）と決定した。

権現山遺跡 SG5区 宇都宮市東谷町字杉村912-1・912-2、東谷町字下原7・8・9・10 7,000㎡

竪穴住居跡37棟、掘立柱建物跡3棟、柵列遺構2箇所（居館柵1+その他の柵1）、溝12条（居館外郭溝2+その他の溝10）、井戸4基、土坑119基（円筒形土坑3基を含む）、柱穴状土坑74基、遺物集積遺構1基、性格不明遺構1基

平成9年度（1998年2月6日～1998年3月19日）

平成10年度（1998年4月20日～9月7日、1999年2月18日～1999年3月26日）

調査担当者：山本訓志・石川幸弘・高野瑞枝・柿沼利幸・大島美智子・田中裕子

重機で表土を除去した後に、98年2月10日から26日まで遺構確認作業、2月27日から遺構調査を行った。99年度は4月20日から作業を始めた。航空写真撮影は98年7月27・28日の両日に実施した。27日には方形柵列遺構だけに白線を入れた状態、翌日には全遺構に白線を入れた状態でそれぞれ撮影した。7月28日の撮影は立野遺跡3区を撮影するヘリコプターで権現山遺跡を同時に撮ったものである。航空写真測量も同時に実施したが、撮影時に水没していた低地調査区の等高線は記入できなかった。98年8月22日には、方形柵列遺構SA-151、竪穴建物SI-18・100・116・137、SD-43・44、祭祀遺構SX-118を中心として現地説明会を実施した。98年9月8日から99年2月15日（金曜日）までは調査を休止して砂田姥沼遺跡1区の調査に移動した。99年2月18日から権現山SG5区を再開して、夏に水没していた低地部の土坑群を中心に台地上の一部遺構も調査し、3月26日に終了した。補足作業として、99年4月15日に低地調査区の等高線を平板測量で追加記入して、4月27・28日にはSG10区表土除去の重機で低地部土層観察ベルトの表土を除去して土坑群を追加調査した。

権現山遺跡 SG9 区 上三川町大字磯岡字西谷 406-1・406-3・407-1・407-2・408-1・408-5・409-1・409-2 4,800㎡ 溝5条、道路状遺構1箇所、土坑21基

平成11年度(1999年12月24日～2000年3月24日)

調査担当者：後藤信祐・松本敏・塚原孝一・大島美智子

磯岡遺跡 SG9 区の西側に隣接する調査区である。現地調査時には磯岡遺跡 SG9 区と権現山遺跡 SG9 区をまとめて「杉村遺跡 IX 区」として実施した。「杉村遺跡 IX 区」の名称で調査を実施した 5,400㎡のうち、調査時に「中央区」「西区」と呼称した中央以西の 4,800㎡が権現山遺跡 SG9 区である。

12月24・27日と2000(平成12)年1月6～14日に表土を重機で除去して、1月24・25日に遺構確認作業を行い、1月26日から土坑群の調査を始めた。南東部に隣接する磯岡 SG9 区と一緒に、2月24日に航空写真を撮影した。2月28日には低地と微高地の土層やテフラを確認するための断ち割りトレンチを重機で掘り、3月3日から22日までトレンチの土層断面図を作成した。東にある磯岡遺跡5区を撮影する機会が3月9日にあり、権現山 SG9 区に断ち割りトレンチを設定した状況の航空写真を再度撮影した。3月7日から中央区東南部の低地を掘り下げて3月23日に低地部の等高線図を作成し3月24日に低地部の全景写真を撮影して、調査を終了した。

権現山遺跡 SG10 区 宇都宮市東谷町字杉村 911-1・911-2・912-1・913～915・916-1・916-2、同市砂田町字原田 434-2 13,400㎡ 竪穴建物跡88棟(他に SG5 区とまたがる竪穴建物2棟)、掘立柱建物跡1棟、井戸12基、溝48条、土坑208基、円筒形土坑9基、柱穴状土坑231基、焼土1。

平成11年度(1999年4月23日～2000年3月24日)

調査担当者：内山敏行・柿沼利幸・田中裕子・佐藤 齊

調査前は山林で、伐採終了後の抜根作業に4月2日から6日まで立ち会って遺物を回収した。現地表で確認できる溝痕跡 SD-201・204 の北・西・南辺を通る土手を設定した後に、4月23日から5月26日まで重機で表土を除去した。4月27日から遺構確認、5月14日に南端から遺構調査を開始した。6月30日に大雨で SG10 区と SG5 区のほぼ全体が水没した。これは、北関東自動車道の盛土の開口部から雨水が SG10 区に集中流入したことが原因だが、低地から僅かに高い低台地に立地する遺跡群であることをよく示す「水害」であった。6月8・9日には都賀町合戦場小学校、12月9日に宇都宮南高校、2月7日に宇都宮東 YMCA の体験学習を受け入れ、10月15日には埋蔵文化財センター職員研修で見学を行った。10月28日に SG10 区南半部調査途中の垂直写真を、砂田遺跡6区を撮影する飛行機から撮影している。2000年3月2日に白線を入れて SG10 区全体の航空写真を撮影後、竪穴建物の貼床除去や低地包含層の調査などを行った。手作業で底まで調査した SE-316・552 以外の井戸10本は、3月6・7日に重機で底部まで断ち割り調査を行い、最下層は土壌水洗も実施して遺物を回収した。現地調査を3月24日に終了した。その後、遺物水洗、井戸出土木製品略測、鍛冶遺構床面採取土水洗・磁選作業を実施した。

権現山遺跡 SG15 区 上三川町大字磯岡字西谷 410-1・410-2・410-3 900㎡ 土坑7基、溝2条、自然流路2条

平成12年度(2001年2月28日～2001年3月23日)

調査担当者：江頭 進・名越侍郎

2000年2月28日から3月2日まで、調査予定地にあった土山を重機で除去・運搬し、3月5日から3月9日まで表土除去を行った。通常より少し深いレベルまで表土を除去してしまった点に、少し問題もあった。3月9日には重機による排土の土山成形作業と並行して遺構確認作業と確認写真撮影を開始した。3月12日(月曜日)から3月21日まで調査区壁面の土層観察・分層作業、グリッド杭設定、遺構調査、断面図作成・撮影を行い、3月22日に遺構完掘写真を撮影して遺構平面図・調査区全体図を作成した。3月23日午後に撤収作業を行い、調査を終了した。遺構が少なかったため、航空写真は撮影しなかった。SG15区

第1章 調査の経緯

の調査結果からみて、SG15区周辺は遺構遺物の密度が低いと判断されたので、SG15区の南北隣接地は発掘調査が必要ない地区として扱うことになった。東谷・中島土地区画整理事業地内における権現山遺跡の発掘調査はこのSG15区(調査時名称「杉村遺跡XV区」)で終了した。この後における「杉村XVI区」から「杉村XVIII区」までの調査は、北方にある磯岡北古墳群のSG16区～SG18区に該当する。

【磯岡遺跡西部】

今回報告するSG9区は磯岡遺跡の西端部である。区画整理前は大字磯岡413・414番地で、区画整理後は北半部が大字磯岡421-1番地に統合されて大形商業施設の敷地になり、南半部は県道真岡雀宮線と一体化した都市計画道路の北半部になっている。

磯岡遺跡SG9区 上三川町大字磯岡字西谷413・414 600㎡ 竪穴住居跡2棟、溝2条、土坑5基、焼土集中1箇所

平成11年度(1999年12月24日～2000年3月24日)

調査担当者：後藤信祐・松本敏・塚原孝一・大島美智子

権現山遺跡SG9区と隣接する調査区で、現地調査は権現山遺跡SG9区と一緒に「杉村遺跡IX区」として実施した。「杉村遺跡IX区」の名称で調査を実施した5,400㎡のうち、調査時に「東区」と呼称した東半部600㎡が磯岡遺跡SG9区である。調査の経過は上述した権現山遺跡SG9区と同様である。竪穴建物跡2棟(建て替えた1棟)以外は少数の土坑と溝だけなので、磯岡遺跡SG9区部分の調査を2000年2月8日にほぼ終えて、残る期間は権現山遺跡SG9区の調査を主に実施した。西に隣接する権現山遺跡SG9区と一緒に、2月24日に航空写真を撮影した。東に隣接する磯岡遺跡5区の撮影時(3月9日)にも、航空写真を再度撮影した。

第2章 遺跡の環境

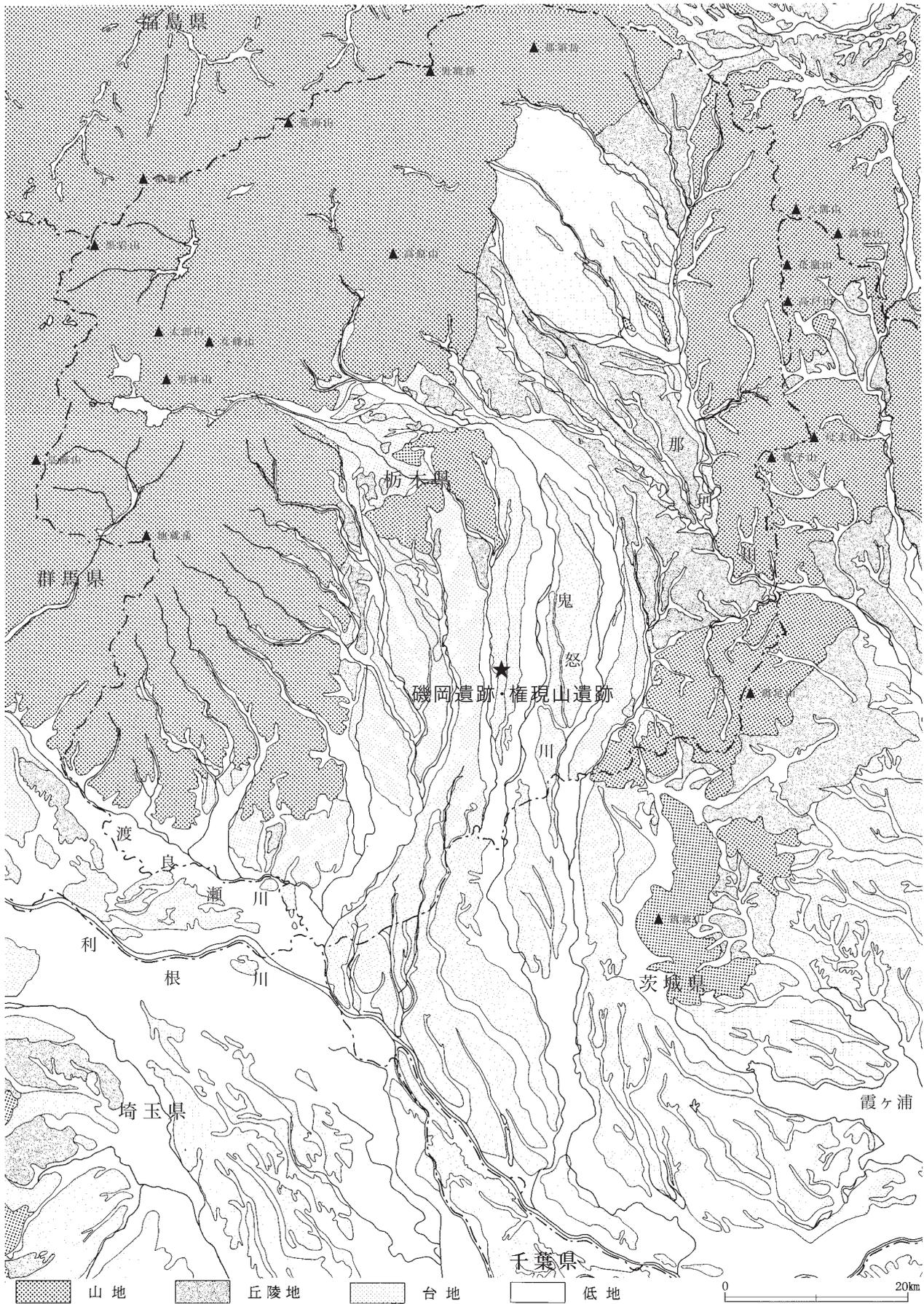
第1節 地理的環境

位置 東谷・中島地区遺跡群は栃木県の南東部、宇都宮市と河内郡上三川町に跨り、宇都宮市街地から南南東へ約7km、上三川町の中心地から北へ約5kmに位置する。東へ約5kmに鬼怒川、西へ約1.5kmに田川がそれぞれ南流する。周辺は起伏の少ない田園地帯が広がっており、各遺跡の発掘調査前の状況は水田、畑地、平地林が主で、一部に宅地が見られた。一方、本遺跡群は、東側が国道4号バイパス（新4号国道）、西側は旧上三川街道、南側は県道雀宮・真岡線、北側は宇都宮環状線に接する。また、地区内に北関東自動車道路の宇都宮・上三川インターチェンジが位置し、交通の要衝としてその重要度を高めつつある。こうした利便性と相まって、近年、本地域は流通業務施設や商業施設等の進出と市街地化が進行している。杉村遺跡と権現山遺跡は、東谷・中島土地区画整理地区（完成後の名称は「インターパーク宇都宮南」）の南西部に位置する。

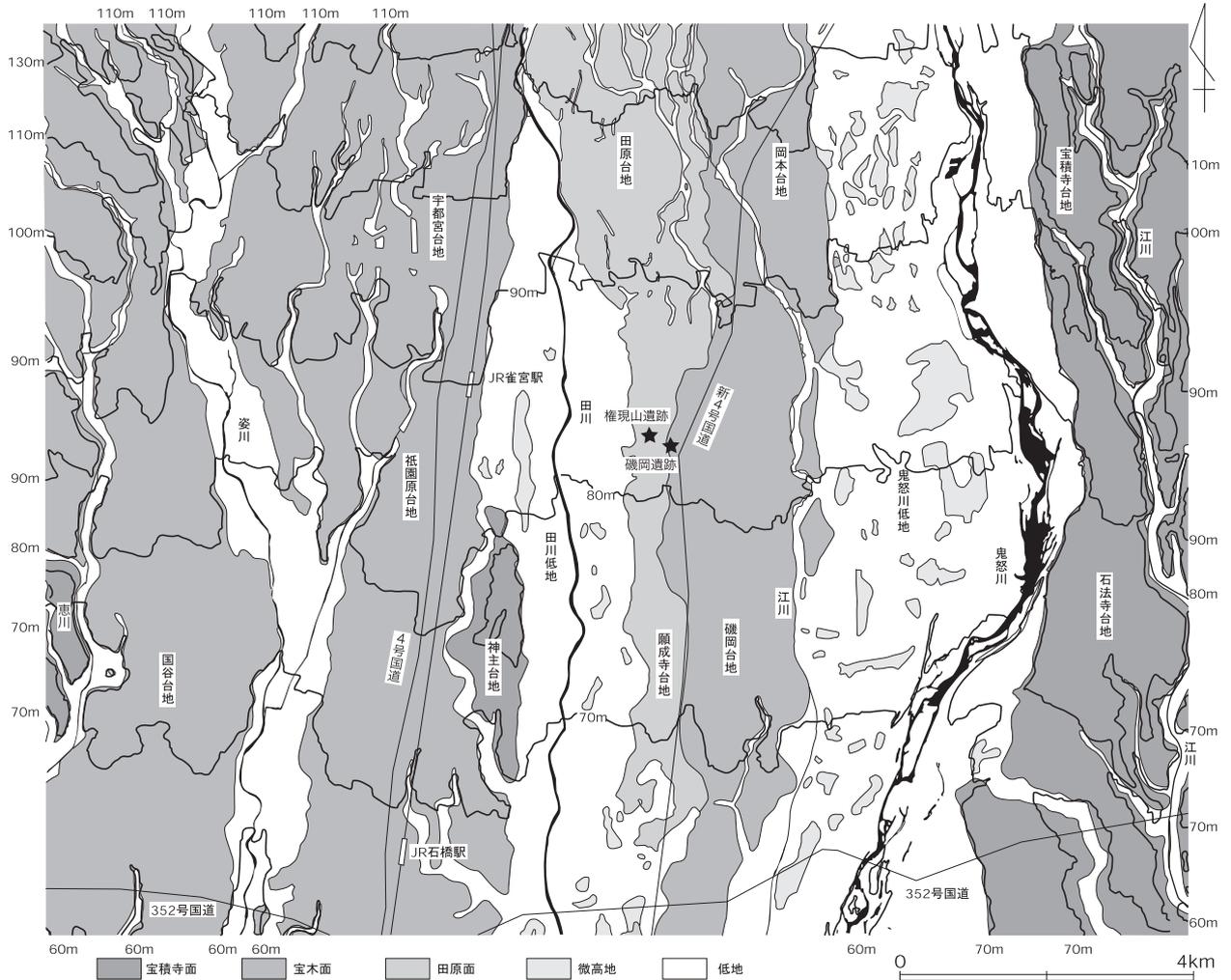
現況 磯岡遺跡は河内郡上三川町大字磯岡字中原および字屋敷西浦に所在し、南西の一部は大字磯岡字西谷に及ぶ。磯岡遺跡の中心部を5区で代表させると、北緯36度28分52秒・東経139度54分26秒に所在する（世界測地系）。南流する小川の開析谷の東に面する標高79.4～81.2mの低台地に立地する。この開析谷は、すぐ北にある微高地（杉村遺跡）の西側が「西谷田」、東側が「中島谷田」と呼ばれ（*1）、磯岡遺跡付近で両方の谷がひとつに合流する。今回報告するSG9区は磯岡遺跡の西縁部で、北緯36度29分49秒・東経139度54分26秒、磯岡遺跡で最も低い開析谷に降りる途中の標高79.4m地点である。磯岡遺跡SG9区の面積は600㎡。報告済みの県調査1～7区（37,110㎡）と北関東自動車道調査区（2,700㎡）と上三川町教育委員会1・2次調査区（6,210㎡）を加えると合計46,620㎡が調査されている。調査前の状況はSG9区が水田、他は台地上が主に畑地（一部は土木工専用重機の集積所）であった。

権現山遺跡は宇都宮市東谷町および砂田町に所在し、ほぼ中央部に相当するSG1区で代表させると、世界測地系で北緯36度29分01秒・東経139度54分17秒に所在する。上記の「西谷田」と呼ばれる小川の開析谷に面し、主にその西側の台地上に立地する。ただし権現山遺跡の南東部（SG2区・SG9区・SG15区など）は、上記の「西谷田」と「中島谷田」が合流した低地部にある。一方、権現山遺跡の西半部（北関東自動車道調査区など）は、「赤沢川」や「川田用水」が南流する開析谷に面している。権現山遺跡の範囲はおおよそ東西250～400m×南北800mで推定総面積は約26万㎡あり、そのうち東谷・中島地区内では71,900㎡の発掘調査を実施した。今回報告する権現山遺跡南部（SG2区・SG5区・SG9区・SG10区・SG15区）の合計面積は33,100㎡である。調査前の状況は主に畑地と水田で、SG10区周辺は山林であった。山林であった部分も、後世に開墾などの土地利用を経ていると思われる。

地形の分類 栃木県は関東地方の北部に位置し、東と南を茨城県、西を群馬県、北を福島県と境を接している。栃木県の地形は、大きく見ると、東部山地、中央部平地、西部山地に分けられる。東部山地は八溝、鷲子、鶏足などの山塊からなる八溝山地、西部山地は那須、高原、日光、足尾などの山塊からなる下野山地と足尾山地である。東西の山地は南北に連なっており、両者に挟まれるように中央部平地が広がる（阿久津1981）。本遺跡は中央部平地に位置する。中央部平地は関東平野の北縁をなし、山地から南北に延びる丘陵とそれに平行するように延びる台地と低地・河川からなる。これらの台地と低地・河川は、東から鬼怒川低地（鬼怒川）、岡本・磯岡台地（宝木段丘面＝中段段丘面）、田原・願成寺台地（田原段丘面＝下位段丘面）、田川低地（田川）、神主台地（宝積寺段丘面＝上位段丘面）、宇都宮・祇園原台地（宝木段丘面＝中段段丘面）と分類されている。



第3図 遺跡の位置 (1/60万)



第4図 周辺地形分類図 (1/10万)

田原・願成寺台地 権現山・杉村両遺跡を含む東谷・中島地区遺跡群の大半の遺跡（砂田・立野・磯岡・磯岡北・中島笹塚・砂田姥沼遺跡等）と、その周辺の関連遺跡群（東谷古墳群の東半部や上石田遺跡・砂田東遺跡）は、田原・願成寺台地の上に立地する（第5～7図）。この台地は、中央部低地の中央に南北に連なり、鬼怒川低地（鬼怒川）と田川低地（田川）に挟まれている。宇都宮市北部の今里町～北東部の上田原町～宇都宮市市街地東部の砂田町・東谷町～河内郡上三川町願成寺・上蒲生周辺にかけての台地であり、全長は約33km、東西の幅は2.0～2.5km、標高は170m～68mである。台地の北から南への傾斜は平均すると4.2/1000mであり、田川低地との比高は1～2mほどである。台地内部には、小河川によって形成された細かな開析低地が発達している。東側にある一段高い岡本・磯岡台地とは約2mの比高があるが、両地形面の差は南に行くほど不明瞭となる。

田原・願成寺台地の台地表層部は、田原段丘礫層を最も新しい田原ロームが0.5～2mの厚さで覆っており、南に行くほど薄くなっている。田原ロームの鍵層である七本桜軽石層（Nt-S）と今市軽石層（Nt-I）は日光の男体山から噴出した火山灰（ともに1.4～1.5万年 cal BP）で、栃木県域北部に分布する。宇都宮市街地北方付近ではやや薄くなり、これ以南では本遺跡群のようにローム層中に軽石が点在する程度となる。田原ロームの下には、砂質土・砂層の厚い堆積が認められる。

田川低地 東谷・中島地区遺跡群の西方には田川低地が広がり、その微高地上には東谷古墳群の西半部や百目鬼遺跡・東谷北浦遺跡が位置している（第7図）。田原・願成寺台地と田川低地との境には、南流する赤沢川（井川）がある。田川低地は、宇都宮市域の北から宇都宮市街地を通過して南へ延び、田原・願成寺

第2章 遺跡の環境

台地の西側に幅 1.5 ～ 2 km にわたって分布する。この低地は、現在水田となっている田川の旧河道とされる部分と、それより 1.0 ～ 1.5 m ほど上位で現在は集落が分布する自然堤防などの微高地上とに識別することが可能である。低地や微高地の形成時期などを決める資料は得られていないが、およそ 2 万年前以降に田川の営力によりできたものと推定されている。

岡本・磯岡台地 田原・願成寺台地の東側には岡本・磯岡台地が広がり、東谷・中島地区遺跡群の東端部にある西刑部西原遺跡および琴平塚古墳群や、東側にある西赤堀遺跡などが所在する。田原・願成寺台地と岡本・磯岡台地との境には、南流する無名瀬川 (*2) がある。岡本・磯岡台地は、宇都宮市白沢・岡本～宇都宮市平出・猿山～上三川町磯岡・日産自動車用地～下野市三王山周辺の南北に長い台地である。全長約 35km、東西幅 1.5 ～ 2.5km、標高 162.5 ～ 54 m である。台地の北から南への傾斜は 4.5/1000 ～ 1/1000 で南ほど緩傾斜となる。鬼怒川低地との比高は、白沢付近で約 15 m あり明瞭だが、南へ行くほど緩斜面状を呈する。台地表層部は宝木段丘礫層を田原ロームと宝木ロームが厚さ 5 ～ 10 m 程で覆っている。厚さは南に行くほど薄くなる。台地内部は、小河川によって形成された細かな開析低地が発達している。

*1 「にしやだ」および「なかじまやだ」の通称は、宇都宮市砂田町在住の福田林蔵氏（1930 年生）からの御教示による。漢字表記は推定である。

*2 「むなせがわ」の漢字表記は、開発前の 10,000 分の 1 地形図による（上三川町役場 1981 年作成）。「武名瀬川」や「田川用水」とも表記・呼称されている。砂田遺跡を南北に縦断する川も「九十九瀬川」と書いて「むなせがわ」と読んでいるが、「無名瀬川」とは違う川であり、南流して田川に合流する。

参考文献

- 栃木県企画部土地対策課 1984 『土地分類基本調査 壬生』
経済企画庁総合開発局国土調査課 1960 『土地分類基本調査 地形・表層地質・土壌調査 宇都宮』
上三川町史編さん委員会 1979 『上三川町史』資料編 原始・古代・中世 上三川町
宇都宮市史編さん委員会 1979 『宇都宮市史』第一巻 原始・古代編 宇都宮市
阿久津純 1981 「自然と環境」栃木県史編さん委員会編 『栃木県史』通史編 1 原始・古代一 栃木県 pp.11-36.

第2節 歴史的環境

東谷・中島地区周辺の遺跡は塚原（1999）の第Ⅱ章第2節が網羅し、各時代・各遺跡の評価は塚原（1999）と中村（2004）、古墳については秋元（2003）が詳しい。これらを参考に資料を追補し、権現山・磯岡両遺跡（110・164）で遺構遺物が出土した時期の歴史環境を述べる。両遺跡周辺の遺跡分布を第5～7図に示す。

旧石器時代 権現山遺跡では北部のSG1区で古墳時代竪穴に水晶製尖頭器が混入していた（内山編 2010, p.68）。本来の出土層は不明だが、本遺跡の標準土層Ⅱ～Ⅳ層間に包含されていたことが想定され、Nt-S（七本桜軽石）とNt-I（今市軽石）の示す1.4～1.5万年 cal BP 頃から、As-YP（浅間板鼻黄色軽石）の示す1.5～1.65万年 cal BP 頃に相当する可能性がある。権現山遺跡西半の北関東自動車道調査A区でAs-YP層相当の遺物集中地点が2箇所ある（谷中他 2001）。磯岡遺跡は2,3,6区に尖頭器がある（津野 2005, p.24）。

東谷・中島地区付近は、宝木段丘面に立地する西刑部西原遺跡（146）を除くと、最上位の田原ローム層だけが載る低段丘に相当するため、旧石器時代後半の遺跡が若干見られる程度である。磯岡北遺跡の宇都宮市調査B区で安山岩の剥片4点（153:勝見 2005, p.37）、砂田遺跡5区（103:津野・篠原・今平 2007, p.22）で尖頭器と黒曜石剥片1点、中島笹塚遺跡3区・7区（150:内山 2008, p.95）で黒色安山岩剥片がある。西刑部西原遺跡（146）は3区の遺物集中地点4箇所と礫群4箇所から黒曜石・珪質頁岩の尖頭器・搔器・削器などが出土し（亀田 2012）、同遺跡2区にも黒色安山岩の剥片が1点ある（中村 2004, p.169）。東側の西赤堀遺跡（161）では尖頭器と搔器を主体とする遺物集中地点がNt-I直下に6箇所と（安藤編 1996）、出土層不明の珪質頁岩の縦長剥片が1点ある（亀田 2007）。島田遺跡（178）では石器集中地点が暗色帯上に1箇所（秋元他 1991）と暗色帯相当に2箇所（江原他 2007）あり、ともにナイフ形石器が出土している。

縄文時代草創期～早期 磯岡遺跡3区には爪形文土器がある（津野 2005）。権現山遺跡には草創期の遺物がない。権現山遺跡南部のSG10区にある縄文時代の陥穴状土坑3基は草創期～早期の遺構を含むかもしれないが、詳しい時期がわからない（本書第5章第2節）。1.4～1.5万年 cal BP に降下した今市・七本桜軽石を混入する陥穴状土坑や土坑が、中島笹塚遺跡3・5・7区（150:内山 2008）、磯岡北遺跡SG16区SK-20（153:内山 2006）、西刑部西原遺跡5～7・10・E区（146:亀田 2012・白崎 2010）、砂田遺跡3・10・12・13・16区（103:藤田・田代 2002, p.205; 今平 2012, p.24）、立野遺跡5・8区（108:内山 2005, pp.66,710）にある。田川西岸では殿山遺跡（85:大川他 1995）に溝型土坑を含む時期不詳の陥穴状土坑が3基ある。南方の島田遺跡に爪形文土器（178:江原他 2004・2007）、北方の立野遺跡A区に多縄文系土器があり（亀田 2008）、琴平塚古墳群（中村 2004）・磯岡北遺跡SG12区（内山 2007）・砂田姥沼遺跡C区（白崎他 2008）に有茎尖頭器がある。

縄文時代早期 権現山遺跡では撚糸文系（井草・大丸・夏島式土器と擦痕文土器）、沈線文系（三戸式・田戸下層式・田戸上層式・出流原式）、条痕文系土器や早期末の縄文条痕土器（内山編 2010, pp.70-76）、スタンプ形石器・礫器（本書第4章）が出土した。SG10区の縄文時代土坑SK-265・307にも早期土器片がある（第5章第2節）。磯岡遺跡は1区で井草式以降の撚糸文系土器と野島式土器が少量（塚原 1999, p.41）、5区に夏島式土器が1片ある（津野 2005, p.22）。

東谷・中島地区では、撚糸文期の遺物が目立つ。北側にある立野遺跡5区（108）に撚糸文系土器・黒曜石製円形搔器・石鏃未成品を含む遺物集中地点があり、撚糸文系・条痕文系土器の包含層や、撚糸文系土器片を出土した陥穴状土坑もみられる（内山 2005, pp.33-53,63,67）。杉村遺跡（111）は、北関東自動車道路調査区で稻荷原式土器・スタンプ形石器と住居又は土坑1基、沈線文（主に田戸下層式）・条痕文



第5図 周辺の遺跡分布図

第2表 東谷・中島地区周辺の遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	本村遺跡	66	舗飛内遺跡	129	猿山東原遺跡
2	陽南1丁目遺跡	67	大山館跡	130	柿木坂遺跡・柿木坂古墳群
3	ガンセンター東遺跡	68	木田遺跡	131	東原古墳群
4	西原境遺跡	69	多功遺跡	132	西原庚申塚
5	並松遺跡	70	上大領兵行内遺跡	133	さるやま城遺跡・さるやま城古墳群
6	雷電山遺跡	71	長持塚古墳	134	猿山遺跡
7	江曾島北原遺跡	72	権現山北遺跡	135	瑞穂野団地遺跡
8	関道遺跡	73	愛宕塚東遺跡	136	根本西台古墳群
9	江曾島北原南遺跡	74-76	茂原古墳群	137	桑島台古墳群
10	おしめ尽遺跡	74	茂原権現山古墳	138	飯塚古墳
11	大房林遺跡	75	茂原大日塚古墳	139	藤腰遺跡
12	城南3丁目遺跡	76	茂原愛宕塚古墳	140	南原古墳
13	城南3丁目南遺跡	77	小蓋遺跡	141	上横田A遺跡
14	宮の内遺跡	78	江面遺跡	142	成願寺北遺跡
15	塚山北遺跡	79	上神主・茂原遺跡	143	大関台遺跡(小屋原遺跡)
16	北若松原遺跡		茂原城跡	144	成願寺遺跡
17	塚山古墳群	80	茂原向原遺跡	145	西刑部古屋原遺跡・西刑部古屋原古墳群
	塚山古墳(1号墳)	81	後志部遺跡	146	西刑部西原遺跡
	塚山西古墳(2号墳)	82	神主古墳群	147	大関高塚群
	塚山南古墳(3号墳)		上神主浅間神社古墳(神主1号墳)	148	中道遺跡
18	一向寺別院付近遺跡		上神主狐塚古墳(神主5号墳)	149	榎戸遺跡
19	若松原遺跡		後志部古墳(神主7号墳)	150	中島笹塚遺跡(中島笹塚古墳群を含む)
20	二軒屋遺跡(中原遺跡)		下原古墳(神主20号墳)	151	後高塚遺跡
21	旭ヶ丘団地遺跡	83	向原遺跡	152	古屋原高塚群
22	西原北遺跡	84	向原南遺跡	153	磯岡北遺跡(磯岡北古墳群を含む)
23	留西遺跡	85	殿山遺跡	154	琴平塚古墳群
24	十里木古墳	86	薄市遺跡	155	西沼遺跡
25	留西南遺跡	87	台内手遺跡	156	平塚原根岸遺跡
26	若松原南遺跡	88	大山祇神社古墳	157	不動堂遺跡
27	綾女塚古墳	89	芋内遺跡	158	内野遺跡
28	雀宮東浦遺跡	90	上石田遺跡	159	下小屋原遺跡
29	雀の宮四丁目遺跡	91	石田館跡	160	東谷北浦遺跡
30	雀宮駅東遺跡	92	上蒲生の古墳群	161	西赤堀遺跡・西赤堀古墳群
31	大谷田遺跡		十三塚古墳(上蒲生1号墳)	162	南浦遺跡
32	牛塚東遺跡	93	後志部東遺跡	163	高島館跡・高島遺跡群
33	雀宮牛塚古墳	94	粕内遺跡	164	磯岡遺跡
34	二子塚北遺跡	95	梁館跡	165	磯岡・西汗の古墳群
35	針ヶ谷二子塚古墳	96	大塚神社古墳群		屋敷東浦愛宕塚古墳(磯岡・西汗3号墳)
36	天狗原遺跡	97	下栗念仏塚遺跡	166	西赤堀東遺跡
37	島の前遺跡	98	下栗大塚古墳	167	磯岡B遺跡
38	宇都宮機器南遺跡	99	東川田城	168	西赤堀狐塚古墳(磯岡・西汗2号墳)
39	赤土山遺跡	100	菅谷遺跡	169	西赤堀南遺跡
40	多功神塚古墳群	101	赤沢遺跡	170	西田遺跡
41	富士見団地北遺跡	102	下桑島西原古墳群	171	西林ノ内遺跡
42	岡田山遺跡	103	砂田遺跡	172	上郷の古墳群
43	茂原北原遺跡	104	砂田東遺跡		愛宕神社古墳(上郷1号古墳)
44	石川坪遺跡	105	砂田瀧遺跡		笹塚古墳(上郷2号墳)
45	富士見向山遺跡	106	砂田姥沼遺跡		上郷瓢箪塚古墳(上郷3号墳)
46	明ノ内遺跡	107	赤沢高塚群		長塚古墳(上郷D3号墳)
47	西の前遺跡	108	立野遺跡		しらみ塚古墳(上郷4号墳)
48	上原遺跡	109	桜稻荷古墳(古墳ではなく後世の塚)		上郷26・27号墳
49	前畑遺跡	110	権現山遺跡	173	仏沼遺跡
50	西下谷田遺跡(北原東遺跡)	111	杉村遺跡	174	願成寺遺跡
51	下古山北原古墳	112-118	東谷古墳群	175	上蒲生遺跡
52	北原遺跡	112	権現山遺跡B区(原古墳群)	176	大野遺跡
53	大木遺跡	113	車塚古墳群	177	西原遺跡
54	一本松遺跡	114	権現塚古墳群	178	島田遺跡
55	若林北遺跡	115	松の塚古墳	179	上三川地区の古墳群
56	上ノ原遺跡	116	双子塚古墳		八龍塚古墳(上三川1号墳)
57	若林南遺跡	117	笹塚古墳	180	上三川城跡
58	大山遺跡	118	鶴舞塚古墳	181	大町遺跡
59	谷端北遺跡	119	新谷台遺跡	182	石井城跡
60	谷端遺跡	120	三日月神社古墳	183	高尾神社古墳
61	東浦遺跡	121	三日月神社南古墳群	184	桑島城跡
62	大山古墳群	122	十ヶ屋敷遺跡	185	根本遺跡
	五社神社古墳(大山1号墳)	123	久部浅間山古墳	186	高籠神社古墳(西木代1号墳)
	大山瓢箪塚古墳(大山9号墳)	124	久部台古墳群	187	五丁免遺跡
	新出古墳(大山13号墳)		久部愛宕塚古墳(1号墳)	188	中館跡
	長塚古墳(大山D20号墳)	125	追金仏遺跡	189	上郷遺跡
63	新出遺跡	126	石井久保田古墳群	190	五霊遺跡
64	稻荷城遺跡	127	大久保台山遺跡	191	百目鬼遺跡
65	横塚遺跡	128	天王山遺跡		

第2章 遺跡の環境

系土器があり（藤田・安藤 2000, pp.31-34,38）、GN1 区にも条痕文系土器と片刃石器が少量ある（内山編 2010）。砂田遺跡（103）の既報告資料では、1 区で鶴ガ島台式、2 区で撚糸文（夏島式）・沈線文・条痕文系（藤田・田代 2002, pp.20,165-169）、4 区から 6 区にかけて撚糸文系土器 1 片と礫器少量（津野・篠原・今平 2007, p.22）がある。磯岡北遺跡（153）の SG17 区（内山 2006）や宇都宮市調査 B 区（勝見 2005, pp.19,38）に撚糸文系土器（井草式）・スタンプ形石器・礫器が若干まとまって見られる。中島笹塚遺跡（150）では撚糸文系（井草式・大丸式・天矢場式）がやや目立ち、沈線文系（三戸式・田戸下層式）・条痕文系（鶴ガ島台式を含む）土器と、田戸下層式期の土坑 1 基がある。砂田姥沼遺跡では井草Ⅱ式・大丸式土器が出土した（106：藤田 2011, p.32）。西刑部西原遺跡（146）には井草・夏島・天矢場式と押型文土器（亀田 2012）、同遺跡宇都宮市調査 A 区に夏島式が 1 片ある（土生・宮田他 2007b, p.31）。

田川の東岸地域では、瑞穂野団地遺跡南調査区（135：岩上他 1978, p.58）・仏沼遺跡（173：倉田編 1971, pp.88-91）・島田遺跡に撚糸文系土器が見られる。島田遺跡には沈線文系・条痕文系土器もある（178：江原他 2007, p.21）。西赤堀遺跡には夏島式土器が少量あり、時期不明だが埋土のしまりが強い陥穴状土坑が 1 基調査されている（161：亀田 2007, pp.21-23）。

田川の西岸地域では、西下谷田遺跡（50：板橋編 2003, p.388）・薄市遺跡（86：秋元 1988, p.32）に井草式土器、宮の内遺跡（14：田代 1996, p.180）の B 遺跡で撚糸文系土器・スタンプ形石器および鶴ヶ島台式土器、茂原向原遺跡（80：安永 2001, p.347）と神主古墳群の後志部古墳（82：石部他 1998, p.74）で条痕文系土器、殿山遺跡（85：大川他 1995, p.20）で撚糸文・条痕文系土器がある。文殊山遺跡（53 のすぐ南西：今平 1999, p.107）と上神主・茂原遺跡（79：安永 2001, p.76）の両遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が少量出土している。上神主・茂原遺跡の撚糸文系土器は浅間神社古墳（82）の調査でも出土した（石部他 1994）。このほか、木田遺跡（68：前澤 1979）にも早期の遺物があるという。

縄文時代前期 権現山遺跡では黒浜式期の土坑が北部の SG1 区に 1 基、遺構外に黒浜、諸磯 a・b、浮島・興津式と前期末の土器があり（内山編 2010, pp.74,77,333）、前期末～中期初頭の結節縄文を施す土器片が南部で SG10 区の縄文時代土坑 SK-307 と時期不明土坑 SK-272 にある（本書）。開析谷の対岸にある磯岡遺跡では諸磯 a～c・浮島式と前期末～中期初頭の土器がある（津野 2005, pp.23,289）。東谷・中島地区周辺では、縄文前期の遺跡は少ない。砂田姥沼遺跡に黒浜式および前期末？の土器片（106：藤田 2011, p.32）、中島笹塚遺跡には羽状縄文系・浮島式・諸磯 b 式と前期末～中期初めの土器がある（内山 2008, p.422）。浮島式（？）が砂田遺跡 6 区に 1 片（津野・篠原・今平 2007, p.22）、西刑部西原遺跡では羽状縄文系と諸磯・浮島式系土器（亀田 2012）、同遺跡 A 区にも諸磯式がある（土生・宮田他 2007b, p.31）。田川の東岸域では、仏沼遺跡に羽状縄文系土器がごく少量（173：倉田編 1971, pp.88-91）、島田遺跡に羽状縄文系・諸磯 b・浮島式が少量ある（178：江原他 2007, p.22）。

田川の西岸では、殿山遺跡（85：大川他 1995, pp.19-20）に羽状縄文系・諸磯 a・b・浮島・興津式が見られる。神主古墳群（82）の後志部古墳（石部他 1998, p.74）で興津式、天狗原遺跡に諸磯 a 式が少量ある（36：神野 1994, pp.51,55）。

縄文時代中期 権現山遺跡では五領ヶ台式、阿玉台 I～IV 式、加曾利 E I～EII 式土器が出土した（内山編 2010, pp.77-83）。磯岡遺跡では I 区（塚原 1999, p.37）に阿玉台式期の竪穴 1 棟、2～7 区（津野 2005, pp.24,289）に阿玉台 1b～加曾利 EI 式土器がある。

東谷・中島地区は大半が低台地上なので、中期の資料は少ない。北側の立野遺跡（108）では 5 区に加曾利 E 式期の土坑が 2 基ある（内山 2005, pp.62-63）。開析谷を挟んだ東側では、磯岡北遺跡（153）北部の SG17 区に阿玉台式期の竪穴 1 棟と遺物集中地点 1 箇所、SG12・SG17 区に前期末～中期初頭と加曾利 E 式土器が極少量あり（内山 2006, p.39）、同遺跡南部の SG13 区でも阿玉台～加曾利 E 式土器が少量ある（藤田 2003, p.152）。中島笹塚遺跡で加曾利 E I 式期の竪穴 1 棟と前期末～中期初頭・阿玉台・加曾利 E I・

EIII～称名寺式（内山 2008, p.422）、砂田姥沼遺跡で阿玉台式（106：藤田 2011, p.32）が少量ある。無名瀬川東岸では西刑部西原遺跡に阿玉台 1b 式・IV 式と加曾利 E 式（亀田 2012）、同遺跡に重複する琴平塚古墳群（154）でも加曾利 EII 式が少量ある（中村 2004, p.171）。

田川の東岸域では、上三川町の市街地付近に中期遺跡群が見られる。島田遺跡で阿玉台 1b～加曾利 EII 式期の竪穴建物 28 棟と袋状土坑を含む土坑 277 基が調査された（178：江原他 2004-2007）。島田遺跡の一部かと思われる東館遺跡や、その北方の大野遺跡（176）でも中期後半の遺物が知られる（倉田編 1971, pp.116,118）。上三川城跡（180）でも加曾利 EI 式期の土坑が 10 数基確認されている（江原他 2006, p.157）。宇都宮市域では柿木坂遺跡（130：大関 1992）で加曾利 E2 式期の遺物が報告・検討されている。

田川西岸では、西川田川の谷周辺に遺跡群がある（名取他 1996）。石川坪遺跡（44：宇都宮市 2003, p.20; 同 2004, p.13）で阿玉台式期中心の竪穴と袋状土坑群、二軒屋遺跡（20：五十嵐 1981; 名取他 1994）で加曾利 EII 式期の竪穴と袋状土坑がある。旭ヶ丘団地（21：名取他 1998, pp.94-102）・兵庫塚 A 地点（山崎 1970）・二軒屋西（田代 1968, pp.11,24）は同一遺跡と思われ、阿玉台～加曾利 E 式土器や 10 基の袋状土坑が知られる。その南の台地や、赤土山（39）・富士見団地北（41）遺跡にも中期の遺物がある（名取他 1996, pp.38-42,52-56）。

縄文時代後期 権現山遺跡では堀之内 1・2 式、加曾利 B 式、曾谷式、後期安行式土器が出土した（内山編 2010, p.84）。SG10 区の時期不明土坑 SK-532 にも堀之内式土器片がある（本書）。磯岡遺跡には後期初頭～堀之内 1 式の土器がある（津野 2005, p.24）。

後期の遺跡は少ない。北側にある杉村遺跡 GN1 区には安行 2 式が少量ある（内山編 2010, p.36）。立野遺跡（108）の 4・5 区で堀之内 1 式期の土坑各 1 基と後期土器片が少量ある（内山 2005, p.733）。開析谷の東側では、磯岡北遺跡（153）の宇都宮市調査 B 区で堀之内式（勝見 2005, p.38）、SG17 区で称名寺・堀之内・加曾利 B 式（内山 2006, p.39）が出土し、SG13 区に堀之内～加曾利 B 式期の土坑と遺物集中区がある（藤田 2003, pp.144-156）。中島笹塚遺跡（150）には加曾利 EIII～称名寺式が少量ある（内山 2008, p.422）。

田川東岸では、西赤堀遺跡（161）で称名寺式期の竪穴住居跡が 1 棟調査されている（亀田 2007, pp.20-21）。仏沼遺跡（173：倉田編 1971, pp.88-92）に綱取系および堀之内 1 式土器が見られる。また、粕内遺跡（94：前澤 1979）にも後期の遺物があるという。田川西岸では、天狗原遺跡に堀之内 2 式が少量あり（36：神野 1994, pp.51,55）、兵庫塚 3 丁目（名取他 1996, pp.40-47）・石川坪（44：渡辺他 1993・下野考 1993）・殿山（85：大川他 1995）の各遺跡に後～晩期の遺物がある。

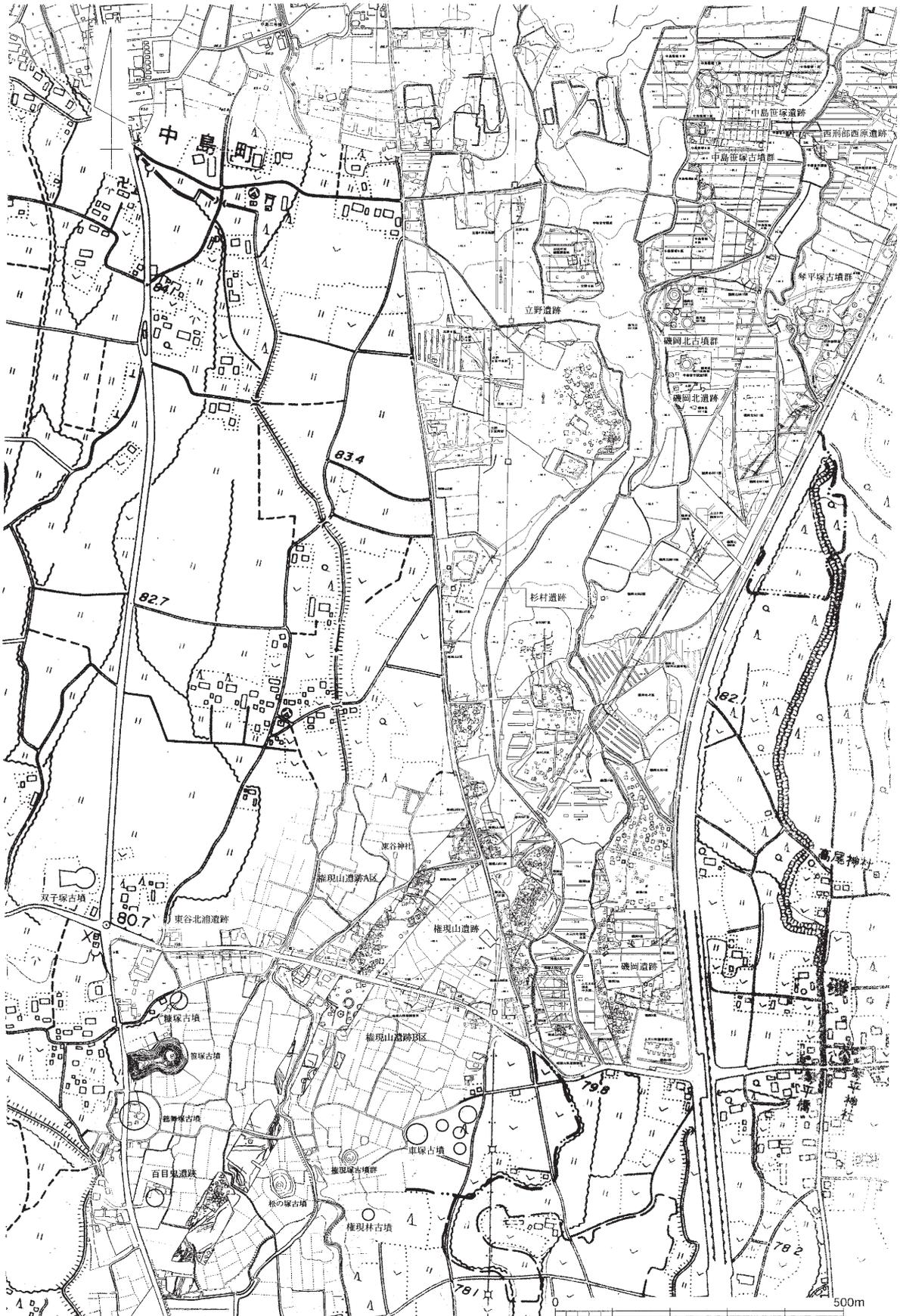
縄文時代晩期 権現山遺跡南部の SG10 区に大洞 C2 式期の竪穴 SI-63 があり（本書第 5 章第 1 節）、遺構外遺物に大洞 B-C・C2・A 式土器が少量ある（内山編 2010, p.87）。磯岡 3・6 区には晩期前～中葉の大洞系土器（津野 2005, p.24）がある。

東谷・中島地区では、北方の立野遺跡（108）に晩期土器が少量ある（内山 2005, pp.57-58）。開析谷の東側では、磯岡北遺跡 SG17 区に大洞 C2 式と晩期安行式（153：内山 2006）、中島笹塚遺跡に晩期中葉の大洞 C2 式など（内山 2008, p.422）がそれぞれ少量ある。田川東岸域では大野遺跡に大洞 C1 式があるが、資料は少ない（176：倉田編 1971, p.116）。田川西岸では著名な石川坪遺跡（44：渡辺他 1993・下野考 1993）の他、薄市遺跡（86：秋元 1988）や神主古墳群（82）の後志部古墳に大洞 A 式（石部他 1998, p.74）、北側の後志部遺跡（81：鈴木 1991）に大洞 A' 式がある。

弥生時代中期 権現山遺跡南部の SG10 区に弥生中期後半の SK-544 がある（本書第 5 章第 3 節）。権現山遺跡 SG5 区の遺構外遺物に弥生前期後葉～中期前葉の大洞系土器と条痕文系深鉢形甕が目立つ。中期中葉（出流原型）～後葉の土器も権現山遺跡各地区にあり、在来の重四角文・貼付口縁・捺糸文の他に、中部高地型櫛描文や東北南部系平行沈線文も少量ある（内山編 2010）。磯岡遺跡では中期後半の土坑 2 基と土



第6図 磯岡遺跡・権現山遺跡とその周辺 (1/10,000)



第7図 東谷・中島地区遺跡群と磯岡・権現山・百目鬼遺跡(1/10,000)

器が5区にある(津野 2005, pp.26,289)。

東谷・中島地区周辺で弥生中期の遺構・遺物は希薄である。北方の立野遺跡(108)では4区と1区に中期後半およびその可能性のある土坑があり、他区でも少量の遺物が出土した。開析谷の東対岸にある磯岡北遺跡の北関東自動車道路調査区に中期後半の竪穴建物1棟と土坑2基がある。中島笹塚遺跡では条糸・撚糸・縄文や充填縄文の破片が少量ある。撚糸文の土器は、立野4区(内山 2005, pp.631-637)、磯岡I区SK-96(164:塚原編 1999)、磯岡北遺跡北関東自動車道路調査区3号土坑(153:藤田・安藤編 2000, pp.325-338)、仏沼遺跡の土坑2基(173:倉田編 1971, pp.94-95)にある。

田川の西岸では、弥生中期前半の土坑が殿山遺跡(85:大川他 1995)、中期後半の住居と土坑各1基が西下谷田遺跡(50:今平 2006)、上神主・茂原遺跡に中期後半の土坑1基と中期後半および後期の土器片がある(79:安永 2001, p.81)。薄市遺跡(86:秋元 1988, p.35)と本村遺跡(1:富川 2004, pp.50-54)で多く出土した弥生土器にも中期の資料を含む。権現山北遺跡(72:大島編 1979, pp.152,156)に撚糸文を用いる土器がある。愛宕塚東遺跡にも中期後半の土器があるという(73:今平 2008)。

弥生時代後期 権現山遺跡では弥生後期の二軒屋式少量と樽式1片の他、アメリカ式石鏃もあるが中期か後期か決めることは難しい(内山編 2010, pp.96,98)。磯岡遺跡では附加条1種で施文する破片が5区に少量ある(津野 2005, p.26)。

後期には、田川流域全体で遺跡数がやや増加する。田川東岸にある東谷・中島地区周辺では、北方の杉村遺跡に弥生後期二軒屋式期の土坑が1基ある(内山編 2010, p.36)。磯岡北遺跡SG17区で出土したような幅広有茎鏃(153:内山 2006, p.45)を弥生後期と考える意見がある(海老原 2004, p.14)。砂田姥沼遺跡3区では、古墳前期のSI-5などから後期弥生土器が出土した(106:藤田 2011, pp.37,195)。中島笹塚遺跡(150:内山 2008, pp.106,310)や、権現山遺跡の西に隣接する百目鬼遺跡(191:谷中・大島編 2001)と東谷北浦遺跡(篠原・亀田 2009)では、遺構が未確認だが後期土器が一定数あり、集落を形成していたと考えられる。北東の瑞穂野団地遺跡南地区に二軒屋式期の竪穴建物跡が2棟ある(135:岩上他 1978)。

上記の遺跡以外では弥生後期の資料は希薄である。北方の立野遺跡(108:内山 2005)は約61,000㎡を調査したが、弥生後期土器は立野5区の1片だけであった。砂田遺跡(103)も調査面積11万㎡に対して、弥生土器は数片しかない(『東谷・中島地区遺跡群』15掲載予定)。

遺跡は田川西岸地域で目立つ。西川田川と兵庫川の谷周辺にある二軒屋遺跡(20:寺内他 1939a)や天狗原遺跡(36:神野 1994)が代表的である。「東河田遺跡」(名取他 1998, pp.78-79)として戦前から知られる本村遺跡(1:富川 2004 および水野・柏崎他 2007)の竪穴19棟と、殿山遺跡(85:大川他 1995)を中心とする上ノ原遺跡から向原南遺跡の範囲(56・84:大川他 1992)の竪穴21棟が、比較的大きな集落群である。大山遺跡にも後期の土坑がある(58:秋元編 1988)。また、古墳前期の項で触れる西下谷田遺跡の竪穴建物中9棟から樽式・十王台式・吉ヶ谷式など、大日塚古墳墳丘下竪穴建物や愛宕塚古墳下層で樽式系などの弥生後期土器も出土した。

古墳時代前期 前期の遺物は磯岡遺跡にはない。権現山遺跡南部の低地・微高地に少量みられ、SG9区南東部低地にS字状口縁甕破片、SG2区流路2に二重口縁壺破片、SG2区遺構外のD区出土遺物に高杯と台付甕の破片がある。二重口縁壺の頸部は長く、台付甕はヘラナゲ調整する前期後葉のものである。

田川東岸の東谷・中島地区周辺では、本格的な古墳時代集落は中期前葉に現れる。それまでは小規模な集落が点在する。東谷・中島地区の北部にある砂田姥沼遺跡2区SI-1と3区SI-5が前期の竪穴建物である(106:藤田 2011)。周辺地域には西刑部古屋原遺跡SI-02(145:清水 2002)、砂田東遺跡B区SI-12・13(104:中山 1996)がある。田川東岸の低台地では、粕内遺跡(94)と五丁免遺跡(187)に前期の遺物がある(前沢 1979)。前期末～中期初めの建物は、杉村遺跡北関東自動車道路調査区の60・69・70号住居跡(藤田・

安藤 2000, p.410)、北側の立野遺跡 5 区 SI-14 (108: 内山 2005, pp.122-123,739) および砂田姥沼遺跡 1 区 SI-7・12 (106: 藤田 2011)、西方の東谷北浦遺跡 SI-139 (160: 篠原・亀田 2009) がある。

前期古墳と同じく前期の集落も田川西岸の茂原地域に多い。大日塚・愛宕塚古墳下層 (75・76: 久保編 1990)・愛宕塚東 (73: 名取他 1998, pp.87-89)・西下谷田 (50: 今平 2006) の各遺跡に前期前半の集落が見られる。権現山北遺跡で前期後葉の竪穴 1 棟 (72: 大島編 1979)、上ノ原遺跡で竪穴 6 棟 (56: 大川他 1992)、殿山遺跡で 1 棟 (85: 大川他 1995, p.230) が報告されている。田川西岸に面する台地では、木田遺跡 (68: 栃木県教委 1988, p.77) に前期の竪穴建物がある。やや西方にある西川田川の開析谷では、天狗原遺跡 (36: 神野 1994) に竪穴 3 棟、留西遺跡 (23: 宇都宮市 1983, p.317) と留西南遺跡 (25: 名取他 1996, p.31) に前期の遺物がある。

前期～中期初頭の古墳 田川東岸では、前期古墳が小規模で数も少ない。最初に現れるのは小形方墳で、西刑部古屋原 2・4 号墳 (145: 辺長 10～14m、清水 2002) や上郷 26・27 号墳 (172 の西部: 辺長 11～14m、秋元 2000) である。中島笹塚 7・8 号墳も中期初頭の小形方墳と思われる (150: 辺長 7.1～12.6m、内山 2008)。この他、権現山遺跡 B 区 (112) の土壙墓 2 基が前期末～中期初頭である (谷中他 2001, III-p.284)。

東谷・中島地区から田川をはさんだ対岸 (西岸) では、有力な首長墳が築かれる。前方後方墳 3 基を含む茂原古墳群がよく知られている (久保編 1990・今平 2009)。大日塚古墳 (75: 墳長 35.8m・箱式木棺・素文鏡 1 面)・愛宕塚古墳 (76: 墳長 50m・舟形木棺・S 字文または重圏文鏡)・権現山古墳 (74: 墳長 63m) の 3 基で、大形化している権現山古墳が最後に築かれたと推定されている。小形墳としては、牛塚東遺跡で辺長 11m と 6m の方墳 (32: 今平 1993)、北原東遺跡に辺長 13.0 × 11.8m の方墳 (50 の南端部: 安永 2001)、殿山遺跡に「方形周溝墓」2 基 (85: 大川他 1995, p.7) がある。上神主浅間神社古墳 (82 の北端) は墳径 53～54m で、茂原古墳群に続いて方系墳から円墳に転換した中期初頭頃の首長墳である (石部・秋元編 1994)。茂原周辺地域以外では、城南 3 丁目遺跡 2 号墳が方墳の可能性もある (12: 今平 1996)。

古墳時代中期の集落 古墳中期集落は周辺に数多い。田川東側地域では、上述した前期末～中期初頭の小集落 (砂田姥沼 1 区・立野 5 区・杉村・東谷北浦) の次段階から、東谷・中島地区周辺に多数の中期集落が見られる。東谷北浦遺跡 (160) の SD-77・87 が中期初頭の溝で、東谷古墳群の初期首長墳と推定される笹塚古墳 (117) のすぐ東北にある。東谷古墳群と周辺遺跡群の形成が中期初頭に東谷北浦遺跡から始まってきたことを示すものかもしれない。周辺遺跡群の中核である権現山遺跡は、豪族居館 (首長居宅) と考えられる施設を SG1 区と SG5 区に含み、周辺の竪穴建物も高密度で (4 区・SG5 区・SG10 区・北関東自動車道 A 区)、遺物の質・量も豊富である (内山編 2010, 橋本他 2011・2012)。

周辺の中期集落群は権現山遺跡と同時か、または少し遅れて現れる。その例は、砂田 4・6 区 (津野他 2007) と 10・12・13 区 (今平 2012)、立野 5・6 区周辺 (後述)、杉村 (藤田他 2000・内山編 2010)、磯岡 (塚原 1999・藤田他 2000・高野他 2004・津野 2005・栗田 2005 および本書)、砂田姥沼 1 区 (藤田 2011)、西刑部西原 3 区 (とちぎ埋文 2001, pp.39-40) の諸遺跡がある (103,106,108,111,146,164)。北方の砂田東遺跡 (104: 中山 1996)、東方の成願寺遺跡 (144: 篠原編 2000)、南方の願成寺遺跡や大野遺跡 (174・176: 倉田編 1971) も、東谷・中島地区の諸遺跡と時期をそろえるように形成される。

権現山遺跡の北側では、開析谷を挟んで西側集落の立野遺跡と、東側墓域の中期群集墳が対応して営まれる。立野遺跡 (108) の 5 区・6 区・宇都宮市調査 A 地区周辺で調査した 91 棟の古墳時代竪穴建物は、約半数の 44 棟が中期で、磯岡北古墳群 (153) と中島笹塚古墳群 (150) に先行する中期中葉に 13 棟、中島笹塚古墳群の前半期および磯岡北古墳群に対応する中期後葉に 9 棟が確認されている。磯岡北古墳群の造営停止後、中島笹塚古墳群の後半期に対応する中期末は立野 5・6 区周辺の竪穴建物が最も多い時期で、

3区の単独建物を含めて21棟ある(内山2005, pp.735-742; 水野他2005, p.35)。このうち2棟はそれぞれ辺長14.5mと12mで(宇都宮市調査A地区SI-2・3)、古墳時代を通じて最大級の竪穴建物である。

開析谷の東側でも、少数の集落が形成される。磯岡北遺跡(153)では、磯岡北古墳群の造営前・造営後の竪穴建物6棟がSG17区(内山2006)・SG11区(藤田2003)と宇都宮市調査A・B区(勝見2005)にある。中島笹塚遺跡(150)でも5区に中期(中葉?)の竪穴建物1棟と円筒形土坑3基がある。

田川西岸では、塚山古墳群(17)を中心とする兵庫川・西川田川の谷に大集落が現れる。北若松原遺跡は塚山古墳群とほぼ同じころの集落で、竪穴24棟が調査された(16:宇都宮市1992, p.38; 1994, p.30)。中原(二軒屋)遺跡も同様と思われる(20:寺内他1939b)、若松原(19)・西原北(22:名取他1996, p.36)の両遺跡と一連の大集落であろう。若松原遺跡周辺と北若松原遺跡では石製模造品が豊富で、白玉生産を示す未成品も多数採集され(名取他1998, pp.108-133)、塚山古墳群と対応する拠点集落の手工業生産地区と見てよい。北方の雷電山遺跡にはTK-23~47型式期の特異な長方形竪穴建物群がある(6:今平1994)。

また、田川西岸で前期の中核地域だった神主台地の茂原周辺にも大集落がある。殿山遺跡(85:大川他1995)では、首長居宅と見られる辺長50mの方形区画溝の周囲で調査した447棟の竪穴建物の大半が中~後期で、陶質土器(定森1999)・初期須恵器・鍛冶遺構や、凝灰岩切石の竈焚口杵(水野他2005, p.36)などを伴う。権現山北遺跡(72)では中期前~中葉の竪穴8棟と中期末葉の1棟を調査した。ここでは権現山4区・立野5区等と同様の円筒形土坑群が、遺物からみて中期の集落に伴うらしい(大島編1979, pp.132-145)。薄市遺跡でも中期の竪穴建物が2棟調査されている(86:秋元1988, pp.43-50)。

中期古墳 田川東岸では、栃木県域中央部を代表する中期古墳群の東谷古墳群が、東谷・中島地区のすぐ西側に造られる(橋本・谷中2001)。双子塚(墳長73m)・笹塚(105m:小森1979, 秋元・今平1998, 宇都宮市教育委員会2012, 今平2012)の前方後円墳2基と、鶴舞塚(径53m:梁木1984)・松の塚(48m:谷中他2001)・権現塚(30m)・車塚(35m)の大形円墳が北西から南東へ順に立地し、おおよその順序で築かれた可能性がある(112-118)。東谷地域における中期後半の首長墳は埴輪のない大形円墳になる。田川東岸で埴輪を持つ中期後葉の前方後円墳は墳長40mの八龍塚古墳がある(179:秋元1989)。中期群集墳としては東谷古墳群の東半部に含まれる円墳群(112:谷中他2001)と、磯岡北古墳群(153:内山2006)・中島笹塚古墳群(150:内山2008)・西刑部古屋原1,3,5,6,7号墳(145:墳径14~28m:清水2002)がある。磯岡北と中島笹塚の古墳群は、立野遺跡5・6区周辺の集落に対応する墓域と推定される(第7図)。中島笹塚2・10号墳と磯岡北3号墳でそれぞれ円墳から小形倭鏡を1面ずつ出土している点は(とちぎ埋文2005b)、次に述べる田川西岸の状況と同様である。

田川西岸では、東岸の東谷笹塚古墳に続いて塚山古墳群が現れる(17:宇都宮大1995・2003)。また、雀宮牛塚古墳が豊富な副葬品を持つ(33:大和久1969)。塚山(墳長98.3m)→塚山西(63.1m)→雀宮牛塚(56.7m)・塚山南古墳(58.0m)の順で、TK-216~23型式期に築かれた可能性が高い。塚山西・南古墳並行期に、本村遺跡(1:富川2004)の2号墳(径24m・乳文鏡1面・銀杏葉文線刻埴輪他)、城南3丁目遺跡(12:今平1996)の1号墳(径12.9m・木棺2基・乳文鏡1面)など、副葬品がやや豊富な中小古墳がつくられる。

古墳時代後期・終末期の集落 古墳時代終末期後半(7世紀後半)には、古墳中~後期以来の中心的な集落遺跡が衰退する。権現山遺跡と、その北側の立野遺跡5・6区周辺(108:内山2005, p.742)の古墳時代集落は終末期前半(8段階=7世紀前半)、杉村遺跡も終末期後半(9段階=7世紀後半)までで衰退する。中期集落の項で上述した周辺各遺跡も、多くが同様な状況を示す。磯岡遺跡5区(津野2005)は奈良時代以後に続くが、規模が縮小する。

それに代わって、砂田遺跡(103:藤田他2002・中山他2005・津野他2007)と、東側の岡本台地上にある西刑部西原(146:白崎2010)・西赤堀(161:安藤1996)・瑞穂野団地(135:岩上他1978)・

大関台（143：杉浦 2001）の各遺跡が中心的な集落になってゆく。また、後期から出現する集落も見られる。中期群集墳が形成された中島笹塚・磯岡北遺跡では、墓域が消滅する後期以降に集落が現れる（150・153）。部分的な調査で後～終末期集落が知られている中島笹塚遺跡 1・3・7 区（内山 2008）および砂田姥沼遺跡 1～3 区（藤田 2011）と A・B・D・E 区（土生他 2007b・小野他 2007・水野他 2008a・小野他 2008）は、終末期に遺構数が増加した後、奈良時代に小規模化して続く可能性がある。磯岡北遺跡は、宇都宮市調査 B 区（勝見 2005）と SG3 区・SG11 区（藤田 2003）に終末期の建物が知られる。

田川の西岸地域でも同様な状況がある。神主台地の中核的集落として中期から続く殿山遺跡（85）は、後期には向原遺跡（83：大川・三輪 2000）や向原南遺跡（84：大川・吉岡他 1992）も加わり、終末期前半まで継続する。権現山北遺跡（72）も後期後半までは集落がみられる。殿山遺跡 KT-100 などを最後として、終末期後半にはこれらの集落群が消滅し、南側の薄市遺跡（86：秋元編 1988）と北側の西下谷田遺跡（50：板橋編 2003,2006；今平 2008）に中心が移る。西下谷田遺跡は竪穴建物 86 棟と掘立柱建物 45 棟の他に門を持つ 150 × 108m の板塀区画施設を含み、河内評家かと考えられている（板橋 2007）。

中期後半における田川西岸地域の中心であった塚山古墳群周辺の集落は、未調査で不明な部分が多いが、若松原南遺跡に竪穴建物がある（26：宇都宮市 2008・2009a）。弥生後期・古墳前期の項でも触れた天狗原遺跡（36）では、古墳後期の竪穴建物や、立野 5 区と同様の円筒形土坑・円形周溝遺構がある。関道遺跡（8：赤石澤 1988）や、古墳・奈良時代建物が 15 棟調査された雀宮東浦遺跡（28：宇都宮市 2009b, p.24）は古墳後期から奈良時代まで続く可能性もある。

後期・終末期古墳 田川東岸の後期前半では、琴平塚 1 号墳が最大の古墳である（154：長 52m・二重周溝、中村 2004）。ただし中期末の可能性もある。笹塚古墳以降の東谷・中島地区周辺でしばらく途絶えていた前方後円墳と埴輪樹立がここで再開する。他に、墳長 31m のしらみ塚古墳がある（172 の西部：秋元 2000）。田川西岸の後期前半では、墳長 48.8m の上神主狐塚古墳が最大である（82 の北西部：石部・秋元編 1995）。琴平塚 1 号・上神主狐塚・しらみ塚は、いずれも前方部が短い帆立貝形前方後円墳である。琴平塚 1 号墳を中心として後期前半から群集墳が形成される（中村 2004）。下桑島西原古墳群（102：今平他 2002）では後期前半の円墳 2 基と後期後半の墳長 35m の前方後円墳 1 基（140：南原古墳）が知られ、周溝内の木棺直葬・竪穴式小石室や、古墳外の土壙墓も見られる点が琴平塚古墳群と同様な時期・群構成である。

後期後半に古墳が増えて群集墳が盛行し、その中に前方後円墳が所在する（中村 2004, p.190）。田川東岸では墳長 68m の上郷瓢箪塚古墳が最大である（172 の東端：前澤 1979, p.414）。東谷・中島地区では琴平塚 3・5 号墳（長 25.0 m と 23.7m）がある。周辺に長 50.5m の久部愛宕塚（124：梁木他 1995）、47m の下栗本郷山（133 に所在：里見 1989）、32～38m の根本西台 1・2・5 号墳（136：水野他 2008b・c）、38.5m の飯塚古墳（138：斎藤他 2003）、30～40m の西刑部古屋原 8 号墳（152：清水 2002）、42m の西赤堀 1 号墳と 27m の同 2 号墳（161：安藤編 1996）、39m の西赤堀狐塚（168：大川・水野他 1987, 中山・井他 2005）、36m の高尾神社古墳（183：内山 1998,2000）などがある。墳長 36 m の屋敷東浦愛宕塚古墳（165：前澤 1979, p.398）も後期後半と推定される。径 43.5m の大形円墳である下栗大塚古墳は終末期と想定される（98：宇都宮市 1996, pp.2-3）。後～終末期群集墳は成願寺（144：篠原編 2000）・西赤堀（161：安藤 1996）両遺跡にあり、方墳を含む。また、単独所在の小形方墳が立野遺跡 5 区と砂田姥沼遺跡 1 区にある（108：内山 2005、106：藤田 2011）。

田川西岸では、推定長 45m 以上の本村 3 号（1 の北部：水野他 2007）、40～50m の綾女塚（27：秋元・飯田他 1998）、30～40m 前後の針ヶ谷二子塚（35：宇都宮市 1990）、43m の大山瓢箪塚（62 の南端：前澤 1979）、47.4m の後志部（82 の中央：石部他 1998）が後期後半の前方後円墳である。墳形不明の十里木古墳（24：宇都宮市 1998, p.16）は切石石室で 7 世紀初葉とされる（秋元・飯田他 1998,

pp.114,128)。市街地化していない地域では、これら首長墳の周囲に群集墳を確認できる（1 本村古墳群・62 大山古墳群・82 神主古墳群）。また、円墳だけの古墳群もみられる（50 西下谷田古墳群：今平 2008）。

奈良・平安時代 権現山遺跡南部の SG10 区 SD-250a・b から北東の杉村・磯岡北・杉村北・西刑部西原遺跡へ続く古代道路状遺構は東山道と推定されている（藤田・安藤 2000, 藤田 2003, 亀田 1999, 本書第 5 章第 17 節）。この道路状遺構以外は古代の遺構・遺物が少ない。

磯岡遺跡では 1 区と 5 区に 8～9 世紀代の竪穴・掘立柱建物が少数あり、漆紙文書の具注暦（塚原編 1999, pp.442-445）と円面硯・獣脚・鉄鉢形土器（津野 2005, p.103,112,117,294）が注目される。権現山遺跡周辺では、少数または単独で奈良時代以降の建物が見られる。権現山遺跡南部の SG10 区に 9 世紀代の 1 棟（本書第 5 章第 15 節）、北部の SG1 区に古代の溝が 1 条ある（内山編 2010, p.442）。杉村遺跡（111）では、GN1 区に 1 棟（内山編 2010, p.57）と北関東自動車道調査区に 2 棟（藤田・安藤 2000）の奈良時代前葉の竪穴建物がある。北側にある立野遺跡（108）でも古代の遺構が希薄で、5 区に奈良時代末頃の単独建物がある。立野遺跡では 4・7・8 区の大溝と、その溝に降りる 2 区の通路遺構が注意される（内山 2005, pp.748-749）。東に隣接する磯岡北 SG3・SG4 区でもそれぞれ単独の竪穴建物がある（153：藤田 2003, pp.167-172,177-179）。磯岡北遺跡の各古墳や中世溝にも 7 世紀末～奈良時代の須恵器が少量混入していた（内山 2006）。中島笹塚遺跡では 1 区で古墳終末期～奈良時代の集落、8 区で奈良時代の溝を通過する道路状遺構を調査した（150：内山 2008）。砂田姥沼遺跡では 1 区に奈良時代、3 区に平安時代前半の建物が 1 棟ある（106：藤田 2011）。

東側の高位台地上に大規模な古代の集落 - 猿山（134：川原他 1981; 常川他 1978）・瑞穂野団地（135：岩上他 1978; 水野他 2008b）・大関台（143：杉浦 2001）・西刑部西原 3 区と E 区（146：とちぎ埋文 2001, 白崎 2010）・西赤堀（161：前澤 1976・安藤 1996・亀田 2007）・島田（津野田 2010）の各遺跡がある。遺跡の立地が総じて東へ進むことが指摘されている（橋本 2002, p.13）。

東谷・中島地区遺跡群の多くが立地する田原低台地では、砂田遺跡が最も大規模である（103：芹澤 1993, 藤田・田代 2002, 中山・青木他 2005, 津野・篠原・今平 2007, 今平 2012）。8 世紀代に掘立柱建物跡の比率が高い集落である。砂田 3 区 SI-97 に「中嶋」の墨書土器があり、『倭名抄』の郷名に見られない「中島」の地名が 9 世紀から現代まで続くことを示した（藤田他前掲）。同遺跡 5 区の墨書土器から 9 世紀中～後葉に「大麻」部集団等が居住したと解釈されている（津野他前掲, p.687）。砂田 24 区（津野他前掲）と 22・36・37 区（『東谷・中島地区遺跡群』15 掲載予定）と A 地区（中山・青木他 2005）では、旧河道に降りてゆく古墳後期と平安時代の水場遺構がある。

田川西岸台地にある上神主・茂原遺跡（79：秋元・保坂 1999; 深谷他 2003）は、西下谷田遺跡を引き継いで 7 世紀後葉に成立する。推定東山道に取り付く位置にあり、奈良時代の河内郡家政庁と、人名瓦を伴う瓦葺倉を含む正倉群と考えられている。また、多功遺跡（69：秋元他 1997）も河内郡衙と推定されている。これらに伴う瓦が東谷・中島地区の西刑部西原遺跡に持ち込まれている。

中世 権現山遺跡北部の SG1 区では不整形の区画溝内に 13 世紀後半～14 世紀前半を中心とする竪穴遺構 2・土坑 2・井戸 1 が認められた。権現山南部の SG10 区では柱穴群・土坑・井戸がある（本書第 5 章第 18～21 節）。すぐ北側の立野遺跡（108）では、5 区に方形区画溝・8 区に方形竪穴遺構 1 基（内山 2005）、宇都宮市調査 A 地区に方形竪穴遺構群（水野他 2005）がある。

台地の東端から西端まで、古墳群の周溝をも連結・利用しながら伸びる 13 世紀ころの長い溝が、磯岡北古墳群の北端部に認められる（磯岡北遺跡 SG12・SG16～17 区）。常滑産陶器・青磁碗・かわらけが見られ、磯岡北古墳群周辺を中世に利用していたようである。集落に関わる遺構としては方形竪穴があり、磯岡北遺跡 SG3 区で 1 基（153：藤田 2003, p.173）と、同じく磯岡北遺跡の一部に含まれる「杉村北遺跡」（亀田 1999）で 2 基が確認され、後者では井戸が隣接している。

東谷・中島地区の周辺は、鎌倉・室町時代において宇都宮氏および芳賀氏の支配下にあったことが知られている。小規模な城館として刑部城（186の北東1km）・桑島城（184）・高島館（163）がある。また北方には石井城（182）・さるやま城（133：宇都宮市2005b・2009ab）があり、これらの分布から、中世から鬼怒川低地の開発が本格的に行われたものと考えられている（橋本2002, p.19）。大関台遺跡（143）では長辺80mの方形区画溝を戦時の臨時拠点と考える意見がある（杉浦2001, p.386）。権現山遺跡SG1区や立野遺跡5区の方形区画溝はこれより少し小規模で溝も浅いので、大関台遺跡と同様な性格を考えるとよいかどうかは不詳である。

近世 権現山遺跡南部にある大規模な方形区画溝SG10区SD-201ab・204と不整形のSD-503が近世の区画溝と考えられる。近世から近代とみられる大形の方形区画溝は砂田遺跡に多い（津野他2007・今平2012）。砂田姥沼遺跡にも類似した方形溝がある（藤田2011, pp.104-105）。

（第2章第2節 参考文献）

赤石澤亮 1988『関道遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第25集 宇都宮市教育委員会

秋元陽光編 1988『薄市遺跡・大山遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第7集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）

秋元陽光編 1989『八龍塚古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第8集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）

秋元陽光・川田均・江原英 1991『島田遺跡』II 上三川町埋蔵文化財調査報告第9集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）

秋元陽光編 2000『上三川町の古墳』I 上三川町埋蔵文化財調査報告第21集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）

秋元陽光 2003「上三川町における古墳の素描 - 古墳から見た古墳時代集団の抽出 -」『栃木の考古学』塙静夫先生古稀記念論文集「栃木の考古学」刊行会 宇都宮, pp.225-238.

秋元陽光・飯田光央・篠原真理 1998「綾女塚古墳の課題」『栃木県考古学会誌』第19集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.109-133.

秋元陽光・大橋泰夫 1988「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向」『栃木県考古学会誌』第9集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.7-40.

秋元陽光・君島利行・諏訪間伸・藤田典夫・植木茂雄 1985『大町遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第5集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）

秋元陽光・今平利幸 1998「宇都宮市東谷笹塚古墳出土の遺物」『峰考古』第13号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮, pp.41-64.

秋元陽光・保坂知子・及川真紀 1997『多功遺跡』III 上三川町埋蔵文化財調査報告第16集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）

秋元陽光・保坂知子 1999『上神主・茂原遺跡』I 上三川町埋蔵文化財調査報告第19集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）

安藤美保編 1996『西赤堀遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第178集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団

五十嵐利勝 1979「権現山北遺跡採集の石器について」『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第5集 宇都宮市教育委員会, pp.177-182.

五十嵐利勝 1981「宇都宮市二軒屋遺跡発掘調査報告」『下野考古学』2 下野考古学研究会 宇都宮, pp.1-140.

石部正志・秋元陽光編 1994『上神主浅間神社古墳・多功大塚山古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第12集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）

石部正志・秋元陽光編 1995『上神主狐塚古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第13集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）

石部正志・秋元陽光・飯田光央編 1998『後志部古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第17集 上三川町教育委員

会（栃木県河内郡）

板橋正幸編 2003『西下谷田遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第273集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

板橋正幸編 2006『西下谷田遺跡II』栃木県埋蔵文化財調査報告第297集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

板橋正幸 2007「県内の郡内複数官衙について - 古代下野国河内郡を中心として -」『上神主・茂原官衙遺跡の諸問題』栃木県考古学会 宇都宮, pp.51-64.

岩上照朗・石橋知明編 1978『宇都宮市瑞穂野団地遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第4集 宇都宮市教育委員会

内山敏行 1998「宇都宮市上桑島町 高尾神社古墳発掘調査報告（1）」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』20 平成8年度（1996） 栃木県埋蔵文化財調査報告第217集 栃木県教育委員会, pp.117-137.

内山敏行 2000「宇都宮市上桑島町 高尾神社古墳発掘調査報告（2）」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』22 平成10年度（1998） 栃木県埋蔵文化財調査報告第233集 栃木県教育委員会, pp.97-121.

内山敏行 2005『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第290集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

内山敏行 2006『東谷・中島地区遺跡群7 磯岡北古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第299集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

内山敏行 2008『東谷・中島地区遺跡群9 中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第311集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

内山敏行編 2010『東谷・中島地区遺跡群10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第331集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

宇都宮市教育委員会社会教育課編 1983『宇都宮の遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第10集

宇都宮市教育委員会文化課 1990～2009a『宇都宮市文化財年報』第6号〔平成元年度〕～第24号〔平成19年度〕 宇都宮市教育委員会文化課 2009b『宇都宮市文化財年報』第25号〔平成20年度〕

宇都宮市教育委員会（とびやま歴史体験館）2012『笹塚古墳とその時代 - 下毛野の成立を考える -』とびやま歴史体験館第14回企画展

宇都宮大学考古学研究会 1995「塚山古墳外形確認調査報告」『峰考古』第9号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮, pp.1-108.

宇都宮大学考古学研究会 2003『塚山西古墳 塚山南古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集 宇都宮市教育委員会

江原美奈子・深谷昇 2004『島田遺跡』III 縄文時代編 1 上三川町埋蔵文化財調査報告第28集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）

江原美奈子・深谷昇 2005『島田遺跡』IV 縄文時代編

第2章 遺跡の環境

2 上三川町埋蔵文化財調査報告第31集 上三川町教育委員会(栃木県河内郡)

江原美奈子・深谷昇 2006『島田遺跡』V 縄文時代編 3 上三川町埋蔵文化財調査報告第33集 上三川町教育委員会(栃木県河内郡)

江原美奈子・深谷昇 2007『島田遺跡』VI 旧石器時代・遺物包含層編 上三川町埋蔵文化財調査報告第34集 上三川町教育委員会(栃木県河内郡)

海老原郁雄 2004「アメリカ式石鏃とその周辺」『唐澤考古』第23号 唐澤考古会 佐野, pp.1-16.

大川清・水野順敏・矢野淳一 1987『栃木県上三川町西赤堀狐塚古墳』上三川町教育委員会(栃木県河内郡)

大川清・三輪孝幸 2000『向原遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第22集 上三川町教育委員会(栃木県河内郡)

大川清・吉岡秀範・三輪孝幸・中島雄一 1992『栃木県上三川町 上ノ原・向原南遺跡』日本窯業史研究所報告第43冊 馬頭(栃木県那須郡)

大川清・吉岡秀範・三輪孝幸・中島雄一 1995『栃木県上三川町 殿山遺跡I』日本窯業史研究所報告第46冊 馬頭(栃木県那須郡)

大島和子編 1979『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第5集 宇都宮市教育委員会

大関利之 1992「宇都宮市柿木坂遺跡の加曾利E式土器」『栃木県考古学会誌』14 宇都宮, pp.93-100.

大和久震平 1969『雀宮牛塚古墳』宇都宮市教育委員会(1984年『牛塚古墳』として再版)

小野麻人・大橋生(東京航業研究所編) 2007『砂田姥沼遺跡 B区』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第64集 宇都宮市教育委員会

小野麻人・林邦雄・佐々木藤雄(東京航業研究所編) 2008『砂田姥沼遺跡(E区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第70集 宇都宮市教育委員会

勝見一品(埋蔵文化財発掘調査支援協同組合編) 2005『磯岡北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第53集 宇都宮市教育委員会

亀田幸久 1999『杉村北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第221集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

亀田幸久 2007『西赤堀遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第304集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

亀田幸久 2008「宇都宮市立野遺跡の縄文草創期土器について」『唐澤考古』27 唐澤考古会 佐野, pp.29-32.

亀田幸久 2012『東谷・中島地区遺跡群12 西刑部西原遺跡(旧石器・縄文・弥生時代編)』栃木県埋蔵文化財調査報告第354集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団

川原由典・中山晋 1981『猿山遺跡 付久部台古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第38集 栃木県教育委員会

神野安伸 1994『天狗原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第34集 宇都宮市教育委員会

久保哲三編 1990『茂原古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第28集 宇都宮市教育委員会

倉田芳郎編 1971『栃木日産遺跡』先史7 駒沢大学考古学研究会 東京

栗田欣行 2005『磯岡遺跡第2次調査報告』上三川町埋蔵文化財調査報告第32集 上三川町教育委員会(栃木県河内郡)

小森哲也 1979「宇都宮市笹塚古墳出土の円筒埴輪の年代的位置づけ」『峰考古』第2号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮, pp.60-83.

今平利幸 1993『牛塚東遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第32集 宇都宮市教育委員会

今平利幸 1994『雷電山遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第35集 宇都宮市教育委員会

今平利幸 1996『城南3丁目遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第39集 宇都宮市教育委員会

今平利幸 2006『西下谷田遺跡-弥生・古墳時代前期編-』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第56集 宇都宮市教育委員会

今平利幸 2007『西下谷田遺跡-古代編I-』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第57集 宇都宮市教育委員会

今平利幸 2008『西下谷田遺跡-古代編II-』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第65集 宇都宮市教育委員会

今平利幸 2009『大日塚古墳 旧配水塔撤去に伴う発掘調査』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第72集 宇都宮市教育委員会

今平利幸 2012『笹塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第78集 宇都宮市教育委員会

今平昌子 1999『一本松遺跡・文珠山遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第230集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

今平昌子 2012『東谷・中島地区遺跡群13 砂田遺跡(10・12・13・16・27区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第355集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団

今平利幸・梁木誠 2002『下桑島西原古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第30集 宇都宮市教育委員会

斎藤恒夫・鈴木宜孝・栃本さや・大塚伸子 2003「宇都宮市飯塚古墳測量調査報告」『峰考古』第14号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮, pp.1-10.

定森秀夫 1999「陶質土器から見た東日本と朝鮮」『青丘学術論集』第15集 韓国文化研究振興財団 東京, pp.5-93.

里見英司・八木原誠・清水秀和 1989「宇都宮市下栗町本郷山古墳墳丘測量調査報告」『峰考古』第7号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮, pp.57-66.

篠原浩恵編 2000『成願寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第239集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

篠原祐一・亀田幸久 2009『権現山遺跡・東谷北浦遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第318集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

清水正幸 2002『西刑部古屋原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第46集 宇都宮市教育委員会

下野考古学研究会 1993「石川坪遺跡」『下野考古学』19 宇都宮

白崎智隆(埋蔵文化財発掘調査支援協同組合編) 2008『砂田姥沼遺跡(C区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第62集 宇都宮市教育委員会

白崎智隆(埋蔵文化財発掘調査支援協同組合編) 2010『西刑部西原遺跡(E区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第76集 宇都宮市教育委員会

杉浦昭博編 2001『大関台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第251集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

鈴木正博 1991「栃木『先史土器』研究の課題」『古代』第91号 早稲田大学考古学会 東京, pp.133-171.

芹澤清八 1993『砂田A遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第132集 栃木県教育委員会

芹澤清八 2003「大曲北遺跡出土尖頭器の再評価」『栃木県考古学会誌』24 栃木県考古学会 宇都宮 pp.5-20.

高野浩之・戸部孝一・深谷昇・平岡和夫 2004『磯岡遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第29集 都市基盤整備公団・上三川町教育委員会・山武考古学研究所

田代 寛 1968『鉢木遺跡の袋状土壇』塩谷郷土史館研究報告第2集 氏家(栃木県塩谷郡)

田代己佳 1996『宮の内A遺跡・宮の内B遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第175集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

塚原孝一編 1999『東谷・中島地区遺跡群 No.1 磯岡遺跡(I区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第229集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

常川秀夫・山野井清人 1978『猿山A遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第24集(原本では第20集と記載) 栃木県教育委員会

津野 仁 2005『東谷・中島地区遺跡群6 磯岡遺跡(2~7区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第292集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

津野 仁・篠原浩恵・今平昌子 2007『東谷・中島地区遺跡群8 砂田遺跡(4~6・18・19・23・24区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第305集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

津野田陽介 2010『島田遺跡』VII 古墳-歴史時代編1(IV~V次調査) 上三川町埋蔵文化財調査報告第35集 上三

- 川町教育委員会(栃木県河内郡)
寺内武夫・篠崎善之助 1939a「下野中原遺跡調査概報-第一回-」『考古学』10-10 東京考古学会, pp.514-527.
寺内武夫・篠崎善之助 1939b「下野中原遺跡調査概報-第二回-」『考古学』10-11 東京考古学会, pp.537-555.
栃木県教育委員会事務局文化課 1988『栃木県埋蔵文化財保護行政年報(昭和62年度)』栃木県埋蔵文化財調査報告第99集
栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997『埋蔵文化財センター年報』第7号(平成9年度)
栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『埋蔵文化財センター年報』第9号(平成11年度)
栃木県立なす風土記の丘資料館 1999『栃木の遺跡』第7回企画展図録 小川(栃木県那須郡) p.45
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2000『埋蔵文化財センター年報』第10号(平成12年度版)
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2001『埋蔵文化財センター年報』第11号(平成13年度版)
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2002『埋蔵文化財センター年報』第12号(平成14年度版)
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2003『埋蔵文化財センター年報』第13号(平成15年度版)
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2004『埋蔵文化財センター年報』第14号(平成16年度版)
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2005a『埋蔵文化財センター年報』第15号(平成17年度版)
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2005b「中島塚遺跡と磯岡北遺跡」『栃木県埋蔵文化財センターだより やまかいどう』No.39 栃木県教育委員会, p.5.
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2006a『埋蔵文化財センター年報』第16号(平成18年度版)
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2006b「砂田姥沼遺跡3区」『栃木県埋蔵文化財センターだより やまかいどう』No.41 栃木県教育委員会, p.5.
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2007『埋蔵文化財センター年報』第17号(平成19年度版)
富川 努 2004『本村遺跡(弥生・古墳編)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第49集 宇都宮市教育委員会
中村亨史 2004『東谷・中島地区遺跡群4 琴平塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告書第283集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
中山 晋 1996『砂田東遺跡・上横田A遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第176集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
中山哲也・井 博幸・三輪孝幸(日本竊史研究所編) 2005『西赤堀塚古墳第2次調査報告』上三川町埋蔵文化財調査報告書第30集 上三川町教育委員会
中山哲也・青木健二・倉田有子(日本竊史研究所編) 2005『砂田遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第54集 宇都宮市教育委員会
名取昌昭・武藤健三・五十嵐利勝 1994「宇都宮市二軒屋遺跡第二次調査報告」『下野考古学』21 下野考古学研究会 宇都宮, pp.1-146.
名取昌昭・武藤健三・五十嵐利勝 1996「雀宮周辺の分布調査 6」『下野考古学』24 下野考古学研究会 宇都宮, pp.1-60.
名取昌昭・武藤健三・五十嵐利勝 1998「雀宮周辺の分布調査 補足編」『下野考古学』26 宇都宮
橋本澄朗・谷中隆 2001『東谷古墳群』と権現山遺跡・百目鬼遺跡』『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第257集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
橋本澄朗 2002「大谷磨崖仏造像の歴史的背景について」『研究紀要』10 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター, pp.1-20.
橋本博文・齋藤瑞穂ほか 2011「権現山遺跡測量・発掘調査報告」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』11 新潟大学人文学部 新潟, pp.1-37.
橋本博文・齋藤瑞穂ほか 2012「権現山遺跡測量・発掘調査報告2」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』12 新潟大学人文学部 新潟, pp.1-65.
土生朗治・越智徹・富川努 2008『中島塚遺跡(A区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第63集 山武考古学研究所・宇都宮市教育委員会
土生朗治・宮田和男・越智徹・大塚雅之(山武考古学研究所編) 2007a『西刑部西原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第59集 宇都宮市教育委員会
土生朗治・宮田和男・越智徹・大塚雅之(山武考古学研究所編) 2007b『砂田姥沼遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第60集 宇都宮市教育委員会
深谷昇・梁木誠・田熊清彦 2003『上神主・茂原官衙遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告書第27集・宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第47集 上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会
藤田直也 2003『東谷・中島地区遺跡群3 推定東山道関連地区』栃木県埋蔵文化財調査報告書第274集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
藤田直也 2011『東谷・中島地区遺跡群11 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第337集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
藤田直也・田代隆 2002『東谷・中島地区遺跡群2 砂田遺跡(1区・2区・3区)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第265集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
藤田典夫・安藤美保編 2000『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県埋蔵文化財調査報告書第241集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
前澤輝政 1976『西赤堀遺跡』上三川町教育委員会(栃木県河内郡)
前澤輝政 1979「原始・古代編」上三川町史編さん委員会編『上三川町史』資料編 原始・古代・中世 上三川町(栃木県河内郡)
増淵純子・築島佐知子 1985「宇都宮市茂原町愛宕塚東遺跡採集の弥生土器」『峰考古』第5号 宇都宮大学考古学研究会, pp.15-21.
水野順敏・河野一也・栗田欣行(日本竊史研究所編) 2005『立野遺跡(A地区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第55集 宇都宮市教育委員会
水野順敏・柏崎広伸・井 博幸・三辻利一・三輪孝幸(日本竊史研究所編) 2007『本村古墳群・本村遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第58集 宇都宮市教育委員会
水野順敏・柏崎広伸(日本竊史研究所編) 2008a『砂田姥沼遺跡(D区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第67集 宇都宮市教育委員会
水野順敏・柏崎広伸 2008b『みずほの台遺跡群(根本西台古墳群第2次・瑞穂野団地遺跡東地区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第68集 宇都宮市教育委員会
水野順敏・柏崎広伸 2008c『みずほの台遺跡群II(根本西台古墳群第3次・西刑部上原遺跡)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第69集 宇都宮市教育委員会
森嶋秀一 2004「204. 上三川町・宇都宮市上神主・茂原官衙遺跡出土の大型尖頭器」『Aesculus』No.22 Aesculus 同人(栃木県石器時代研究会) 宇都宮, pp.1-3.
安永真一 2001『上神主・茂原 茂原原原 北原東』栃木県埋蔵文化財調査報告書第256集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
谷中隆・大島美智子編 2001『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第257集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
梁木誠 1984『鶴舞塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第13集 宇都宮市教育委員会
梁木誠・今平利幸 1995『久部愛宕塚古墳・谷口山古墳・御蔵山古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第37集 宇都宮市教育委員会
山崎芳家 1970「宇都宮市兵庫塚A地点・B地点および針ヶ谷遺跡について」『足跡』2 宇都宮学園高等学校地理・歴史研究会 宇都宮, pp.22-26.
渡辺邦夫・上野修一 1993「宇都宮市石川坪遺跡出土の石製品」『Aesculus』19 Aesculus 同人 宇都宮, pp.15-16.

第3章 調査区の配置と標準土層

第1節 権現山遺跡における調査区の配置と概要

調査区と遺構 権現山遺跡は、東谷・中島土地地区画整理事業対象地区の南西部にあり、地区外の南側および南西側まで広がる。遺跡の中心は「西谷田」の開析谷よりも西側の低台地上にあり、標高 79.7～83.0m で北部ほど標高が高い。低地からの比高は、大きいところでも 1.0～1.5m 前後。遺跡の南東部は、「西谷田」より東側にある標高 79.0～79.4m の低地および微高地まで及ぶ (SG2 区・SG9 区・SG15 区)。

権現山遺跡北部 (2～4 区と SG1 区) および同遺跡南部 (SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) の調査で認められた遺構の種類と数は、下記のとおりである。『東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』(内山編 2010) 刊行時には、権現山遺跡南部 (SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) が整理作業の途上であったため、その後の整理作業によって南部の遺構数に変動が生じている。権現山遺跡 SG9 区のすぐ東側に所在する磯岡遺跡 SG9 区 (古墳時代の竪穴建物跡 2、時期不明の溝 2・土坑 2) は、権現山 SG9 区と同時に発掘調査を実施したが、実際は磯岡遺跡の一部であることから、下記の権現山 SG9 区の遺構数は磯岡 SG9 区を除外して集計している。また、下記の各遺構のうち権現山 SG1 区の古代道路遺構は、杉村遺跡 SG1 区や磯岡北遺跡の道路状遺構と一連の遺構で、『東谷・中島地区遺跡群 3』(藤田 2003) で報告済みである。

(権現山遺跡北部)

権現山 2 区…古墳時代の竪穴建物跡 6 棟 (3 棟の建替)・掘立柱建物跡 4・柱穴状土坑 3・遺物集中地点 1 / 中世の井戸 1 / 近世の溝 4 / 時期不明の掘立柱建物跡 1・井戸 3・溝 9・土坑 103

権現山 3 区…遺構なし

権現山 4 区…古墳時代の竪穴建物跡 41・掘立柱建物跡 2・方形周溝遺構 1・溝 1・柱穴状土坑 1・土坑 52 (土坑 21・円筒形土坑 31) / 時期不明の掘立柱建物跡 3・井戸 2・溝 1・土坑 28・柱穴状土坑 7

権現山 SG1 区…縄文時代の土坑 1 / 古墳時代の竪穴建物跡 37 (鍛冶遺構 1 を含む)・土坑 25 (土壇墓? 1・土坑 6・円筒形土坑 18)・居館跡 1 (外郭溝 1・塀 1・柵列 1・掘立柱建物 1・不明遺構 1・柱穴状土坑 61) / 古代の道路遺構 1 / 古代の溝 1 / 中世の竪穴遺構 2・井戸 1・溝 2・土坑 2 / 時期不明の集礫遺構 1・井戸 2・溝 4・土坑 59・柱穴状土坑 114

(権現山遺跡南部)

権現山 SG2 区……古墳時代の土坑 2 / 時期不明の溝 1・土坑 49・集石遺構 1 / 自然流路 7

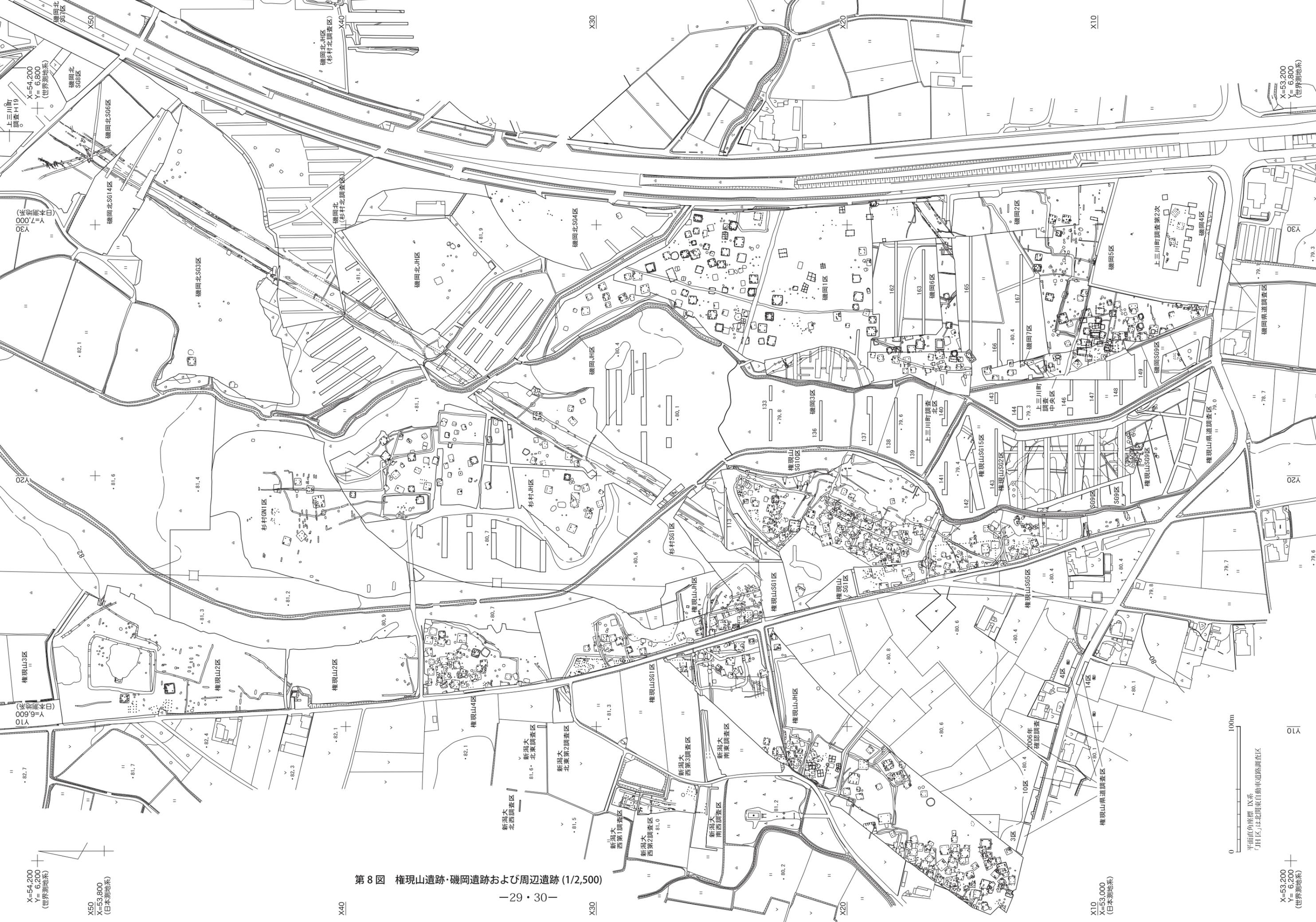
権現山 SG5 区…古墳時代の竪穴建物跡 37・居館跡 1 (柵列 1・居館外郭溝 2 (北辺は SG5 区 SD-43 に連続))・溝 4・遺物集中地点 1・土坑 71 (土坑 68+ 円筒形土坑 3)・不整形遺構 1 / 平安時代の土坑 1 / 中世～近世の土坑 1・溝 3 / 時期不明の掘立柱建物跡 3・柵列 1・井戸 4・溝 3・土坑 46・柱穴状土坑 74

権現山 SG9 区…古墳時代の土坑 1 / 時期不明の通路状遺構 (?) 1・溝 5・土坑 20

権現山 SG10 区…縄文時代の竪穴建物跡 1・土坑 6 / 弥生時代の土坑 1 / 古墳時代の竪穴建物跡 86 (鍛冶遺構 1 を含む、SG5 区に続く建物 2 棟を除く)・井戸 1・溝 17・居館外郭溝 2 (西溝は SG5 区 SD-43 に連続)・土坑 55 (土坑 46+ 円筒形土坑 9)・柱穴状土坑 17 / 平安時代の竪穴建物跡 1・土坑 1 / 古代の道路側溝 2 / 中世の井戸 6・土坑 2・柱穴状土坑 82 / 中～近世の溝 1 / 近世の土坑 1・溝 4 / 時期不明の掘立柱建物跡 1・井戸 5・溝 22・焼土 1・土坑 142・柱穴状土坑 132

権現山 SG15 区…時期不明の溝 2・土坑 7 / 古墳時代以降の自然流路 2

以上の権現山遺跡の 9 地区の遺構を、時代・種別ごとに集計すると次のとおりである。上記のように、前回報告時 (『東谷・中島地区遺跡群 10』) の集計値は、その後の整理作業によって遺跡南半部の遺構数が変動している。また、権現山 SG9 区の遺構数からは磯岡 SG9 区を除外している。



第8図 権現山遺跡・磯岡遺跡および周辺遺跡(1/2,500)

X50
X=54,200
Y=6,200
(世界測地系)

X50
X=53,800
(日本測地系)

X40

X30

X20

X10
X=53,000
(日本測地系)

X10
X=53,200
Y=6,200
(世界測地系)

0 100m

平面直角座標 Ⅹ系
「Ⅱ区」は北関東自動車道路調査区

縄文時代：竪穴住居 1、土坑 7

弥生時代：土坑 1

古墳時代集落跡：竪穴建物 206（鍛冶遺構 2 を含む）・掘立柱建物跡 6・方形周溝遺構 1・溝 22・柱穴状土坑 21・土坑 206（土壙墓?1・円筒形土坑を含む）・遺物集中地点 2・不整形遺構 1・井戸 1

古墳時代居館跡：2箇所（外郭溝 3・塀 1・柵列 2・掘立柱建物 1・不明遺構 1・柱穴状土坑 61）

奈良～平安時代：溝 1・道路遺構 1・道路側溝 2

平安時代：竪穴建物 1、土坑 2

中世：竪穴遺構 2・井戸 8・溝 2・土坑 4

中～近世：溝 4・土坑 1

近世：溝 4・土坑 1

近現代：溝 2

時代不明：竪穴遺構 1、掘立柱建物 8、井戸 16、溝 47、土坑 459、柱穴状土坑 428、焼土 2、柵列 1、通路状遺構(?)1、集礫遺構 1、集石遺構 1、

自然地形：自然流路 9

このうち、今回報告する南半部だけの遺構数は、巻末の「報告書抄録」に示したとおり竪穴住居跡 124 棟、土坑 681 基、掘立柱建物跡 15 棟、井戸 25 基、溝 87 条等である。

隣接する調査区 権現山遺跡の西部は、北関東自動車道建設と県道拡幅に伴って発掘調査が実施されている。権現山遺跡県道調査区では古墳中期の竪穴建物 6 棟から、土師器・須恵器や直弧文のある紡錘車等が出土した（篠原・亀田 2009）。北関東自動車道の権現山 A 区では旧石器時代遺物集中地点 1 箇所・古墳中期～終末期の竪穴建物跡 160 棟・中世の可能性のある方形竪穴 1 棟と地下式坑 1 基、同じく権現山 B 区では古墳中期の円墳 10 基・土壙墓 2 基と中～後期の竪穴建物跡 16 棟などが調査された（谷中・大島編 2001）。B 区は主に墓域で、東谷古墳群の東半部である。また、権現山遺跡北部居館の西半を主対象として、新潟大学考古学研究室が自主調査（学術発掘）を行った調査区では、居館外郭の溝（堀）・柱穴と、古墳時代の竪穴建物跡 3・時期不明の掘立柱建物跡 1・土坑が確認されている（橋本・齋藤ほか 2011・2012）。

権現山遺跡の西縁を赤沢川が画している。この小川をはさんだすぐ西側には、標高 80m の微高地があり、東谷古墳群の西半部と、百目鬼遺跡、東谷北浦遺跡が立地している。百目鬼遺跡では古墳中期の竪穴建物跡 53 棟と大形円墳の周溝（松の塚古墳）が北関東自動車道調査区で確認された（谷中・大島編 2001）。東谷北浦遺跡では笹塚古墳北側にある古墳前期末～中期の竪穴住居 13 軒や溝が知られ、笹塚古墳と双子塚古墳の間では円墳も調査されている（篠原・亀田 2009）。

権現山遺跡の北側には、少し間をあけて同じ台地上に立野遺跡 5 区・8 区・4 区などがある（内山 2005）。立野遺跡 5 区は縄文早・中・後期と弥生中期(?)の土坑、古墳前期末～終末期と奈良時代の竪穴建物跡、中世の集石土坑、中・近世の溝などが確認された遺跡で、古墳中期 32 棟・後期 39 棟・時期不明 1 棟・奈良時代末 1 棟の竪穴建物跡がある。立野遺跡 4 区・8 区では縄文後期と弥生中期の土坑、古代の溝、中～近世の方形竪穴遺構 1 棟、時期不明の掘立柱建物跡 1 棟と柱穴群などが含まれる。

第2節 磯岡遺跡における調査区の配置と概要

調査区と遺構 磯岡遺跡は、東谷・中島土地区画整理事業対象地区の南東部にあり、地区外の南側および東側まで広がる。遺跡の中心は「中島谷田」の開析谷よりも東側の台地上にあり、標高 80.0m 前後で北部ほど標高が高い。西側低地部（標高 79.0～79.2m）からの比高は 1.0m 前後。遺跡の南西部は、「中島谷田」より東側にある標高 79.4m の台地西縁にも及び、ここが SG9 区に該当する。

第3章 調査区の配置と標準土層



磯岡遺跡1～7区とSG9区および上三川町教育委員会第1・2次調査区で認められた遺構の種類と数は、次のとおりである（塚原1999・高野他2004・津野2005・栗田2005）。ただし、権現山遺跡SG9区のすぐ東に隣接する磯岡遺跡SG9区（古墳時代の竪穴建物跡2、時期不明の溝2・土坑2）は、権現山SG9区と同時に「杉村遺跡IX区」の地区名で一括して発掘調査を実施したが、実際は「杉村遺跡IX区」の東半部だけが磯岡遺跡に含まれることから、下記の磯岡SG9区の遺構数は権現山SG9区を除外して集計している。

1区 縄文時代の竪穴住居跡1・土坑4／弥生時代の土坑2／古墳時代の竪穴建物跡65（建替・拡張を含めて76）・土坑11・井戸1／平安時代の竪穴建物跡2

2～7区 弥生時代の土坑2／古墳時代の竪穴建物跡63・掘立柱建物跡1・土坑25・性格不明遺構1／奈良時代の竪穴建物跡3・掘立柱建物跡2・土坑2・溝1・道路状遺構1／平安時代の竪穴建物跡5・掘立柱建物跡9・井戸2・土坑1・道路状遺構1／時期不明の竪穴建物跡7・掘立柱建物跡7・土坑189・溝51

SG9区 古墳時代の竪穴建物跡2／時期不明の溝2・土坑5・焼土集中1

北関東自動車道調査区 古墳時代の竪穴建物跡9／時期不明の溝4

県道雀宮真岡線拡幅部調査区 古墳時代の竪穴建物跡1

上三川町第1次北区と中央区 古墳時代の竪穴建物跡24（2～7区調査と同一の8棟を含む）／奈良時代の竪穴建物跡1／平安時代の竪穴建物跡1・掘立柱建物跡1／時期不明の竪穴建物跡10・掘立柱建物跡3・土坑30・小ピット57・溝9

上三川町第2次調査区 古墳時代の竪穴建物跡4／時期不明（古墳～平安時代）の竪穴建物跡1棟／奈良時代の竪穴建物跡1棟／土坑12・風倒木痕2・小ピット17

以上の磯岡遺跡の各地区の遺構を、時代・種別ごとに集計すると次のとおりである。

縄文時代：竪穴住居1、土坑4

弥生時代：土坑4

古墳時代：竪穴建物160

奈良時代：竪穴建物4、掘立柱建物跡2、土坑2、溝1、道路状遺構1

平安時代：竪穴建物8、掘立柱建物跡9、井戸2、土坑1、道路状遺構1

時期不明：竪穴建物18、掘立柱建物跡10、土坑236、小ピット74、溝64、焼土集中1

第3節 権現山遺跡・磯岡遺跡と周辺の土層

台地部の土層 権現山遺跡のうち西半部の台地上に立地する2・3・4・SG1・SG5・SG10区では、台地上で地山の最も深い部分までを把握できたSG10区の標準土層記号を準用して、I層からV層までに区分できる（第9図上段）。SG10区にある中世の井戸SE-569で確認した地山の標準土層を図上段左に示す。I層が表土、III層とIV層がローム層、V層が礫層である。

V層（礫層）は明瞭な水成堆積層である。鹿沼軽石層（Ag-KP 4.5万年 cal BP）は、層としては確認できず、砂礫層群であるV層を構成するラミナ（葉層）の中に鹿沼軽石粒が混在してみられる。

IV層（ハードローム）は砂粒を含むので、水の影響も受けながら更新統最上部の田原ロームが堆積したことがわかる。IV層の形成開始期を示す情報は、権現山遺跡の北に隣接する立野遺跡5区と、権現山遺跡西半の北関東自動車道調査区で、ローム層最下部から浅間大窪沢軽石（As-Ok1、未較正年代で1.7万年 BP）や浅間板鼻黄色軽石（As-YP,1.5-1.65万年 cal BP）が検出されている（古環境研究所2001・2005b）。権現山遺跡SG1区の旧石器時代の尖頭器も、ローム層形成年代の一時期を示す。ただしこの尖頭器が本来含まれていた層は不明で、古墳時代の竪穴建物の混入遺物である（『東谷・中島地区遺跡群』10, p.68）。

七本桜軽石（Nt-S）と今市軽石（Nt-I）は1.4-1.5万年 cal BPの男体火山起源のテフラである。東谷・中

島地区周辺では、層を形成せず粒・塊状で認められ、II層からIII層を中心として、その上下（黒色腐植層の最下部からハードローム層の最上部まで）に散在している。権現山遺跡SG10区ではI層最下部にNt-SとNt-Iが認められたが、西側の北関東自動車道A区ではII層中にある（谷中・大島編2001）。人為的な土地利用の影響も含め、I層（腐植）の形成つまり土壌化の進行状況によってこのような差が生じたと推定される。立野遺跡5区ではハードローム最上部にもNt-S・Nt-Iがあり、同じ東谷・中島地域でも差がある。

低地部の土層（第9図下段）低地と微高地で地山ローム層がほとんどない権現山SG2・SG9・SG15区と、台地から低地への移行部（権現山2・4・SG1区東端と磯岡遺跡SG9区）では、統一した土層名を付与できない。4区低地トレンチ（古環境研究所2010b, p.324）とSG9区断ち割りトレンチ（第383図）では、古墳前期の浅間C軽石（As-C）と後期初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）を確認した。さらに、権現山SG2区の北東部低地13-21グリッドでは1108年に降下した浅間B軽石（As-B）も認められた（第241図）。

Hr-FAは肉眼でよく観察できる場合が多い。第9図下段では、4区低地トレンチ12層、SG9区断ち割りトレンチBの4'層下面、SG2区VII層中位に降下している。層として確認できない場合も、白色テフラ粒集中部がHr-FA層準を示す可能性が高い。なお、古墳後期初頭のHr-FAと後期中葉のHr-FP（榛名二ツ岳伊香保テフラ）は、層相や火山ガラス屈折率から識別しにくい場合がある（今平2012, p.71）。東谷・中島地区周辺で確認される榛名火山のテフラは、テフラの分布（古環境研究所2000, p.379）および考古学的遺構・遺物との関係（古環境研究所他2005b, p.495）から判断すると、古墳後期初頭のHr-FAと考えられる。

As-Cは、Hr-FAに比べると観察しにくい場合が多いが、権現山SG2区13-21グリッドでは最大厚2cmの層として認められた（第9図下段・第257図）。第9図下段の権現山4区低地トレンチ14層（『東谷・中島地区遺跡群』10, pp.320,322）、権現山SG9区断ち割りトレンチBの5層（第383図）のAs-Cはテフラ層としては確認できないが、白色テフラ粒を肉眼でも認めることができる。

遺構・遺物との関係 台地上では、II層（ローム漸移層）で弥生・古墳時代以後の遺構を確認できた。縄文時代前半期の遺構や包含層は、ソフトローム層（権現山遺跡III層）まで掘り下げないと遺構確認が難しい場合がある。権現山遺跡SG10区の縄文時代土坑SK-697・699は、上部を破壊する古墳時代溝SD-527の法面で確認した。中島笹塚3区、磯岡北遺跡（磯岡北古墳群）SG17区、立野5区などでも同様な状況がある。低地部では、古墳時代テフラの降灰層準で古墳時代遺構を確認できることになる。遺構プランよりも先に、遺構覆土上部の窪地に堆積した白灰色テフラの集中部を確認できる場合がある。ただし、権現山遺跡南部の低地部では、古墳時代の土坑と自然流路を確認できたが、水田遺構は確認されなかった。

（第3節註） ※第〇集 = 栃木県埋蔵文化財調査報告第〇集
 古環境研究所1999「栃木県、磯岡遺跡I区の自然科学分析」『東谷・中島地区遺跡群No.1 磯岡遺跡（I区）』第229集 pp.409-411。
 古環境研究所2000「テフラ分析」『杉村・磯岡・磯岡北』第241集 pp.377-384。
 古環境研究所2001「権現山遺跡・百目鬼遺跡の土層とテフラ」『権現山遺跡・百目鬼遺跡』第257集 本文編III pp.250-258。
 古環境研究所2003「杉村遺跡SG1区、磯岡北SG3・SG6・SG11区、西刑部西原遺跡2区の自然科学分析 第1節 土層とテフラ」『東谷・中島地区遺跡群3 推定東山道関連地区』第274集 pp.235-251。
 古環境研究所2004「栃木県西刑部西原遺跡の土層とテフラ」『東谷・中島地区遺跡群4 琴平塚古墳群』第283集 pp.197-203。
 古環境研究所2005a/b「立野遺跡5区竪穴建物跡の古墳時代火山灰」「立野遺跡5区の指標テフラと古環境」『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』第290集 pp.389-390, 495-500。
 古環境研究所2005c/d「磯岡遺跡の自然科学分析 I. 磯岡遺跡のテフラ分析」「磯岡遺跡の自然科学分析 I. 磯岡遺跡の土層とテフラ」『東谷・中島地区遺跡群6 磯岡遺跡（2～7区）』第292集 pp.302-305, 309-313。

古環境研究所2007「砂田遺跡の自然科学分析 I. 土層とテフラ」『東谷・中島地区遺跡群8 砂田遺跡（4～6・18・19・23・24区）』第305集 pp.748-753。
 古環境研究所2008a/b「栃木県東谷・中島地区（中島笹塚遺跡6区）における火山灰分析」『栃木県東谷・中島地区（中島笹塚遺跡7区・8区）における火山灰分析』『東谷・中島地区遺跡群9 中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡』第311集 pp.368-373, 375-380。
 古環境研究所2010a/b/c「権現山遺跡2区と杉村遺跡GN1区のテフラ分析」「権現山遺跡4区の埋没谷と井戸跡SE-72における土層とテフラ」「権現山遺跡SG1区における土層とテフラ」『東谷・中島地区遺跡群10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』第331集 pp.161-164, 322-324, 471-475。
 古環境研究所2011「砂田姥沼遺跡2区・3区の火山灰分析」『東谷・中島地区遺跡群11 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡』第337集 pp.228-233。
 今平幸 2012『笹塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第78集 宇都宮市教育委員会 pp.68,71。
 パリノ・サーヴェイ株式会社2012「西刑部西原遺跡3区の理化学分析報告」『東谷・中島地区遺跡群12 西刑部西原遺跡（旧石器・縄文・弥生時代編）』第354集 pp.97-103。
 谷中隆・大島美智子編2001『権現山遺跡・百目鬼遺跡』第257集 本文編I -pp.28,34。

第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物

第1節 縄文時代遺構外出土遺物の追加報告

権現山遺跡の各調査区で縄文時代遺構以外から出土した縄文時代遺物は、権現山遺跡北部の報告書である『東谷・中島地区遺跡群』10に、南部の各調査区出土遺物もまとめて報告した。その後の整理作業にともなって、権現山遺跡南部の古墳時代遺構出土品と遺構外出土遺物に少量の縄文時代遺物が確認されたので、ここで追加報告をおこなう。



第10図 権現山遺跡 縄文時代の遺構外出土遺物

第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物

第3表 権現山遺跡各地区の縄文時代遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 縄文土器 深鉢	高 残2.2 底 復8.4	外底面は円周方向に削って凹底状にする。外面胴部下端ナメヘラケズリ、内面ヨコナデ。焼成後に外面側から回転穿孔した補修孔が2箇所ある。 [注記]UT-SGX-SI-61 南西攪乱	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白粗～細粒多、白・灰色礫や や多 やや硬質	SG10 区 古墳時代堅穴 底 1/4 周 注記は左欄
2 有孔円盤形 土製品	長 残8.9 幅 残5.0 厚 残1.8 重 残62.4	表裏面ともナデで、同一方向に走る繊維状物質の圧痕が残る。表面は細く、裏面は幅1～2mm程のやや太いものもある。中央に1孔あり、表面に剥落痕あり。周囲に4孔あり、復元すれば8孔となる。孔は表面からの穿孔で、孔径は表面側約3mm、裏面側2mm。中央の孔もほぼ同様か、わずかに大きい程度と推定される。	2.5Y4/1 黄灰 やや緻密 白細粒少、赤細粒・ 微砂粒微量 やや硬質	SG5 区 の確認調査トレン チで SI-8・9・10 付近 1/2 周 UT-TN-SX TX16-16 SI
3 有孔円盤形 土製品	復原径 9.8 長 残8.6 幅 残5.0 厚 残1.9 重 残62.8	中央孔(径3.63mm)を中心に、貫通する孔3個(径3.5～4.3mm)、貫通しない孔1個(径4.3mm)がある。同心円状に並ぶとすれば、全体で6～8個の孔が推定できる。表面中央には剥落痕がある。中央の孔を通る左側の欠損面には黒色物質が付着し、欠損後も使用していたとも推測される。表裏面はか全面がナデ整形される。	5YR6/6 橙 やや緻密 白細粒少、白礫～ 粗粒と赤細粒微量 やや硬質	SG5 区 古墳時代堅穴 約 1/2 周 残存 UT-SG-V SI-10 21
4 円盤状 土製品	復原径 9.2 長 残7.6 幅 残4.3 厚 1.7 重 残40.5	中央に1孔(径不明)、同心円状に3孔(表2.7～4.2、裏2.3～2.6mm)あり。孔径から、表面から穿孔したと見られる。孔間隔から、全周で8孔が推定できる。左上は新しい欠損だが、左下の欠損面は黒色物質が付着し、欠損後に使用したとも推測される。表裏面、側面はナデ、表裏面にはミガキ状の浅い沈線と、細い条線数本がある。	5YR6/6 橙 やや緻密 白細粒少 やや硬質	SG5 区 古墳時代堅穴 約 1/3 周 残存 UT-SG-V SI-10 22
5 スタンプ形 石器	長 11.4 幅 7.2×4.9 重 残669.6	断面隅丸方形の棒状河原石を素材とする。下面は1回の剥離そのまま、突出部を中心に磨滅と剥離が認められる。他に加工痕等はない。SI-20 出土で、古墳時代に編物石等として使った可能性あり。	7.5Y6/2 灰オリーブ 輝石安山岩(新第三紀)	SG5 区 古墳時代堅穴 完形 UT-SG-V SI-20 42
6 スタンプ形 石器	長 9.5 幅 7.5×4.5 重 504.8	断面楕円形の棒状河原石を素材とする。下面は1回の剥離ほぼそのまま、わずかに磨滅。側面剥離はわずか。他に加工痕はない。SI-20 出土で、古墳時代に編物石等として使った可能性あり。	2.5Y6/3 にぶい黄 輝石安山岩(新第三紀)	SG5 区 古墳時代堅穴 完形 UT-SG-V SI-20 37
7 石器 礫器	長 7.6 幅 6.7×2.3 重 15.7	扁平な自然礫の一端に片面側から連続する剥離を行う。刃部角は50～60°前後。刃部剥離面の稜線がわずかに磨耗気味。	5Y7/1 灰白 石英含有かんらん石輝石安山 岩(新第三紀)	SG5 区 試掘溝 TX15 完形 UT-SG-V TR15
8 石器 礫器	長 残11.3 幅 6.8 厚 3.1 重 残293.6	自然の円礫を素材として、左図の面を節理に沿って平坦に削った後に外周を加工する。左図の面の右辺と下辺を急角度の鈍い刃部にする。下辺は古い時期に折損し、使用による破損かもしれない。左辺は少し剥離を行ってはいないが、刃部にはならない。	10BG3/1 暗青灰 頁岩(古期)	SG1 区 古墳時代堅穴 端部欠 UT-SG-I SI-18 21
9 石器 礫器	長 10.8 幅 9.2 厚 2.8	大形の剥片。背面は礫面で、腹面には左縁からの剥離が2枚ある。下端には、使用によると見られる剥離がある。重量378.4g。	7.5Y6/2 灰オリーブ 頁岩(古期)	SG5 区 古墳時代堅穴 完形 UT-SG-V SI-20 39
10 石器 磨製石斧	長 残5.1 幅 5.5 厚 残2.5	両側にやや不明瞭な側面を持ち、縦断面形は表裏対称。図左半の刃部に細かい剥離が少し見られるので縦斧とも見られるが、あまり確実でない。重量60.9g。	5GY4/1 暗オリーブ灰 閃緑斑岩	SG1 区 古墳時代堅穴 先端部残 UT-SG-I SI-32 貯蔵穴覆土
11 石器 磨石	長 10.7 幅 6.9 厚 3.4 重 311.3	硬質・緻密な安山岩の河原石を素材とする。磨石として使用した時点で、左側に欠損していたと見る。表裏面とも周縁付近まで研磨し、周縁には敲打とそれに伴う剥離がある。敲打による凹みは表・裏とも2ヶ所ずつ確認できる。研磨状態を見ると、円形礫の中心付近が表裏とも最も良く研磨され、元来円形の磨石として使用したものを、欠損後再生したと推定される。	7.5Y7/1 灰白 輝石安山岩(新第三紀)	SG5 区 古墳時代堅穴 完形 UT-SG-V SI-21 29
12 石器 石斧	長 18.0 幅 8.6 厚 5.9 重 1153.8	片面が扁平で対面が中高の自然礫の両側縁を剥離後に敲打成形。刃部は、扁平な面は自然面のままで、中高の面は節理に沿った割れ面の高い部分を敲打するが、凸部を除去しきれないで加工をやめている。刃部が細かく剥離するので未成品ではなく粗雑な完成品。研磨は認められないが、石材は磨製石斧と共通する。	5Y6/2 灰オリーブ 砂岩(古期)	SG10 区 19.0-18.0 グ リッド所在の古墳時代 溝 完形 UT-SG-X SD-319 9
13 石器 石鏃	長 残18.80 幅 15.75 厚 3.40	使用によって先端が小さく欠損している。左図の面の方が厚み(丸味)を持つ。立野遺跡5区の包含層および集中地点にある早期の鏃に形や石材が共通する。残存重量0.59g。	N1.5/0 黒 黒曜石	4 区 先端部欠 UT-GN- IV
14 石器 スクレイ パー	長 1.92 幅 2.32 厚 0.95 重 3.69	小形でわずかに横長の剥片を素材として、剥片頂部の打点付近を折り取っている。腹面のおおよそ全周と背面の約半周に小さな剥離を行って刃部を作る。	N1.5/0 黒 白色粗粒がやや目立つ黒曜石	SG5 区 古墳時代堅穴 完形 UT-SG-V SI-6

1は補修孔のある深鉢底部である。3と4は古墳時代の堅穴建物SG5区SI-10に混入して2点出土した有孔円盤形土製品で、胎土・焼成も同様だが、孔径が違うので別個体である。2も同種で、16-16グリッドで試掘トレンチTX16から出土した。TX16が16-16グリッドでSG5区SI-10の上部を掘り下げているので、これもSG5区SI-10周辺で出土している。これら3例は円周状に孔を配列する特徴がある。通常は小孔を直線状に配列し、中央孔が他孔よりも一回り大きいことが多い。大洞C2式期の建物跡SG10区SI-63の有孔円盤形土製品(第14図)が晩期の粗製土器と同じく砂粒を多く含むのに比べると、SG5区の3点は胎土がずっと精良で、むしろ土師器や晩期の精製土器に近い。有孔円盤形土製品は大洞C1～C2式期に見られる遺物で、SG5区出土例のように比較的精良な胎土が目立つ。

縄文早期のスタンプ形石器(5・6)は前回報告した石器中には認められなかった器種で、礫器(9)とともにSG5区で古墳時代堅穴SI-20に混入して出土した。すぐ南側の古墳時代堅穴SI-21に磨石がある(11)。SG5区SI-21・22には捺糸文・条痕土器が少量混入している(前回報告書の第36図6・36、第37図123)。他の礫器2点は、7がSG5区の試掘トレンチ、8が古墳時代堅穴SG1区SI-18で出土した。

12は磨製石斧に使う石材を用いて、敲打して作った石斧。節理面に沿った割れ面と段が刃部の上方にあり、それを除去しようとして敲いている。通常であれば磨製石斧の未成品とされるものだが、使用して刃部が剥離しているので石斧（製品）として扱った。SG10区中央部で古墳時代溝SD-319に混入して出土した。SG10区SD-319では条痕文系土器（前回報告書の第37図113・121・122）があり、それと近接するSG10区SI-34には撚糸文系・沈線文系・条痕文系土器（前回報告書の第36～37図26・70・114）と浮島式・興津式（同じく第38図163・168・169）がある。10は磨製石斧の刃部破片。13は権現山4区の遺構外で採集した黒曜石製の鏃で、使用して先端が小さく欠損している。立野遺跡5区の包含層および遺物集中地点にある早期の石鏃に形や石材が共通する（『東谷・中島地区遺跡群』5）。14は古墳時代竪穴SG5区SI-6で出土したチャート製スクレイパー。

この他に、時期不明の遺構にも少量の縄文時代遺物がある。SG10区の時期不明土坑SK-272・532で縄文土器片が出土した（次章の第237図）。SG10区SK-272は横位の結節縄文を施す前期末～中期初めの胴部片、SK-532では後期堀之内式がある。SK-272は覆土が硬いので、縄文時代土坑の可能性も皆無ではない。SG2区の時期不明土坑SK-5でもスクレイパーが1点ある（第6章の第255図）。

石器石材は、次節に掲載するパリノ・サーヴェイ（石岡智武氏）の観察による岩石学的な名称を示した。安山岩が細かく分類されている。「頁岩(古期)」(8・9など)は、考古学で通常用いる岩石分類では「ホルンフェルス」と認定しているものである。また、「砂岩(古期)」(12など)は、考古学では「硬砂岩」と認定することが多い。縄文・弥生時代の遺構外出土遺物として『東谷・中島地区遺跡群10』に掲載した石器についても、この機会に岩石学的な観察を依頼し、その結果を第4表に示した。「頁岩(古期)」は考古学で呼称する「ホルンフェルス」に相当し、「頁岩(新第三紀)」は考古学でいう「珪質頁岩」や「頁岩」に相当する。

第2節 東谷・中島地区遺跡群発掘調査に係る石器石材鑑定 - 権現山遺跡 -

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに 東谷・中島土地区画整理事業に伴う権現山遺跡の発掘調査では、古墳時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが多数検出され、土師器、須恵器などの土器、石製祭具などの遺物が出土している。この他には、縄文時代および弥生時代の石器類なども出土している。

今回は、縄文時代および弥生時代の石器類を対象として肉眼による石材鑑定を行い、石質に関する資料を作成するとともに、石材の産地について可能な限り検討した。以下にその結果を報告する。

1. 試料 鑑定試料は、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター(2010)『東谷・中島地区遺跡群10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』掲載の、縄文・弥生時代の遺構外出土石器52点および本報告書掲載のSG10区、SG1区、SG5区などの住居跡および遺構外より出土した縄文・弥生時代の石器21点の計73点である。器種別の点数は、石鏃13点、石匙1点、スクレイパー2点、石核1点、石核2点、石皿3点、石斧1点、片刃石器3点、打製石斧8点、打製土掘具(石鏃)1点、剥片10点、磨製石斧1点、磨石7点、スタンプ形石器2点、敲石1点、礫器14点、被熱礫2点および自然石1点である。

2. 分析方法 当社技師1名が平成24年3月19日に埋蔵文化財センターに赴き、肉眼による石材の鑑定を行った。

石材鑑定では、野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。鑑定は、五十嵐(2006)に示される分類基準を参考にして行なった。個々の石材のより正確な岩石名は、薄片作製観察、X線回折試験、全岩化学組成分析等を併用することにより調べることができ、今回は肉眼鑑定のみで留めるため、鑑定された岩石名は概查的な岩石名であることに留意されたい。

3. 結果 肉眼による石質の鑑定結果を、第4表～第7表に示す。表に基づき、時代、出土場所および器

第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物

第4表 『東谷・中島地区遺跡群』10 掲載、縄文・弥生時代の遺構外出土石器の石質

図番号	地区名	器種	石質	備考
45 図 1	SG10 区	石鏃	頁岩	
45 図 2	SG10 区	石鏃	チャート	
45 図 3	SG5 区	石鏃	チャート	
45 図 4	SG10 区	石鏃	チャート	
45 図 5	SG10 区	石鏃	チャート	珪質頁岩質
45 図 6	SG10 区	石鏃	チャート	
45 図 7	SG1 区	石鏃	チャート	
45 図 8	SG5 区	石鏃	流紋岩質凝灰岩	溶結凝灰岩?
45 図 9	SG1 区	石鏃	頁岩	古期
45 図 10	4 区	石鏃	チャート	珪質頁岩質
45 図 11	SG1 区	石鏃	チャート	
45 図 12	4 区	石鏃	玉髓	
45 図 13	SG5 区	石鏃	チャート	
45 図 14	SG10 区	片刃石器	頁岩	古期、粘板岩質
45 図 15	SG10 区	片刃石器	堇青石ホルンフェルス	
45 図 16	SG5 区	スクレイパー	頁岩	
45 図 17	SG2 区	スクレイパー	チャート	
45 図 18	4 区	スクレイパー	黒曜石	透明感があり、やや緑色の色調が入る。
45 図 19	2 区	石匙	頁岩	
46 図 20	SG10 区	剥片	緻密質輝石安山岩	第四紀
46 図 21	SG10 区	剥片	堇青石ホルンフェルス	
46 図 22	SG5 区	剥片	輝石安山岩	第四紀。黒色で無斑晶ガラス質安山岩に近い岩相を呈する。
46 図 23	SG1 区	剥片	チャート	
46 図 24	SG1 区	剥片	頁岩	古期
46 図 25	4 区	剥片	頁岩	古期
46 図 26	4 区	剥片	頁岩	
46 図 27	SG10 区	剥片	無斑晶質安山岩	第四紀。黒色で無斑晶ガラス質安山岩に近い岩相を呈する。表面は象の肌状。
46 図 28	SG5 区	石核	流紋岩	流紋岩質溶結凝灰岩?
46 図 29	SG5 区	礫器(剥片素材)	頁岩	古期
46 図 30	SG5 区	礫器(剥片素材)	緻密質輝石安山岩	第四紀
46 図 31	SG10 区	礫器(剥片素材)	頁岩	古期
47 図 32	2 区	礫器	頁岩	古期
47 図 33	SG2 区	礫器	頁岩	古期
47 図 34	SG10 区	礫器	頁岩	古期
47 図 35	SG2 区	礫器	堇青石ホルンフェルス	
47 図 36	SG10 区	礫器	頁岩	古期
47 図 37	SG5 区	礫器	堇青石ホルンフェルス	
47 図 38	SG1 区	礫器	輝石安山岩	第四紀
47 図 39	SG10 区	礫器	堇青石ホルンフェルス	
48 図 40	SG9 区	打製石斧	砂岩	古期
48 図 41	SG2 区	打製石斧	輝石安山岩	第四紀
48 図 42	SG1 区	打製石斧	堇青石ホルンフェルス	
48 図 43	SG5 区	打製石斧	頁岩(古期)	
48 図 44	SG10 区	打製石斧	輝石安山岩	第四紀
48 図 45	SG5 区	打製石斧	堇青石ホルンフェルス	
49 図 46	SG10 区	打製石斧	輝石安山岩	第四紀
49 図 47	SG2 区	打製石斧	輝石安山岩	第四紀
49 図 48	SG 調査区	磨石	多孔質安山岩	第四紀
49 図 49	SG 調査区	磨石	多孔質輝石安山岩	
49 図 50	SG10 区	磨石	多孔質安山岩	第四紀
49 図 51	SG10 区	磨石	輝石安山岩	第四紀。安山岩質溶結凝灰岩?
49 図 52	SG1 区	石皿	多孔質輝石安山岩	第四紀
12 図 1	杉村 GN1 区	片刃石器	輝石安山岩	

第5表 縄文晩期住居跡 SG10 区 SI-63 出土石器の石質

報告番号	器種	石質	備考
—	剥片	玉髓	
15 図 13	石皿	多孔質安山岩	第四紀
15 図 14	石皿	多孔質輝石安山岩	第四紀
15 図 15	磨石	輝石安山岩	第四紀
15 図 16	磨石	多孔質かんらん石輝石安山岩	第四紀
15 図 17	敲石	黒雲母流紋岩	
15 図 18	被熱礫	多孔質安山岩	第四紀
15 図 19	被熱礫	輝石安山岩	第四紀
15 図 20	石核	頁岩	古期
15 図 21-1	剥片	珪化流紋岩	玉髓質
15 図 21-2	石核	珪化流紋岩	玉髓質
15 図 22	自然石	多孔質安山岩	第四紀

第6表 『東谷・中島地区遺跡群』14 掲載、縄文時代遺構外出土石器の石質

報告番号	地区	器種	石質	備考
10 図 5	SG5 区	スタンブ形石器	輝石安山岩	
10 図 6	SG5 区	スタンブ形石器	輝石安山岩	
10 図 7	SG5 区	礫器	石英含有かんらん石輝石安山岩	
10 図 8	SG1 区	礫器	頁岩	古期
10 図 9	SG5 区	礫器	頁岩	古期
10 図 10	SG1 区	磨製石斧	閃緑斑岩	
10 図 11	SG5 区	磨石	輝石安山岩	
10 図 12	SG10 区	石斧	砂岩	古期

第7表 弥生中期後半の土坑 SG10 区 SK-544 出土石器の石質

報告番号	器種	石質	備考
18 図 5	打製土掘具(石鏃)	砂岩	古期

種別に集計した石材組成を第8表に示す。

鑑定された石質は、半深成岩類の閃緑斑岩1点、火山岩類の流紋岩1点、黒雲母流紋岩1点、輝石安山岩7点、輝石安山岩(第四紀)6点、無斑晶質安山岩1点、緻密質輝石安山岩(第四紀)2点、多孔質安山岩3点、多孔質安山岩(第四紀)2点、多孔質輝石安山岩2点、多孔質輝石安山岩(第四紀)1点、石英含有かんらん石輝石安山岩1点および多孔質かんらん石輝石安山岩1点、火山碎屑岩類の流紋岩質凝灰岩1点、堆積岩類の砂岩(古期)3点、頁岩(古期)14点、頁岩4点およびチャート11点、変成岩類の堇青石ホルンフェルス7点、変質岩類の珪化流紋岩2点、および鉱物の玉髓2点である。鑑定に際しては、堆積岩類について、岩相から堅硬緻密質で中生界～古第三系に由来すると判断されるものは「古期」と付し、火山岩類について未変質で火山ガラスが残存する新鮮な岩相のものには「第四紀」と付記した。

対象試料数が少ないため、器種別の石材組成の傾向を把握することは難しいが、石鏃にチャートを多用する傾向や、打製石斧、礫器、剥片に安山岩類、頁岩、堇青石ホルンフェルスなどが、また多孔質な安山岩類

第8表 時代・出土場所別の器種別石材組成

石質	時代・出土場所																				合計				
	縄文・弥生時代遺構外 #1										縄文時代遺構外 #2					縄文晩期の住居跡 #2						弥生中期 後半の 土坑 #2			
	石鏃	石匙	スクレイパー	打製石斧	片刃石器	石核	剥片	石皿	磨石	礫器	礫器 (剥片素材)	石斧	スタンピング石器	磨製石斧	磨石	礫器	石核	剥片	石皿	磨石			敲石	被熱礫	自然石
半深成岩類																									
閃緑斑岩														1											
火山岩類																									
流紋岩						1																			1
黒雲母流紋岩																						1			1
輝石安山岩					1		1					2		1						1			1		7
輝石安山岩(第四紀)				4					1	1															6
無斑晶質安山岩							1																		1
緻密質輝石安山岩(第四紀)							1				1														2
多孔質安山岩																			1				1	1	3
多孔質安山岩(第四紀)									2																2
多孔質輝石安山岩									1										1						2
多孔質輝石安山岩(第四紀)								1																	1
石英含有かんらん石輝石安山岩																1									1
多孔質かんらん石輝石安山岩																						1			1
火山碎屑岩類																									
流紋岩質凝灰岩	1																								1
堆積岩類																									
砂岩(古期)				1								1													1
頁岩(古期)	1			1	1		2			4	2				2	1									14
頁岩	1	1	1				1																		4
チャート	9		1				1																		11
変成岩類																									
華青石ホルンフェルス				2	1		1			3															7
変質岩類																									
珪化流紋岩																		1	1						2
鉱物																									
玉髓	1																								1
合計	13	1	2	8	3	1	8	1	4	8	3	1	2	1	1	3	2	2	2	2	1	2	1	1	73

#1「東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部・杉村遺跡」掲載データ #2「東谷・中島地区遺跡群 14 権現山遺跡南部・磯岡遺跡」掲載データ

が石皿や磨石に使用されるなど、一部の器種では石材利用の傾向が認められる(第8表)。

4. 考察 権現山遺跡は宇都宮市南東部に位置し、周辺には後期更新世から完新世の段丘堆積物が広く分布している。本遺跡の東方には大河川の鬼怒川が南流し、西方には田川が鬼怒川とほぼ平行して流れる。周辺の段丘堆積物からは、これらの河川に由来する礫が採取できるものと考えられ、それらの礫は在地性の石材とみることができる。したがって、出土石材の在地、非在地について検討するには、鬼怒川および田川の水系に分布する地質の把握が重要となる。

鬼怒川は栃木県と福島県の県境の下野山地を水源とし、水系には多様な地質が分布する。鬼怒川流域の地質については、山本ほか(2000)の20万分の1地質図幅「日光」や、須藤ほか(1991)の20万分の1地質図幅「宇都宮」に概略が記されている。鬼怒川上流域における基盤岩はジュラ系の付加複合体とされる足尾帯であり、硬質の砂岩、頁岩、チャートなどから構成される。足尾帯は後期白亜紀～古第三紀の花崗岩類に貫かれており、鬼怒川支流の大谷川上流においては花崗岩類と同時代の奥日光流紋岩類と呼ばれる流紋岩-デイサイト質火砕岩に覆われている。鬼怒川本流の中～上流域においては、足尾帯および花崗岩類はさらに前期中新世～鮮新世のデイサイト-流紋岩質火砕岩や、玄武岩、安山岩、デイサイト-流紋岩の溶岩などによって覆われている。花崗岩類および前期中新世～鮮新世のデイサイト-流紋岩質火砕岩には、中新世の流紋岩およびデイサイト-流紋岩岩脈が各所に貫入している。上流域にはさらに第四紀火山も数多く分布し、男体火山、女峰赤雉火山などの日光火山群や、高原火山といった玄武岩、安山岩、デイサイトの溶岩・火砕岩などを主要な構成岩石とする火山が点在している。

一方、田川は、日光市今市周辺に水源を持ち、流域には新第三系の火砕岩類、溶岩などが広く分布している。その岩相は流紋岩-デイサイト質火砕岩、玄武岩、安山岩、デイサイト-流紋岩の溶岩などであり、宇都宮市周辺においては大谷石の石材で有名な中期中新世の大谷層が分布している。このほか、流紋岩-デイサイト質火砕岩類を主体とする奥日光流紋岩類なども小規模に随伴する。

第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物

出土石器において最も頻繁に使用される石材は、火山岩類である(第8表)。火山岩類は、新第三紀または第四紀の地質に由来すると推定されるものが主体であり、安山岩類を主とし、流紋岩類を僅かに伴う。火山岩類は、鬼怒川や田川流域の代表的な岩種であり、本遺跡周辺地域の段丘礫や河床礫などから容易に採取できる在地性石材とみることができる。

堆積岩類も使用頻度の高い石材であり、チャート、砂岩(古期)、頁岩(古期)といった石材は、古期堆積岩類の岩相を示す。これらの石材は足尾帯に由来するものと考えられ、足尾帯が広く分布する、足尾山地や鬼怒川最上流部の帝釈山の東～南側地域に起源をもつ石材と考えられる。頁岩(古期)と岩相が類似する変成岩類の堇青石ホルンフェルスについても、同様に足尾帯に由来する石材とみることができる。堇青石ホルンフェルスは、頁岩などの泥質堆積岩が花崗岩質マグマなどの貫入により熱変成を受けた岩石であり、頁岩と関連性のある石材と捉えられる。このような足尾帯に由来する石材についても、火山岩類と同様に本遺跡周辺において容易に入手できたものと考えられる。

吉川ほか(2010)によると、本遺跡周辺の段丘堆積物は、宝木段丘堆積物、田原段丘堆積物および最低位段丘堆積物に分けられている。これらの段丘堆積物における円礫層の岩種は、流紋岩、安山岩、砂岩、頁岩、チャートとされており、最大粒径は宝木段丘堆積物において20cm以上、田原段丘堆積物および最低位段丘堆積物において15～20cmとなっている。今回鑑定試料とした石器に使用される上記の主要石材は、吉川ほか(2010)に示される段丘堆積物中の礫種と調和的である。また、礫径についても、十分な大きさのものが採取できるものと考えられる。

在地性と判断される石材としては、この他に火山砕屑岩類の流紋岩質凝灰岩、変質岩類の珪化流紋岩などが挙げられる。これらは、鬼怒川または田川流域に分布する新第三系の地質に起源する石材と推測され、希少石材ではないことから、河床礫や段丘礫などから入手されたものと考えられる。

上記の在地性石材に対し、異地性の可能性がある石材は、半深成岩類の閃緑斑岩、堆積岩類の頁岩(古期以外)、鉱物の玉髄である。これらは、鬼怒川の河床礫においても入手できる可能性はあるが、その地質分布は小さいため、本遺跡近隣の河川の河床礫にはほとんど見つけることはできないと考えられる。閃緑斑岩は、ドレライトに近い岩相を示し、磨製石斧として1点だけ出土している。閃緑斑岩の産地を特定することは難しいが、流通性のあるドレライトの磨製石斧と同様に、遠方からの搬入品の可能性も指摘される。玉髄については、剥片試料において母岩の流紋岩が付着する状況が認められており、流紋岩の分布域より採取された可能性がある。鬼怒川の上流域には流紋岩の分布が各所に認められており、これらに伴って産出する鉱物と推測されるが、採取地については不明である。鑑定された頁岩は、足尾帯に由来する古期頁岩が主体となっているものの、石鏃、石匙、スクレイパーなどには均質で貝殻状の断口を示す中新統の頁岩とみられるものが確認される。鬼怒川や田川の流域には、このような岩相を示す頁岩の広い分布は知られていないため、中～上流域の小規模に産する頁岩分布域の近傍より採取されたものと推測される。

鬼怒川や田川流域の地質背景をもとに、石材の由来について検討した結果、上記の通りほとんどの石材は鬼怒川や田川流域の地質と整合することが明らかとなった。一方、異地性と推測される石材も列挙できたが、産地の詳細は不明である。主要石材については、本遺跡近傍の鬼怒川や田川における実際の河床礫との石材組成の比較が重要と思われるが、異地性とみられる石材についても鬼怒川、田川の河床礫において採取できるかどうかをまず確認することが課題である。

引用文献

五十嵐俊雄, 2006, 考古資料の岩石学. パリノ・サーヴェイ株式会社, 194p.
須藤定久・牧本 博・秦 光男・宇野沢 昭・滝沢文教・坂本 亨・駒沢正夫・広島俊男, 1991, 20万分の1地質図「宇都宮」, 地質調査所.
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター, 2010, 東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部(2～4区・SG1区)・

杉村遺跡(GN1区), 栃木県埋蔵文化財調査報告 第331集, 栃木県教育委員会, 331p.
山元孝広・滝沢文教・高橋 浩・久保和也・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久, 2000, 20万分の1地質図幅「日光」, 地質調査所.
吉川敏之・山元孝広・中江 訓, 2010, 宇都宮地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 産業技術総合研究所地質調査総合センター. 79p.



第111図 権現山遺跡SG10区 全体図 (1/600・等高線主曲線20cm)

第5章 権現山遺跡 SG10 区

権現山遺跡 SG10 区は、宇都宮市東谷町字杉村 911-1・911-2・912-1・913～915・916-1・916-2、同市砂田町字原田 434-2 に所在し、北緯 36° 28′ 58″、東経 139° 54′ 21″（世界測地系）である。権現山遺跡の中心部と考えられる中期の居館 2 基（SG1 区と SG5 区）に挟まれた遺構集中地区である。「西谷田」の低地を東側に望む低台地の東端に立地し、調査前の現況地形が台地部標高 80.4～81.3m、東側低地部（標高 79.5～79.9m）との比高が約 0.9～1.4m。SG10 区の範囲は南北長 180m×東西幅 50～120m で、調査面積は 13,400㎡。SG10 区の南西は SG5 区の遺構密集地区へ続き、北西側は SG1 区へ続く。ただし、SG10 区西部から南（SG5 区北端）と北（SG1 区南端）に続く部分は、地山ロームまでおよぼ土取で攪乱され、遺構の大半が消滅している。SG10 区北側の杉村遺跡 SG1 区は古代道路（推定東山道）調査区である。さらにその北方には、杉村遺跡北関東自動車道調査区の前古墳時代集落が立地する微高地がある。

第1節 縄文時代の竪穴建物跡

SG10 区 SI-63（第 14・15 図、写真図版 69・171・172）

〔位置〕 SG10 区中央部の 20-19 および 21-19 グリッドにあり、古墳時代の SD-304 に切られる。他に縄文晩期の遺構はない。縄文時代遺構外出土の晩期粗製土器がごく少量あり（『東谷・中島地区遺跡群』10, p.87）、SI-63 に関わる縄文晩期集落の遺物が周辺の古墳時代遺構 SD-304・SI-59 に流入したものであろう。縄文晩期集落関係の遺構が他にあったとしても、古墳時代や中世の開発で消滅したことが推定される。

〔規模と形状〕 不整形の建物跡で、主軸方位は GN-36° -E（P1 を通る北東-南西方向の対称軸）。規模は 3.88m（北東-南西方向）×3.86m（南東-北西方向）、残存壁高は 8～17cm。柱穴は P1 だけを確認し、深さ 20cm、底面形状から推定した柱径は 15～20cm である。壁際などをよく探索したが、他の柱穴は認められなかった。入口施設・壁溝・貼床はない。

〔炉〕 南寄りにあり、東西 85×南北 74cm、深さ 16～21cm でかなり深い。炉体土器を埋めるために深いのではなく、炉底面が非常に良く焼けていたのでこの穴自体が炉だと考えられる。炉の東側は、長さ 115cm の範囲が床面から 4～6cm の深さでくぼみ（炉 4 層）、その上面付近に薄く貼り付くように炭粒を多く含む。炉の図に記入した土器片は、周囲の竪穴床面と同様のレベルで、炉覆土上面付近に多い。炉覆土中位（炉断面図の 2 層中位）にある土器片が最も深い位置で、覆土下位や炉底面には土器片がない。炉の周囲に焼土が多く、炉内中央の 3 層に焼土が最も多い。

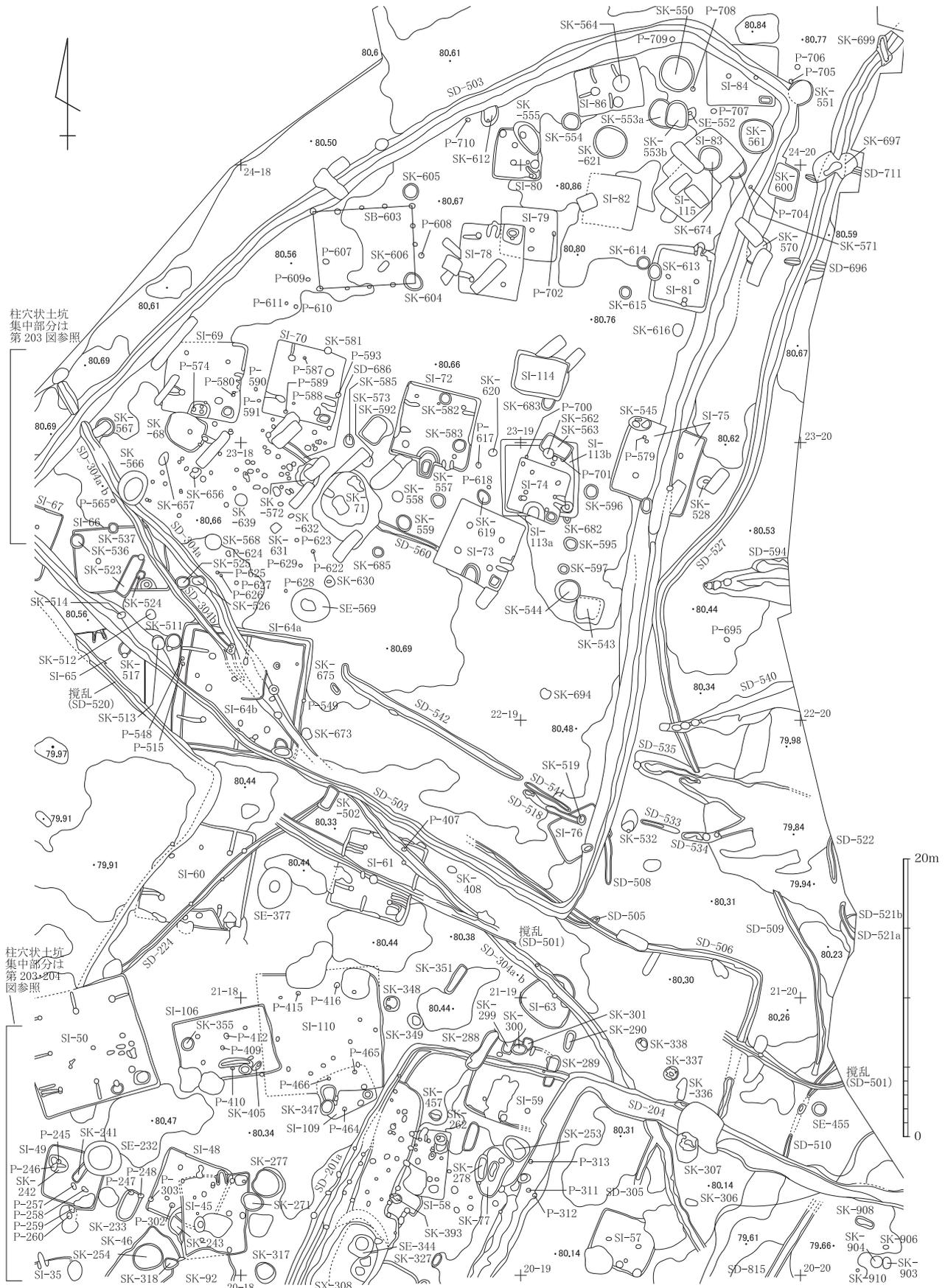
〔覆土〕 大半が暗褐色土で、中央上部に黒褐色土が入るので、自然埋没の可能性がある。テフラ粒などはない。重複する SD-304 と一緒に柱穴 P1 を掘り上げてしまったので、P1 内の覆土の状況が不明である。

〔遺物出土状況〕 南西側の約半分に遺物が多い。炉の上方に大形の多孔質安山岩の自然石があり、被熱して割れたと見られる破片に接合できた（写真図版 172-22）。

この大形自然石は上半が床面レベルより上にあり、下半が炉覆土に入り込む。断面図 A-A' は大形自然石の縁辺を切るラインで図化しているので、この石を縦長の形に描いている。炉東側の炭分布範囲には土器類が少ない。21-1・2 と同一母岩の玉随質小剥片・碎片は、この炭化物集中部から採取したポリ袋 1 枚分の土を 1.2mm メッシュで水洗選別して検出した。

〔出土遺物〕 2 は口縁部に小突起と補修孔がある浅鉢。3 は、広げた口縁部上面に文様を持つ大洞 C1 式の浅鉢で、他の遺物よりも古いので周辺遺構から流入したと考えるのが自然だが、C1 式期の遺構・遺物は周辺に認められていない。口縁上面に小突起を持つ有文粗製深鉢（6）は大洞 C2 式で、網目状撚糸文の 7 は壺形に近いので C2 式でも新相である。8 と 11 の胴部下位は無文。C2 式期と考えられる 3 孔の円盤状土製品

第5章 権現山遺跡 SG10 区

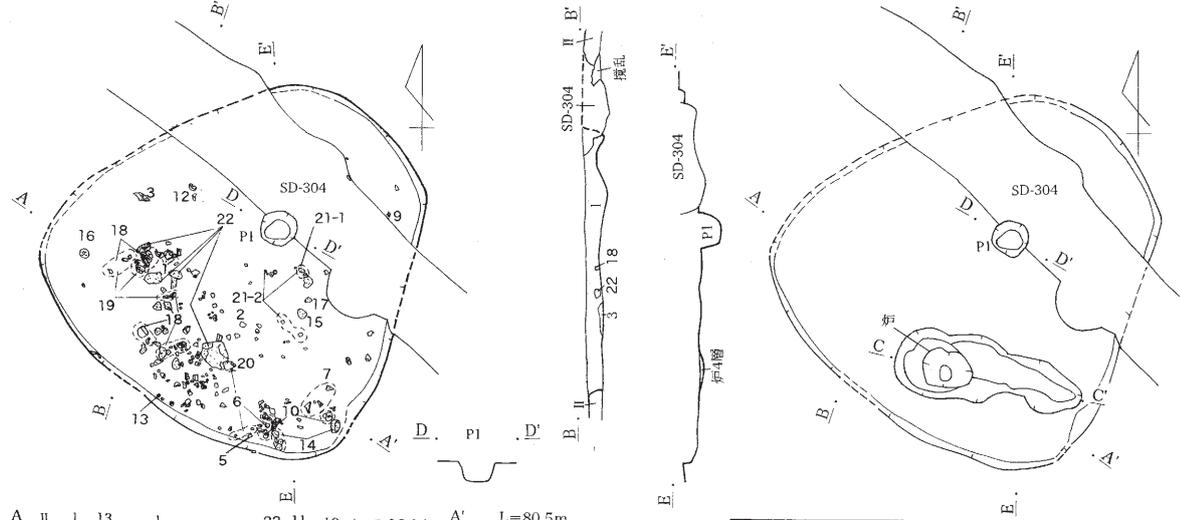


第12図 権現山遺跡 SG10 区 北半部拡大図 (1/400・等高線主曲線 20cm)



第13図 権現山遺跡 SG10区 南半部拡大図 (1/400・等高線主曲線 20cm)

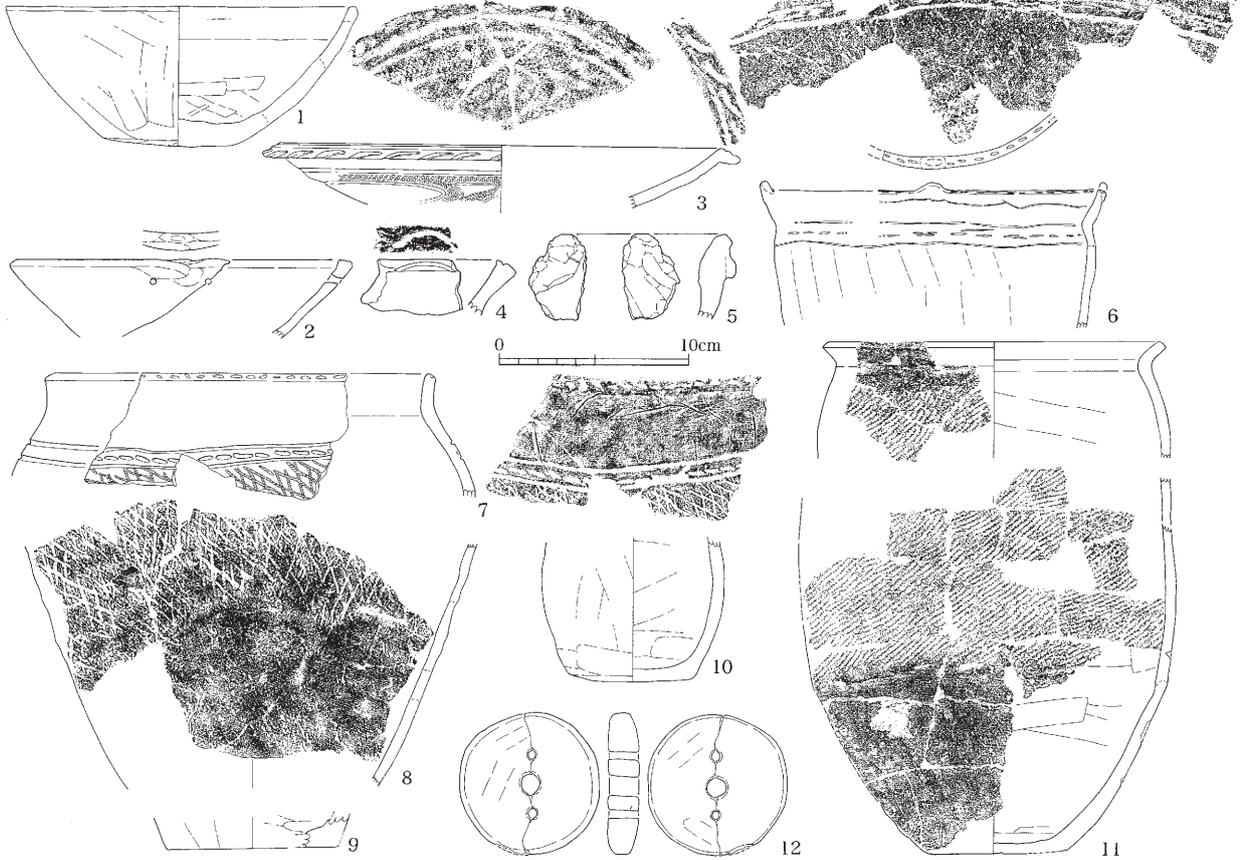
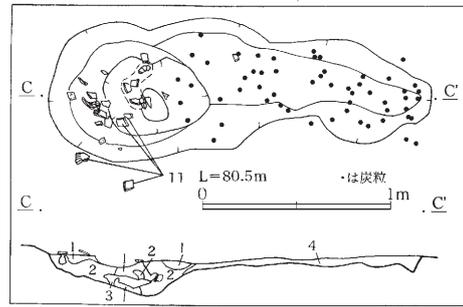
第5章 権現山遺跡 SG10 区



SG10区SI-63 (4~9層は欠番)

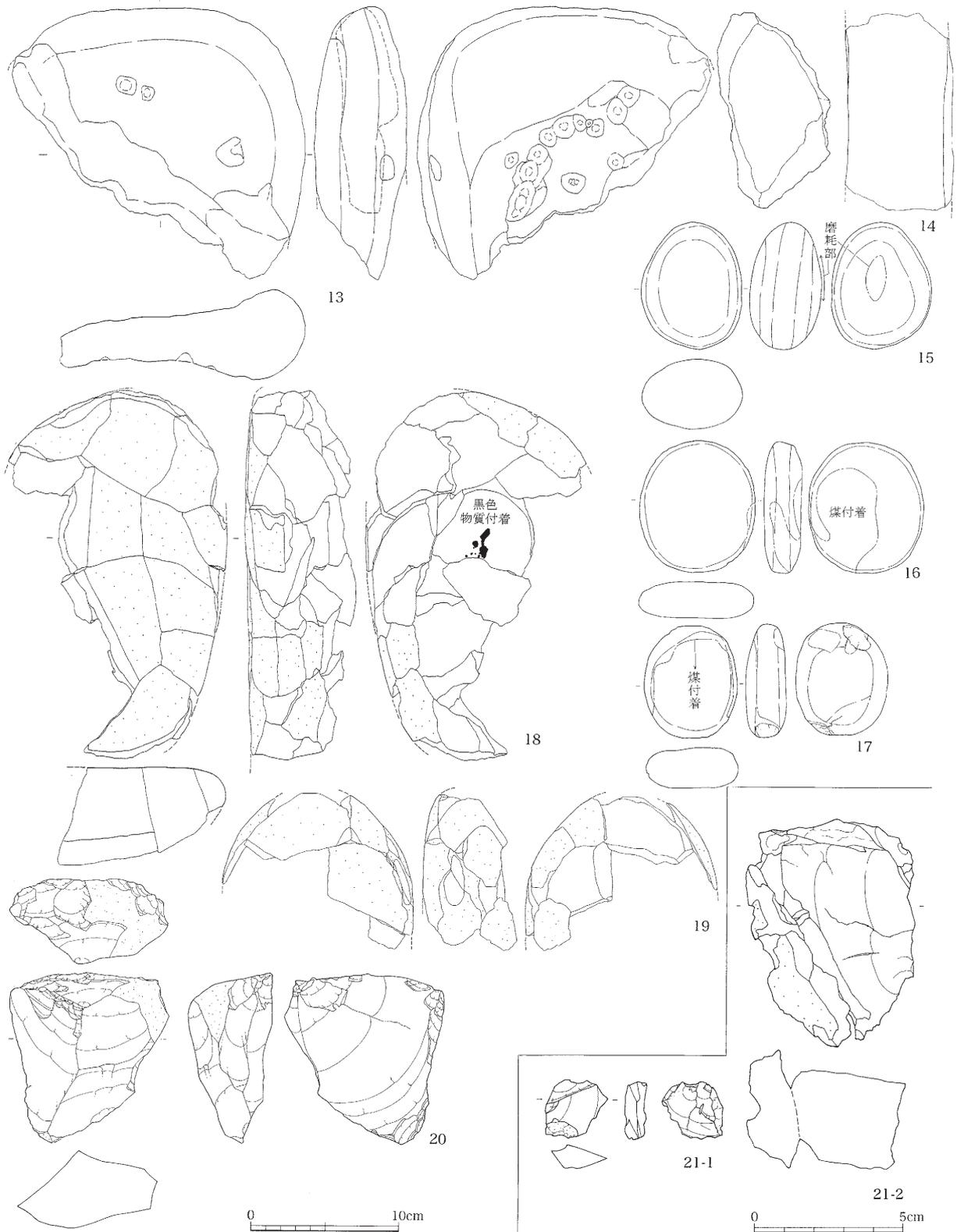
- 1 暗褐色 ローム微粒少。2層の黄暗褐色の土がしみのように入る。しまりやや弱。粘性やや有。
- 2 黄暗褐色 1層よりもやや黄色味強。しまりやや弱。粘性やや有。
- 3 黄褐色 ロームと1層の混合土。おそらく攪乱。しまり強。粘性有。
- 10 黄褐色 地山II層に類似するので、地山の可能性もある。しまりやや弱。粘性有。
- 11 黒褐色 ローム微粒若干。焼土粒極少。しまりやや強。粘性有。
- 12 黄色 ロームに暗褐色土塊が、しみのように混入。しまり強。粘性有。
- 13 黒褐色 基本は1層だが、ローム微粒・炭化物が多。しまりやや弱。粘性有。
- II 黄褐色 地山であるが、はっきりとした黄色ではない。しまりやや弱。粘性有。標準土層のII層と同じ。

- 1 明茶褐色 ローム・黒色土・褐色土の微粒と少量の焼土粒が混じる。
- 2 暗黄褐色 1層から黒色土がなくなり、ローム・褐色土の混合土。焼土粒は小さくなり多。しまりやや弱。粘性有。
- 3 明黄褐色 ローム粒と焼土の混合土。2層よりも焼土粒多。しまりやや弱。粘性有。火床かもしれない。
- 4 暗褐色 炭化物の入った黒褐色土とロームの混合土。しまりやや弱。粘性有。



第14図 権現山遺跡 SG10 区 SI-63 (1) 遺構・遺物

(12) は小型品である。有孔円盤形土製品は宇都宮市刈沼遺跡や小山市寺野東遺跡（環状盛土遺構）に例があり、市原市西広貝塚など千葉県域にも多い。SG5 区の前墳時代遺構混入遺物および遺構外出土縄文時代遺物にも、同種の有孔円盤形土製品が3点ある（第10図2～4）。



第15図 権現山遺跡 SG10 区 SI-63 (2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

石器は石皿兼多孔石・磨石・敲石がある。剥片および石核類では、乳白色の玉髄質の石核1点(21-2)・小剥片5点(21-1他)・碎片少量と、チャートの微細剥片1点がある。玉髄質の小剥片と石核は同一母岩で、石器製作時の調整剥片と残核が残され、完成した石器は持ち出されたのであろう。18と19は被熱破損した自然礫。この2点よりも大きな多孔質安山岩の自然石も1点あり、やはり被熱破損している(長径35×短径30×厚さ18cm、写真図版172-22)。石器石材は、パリノ・サーヴェイ(石岡智武氏)の観察による岩石学的な名称である。「頁岩(古期)」(20)は、考古学で通常用いる岩石分類では「ホルンフェルス」と認定しているものである。

第9表 権現山遺跡 SG10 区 SI-63 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 縄文土器 浅鉢	口 18.1 高 7.4 底 6.9	外底面は1方向ヘラケズリで緩い凸面状。外面体部は縦～斜位のヘラケズリで擦痕状。内面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色粗～細粒 多、黒・透明細粒やや多 やや硬質	中央南・西部床土6～7cmで接合 口1/3周、底11/12周 70、71、73、85
2 縄文土器 浅鉢	口 復17.5 高 残4.1	内外面は無文で内面を丁寧に磨く。口縁端面に小突起を持ち、その周辺で外面も肥厚させる。補修孔を2箇所、内面から外面へ向かって開ける。孔径は3.1～3.4mm。	外:7.5YR6/6 橙 内:2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白・黒・灰色・透明粗～細粒やや多 やや硬質	中央南部床直土と炉底直土が接合 口1/6周 75、78、86、87、炉11
3 縄文土器 精製浅鉢	口 復23.0 高 残3.2 最大 復25.0	外面は口縁部が水平に外へ張り出し、胴部上端に沈線2本で上下を区画した幅1cmの無文帯を持ち、その下に雲形文を描いて2段LR横回転の縄文を充填する。三叉形の内部を彫刻的に凹ませる無文部も見られる。内面は口縁部上面に沈線を1周巡らして、その外周から口縁部へ向けて「し」字形の短沈線を描く。内外面が磨滅気味で文様や調整が不明瞭。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白・黒・透明粗～細粒やや多、灰色粗～細粒少 軟質	北西床直土 口1/4周 11
4 縄文土器 精製浅鉢	口 復20～30 高 残2.9	口縁部が広く厚くなり、端面に沈線で弧状または蛇行状の文様を入れる。外面体部は磨耗して調整不明で、内面は横位のミガキ。	外:10YR7/4 にぶい黄橙 内:10YR6/2 灰黄褐 やや粗い 白・灰色粗～細粒 多、透明粗粒と黒細粒少、金色雲母細片極少 硬質	北上面表土 口1/18周 北上面表土
5 縄文土器 深鉢か		内外面ともに雑なコビナデ。口縁部にヨコナデを行わない。断面図に示したように、外面に貼り足した粘土塊または粘土紐をそのまま残している。完成した土器ではなく、製作途中の粘土が焼成されてしまったものとも考えられる。	外:2.5Y6/2 灰黄 内:2.5Y4/1 黄灰 やや緻密 白・灰色・透明粗～細粒やや多 硬質	南部床土6cm 14
6 縄文土器 深鉢	口 18.1 高 残7.5	非常に薄い。口縁部上面には長さ5mm程の短線状刺突を行う。また、4単位の小突起を持ち、そのうち3箇所が現存する。口縁部外面は細い粘土帯を貼り付けて、その下端が浅い段または沈線に見るように接合痕を残している。肩部はやや鋭い工具で2本の沈線とその中間に横位の短線を描く。胴外面タテヘラケズリ。内面は胴部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面胴部が被熱して赤色化する。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・灰色粗～細粒 多、透明粗粒と赤・黒細粒少 やや硬質	南部床土3～8cmが接合 口2/3周、肩全周 6、13、18
7 縄文土器 深鉢	口 復19.8 高 残6.6	口縁部には右横から棒で刺した連続刺突。肩部は平行沈線間に連続刺突を行い、刺突は工具を深く入れた左から右へ浅く抜くように動かす。胴部は1段Rの縄を巻いた絡条体で網目状燃糸文。内面はナデで、口縁部と肩部にヨコヘラミガキ。	外:5Y3/1 オリーブ黒 内:2.5Y6/3 にぶい黄 粗い 白・黒・透明細粒やや多、白粗粒と赤細粒少 やや軟質	南部床土9cm 口1/6周 3
8 縄文土器 深鉢	高 残12.8	1段Rの縄を巻いた絡条体で残存部の上半に網目状燃糸文。残存部下半の外面は下方向へのタテヘラケズリ。内面は丁寧なナメヘラナデ。	外:7.5YR6/6 橙 内:7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・灰色粗粒と白細粒多、黒・透明細粒と金色雲母細片少 やや軟質	周辺部および南側の表土中 胴1/3周 周辺表土、南表土
9 縄文土器 深鉢	高 残1.8 底 復9.0	外底面は無調整で外周だけに軽いヘラケズリ。外面胴下端ナメヘラケズリ。内面ヨココビナデ。外面に煤が少量付着。	外:7.5YR7/4 にぶい橙 内:10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多 やや硬質	北東床直土 底1/6周 107
10 縄文土器 深鉢	高 残7.7 底 6.7 最大 残9.5	外面底部に1方向のヘラケズリ後ヘラナデ、外面体部に斜位と下端に横位のヘラナデ。内面は底部に多方向ヘラケズリ、体部に横～斜位のヘラナデ。外面全体がよく被熱赤化している。	外:7.5YR7/4 にぶい橙 内:2.5YR6/6 橙 粗い 白・灰色粗～細粒多、透明粗粒と黒細粒と金色雲母細片少 軟質	南部床土1～11cmが接合 底全周 2、5、6、8、9、13、18、22、50、97、113
11 縄文土器 深鉢	口 復20.3 高 残23.3 底 7.6	外面胴部中位以上に2段LR横回転の縄文。外面口縁部ヨコナデ、胴部下位ナメヘラケズリ、外底面多方向ヘラケズリ。内面ナメヘラナデ。明確な被熱・煮炊痕はない。 [注記]17、16、17、20～24、29～31、33、35、36、38～41、46、48、49、53、59、115、116、118、119、128、炉1、炉3、炉5、炉6、炉一括、南東Aトレ	外:10YR7/6 明黄褐 内:7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・灰色粗～細粒 多、透明粗粒と黒細粒やや多 やや硬質	炉底直土～1cmと南部床直土～11cmが接合 口1/12周、底3/4周 注記は左欄
12 土製品 有孔円盤形	長径 7.4 短径 7.3 厚 1.6 重 96.3	焼成前に穿孔され、中央に1孔(径10.4mm)、両側に径5.6mmと4.0mmの各1孔がある。穿孔時の剥離や粘土はみ出しは見られない。両面と側面が丁寧にナデ調整される。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 白・黒・灰色細粒 多、灰色粗粒と透明細粒やや多 軟質	中央北部床土3cm 完形 12
13 石器 石皿	長 残18.5 幅 残19.8 厚 残6.1 重 残1409	左図の面を使用し、中央が緩く凹む。外周の側面に丸味を持ち、加工した可能性もあるが石材が多孔質なので加工痕は不詳。右図の面は中央が凹むが石皿としては使用せず、多孔石として用いられている。中央の図は側面で、その内部の破線は断面形。	N3/(B) 暗灰 多孔質安山岩(第四紀)	南西部床土6cm 約1/2残 40
14 石器 石皿	長 残13.3 幅 残7.7 厚 残7.3	図示した面が使用面で、ほとんど凹まないで中央の平坦な部位。裏面も平坦に近く、わずかに凸面状の丸味を持つ。全周は破面で、破損後に10×6cmの範囲で煤が付着。残存重量815.4g。	N6/(B) 灰 多孔質輝石安山岩(第四紀)	南東部床土3.5cm 一部残 1
15 石器 磨石	長 8.6 幅 6.6 厚 4.8	自然の円礫をそのまま使用。片面の中央部が少し磨耗している。他にも使用した部位があるかもしれないが不明瞭。被熱痕や付着物は見られない。重量392.4g。	N5/(B) 灰 輝石安山岩(第四紀)	中央部床土3cm 完形 98

16 石器 磨石	長 幅 厚 8.9 7.7 2.5	幅1cm程の側面を持ち、両面との間に稜線が弱く認められる。非常に多孔質なので、磨耗範囲や擦痕は不明。図示した範囲に暗灰色の物質が薄く付着し、おそらく煤と思われる。重量253.0g。	N5/(B) 灰 多孔質かんらん石輝石安山岩 (第四紀)	西部床上2cm 完形 69
17 石器 敲石	長 幅 厚 7.6 6.2 2.7	右図に示した面の右上と左下に敲打・破損痕あり。左図に示した面を中心として煤が明確に付着する。煤付着部以外は被熱して薄桃色に変色する。重量178.8g。	2.5YR7/0.5 明赤灰 黒雲母流紋岩(新第三紀)	中央部床上3cm 完形 99
18 被熱礫	長 幅 厚 重 残24.9 残14.8 残7.5 残2154	被熱した大きな自然礫。右図の面は被熱して桃色～赤灰色になり、左図の面は非常に薄く煤が付着する。熱によって表面が剥離し、中心部まで割れて2～8cm大の石片に分割され、石片が失われた部分も多いと見られる。破面に黒色付着物が付く部分が1箇所ある。19と同一個体の可能性あり。 [注記]4、32、41、50、52、54、55、57、61、63、66、67、79、121～123	2.5YR7/0.5 明赤灰 多孔質安山岩(第四紀)	南西部床直上～床上11cmと西部・南東部・中央部・南部の床直上が接合剥離・破損多 注記は左欄
19 被熱礫	長 幅 厚 重 残10.4 残12.9 6.4 残448	被熱した自然礫。右図の面と外周側面は被熱して桃色～赤灰色になり、左図の面は薄く煤が付着する。熱によって表面が剥離し、中心部まで割れて3～8cm大の石片に分割され、石片が失われた部分も多いと見られる。18と同一個体の可能性あり。	2.5YR7/0.5 明赤灰 輝石安山岩(第四紀)	西部床直上～床上10cmが接合剥離・破損多 63、66、67、123?
20 石器 石核	長 幅 厚 11.5 10.7 5.7	右図の面は強い打撃で初期に剥離している。この大きな剥片に対して、左図の各剥離面をその後剥離している。重量619.9g。	N5/(B) 灰 頁岩(古期)	南西部床上11cm 完形 72
21-1 石器 剥片	長 幅 厚 1.95 2.1 0.8	白地に細い黒色の縞が入る小剥片。同一母岩の石核1点と小剥片5点、破片少量があり、そのうち小破片1点を図化した。重量2.3g。	N9.5/(YR) 白 玉髄質珪化流紋岩	完形 101
21-2 石器 石核	長 幅 厚 重 7.7 5.6 5.0 140.3	白地に細い黒色の縞が入る石材。同一母岩でこの石核から剥離した可能性のある小剥片5点と破片少量がある。図の左半は自然面に近く不規則な形状をなし、早い段階に剥離・除去した部分を接合した。	N9.5/(YR) 白 玉髄質珪化流紋岩	完形 93、101、105
22 自然石	長 幅 厚 重 35 30 18 未計測	自然石で、被熱赤化は明瞭ではないが、おそらく被熱によって剥離が進行している。接合できないが同一母岩と見られる破片も22片(1254g)ある。実測図は作成せず、写真だけを掲載する。 [注記]27、42、44、56、58、64、65、67、68、74、80、83、84、114、125、130、南東Aトレ、南北トレ、周辺表土、北西カクラン	N5/(B) 灰 多孔質安山岩(第四紀)	中央～南西部の床直上～床上7cm 約1/2欠 注記は左欄

第2節 縄文時代の土坑(第16・17図、写真図版69・70・170)

縄文時代と考えられる土坑は、SG10区で6基を調査した。各土坑の詳細は第10表にまとめた。

SK-219は陥穴状土坑で、上部を切る古墳後期のSI-40貼床下で確認した。SI-40に切られるレベルの少し下で、上部が外側へ開いていたと思われる状況がある(断面図の1層・2層部分)。覆土4層は混じり物がないソフトロームで、現地所見では地山を掘りすぎた可能性も考えているが、5層(黒褐色土)との関係からみて地山ではないと考えられる。遺物は1片だけが2層で出土した。外面無文で内面の砂粒が擦痕状に少し動いた痕があり、内面黒色処理の可能性はある(外面は10YR7/4にぶい黄橙色、内面は10YR6/2灰黄褐色)。縄文早期の燃糸文系土器と判断した。

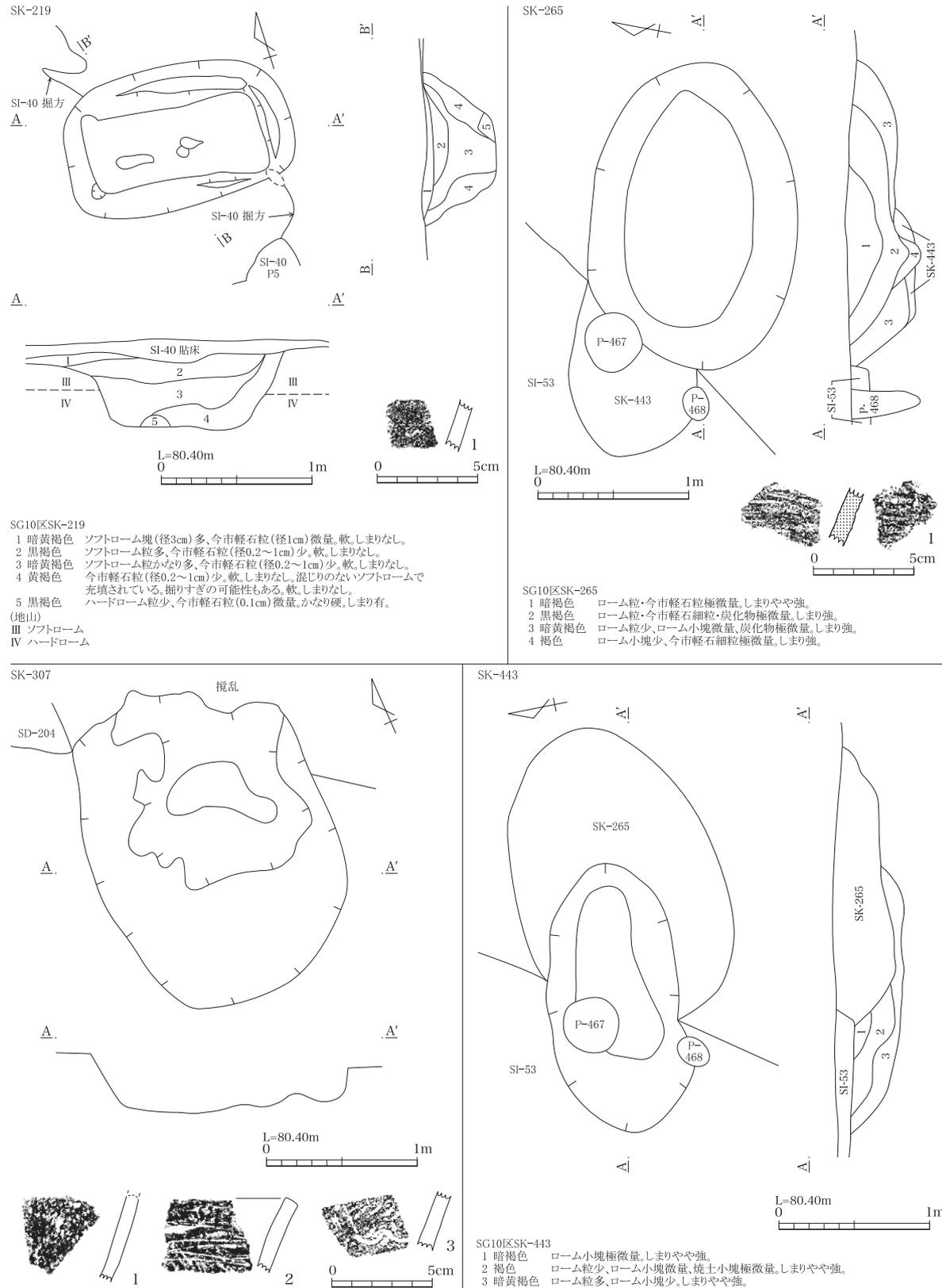
SK-265と443は重複する土坑で、土層が類似するので同一遺構かもしれないが、調査時の所見によると別々の土坑として扱っている。SK-265の遺物は1片だけある。内外面にやや浅い条痕を施し、繊維と白・透明粗～細粒の多い縄文早期土器で、外面は5YR7/6の橙色、内面は2.5YR8/3の淡黄色。SK-443に伴う遺物はない。SK-443を切る時期不明のP-467内にはSI-53の土師器片が落ち込んでいた。

SK-307の遺物3片はすべて縄文土器だが、早期燃糸文系・沈線文系と前期末～中期初めの結節縄文を施す土器が各1片で、時期にまとまりがない。1は縦位の縄文または燃糸文が非常に浅く、白・透明礫が多く硬質で、にぶい黄褐色(10YR3/3)。2は外面を斜め方向に削った後に横位の細沈線を多く描き、内面が擦痕状で白礫～細粒と黒・透明粗～細粒が多く硬質で、外面はにぶい黄褐色(10YR7/4)、内面は灰色(5Y5/1)。3は上下2箇所結節があるLRの縄を横位に施文し、白・透明粗～細粒と金色雲母細片が多く、黒細粒も少量含み硬質で、にぶい褐色(7.5YR5/4)。

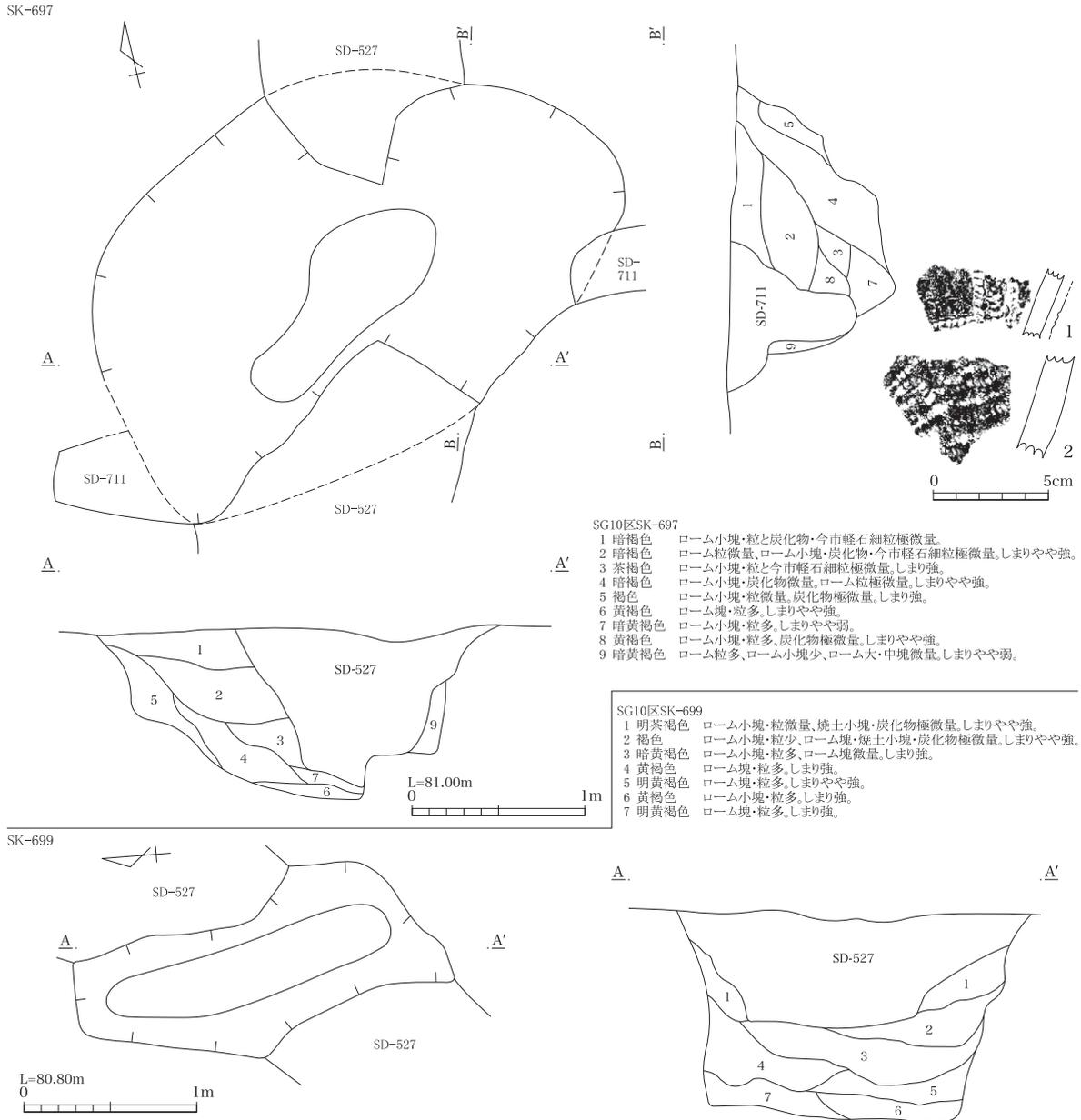
SK-697とSK-699は陥穴状土坑で、2基が並んでいるようにも見られる。SK-697は中期の阿玉台III式と中期後半(阿玉台III～加曾利E式)の破片が各1点と、図示以外に無文の1片がある。阿玉台III式の1は右及び下方向に進む爪形文が縦位隆帯の脇にあり、隆帯上に斜位の刻み、地文にごく浅い無節縄文(?)があり、白・透明粗～細粒が多く、黒細粒と金色雲母細片を少し含み硬質で、「SK-697付近」の遺構確認面で出土した。2は2段RL縦位施文で、内面は縦方向に削った後に磨く。白・赤粗～細粒が多く、黒・透

第5章 権現山遺跡 SG10 区

明細粒と黒雲母細片も含み硬質で、にぶい赤褐色（5YR5/4）。SK-699 には遺物がない。



第16図 権現山遺跡 SG10 区 縄文時代の土坑 (1) SK-219・265・307・443 遺構・遺物



第17図 権現山遺跡 SG10区 縄文時代の土坑(2) SK-697・699 遺構・遺物

第10表 権現山遺跡 SG10区 縄文時代の土坑

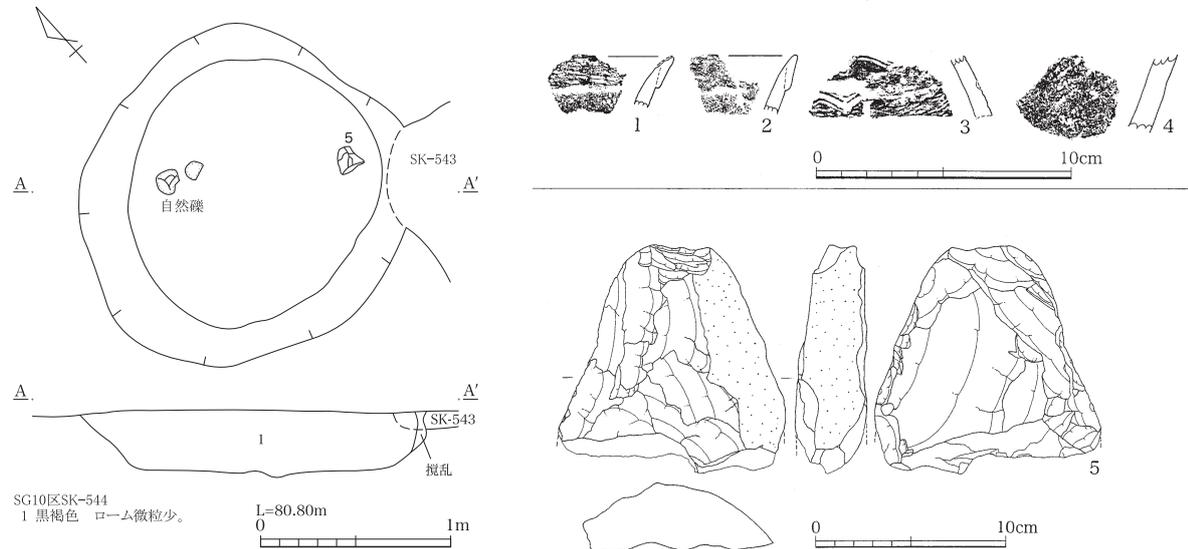
遺構名	グリッド	平面形	重複	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	中軸	覆土
SK-219	19.0-17.0	隅丸長方形	SI-40より古	1.54	0.98	0.62	N-80°-E	自然埋没
古墳後期のSI-40に上部を切られる。SK-220が近接するが重複しない。陥穴状土坑で縄文早期の可能性ある。柱状のものを立てていたような窪みが四隅の壁面にある。土坑底面は117×48cmの長方形。底面中央にある3箇所の窪みは底面から深さ3～6cmで浅い。遺物は無文の擦糸文系土器深鉢胴部1片のみ。								
SK-265	19.5-18.0	楕円形	SK-443→SK-265→SI-53→P-467・P-468	2.06	1.36	0.50	N-78°-E	自然埋没
縄文時代のSK-443を切る。SK-443と土層が類似し、同一遺構かもしれない。古墳中期のSI-53と時期不明のP-467に切られる。遺物は早期条痕文系土器1片の他に3cm大の小礫1点のみ。								
SK-307	20.0-19.5	不整形	SD-204より古?	2.20	1.60	0.40	N-55°-E	
底面に凹凸がある。台地東端が東へ傾斜し始める位置にある。近世のSD-204に切られると考えられるが、重複部分に風倒木痕の攪乱があり不明。土層断面図なし。遺物は早期擦糸文系・早期沈線文系・前期末～中期初頭の結節縄文を施す縄文土器片が各1片ずつあり、時期にまとまりがない。								
SK-443	19.5-18.0	楕円形	SI-53・SK-265・P-467・468より古	1.80	0.88	0.46	N-86°-W	自然埋没
古墳中期のSI-53、縄文早期のSK-265、時期不明のP-467・468に切られる。SK-265と土層が類似し、同一遺構かもしれない。遺物はない。SK-443出土として取り上げられた土師器杯は、P-467から出土したもので、SI-53からP-467に流入した土師器と考えられる。								
SK-697	23.5-20.0・24.0-20.0	楕円形	SD-527とSD-711より古	3.22	2.20	1.00	N-48°-E	
古墳中期後葉のSD-527とSD-711に切られる。陥穴状土坑。SK-699と並ぶものかもしれない。図示した半截竹管文および縄文施文各1点の他に、文様不明の1片がある。遺物がこの土坑に伴うかどうかは不明。								
SK-699	24.0-20.0、24.5-20.0	不整形	SD-527より古	2.20	0.86	1.23	N-21°-W	
古墳中期後葉のSD-527に切られる。陥穴状土坑。SK-697と並ぶものかもしれない。遺物なし。								

第3節 弥生時代の土坑

弥生時代の遺構は、SK-544 だけを調査した。この他に、後世の遺構から少量ずつ出土した SG10 区の弥生時代遺物を、権現山遺跡全地区の弥生時代遺物とともに前回報告書に掲載した（『東谷・中島地区遺跡群』10, pp.88-97）。以下の（ ）内は前回報告の土器分類を示す。SG10 区では、中期後半の土器として波状文・山形文などを描く破片（5 群）が中央部～西部の SI-64・106 と SD-304、重四角文（6 群 1 類）が北東部の SI-74、撚糸文・条線文を地文にするもの（7 群 1 類・3 類）が中央部東半の SD-527・821 と遺構外にある。中期後半でも東北南部系の平行沈線文土器（8 群 1・2 類）は北東部に多く（SI-81 と SD-503・527）、中央西部の SI-106 にもある。弥生後期土器（10 群）が南西部の SI-30 と北西部遺構外にある。他に、縄文や撚糸文の破片（9 群 1・2 類）が出土した。

SG10 区 SK-544（第 18 図、写真図版 70・170）

SG10 区北部の 22.0-19.0 グリッドにある。土層断面図では重複関係が明確でないが、整理作業時点で、古墳中期の SK-543 に切られると判断した。円形で南北 166 × 東西 182cm、残存する深さは 34cm。埋土は単層で、混入物が少ないので自然埋没かもしれない。テフラの層や粒は見られない。遺物は覆土中から 6 片出土したうち、文様のある 4 片を図示した。他に、底面直上から 9cm までのレベルで、礫が 3 点出土した。貼付口縁に撚糸文（1 段 L?）を施す甕口縁部小片が 2 点ある（1・2）。3 本以上の平行線で上下 2 段の山形文を肩部に描く壺片は胴部が 1 段 L (?) の撚糸文（3）。縄文のある甕片は上半に煤、下半に被熱が見られる（4）。各土器の混和材は、白または灰色粗粒と白・黒・透明細粒が目立つ。1 と 3 はにぶい橙色（7.5YR6/4）、2 はにぶい褐色（10YR5/3）、4 は橙色（5YR6/6）。また、折れた打製土掘具（石鋤）の基部が 1 点ある（5）。この石器の石材は、パリノ・サーヴェイ（石岡智武氏）の観察による岩石学的な名称では「砂岩（古期）」であるが、考古学で通常用いる岩石分類では砂岩が変成したホルンフェルスと認定しているものである。図示しなかった礫のうち 1 点は、全面が被熱赤化した礫片であった。弥生中期後半の土坑と考えられる。



第 18 図 権現山遺跡 SG10 区 SK-544 遺構・遺物

第 11 表 権現山遺跡 SG10 区 SK-544 出土遺物（1～4 は本文中で説明）

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
5 打製 土掘具 (石鋤)	長 残 12.1 幅 残 11.9 厚 3.9 重 残 516.9	自然面を背面に広く残す。腹面は大きく剥離した後に外周を背面側から加工する。図の上端はこれと逆に背面側を加工する。石材が非常に硬いので、着柄の磨滅痕等は不明。図の下端が大きく破損して放棄したと考えられる。	N6/(B) 灰 砂岩（古期）起源の緻密で硬質 なホルンフェルス	底上 9cm 下部欠 1

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

SG10区では古墳時代中期・後期の竪穴建物跡86棟を調査した（古墳中期の鍛冶遺構1棟を含む）。この他に、SG5区とSG10区の境界にある建物2棟（SI-4とSI-100）がある。

SG10区 SI-2（第19・20図、写真図版71・189）

〔位置〕SG10区南部、東側低地に面する台地平坦面縁辺部の17-17・18グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は北にSI-89a・89b・30がある。時期不明のSK-454とSK-1が北と西に近接する。南東隅で、古墳中期の円筒形土坑SK-210→SI-2→古墳後期のSD-41・42の順に重複する（断面図C-C'の右端部）。中央西寄りの覆土が時期不明のSK-203に切られる（断面図B-B'）。北辺の一部が攪乱され、床に達しない攪乱が覆土中にある。

〔規模と形状〕方形の建物跡で主軸方位はGN-9°-W。東西7.04×南北6.92m、残存壁高は最小24cm（南部）～最大46cm（北部）。主柱穴は4本で、柱間は東西約4m（南側3.96～北側4.04m）×南北約3.6m（東側3.58～西側3.60m）。床面からの深さは、北側が深く（P1=45cm, P2=47cm）、南側が浅い（P3=35cm, P4=39cm）。床面から深さ16cmのP6は、貼床除去後に掘方底面で確認した。入口施設は南側中央が想定されるが、ピットなどの遺構はない。

貯蔵穴P5は南東隅にあり、東西86×南北85×深さ45cm。貯蔵穴の周囲に幅約60cm・高さ2～7cmの土手状盛土がめぐる。覆土は竪穴部と同種で自然埋没している。間仕切溝は4本ある。北壁際で2本（D1・D2）、西壁際で1本（D3）、南壁際で1本（D4）の計4本がある。北部東半のD1は床面で認識できず貼床除去後に掘方底面で確認し、それ以外は床面で確認できた。D3は主柱穴P2に付随し、D1の南端はP6につながる。規模はD1が幅32×深さ9cm、D2が幅25×深さ8cm、D3が幅26×深さ9cm、D4が幅41×深さ15cm。北部西半にあるD2は平行する2本が作り替えられているのかもしれないが、土層横断面を確認していないため、詳細は不明である。掘方は外周部が内周部よりも7～15cm深い。

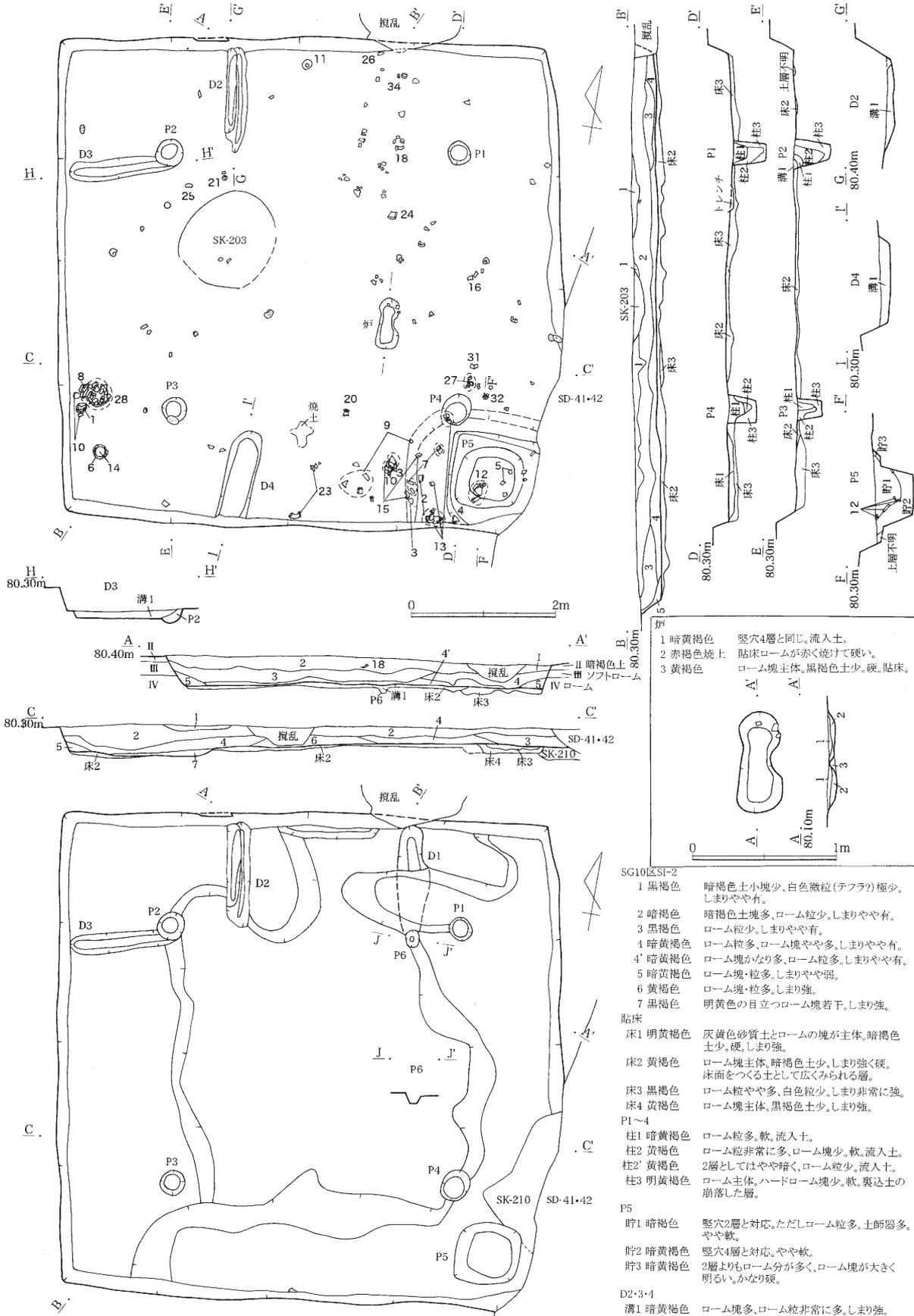
〔炉〕中央から南東に寄った位置にある。南北70×東西28～30cmの「8」または「B」字形である。浅い炉が2基つながったように、中央部が浅くて貼床土の焼け方が弱い。

〔覆土〕自然埋没状で、テフラの可能性のある白色粒を最上層に含む。南部にある焼土は床面から数cm浮いている。

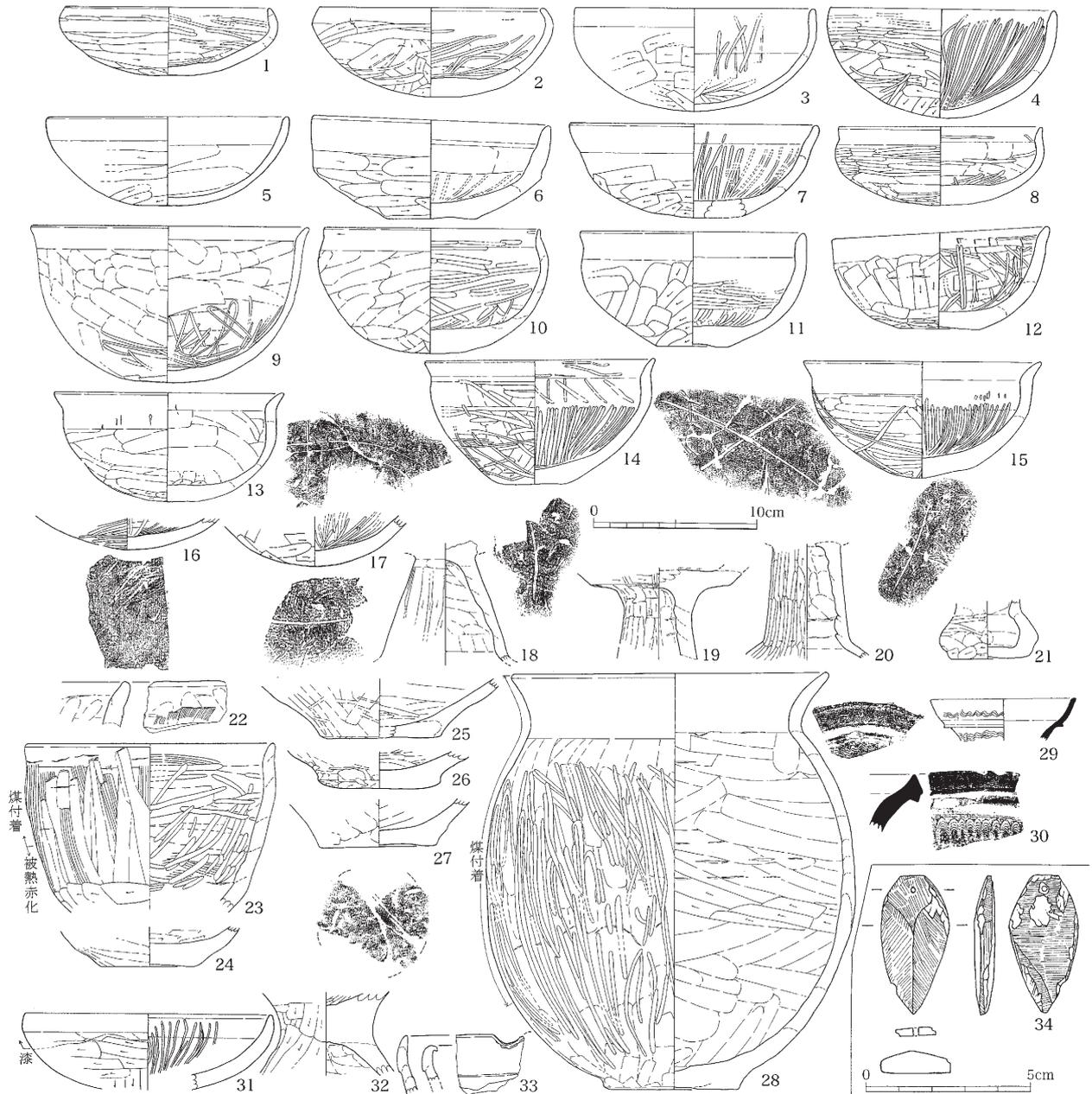
〔遺物出土状況〕遺物は建物全体から出土し、特に集中部はない。床面直上から出土するものはわずかで、多くは床面から浮いた位置で出土する。被熱痕や煤付着の見られる土器が、器種に関わらず多い。南西部では甕（28）の周囲に、残存度の高い正位の杯（1・6・8・14）と割れた杯（10）があり、6の上に14が重ねられていた。

〔出土遺物〕大きめの内斜口縁杯（9～15）と、初期の深い模倣杯（1～5）が主体である。14と15は体部に「×」と底部に「-」を、17は底部に「-」を描く。「×」の類例はSI-45にある。16は研磨具に転用している。21は小形粗製土器の小形壺。27は木葉底かもしれない。28は炉で煮炊きした状況の煤が付く甕。甕（29）は口径が小さく端面が水平なTK-208型式。須恵器甕（30）はSI-10の破片に類似する。石製模造品の剣形品はSG10区ではSI-73・101、古墳時代溝SD-527、後世の溝SD-201・506、遺構外出土古墳時代遺物にある。また、SG5区の剣形品はSI-8などにある。図示以外の土師器合計2,087片・12,306gの内訳は、杯790片・2,879g、高杯335片・2,166g、鉢22片・235g、小形壺45片・410g、壺甕類878片・6,442g、小形土器17片・175g。

漆仕上げの杯（31）・内面を炭素吸着処理するやや大形の高杯（32）・片口鉢（33）は、古墳後期の混入遺物。片口鉢はSG5区SD-41に類例がある。



第19図 権現山遺跡 SG10 区 SI-2 (1) 遺構



第20図 権現山遺跡 SG10区 SI-2(2) 遺物

第12表 権現山遺跡 SG10区 SI-2 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.4 高 4.1 最大 重 13.2 最大 重 151.9	外面の口～体部境に弱い稜あり。外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキおよび体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。内面は底部ヘラナデ後に疎らな1方向ヘラミガキ、上半部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明細砂少 やや軟質	南西壁際床土 10cm ほぼ完形、口 11/12 周 4、6
2 土師器 杯	口 復 13.6 高 5.6 最大 重 14.6	強く内彎する口縁部の端に面を持つ。外面は口縁部ヨコナデ後に体部を横位のヘラナデとヘラケズリ、底部多方向ヘラケズリ。内面は体部ヘラナデ後ナメヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒・赤・透明 細粒少 やや硬質	南西部床土 6～13cm 口 1/3 周 27、34、西南 1～3 層
3 土師器 杯	口 復 14～15 高 6.3	小片なので復原値は参考程度。薄い。外面は口縁部ヨコナデ、体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ、上半に縦位と底部に多方向のヘラミガキ。外面底付近に煤付着。	5YR6/6 橙 やや緻密 白礫～細粒と赤・ 黒・透明細粒少 やや硬質	南東部床土 10cm 口 1/12 周 21、31、東南 1～2 層
4 土師器 杯	口 13.6 高 6.7 重 残 283.6	底部が薄い。外面は口縁部ヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ、体～底部ヘラケズリ後に疎らなヘラミガキ。内面は密な放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白礫～細粒やや多、 灰色礫と赤・黒細粒少 やや硬質	南西壁際床土 12cm。東 南部と貯蔵穴 P5 の各 1 片も接合 ほぼ完形、口 11/12 周 35、西南 1～3 層、P5、 東南 3 層

第5章 権現山遺跡 SG10 区

5 土師器 杯	口 復 14.8 高 5.5	全体が薄い。外面は体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。内面は体部にナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	5YR6/6 橙 緻密 白・透明礫～細粒やや多、赤・黒・灰色細粒少 やや軟質	貯蔵穴 P5 底直上～底上 6cm 口 1/8 周 41、42、P5
6 土師器 杯	口 14.3 高 6.3 底 5.4	外面は口縁部ヨコナデ後、口縁部下位と体部にヨコヘラケズリ、底部多方向ヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に放射状ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 黒・透明粗～細粒やや多、白・赤粗～細粒少 やや硬質	南西隅床上 5cm。正位で 2 枚重ねた下側の杯 口 3/4 周、底全周 1、東中、西南 3 層
7 土師器 杯	口 復 14.9 高 5.7	口縁部内面が少し内彎する。外面は体部上半ナデ後、下半に横位と底部に 1 方向のヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデと体部ナデの後に放射状のヘラミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒・細砂粒少、礫・黒雲母微粒微量 やや硬質	南東部床上 4～9cm。 南西部の 5 片も接合 口 1/2 周 25、28、29、西南 1～3 層、東南 1～2 層
8 土師器 杯	口 12.4 高 4.8 最大 12.8 重 残 195.0	底部が丸く厚い。頸部内面に少し稜線あり。外面は体部に横位のヘラナデ後ミガキと底部に 1～2 方向のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は全体をヘラナデ後、体部下位に多方向と中位に横方向のヘラミガキ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗粒と黒細粒やや多、白・透明粗～細粒少 やや軟質	南西壁際床上 11cm 口 11/12 周、体全周 3
9 土師器 杯	口 復 17.0 高 9.6	外面は不明瞭なナデ後、主に下位にナメヘラミガキ。内面はヨコヘラナデ後、下半部に多方向にヘラミガキ。内外面口縁部にヨコナデ。	7.5YR5/4 にぶい褐 白粗～細粒やや多、黒・透明細粒と灰色礫少 やや硬質	南東部床上 10～18cm。 南西部の 2 片も接合 口 1/3 周 16、17、18、23、西南 1～3 層、東南 1～2 層
10 土師器 杯	口 13.1 高 7.7 最大 14.0	口～体部境の稜が内面で明瞭。外面～底部に多方向と体部に斜位のナデ後、内外面の口～頸部にヨコナデ。内面の体～底部に多方向と口縁部に横位のヘラミガキ。外面体部に煤が明瞭。 [注記]5、6、20、26、33、西南 1～3 層	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒粗～細粒やや多、赤粗粒と透明細粒少 やや硬質	南西壁際床上 10～12cm、南東部床直上～床上 11cm 口 7/12 周 注記は左欄
11 土師器 杯	口 13.7 高 7.0 底 4.3	底部に厚みがあり、外底面はヘラケズリして上げ底状。外面は口縁部ヨコナデ後に体部を横～斜位のヘラケズリ。内面は体部の下位に放射状と中位に横位のヘラミガキ。内面の上位は器面剥離で調整不明。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや少、白・黒・透明細粒と白礫少 やや軟質	北壁際の床上 7cm 口 1/2 周、底全周 80
12 土師器 杯	口 13.2 高 6.2 底 5.0 重 残 294.7	厚く重い。外底面はナデで平底状。外面体部は上半に縦位と下半に横位のヘラケズリ。内面体部は横～斜位にヘラケズリした後多方向のヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒やや少、白・赤粗～細粒少 やや軟質	貯蔵穴 P5 底直上～底上 46cm 口 5/6 周、底全周 36、37、38、39
13 土師器 杯	口 復 14.0 高 6.7	外面の体部をヨコヘラナデ後、外底面を削って丸底に仕上げる。内面は体部ナデ後に底部を 1 方向ヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。外面に広く煤付着。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・透明粗～細粒多、赤・黒細粒と灰色礫少 やや硬質	南東部床上 6～13cm。 南西部の 4 片も接合 口 1/3 周、底全周 26、32、34、西南 1～3 層
14 土師器 杯	口 14.5 高 7.1 重 残 325.7	外面は体部に横～斜位ナデ後、下半部に斜位ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。内面は中位以下に放射状ヘラミガキ。外面の側面に「×」と底部に「-」の焼成前刻線あり。外面全体に煤付着。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・透明細粒やや少、赤・黒細粒少 硬質	南東隅部床上 5cm。正位で 2 枚重ねた上側の杯 口 5/6 周、体全周 1、東中
15 土師器 杯	口 14.0 高 7.7 底 3.8	やや狭い平底面に沈線 1 本あり。外面は体部ナデ後に口縁部ヨコナデと体部下位ヘラケズリを行い、全体を磨く。外面に図示した焼成前の刻線「+」あり。内面全体と外面口縁部にヨコナデ。内面は下半に放射状と、上部に横～斜位のヘラミガキ。 [注記]2、20、21、24、30、50、西南 1～3 層、東南、東南 1～2 層、東南 3 層	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・透明細粒やや多、赤・黒細粒少 やや硬質	南東部床上 2～12cm、南西部にも破片あり 口 5/12 周、底 7/12 周 注記は左欄
16 土師器 杯 (研磨具 転用)	高 残 1.9	外面は密な多方向ヘラミガキ。焼成後に平行刻線のキズがあるので、研磨具に転用したと考えられる。内面はヘラナデ後に密な放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	東側床上 13cm 54
17 土師器 杯	高 残 3.0	丸底で外面底部は多方向ヘラケズリの後に焼成前の刻線「-」あり。内面は密な放射状ヘラミガキと炭素吸着の黒色処理。 [注記]A ベルト東 4 層、南東 A トレンチ、東北 1～3 層、東北、B ベルト北攪乱	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 白細粒やや多、黒・透明細粒少 硬質	主に北東部 注記は左欄
18 土師器 高杯	高 残 7.4	薄手で、内面の仕上げナデが比較的丁寧。外面は磨耗しているがタテヘラケズリとみられる。内面に稜を持って裾が開く。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒やや多、黒・透明細粒少 軟質	北東部床上 5cm 脚上端全周、下部 1/6 周 113
19 土師器 高杯	高 残 5.7	脚注上端部から 1.5cm 下で最も細くなる。外面は脚上部と杯底部にタテヘラケズリ後、杯底部外周と杯体部をヨコヘラケズリ。外面脚下部と杯体部にタテヘラナデまたはミガキ。内面は杯底部に放射状のヘラケズリ後ヘラミガキ。脚内面は粘土積み上げ痕を残し、雑なナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒やや多、透明・赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	脚柱 1/2 周、杯底 1/6 周 西中 1～2 層
20 土師器 高杯	高 6.7	薄く丁寧。外面は縦位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内面脚柱部下端は、倒立状態で反時計回りに積んだ紐痕を残すが、全体にやや丁寧なナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白細粒多、白粗粒と黒・透明細粒少 硬質	南部床上 17cm 脚柱全周 22
21 土師器 小形壺	高 残 3.6 底 4.4 最大 6.2	粗製の小形土器。外面は体部を雑にナデた後に疎らなヨコヘラミガキ、体部下端ヨコヘラケズリ。外底面はナデで平坦にする。内面は雑なヨコナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤粗～細粒多、黒粗粒と黒・透明細粒少 やや硬質	北西部床上 17cm 体～底部全周 75
22 土師器 鉢	口 復 18～20 高 残 3.6	小片 2 点しかないで口径は参考値。外面は体部に斜位のハケマまたはヘラナデ。内面体部に雑なヨコナデ。内外面の口縁部に雑なヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・透明粗～細粒と白・赤粗粒少 やや硬質	東北部 4 層と東中央部 4 層で各 1 片出土 東北 4 層、東中 4 層
23 土師器 鉢	口 復 15.1 高 残 10.3	口縁部は内面に弱い稜を持ち外へ折れる。外面は体部ハケマ→口縁部ヨコナデ→体部タテヘラナデ→下位ヨコヘラケズリ。内面は口縁部と体部下位にヨコヘラケ後、体部上位にヨコヘラナデと口縁部にヨコナデして、多方向の疎らなヘラミガキ。外面の下半部が被熱赤化し、上半部に煤が明瞭。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・黒・透明細粒少 やや軟質	南壁際床上 11～12cm。 南部床上 21cm と東南部 1～2 層の各 1 片も接合 口 5/12 周、口～体 5/12 周 12、13、130、東南 1～2 層
24 土師器 鉢?	高 残 2.5 底 5.8	外底面は少し上げ底状でナデ。外面体部ナメナデ、内面底部は多方向のヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・黒・透明細粒少 軟質	中央部床上 5cm 底全周 90

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

25 土師器 大形壺	高底 残 3.7 復 7.4	外底面はヘラナデ後に外周をナメヘラケズリして弱く突出する。胴部は外面がヘラナデで少し光沢があり、内面は横～斜位の丁寧なナデ。	2.5Y6/4 にぶい黄 やや緻密 透明・白・赤粗～ 細粒やや多、黒細粒少 硬質	北西部床上 11.2cm 底 5/12 周 74
26 土師器 甕		外底面はヘラナデ後に外周をナメヘラケズリし、やや丸みを帯びる。胴部外面と底～胴部内面は雑なナデ。内面に薄いコゲ痕あり。	10YR7/4 にぶい黄橙 粗い、白・灰色粗～細粒やや 多、赤・透明粗～細粒少 硬質	北壁際床上 21cm 底 1/3 周 102
27 土師器 甕	高底 残 2.8 7.1	外面胴部に雑なヘラナデ。外底面は木葉痕の可能性はあるが不明瞭。内面はヘラナデ。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 白・赤細粒多、黒・ 透明細粒少 やや軟質	南西部床上 2cm 底 1/3 周 50、南東 C トレンチ
28 土師器 甕	口高 19.2 25.6 底 8.1 最大 22.2 重 残 2059	外面は胴部タテナデ後タテヘラミガキ。外底面は外周に粘土を貼ってナデ。内面は胴部ナメヘラナデで、中位の積み上げ休止部付近にナメヘラケズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ。胴部下位を除く外面に煤付着。内面の汚れは不明瞭。	2.5Y5/6 明赤褐 粗い 白・赤粗～細粒多、灰 色粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南西壁際床上 9cmで横倒 してつぶれて出土。東 南部と西南部 2～3 層 の破片も接合 ほぼ完形 口 11/12 周、底全周 2、東南、西南 2～3 層
29 須恵器 甕	口高 復 9.6 残 2.6	口縁端面はごくわずかに内傾するが、ほぼ水平な面。外面の口～頸部境に明瞭な突線あり。3～4 歯の工具で口縁部と頸部に櫛描波状文。頸部は 2 回以上施文しているため波状文が重複する。施文時のロクロは左回転(反時計回り)。内面には自然釉が多く、灰黄色と暗緑色にやや汚く発色する。	5Y4/1 灰 やや緻密 半透明礫～細粒少 硬質	西中央部 口 1/4 周 西中 1～3 層
30 須恵器 甕	口高 復約 40 残 3.3	内外面をロクロナデの後、5 歯または 6 歯の工具で櫛描波状文。ロクロナデ時も波状文施文時も、同じくロクロ左回転(反時計回り)。黄灰色に発色した自然釉が外面に付着。	N5/0 灰 やや緻密 白・透明粗～細粒 多 硬質	南東部 口 1/24 周 南東 C トレンチ
31 土師器 杯	口高 復約 15 残 4.7	小片のため復原値は参考程度。外面体部ナデ後に口縁ヨコナデ、底部多方向と体部横位のヘラケズリ。内面ヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。内面全面と外面上位に漆仕上げ。古墳後期の遺物が混入。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・透明粗～ 細粒やや多 やや硬質	南西部床上 4cm 口 1/8 周 49
32 土師器 高杯	脚柱径 5.6	外面は脚部タテヘラケズリ後に杯体部を軽くナデ。杯内面は多方向の密なヘラミガキと炭素吸着の黒色処理。脚内面はヨコヘラナデ。古墳後期後半の遺物が混入。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒多、透 明礫～細粒と白礫・赤粗粒少 やや硬質	南東部床上 15cm 脚注全周 46
33 土師器 鉢	口高 推 15～20 残 3.7	SG5 区 SD-41 の 4(完形)とよく似ている。外面の口～体部境に浅い段あり。片口の注口部を焼成前に作り出した鉢の口縁部。内外面ともにヨコナデ。古墳後期の遺物が混入。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	南東部 口 1/12 周 南東 C トレンチ
34 石製模造品 剣形品	長幅 41.9 20.9 厚 6.4 重 7.0	形削工程の剥離痕を各所に少しずつ残す。背面には三叉状の稜を持ち、上端部以外の全周に幅 3mm以下の側面を持つ。背面の 3 面と腹面にほぼ 1 方向(部分的には 2 方向)の研磨痕。側面には下部を縦～斜方向、上部を横～斜方向に研磨する。図示した背面から腹面側へ 1 箇所穿孔し、腹面側に穿孔剥離を生じている。初孔径 1.55mm。終孔径 1.35mm。	5B1.7/1 青黒 緻密 緻密で軟質な滑石 やや硬質	北東壁際床上 15cm 完形 100

SG10 区 SI-4 (第 2 分冊の第 283 図、写真図版 22)

SG5 区 SI-4 と同一の建物跡である。SG10 区内では遺構の東半部がほとんど残っていないので、すべて SG5 区で報告する。

SG10 区 SI-6 (第 21～23 図、写真図版 71・72・174・189・190)

[位置] SG10 区南部、東側低地に面する台地平坦面縁辺部の 17-17 グリッド。同じく古墳後期の遺構は西に SI-14 と SI-85 がある。北に近接する時期不明の SK-234 とは重複しない。北東部で古墳中期の SI-30・89a・89b を切り、SI-89b → (拡張) → SI-89a → SI-30 → SI-6 の順序になる。

[規模と形状] 方形で中軸は N-7° -E、東西 5.36 × 南北 5.50m。残存壁高は 18cm (南西部) ～ 38cm (北部)。南西隅と南東隅にある段差は拡張部かもしれないが、内側にある周溝を埋め戻した状況がないので確実でない。地山の柔らかい部分を掘りすぎて生じた段差の可能性も否定できない。この竪穴は東西壁の上部を掘りすぎた部分もあると記録され、土層の識別が困難だったとみられる。掘方底面は小さな凹凸があり、ローム塊・粒の多い土で全体を貼床する。床面からの深さは中央部が浅く、周辺部が深い傾向を持つ。

主柱穴は 4 本 (P1～P4)。P1 と P4 には柱痕 (柱 1 層・柱 4 層) があり、P1 の土層は抜き取った可能性を示す。東柱穴東側と西柱穴西側に床面下約 20cm の一段浅い掘形を持つ (柱 3 層)。柱間は東西間 2.16～2.20m、南北間 2.46～2.54m。深さは P1=53cm、P2=57cm、P3=52cm、P4=42cm で、P4 が浅い。

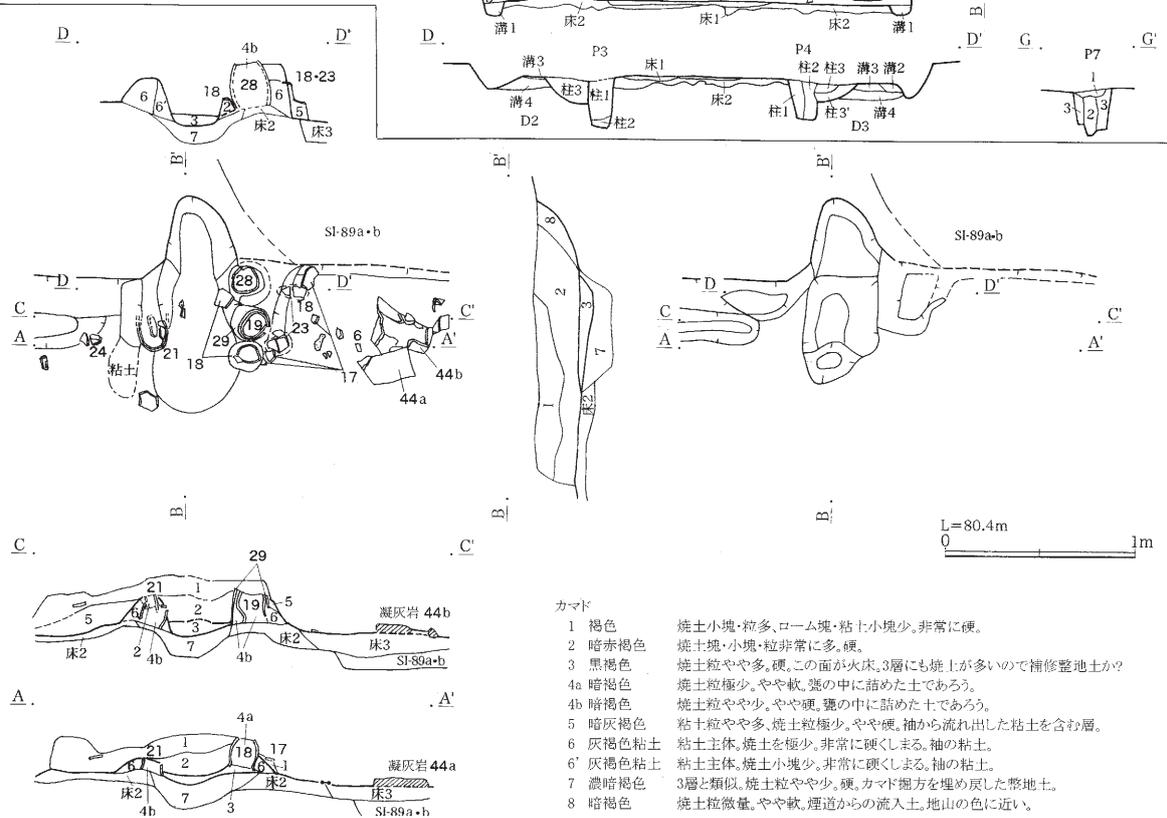
中央部の P7・8・9 は貼床下の掘方底で確認し、埋め戻した旧柱穴の可能性がある。P7 は径 47 × 36 × 床面から深さ 53cm、P8 は径 24cm・床面から深さ 21cm、P9 は径 28 × 22 × 床面から深さ 26cm。

壁溝 D1 は、SI-30・89a・89b の上に重複する北東部では、平面および土層断面観察で壁溝の存在を明確にできなかったが、それ以外の部分を全周する。間仕切り溝は西壁際で D2、東壁際で D3・D4 の計 3 本を掘方底面で確認した。床面からの深さは D2 が 8cm、D3・D4 が 17～18cm。主柱穴に付随する位置に

第5章 権現山遺跡 SG10 区

ある D2 と D3 の覆土は主柱穴覆土に切られる (断面図 D-D')。近接している D3・D4 は時期差があるとも見られるが、D4 の土層を確認していないため詳細は不明である。

- SG10区SI-6
- 1 暗褐色 白色粒(デブリ)やや多、ローム粒少。硬。しり強。
 - 1' 暗褐色 1層と同じでやや黒味が強。白色粒やや少。硬。しり強。
 - 2 暗黄褐色 ローム塊・小塊・粒やや多、白色粒極少。硬。しり強。
 - 3 暗赤褐色 2層中に焼土塊・粒多。
 - 床1 明黄色 ハードローム塊を滿く敷いた層。黒褐色土少。非常に硬くふみ固めている。
 - 床2 暗黄褐色 ローム塊・粒多、黒褐色土やや多、やや軟。
 - 床3 黒褐色 ローム塊・粒やや多。やや硬。下に堅穴があるので、黒味を帯びる。
 - P1~4
 - 柱1 暗褐色 ローム粒・小塊やや多。やや硬。柱痕部分。
 - 柱2 黄褐色 ローム粒・小塊非常に多。やや軟。裏込め土(P4)及びその崩落した土(P1・2・3)。
 - 柱3 褐色 ローム粒・小塊やや多。やや硬。裏込め土。
 - 柱3' 明黄褐色 ローム塊主体。褐色土少。
 - 柱4 暗黄褐色 ローム粒・小塊多。褐色土少。軟。柱痕部分。
 - P5・6
 - 貯1 暗黄褐色 赤色焼土塊多。ローム粒やや多。ローム大塊・塊少。非常に硬。
 - 貯2 黄褐色 ローム塊多。赤色焼土小塊少。非常に硬。
 - 貯3 暗黄褐色 ローム粒非常に多。褐色土やや多。ローム塊少。やや軟。
 - 貯4 黄褐色 ローム塊・粒非常に多。褐色土少。やや軟。
 - P7
 - 1 暗褐色 黒褐色土塊やや多。ハードローム塊・ローム粒少。軟。
 - 2 暗褐色 ローム粒少。軟。柱痕。
 - 3 暗黄褐色 ローム土主体。ハードローム粒・黒褐色土やや多。軟。
 - P8-9
 - 1 暗黄褐色 ローム主体。ハードローム塊・黒色土塊少。軟。
 - 2 暗黄褐色 ローム主体。暗褐色土塊やや多。軟。
 - 周溝D1
 - 溝1 黄褐色 ローム塊多。褐色土少。しり非常に強。
 - 間仕切溝D2・3・4
 - 溝2 暗赤褐色 ローム粒少。軟。
 - 溝3 暗黄褐色 床2層と類似。やや軟。
 - 溝4 黄褐色 ローム土主体。褐色土少。



第21図 権現山遺跡 SG10 区 SI-6 (1) 遺構

貯蔵穴は2箇所、作り替えた可能性もある。北西貯蔵穴P5は不整楕円で底面が東へ少し傾く。南西貯蔵穴P6はほぼ平底の長方形。P5・P6は壁が直線的で、自然埋没状。P5は52×40×深さ21cm、P6は88×64×深さ40cm。SG10区ではSI-16・18・19・40・86・89a・104・108・111に複数貯蔵穴がある。SG10区SI-89a・104や磯岡遺跡SG9区SI-49のように作り替えて複数になったともみられる。SG5区ではSI-11などに複数貯蔵穴がある。貼床土の硬化部(床1層)は断面で確認し、平面範囲は不明確である。

【カマド】北壁際中央にある。両袖幅91cm、煙道先端から東袖先端まで80cm。カマド袖の下部を掘方掘削時に少し高く掘り残す。東袖に土師器甕18・19と甑28・29を倒立し、北から2つめの29の中に19を入れる。西袖にも21を倒立する。火床面は構築当初の面と、整地土(3層)でかさ上げた面がある。袖が西へ流出したカマド5層が壁溝を埋めている。天井材と推定される軟質凝灰岩(44)が折れて東側床面で出土した。2点の破面を接合できないが、本来は合計重量5kg程度の同じ石だったと推定できる。外した天井石に亀裂があり再使用できないので廃棄したのであろう。片端部だけは出土しなかった。

【覆土】覆土は自然埋没状で、テフラの可能性もある白色粒を含み、上層に多い。南壁際にある粘土は、北部が床面に接し、南部が周溝埋土上に載る。西壁際3層中・南西部1層中・北東部2層中に焼土がある。

【遺物出土状況】建物跡全体で出土するが、中央部から南西のP3付近が希薄である。南壁際は遺物点数は多いものの、小破片主体の土器片ばかりである。北東部で床からやや浮いたレベルを中心として遺物が多く、同じ範囲に礫も多い(33～41)。床面の遺物は少ない。カマド構築材の土師器はカマドの項で説明した。

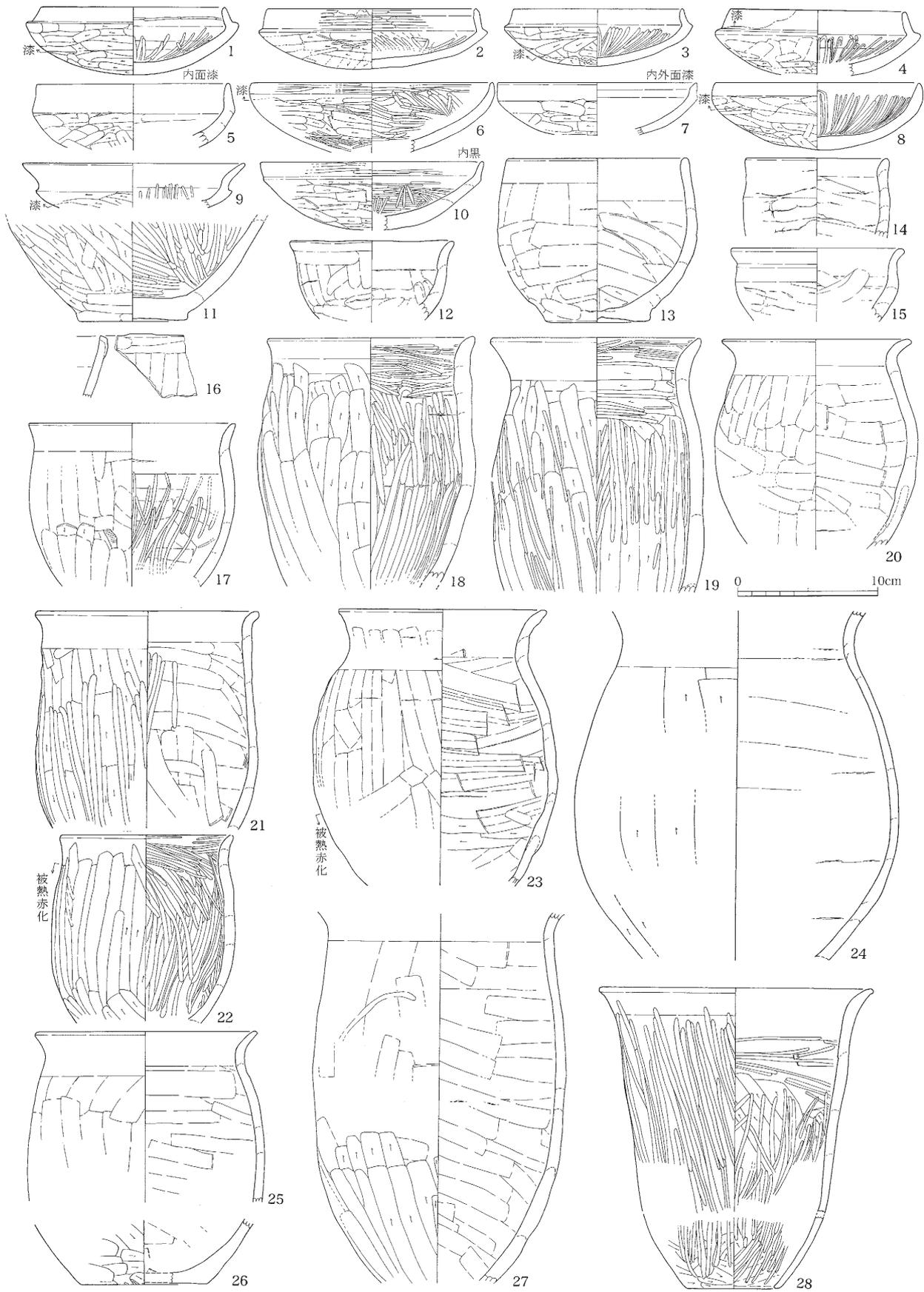
【出土遺物】極めて多い。土師器杯は身摸倣形(1～5)と半球形(6～8)が主体で漆仕上げが多いが、10は内面炭素吸着。2の口縁部上端を不規則にナデるのは補修痕の可能性もある。補修痕のある土師器はSG10区SI-22・23・25・33・87・111と時期不明のSK-243、焼成前亀裂はSG10区SI-19aの高杯・SI-34aの杯・高杯・SI-36の杯にある。SG5区SI-20の大形甑、SG5区SI-21の壺、SG2区流路2の鉢、磯岡遺跡SG9区SI-49aの杯も補修の可能性を持つ。内傾形(13)・貼付口縁(16)・粗製(12・14・15)の鉢がある。内面をよく磨く小形甕が目立ち、18と19が類似している。土製丸玉・勾玉がある(45・46)。SI-60にも土製勾玉破片(?)がある。図示以外の土師器合計1,863片・11,802gの内訳は、杯582片・3,181g、鉢13片・525g、高杯46片・538g、小形壺4片・51g。壺甕類1,195片・6,893g、甑6片・244g、小形土器17片・370g。古墳中期後葉ころの土師器もあり、重複するSI-30・89から混入したものであろう。

鉄関連遺物では、ごく小さな鍛冶滓が2点出土した(47・48)。重複するSI-30(中期)や、西側のSI-14(後期)でも鉄滓・炉壁が少し出土している。

第13表 権現山遺跡SG10区SI-6出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.1 高 4.8 最大 14.9	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヘラナデ後に上半をヨコナデし、体部に放射状と口縁部に横位一条のヘラミガキ。内面全面と外面中位以上に漆仕上げ。	5YR6/8 橙 緻密 透明粗～細粒と黒細粒多、白・灰色粗～細粒少 やや硬質	中央部北寄りと南寄りの1片が接合 口～体3/4周 69、120
2 土師器 杯	口 復15.2 高 3.7 最大 16.2	外面は体部に横位と底部に1～2方向のヘラケズリ後、体部に疎らなヘラミガキ。内面体部はナメヘラナデ後に放射状または斜放射状のヘラミガキ。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。口縁部上端外面に雑なナデがあり、焼成前に補修した痕かもしれない。漆仕上げは見られない。 [注記]27、41、49、52、53、127、128、南東2層	5YR6/6 橙 やや緻密 白細粒と黒・透明粗～細粒少 やや硬質	南部床直上22cmと北西部床直上2～3cm。南東部1片も接合 口1/6周、体5/12周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 11.9 高 4.1 最大 13.2 重 残230.0	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデ後、体部に放射状ヘラミガキ。外面上半と内面全面に漆仕上げ。	5YR6/8 橙 やや緻密 黒粗～細粒多、透明・白粗～細粒少 やや硬質	北面床直上15cm 口11/12周、体全周 123
4 土師器 杯	口 12.4 高 残4.7 最大 14.4	外面は体部ナデ後に底部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は体部中位以上にヨコナデ後、体部に放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白・黒細粒やや多、白・赤・灰色粗～細粒と透明細砂少 やや硬質	中央～北西部床直上3～19cm 口1/2周、体3/4周 93、122、124、126
5 土師器 杯	口 復13.6 高 残4.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデで、体部をヘラミガキしている可能性もあるが不確実。内面漆仕上げ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東部床直上17cmと北部各1片が接合 口1/3周 110、ベルト北2層
6 土師器 杯	口 復17.0 高 残4.9	外面は口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。体部ヨコヘラケズリ後に斜～横位ヘラミガキ。内面は体部ヘラナデ後に横～斜位ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	5YR6/6 橙 緻密 白細粒と赤・黒粗～細粒やや少、白礫少 硬質	東壁際床直上4cm 口1/6周 164B

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第22図 権現山遺跡 SG10 区 SI-6 (2) 遺物

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

7 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 3.8	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ。残存する内外全面に漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 白・赤・透明細粒微量 軟質	中央東～南東床上 5～55cm 口 1～2 周 56、65、78、81
8 土師器 杯	口 14.6 高 4.8 最大 14.9	外面は上半部ナデ後に下半部多方向ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に密な放射状ヘラミガキ。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 黒・透明粗～細粒 多、白粗～細粒少 やや硬質	中央南床上 2～3cm、 南東の 1 片も接合 口 5/6 周、体 11/12 周 67、68、南東
9 土師器 杯	口 復 15.8 高 残 3.2	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリで、体部上端の稜が強い。内面はヨコナデ後に体部を放射状ヘラミガキ。内面全面と外面上半に漆仕上げ。	10YR8/2 灰白 緻密 透明細粒やや多、白・ 赤細粒少 軟質	南東床上 10cm 口 1/4 周 65
10 土師器 杯	口 復 15.6 高 残 4.9	残存口径が少ないので復原径・器高は参考値。外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部に多方向の密なヘラミガキ、口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明粗粒と白・黒 粗～細粒少 やや硬質	南東床上 14cm 口 1/24 周、体 1/3 周 SI-30 No 55
11 土師器 鉢	高 残 7.1 底 7.8 最大 復 18.0	底部は円板状に突出し、外底面は多方向ヘラケズリでやや上げ底。外面胴部はナメヘラケズリ後に一部ヘラナデ。内面は底部に多方向と胴部に斜位の密なヘラミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 黒・灰色・透明細粒やや多 硬質	北西隅床上 16～19cm 胴下半 1/3 周、底全周 129、130、131
12 土師器 鉢	口 復 11.6 高 残 5.6	体部内外面は非常に雑なコピナデで、粘土組織み痕を残す。特に内面は凸凹が著しい。口縁部内外面にヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白 細～微粒少 やや硬質	北東部 口～体 1/3 周 北東 2 層
13 土師器 鉢	口 復 12.4 高 11.8 底 7.4 最大 14.1	外底面は円板状に突出した後に中央が凹み、多方向ナデ。外面体部は縦と横位の不明瞭なナデ。内面体部は斜～横位のヘラケズリとヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒やや多、白・灰色礫と 黒細粒少 軟質	中央北東床上 11cm で正 位 口 1/4 周、底全周 115
14 土師器 鉢	口 復 10.0 高 残 5.7 最大 残 10.4	体部内外面はやや雑なナデで、粘土組織み痕を残す。特に外面によく残っている。口縁部内外面はヨコナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明細粒少 やや軟質	中央北床上 15cm とカマ ト北東部の 1 片が接合 口～体 1/4 周 114、K 北東
15 土師器 鉢	口 復 12.0 高 残 5.3	外面は体部を雑にナデで、組織み痕が残る。口～頸部内外面ヨコナデの後に内面体部ナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 透明粗～細粒と黒細粒少 や や軟質	北東床上 17cm 口 1/4 周 108
16 土師器 鉢	口 推 20～30	口縁部内面が弱く内彎する。外面はやや雑なタテヘラナデ後に口縁部を粘土貼付けしてヨコナデ。内面はヨコナデ。	7.5YR6/8 橙 緻密 白・透明粗～細粒と黒 細粒少 硬質	南東壁際床上 4cm 口 1/12 周 61
17 土師器 小形甕	口 復 14.6 高 残 11.5	外面胴部はタテヘラナデで部分的にタテヘラケズリ。ヨコハケ状に見える部分もあるが、ヘラケズリ時に生じた平行線の可能性がある。内面胴部は横～斜位ヘラナデ後にタテヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。胴部外面がやや被熱赤化する。 [注記] 2、5、6、7、南東 1 層、北西 2 層	2.5YR5/6 明赤褐 粗い 白・赤・灰色細粒やや 多、白礫と黒・透明細粒やや 少 やや硬質	カマト東部床直上～床 上 11cm。北西部の 1 片 も接合 口 1/6 周、肩 1/3 周 注記は左欄
18 土師器 小形甕	口 14.8 高 残 17.6 最大 15.4	口頸部の外反が弱い。外面は口～頸部ヨコナデ後に、胴上半と下半を上方と下方ヘラケズリ。内面は胴部を縦位、口～頸部を横位の密なヘラミガキ。19 と類似。	5YR6/6 橙 やや粗い 白細粒多、赤・透 明粗～細粒と黒細粒やや多 やや硬質	カマト東袖構築材。整 地層上に倒立 口～頸全周、胴下半 1/2 周、1、10、18
19 土師器 小形甕	口 14.9 高 18.1 最大 15.0	外面は口～頸部ヨコナデ後に胴～頸部をタテヘラケズリしてから、口縁部を再度ヨコナデ、胴部タテヘラミガキ。内面は胴部に縦位と頸部に横位のヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面のミガキはやや粗雑。18 と類似する。	2.5YR5/8 明赤褐 粗い 灰色礫～細粒と白・黒・ 赤粗～細粒多、透明粗～細粒 やや多 やや硬質	カマト東袖構築材。29 の箇の内側に入って床 直上に倒立 口～肩全周 No 17B
20 土師器 小形甕	口 復 13.4 高 残 14.9 最大 復 14.3	外面胴部下位タテナデ後に、胴部中位の積み上げ休止部の内外面を横～斜位ヘラナデし、胴部上位の外面に縦位と内面に横位のヘラナデ。口～頸部の内外面をヨコナデ。被熱痕や煤は見られず、焼成時の黒斑を外面に広く残す。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 赤・灰色礫～細粒 やや多、白・黒粗粒少 やや硬質	カマト東部床上 17cm。北 東部の 2 片も接合 口 1/12 周、頸 5/12 周、 胴 1/2 周 85、北東上面
21 土師器 小形甕	口 15.8 高 残 15.6	口縁部が短く外反。外面は胴部タテヘラケズリ後タテヘラミガキ。内面は胴部ナメヘラナデ後、部分的にタテヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白細粒多、赤粗～ 細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	カマト西袖構築材。床 直上に倒立 口 11/12 周 19、K 南西中層
22 土師器 小形甕	口 12.4 高 残 13.4 最大 13.1	口縁部は歪んで推定長径 13cm の楕円形。外面は口縁部ヨコナデ後、胴部に縦位と下部に斜位のヘラケズリ。内面は胴部に縦～斜位の後に口縁部に横位の密なヘラミガキ。外面胴部が被熱赤化。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒と白細 粒やや多、黒・透明礫～細粒 少 やや硬質	中央西部壁際 7cm。カマ ト西の 2 片も接合 口 5/6 周 12、99
23 土師器 小形甕	口 復 14.6 高 残 19.6 最大 復 17.4	外面はタテヘラナデ後、口～頸部をヨコナデしてヘラナデ上端を消す。外面胴部下位は被熱赤化し剥離して調整不明。内面は胴部下位ナメナデの後に積み上げ休止部をヨコヘラケズリして、上半部は粗いヨコハケ状のヘラナデ調整が頸部まで及んだ後に口～頸部ヨコナデ。外面胴部下位が被熱赤化し、内面胴～頸部が薄く汚れる。 [注記] 1、4、96、98、99、K 東貼床、北西 2 層、南東 1 層、北東 2 層	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒多、白・灰色礫と赤・ 黒細粒少 やや硬質	中央東部床上 1～9cm。 カマト東貼床・北西部・ 南東部に各 1 片 口 1/2 周、頸 3/4 周 注記は左欄
24 土師器 甕	高 残 25.1 最大 復 23.0	外面胴部タテヘラケズリ。内面胴部ヨコヘラナデ。内外面頸部ヨコナデ。内外面が強く被熱赤化して磨滅し、調整が不鮮明。	7.5YR7/6 橙 粗い 白礫～細粒多、黒・透 明粗～細粒と透明礫やや多 軟質	カマト東袖構築材。床 面に倒立 頸 1/2 周、胴全周 16
25 土師器 甕	口 15.8 高 残 12.3 最大 16.8	器が薄い。胴部は外面に縦～斜位ヘラナデ、内面にヨコヘラナデ。口縁部内外面にヨコナデ。下半と思われる土器があるが接合できない。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色礫～細粒 と赤・黒・透明細粒やや少 やや軟質	中央西部床上 1～4cm。 逆位で出土 口 5/6 周、頸～胴上半 全周 97、98
26 土師器 甕	高 残 4.6 底 復 8.2	外底面は 1 方向のヘラケズリで少し上げ底状。外面胴部に横～斜位ヘラケズリ。内面胴部に横～斜位ヘラナデ。胴部外面がやや被熱する。胴部破片も少しあるが底部との接合がない。 [注記] 91、112、北東一層、A トレ北、A トレ北上西	2.5YR6/3 にぶい黄 粗い 透明粗～細粒多、白細 粒少 やや軟質	中央部床上 12～16cm。 北東部の 2 片も接合 胴部 1/4 周、底 1/4 周 注記は左欄
27 土師器 甕	高 残 26.5	残存部下端から高さ 8cm の所に積み上げ休止部があり、外面はその付近より上側がタテヘラナデ、下側がタテヘラケズリ。内面は横～斜位ヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。外面胴部下位が弱く被熱する。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや多、黒・灰色細粒少 やや軟質	中央東部床上 19cm。北 東部の 2 片も接合 頸～胴下半 1/4 周 84、北東 1 層
28 土師器 甕	口 復 19.5 高 推 21.4 底 復 6.2	外面は下位ナメヘラケズリ、中位タテヘラナデ、口縁部ヨコナデの後に全体をタテヘラミガキ。内面は胴部ナメヘラケズリと口縁部ヨコナデの後に中位以上タテヘラミガキと上位ヨコヘラミガキ。下端の孔縁部は磨耗している。胴部下位に接合できない部分があるので復原器高は推定。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・灰色・透明礫 ～細粒やや多、黒粗～細粒少 やや硬質	北東部床上 17～23cm 口 1/3 周、底 1/4 周 87、106、107、109、110、 南東、A トレ北、北東 1 層、北東 2 層、A トレ 北上面



第23図 権現山遺跡 SG10 区 SI-6(3) 遺物

29 土師器 甕	口 21.1 高 残 22.8	外面は口縁部ヨコナデ後に胴部に縦位のヘラケズリと疎なヘラミガキ。内面は胴部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデの後、胴部縦位、頸部斜位、口縁部縦位のヘラミガキ。燃焼部の側が被熱赤化。 [注記]17、17A、北西1層、南東1層	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒と黒細 粒やや多、赤・透明粗～細粒少 やや硬質	カマド東袖構築材。19 の小形甕を中に入れて 床直上に倒立。北西部と 南東部の各1片も接合 口 1/2 周、頸 2/3 周 注記は左欄
30 土師器 甕	口 復 24.8 高 残 8.5	外面は口縁部ヨコナデ後に胴部を縦位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデまたはヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデの後、胴部に縦位と口縁部に横位の密なヘラミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 赤粗～細粒やや少、白・ 黒粗～細粒少 やや硬質	南東部床上 8～12cm 口 1/6 周 63、64

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

31 土師器 大形壺	高底 残 4.1 7.5	外底面はナデ後に軽く削って、少し凹面状。外面胴部はナナメナデ。内面底部はココヘラナデ。被熱痕やコゲは見られない。 [注記]133、Aベルト北東床、K北東、Aトレ北、北東1層、Aベルト北2層、北東2層、北西3層	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い、白・灰色・透明粗 ～細粒やや多 やや軟質	北東部床上 9cm。北西部 の1片も接合 底2/3周 注記は左欄
32 須恵器 壺	肩 20～30	肩部に櫛刺突文をロクロ右回転(時計回り)で施文する。外面に薄黄緑色の自然釉が薄く付着する。	5Y7/2 灰白 緻密 黒細粒と白微粒少 硬質	中央床上 11cm 肩 1/12周 89
33 石器 編物石	長幅厚 残 14.5 6.1 5.6	細長い自然の河原石をそのまま利用。図で右半部の縁辺が崩れてしまっている。被熱・加工痕や付着物は見られない。残存重量 749.2g。	N7/0 灰白 やや粗粒で硬質な花崗岩	中央南東寄り床上 6cm 一部欠 150
34 石器 編物石	長幅厚 16.8 6.3 5.2	細長い自然の河原石をそのまま利用。被熱・加工痕や付着物は見られない。重量 792.0g。	7.5Y6/2 灰オリーブ 緻密で硬質な流紋岩	中央東寄り床上 5cm 完形 148
35 石器 編物石?	長幅厚 17.8 11.5 6.2	図の下面が平坦になる自然の河原石。全面が弱く被熱赤化し、両側縁付近に煤が付着する。加工痕は見られない。重量 1755g。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密で硬質な石英斑岩	中央北東寄り床上 17cm 完形 141
36 石器 編物石?	長幅厚 18.7 10.7 6.9	自然の河原石をそのまま利用。被熱・加工痕や付着物は見られない。重量 1580g。	2.5Y6/2 灰黄 緻密で硬質な流紋岩	中央北寄り床上 14cm 完形 137
37 石器 編物石?	長幅厚 残 11.1 7.7 4.1	自然の河原石。全面がかなり被熱して赤色化した後に図の下部が折損している。加工痕や付着物は見られない。残存重量 623.7g。	10YR5/3 にぶい黄褐 緻密で硬質な流紋岩	中央東寄り床上 13cm 一端部欠 147
38 石器 編物石?	長幅厚 14.0 8.7 5.3	自然の河原石。被熱・加工痕や付着物は見られない。重量 718.6g。	2.5Y7/2 灰黄 緻密で硬質な石英斑岩	南東隅床直上 完形 154
39 石器 編物石	長幅厚 15.4 4.7 3.6	細長い自然の河原石をそのまま利用。被熱・加工痕や付着物は見られない。重量 331.3g。	2.5Y7/4 浅黄 緻密で硬質なホルンフェルス	P4 上面上 8cm 完形 P4 上面より上 8cm
40 石器 編物石	長幅厚 13.4 6.5 3.5	細長く断面形が隅丸長方形の自然の河原石をそのまま利用。被熱・加工痕や付着物は見られない。縁辺や表面がやや剥落気味の現状で残存重量 489.1g。	10Y6/1 灰 粗粒の長石斑晶が目立つやや 軟質な図岩	中央北東寄り床上 6cm 完形 140
41 石器 編物石	長幅厚 14.1 7.4 3.8	細長い自然の河原石をそのまま利用。全面の多くが弱く被熱して赤色化している。加工痕や付着物は見られない。残存重量 692.5g。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い安山岩	中央床上 9cm 完形 149
42 石器 敲石	長幅厚 16.4 6.7 4.8	細長い自然の河原石をそのまま利用。両端に敲打痕あり。重量 693.6g。	2.5Y6/3 にぶい黄 緻密で硬質な安山岩	南西壁際床上 18cm 完形 155
43 石器 敲石	長幅厚 10.9 5.7 1.9	平面楕円形で板状の自然礫をそのまま利用。片方の端部の両面に敲打による剥離がある。重量 196.4g。	5Y6/1 灰 緻密で硬質なホルンフェルス	中央北寄り床上 6cm 完形 142
44a カマド 構築材 (天井材)	長幅厚重 残 25.3 19.4 6.4 残 1871	平面形は一端辺が少し斜行する四角形で、断面形は長方形の板状石材。各面を加工して平坦にする。加工痕は少し認められるが不明瞭。一方の平面と側面が被熱赤化し、他の面は煤が表面に付着する。もう1片と同一個体の可能性が高い。	10YR8/2 灰白 緻密 細粒で軟質な凝灰岩 軟質	カマド東床直上 一端部残 9
44b カマド 構築材 (天井材)	長幅厚重 残 36.4 残 19.6 残 6.5 残 2128	断面が長方形の板状石材。各面を平坦に加工し、加工痕は少し認められるが不明瞭。図示した平面は全体に煤が付着し、反対の面はすべて破面。1側面が被熱赤化する。もう1片と同一個体の可能性が高い。	10YR7/2 にぶい黄橙 細粒で軟質な凝灰岩	カマド東床直上 両端部欠 9
45 土師質 土製丸玉	径高重 復 2.9 復 2.2 残 4.88	全面ナデ調整後、裏面に円周方向のミガキ。穿孔部分は残っていない。漆仕上げは見られない。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	西部 5/12周 Bトレ西
46 土師質 土製勾玉	長幅厚 2.5 0.9 0.9	ナデ調整後におそらく左図の面から焼成前に穿孔し、左図の面で径2.1mm、右図の面で1.9mm。表面全面が褐灰色(10YR4/1)で、漆仕上げしている可能性がある。重量 2.77g。	2.5Y4/1 黄灰 緻密 白・透明細粒少 やや軟質	中央東寄り床直上 完形 100
47 埴形鍛冶滓 (小)	長幅厚重 残 2.9 残 2.2 残 2.2 残 17.6	上下面と下手側の側面が生きている小形の埴形鍛冶滓の肩部小破片。滓質は緻密で破面は青光りしている。下面には灰色に被熱した炉床土が固着する。鍛冶関連遺物構成No.61。	表 青灰色 地 青灰色 磁着度 5 メタル度 なし	破面3面
48 埴形鍛冶滓 (極小)	長幅厚重 2.2 2.8 1.1 5.4	厚さ9mm程の扁平な極小の埴形鍛冶滓破片。側面が点々と小破面となっており、上面は木炭痕を残す半流動状の面となる。滓内部の気孔が目立つ。鍛冶関連遺物構成No.62。	表 明褐色 地 オリーブ黒色 磁着度 2 メタル度 なし	ほぼ完形

SG10区 SI-9 (第24図、写真図版72・73・190)

[位置] SG10区南部、東側低地に面する台地平坦面縁辺の17-17、18-17グリッド所在。同じく古墳中期の建物は北にSI-88、南にSI-30、西にSI-16がある。重複する遺構はない。

[規模と形状] 南北軸の長方形で、中軸線はN-4°-W。東西3.40×南北4.62mで、壁は直線的に外傾し、壁残存高は最大で20cm。掘形の深さは床から2～8cmで、北壁側の約1mの範囲で掘形底が5～6cm深くなる。暗褐色土で貼床し、床は平坦で傾斜しない。

南東隅にある貯蔵穴P1は、床面ではわからず、貼床を除去した後に掘方底面で確認した。浅く小さな円形ではあるが、一応貯蔵穴と判断した。貼床で埋め戻されていたという所見があり、古い時期の貯蔵穴と考えることができる。貯蔵穴の内部と上面付近で出土した土器片(1)が接合している。P1は径38cm、床面からの深さ13cm。

[火処] 認められない。

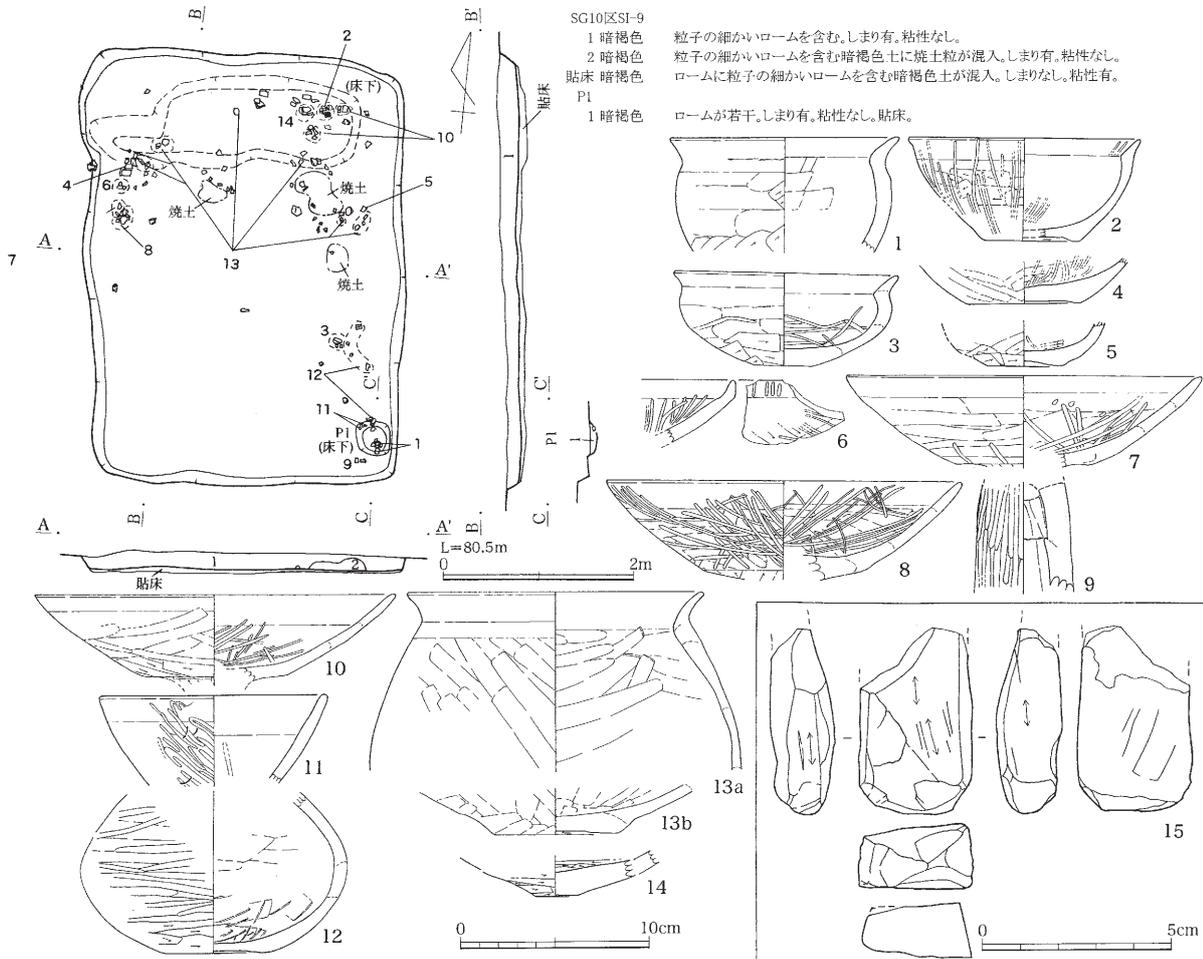
[覆土] 覆土は中央東部の3層を除き大半が単層。北半で3箇所に焼土があり、その下面レベルは床面から

第5章 権現山遺跡 SG10 区

5～9cm 浮いている。

[遺物出土状況] 遺物は竪穴北半と東部に多く、中央から南西部にはほとんどない。4は床から3cm上方にあるが、他の遺物は10cm前後浮いている。南東隅部に貼床除去後に確認した貯蔵穴P1の内部と、P1上方の床面レベル付近で出土した土師器杯片が接合した(1)。貯蔵穴を埋め戻した土に入った遺物であろう。

[出土遺物] 1は外面に煤が付く深い椀形杯。浅い椀形杯(2・3)があり、内面を磨く杯や、初期の摸倣杯(6)も含む点は、中期後葉まで下がる要素である。図化以外に上げ底状の土師器杯底部が2片ある。13はよく被熱している小形甕。13・14の甕は破片が多いが接合できない。遺物量は少ない。図示以外の土師器合計464片・3,327gは小片ばかりで、その内訳は杯65片・247g、高杯65片・528g、鉢2片・27g、小形壺17片・153g、壺甕類315片・2,372g。表面が剥落した土器が目立ち、被熱または埋没環境の影響によると思われる。



第24図 権現山遺跡 SG10 区 SI-9 遺構・遺物

第14表 権現山遺跡 SG10 区 SI-9 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 5.9	外面は体部ナデと下位ナメヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面全体に煤が付着し、外面体部が弱く被熱赤化する。	5Y8/2 灰白 緻密 赤・黒粗～細粒と白・透明細粒少 軟質	P1 底上 1cm と P1 上方の床面レベルの各 1 片が接合 口 1/6 周 39、P1-4
2 土師器 杯	口 復 12.2 高 5.4 底 4.9	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面は口～頸部ヨコナデと体部ヨコヘラケズリの後にタテヘラミガキ。内面は磨耗・剥離して調整が不明瞭だが、口縁部と体部に縦～斜位ヘラミガキ。	5YR/6 橙 粗い 赤礫～細粒多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東部床上 14cm 口 1/3 周、底全周 5、北東
3 土師器 杯	口 復 11.7 高 5.0 底 3.1	外底面は平底でナデ。外面体部ナデ後に下位ヨコヘラケズリ、中位に部分的なヨコヘラミガキ。内面体部ナデ後に横～斜位ヘラミガキ。内外面口～頸部ヨコナデ。内面に炭化物または煤の汚れあり。	2.5YR5/8 明黄褐 やや緻密 赤粗～細粒多、白・黒細粒少 やや軟質	南東部床上 13cm 口 7/12 周、底全周 32、南東、南東 A トレ

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

4 土師器 杯	高底 残 2.4 復 5.8 最大 残 10.8	外底面は凹底状でヘラケズリ後ナデ。外面体部はナメヘラナデで少し光沢のあるミガキ風に仕上げられる。内面はヘラケズリまたはナデの後にタテヘラミガキ。外面体部に黒色物質が付着し、煤かどうかは不詳。	5YR4/3 にぶい赤褐 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北西部床上 3cm 底 1/3 周 52
5 土師器 杯	高底 残 2.4 3.8	外底面は凹底で、外周寄りをヘラケズリ。外面体部はヘラナデ後、下端部をヨコヘラケズリ。内面は磨滅して不明確だが、ヘラミガキの痕跡が残る。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・赤粗～細 粒少 硬質	南東部床上 8cm 底 3/4 周 26、南東
6 土師器 杯	口高 復 16～18 残 3.3	外面は体部ナメヘラケズリ後ナメヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面はヨコナデで口～体部境に浅い段を持ち、体部に放射状ヘラミガキ。	2.5Y7/4 浅黄 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや多、赤細粒少 やや硬質	北西部床上 8cm 口 1/6 周 60、北西
7 土師器 高杯	口高 復 18.6 残 4.8	外底面は放射方向のやや雑なヘラケズリ。体部外面に横位と内面に横および斜位のヘラナデ後、口縁部内外面ヨコナデ。外面下位と内面中～下位にやや疎らなヘラミガキ。	5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒細 粒少 軟質	中央西壁際床上 15cm 口 1/6 周 63
8 土師器 高杯	口高 復 18.4 残 5.2	外底面は放射状ヘラケズリ、内底面に多方向ヘラナデ。内外面の体部に横～斜位ヘラナデ。口縁部にヨコナデ。体部にナメヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤粗～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	中央西壁際床上 15cm 口 1/4 周 61
9 土師器 高杯	高底 残 5.8	外面は密なヘラミガキ。内面は粘土の輪積み痕を残し、雑なタテナデ。	10R5/8 赤 やや緻密 白・黒・透明細粒 と赤粗粒少 やや硬質	北東部床上 12cm。焼土 より下層 脚柱全周 41
10 土師器 高杯	口高 復 19.0 残 4.7	外面の杯底部は放射状ヘラケズリ後に外周部ヨコヘラナデ。外面の杯体部はナメヘラケズリ後に上半部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデ。内面は杯体部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデの後に多方向のヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・灰色粗粒多、 赤・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	北東部床上 13～15cm。 北東部の1片も接合 口 1/6 周、杯底 5/12 周 6、10、30、北東
11 土師器 小形壺	口高 復 11.7 4.7	外面は頸部ナデと口縁部ヨコナデの後にナメヘラミガキ。内面ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は剥離と磨滅が激しいため調整が不明瞭。	7.5YR6/8 橙 緻密 赤・黒粗～細粒と白細 粒少 軟質	P1 内と P1 上方 (床上 12cm) 口 5/12 周 37、P1-1、P1
12 土師器 小形壺	高底 残 8.5 4.9 最大 復 14.2	外底面は多方向のヘラケズリ後ヘラミガキで弱く凹む。外面は体部下位に横～斜位ヘラケズリと上位にヨコヘラナデの後、体部中位にヨコヘラミガキ。内面は体部下位に多方向ヘラナデ、体部上位に横位のナデまたはヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 緻密 赤・黒・透明細粒少 やや硬質	南東部床上 7～12cm、 北西部で1片出土 体 1/6 周、底全周 30、35、北西
13 土師器 小形甕	口高 復 15.5 12.1 6.4	破片が不足して胴部を復原できない。外底面は多方向ヘラケズリで少し上げ底状。内外面は胴部に縦～斜位のヘラナデ後、口～頸部にヨコナデ。外面全体が被熱して脆い。 [注記]27、44、49、51、55、56、57、北東、北東Bトレ、北西	5YR7/6 橙 粗い 白・灰色礫～細粒多、 黒・透明粗～細粒やや多 やや軟質	北西部床上 8～18cm。 北西部にも破片あり 口 1/3 周、底 5/6 周 注記は左欄
14 土師器 甕	高底 残 2.4 2.1	外底面には木葉痕の可能性のある圧痕が残る。底面の外周側の胴部下端をヨコヘラケズリして、底面の範囲が非常に小さくなるように削り込んでいる。内面は円周方向のヘラナデおよび一部ヘラケズリ。外面側が被熱赤化。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明粗～細砂多、 白・黒粗～細砂やや多、赤粗 粒少 やや硬質	北東部床上 13cm 底全周 2
15 石器 砥石	長幅 残 4.9 3.0 重 残 23.9	細長い砥石で、図の上部が薄くなった部分で折れて破損している。片側の平面と、両側の側面を砥面に利用して平滑に磨耗する。裏側の平面は砥面ではなく、切削加工時の条線状痕跡が残る。	2.5Y8/3 淡黄 緻密で軟質な流紋岩質凝灰石	北東部 端部欠 北東

SG10区 SI-10 (第25・26図、写真図版73・173・190)

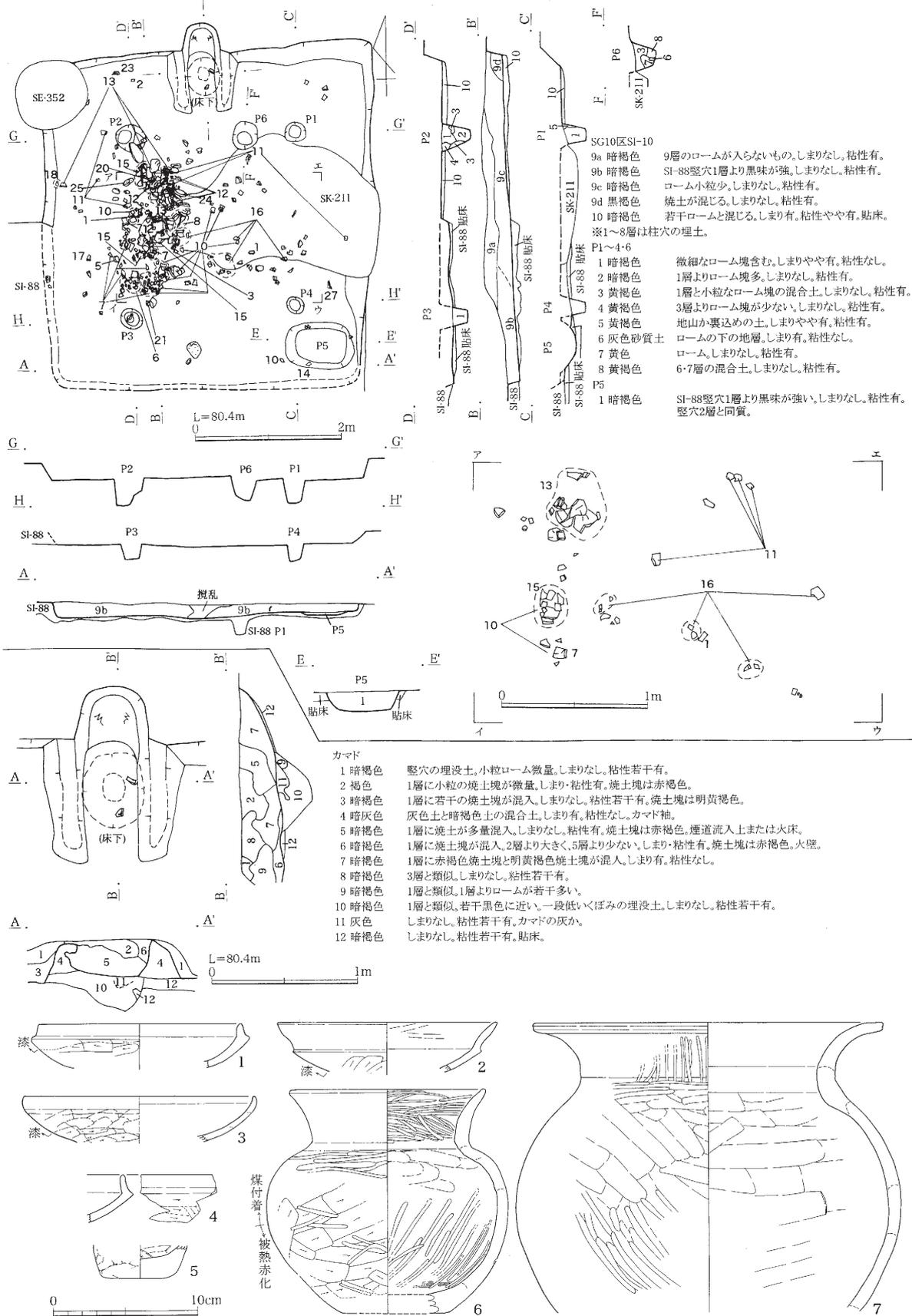
【位置】SG10区南部、東側低地に面する台地平坦面縁辺部の18-17グリッド。同じく古墳後期の建物は北と北東にSI-12とSI-32があり、南に古墳中期のSK-11やSI-9がある。SK-11→SI-88→SK-211→SI-10→SE-352の順に重複する。中央部以南で古墳中期のSI-88を切り、中央から東壁際中央付近が古墳中～後期のSK-211を切る。北西隅が時期不明の井戸SE-352(中世?)に切られる。

【規模と形状】南半はSI-88と重複するため壁と床を平面的に確認できなかった。土層断面で確認した床面と壁から、ほぼ方形と見られる。東西4.56×南北4.77m、中軸線はN-0°30′-E。壁は直線的に外傾し、最大残存壁高は北東隅で35cm。床面はほぼ平坦で南部がやや低い。先行するSI-88・SK-211より床面が少し高い。本建物の覆土・貼床がSI-88・SK-211の覆土と区別しにくいために重複部でSI-10の床を捉えられず、SE-352にも切られるので、北半約1/3の範囲のみで床面を観察できた。重複部でSI-10の床面をうまく捉えられなかったので、南北方向の断面でSI-10床面がかなり南へ傾斜する状況にはやや疑問が残る。

掘方は北部で明瞭である(10層)。南部は先行するSI-88埋土に掘り込んだ土を固めたか、それに暗褐色土を混ぜて貼床したとみられたが、貼床や掘方をSI-88埋土から明確に区別・認識できなかった。

主柱穴は4本で、北側のP1・P2は床面で確認した。深さはP1=34cm、P2=43cm。南側のP3・P4はSI-10床面で確認できず、SI-88の床まで掘り下げてから確認した。P3とP1、P4とP2の底面レベルがそれぞれほぼ同じなので、床面からの深さも同様か、または南部の床面が少し低い分だけP3・P4がやや浅いと推定される。柱間寸法は東西2.22～2.36mで北側がやや広く、南北2.40～2.52mで西側がやや広い。建物内北東部、P1西側の床面で確認したP6は径36×深さ31cmである。

南東隅にある貯蔵穴P5は、本竪穴の床面下にあるSI-88床面で確認した(現地調査時の名称はP9で、整理作業時にP5に変更)。東西軸の長方形で83×62cm、本建物床面からの深さは推定19cm。P5覆土は竪穴覆土2層と同質なので、竪穴廃絶後に一緒に埋没したことがわかる。



第25図 権現山遺跡 SG10 区 SI-10 (1) 遺構

[カマド] 北壁際中央にある。両袖幅 96cm、煙道先端から袖先端まで 121cm。燃焼部の竪穴貼床（12層）を切って東西 42 × 南北 53cm の円形に掘り、焼土が混じらない 9～11層で埋め戻して火床を作った後に、灰色と暗褐色を混ぜた 4層で袖を作る。カマドの西側では断面図に貼床土（12層）が記録されていないが、3層の下部に貼床土があったことが推定される。焼土の多い 5～7層が火床堆積土と内壁崩落土である。

[覆土] 自然埋没で、白色テフラ粒は確認していない。上層の 9a層はローム粒を含まない。南部の 9b層は先行する SI-88 埋土 1層と似た黒味の強い土。北部の 9c層はローム粒が多くなる。9b層と 9c層の境界は漸移的で、現地で作成した南北断面図 B-B' の原図は 9b層と 9c層を区別しないで同一層としている。

[遺物出土状況] 遺物は比較的多い。壁際には少なく、中央部西半に集中し、多くは床面からかなり浮いている。下部の遺物出土状況を拡大図に示した（アイウエの範囲）。自然礫が多く、北西柱穴 P2 の南側で床上 17cm のレベルにある長 33 × 幅 11 × 厚さ 13cm の礫が最も大きい。先行する SK-211 や、新しい SE-352 の遺物として取り上げた中にも SI-10 からの混入品を含み、接合できたものもある。甕(11)や甑(6)のうち少数の破片が、先行する SK-211 の遺物として取り上げられているが、本来は SI-10 の遺物である。

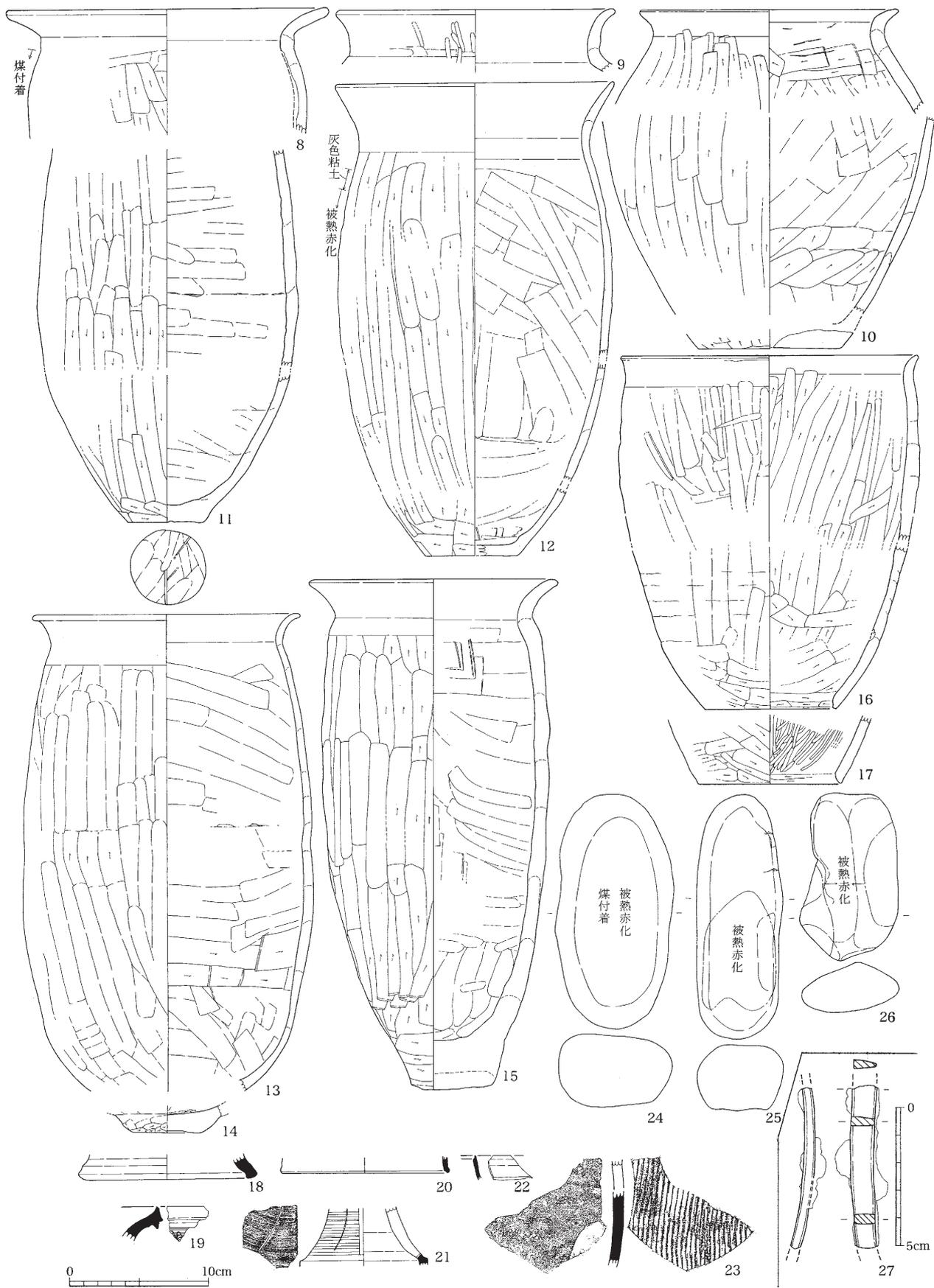
[出土遺物] 壺・甕・甑類の中では長胴甕が多く、甑も目立つ。杯類は口縁部が短くて内面を磨かない。6は外面下半が被熱する中形壺。7は丁寧に調整した大形壺。10の甕はやや薄く、口頸部が小さい点がやや異形。11は木葉痕をナデ消したことがわかる。15は被熱使用痕が不明確な甕。図化した遺物以外は小破片ばかりである。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 719片・5,136gの内訳は、杯 262片・1,776g、高杯 100片・629g、小形壺 6片・75g。壺甕類 348片・2,644g、小形土器 1片・5g、焼粘土塊 2点・7g。

礫が多く、大きさや形は様々で、被熱赤化や煤が認められる礫もある。このうち長方形礫の一部を編物石と判断したが、出土状況ではなく形状から選んだもので、自然礫との区別は不明瞭である。図示した遺物以外に、白色軟質の凝灰岩小破片 1点（53 × 37 × 18mm）がある。

古墳中期の土師器高杯・杯・鉢が多く、外面赤彩の壺も 1片あって、重複する SI-88 などから混入した可能性が高い。古墳中期の混入須恵器は甕（19）・口端に段を残す蓋杯（20・22）・高杯（21）と、同一個体らしい甕胴部 16片がある（23）。23と同一個体とみられる甕片は SI-12 に 7片、SI-23・30・40・47・50 と SK-46 と SD-41・42 に各 1片、平安時代の SI-90 に 1片混入していた。19は SI-2 の破片に似る。

第 15 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-10 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 3.0 最大 復 14.8	外面体部ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ。外面の上位に漆仕上げが残る。	7.5YR8/6 浅黄橙 緻密 白・灰色礫～細粒と赤粗粒と 黒・透明細粒少 やや軟質	床直上～床上 22cm 口 5/12 周 55、155、180
2 土師器 杯	口 復 14.9 高 残 3.4	外面体部ヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデと内面口縁部にナメナデ。内面体部は磨減しているため調整不明。内外面の残存部を漆仕上げ。	7.5YR4/3 褐 やや緻密 透明粗～細粒と白・ 黒細粒少 やや硬質	北西床上 4cm 口 1/4 周 2、北西
3 土師器 杯	口 復 15.6 高 残 3.2 最大 復 16.0	薄く軽い。外面は上半部ナデで粘土積み上げ痕を残し、下半部ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面全面ヨコナデ。外面上半と内面に漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・透明粗～細粒少 やや硬質	北西床上 28cm 口 1/4 周 114、北西
4 土師器 杯	口 復 14～15 高 残 3.3 最大 復 15～ 16	体部に外面横～斜位ヘラケズリと内面ヘラナデの後、外面口縁部と内面全体をヨコナデ。漆仕上げは見られない。被熱により全体が少しオレンジ～ピンク色。	2.5YR7/4 淡赤橙 緻密 白・灰色粗粒と黒・透 明細粒少 やや硬質	北東部 口 1/6 周 北東、北東 B トレ
5 土師器 小形土器	高 残 2.3 底 4.6	外面はコビオサエおよびナデ。素材粘土の接合痕も残す。内面は横～斜位のヘラナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 白細粒多、赤粗粒と黒・ 透明細粒少 やや硬質	南西床上 36cm 底 3/4 周 95
6 土師器 壺	口 13.5 高 15.3 底 復 7.2 最大 16.5	外面は平底でナデカケズリ。外面は体部ヘラケズリ後やや疎らにヘラミガキ。内面体部ナデ後、中位以下に斜位と底部外周に横位ヘラミガキ。内外面口～頸部ヨコナデ後、内面横～斜位の密なヘラミガキ。外面下半～底面が被熱赤化、中位から口縁まで少量の煤付着。	7.5YR6/6 橙 粗い 白・灰色粗～細粒多、 灰色礫と赤・透明粗粒やや多、 黒細粒少 硬質	南西床上 29cm。北西の 3片と北東の 1片も接 合 口 2/3 周、頸 5/6 周 102、北西、北東 B トレ、 SI-88 北西
7 土師器 大形壺	口 復 24.0 高 残 19.8 最大 復 26.4	口縁部は内面上端をかすかに上げ気味にし、口端面には浅い凹線を 1本入れる。胴部外面ナメナデ後、中～下位にナメヘラミガキ。頸部外面をヨコナデとタテヘラミガキ後、肩部ヨコヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。 [注記] 53、55、57、59、60、62、63、65、67、68、70、71、74、87、91、93、94、97、99、107、109、110、115、131、140、176、北西、南西、北東、北東 B トレ、SI-88 北西	10YR8/6 黄橙 やや緻密 白礫と白・黒・透 明細粒少 やや硬質	床上 10～38cm 口 1/4 周、頸 3/4 周 注記は左欄
8 土師器 甕	口 復 22.9 高 残 9.1	外面胴部タテヘラケズリ後、頸部に少し雑なナデと内外面口縁部にヨコナデ。内面胴部は剥落して調整不明。外面肩部に煤少量付着。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白礫～細粒と灰色・ 透明粗～細粒多、赤・黒粗～ 細粒少 やや軟質	中央床上 30cm 口 1/8 周、頸 1/4 周 79



第26図 権現山遺跡 SG10 区 SI-10 (2) 遺物

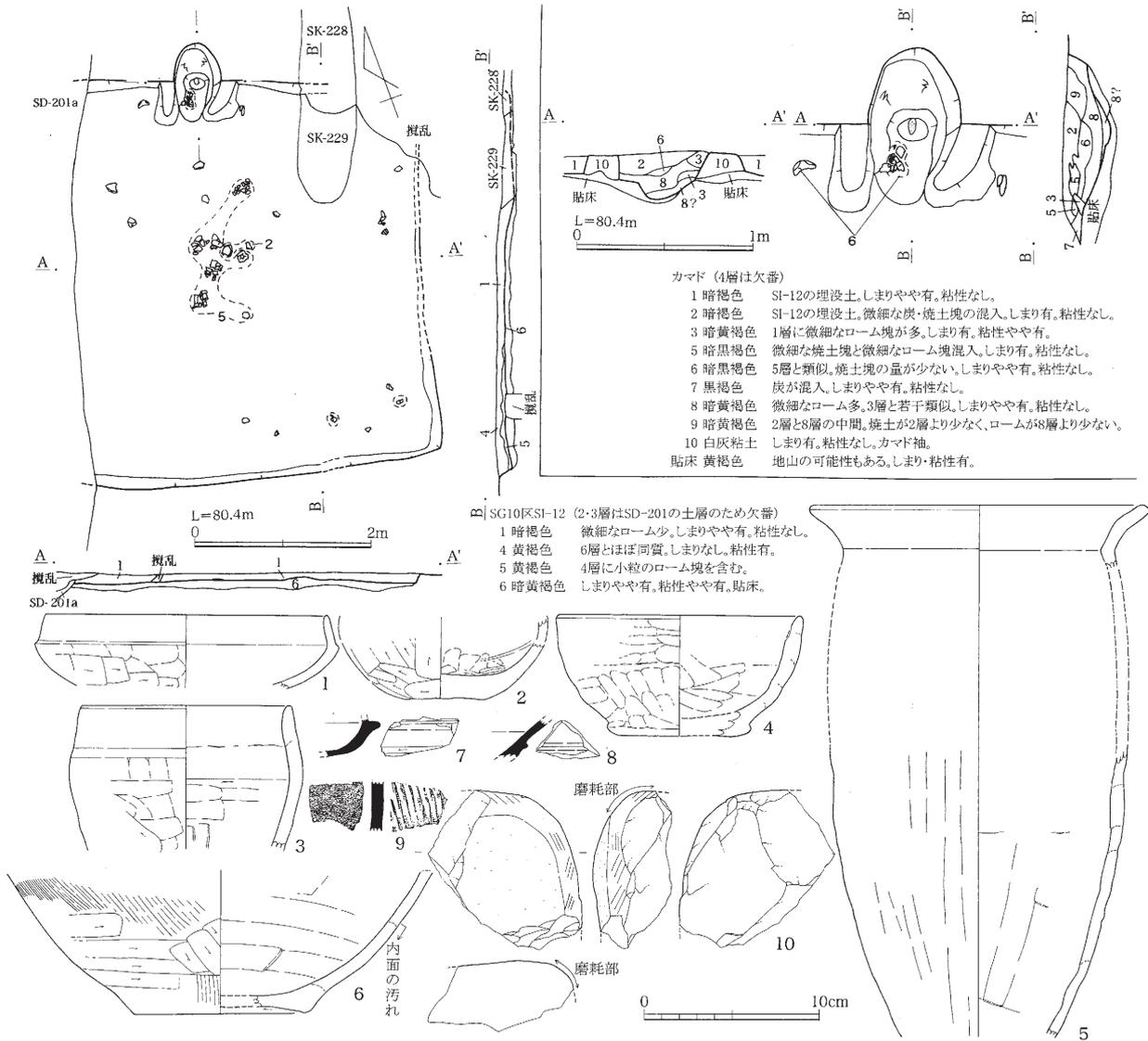
第4節 古墳時代の竪穴建物跡

9 土師器 甕	口 復 19.8 高 残 5.4	口～頸部の内外面ヨコナデ後、外面に疎らなタテヘラミガキ。平底の底部が1片あるが、同一個体と断定せず図示を省略した。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白細粒やや多、赤・黒・透明細粒少 軟質	南西 口1/10周、頸1/6周、 底1/4周 南西
10 土師器 甕	口 復 18.3	口縁部・胴部・底部の破片があるが接合できない。外底面はヘラケズリで平坦。内外面の口～頸部ヨコナデ後、外面胴部タテヘラケズリ。内面は胴部ナメヘラナデ後に胴下部と肩部の少し厚い部分をヘラケズリ。外面胴部に被熱痕と煤が少量あり。 [注記]4、22、54、67、78、107、108、110、111、112、135、116、117、120、154、156、162、176、178、181、北東、北東Bトレ、南東、南西	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、赤・黒細粒少 やや軟質	床直上～床上36cm 口3/4周、胴1/6周 注記は左欄
11 土師器 甕	高 残 26.2 底 5.4 最大 復 18.5	外底面は木葉裏面圧痕の大半をナデ消す。外面胴部上半タテヘラナデ、下半タテヘラケズリ、下端ナメヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ。残存する外面全体が被熱赤化。 [注記]28、52、79、80、129、132、136、142、149、北東、北東Bトレ、SK-211の1～5	7.5YR6/6 橙 粗い 白・灰色礫～細粒多、 赤・黒粗～細粒やや多 やや硬質	床直上～床上30cm 胴1/4周、底全周 注記は左欄
12 土師器 甕	口 復 19.8 高 推 35.0 底 6.5	上・中・下位が接合できず器高は推定。外面胴部下端横位と全体縦位のヘラケズリ。内面は胴下位ヨコナデとヨコヘラナデ後に中位以上を成形し斜位ヘラナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面肩部に灰色粘土痕、それより下位が被熱。内面使用痕は不明。 [注記]20、22、23、24、25、26、27、31、32、33、56、57、58、75、77、152、165、北東、北東Bトレ、北西、攪乱、南東	7.5YR6/6 橙 粗い 白・透明粗～細粒多、 赤・黒・灰色粗～細粒少 やや軟質	床上6～22cm 口5/12周、底1/2周 注記は左欄
13 土師器 甕	口 復 19.0 高 残 34.3 最大 復 20.6	外面は胴中位タテヘラケズリ後にタテヘラナデ。内面は胴下位を雑にナメヘラナデ、中位以上ヨコヘラナデ。胴下位の厚くなった部分をヨコヘラケズリ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面中位に少し煤が付くが不明瞭。 [注記]12、20、31、40、76、80、81、85、107、165、178、北西、北東、北東Bトレ	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・黒粗～細粒多、 赤・透明粗～細粒やや多 やや硬質	床上14～32cm 口1/6周、頸1/2周、 胴1/4周残 注記は左欄
14 土師器 甕	高 残 2.0 底 4.8	突出する外底面は雑なナデで、中央部が少し凹む。外面胴部下端ナメヘラケズリ。内面多方向ヘラナデ。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや粗い 白・灰色粗～細粒多、赤粗粒 と黒・透明細粒少 硬質	貯蔵穴底面 底2/3周 161
15 土師器 甕	口 17.6 高 底 37.6 復 5.2～5.6	外面は下端部に横～斜位と胴部に縦位のヘラケズリ。外底面はナデで小さな凸面状。内面は底部タテナデと胴部ヨコヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。煮炊に使用した痕が不明。 [注記]10、54、72、84、88、89、90、96、109、111、175、北西、南西、北東Bトレ	5YR6/6 橙 粗い 白・黒礫と白粗粒と白・ 灰色砂粒多 やや軟質	床上10～36cm ほぼ完形 口7/12周、底全周 注記は左欄
16 土師器 甕	口 復 21.0 高 推 25.1 底 復 9.3 最大 復 21.3	外面口縁部ヨコナデ後胴部タテナデ、胴下端ヨコヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ後、胴部に縦～斜位と胴下端に横位のヘラケズリ。孔端面もヨコヘラケズリ。内面のケズリは少し光沢を持つ。 [注記]82、121、130、143、147、148、175、177、179、北東、北西、南、攪乱、SK-211、SK-211の6	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と黒粗 粒多、白・透明細粒少 やや硬質	床直上～床上19cm 口1/8周、底1/2周 注記は左欄
17 土師器 甕	高 残 4.9 底 復 10.2	外面胴下位はナメヘラケズリ。内面胴部は密なナメヘラミガキ。孔端面はヨコヘラケズリ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 黒・透明細粒やや 少、白・灰色細粒少 硬質	南西床上32cm 底1/6周 48
18 須恵器 器種不明	高 残 1.9 底 復 11.5 最大 復 12.6	有台盤または有台椀の脚台部の可能性あり。脚端部内面が、脚部から明瞭に折れて肥厚する。外面に黒色の自然釉が薄くかかる。破面は赤灰色。	N5/0 灰 やや緻密 白粗～細粒微量 硬質	西壁際床上17cm 胴1/9周 41
19 須恵器 甕	高 残 2.5	外面の口縁より少し下に断面三角の突線1条。頸部はカキメの後に6歳以上の工具で横掃波状文。施文時のロクロは左回転（反時計回り）。外面に黒色の自然釉が薄くかかる。破面は赤灰色。	5Y4/1 灰 緻密 白・透明粗～細粒少 硬質	北西部 口縁部片 北西
20 須恵器 杯蓋	口 復 12.0 高 残 1.2	内外面ロクロナデ。口縁端部内面に浅い段あり。外面に自然釉がかぶり、灰白色に汚く発色する。古墳中期末の遺物がSI-12やSK-11・211等から混入。	2.5Y7/1 灰白 やや緻密 白細粒少 硬質	北西部 口1/8周 北西
21 須恵器 高杯	高 残 4.3	外面カキメ後に斜位のヘラ描き刻線1本あり。四方透窓で、45°方向の2孔が1部分ずつ残る。内外面に黒色の自然釉が薄くかぶる。古墳中期の遺物が混入。	10Y3/1 オリーブ黒 やや緻密 白礫～細粒少 硬質	南西床上16cm 脚1/4周 105
22 須恵器 杯	高 残 1.7	内外面ロクロナデ。口縁端部内面に浅い段あり。破面は赤灰色。古墳中期末の遺物がSI-12やSK-11・211等から混入。	5Y4/1 灰 やや緻密 白・透明微粒少 硬質	北東部 口1/24周 北東
23 須恵器 甕		同一個体と思われる16片のうち最大の1片を図示。外面は木目直交の平行溝を彫った叩き板を使い、木目があまり浮き出ないので擬格子状にはならない。内面は当具痕を磨り消して無文。破面はわずかに赤灰色。古墳中期の遺物が混入。SI-12の9と同一個体の可能性あり。	10Y5/1 灰 やや緻密 白礫～細粒少 硬質	床直上～床上31cm 胴部片 1、13、41、46、122、158、 166、北西、北東、北東 Bトレ
24 石器 編物石	長 16.7 幅 8.2 厚 5.2	自然の河原石をそのまま利用。全面が被熱赤化して煤も付着する。加工痕は見られない。重量1058.3g。	10YR6/4 にぶい黄橙 石英斑晶がやや目立つ流紋岩	中央床上12cm 完形 29
25 石器 編物石	長 17.4 幅 6.1 厚 5.7	自然の河原石をそのまま利用。図示した面が被熱赤化する。加工痕は見られない。重量876.5g。	5Y6/2 灰オリーブ 流紋岩またはチャート変成岩	西部床上2cm 完形 37
26 石器 編物石	長 11.9 幅 6.9 厚 3.7	中央部がくびれた自然の河原石をそのまま利用。表面全体が被熱赤化していて、図示した面の中軸線上が最も明瞭に被熱している。反対面の被熱は弱い。重量395.7g。	10Y5/1 灰 石英斑岩	西部床上14cm 完形 36
27 鉄製品 不明	長 残 5.8cm 厚 3.2～ 3.6mm 幅 8.9mm	幅がほぼ均一な鉄棒で、片端に近い部分では断面が長方形。もう一方の端では1側縁が薄くなるので、断面が長三角形に近づく。これが刃部であれば、刀子の茎部破片と考えることができるが不確実。残存重量7.8g。		南西床上17cm 両端欠 157

SG10区 SI-12 (第27図、写真図版73・74)

[位置] SG10区南部、東側低地に面する台地縁辺の18-17グリッド。古墳後期の建物は南にSI-10、北東にSI-32・34、北西にSI-40がある。時期不明のSK-228・229によりSI-12→SK-229→SK-228の順序で切られる。西壁全体が近世のSD-201aに切られる。北東隅は抜根で攪乱されている。

[規模と形状] 西壁が明確ではないが方形と推定され、中軸線はN-16°-E。南北長4.68m、東西長は残存4.02mで、カマドが北壁中央と仮定すると東西の推定長は4.76m。壁は直線的に外傾し、残存高8～12cm。床



第27図 権現山遺跡 SG10 区 SI-12 遺構・遺物

は平坦で傾斜しない。全体を貼床し、南北断面の南半部は黄褐色土（5層）で少し高く貼った可能性もあるが、ややしまりがないので、人為的な床面の高まりかどうかはよくわからない。柱穴は認められない。

【カマド】西壁が不明なため北壁中央から東西に偏るのか不明確だが、ほぼ中央にあると推定する。両袖幅190cm、煙道先端から袖先端まで187cm。貼床土で掘形を埋め戻してから構築するが、貼床土と地山ローム土の区別が不明瞭であった。袖は灰白色粘土(10層)で、調査を実施した7月下旬には乾燥して粘性がなく、よく締まっていた。煙道は北壁から87cm突出してゆるく上がる。カマド平面図で東西断面と南北断面の交点付近にある石は、遺構確認面の直上にあった自然礫で、断面図には記入されていない。

【覆土】約10cm程度残る。貼床（6層）および貼床の可能性のある5層を除くと、単層で埋没している。

【遺物出土状況】遺物は少ないが、覆土が10cmほどの厚さしか残っていないため出土レベルは床面に近い。建物全体から散漫な状態で出土し、中央付近にやや多い。被熱使用痕があるハケ調整球胴甕（6）の底部がカマド内と西側で出土し、接合した。中央部で長胴甕（5）、南部で杯（1）が出土した。

【出土遺物】1は大形で口縁も高いが、ミガキを省略するので後期末頃であろう。甕（5）は金色に発色する雲母片が多く、茨城県域からの搬入品。雲母片を含む土師器はSG5区ではSI-24の高杯、SG10区ではSI-12・21a・22・23・47・59・72・73・74・81・85・114にあり、権現山遺跡北部の2区に多く、他地区に

第16表 権現山遺跡 SG10区 SI-12 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 16.0 高 残 4.2 最大 復 17.2	外面は体部上半ナデ後、下半ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面全面にヨコナデ。内面は全体が黒色。漆仕上げは見られない。	2.5Y8/3 淡黄 やや緻密 白・透明粗～細粒 やや多、灰色粗粒と黒細粒少 やや軟質	南部床上 8～10cmと南東の4片が接合 口 1/3 周 16、17、南東
2 土師器 鉢	高 残 4.8 底 4.8	外底面に多方向、外面体部に斜位のヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・透明粗～細粒 やや多、黒細粒少 やや硬質	中央部床上 2cm 底全周 7
3 土師器 鉢	口 復 11.7 高 残 8.2	外面の口～体部境に緩く弱い段あり。外面体部ナデ後に一部ナメヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒と 白・透明細粒少 やや硬質	口 1/6 周
4 土師器 粗製鉢	口 復 13.8 高 6.9 底 復 6.7	底部円盤の上に5段の紐積みをして、外底面と体部内外面にやや雑なナデ調整。紐積み痕を残し、特に外面で目立つ。	2.5Y4/1 黄灰 やや緻密 白細粒多、赤粗～細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	南東隅床上 7cm 口 1/24 周、底 1/4 周 13、14
5 土師器 甕	口 復 19.2 高 残 20.1	口縁部と胴部は接合できない。底部も小片2点で復原・図示できない。胴部内外面タテヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部も胴部も薄い。[注記]6、19、北西、南西、南東、カマド一括、SK-229	5YR4/3 にぶい赤褐 粗い 白・透明粗～細粒と礫 多、金色雲母粗～細片多、黒粗～細粒少 やや軟質	中央部床上 3～4cmが接合 口 1/2 周、胴 1/4 周、底 1/6 周 注記は左欄
6 土師器 甕	高 残 8.0 底 復 9.6	外面はナメハケ後に胴下端部を横～斜位ヘラケズリ。外底面は多方向ヘラケズリで凹底。内面はヨコヘラナデ。外面の全体が被熱赤化し、内面は底から高さ5cmまでの範囲にコゲ痕付着。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 白・黒・透明粗～細粒多、白礫と赤粗粒少 やや軟質	カマド西袖床上 4cmとカマド火床上 17cmが接合 底 5/12 周
7 須恵器 杯身	最大 復約 12	内外面口クロナデ。底部外面に回転ヘラケズリ。	N5/(B) 灰 緻密 白細粒少 硬質	体 1/12 周 南東 Bトレ
8 須恵器 高杯		杯体部外面下に2段を持ち、下段の上半と上段が残っている。内外面口クロナデ。	N5/(B) 灰 緻密 白細粒少 硬質	南西
9 須恵器 甕		同一個体と思われる小片7点のうち1片を図示。外面は木目直交の平行溝を彫った叩き板を使い、木目がほとんど浮き出ないので擬格子状にはならない。内面は当具痕を磨り消して無文。破面はわずかに暗褐色。SI-10の23と同個体の可能性あり。	N6/(B) 灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	南東
10 石器 砥石	長 残 8.6 幅 残 7.0 厚 残 3.9	自然の円盤、外周部の側面を使用。擦痕は不明瞭だが、かなり平滑に磨耗している。平坦面の部分は使用していない。大部分が剥離・破損し、反対面を使用していたかどうかは不明。重量 377.6g。	2.5GY5/1 オリーブ灰 緻密で硬質なホルンフェルス	西部床上 5cm 破片 5

も若干ある(『東谷・中島地区遺跡群』10, p.550)。図示以外の土師器合計 235片・1,988gの内訳は、杯 117片・627g、高杯 31片・210g、鉢 14片・176g、小形壺 1片・6g、壺甕類 70片・934g、甑 2片・35g。

SI-10の23と同一個体の可能性がある古墳中期の甕片が7点混入し、1片を示した(9)。径が小さいと見られる須恵器杯身(7)も古墳中期末の混入品かもしれない。ホルンフェルスの砥石(10)はSG10区 SI-12・13・18c・19a・25・34a・55・59・65・80・84・86・101、SG5区 SI-7などに例がある。また、権現山遺跡北部(SG1区 SI-17・4区 SI-15他)や立野遺跡5区(SI-7他)などの周辺集落にもある。

SG10区 SI-13 (第28図、写真図版74・190)

[位置] SG10区南部の17-16・17グリッド。古墳後期の建物は北東にSI-15がある。古墳後期のSI-85に西部を切られ、近世のSD-201a・bに南東隅を切られる。

[規模と形状] 西端部形状は不明だが、東西軸の長方形と推定される。東西推定長約6.3m、南北長5.69m。中軸線はN-7°-W。壁残存高は、最もよく残る北東部で7～10cmあるが、南壁の西部では2cmだけになり、西部では掘方まで削平されて消滅する。4本の支柱穴P1～P4の柱間は南北方向が2.30mでほぼ一定している。東西の柱間は、北側が広く2.98m、南側が少し狭く2.92m。南東柱穴P4がやや深くて床面から54cm、他の支柱穴P1～P3は床面から深さ40～46cm。柱痕からみて推定柱径は10～15cm。南壁中央にある貯蔵穴P5は東西130×南北106×深さ28cmの楕円形で、貯蔵穴底面がわずかに北へ傾斜する。貯蔵穴は自然埋没で、古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラと見られる白色粒子・白色塊が上層に多い。

掘形の深さは床から4～10cmで、北東と南東の隅部は12～19cmまで一段と深くなる。北西と南西の隅部も掘形が深くなっていたかどうかは、西部がひどく削平されているのでよくわからない。

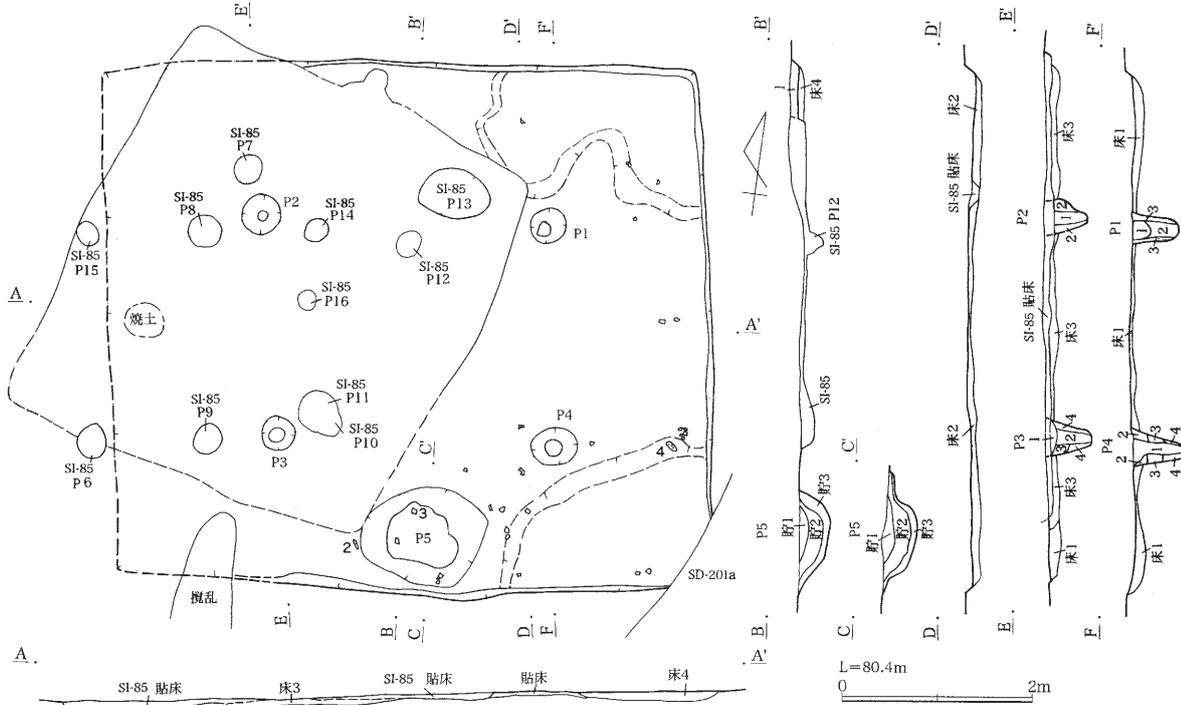
[火処] 不明である。北壁と東壁にカマドが認められないので、炉を持っていた可能性がある。西壁付近の床面に焼土が少しまとまってみられたが、位置が偏っているのでこれを炉と考えることは難しい。

[覆土] 竪穴の覆土は10cmほどしか残っていない。貼床またはその可能性が高い層を除くと、単層で埋没している。古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラかともみられる白色粒子を、貯蔵穴と同様に多く含む。

第5章 権現山遺跡 SG10 区

[遺物出土状況] 覆土が薄いので、出土遺物は床面に近い。特に集中箇所はないが、南東部にやや多い。

[出土遺物] 1は口縁部がないため不明確だが、深身の初期模倣杯と思われる。2は小破片でSI-13に伴うかどうか不詳。ホルンフェルスの砥石(4)は、SG10区SI-12などにある。遺物は少ない。図示以外の土師器合計155片・1,204gの内訳は、杯60片・284g、高杯7片・42g、鉢7片・110g、小形壺6片・25g、壺甕類73片・723g、甌1片・6g、小形土器1片・14g(他に須恵器壺1片・9g)。土師器甕片が多いが図示できるものはない。図示以外に須恵器壺小片が1片あり、古墳終末期頃の混入品の可能性がある。

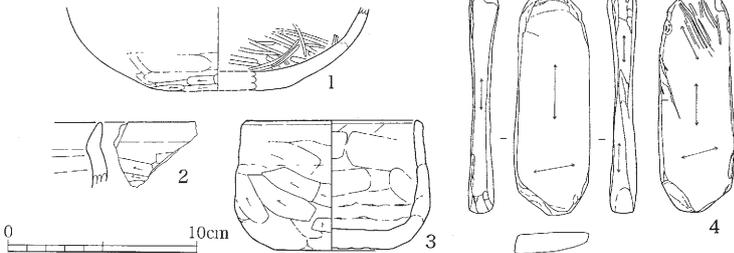


SG10区SI-13

- 1 茶褐色 ソフトローム粒・FA白色粒多、焼土粒微量。しまり・粘性なし。
- 床1 暗褐色 ローム小塊・粒多、ローム中塊微量。しまり強、粘床。
- 床2 暗褐色 ローム小塊・粒多、しまり強、粘床。
- 床3 暗黄褐色 ローム小塊・粒多、ローム中塊少、今市軽石細粒極微量。しまり強、粘床。
- 床4 暗黄褐色 ソフトローム粒多、ソフトローム塊(径2~3cm)少、しまりかなり有。粘性なし、粘床。
- P1 1 黄褐色 ローム小塊・粒多。しまり強。
- 2 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少。しまりやや弱。
- 3 黄褐色 ローム小塊・粒多、ローム中塊少。しまりやや弱。
- P2 1 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少。しまり強。
- 2 黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、ローム中塊微量。しまり強。
- P3 1 褐色 ローム小塊・粒少。しまり強。
- 2 暗黄褐色 ローム小塊多、ローム粒少、ローム中塊微量。しまりやや強。
- 3 黄褐色 ローム小塊・粒多、ローム中塊微量。しまりやや強。
- 4 褐色 ローム小塊・粒少。しまりやや弱。
- P4 1 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少。しまりやや弱。
- 2 暗黄褐色 ローム小塊多、ローム粒少。しまり弱。
- 3 黄褐色 ローム小塊・粒多、ローム中塊微量。しまりやや強。
- 4 褐色 ローム粒少、ローム小塊微量。しまりやや弱。

P5 (貯1~3層はすべてしまり弱)

- 貯1 暗褐色 二次的な混入と思われる。径1~2cmのFA塊少、焼土粒微量。
- 貯2 暗褐色 1層と同様だが、FAの量は1層より少ない。ソフトローム粒少。
- 貯3 暗黄褐色 ソフトローム粒多、ソフトローム塊少。軟。



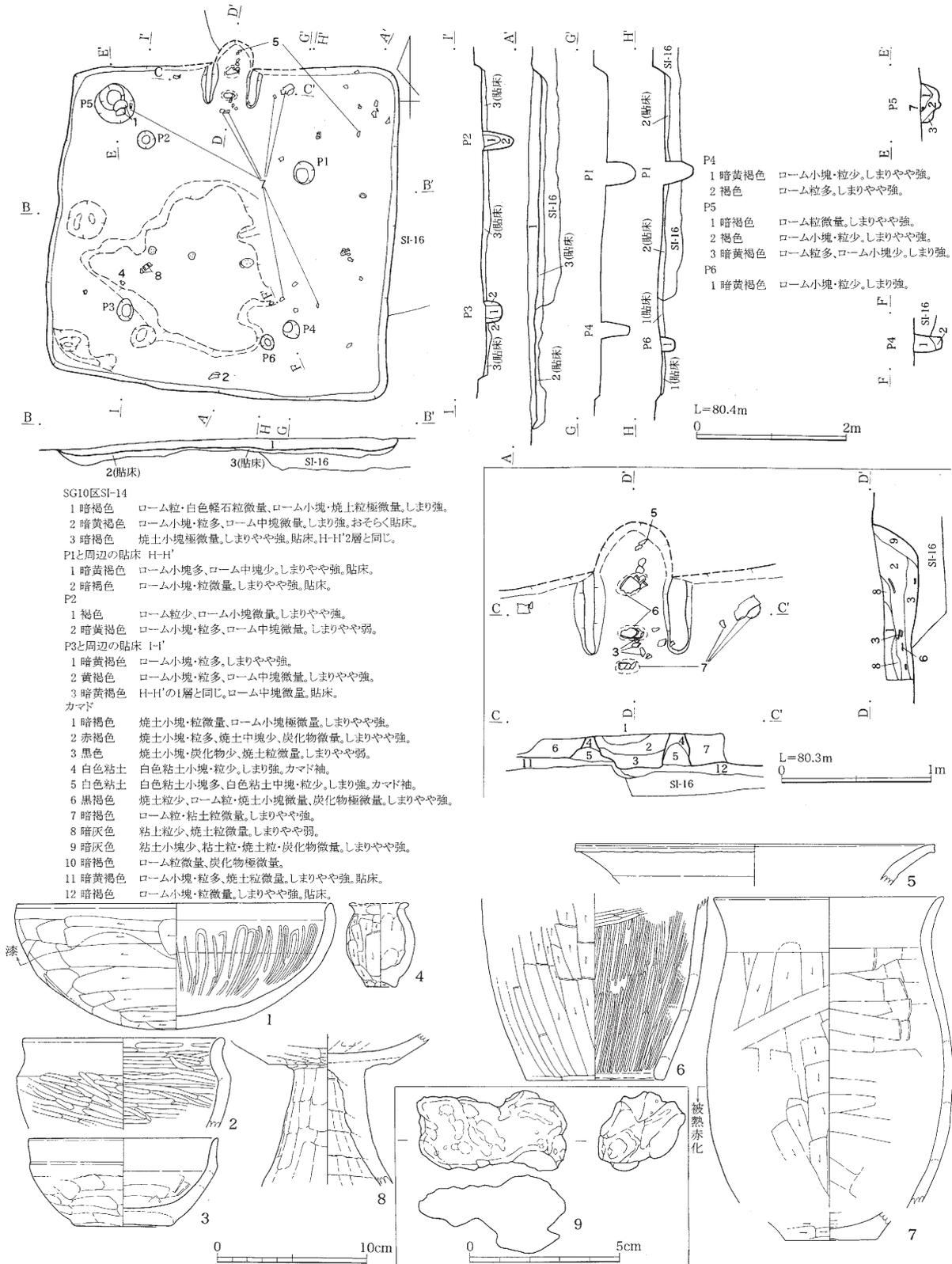
第28図 権現山遺跡 SG10 区 SI-13 遺構・遺物

第17表 権現山遺跡 SG10 区 SI-13 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 4.5 最大 残 15.8	外面は体部にナデ後ヨコヘラナデ、底部にヨコヘラケズリ。内面は密なヨコヘラミガキ後に疎かなタテヘラミガキ。 [注記]6、SI-85 A-A' 南一括	7.5YR5/4 にぶい褐 緻密 赤細粒やや多、白・黒・ 透明微粒少 やや硬質	南部床上6cmとSI-85に 混入した2片が接合 体1/3周注記は左欄
2 土師器 杯	口 復約 14 高 残 3.5	内面頸部の稜が明瞭。体部は外面ナデ後ヨコヘラケズリ、内面ナデ。口縁部 内外面ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 黒細粒やや少、白・赤・透明 細粒少 やや硬質	北東部 口1/12周 北東区
3 土師器 小形土器	口 復 9.5 高 6.9 底 6.4	外面で体部より口縁部が少し薄い。外底面と外面体部に雑なナデの後、体部 ナメヘラケズリ。内面底部は雑なヘラナデ。内面は雑なナデで粘土紐積み 痕を残す。内外面口縁部にやや雑なヨコナデ。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白粗~細粒やや多、黒粗~細 粒と透明細粒少 やや硬質	P5内底上10cm 口1/12周、底5/12周 5、一括貯蔵穴
4 石器 砥石	長 12.8 幅 4.0 厚 1.4	両面を主に長軸方向によく使用して平滑に磨耗し、薄くなっている。両側面 もそれと同様に使用して平滑に磨耗している。右図の面の上部には線状に深 くなる部分がまとまる。重量98.7g。	2.5Y7/3 浅黄 泥岩起源の緻密・細粒で硬質 なホルンフェルス	北東部床上2cm 完形 10

SG10区SI-14 (第29図、写真図版74・75・174・190)

[位置] SG10区南部の18-16・17グリッド。同じく古墳後期の建物は北にSI-15・20、南にSI-85がある。古墳中期のSI-16を切る。



第29図 権現山遺跡 SG10区 SI-14 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

[規模と形状] 東西 4.62 × 南北 4.50m の正方形で、中軸線は N-3° -E。中央から南西寄り掘方底が島状に一段高く（床面下 1 ～ 2cm）、それ以外でやや深い（床面下 5 ～ 8cm）。床下に SI-16 埋土がある北東部は貼床が黒くてロームが少なく、やや厚い。カマド部の掘方が他より深い状況は認められなかった。

主柱穴 4 本は、P2 が少し北西に外れた位置で（P2-P3 の柱間だけが他より長く 2.30m）、他の柱間は 2.10 ～ 2.15m。北東柱穴 P1 は床面で確認できず、床下で確認した。床面からの深さは P1=38cm、P2=40cm、P3=22cm、P4=39cm で、南西柱穴 P3 が他より浅い。南東柱穴 P4 の南西にある浅い柱穴 P6 は床面からの深さ 17cm。北西隅の貯蔵穴 P5 は径 54cm ・ 深さ 27cm の円形で、底面はやや凹凸を持ち中央が深い。

[カマド] 北壁のほぼ中央にある。竪穴の掘方を埋めた貼床の上に白色粘土で袖を作る。焚口から燃焼部にかけて火床面のレベルが約 10cm 低くなり、煙道部分は竪穴の北壁を 30 ～ 35cm 掘り込んで突出する。煙道部分の平面形は調査時の記録に不備があったらしく、復元形を破線で記入してある。

[覆土] 単層で、1 層中の白色軽石粒は古墳時代テフラの可能性はある。貯蔵穴覆土は自然埋没状。

[遺物出土状況] カマド内とカマド東側にやや多く、それ以外は少量ずつ各所で出土した。カマド東側で床から少し浮いている 1/3 周大の甕破片はカマド焚口部の破片と接合し、同一個体の接合できない破片が南東部や貯蔵穴覆土にある（7）。大形の杯が伏せた状態で貯蔵穴覆土中にある（1）。

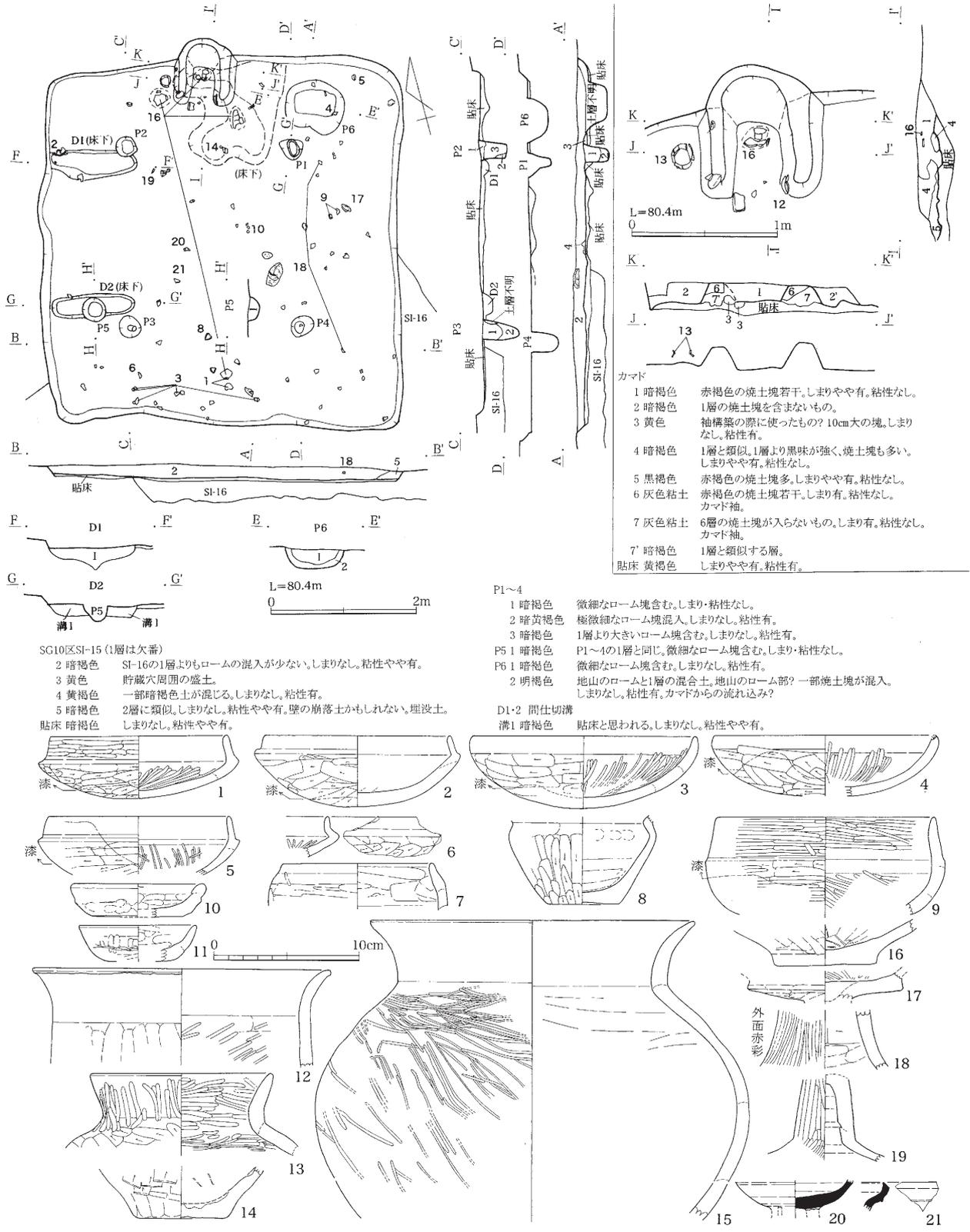
[出土遺物] 1 は非常に大形の杯で口径 20cm を越える。2 は密に磨いて内面炭素吸着の鉢。長胴甕形の小形土器は珍しい（4）。5 は須恵器のようにシャープなヨコナデを口縁部に施す甕。8 は古墳中期の SI-16 出土破片と接合し、古墳中期の混入品か。遺物は少なく、長胴甕・大形甕・鉢が主体である。図示以外の土師器合計 290 片・2,347g の内訳は、杯 139 片・623g、高杯 21 片・289g、小形壺 4 片・27g、壺甕類 125 片・1,399g、小形土器 1 片・9g。古墳中期後葉ころかと思われる土師器椀形杯・高杯・壺・甕などが一定量含まれ、重複する SI-16 などから混入した遺物と見られる。鉄関連遺物では、ごく小さな鍛冶炉壁が 1 点出土した。東側の SI-6 ・ 30 でも鉄滓や炉壁が少し出土している。炉壁片は SI-30 出土例と質感が似る。

第 18 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-14 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 大形杯	口 20.6 高 8.4 最大 21.1	外面は口縁部ヨコナデと底部に 2 ～ 3 方向の後、体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ナデと口縁部ヨコナデ後、放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明粗～ 細粒多 やや軟質	貯蔵穴底上 25cm 口 2/3 周 1
2 土師器 鉢	口 復 13.2 高 残 6.0	外面は口～頸部ヨコナデ後に、体部をヨコヘラケズリの後密なヨコヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ後、口縁部と体部にヨコヘラミガキ。内面は炭素吸着による黒色処理。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒と赤・ 黒・透明細粒少 硬質	南壁際床上 3cm。南東にも破片あり 口 1/2 周 10、南東
3 土師器 鉢	口 復 12.6 高 5.9 底 6.2	やや厚手で重い。外底面と外面体部はナデで、粘土組織み痕をやや多く残す。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。漆仕上げは見られない。	10YR7/6 明黄橙 やや緻密 白・黒粗～細粒と 赤・透明粗～細粒少 やや硬質	カマド火床上 7cm 口 1/4 周 41、48
4 土師器 小形土器	口 復 3.9 高 5.6 底 2.0 最大 4.5	長胴甕形。頸部以下はおそらく手握ねで成形し、口縁部だけ粘土紐を 1 段積んで作る。外底面は雑なヘラケズリで凹み底状にする。外面口～頸部を雑にナデた後、胴部タテヘラケズリ。内面は胴部を丁寧な指頭ナデの後、口～頸部を軽くヨコヘラナデ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒粗～細粒や や多、透明細粒少 やや硬質	南西床上 4cm 口 1/12 周 頸部以下完存 4
5 土師器 甕	口 復 23.8 高 2.8	外面は頸部から胴部へ 1mm 程の段を持って厚くなる。内外面ともに丁寧なヨコナデで口端面は凹線状になる。現存部にミガキは見られない。	7.5YR6/6 橙 緻密 黒粗～細粒やや多、白・ 赤・透明細粒少 硬質	北東部床上 3cm とカマド 煙道 口 1/3 周 25、45、カマド一括
6 土師器 甕		外面胴部はタテヘラケズリで、下位を下向けに削ってから中位を上向きに削る。胴下端の孔縁部はヨコヘラケズリ後ナデ。内面胴部は密なやや細いヘラミガキの後、中位に横～斜位のやや太いヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗粒と白細粒多、 赤・黒細粒少 やや硬質	カマド内 5 ～ 13cm 底 1/2 周 37、40、43、48、49、 北西、南西、カマド一括
7 土師器 甕	口 復 15.2 高 残 23.0 底 復 6.0 最大 復 16.2	底部破片はあるが、胴部下位が接合できない。外底面に 1 方向または多方向ヘラケズリ。胴部外面は下端部に横位と、それ以外に縦位のヘラケズリ。胴部内面ヨコヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。外面下半が被熱赤化。 [注記] 2、14、33、34、47、南西、北西、カマド一括	2.5YR7/6 橙 やや粗い 黒粗～細粒多、白・ 赤・透明粗粒少 やや硬質	カマド周辺床上 4 ～ 8 cm、貯蔵穴底上 23cm、 南東部床上 6cm 口 1/4 周、頸 1/3 周、 底 5/12 周 注記は左欄
8 土師器 高杯	高 残 10.3	脚上端は倒立状態で反時計回りに巻き上げ。脚上端と杯底部の接合痕は水平。外面脚部タテナデ、杯底部ヨコナデと部分的ヨコヘラケズリ、杯体部下端ナメヘラケズリ。脚内面ユビオサエと軽いタテナデ。杯内面は多方向ヘラナデ。SI-16 の破片が SI-14 に混入か。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・灰色粗粒と白・ 黒細粒少 やや軟質	南西部。SI-16 東部の 1 片が接合 脚柱全周、杯底 1/4 周 5、6、SI-16 東
9 炉壁 (鍛冶炉?) または 被熱粘土塊	長 2.7 幅 4.9 厚 2.9 重 18.4	褐色からくすんだ赤褐色に被熱した鍛冶炉の炉壁破片。左寄りの肩部は灰色の部分とくすんだ紫紅色の被熱部分が混在する。胎土は砂を混じえているもので、上手側側部の一部は発泡して粉末状の鍛造剥片が固着する。この鍛造剥片の存在により単なる被熱粘土塊とは異なることがわかる。鍛冶関連遺物構成 No. 63。	5YR5/7 明赤褐 やや粗い やや硬質 磁着度 1 メタル度 なし	破片?

SG10区SI-15 (第30図、写真図版75・190)

[位置]SG10区南部の18-16・17グリッド。古墳後期の建物は南西にSI-13がある。古墳中期のSI-16を切る。
 [規模と形状] 東西5.04×南北5.18mの僅かに南北に長い長方形で、中軸線はN-15°-E。残存壁高は4～



第30図 権現山遺跡 SG10区 SI-15 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

16cm で、北西部の壁がやや深く残る。南半部の下層に SI-16 がある部分では、貼床土が黒くてロームが少なく、壁や床面を確認しにくい箇所もあった。

支柱穴 P1 ～ P4 の配置は竪穴平面形と同じく僅かに南北に長い方形で、柱間は東西方向が 2.28 ～ 2.30m、南北方向が 2.50 ～ 2.54m。南西柱穴 P3 だけが深く（床面から 53cm）、P1・P2・P4 は浅い（34 ～ 36cm）。南東柱穴 P4 は下層の SI-16 に掘り込まれているので、SI-16 を調査してからようやくその位置を確認できた。南西支柱穴 P3 の西側の床面で確認した P5 は深さ 20cm の浅い柱穴で、床下で確認した間仕切溝 D2 を切っていると判断される。P5 の上層で土師器が 2 片出土した。P5 は後世の柱穴の疑いもある。

西側の支柱穴 2 本に連結する間仕切溝 2 本は、どちらも貼床と同質の土で埋め戻されていて、貼床除去後に確認した。長 114 ～ 118cm × 幅 27 ～ 42cm、床面からの深さ 15 ～ 20cm。北壁の東部にある貯蔵穴 P6 は東西軸の隅丸方形で、東西 82 × 南北 74 × 床面から深さ 33cm。貯蔵穴の周囲を取り巻くように、黄色土で盛土を巡らしていた(断面図 A-A' の 3 層)。ただし平面図にはこの盛土の形状が記録されていない。P6 の覆土は自然埋没で、カマドに関わる焼土が最下層に西側から流入している (E-E' の 2 層)。貼床は数 cm 程度の浅いもので、掘方底面に顕著な凹凸は少ない。下層に SI-16 がある部分では掘方形状を記録できなかった (D-D')。

[カマド] 北壁中央より少し西寄りにある。規模は長 92 × 幅 84cm。竪穴の掘方が緩く窪む部分を、厚さ約 10cm の貼床土で平坦に埋め戻した上に、主に灰色粘土で両袖を作る。西袖は黄色土塊や焼土混じり暗褐色土も併用している。煙道は北壁を幅 71 × 奥行 25cm の半円形に掘り込み、かなり緩く上がってゆく。カマド西側の床面には胴下半を欠いた土師器甕を正位においてあり、転用器台と考えられる。

[覆土] 自然埋没で、壁際に暗黄褐色土が流入している以外は、暗褐色土の単層。

[遺物出土状況] 南部にやや多い傾向がある。通例と異なり、貯蔵穴周辺に遺物が少ない。13 は肩部で破損した壺の口～頸部を上向きに置いた状態なので、器台に転用した可能性が高い。ただし、床面レベルから少し浮いて出土した (断面図 J-J')。カマド東袖の先端では甕口縁部 1 片が下向きで出土した (12)。

[出土遺物] 土師器杯の多くが漆仕上げ。8 は肩部の張った鉢。20 は後期前半の 3 方透の須恵器高杯で、杯底部の丸みがやや強く、脚上端がまだ完全に細くなっていない。14 は非常に顕著に被熱している甕底部。

古墳中期の混入遺物も見られる (17 は杯部が有段状、18 は外面赤彩、19 は屈折脚の高杯)。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 528 片・3,888g の内訳は、杯 224 片・1,020g、高杯 24 片・223g、鉢 4 片・78g、小形壺 1 片・11g、壺甕類 272 片・2,534g、小形土器 1 片・11g、焼粘土塊 2 点・11g。

第 19 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-15 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.1 高 4.4 最大 13.5	外面は底部に 2 方向と体部に横位のヘラケズリ。外面体部上端は雑なナデのままに削り残す。口縁部は内外面ヨコナデ後に外面ヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面の底部以外と内面を漆仕上げ。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 白・黒粗～細粒や やや赤・赤・透明粗～細粒少 硬質	北部出土。SI-16 にも破片が混入 口 3/4 周、体 11/12 周 北、南西ベルト、 SI-16 の 19、20、北西
2 土師器 杯	口 12.7 高 4.8 最大 14.1 重 残 259.0	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部と内面口～体部ヨコナデ。内面底部に多方向ナデ。外面中位以上と内面に厚い漆仕上げ。	5YR6/6 橙 緻密 白・黒・赤細粒少 やや硬質	北西部床上 3cm (間仕切溝底上 22cm) 口 11/12 周、体全周 68
3 土師器 杯	口 復 15.2 高 5.0 最大 復 15.4	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ後、内面体部に放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。 [注記]61、C トレ西、北西、SI-16 の 5、23、北西	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 黒粗～細粒やや多、 白・透明粗～細粒少 やや硬質	南壁際床上 12cm。SI-16 に破片が混入 口 1/4 周 注記は左欄
4 土師器 杯	口 復 15.0 高 4.2 最大 復 15.4	外面は口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ後にやや密な放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 黒粗～細粒多、白・ 透明粗～細粒やや多 やや硬質	貯蔵穴底直上、北東部の 2 片も接合 口 1/2 周 21、北東、貯蔵穴
5 土師器 杯	口 復 12.3 高 残 4.0 最大 復 13.7	外面体部はヨコヘラケズリで、体部上端に粘土組織み痕とナデを残す。外面口縁部と内面ヨコナデ後、内面体部にやや細い放射状ヘラミガキ。外面の口～体部中位と内面に漆仕上げ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒細粒少 やや硬質	北東隅床上 9cm 口～体 1/6 周 19
6 土師器 杯	口 復 13～14 高 残 2.8 最大 復 15～16	外面体部ナメヘラケズリ。外面口縁部と内面をヨコナデ後、内面体部に放射状ヘラミガキ。漆仕上げは現状では見られない。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 硬質	南西部床上 12cm 口 1/6 周 63

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

7 土師器 鉢	口 復 10.2 高 残 3.3	口縁端部は不明瞭な内傾斜面。内外面はやや雑なヨコナデで、粘土組織み痕が少し残る。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白粗～細粒少 硬質	口 1/4 周 A トレ
8 土師器 鉢	高 残 6.1 底 4.8 最大 復 10.0	外底面は軽いヘラナデで少し上げ底状。外面頸～肩部ヨコナデ、体部タテヘラズリ。内面体部ヨコヘラナデ、肩部ユビオサエ、頸部ヨコナデ。	5YR7/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明細粒少 やや軟質	中央南部床上 4cm と南東部の各 1 片が接合 底全周、肩 1/6 周 54、南東
9 土師器 鉢	口 復 14.8 高 残 6.7 最大 復 16.2	外面の口～体部境に明瞭な段あり。内外面の口縁部をヨコナデ後、ヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラズリ後にヨコヘラミガキ。内面体部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げ。	2.5Y7/3 灰黄 緻密 黒細粒やや多、白・灰 色・透明細粒少 やや硬質	北東部床上 9cm と中央東部床上 3cm が接合 口 1/6 周、体 1/4 周 19、31、北東
10 土師器 小形土器	口 復 8.8 高 残 2.3 底 復 6.1 最大 復 9.2	確実な組織み痕がないので手捏ね成形の可能性あり。外底面は多方向ナデで、緩く突出する。外面体部は雑なナデとユビオサエで、粘土成形の凹凸を多く残す。外面口縁部と内面に雑なナデ。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや緻密 白・透明細粒多、 赤粗～細粒と黒細粒少 硬質	中央部床上 6cm 口 1/12 周、底 5/12 周 29
11 土師器 小形土器	口 復 8.0 高 残 2.5	体部は 1 段だけの粘土紐を底部上に積んで成形する。外底面は多方向ナデ。外面体部は雑なタテナデとユビオサエで、組織み痕を残す。外面口縁部ヨコナデ。内面は斜～横位の雑なナデ。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや粗い 赤粗粒と白細粒や やや多 やや硬質	北西部 口 1/8 周、体 1/3 周 北西
12 土師器 甗	口 復 20.3 高 残 5.8	外面胴部タテヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。内面胴部はヨコヘラナデ(?)の後にナメヘラミガキ。	10YR8/6 黄橙 やや粗い 白・黒粗～細粒や やや多、灰色・透明粗～細粒少 やや硬質	カマド東袖部床上 4cm と北西部の 1 片が接合。 北西部床上 4cm にも 2 片 あり 底 1/3 周 5、カマド 8、北西
13 土師器 壺	口 12.4 高 残 5.7	内外面の口～頸部ヨコナデ後に外面肩部をヘラズリ。外面口縁部はタテヘラミガキで、密に磨く部分が多い。内面はヨコヘラミガキで、特に肩部は密に磨いている。「胴下半を欠いた甗を上向きにして床面に置く。転用器台だろう。」と実測図面にコメントがあり、肩部の組織み上げ痕を破損した甗を上向きに置いてあったので、転用器台として用いたことが推定される。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤・白粗～細粒多、 白礫と黒・透明粗～細粒やや 多 やや硬質	カマド西床上 4cm で正位 口全周 カマド 1、北西
14 土師器 甗	高 残 3.5 底 6.2	外面は底部と胴部下端にヘラナデ、胴部にタテヘラズリ。内面はナメヘラナデ。残存部分の全体が強く被熱して、内面の器面が剥離・破損している。	10YR5/2 灰黄褐 やや粗い 白細粒やや多、黒・ 透明細粒少 やや硬質	中央北部床上 4cm 底 7/12 周 15
15 土師器 大形壺	口 復 22.2 高 残 20.5 最大 復 29.6	外面胴部はヘラナデ後に横～斜位ヘラミガキで、上半部ほど密になる。内外面の口～頸部ヨコナデ。内面胴部はヨコナデまたはヨコナデで、特に下部ほど器面が荒れて調整が不詳。胴部外面の約 1/3 に大黒斑あり。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒粗～細粒や やや多、白礫と赤粗粒と透明粗 ～細粒少 やや硬質	カマド付近床上 4～6 cm とカマド内床上 19cm と南部床上 6cm が接合 口 1/18 周、頸 1/3 周、 胴 1/2 周 5、16、53、カマド 6
16 土師器 大形壺	高 残 3.1 底 7.0	平底で突出する外底面を 2 方向程度のヘラズリ。外面胴部に横位と斜位のヘラナデ。内面底部は放射方向および円周方向のヘラナデ。内面底部の器面は黒色。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒細粒やや少、 赤・透明細粒少 やや硬質	底 2/3 周
17 土師器 高杯	高 残 2.3 杯底 10.6	脚部上端は粘土充填成形。杯部は有段状。杯底部外面ナメナデ、杯体部外面ヨコナデ。内面杯底部は斜放射状のヘラミガキ。古墳中期中～後葉の遺物が混入。	5YR6/8 橙 やや粗い 透明粗～細粒多、 白・黒細粒やや多、白礫と赤 粗粒少 やや軟質	東部床上 6～11cm が接 合 杯底 3/4 周 25、32、43
18 土師器 高杯	高 残 4.1	外面タテヘラミガキ後赤彩。内面は上部ヨコヘラズリ、下部ヨコナデまたはヨコヘラナデ。古墳中期の遺物が混入?	10YR5/6 赤 やや緻密 白・黒細粒と灰色・ 透明粗～細粒少 やや硬質	北西部床上 3cm 脚 1/6 周 9
19 土師器 高杯	高 残 5.9 最大 残 8.0	脚柱部に縦位と脚裾部に斜位の密なヘラミガキ。脚柱部内面はおそらく細長いヘラを入れてヨコヘラナデ。脚裾部内面ヨコナデ。古墳中期後葉の遺物が混入。	5YR7/6 橙 緻密 白・黒・透明細粒少 やや軟質	中央部床上 1cm 脚柱全周 13
20 須恵器 高杯	高 残 2.1 最大 残 7.9	外面の杯底部は回転ヘラズリと推定できるが、黄色く発色した自然釉が外面を覆うので、ヘラズリの範囲や方向は不明。杯内面はロクロナデ。脚部接合後、脚外面に 3 方向の透窓を開けている。	N5/ 灰 やや粗い 白粗粒やや多 硬質	中央南西寄り床上 1cm 杯底 3/4 周、脚上端全 周 12
21 須恵器 甗	口 20～30	外面の口縁部より少し下方に明瞭な突線 1 条あり。口縁端部は外傾する明瞭な斜面。	N5/(B) 灰 やや緻密 白・透明粗～細粒 少 硬質	北東部 口 1/36 周 北東

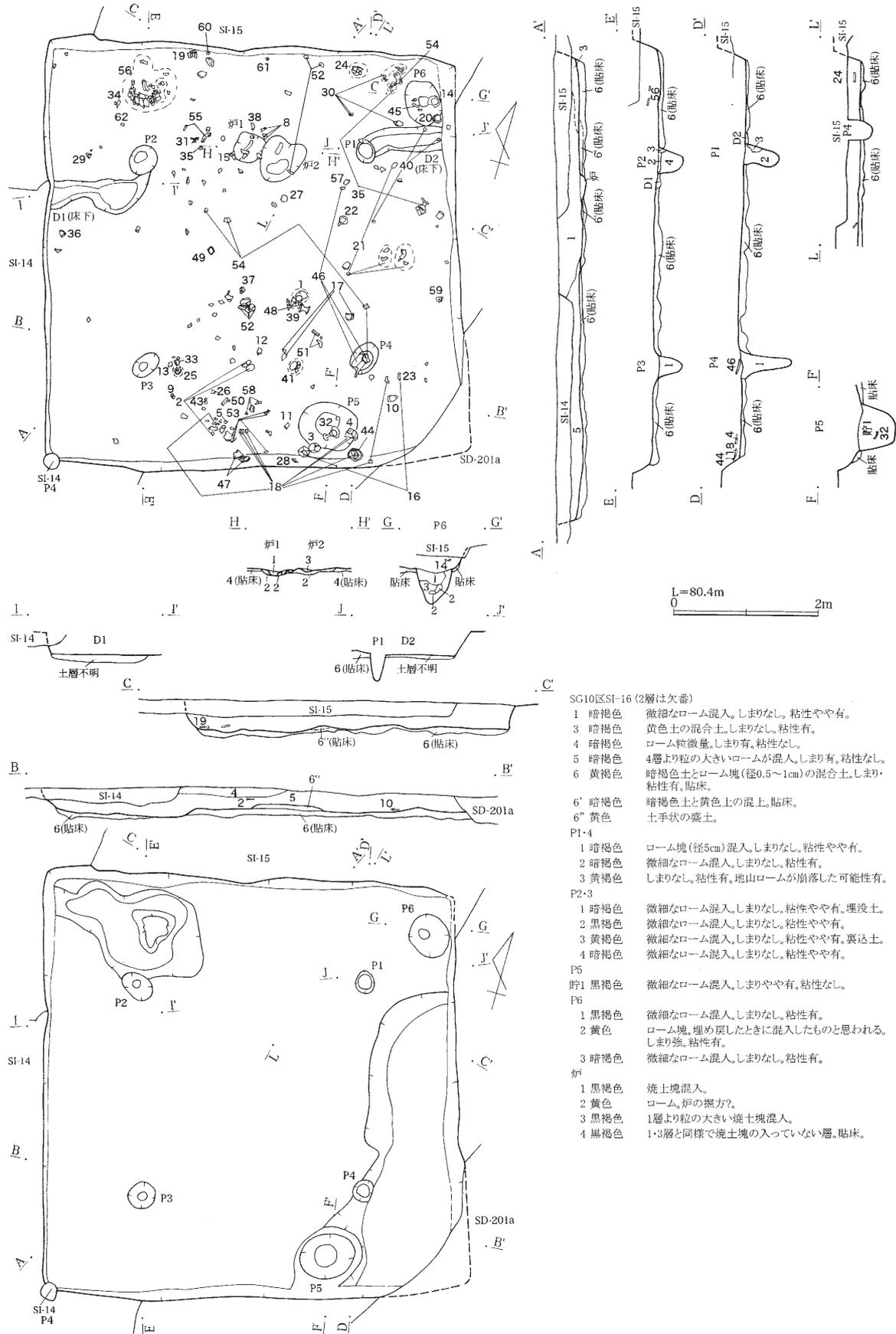
SG10 区 SI-16 (第 31～33 図、写真図版 76・190・191)

【位置】 SG10 区南部の 18-17 グリッド。古墳中期の建物は西に SI-19、南東に SI-30 がある。古墳後期の SI-14・15 と近世の SD-201a に切られる。

【規模と形状】 東西 5.82 × 南北 6.04m の正方形で、中軸線は N-15° -W。残存壁高は 12～32cm。掘方は床面から深さ 4～12cm で、周囲よりも北西部は 4～9cm ほど深く、南東部は 1～6cm ほど深い。

主柱穴は 4 本で、東西に少し長い方形に配置し、柱間は南北 2.90m × 東西 3.10m でほぼ一定している。床面からの深さは P1=46cm、P2=49cm、P3=54cm、P4=74cm で P4 だけが深い。北側の主柱穴 P1 と P2 に付随するように間仕切溝があり、壁際まで繋がる。2 箇所ともに貼床除去後に確認した。断面「U」字状で、平均幅 35cm・床面から深さ 4～6cm だが、北西部の間仕切溝は最大幅 47cm・深さ 10cm の部分もある。

貯蔵穴は 2 箇所ある。北東にある P6 は埋め戻した旧期貯蔵穴で、南東にある P5 が新时期貯蔵穴と考えられる。どちらも底面は丸みがあり、壁面は緩く外へ開く。P5 は楕円形で径 78 × 64 × 深さ 41cm、覆土は単層で土師器高杯などが流入している。P6 は径 62 × 49 × 深さ 47cm の少し角張った楕円形で、10cm 大のローム塊を含む覆土で埋め戻した土の中にも土師器破片が少量混入し、埋め戻した上面には土師器杯(14・20)や土師器破片が数点ある。貯蔵穴が複数ある建物跡は、SG10 区では SI-6 などがある。



- SG10区SI-16 (2層は欠番)
- 1 暗褐色 微細なローム混入。しまりなし。粘性やや有。
 - 2 暗褐色 黄色土の混合土。しまりなし。粘性有。
 - 3 暗褐色 ローム粒微量。しまり有。粘性なし。
 - 4 暗褐色 4層より粒の大きいロームが混入。しまり有。粘性なし。
 - 5 暗褐色 暗褐色土とローム塊(径0.5~1cm)の混合土。しまり粘性有。貼床。
 - 6 黄褐色 暗褐色土と黄色土の混土。貼床。
 - 6' 暗褐色 土手状の盛土。
 - 6'' 黄色
 - P1-4
 - 1 暗褐色 ローム塊(径5cm)混入。しまりなし。粘性やや有。
 - 2 暗褐色 微細なローム混入。しまりなし。粘性有。
 - 3 黄褐色 しまりなし。粘性有。地山ロームが崩落した可能性有。
 - 4 暗褐色
 - P2-3
 - 1 暗褐色 微細なローム混入。しまりなし。粘性やや有。埋没土。
 - 2 黒褐色 微細なローム混入。しまりなし。粘性やや有。
 - 3 黄褐色 微細なローム混入。しまりなし。粘性やや有。裏込土。
 - 4 暗褐色 微細なローム混入。しまりなし。粘性やや有。
 - P5
 - 1 黒褐色 微細なローム混入。しまりやや有。粘性なし。
 - P6
 - 1 黒褐色 微細なローム混入。しまりなし。粘性有。
 - 2 黄色 ローム塊。埋め戻したときに混入したものである。しまり強。粘性有。
 - 3 暗褐色 微細なローム混入。しまりなし。粘性有。
 - 炉
 - 1 黒褐色 焼土塊混入。
 - 2 黄色 ローム。炉の掘方?
 - 3 黒褐色 1層より粒の大きい焼土塊混入。
 - 4 黒褐色 1-3層と同様に焼土塊の入っていない層。貼床。

第31図 権現山遺跡 SG10 区 SI-16 (1) 遺構

[炉] 北側主柱穴の中間で東西に並んで地床炉が2基ある。両者の前後関係は明らかに出来なかったが、貯蔵穴が2時期あることと関係するのであろうか。西側の炉1は床を少し深く掘って37×46×深さ9cm。東側の炉2は58×66×深さ5cmで、覆土の上部に焼土塊があるので床面レベルで火を焚いたのかもしれない。西側の炉1の上面付近に自然礫が1点ある。

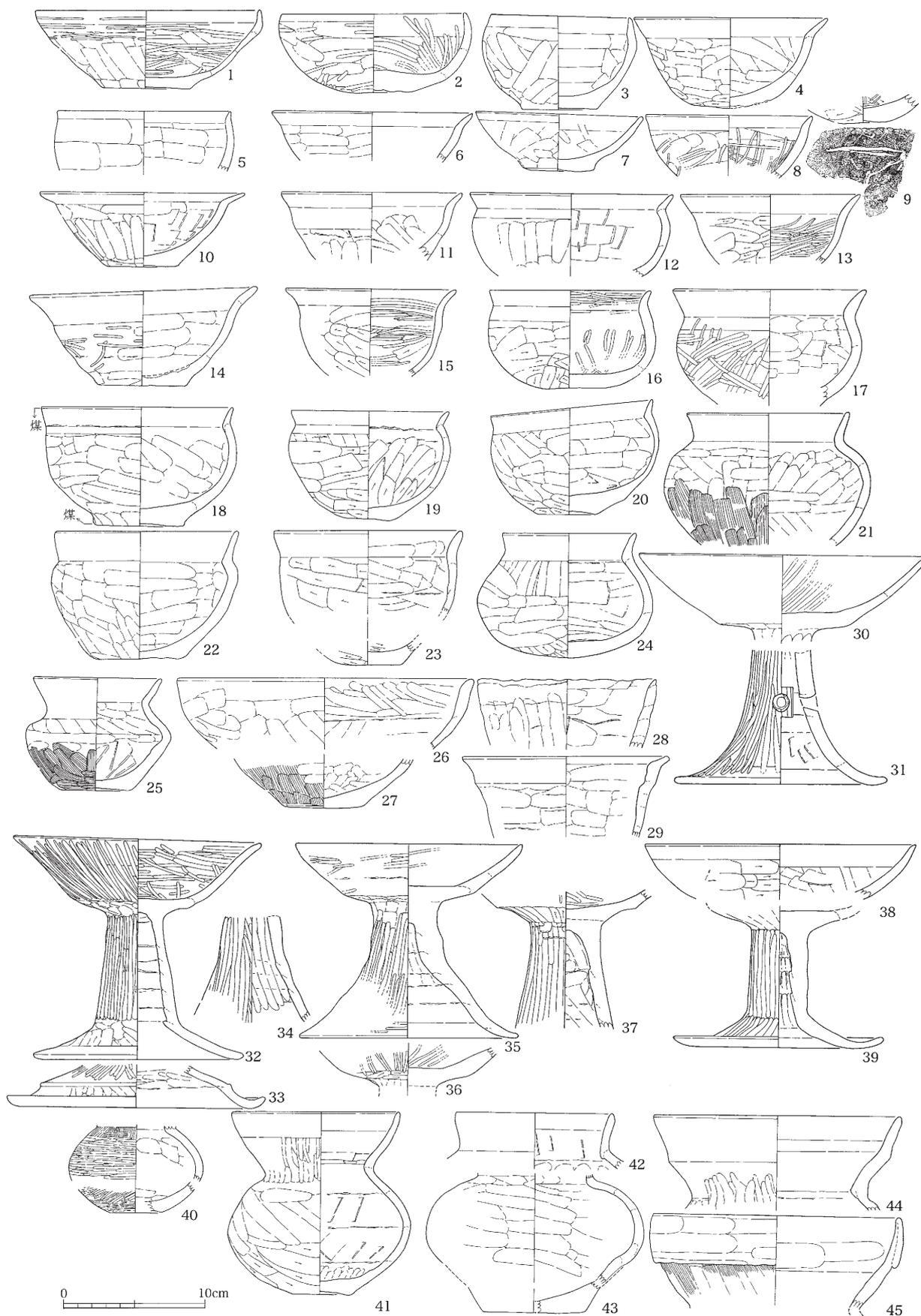
[覆土] 自然埋没状である。白色テフラ粒などは認められない。

[遺物出土状況] 全域に多いが、西壁付近では遺物が少ない。二重口縁壺(46)は、破片の多くがSI-16の床面とP4内の上半にあるが、東方にあるSI-30の床面から10数cm浮いた状態で接合する破片が出土した。中形の貼付口縁壺(45)はSI-15に2片が流入している。54は破片が広くみられ、南東主柱穴の埋土中にも1片ある。北西部で床から少し上方に残存度の高い甕(56)がある。

[出土遺物] 外面に煤の付いた土師器が目立つ。口縁が外に開く椀形杯が多い。1は内外面の横位ヘラミガキが特徴で、SG5区SD-227の7に似る。7は平底の粗製杯。31は脚部に孔を持つ高杯で、SG10区SI-25などに例がある。40は精製品の小形壺。44と46は二重口縁。貼付口縁の壺(45)はSG5区SI-100などに例がある。56は外面上半に吹きこぼれ痕跡が残る。凸面底の甕(57)は本遺跡SG5区SI-5・29やSG10区SI-16・50・53にあり、周辺では成願寺遺跡16号住居跡(篠原他2000)や立野遺跡5区SI-21(内山2005)などにも見られる。また、尖底状の甕がSG10区SI-88にある。軽石質の砥石が北壁際で3片出土し、1点を図示した(60)。軽石質の砥石は、SG10区SI-64aとSG5区SD-101にある。本遺跡北部のSG1区SI-7(『東谷・中島地区遺跡群』10)や、立野5区SI-29・中島笹塚6区SI-34などにもある(『東谷・中島地区遺跡群』5・9)。図示以外の土師器合計814片・6,646gの内訳は、杯484片・2,438g、高杯66片・820g、鉢3片・33g、小形壺12片・126g、壺甕類241片・3,229g。

第20表 権現山遺跡SG10区SI-16出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復15.6 高 5.5 底 6.2 重 残209.4	口縁部内外面が弱い稜を持って直立気味に上がる。外底面は多方向ヘラケズリ、外面体部タテヘラナデ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向のヘラケズリ後ミガキ、体部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデ後に口へ体部ヨコヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白粗～細粒と黒細粒 やや多、赤・透明粗～細粒少 やや軟質	中央南寄り床上2～6cm ほぼ完形 口全周、底全周 92、102、103
2 土師器 杯	口 12.8 高 5.5 最大 13.4 重 残235.8	外面は全体をやや雑にナデた後に口縁部ヨコナデ。口縁部と体部に疎らなヨコヘラミガキ。内面は体部ナメナデと口縁部ヨコナデの後に体部をナメヘラミガキ。体部外面に5×10cm大の黒斑あり。 [注記]97、137、南東、貼床(北東～南東)	2.5YR7/3 浅黄 粗い、白・灰色礫と白・赤・黒粗～細粒 やや少 やや軟質	南部床上14～23cmと 南東部5片が接合 口3/4周、底全周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 9.7 高 6.6 底 5.2 最大 10.7	外底面は2～3方向のヘラケズリ後ナデ。外面体部に斜～横位ナデ、内面体部に主として横位のナデ。内外面口縁部ヨコナデ。残存重量192.9g。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒・赤・透明粗～細粒少 硬質	P5付近壁際床上8cm ほぼ完形 口11/12周、底全周122
4 土師器 杯	口 13.5 高 6.4	内面の口へ体部境に弱い稜あり。外底面と体部下位は円周方向のヘラケズリでやや凸面状。外面体部に横～斜位ナデと内面体部に斜位ヘラナデの後、内外面口縁部ヨコナデ。外面に8cm大の黒斑あり。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	P5内で13片が接合 口7/12周、底全周119直上、119貯蔵穴、119貯蔵穴直上、P5-1層
5 土師器 杯	口 復12.0 高 残4.2 最大 復12.5	頸部の屈曲は外面で弱く、内部では明瞭。内外面ともに磨滅のため調整が不明瞭。内外面の体部をナデ後、口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・透明細粒やや多、赤・灰色粗～細粒少 やや軟質	南部床上15cmで2片、 南東部で5片 口1/3周 34、南東
6 土師器 杯	口 復14.0 高 残3.5	内面口へ体部境に稜あり。外面は体部にヨコヘラナデまたはヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は剥離が著しいため調整が不明瞭。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北西部・東部・西部で 出土 口1/5周 北西・東・西
7 土師器 杯	口 復11.6 高 4.1 底 4.9	粗製の杯。外面は体部ナメナデ後に口縁部ヨコナデ。外底面は比較的平で、2方向程度のヘラナデ。内面はやや雑な多方向ヘラナデを、口縁部ヨコナデより後で施す可能性あり。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、白・黒粗～細粒少 硬質	南西部4片と東部1片が接合 口1/72周、底3/4周 南西、一括(東)
8 土師器 杯	口 復11.6 高 残4.4	薄く軽い。外面体部ナデ後にやや偏ったナメヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデ後、主に放射状と一部に横位のヘラミガキ。内外面口縁部に煤が少量付着。	2.5Y6/2 灰黄 やや緻密 白・透明粗～細粒多、黒・灰色粗粒少 やや硬質	北部床上17～18cm 口2/3周 21、22
9 土師器 杯	高 残2.0 底 3.0	外底面は円周方向のヘラケズリで少し上げ底状にし、焼成前に深く鋭い線刻を2本描く。体部外面に横～斜位ヘラケズリ。内面は底部を1方向ヘラケズリ後に多方向のやや粗いヘラミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤・透明粗～細粒少 やや硬質	南西部床上11cmと南東部遺構確認面の各1片が接合 底全周149、南東上面
10 土師器 杯	口 復14.3 高 5.2 底 4.8	内面口へ体部境に稜あり。外底面は1方向ナデ。外面体部タテナデ後に下端ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面上位に煤少量付着。 [注記]113、P5-1、P5-1層、一括(東)	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白粗～細粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	南東隅床上4cmとP5底上19cm。東部の1片が接合 口1/4周、頸12周、底全周 注記は左欄
11 土師器 杯	口 復12.6 高 残4.8	内面の口へ体部境に稜あり。外面体部はナデで組積み痕を残す。内面体部はナデとヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR7/8 橙 やや緻密 赤・黒・透明粗～細粒やや多 やや硬質	南東部床上4cm 口5/12周 114



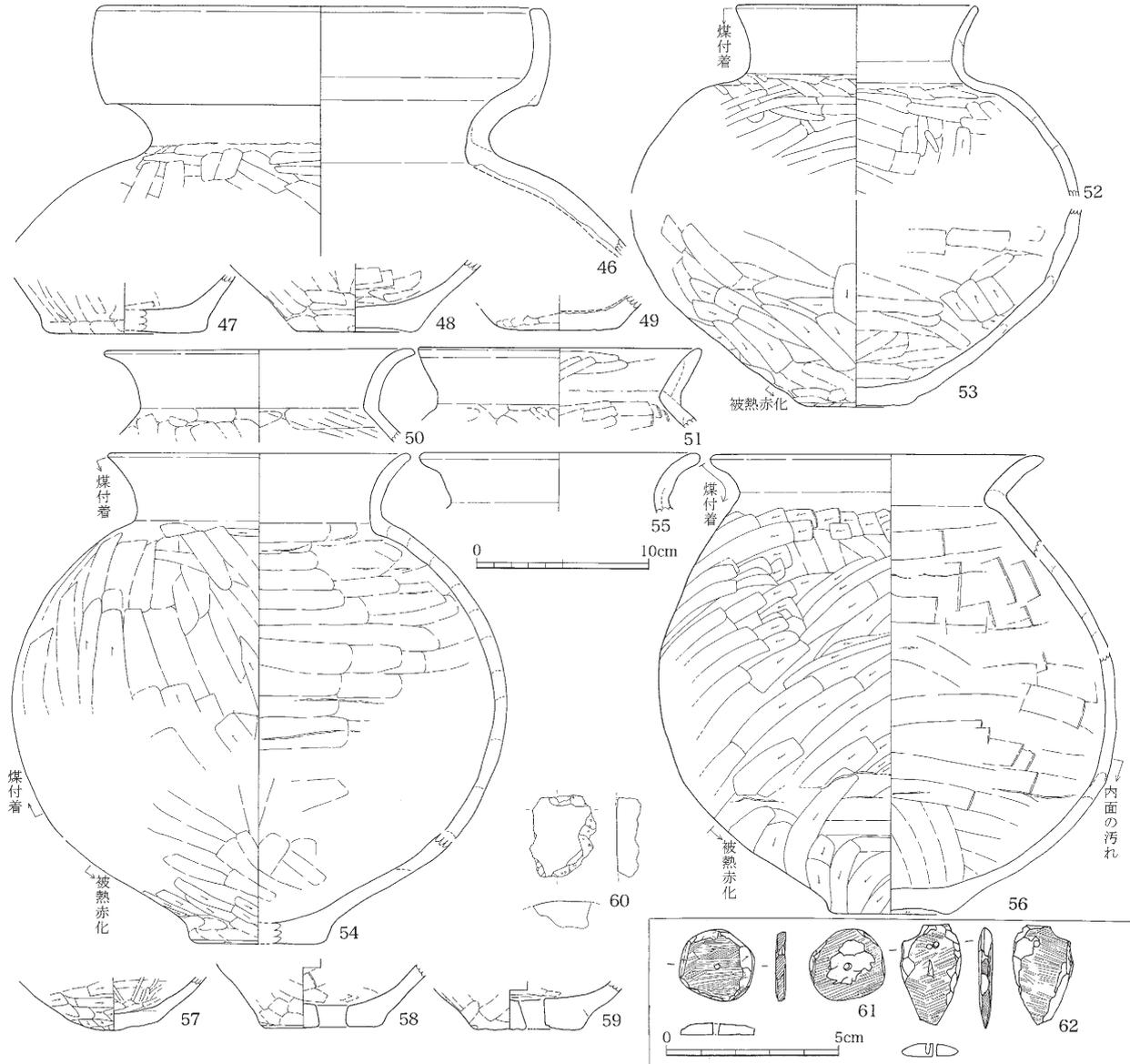
第32図 権現山遺跡 SG10区 SI-16(2) 遺物

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

12 土師器 杯	口 復 14.1 高 残 5.4	体部は外面タテヘラナデ、内面にやや雑なヨコヘラナデ。外面の口～頸部と内面口縁部にヨコナデ。外面体部に少量の煤付着。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 赤粗粒多、白・黒・赤・透明細粒少 やや硬質	南部床土 20cm。南東と東部に各 1 片 口 1/6 周、頸 1/4 周 98、99、南東、東
13 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 4.9	内面の口～体部境に弱い稜あり。内外面口縁部ヨコナデ。外面体部にヨコヘラナデ。内面体部に密なヨコヘラミガキ。	10YR7/6 明黄褐 緻密 白細粒と赤・透明粗粒少 やや硬質	南西部床土 11cm 口 1/6 周 82
14 土師器 杯	口 15.8 高 6.2～7.1 底重 6.0 残 295	外底面は平底でナデ調整。外面体部ナデと口縁部ヨコナデ後、上半部にヨコヘラミガキ。内面は体部ナデと口縁部ヨコナデ。内面底部は器面が斑状に剥離する。外面底部に 8cm 大の黒斑あり。外面上位に少量の煤が付着。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白粗～細粒やや少、赤・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	P6 底直上で正位 口 5/6 周、体全周 44
15 土師器 杯	口 復 11.9 高 残 6.1	外面は体部の上位にナデと下位に横～斜位ヘラナズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメヘラナズリ後にヨコヘラミガキ。 [注記]16、Aトレ、東、SI-15 南西、SI-15・16Cトレ西	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央北寄り床土 14cm。 東の 1 片も接合。SI-15 にも混入 口 1/8 周、頸 1/4 周 注記は左欄
16 土師器 杯	口 11.2 高 7.0 最大 11.7 重 残 235.5	頸部は内面に稜を持つが、外面は緩く外反する。外面は底部に 1 方向と体部下位に横方向のヘラナズリ。外面肩部ナデ、内外面口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向、体部に縦位、口縁部に密な横位のヘラミガキ。外底面に 6cm 大の焼成時の黒斑あり。 [注記]112、123、P5-1、P5-3	10R6/8 赤橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	南東部床土 3～14cmと P5 底土 19～48cmが接合 口 5/6 周、体 3/4 周、 底全周 注記は左欄
17 土師器 杯	口 復 13.5 高 残 8.2	外面体部はナデまたはヘラナデの後に斜～横位ヘラミガキ。内面体部はヨコヘラナデで、頸部はやや強い断続ヨコナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面全体に煤がやや多く付着する。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 硬質	南東部床土 2cm 口 5/12 周 104
18 土師器 杯	口 13.3 高 8.3 底重 6.2 残 319	外面頸部に紐積み痕を若干残す。外底面は丁寧なナデで少し上げ底状。内外面ともに体部ナデ後、口～頸部ヨコナデ。外面口～体部の全体に煤が明瞭に付着し、外底面は煤がなくやや赤褐色。 [注記]114、120、129、139、P5-1層、P5-2、南東	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・透明細粒少 やや軟質	南東部床土 4～24cmと P5 底土 48cmが接合 口 3/4 周、体部ほぼ全周 注記は左欄
19 土師器 杯	口 10.9 高 7.7 底重 3.4 最大 11.2	薄く軽い。外底面はナデで平底。外面肩部タテナデ後に体部ヨコヘラナズリ。内面体部ナメヘラナデ後に下半部を縦～斜位ヘラナズリ。内外面の口～頸部をヨコナデ。残存重量 171.2g。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色・透明粗～細粒やや少、赤・黒細粒少 硬質	北西部壁際床土 6cm 口 3/4 周、底全周 6、北西
20 土師器 杯	口 11.3 高 7.5 底重 4.1 残 237.2	体部が薄い。外底面は円周方向の雑なヘラナズリで上げ底状。外面は体部ナデ後に下位をナメヘラナズリ。内面は底部多方向ヘラナデ、体部ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内外面全面が黒色化している。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒やや多、黒・灰色・透明粗～細粒少 やや硬質	北東壁際床土 5cmで正位 ほぼ完形 口 11/12 周、底全周 45
21 土師器 杯	口 11.2 高 9.3 最大 14.3	やや厚くて重い。外面体部上半ナデと下半タテハケ。内面体部は斜～横位ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面上半に煤が多く付着する。欠損している底部周辺が被熱していた可能性もある。 [注記]36、54、55、57、106、東、北西、一括(東)	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・灰色粗～細粒と赤・黒・透明細粒少 やや硬質	東部床土 3～18cmが接合 口 5/6 周、肩 2/3 周 注記は左欄
22 土師器 杯	口 復 12.8 高 9.0 底重 6.2 最大 13.1	外底面は多方向ヘラナデの後に 1 方向ナデ。外面体部に横～斜位ヘラナデと内面体部にナデの後に、内外面口縁部ヨコナデ。外面は不規則な被熱痕と煤が全体に見られる。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 白・赤・灰色粗～細粒多、灰色礫と黒・透明粗～細粒少 やや軟質	中央東寄り床土 7cm 口 1/4 周、体 1/2 周、 底全周 58、東
23 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 7.8 底重 4.2	体部下位を接合できない。外底面は多方向ヘラナズリ。外面体部ナメヘラナズリ。内面は底部に多方向の雑なヘラナズリ、体部にナメヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 粗い 白・透明粗～細粒多、赤・黒細粒少 硬質	南東部床土 3cm 口 1/3 周、底 3/4 周 112、南東、北西
24 土師器 鉢	口 9.2 高 8.8 最大 12.2	外面肩部タテナデ。外面底部に多方向と体部に横位のヘラナズリ後、体部ヨコヘラナデ。内面体部ヨコヘラナデと肩部ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面口縁部に煤(?)が少量付着。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤・透明粗～細粒やや多、白・黒細粒少 やや硬質	北東壁際床土 8cm 口 7/12 周、体部ほぼ完形 29
25 土師器 鉢	口 復 9.0 高 7.9 底重 4.8 最大 10.1	肩部の角度が場所により異なる。外底面は多方向のヘラナデと浅いハケメでやや上げ底状にする。外面肩部ナメナデと体部ヨコナデ、下位に浅いタテハケ、下端に浅いヨコハケ。内面は底部にヨコヘラナデ、肩部ナメナデ。内外面口縁部ヨコナデ。27と同工品。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・灰色・透明粗～細粒少 やや硬質	南西部床土 3cm 口 1/8 周、肩 7/12 周、 底全周 80
26 土師器 鉢	口 復 20.6 高 残 4.5	口縁部が厚くて歪みもあり、全体の作りがやや雑。外面体部はやや雑なナデ。外面口縁部と内面を横～斜位のナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・赤粗～細粒やや多、透明粗～細粒と黒細粒少 硬質	南部床土 17cm 口 1/5 周 145、南東
27 土師器 鉢	高 残 3.5 底重 5.4	外底面は多方向のヘラナズリで弱い凸面状。外面体部はやや浅いタテハケ。内面は多方向ナデで底面中央が最も深く凹む。25と同工品。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、黒・灰色・透明粗～細粒少 やや硬質	中央部床土 6cm 底全周 59
28 土師器 粗製鉢	口 復 6.2 高 残 4.7	外面は体部にタテナデで、粘土紐積み痕をよく残す。内面はヨコヘラナデで、粘土紐積み痕を半分程残す。内外面の口縁部は雑なヨコナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・透明粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	南部壁際床土 8cmと南東部 2 片が接合 口 1/3 周、口～体 1/3 周 124、南東
29 土師器 粗製鉢	口 復 14.4 高 残 5.7	体部外面はコピオサエで粘土積み上げ痕を少し残す。体部内面はやや丁寧なナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	2.5Y8/3 淡黄 やや緻密 白・赤・透明粗～細粒と灰色礫・黒細粒少 やや硬質	北西部床土 17cm 口 1/12 周、体 1/6 周 69
30 土師器 高杯	口 復 20.2 高 残 6.2	外面は杯体部が磨滅して調整不明。杯底部に放射状と脚部に縦位のヘラナズリまたはヘラナデ。内面も磨滅して不明瞭だが、杯体部にナメヘラミガキの痕跡あり。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 軟質	北東隅床直上～床土 21cmが接合 口 5/12 周、杯底 1/2 周 30、35、38、40、41
31 土師器 高杯	高 残 9.4 脚裾 復 14.9	内面は輪積痕を残し、上部コピナデと下部ヨコヘラナデ。内外面の脚裾部ヨコナデ。外面タテヘラミガキ。焼成前に 2 方向に穿孔し、対面の孔は図示したもより 9mm 下位にある。孔縁部はヘラナズリ。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・透明細粒と赤粗～細粒少 やや硬質	中央部床土 6cm 脚柱全周、脚裾 1/36 周 59
32 土師器 高杯	口 17.5 高 16.9 脚裾 14.6	脚柱部は倒立状態で半時計回りに巻き積みする。外面の杯底部と脚部下位に斜放射方向のヘラナズリ後ナデと脚裾部ヨコナデ。外面脚部タテヘラナズリ後タテヘラミガキ。杯部は口縁部ヨコナデ後に外面ナメヘラミガキ、内面横～斜位ヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒やや多、白・赤粗～細粒少 やや硬質	P5 底土 19cmで斜位 口全周、脚裾 2/3 周 P5 No. 1、南東
33 土師器 高杯	高 残 3.0 脚裾 復 18.0	脚部外面に 3mm 弱の段差を作る。外面はヨコナデ後に縦～斜位ヘラミガキ。内面はヨコナデで、積み上げ休止部がある段状部にはナメナデ。内面全体に薄く煤が付着する。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗粒と白・黒透明細粒少 やや硬質	南西部床土 10cm。南東部にも 1 片あり 脚裾 1/5 周 81、南東
34 土師器 高杯	高 残 7.4	外面は密なタテヘラミガキ。内面は倒立状態で反時計回りの巻き積み痕を少し残し、下部はヨコナデ、上部は棒状工具によるタテナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒やや多、黒・透明細粒少 硬質	北西隅床土 12cm 脚柱全周 2

第5章 権現山遺跡 SG10 区

35 土師器 高杯	口 復 15.8 高 13.8 脚裾 15.2	外面は杯部にヨコヘラミガキ、杯底部に放射状のヘラナデ（ヘラケズリ？）、脚部にタテヘラケズリ後タテヘラミガキ、裾部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。脚内面には倒立状態で反時計回りの巻き積み痕を残し、コビオサエと裾部ヨコナデ。杯内面は上半にヨコヘラミガキ痕がわずかに残り、下半は調整不明。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・赤粗～細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	東部床上 20cm。北東隅床上 5cmの 1 片も接合 口 1/6 周、杯底 1/2 周、脚全周、裾 2/3 周 39、52
36 土師器 高杯	高 残 2.9	外面は杯底部に放射状ヘラナデ後、外周をヨコヘラケズリして杯体部タテヘラミガキ。内面は杯底部に多方向のヘラケズリ後ヘラミガキ、杯体部はナデ後にナメヘラミガキ。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白細粒少 やや硬質	西壁際床上 8cm 杯底 1/6 周、脚 3/4 周 77
37 土師器 高杯	高 残 10.0	脚柱部の巻き積み方向は不詳。外面は杯体部ナデ後タテヘラミガキ、杯底部放射状ヘラケズリ、脚柱部タテヘラミガキ。内面杯底部に多方向ヘラミガキ。内面脚柱部ナメナデ。	5YR6/6 橙 緻密 白・黒・透明細粒と赤粗～細粒少 硬質	中央部床上 17cm と南東部床上 20cm が接合 杯底 1/6 周、脚柱 1/2 周 91、99
38 土師器 高杯	口 復 18.8 高 残 3.9	外面にヨコヘラケズリと内面にやや雑なナメナデの後、内外面口縁部にヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	北部床上 15cm 口 1/6 周 20
39 土師器 高杯	高 残 9.6 脚裾 復 14.6	外面は杯底部に放射方向のナデ、脚柱～裾部にタテヘラケズリ後タテヘラミガキ。杯内面は底部に多方向ナデ。脚柱部内面は絞目状の皺を多く残す。脚裾部内外面ヨコナデ。	5YR7/8 橙 やや緻密 白・赤・黒・透明粗～細粒やや少 やや硬質	中央南東部床上 4cm で横位。北東・北西・東の各 1 片も接合 脚柱全周、脚裾 1/6 周 101、北東、北西、東
40 土師器 小形壺	底 復 3.7 最大 復 9.4	精緻な作り。外底面は凹み底。外面肩部タテハケ後、外面体部全体と外底面に丁寧に密なヘラミガキ。内面は体部ナメヘラナデ、肩部ユビオサエ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 灰色粗粒と白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東部床直上～床上 6cm 頸 1/2 周、底 1/4 周 46、49、152
41 土師器 小形壺	口 11.8 高 13.0 底 3.9	外底面は少し抉るようなヘラケズリで凹み底にした後、軽いナデ。外面は体部にナメヘラケズリ後、上半部ナメヘラナデ。内面は底部に 1 方向ナデ、体部にヨコおよびナメヘラナデ、肩部ナデ。頸部は外面に縦位と内面に横位のヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・透明粗～細粒多、赤・黒細粒少 やや硬質	南部床上 10cm 口 7/12 周、体全周 100
42 土師器 短頸壺	口 復 10.9 高 3.9	内面の肩部ユビオサエと頸部ヨコヘラナデ、内面口縁部と外面口～肩部ヨコナデ。	7.5YR4/2 灰褐 やや緻密 赤・白粗～細粒やや多、黒・透明粗～細粒少 硬質	南東部 口 1/6 周、肩 1/4 周 南東部
43 土師器 壺	高 残 9.9 最大 復 14.4	底部破片が小片で体部に接合できないので、体部の高さは想定。外底面は 1 方向ヘラナデ。体部は内外面ともにナメヘラナデ。 [注記]144、東、南東、一括(東)、A トレ、北西、南東 1 層	7.5YR7/3 にぶい橙 やや粗い 赤・白粗～細粒やや多、黒・透明粗～細粒と灰色礫少 やや硬質	南部床上 17cm。東部 4 片と南東部 1 片が接合し、北西にも 6 片あり 胴 1/3 周 注記は左欄
44 土師器 壺	口 17.3 高 残 6.6	口縁部はごく弱く受口状にする。内外面の口～頸部ヨコナデ後、外面胴部に施す縦位のやや強いヘラナデが、頸部の途中まで及んでいる部分がある(図の外面部)。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・透明粗～細粒と赤粗～細粒少 やや硬質	南東壁際床上 3cm 口～頸全周 121
45 土師器 壺	口 復 17.4 高 残 6.5 最大 復 17.6	頸部下端で欠損する。外面は頸部ナメヘラケ後後にナメナデ、その後外面を貼付口縁にしてヨコナデ。内面は丁寧にヨコナデし、口縁部はかすかに内彎する。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・透明細粒多、白礫と黒細粒少 やや硬質	P6 底上 5cm。SI-15 に 2 片混入 口 1/2 周 SI-16 P6 No. 1、SI-15 34、北東
46 土師器 大形壺	口 復 25.9 高 残 14.3	外面肩部ナメナデ、内外面口～頸部ヨコナデ。内面胴部は器面が剥落して調整不明。胴部が 8 片あるが、復原・図示できない。 [注記]SI-16 33、116、SI-30 42、128、東 16 層、南西 2 層	5YR9/8 橙 やや粗い 黒・透明粗～細粒多、白・灰色細粒やや少 やや軟質	南東部床直上。北東部にも 1 片。SI-30 の北西床上 16cm、貯蔵穴底上 17cm。東部にも 7 片 口 1/3 周、頸 5/12 周 注記は左欄
47 土師器 大形壺	高 残 4.2 底 6.7 最大 残 14.4	外底面は多方向ヘラケズリでやや上げ底。外面下端部ナデと胴部タテヘラナデ。内面多方向ヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・透明礫～細粒多、黒・灰色粗～細粒少 やや硬質	南部壁際床上 24cm 底全周 129
48 土師器 大形壺 または甕	高 残 3.4 底 復 8.4	外底面は多方向に軽くヘラケズリする。外面胴部ナメヘラナデ(一部ヘラケズリ)。内面底部多方向ヘラナデ。被熱痕は見られない。	7.5YR7/8 黄橙 やや緻密 白・透明細粒やや少、赤・黒細粒少 やや軟質	中央南東寄り床上 3cm 底 1/3 周 102
49 土師器 大形壺	高 残 1.9 底 7.0 最大 残 9.5	外底面は多方向ヘラケズリで丸みを持つ。外面胴部下端にやや雑なナデ。内面は剥落して調整不明。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白粗～細粒やや少、黒・透明細粒少 やや硬質	中央床上 16cm 底全周 74
50 土師器 甕	口 復 17.8 高 残 5.3	外面肩部ナメナデ後、口縁部ヨコナデ。内面は肩部に粗いナメヘラケ(?) 後ヨコナデ、口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤・透明粗～細粒やや少、黒細粒少 硬質	南部床上 19cm 口 1/6 周、頸 1/4 周 132
51 土師器 甕	口 復 16.1 高 残 4.7	内外面の肩部にナメヘラナデ。外面は口縁部ヨコナデで、外面上端を狭い幅で少し強くナデ。内面は口縁部ナメナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒やや少、黒・透明細粒少 やや軟質	南東部床上 4cm 口 1/12 周、頸 1/3 周 151
52 土師器 甕	口 復 14.0 高 残 11.1	外面は肩部ヨコヘラナデ、内面は肩部ナメナデ後に少しタテヘラケズリ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面全面に煤付着。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 白・黒・灰色・半透明粗～細粒やや少 やや硬質	中央南寄り床上 2cm 口 1/2 周、肩 1/3 周 92、東
53 土師器 甕	高 残 11.5 底 6.2 最大 残 26.0	外底面は多方向ヘラケズリで緩い凸面状。内外面ともに斜～横位ヘラナデ後、積み上げ休止部の厚くなった部分をねらってナメヘラケズリ。外面の底部とその周辺が被熱赤化し、胴部に煤が少量付着。 [注記]24、27、28、126、129、南東、北東、北西	7.5YR4/4 褐 粗い 白・赤・灰色礫～細粒多、黒・透明粗～細粒やや多 やや軟質	南部と壁際の床上 24～31cm が接合。北東部床上 12～13cm や北西部に小片あり 胴下半 1/3 周、底 3/4 周 注記は左欄
54 土師器 甕	口 復 17.4 高 復 28.3 底 復 7.4 最大 28.6	外底面は雑な多方向ヘラケズリ。外面胴部は縦～斜位のヘラナデ後ヘラケズリ。内面は底部多方向ナデ、胴部ヨコヘラナデ、肩部は時計回りの紐積み痕を残しながらユビオサエ。口～頸部の内外面にコビナデ。外面の下位～底部が被熱し、中位以上に煤付着。 [注記]32、33、40、72、73、90、105、116、東一括、北西	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・灰色粗～細粒やや少、赤・透明粗～細粒少 やや硬質	北東床直上～床上 13cm、中央部床上 10～14cm、南東支柱穴底上 66cm。 SI-14・15 にも混入 口～頸 1/3 周、底 5/12 周 注記は左欄
55 土師器 甕	口 復 16.1 高 残 3.6	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面は器面が薄く剥落している。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・黒粗～細粒と透明細砂やや少 やや硬質	北西床上 11～26cm 口 5/12 周、頸 3/4 周 11、13



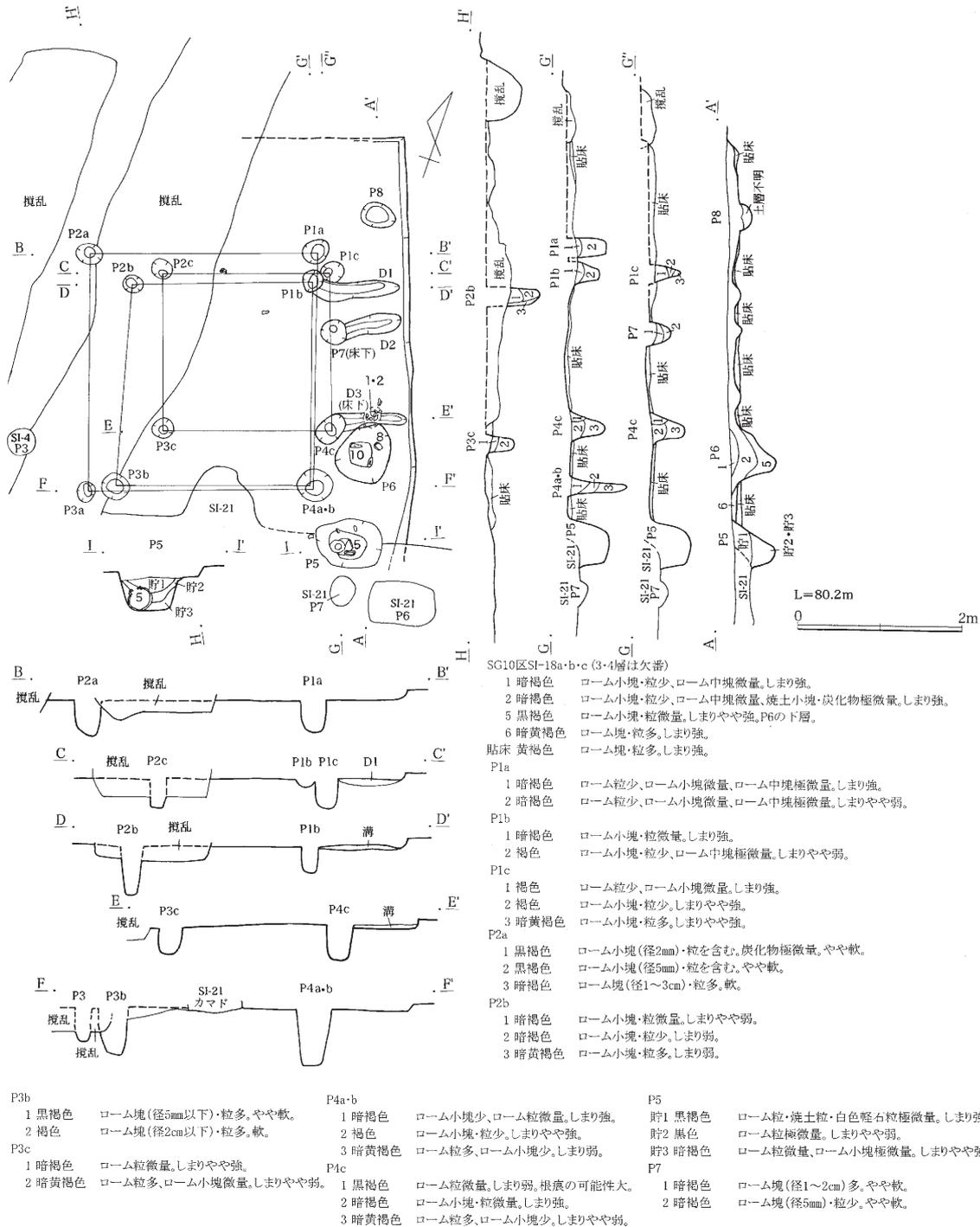
第33図 権現山遺跡 SG10区 SI-16(3) 遺物

56 土師器 甕	口 復 19.2 高底 26.5 底 6.8 最大 26.3	外底面は1方向ヘラケズリで凹み底。外面胴部はヘラナデ後にナメヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面は胴下位～底部が弱く被熱し、それより上方は煤が付着して口～肩部には吹きこぼれた流れの痕が見える。内面は下位にコケ痕が付着。 [注記]SI-16 4、5、SI-14 15、131、東、Aトシ、南西、一括(東)	10YR3/1 黒褐 粗い、白礫～細粒多、赤・黒・透明細粒少 やや硬質	北西部床上 14cm。中央北寄りや東部に小片あり 口1/2周、頸7/12周、底全周 注記は左欄
57 土師器 甕	高 残 3.0	外底面は多方向ヘラケズリで凸面状にする。外面胴部にヨコヘラケズリ。内面は底部中央を凹ませるような少し強いヘラナデと、体部に横位ナデ後タテヘラナデ。被熱痕の有無は不詳。	10YR5/2 灰黄褐 やや粗い、白・灰色礫～粗粒多、赤・透明粗～細粒と黒細粒少 硬質	北東部床上 13cm 底全周 32
58 土師器 小形甕	高 残 3.9 底 6.8	底面の一孔は、孔端面を軽いナデ。外底面は丁寧なナデ。外面の体部はナメヘラナデ、内面底部は多方向ヘラナデ。孔径 1.6～1.8cm。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い、白粗～細粒多、赤・黒粗～細粒少 やや硬質	南部床上 28cm 底1/2周 131
59 土師器 小形甕	高 残 2.8 底 6.2	底面の一孔は内面側から棒状工具で穿孔し、中心からずれている。外底面はナデ。外面体部はナメナデ、内面底部は多方向ヘラナデ。孔径 1.2～1.4cm。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 白・透明細粒少 やや硬質	東壁際床上 25cm 底全周 108
60 石器 砥石	長 残 4.6 幅 残 3.4 厚 残 1.6	極めて多孔質で、いわゆる「軽石」状の石材。水には浮かない。図示面の中央部を使用したと見られる。石材が粗いので研磨痕は不明。図示面の裏側と外周全体が破面。接合できない3片が出土したうち、最も大きな1片を図示した。重量 17.5g。	5Y4/1 灰 多孔質安山岩の溶岩 やや軟質	北中央壁際床上 10cm 1面だけ残存 7
61 石製模造品 有孔円板	長 2.13 幅 1.99 厚 0.36	両面はそれぞれほぼ1方向に研磨。側面全周は斜位に研磨する。特に左図の面は外周寄りに切削痕が残る。孔径は初孔 1.65～1.70mm、終孔 1.55～1.70mm。右図の面に穿孔剥離を広く生じる。重量 2.7g。	N3/(G) 暗灰 緻密で節理の発達した滑石片岩	北壁際床上直上 完形 26
62 石製模造品 剣形品	長 2.9 幅 1.69 厚 0.41 重 2.7	2孔中1孔は貫通しない。背面は2方向、腹面は1方向に研磨。背面に錆はない。側面は縦位にやや近い斜位に研磨し、頭部だけは横位研磨。全周に切削痕を残す。初孔・終孔ともに径 1.50～1.55mmで、途中で穿孔して隣に開け直し、裏面に穿孔剥離を生じる。	10Y3/1 オリーブ黒 緻密で節理の発達した滑石片岩	北西部床上直上 完形 3

SG10 区 SI-18a・b・c (第 34・35 図、写真図版 76・77・191)

[位置] SG10 区南部の 18-16 グリッドで SI-18c → b → a の順に拡張建替した 3 時期の建物。同じく古墳中期の SI-19 が南にある。古墳後期の SI-21 に切られる。SG5 区 SI-4 の北東主柱穴 P3 との関係は不明確で、中期の SG10 区 SI-18 → 後期の SG5 区 SI-4 の順を推定できる。西側は南北方向の攪乱溝で破壊される。

[規模と形状] 南北方向の中軸線は a・b・c 期ともに同様に N-19°-W。残存壁高は 13 ~ 15cm。ローム塊・粒主体の土で厚さ 4 ~ 8cm の貼床を施している。abc 各期の主柱穴や貯蔵穴を同じ床面で確認できたので、各期の床面レベルはほぼ同じである。貯蔵穴が複数ある建物跡は、SG10 区では SI-6 などがある。P1a ~ c



第 34 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-18a・b・c (1) 遺構

の北東にあるP8（床面から深さ15cm）は、a～b期のどの時期に伴うかよくわからない。ab期貯蔵穴P5のすぐ南にある柱穴はSI-21に伴うと考えられる（SI-21のP7）。

SG10区 SI-18a（第34・35図、写真図版76・191）

〔規模と形状〕 a期は、北壁・東壁と柱穴・貯蔵穴だけを確認した。残存規模は南北5.34m以上×東西4.20m以上で、支柱穴と壁の距離からみると、南北5.8m×東西5.2m前後の規模を推定できる。

a期の支柱穴は4本で、東西に少し長い方形に配置し、柱間は南北2.86m×東西2.75mではぼ一定している。床面からの深さは北東柱穴P1aと北西柱穴P2aが39cmと42cmで、南西のP3aは浅く（26cm）、南東のP4a・bが深い（62cm）。P4a・bはSI-18のa期とb期の両方に用いた柱穴であろう。南東支柱穴P4はb期と同じ位置で、他の3本を北～西方向に移動してb期からa期の建物へ拡張している。床面からの深さはP1a=44cm、P2a=46cm、P3a=38cm、P4ab=68cm。

a・b期の共用とみられる貯蔵穴P5は東西77×南北70×床面から深さ49cmで、調査開始時名称は「SK-295」としたが、SI-18のa・b期貯蔵穴と判明した。位置から見てc期貯蔵穴と考えられるP6は、a期竪穴と一連の土層で自然埋没した堆積状況なので、c期からa期まで開口していたことも考えられる。その場合、a・b期には貯蔵穴を2基使っていたことになる。SG10区ではSI-6などが複数貯蔵穴を持つ。

〔火処〕 残存していない。遺物からみて古墳中期の建物なので、炉を持っていた可能性がある。

〔覆土〕 遺構の残りが浅いので、1～2層程度を確認しただけである。新期貯蔵穴P5の上層に含む白色軽石粒は、古墳時代テフラの可能性もある。6層は、貯蔵穴P5・P6よりも古い層であるように図化・記録されているので、6層も貼床の可能性があろう。

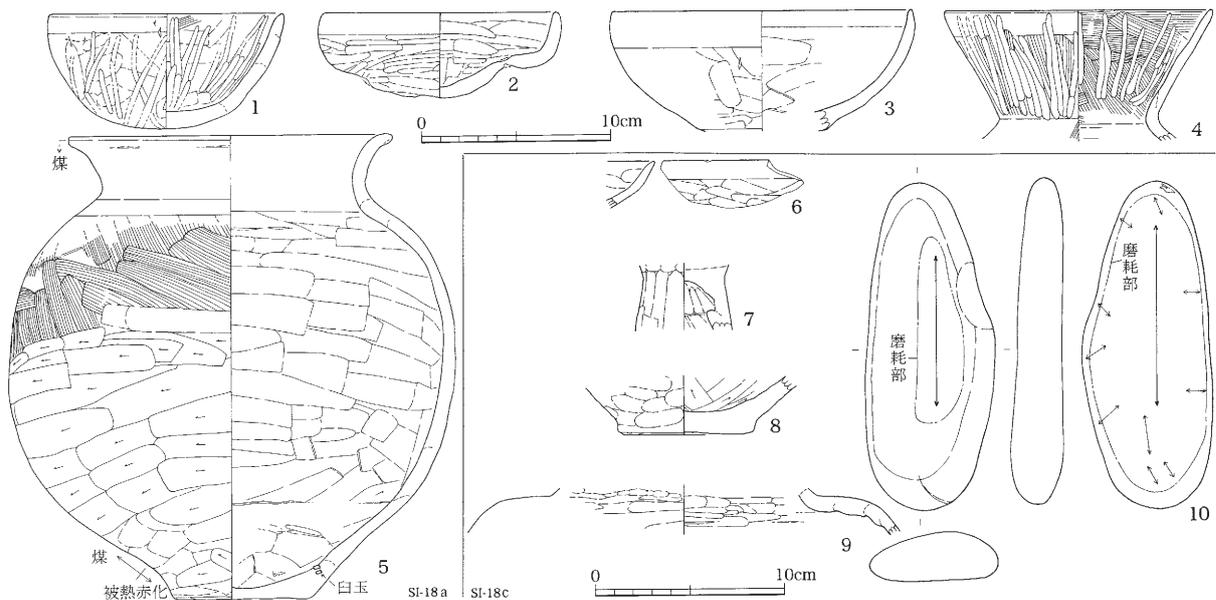
〔遺物出土状況〕 a・b期の貯蔵穴P5内に完形の土師器甕がある。P5の北方にも遺物が少しまとまる。

〔出土遺物〕 1～5がSI-18aの遺物である。杯は深身のもので、2も本来は深いとみられるが乾燥時に変形した器をそのまま焼成した不良品。5は甕の底付近に滑石製白玉1点があり、土器成形時の粘土中に混ざったものである。SG10区SI-30などに滑石製の玉がある。図示以外の土師器合計119片・970gの内訳は、杯37片・191g、高杯5片・66g、壺甕類77片・713g。

SG10区 SI-18b（第34図、写真図版76）

〔位置〕 SG10区SI-18aと同じ。

〔規模と形状〕 b期の規模は、支柱穴から壁までの距離を1.1m程度と仮定すると、一辺4.7m前後が想定さ



第35図 権現山遺跡 SG10区 SI-18a・b・c(2) a・c期遺物

第 21 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-18a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.2 高 6.1	体～底部の境は内外面ともに不明確。外面は底部に 1 方向と体部に斜～横位のナデ後、口縁部ヨコナデと体部ナメヘラミガキ。内面は横～斜位のナデと一部にハケメ後、底部に多方向と体部に縦位のヘラミガキ。 [注記]5、11、5 付近出土、カマド近辺	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・黒粗～細粒や やや多、透明粗～細粒少 やや硬質	南東部床上 4～10cm が 接合 口～体 1/2 周、底 5/6 周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 12.2 高 4.5 最大 12.7	全体の仕上げが粗く、底部は歪んで突出した丸底。本来はより深い形を製作したが、中位部分が段状に垂れ下がり、補正できなかったと見られる。外面は体部ナデ後に口縁部ヨコナデと体部上位ヨコヘラナデ。内面は体部が主にナデで、口縁部はやや雑なヨコナデ。 [注記]SI-18 5、8、9、5 付近、8 付近、SI-21 カマド、カマド近辺	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒と 白細粒少 やや硬質	南東部床上 7～10cm。 SI-21 混入の 2 片も接合 口～体 3/4 周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 復 15.6 高 残 6.4	残存部が少ないので復原径は参考程度。外底面は緩い凸面状で、雑なナデまたはヘラナデ。外面体部ナデ、内面体部ナメヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	口 1/18 周、底 1/4 周 SI-18 一括
4 土師器 小形壺	口 復 14.0 高 残 7.0	外面肩部は残存部がわずかで、ハケ後ヘラミガキの可能性あり。頸部は外面タテハケ・内面ナメハケ後、口縁部をヨコナデするが、内面側ではごく弱い。内外面にやや密なタテヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤・黒・透明粗～細粒 と白細粒少 硬質	南東部床上 2cm 口 1/6 周、頸 1/4 周 SI-21 4
5 土師器 甕	口 17.0 高 24.6 底 7.1 最大 23.3	外底面はほぼ 1 方向ヘラケズリ。外面肩部に浅いハケと胴下位ナデ後、胴中位ヨコヘラケズリ。内面は胴下位に積み上げ休止痕を残し全体をヨコヘラナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ。断面図に記入した位置に滑石製白玉が 1 点、焼成前に混和または混入（径約 4mm、高さ約 3mm）。外面底部が弱く被熱し、口～胴部は煤が多く残る。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明粗～細粒多、 白・黒・赤粗～細粒少 やや硬質	西貯蔵穴底上 11cm で斜 位 ほぼ完形 口 11/12 周、底全周 SK-295 2

れる。b 期の遺構は、支柱穴 4 本と、北東支柱穴 P1b の東にある間仕切溝を確認した。貯蔵穴と南東柱穴 P4 は a 期と同じ場所を用いたと考えられる。柱間は南北 2.50 × 東西 2.45m であるが、北西柱穴 P2b だけは少し内側にある（P1b-P2b 間が東西 2.20m）。P1b の東側に附随する間仕切溝 D1 は長 93 × 幅 19 × 深さ 3～6cm で、a 期には埋め戻されていた可能性が高いが、a 期床面でプランを確認できた。この溝の東端が a 期の壁近くまで伸びているので、b 期の東壁は a 期とほぼ同じ位置、つまり東側柱穴から 1.1～1.2m ほど東側にあったと推定できる。床面からの深さは P1b=36cm、P2b=61cm、P3b=58cm、P4ab=68cm。

【火処】残存していない。【出土遺物】b 期の遺物はない。

SG10 区 SI-18c (第 34・35 図、写真図版 76・77)

【位置】SG10 区 SI-18a と同じ。

【規模と形状】b 期へ拡張する前の、最も規模が小さい時期の建物である。c 期の規模は、支柱穴から壁までの距離を 1.0m 程度と仮定すると、一辺 3.9～4.0m 前後が想定される。c 期遺構は、支柱穴 4 本・東側補助柱穴 1 本 (P7)・東側柱穴 P4c と P7 の東にある間仕切溝各 1 本 (D2 と D3)・貯蔵穴 1 箇所 (P6) を確認した。柱間は南北 1.90 × 東西 2.03m である。P4c の東側に附随する間仕切溝 D3 は長 73 × 幅 12～18 × 深さ 4～5cm、P7 の東側に附随する間仕切溝 D2 は長 94 × 幅 20 × 深さ 6cm で、貼床除去後に確認した。これらの溝の東端が a 期の壁近くまで伸びているので、c 期の東壁も a 期とほぼ同じ位置、つまり東側柱穴から 1.0m ほど東側にあったと推定できる。位置からみて c 期貯蔵穴と考えられる P6 は東西 65 × 南北 63 × 床面から深さ 45cm。ただし、貯蔵穴 P6 が a 期堅穴と一連の土層で自然埋没しているという所見を重視した場合は、c 期から a・b 期まで開口していた（つまり a・b 期には貯蔵穴を 2 基使っていた）ことも考えられる。床面からの深さは P1c=34cm、P2c=38cm、P3c=33cm、P4c=46cm、P7=25cm。

【火処】残存していない。

【遺物および出土状況】c 期貯蔵穴である P6 に遺物が少量ある。6～10 が SI-18c の遺物である。7 は胎土に混和した植物繊維の圧痕や炭化物が残る。8 は底面もふくむ外面全面に煤が付く。10 は緻密で硬質なホルンフェルスの砥石で、SG10 区では SI-12 などに例がある。図示以外の土師器合計 17 片・214g の内訳は、杯 5 片・15g、高杯 4 片・52g、壺甕類 8 片・147g。

第 22 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-18c 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
6 土師器 高杯	口 復 16～20 高 残 2.5	口縁部が薄くて歪んでいるので正確な径を復原できない。外面杯体部ナメナデ後に内外面口縁部ヨコナデ、内面杯体部ナメナデ。	5YR7/4 にぶい橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明粗～細粒少 やや軟質	東貯蔵穴内 口 1/8～1/12 周 SI-18 貯蔵穴一括

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

7 土師器 高杯	高 残 3.5	外面は上部タテナデ後、その少し下方をタテヘラナデ。脚は倒立して成形し、内面を斜放射状のヨビナデ後に2段目を積み上げて雑なナメナデ。胎土に混和した植物質の圧痕や炭化物がよく残る。	5YR6/8 橙 やや粗い、赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明粗～細粒と植物 繊維少 硬質	東貯蔵穴内 脚柱 1/2 周 SI-18 貯蔵穴一括
8 土師器 甕	高 残 3.1 底 7.1 最大 11.0	円板状に突出した外底面は主に1方向のヘラケズリ。外面胴部ナメナデ。内面底部はおおむね放射状のヘラケズリ。底面を含む外面全体に多量の煤が付着。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い、白・灰色礫～細粒 やや多、赤・黒・透明粗～細 粒少 硬質	東貯蔵穴内底上 19cm 底全周 6
9 土師器 大形壺	高 残 2.5 最大 残(復)22.7	外面は肩部ヨコヘラナデ、頸基部ヨコヨビナデ。内面はヨコヨビナデで、肩部に粘土粗積み痕を残す。粗積みは上から見て時計回り方向に巻き上げる。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒粗～細粒と 赤・透明細粒少 やや硬質	東貯蔵穴内 頸 1/4 周、肩 1/6 周 SI-18 貯蔵穴一括
10 石器 砥石	長 17.2 幅 6.8 厚 2.6	細長くて扁平な自然の河原石をそのまま利用。図示した範囲がかなり平滑に磨耗し、ごく弱い光沢を生じている。右図の面のほうがより平坦で、使用していた範囲も広い。	7.5Y5/2 灰オリーブ 5GY5/3(緑灰色)の縞あり 非常に緻密で硬質なホルンフェ ルス	東貯蔵穴内底上 16cm 完形 7

SG10 区 SI-19a・b (第 36・37 図、写真図版 77・192)

〔位置〕 SG10 区南部の 17-16 および 18-16 グリッド。同じく古墳中期の建物は北に SI-18 (a・b・c)、東に SI-16 がある。古墳後期の SI-20、古墳時代の SK-94・95・456 および時期不明の P-445 に切られる。古墳時代の P-469・470 を西壁付近で切る。古墳中期の SI-19(b → a) → 後期の SI-20 → SI-21 の順に重複する。

〔遺構名の対応〕 現地調査時には SI-19 と呼称した遺構で、旧期を SI-19b、新期を SI-19a に整理・改称した。調査時名称の「SI-93・96」と「SK-117・444」を SI-19 の一部として吸収・統合した。旧期 (SI-19b) の貯蔵穴 P7 は調査時名称が「SK-117」、SI-19a・19b の柱穴 P2 は調査時名称が「SK-444」、SI-19 南半の床面がやや高い部分 (入口施設の盛土部?) は調査時名称が「SI-93」、炉 3 の調査時名称は「SI-96」である。

〔規模と形状〕 炉が 3 基、貯蔵穴が 2 基あるので、2 時期の建て替えを推定した。ただし、柱穴の建て替えは認められない。炉 3 箇所のうち、被熱礫 2 点が残されていた炉 3 を最新期 (SI-19a) の炉と考えた。

建物はわずかに南北に長い長方形で南北 7.16m × 東西 6.68m。南北方向の中軸線は a 期・b 期ともに N-7°-W。残存壁高は最大 23 ~ 26cm で、北西部では低い (7cm)。南西隅は二段状に凶化されていて、建替を反映する可能性もあるが確実ではなく、外側の段は調査時に誤って掘りすぎた疑いも残る。貼床はローム塊を主体とする黄褐色土である。

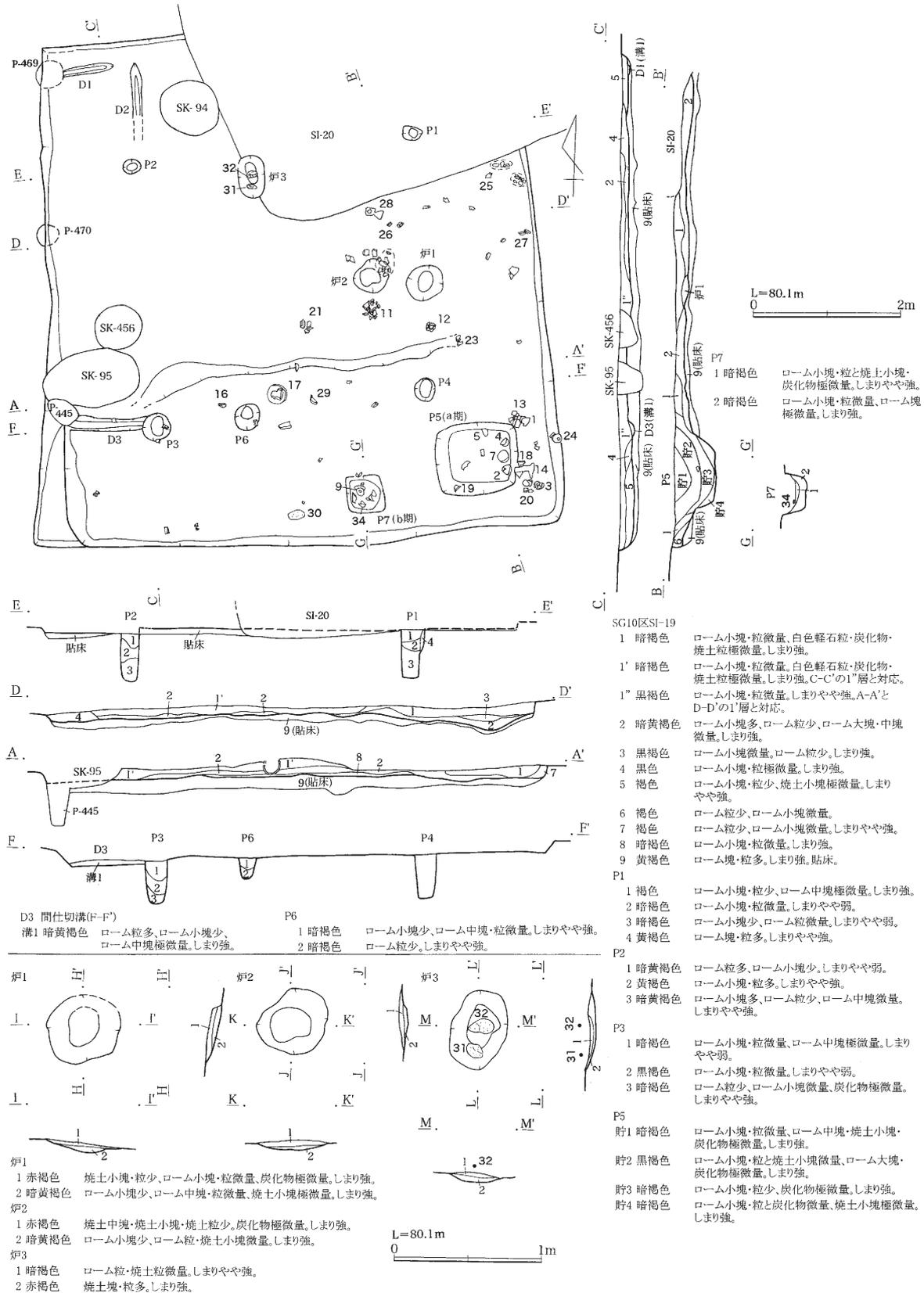
主柱穴は P1 ~ P4 で、床面からの深さは約 60cm (58 ~ 64cm)。南北の柱間は 3.54m で、東西の柱間は 3.62m (南側) ~ 3.84m (北側)。南西柱穴 P3 の東側に補助柱穴 P6 があり、床面からの深さは 32cm。確実な壁溝はないが、床面から深さ 9 ~ 10cm の溝 D1 を、北西壁から南へ約 20cm 離れた位置で貼床除去後に確認した。拡張前の周溝を埋め戻したのかもしれないが、ごく一部だけなのではっきりしない。間仕切溝は D2・D3 の 2 箇所、幅 13 ~ 15cm・床面から深さ 6 ~ 10cm。北西柱穴 P2 の北側で貼床除去後に確認した間仕切溝 D2 の南部では掘方底よりも溝が浅くなるので、掘方底に附属する溝ではなくて床面から掘った溝と考えられる。南西柱穴 P3 の西側では間仕切溝 D3 を床面で確認した。

〔貯蔵穴〕 新旧の 2 時期と考えられる 2 箇所の貯蔵穴がある。南東隅にある新期 (SI-19a) の貯蔵穴 P5 は東西 109 × 南北 97 × 深さ 32 ~ 42cm で、竪穴部と一緒に自然埋没する (貯 1 層 ~ 貯 4 層)。西へ 75cm のところにある旧期 (SI-19b) の貯蔵穴 P7 は東西 52 × 南北 46 × 深さ 25cm で、覆土上半部の記録はないが、覆土下半は自然埋没状の堆積である。貯蔵穴が複数ある建物跡は、SG10 区では SI-6 などがある。

〔炉〕 3 箇所ある。東側にある炉 1 (長 51 × 幅 47 × 深さ 9cm) と、そのすぐ西にある炉 2 (長 48 × 幅 44 × 深さ 6cm) が、先行する b 期の炉と想定されるが、確証はない。北側にある炉 3 (長 54 × 幅 39 × 深さ 3cm) には被熱礫が 2 点残されていたので、これを新期 (a 期) の炉と想定することもできる。

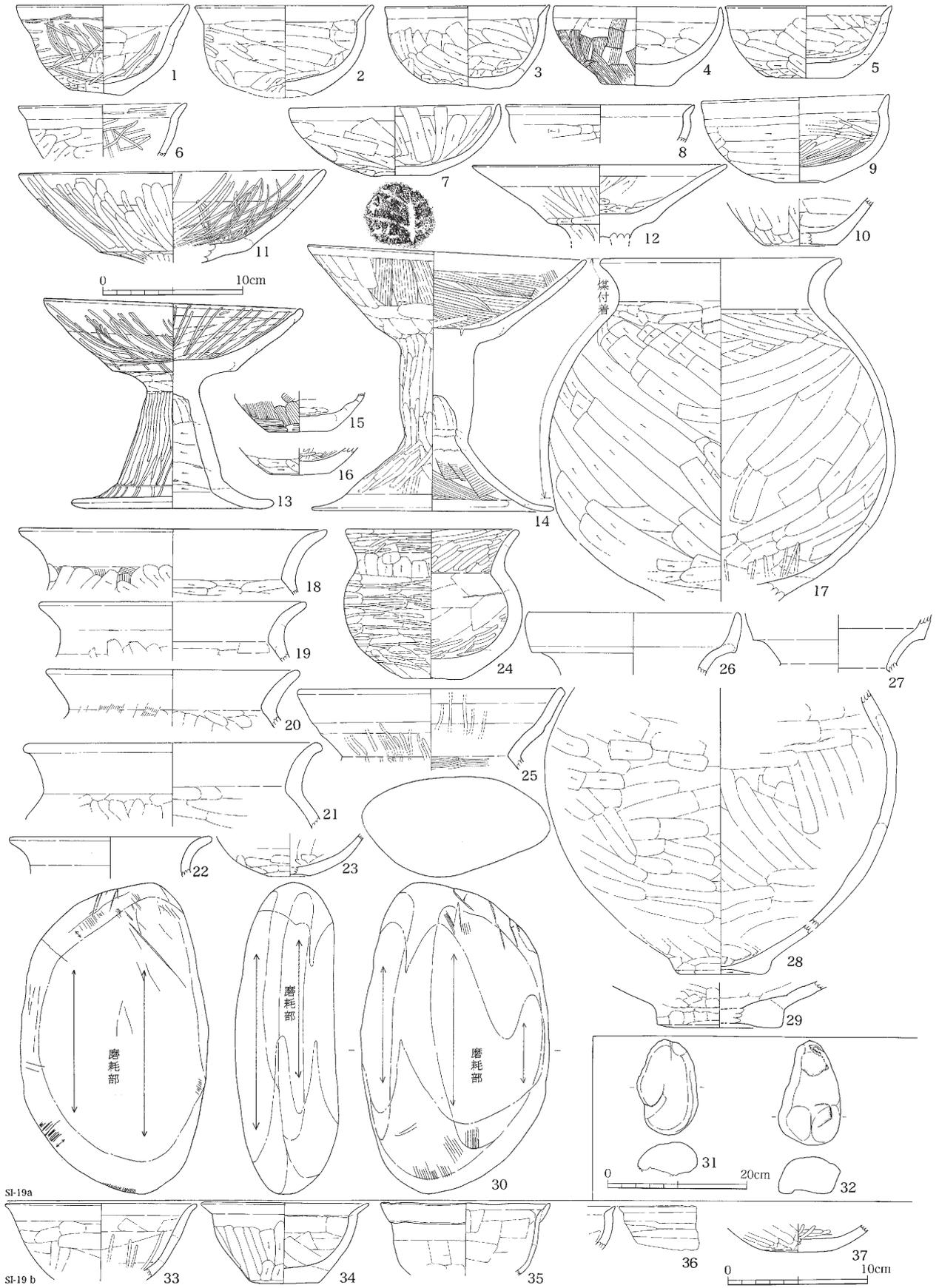
〔覆土〕 自然埋没である。新期の SI-19a 貯蔵穴 P5 が竪穴部と一緒に自然埋没した状況がよくわかる (断面 B-B')。別の建物が重複している可能性が調査時に考えられた土層があるが (旧名称 SI-93・94)、独立した竪穴や柱穴が認められないので SI-19 の覆土に統合して扱った。「SI-93」は SI-19 南半の確認面がやや高い部分である (1' 層および 1'' 層)。

〔遺物出土状況〕 新期の SI-19a に伴う遺物は建物全域にあり、残存度の高い遺物は南東隅の貯蔵穴 P5 東側に最も多い。倒立した完形の土師器甕 (17) がほぼ床面にある (東西断面 A-A')。旧期 (SI-19b) の貯蔵穴



第36図 権現山遺跡 SG10 区 SI-19a-b (1) 遺構

P7を埋め戻した上方にも新期のSI-19aの遺物がある(9)。旧期のSI-19bに伴う遺物はSI-19b貯蔵穴P7から出土した(33~37)。



第37図 権現山遺跡 SG10区 SI-19a・b(2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

[出土遺物] 内斜口縁の椀形杯が多い。7 は初期模倣杯の可能性があり、木葉痕を残す。14 は仕上げが雑な高杯で、杯底部に生じた亀裂を補修はせず、仕上げ調整をやめた不良品かもしれない。補修痕のある土師器は SG10 区 SI-6 などにある。13 は脚が少し短い。25 ～ 27 のような受口状の壺は、SG10 区 SI-19a・25・50・64a・66・80・88・101 と中世井戸 SE-569 混入品、SG5 区では SD-227 などにある。SG10 区 SD-43 の壺も弱い受口状だが、種類が少し異なる。20・27・28 は被熱痕や煤が不規則である。図示以外の土師器合計 404 片・4,484g の内訳は、杯 218 片・1,224g、高杯 13 片・213g、小形壺 13 片・134g、壺甕類 158 片・2,902g、甌 2 片・11g。30 は緻密・硬質なホルンフェルスの砥石で、SG10 区 SI-12 などに例がある。

SG10 区 SI-19b 出土遺物 (第 37 図 33 ～ 37)

竪穴部や柱穴は SG10 区 SI-19a と同様で、貯蔵穴と炉が複数あることから b 期を認定した。遺構の詳細は SG10 区 SI-19a・SI-19b の項で説明した。旧期 (b 期) の SI-19b に伴う遺物は、b 期の貯蔵穴 P7 から出土した。内斜口縁の椀形杯は、SI-19a と同様にやや開いた形である。35 は貼付口縁の杯。図示以外の土師器合計 39 片・375g の内訳は、杯 5 片・13g、高杯 3 片・46g、壺甕類 31 片・316g。

第 23 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-19a・b 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SI-19a 出土遺物				
1 土師器 杯	口 12.2 高 6.2 底 3.6 重 218.2	外面は体部ナデ後に体部下端ヨコヘラケズリ。外底面は多方向ヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内外面の体部に不規則でやや疎らなヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・透明粗～ 細粒やや多、白・灰色礫少 やや硬質	南東部床上 4cm ほぼ完形 口全周、底全周 37
2 土師器 杯	口 12.5 高 残 6.6 重 残 262.1	外面体部はナメヘラナデで、底近くはヘラケズリ。肩付近に疎らなヨコヘラミガキ。内面体部にヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面体部のほとんどが黒斑。外底面は剝離破損していて、焼成時に剥がされた可能性がある。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 23cm 口～体全周 27
3 土師器 杯	口 復 11.6 高 5.8 底 4.6	外面は口縁部ヨコナデと体部ナデ後に下半部ナメヘラケズリ。外底面は主に 1 方向のヘラケズリで、削り残して高くなった部分も見られる。内面は体部ヘラナデと口縁部ヨコナデの後に、底部に多方向と体部に斜位のヘラケズリ。	5YR6/8 橙 緻密 白細粒やや少、灰色礫 と赤・黒・透明粗～細粒少 硬質	南東隅床上 11cm 口 3/4 周、底 5/6 周 29
4 土師器 杯	口 11.8 高 5.7 底 4.8	外面は体部ナデ後に浅いタテハケ。外底面はナデ。内面は体部ヘラナデ後にナデ。内外面口縁部ヨコナデ。残存重量 201.0g。	10YR7/4 にぶい黄褐 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 30cm ほぼ完形 口全周、底全周 25
5 土師器 杯	口 11.8 高 5.1 底 5.5 重 残 219.0	底が厚くてやや重い。外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部ナメヘラナデ、体部下端ナメヘラケズリ、外底面 1 方向ヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に底部を放射状ヘラケズリと体部を横～斜位ヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白粗～細粒やや少、 赤・黒・透明粗～細粒少 硬質	貯蔵穴底上 12cm ほぼ完形 口 11/12 周、底全周 24
6 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 3.8	内外面口縁部ヨコナデ後に外面体部ヨコヘラケズリ。内面の体部に多方向と口縁部に横位のヘラミガキ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・透明粗～細粒 やや少、赤・黒粗～細粒少 やや硬質	南半の床が高い部分 (旧称 SI-93) 口～体 1/4 周 SI-19・93 一括
7 土師器 杯	口 14.9 高 4.9 底 4.2 最大 15.0	外底面は木葉の裏面圧痕。外面は口縁部ヨコナデ後に体部下位ヘラケズリと上位ヘラナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に底部多方向と体部斜位のヘラケズリ。重量 224.6g。	10R5/6 赤 やや緻密 白細粒多、白礫と 黒・透明粗～細粒少 硬質	貯蔵穴底上 12cm 完形 26
8 土師器 杯	口 復 13.3 高 残 2.8	外面口縁部と内面をヨコナデ。外面体部はヨコヘラケズリの可能性あり。器面が磨耗して調整痕が不明確。ミガキの有無は不明。	10R5/4 赤褐 やや緻密 赤粗～細粒やや少、 白・黒・透明細粒少 軟質	口 1/4 周 SI-19 一括
9 土師器 杯	口 13.3 高 6.1 底 3.5	外底面はおそらくヘラケズリで凹み底。内外面口縁部ヨコナデ後に外面体部ヨコヘラケズリ。内面は下位に斜放射状と中位に横位のヘラミガキ。底面から口縁部まで外面全体に薄く煤付着。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 灰 色礫と白・黒・粗～細粒と赤 粗粒少 やや硬質	床上 15cm (SI-19b 貯蔵 穴の上方) 口 1/4 周、底全周 16
10 土師器 杯	高 残 3.4 底 復 5.3	外底面は丁寧な 1 方向ヘラケズリで中央が少し凹む。外面体部タテヘラケズリ。内面は底部に 1 方向 (?) と体部に横位のヘラナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 粗い 白礫と赤・白粗～細粒 少 やや硬質	底 1/3 周 SI-19 一括
11 土師器 高杯	口 21.8 高 残 6.6	外面は口縁部ヨコナデ後、杯底部と杯体部に放射状および斜放射状のヘラケズリ。内面は体部ナデと口縁部ヨコナデ後、交差する斜位のヘラミガキ。	5YR6/8 橙 緻密 白・赤粗粒少 やや硬質	中央東寄り床上 6cm 口 1/2 周 41
12 土師器 高杯	口 復 18.0 高 残 5.5	外面はタテヘラケズリ後に杯部下端ヨコヘラケズリ。内面は杯体部ナメヘラケズリと下半部ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部はヨコナデと見られるが、残存部がわずかなので不明確。 [注記] SI-19 35、42、一括、貼床中	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 赤粗～細粒非常に 多、白・黒粗～細粒少 やや軟質	中央東寄り床直上。南 東壁際床上 4cm にも 1 片あり 口 1/36 周、杯底全周 注記は左欄
13 土師器 高杯	口 18.4 高 14.5 脚裾 14.4 重 残 738.0	杯底～脚を黄橙色土で成形後、杯体部を橙色味の強い土で製作。外面脚柱部タテナデと裾部ヨコナデ後タテヘラミガキ。杯底外面横位と杯体部斜位ヘラナデ後に口縁ヨコナデ、杯体部斜位ヘラミガキ。杯内面は斜放射状ナデ後に口縁部ヨコナデ、杯体部タテヘラミガキ。脚部内面は上端をタテナデ後に脚柱部を積み上げてヨコヘラケズリ、裾部ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白・灰色礫～細粒と黒粗粒少 やや硬質	南東部床上 3cm 口 11/12 周、脚柱全周、 脚裾 1/2 周 36
14 土師器 高杯	口 19.9 高 18.4 脚裾 17.2 重 残 837.0	外面はナデ後に脚柱～脚裾部をタテヘラナデし、杯部と脚部にはナデ調整前のタテハケが少し残る。杯内面は横～斜位ハケで、杯底面には 1 方向ナデをしているが、ここに生じている焼成前の亀裂は補修した様子が無い。脚内面は倒立状態で中実柱状部の上に反時計回りで巻き積みしてナメハケ。口縁と脚部の内外面はヨコナデがやや雑で、杯部平面形の歪みが修正されていない。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 赤・白粗～細粒や や多、白礫と黒・灰色・透明 粗～細粒少 硬質	南東隅部床直上で横位 口～脚柱全周、脚裾 1/2 周 32

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

15 土師器 小形壺?	高底 残 2.8 復 4.0	外底面は1方向ヘラケズリ後にナデ、外面体部ナナメハケ後に体部下端ヨコハケ。内面はやや雑なナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明粗～細粒と白 礫少 やや硬質	底 1/2 周 SI-19 一括
16 土師器 鉢	高底 残 1.9 4.4	外底面はおそらくケズリの後にナデ。外面体部下端ヨコヘラケズリ。内面底部はヨコヘラナデ後に多方向のやや雑なヘラミガキ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒やや少、 赤・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	南西部床上 11cm 底 1/2 周 10
17 土師器 甕	口高最大重 17.2 残 24.5 24.5 残 2025	外面は胴部に斜位と下端に横位のヘラケズリ後、頸下端ナデと口縁部ヨコナデ。内面はナナメヘラナデ(一部ヘラケズリ)後、頸下端ナデと口縁部ヨコナデ。内面底付近は多方向ヘラナデと擦痕あり。外面下位が少し被熱し、中位から口縁部まで煤が多く付着する。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色礫～細粒 多、赤・黒・透明粗～細粒少 硬質	南部床直上逆位で出土 口～胴下半完存 15
18 土師器 甕	口高 残 4.7	肩部が薄い。外面は頸部ハケ調整後に口縁部をヨコナデしてから頸部ナナメヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に肩部ヨコヘラケズリ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 透明粗～細粒と白・ 黒細粒多、赤・灰色粗～細粒 少 硬質	南東隅床直上 口 1/24 周、頸 1/4 周 33
19 土師器 甕	口高 復 19.0 残 4.3	外面は口～頸部ヨコナデ後に頸部以下をタテヘラナデ。内面は肩部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤・黒粗粒やや多、白・透明 細粒少 やや硬質	南東部床上 16cm 口 1/6 周、頸 1/3 周 21
20 土師器 甕	口高 復 18.0 残 4.3	肩部の外面にナナメハケと内面にコビナデ後、内外面の口縁部にヨコナデ。内外面に不規則な被熱痕と煤が見られ、破損した後に被熱した可能性がある。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・黒・透明細粒 多、白・赤・透明粗粒少 硬質	南東隅床上 14cm 口 1/8 周、頸 1/6 周 28
21 土師器 甕	口高 復 22.0 残 6.2	外面肩部タテナデと内面肩部ナナメヘラナデの後に、内外面口～頸部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・透明粗～細粒やや多、 灰色礫～細粒少 硬質	中央部床上 15cm 口 1/8 周、頸 1/6 周 40
22 土師器 小形壺	口高 復 14.4 残 2.7	口縁部内外面にヨコナデ。	2.5Y4/1 黄灰 やや緻密 赤粗～細粒多、白 粗～細粒と黒・透明細粒少 硬質	口 1/6 周 SI-19 一括
23 土師器 小形壺	高底 残 3.1 復 3.0	外底面はおそらくヘラケズリ後ナデで上げ底状。内外面に丁寧なヨコヘラナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤・黒細粒や やや少、赤粗粒少 やや硬質	南東部床上 7cm 底 1/3 周 44
24 土師器 壺	口高最大重 12.3 10.5 10.5 最大 12.6 残 111.0	厚く重い。外底面は1方向ヘラケズリ。外面は頸部タテヘラケズリと体部ヨコヘラケズリ後ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。頸部と底面以外の外面にやや疎らなヨコヘラミガキ。内面は体部に斜位のヘラナデおよびヘラケズリ後、下半～底部にナナメヘラミガキ。口～頸部の内面にヨコナデ後、横～斜位ヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 黒・透明粗～細粒 多、白・灰色礫～細粒と赤粗 粒少 硬質	南東隅部 口 5/6 周、体～底全周 70
25 土師器 壺	口高 復 18.5 残 5.9	口縁部中位で外面に浅く広い凹線を持ち、内面は弱く内側に折れる。外面は肩部から口縁部をタテヘラミガキし、口縁部上半は磨滅してミガキが不明。内面は肩部に浅いヨコハケで、口縁部はヨコナデ後にタテヘラミガキをするが、下半部は磨滅してミガキが不明。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と黒・ 透明細粒少 やや硬質	北東隅(床上レベル不明) 口 1/12 周、頸 1/6 周 58
26 土師器 壺	口高 復 14.7 残 4.8	幅広く立ち上がる口縁部外面の下位が弱く凹む。内外面ともにヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤・透明粗～細粒やや多、白・ 黒細粒やや少 やや硬質	北東部床上 4cm 口 1/4 周 64、一括
27 土師器 壺	高 残 4.2	内外面の肩部から口縁部までヨコナデ。口縁部内面は弱く受口状で、現存する上端よりも口縁部は更に長く伸びると思われる。内外面に不規則な煤が付着する。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒 やや少、白・赤・灰色粗～細 粒少 やや硬質	北東壁際床上 3cm 頸 1/6 周 54
28 土師器 壺	高底 残 20.4 5.8	突出する上げ底で、外底面は外周を横位、中央を1～2方向ヘラケズリ。外面胴部は横位ヘラナデと部分的ヘラケズリ。外面下位は斜位ヘラナデ。内面胴部下位が縦位、それ以外は横位のヘラナデ。割れた後に外面が被熱した破片が少しあり、煤が外面に付着。 [注記]SI-19 39、50、65、69、南東一括、一括、SI-20 南東一括、SI-93 一括	5YR6/6 橙 やや粗い 白・灰色礫～細粒 多、赤・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	中央床上 12～13cmと 北部床上 8～10cm。南 東部の1片も接合 胴部 1/4 周位、底全周 注記は左欄
29 土師器 大形壺	高底 残 3.3 8.9	円板状に突出する底面は中凹み状で中央部に1方向ナデ後、外周を円周方向のナデ。胴部下位をコビオサエ後に雑なヨコナデ、胴部タテナデ。内面はナデと思われるが、器面が荒れて不明確。7cm大の黒斑が外面に残り、焼成時に生じたものと見られる。胴部片は少量あるが接合できない。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒 やや多、白粗～細粒少 硬質	中央南寄り床上 19cm 底全周 口 1/3 周 SI-19 14、一括、貼床中 ・SI-93 一括
30 石器 砥石	長幅厚重 22.3 13.4 7.3 3144	縦長で断面が楕円形の自然石をそのまま利用。中央部の上下面から両側面にかけての全周が平滑に磨耗する。特によく磨耗する範囲を図に記入した。主に長軸方向に研磨していると思われるが、石材が硬いので擦痕は不明瞭。	10BG2/1 青黒 緻密で硬質なホルンフェルス	南壁際床上 6cm 完形 67
31 礫	長幅厚 13.4 8.3 4.6	自然礫で、加工・使用痕は見られない。全面がよく被熱赤化している。剥離したと思われる面も良く被熱する。重量 641.2g	10YR5/1 褐灰 石英珪岩	片面の約 1/2 が剥離 1(片)
32 礫	長幅厚 14.6 8.7 4.8	自然礫で、加工・使用痕は見られない。全面がよく被熱赤化している。重量 824.8g	2.5Y5/1 黄灰 石英珪岩	完形 2(片)

SI-19b 出土遺物

33 土師器 杯	口高 復 13.6 残 5.5	体部外面と内面に斜～横位ヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。体部内面に疎らなタテヘラミガキ。 [注記]SI-19 一括、SI-93 一括、SI-117 上半分	5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白 粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴内上半の4片と 地点不詳の3片が接合 口 1/3 周 注記は左欄
34 土師器 杯	口高底 復 11.8 5.8 4.8	底部が厚くて体部が薄い。外底面は緩い凸面が多方向ナデ。外面口縁部にヨコナデ後、外面体部タテヘラケズリ。内面は体部に斜～横位ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明粗～細粒やや少 や やや軟質	貯蔵穴内底上 15cm 口 1/8 周、底全周 SI-117 5、6
35 土師器 杯	口高 復 12.0 残 5.3	非常に薄くて軽い。口縁部に歪みあり。外面体部は下位ヨコナデと中位タテナデ後に上位から口縁部貼付帯にかけてをヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。外面全体に煤が多く付着する。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや少、黒・透明粗～細粒少 やや硬質	貯蔵穴内上半の3片が 接合 口 1/4 周、頸 1/4 周 SI-117 上半分
36 土師器 杯	口高 復 12～15 残 3.1	薄く軽い。内外面ともに口縁部ヨコナデ後、体部をヨコヘラナデ。	10R6/8 赤橙 やや緻密 赤粗～細粒やや少、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴内上半 口 1/8 周 SI-117 上半分
37 土師器 杯	高底 残 1.9 復 4.8 最大 復 10.1	外底面は多方向ヘラケズリで緩やかな凸面状。外面体部はナナメナデ。内面はヨコヘラナデ後にやや疎らなタテヘラミガキ。	10R5/6 赤 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや多、白礫と黒・灰色粗～ 細粒少 硬質	貯蔵穴内上半 底 1/3 周 SI-117 上半分

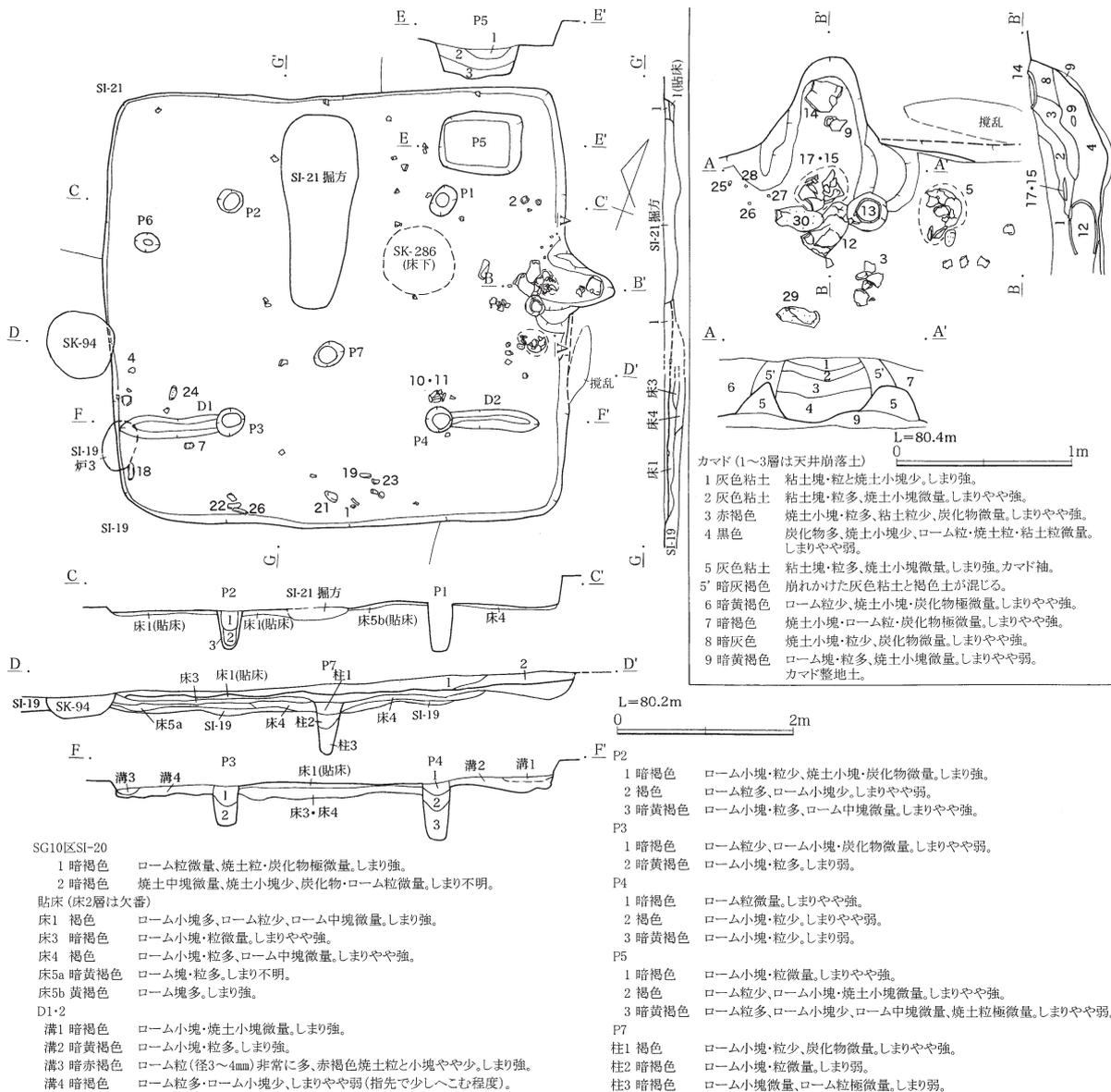
SG10 区 SI-20 (第 38・39 図、写真図版 77・78・192・193)

[位置] SG10 区南部の 18-16 グリッド。同じく古墳後期の建物は北に SI-21a・21b・22、東に SI-14・15 がある。東・北・南にある SI-16・18・19 は古墳中期。

[重複関係] SI-20 が古墳時代の SK-286 の上部を切り、SK-286 の上を SI-20 の貼床が覆う。古墳中期の SI-19a・19b → 後期の SI-20 → 後期の SI-21a・21b の順に重複する。現地調査時には SI-21 → SI-20 の順を考えたが、出土遺物の特徴を考慮して順序を訂正した。SI-20 北西上部を SI-21 が切る重複部は厚さ 3cm 程しか残っていないので、重複関係を断面 (G-G') で確認できなかった。SI-20 の北部中央を切る不整形長方形の落ち込みは SI-21 の掘方南東部が深くなる部分と推定され、SI-21 が SI-20 より新しい証拠といえる。SI-21 掘方は、調査時には時期不明の土坑「SK-284」として扱い、整理作業時に「SI-21 掘方」に名称変更した。

[規模と形状] 長方形で南北 4.96m × 東西 5.24m。南北方向の中軸は N-21° -W (東西軸は N-69° -E)。

支柱穴は P1 ~ P4 の 4 本で、柱間は南北 2.50m × 東西 2.36m。P1 ~ P3 は床面から深さ 40 ~ 46cm で、P4 だけは 65cm で少し深い。P2 の柱痕からみて推定柱径は 16 ~ 18cm。北西部で西壁近くにある補助柱穴 P6 は床面から深さ 40cm。中央部の南寄りにある補助柱穴 P7 (床面から深さ 67cm) は、先行する



第 38 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-20 (1) 遺構

SI-19の覆土を切る柱穴で、SI-20に伴う可能性があるとは判断して整理作業時にP7と命名した。

残存壁高はカマド付近が最も高く27cm、北東隅が18cm、西壁は2～8cm。貼床は厚さ4～6cm。南側支柱穴の東西にある間仕切溝は溝幅18～24cm・床面から深さ8～14cmで、貼床除去後に確認したが、貼床で覆われていたわけではない(断面図F-F')。P3西側の間仕切溝D1はSI-19の炉3を切るののでF-F'の溝3層に焼土が混じる。北東隅の貯蔵穴P5は98×72×床面から深さ40cmで、自然埋没状の覆土に焼土が少し混じる(P5の3層)。南部で下層にSI-19がある部分の掘方がやや深い(断面G-G'の床4層)。

[カマド]両袖幅97cm、煙道先端から袖先端まで88cm(南袖先端の甕を含め99cm)。ローム塊主体の9層(貼床またはカマド整地土)上に、焼土塊を含む灰色粘土の5層で袖を作る。不規則に被熱した土師器甕13が南袖先端に正立する。北袖先端に立てた大形の河原石30が南へ倒れる。両袖先端に立てた甕と石の上に長胴甕12を掛けて焚口を補強したと見られる。焚口より少し奥で出土した甕15や焼粘土塊17も構築材かもしれないが、破片量が不足し断定できない。焚口手前にある自然石29もカマド構築材の可能性ある。煙道は東壁を外側へ50cm掘り込み、先端がやや急に上がる。煙道最上層に甕14の大破片が入る。

[覆土] 竪穴の残りが浅いので、大半が単層である。東部にある2層からみて自然埋没の可能性ある。

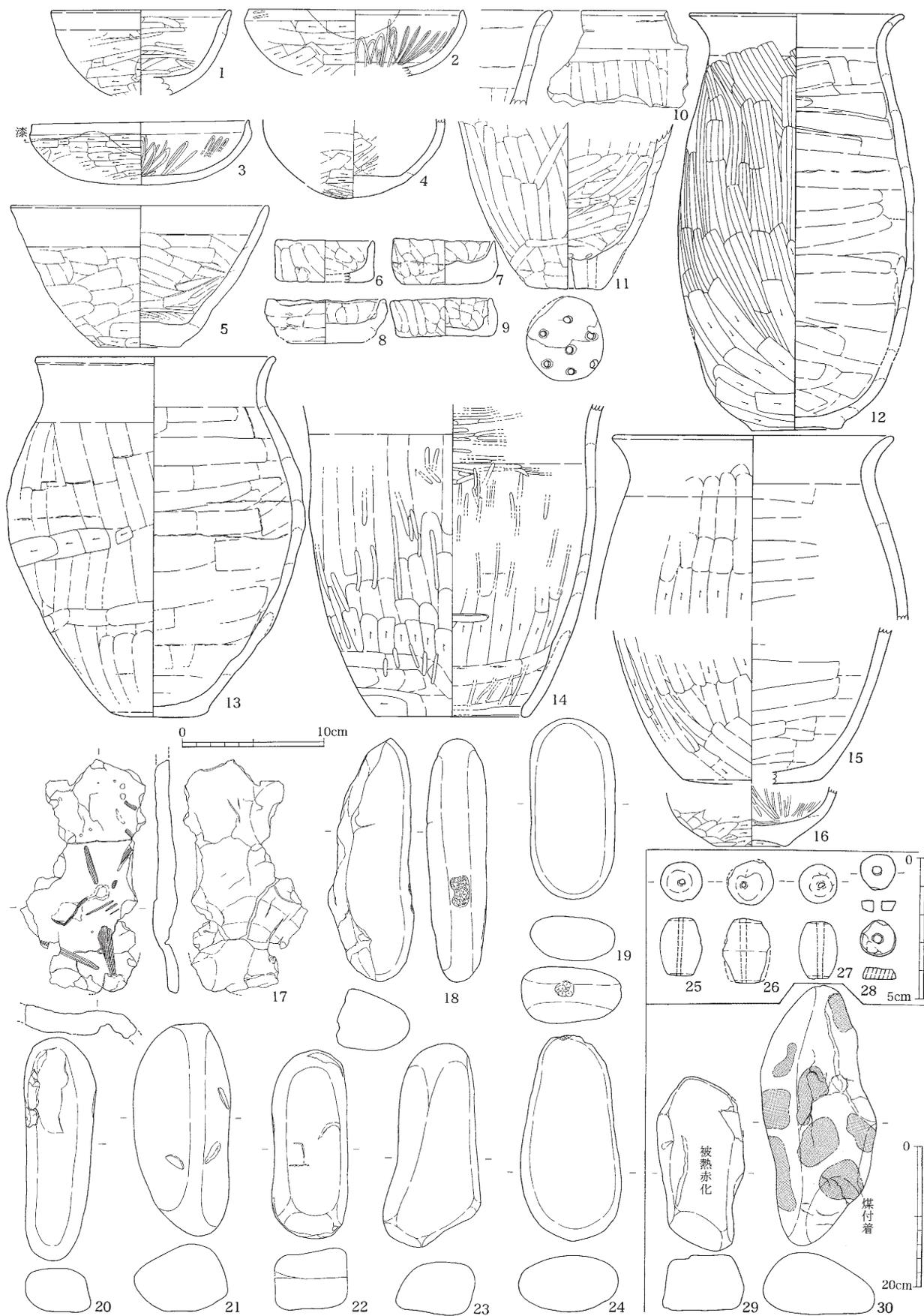
[遺物出土状況] カマド内の出土状況はカマドの項で述べた。カマドの西側には被熱礫(29)、南側に鉢(5)がある。カマド以外では北東部と南部に若干の遺物がある。小形土器がカマド付近に6・7・9と南西部に7があり、土玉(棗玉)3点と白玉1点もカマド北袖付近で出土した(25～28)。

[出土遺物] 杯類は主に漆仕上げ。大形でも小形でもない中形甕で多孔を持つ11は10と同一個体の可能性が高い。多孔甕はSG10区SI-32、本遺跡北部のSG1区SI-40、西部の北関東道路調査A区SI-004・012・269・493・504とB区SI-101にもある。甕は長胴化が進み始めた形状。12と13は不規則に被熱し、出土状況からみても焚口の構築材とみられる。15も底部に煤が薄く着くなど不規則な使用痕からみてカマド構築材の疑いがあるが、破片が少ないので確実ではない。16は古墳中期末ころの遺物が混入。

大形板状の焼粘土塊17は片面に植物圧痕を残す。編物石18・19に敲打痕がある。土製棗玉はA区SI-138(谷中・大島編2001)や中島笹塚7区I-5(内山他2008)にあり、埋木製棗玉がSG10区SI-78にある。粘板岩製白玉(28)はSG10区SI-20・30・37・40・70、SG5区ではSI-6他にある。また、滑石製白玉はSG10区SI-30などにある。遺物はやや多い。甕・甎が主体で、杯・鉢・小形土器・焼粘土塊などが少量ある。図示以外の土師器および焼粘土塊合計261片・2,497gの内訳は、杯鉢類76片・625g、小形壺6片・51g、壺甕類140片・1,116g、甎34片・644g、小形土器3片・26g、焼粘土塊2点・35g。

第24表 権現山遺跡SG10区SI-20出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復12.6 高 残5.8	底部が厚く外面が丸くて内面が平坦。外面は体部上位にナデと積み上げ痕を残し、中～下位をヨコヘラケズリ。外底面はおそらく多方向ヘラケズリ。内面はヘラナデ後に口縁部ヨコナデ、底部に多方向と体部に横～斜位のヘラミガキ。内面に暗褐色の付着物が少し見られ、漆仕上げをしている可能性もある。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・黒粗～細粒多、 白礫・赤粗粒・透明細粒少 やや硬質	南壁際床上5cm 口1/12周、底1/4周 41A
2 土師器 杯	口 復15.0 高 残4.7 最大 復15.5	口縁部内面の稜線は弱い。外面は口縁部がヨコナデでごく一部にヨコヘラミガキ。外面底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面はヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。内外面の口縁部に暗褐色の付着物が薄く見られ、漆仕上げの可能性ある。	10YR5/2 にぶい黄褐 やや緻密 白・黒粗～細粒や や少、透明細粒少 硬質	カマド北床直上 口1/4周 36、カマド一括
3 土師器 杯	口 復15.2 高 4.4 最大 復15.5	外面の口～体部境に稜あり。内面の口縁部は少し長い内傾面。外面の底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面はヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	10YR4/3 にぶい黄褐 やや緻密 白・黒粗多、灰 色・透明粗粒少 硬質	南部床上2cmと中央床直上・カマド西床上6cmが 接合 口1/4周 8、23、55
4 土師器 鉢	高 残5.8	底部は厚く、外面が丸くて内面が平坦。外面は体部ナデの後に多方向ヘラケズリ。内面は底部に1方向と体部に斜位のヘラケズリ。内面全体が炭素を吸着して黒色。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 白粗～細粒と黒細 粒やや多、赤粗粒と透明細粒 少 硬質	南西壁際床直上 底全周 15、16
5 土師器 鉢	口 18.0 高 10.0 底 5.8	口縁部は歪んでいて17×19cmの楕円形。外底面は雑なナデでわずかに中央が凹む。外面体部はタテナデ→ヨコナデ→下端部にヨコヘラケズリ。内面体部はやや雑なナメヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面底部は1方向ヘラナデ後に外周部をヨコヘラミガキ。外面底付近は黒斑で、内面は薄い褐色に変色している。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒少 やや硬質	カマド南床上15cm 口1/2周、体3/4周、 底5/12周 57、カマド一括
6 土師器 小形土器	口 復6.8 高 2.9 最大 1.9	粘土紐積み痕は確認できない。外底面は平坦にナデる。外面体部ナデ。内面体部と底部は雑なナメナデで、指先で引きずり上げるようにして成形・調整している。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤細粒少 やや硬質	カマド付近 口1/2周、底3/4周 カマド一括



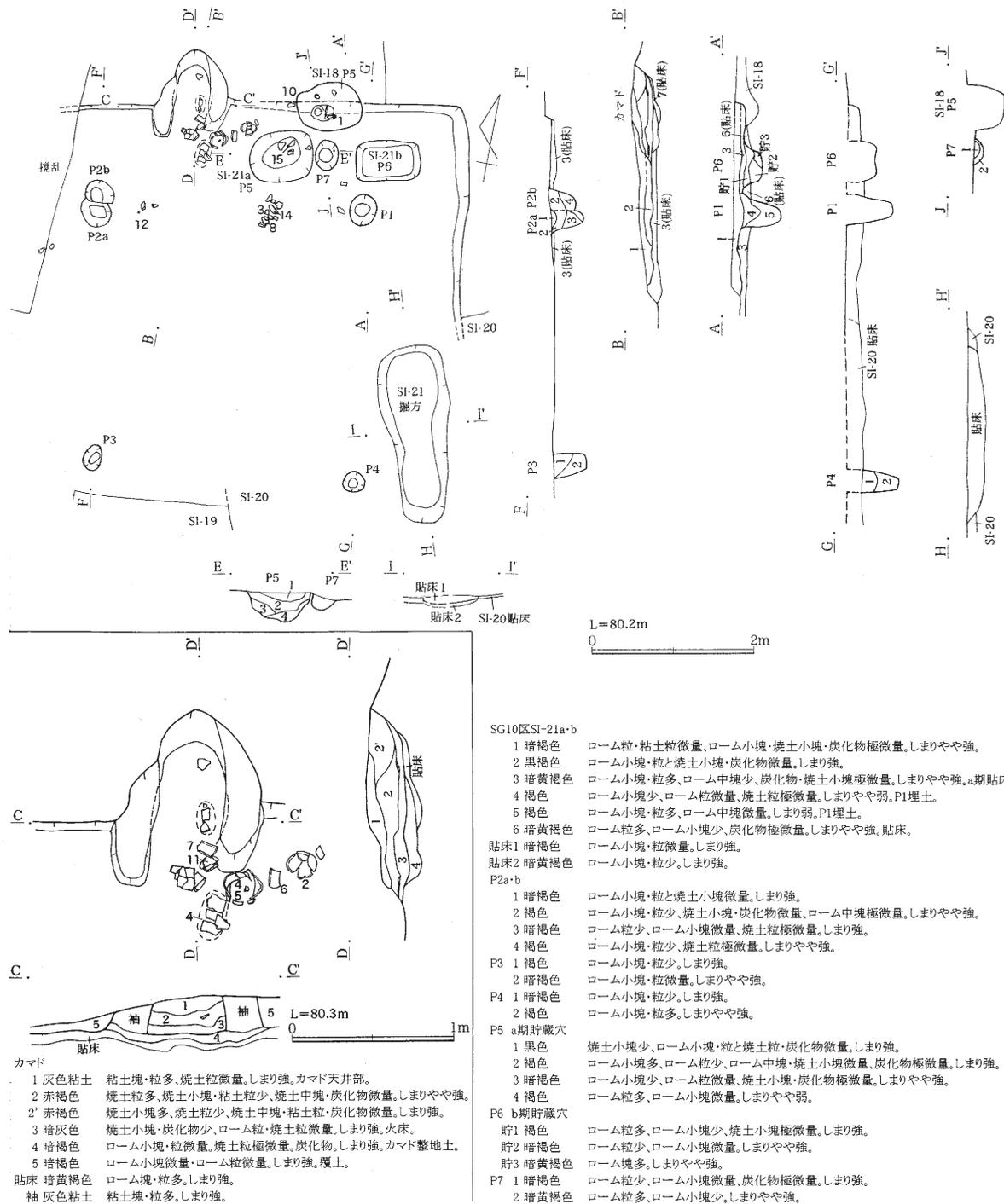
第39図 権現山遺跡 SG10区 SI-20(2) 遺物

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

7 土師器 小形土器	口高 7.1 底 3.0～3.3 重 6.1 最大 118.5	底部の底に1段だけ粘土紐をのせて、内面底部の土を斜放射方向の指先で引きずるようにして成形・調整している。外面は内面より少し丁寧にナデている。外面は平坦にナデる。	5YR6/6 橙 やや粗い 白粗～細粒多、白礫と赤粗～細粒少 やや硬質	南西部床上 4cm 完形 2
8 土師器 小形土器	口高 8.4 底 3.0 底復 5.2 最大 8.6	正円形ではないので復原径は参考値。粘土組織み上げ痕は不明確だが、粘土塊の合わせ目痕は散見できる。外底面はナデで、少し丸味を持った面になる。体部外面はやや雑なナデ。内面底部～体部は指先で放射状に引きずり出すような非常に雑なナデ。	10YR4/3 にぶい黄褐 やや緻密 赤粗～細粒と白細粒やや多、黒細粒少 やや硬質	南東部 口1/8周、底1/3周 南東一括
9 土師器 小形土器	口高 7.0 底 2.6 底復 6.4 最大 7.3	底部の上におそらく1段だけ組織みをして成形する。外底面は平坦にナデる。外面はやや雑なナデ。内面は指頭による雑なナデで底部に多方向と体部に横位。重量 86.8g。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白礫と赤・黒細粒 微量 硬質	カマド内床上 8cmで正位 完形 64
10 土師器 甌	口復 18～24 高残 6.8	11と同一個体の可能性が高い。外面胴部タテヘラナデと内面胴部タテナデの後に内外面口縁部ヨコナデ。内面全体に黒褐色物質が付着する。 [注記]51、54、カマド一括、南東一括	10YR5/3 にぶい黄褐 緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	カマド西床上 5～6cm。 南東部にも1片 口1/12周 注記は左欄
11 土師器 甌	高底 残 12.2 5.1	10と同一個体の可能性が高い。底部が厚く重い。外面は上部に縦位と下部に斜～横位のヘラナデ。内面は上部に縦～斜位のヘラナデ後に下部にナメヘラナデ。底面は外面に雑なナデと内面に雑なヘラナデ後、丸棒状工具で7個の孔を開ける。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	南東床直上～7cmとカマド西床上 5～6cmが接合 底全周 20、21、南東一括
12 土師器 甕	口高 15.0 底 29.3 底復 6.2 最大 16.5	外底面は弱く凹む中央がナデで、外周が2方向程度のヘラケズリ。外面は上から下へ浅いタテハケ後に胴下位をヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ。内外面の口縁部をヨコナデ。外面は側面の約半周が被熱し、カマド焼口の構築材と考えられる。残存重量 1,559g。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・透明粗～細粒多、灰色粗粒と黒細粒やや多 やや軟質	焚口の床直上で横位 口2/3周、胴全周 47
13 土師器 甕	口高 16.8 底 25.4 底復 5.5 最大 20.8	外底面は雑な1方向ヘラケズリ。胴部は外面に縦位と内面に横位のヘラナデで、胴中位と下位の積み上げ休止部が厚くなっている部分の外面をヨコナデとヨコヘラケズリ。口～頸部内外面ヨコナデ。胴部中～下位の約半周が強く被熱する。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・黒粗～細粒多、灰色・透明粗～細粒やや多、赤粗～細粒少 やや軟質	カマド南袖先端床直上 正位 口～胴中位全周、底1/2周 46
14 土師器 甌	高底 残 22.0 復 10.5	内外面胴部をタテヘラナデ。胴部下位は積み上げ休止部が厚い部分の内外面をタテヘラケズリ、胴下端ナデ(外面は一部にヨコヘラケズリ)。胴部のタテヘラミガキは外面は疎らで、内面では密。頸部内面に密なヨコヘラミガキ。内外面の広い範囲に黒斑あり。	2.5Y7/4 浅黄 やや粗い 白・透明粗～細粒多、黒粗～細粒少 やや硬質	煙道底上 25cm 頸1/6周、胴1/2周、 底3/4周 40、カマド一括
15 土師器 甕	口高 復 19.4 残 23.5 底復 7.0	破片が不足し、胴部中位を接合できない。外底面は外周に丸味がありナデ調整。外面胴部はタテヘラケズリ後にヘラナデ調整で、ヘラケズリは上半と下半で逆方向。内面は胴部ヨコヘラナデ。内外面の口～頸部をヨコナデ。下半部～底部の外面全体に弱い被熱痕と少量の煤が見られる。カマド構築材に転用した可能性もある。	10YR7/2 にぶい黄橙 やや粗い 灰色礫～粗粒と黒細粒やや多、白礫と白・赤・灰色細粒少 やや硬質	カマド火床上 17cm 口1/9周、頸1/6周、 底1/4周 39、カマド一括
16 土師器 杯	高底 残 4.2 5.0 最大 残 11.9	外底面はおおよそ3方向のヘラケズリで凹底状にする。外面体部ナメヘラケズリ。内面は体部に斜放射状と底部に多方向(?)のヘラミガキ。古墳中期末頃の遺物が混入。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤礫～細粒と白・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	南西壁際床直上 底全周 11
17 焼粘土塊	長幅厚 残 16.4 8.7 厚 残 2.9 重 残 219.1	左図の面は草本植物の葉か茎の厚痕が散在する。右図の面は素手で繰り返し押しつけたような凹凸が全体に見られる。草等を介在した面に手で押しつけて成形した大形の板状粘土塊で、図の下縁を除いて全周が破面。同一個体だが接合できない破片が3片あり、図示した分だけの重さは163.4g。	10YR6/2 灰黄褐 やや粗い 赤粗～細粒やや多、白・黒細粒少 やや軟質	カマド床上 17cm 全周の大半が破面 39、カマド一括
18 石器 編物石	長幅厚 17.0 残 5.9 厚 4.5	細長い自然礫をそのまま利用。縦位に片側面が割れた面は磨耗しているのので人為的な加工ではない。側面に狭い範囲の敲打痕が1箇所ある。被熱痕はない。残存重量 514.6g。	2.5Y6/3 にぶい黄 硬質な流紋岩	南西隅床上 2cm 完形 1
19 石器 編物石	長幅厚 12.7 5.9 3.0	扁平な自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は認められない。表面に暗褐色の付着物がわずかに見られ、片方の面にだけ付く傾向がある。重量 365.9g。	2.5Y7/4 浅黄 やや多孔質気味で硬質の安山岩	南部壁際床上 4cm 完形 7
20 石器 編物石	長幅厚 15.6 5.1 3.5	細長い棒状の自然礫をそのまま利用。図示した面の左上が5mm程厚くなる。左右側面の上半部に小さな剥離が1箇所ずつ見られる。被熱痕や使用痕は見られない。重量 405.9g。	2.5Y6/2 灰黄 緻密で硬質な流紋岩	南西壁際床直上 完形 5
21 石器 編物石	長幅厚 14.9 6.7 4.6	細長い棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 676.6g。	2.5Y6/3 灰黄 硬質な石英琺瑯岩	南西壁際床直上 完形 6
22 石器 編物石	長幅厚 13.3 5.3 4.4	細長く断面が四角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。断面図に記入した破面で縦位に2つ割れているが、敲打痕は認められない。重量 520.2g。	5Y6/3 オリーブ黄 緻密で硬質な流紋岩	南西壁際床直上。縦に 割れた2片が接合 完形 3、4
23 石器 編物石	長幅厚 14.0 6.8 4.2	細長くてやや扁平な自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕はない。重量 539.9g。	2.5GY7/1 明オリーブ灰 緻密で硬質な琺瑯岩	南部壁際床上 1cm 完形 10
24 石器 編物石	長幅厚 14.5 7.0 4.1	扁平な自然礫をそのまま利用。一端の小口に少し敲打痕あり。加工痕や被熱痕は見られない。重量 570.6g。	2.5GY6/1 オリーブ灰 硬質な石英琺瑯岩	南部壁際床上 3cm 完形 12
25 土製品 薬玉	長幅厚 19.9mm 14.5mm 重 3.2	両小口の平坦面は明瞭で、側面の中央にはほとんど稜を持たない。成形時の粘土の皺も少し残るが、全体を丁寧にナデで仕上げる。焼成前に細い丸棒で穿孔し、孔径は両面ともに1.55～1.65mmで一定している。現状では漆等は見られない。	2.5Y6/1 黄灰 緻密 黒細粒少、赤粗粒微量 やや軟質	カマド北袖付近床直上 完形 42
26 土製品 薬玉	長幅厚 22.4mm 残 16.9mm 重 3.2	図化面の対面は下半が破損。両小口は丸味を持ち、ナデがやや雑。側面は丁寧にナデで、側面中央の稜は不明確で弱い。焼成前に丸棒で穿孔し、玉の中軸に対し孔がやや斜交。孔径 1.3～2.0mmで、図の上側が大きい。表面がやや暗褐色だが、確実な漆仕上げはない。	2.5Y4/1 黄灰 緻密 黒礫微量 やや軟質	カマド北袖付近床直上 一部欠 43
27 土製品 薬	長幅厚 20.1mm 14.4mm 重 3.1	両小口の平坦面は明瞭で、側面の中央にはほとんど稜を持たない。全体を丁寧にナデで仕上げる。焼成前に細い丸棒で穿孔し、孔径は1.90～2.75mm。図示した側の小口では棒がブレているので孔径が大きくなっている。現状では漆等は見られない。	2.5Y4/1 黄灰 緻密 黒微粒少 やや軟質	カマド北袖付近床直上 完形 44
28 石製品 白玉	径 11.75～ 12.15mm 厚 4.10mm 重 0.7	両面は石材の節理に沿った破面のままで研磨なし。側面は穿孔しほぼ同じ方向で少し斜位の研磨痕。孔径は両面ともに3.4～3.6mmで一定し、穿孔剥離はない。穿孔後に分割して白玉を製作したものと見られる。	7.5Y4/1 灰 緻密で軟質な粘板岩	カマド北袖付近床直上 完形 45
29 カマド 構築材	長幅厚 22.7 11.3 8.0	自然の礫をそのまま利用。全面が被熱赤化し、図の右上部が剥離破損した後更に赤化している。加工・使用痕は見られない。重量 3552.4g。	5YR6/2 灰褐 緻密で硬質な石英琺瑯岩	カマド西床直上 ほぼ完形 63
30 カマド 構築材	長幅厚 36.5 15.5 8.7	カマド焼口を構築する礫。図示した面を中心として全面の各部分に煤が付着する。明確な被熱赤化部は見られない。重量 6150g。	2.5Y6/1 黄灰 やや粗粒の安山岩	カマド床直上 ほぼ完形 48

SG10 区 SI-21a・21b (第40・41 図、写真図版 78)

[位置] SG10 区南部の 18-16 グリッド。同じく古墳後期の建物は南に SI-20、東に SI-22 がある。北にある古墳中期の SI-18a・18b・18c を切る。古墳中期の SI-19a・19b → 後期の SI-20 → SI-21b → SI-21a の順に重複する。現地調査時には SI-21 → SI-20 という構築順を考えたが、SI-21 は南部が削平されて SI-20 と重複する土層が僅かなため、出土遺物の特徴も考慮して、順序を訂正した。西側は南北方向の長方形攪乱坑に切られる。古墳後期前葉の SG5 区 SI-4 の東端を古墳後期末の SG10 区 SI-21 が切ると推定される。ただし、西側に連続する SG5 区の調査では 10 区 SI-21a・21b の西端部分は確認されず、SG5 区 SI-4 が隣接してい



第40 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-21a・b (1) 遺構

る。SG5区SI-4の東半部の柱穴や壁は、SG10区SI-21の調査では確認されていない。南方にあるSK-94は、SI-21a・bとほぼ同時期の遺物を出土している。

〔遺構名の対応〕 調査時に「SI-21」と呼称し、整理作業時にSI-21a・21bに改称した。SI-21bが古期、SI-21aが新期である。SI-21bの貯蔵穴P6は、調査時の旧名称「S-99」である。SI-21南東部の長方形掘方は、調査時に時期不明土坑「SK-284」とし、整理作業時に「SI-21掘方」に改称した（断面図H-H'とI-I'）。

〔規模と形状〕 方形の建物跡で中央から北東部が残る。北東主柱穴P1から北壁・東壁までの距離が1.30mであることを参考にすると、復元推定値は東西5.86×南北5.90m。竪穴の残存長は東西5.40m×南北3.10mで、主軸方位はGN-10°-W。残存壁高は北東隅部で最大15cm。南半部は削平されてほとんど残らず、南壁も不明である。

中央部から東部は掘方の底面が周囲より6cmほど高い。掘方の南東部は長方形の落ち込み状で、先行するSI-20の北部を切る（南北222×東西84×床面からの深さ22cm、断面図H-H'およびI-I'）。新期（SI-21a）の貼床である3層はローム小塊の多い暗黄褐色土で、旧期（SI-21b）の貯蔵穴P6の上を覆う。旧期貼床である6層はローム粒の多い暗黄褐色土で、旧期貯蔵穴P6の周囲で認められた（断面図A-A'）。

主柱穴は4本あり、底面標高が79.40～79.51mなので、床面（79.95m）からの深さは44～55cmと推定される。北西柱穴P2は2時期あるように見え、北側の一段浅いP2b（床面から深さ33cm）が旧期（SI-21b）の柱穴底面を示しているのかもしれない。北側のP2bと南側のP2aが一連の土層で埋没しているので、新期（a期）の柱を抜く時に旧期（b期）の柱穴埋土と一緒に壊したとも考えられる。主柱穴の配置は東西3.26×南北3.30mで、北西柱穴P2aは少し南にあるのでP2a-P3間が少し狭い（3.10m）。新旧貯蔵穴（P5とP6）の間にある浅い柱穴P7は、北側のSI-18調査時に確認した柱穴であるが、SI-21に伴う可能性が高い（床面から深さ17cm、断面図J-J'）。入口施設は不明。

貯蔵穴は北東部に2基あり、西側が最終期のa期貯蔵穴P5で、東側が埋め戻されていたb期貯蔵穴P6である。a期貯蔵穴P5は東西80×南北68×深さ33cm。b期貯蔵穴P6は南北51×東西80×深さ24cm。周溝や間仕切溝はない。南方にある古墳時代のSK-94は同時期の遺物を出土しているので、これをSI-21a・bの張出ピットと考える余地もあるが、SK-94は方形でなく円形なので可能性は低い。

〔カマド・覆土〕 最終期であるa期のカマドと覆土の状況が残されていると考えられるので、SI-21aの遺構として次項で説明する。

〔出土遺物〕 SG10区SI-21a・21bのそれぞれについて次項で説明する。

SG10区SI-21a（第40・41図、写真図版78）

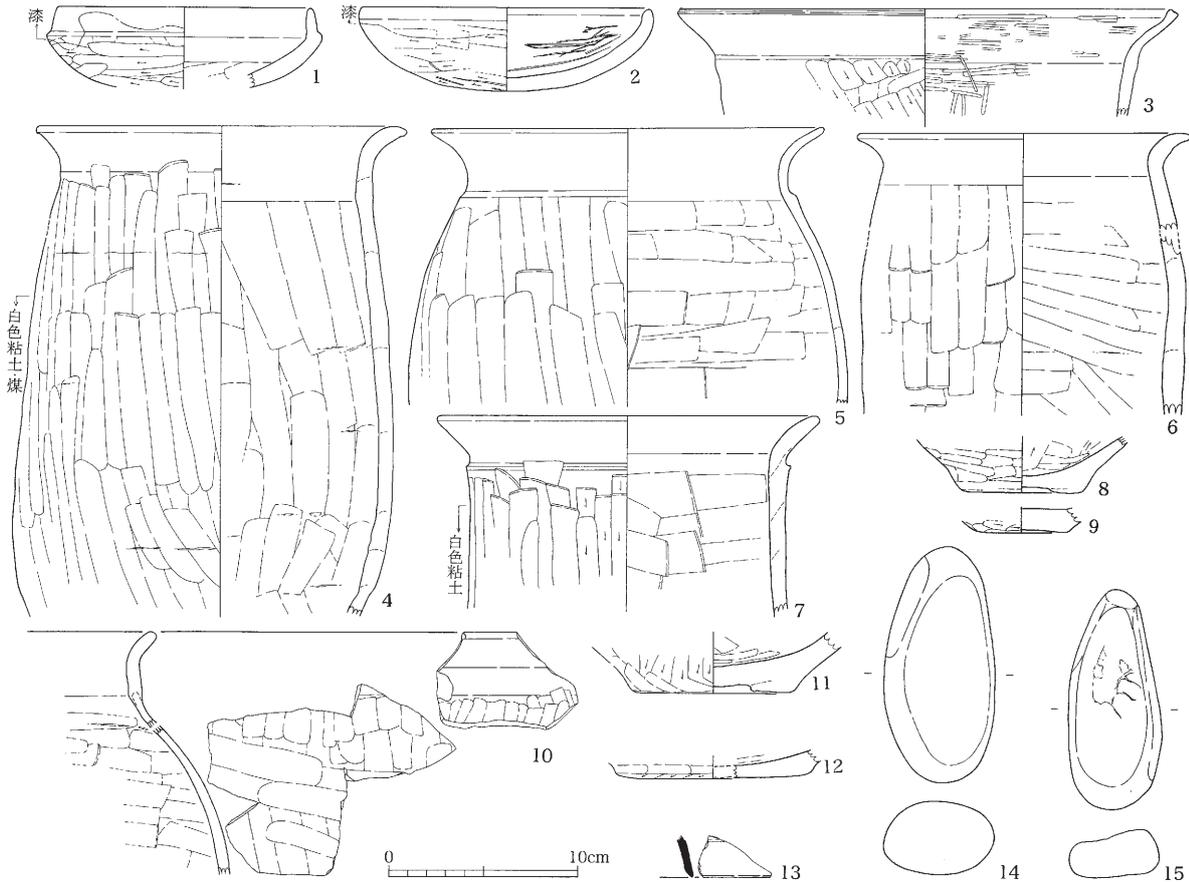
〔規模と形状〕 竪穴部の規模・形状は、前項で説明したSG10区SI-21a・21bに共通すると考えられる。

〔カマド〕 北壁中央にある。両袖幅94cm、煙道先端から袖先端まで109cm。貼床の上に整地土を載せ（4層）、その上に灰色粘土で造った袖は、壁の北側を掘り込んだ掘方内まで80～100cmほど北へ続く。天井部を反映する1層が最上層に残る。東袖先端に倒立した土師器甕4はカマド構築材の可能性が高いが、別個体の土師器甕5の破片と一緒にされているので、二次的に移動・改変されているか、または破片を組み合わせ使用したのかもしれない。

〔覆土〕 竪穴の残りが浅いため大半が単層で、カマド南側にだけ焼土混じりの2層がある。テフラの層や粒などは認められない。

〔遺物出土状況〕 新期貯蔵穴P5の底から5～30cm浮いて土師器片が出土した。その南側でも、床面～床上6cmの範囲内で土師器片がまとまる。カマド内とその南東部に土師器甕類が多い。4の甕は東袖先端付近に倒立したと考えられ、全周が残っていないので、5の破片を組み合わせた可能性もある。カマドの東方には完形の杯が正位で床から4cm浮いている（2）。1は先行するSI-18の貯蔵穴（調査時名称SK-295）で出土したが、SI-18貯蔵穴上部をSI-21aが切るので、SI-21aの床面または貼床中の遺物と見られる。

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第 41 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-21a・b(2) a 期遺物

【出土遺物】 2 は内面に焼成後の引っ掻き傷と見られる浅い沈線がある。5 は微量の雲母を含むので搬入品の可能性がある。雲母を含む土師器は SG10 区では SI-12 などとあり、権現山遺跡北部にある 2 区に多く、他地区にも若干ある（『東谷・中島地区遺跡群 10』p.550）。4 は煤・白色粘土・被熱痕がかなり不規則に見られ、カマド構築材的な痕である。7 も白色粘土が残る。3 は口縁端が三角になる独特な甑。須恵器杯（？）は混入の可能性が高い（13）。遺物は少なめで、割合は土師器甕が圧倒的に多い。図示以外の土師器合計 225 片・2,788g の内訳は、杯 113 片・828g、小形壺 1 片・17g、壺甕類 102 片・1,752g、甑 9 片・191g。古墳中期中～後葉の土師器碗形杯などを僅かに含み、重複する SI-18 などからの混入であろう。

SG10 区 SI-21b（第 40 図、写真図版 78）

【規模と形状】 竪穴部の規模や形状は SI-21a とほぼ同様と推測される。北東隅部で SI-21a の貼床下に埋め戻された旧期（b 期）の貯蔵穴 P6 が SI-21b の遺構である（東西 80 × 南北 51 × 深さ 24cm）。この旧貯蔵穴 P6 の周囲に SI-21b の貼床（6 層）が認められる。SI-21a の項で述べたように、北西支柱穴 P2 の北半部である P2b が他の支柱穴よりも浅いので（床面から深さ 33cm）、SI-21b の柱穴が SI-21a よりも浅かったことが推定される。

【遺物および出土状況】 SI-21b に伴う旧期貯蔵穴 P6 から出土した土師器壺甕類 5 片・52g だけがあるが、図示できる遺物はない。

第 25 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-21a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.4 高 4.3 最大 14.5	外面体部上端に狭くナデを残し、それより下をヨコヘラケズリ。内面下位ナデ、内面上位～外面口縁部にヨコナデ。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	7.5YR7/4 に近い橙 やや緻密 白・黒・透明細粒 と灰色礫少 やや軟質	SI-18a・b の貯蔵穴上方で SI-21a の床面～貼床付近 口 1/4 周、体 1/3 周 SK-295 1

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

2 土師器 杯	口 15.0 高 4.5 最大 15.4 重 259.4	内外面とも磨耗して調整が不明確。外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部から内面中位までヨコナデ。内面全面と外面上位に漆仕上げ。内面体部には焼成後の引っ掻き傷と見られる浅い沈線が不規則に入る場所があるので、内面図に示した。	10YR7/2 にぶい黄橙 緻密 赤・黒・透明微粒少 軟質	カマド東床上4cmで正位 完形 23
3 土師器 甌	口 復 25.6 高 残 5.7 最大 復 26.6	大ききの割に薄い。口縁部内面が断面三角形で、端面は浅く凹む。外面頸部に緩い段あり。口縁部内外面ヨコナデ後、外面胴部ナメヘラケズリ。内面は胴部に縦位と口縁部に横位の密なヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明微粒多、白・ 黒細粒少 やや軟質	中央部床上7cmとカマド 東床上3cmが接合 口1/6周 13、22
4 土師器 甕	口 19.4 高 残 26.0 最大 19.8	内外面の口縁部をヨコナデ。外面胴部は上から下ヘタテヘラケズリの後にタテヘラナデ。内面胴部はタテヘラナデ。外面胴部に白色粘土と煤が付着し、また被熱赤化部が口縁部～残存下端の全域に広く見られる。 [注記]26、27、カマド一括、カマド近辺	10R5/6 赤 やや粗い 白・赤・灰色・透 明粗～細粒と黒細粒多 やや硬質	カマド東袖の南方6cm (倒立)と床上8cm(破片 3点)。焚口の構築材か 口～頸1/4周、肩2/3 周 注記は左欄
5 土師器 甕	口 復 21.4 高 残 14.8	胴部が薄い。外面胴部は下から上ヘタテヘラケズリの後にタテヘラナデ。内面胴部はヨコヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。 [注記]26、貼床一括、カマド近辺	5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・灰色礫～ 細粒多、金色雲母粗～細片と 透明細粒微量 やや軟質	カマド東袖先端の東方 床上6cmで倒立(?)貼床 出土の3片も接合 口1/36周、頸～肩1/3 周 注記は左欄
6 土師器 甕	口 復 17.4 高 残 14.9	胴上部の接点がわずかなので胴部破片の傾きがやや不明確。外面は胴部に縦位のヘラケズリ後ヘラナデ。内面胴部は斜～横位ヘラナデ。内外面の口～頸部をヨコナデ。外面胴部が少し被熱赤化。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 灰色礫～細粒多、 白・透明粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	カマド南東の床上18cm 口1/6周、胴上半1/4 周 24、カマド近辺
7 土師器 甕	口 復 19.9 高 残 10.7	外面の頸部に強い段があり、胴部は下方へ向かって少し開き気味。外面は口縁部ヨコナデ後に頸部タテヘラケズリ。胴部のケズリはやや強いヘラナデとも言える。内面は胴部ヨコヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。外面肩部に白色粘土が付着する。	5YR6/8 橙 やや緻密 灰色粗粒多、白・ 透明粗～細粒やや多、黒細粒 少 硬質	床上5cmと焚口部床直上 が接合 灰色粗粒多、白・ 透明粗～細粒やや多、黒細粒 少 硬質 口～頸5/12周 28、33
8 土師器 甕	高 残 3.0 底 6.6	外底面は外周に粘土を貼ってヘラナデし、中央が凹む。外面胴部ヨコヘラナデ。内面底部は主に放射状の弱いヘラケズリ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・灰色礫と白・ 透明粗粒やや少、黒細粒少 硬質	中央部床上6cm 胴下端～底1/2周 10
9 土師器 甕	高 残 1.3 底 4.8	外底面は中央部が少し上げ底状でナデ。外面胴下端はヨコヘラケズリ。内面は1方向のやや雑なヘラケズリ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明細粒 と白・赤粗粒少 硬質	カマド付近 底3/4周 カマドキン辺
10 土師器 大形壺	口 28～32 頸 24～28 高 残 12.8	大形壺としては薄い。頸部が直立気味。内外面の口～頸部ヨコナデ後に内外面の胴部をヘラナデ。外面肩部のタテヘラナデと内面肩～胴部のヨコヘラナデは、砂粒が動くようなケズリに近い調整。胴部外面に10cm大以上の黒斑あり。 [注記]SI-214、カマド近辺、カマド一括、SK-2952、一括	7.5YR6/6 橙 やや緻密 透明細粒と赤粗～ 細粒やや多、白・黒細粒少 やや硬質	北壁際床上2cm、カマド 近辺、SI-18a・bの貯蔵 穴が混入 口1/30周、頸1/12周 注記は左欄
11 土師器 大形壺	高 残 3.3 底 8.6	外底面は外周に粘土を貼ってヘラケズリし、中央が凹む。外面はタテヘラケズリ。内面底部は多方向ナデ。底部内面の一部に赤褐色の焼けた粘土が付着する。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 灰色粗～細粒やや多、白・黒・ 透明細粒少 硬質	カマド内床直上で逆位 底2/3周 29
12 土師器 大形壺	高 残 1.5 底 復 10.0	外底面は薄い円板状に張り出し、外周を中心として円周方向のヘラケズリ。外面胴部下端はやや雑なナデ。内面底部は円周方向のナデ。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 灰色・透明粗～細 粒やや少、赤・黒細粒少 やや硬質	北西部床上5cmが接合 底2/3周 18、19
13 須恵器 杯蓋?	口 復約 12 ～14 高 2.2	肩部に浅い段、内面口縁部斜面に持つ。上下逆になって無蓋高杯の可能性もある。ロクロ回転方向は口縁部を上に向けた状態で左回転(反時計回り)。外面に黒色の自然釉あり。古墳中期末～後期前半の遺物が混入。	N4/ 灰 やや緻密 白・透明粗～細粒 硬質	口1/12周
14 石器 編物石	長 12.4 幅 5.8 厚 4.1	細長い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量441.5g。	N7/ 灰白 やや多孔質で緻密な安山岩	中央部床上3cm 完形 14
15 石器 編物石	長 11.6 幅 4.9 厚 3.1	細長い自然礫をそのまま利用。手前側に図の中央部で緩く反るような形状。加工・使用・被熱痕は見られない。重量225.4g。	7.5Y7/2 灰白 緻密で硬質な石英珪岩	a期貯蔵穴底直上 完形 7

SG10区 SI-22 (第42・43図、写真図版78・193)

[位置] SG10区南部の18-16グリッド。同じく古墳後期の遺構は北にSI-23、東にSI-20、南にSI-15がある。古墳中期のSI-105を切り、後期のSI-21(21a・21b)に切られる。時期不明のP-406に東壁を切られると推定される。平安時代のSI-90とは近接するが重複しない。南東隅が攪乱されている。

[規模と形状] 方形の建物跡。東西4.62×南北4.78m。主軸方位はGN-2°-E。壁は東側がよく残り、残存壁高は最大20cmで、南西部では残りが悪く4～9cm。ローム小塊・粒を主体とする土で全体を数cmの厚さで貼床している。

主柱穴は4本で、柱間は東西2.12×南北1.94～2.12m。床面からの深さは、北側の2本が深く(50cm)、南側の2本が浅い(31～35cm)。南西のP3では柱径10～14cmの柱痕状土層が見られる。入口施設と考えられるP6は径23×31cm、床面からの深さ36cm。

北東隅にある貯蔵穴P5は東西61×南北52×深さ33cmで、貼床と同じローム質の土手状高まり(幅21～42cm・高さ2～7cm)で南～西側を囲まれている。貯蔵穴の埋土は自然流入層で、西側のカマドから流れてきたと推定される焼土を含む。南壁側だけで確認した壁溝は幅12～18cm・深さ4～7cm。間仕切溝は認められない。

[カマド] 北壁のほぼ中央で、わずかに西に寄る位置にある。両袖幅77cm、煙道先端から袖先端まで

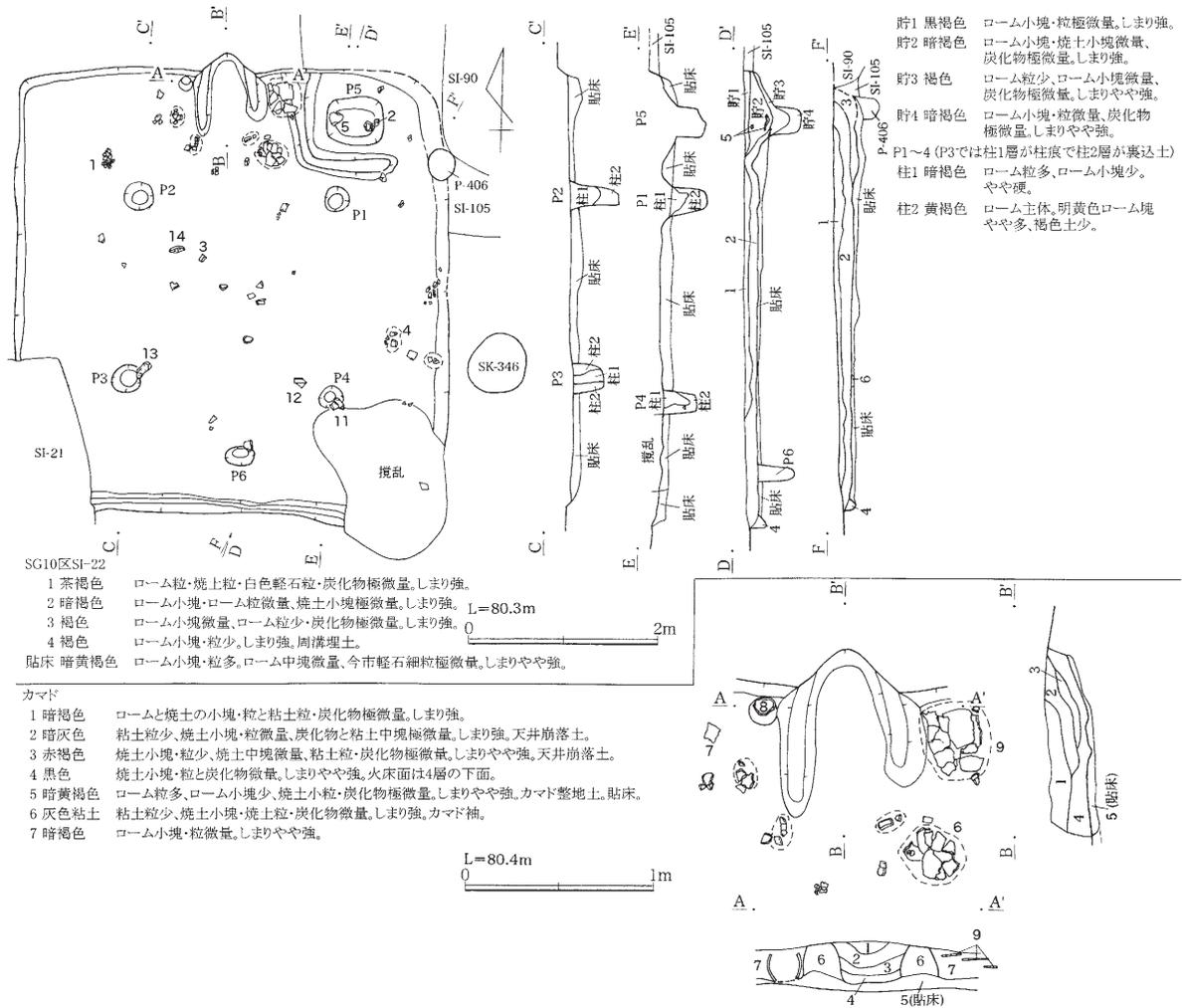
第5章 権現山遺跡 SG10 区

89cm。カマド下部は竪穴の掘方が周囲より4～7cm高く、その上を竪穴貼床と同じ土で平坦に整地した面に、灰色粘土で両袖を作る。煙道は北壁を約40cm北側へ掘り、両袖基部の粘土がその中に入る。

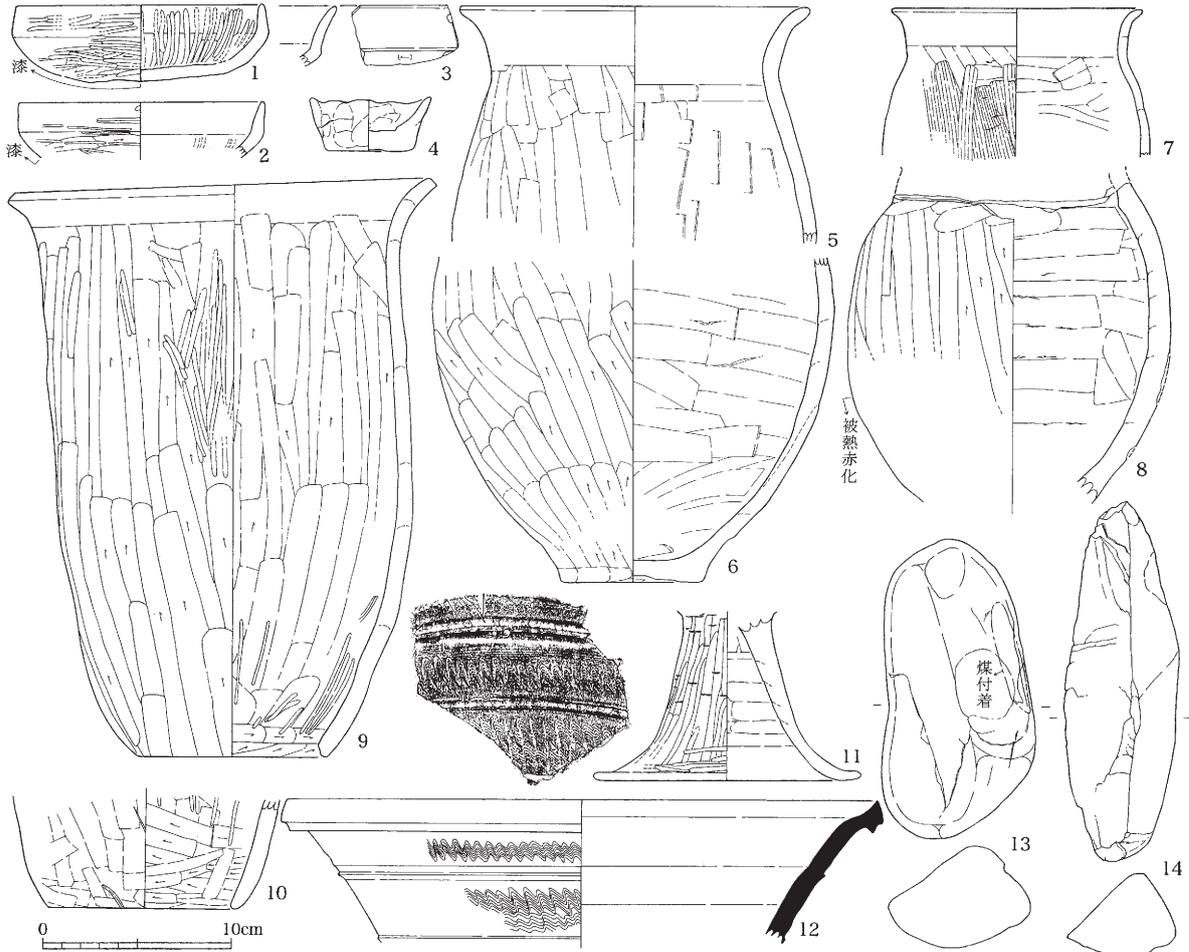
〔覆土〕自然埋没状で、最上層に白色軽石粒を含む。

〔遺物出土状況〕遺物はカマド周辺に多い。カマドの西側に正立する小形甕(8)は、底部がなく、頸の破損面が磨耗しているので小形甕などを載せる転用器台であろう。カマドの南側と東側では甕(6)と甕(9)が倒れている。貯蔵穴内の甕片(5)は、6と同一個体の上部破片(?)がカマド側から流入したように見える。

〔出土遺物〕1・2は早い時期の漆仕上げ杯。カマドの南東で出土した6と貯蔵穴の5は胎土が類似し、同一個体の可能性もある。7は薄い小形甕。9は焼成前に胴部外面の亀裂を粘土貼り付け・ミガキ調整で補修している可能性がある。補修痕のある土師器は、SG10区ではSI-6にある。遺物量はやや多く、土師器長胴甕が主体で、壺片少量と杯・高杯がわずかにあるが、重複するSI-105など周辺の遺構から混入した古墳中期の遺物もかなり含んでいると考えられる。図示以外の土師器合計623片・5,015gの内訳は、杯357片・2,170g、高杯12片・109g、壺甕類253片・2,726g、甕1片・10g。土師器高杯(11)と波状文がやや雑な須恵器甕(12)は古墳中期後葉の遺物で、重複するSI-105などから混入したものかもしれない。



第42図 権現山遺跡 SG10 区 SI-22 (1) 遺構



第43図 権現山遺跡 SG10区 SI-22(2) 遺物

第26表 権現山遺跡 SG10区 SI-22 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.9 高 4.2 最大 復 13.5	外面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラケズリの後にヨコヘラミガキ、底部に多方向ヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後、全面に放射状ヘラミガキ。内面全面とおそらく外面にも漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多 やや軟質	北西部床直上 口 1/4 周、体 1/3 周 41、一括セクション
2 土師器 杯	口 復 12.8 高 残 2.9	外面は体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデの後にヨコヘラミガキ。内面は磨滅しているが、体部に少し残る状況からみて放射状ヘラミガキの可能性あり。内外面漆仕上げ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗～細粒と透明 細砂少 やや硬質	貯蔵穴内底上 18cm 口 1/5 周 22
3 土師器 杯	口 復 14～16 高 残 3.2	内外面口縁部ヨコナデと外面体部ヨコヘラケズリ。内外面ともに磨滅しているのでミガキの有無が不明。現状では漆仕上げは認められない。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 赤・透明細粒やや 少、白・黒細粒少 やや硬質	中央床上 3cm 口 1/12 周 37
4 土師器 小形土器	口 6.4 高 残 2.7 ～ 2.9 底 4.0	底部の上に粘土紐を一段積んで成形。外底面はナデ。内外面体部にコビオサエ痕の弱い凹凸あり。残存重量 51.7g。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒少 やや硬質	中央東床上 7cm ほぼ完形 口 2/3 周 7
5 土師器 甕	口 復 18.3 高 残 12.5	胴部は外面タテヘラナデ、内面ヨコヘラナデ。内外面で工具が異なり、外面は非常に浅く不明瞭なハケメとみなすこともできるような調整である。内外面の口～頸部にヨコナデ。内面口縁部と外面肩部に 8～9cm 以上の黒斑あり。外面の肩部が暗褐色に汚れ、薄い煤かもしれない。6 と同一個体の可能性あり。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明粗～細粒 多、黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴内底上 31cm 口 1/3 周、頸 5/12 周 23
6 土師器 甕	高 残 17.1 底 7.4 最大 復 21.1	胴部下位に積み上げ休止部あり。外面は上半部タテヘラナデ後に下半部タテヘラケズリ、胴部下端ナデ。外底面に 1 方向または多方向のヘラケズリ。内面は胴部下位をナメヘラナデ後に、中位以上を成形してヨコヘラナデ。胴部下位が被熱しているが、範囲はあまり明確ではない。5 と同一個体の可能性あり。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、黒細粒少 やや硬質	カマド南床上 1～14cm が接合 胴 1/3 周、底全周 44、51
7 土師器 甕	口 復 13.2 高 残 7.9	薄く、頸部が一度開いてから口縁部が更に外反する。外面は頸～肩部にナメヘラナデ後、口縁部ヨコナデ、胴部にやや不明瞭なタテハケ。内面は胴部に横～斜位ヘラナデ後、口～頸部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 透明細粒多、黒粗 粒と白粗～細粒少 やや硬質	カマド西床直上 口 1/6 周 56、一括セク A 東
8 土師器 小形甕	口 12.4 高 残 16.9	外面は胴部タテヘラケズリ後に頸部ナデ。内面はヨコヘラナデ。頸部以上を欠損し、その破面は少し磨耗しているため、この上に小形甕や小形甕を載せる器台として使用した可能性が高い。底部はやや斜位に破損して、このままではまっすぐ立てることができない。床面の凹凸に合わせて置くことで直立させていたものと考えられる。胴下位の外面が被熱赤化して、表面が著しく剥落している。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色礫～細粒 と黒・透明粗～細粒多、金色 雲母少 やや軟質	カマド西床直上で正位 胴全周、頸と底欠 57

第5章 権現山遺跡 SG10 区

9 土師器 甕	口 22.4 高底 30.3 重 10.0 2059	外面胴部タテヘラケズリ後に内外面口縁部ヨコナデ、内面は胴部タテヘラケズリ後にヘラナデ、胴下位ヨコヘラケズリ後に少しタテヘラミガキ。主面に図示した胴部上半外面に2～3mmの粘土を貼ってヘラミガキしているのので、焼成前に生じた亀裂を補修しているかもしれない。外面の約半周に黒斑あり。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 黒・灰色・透明粗～細粒 やや多 やや硬質	カマド東側床上4cmで 横位 口1/2周、頸～底全周 42
10 土師器 甕	高底 残5.8 復9.8	外面は主に縦位のヘラナデ。内面はヨコヘラケズリ後にナナメヘラナデ。残存する上端部よりも上方はタテヘラナデ後タテヘラミガキと思われる。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・灰色・透明粗～細粒と黒 細粒少 やや硬質	P4 内底上7cm 底1/3周 1、P4
11 土師器 高杯	高脚 残9.0 復14.0	外面は脚柱部に縦位と裾部に横位のヘラミガキ。ヘラを止めた短線状の痕跡がよく残る。内面は脚柱部ヨコヘラナデと裾部ヨコナデ。古墳中期の遺物が混入。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明細粒やや多、 赤・黒粗～細粒少 やや硬質	南東床上7cm 中位全周、裾1/12周 2
12 須恵器 甕	口 復31.0 高 残7.5	断面が低い三角形の突縁で頸部を3段以上に区画後、6～8歯工具で右から左へ飾描波状文を描く。残存する下段の区画内は上下2段に施文し、上の段よりも下の段を後で描く。ロクロナデ調整時と波状文施文時のロクロ回転方向は同じ。古墳中期の遺物が混入。	N5(B) 灰 やや緻密 白礫～細粒少 硬質	南東部床上2cm 口1/2周 3
13 石器 編物石	長 15.7 幅 7.5 厚 5.1	やや細長い自然礫をそのまま利用。図示した範囲に暗灰色の煤(?)が薄く付着する。加工・使用痕や被熱痕は見られない。重量816.5g。	7.5Y5/1 灰 緻密で硬質なホルンフェルス (砂岩起源)	南西床上5cm 完形 35
14 石器 編物石	長 18.8 幅 5.8 厚 4.6	節理に沿って縦に長く割れた自然礫をそのまま利用。図の左半部が割れ面。加工・使用・被熱痕や付着物は見られない。重量537.5g。	7.5Y6/2 灰オリーブ 緻密で硬質な緑色の火山岩	中央部床直上 完形 38

SG10 区 SI-23 (第44～48図、写真図版79・193・194)

【位置】 SG10 区南部の18-16 および18-17 グリッド。同じく古墳後期のSI-22が南にある。SI-25→SI-24→SI-23→SI-90→SE-236、およびSI-105→SI-23→SI-90の順に重複する。この重複関係と出土遺物から、古墳中期(SI-25とSI-105)→後期(前葉のSI-24→中葉のSI-23)→平安時代のSI-90→時期不明の井戸SE-236の順が考えられる。古墳時代の柱穴状土坑P-325・326・330・331を切る。この4基の柱穴状土坑はSI-23貼床下で確認し、P-326・331の上方にはSI-23の遺物も存在するので、SI-23より古い柱穴と考えられる。古墳時代の可能性が高いP-314・315も重複するが、この2基はSI-23の貼床に覆われていた確証がなく、SI-23との新旧が不明である。

【規模と形状】 方形の建物跡で、主軸方位はGN-16°30′-E。東西6.05×南北6.04m、残存壁高は最大26cm。掘方は床面から深さ4～10cmで、ローム主体の暗黄褐色土で全体を貼床している。

主柱穴は4本と推定されるが、南東柱穴は確認できなかったためSI-90に破壊されたことが推定される。柱配置は方形で、柱間は東西3.26×南北3.12cm。北東柱穴P1は北側に貯蔵穴があるので、少し南にずれた位置にあるらしい。床面からの深さはP1=51cm、P2=56cm、P3=64cmで、P3に続く少し浅い部分はP3北が深さ36cm、P3東が34cm。P3の状況からみて、柱を建て替えた可能性がある。

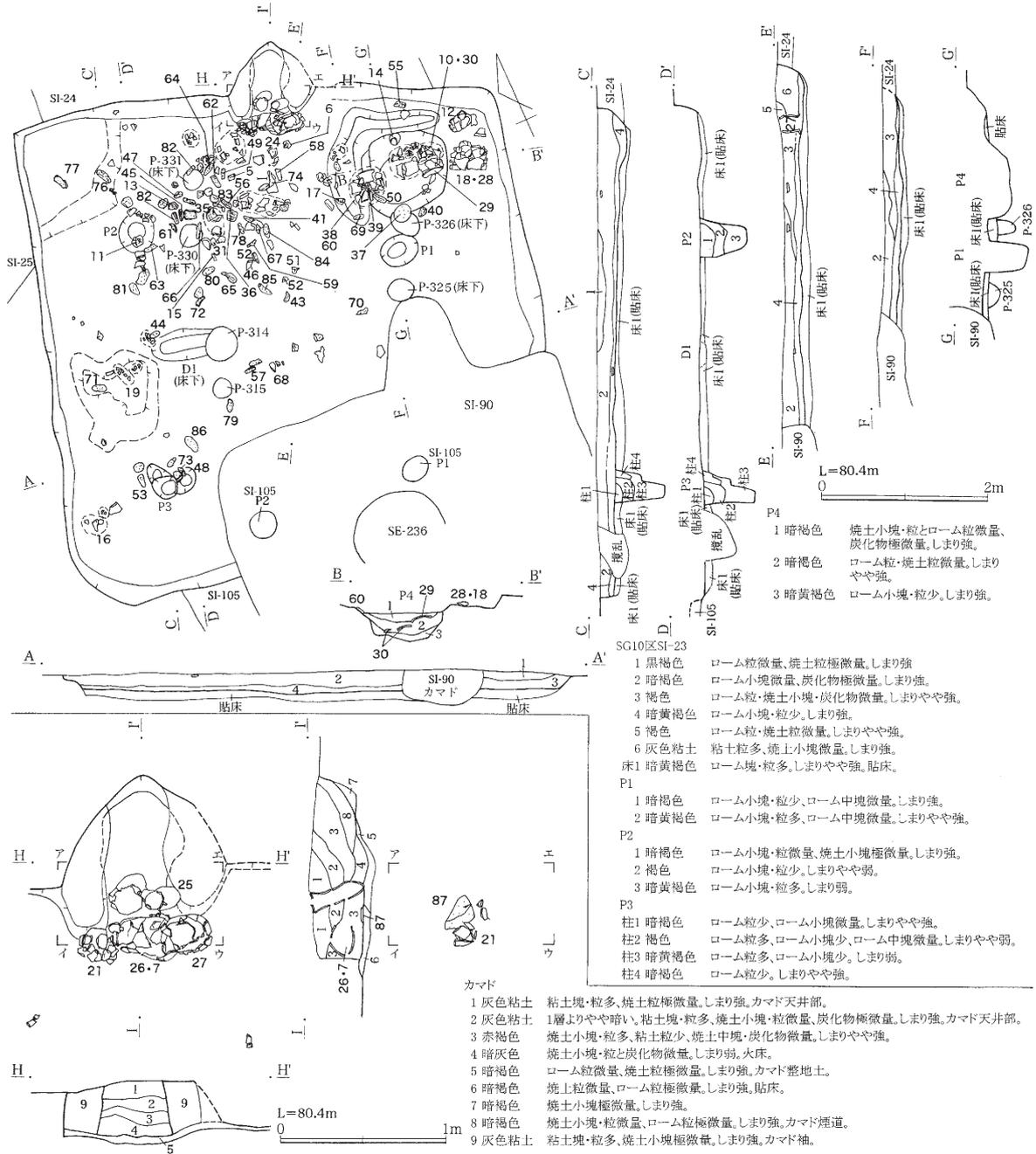
北東隅にある貯蔵穴P4は東西93×南北97×深さ38cmで、北～西側を土手状の盛土が囲む(幅26～44cm、床面から高さ4～8cm)。中央から西部にかけて貼床下で確認した溝D1は間仕切溝の可能性もある。D1の東端はSK-314との前後関係が不詳で、溝の長さ70cm以上×幅36cm、床面からの深さ10～11cm(掘方底から深さ2～3cm)。

【カマド】 北壁中央にある。東西両袖の先端に土師器甕21と27を倒立する(カマド平面図および竪穴断面図E-E')。焚口の天井に架け渡していた土師器甕26は落下し、西袖先端の甕21も胴部下半が折れて焚口付近に落ちていた(カマド下層遺物図)。掛口には2個の土師器甕をかける。カマドに掛けた甕2個のうち、西側の甕は復原・図示できなかった(断面図I-I')。東側の甕はやや小さくて片側が被熱している(25)。両袖幅105cm、煙道先端から袖先端まで96cm(袖先端の土師器甕も加えると約110cm)。貼床土および整地土層の上に灰色粘土で造った両袖の基部が、北壁から外へ55～64cm張り出した掘方の中に入り、煙道の先端は急に上がる。

【覆土】 自然埋没と思われる。テフラ粒などは認められない。

【遺物出土状況】 遺物は多く、特に貯蔵穴付近とカマド内およびカマド南側に集中する。カマドの遺物出土状況はカマドの項で説明した。大形壺(30)は接合できない上半部と下半部が貯蔵穴で出土した。粗製小形土器4点のうち7がカマド焚口付近で出土し、カマド以外の各所で8～10が出土した。

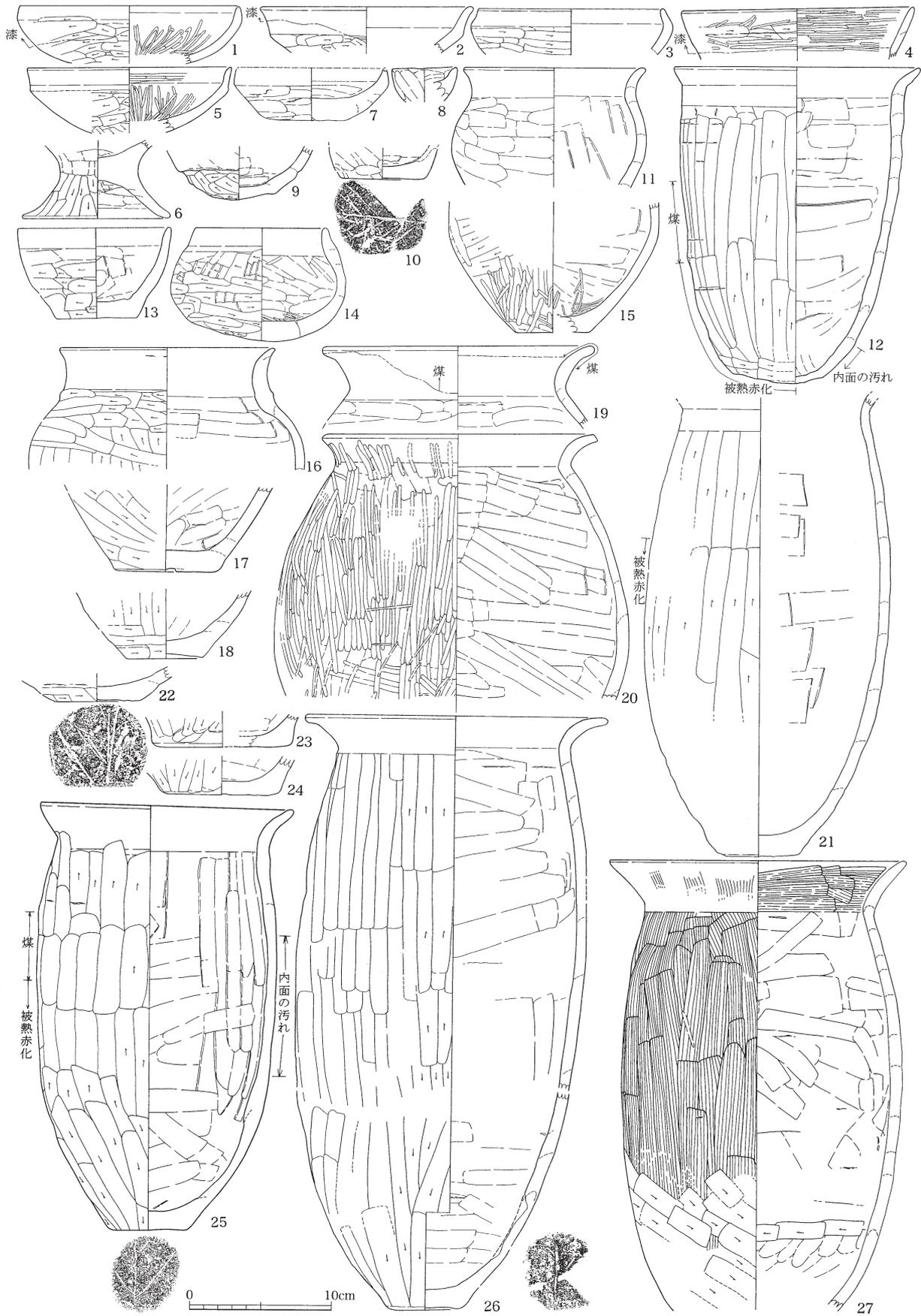
【出土遺物】 14と15は焼成前の亀裂を内面のミガキで補修した可能性がある。補修痕のある土師器は、



第44図 権現山遺跡 SG10区 SI-23 (1) 遺構

SG10区ではSI-6などにある。短脚高杯(6)は杯部内面が炭素吸着の黒色処理。内面へラミガキ後黒色処理の高杯は、SG5区SI-15などにある。12と25は片側から被熱した状況がわかる甕および小形甕。20は磨いた貯蔵用甕で、白色針状物質(骨針)を少量含み、加熱痕はない。白色針状物質(骨針)を含む土師器は、SG10区SI-23・30・37・40・50・57・60・108とSD-43・304bおよび低地包含層、SG5区SK-203にある。22・25・26は木葉底の甕。26は黒雲母が金色に発色した雲母を少量含む。雲母片を含む土師器はSG10区ではSI-12などにある。ハケ調整甕の割合は少ない(27)。大形壺(30)は、壊れた下半部を煮炊きに転用したような汚れがあり、上半部は汚れていない。須恵器脚付壺(35)は、波長の長い波状文を入れた区画帯の下側がやや突線状で、胴中位にカキメを持つ特徴から、関東地方産の可能性を持つ。SG10区の須恵器では円筒形土坑SK-621・SK-553(遺構間接合)に脚付有蓋壺、SI-88に有蓋壺がある。須恵器甕胴部(33)

第5章 権現山遺跡 SG10 区



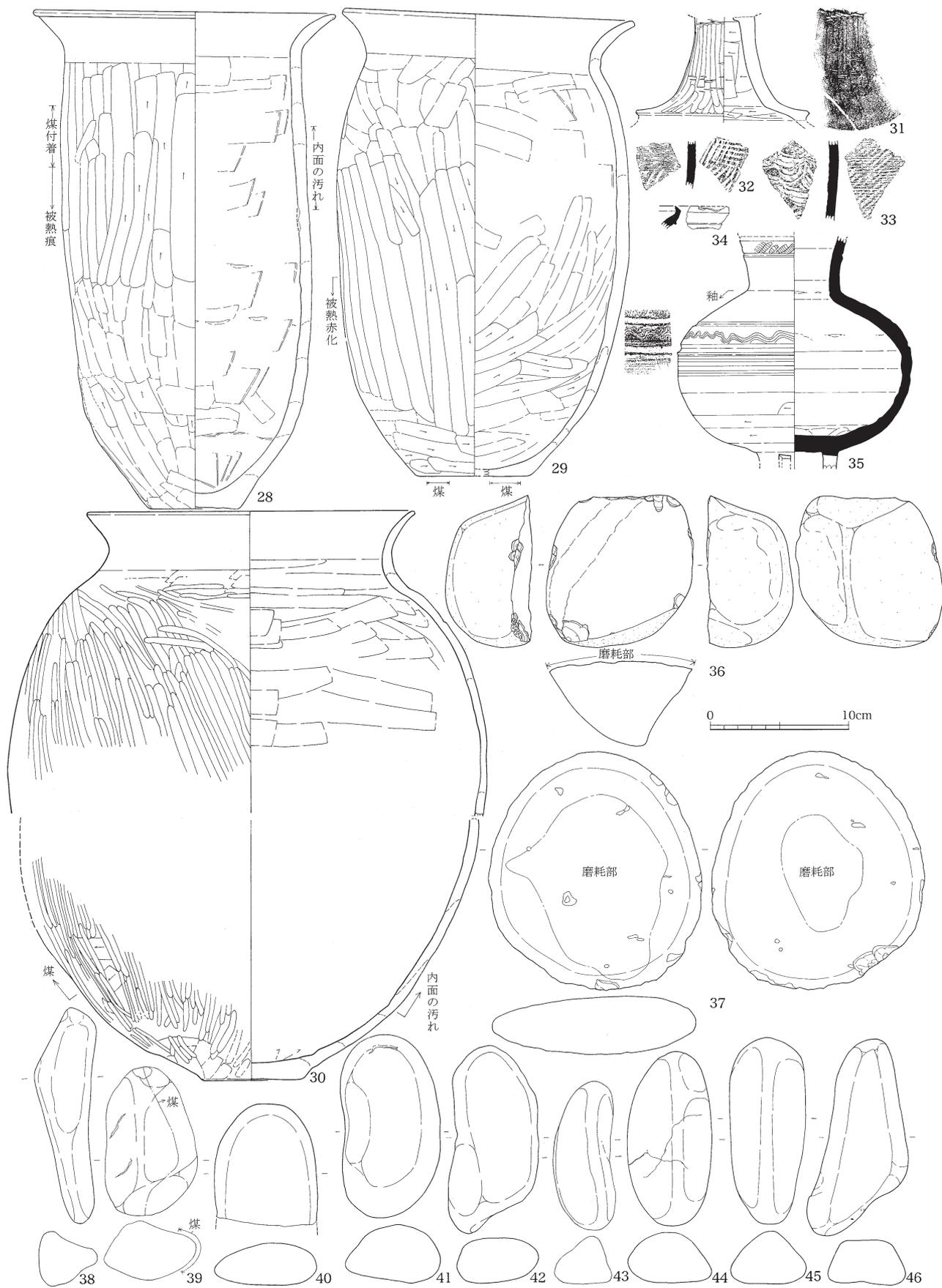
第45図 権現山遺跡 SG10 区 SI-23 (2) 遺物

にやや類似した破片が、中世のSE-377に1片ある。石が多量に出土し、編物石および特徴のある石を図示した。編物石が非常に多い。台石・敲石・砥石も少量ある。

遺物量は極めて多く、土師器甕が主体で、杯類がやや少なく、高杯・鉢・小形土器・甑は少ない。図示以外の土師器および焼粘土塊合計1,567片・13,836gの内訳は、杯673片・3,738g、高杯51片・582g、小形壺2片・26g、壺甕類830片・9,320g、小形土器10片・166g、焼粘土塊1点・4g。図化した以外の土師器壺甕類は底部が7点あり、そのうち長胴甕は2～3点で、他は球胴状と思われた。他に須恵器甕胴部1点(18g)があるが、これはSI-10他で出土している須恵器甕と同一個体の破片が混入したものである。31のように古墳中期の遺物もあり、SI-25とSI-105から混入したとみられる。

第27表 権現山遺跡SG10区SI-23出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復15.3 高 残4.1 最大 復15.7	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面はおそらくヘラナデ後にヨコナデし、主に放射状のヘラミガキ。	10YR3/2 黒褐 やや緻密 透明粗～細粒多、 白・黒細粒少 やや硬質	北東部 口1/6周 北東一括
2 土師器 杯	口 復14.8 高 残3.3	口縁端部が弱く外反する。外面は口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラケズリ。内面ヨコナデ。外面上位と内面に漆仕上げ。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 黒・灰色粗～細粒 やや多、白・赤・透明細粒少 やや硬質	南東部 口1/36周、体1/6周 南東
3 土師器 杯	口 復13.0 高 残3.3 最大 復14.1	外面は体部ナデ後ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。内外面の下位に黒色物質(煤?)が付着する。現状で漆仕上げは見られない。	10YR5/2 灰黄褐 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	北東部 口1/5周 北東
4 土師器 杯	口 復16.0 高 残3.7	外面は口縁部ヨコナデと中位にヨコヘラケズリの後に横～斜位ヘラミガキ。内面は口～体部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。	7.5YR4/2 灰褐 やや緻密 白・黒粗～細粒多、 透明粗～細粒少 やや硬質	カマド西床上1cm 口1/6周 167
5 土師器 杯	口 復14.3 高 残4.6	残存円周が少ないので復原径は参考値。外面は口縁部ヨコナデ後に底部を1方向(?)と体部を横位のヘラケズリ。内面は体部に放射状と口縁部に横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒粗～細粒多、 透明粗～細粒やや多、赤粗粒 少 やや硬質	中央北寄りカマド付近 床上15cm 口1/12周、体1/8周 115
6 土師器 高杯	高 残5.5 脚裾 10.4	外面は脚柱部を上方向にタテヘラナデ後、脚部を下方向にタテヘラケズリ。杯部内面は平滑なヘラナデ(?)で、炭素吸着による黒色処理。脚内面は上部に円周方向のヘラナデ、裾部にヨコナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、黒・赤・透明細粒少 硬質	カマド東南床上13cm 脚部2/3周、脚柱全周 108
7 土師器 小形土器	口 復10.2 高 残3.7 底 復5.6 最大 復10.8	厚く重い。底面も紐を巻いて成形した可能性があり、外底面中央が凹む。外面体～底部ナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 黒・透明細粒少 やや硬質	カマド内床上1cm 体1/6周、底2/3周 165
8 土師器 小形土器	口 復4.5 高 残2.4	紐積み痕がなく、手握ね成形と思われる。底部は厚い。内外面ともにコピナデ。	10R5/6 赤 緻密 赤粗～細粒少 やや硬質	北西部 口5/12周 北西
9 土師器 小形土器	高 残3.8 底 4.5	外面は積み上げ痕を残す雑なナデの後、体部下位と床面に粗いヘラケズリ。内面は円周方向の雑なヘラナデ。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 白・赤粗粒と黒・ 透明細粒少 やや軟質	南西部2片、北東部1片 底3/4周 南西、北東
10 土師器 小形土器	高 残2.2 底 6.4	外底面はカシワと見られる木の葉の裏面圧痕。外面体部はナメナデとコピオサエ。内面はやや雑な円周方向のヘラナデ。内面は炭素を吸着させて黒色処理。	10YR6/2 灰黄褐 やや緻密 白・透明粗～細粒 と黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴内 底1/2周 158、北東
11 土師器 小形甕	口 12.7 高 残8.5 最大 13.5	外面は器面が荒れて調整が不明瞭で、胴部は横位のヘラケズリまたはヘラナデ。内面胴部ヨコヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。被熱痕や煤は見られない。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 赤粗粒やや多、白・ 黒・赤・透明細粒少 やや硬質	北西床上18～20cmで 接合 口3/4周、胴上半全周 41、47、50
12 土師器 小形甕	口 17.3 高 22.1 底 6.2 重 残1199.1	外面は胴部タテヘラケズリ後、外底面に1方向と胴下端に横位のヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面下位が被熱して中位に煤が付き、火に面した側は被熱痕が広い。内面下位にコゲ付着。	10YR6/6 明黄褐 粗い 灰色礫多、白・黒・透 明粗～細粒やや多、赤粗粒少 やや硬質	北東隅床上12cm 口1/2周、底3/4周、 体全周 151
13 土師器 鉢	口 10.8 高 6.4 底 5.6	外底面は多方向ヘラケズリ。外面体部は上部ナデと中～下位ヨコヘラケズリ。内面体部はやや雑なヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄褐 やや緻密 白粗～細粒と赤・ 黒細粒少 硬質	南西床上13cm 口1/18周、底全周 74
14 土師器 鉢	口 9.2 高 8.0 最大 12.2 重 351.0	丸い底部に厚みがあり、底部が不安定。外面頸部にごく弱い段あり。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は下半に円周方向、上半に斜位のナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。断面に示した亀裂が底部の約1/3周に生じて、それを塞ぐために内面を焼成前にヘラミガキしている。外面には補修ミガキ痕がない。外面の半周と内面全体が炭素を吸着して黒色で、意図的に行った可能性がある。	10YR8/4 浅黄 緻密 白・赤・透明粗～細粒 やや少、黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴内 完形 144
15 土師器 壺	高 残9.2 底 復5.2	外底面はヘラナデで、少しヘラミガキも行うらしい。外面胴部はナメヘラケズリ後に、タテヘラミガキを主に下部で行う。内面はヨコヘラナデ後に底面ばかりを集中的にヘラミガキする。焼成前に入った亀裂をヘラミガキで補修した可能性がある。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 赤粗粒と黒・透明細粒 少 やや硬質	中央部床上3cm 底1/3周 65
16 土師器 甕	口 復15.0 高 残8.7	頸～肩部境の内外面が少し厚い。内外面の口～頸部ヨコナデ後に胴部を外面ヨコヘラケズリと内面ヨコヘラナデ。胴部外面はヨコヘラケズリ以前のタテヘラケズリが主に下方で見られる。	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 白・黒粗～細粒や やや多、透明細粒少 硬質	南西隅床上12cm 口5/12周、胴1/4周 1
17 土師器 甕	高 残6.1 底 7.2	外底面は外周に粘土を貼って高さを揃え、やや雑なナデ。外面胴部ナメヘラケズリ。内面底部ナデと胴部ナメコピナデ。内外全面黒色だが、煤や被熱痕はない。	5Y3/1 オリーブ黒 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、白礫と黒細粒少 やや硬質	カマド南床上15cmと北 東床上12cmで接合 底2/3周 111、127
18 土師器 甕	高 残4.8 底 5.3	外底面は1方向のヘラケズリ後に雑なナデで凹み底状。外面はタテヘラケズリ後に下端をヨコヘラケズリ。内面はヘラナデと見られるが、磨耗して詳細不明。外面が被熱している可能性もあるが不明確。	2.5YR6/8 橙 粗い 赤粗粒多、灰色・透明 粗粒と白・黒・赤粗粒少 硬質	貯蔵穴東床上5cm 底3/4周 149、北東



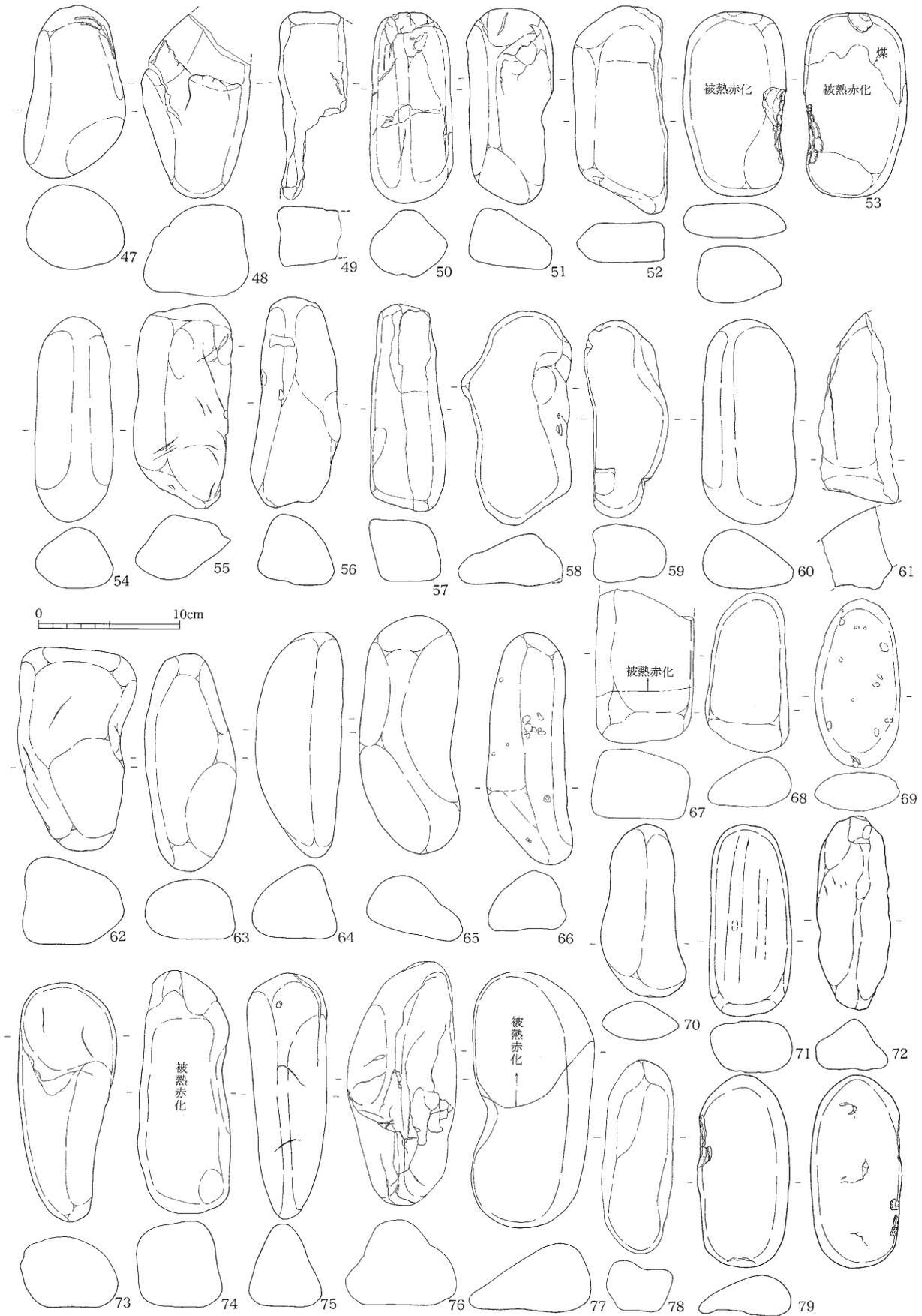
第46図 権現山遺跡 SG10 区 SI-23 (3) 遺物

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

19 土師器 甕	口高 18.9 残 5.9	肩部内外面ヨコヘラナデ後、口～頸部ヨコナデ。口縁部の外面と内面上半に煤が付着する。 [注記]1、25、27、28、北西、K、北東	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや少 やや軟質	南西隅床上 12cmと中央 西寄り床上 2～6cmが 接合 口 1/4 周、頸 1/2 周 注記は左欄
20 土師器 甕	口高 19.2 残 18.7 最大 復 24.8	外面は胴部に縦位(部分的に横位)のヘラナデ調整と口縁部にヨコナデの後、密なタテヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面肩部に 10cm 以上の黒斑が残る。火にかけて使った痕は見られない。 [注記]102、110、112、114、121、K、北西、18.5-17.0 表土	7.5YR7/6 橙 緻密 白・透明礫～細粒やや 多、灰色礫と黒細粒少、白色 針状物微量 やや硬質	中央北寄り床上 11～ 20cm。カマドと北西部 の各 3 片も接合 口 5/6 周、頸～肩全周 注記は左欄
21 土師器 甕	高底 32.6 残 4.7 最大 復 16.9	胴部外面タテヘラケズリと内面ヨコヘラナデの後に頸部外面(おそらく内面も)ヨコナデ。胴下半から底部の外面は被熱で器面がボロボロに剥落して調整不明。 [注記] 164 165 169 K	2.5YR6/8 橙 やや粗い 灰色・透明礫～細 粒と白粗～細粒多、赤・黒粗 ～細粒少 硬質	カマド西袖先端に倒立 (床直上～床上 11cm)。 底部はカマド焚口部に 転落 頸 1/12 周、胴下半～底 全周 注記は左欄
22 土師器 甕	高底 2.3 残 6.0	外底面は木葉の裏面圧痕が少しズレて 2 回付く。外面胴下端ヨコヘラケズリ。内面はナデまたはヘラナデ。	10YR6/2 灰黄褐 粗い 白・灰色礫～粗粒多、 白・黒粗～細粒少 やや軟質	北東壁際床直上 底全周 145
23 土師器 甕	高底 2.4 残 9.8	外底面はやや雑な擦痕とナデ。外面胴下端タテヘラケズリ。内面はヘラナデと思われるが大半が剥落して不鮮明。被熱使用痕ははっきりしないので、甕ではなく大形壺かもしれない。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒多、赤粗粒と黒細粒少 硬質	北東部 底 1/3 周 北東一括
24 土師器 甕	底 7.8	外底面は雑なナデ。外面胴部にやや雑なナメヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横～斜位のヘラナデ。被熱痕は見られない。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明粗～細粒多、 黒細粒と白粗～細粒やや多 硬質	カマド南床上 15cm 底 5/6 周 109
25 土師器 甕	口高 17.6 残 30.0 底重 5.4 1843.0	外底面は浅く不明確な木葉痕。外面口縁部ヨコナデ後に胴部を上方向、胴下部を下方向ヘラケズリ。内面は下部を多方向と上部を主に縦方向のヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面の赤化部は片側が広く明瞭で、外底面まで赤化する。内面の汚れは暗褐色で薄い。	2.5Y7/3 浅黄 粗い 白・透明礫～細粒と黒 粗～細粒多、赤・灰色粗粒少 やや軟質	カマド内床上 25cm 口 2/3 周、胴全周 162、K
26 土師器 甕	口高 21.2 残 41.9 底重 復 5.4	外底面は不鮮明な木葉痕。外面タテヘラケズリと内面ヨコヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。外面胴部全体が被熱するが、元々赤褐色の土器なので範囲が不明確。	5YR5/6 明赤褐 粗い 白・灰色粗～細粒多、 黒・透明細粒と 3mm 以下の赤 粗～細粒やや多、金色雲母粗 ～細片少 軟質	カマド内床上 1cm で斜位。 焚口天井構築材 口 7/12 周、底 3/4 周、 頸全周 165、K
27 土師器 甕	口高 20.6 残 31.7	外面はタテハケ後に胴下位ナメヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は胴下位のやや厚い部分をナデ後ヘラケズリ、中位以上は横～斜位ヘラナデ。口縁部内面はヨコハケ後に軽くヨコナデ。外面胴下半の偏った位置が被熱する。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒粗～細粒と 透明細粒多、灰色礫少 やや軟質	カマド東袖先端に倒立 口全周、胴上～中位全 周 163、K
28 土師器 甕	口高 21.0 残 35.7～ 36.0 底重 6.4	外底面は軽いヘラナデ。外面胴部は下半にタテヘラナデ、上半にタテヘラケズリを主に行う。内面胴部ヨコヘラナデ。内外面口縁部をヨコナデし、外面口縁部が少し肥厚。胴上位内面に薄い汚れ、外面に煤が付着、中位以下の外面が被熱する。残存重量 2052.7g。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや粗い 白粗～細粒多、白・ 灰色礫と黒・透明粗～細粒少 軟質	貯蔵穴東側床上 5cm 口 1/2 周、頸全周、底 全周 149、貯蔵穴周辺
29 土師器 甕	口高 20.9 残 33.5 底重 8.0 2208.1	外底面は多方向ヘラケズリで薄く仕上げる。外面胴部上半ナデ後に中位以下タテヘラケズリ、下端ヨコヘラケズリ。内面胴部は斜～横位ヘラナデ後に胴下位の積み上げ休止部をヘラケズリで薄くする。内外面口縁部ヨコナデ。底部外面に環状に煤が付着。外面下半の被熱は不明瞭。 [注記]149、159、160、161、北東、貼床一括	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、灰色粗粒と黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴東部底直上～底 上 15cm。貯蔵穴東側にも 1 片あり 口全周、底全周、胴下 半 1/5 欠 注記は左欄
30 土師器 大形壺	口高 23.3 残 推約 40 最大 7.3 底重 33.9	外面は胴部ヘラナデとヘラケズリの後に縦～斜位ヘラミガキ。外底面はヘラケズリ。内面はヨコヘラナデだが下半部は剥落して不詳。内外面口縁部ヨコナデ。上半と下半の接点がなく、下半だけ外面の煤と内面の汚れが付くので、下半の破面を割り揃えて煮炊きに転用した可能性がある。	10YR7/6 明黄褐 緻密 白・黒細粒多、白・灰 色礫と赤細粒少 やや硬質	中央北寄り床上 9cm 脚柱全周、脚裾 1/4 周 68、北西
31 土師器 高杯	高底 7.4	脚裾近くに突帯を持つ。外面は密なタテヘラミガキで、ヘラ先が当たった細線状の傷が目立つ。内面はヨコナデ(少し)とヨコヘラケズリ(大半)。古墳中期の遺物で、SI-25 から混入した可能性あり。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・赤粗～細粒やや多、黒・ 透明細粒少 硬質	北西部 胴部片 北西
32 須恵器 甕	高底 3.5	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面は当具痕をうっすらと残し、その上に回転を使わない横位のカキメを浅く施す。	7.5Y4/1 灰 やや緻密 白礫と白細粒微量 硬質	北西部 胴部片 北西
34 須恵器 壺か甕	口高 16～22 残 1.7	口縁部下位外面に突線を持つ。口縁部先端を上折り曲げた稜が鮮明。器厚が薄いので大きな器種ではない。	N5(B) 灰 やや緻密 白・灰色細～微粒 少 硬質	口縁部片
33 須恵器 甕	高底 5.8	外面は斜位の平行叩き目の後にカキメ。内面は同心円文当具痕で、図の上方向に進行する。破面はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)。	N4(B) 灰 やや粗い 白・灰色粗～細粒多 硬質	北西部 胴部片 北西
35 須恵器 脚付長頸壺	高底 16.9 最大 16.7 残 1153.0	頸部下位と肩部の内面に積み上げ痕あり。体部ロコナデ後に外面底部を回転ヘラケズリして脚を接合し、2 方向に長方形の透窓を開ける。肩部は 2 本の凹線間に波長の長い櫛描波状文。その回転は底部のケズリと逆方向。胴中位外面に浅いカキメあり。肩部凹線の下側は低い突線状になる。内面は底部が多方向ナデによる凹凸面になる。肩部外面に緑色の自然礫。	5Y5/1 灰 緻密 白粗～細粒多 硬質	中央部北寄り床上 15cm ほぼ完形 70
36 石器 砥石	長幅 10.8 厚 10.3 底重 6.1	自然礫の隅部を分割したか、自然に割れた破片を使用。広い破面を対象物に当てて研磨し、高い部分がかなり平滑に磨耗。周縁部の小剥離も研磨時の衝突痕と思われる。被熱痕はない。重量 841.0g。	2.5Y7/2 灰黄 やや粗粒の斑も含み硬質な 安山岩	中央北寄り床上 15cm 完形 86
37 石器 台石	長幅 17.1 厚 15.3 底重 4.1	扁平な自然礫をそのまま利用。左図面の中央部が明瞭に磨耗する。右図面はそれほど明確な磨耗はなく、範囲も狭い。緑地の小剥離は意図的なものではなく、使用時に偶然生じたものと考えられる。重量 1212.4g。	5Y6/2 灰オリーブ やや多孔質気味で硬質な安山 岩	貯蔵穴付近床上 10cm 完形 139
38 石器 編物石	長幅 15.5 厚 4.1 底重 4.5	断面が三角形で棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。編物石としては軽い。重量 279.0g。	2.5Y7/3 浅黄 緻密で硬質な流紋岩	貯蔵穴付近(図に記入なし) 完形 154
39 石器 編物石	長幅 10.7 厚 6.6 底重 4.4	自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。片側の側縁を中心として表面に煤が薄く付着する。重量 382.2g。	2.5Y6/1 黄灰 緻密で硬質な礫岩	貯蔵穴付近床上 15cm 完形 141
40 石器 編物石?	長幅 8.8 厚 7.3 底重 3.0	扁平な自然礫が割れたもの。編物石と考えるには疑問もある。表面が非常に弱く被熱しているが、その範囲も赤化の程度も不明確。残存重量 284.4g。	2.5Y6/2 灰黄 緻密で硬質な流紋岩	貯蔵穴付近床上 7cm 端部欠 138
41 石器 編物石	長幅 13.1 厚 7.0 底重 4.3	片方の側縁がくびれる形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 550.0g。	2.5Y6/4 にぶい黄 緻密で硬質なデイスイト	中央北寄り床上 12cm 完形 94

第5章 権現山遺跡 SG10 区

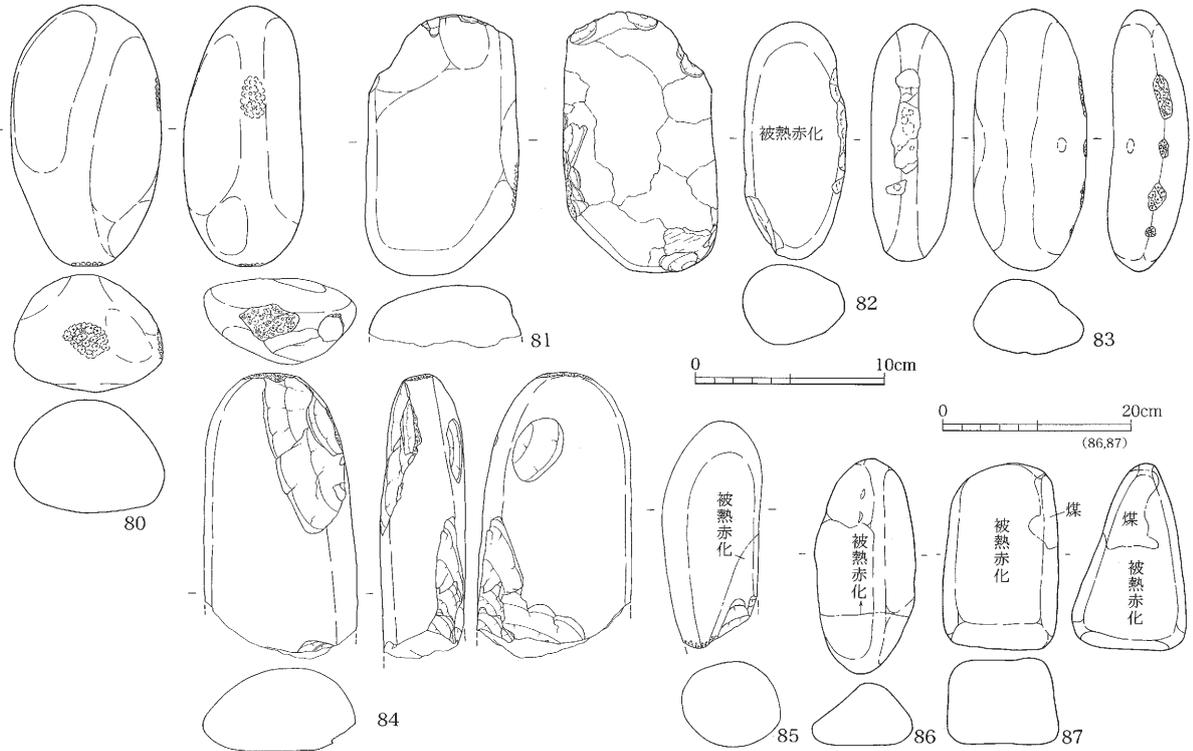
42	石器 編物石	長幅厚 13.4 6.5 3.4	自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 424.4g。	5Y7/3 浅黄 やや粗粒で硬質な角閃石珩岩	中央北寄り床上 17cm 完形 72
43	石器 編物石	長幅厚 10.7 4.4 3.9	断面が隅丸三角形で棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。編物石としては小形で軽い。重量 201.5g。	5Y6/1 灰 緻密で硬質な流紋岩	中央床上 6cm 完形 33
44	石器 編物石	長幅厚 12.5 6.1 3.6	片面に丸味を持つ棒状の自然礫をそのまま利用。中央部の亀裂が両面に現れるほど広く生じているが、敲打痕や使用・被熱痕は見られない。重量 382.4g。	2.5Y6/2 灰黄 比較的緻密で硬質な安山岩	中央西寄り床上 19cm 完形 31
45	石器 編物石	長幅厚 13.4 5.4 4.0	断面が隅丸三角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 383.0g	10YR8/4 浅黄橙 石英斑晶がやや目立つ硬質な流紋岩	北西床上 14cm 完形 73
46	石器 編物石	長幅厚 14.1 7.3 3.4	断面が台形の扁平な自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 431.2g	5Y7/2 灰白 やや粗粒で硬質な流紋岩	中央北寄り床上 9cm 完形 88
47	石器 編物石?	長幅厚 11.9 6.9 5.9	自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。丸味が強く側縁が平行しない短いものなので、編物石と考えるには疑問もある。重量 699.4g。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密で硬質なデイスサイト	中央北寄り床上 14cm 完形 76
48	石器 編物石?	長幅厚 残 12.7 残 7.6 6.4	自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。不整形で分厚く、編物石と考えるには疑問もある。重量 723.9g。	2.5Y6/2 灰黄 緻密で硬質な流紋岩	南西部床上 8cm 端部欠 7
49	石器 編物石	長幅厚 残 13.2 残 4.9 残 4.7	断面が長方形の自然礫をそのまま利用。残っている範囲に加工・使用・被熱痕は見られない。重量 339.9g。	2.5Y7/1 灰白 やや粗粒で硬質な珩岩	中央北寄りカマド付近 床上 16cm 約 1/2 欠 116
50	石器 編物石	長幅厚 13.4 5.8 4.9	断面が隅丸方形または隅丸菱形の細長い自然礫を利用。加工・使用・被熱痕は見られない。両端から少し崩れているのは人為的な使用痕ではないと思われる。重量 496.7g	2.5Y6/3 にぶい黄 緻密で硬質な流紋岩	貯蔵穴付近床上 10cm ほぼ完形 両端部が少し崩れる 140
51	石器 編物石	長幅厚 13.8 6.0 4.5	断面が三角形の自然礫をそのまま利用。図の右側縁部から裏面側にかけての部分がかびれる形。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 469.1g	2.5Y4/2 暗灰黄 チャート起源の緻密で硬質なホルンフェルス	中央北寄り床上 9cm 完形 90
52	石器 編物石	長幅厚 14.6 6.6 3.0	断面が長方形のやや薄い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 479.0g	5B4/1 暗紫灰 チャート起源の緻密で硬質なホルンフェルス	中央北寄り床上 8cm 完形 89
53	石器 編物石	長幅厚 12.9 7.2 4.0	図の上部がやや薄い自然礫。ほぼ全面が被熱し、右図の面には煤付着痕もあり。先端と側面に剥離が見られる。重量 452.4g。	5Y5/1 灰 緻密で硬質な安山岩	P3 付近床上 17cm 完形 4
54	石器 編物石	長幅厚 14.3 5.5 4.3	断面が三角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 476.2g	10YR5/4 にぶい黄褐 緻密で非常に硬質な流紋岩	中央北寄り床上 12cm 完形 105
55	石器 編物石	長幅厚 14.4 6.6 4.5	断面が不整四角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 665.8g	N6/(G) 灰 ホルンフェルス	北東壁際床直上 完形 146
56	石器 編物石	長幅厚 14.7 6.3 5.4	断面が不整三角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 558.9g	2.5Y6/2 灰黄 捕獲岩の目立つ流紋岩または礫岩	中央北寄り床上 14cm 完形 84
57	石器 編物石	長幅厚 残 14.0 5.3 4.7	断面が方形の自然礫をそのまま利用。縦に 2 つに割れているが接合できる。加工・使用・被熱痕は見られない。残存重量 529.8g	2.5Y6/3 にぶい黄 緻密で硬質な流紋岩	中央南寄り床上 5cm の 2 片が接合 完形 12、13
58	石器 編物石	長幅厚 15.1 7.7 3.7	図示した面に丸味が強い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 547.3g	7.5Y6/1 灰 泥岩起源の緻密で硬質なホルンフェルス	カマド付近床上 12cm 完形 107
59	石器 編物石	長幅厚 13.8 5.9 4.6	断面が不整四角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 489.1g	2.5Y6/2 灰黄 緻密で硬質な流紋岩	中央北寄り床上 11cm 完形 92
60	石器 編物石	長幅厚 14.3 6.6 4.4	断面が三角形に近い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 626.2g	2.5Y7/2 灰黄 やや多孔質気味で硬質なデイスサイト	貯蔵穴付近床上 12cm 完形 148
61	石器 編物石?	長幅厚 13.3 5.6 5.7	図の左右両側縁が折損した礫。図示した面には自然面が、図の反対面には古い破面が残っている。このような割れた礫を編物石として使ったかどうかは疑問も残る。加工・使用・焼成痕は見られない。重量 395.9g。	7.5Y5/1 灰 やや粗粒で硬質な石英珩岩	北西床上 13cm 完形 71
62	石器 編物石	長幅厚 14.2 8.3 6.2	図示した面の反対面が比較的平坦になる自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。編物石としてはかなり重い。重量 1106.0g	2.5GY5/1 オリーブ灰 珩岩起源の緻密で硬質なホルンフェルス	中央北寄りカマド付近 床上 15cm 完形 117
63	石器 編物石	長幅厚 15.2 6.3 4.6	断面が楕円形で棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 612.1g	7.5Y6/1 灰 多孔質で硬質な安山岩	北西床上 12cm 完形 44
64	石器 編物石	長幅厚 15.8 6.0 5.2	断面が三角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 650.9g	5Y6/2 灰オリーブ 緻密でやや硬質なデイスサイト	カマド付近床上 17cm 完形 118
65	石器 編物石	長幅厚 16.6 6.9 4.9	平面形・側面形ともに中央部で少し曲がる形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 774.9g	2.5Y6/2 灰黄 やや多孔質気味で硬質な安山岩	中央床上 12cm 完形 63
66	石器 編物石	長幅厚 16.0 5.6 5.3	断面が半円状に近い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 469.6g	2.5Y6/1 黄灰 捕獲岩の多い硬質な流紋岩または礫岩	中央北寄り床上 12cm 完形 66
67	石器 編物石?	長幅厚 残 10.7 6.9 4.8	断面が四角形で棒状の自然礫。編物石と考えるには疑問もある。図上半部の全周が明瞭に被熱赤化している。上端は欠失していて、この破面には被熱痕がない。残存重量 668.4g。	2.5Y6/2 灰黄 緻密で硬質な安山岩	中央北寄りカマド付近 床上 8cm 端部欠 95
68	石器 編物石	長幅厚 11.1 5.8 3.7	棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。編物石としては小形。重量 331.3g。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや多孔質で硬質な流紋岩	中央南寄り床上 7cm 完形 14
69	石器 編物石	長幅厚 11.8 6.0 2.8	薄い棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。編物石としては軽い。重量 250.4g。	5Y7/1 灰白 多孔質気味で硬質な安山岩	貯蔵穴付近床上 13cm 完形 126
70	石器 編物石	長幅厚 12.0 6.0 3.1	扁平な自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。編物石としては軽い。重量 240.8g。	5Y7/2 灰白 緻密で硬質な石英斑岩	中央東寄り床上 7cm 完形 20
71	石器 編物石	長幅厚 13.4 5.7 3.5	断面が長方形気味の自然礫をそのまま利用。素材の岩石に由来する縦方向の浅い凹みが両面に見られ、人為的な加工ではない。使用痕や被熱痕は見られない。重量 485.3g。	5Y6/1 灰 安山岩	南西床上 11cm 完形 24



第47図 権現山遺跡 SG10区 SI-23(4) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

72 石器 編物石	長 残 13.6 幅 5.1 厚 4.4	断面が三角形の自然礫を利用。図の上半部で表裏両側が欠けているが、人為的な敲打による剥離ではない可能性のほうが高い。他には使用・被熱痕は見られない。残存重量 348.4g。	10YR7/6 明黄褐 非常に緻密で硬質な流紋岩	中央床上 12cm 端部欠 61
73 石器 編物石	長 16.7 幅 6.8 厚 5.0	断面が図の上部で半円状、下部で台形状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 722.3g	2.5Y7/2 灰黄 やや多孔質気味で硬質なデイサイト	南西床上 8cm 完形 7
74 石器 編物石	長 17.0 幅 6.7 厚 6.8	断面が四角形で図の右側が少しくびれ、手前側が薄くなる自然礫をそのまま利用。加工・使用痕はない。全面が強く被熱して赤色化している。重量 1053.3g	5YR4/6 赤褐 緻密で硬質な流紋岩	カマド付近床上 11cm 完形 106
75 石器 編物石	長 17.2 幅 5.5 厚 5.8	断面が三角形で、両端よりも図の中央部が高い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 661.3g	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密で硬質な流紋岩	図に記入なし。貯蔵穴 東・No.149 下の石と推定 完形 153
76 石器 編物石	長 17.2 幅 7.7 厚 6.0	断面が不整三角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 966.1g	5Y6/2 灰オリーブ 緻密で硬質なデイサイト	北西床上 55cm 完形 55
77 石器 編物石	長 18.0 幅 8.5 厚 4.9	断面が隅丸二等辺三角形で、図の右側縁が厚い自然礫をそのまま利用。図上部両面の約 1/2 ~ 1/3 がよく被熱して赤色化している。加工・使用痕は見られない。重量 944.5g	2.5Y7/4 浅黄 緻密で硬質な流紋岩	北西床上 22cm 完形 57
78 石器 編物石	長 13.7 幅 4.9 厚 3.7	断面が台形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 381.0g	10Y7/1 灰白 やや緻密(少し多孔質気味)で硬質な流紋岩	中央北寄り床上 12cm 完形 93
79 石器 編物石	長 13.5 幅 6.4 厚 2.8	薄い不整形な自然礫を利用。一側縁の表裏面に剥離あり。これ以外の加工・使用・被熱痕は見られない。重量 355.9g。	5Y6/1 灰 緻密で硬質な安山岩	中央南寄り床上 5cm 完形 11
80 石器 敲石	長 13.7 幅 7.9 厚 6.2	厚手で丸味のある自然礫を利用。図示した下面中央と右側縁上部に敲打痕が残っている。加工・被熱痕は見られない。重量 942.5g	7.5Y7/1 灰白 多孔質気味で硬質な安山岩	中央北寄り床上 8cm 完形 64
81 石器 敲石	長 13.5 幅 7.9 厚 3.1 (最大 3.5)	片面に丸味を持ち、反対面は古い時期の割れ面になっている扁平な自然礫を利用。外周の所々に剥離と敲打痕が見られる。被熱痕は見られない。かなり扁平で幅が広いので、編物石として使った可能性は低い。重量 524.9g。	2.5Y6/1 黄灰 緻密で比較的硬質な安山岩	北西部床上 15cm 完形 39
82 石器 敲石	長 12.5 幅 5.3 厚 4.2	断面が楕円形状の自然礫をそのまま利用。図示した側縁を敲打に用いた痕跡あり。表面全体が被熱して赤色化している。重量 394.0g。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや多孔質気味で硬質な流紋岩	中央北寄りカマド付近 床上 15cm 完形 120
83 石器 敲石	長 13.8 幅 5.9 厚 4.2	両端よりも中央部が少し薄くなる自然礫を利用。図の右側縁で 4箇所敲打痕が見られる。この他に加工・被熱痕は見られない。重量 457.4g。	5Y6/1 灰 緻密で硬質な安山岩	中央北寄り床上 13cm 完形 83
84 石器 敲石	長 残 14.9 幅 8.0 厚 4.4	断面楕円形の自然礫の先端と側縁に敲打痕と、それに伴って生じた剥離も見られる。図下端が折損している形のまま使用したともみられる。下部の剥離は折損時に生じたのであろう。重量 805.9g	2.5Y7/3 浅黄 緻密で硬質な安山岩	中央北寄り床上 14cm 端部欠 91
85 石器 敲石	長 残 11.5 幅 5.2 厚 4.4	断面円形の自然礫。一端部は折れた破損面。その破面は軽く敲打して稜がつぶれ、また図示した剥離が生じている。これらの破面や剥離面とその周辺が被熱して明瞭に赤色化している。残存重量 376.7g。	10YR7/6 明黄褐 緻密で硬質な石英斑岩	中央床上 12cm 完形 32
86 礫	長 22.5 幅 10.5 厚 7.0	断面が三角形の自然礫。全周ともに約 2/3 の範囲が強く被熱して赤色化している。加工・使用痕は見られない。支脚に使った可能性もある。重量 2001.9g。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗粒で硬質な石英斑岩	南西床上 15cm 完形 10
87 礫	長 19.5 幅 12.0 厚 12.0	平面が長方形で、片側が薄くなる形の自然礫。全面が被熱赤化し、一部に煤が付着する。カマド構築材とも考えられる。重量 4200.0g。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや多孔質気味で硬質な安山岩	カマド内床上 10cm 完形 172



第 48 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-23 (5) 遺物

SG10区 SI-24 (第49図、写真図版79・194)

〔位置〕 SG10区南部の18-16および19-16グリッドにある。同じく古墳後期のSI-22が南にある。北に古墳中期のSI-28が近接する。古墳中期SI-25→後期後葉SI-24→後期末葉SI-23→平安時代SI-90→時期不明SE-236の順に重複する。古墳時代と推定される柱穴状土坑P-314・315・325・326・330・331と重複する位置にあるが、SI-24との前後関係は、後期末のSI-23が重複しているために不明である。

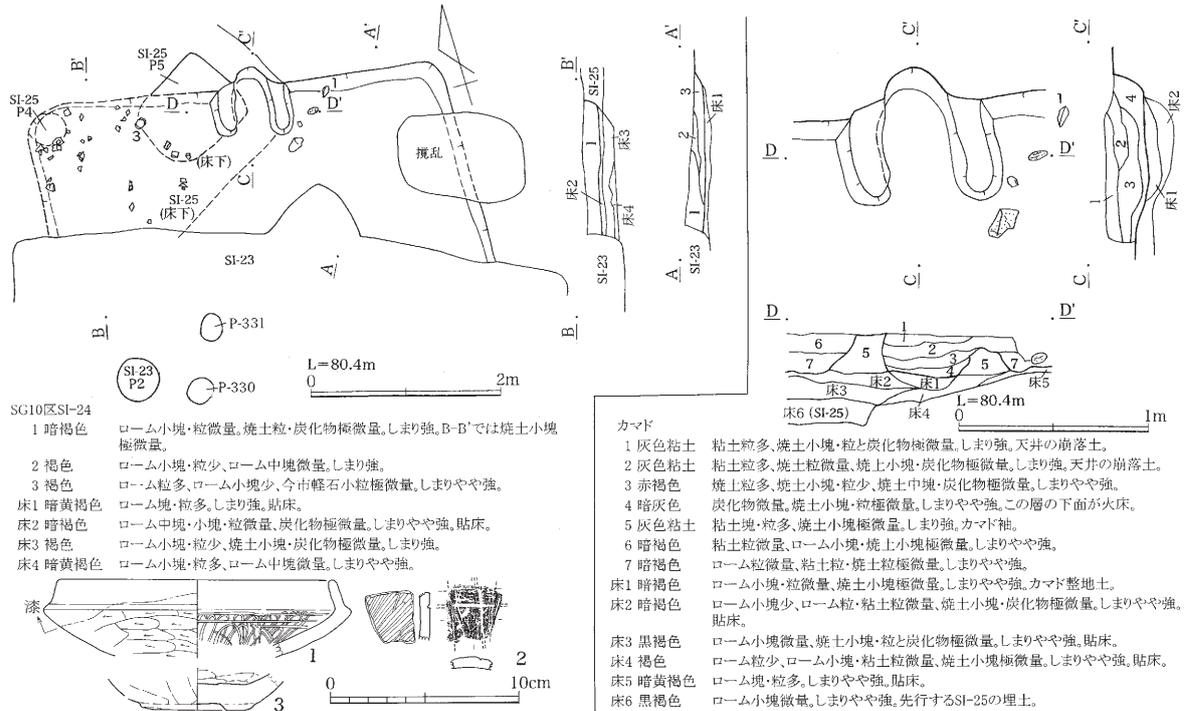
〔規模と形状〕 方形と推定され、主軸方位はGN-6°-E。東西長4.58m、南北の残存長2.26m、残存壁高6cm(東部)～16cm(北西部)。床面に柱穴がないとも考えられるが、北東部の攪乱坑、先行するSI-25の貯蔵穴、後行するSI-23貯蔵穴などが重なるので柱穴を確認できなかったのかもしれない。貼床の厚さは4～16cmで、場所により異なる。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝は、残存部には見られない。

〔カマド〕 北壁中央にある。SI-25跡地の窪みを厚めの床2～5層で整地後、カマド西半を作る。西袖下層はSI-25貯蔵穴P5の窪地があるので貼床が厚い(断面D-D')。両袖幅83cm、煙道先端から袖先端まで73cm。袖粘土や、カマド下部の床1～4層にも焼土小塊を僅かに含むので、作り替えたことを想定できる。火床面に3・4層が堆積後、天井が崩れた1・2層が載る。燃焼部埋土に焼土・遺物が少ない。

〔覆土〕 断面A-A'を見ると自然埋没状態で、1層にカマドから流出した焼土粒を含むこともその可能性を支持する。時期が接近するSI-23に切られるが、そのためにSI-24を人為的に埋め戻していることは、残存する埋土に関しては考えにくい。古墳時代テフラの可能性のある白色粒などは認められない。覆土3層中の今市軽石は、縄文草創期に降下したテフラの粒が地山から流入したものである。

〔遺物および出土状況〕 遺物は少なめで、北西部にやや多い。先行するSI-25からの混入品が多い。図示した以外でSI-24に伴うと考えられる遺物は少量の土師器杯で、他に土師器甕もあると思われるが明確に混入品と識別できない。高杯7片はSI-25からの混入であろう。図示以外の土師器合計187片・1,141gの内訳は、杯96片・347g、高杯7片・30g、鉢4片・46g、小形壺17片・112g、壺甕類63片・606g。

土師器杯(1)は口縁端や体部が磨耗している。この土師器杯がSI-24に伴うと考えれば、SI-24を切るSI-23との時期差は短い。2はSI-25から混入した疑いもある杯で、外面に格子状の刻線がある。3は製作時に胴部が変形したまま焼成した甕。



第49図 権現山遺跡SG10区 SI-24 遺構・遺物

第 28 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-24 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.6 高 残 4.1 最大 復 16.1	外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ後に体部を放射状ヘラミガキ、体部上位に間隔を空けたヨコヘラミガキ。外面上半と内面全体に漆仕上げ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒 多、白細粒少 やや硬質	カマド東側壁際床土 8cm 口～体 1/2 周 1
2 土師器 杯?	高 残 2.8	外面にヘラケズリ、内面に密なヘラミガキ。焼成後に外面に格子状の刻線をおそらく金属の工具で入れている。図の上辺と左右両側は刻線に沿って割れた破面。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白粗粒と褐色粗～細粒少 やや硬質	体部片一部 一括
3 土師器 甕	高 残 2.2 底 5.7	外底面は外周に粘土紐を貼り付け、中央が凹む。外面胴部ナメナメナデ。内面は底部に雑な 1 方向ナデ、胴下端に円周方向のナデ。胴部下位が成形時に歪んで変形した部分あり。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 灰色礫～細粒やや多 やや硬質	北西部壁際床直上 底全周 13

SG10 区 SI-25 (第 50～53 図、写真図版 79・80・194・195)

【位置】 SG10 区南部の 18-16 および 19-16・17 グリッドにある。同じく古墳中期の SI-18 と SI-105 が南にある。古墳中期の建物同士で SI-25 → SI-28・SI-38 の重複関係が推定される（ただし、各重複状況の断面図は作成されていない）。南側では、古墳中期 SI-25 → 後期後葉 SI-24 → 後期末葉 SI-23 → 平安時代 SI-90 → 時期不明 SE-236 の順に重複する。時期不明の溝 SD-283 に切られる。P1 の南東にある径 25cm の小穴（旧名称 SK-423）は攪乱と判明して欠番になり、この小穴の遺物は SI-25 からの混入品として扱った。

【規模と形状】 方形の建物跡で主軸方位は GN-31° -W。東西 7.40 × 南北 7.26m、残存壁高は 8～22cm。主柱穴は 4 本の方形配置で、柱穴の方位は竪穴主軸よりも 5°ほど東に触れる（GN-26° -W）。柱間は東西 3.56m（南側）～3.75m（北側）、南北 3.46m（東側）～3.54m（西側）で、北西主柱穴 P2 が少し外側に出る。床面から柱穴底までの深さは P1=47cm、P2=52cm、P3=64cm、P4=66cm。南西主柱穴 P3 の北側にある P7 は床面から深さ 22cm（断面図 G-G'）。南東主柱穴 P4 の南側にある P8 は貼床除去後に確認した柱穴で、深さは床面から 29cm（掘方から 15cm）。

貯蔵穴 P5 は南東隅にあり、東西 104 × 南北 92 × 深さ 27cm。入口ピットの可能性がある P6 は床面から深さ 32cm。そのすぐ南にある入口施設は、東西 258cm 以上 × 南北 142cm の範囲が床面より 2～6cm 低くなる。入口部が低い点は SI-60 に似る。貯蔵穴 P5 の北側と西側を幅約 60cm・高さ 4～7cm の土手状盛土が囲み、P8 の北側では入口施設のある西方へ少し伸びる。この盛土は、ロームに似た明黄色土の硬い塊を貼り、幅が広いので土手状というより面的な盛土である。壁溝・間仕切溝はない。

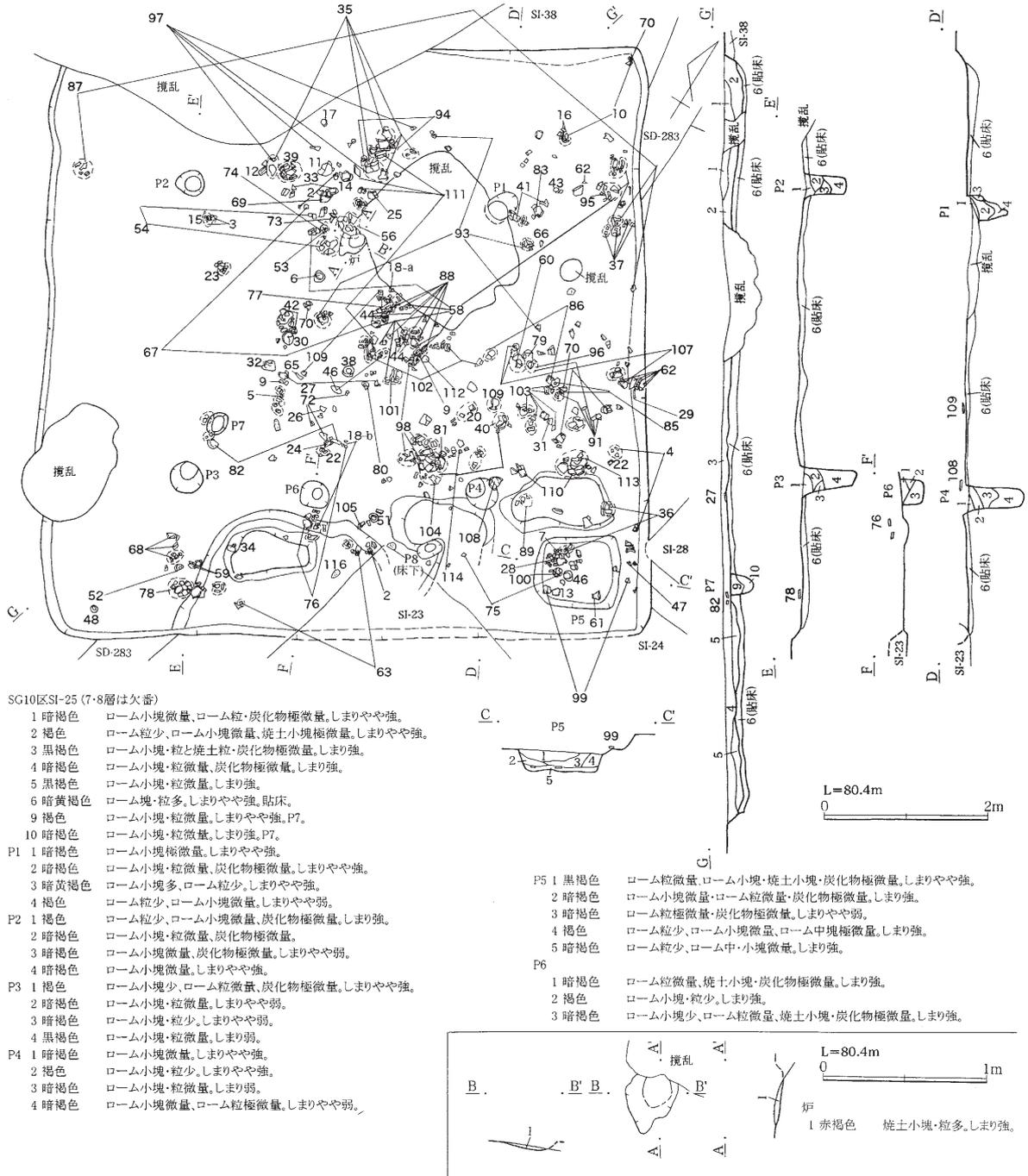
【炉】 竪穴中央から少し北西に寄った位置にあり、北端が攪乱されている。長径残存 68cm × 短径 63cm、床面からの深さ 5～10cm で北東部が深い。焼土の塊・粒で埋まっている。

【覆土】 自然埋没と思われる。テフラの層や粒は認められない。貯蔵穴 P5 の覆土も自然埋没状である。

【遺物出土状況】 貯蔵穴底から少し浮いて残存度の高い高杯脚（61）や杯（7・13・28）があり、最下層上面付近に多い（断面 C-C'）。貯蔵穴北側にも遺物が多く、109・62 のように東壁側の高い位置に大破片があるので、東側から廃棄あるいは流入したものを含む。南西部でも床から少し浮いた遺物群があり、内面を上に向けて割れ広がった状態の高杯杯部がある（76・78 など）。中央部では大攪乱坑の南と北西で床から少し浮いた遺物が多い。重複する古墳後期の建物 SI-23 で出土した中期の高杯は、SI-25 から混入した疑いがある。遺構間接合遺物としては、SI-25 床付近出土品（SI-25-36）が SI-66 上層の破片（SI-66-27）と接合した。SI-25 の遺物破片が、北へ 65m 離れた SI-66 の上層に廃棄または流入したのであろう。

【出土遺物】 出土遺物は非常に多く、SG10 区の遺構中でも最多クラスである。図示以外の土師器合計 1,335 片・12,280g の内訳は、杯 403 片・2,338g、高杯 568 片・4,432g、小形壺 60 片・656g、壺甕類 304 片・4,854g。

図示以外の杯は内斜口縁椀形杯が多い。9・14・24・26・27 は体部下半外面のケズリを省いたために底部が大きい杯。25 の体～底部と 26・27 の底面に木葉痕を残す。高杯・鉢・小形壺もやや多い。40 は貼付口縁の鉢。44 は小形壺の頸部に突帯を持つ。杯部内外面をよく磨く高杯が多く、少し短脚化した高杯も含む。



SG10区SI-25 (7・8層は欠番)

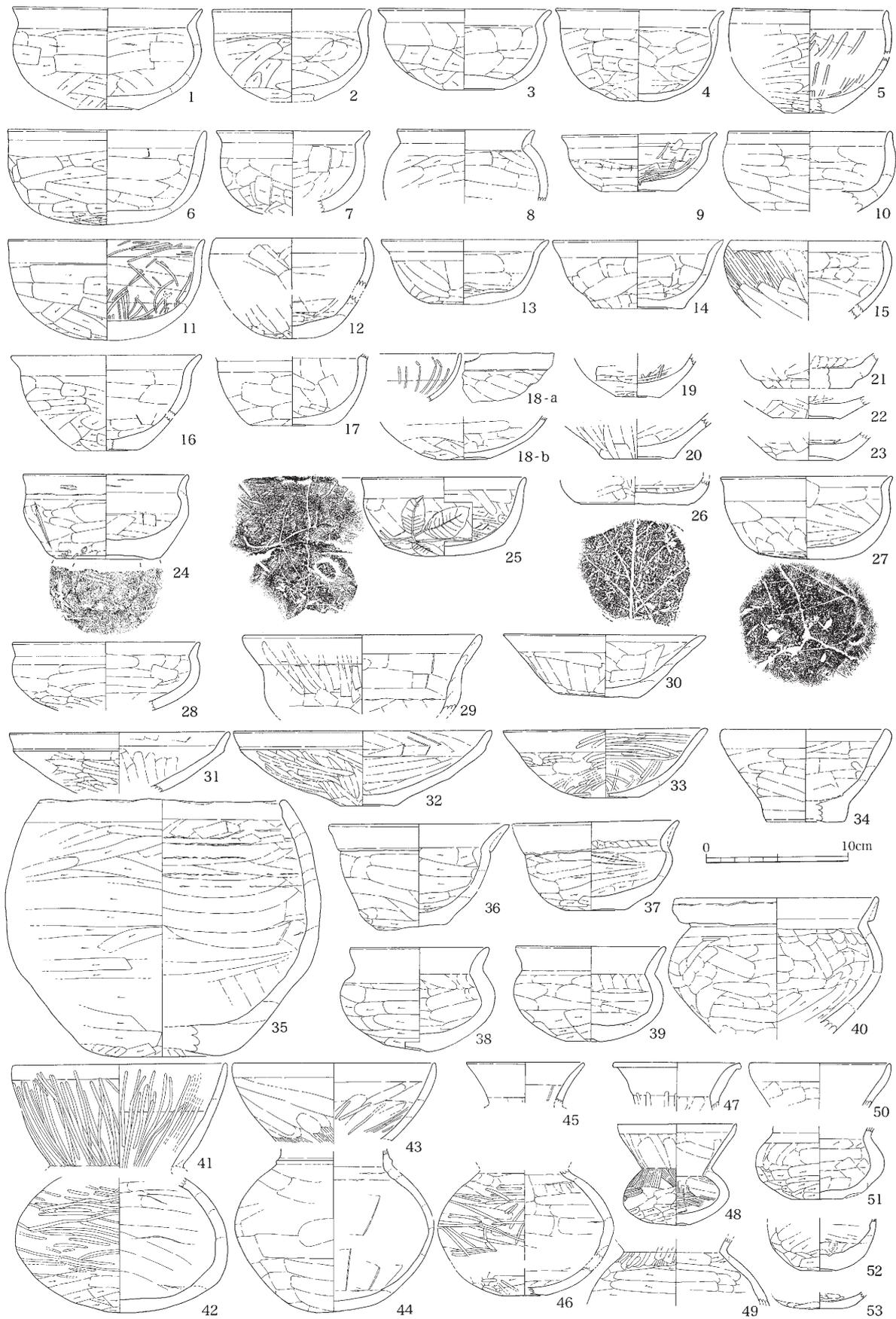
- 1 暗褐色 ローム小塊微量、ローム粒・炭化物極微量。しまりやや強。
- 2 褐色 ローム粒少、ローム小塊微量、焼土小塊極微量。しまりやや強。
- 3 黒褐色 ローム小塊・粒と焼土粒・炭化物極微量。しまり強。
- 4 暗褐色 ローム小塊・粒微量、炭化物極微量。しまり強。
- 5 黒褐色 ローム小塊・粒微量。しまり強。
- 6 暗黄褐色 ローム塊・粒多。しまりやや強。貼床。
- 9 褐色 ローム小塊・粒微量。しまりやや強。P7。
- 10 暗褐色 ローム小塊・粒微量。しまり強。P7。
- P1 1 暗褐色 ローム小塊極微量。しまりやや強。
- 2 暗褐色 ローム小塊・粒微量、炭化物極微量。しまりやや強。
- 3 暗黄褐色 ローム小塊多、ローム粒少。しまりやや強。
- 4 褐色 ローム粒少、ローム小塊微量。しまりやや弱。
- P2 1 褐色 ローム粒少、ローム小塊微量、炭化物極微量。しまり強。
- 2 暗褐色 ローム小塊・粒微量、炭化物極微量。
- 3 暗褐色 ローム小塊微量、炭化物極微量。しまりやや弱。
- 4 暗褐色 ローム小塊微量。しまりやや強。
- P3 1 褐色 ローム小塊少、ローム粒微量、炭化物極微量。しまりやや強。
- 2 暗褐色 ローム小塊・粒微量。しまりやや弱。
- 3 暗褐色 ローム小塊・粒少。しまりやや弱。
- 4 黒褐色 ローム小塊・粒微量。しまり弱。
- P4 1 暗褐色 ローム小塊微量。しまりやや強。
- 2 褐色 ローム小塊・粒少。しまりやや強。
- 3 暗褐色 ローム小塊・粒微量。しまり弱。
- 4 暗褐色 ローム小塊微量、ローム粒極微量。しまりやや弱。

- P5 1 黒褐色 ローム粒微量、ローム小塊・焼土小塊・炭化物極微量。しまりやや強。
- 2 暗褐色 ローム小塊微量、ローム粒微量、炭化物極微量。しまり強。
- 3 暗褐色 ローム粒極微量、炭化物極微量。しまりやや弱。
- 4 褐色 ローム粒少、ローム小塊微量、ローム中塊極微量。しまり強。
- 5 暗褐色 ローム粒少、ローム中・小塊微量。しまり強。
- P6 1 暗褐色 ローム粒微量、焼土小塊・炭化物極微量。しまり強。
- 2 褐色 ローム小塊・粒少。しまり強。
- 3 暗褐色 ローム小塊少、ローム粒微量、焼土小塊・炭化物極微量。しまり強。

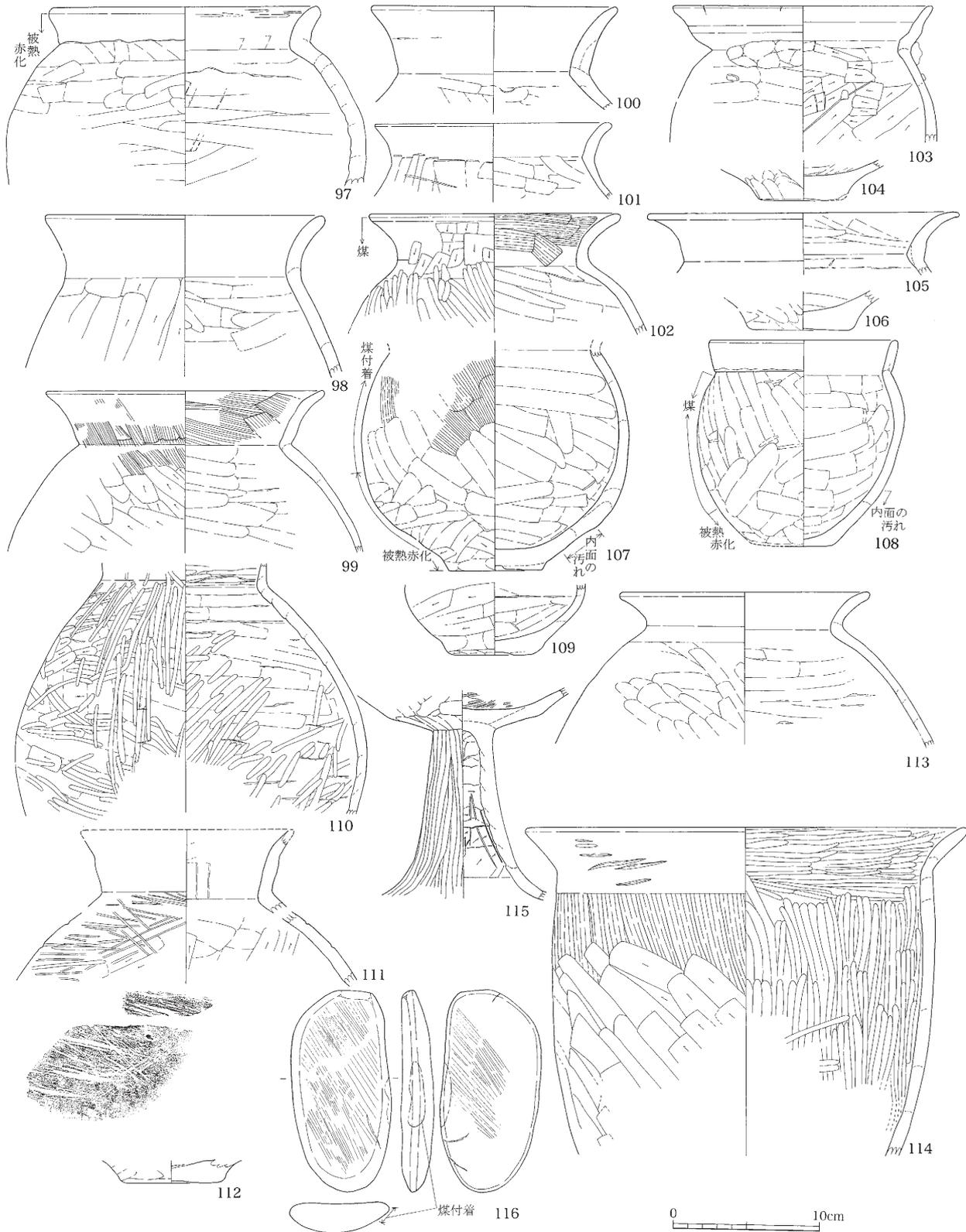
第50図 権現山遺跡 SG10区 SI-25 (1) 遺構

脚に貫通孔や非貫通孔を持つ高杯が3点ある(85・87・94)。非貫通孔はSG5区SI-5・15・116と、北関東自動車道調査A区SI-080・139・遺構外(谷中・大島2001,pp.178,211,436)、杉村遺跡北関東道27・70号住居(藤田・安藤2000)にある。貫通孔はSG10区ではSI-16とSK-346・SK-903や低地古墳時代遺物包含層にあり、SG5区SI-5、権現山遺跡北部のSG1区居館周縁攪乱、北関東自動車道調査A区SI-081・229・326にもある。

壺甕類は割合としてはやや少なめで、貼付口縁や二重口縁・受口状口縁など異形のものが目立つ。36と37は類似した鉢で、36はSI-66との遺構間接合品。97・108は頸部外面に接合痕を残す。107と109は凹底状の小形甕。110は外面の偏った位置にヘラミガキを施すが、補修痕などは明らかでない。111は壺



第51図 権現山遺跡 SG10区 SI-25(2) 遺物



第53図 権現山遺跡 SG10 区 SI-25 (4) 遺物

の肩部外面を研磨具に転用したと思われる焼成後の平行刻線がある。97の丸い甕と35の大形鉢は厚さ・胎土・調整がよく似ている。貼付口縁の鉢(36・37・40)は、古墳時代土坑SK-261bにもある。

補修痕跡のある土師器が目立つ。9は焼成前に生じた亀裂をミガキで補修したが、内面の亀裂を消しきれ

なかった不良品の杯。54は脚裾部内外面と杯底部内面の亀裂を粘土やヘラミガキで補修している。103はS字形（受口状）口縁部が成形時に外へ開き始めたので粘土塊を貼り付けて支え、口縁部ヨコナデも不十分なまま焼成した不良品の甕。受口状口縁の壺はSG10区SI-19aなどにある。補修痕のある土師器は、SG10区ではSI-6などにある。補修痕以外に、焼成剥離（2）や木葉痕の消し忘れ（26・27）も不良品として評価できるかもしれない。25は側面～底面に3枚の木葉痕を最後に押しつけた杯で、製作者が自家消費用に作ったことを想像させる。116は非常に硬質なホルンフェルス製の砥石で、SG10区SI-12などに例がある。

長脚化した高杯（115）やハケ調整大形甕（114）は、SI-24などから混入した古墳後期の遺物と考えられる。

第29表 権現山遺跡SG10区SI-25出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復13.3 高 7.1 底 復4.5	薄く軽い。外底面はナデ仕上げで凹底状。外面は体部上位ナデ後に中～下位ヘラケズリ、口～頸部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面の広い範囲に煤が付着する。 [注記]182、183、189、一括、北一括	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 黒粗～細粒と透明細粒少 やや硬質	北東壁際床直上～床上 14cm 口1/2周、底1/8周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復11.2 高 残6.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を横～斜位ヘラケズリ。内面は体部に丁寧な横～斜位ナデの後、口縁部ヨコナデ。外底面の剥離破損部は、胎土中に混在していた草本植物の部分で剥がれているので、焼成時に生じた亀裂から破損したのかもしれない。内外面の体部中～下位に漆仕上げの可能性あり。	7.5YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	北西床上5～7cmと南 東床上7cmで接合 口1/8周、体1/6周 17、31、316、南東一括
3 土師器 杯	口 復12.0 高 5.7 底 4.2	外底面は1方向ヘラケズリでほぼ平底。外面体部は上半ナデ後に下半ヘラケズリ。内面底部に1方向と体部に横位のナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 黒・透明粗～細粒少 やや軟質	中央西部床直上の2片 が接合 口1/4周、底全周 49、50
4 土師器 杯	口 復11.7 高 6.4	非常に薄く軽い。外面は体部上位ナデ後に中位以下ヘラケズリ。内面は底部に1方向、体部を雑な横位のヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。 [注記]38、259、371、一括、上面、東中上面	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤・灰色・透明粗 粒と白粗～細粒少 やや硬質	北東床直上。南西床直 上～床上6cmや東中央上 面にも破片あり 口1/2周、頸2/3周 注記は左欄
5 土師器 杯	口 復11.0 高 残7.3 底 復3.5 最大 復11.4	外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面体部は上位ナデ後に中位以下をヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデと体部ナメヘラミガキ。外面体部に焼成時の大きな黒斑がある。	2.5YR7/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明粗～細粒少 やや硬質	中央南部床上10cm 口1/6周、頸1/3周、 底2/3周 82、A-A' キン辺
6 土師器 杯	口 13.9 高 6.7 重 残224.6	底部がやや厚く、体部下位が薄い。外面は口縁部ヨコナデ後に底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデと底部1方向ヘラケズリの後、口縁部ヨコナデ。内面のヘラミガキは現状では認められない。11と類似。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤・透明粗～細粒 多、白・黒粗～細粒少 やや軟質	中央西部床上3cm 口2/3周 48
7 土師器 杯	口 復10.6 高 残5.8	外面は体部上半ナデと下半ヘラケズリの後、口～頸部ヨコナデ。内面は体部に横位と底部に1方向(?)のヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや緻密 黒粗～細粒多、白・ 赤・透明粗～細粒少 軟質	貯蔵穴底上6cm 口1/6周、頸1/3周 382
8 土師器 杯	口 復9.6 高 残5.0 最大 復11.4	外面は口～頸部ヨコナデ、肩部ヨコヘラケズリ。外面下半はヘラナデかナデのようであるが、磨滅して不明確。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや多、白礫と赤・黒細粒少 やや硬質	東部中央上面 口1/6周、肩1/4周 東中上面
9 土師器 杯	口 10.6 高 4.0 底 5.2 重 残139.5	底部内外面はほぼ1方向の密なミガキで、焼成前に底部内面に生じた亀裂を補修している。結果として内面の亀裂を塞ぐことができていないが、外面まで貫通することは回避できている。体部外面ナデと内面ヨコヘラケズリの後、口縁部内外面ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、黒・ 透明粗～細粒と白細粒少 やや硬質	中央床上2cm 口11/12周、体～底全 周 357
10 土師器 杯	口 復11.5 高 残5.7 最大 復11.9	外面が丸底状で内面は平底状。内外面体部ヨコヘラナデ、内面底部に1方向か多方向のヘラナデ。内外面の口縁部をヨコナデし、体部との境に弱い稜を持つ。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白粗～細粒と赤・ 黒細粒少 軟質	北東中央床上21cmと北 壁際床上15cmが接合 口1/12周、体1/4周 174、368
11 土師器 杯	口 13.8 高 7.1 重 残300.4	下半部が厚い。内外面の口～体部境にほとんど稜を持たず、口縁が弱く外反する。外面は口縁部ヨコナデ後に、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に口縁部をヨコナデ。内面の体部に縦～斜位と口縁部に横位のヘラミガキ。6と類似。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明粗～細粒少 やや硬質	北西床上8cmで横位 口11/12周、体全周 20
12 土師器 杯	口 復10.2 高 残6.8	口縁部破片と底部破片の接点がないので器高は推定。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヘラナデ、底部多方向ヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 硬質	北西床上2～8cm 口1/9周、底全周 16、24
13 土師器 杯	口 復11.7 高 4.6 底 6.0	薄く軽い。外底面に多方向ヘラケズリ。外面は体部に横～斜位ナデ、口～頸部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のナデ、口縁部ヨコナデ。	2.5YR7/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 黒・透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上14cm 口1/6周、底5/12周 377
14 土師器 杯	口 12.0 高 4.8 底 6.1 重 残148.9	頸部の稜が内面で特に明瞭。外底面は多方向ハケメの後に雑なナデで、潰れて貼り付いた粘土カスが外周部で目立つ。外面は体部下端で縦位、その上側で横位のナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	10R6/8 赤橙 やや粗い 白・黒・赤粗～細 粒多、透明細粒少 やや硬質	北西床上8cm 口5/6周、体全周 16
15 土師器 杯	口 復10.8 高 残5.5 最大 復11.8	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を非常に浅いナメハケ、下半部をナメヘラケズリ。内面は下半部ナメヘラナデ後に上半部をナデ調整し、口縁部ヨコナデ。外面の約半周に焼成時の黒斑あり。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤・透明粗～ 細粒と黒細粒少 やや硬質	中央西部床直上 口5/12周 49、西一括
16 土師器 杯	口 復13.4 高 推6.7 底 復4.3	体～底部破片の接点がないので器高は推定。外底面はナデでほぼ平坦。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は底部多方向ヘラナデ、体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗粒やや多、白・ 黒・赤細粒少 やや硬質	北部床上20～21cm 口1/36周、底1/3周 173、175
17 土師器 杯	高 残4.9 底 復5.9	頸部内面で明瞭に外へ折れる。外面は体部ナデ後に体部下端ヨコヘラナデ、外底面を1方向ヘラケズリ、頸部ヨコナデ。内面は体部を横～斜位ヘラナデ後に頸部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・赤粗粒と 白・透明細粒少 やや硬質	北西壁際床上13cm 底1/3周 5

第5章 権現山遺跡 SG10 区

18-a-b 土師器 杯	口 復 12~14 高 推 4~5 底 3.5	口縁部は1片だけで、径を出すには残存度が小さく、体部との接点もない。非常に薄く軽い。外底面は多方向ヘラケズリで凹底。外面体部ナデ後に下端部を横~斜位ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ後に口縁部ヨコナデと疎らなタテヘラミガキ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白粗~細粒少、透明細粒微量 やや硬質	南部床上3~10cm 口1/8周、底5/6周 94、117、156、328
19 土師器 杯	高 残 3.1 底 3.0	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内面底部は多方向ヘラケズリの後に多方向ヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗粒多、白・黒・透明細粒少 硬質	遺構上面 底全周 上面
20 土師器 鉢	高 残 3.2 底 4.8	外底面は中央を少し削って凹底状にする。外面体部タテヘラナデ。内面底部は多方向ヘラナデ。外面の大半が焼成時の黒斑。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・透明粗~細粒と白細粒やや多、白礫と黒細粒少 やや硬質	中央東部床上17cm 底2/3周 272
21 土師器 杯	高 残 2.4 底 復 5.8	外底面が円板状に約6mm突出する。外底面は軽いナデで、5×3mm大の種子圧痕(?)も見られる。外面体部ナデ。内面底部は多方向のやや雑なナデ。	2.5YR/2 灰白 やや緻密 白・透明細粒やや少、赤粗粒と黒細粒少 硬質	南東壁付近床上7cm 底5/12周 260
22 土師器 杯	高 残 1.7 底 4.8	外底面は多方向ヘラケズリで凹底。外面体部下端ヨコヘラケズリ。内面底部に多方向ヘラナデ。	10YR4/1 褐灰 粗い 灰色礫と白礫~細粒多、黒・透明粗粒少 硬質	中央南部床上5cm 底全周 89
23 土師器 杯	高 残 2.1 底 4.2 最大 残 8.6	外底面は円周方向のヘラケズリで凹底状。外面体部は横~斜位ヘラナデ。内面底部は円周方向のヘラナデ。外面に不規則な被熱赤化と煤付着が見られる。	5YR6/6 橙 粗い 赤粗~細粒多、黒・透明細粒やや多、黒粗粒と白細粒少 やや軟質	中央西部床上1cm 底全周 51
24 土師器 杯	口 復 11.6 高 5.9 底 7.0	外底面は中央部ハケメ(?)後に外周を高くして全体をナデ調整し、乾燥時に敷いた草本植物の痕が表面に残る。外面は体部ナデ後に口~頸部ヨコナデで、縦位の不規則な凹み、体部下位の不規則な刺突、口縁部の平行短線状傷など、製作時の不手際がそのまま残る。内面は底部に多方向と体部に横位の雑なヘラナデの後に口~頸部ヨコナデ。焼成時に内外全面が黒褐色化している。	2.5Y4/1 黄灰 やや緻密 白・透明細粒やや多、白・赤粗粒少 硬質	中央南寄り床上6cm 口1/8周、底7/12周 90
25 土師器 杯	口 復 11.4 高 5.5 底 8.1	外面の体~底部境に高さ2~3mmの段がある。外底面は凸面形で、大きな木葉痕が付いていたのを軽いナデでほとんど消している。外面体部ナメナデ後に口縁部をヨコナデ。その後改めて体部から底部にまたがるように3枚の木葉とそれを付けた枝の痕を押し付けている。内面は底部に1~2方向と体部に斜位のヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。26・27と同工品。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白・透明細粒やや多、赤粗粒と黒細粒少 硬質	北西床上13cm 口1/3周、底7/12周 13
26 土師器 杯	高 残 2.0 底 7.6	外面の体~底部境に高さ2mmの浅い段がある。外底面には木葉の裏面圧痕が向きを変えて2回付き、カシワの葉と思われる。外面体部ナデ、内面は底部に1方向のヘラケズリ、体部に横~斜位ヘラナデ。25・27と同工品。	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 白・赤粗~細粒多、白礫と黒・灰色・透明粗~細粒やや多 やや硬質	中央南部床上7cm 底2/3周 101
27 土師器 杯	口 11.9 高 5.8 底 8.1	外面の体~底部境に高さ1mm程の浅い段。外底は凸面でケズリを行わず、2~3回程方向を変えて木葉裏面痕があり、7×3mmの紡錘形の種子圧痕も残る。外面上半ヨコナデ後に体部ナメナデ。口縁部の水平ラインに対して少し傾くナデで、口縁部に歪みが生じる。内面は底部1方向と体部に斜~横位のヘラケズリの後、口~頸部ヨコナデ。南西部出土破片は破損後に黒色化(5Y2/1)。25・26と同工品。	5Y2/1 黒 やや緻密 白・赤粗~細粒多、白礫と黒細粒少 やや硬質	南西床上4cmと中央床上7cmと北東上面 口1/2周、底全周 73、109、A-A' 東、北東上面
28 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 4.8	外面は体部に丁寧なナデ後に口~肩部ヨコナデと体部下位ナメヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラナデ。内外面に数cm以上の黒斑あり。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・透明細粒やや多、白礫と赤粗粒少 硬質	貯蔵穴底上4~9cmの2片が接合 口1/3周 386、395
29 土師器 杯	口 復 16.6 高 残 5.5	全体の調整が粗雑。外面は下半を横~斜位ナデの後に上半を縦~斜位の深いヘラナデで調整して凹凸が生じ、口縁部ヨコナデ。内面は下部をナメヘラナデ後に中位以上を積み上げてヨコヘラナデし、口縁部ヨコナデ。	10YR6/6 明黄褐 やや粗い 赤粗粒と白細粒多、黒・灰色・透明粗~細粒やや少 やや硬質	中央東壁際床上23cmと北東部上面が接合 口1/3周 223、北東上面一括
30 土師器 杯	口 14.1 高 4.3 底 5.8	外底面は雑な多方向ヘラケズリで凹凸を持つ。外面は体部に主として縦位のナデ後、体部下端に横位のヘラナデまたはヘラケズリ。内面は体部にナメヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	10YR8/6 黄橙 やや粗い 赤・黒・透明粗~細粒やや多、白細粒少 軟質	中央西部床上4cm 口2/3周、底全周 58
31 土師器 杯	口 復 15.4 高 残 4.2	外面は体部にやや雑なナメヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。内面は体部にナメヘラナデ、口縁部にヨコヘラナデ後ヨコナデ。32と同工品。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗~細粒多、白礫と白・黒・透明粗~細粒少 やや硬質	中央東部床上6cm 口1/7周 268
32 土師器 杯	口 復 18.0 高 残 5.3 底 3.6	外底面は雑なヘラケズリでわずかに凹面状。外面は体部にやや雑なナメヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横~斜位のヘラナデ後、口縁部を軽くヨコナデする。ヨコナデ以前にヘラナデした凹凸がよく残っている。31と同工品。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗~細粒多、白・黒・透明粗~細粒少 やや硬質	中央西部床上5cm。攪乱西の2片も接合 口1/3周、底3/4周 67、一括、攪乱西
33 土師器 杯	口 復 14.2 高 4.8 底 復 3.4	薄く軽い。外底面はヘラケズリによりわずかに凹面状。外面は体部ナデ後ナメヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後に部分的なヘラミガキ。内面は体~底部に多方向と口縁部に横位のヘラミガキ。接合できた3片中の1片だけは破損後に黒色化。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗粒多、透明粗粒と白・黒・赤細粒やや多 やや硬質	北西床上3~10cm 口5/12周、底1/3周 27、29、30
34 土師器 鉢	口 復 11.4 高 6.5 底 復 5.6 最大 復 12.0	口縁部と底部が厚い。外底面が円板状に突出して底面は多方向ナデで中央が少し凹む。外面は体部ナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面の底部だけが激しく剥落し、底部を傷めるような使い方をした可能性がある。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 赤粗~細粒多、白・透明粗~細粒と黒細粒少 硬質	北陽床上7cmで横位 口5/12周、底1/3周 331、一括、A-A' キン辺 硬質
35 土師器 鉢	口 復 17.0 高 18.0 底 7.0 最大 22.0	外底面は雑な多方向ヘラケズリで、ごくわずかに凹む。外面肩部ナデ後にヘラケズリ、内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。口縁部は水平に仕上げられておらず、少し波打っている。体部から底部にかけて、かなり厚く重い。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗~細粒と白細粒多、白・赤礫と黒粗~細粒少 やや硬質	北西床上1~12cm 口1/2周、底1/3周 1、2、4、9、22、36、37、166、A-A' 西
36 土師器 鉢	口 復 12.5 高 残 7.2 底 復 4.8	下半部が厚くやや重い。外面は体部ナデの後に下端部ヨコヘラケズリ、外底面多方向ヘラケズリ。口縁部外面に粘土帯を付けて貼付口縁にし、内外面ヨコナデ。内面は体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。37と同工品。SI-25出土破片(口1/2周、底5/12周)とSI-66出土破片(口1/3周、底1/12周)が接合。 [注記]SI-25 297、388、東コーナー、貯蔵穴一括、SI-66 A ベルト東1層	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗~細粒多、白・黒・透明粗~細粒少 やや硬質	SI-25の南東隅床上1cmと貯蔵穴底上9cm。SI-66の東半部覆土1層出土破片と接合 口5/6周、底1/2周 注記は左欄
37 土師器 鉢	口 11.5 高 6.2 底 4.0 重 残 159.9	底部がやや厚い。外底面はナデで、ごくわずかに凹む。外面肩部ナデ後に口縁部を粘土帯で貼付口縁状にして、体部下位ヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向と頸~体部に横位のヘラケズリを雑に行うだけで仕上げ調整をしていない。内外面の口縁部にヨコナデ。外面の約1/3周が黒斑。36と同工品。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗~細粒と白細粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	北東壁際床直上~床上7cm 口2/3周、底全周 188、190、364、366、367、北東
38 土師器 鉢	口 復 9.7 高 7.1 底 3.0 最大 10.7	やや厚く重い。外底面は1方向ヘラケズリで凹底状にし、口縁部に対してかなり傾いている。口~肩部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は下半部ヨコヘラナデ、肩部ユビナデ、口縁部ヨコナデ。内面の大半は黒斑状。39と同工品。重量241.9g。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗~細粒多、白・黒細粒少 やや硬質	中央床直上で正位 完形 105

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

39 土師器 鉢	口 10.3 高 6.7 底 2.7 最大 10.4	下半部がやや厚く重い。外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面上半ナデと口縁部ヨコナデの後に体部下半ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコナデと肩部ユビオサエの後に口縁部ヨコナデ。38と同工品。残存重量 218.1g。	5YR6/8 明赤褐 粗い 赤粗～細粒多、白粗～ 細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	北西床上 2cm 口 2/3 周、体全周 25
40 土師器 鉢	口 14.2 高 残 9.5 最大 14.8	頸が強く外へ折れて口縁部外面に厚い粘土帯を貼り、口縁上半内面が弱く内彎する。外面は体部に横～斜位ナデの後に口縁部を貼り付けてヨコナデ。内面は下部に1方向ヘラケズリ後に、体部上位にやや凹凸の残るナデとユビオサエ、口縁部ヨコナデ。	5YR8/4 淡橙 やや緻密 赤粗～細粒と白細 粒やや多、黒粗～細粒と透明 細粒少 やや硬質	中央東寄り床上 2cm 口 1/2 周 271、一括
41 土師器 小形壺	口 復 14.9 高 残 7.4	外面は主に横位のナデの後に口縁部をヨコナデし、全体をタテヘラミガキ。内面は頸部ナデと口縁部ヨコナデの後に、全体をタテヘラミガキ。外面全体に煤が広く付着する。	2.5Y7/4 浅黄 やや緻密 赤・黒粗～細粒と 白細粒少 やや硬質	北部床上 9～10cmが接 合 口 1/3 周、頸 2/3 周 195、201
42 土師器 小形壺	高 残 9.5 最大 14.7	外面は下位に多方向および横方向のヘラケズリと、積み上げ休止痕付近にヨコヘラナデ。中位以上はナデ後にヨコヘラミガキ。内面は中位以下ヨコヘラナデ、肩部ヨコユビナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 黒粗～細粒やや多、透明細粒 少 やや硬質	中央西寄り床上 4cm 体 3/4 周、底全周 59、63、一括
43 土師器 小形壺	口 復 14.0 高 残 5.4	外面は頸部下位ナメハケ後に中位ナメナデ、口縁部ヨコナデ。内面は頸部ナメナデ後にナメヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白 粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	北部床上 6cmと北部遺構 上面の各2片が接合 口 1/4 周 194、北上面一括
44 土師器 小形壺	高 残 11.4 最大 13.8	外面は頸部に尖突を貼ってヨコナデ。体部に横位と底部に多方向のヘラナデで肩部には弱い光沢を持つ。内面は体部ヨコヘラナデ、肩部は粘土組織み痕を残し軽いナデ、頸部ヨコナデ。外面にごく少量の煤が付着する。 [注記]147、148、149、151、161、162、359、360、361、一括	7.5YR6/8 橙 粗い 白粗～細粒多、白・赤・ 透明礫と赤・黒細粒少 やや硬質	中央床直上～床上 5cmで 接合 底全周、頸～胴 1/2 周 注記は左欄
45 土師器 小形壺	口 復 8.1 高 残 2.9	外面は頸部タテナデ(?)の後、口～頸部まで広くヨコナデ。内面は頸部ヨコヘラナデの後、口～頸部まで広くヨコナデ。 ※注記の○=解説不能、おそらく「19.○-16.○」というグリッド名	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒細粒少 やや硬質	X19 ライン以北 口 1/4 周 19○(左欄)に注釈
46 土師器 小形壺	高 残 8.4 底 復 3.4 最大 残 12.2	外底面は凹面で丁寧にナデ。外面体部は下半ヨコヘラケズリと上半ヨコヘラナデの後に横～斜位ヘラミガキ。内面は下半ヨコヘラナデ、上半ヨコユビナデおよびタテナデ、頸部ヨコナデ。 [注記]103、114、356、379、SD-283 D-E 間一括	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	中央床上 2～4cmと貯 蔵穴底上 6cm。SD-283 混入 4 片も接合 胴上半全周、底 1/2 周 注記は左欄
47 土師器 小形壺	口 復 9.0 高 残 3.4	外面は口縁部と肩部をヨコナデ後に肩部タテヘラミガキ。内面は肩部ユビオサエ後に口縁部ヨコナデ。口縁端部が少し肥厚するように外反する。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤・黒粗～細粒や や少、白・透明細粒少 やや硬質	南東壁際床直上 1 片と 貯蔵穴内 2 片 口 5/12 周、頸 7/12 周 372、貯蔵穴一括
48 土師器 小形壺	口 復 8.1 高 残 7.1 底 2.0	外底面はやや強くナデで凹底状にする。外面肩部タテハケ後に体部ナデと一部に浅いヨコハケ、下部にヨコヘラケズリ、頸部ナメナデ。内面は底部に円周方向のヘラナデ後、体部をヨコハケおよびナメハケ調整してから肩部が強く内傾するように頸を絞りを、頸内面にナメヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや緻密 白・黒細粒やや多、 赤・透明粗～細粒やや少 硬質	南隅床上 3cmで正位 口縁部は攪乱中 口 1/4 周、体～底全周 347、西部攪乱内一括
49 土師器 小形壺	高 残 4.6	平底の底部破片もあるが、接合できる体部下半がなく同一個体と断定できないので図示していない。外面は肩部ヨコヘラケズリ後に頸部の上下をタテヘラケズリし、薄く軽く仕上げている。内面は肩部ヨコナデで粘土組織み痕を丁寧に消し、頸部の直下をヨコヘラケズリ。内外の器表面が濃暗赤色で塗彩しているようにも見えるが、塗ることが難しい肩部内面も同様になっているので、塗彩ではなく焼成時の発色と考えられる。頸部は破面も含めて桃色に近く、被熱している可能性もある。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	中央東部床上 15cm。東 部や SD-283 混入片も あり 頸 3/4 周、底 3/4 周 248、Bベルト一括、東 一括、A-A' 西、SD-283 D-E 間一括
50 土師器 小形壺	口 復 9.7 高 残 3.2	外面は頸部ナデ後に口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデで、口縁部が内彎する。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 白細粒多、赤粗粒 と黒・透明細粒少 軟質	北東部上面 口 1/4 周 北東上面一括
51 土師器 小形壺	高 残 5.0 底 3.5 最大 8.9	外面は肩部と底面にナデ、体部下半にヨコヘラケズリ、頸部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ、肩部ヘラケズリ、頸部ヨコナデ。外面に小黑斑があり、内面は全面が炭素を吸着して黒色。外面にごく少量の煤付着。	5YR8/4 淡橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 黒粗～細粒と透明細粒少 やや硬質	南部床直上 胴～底全周 311
52 土師器 小形壺	高 残 3.7 底 2.3 最大 7.4	外底面はナデ仕上げで凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は底部に雑なユビオサエの後に、体部を積み上げて雑なナデ。外面の約半分が黒斑。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 黒粗～細粒と白・透明細粒少 やや硬質	南部床上 6cm 底全周 340、北東上面一括
53 土師器 小形壺?	高 残 1.2	外面はやや雑な多方向ヘラナデ。内面は多方向ユビナデで、爪先の当たった痕が目立つ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤細粒やや少、黒・透明 細粒少 やや硬質	中央西部床直上 底全周 363
54 土師器 高杯	口 16.5 高 13.5 脚裾 12.7 重 残 444.5	外面は脚部タテヘラミガキ、杯底部タテヘラケズリ後ナメヘラミガキ、杯体部に横位のナデと下端ヘラケズリ、口縁部ヨコナデの後に横～斜位ヘラミガキ。杯内面の底部に多方向と体部に斜位のヘラケズリ、体部上半にナメナデの後に放射状ヘラミガキ。内面底部に焼成前に生じた長さ 4cmの亀裂をヘラミガキで補修しているが、大きな凹みが残っている。脚裾部の内外面に生じた亀裂に粘土を貼って補修した痕が 4 箇所あり、こちらの補修はうまくまかせている(断面図と外面図を参照)。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 灰色・透明粗～細粒と黒細粒 少 やや硬質	南西床上 10cm。床上 4 cmの1片も接合 口 5/6 周、脚柱全周、 脚裾 2/3 周 33、46、A-A' 西
55 土師器 高杯	高 残 6.1 脚裾 復 16.8	外面はおそらくナデと裾部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は粘土組織み上げ痕をよく残して雑なユビオサエを行い、裾部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、黒 細粒やや多、白・透明細粒少 やや軟質	脚全周、脚裾 1/36 周 中央攪乱
56 土師器 高杯	口 19.5 高 15.8 脚裾 12.7 重 残 679.8	外面杯底～脚部タテヘラナデ、杯底外周ヨコヘラナデ、脚裾ヨコナデ。杯体部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデ後に杯外面斜位ヘラミガキ。杯内面体部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデの後にナメヘラミガキ。脚内面裾部ヨコナデ後に脚柱部ヨコヘラケズリ。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや緻密 灰色礫と白粗～細 粒やや多、赤粗粒と黒・透明 細粒少 軟質	北西床上 2cm 口 11/12 周、脚柱全周、 脚裾 7/12 周 40
57 土師器 高杯	高 残 10.0	外面はタテヘラミガキで、下部は磨滅して調整不詳。内面は上端部に絞りに目撃が多く、それ以下は粘土積み上げ痕を残したままユビオサエ。脚裾が屈折して外へ開く部分はほとんど欠損しているが、脚柱部と違う灰白色(7.5YR8/1)の土を使う。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 軟質	貯蔵穴の4片と東隅の 2片が接合 脚柱 1/2 周 貯蔵穴、東コーナー
58 土師器 高杯	口 18.3 高 15.3 脚裾 15.5	外面は脚部と杯底部に縦～斜位ヘラケズリ、杯底部ナメナデまたはヘラナデ。内外面の口縁部と脚裾部にヨコナデ。杯内面はナメヘラナデ、脚内面は粘土積み上げ痕を残す程度の軽いユビオサエ。ヘラミガキをしていた可能性もあるが、全面がかなり磨滅しているのははっきりしない。 [注記]35、136、140、142、146、150、155、158、184、286、353、355、365、一括、東コーナー、中央攪乱、A-A' 近辺、SI-24 20	5YR7/8 橙 緻密 赤細粒と白・赤微粒多 軟質	北西床上 2cm・中央床直 上～床上 2cm・北東床上 4cm・南東床上 5cmが接 合。SI-24 の混入もあり 一部欠 注記は左欄

第5章 権現山遺跡 SG10区

59 土師器 高杯	口 復 14.3 高 残 6.5	外面は脚上位と杯底部にタテヘラケズリ、杯体部に斜位と横位のヘラナデ。内面は杯底に多方向と杯体部に横位のヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。88と同工品。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白 礫～細粒やや多、黒・透明細 粒少 やや硬質	南東床上 6cm 口 1/6 周、杯底 1/3 周 344、346
60 土師器 高杯	高 残 10.9 脚裾 復 15.8	外面はタテヘラケズリ後に裾部ヨコナデ、全体をタテヘラミガキ。内面は上部に縦位と中部に横位のナデ、裾部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・透明細粒多、 赤・黒細粒少 やや硬質	北東床上 5cm 脚柱全周、脚裾 1/3 周 231
61 土師器 高杯	高 残 9.7 脚裾 12.7	外面はタテヘラナデ後に裾部ヨコナデ。内面は倒立状態で反時計回りに積み上げた粘土紐を軽く押さえるだけでほとんど接合痕のまま残し、裾部だけヨコナデ。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒やや多、黒・ 透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 7cmで横位 脚柱全周、脚裾 7/12 周 375
62 土師器 高杯	口 復 19.8 高 残 7.3	外面脚部タテヘラケズリ、杯底部ヨコヘラケズリ後ナメヘラミガキ、杯体部ヘラナデと口縁部ヨコナデ後ナメヘラミガキ。内面ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後に底部1方向と体部横～斜位のヘラミガキ。脚内面上端に雑なナデの後に脚部を積み上げる。 [注記]192、216、218、219、220、222、北東上面一括	7.5YR6/6 橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒少 やや硬質	北東床上 5～29cmの7 片と北東上面の8片が 接合 口 3/4 周、杯底 2/3 周 注記は左欄
63 土師器 高杯	高 残 9.0 脚裾 復 14.7	外面は裾部ヨコナデ後にタテヘラミガキを密に行い、もう一度裾をヨコナデする部分も見られる。内面は倒立した状態で反時計回りに積み上げた粘土紐をよく残す程度の軽いユビオサエと裾部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白細粒と黒・透明粗～細粒少 やや軟質	南陽床上 4～13cm 脚柱全周、脚裾 1/3 周 318、334、南東一括
64 土師器 高杯	高 残 7.8	倒立状態で成形し、時計回りに粘土紐を積んでいるのかもしれないが不確実。内面は上部タテヘラケズリと裾部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は上部ナデと下部ヨコヘラナデの後に裾部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒や やや多、白・透明細粒少 やや硬質	北上面と北東上面で接 合 脚柱全周、下位 1/4 周 北上面一括、北東上面 一括
65 土師器 高杯	口 復 19.1 高 残 6.6	外面は脚と杯底部に縦位と杯体部下位に斜位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ後に杯体部および杯底部外周をヘラミガキ。内面は杯体部をおそらくヘラナデした後に、口縁部をヨコナデして杯底部～体部に多方向のヘラミガキ。脚内面は上端部がよくわずかに残る。 [注記]78、中央攪乱、一括 A-A' 東	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央南床上 7cmの1片 と中央部・東部の3片 が接合 口 1/8 周、杯底全周 注記は左欄
66 土師器 高杯	高 残 8.8 脚裾 復 16.3	外面は上部タテヘラケズリ後に脚裾部ヨコナデ。内面は倒立状態でおそらく反時計回りに積み上げた痕を残し、絞り目状の皺が生じる。内面脚裾部ヨコナデ。 [注記]202、北東上面一括、中央攪乱、SD-283 D-E 間一括	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、透 明粗粒と黒細粒少 やや軟質	北東上面3片と床上9 cm。攪乱とSD-283の各 1片も接合 脚裾 1/8 周、脚柱 1/3 周 注記は左欄
67 土師器 高杯	高 残 7.0	高さ3cmの逆円錐状を作って内面をタテユビナデした後、倒立状態で7～10mmの粘土紐を輪積み状に積み上げた痕をそのまま内面に残す。外面はタテヘラケズリ。外面の約半周は焼成時の黒斑。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 黒・透明粗～細粒 やや多、白粗～細粒と赤細粒 少 やや硬質	中央床上 3cmと北西床上 6cmが接合 脚 5/6 周 32、147、A-A' 西
68 土師器 高杯	口 16.4 高 残 5.6	杯部底面に放射状ケズリ、その外周にヨコヘラケズリ。杯部外面に横～斜位ナデ。杯部内面は浅いナメハケ、内底面は円周方向のナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄褐 やや粗い 赤粗～細粒多、 白・黒粗粒と透明細粒少 やや硬質	南西陽床上 4～12cm 口 2/3 周、口～体 3/4 周、杯底全周 341、342、343
69 土師器 高杯	高 残 10.8 脚裾 復 16.9	外面はナデ後に裾部ヨコナデし、全体をタテヘラミガキ。脚内面は粘土積み上げ痕を残してユビオサエと雑なナデで調整し、裾部にヨコナデと疎らなナメヘラミガキ。	2.5YR7/8 橙 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや多、白・赤礫と赤粗粒少 やや硬質	北西床上 3cm。東部の1 片も接合 脚柱全周、脚裾 1/2 周 29、東一括
70 土師器 高杯	高 残 6.9 底 復 13.9	外面は脚部ナデと裾部ヨコナデの後、脚全体に密なタテヘラミガキ。内面は上部に雑なナデ後、倒立状態で反時計回りに積み上げた痕をそのまま残し、下部をナメヘラナデ後に裾部ヨコナデ。	5YR4/6 赤褐 やや緻密 白・透明細粒やや 多、赤礫と白・赤粗粒少 硬質	中央西寄り床直上と中 央東寄り床上 11cmが接 合 脚 1/2 周 57、251、中央攪乱
71 土師器 高杯	高 残 6.7	外面タテヘラナデ後、上端部にヨコヘラナデ。内面は倒立状態で反時計回りに積み上げた粘土紐をよく残し、軽いユビオサエ。	5YR5/4 にぶい赤褐 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒少 硬質	北壁際床上 4cm 脚柱全周 369
72 土師器 高杯	口 復 19.1 高 残 7.3	外面は杯体部ナデと杯底～脚部タテヘラケズリ後に口縁部ヨコナデと杯体部ヘラミガキ。内面は杯体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部に縦位と底部に多方向のヘラミガキ。 [注記]92、98、104、東中上面、一括 A-A'	5YR6/6 橙 やや粗い 白礫～細粒やや少、 赤粗粒と黒細粒少 硬質	東中央上面の3片に南 床上 3～4cmの2片が 接合 口 5/12 周、杯底 5/6 周 注記は左欄
73 土師器 高杯	高 残 10.6 底 復 16.0	外面は脚柱部ナデと裾部ヨコナデの後に全体をタテヘラミガキ。内面は裾部ヨコナデの後に脚柱部ヨコヘラケズリ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白礫～細粒やや多、 赤・黒粗～細粒と透明細粒少 硬質	北西床直上 脚柱全周、脚裾 1/6 周 38、一括 A-A'
74 土師器 高杯	高 残 6.5	脚内部の中空部は径12mm。脚裾部タテヘラナデ後ヨコナデ、杯底部外面ヨコヘラケズリ、杯体部外面ヨコヘラナデ。杯内面は底部に1方向と体部に横位のヘラナデ。脚内面ユビナデ。 [注記]144、中央攪乱、A-A' キン辺、一括 A-A'、一括	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央床直上 杯底 3/4 周 注記は左欄
75 土師器 高杯	高 残 2.7 最大 残 9.7	外面は脚上位ヨコナデと杯底～体部タテヘラナデ。内面杯底部は多方向ナデ。 [残存状態]杯底 7/12 周 [注記]306、394、貯蔵穴一括	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明細粒少 やや硬質	南東床上 3cm・南東隅 床上 7cm・貯蔵穴の各1 片が接合 残存状態・注記左欄
76 土師器 高杯	口 推約 19 高 残約 6	外面は杯底部に斜位と杯体部に横位のヘラナデ後、杯体部にナメヘラミガキ。内面は横～斜位のヘラナデ後に縦～斜位のヘラミガキ。口縁部と思われる小片が1点あるが、体部に接合できない。口縁部ヨコナデ後に内面ナメヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒と黒・ 透明細粒少 硬質	南部床上 3～14cm 口 1/12 周、杯底 11/12 周 95、327
77 土師器 高杯	高 残 10.5 脚裾 15.1	脚外面はおそらくタテヘラケズリ後にタテヘラナデ。外面杯底部もタテヘラナデ。脚内面は上部タテナデ後に中位以下を成形してナデ。内外面の脚裾部ヨコナデ。杯内面は底部を多方向ナデ。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗粒と白細粒多、 赤・黒・透明細粒少 硬質	中央床直上 脚柱全周、脚裾 1/4 周 152
78 土師器 高杯	口 18.9 高 残 6.3	杯体部外面タテナデと下端部ナデの後に杯底部タテヘラケズリと外周ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。杯体部外面に密なタテヘラミガキ。杯部内面ヘラナデと口縁部ヨコナデの後に上半部に主に横位のヘラミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白礫～細粒と赤・ 黒・透明粗～細粒やや多 軟質	北西陽床上 2cm 口 7/12 周、杯底全周 339
79 土師器 高杯	高 残 9.7 脚裾 14.8	外面は下部タテヘラナデと上部タテヘラケズリと裾部ヨコナデの後に、タテヘラミガキと下位にヨコヘラミガキ。内面は倒立状態で反時計回りに積み上げて雑にナデた後に、中位ヨコヘラケズリと裾部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 硬質	中央東寄り床上 8cm 脚柱全周、脚裾 1/3 周 230
80 土師器 高杯	高 残 3.2	脚内部は狭い中空状にする。外面は脚部にタテヘラナデ、杯底部に縦～斜位ヘラナデ。杯内面は体部と底部にヨコヘラナデ。脚内面ユビナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤・透明 粗～細粒少 硬質	中央床直上 杯底 2/3 周 106

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

81 土師器 高杯	高 残 8.9	外面杯底部タテヘラケズリ、脚柱部タテヘラミガキ。外面体部下端ナデ。杯内面に多方向と体部内面に縦位のヘラミガキ。脚柱部内面ユビナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、 白・黒・灰色粗～細粒と透明 細粒少 やや硬質	南東床上 7cm。SI-23 混入の 1 片も接合 杯体部 1/6 周、脚上半 1/3 周 350、SI-23 南東
82 土師器 高杯	口 復 20.3 高 残 7.1	外面は脚部タテヘラケズリ後に杯底部外周ヨコヘラケズリ。杯体部内外面ナメヘラナデと内面底部 1 方向ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。脚内面上端部ユビナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤礫～細粒多、 白・黒・透明粗～細粒やや多 やや軟質	南中央床上 1～5cm 口 5/12 周、杯底全周 85、93
83 土師器 高杯	高 残 10.8 脚裾 復 15.5	外面は磨滅して不明確で、タテヘラケズリまたはタテヘラナデの後に裾部ヨコナデと推定できる。外面ヘラミガキの有無は不明。内面は倒立状態で反時計回りに粘土紐を積み上げて軽くナデ。内面も脚裾はヨコナデと推定される。	7.5YR6/6 橙 粗い 赤粗～細粒多、白・黒 粗～細粒少 やや軟質	北東床上 12cm 口 5/12 周、脚裾 1/8 周 196
84 土師器 高杯	高 残 1.9	外面脚柱～杯底部タテヘラケズリ。内面杯底部は多方向の密なヘラミガキ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 赤粗～細粒と透明 細粒多、白・黒細粒少 硬質	北上面 杯底 2/3 周 北上面一括
85 土師器 高杯	高 残 8.1	外面中位に貫通しない径 7mm・深さ 2mm の孔を持つ。外面は磨滅しているが、タテヘラケズリまたはタテヘラナデ。内面は倒立状態で反時計回りに積んだ粘土紐を残し、上部ユビオサエ、中部ナメヘラケズリ、下部ヨコヘラケズリ。	10YR8/6 黄橙 やや粗い 赤粗～細粒多、 白・黒・透明細粒少 やや軟質	中央東寄り床上 6～13cm 脚柱全周 246、250
86 土師器 高杯	口 復 17.4 高 残 5.1	外面杯底部タテハケ。内外面の杯体部ナメハケと口縁部ヨコナデ、外面下端ヨコヘラケズリ。内面の杯底部に多方向と体部に斜位のヘラミガキ。[注記]202、234、247、一括 A-A' 東	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤・灰色・透明粗 ～細粒と白・黒細粒少 硬質	北東床上 9cm と中央東寄 り 5～7cm が接合 口 1/8 周、杯底 5/6 周 注記は左欄
87 土師器 高杯	高 残 11.7 脚裾 復 14.8	脚外面はタテヘラケズリで、杯底面にはタテヘラナデ。脚内面は倒立状態で主に時計回りに積み上げてユビオサエ。脚下部には向かい合う位置に 1 孔ずつ、計 2 孔の孔が貫通している。これ以外に内面図の下位にある非貫通孔 2 箇所は内面から刺突し、外面には少しか先端が達している。[注記]55、189、226、北一括、A-A' キン辺	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、黒 粗～細粒と透明細粒少、白粗 ～細粒微量 やや硬質	中央西隣床上 6cm と北東 床上直上～床上 5cm が接合 脚上半一部欠、脚下半 1/2 周 注記は左欄
88 土師器 高杯	口 13.8 高 残 6.5	外面は脚上位と杯底部に横位、杯体部に斜位のヘラナデ。内面は杯底～体部にヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面にはナデ後に部分的なヨコヘラケズリも行う。内面の変色から見て、横倒しの状態で二次被熱したと見られる。59 と同工品。[注記]125、138、139、141、143、150、160、中央攪乱	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白 粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	中央床上直上～床上 7cm 口 5/6 周、底 11/12 周 注記は左欄
89 土師器 高杯	高 残 9.8	外面はタテヘラミガキ。内面は上部に横～斜位ユビナデ。中位以下は粗積み痕を残したままでユビオサエ。[注記]293、SD-283 D-E 間一括	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・黒・透明細粒 多、赤粗～細粒少 硬質	南東床上 2cm。SD-283 混入 3 片も接合 脚柱全周、下部 3/4 周 注記は左欄
90 土師器 高杯	高 残 8.8	外面は脚柱部タテヘラナデまたはヘラケズリと見られるが、磨滅して不詳。内面は上部ユビオサエ、中位以下ヘラケズリ、裾部ヨコナデ。内面に鋭い沈線 3 本を焼成前に入れる。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明細粒少 やや軟質	北東上面 脚柱全周 北東上面
91 土師器 高杯	高 底 復 14.6	外面に縦～斜位ヘラケズリと内面にナメヘラナデの後に、内外面の裾部ヨコナデ。[注記]76、229、250、253、255、265	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白細 粒多、黒・透明細粒少 軟質	南西床上 6cm の 1 片と 中央南寄り床上 2～13 cm の 5 片が接合 脚裾 5/12 周 注記は左欄
92 土師器 高杯	高 残 4.2	外面杯底部と脚柱部にタテヘラケズリ。杯体部下端の垂直面をヨコナデし、それより上の傾斜部はナメヘラケズリ。杯内面は下部に放射状と上部に斜位のヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・灰色粗～細粒 多、赤粗粒と黒・透明細粒少 硬質	北東上面 体 1/12 周、杯底全周 北東上面一括
93 土師器 高杯	口 復 15.4 高 14.1 脚裾 復 13.0	外面は脚部に縦位と脚上端に横位のヘラナデ、杯底外周にヨコヘラケズリ、杯体部に斜位のヘラケズリとヘラナデ。内外面の口縁部と脚裾部にヨコナデ。内面杯部に多方向ヘラナデ、内面脚部に粘土紐を残すようなユビオサエ。[注記]163、168、204、211、一括、北東	2.5YR7/8 橙 やや粗い 赤粗粒多、白・黒・ 透明細粒少 やや硬質	中央床上直上。北西床上 6 cm と北東床上 7～8cm の破片が接合 口 1/3 周、脚裾 1/6 周 注記は左欄
94 土師器 高杯	高 残 8.0	脚部外面にタテヘラミガキ。内面は上端にわずかな絞目状の皺を持ち、倒立状態で反時計回りに粘土紐を積み上げてユビオサエ。焼成前に径約 5mm の円孔を丸棒状工具で開ける。反対側に円孔があったかどうかは、残りが悪いので不詳。3 方向に孔を開けていた可能性は低い。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、 黒・透明細粒少 軟質	中央床上 5cm 脚柱全周 145、一括 A-A'
95 土師器 高杯	高 残 3.8	外面は杯体部ヘラナデまたはナデ、杯底部タテヘラケズリ。脚内面上端ナデ。杯内面はヨコヘラナデかナデと見られるが、磨滅して詳細不明。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、黒細粒少 やや軟質	北東床上 8cm。北東上面 出土の 2 片と接合 杯底 1/3 周 185、北東上面一括
96 土師器 高杯	高 残 12.8 脚裾 復 17.0	外面は脚裾部ヨコナデ後、杯部から脚裾まで全体に密なヘラミガキ。杯内面はナデ後にかなり密なタテヘラミガキ。脚部内面は上部に粘土積み上げ痕を残してユビオサエ、裾部ヨコナデの後に中位にヨコヘラケズリ。[注記]229、北東上面一括、北上面一括	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白礫～細粒やや多、 黒・透明細粒少 やや硬質	北～北東上面出土の 8 片に中央床上 8cm の 1 片が接合 体 1/4 周、杯底全周、 脚裾 1/4 周 注記は左欄
97 土師器 甕	口 復 18.4 高 残 12.3	厚手で外面は頸部に接合痕を残す。内外面の胴部にやや強いヨコヘラナデ。内面頸部ヨコヘラナデ後、内外面の口～頸部ヨコナデ。内面口縁部上半はヨコヘラミガキの可能性あり。外面全体が被熱赤化。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒多、 黒細粒少 硬質	北西床上 3～9cm 口～肩 1/3 周 11、21、22、68、167、 一括、攪乱西
98 土師器 甕	口 18.9 高 残 11.0	外面胴部タテヘラケズリ。内面胴部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面肩部がやや被熱赤化している可能性あり。[注記]117、282、284、285、一括、中央一括、南東一括、一括 A-A' 東、北東上面、東中上面	10YR6/3 にぶい黄褐 やや緻密 白・透明細粒多、 白粗粒と黒細粒少 やや硬質	南東部床上 8～23cm で 接合。中央部と東部で も 6 片出土 口 7/12 周、肩 1/2 周 注記は左欄
99 土師器 甕	口 復 18.8 高 残 11.1	外面は肩部上位ハケ後に下位ヘラケズリ、口縁部ナメハケ後に上半部ヨコナデ。内面は肩部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。口縁部外面に煤が少量、部分的に見られる。[注記]299、376、貯蔵穴一括、SI-24 14、24、34、一括	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 透明粗粒と灰色細 粒やや多、白礫と赤粗粒少 硬質	南東隅床上直上と貯蔵穴 底上 23cm で接合。SI-24 への混入あり 口 1/2 周、肩 1/4 周 注記は左欄
100 土師器 甕	口 復 16.6 高 残 7.0	肩部外面ナメヘラナデ、内面ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。[残存状態]口 1/12 周、頸 1/4 周 [注記]381、貯蔵穴、東中上面一括	7.5YR7/6 橙 緻密 赤粗～細粒やや多、白 細粒少 硬質	貯蔵穴内底上 14cm。東 中央上面の 1 片も接合 残存状態・注記は左欄

第5章 権現山遺跡 SG10 区

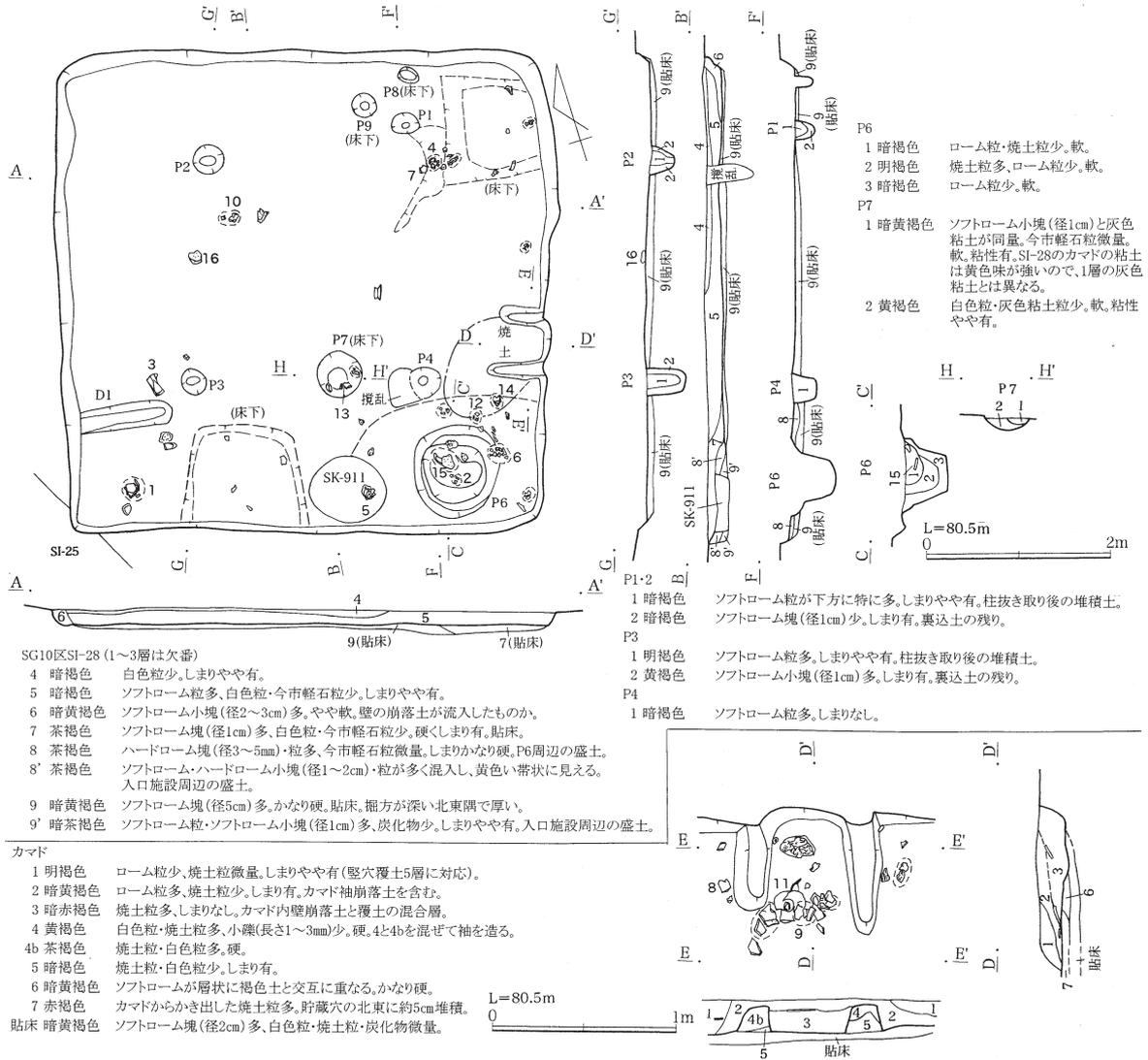
101 土師器 甕	口 復 16.0 高 残 5.2	外面は胴へ頸部タテヘラナデ、内面は肩部に横～斜位ヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・透明細粒 やや多、白礫と白・赤粗粒少 やや硬質	中央床上 4cm 口へ頸 1/3 周 115
102 土師器 甕	口 16.9 高 残 8.4	外面は肩部に密なヘラミガキ、口へ頸部ヨコナデ後にタテヘラナズリ。内面はヨコヘラナデで、口縁部上半に浅いヨコハケ。外面の口縁部以下に煤が付着。 [注記]110、133、235、一括、東一括	2.5Y8/4 淡黄 やや粗い 白・黒・透明細粒 少、白礫微量 やや硬質	中央床直上へ床上 4cmで 接合 口全周、胴上半 1/2 周 注記は左欄
103 土師器 甕	口 復 17.5 高 残 9.4 最大 復 18.0	受口状で二重口縁状。頸部が外へ開く方向に変形するのを止めるために、粘土塊を頸部に貼り付けて支えている。口縁部上半の仕上げナデが不十分で、端部に焼成前の亀裂が生じている。胴部外面ナデ、内面ナデとナメヘラナズリ。口縁部内外面ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒や やや多、黒・灰色・透明細粒少 軟質	南東床上 3～11cm 口 7/12 周、頸 2/3 周 239、240、241、242、243、 245、249、267、268
104 土師器 甕	高 残 2.8 底 復 5.5	円板状に突出する平底の中央が少し凹み、外周をヘラナズリ。外面胴部下端ナデ、内面底部へ胴部下位にナメナデ。外面は被熱している。 [注記]285、SD-283 D-E 間一括	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・透明細粒多、 黒細粒少 硬質	南東床上 22cmと SD- 283 混入片が接合 底全周 注記は左欄
105 土師器 甕	口 復 21.0 高 残 4.3	外面は口へ頸部ヨコナデ。内面は肩部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ後に頸部を横～斜位ナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白粗～細粒多、白 礫少 硬質	南壁際床上 10cm 口 1/8 周、頸 1/8 周 313
106 土師器 甕	高 残 2.7 底 7.0	外底面はおそらく多方向ヘラナズリの後にナデ。外面胴部は斜位のナデまたはヘラナデ。内面はヨコヘラナデ。全面の器面が荒れて調整が不明瞭で、外面は被熱していると思われる。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 黒・透明粗～細粒 多、白粗～細粒少 やや軟質	東中央の遺構上面 底全周 東中上面一括
107 土師器 小形甕	高 残 15.0 底 6.4 最大 18.1	外底面は外周に粘土を貼り多方向ヘラナズリ。胴部下位に斜位のヘラナデとヘラナズリ、上位に浅く細かいタテハケ。胴部中位～下位の境に積み上げ休止痕があり、外面にやや雑なナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ、頸部ヨコナデと思われる。胴部上半外面に煤が付着し、胴部下位は外面が被熱赤化し内面に汚れが付着する。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 灰色・透明礫～細粒と黒細粒少 やや軟質	中央床上 2～7cmと東 部床面～床上 8cmで接 合 胴 1/3 周、底全周 77、154、217、232、233、 257、266、一括、東一括
108 土師器 小形甕	口 復 12.8 高 14.1 底 復 5.4 最大 13.8	外面は貼付口縁状で接合痕を意図的に残している。外底面はナデ、外面は胴部ナメナデ、口縁部ヨコナデ。内面は胴部に斜～横位ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。胴下半～底面の外面が被熱赤化して内面に汚れがあり、胴上半の外面に煤が多く付着する。	10R6/8 赤橙 やや粗い 白粗～細粒やや多、 灰色礫と黒・透明細粒少 軟質	南東床上 4cm 口 1/3 周、胴 1/2 周、 底 1/4 周 289
109 土師器 小形甕	高 残 4.9 底 5.6	外底面は中央部 1 方向ナデの後に、粘土を貼り付けて高くした外周部を円周方向にヘラナズりする。外面胴部は下端ヨコナデ後にその上側をヨコヘラナズリ。内面はヨコヘラナデ。明確な被熱・使用痕は見られない。	7.5YR7/6 橙 粗い 赤粗～細粒多、白礫～ 細粒と黒・透明粗～細粒少 やや硬質	中央東部床上 3cm 底全周 237
110 土師器 壺	高 残 17.3 最大 23.7	外面は胴部に斜位のヘラナデとヘラナズリ後ヘラミガキ。頸部はヨコナデまたはタテナデの後にタテヘラミガキ。内面は胴部にヨコヘラナデ後ナメヘラミガキ。頸部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面ともにヘラミガキが多いところと少ないところがあり、多いところを図の正面に示した。内面肩部に粘土積み上げ痕がよく残る。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒多、 黒・灰色・透明細粒少 やや硬質	南東隅床上 3～15cm。 東中央の遺構上面にも 1 片あり 頸全周、胴中位 1/2 周 263、291、東中上面一 括、B ベルト一括
111 土師器 壺	口 推 14.4 高 残 10.8 最大 復 23.0	外面肩部ナメヘラナズリ、頸部ヨコナデ。内面肩部ナメナデとナメヘラナズリ、頸部ヨコヘラナデ後ヨコナデ。外面肩部～胴部上半に焼成後の鋭い平行刻線。この土器を研磨具に転用した可能性が高い。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗粒やや多、白・ 黒・赤・透明細粒少 やや軟質	北西床上 6～9cmで接合。 中央部にも 1 片。 頸～肩 1/6 周 2、10、14、113
112 土師器 壺	高 残 1.5 底 6.8	円板状に突出する平底の底面はナデで、中央が少し凹む。外面胴部下端ナデ。内面底部におそらく多方向のナデ。被熱痕は見られない。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒細粒少 やや硬質	中央床上 7cm 底全周 124
113 土師器 大形壺	口 復 17.0 高 残 10.3	胴部が薄い。外面は胴部ナメナデ、口へ頸部ヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ、口へ頸部ヨコナデ。 [注記]263、東中上面一括、上面、B ベルト一括	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・灰色・透 明細粒と白礫～粗粒少 やや硬質	東中央上面の 10 片と南 東床上 15cm の 1 片が接 合 口 1/6 周、頸 5/12 周 注記は左欄
114 土師器 甗	口 復 30.0 高 残 22.3	外面は胴部上半に浅く粗いタテハケの後に中位以下をナメヘラナズリ。内外面の口縁部をヨコナデ後、外面口縁部に付いた浅い傷をナデ消さないまま焼成されている(外面図参照)。内面は胴部に縦位と口へ頸部に横位の密なヘラミガキ。古墳後期の混入遺物。 [注記]270、277、285、中央一括、東中上面一括	2.5Y7/4 浅黄 緻密 白・黒・透明粗～細粒 と赤細粒少 やや硬質	南東床上 9～22cm。東 中央上面にも 17 片。 口へ胴下半 1/2 周 注記は左欄
115 土師器 高杯	高 残 14.4	外面は脚部タテヘラミガキ、杯体へ底部に縦～斜位ヘラナデ。杯内面は斜～横位ヘラミガキ。脚内面は上部がナデとユビオサエ、下部がナメヘラナズリ、裾部ヨコナデ。脚内面に焼成前の鋭い縦刻線を 3 本、内面ヘラナズリの工具で描く。古墳後期の遺物が混入。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、黒・透明粗～ 細粒やや多、白・灰色粗～細 粒少 やや硬質	北西床上 6～7cm の 3 片と不明の 2 片が接合 脚柱全周 2、8、攪乱西、一括 A-A'
116 石器 砥石	高 13.7 幅 6.6 厚 2.0	片面が平坦に近く、反対面中央が厚い板状自然石をそのまま利用。両面を砥面に使う。非常に硬いので擦痕は不明瞭で浅い。全体の表面がごく弱く被熱赤化。図示した長側面を中心に煤が少し付着。重量 305.7g	2.5Y5/3 黄褐 非常に緻密で硬質なホルン フェルス	北部床上 18cm 完形 330

SG10 区 SI-28 (第 54・55 図、写真図版 80・195)

[位置] SG10 区南部の 19-17 グリッドにある。同じく古墳中期の建物は西に SI-38、南に SI-105 がある。古墳中期の建物同士で SI-25 → SI-28 の重複関係が推定されるが、SI-25 との重複状況を示す断面図は記録されていない。SI-28 と時期が近い古墳中期末の土坑 SK-911 が入口部分の貼床層を切る(現地調査時に SI-28 の入口施設「P5」と考えられた土坑を、整理作業時点で「SK-911」と改称した)。

[規模と形状] 方形の建物跡で主軸方位は GN-14° -E。東西 5.48 × 南北 5.27m、残存壁高 9～18cm。

主柱穴は 4 本で、床面からの深さは北東の P1 が浅くて南西の P3 が深く、P1=20cm、P2=27cm、P3=40cm、P4=26cm。柱間は南北が 2.42m (西側)～2.79m (東側)、東西が 2.48m (南側)～2.19m (北側)。北東に離れる P1 は主柱穴かどうか疑問もある。P2・P3 の抜き取り痕と裏込土からみて柱径は 12～15cm。貼床除去後に小穴 P7～P9 を確認した。P7 の覆土に粘土とソフトローム小塊が多い(断面 H-H')。P7 が径 49 × 床面から深さ 19cm、P8 は径 24 × 16 × 深さ 19cm、P9 は径 27 × 深さ 19cm。



第54図 権現山遺跡SG10区SI-28(1)遺構

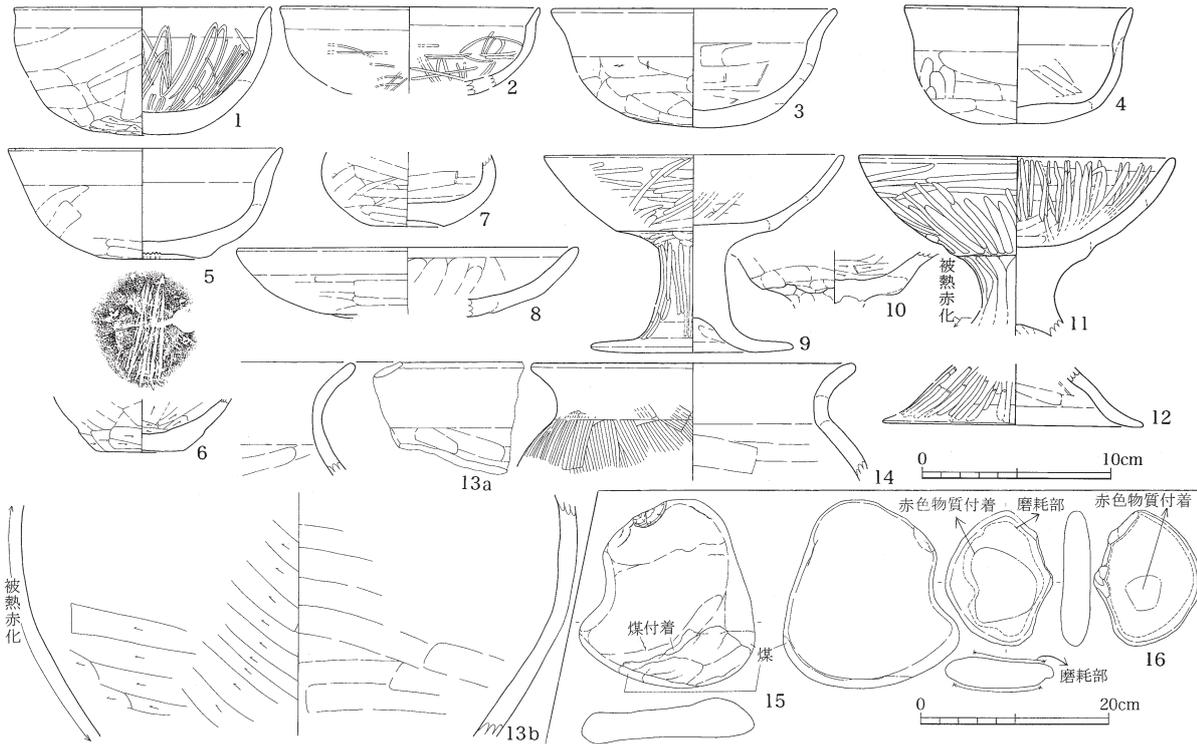
入口は南壁側の西部で東西112~133cm×南北100cm・深さ約10cmの隅丸台形の範囲が窪む。この窪みは、床面での形や土層断面図はなく、掘方底面に達した窪みの範囲が図化されているだけである。

入口部の東側を切る古墳中期末のSK-911上をSI-28の7層が覆うので、SI-28とSK-911の時期差は少ない。調査時にはSK-911をSI-28の入口施設「P5」と考え、その可能性も残る。南東隅の貯蔵穴P6は東西94×南北101cm、周囲盛土面から深さ42~50cm。P6の流入土上・中層にカマドの焼土粒が混じる。P6から入口付近は床から2~5cm高くロームで盛土する(断面B-B'とF-F'の8・8'・9'層)。壁溝はない。南西柱穴P3の西で貼床除去後に確認した間仕切溝D1は幅24~27cm、床面から深さ7~14cm。

掘方は、北東隅部の東西105×南北94~120cmの範囲が床面から15cm(周囲の掘方底より2~7cm)まで深くなる。また、P1の南側とP4の周辺では掘方底が周囲より3~7cm高い。掘方掘削後に暗黄褐色のソフトローム(9層)で貼床している。南東部の貼床土はやや異質である(8層)。

[カマド] 東壁の南部にあり、煙道は東壁からほとんど突出しない。両袖幅80cm、煙道先端から袖先端まで67cm。ソフトロームに焼土・白色粒を混ぜた土で両袖を作る。燃烧部~煙道間の火床面上5~10cm(断面E-E'で覆土2・3層の境)と、南袖南側の床上3~6cmに、カマド構築材の被熱した灰白色粘土塊が落ち込んでいる。カマド内で逆位になって出土した高杯(11)は杯部が完形で脚が被熱しているため、支脚

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第 55 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-28 (2) 遺物

に転用したものかもしれない。ただし、出土位置は火床面よりも 7cm 上方である。

〔覆土〕 自然埋没状で、上～中層に含む白色粒子は古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラの可能性が高い。

〔遺物出土状況〕 南壁付近から貯蔵穴とカマド周辺に多い。南西部の杯 (1) は床上 1cm で上を向く。北東柱穴 P1 の南東 (床上 7～12cm) や、北東隅 (床面～床上 2cm) にも少し土師器片がある。西半部で 7～14cm 大の自然礫が床上 7～11cm にあり、石皿 (16) も含む。カマドの遺物の状況は上述した。

〔出土遺物〕 北西にある SI-38 と時期が近く、東壁にカマドを持つ SI-28 のほうが少し新しいと考えられる。5 は杯底を研磨具に転用したと見られる平行刻線がある。高杯はよく磨く 9・11・12 と、仕上げナデを省いた 10 がある。8 は中期末の一般的な高杯と胎土が異なり、後期の混入遺物かもしれない。

遺物量は比較的あり、杯が主体で高杯・壺・甕も一定量があり、小形壺は少ない。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 162 片・1,427g の内訳は、杯 58 片・349g、高杯 21 片・128g、鉢 1 片・13g、小形壺 20 片・117g、壺甕類 58 片・796g、焼粘土塊 4 点・24g。図化した以外の土師器では、鉢形および潰れた半球状の杯があり、壺甕類は小破片ばかりで底部が 2 個体分ある。

第 30 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-28 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.5 高 6.7	厚く重い。外面は体部ナメヘラナデ後に底部を 1 方向ヘラケズリで丸底にするが、底面中央が小さく凹んでいる。内面体部ヘラナデ後に内外面の口縁部をヨコナデし、内面体部に放射状ヘラミガキ。外面全体が黒色化している。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 灰色粗粒と白粗～ 細粒と黒・透明細粒少 硬質	南西隅床上 1cm で正位 口 1/4 周、底全周 55
2 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.7	外面体部は磨滅で不明瞭だが、ヘラケズリ後に主に横位のヘラミガキ。内面体部はナデまたはヘラナデの後に縦・横位ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。	2.5Y5/8 明赤褐 緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 37cm 口 5/12 周 25、貯、南東
3 土師器 杯	口 復 14.8 高 残 6.2	体～底部境の稜が内面では明瞭で外面では弱い。外底面は多方向ヘラケズリで丸底状。外面体部ナデ後に口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面の口～体部に少量の煤あり。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤・灰色粗粒と 白・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	南西床上 12cm 口 1/4 周、底全周 52
4 土師器 杯	口 復 12.0 高 6.2	口～体部境の稜が内面では明瞭で外面では弱い。外面は体部に横～斜位と底部に 1 方向のナデ、口縁部ヨコナデ。内面は磨滅して調整不詳で、体部はヨコヘラナデをしている可能性がある。	5YR7/8 橙 やや緻密 白・黒粗～細粒 やや多、透明粗～細粒少 軟質	北東床上 7cm で正位 口 2/3 周 40

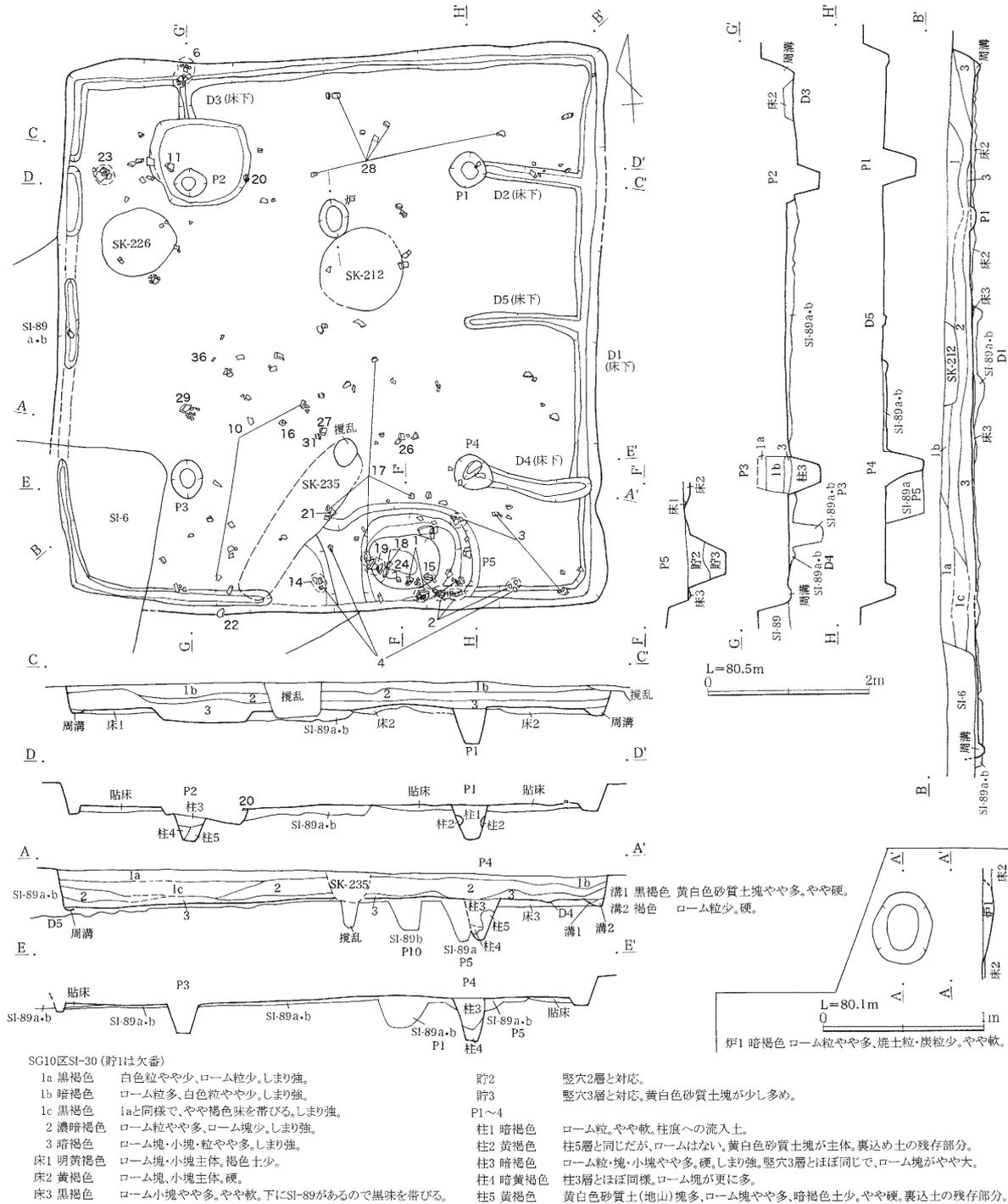
第4節 古墳時代の竪穴建物跡

5 土師器 杯	口高 14.3 残 5.9 底 4.5	口～体部境の稜が内面では明瞭で外面では弱い。外底面はナデ後に外周部ヘラナデで凹底状。外面体部ナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は磨滅して調整不明。外底面に焼成後の平行刻線があり、研磨具に転用したと考えられる。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗粒やや多、 黒・透明細粒少 軟質	P5 内底上 2cmと南西隅 床上 1cmが接合 口 1/2 周、体 3/4 周、 底全周 37、55、貯
6 土師器 鉢	高 残 2.9 底 復 4.6	外底面はほぼ 1 方向ヘラケズリで平底。外面体部はヘラナデ後に下端部をヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に縦位のヘラケズリ。	2.5Y7/6 明黄褐 やや粗い 赤粗～細粒多、 白・灰色粗粒と黒粗～細粒少 やや硬質	南東隅床上 4cm 底 2/3 周 29
7 土師器 小形壺	口 残 3.9 底 3.8 最大 復 9.2	外底面はおそらく削って凹ませた後に、主に円周方向のヘラナデ。外面体部は丁寧なヨコヘラナデで平滑に仕上げられる。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 透明粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	北東床上 9cm 体 1/4 周、底全周 39
8 土師器 高杯?	口 復 17.9 高 残 3.7	浅く、体～底部境の外面に段があるので、高杯の可能性はある。外底面 1 方向ヘラケズリ、外面体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は体部タテナデ後に口縁部ヨコナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 黒細粒多、赤・透 明粗粒と白細粒少 軟質	カマド北袖部床上 4cmが 南西部 2 片と接合 口 1/6 周 16、A-A' 東、南西
9 土師器 高杯	口 復 15.7 高 10.4 脚裾 復 10.5	外面は杯底部に横位、杯体部と脚部に横位のナデ後、口縁部と脚裾部ヨコナデ。杯体部にヨコヘラミガキ、脚柱～裾部にタテヘラミガキ。杯部内面はナデ後に底部を多方向、体部を斜位にヘラミガキ。脚部内面はナデ後に裾部ヨコナデ。杯上半部内面は磨滅して調整不明。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒・赤粗～細 粒と灰色粗粒少 やや硬質	カマド北袖部床上 1～ 3cmで逆位 口 1/8 周、脚柱全周、 脚裾 1/4 周 2、6
10 土師器 高杯	高 残 2.5	外面杯底部はやや雑なナデで粘土積み上げ痕をよく残す。外面杯体部ナデ。内面は杯底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗粒多、白・ 黒・透明細粒やや多 やや硬質	北東隅床上と中央西 部床上 9cmが接合 杯底 3/4 周 47、49
11 土師器 高杯	口 16.6 高 残 9.4	外面は杯部ナデ後に脚柱部までタテヘラミガキ。口縁部に狭いヨコナデの後にヨコヘラミガキ。内面はヘラナデと口縁部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。脚下部の破損している付近が被熱赤化する。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや多、白礫と灰色粗粒少 やや硬質	カマド火床上 7cmで逆位 杯～脚柱全周 1
12 土師器 高杯	高 残 3.2 脚裾 復 13.6	外面は裾部ヨコナデ後に脚部タテヘラミガキ。内面は脚部ヘラナデ後に裾部ヨコナデ。	2.5YR7/8 橙 やや緻密 白・黒・透明粗～ 細粒多、白・灰色礫少 やや軟質	南西床上 3cmとカマド内 および火床上 5cmが接合 脚 2/3 周、裾 1/4 周 5、32、K
13 土師器 甕	口 復約 20 高 口残 5.9 胴残 12.8 最大 復 29.2	胴部と頸部の間は破片が不足して接合できない。胴部は外面ナメヘラケズリおよびケズリ後に軽いヘラナデ、内面ヨコヘラナデ。肩部内外面ナデ後に口～頸部をヨコナデ。胴部外面が被熱赤化する。全体が磨滅して調整が不明瞭。 [注記]3、4、8、9、10、12、20、24、33、65、67、貯東床直、貯南東、貯K、南西、床裏、A-A'	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白・黒・透明粗～細粒 多、灰色礫と赤粗粒少 軟質	カマド焚口部床上 2～ 6cmとP7 底上 3cmが接 合。貯蔵穴内や周辺に も多数の破片あり 口 1/9 周、胴 1/3 周 注記は左欄
14 土師器 甕	口 復 16.9 高 残 6.2	外面は 7 本/cmの縦～斜位ハケメ後に口～頸部ヨコナデ。内面は肩部ヨコヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。 [注記]24、貯東床直、南東、19.0-17.0、表土	10YR6/3 にぶい黄橙 粗い 黒粗～細粒多、白粗～ 細粒やや多、透明細粒少 軟質	貯蔵穴東床直上～床上 1cm 口 1/4 周 注記は左欄
15 石器 台石	長 19.8 幅 18.3 厚 4.2 重 1907	扁平な自然礫。右図の面は特に平坦で、台石としてこの面を使用した可能性がある。但し、確実な使用痕は不明。左図の面の下部がやや厚く、両面に煤が少量付着する。この部分と図上端が剥離しているのは人為的かどうか不明。	N6/0 灰 緻密な安山岩	貯蔵穴内底上 26～28 cmの 2 片が接合 完形 27A、27B
16 石器 石皿	長 14.2 幅 11.3 厚 3.2 重 518.3	扁平な円礫をそのまま利用。側面が割れた部分もあるが、人為的加工ではない。両面の平坦面が周縁部よりも磨耗し、その中央部に明赤褐色(5YR5/6)の付着物が少々残り、鉄錆のようにも見える。	5Y6/1 灰 多孔質でやや硬質な安山岩	中央西部床上 8cm 完形 50

SG10 区 SI-30 (第 56・57 図、写真図版 81・174・195)

[位置] SG10 区南部の台地東縁辺の 17-17 グリッド。同じく古墳中期の建物は南に SI-2、北に SI-9、北西に SI-16 がある。古墳中期の SI-89a・b を切る。SI-89b → (拡張) → SI-89a → SI-30 → SI-6 の順序で重複し、後期の SI-6 と、平安時代の SK-235 と時期不明の SK-212・226 に切られる。旧名称 SI-7・SI-8 は SI-30 の覆土 1 層の一部で、旧名称 SK-227 は SI-30 の北西主柱穴 P2 周囲に附属する窪みと判明したために、SI-7・SI-8 および SK-227 は欠番となった。SI-30 の遺物には「SI-7」や「SI-89」と注記したものが含まれている。
[規模と形状] 方形で、主軸方位は GN-2° -E。東西 7.0 × 南北 7.02m、残存壁高は 23～44cm。主柱穴は 4 本で、柱間は南北に長く東西 3.48 × 南北 3.70m。P1・2・4 の残存裏込土からみて柱径は 12～18cm ほどで、床面からの深さは P1=45cm、P2=41cm (周囲の凹みから 37cm)、P3=36cm、P4=54cm で、P4 が少し深い。北西柱穴 P2 の周辺が隅丸方形に東西 124 × 南北 110 × 深さ 10～15cm の規模でくぼむ。この範囲は貼床を切って掘り込まれ、竪穴部分と一連の同じ土で埋没していた (断面図 C-C' と D-D')。

入口施設と考えられる土手状盛土 (床面から高さ 3～5cm) が貯蔵穴 P5 の西側で半円形に巡っていたと考えられるが、SK-235 に破壊された部分よりも西側では確認できなかった。貯蔵穴 P5 は南壁の東部にあり、東西 86 × 南北 68 × 深さ 49cm で、土手状盛土 (幅 25～60cm・高さ 3～9cm) が周囲を巡る。土手状盛土から一段落ち込む上部を含めた P5 の規模は東西 126 × 南北 106 × 深さ 63cm。P5 の底面は地山中の黄白色粘質土中にあり、軟らかいので調査時に底面を数 cm 掘りすぎてしまっている。壁溝 D1 は幅 15～20cm で貼床除去後に確認し、床面からの深さは 2～9cm。東側に 3 本と北西部に 1 本ある間仕切溝 D2～D5 も貼床除去後に確認したもので、幅 15～26cm、床面からの深さ 7～9cm。東側中央の D5 以外は



第56図 権現山遺跡 SG10 区 SI-30 (1) 遺構

主柱穴 P1・P2・P4 を通る線上にあり、P1・P4 と連結している。

掘形底面や柱穴底面の地山は、ローム層よりも下にある非常に硬い黄色砂質土である。貯蔵穴 P5 だけは柱穴底よりも底面が深く、地山の粘土層中にある。

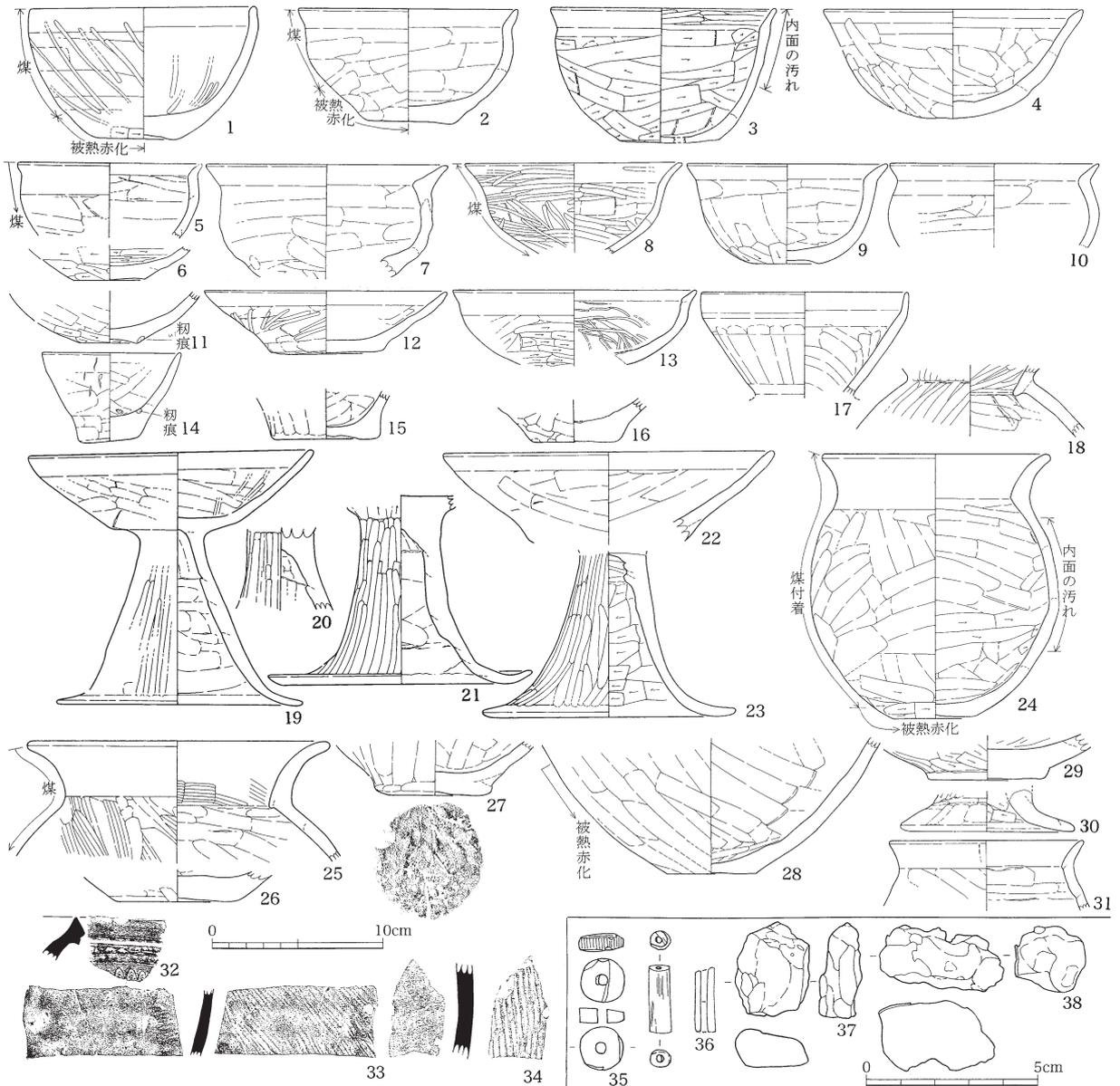
[炉] 中央北部にあり、南北 45 × 東西 36 × 床面から深さ 2 ~ 4cm。底面中央部 ~ 南半部が被熱していた。

[覆土] 覆土は自然埋没と思われる。1 層の各層 (1a ~ 1c 層) にテフラと思われる白色粒子をやや少量含む。

[遺物出土状況] 貯蔵穴周辺に多い。貯蔵穴埋土上部に西から流れ込んだ状況で高杯 (19) と小形甕 (24) がある。残存度の大きい椀形杯 (1 ~ 4) も貯蔵穴周辺の遺棄品であろう。SI-16 床面で出土した大形二重

口縁壺 (SI-16 の 46) に接合する破片が、SI-30 の床上 10 数 cm にある。両遺構の時期が近く、SI-30 が SI-16 より少し古い可能性を示す。重複する平安時代土坑 SK-235 に係わる 9 世紀代の土師器杯や須恵器甕 (33) も混入している。新治窯産の平安時代須恵器平底甕片 (SK-235 と同一個体) が SI-30 の竪穴西部覆土下位にもあるので、SK-235 以外の平安時代遺構が SI-30 覆土中に掘り込まれていた可能性もある。

[出土遺物] 外面に不規則な煤が付着する椀形杯が見られる (1・2・3・5・8)。稲籾痕がある土師器 (11・14) は、SG10 区では SI-50 の杯などにも見られる。17 のように白色針状物質 (骨針) を含む土師器は搬入品で、SG10 区 SI-23 などにもある。18 は焼成や頸部接合方法が通常の小形壺と異質で、やはり搬入品かもしれない。高杯の脚部上端を逆凹字形に作るものが見られる (19~21)。24 は外面によくススが付く小形甕。25 の他にもハケ調整甕の破片が見られた。27 は底部木葉痕の大半を削って消している。重複する SI-89a・b と同じく古墳中期中葉の遺物が見られ、SI-89 からの混入品も含まれているであろう。短脚高杯 (30) や小形甕 (31) は古墳後~終末期の混入品。古墳時代須恵器は、外面平行叩き・内面無文の甕胴部破片が数片ある (34)。34 と同一個体とみられる須恵器甕片は SI-10・12 などに混入している。混入した平安時代の須恵器甕 (33) と同一個体の破片は、重複する平安時代土坑 SK-235 や中世の SE-252 など複数の遺構から出土した。



第 57 図 榎現山遺跡 SG10 区 SI-30 (2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

遺物は多いが小破片主体で、接合できたものは少ない。図示以外の土師器は椀形杯が口縁部で約 16 個体（内斜口縁 12+ 半球状 4）、高杯が杯底部で 3 個体、小形壺 3～4 個体（中形品 1+ 小形品 2～3）、鉢が底部で 2 個体、甕が底部で約 10 個体、貼付口縁壺 3 個体、貼付口縁甕 4～5 個体。図示以外の土師器と焼粘土塊合計 3,029 片・20,677g の内訳は、杯 1,544 片・7,233g、高杯 214 片・1,807g、壺甕類 1,258 片・11,467g、甕 11 片・139g、焼粘土塊 3 点・31g。不掲載の須恵器は口縁部小片 1 点・1g がある。

鉄関連遺物は、鍛冶炉炉壁（38）と極小の椀形鍛冶滓（37）が各 1 点ある。重複する SI-6 や西側の SI-14 にも鉄滓・炉壁が少しある。炉壁片は SI-14 出土例に質感が似る。重複する時期不明土坑 SK-226 の滑石製有孔円板は SI-30 から混入した可能性がある。両面穿孔の滑石製管玉はよく磨かれて黒味が強い(36)。北方の砂田遺跡 4 区工房跡（津野・篠原・今平 2007）にある両面穿孔管玉は研磨が粗い未成品なので 36 より灰色に見える。権現山遺跡南部では SG10 区 SI-81 に碧玉製管玉がある。粘板岩製白玉（35）は SG10 区 SI-20 などにあり、SG10 区 SI-18 の甕胎土内と SI-30・36・69（現物紛失）・81 に滑石製白玉がある。

第 31 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-30 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.1 高 7.6 底 4.4 重 270.2	外底面はヘラケズリで凹底状にする。外面は体部ヘラナデと下端ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデの後に疎らなナメヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。外面は中位以上に煤が付着し、下位～底部は被熱赤化した可能性があるが、内面には煮炊きに用いた痕跡がない。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや粗い 赤・黒・透明粗～ 細粒と白細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 15～43cm で接合 口 5/6 周、底全周 11、13、17
2 土師器 杯	口 12.6 高 6.6 底 4.8 重 212.3	外面は口～頸部にヨコナデの後、底面に多方向(?)と体部に横位のヘラナデ。内面は体部にヨコヘラナデ、口縁部にヨコナデ。外面上半に煤が付着。外面下半と外底面は淡赤橙色(2.5YR7/4)で、被熱している可能性もある。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明細粒少 やや軟質	南東隅床上 1cmと貯蔵穴 底上 4～15cmが接合 ほぼ完形 口 11/12 周、底全周 4、9、10
3 土師器 杯	口 13.1 高 7.8 底 5.8	外底面は多方向ヘラケズリ。外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部を横～斜位ヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後にヨコヘラケズリと口縁部ヨコヘラミガキ。外面全体に不規則な煤が付着する。内面上半の汚れも煤によるものかもしれない。 [注記]3、33、35、東南 2～3 層、東中 6 層、SI-7 南東 2 層	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒多、 赤・黒・透明細粒少 硬質	南東隅床上 3～6cmと 貯蔵穴底上 2cmが接合 口 1/2 周、底 1/3 周 注記は左欄
4 土師器 杯	口 復 14.9 高 6.0	口～体部境の内面に弱い稜あり。外面体部に横～斜位ヘラナデと口縁部ヨコナデ。内面体部にナメヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。 [注記]5、25、29、東南 3 層、P5 西 1・2 層	5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、灰色粗粒と黒・透明細 粒少 やや硬質	南端中央床直上～床上 3 cm。東南 3 層と貯蔵穴 西半 1～2 層も接合 口 5/12 周 注記は左欄
5 土師器 杯	口 復 10.8 高 残 4.4	内外面の体部にヨコヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。内面のヘラナデは頸部がやや雑で浅い段を生じている。内面の残存部全体に煤が付着する。	5YR7/6 橙 やや緻密 白粗～細粒やや少、 赤・黒・透明細粒少 やや硬質	東部中央の 2 層 口 1/4 周 東中 2 層
6 土師器 杯	高 残 1.9 底 4.1	外底面は反時計回りのヘラケズリでわずかに凹底状。体部の内外面をヨコヘラケズリ。外面にごく少量の煤が付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色粗～細粒 と赤・黒・透明細粒少 硬質	南東部の攪乱中と 1 層中 底 3/4 周 東南 1 層、C トレ東攪乱
7 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 6.7	口～頸部は体部よりも明るい色の粘土で成形する。全体の仕上げが雑で底付近が厚い。外面は体部ナデ後に下端部をヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや軟質	中央西部 口 1/6 周、頸 1/4 周 中西 1a 層
8 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 5.3	内外面ともに体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。外面は体部に横～斜位と口縁部に横位の密なヘラミガキ。内面体部ヨコヘラミガキ。内面口縁部もヨコヘラミガキの可能性あり。外面全体に不規則な煤が付着する。	10R6/6 赤橙 やや粗い 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒少 やや硬質	東部中央 口 1/6 周、体 1/4 周 東中 1b 層
9 土師器 杯	口 復 11.6 高 5.8 底 3.8	外底面は中央を抉るように削って凹底状にし、外周部をナデ。外面は体部に斜位と頸部に横位のナデ、体部下端ナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/8 黄橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 黒・透明細粒少 軟質	中央西部 2 片と北西部 1 片 口 1/4 周、底 3/4 周 中西 1a 層、D ベルト西 1b 層、西中フク土
10 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 4.9 最大 復 12.1	外面は体部上位ナデ後に中位以下をヨコヘラケズリ、口～頸部ヨコナデ。内面は体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 [注記]76、141、中西 1 層、A トレ中南	2.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	中央床 上 1cmと南壁際 床上 5cm。中央南部と西 部に各 1 片 口 1/4 周、体 2/3 周 注記は左欄
11 土師器 杯	高 残 3.1 底 3.3	外底面は反時計回りのヘラケズリで凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ後に体部下端よりも上方をナメヘラナデ。内面は磨滅して調整不明。外面体部下端に稲羽圧痕が 1 箇所ある。	5YR4/6 赤褐 やや粗い 白粗～細粒多、灰 色と赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	北西隅床上 33cm 底全周 125、西北 2 層
12 土師器 杯	口 14.0 高 3.7 底 6.5 重 残 157.9	外底面は多方向ヘラケズリ。外面体部に斜位のヘラナデとヘラミガキ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗粒多、白礫～ 細粒と赤・黒・透明細粒少 やや硬質	南西床上 17cm 口 5/6 周、底全周 126、東北
13 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.3	口～体部境の稜は内面で明瞭。外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部にナデまたはヘラナデと口縁部ヨコナデの後に体部を横～斜位ヘラミガキ。	2.5YR6/6 橙 やや緻密 白細粒多、赤粗粒 と黒・透明細粒少 硬質	西部中央 口 1/9 周 西中フク土
14 土師器 小形土器	口 復 8.1 高 5.2 底 2.4	厚い底部に薄い体部を積み上げる。底部近くの内面に稲羽痕あり。内外の底面に多方向、体部に横～斜位のナデ。 [注記]29、P3 下半、東南 3 層、SI-15 東西ベルト	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗粒と黒細粒や やや少、白・透明細粒少 硬質	南部床上 1cmと南西主柱 穴。SI-15 の小片と接合 口 1/6 周、底全周 注記は左欄

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

15 土師器 鉢	高底 残 2.8 5.8	底部がやや突出し、外面中央がコピオサエで少し凹む。外底面の外周を多方向ナデ、外面胴部タテナデ、内面ナメナデ。被熱痕はなく、外面に焼成時の黒斑を残す。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 75cm 底全周 14
16 土師器 鉢	高底 残 2.5 5.0	外面体部と外底面に多方向ナデ。内面は剥離と磨滅の為に調整が不明で、ヘラミガキの可能性もある。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・赤粗～細 粒と透明細粒少 やや硬質	中央床上 1cm。3層の1 片が接合 底 1/2 周 77、東中 3層
17 土師器 小形壺	口高 復 11.9 残 6.2	頸部に外面タテナデと内面ナメナデの後に口縁部内外面と頸下端外面をヨコナデ。外面の口縁部下端が弱く隆起する。やや薄くて軽い。 [注記]22、26、27、39、88、東南1層、SI-7 南東2層、SI-89 カ	5YR6/6 橙 やや緻密 透明粗～細粒と白 色針状物質やや多、赤・黒細 粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 18cmと中央 部床上 8cmと南東部 1 ～2層。SK-235に2片 混入 口 1/3 周、頸 3/4 周 注記は左欄
18 土師器 小形壺	高底 残 4.3	外面は肩部に斜位と頸部に縦位の密なヘラミガキ。内面は頸部下端か体部に少し入り込むようにして接合する。内面肩部ヨココピナデ後に絞り目。内面頸部下端に密なナメヘラミガキ。	7.5YR5/4 にぶい褐 緻密 白・黒・赤・透明細粒 少 硬質	貯蔵穴底上 33cm 頸 1/6 周 21
19 土師器 高杯	口高 脚裾 復 14.2 重 残 451.0	杯部外面はヘラナデ後に口縁部ヨコナデで、ヘラミガキの有無は磨滅して不明。脚部外面裾部ヨコナデ後に脚全体をタテヘラミガキ。脚部内面は縦・横・斜位のナデ後に裾部をヨコナデ。杯部内面はヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 42cmで斜め 下向き ほぼ完形 口 11/12 周、 脚裾 1/2 周 23
20 土師器 高杯	高底 残 4.8	脚柱部上端は中央が凹む逆凹字形で、そこへ倒立状態で反時計回りに粘土紐を積んで成形する。外面は杯底部タテヘラミガキ。内面は上端が粘土の皺を残したまま、それより下部は軽いタテナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 透明粗～細粒と黒細粒少 硬質	P2 周辺の凹み内で底上 11cm 脚柱全周 SK-227 の 1
21 土師器 高杯	高底 脚裾 復 15.2	脚柱部上端は中央が凹む逆凹字形で、そこへ倒立状態で反時計回りに紐を積んで成形する。外面は杯底部タテヘラミガキと脚柱部タテヘラミガキ。杯内面は放射状の密なヘラミガキ。脚内面は横位のナデとヘラナデの後に裾部をヨコナデ。	2.5Y8/4 淡黄 緻密 赤粗～細粒と白・黒細 粒少 やや硬質	中央南部床上 11cm 脚柱全周、脚裾 1/12 周 28
22 土師器 高杯	口高 復 19.1 残 5.2	内外面ともにナメヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。全体が磨滅して調整が不明瞭で、ヘラミガキの有無ははっきりしない。	5YR7/6 橙 粗い 赤粗粒と白細粒多、白礫～粗 粒と黒・透明粗粒少 軟質	西寄り南端部床上 7cm 口 1/4 周 50
23 土師器 高杯	高底 脚裾 復 14.6	杯部外底面に倒立状態で反時計回りに粘土紐を巻き積み成形する。外面はタテヘラミガキと裾部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は裾部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・赤粗～細 粒少 やや硬質	北西隅床上 17cm 脚柱全周、脚裾 1/3 周 133
24 土師器 小形甕	口高 底 4.6 最大 14.2 重 残 612.1	外底面は1～2方向のヘラミガキ。外面体部はナメヘラナデ後に体部下端ヨコヘラミガキ、口～頸部にヨコナデ。内面は主に横位の粗いヘラナデ後に、胴部下端の厚かったと見られる付近をヨコヘラミガキ。外面底部が被熱赤化し、口縁部から体部まで煤が付着する。内面は頸部下から体部中位に暗褐色の汚れが付着。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白礫と白・赤粗～ 細粒やや多、黒・透明粗粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 33～40cm で上向き斜位 ほぼ完形 20、21
25 土師器 甕	口高 復 17.4 残 7.0	外面肩部は5本/cmのナメヘラナデ後に間隔を空けたナメヘラナデ。内面肩部はおそらくナメヘラナデの後に斜位ヘラナデ。内面頸部ヨココピナデ後に口縁部内外面をヨコナデ。外面に煤が付着する。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 白礫～細粒多、 黒・透明粗～細粒やや多 硬質	東壁北半部から東側へ 続く攪乱中 口 1/4 周、頸 1/3 周 D東攪乱
26 土師器 甕	高底 残 1.8 6.9	外底面は中央が少し凹み、外周部に軽いナデ。外面胴部下端は縦および横位のナデ。内面底部に多方向ナデ。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 白・黒・透明粗～ 細粒やや多、赤細粒と透明細 粒少 硬質	南東床上 28cm 底部一部欠 82
27 土師器 甕	高底 残 3.2 6.8	円板状に突出する外底面は中央が少し凹み、外周部を多方向ヘラミガキ。木葉痕が少しだけ削られないで残る。外面胴部下端はナメヘラナデ。内面底部は多方向、胴部はおおむね縦位のヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白粗～細粒多、赤 粗粒と黒細粒少 硬質	中央南部床上 4cm 底全周 78
28 土師器 甕	高底 残 7.9 5.1	外底面は1方向のヘラミガキ。外面胴部ナメヘラナデ。内面は底部に多方向と胴部に斜位のヘラナデ。外面胴下半～底面が被熱し、内面底中央に少しコゲ痕あり。 [注記]115、117、118、120、122	5YR5/4 にぶい赤褐 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや多、黒細粒少 やや軟質	北部中央から北東床直 上～床上 12cm 胴 5/12 周、底 7/8 周 注記は左欄
29 土師器 大形壺	高底 残 2.7 6.7	円板状に突出する外底面を多方向ヘラミガキ。外面胴部下端はナメヘラミガキで、突出した円板状底部の側面にヘラミガキが当たった。内面底部はおおむね放射状のヘラミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 灰色・透明粗粒と 白粗～細粒少 硬質	南西床上 28cm 底全周 62
30 土師器 高杯	高底 脚裾 復 10.1	外面は裾部にヨコナデ後、脚柱部にタテヘラミガキ。タテヘラミガキ時に裾部も軽く縦位にヘラナデまたはケズリを行う。内面は裾部ヨコナデ後に脚柱部ナメヘラミガキ。外面の脚柱部と内面の脚裾外縁部が暗褐色で、漆仕上げの可能性が高い。古墳後期後半～終末期前半の遺物が混入。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤・黒粗～細粒やや少、 白・透明細粒少 やや硬質	西部中央の 1b 層 脚裾 2/3 周 西中 1b 層、西中フク土 やや硬質
31 土師器 小形甕	口高 復 11.3 残 4.1	外面は肩部ナメナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は肩部ナデと口縁部ヨコナデ。古墳時代後期の遺物が混入。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 黒・透明粗粒と 白・黒細粒少 やや軟質	中央床上 1cm 口 1/4 周 79
32 須恵器 甕	口高 約 40 残 2.6	口縁部外面に2条の段があり、上端は尖り気味。外面頸部にカキメの後、5齒以上の工具で器面に向かって右から左へ櫛描波状文。外面全体に黒色の自然釉が薄くかぶる。	5Y5/1 灰 やや緻密 白・半透明礫～細 粒少 やや硬質	西部中央 口 1/18 周 西中フク土
33 須恵器 甕	高底 残 4.0	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面は当具痕を磨り消していると思われる。無文当具を使った可能性もある。破面と表裏面の色調には差がない。3片出土した同一個体破片のうち2片が接合したものを図示した。	5Y4/1 灰 やや粗い 白礫～細粒やや多、 赤・黒色湧出粒少 硬質	南部の上面と 1a 層 胴部 3片 Aトレ南、Aトレ南上面、 南西 1a 層
34 須恵器 甕	高底 残 5.6	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面は当具痕を磨り消して無文。SI-10-12・23 出土土片と同一個体の可能性あり。	5Y5/1 灰 やや緻密 白・半透明礫～細 粒少 硬質	
35 石製模造品 白玉	径 12.29～ 12.55mm 厚 3.44～ 4.27mm	図の表面は素材の剥離面の境が浅い段になって残り、穿孔剥離を生じている。裏面は節理に沿って分割した折れ面で、素材に穿孔した後に分割した可能性が高い。側面は穿孔と同じ方向の粗い研磨痕。孔径 2.47～2.68mm、重量 0.93g。	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密で軟質な粘板岩	完形
36 石製模造品 管玉	長幅 0.60～ 0.65 厚 0.54	横断面が楕円状で、片方の小口が長軸に対し少し斜交する。両面から穿孔し、孔径は図上側で 1.83mm、下側で 1.79mm。側面は長軸方向に細かく研磨し、研磨痕はあまり残さないで少し光沢を生じる。両小口面は多方向に研磨して同様の光沢を持つ。重量 1.14g。	5GY2/1 オリーブ黒 緻密で軟質な滑石片岩	中央西部床上 19cm 完形 70
37 埴形鍛冶滓 (極小)	長幅厚重 残 2.8 残 2.2 厚 残 11.8	厚さ 1cm 程の極小の埴形鍛冶滓中核部寄り破片。側部は全周が破面で、破面には緻密な滓層が露出する。下面がわずかに埴形となる。鍛冶関連遺物構成 No.65。	表 明褐色 地 暗青灰色 磁着度 4 メタル度 なし	全周が破面
38 埴形 (鍛冶滓)	長幅厚重 残 2.0 残 3.6 厚 残 2.1 重 残 7.8	SI-14 出土の埴壁とほぼ同一の質感を持つ鍛冶滓の埴壁破片。被熱は強く、全体が灰黒色となっている。上面左側の平坦面には薄皮状の滓が貼り付いており、鍛冶滓の埴壁破片であることがわかる。鍛冶関連遺物構成 No.64。	表 黄灰色 地 明青灰色 磁着度 1 メタル度 なし	小破片

SG10 区 SI-32 (第 58・59 図、写真図版 81・82・196)

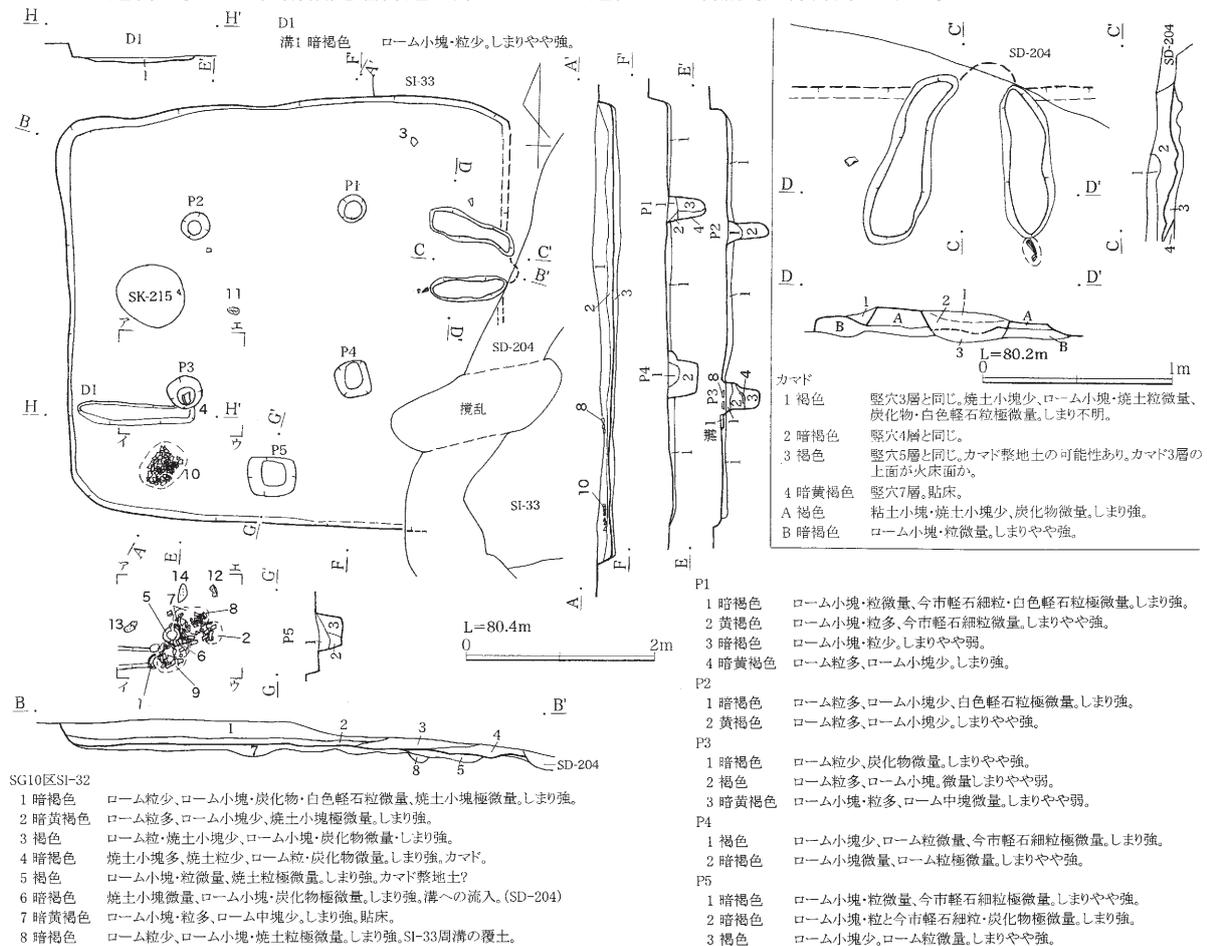
[位置] SG10 区南部の 18-18 グリッド。同じく古墳後期の建物は西に SI-10・12、北に SI-34(a～c 期)がある。古墳中期の SI-33 を切り、近世の SD-204 に東辺を切られる。時期不明の SK-215 は SI-32 の貼床に覆われていないので、SI-32 を切ると考えられる。

[規模と形状] 方形で、SI-33 の上部に掘りこむ東壁を明確に確認出来ない。主軸は GN-1° -W。東西推定長約 4.5m、南北 4.58m、残存壁高は最小 2cm (南東部)～最大 21cm (北西部)。主柱穴 4 本は床面から深さ 33～44cm、北東柱穴 P1 の柱痕径は 10～12cm。柱間は南北 1.78m、東西 1.66m(北側)～1.75m(南側)。南壁中央付近にある貯蔵穴 P5 は東西 52×南北 41×深さ 25cm。入口施設は不明で、貯蔵穴 P5 付近にあったことを類例から想定できる。壁溝はない。南西柱穴 P3 の西にある間仕切溝 D1 は幅 19～24cm・深さ 2～3cm。貼床はローム主体の暗黄褐色土だが、カマド付近では少し異なる (カマド B 層)。

[カマド] 東壁北部にある。SI-33 覆土に掘り込み、SD-204 に切られるため、東壁や煙道先端が不明確である。暗褐色のカマド B 層上に粘土やロームを含む A 層で袖を作る。袖幅 104cm、焚口から煙道までの推定長約 100cm。火床に竪穴部貼床 (カマド 4 層) がなく、貼床除去後に褐色の 3 層で整地したと思われる。

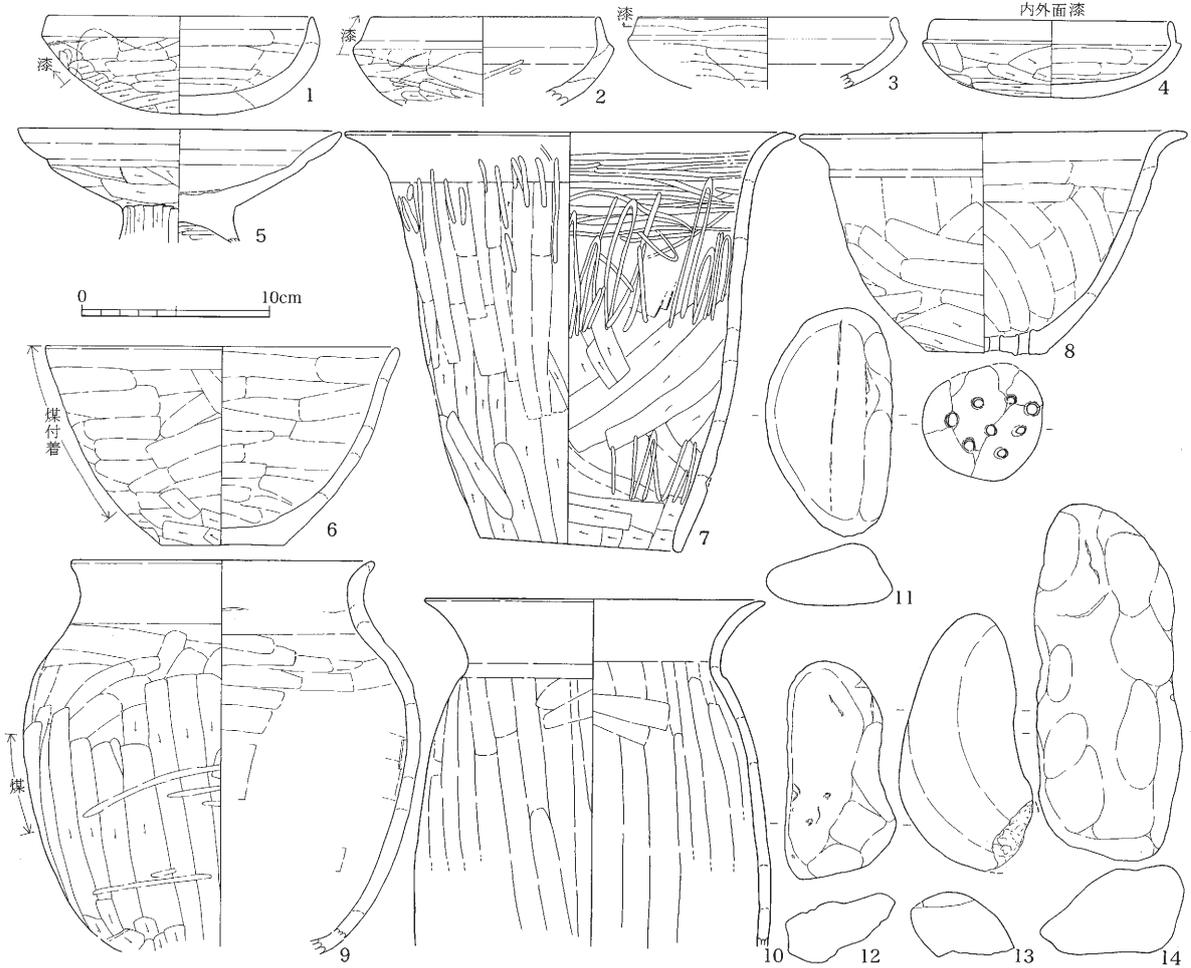
[覆土] 自然埋没状で、カマドのある東からの流入層に焼土、最上層に白色軽石粒を含む。柱穴覆土に軽石を含み、縄文草創期の七本桜軽石 (白色) と今市軽石 (橙色) が地山上部から流入した可能性がある。

[遺物出土状況] 南西部では床から 6～7cm 上に土師器甕(10)がある。その北で床上 10cm 付近に土師器甕・大形甕・多孔小形甕 (7～9) があり、その周囲にも土師器がまとまっている。南西柱穴 P4 内の杯は、やや斜位の上向きで入っていた (断面図 E-E' の 4)。編物石 (11～14) は床上 8～12cm のレベルで出土した。カマドの遺物は少なく、南袖先端付近の床上 3cm に逆位の土師器甕口縁部片がある。



第 58 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-32 (1) 遺構

[出土遺物] 体部が深い後期中頃の漆仕上げ模倣杯を、あまり磨かない点が異例で(1~4)、4だけが薄くて異質である。外傾口縁の高杯は内面を磨いて黒色処理する例が多いが、5にはない。多孔小形甌と鉢(6・8)の胎土・調整がよく似る。多孔甌はSG10区SI-20等にある。図示以外の破片は少ない。図示以外の土師器合計102片・531gの内訳は、杯17片・64g、高杯1片・9g、壺甕類81片・440g、甌3片・18g。



第59図 権現山遺跡 SG10区 SI-32(2) 遺物

第32表 権現山遺跡 SG10区 SI-32 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.0 高 5.2 最大 復 14.6	体部が厚く重い。外面体部は上半ナデ後に下半ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面の上位と内面に漆仕上げ。	5YR6/6 橙 緻密 赤粗粒やや多、白粗～細粒と 黒・透明細粒少 やや軟質	南西床土 4～12cm 口 5/12 周 2、3、10
2 土師器 杯	口 復 11.8 高 残 4.7 最大 13.6	外面は体部上位に雑なナデ後、下位をヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデでヘラミガキ調整も見られるが、ごく一部だけである。外面上位と内面全体に漆仕上げ。	5YR6/6 橙 緻密 赤粗粒と白粗～細粒と 黒細粒少 やや硬質	南西床土 4cm 口 1/4 周、体 1/2 周 9
3 土師器 杯	口 復 13.4 高 残 3.7 最大 復 14.6	体部外面は磨滅して不詳だが、おそらくヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデおよび漆仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや粗い 白・灰色礫～粗粒 と白・黒細粒少 やや硬質	北東床土 9cm 口 1/6 周 19
4 土師器 杯	口 12.5 高 4.1 最大 13.6	薄く軽い。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部と内面口～体部ヨコナデ、内面底部は多方向ナデ。内外面の全体を漆仕上げ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白細～微粒と微砂 粒微量 やや硬質	P3 内底土 15cm 口 1/2 周、底全周 20
5 土師器 高杯	口 16.9 高 残 6.1	外面は口縁部ヨコナデ後に体部に横位と脚柱部に縦位のヘラケズリ。内面はヨコナデで、杯体部内面は剥落して不明確だがミガキは行っていないと考えられる。脚内面は幅の狭い多方向ヘラケズリ。現状では黒色処理や漆仕上げは認められない。	7.5YR5/3 にぶい褐 やや緻密 黒・透明粗～細粒 多、白・灰色粗～細粒少 やや硬質	南西床土 7cmで正位 口全周、口～脚上端全 周 4
6 土師器 鉢	口 18.5 高 10.6 底 6.5 重 残 569.7	外面は斜～横位ナデ後に下位ヨコヘラケズリ。外底面はほぼ1方向のヘラケズリ。内面はヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。外面上～中位に煤が付着。底面を除く外面が少し被熱した可能性もあるが、内面も同様の色調になる部分があるので、焼成時に生じたものかもしれない。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 白・灰色礫～粗粒 やや多、透明粗粒と白・黒細 粒少 硬質	南西床直上 口 2/3 周、底全周 7、11、12
7 土師器 甌	口 23.5 高 21.8 底 復 10.5	外面下半タテヘラケズリ、上半タテヘラナデ後に口縁ヨコナデと疎らなタテヘラミガキ。内面胴部ヘラナデ後に胴中位と下端部が厚かった部分を削る。上部横位と中位以下縦位のヘラミガキ。内面を削った部分は砂が露出し磨きにくく、ほとんど磨かない。	10YR6/6 明黄褐 やや粗い 白粗～細粒と透明 細粒多、白礫と赤粗～細粒と 黒細粒少 やや硬質	南西床直上～床土 10cm 口 3/4 周、底 5/6 周 7、8、11、1A

第5章 権現山遺跡 SG10 区

8 土師器 小形甕	口高底重 20.2 11.6 6.2 残 595.8	外面の頸部に弱い段あり。外面体部ナデ後に下位ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。外底面は1方向ヘラケズリ後に径5～6mmの丸棒を通して8孔を穿孔する。内面は体部ナメヘラナデの後に口縁部ヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・赤粗～細 粒多、白・赤・灰色礫少 やや軟質	南西床直上～床上10cm 口2/3周、底11/12周 7、11、北西
9 土師器 甕	口高最大復 16.0 20.7 20.9	外面は肩部ナデ後に中位以下をタテヘラケズリし、口～頸部ヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ後に口～頸部ヨコナデ。外面の胴部中位に煤が付着する。下部の被熱痕は残存する半周の破片内では認められない。	10YR5/3 にぶい黄橙 粗い 白・灰色・透明礫～細 粒と赤粗粒多、黒細粒少 やや軟質	南西床直上。床上9～ 11cmにも小破片あり 口7/12周、胴1/2周 6、7、10、11、12
10 土師器 甕	口復最大復 18.0 18.2 18.8	胴部および口縁端部がやや薄い。胴部内外面はヘラナデを主に縦位に施した後に、横位にも少しヘラナデする。口縁部内外面ヨコナデ。外面胴部は被熱しているが、その痕跡や範囲は不明確。底部は小片化して復原できない。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白細粒多、白粗粒 と黒・透明細粒少 やや軟質	南西隅床上7cm。北東床 上8cmの1片も接合 口5/12周、胴1/4周 1、18
11 石器 編物石	長幅厚 11.9 6.6 3.3	図示した面と反対側の面が平坦な自然礫。やや短く、側縁もあまり平行していないので編物石と考えてよいかどうか疑問もある。加工・使用・被熱痕は見られない。重量343.1g。	2.5YR7/4 浅黄 緻密で硬質な流紋岩	中央西部床上11cm 完形 15
12 石器 編物石	長幅厚 11.4 5.8 4.0	中央で平面形がくびれて、縦方向にもここで少し曲がった形になる自然礫をそのまま利用。加工・使用痕は見られない。全体が暗赤色化しているため、長く被熱したものと考えられる。重量292.3g。	7.5YR4/2 灰赤 緻密で硬質な流紋岩	南西床上5cm 完形 14
13 石器 編物石	長幅厚 13.2 6.6 3.5	自然礫をそのまま利用。図の反対面は磨耗が進んだ古い割れ面で、図示した面の右下も欠損面がやや磨耗している。加工・使用・被熱痕は見られない。重量340.4g。	10YR6/6 明黄褐 緻密で硬質な流紋岩	南西床上12cm 完形 5
14 石器 編物石	長幅厚 18.2 7.8 5.2	図示した面に凹凸が多く、反対面は比較的平坦になる自然の細長い礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量1032.7g。	2.5Y6/3 にぶい黄 斑晶が目立つ硬質な石英斑岩	南西床上8cm 完形 13

SG10 区 SI-33 (第60図、写真図版 82・83・196)

〔位置〕 SG10 区南部の 18-18 グリッドにある。同じく古墳中期の建物は西に SI-88・101 がある。古墳後期の SI-32・34a・34b と、近世の SD-204 に切られる。また、時期不明の SE-316 に切られる。SI-33 の南東隅は低地へ向かう傾斜面の上部で、水分の多い黒色土中に掘り込まれていたため床面の把握が困難であり、竪穴南東隅と貯蔵穴南半は明確に遺構を確認できなかった。

〔規模と形状〕 方形の建物跡で、主軸方位は GN-10° -W。規模は東西 7.38 × 南北 7.22m。北壁がよく残り、残存する最大壁高は 28cm。南壁から南東隅部は、低地に向かって地山が低くなるので壁の残りが悪い。

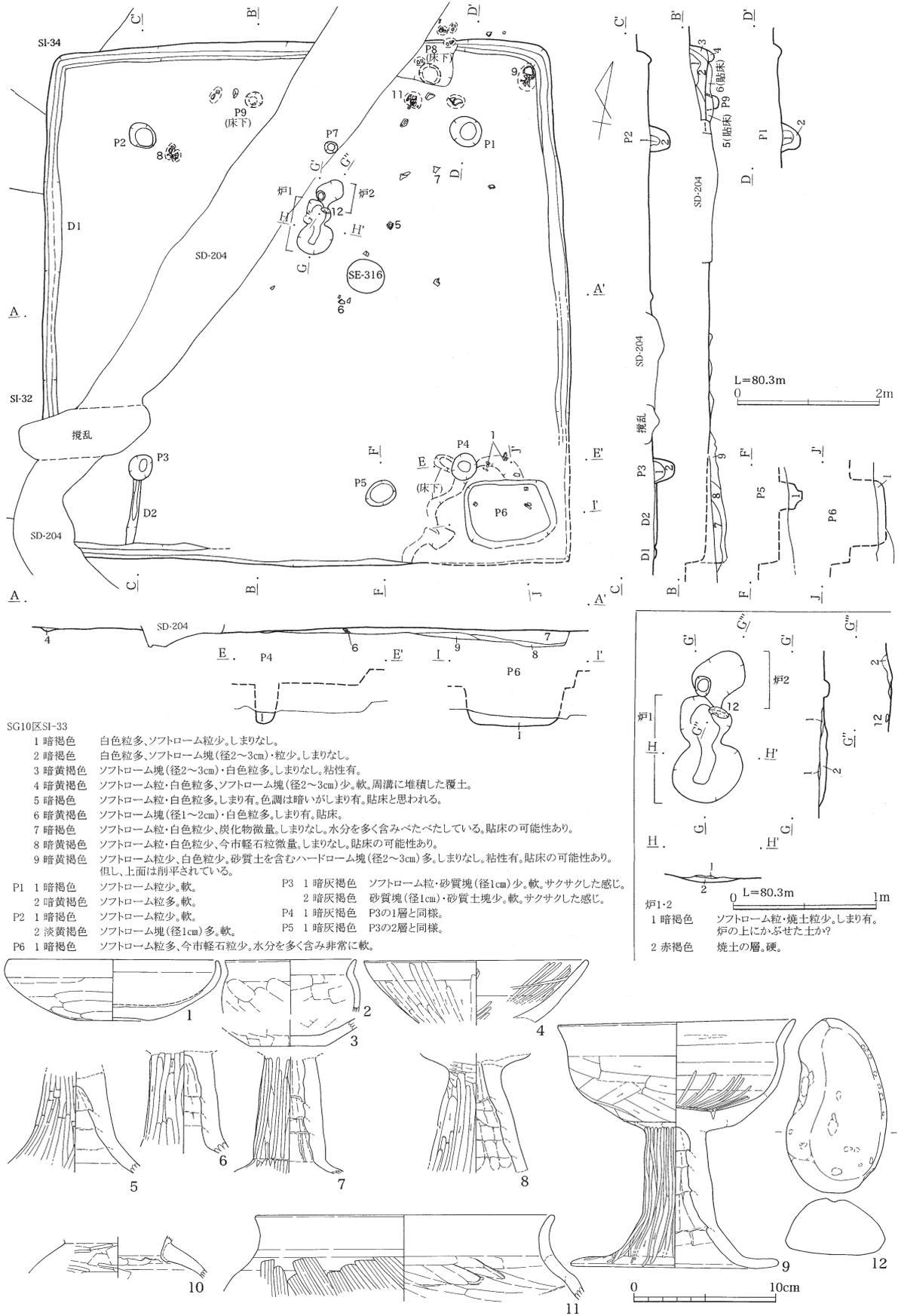
柱穴はすべて貼床除去後に確認した。主柱穴は 4 本で、柱間は東西 4.53m (南側) ～ 4.62m (北側)、南北 4.58m (西側) ～ 4.67m (東側)。床面 (標高 79.93m 前後) からの深さは P1・P2・P3 がほぼ同様に 27～29cm。南東柱穴 P4 は南東部の床面レベル (標高 79.82m) から 42cm で特に深い (断面図 E-E')。P4 周辺の掘方底 (他よりも低く標高 79.64m) から P4 底までの深さは 24cm である。柱痕や裏込土は残っていないが、柱穴形状から推測して柱径は 20cm 以下と考えられる。

入口施設と考えられる P5 は床面から深さ約 20cm。南東隅の貯蔵穴 P6 は東西 128 × 南北推定 96cm、推定床面レベルから深さ 42cm。P6 周辺に破線で示した凹凸は、床面ではなく、7・8 層 (貼床?) を除去した下部の掘方に認められた。北部主柱穴間にある補助柱穴 P7 は上部を SD-204 に少し切られ、床面レベルから深さ 10cm。貼床除去後に確認した補助柱穴は北端に P8 と P9 があり、床面からの深さは P8 が 11cm、P9 が 12cm。P9 は断面図 B-B' をみると貼床 (5 層) に覆われるようだが、床面にある穴を調査時に確認できなかったとも見られる。壁溝 D1 は幅 16～24cm・深さ 2～10cm で、床面が不明瞭な南東部以外で確認した。南西主柱穴 P3 の南にある間仕切溝 D2 は幅 8～12cm、床面から深さ 5～6cm。

床面はやや傾斜があり、南側が低い。貼床は北側に残り、ソフトロームが主体である (5・6 層)。東側から南側にある 7～9 層も床面レベルより下位にあり、ハードローム塊の多い 9 層は貼床の可能性もある。7・8 層は低湿地にみられる水分の多い土質なので貼床と考えてよいかどうか不明確で、低地斜面部にある遺構南東部が流出した後に 7・8 層が再流入した可能性も調査時に考えられている。

〔炉〕 中央の北部で確認した。南側の炉 1 を調査した後に、貼床土を除去する過程で北側の炉 2 が確認されたので、炉 2 → 炉 1 の時期差を想定できる。炉 1 は瓢箪形で、細長い礫が北端にある (12)。炉 1 は南北長 75cm、東西幅 50cm (南半) および 36cm (北半) で、深さ 8～10cm。炉 2 は 40 × 29 × 深さ 10～14cm で、西部に深さ 4cm ほどの小穴がある。

〔覆土〕 低地へ向かう斜面にあり、南部では竪穴覆土がほとんど残っていない。北壁側の堆積状況から自然埋没と思われる。竪穴および貯蔵穴 P6 の覆土各層や上述の貼床層 (?) に、テフラの可能性のある白色粒や、地山から混入した縄文草創期の今市軽石粒を含む。



第60図 権現山遺跡 SG10区 SI-33 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

〔遺物出土状況〕 遺物は少なく、覆土が残っている北半部で主に出土した。北東隅に高杯（脚付椀）が倒れている（9）。南半部の遺物を出土した7層は、貼床土の可能性はある（断面図 A-A' と B-B'）。

〔出土遺物〕 覆土の残りが悪いので遺物も少なめである。1 は初期の模倣杯で、本遺跡北部の SG1 区 SI-12・13 や 2 区 SX-94 に例がある（『東谷・中島地区遺跡群』10）。9 は杯部が椀形の高杯（脚付椀）で、立野遺跡 5 区 SI-67 の類例よりも脚が短縮化している（『同上』5）。この土器は内面の亀裂をヘラミガキで補修したが、結局大きなヒビが現れた不良品土師器。補修痕のある土師器は SG10 区 SI-6 などにある。図示以外の土師器合計 181 片・1.971g の内訳は、杯 44 片・144g、高杯 28 片・473g、鉢 6 片・70g、小形壺 5 片・29g、壺甕類 98 片・1,255g で、高杯が目立つ。

第 33 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-33 出土遺物

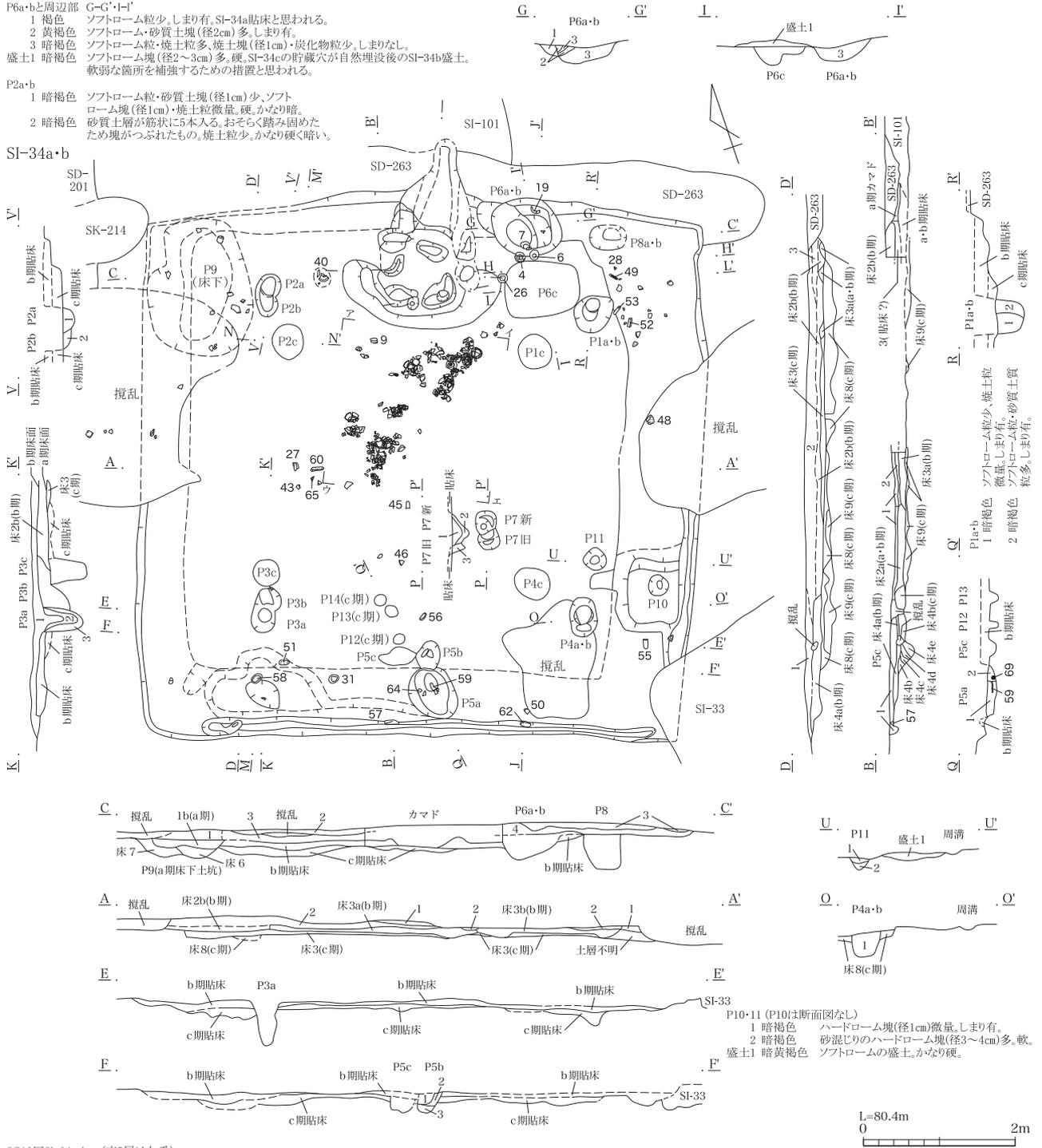
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.5 高 残 4.3 底 復 5.8 最大 復 15.1	薄く軽い。外底面はヘラナデで凹底状。外面体部はナデの可能性はあるが、残りが悪いので不明確。内外面口縁部にヨコナデ。内面体部は器面が剥落して詳細不明。	10R6/8 赤橙 やや緻密 白・黒微粒少 やや硬質	中央床上 7cm と南東床直上と貯蔵穴底下 4cm が接合 口 1/4 周 21、22、23、34 貯穴
2 土師器 杯	口 復 9.2 高 残 3.7 最大 復 9.6	外面は口縁部にヨコナデ、体部にナメナデ。内面は体部ナメナデヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面口縁部と外面に少量の煤が付着。	7.5YR3/3 暗褐 やや緻密 白粗～細粒やや多、 透明細粒少 やや硬質	床面付近 口 1/6 周 床フキン
3 土師器 杯	高 残 1.9 底 5.2	外底面は多方向ヘラナデ、外面体部はヨコヘラナデ。内面は多方向ヘラナデで、剥落しているため詳細は不明。底径が大きいので杯ではない可能性もある。	10YR4/2 灰黄褐 やや粗い 白粗～細粒多、 赤・灰色・透明粗粒少 やや硬質	床面付近 底全周 床フキン
4 土師器 高杯	口 復 15.6 高 残 4.4	外面はタテヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ、杯体部～口縁部にタテヘラナデ。内面は杯体部ナデ後に口縁部ヨコナデ、杯体部～口縁部にナメヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗粒と白・黒粗 ～細粒と透明細粒少 やや軟質	北東 1・2 層 口 1/6 周 北東 1・2 層、北東 1
5 土師器 高杯	高 残 7.0	外面は密なタテヘラミガキで、ヘラ先の当たった痕が目立つ。内面は脚柱部上端を雑にナデた後に、粘土紐を 3 段分積み上げて軽くナデ、裾部をヨコナデする。	10YR7/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗粒と黒細粒や や少、白・透明細粒少 硬質	中央北部床上 2cm 脚中位全周 16
6 土師器 高杯	高 残 8.1	外面はナデ後にタテヘラミガキ。脚柱部上端を倒立した状態で反時計回りに粘土紐を積み上げる。内面には絞った縦位の皺が目立つ。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 黒細粒やや少、 白・赤細粒少 硬質	北東床直上 脚柱全周 14
7 土師器 高杯	高 残 7.1	外面はタテヘラケズリ後にタテヘラミガキ。内面は倒立状態で反時計回りに積み上げた粘土紐痕を残す程度の軽いナデで、脚上端部だけはやや粗いタテナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや少 硬質	中央床上 3cm 脚柱全周 19
8 土師器 高杯	高 残 8.3	外面の杯底部ヨコヘラケズリ、脚柱部タテヘラケズリの後にタテヘラミガキ。脚内面は倒立状態で、反時計回りに積み上げた紐痕をそのまま残し、脚上部を絞った皺が目立つ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 透明細粒多、赤粗粒と白・黒 粗～細粒少 やや軟質	北西床上 4cm 脚 3/4 周 28、29
9 土師器 高杯 (脚付椀)	口 16.6 高 17.1 脚裾 14.5 重 残 654.7	外面は脚柱部タテヘラケズリと脚裾部ヨコナデの後に脚部タテヘラミガキ。外面杯底部ナデ後に杯体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。杯内面は杯体部～底部ナデ、口縁部ヨコナデ。焼成前に杯底部に亀裂が生じたため、亀裂を塞ぐようにナメヘラミガキを行っている。脚内面は 4 段の輪積み痕と絞った縦皺が目立ち、脚裾部内面はヨコヘラナデ後に裾部ヨコナデ。	5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や や少、黒・透明細粒少 軟質	北東隅床上 2～4cm 口～脚柱完存、脚裾 2/3 周 1
10 土師器 小形壺	高 残 3.0	外面は肩部ヨコヘラナデ後に疎らなヨコヘラミガキ。頸部内外面ヨコナデ。内面肩部にやや雑なナデの後、頸部下端を接合する。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒多、 黒・半透明粗粒少 硬質	北西部 頸 1/4 周 北西 1・2 層
11 土師器 甕	口 復 20.7 高 残 5.9	外面は肩部ヨコナデ後にナメハケを施し、口縁部ヨコナデ。ハケメは粗く不明瞭。内面は肩部に横～斜位ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白細粒多、赤・ 黒・透明細粒少 やや硬質	北東床上 2～4cm 口 1/4 周 4、5、北東
12 礫	長 12.1 幅 6.9 厚 3.9	図示した面が中高で、反対面が扁平気味な自然礫。全面が均等にやや被熱してピンク色に変色している。加工・使用痕は見られない。重量 401.5g。	10YR6/2 灰黄褐 多孔質で硬質な安山岩	炉 1 内床直上 完形 33

SG10 区 SI-34a・34b・34c (第 61～65 図、写真図版 83～86・173・174・196・197)

〔位置と関係〕 SG10 区南部の 19-17・18 グリッド。同じく古墳後期の遺構は北に SI-47、西に SI-40、南に SI-12・32 がある。SI-34c→34b→34a という 3 時期の変遷が考えられる 竪穴建物跡である。SI-34a と 34b は、柱穴の建て替えから認識できる。SI-34c は一回り小さな規模で、b 期に拡張するよりも前の建物である。以下、拡張後の SI-34a と 34b を説明してから、拡張前の SI-34c を説明する。

〔重複関係〕 北部で SI-101 (古墳中期) → SI-34c/34b/34a (古墳後期・拡張建替 3 期) → SD-263 (中～近世) → SD-201 (近世) → SK-214 (時期不明) の順に重複している。北東部にある古墳時代中期の SD-319 および時期不明の SK-372 と重複していた可能性もあるが、SD-263 に切られているため、SI-34a・34b と SD-319・SK-372 との重複関係は不明である。南東部の隅で古墳中期の SI-33 を切る。

第4節 古墳時代の竪穴建物跡



SG10区SI-34a-b-c (床5層は欠番)

1 暗褐色 ソフトローム粒少。しまり・粘性なし。
 2 暗褐色 ソフトローム粒やや多、白色粒・焼土粒・炭化物少、しまりやや有。
 3 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)少、しまりやや有。
 4 記録不備のため特徴不明。

床1b 暗褐色 下面にソフトローム粒多、炭化物微量。しまりやや有、SI-34b貼床。
 床2a 暗褐色 ソフトローム塊(径1~2cm)少、しまり・粘性なし、SI-34b貼床。
 床2b 暗褐色 A-A'断面の交点以南については、ソフトローム粒多、炭化物少、今市軽石粒微量。粘性・しまりやや有。その他はソフトローム粒・炭化物微量。SI-34b貼床。
 床3 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)多、硬、粘性有。SI-34c貼床。床9層と対応。
 床3a・3b 土層説明なし。SI-34aおよびSI-34b貼床。
 床4a 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)少、今市軽石粒微量。硬、SI-34b貼床。
 床4b 暗黄褐色 ソフトローム塊(径1~2cm)・ハードローム塊(径1cm)多、かなり硬。ローム塊が横長に押しつぶされているのは、叩き締めによるものと思われる。P5c埋土。
 床4c 褐色 ソフトローム塊(径1cm)微量。しまり有、P5c埋土。
 床4d 暗黄褐色 ソフトローム塊(径1~2cm)少、軟、P5c埋土。
 床4e 暗褐色 下面にソフトローム粒少、軟、P5c埋土。
 床6 暗茶褐色 ソフトローム粒少、今市軽石粒微量。硬、SI-34a床下土坑。
 床7 暗黄褐色 ソフトローム塊(径1~3cm)・粒多、今市軽石粒微量。しまり有。SI-34a床下土坑。
 床8 暗黄褐色 ソフトローム・ハードローム塊(径2~4cm)多、かなり硬、SI-34c貼床。
 床9 暗褐色 ソフトローム・砂質土塊(径1~5cm)多、しまり有、やや水分を含む、SI-34c貼床。

P3a
 1 褐色 竪穴1層と同じ。但し中央部は軟、上部・壁寄り硬。
 2 暗褐色 ソフトローム粒多、やや軟。
 3 暗褐色 ソフトローム塊(径1~3cm)・砂質土(径1~2cm)多、硬。

P3b
 1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)・粒と砂質土塊(径1cm)多、しまり有。埋め戻し土。
 2 暗褐色 ソフトローム粒少、とても硬、埋め戻し土。

P4a-b
 1 暗褐色 ソフトローム塊(径1~2cm)やや多、砂質土塊(径1cm)微量。しまり有。

P5a
 1 暗褐色 ソフトローム粒多、焼土粒微量。軟。
 2 暗褐色 ソフトローム・ハードローム塊(径1cm)やや多、かなり硬。

P5b
 1 暗褐色 ソフトローム粒多、焼土粒少、とても硬。
 2 暗黄褐色 ソフトローム塊(径1cm)・粒とハードローム塊(径1cm)多、とても硬。裏込めか。
 3 暗褐色 ソフトローム粒・砂質土粒少、とても硬。

P7
 1 暗褐色 ソフトローム粒少、しまり有。
 2 暗黄褐色 砂質塊(径2~4cm)多、硬。
 3 暗褐色 砂質塊(径1cm)微量、硬。

P10・11 (P10は断面図なし)
 1 暗褐色 ハードローム塊(径1cm)微量、しまり有。
 2 暗褐色 砂混じりのハードローム塊(径3~4cm)多、軟。
 盛土1 暗黄褐色 ソフトロームの盛土、かなり硬。

L=80.4m
 0 2m

第61図 権現山遺跡 SG10区 SI-34a-b-c (1) 遺構

〔遺構名の対応〕 現地調査時には「SI-103」・「SI-34」・「SI-34B」という3つの建物を確認し、整理作業時にそれぞれ「SI-34a・b・c」に改称した。「SI-103」が一回り小形の建物跡である可能性を調査時には考えたが、カマドの位置や遺物接合関係からみて、SI-34b とほぼ同じ規模で柱穴位置を外側へ移動した大形建物 SI-34a であることが判明した。

SG10 区 SI-34a・34b (第61～65図、写真図版83～86・173・174・196・197)

〔規模と形状〕 方形の建物跡。最終的な a 期竪穴 (SI-34a) の規模は、東西 7.14 × 南北 7.44m、壁の残存する高さは 5～9cm。b 期建物は a 期より僅かに小さい可能性もあるが、b 期と a 期は床面レベルが同じで、竪穴壁や貼床範囲を拡張した確実な痕跡はない。柱間は b 期から a 期へ南北方向に約 40cm 広げるので、竪穴部も a 期に少し拡張した可能性は残る。南壁から北へ 36cm ほどの位置で掘方底面にある段が、b 期南壁の位置を反映しているのかもしれない (断面図 B-B')。主軸方位は a 期・b 期ともに GN-19°-E で、a 期と b 期の柱穴方位がほぼ同じである。

a 期と b 期の主柱穴はそれぞれ 4 本で、柱配置は方形である。柱間は a 期が東西長 4.24m、南北長は 4.38m (東側)～4.36m (西側)。b 期の柱間は東西長 4.24m、南北長 3.95m (西側)～4.05m (東側)。a 期は柱痕径 14cm (P3a)～25cm (P1a) で、床面からの深さは北東の P1a と南西の P3a が深く (57～58cm)、北西の P2a と南東の P4a が浅い (42～43cm)。b 期の柱痕は残っていない。床面からの深さは北東の P1b が深く (54cm)、北西の P2b が浅く (38cm)、南西の P3b と南東の P4b は 44～45cm。

南壁近くにある a 期の入口ピット P5a は径 65cm・床面から深さ 20cm の楕円形で、周囲が浅く広がる。この北側にある b 期の入口ピット P5b は床面から深さ 29cm。入口ピット P5b と P5c の二時期分が東西に並び、位置から判断して P5b が SI-34b、P5c が SI-34c に伴うと考えた。土層断面をみると、P5b が b 期貼床の上面に開口していたことがわかる (断面図 F-F') ただし、現地調査時の所見では、P5b と P5c の前後が逆転する可能性も考えられている。

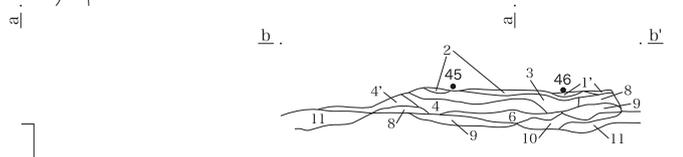
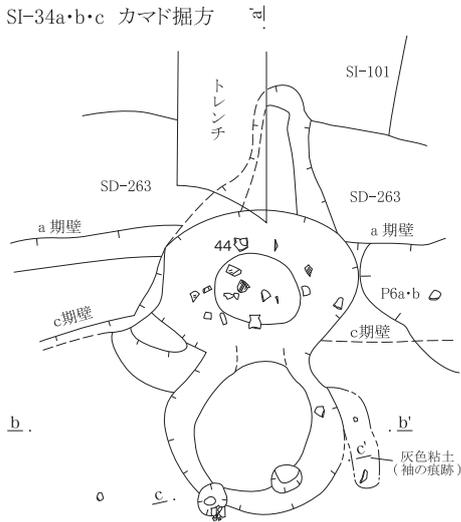
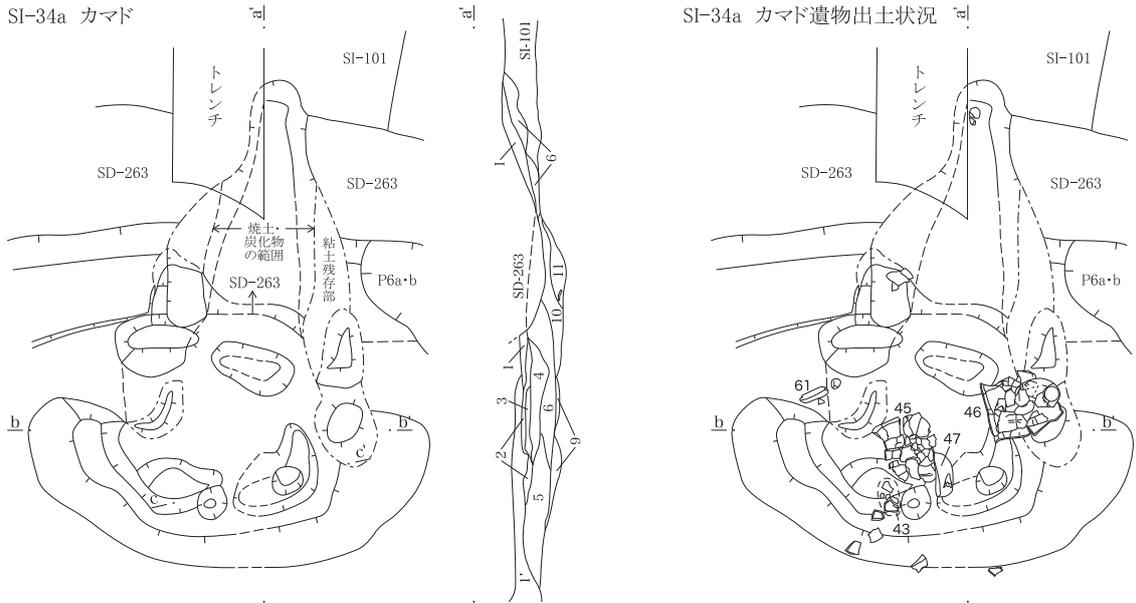
中央部の南東で不規則な位置にある P7 新と P7 旧は重複する 2 時期の柱穴で、a 期と b 期に伴うとも考えられる。床面からの深さは P7 新が 25cm、P7 旧が 11cm。北東部にある P8(a・b) は、北東方向へ斜めに掘られた穴または柱穴で、床面から深さ 44cm。位置の規則性があまり認められないので北東に隣接する時期不明の SK-372 と係わる遺構の可能性もあるが、上部の覆土 (断面図 C-C') にはないので、SI-34a を切る遺構ではない。P8 が SI-34a・34b に伴うと判断しておく。

北東隅にある a 期・b 期の貯蔵穴 P6(a・b) は、東西 86 × 南北 75 × 床面から深さ 23cm の隅丸方形で、北西側にある段は土層断面から見て埋め戻していたものとも考えられる。P6(a・b) の南側には東西 87 × 南北 83cm・高さ 2～4cm のソフトローム質の盛土がある (断面図 I-I')。

床面は平坦である。東壁側の南部にある東西 90 × 南北 110cm × 高さ 4～5cm の方形高まりは、南半部が地山ロームを掘り残して、北半部はソフトローム質を盛って作られていた (断面図 U-U')。この上面には径 28 × 深さ 23cm の P10 がある。P10 の土層断面図は作成されていないが、P11 と同様の埋土が堆積していたと記録されている。c 期の貯蔵穴 P6c を埋め戻した上にある盛土は、軟弱な埋め戻し部分を補強するためのものと考えられた (断面図 H-H' の 3・4 層と I-I')。壁溝 D1 が東辺南部と南辺にある (幅 15～20cm、床面からの深さ 5～7cm)。

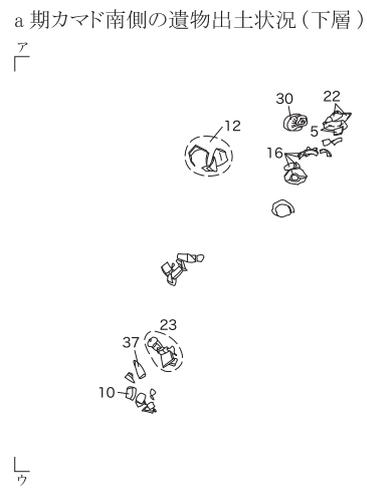
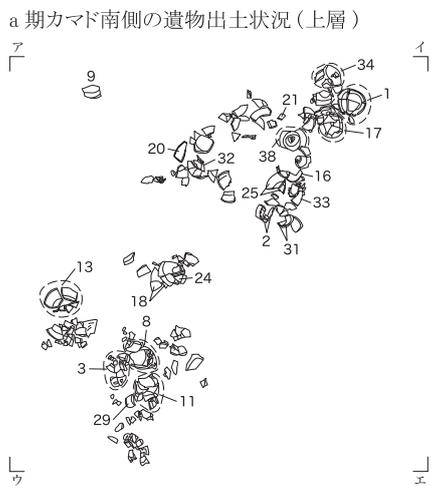
貼床は、c 期建物から四周を拡張した後に c 期竪穴を埋め戻して薄く覆う b 期貼床が認められる (床 1b 層～床 2b 層)。床面は標高 80.0～80.1m 付近にあり、c 期床面より約 10cm 高い。貼床下の掘方は、北西部の P9 が床下土坑状になる (186 × 144 × 床面から深さ 33cm、断面図 C-C' の床 6 層と床 7 層)。また、南西部の南壁側が少し高くなっている。

〔カマド〕 最終段階の建物 (SI-34a) に伴う a 期のカマドを調査した。現地調査時には「SI-103」のカマドとして調査されている。煙道部が壁外北方へ 80cm 伸び、煙道西半はトレンチで壊されている。燃烧部か



- カマド
a-a'・b-b' (7層は欠番)
- 1 暗赤褐色 焼土粒多、焼土塊(径0.5~1cm)・炭化物少、しまり有、1層下面が煙道。
 - 1' 褐色 ソフトローム粒少、しまりなし。
 - 2 黒色 灰色粘土・焼土粒少、炭化物が層的に広がっている、しまりなし。
 - 3 淡赤褐色 灰色粘土粒と焼土粒を50%ずつ含む、炭化物少、粘性有。
 - 4 暗褐色 焼土塊(径1cm)多、灰色粘土塊(径1~2cm)・炭化物少、軟。下面は火床面と思われる。
 - 4' 褐色 ソフトローム粒少、しまりなし。
 - 5 褐色 灰色粘土粒・焼土粒多、炭化物少、しまりやや有。
 - 6 灰褐色粘土 灰褐色粘土層、焼土粒微量、粘性有。
 - 8 灰色粘土 カマド袖・カマドの粘土、粘性有。
 - 9 暗褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)・焼土粒・炭化物少、しまりやや有。
 - 10 灰褐色粘土 焼土粒・炭化物微量、しまり有、古い時期のカマドの粘土と思われる。
 - 11 暗黄褐色 ソフトローム粒多、ソフトローム塊(径1~5cm)少、しまり有。凹んだところに充填した盛土。

L=80.4m
0 1m



第62図 権現山遺跡 SG10区 SI-34a・b・c (2) 遺構

ら煙道にかけての中央部を東西方向の溝 SD-263 で破壊され、SD-263 の底面付近に東西両袖の粘土残存部や煙道床の炭・焼土痕跡が残るので、袖の平面形は把握できた。袖の東西幅は 130cm。カマド焚口付近の床面には、東西 200 × 南北 80cm の範囲が半環状盛土の高まりをなしている。この盛土中には焼土や炭も含まれるので、カマド操業開始後に追加して盛り上げたか、あるいは旧時期のカマドの残材を使って構築したものである（カマド 5・6・9・10 層）。a 期カマド残存部の上側では、全形のわかる土師器甕 2 個が横に倒れて潰れていた（45・46）。46 が完形の長胴甕で、西側の 45 も本来は全周が残っていた甕の、出土時の上面側およそ半周が失われたものと思われる。カマド掘方はひょうたん形に連なる 2 箇所の窪み状である。北半部が SI-34a のカマド掘方で（南北 80 × 東西 115 × 床面から深さ 17cm）、南半部は SI-34c のカマド掘形を反映していると考えられた。掘方の上にカマドを構築した土中にも一定量の土師器片が混入していた。

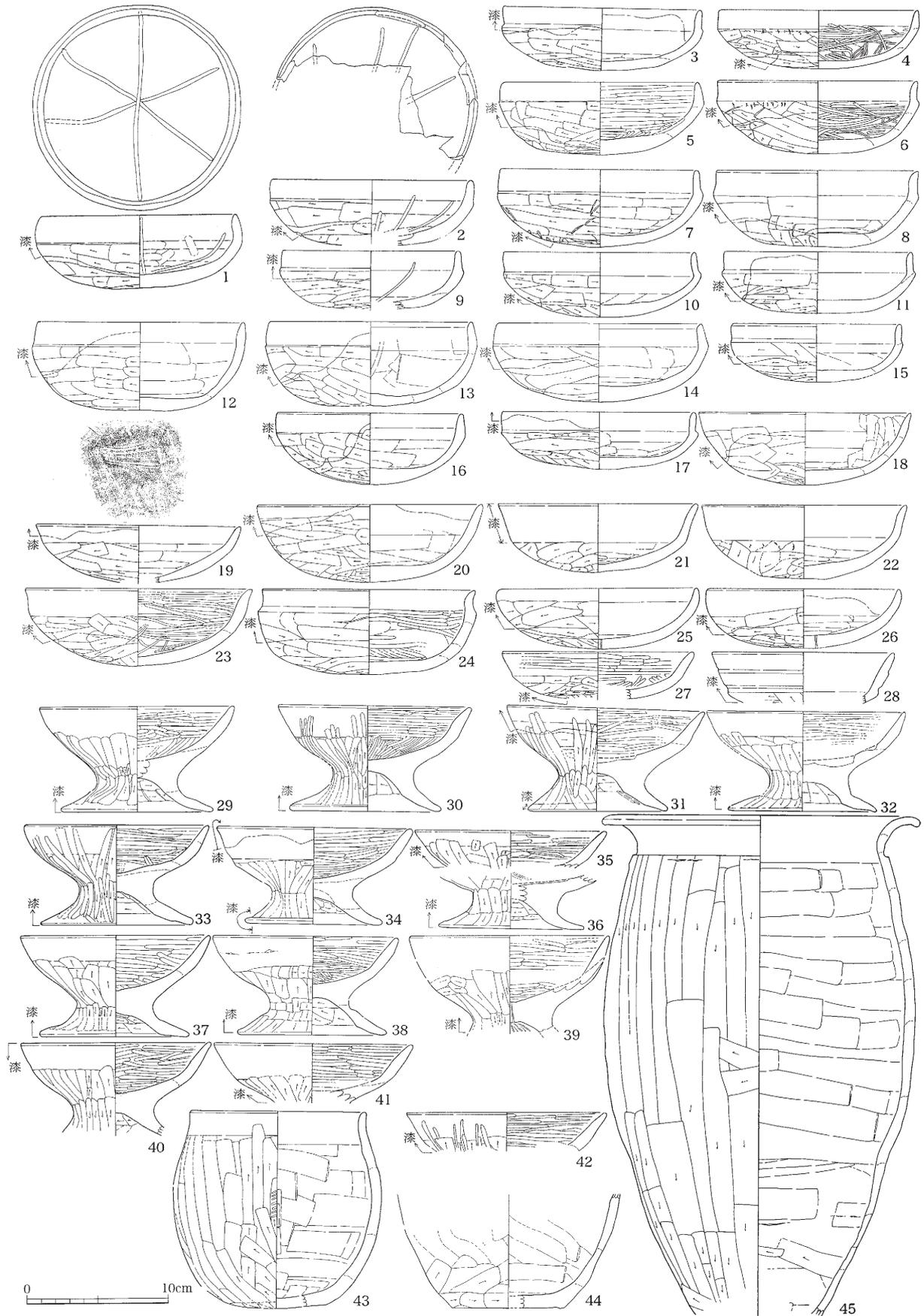
[覆土] 最終期である SI-34a の覆土は自然埋没状で、2 層に白色粒・焼土粒・炭化物を少し含む。

[遺物出土状況] 竪穴部の遺物のうち、a 期・b 期の床面レベルをほぼ標高 80.1m として、これよりも上位の遺物を SI-34a、下位の遺物は SI-34c に伴うものとして扱った。SI-34a のカマド南側に土師器が集中している。カマドの遺物出土状況はカマドの項で説明した。a 期建物中央部の床直上～床上 9cm に土師器高杯がまとまっている（29～34・37・38）。a 期の入口ピット P5a では北端部に耳環（69）、中央部に石（59）がある（断面図 Q-Q'）。b 期から a 期まで使われた貯蔵穴 P6a・b の上部に上向きの土師器杯が 3 点ある（4・6・7）。SI-34b に伴うことが確定できる遺物はほとんどなく、P3b で出土した土師器杯 1 片と甕 1 片だけで、これも古墳中期の混入遺物の可能性が高い。

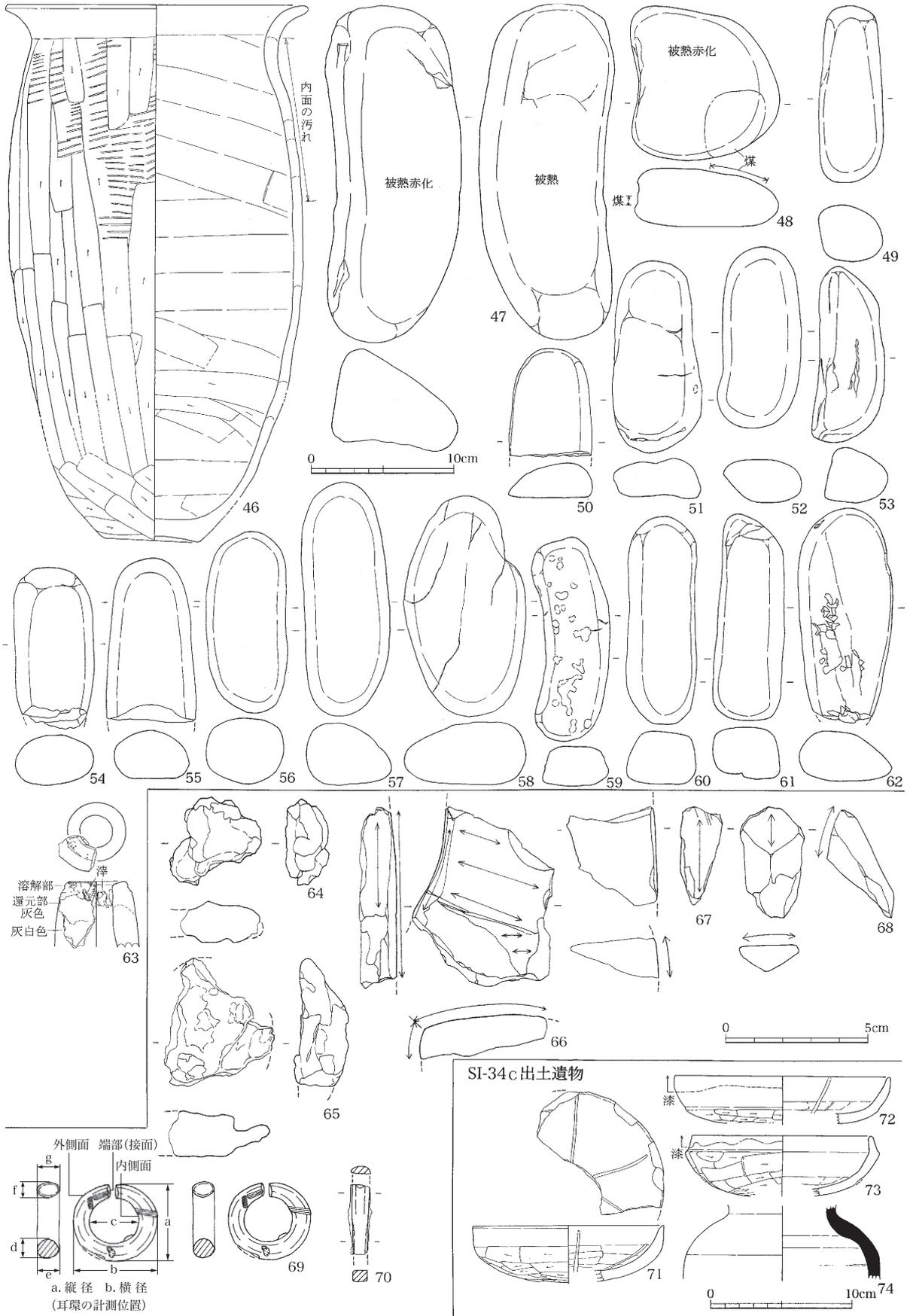
[SI-34a 出土遺物] 杯は大半が漆仕上げで、6 は漆仕上げと内面炭素吸着を両方行う。1・2・9 はごくまばらな放射状ミガキで内面に「米」字状などを描く杯で、SI-34c にも 2 点あり（71・72）、SI-40 にも類例がある。4 と 25 はごく微量の金色雲母を含む。雲母片を含む土師器は SG10 区では SI-12 などにある。同工品の深い杯が 3 個ある（12・13・14）。静止糸切り離しの土師器杯（12）は、古墳後期後葉の新郭遺跡 SI-264 や磯岡遺跡例（内山編 1998・塚原編 1999）、後期末の西続橋遺跡 SI03（海老原・津野 2002）が古い。中島笹塚 7 区 SI-5 の杯（『東谷・中島地区遺跡群』9, p.430）や瑞穂野団地遺跡北 25 号住居址の甕（岩上他 1978, pp.44,117）など古墳終末期にも例がある。有段口縁杯（28、田中 1991）は群馬・埼玉県地域の土師器で、周辺では立野遺跡・中島笹塚遺跡で少数出土している。同工品の漆仕上げ短脚土師器高杯が 14 個ある（29～42）。25・26・39 の底部の亀裂は、焼成前の乾燥時に生じていた可能性が高い。不良品の土師器は SG10 区 SI-6 などにある。土師器甕は口径と胴径がほぼ同じか、口径が僅かに大きい。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 1,032 片・8,231g の内訳は、杯 349 片・2,013g、高杯 135 片・1,435g、小形壺 1 片・3g、壺甕類 552 片・4,741g、甕 1 片・14g、小形土器 1 片・6g、焼粘土塊 5 点・19g で、杯・高杯・鉢が極めて多い。重複する SI-101 から混入した可能性のある古墳中期の遺物が少しある。

専用羽口破片（63）は、『東谷・中島地区遺跡群』10 で権現山遺跡の鍛冶関連遺物全体を報告後に確認したため、同書 pp.490-498 に掲載されていない。椀形鍛冶滓の小片が 2 点出土し、建物規模や遺物量に対して少ないので周辺から流入したとみられる（64・65）。SI-34a と同じ後期の遺構では西側の SI-40 に専用羽口片がある。また、南側の SI-6・14 と東側の SD-41・42 に鉄滓や炉壁があり、南側の SI-30（中期）、北側の SI-36（中期の鍛冶遺構）や SK-77・317（時期不明）でも出土している。66 は SG10 区 SI-12 などのホルンフェルス製砥石に比べるとやや硬さに欠け、粘板岩に近い。耳環（69）は、本遺跡北部の SG1 区 SK-128 や、中島笹塚 7 区 SI-5、砂田 5 区 SI-110、琴平塚 2 号墳・5 号墳にある（『東谷・中島地区遺跡群』4・8・9・10）。また、銅釧が砂田 3 区 SI-186 や中島笹塚 3 区 SI-305 にある（『前掲書』2・9）。70 は鎌身関部が退化した鉄鎌（長頸鎌）の可能性が高い。

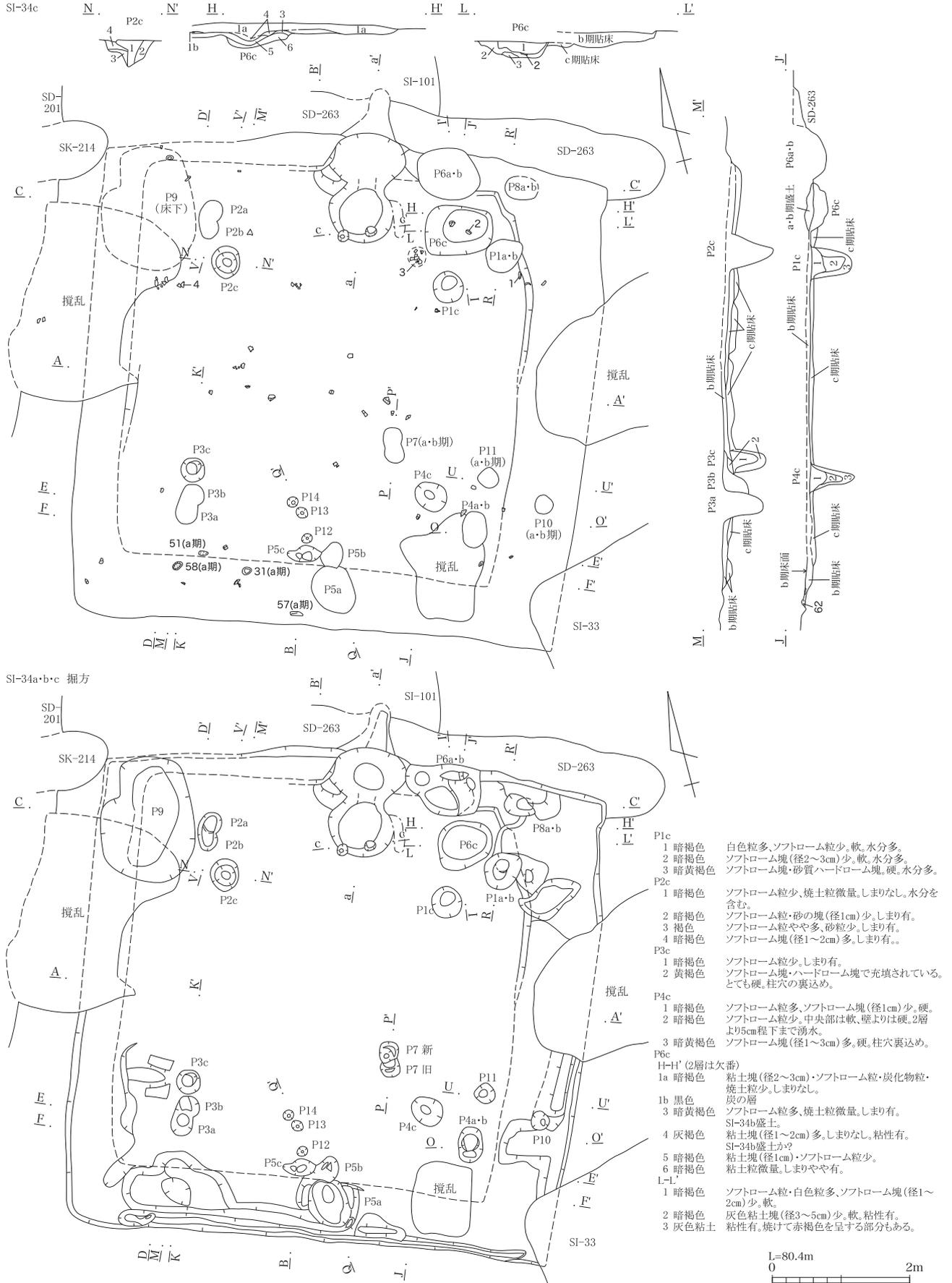
[SI-34b 出土遺物] P3b で 2 片だけ出土したが、古墳中期の混入遺物の可能性が高いので図示していない。土師器合計 2 片・52g の内訳は、杯 1 片・37g、壺甕類 1 片・15g である。



第63図 権現山遺跡 SG10区 SI-34a・b・c(3) a期遺物



第64図 権現山遺跡 SG10 区 SI-34a・b・c(4) a・c 期遺物



SG10 区 SI-34c (第 61・62・64・65 図、写真図版 83～86)

[重複関係] SI-34a・34b の貼床下で確認した、拡張前の建物。調査時には「SI-34B」と呼称し、整理作業時に「SI-34c」に改称した。北側の SI-101 (古墳中期) → SI-34c → 拡張した SI-34b → 34a の順になる。

[規模と形状] 方形の建物跡で主軸方位は GN-23° -E。東西・南北ともに約 5.7m の大きさと推定され、残存する深さは約 10cm (第 65 図)。

c 期の支柱穴は 4 本で方形に配置し、柱間は東西 3.36～3.45m、南北 3.04～3.12m。c 期床面からの深さは北東の P1 が 59cm、北西の P2 が 61cm、南西の P3 が 50cm、南東の P4 が 61cm。柱径を反映する土層の径は 12cm (P2c)～21cm (P1c)。柱穴の上を b 期貼床で覆われる。

c 期の入口ピット P5c は c 期床面から深さ 21cm で、貼床で埋め戻されていた (第 61 図 F-F')。P5 は東西に並んで二時期分があり、東側の P5b が SI-34b、西側の P5c が SI-34c に伴うと考えた。ただし、現地調査時には P5b と P5c の前後が逆転する可能性も考えられている。P5 の北にある 3 個の小穴 P12～P14 も c 期に伴う (径 13～18cm、床面から深さ 10～14cm)。P12 の埋土は c 期貼床である床 8 層に似るが、軟らかい点が異なり、c 期に開口していた穴と現地調査時に判断されている。P13・P14 の覆土は不明。

c 期貯蔵穴は北東隅の P6c で、東西 98×南北 70×床面からの深さ 20cm。b 期貼床で上を埋め、その上に a 期の盛土層 (第 65 図 H-H' の 3・4 層、第 61 図 I-I') や、カマド袖粘土 (H-H' の 1b 層) が載る。南西支柱穴 P3c の西にある間仕切溝 D2 は c 期床面で確認した幅 16～20cm×長さ 62cm の小溝。c 期掘方を埋め戻す c 期貼床はソフトロームおよび地山ローム層下で採れる砂質土を用いる (床 3・8・9 層)。D-D' の中央やや東側で、地山ハードロームを掘り残した不自然な高まりが掘方底面に認められた。

[カマド] c 期のカマドは掘方だけが残っている。a 期・b 期カマドを除去した下部のカマド掘方はひょうたん形で、そのうち南半の円形部分が c 期カマド掘方と推定される。東西 98×南北 82cm で、c 期床面からの深さは 9cm。この円形掘方の東側には東袖痕跡の灰色粘土が認められ、本来は東西の袖幅が 60～70cm であったと考えられる。

[覆土] c 期の竪穴は、上に拡張した b 期建物を造るために、b 期の貼床土で埋め戻されている。

[遺物出土状況] c 期貯蔵穴で出土した遺物 (72) に加えて、竪穴部で b 期床面レベル (標高約 80.1m) よりも下位で出土したと計測されている遺物を、SI-34c に伴うものとして扱った。

[出土遺物] 杯類は主に漆仕上げである。浅い内彎口縁杯 (72) や、半球形杯 (71) の内面に、ごくまばらな放射状ミガキで「米」字状などを描く。同様な例は SI-34a などにある。図示以外の土師器合計 132 片・1,792g の内訳は、杯 54 片・573g、高杯 22 片・239g、壺甕類 56 片・980g。

第 34 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-34a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.7 高 5.2 最大 14.6 重 残 294.7	外面の口～体部境に浅い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に 1 方向と体部に横位のナデ、口縁部ヨコナデ。内面に交差する 3 本のヘラミガキあり。外面上半と内面全体に漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 黒粗～細粒多、赤・ 灰色・透明粗～細粒少 やや硬質	中央床上 5cm ほぼ完形 口 5/6 周 SI-103 100
2 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.6	外面の口～体部境に浅い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に 1 方向または多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部に横位のナデ、口縁部にヨコナデ。内面に疎らなヘラミガキあり。外面上半と内面全体に漆仕上げ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 黒 粗～細粒やや多、赤・灰色・ 透明粗～細粒少 やや硬質	中央床上 5～9cm 口 1/3 周、体 1/2 周 SI-103 129、130、北 東区 1・2 層、D ブロッ ク 2 層
3 土師器 杯	口 13.7 高 4.4 最大 14.0	外面の口～体部境に明瞭な段。外面口縁部ヨコナデ後、底面に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体～底部がナデおよび浅い織物圧痕を少し残し、口縁部ヨコナデ。内外面口縁部に漆仕上げ。内面体部では漆仕上げの痕が不明。 [注記] SI-34・SD-263 上面、SI-103 47、52、55、B ブロック 2 層、A-A' ベルト西 2 層、B-B' 南端 1 層	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤・灰色粗～細粒 やや少、白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央床上 4～6cm。SD- 263 混入の 1 片も接合 口 1/2 周 注記は左欄
4 土師器 杯	口 13.8 高 4.1 最大 14.1 重 219.8	外面の口～体部境に稜あり。外面体部上位に粘土接合痕を残す雑なナデ後に口縁部ヨコナデ、底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面はおそらくヘラナデ後に底部に多方向と体部に横位のヘラミガキ。内外面を漆仕上げするが、外面底部は漆が斑状で薄い。	7.5YR7/4 にぶい褐 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒やや少、黒・透明細粒少、 金色雲母細片極少 硬質	貯蔵穴底上 22cm で正位 完形 SI-103 39
5 土師器 杯	口 13.5 高 5.1 最大 14.1 重 残 234.3	外面の口～体部境に浅い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に 1 方向、体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に 1 方向と口～体部に横位の密なヘラミガキ。外面中位以上と内面全体に漆仕上げ。	7.5YR8/8 黄橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒や やや少、白・透明細粒少 やや硬質	中央床上 5～11cm 口 7/8 周、底全周 SI-103 106、108、138、148、 北東区 1・2 層

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

6 土師器 杯	口 14.0 高 5.1 最大 14.2 重 276.7	外面は体部上位に粘土積み上げ痕を残す雑なナデ、口縁部ヨコナデ、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラミガキ。外面上半に漆仕上げ。内面全面に漆仕上げと炭素吸着を両方向う。	5YR7/8 橙 やや粗い 赤・灰色粗～細粒 やや多、白・黒・透明細粒 やや少 硬質	貯蔵穴底上 20cmで正位 完形 SI-103 40
7 土師器 杯	口 13.8 高 5.5 最大 14.5 重 残 284.1	外面の口～体部境に明瞭な段あり。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向、体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後、口縁部にヨコナデ。内面全体と底部以外の外面全体を漆仕上げ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 14cmで正位 ぼぼ完形 口11/12周 SI-103 41
8 土師器 杯	口 14.2 高 5.3 最大 14.4	内面形状はやや平底気味。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に1方向と体部に横位のヘラナデ後、体部上半～口縁部にヨコナデ。外面上半に漆仕上げが見られる。内面はほとんど残っていないが、本来は内面まで漆で仕上げられていたと考えられる。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤・灰色粗～細粒 やや多、白・黒・透明細粒少 硬質	中央床 上 6～8cm 口1/2周、体 7/12周 SI-34・SD-263、SI-103 54、55
9 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 4.1 最大 復 12.9	外面口縁部ヨコナデ後、底部1方向と体部横位のヘラケズリ。内面口～体部ヨコナデ後、体～底部に非常に疎らな放射状ヘラミガキで、「米」字状等を描く可能性が高い。外面上半と内面に漆仕上げ。	5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒やや少、白・ 赤粗～細粒少 やや硬質	中央床 上 1cm 口1/6周 SI-103 32
10 土師器 杯	口 13.4 高 4.5 最大 13.8	薄く軽い。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に1方向ナデ、口～体部にヨコナデ。外面上半と内面全体に漆仕上げ。〔注記〕SI-103 55、63、144、145、Bブロック2層、A-A'ベルト西2層、B-B'南端1層	10YR7/6 明黄橙 やや緻密 赤・灰色粗～細粒 やや多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央床 上 4～6cm 口3/4周 注記は左欄
11 土師器 杯	口 13.2 高 4.3 最大 13.6	外面は口縁部にヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に多方向のナデまたはヘラナデ、口～体部にヨコナデ。外面の口縁部または体部以上と内面全面に漆仕上げ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤・赤粗～細粒と 黒・灰色・透明細粒少 やや硬質	中央床 上 5～6cm。SD- 263 混入 3片が接合 口1/2周、体 2/3周 SI-34・SD-263 上面、SI- 103 50、56、146
12 土師器 杯	口 14.4 高 6.3 重 残 275.1	外底面中央は静止系切り離し痕の可能性あり。外面口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面の体～底部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面上～中位と内面全体を漆仕上げ。12・13・14は同工品。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒や やや少、黒・透明粗～細粒少 やや硬質	中央床 上 1～5cm 口5/6周 SI-103 75、78、141、148、 北東区1・2層
13 土師器 杯	口 14.1 高 5.9 最大 14.7 重 残 257.9	外面の口～体部境に浅い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後に底部をおおむね1方向、体部を横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面中位以上と内面全体を漆仕上げ。12・13・14は同工品。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや少、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央床 上 1～4cm 口11/12周、体 5/6周 SI-34・SD-263 上面、SI- 103 57・61・中央区1層
14 土師器 杯	口 14.2 高 5.5 最大 14.9 重 残 311.4	外面の口～体部境に浅い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後に底部に多方向、体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面中位以上と内面全体を漆仕上げ。12・13・14は同工品。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒細 粒少 軟質	中央床 上 6～7cm 口5/6周、体全周 SI-103 118、121、Dブ ロック2層
15 土師器 杯	口 復 11.9 高 4.1 最大 12.0	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向と体部に斜～横位のヘラケズリ。内面は体部に主として横位のナデまたはヘラナデ、口～体部上位にヨコナデ。外面上半と内面に漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・灰色粗粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	SD-263 上面 口1/6周、体 1/3周 SI-34・SD-263 上面
16 土師器 杯	口 12.9 高 5.1 最大 13.2	底部が厚い。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面上位と内面全面に漆仕上げ。〔注記〕SI-103 116、117、120、125、Dブロック2層、北東区1・2層	5YR7/6 橙 やや緻密 赤・灰色粗～細粒 多、黒・透明細粒やや少 やや硬質	中央床 上 5～8cm 口5/6周 注記は左欄
17 土師器 杯	口 13.4 高 4.1 最大 13.7 重 残 168.5	薄く軽い。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に1方向と体部に横位のナデ、口縁部ヨコナデ。外面口縁部と内面全面に漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・灰色粗～細粒 やや多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央床 上 6cm ぼぼ完形 SI-103 107
18 土師器 杯	口 復 14.8 高 残 5.1	内面形状はやや平底気味。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向、体部に横位のヘラケズリ。内面は底部多方向ナデ、口縁部から体部までに幅広いヨコナデ。内面体部を斜上方へ向かってナデる部分もある。外面の上位と内面全体を漆仕上げ。	5YR7/6 橙 緻密 赤・灰色粗～細粒やや 少、黒・透明細粒少 硬質	中央床 上 4～7cm 口7/12周 SI-103 67、70、74、145、151、152
19 土師器 杯	口 復 14.3 高 残 4.1	やや薄い。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白・黒・赤粗～細 粒多、白際と透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 20cm 口5/12周 SI-103 42
20 土師器 杯	口 復 15.7 高 5.4	内面形状はやや平底気味。外面は口縁部ヨコナデ後、底部を主に1方向、体部を横位にヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横位のナデまたはヘラナデの後に口縁部ヨコナデ。内外面の口縁部に漆仕上げが残り、体～底部では不明。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤・灰色粗～細粒 やや少、白・透明細粒少 硬質	中央床 上 4～6cm 口1/4周、底 7/12周 SI-103 79、81
21 土師器 杯	口 復 13.9 高 残 4.9	外面は口縁部ヨコナデ後に体～底部を多方向ヘラケズリ。内面は体～底部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。確実な漆仕上げは認められない。22と類似している。〔注記〕SI-34 B-B'セクション、SI-103 82、95、96、99、113、Dブロック2層	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤・黒・灰色粗～細 粒やや少、白・透明細粒少 やや軟質	中央床直上～床上 4cm 口～底 1/2周 注記は左欄
22 土師器 杯	口 復 14.3 高 5.2	外面は体部上位に雑なナデ、口縁部ヨコナデ、中位から底部にかけて多方向ヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横位のナデ、口縁部ヨコナデ。漆仕上げは認められない。21と類似している。〔注記〕SI-103 104、105、109、110、138、149、Dブロック2層	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・赤・灰色粗～ 細粒多、透明粗粒と黒細粒少 やや硬質	中央床 上 5～8cm 口1/2周 注記は左欄
23 土師器 杯	口 15.7 高 5.5	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部ナデ後多方向ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面上半と内面全体を漆仕上げ。〔注記〕SI-34・SD-263 上面、SI-103 51、53、54、62、A-A'ベルト東3層、B-B'南端1層	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒と 白細粒やや少、透明細粒少 やや硬質	中央床 上 4～8cm 口5/12周 注記は左欄
24 土師器 杯	口 14.8 高 6.1 最大 15.3 重 残 323.8	外面は体部上位が軽いナデで粘土積み上げ痕を残し、口縁部ヨコナデ、底部にほぼ1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体～底部ナデと口縁部ヨコナデ後に底面外面と体部中位をヨコヘラミガキ。外面上半と内面全体を漆仕上げ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 灰色粗粒やや多、 赤・黒粗粒と白・黒・透明細 粒少 やや硬質	中央床 上 5～8cm 口～体 11/12周 SI-103 69、71、72、73、145、C ブロック2層
25 土師器 杯	口 13.9 高 4.4 最大 14.1 重 残 211.4	外面は口縁部ヨコナデの後に底部を1方向、体部を横位にヘラケズリ。内面口縁部から体部まで広くヨコナデ。外面上半と内面全体に漆仕上げ。底部内外面を貫通する亀裂は、乾燥時か焼成時に生じた可能性がある(断面図に記入)。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤・灰色粗～細粒 と白・黒・透明細粒少、金色 雲母細片極少 やや硬質	中央床 上 3～7cm ぼぼ完形 口11/12周 SI-103 86、87、88、120、122、 北東区1・2層
26 土師器 杯	口 13.6 高 4.2 重 220.5	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に1方向と体部に横位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内外面の口縁部に漆仕上げ。内面体部には現状で漆が見られない。底部に内外面を貫通する亀裂は乾燥時か焼成時に生じた可能性がある(断面図に記入)。〔注記〕SI-103 38、カマド周辺、SD-263 64	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗粒多、灰色粗 粒と白・黒・赤細粒少 やや硬質	カマド東床上 11cmで正 位。SD-263 混入の1片も 接合 完形 注記は左欄

第5章 権現山遺跡 SG10 区

27 土師器 杯	口 復 13.4 高 残 3.3	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向、体部に横位のヘラケズリ。口縁部ヨコヘラミガキ。内面は体部に多方向、口縁部に横位の密なヘラミガキ。現存部の内外面全体に漆仕上げ。	7.5YR5/3 にぶい褐 やや緻密 白粗～細粒と黒細 粒やや多、灰色・透明粗～細 粒少 軟質	中央床 上 5cm 口 1/6 周 SI-103 27
28 土師器 杯	口 復 12.7 高 残 3.6	外面は口縁部が2段状で、下方の段はやや凹線に近い。体部ヨコヘラケズリ。内面ヨコナデ。残存する内外面を漆仕上げ。接合できない3片から図上復原したため、口径がやや不確実。	2.5Y7/2 灰黄 緻密 黒・透明細粒やや少、 白・灰色粗粒少 軟質	北東床上 6cm 口 1/4 周 SI-34・SD-263 上面、SI- 34 3、B-B' 南
29 土師器 高杯	口 復 13.5 高 7.4 脚裾 10.5	外面口縁部ヨコナデ後に杯体部を上へヘラケズリ。外面脚裾ヨコナデ後に脚部を下へヘラケズリ。内面は杯底部に1方向または多方向ヘラミガキ、杯体部にヨコヘラミガキ。脚裾部内面ヨコナデ後に脚柱部ヨコヘラケズリ。外面全体と杯部内面に漆仕上げで、内外面の口縁部で最も濃く塗られている。 [注記]SI-34・SD-263 上面、SI-103 44、45、56、146、147、Aブロック2層、Dブロック2層、B-B'、B-B' 南端1層	7.5YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤・黒・透明細粒少 軟質	中央床上 4～6cm。SD- 263 混入破片が接合 口 1/3 周、脚柱～裾 3/4 周 注記は左欄
30 土師器 高杯	口 13.4 高 7.4 脚裾 10.5 重 残 293.1	外面は口縁部ヨコナデ後に杯体部を上へヘラケズリし、口縁部タテヘラミガキ。外面脚部を下へヘラケズリして脚裾をヨコナデ。内面は杯底部に1方向、杯体部に縦位、口縁部に横位にヘラミガキ。脚裾部内面ヨコナデ後に脚柱部ヨコヘラケズリ。脚裾部内面に雑なナメナデを行う箇所もある。外面全体と杯部内面に漆仕上げで、内外面の口縁部で最も濃く塗られている。 [注記]SI-103 103、110、112、D2ブロック2層、Dブロック3層、北東区1・2層	7.5YR7/6 橙 緻密 赤・黒・透明粗～細粒 少 やや軟質	中央床上 5～8cm。北 東の1片も接合 口 3/4 周、脚柱全周、 脚裾 1/2 周 注記は左欄
31 土師器 高杯	口 13.8 高 7.3 脚裾 復 9.8	外面は口縁部ヨコナデ後に杯部を主に上へヘラケズリ、脚部を下へヘラケズリ。内面は杯底部に1方向、杯体部に横位のヘラミガキ。脚裾部内面ヨコナデ後に脚柱部ヨコヘラケズリ。脚裾部内面に雑なタナデを行う箇所もある。外面脚裾部および口縁部と杯部内面に漆仕上げ。	5YR6/6 橙 緻密 赤・黒・透明細粒と白・ 赤粗粒少 やや軟質	中央床上 4～9cm 口 1/2 周、脚柱全周、 脚裾 1/2 周 SI-103 127、128、131、140、D ブロック2層
32 土師器 高杯	口 13.8 高 7.1 脚裾 10.2	外面は口縁部ヨコナデと杯体部ナメナデ後に杯体部を上へ、脚部を下へヘラケズリ。内面は杯底部に1方向または多方向、杯体部に横位のヘラミガキ。脚裾部内面ヨコナデ後に脚柱部ヨコヘラケズリ。外面全体と杯部内面に漆仕上げ。 [注記]SI-34 B-B'セク北、床下P1周辺、SI-103 75、76、77、78、83、84、85、130、146、Dブロック2層	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤・黒粗～細粒やや少、 白・透明細粒少 軟質	中央床上 4～9cm。P1 周辺の1片も接合 口 7/12 周、脚柱全周脚 裾 2/3 周 注記は左欄
33 土師器 高杯	口 12.8 高 7.0 脚裾 10.8 重 残 271.7	外面は口縁部ヨコナデと杯体部ナメナデ後に杯体部を上へヘラケズリ。脚裾部ヨコナデ後に脚部を下へヘラケズリ。内面は杯底部に多方向、杯体部に横位のヘラミガキ。脚裾部内面ヨコナデ後に脚柱部ヨコヘラケズリ。外面全体と杯部内面に漆仕上げで、内外面の口縁部で最も濃く塗られている。 [注記]SI-103 123、124、125、126、139、Dブロック2層、北東区1・2層	7.5YR7/6 橙 緻密 赤粗～細粒やや少、 白・黒細粒少 軟質	中央床上 5～7cm。北 東部の小片と接合 口 5/6 周、脚裾 2/3 周、 脚柱全周 注記は左欄
34 土師器 高杯	口 13.5 高 6.9 脚裾 9.5 重 残 299.3	外面は口縁部ヨコナデ後に杯体部を主に上へヘラケズリ。脚部は下へヘラケズリ後に脚裾をヨコナデし、脚端が肥厚する箇所もある。内面は杯底部に1方向、杯体部と口縁部に横位のヘラミガキ。脚内面は中央部をユビナデ後に裾部をヨコナデ。脚裾部および外面口縁部と杯部内面に漆仕上げ。 [注記]SI-103 101、102、Dブロック2層、北東区1・2層	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤・黒・透明細粒少 軟質	中央床上 7cm。北東部の 3片も接合 口 3/4 周、脚柱～脚裾 1/2 周 注記は左欄
35 土師器 杯	口 復 13.4 高 残 2.6	外面は杯体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部タテヘラケズリ。内面は杯体部と口縁部にヨコヘラミガキ。内外面の残存部全体を漆仕上げ。	10YR7/2 にぶい黄橙 緻密 白・赤粗～細粒と黒・ 透明細粒少 軟質	中央床直上～床上 2cm 口 1/3 周 SI-103 82、89、90
36 土師器 高杯	高 残 3.8 脚裾 復 10.1	外面は杯体部を上へヘラケズリ、脚裾部ヨコナデ後に脚部を下へヘラケズリ。内面杯体部にヘラミガキ。脚裾部内面ヨコナデ後に脚柱部ヨコヘラケズリ。外面全体と杯部内面に漆仕上げ。 [注記]SI-34・SD-263 上面、SI-103 B-B' 南端1層	7.5YR7/6 橙 緻密 赤・黒細粒やや少、黒・ 透明細粒少 軟質	中央部 1層。SD-263 混 入破片も接合 脚柱 3/4 周、脚裾 1/12 周 注記は左欄
37 土師器 高杯	口 復 13.2 高 残 7.1 脚裾 10.1	外面杯体部ナメナデ後に口縁部ヨコナデ、杯体部を上へヘラケズリ。内外面脚裾部ヨコナデ後に外面脚柱部タテヘラケズリ、内面脚柱部ヨコヘラケズリ。内面杯底部に1方向または多方向、杯体部に横位のヘラミガキ。外面全体と杯部内面に漆仕上げ。 [注記]SI-34・SD-263 上面、SI-103、SI-103 47、49、50、55、56、143、Aブロック2層、A-A'ヘルト東2層	7.5YR7/6 橙 緻密 赤粗粒と黒粗～細粒と 透明細粒少 やや硬質	中央床上 3～6cm。SD- 263 混入破片と接合 口 2/3 周、脚 2/3 周 注記は左欄
38 土師器 高杯	口 12.9 高 7.0 脚裾 10.3 重 残 326.9	外面は口縁部ヨコナデ後に杯体部を主に上へヘラケズリ、脚部を下へヘラケズリ。内面は杯底部に多方向、杯体部に横位のヘラミガキ。脚裾部内面ヨコナデ後に脚柱部ヨコヘラケズリ。外面全体と杯部内面に漆仕上げで、内外面の杯部上半で最も濃く塗られている。 [注記]SI-103 93、94、114、119、北東区1・2層、Dブロック2層	10YR8/4 浅黄橙 緻密 赤粗～細粒と黒細粒や や少、白・透明細粒少 軟質	中央床直上～床上 8cmに 北東の1片が接合 口～脚柱全周、脚裾 5/6 周 注記は左欄
39 土師器 高杯	口 復 14.0 高 残 6.6	外面は口縁部ヨコナデ、杯体部を上へ、脚部を下へヘラケズリ。内面杯底部中央に1方向、杯体部に横位のヘラミガキ。脚柱部内面タテヘラケズリ。内外面口縁部に漆が残り、おそらく杯脚部外面から杯体部内外面まで漆仕上げだったと思われる。乾燥時に焼成時に生じたと思われる亀裂が脚柱部上端内面から杯底部内面まで達している。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 赤・黒・透明粗～細粒 少 軟質	南西隅床上 10cm 口 1/3 周、脚柱 5/6 周 SI-34 48
40 土師器 高杯	口 13.2 高 残 6.5	外面は口縁部ヨコナデ後に杯体部を上へ、脚部を下へヘラケズリ。内面は杯底部に1方向または多方向、杯体部に横位のヘラミガキ。脚部内面はナメナデ後に上部をヨコヘラケズリ。外面全体と杯部内面に漆仕上げで、内外面の口縁部で濃く塗られている。 [注記]SI-34・SD-263、SI-34・SD-263 上面、SI-34 南西区1層	5YR6/6 橙 緻密 赤粗粒と黒粗～細粒と 透明細粒少 軟質	中央床上 12cm。SD-263 混入の破片と接合 口 2/3 周、脚柱全周 注記は左欄
41 土師器 高杯	口 13.9 高 残 4.2	外面は口縁部ヨコナデ後に杯体部を上へヘラケズリ。内面は杯底部に多方向、杯体部に横位のミガキ。残存する内外面全体に漆仕上げ。 [注記]SI-34・SD-263 上面、SI-103 43、B-B' 南端1層	5YR6/6 橙 緻密 赤・黒粗～細粒やや少、 白・透明細粒少 軟質	中央床上 3cm 口 3/4 周 注記は左欄
42 土師器 高杯	口 14.0 高 残 2.8	外面は口縁部ヨコナデ後に杯体部を上へヘラケズリ。口へ体部に疎かなタテヘラミガキ。内面は口縁部と杯体部にヨコヘラミガキ。内外面の残存部全体を漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒少 軟質	中央床上 2～4cm 口 1/2 周 SI-103 91、97、113
43 土師器 鉢	口 復 12.3 高 残 13.5 最大 14.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部タテヘラケズリで、器面が硬い時に削ったために平行横線状の段になる箇所もある。外底面は主に1方向のヘラケズリで緩い凸面状にする。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。被熱・使用痕は見られない。 [注記]SI-34 C-C' 中央、床下P1周辺、SI-103 7、8、9、10、11、14、26、B-B'ヘルト北2層、カマド内、カマド周辺、中央区1層	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 黒・透明粗～細粒やや少 硬質	カマド南床上 12～16 cmと南西隅床上 13cm 口 1/3 周、底 2/3 周 注記は左欄
44 土師器 甕	高 残 8.1 底 復 7.8	外底面は多方向ヘラケズリ。外面胴部に縦位および斜位のナデ後に胴部下位ナメヘラケズリ、胴部下端ヨコヘラケズリ。内面は底部に1方向と体部に横位のヘラナデ。外面が被熱しているかもしれないが不明確。 [注記]SI-34 C-C' 中央、SI-103 159、164、165	5YR6/6 橙 粗い 白・灰色礫～粗粒多、 赤粗粒と透明粗～細粒少 硬質	カマド床直上～床上 8cm 底 1/2 周 注記は左欄

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

45	土師器 甕	口高 復22.2 残35.3	外面頸部の段が明確。外面胴部タテヘラケズリ後に頸～口縁部ヨコナデ。内面胴部ヨコヘラナデで、胴部下位にナナメヘラナデやヨコヘラケズリも見られる。内面口縁部ヨコナデ。被熱・使用痕や煤は現存部には認められない。[注記]SI-103 1-1～1-30、カマド内	7.5YR6/6 橙 粗い、白・赤・透明粗～細粒多、灰色粗粒と黒細粒少 やや硬質	カマド内床直上～床上 17cm 口5/12周、胴1/3周 注記は左欄
46	土師器 甕	口高底重 21.1 37.6 6.4 残2735.1	外底面は1方向のヘラケズリでやや凹底状。外面は上位と下位をそれぞれ上方向と下方向にヘラケズリし、外面上位は器面が硬い時に削っているので平行線状の段を生じる。内面は胴部ヨコヘラナデ後に下位の積み上げ休止部をヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面の胴上位が汚れる。外面の被熱痕や煤は不明確。	5YR6/8 橙 粗い、白・赤～細粒多、灰色礫と黒・透明粗～細粒やや多 やや硬質	カマド火床上12～18 cmと東袖上面5～6cm ほぼ完形 口全周、底全周 SI-103 2-1～2-35、カ マド内
47	礫	長幅厚 23.7 9.5 6.9	断面が隅丸三角形の長い自然礫。全面が強く被熱赤化している。加工・使用痕は見られない。重量2390g。	2.5Y5/1 黄灰 緻密で硬質な石英斑岩	中央床上3cm 完形 SI-103 17
48	礫	長幅厚 10.8 10.6 4.9	厚さ3～5cmの扁平な自然礫で、図の手前側がやや薄い。全面が被熱して桃色になり、所々に煤が付着する。加工痕は見られない。重量733.9g。	2.5Y6/3 にぶい黄 多孔質気味で硬質な安山岩	東攪乱中 完形 SI-34 16
49	石器 編物石	長幅厚 12.4 4.6 4.3	断面が不整な隅丸四角形の自然礫をそのまま利用。両側縁の中央がわずかに磨耗している可能性もあるが不明確。その他には加工・使用・被熱痕は見られない。重量356.2g。	2.5Y6/2 灰黄 少し多孔質でやや硬質な安山岩	北東床上8cm 完形 SI-34 4
50	石器 編物石	長幅厚 残7.5 5.7 2.4	図示した面の反対面がかなり扁平で、その面に小さな凹みが多く見られる。図の下縁が折損する。この他には加工・使用・被熱痕は見られない。残存重量167.0g。	5Y5/1 灰 多孔質で緻密な安山岩(溶岩)	西寄り南壁際床直上 一部欠 SI-34 21
51	石器 編物石	長幅厚 13.5 6.3 3.6	断面が長方形気味で、上下両端よりも中央部が少し薄い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量373.1g。	5Y7/2 灰白 緻密で硬質な石英斑岩	南西床直上 完形 SI-34 46
52	石器 編物石	長幅厚 12.7 6.0 3.2	断面が楕円形で、図下部の左側縁が少しくびれる自然礫をそのまま利用。両側縁の中央がわずかに磨耗している可能性もあるが不明確。その他には加工・使用・被熱痕はない。重量362.1g。	2.5Y6/3 にぶい黄 少し多孔質で硬質な安山岩	北東床上8cm 完形 SI-34 13
53	石器 編物石	長幅厚 12.3 5.2 4.6	図の左側が平坦面になるような断面D字形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量344.5g。	2.5Y8/3 淡黄 緻密で硬質な流紋岩	北東床上6cm 完形 SI-34 12
54	石器 編物石	長幅厚 残11.2 5.5 3.8	断面が楕円形で棒状の自然礫をそのまま利用。図の下端が折損する。この他には加工・使用・被熱痕は見られない。残存重量354.1g。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密で硬質な花崗斑岩	a期建物南壁付近 一部欠 SI-34 上層南壁
55	石器 編物石	長幅厚重 残11.5 6.3 3.5 残321.0	図示した面に丸味を帯び、反対面がやや平坦になる形の自然礫をそのまま利用。図の下端が折損し、その破面の稜は少し磨耗している。加工・使用痕はない。全体が弱く被熱している可能性もあるが不明確。図示した面と下端の破面に黒色の付着物が少量散在する。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密でやや硬質なデイスサイト	南東隅床上4cm 下端部欠 SI-34 19
56	石器 編物石	長幅厚 12.7 5.7 4.7	各辺が外へ膨らむような隅丸方形の断面形。細長くて幅・厚とともに中央部がやや大きくなる自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量496.5g。	10YR5/4 にぶい黄褐 緻密で硬質な流紋岩	南壁際中央床上2cm 完形 SI-34 25
57	石器 編物石	長幅厚 16.3 6.1 4.5	細長くて重心が図の下寄りにある自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕はない。図の裏側面に擦痕があるが、発掘調査時の傷と考えられる。重量632.3g。	N5(B) 灰 多孔質で硬質な安山岩	南壁際中央床直上 完形 SI-34 51
58	石器 編物石	長幅厚 15.3 8.5 5.0	やや細長く、横断面でわかるように片方の側縁がやや厚い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕はない。重量722g。	2.5Y6/3 にぶい黄 少し多孔質で硬質な流紋岩	南西隅床上7cm 完形 SI-34 45
59	石器 編物石	長幅厚 14.3 5.4 3.0	断面が長方形または台形で、平面形が緩く曲がる自然礫をそのまま利用。図に記入した浅い凹みが多いが、人為的な加工ではない。図の反対面ではこのような凹みがなく、むしろ中央部はかなり平滑である。加工・使用・被熱痕は見られない。重量306.5g。	N7/1 灰白 緻密で硬質な安山岩	南壁際中央床上4cm 完形 SI-34 77
60	石器 編物石	長幅厚 14.6 4.9 3.7	断面が隅丸四角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量475.7g。	10YR7/2 にぶい黄橙 緻密で硬質な石英斑岩	中央床上5cm 完形 SI-103 25
61	石器 編物石	長幅厚 14.5 5.0 4.9	断面が隅丸四角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量560.2g。	5Y7/3 浅黄 緻密で硬質な安山岩	中央床上10cm 完形 SI-103 5
62	石器 編物石	長幅厚 残15.1 6.7 3.7	細長い自然礫で、全面が弱く被熱して桃色になる。下端の小口部と、図示した面の中央～下部でかなり割れが進んでいて、被熱以外に敲打が加わっている可能性もある。残存重量539.9g。	10YR7/2 にぶい黄橙 やや緻密で硬質な安山岩	南壁際中央床直上 下端欠損 SI-34 22
63	土師質 専用羽口	長幅厚 残4.5 残2.6 復2.2 残23.1	先端部の1/4弱が残る以外はすべて破面。粘土組接合痕または積み上げ痕が残る。残存する円周が少ないので復原径は参考値で、使用角度も不明。先端部は溶損して暗緑灰色～黒色ガラス質になり、鉄錆色の滓が内外面に付着する。身厚は1.3～1.6mm。鍛冶関連遺物構成Noなし。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 透明粗～細粒やや多、白細粒少 やや硬質 磁着度 2 メタル度 未測定	南西 1/4周 SI-34 南西区1層
64	腕形鍛冶滓 (極小)	長幅厚重 残3.1 残3.2 残1.5 残9.3	もう1点の鉄滓と似た厚さ1.4cm程の極小の腕形鍛冶滓肩部寄り破片。左側部が主破面で滓質は密度が低い。上面は浅く凹む半流動状の面となり、小さな腕形の下面には炉床土の痕跡を残す。鍛冶関連遺物構成No 66。	表 にぶい黄橙色 地 暗灰黄色 磁着度 1 メタル度 なし	a期建物の入口ピット底 面上12cm 全周の大半が破面 SI-34 73
65	腕形鍛冶滓 (極小)	長幅厚重 残4.5 残3.8 残1.9 残27.3	側部3面が破面になった極小の腕形鍛冶滓の中核部から側部破片。上面は浅く凹み、下面は皿状となる。右側部が部分的に重層気味で操業時に原料投入が2回に分かれている可能性を持つ。滓質はほぼ緻密で破面には気孔が散在する。鍛冶関連遺物構成No 67。	表 明褐色 地 明青灰色 磁着度 3 メタル度 なし	a期建物床上13cm 破面3面 SI-103 24
66	石器 砥石	長幅厚重 残6.3 残5.0 残1.3 残48.6	図示した左側面をよく使用して平滑な凹面状になる。この面に接している平面図左上部の縁辺も幅2～5mmの狭い範囲が平滑に砥がれている。図示した平面の上半部も弱く磨耗するが、元の石の凹凸をまだ残し、砥面と呼ぶにはやや疑問が残るものである。	5Y7/2 灰白 粘板岩起源の緻密で硬質なホルンフェルス	D-D' 南 2面残存 SI-34 D-D' 南
67	石器 砥石	長幅厚 残3.4 残3.1 残1.5	図示した側面がやや磨耗し、砥面と考えられる。図の上部寄りにわずかな擦痕を残す。この面以外はすべて破面。残存重量11.2g。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密・細粒でやや硬質な砂岩	カマド周辺 1面残存 SI-103 カマド周辺
68	石器 砥石	長幅厚 残3.8 残2.2 残1.5	大半が破面。砥面が狭い範囲に残り、平滑に磨耗している。残存重量11.4g。	5Y8/1 灰白 緻密・細粒でやや硬質な砂岩	カマド袖部東西断面ラ イン付近の貼床中 1面残存 SI-103 H-H' 床下

第5章 権現山遺跡 SG10 区

69 銅製品 耳環	縦 26.6mm 横 28.5mm 重 残 11.3	環の断面は表裏方向に少し厚い楕円形。環の下側面に被覆材の銀色を確認できる部分があるので銅地銀張製。銀板の表面に鍍金を施しているかどうかは不明。環の端面で銀板を処理している方法は、銅錆が多いので確認できない。図示した面に有機質が残り、図左上部には非常に細かい織物が4×1.5mmの範囲に錆着している。これ以外は植物質なので土中で付着した疑いがある。計測値は、a26.6、b28.5、c16.6、d6.17、e7.18、f5.34、g7.51(単位:mm)。		P5(a期)の底直上 表面 1/8 弱欠損 SI-34 94
70 鉄製品 鉄鏃?	長 残 2.4 重 残 1.7 (錆を含む)	長頸鏃の鏃身から頸部にかけての破片かと思われる。頸部は幅 5.9×厚 4.2mmの長方形。鏃身は幅 6.2×厚 2.8mmの片丸造で、両切刃造であった可能性も残る。鏃身関部を持たずに頸部から刃部へ続く形状。		東西ベルト A-A' の中央 部上層 両端欠損 SI-34 上層 A-A' 中央

第 35 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-34c 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
71 土師器 杯	口 復 13.3 高 残 4.0	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部にナデまたはヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面に「水」字状または「米」字状等の疎らな放射状ヘラミガキを装飾的に行っていたと考えられる。漆仕上げは見られない。	7.5YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒や や多、灰色・透明粗粒と白細 粒少 やや硬質	北東 c 期床直上 口 1/4 周 SI-103 37
72 土師器 杯	口 復 14.9 高 残 3.3	口縁部が丸く内彎し、外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面は体部にヨコヘラナデ、口縁部にヨコナデ。内面にヘラミガキが 1 本だけ残存し、十字状または「米」字状等の疎らな放射状ヘラミガキを装飾的に行っていたと考えられる。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	7.5YR7/8 黄橙 やや緻密 黒細粒やや少、赤・ 透明粗～細粒少 やや硬質	c 期貯蔵穴底上 4cm 口 1/8 周、体 1/4 周 SI-34 31
73 土師器 杯	口 復 12.5 高 残 4.3 最大 復 13.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は下位ヨコヘラナデ後に中位と口縁部をヨコナデ。外面口縁部と内面全面を漆仕上げ。	5YR7/6 橙 やや粗い 黒粗 ～細粒多、赤・灰色粗～細粒 と白・透明細粒少 やや硬質	北東部 c 期床直上 口 5/12 周 SI-103 36
74 須恵器 壺	高 残 5.2 最大 復 13.7	内外面ロクロナデ。ロクロは左回転(反時計回り)。胴部内面に粘土粗積み上げ痕を少し残す。	10YR5/1 灰 緻密 白細粒少 硬質	北西 c 期床土 6cm 頸 1/6 周、肩 1/8 周 SI-34 55

SG10 区 SI-35 (第 66 図、写真図版 86)

[位置] SG10 区中央部西端付近の 19-17 と 20-17 グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は、南に SI-37・39 がある。中～近世の溝 SD-263 に南西部を切られる。時期不明の P-291 との重複部が SD-263 に切られているため、SI-35 と P-291 の新旧は不明である。建物の西部と東壁部は現代の攪乱で壊され、西攪乱坑には木根や草、東攪乱坑には現代のゴミが入っていた。

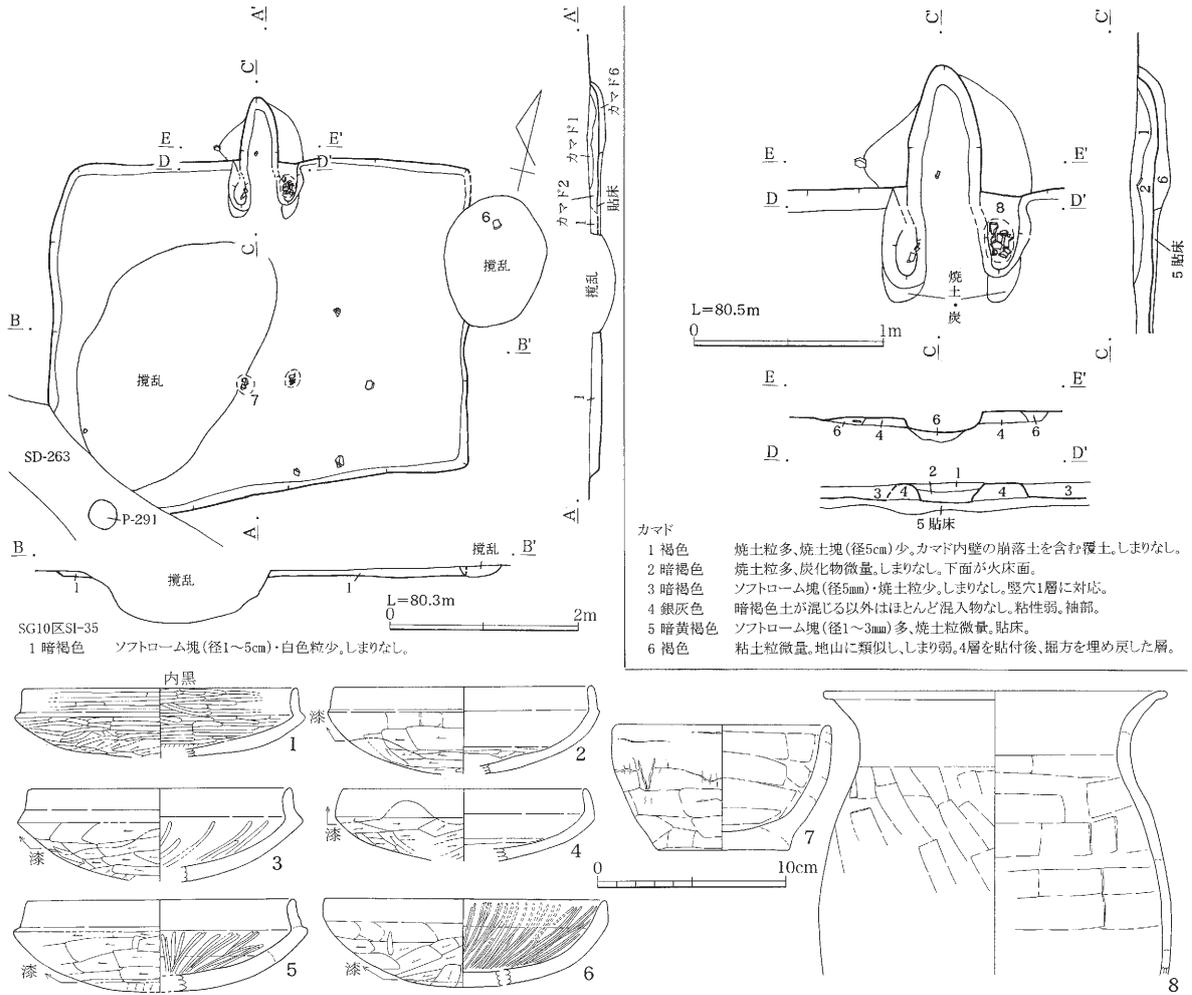
[規模と形状] 長方形の建物跡で主軸方位は GN-12° -W。東西 4.21 × 南北 4.22m、壁が最もよく残る北東～東部では残存壁高 13cm で、西壁は残りが悪く 4～5cm。支柱穴・入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝は認められなかった。ソフトローム主体の土で厚さ 5cm 程度の貼床を行うことがカマドの土層断面で記録されている。カマド以外の竪穴部でも貼床を除去して掘方まで調査を行ったが、カマド部以外の竪穴土層断面では貼床の厚さが図化されていない。

[カマド] 北壁中央から僅かに東へ寄った位置にあり、残りは悪い。両袖幅 78cm、煙道先端から袖先端まで 119cm。北壁より北側の竪穴外へ飛び出す浅く広いカマド掘方に、両袖の北半部を入れるように灰色粘土で袖を造り(カマド 4 層)、粘土の周囲は掘削した排土で掘方を充填する(カマド 6 層)。このようなカマドの構築法は SI-40 と類似している。カマド袖は覆土と区別することが難しかった。両袖の先端部には焼土と炭がまとまって見られた。東袖の残存上面には土師器甕(8)の破片がまとまって載る。

[覆土] 単層で、自然埋没と思われる。テフラと思われる白色粒を少量含むが、古墳時代のテフラかどうかは確実ではない。

[遺物出土状況] 遺物が少ないのは、竪穴の残りが浅いことにもよると思われ、結果として床面に比較的近いレベルで遺物が出土している。カマドの東西両袖と煙道に遺物が少しある。東袖にある土師器甕(8)が遺棄品であろう。

[出土遺物] 遺物は少量の土師器で、須恵器はない。土師器は杯類が個体数・破片数ともに多く、鉢・甕・小形土器などが少し混じる。土師器杯は身模倣形の杯が多く、半球形の杯も含む。これらの杯類は漆仕上げでやや粗いヘラミガキを行うものが主体で、古墳後期後葉と考えられる。1 は漆仕上げではなく、炭素吸着の黒色処理。図示以外の土師器合計 55 片・560g の内訳は、杯 28 片・206g、高杯 2 片・29g、鉢 9 片・122g、壺甕類 16 片・203g。



第66図 権現山遺跡 SG10 区 SI-35 遺構・遺物

第36表 権現山遺跡 SG10 区 SI-35 出土遺物

番号 種類 器類	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.4 高 残 3.6 最大 復 15.2	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ、口~体部ヨコヘラミガキ。内面は底部に1方向と口~体部に横位の密なヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。 [注記] 南西1層、掘乱中、SD-263 3、6	2.5Y8/4 淡黄 やや緻密 白濁と黒・透明細 粒少 やや硬質	南西1層。SD-263 底上 2~5cmの破片も接合 口1/4周、体1/3周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.6 最大 復 14.2	外面は体部上位ナデ後に口縁部ヨコナデ、体~底部ヨコヘラケズリ。内面は体部に多方向ヘラナデ後、口~体部ヨコナデ。外面中位以上と内面全体を漆仕上げ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 白粗~細粒と黒・ 透明細粒少 やや硬質	東側掘乱 口5/12周 東掘乱
3 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 4.9 最大 復 15.0	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向(?)と体部に横位のヘラケズリ。内面はヨコナデ後、体部に放射状のやや密なヘラミガキ。外面上半と内面全体を漆仕上げ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 黒・透明細粒多、 黒粗粒と白粗~細粒少 やや硬質	東側掘乱 口5/12周 東掘乱
4 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 3.7	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部ヨコヘラナデ、口~体部ヨコナデ。外面口縁部と内面全体に漆仕上げ。	10YR7/8 黄橙 やや緻密 黒・灰色粗粒やや 多、赤粗粒少 やや硬質	掘乱中 口1/4周、体1/3周 掘乱中
5 土師器 杯	口 復 13.9 高 残 4.9 最大 復 15.4	体部がやや厚く重い。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部上半と口縁部にヨコナデ後、体部に放射状ヘラミガキ。外面の体部以外と内面に漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 黒細粒多、白・透 明粗~細粒少 硬質	表採 口1/4周、体7/12周 表採
6 土師器 杯	口 復 14.7 高 4.7 最大 復 15.0	厚く重い。外面は体部上位ナデ後に口縁部ヨコナデ、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部に横~斜位ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ、内面全体に放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面全体に漆仕上げ。外面底部に黒斑があるので底部の漆の有無は不明。	7.5YR6/3 にぶい褐 やや粗い 白・黒・透明粗~ 細粒多、赤細粒少 やや硬質	北東隅床上11cmとSD- 263 底上2cm 口1/3周、体5/12周 9、表採、東掘乱、SD- 263 17
7 土師器 粗製鉢	口 復 11.2 高 6.6 底 6.8 最大 復 11.4	外底面は木葉痕または草本植物の圧痕が付いていたかもしれないが、ほとんどナデ消されている。外面体部はやや雑なナデで粘土積み上げ痕を残し、口縁部にヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・赤・透明 粗~細粒少 やや軟質	中央床上3~6cm。カ マド西袖に1片 口1/3周、底5/6周 5、7、11、Bセク1層、 南東1層
8 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 15.1 最大 復 18.4	薄く軽い。外面は胴部ナメヘラナデ後に口~頸部ヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ後に口~頸部ヨコナデ。胴部外面は弱く被熱しているが、あまり明瞭には赤化していない。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白細粒多、白粗粒 と透明粗~細粒と黒細粒少 軟質	カマド東袖上5cm。カマ ド西袖上2cmと焚口部で 各1片出土 口~胴1/6周 1、2、13

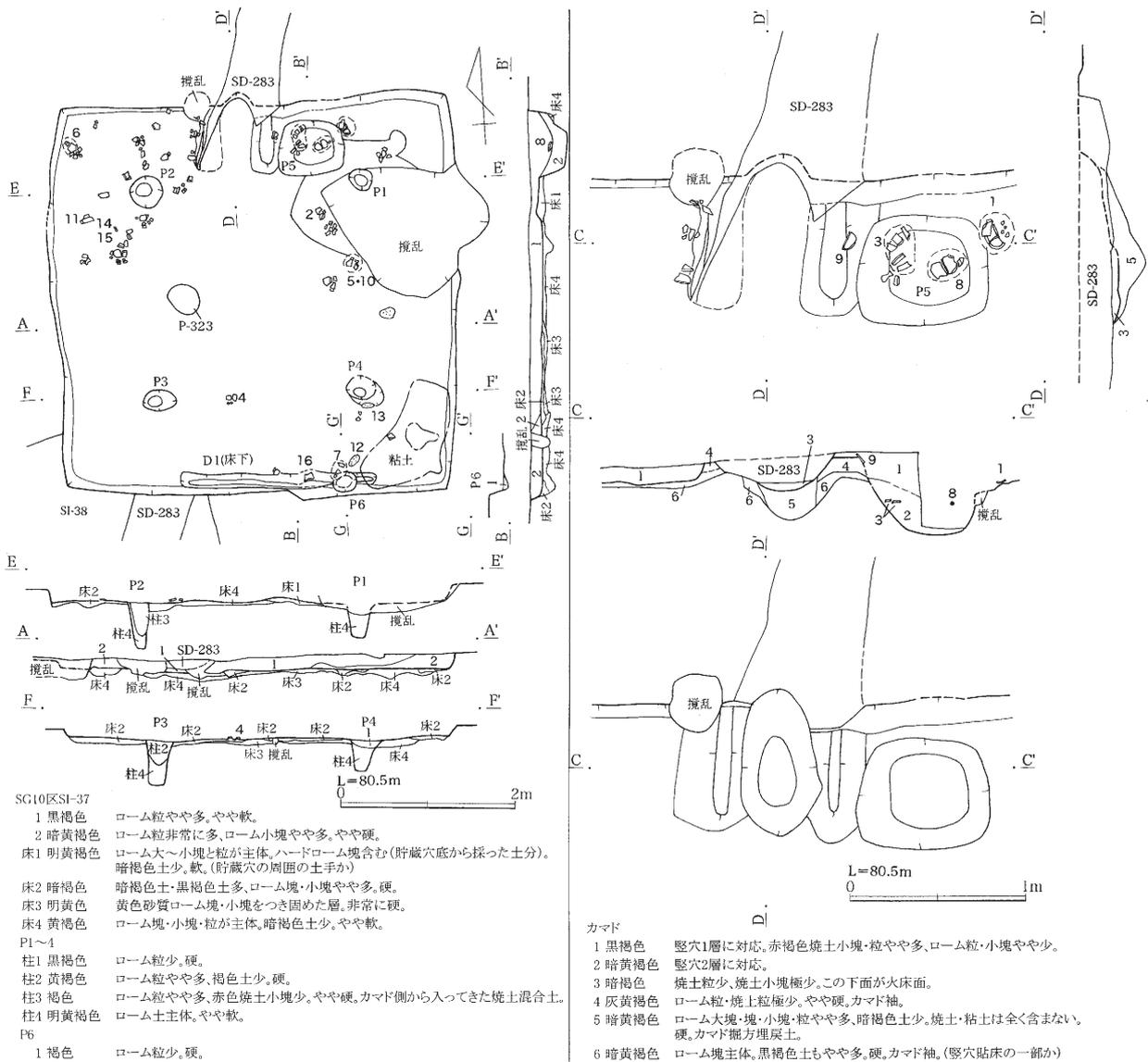
SG10 区 SI-36 → 本章第5節（古墳時代の竪穴鍛冶遺構）を参照

SG10 区 SI-37（第 67・68 図、写真図版 87・197）

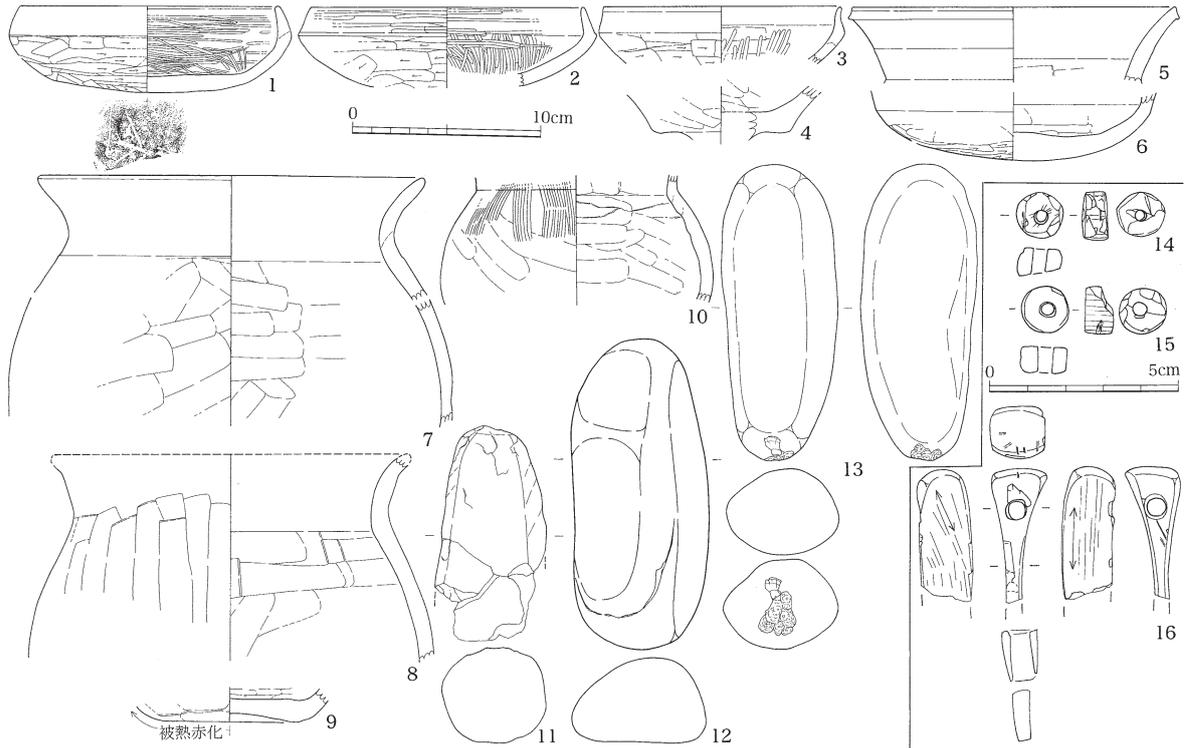
[位置] SG10 区南部西端付近の 19-16・17 グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は、北に SI-35・南に SI-39 がある。古墳中期の SI-38 を切り、時期不明の溝 SD-283 に中央部を切られる。SI-37 の床面で確認した時期不明の P-323 も SD-283 に上部を切られる。SI-37 に P-323 が伴うと考えるのは位置・形状が不自然なので、P-323 が SI-37 よりも新しく、SI-37 → P-323 → SD-283 の順になる可能性がある。北東部に抜根痕の攪乱があり、貯蔵穴 P5 の南東部付近まで根痕が及ぶ。

[規模と形状] 方形で主軸方位は GN-2° -E。東西 4.68 × 南北 4.62m、壁の残存高は 11 ~ 17cm。主柱穴は 4 本で、東西柱間は南側が 2.34m、北側が 2.48m。南北柱間は 2.40m。柱穴底面形状からみて推定柱径は 12 ~ 16cm 前後。床面からの深さは東側柱穴が浅く（P1=41cm, P4=37cm）、西側柱穴が深い（P2=53cm, P3=49cm）。P3 は地山の黄色砂混じりローム層を掘り抜いて、さらに下層の黄灰色砂質土中に底面を持つ。南壁際の東部にある P6 は径 15cm・深さ 7cm の浅いくぼみで、柱穴と呼ぶには浅すぎるものである。

貯蔵穴 P5 は北東部でカマドのすぐ東側にあり、東西 76 × 南北 65 × 深さ 31cm。貯蔵穴 P5 の南側で床



第 67 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-37 (1) 遺構



第 68 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-37 (2) 遺物

面が少し高いので、貯蔵穴周囲を囲む高まりの痕かもしれないが（断面 B-B'）、P5 の南東側に木根痕の攪乱が及んでいるので、平面的には明らかにできない。壁溝 D1 は南壁際の中央部にあり、長 2.26m・幅 15～19cm で、床面では認識できず貼床除去後に確認した。竪穴の掘方は床面より下へ 2～8cm ほどの深さがあり、ローム塊主体の貼床土で埋め戻している。入口施設や間仕切溝はない。

【カマド】北壁中央の少し西寄りにある。東袖が貯蔵穴に接している点が珍しい。両袖幅 108cm で、煙道は SD-283 で破壊されて長さなどが不明である。地山ソフトロームを少し高く掘り残した上に貼床と一連の暗黄褐色土（カマド 6 層）を貼ってから、灰黄褐色粘土の 4 層で両袖を作り、5 層でカマド掘方中央部を埋め戻している。5 層を除去した掘方（カマド図下側）で、西袖基部や燃燒部の形状を、SD-283 で破壊された現況よりもよく把握できる。袖基部から先端までの長さは西袖が 130cm、東袖が 144cm。東西両袖残存部を覆うカマド 1 層中に土師器片が少し残っていた。

【覆土】自然埋没と思われ、テフラの層や粒などは含まない。貯蔵穴内（断面図 B-B' と C-C'）や P4 上部（断面図 F-F'）も、竪穴部と同種の層で自然埋没している。南東隅では東西 105 × 南北 120cm の範囲で厚さ 3～7cm の粘土が床面直上に広がり、その中央部は径 30～35cm の範囲で粘土がみられない。

【遺物出土状況】北西部と北東部に遺物が多い。北東部の攪乱坑に落ち込んだ遺物に大きな破片がある。カマドは SD-283 に破壊されているためか遺物が少ない。貯蔵穴 P5 内に甕上半部がある（8）。貯蔵穴に落ち込みそうな位置で内面を上向きにした杯破片が P5 東側にある（1）。土製支脚はカマド内ではなくて北西部の床面で出土した（11）。南東部に石・礫がやや目立つ。南東支柱穴 P4 の北方で床上 3cm のレベルに径 16 × 14 × 厚さ 5cm・重量 1.6kg の平たい石がある。南東支柱穴 P4 の上部が南側に広がる部分に入れた細長い礫は編物石または敲石で（13）、その上面が床レベルに見えていた。

【出土遺物】杯類はミガキが多くて炭素吸着または黒色気味のものが目立ち、漆仕上げの杯がない。1 は木葉底。7 は白色針状物質を含む搬入品の甕。白色針状物質を含む土師器は SG10 区 SI-23 などにある。土製支脚（11）は SG5 区 SI-9 にもある。有孔砥石（16）の出土例は SG10 区古墳時代溝 SD-41・42 と SG5 区古墳時代遺物包含層にあり、粘板岩製白玉（14・15）は SG10 区 SI-20 などにある。有孔砥石は、周

第5章 権現山遺跡 SG10 区

辺では権現山遺跡 A 区 SI-018,038,063,273 と B 区 SI-052 と百目鬼遺跡 SI-580 (谷中・大島 2001)、杉村遺跡 25 号住 (藤田・安藤 2000)、中島笹塚遺跡 (2 号墳と 1 区 SI-3 : 内山 2008)、立野遺跡 (5 区 SI-61・64 : 内山 2005)、砂田遺跡 6 区 (SI-324 と表採品 : 津野・篠原・今平 2007)、島田遺跡 V 次 SI-33 (津野田 2010) などにある。周辺地域以外では、鹿沼市青龍淵遺跡 3 区 SI-37 (津野 2009)、足利市田島持舟遺跡 519・521 号住居跡で最近の報告例がある (篠原・藤田 2011)。また、穿孔が貫通しない砥石は本遺跡北部の 4 区 SI-17・31 にある (内山 2010)。遺物は少なめで、甕が多く、中形の壺も一定量がある。杯は数個体分があり、ほとんどが身模倣形の杯で、外面の稜線がやや不明瞭なものが目立つ。外面の稜が明確で最大径 15cm を越える身模倣形杯もあるので、中期末よりも後期初頭の可能性が高い。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 275 片・2.679g の内訳は、杯 44 片・241g、壺甕類 230 片・2,424g、焼粘土塊 1 点・14g。

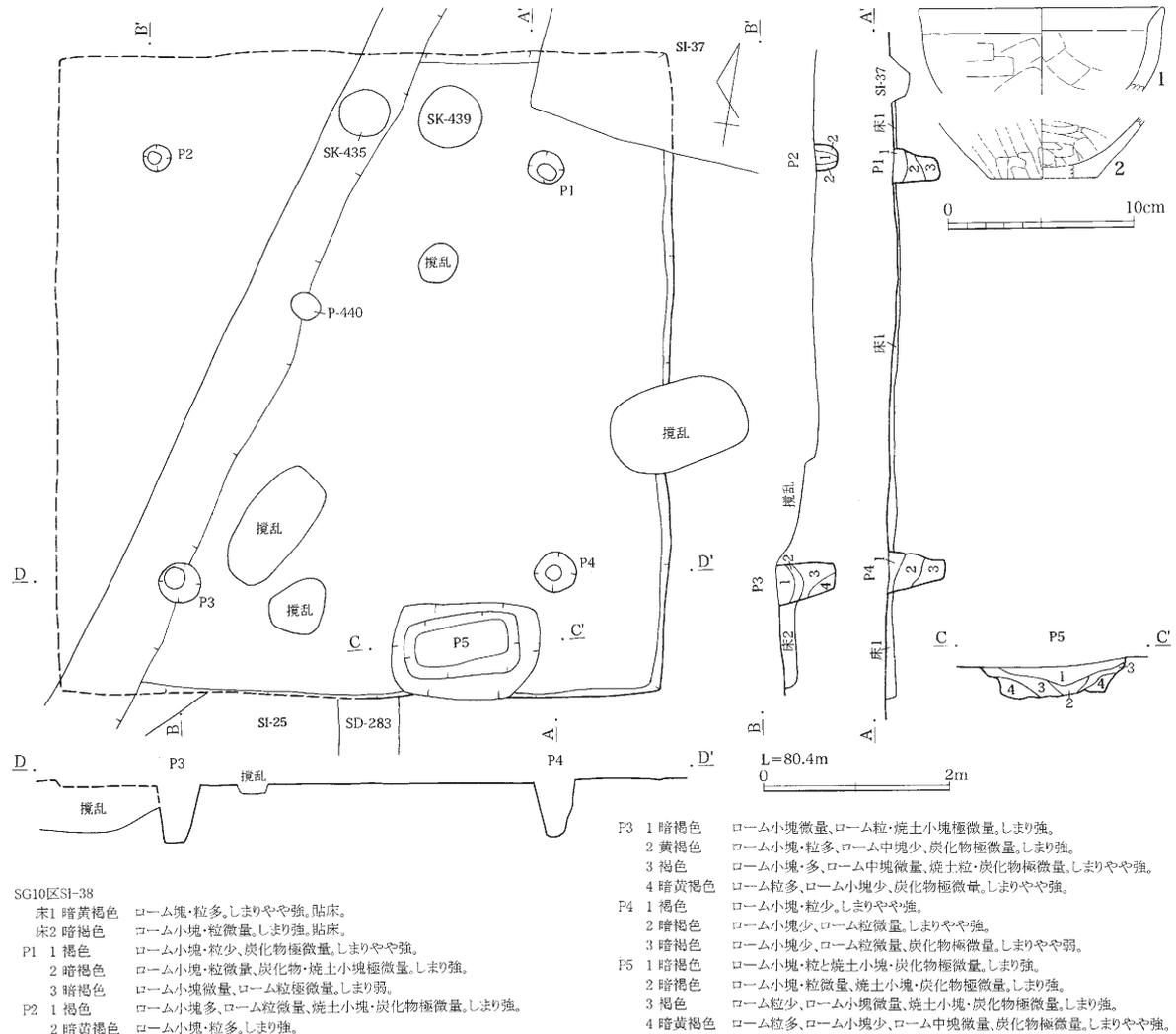
第 37 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-37 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.6 高 4.6 最大 復 14.8	外底面にカシワの葉の裏面と思われる木葉痕を残す。口縁部ヨコナデ後、底部外周から体部までをヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向、体部に斜～横位、口縁部に横位のヘラミガキ。内外面に漆仕上げをしている可能性もあるが不確実。外面全体の黒色味が強い。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 白・赤粗～細粒と黒・ 透明細粒少 硬質	北東床直上 1cm。攪乱中に 1 片 口～底 1/2 周 1、10
2 土師器 杯	口 復 14.3 高 残 4.2 最大 復 15.6	外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部に斜放射状、体部上位と口縁部に横位のヘラミガキ。内外面全体が炭素を吸着して黒色。	10Y2/1 黒 やや緻密 透明粗～細粒と白 細粒少 やや硬質	南東床直上 口 1/8 周、体 1/6 周 8
3 土師器 杯	口 復 2.4 高 残 3.1	外面は体部上端ナデ、その下部をヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ナデまたはヘラナデ後にタテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。口縁端部は短く外反する部分と外反しない部分とが見られる。破面にはぶい橙色で、内外面は黒色。	5Y3/1 オリーブ黒 やや粗い 白粗～細粒やや多、 黒・透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 20cm 口 1/6 周 5
4 土師器 高杯	高 残 2.9	磨滅しているため調整不明瞭だが、外面はナメヘラナデまたはヘラケズリと思われる。内面はナメナデ。	7.5YR6/8 橙 緻密 白・黒細粒やや少、赤・ 透明細粒少 軟質	中央南部床直上 杯底 1/3 周 21
5 土師器 壺	口 復 17.0 高 残 3.8 最大 復 17.4	外面は丁寧なヨコナデで、頸部中位と口縁端部下位が少し突出気味。内面は頸部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明細粒多、白・ 灰色粗～細粒と黒細粒少 硬質	中央東部床直上 4cm 口 1/6 周 12
6 土師器 壺	高 残 3.6	底部が厚く重い。外底面を 1 方向ヘラケズリ後に外面体部ヨコヘラナデ。内面は円周方向のヘラナデ。残存部分には漆仕上げが認められない。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 白・黒・灰色粗～ 細粒多、白礫と赤・透明細粒 少 硬質	北西床直上～床上 2cm が 接合。北東・南東に小 破片 1、24、39、南東区 1
7 土師器 甕	口 復 20.3 高 残 12.9 最大 復 23.5	外面は胴部ナメヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。頸～胴部の境にごく浅い段あり。内面は胴部に斜位と肩部に横位のヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。 [注記] 7、13、17、18、南西貼床	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・灰色・透明粗 ～細粒と黒細粒少、白色針状 物質極少 やや硬質	中央床面と北東部の各 1 片と南壁際床面の 2 片 口 1/2 周 注記は左欄
8 土師器 甕	高 残 11.0	外面は口～頸部ヨコナデ後に頸～胴部タテヘラナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。	10YR7/6 明黄褐 粗い 白・透明粗～細粒多、 灰色粗粒と黒細粒少 軟質	貯蔵穴底上 15cm と西部 床面直上 頸 5/12 周 2、31、SD-283
9 土師器 甕	高 残 1.8 底 7.0	外底面はおそらくヘラケズリで凹底状にしているが、器面が荒れてケズリの状況が不明。外面胴部タテヘラナデ。内面は底部を 1 方向ヘラナデ、外周部は円周方向のナデ。外面全体が被熱赤化している。	2.5YR6/8 橙 粗い 白・灰色・透明粗～細 粒多、赤粗～細粒と黒細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 20cm 底 7/12 周 5
10 土師器 小形甕	高 残 6.8 最大 復 14.2	外面は体部ナデ後に肩部タテハケ。頸部までおそらくハケを施して、ヨコナデで消している。内面は体部ナデで肩部に粗積み痕を残し、頸部ヨコヘラナデ。外面体部に 6cm 以上の黒斑あり。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や 多、灰色粗と黒・透明細粒 少 やや硬質	北東床上 4cm と北東攪乱 の各 1 片が接合 頸 1/4 周、胴 1/2 周 12、北東攪乱
11 土製品 支脚	長 残 11.3 幅 残 5.5 厚 残 5.6 重 残 260.2	断面は不整形で、表面は縦および斜位のナデ調整。上端部のナデは粗雑。全体が被熱しているが、それほど顕著ではない。現状の下端面が磨滅しているため、本来の下端面を留めているのかわからない。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤礫～粗粒と白細 粒少 軟質	北西床直上 下端欠 32
12 石器 編物石	長 16.3 幅 7.0 厚 4.7	図示した面が甲高で丸味を持ち、反対面が平坦な自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 819.7g。	7.5Y6/1 灰 緻密で硬質な安山岩	南壁際床直上 完形 52
13 石器 編物石 または 砥石	長 15.5 幅 6.0 厚 4.5	棒状で断面が楕円形の自然礫をそのまま利用。下端部に図示した敲打痕がある。この他には加工・使用・被熱痕は見られない。重量 657.6g。	2.5Y7/1 灰白 硬質で少し多孔質気味な安山 岩	P4 開口部底上 4cm 完形 51
14 石製模造品 白玉	径 12.3～ 12.5mm 厚 7.6mm 重 1.4	上下面は粘板岩の節理に沿って割っただけで研磨していない。側面は穿孔と同じ方向 (横方向) に粗い研磨痕を残し、それ以前の切削痕もかなり残す。左図の面で孔径 3.3～3.4mm、右図の面で孔径 3.2～3.3mm。	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密で軟質な粘板岩	北西床直上 ほぼ完形 30
15 石製模造品 白玉	径 12.1～ 12.5mm 厚 7.2mm 重 1.3	上下面は粘板岩の節理に沿って割った面で、右図の面は不規則な斜めの割れ面も残り研磨していない。側面は穿孔と同じ方向 (横方向) に粗い研磨痕を残し、切削痕を残す部分はごく少ない。左図の面で孔径 3.5mm、右図の面で孔径 3.3mm。	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密で軟質な粘板岩	北西床直上 ほぼ完形 30
16 石器 砥石	長 3.5 幅 1.4 厚 1.4 重 6.0	右図の面から穿孔して左図の面に穿孔剥離を生じ、初孔径 5.5～5.8mm、終孔径 4.8～5.1mm。本来の表裏面よりも両側面のほうをよく使用して非常に薄くなり、穿孔に接近したところまで減っている。上端は使用していない。	5Y7/2 灰白 緻密で軟質な流紋岩	南壁際 端部欠 18 フキン

SG10区 SI-38 (第69図、写真図版88)

[位置] SG10区南部の西端付近である18-16および19-16グリッドにあり、東端は18-17および19-17グリッドに少し出る。重機による現代の土探りで西側が破壊されている。

古墳中期の建物SI-25より新しいと推定される。ただし、重複状況の断面記録がない。古墳後期のSI-37に北東隅部を、時期不明のSD-283に東部覆土上層を切られる。北部のSK-435・439は、SI-38の貯蔵穴の可能性も調査時に考えたが、別の土坑と判断した。古墳時代のSK-439は中期後葉のSI-38より遺物がわずかに古く見えるが、SI-38の貼床除去前にSK-439を確認できたので、SK-439が新しいと判断した。SI-38にSK-439が伴う可能性も残る。SI-38と時期不明のSK-435の重複関係は不明で、SK-435の方が新しそうにも思える。SI-38の西部を破壊した攪乱面にSK-435の下部が残る。時期不明のP-440とSI-38の新旧は不明。南東隅の貯蔵穴P5は調査時に「SK-434」と呼称したが、SI-38の貯蔵穴と判明した。



第69図 権現山遺跡SG10区 SI-38 遺構・遺物

第38表 権現山遺跡SG10区 SI-38 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復約 13 高 残 4.5	残存破片が小さいので復原径は参考程度。内外面の体部をナナメナデの後に口縁部ヨコナデ。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	P5内 口1/8周 SK-434一括
2 土師器 杯	高 残 3.2 底 復 5.6	薄いので杯としたが、大きな平底なので鉢か小形甕かもしれない。外底面は多方向ヘラナデ。外面体部タテナデ。内面体部は横～斜位ナデ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒と粗～細砂粒少 やや硬質	南東部上面 底1/3周 南東上面

第5章 権現山遺跡 SG10 区

〔規模と形状〕 方形で主軸方位 GN-10° -W、南北長 6.90m、西壁は消滅したが推定東西長 6.6m。残存壁高はわずかで、東壁と北壁で 2～6cm、南壁で 4cm。主柱穴 4 本は東西柱間 4.05（南側）～4.18m（北側）、南北柱間 4.28（東側）～4.52m（西側）。底面形からみて柱径 20cm 以下で、床面から P1=49cm、P2=48cm、P3=55cm、P4=59cm の深さ。P3 の東 1m の穴は入口施設ではなく攪乱と判断した（径 57×68×床から深さ 31cm）。南東部の貯蔵穴 P5 は東西 155×南北 103×深さ 37cm。調査時は P5 を SK-434 と呼称したが、調査時から SI-38 の貯蔵穴である可能性を考えていた。壁溝・間仕切溝はない。

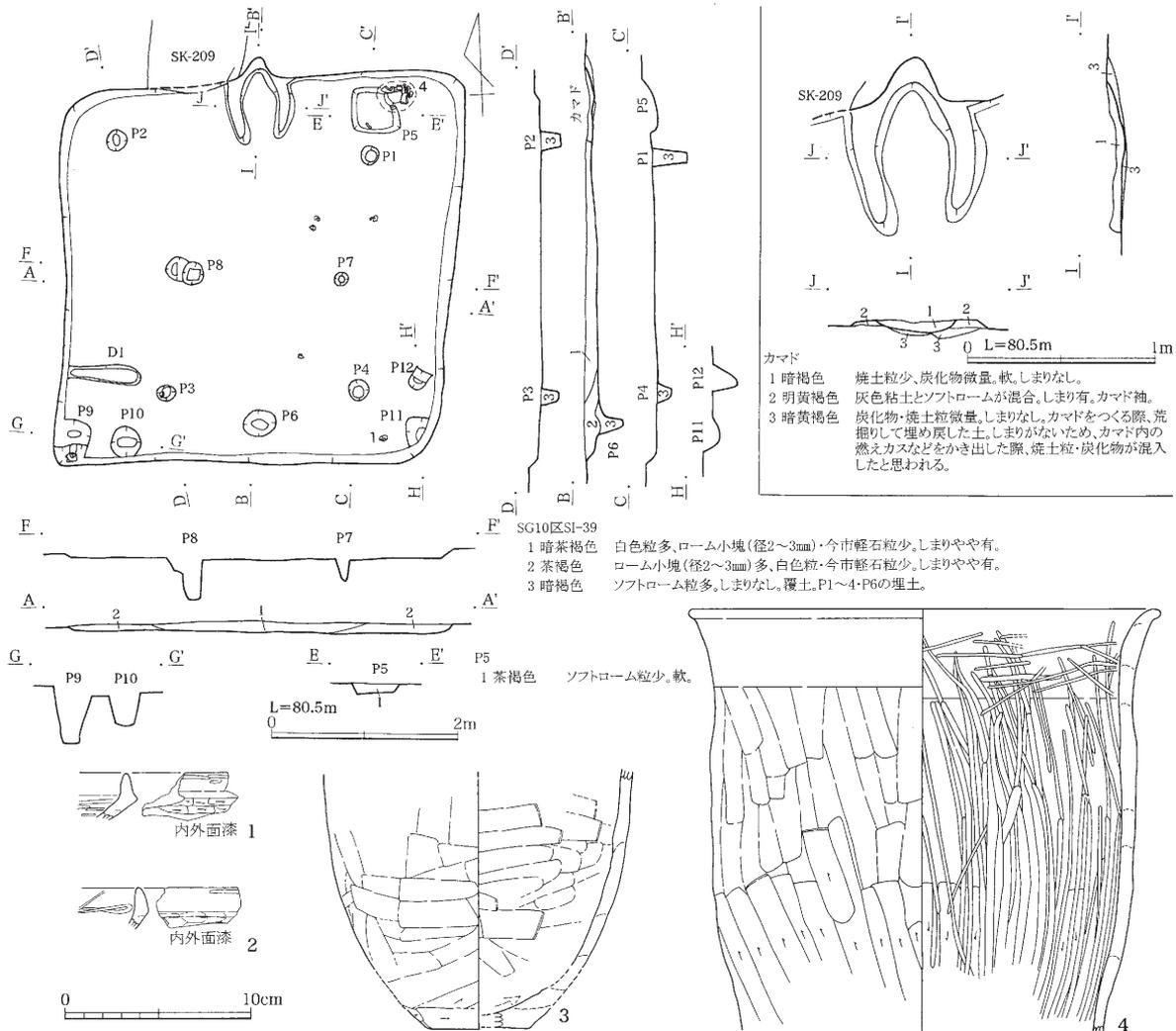
〔火処〕 不明である。西半部の土採りで炉が消滅したことが想定される。

〔覆土〕 貼床土がかろうじて残る程度で、覆土はほとんどない。貯蔵穴 P5 は自然埋没状に堆積する。

〔遺物および出土状況〕 竪穴の残りが悪いので遺物はごく少ない。遺構上面出土の遺物（2）も床面に近い遺物と言える。また、貯蔵穴内遺物がある（1）。東にある古墳中期後葉の SI-28 のほうが、カマドを持つことからみても少し新しいと考えられる。図示以外の土師器合計 78 片・416g の内訳は、杯 25 片・87g、高杯 20 片・120g、小形壺 19 片・91g、壺甕類 14 片・118g。

SG10 区 SI-39（第 70 図、写真図版 88）

〔位置〕 SG10 区南西部の台地平坦面、19-17 グリッド所在。同じく古墳後期の SI-37・40 が北西と南西に近接する。南と西には中期の SI-28・38 がある。時期不明の SK-209 に北西部を切られる。



第 70 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-39 遺構・遺物

第39表 権現山遺跡 SG10区 SI-39 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12~14 高 残 2.5 最大 復 13 ~ 15	外面は口縁部ヨコナデ後に上部をヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ後に体部上位をヨコヘラミガキ。残存する内外面全体に漆仕上げ。	10YR4/2 灰黄褐 緻密 白細粒多、白・赤・透明細粒少 硬質	南東隅床上 9cm 口 1/18 周 2
2 土師器 杯	口 復 14~16 高 残 2.3 最大 復 15 ~ 17	外面は体部上位に横~斜位ヘラナデ、口縁部ヨコナデ後に上部をヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後、体部上端にヨコヘラミガキ。残存する内外面全体に漆仕上げ。	10YR3/1 黒褐 緻密 白・黒・透明細粒少 硬質	口 1/12 周 2層
3 土師器 甕	高 残 13.7 底 復 5.4	外面は胴中部タテヘラナデと胴下部ヨコヘラナデ、胴下端ヨコヘラケズリ。外底面はおそらく円周方向ヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデで、底から上へ9cm付近の内面にはナメナデ。	7.5YR6/8 橙 やや粗い 白・透明粗~細粒 と黒細粒少、白礫微量 軟質	中央底上 7cm。北西の1 片も接合 胴 1/4 周、底 1/6 周 5、Bセク北、北西1層
4 土師器 甕	口 復 24.8 高 残 22.8	外面は上位ヘラナデ後に口縁部ヨコナデと下位タテヘラケズリ。内面は下位タテヘラケズリと上位ヘラナデ(?)の後に口縁部をヨコナデし、胴部に縦位の後に頸部に横位のヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明粗~ 細粒多、白・灰色礫と赤粗~ 細粒少 やや軟質	北東床上 2cmと南東床上 9cmが接合 口 5/12 周 1、2、SK-209 1層

【規模と形状】 方形で、わずかに東西に長い。南北の中軸線はN-5°-E。2本の棟持柱を結ぶ東西方向の中軸線はN-86°-Wである。規模は南北4.27m、東西4.31m。壁は外傾し、残存高は西壁で2~5cm、東壁で9~11cm。床は平坦で傾斜しない。掘方・貼床は認められない。

主柱穴は計6本で、棟持柱の可能性のあるP7・8と、周囲のやや浅いP1~P4である。南西柱穴P3が少し内側に入る。西棟持柱P8の西部にある深さ19cmの浅い段は柱の抜き取り穴と判断した。現地調査時の所見によると、P1~P4とP7も柱を抜き取った可能性がある。南北の柱間は2.55m(東側)~2.75m(西側)、東西の柱間は2.06m(南側)~2.70m(北側)、棟持柱P7とP8の柱間は1.56m。深さはP1=37cm、P2=24cm、P3=22cm、P4=21cm、東棟柱P7=25cm、西棟柱P8=43cm。補助柱穴4本は、南東の2本が浅く(P11=7cm、P12=28cm)、南西の2本が深い(P9=56cm、P10=37cm)。

入口ピットP6は南壁近く中央にあり、径29×35×深さ27cm。南西部にある間仕切溝D1は幅13~17cm、床面から深さ10cm。北東部にある貯蔵穴P5は上面・底面ともに長方形で南北48×東西51cm、床面から深さ9cmで非常に浅くて壁が外傾し、貯蔵穴覆土は単層である(断面図E-E')。

【カマド】 北壁中央にある。竪穴そのものが浅いので、カマドの残りが悪い。両袖幅74cm、焚口から煙道までの長さ83cm。3層で整地した上に2層で袖部を作る。3層にも炭・焼土粒が混じるので、現地調査時の所見では燃焼部の清掃などで3層をかき回したと推定している。または、カマドを作り替えたとも考えられる。煙道の掘方は北壁を「V」字状に掘り、煙道の斜面にも3層を入れるので、確認面の位置で完成時の煙道が掘方よりも12cm短くなる。煙道の傾斜は緩い。燃焼部内には1層が堆積する。

【覆土】 上下2層の自然埋没状で、両方の層にテフラの可能性のある白色粒を含み、縄文草創期に降下した今市軽石粒も地山から流入している。

【遺物出土状況】 遺物は主に東半で出土した。北東部では、貯蔵穴の上面で土師器甕がつぶれている(4)。

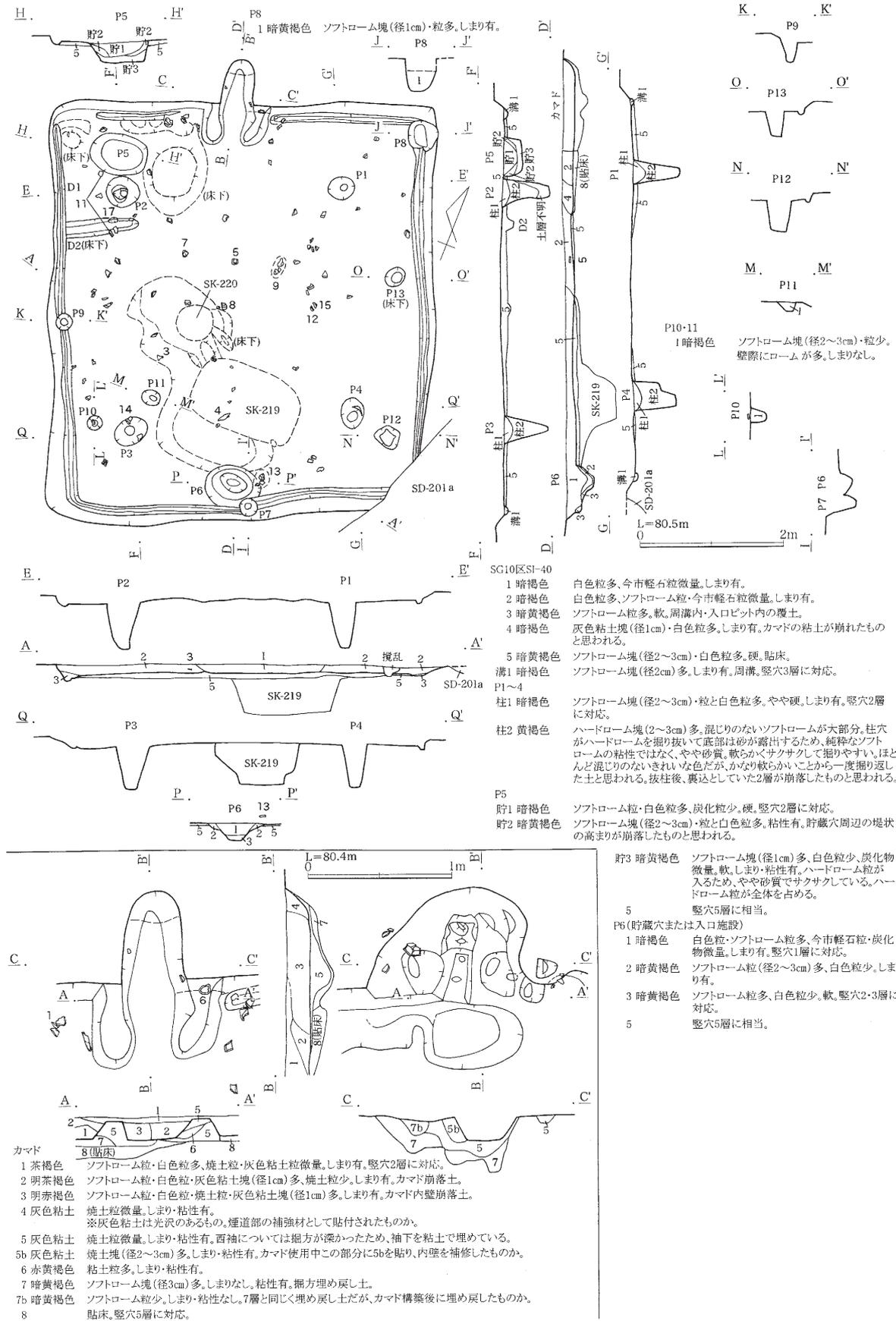
【出土遺物】 甕は長胴気味である(3)。遺物は少なく、土師器の甕・甕が主体である。土師器杯は身模倣形(1)と半球形(2)がある。身模倣形の杯(1)はミガキ調整と漆仕上げを行い、口縁部外面を磨く破片があり、復元径は不明である。胴部が長い甕の形状や、身模倣形杯の口縁部長や、内外面を磨く杯からみて古墳後期中頃と思われる。図示以外の土師器合計47片・366gの内訳は、杯5片・30g、壺甕類42片・336g。

SG10区 SI-40 (第71・72図、写真図版88・89・174・198)

【位置】 SG10区南部の19-17グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は北西にSI-39、東にSI-34がある。縄文時代のSK-219と古墳時代のSK-220を切り、南東隅を近世のSD-201aに切られる。SK-219とSK-220はSI-40の貼床除去後に確認した。

【規模と形状】 方形の建物跡で主軸方位はGN-21°-W。東西5.56×南北5.96m、残存壁高は7~15cmで、北東部と南西部で壁がよく残る。主柱穴は4本で、柱間は東西3.08m、南北3.20m(東側)~3.30m(西

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第71図 権現山遺跡 SG10 区 SI-40 (1) 遺構

側)。柱穴底面形から推定した柱径は10～15cm程で、床面からの深さはP1が64cm、P2～P4が52～53cm。柱穴底面は地山ハードロームを掘り抜いて、その下の砂層に達している。

貯蔵穴P5は北西隅にあり、東西79×南北57×深さ26cm。貯蔵穴または入口施設と考えられるP6は東西76×南北58×床面から深さ26cm。P7も入口施設かもしれないもので、床面からの深さ30cm。P6を貯蔵穴と考えた場合は、複数の貯蔵穴を持つことになる。SG10区ではSI-6などが複数貯蔵穴を持つ。

P8～P12は東部と南西部の床面で確認した。P9～P11は補助的な柱穴と思われる。P8とP12は、SI-40より新しい遺構の疑いもある。床面からの深さは、P8=29cm、P9=32cm、P10=22cm、P11=20cm、P12=48cm。

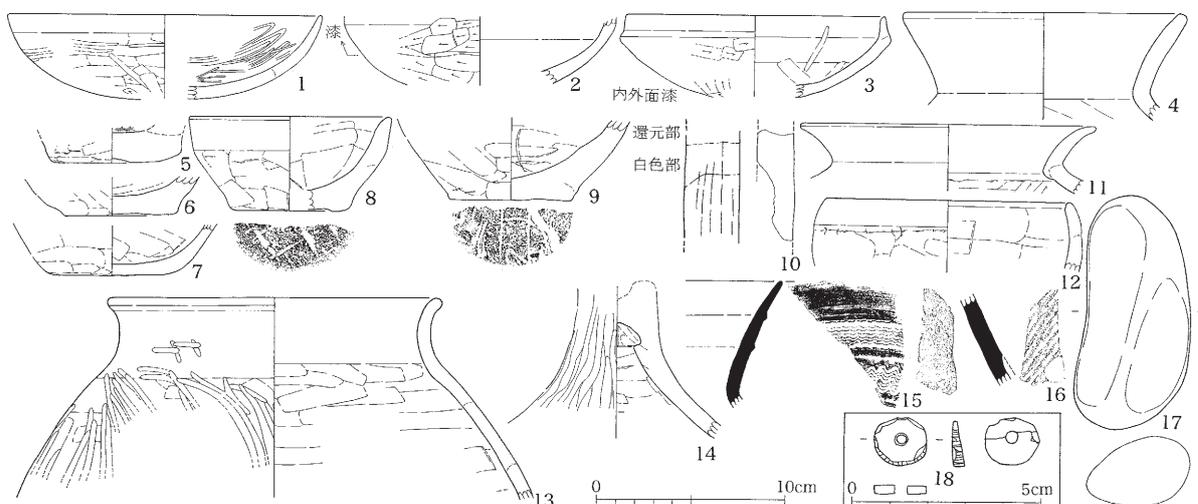
壁溝D1は深さ1～8cmで、北西隅では床面が高くなり溝が消失する。間仕切溝D2は北西主柱穴P2の南にあり、床面では認識できず、貼床除去後に確認した。D2は幅26～33cm、深さ約17cm。掘方の底面は南西部で4～8cm低く、北西部で3～5cm高くなる部分があり、平面図に破線で示した。

【カマド】北壁中央より少し西寄りにある。両袖幅90cm、煙道先端から袖先端まで127cm。東袖を作る灰色粘土のカマド5層は、竪穴壁の南約20cm付近よりも南側に明瞭に認められた。竪穴の掘方を貼床（カマド8層）で埋め戻した後に西袖を作るが、東袖は地山ローム層の上に袖を作っている。煙道部の広い掘方をカマド5層・7層で埋める構築方法（断面図C-C'）がSI-35と類似している。カマド5層のうち焼土が多い5b層は補修時に貼った土かと考えられた。煙道の先端寄り20cmで灰色粘土の4層（断面図B-B'）がよく確認された範囲を、平面図に破線で示した。

【覆土】自然埋没と思われる。覆土の各層に含む白色粒はテフラの可能性もある。

【遺物出土状況】竪穴全体で出土し、北部にやや多い。カマド掘方図に示したように、煙道部西側の掘方埋戻土中で土師器壺甕類の胴部片が出土した。粘板岩製白玉（18）はSI-40の北壁部で採集されたので、遺構北側から流入した疑いがある。SI-10他と同一個体の可能性がある古墳中期の須恵器甕が1片、混入している（16）。

【出土遺物】漆仕上げの他に内面炭素吸着仕上げの杯もある（1）。3の内面はSI-34aなどにある「米」字状ヘラミガキかもしれない。小形粗製土器が目立つ（5～9）。13のように白色針状物質を含む搬入品の土師器はSG10区SI-23などにある。14・16は古墳中期の混入遺物で、16はSI-10他出土の須恵器甕と同個体の可能性がある。専用羽口が1片あり（10）、東側のSI-34a（古墳後期末）にある小形鍛冶滓2片と関連するか、または北方の古墳中期鍛冶遺構SI-36から混入したことが考えられる。この羽口は『東谷・中島地区遺跡群』10で権現山遺跡の鍛冶関連遺物全体を報告後に確認したため、同書pp.490-498に掲載されて



第72図 権現山遺跡 SG10区 SI-40(2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

いない。粘板岩製の白玉は SI-20 などにある。ただし 18 は遺構北側から流入した疑いがある。石器では、やや硬質な流紋岩製砥石の小さな 1 片が出土した。

遺物の量は比較的多いが、建物の大きさに比べると少なめである。土師器甕と杯が多い。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 368 片・3,885g の内訳は、杯 228 片・1,927g、高杯 19 片・251g、鉢 3 片・149g、壺甕類 117 片・1,547g、焼粘土塊 1 点・11g。古い時期の混入遺物が多く見られ、床下にある SK-220 などから混入した遺物も含んでいるかもしれない。

第 40 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-40 出土遺物

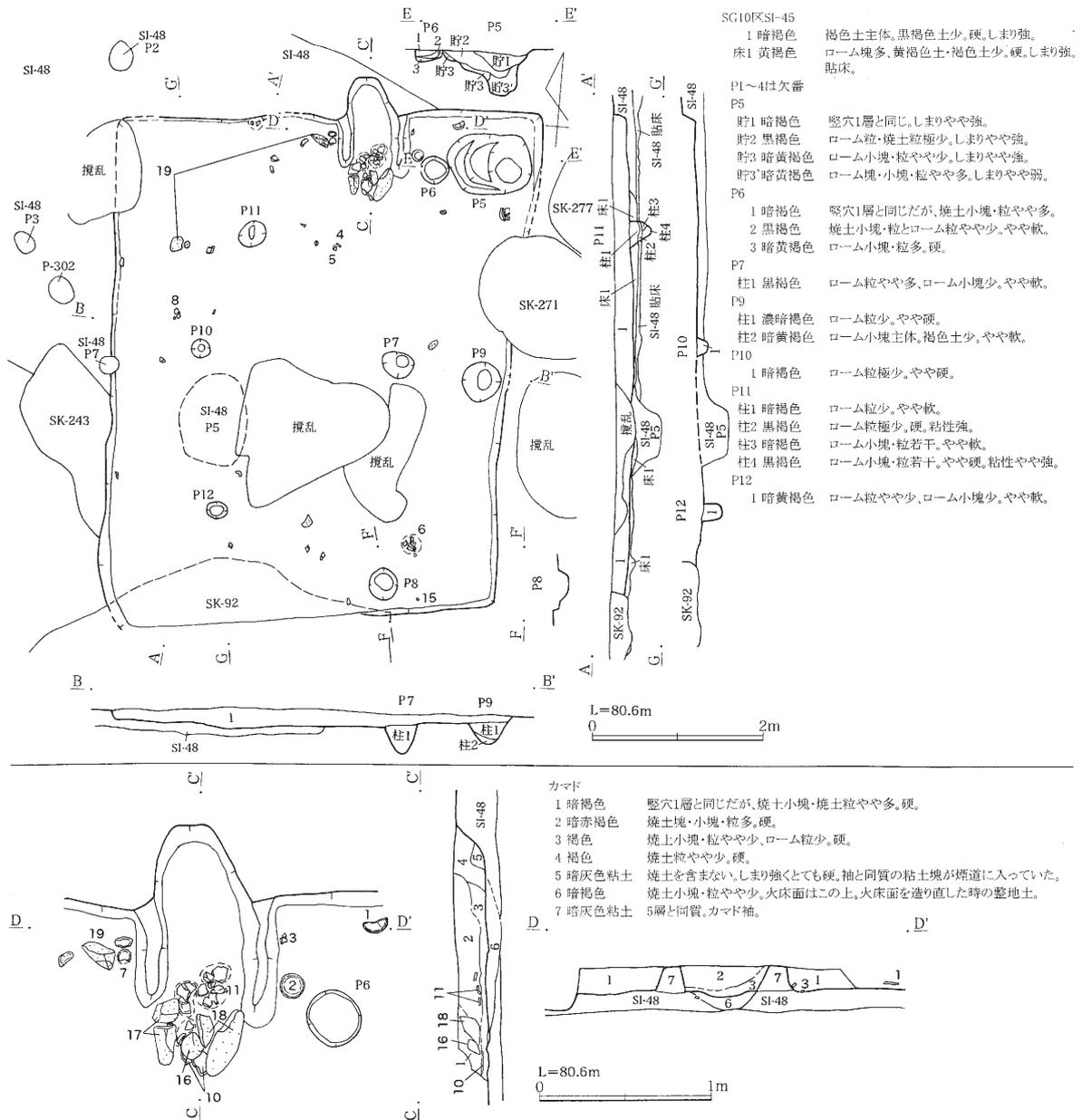
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 16.4 高 残 4.5	外面は体部ヘラケズリ後にヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ、上半に疎らなヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向と体部に横位の密なヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。破片化した後に被熱したものを含む。 [注記]6、53、72、カマド、カマド 5、北東 1・2 層	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・灰色粗～細粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	中央北部床上 9cm とカマド西床直上～床上 6cm が接合。北東にも破片あり 口 1/4 周 注記は左欄
2 土師器 杯	高 残 3.6 最大 残 14.2	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ。外面上半と内面に漆仕上げ。	5YR4/4 にぶい赤褐 やや粗い 黒・透明粗～細粒多 やや硬質	南東補助柱穴 P12 (調査時の P7) 内 体 1/6 周 P7
3 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.3	外面は口縁部ヨコナデ、体部に横位と底部に多方向 (?) のヘラケズリ。内面は上半部ヨコナデと下端部ナメナデの後に、ヘラ先で縦位に擦痕を 1 本付ける。疎らな放射状ヘラミガキを意図したのかもしれない。残存する内外面全体を漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 白・黒・赤細粒多、赤・黒粗粒と透明細粒少 やや硬質	南西床上 6cm 口 1/6 周 21
4 土師器 大形壺	口 復 14.9 高 残 5.5	内外面ともに肩部ナデ後、口～頸部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、黒粗粒と白・透明粗～細粒少 やや軟質	中央南部床上 3cm 口 1/3 周 12
5 土師器 鉢	高 残 1.7 底 5.8	外底面は中央にある径約 2cm の凹部がナデ、外周部がナデと円周方向ヘラナデ。外面は体部タテヘラナデと体部下端ヨコヘラナデ。内面底部中央はやや密な多方向ヘラミガキ。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白・黒・透明細粒少 硬質	中央床上 4cm で正位 底 3/4 周 35
6 土師器 鉢	高 残 2.0 底 5.8	外底面は軽くナデ。外面は体部に斜位と体部下端に横位のナデ。内面底部は多方向ヘラナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・黒・透明細粒少 やや硬質	カマド東軸直上で逆位 底全周 1
7 土師器 鉢	高 残 2.7 底 5.7	外底面は 1 方向ナデ、外面体部はヨコヘラナデ。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤細粒多、白・黒・半透明粗～細粒少 やや軟質	中央床上 11cm で正位 底 7/12 周 36
8 土師器 小形土器	口 10.5 高 5.0 底 6.1	外底面はナデ後、丸棒を格子状に重ねた上に置いた可能性のある圧痕あり。外面は体部に斜～横位のヘラナデ、口縁部にヨコナデ。内面は横～斜位のヘラナデで、口縁部は少しヨコナデも行う。	5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒と白細粒多、透明細粒少 やや硬質	中央床上 3cm で逆位 口 1/6 周、底 5/12 周 37
9 土師器 小形土器	高 残 4.3 底 復 6.4	外底面は木葉底で葉の裏面圧痕を残す。外面体部は斜～横位ナデ。内面は多方向のやや雑なヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白微粒少 硬質	北東 1・2 層 底 1/2 周 北東 1・2 層
10 土師質 専用羽口	長 残 5.7 最大 復 5.7 孔 復約 2	羽口の先端に近い部分の破片。孔は全周の 1/6 程度しか残っていないので、正確には不明だが径約 2cm 前後と推定される。残存する先端寄りには外面が還元して灰色化し、それより基部側の約 1.5cm の範囲は白色化する。溶解・滓化した先端部は破損して残っていない。外面は長軸方向のヘラナデ調整。孔は丸棒状工具で成形・調整した可能性がある。鍛冶関連遺物構成 No. なし。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 透明粗～細粒と白細粒やや多、赤・灰色粗～細粒少 やや軟質 磁着度 1 メタル度 未計測	北東 1・2 層 1/3 周 北東 1・2 層
11 土師器 甕	口 復 15.5 高 残 3.5	外面は口縁部と肩部に丁寧なヨコナデ。内面は肩部に横～斜位のナデおよびナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白粗～細粒多、黒・透明粗～細粒やや多、白礫と赤細粒少 硬質	北西床上 2～10cm 口 1/4 周、頸 1/3 周 46、68
12 土師器 粗製鉢	口 復 12.7 高 残 3.8	外面は体部に雑なナデで紐積み痕をよく残り、口縁部ヨコナデ。内面はヨコヘラナデ後にヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 粗い 赤粗～細粒と白細粒多、黒・透明細粒少 やや軟質	中央床上 7cm 口 1/6 周 27
13 土師器 大形壺	口 復 17.5 高 残 10.5	外面は胴部ナデ後に口～頸部ヨコナデ、胴部にナメヘラミガキ。内面は胴部に横位と肩部に横～斜位のヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。破片化した後に煤が付着したものあり。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明粗～細粒やや少、赤・黒細粒と白色針状物質少 硬質	北西床上 17cm と南部中央床上 11cm と中央床上 6cm が接合 口 5/12 周、頸 1/3 周 10、33、54、71
14 土師器 高杯	高 残 8.3	外面はタテヘラミガキ。内面は上端部コビナデ後に中位以下を付け足してヨコヘラナデ。内外面に煤がやや多く付着する。古墳中期の遺物が混入。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒と白・黒・透明細粒少 硬質	P3 上面・床面下 3cm 脚柱全周 14
15 須恵器 壺	高 残 6.7	口径は 12～14cm 位の可能性を持つ。頸部に断面三角形のやや低い突帯 2 条あり。左回転 (反時計回り) の状態で、7 歯の工具で器面に向かって右から左方向へ節描波状文を施文する。内面全体と外面口縁部の回転ヨコナデも左回転の状態。	5Y5/1 灰 緻密 白礫と白粗～細粒少 硬質	中央床上 10cm 口 1/9 周 28、北東 1・2 層
16 須恵器 甕	高 残 4.9	外面は木目平行の溝を持つ叩き板で縦位の平行叩き。内面は無文。外面に薄く黒色自然釉が付着する。SI-10 等で出土した破片と同一個体の可能性あり。	N4/ 灰 やや粗い 白細粒多、白礫～粗粒少 硬質	南東部南半で北西～南東方向ベルトの東半部 肩部 ?1 片 A-A' セク東
17 石器 編物石	長 12.3 幅 5.8 厚 3.6	図の左側縁が少しくびれる棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 376.3g。	N6/ 灰 やや緻密で硬質な安山岩	北西床直上 完形 49
18 石製模造品 白玉	長 12.69mm 幅 13.41mm 厚 3.03mm 重 0.61	表裏両面は節理に沿った剥離面のままで研磨していない。側面は横方向 (穿孔と同じ方向) に粗く研磨する。初孔径 3.20mm、終孔径 2.75mm。穿孔剥離がないので、長い玉に穿孔してから節理に沿って分割した可能性がある。	7.5Y3/1 オリーブ黒 緻密で軟質な粘板岩	SI-40 の北側から流入した可能性あり SI-40 付近 990929

SG10区 SI-45 (第73・74図、写真図版90・198)

[位置] SG10区中央部の20-17グリッド。同じく古墳後期の遺構は、南にSI-47、西にSI-35、北にSI-110、東にSI-51がある。古墳中期のSI-48の上部を切り(SI-48→SI-45→SK-243)、中世のSK-92と時期不明のSK-243・271に切られる。西側と東側に古墳時代のSK-46と時期不明のSK-277が隣接する。

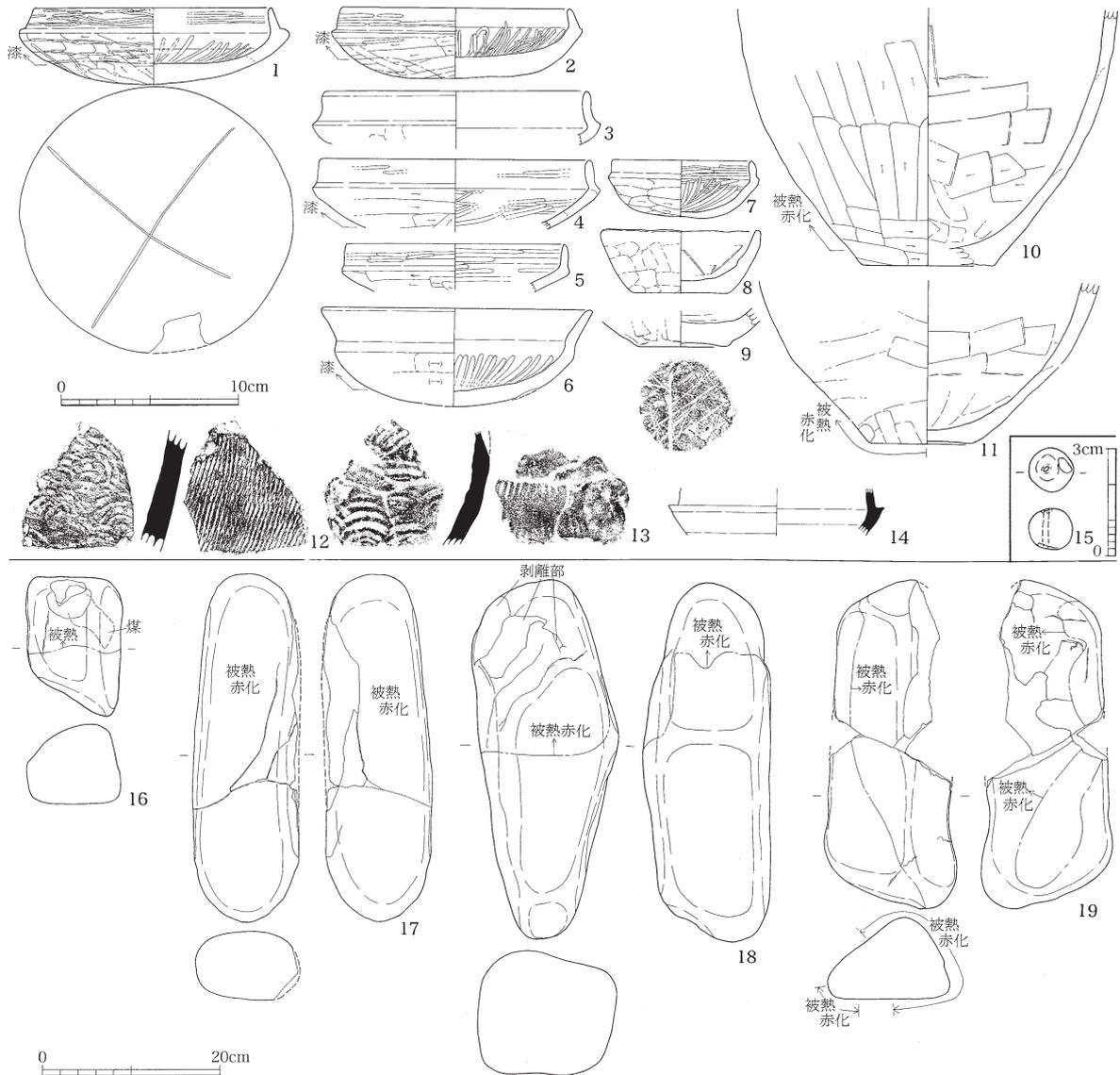
[規模と形状] 不整長方形で南・北壁に直交する方向を主軸とすると、主軸方位はGN-6°-W。主軸方向で測った規模は東西5.34×南北6.00m(計測軸の方位を変えた場合は東西幅5.04m)。残存壁高は1cm(東壁)～19cm(西壁南部)。南壁はSK-92に破壊されるが、残存する貼床土で平面形を把握できた。貼床を除去しても支柱穴は確認できず、支柱穴のために用意した番号P1～P4を欠番とした。P5は貯蔵穴。

補助柱穴P6～P12は床面で確認した。深さはP6=13cm、P7=33cm、P8=10cm、P9=23cm、P10=12cm、P11=23cm、P12=26cm。P6はカマドの項を参照。P7はやや深いが支柱穴と考える程ではない。各柱穴の位置は不規則で、覆土も様々である。P7は覆土の黒味がやや強いのでSI-45より新しい可能性も



第73図 権現山遺跡 SG10区 SI-45(1) 遺構

あるが、P7 上方の覆土断面 B-B' では確認できない。P8 は柱穴というより浅い窪みで、土層を記録しなかった (F-F')。P10 は下層の SI-48 覆土と区別しにくい (G-G')、SI-45 床面で確認したので SI-45 の柱穴と判断した。北東隅の貯蔵穴 P5 は東西 101 × 南北 70 × 深さ 50cm。入口施設は不明。壁溝や間仕切溝はない。
[カマド] 北壁中央より少し東に寄る。両袖幅 83cm、煙道先端から袖先端まで 117cm。貼床上面を南北に長い溝状に窪ませた東西に暗灰色粘土の 7 層で袖を作る。カマド東側床にある深さ 13cm の P6 にはカマド周辺と同じ覆土や焼土小塊が流入する (E-E')。火床面下にある整地土のカマド 6 層も焼土を含むので、火床面を作り替えたことがわかる。6 層より下は SI-45 貼床として認識できず、先行する SI-48 覆土になる。流紋岩質の自然礫で焚口の両袖先端を補強する (17・18)。同質の棒状石材片が西袖西側と竪穴北西部にあり、接合した長さは 36.5cm で焚口天井材と推定できる (19)。16 は用途不明で、支脚かもしれない。
[覆土] 単層で、テフラの層や粒はない。貯蔵穴 P5 は E-E' の貯 2 層にカマドから焼土粒が流入し、自然埋没状に堆積する。貼床はローム主体の床 1 層。カマド付近 (断面 A-A') や北西部では貼床の記録がない。下層の SI-48 覆土を掘って固めた土にロームをほとんど混ぜないので貼床として認識できないのだろう。
[遺物出土状況] カマド東西の床付近に残存度の高い上向きの土師器杯が目立つ (1・2・7)。燃烧部に土師器甕 (10・11) の破片が多い。3 もカマド東床面にあるが、下層の SI-48 と注記される破片と接合するので、



第 74 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-45 (2) 遺物

SI-45 構築時の貼床に混入した遺物かもしれない。カマド構築材（16～19）の状況はカマドの項を参照。
 [出土遺物] 身模倣形杯が多く（1～5・7）、半球形杯もある。「×」の刻線を描く杯はSI-2にもある。土師器甕は破片だけ出土した（10・11）。土玉は丸玉1点を示した（15）。洗浄中に誤って紛失した「模造品」1点の記録があり、土玉は計2点と考えられる。重複するSI-48などから古墳中期の遺物が多く混入している。14は古墳中期末の須恵器杯身片。図示以外の土師器は小破片ばかりで合計552片・3,856gの内訳は、杯251片・1,175g、高杯27片・432g、小形壺6片・26g、壺甕類267片・2,178g、小形土器1片・46g。図示以外の須恵器は高杯1片・9gと器種不明（杯？）1片・7g。16～19はカマドの項で説明した。

第41表 権現山遺跡SG10区SI-45出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.2 高 4.3 最大 15.1 重 残 296	外底面をほぼ1方向ヘラケズリ後、外面体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。外面中央に「×」の浅い焼成前線刻あり。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部は放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。外面体部に10cm大の黒斑あり。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白粗～細粒多、赤 細粒少 やや硬質	カマド東と貯蔵穴南で 正位の床土1cm各1片 が接合 口5/6周 1、18
2 土師器 杯	口 12.6 高 3.9 最大 13.8 重 残 316	厚く重い。外底面は多方向ヘラケズリ後に1方向ヘラナデ。外面体部ヨコヘラケズリ後に少しヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後に外面ヨコヘラミガキ。内面体部は多方向ヘラナデ後に放射状ヘラミガキ。外面中～下位以上と内面全体を漆仕上げ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 黒粗～細粒多、黒 礫と白細～微粒と灰色粗砂少 硬質	カマド東床土3cmで正位 口1/2周、体～底完存 2
3 土師器 杯	口 復 14.5 高 残 2.7 最大 復 16.0	外面体部にやや雑なナデの後、外面口縁部と内面をヨコナデ。破面も含めて全体が黒色。漆仕上げは見られない。	5Y3/2 オリーブ黒 粗い 白粗粒多、灰色粗粒と 黒細粒少 やや軟質	カマド東床直上。SI-48 混入1片が接合 口1/8周、体1/6周 47、SI-48 16
4 土師器 杯	口 復 15.1 高 残 4.1 最大 復 15.9	薄く軽い。外面は体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内面体部は横位および斜位のヘラミガキ。残存する内外面全体を漆仕上げ。	2.5Y7/4 浅黄 やや緻密 白・灰色粗粒多、 白・黒・透明細粒少 やや軟質	北東1層の8片に中央 床土3cmの2片が接合 口1/12周、体1/4周 22、北東1層
5 土師器 杯	口 復 12.5 高 残 2.6	外面体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部と内面体部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。漆仕上げは見られない。	7.5YR5/8 明褐 やや緻密 白・透明粗粒多、 赤・黒細粒少 硬質	北東床土5～6cmと南 北ベルト北半部1層 口1/3周 21、23、A北半1層
6 土師器 杯	口 復 15.0 高 5.5	外面体部はヘラケズリと推定されるが磨滅して不明確。内外面口縁部ヨコナデ後、内面口縁部を磨いているかもしれないが磨滅して不明。内面体部に放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・透明粗粒多、 黒粗～細粒と赤細粒少 硬質	南東隅床土4cm 口1/2周 39、東掘乱、南東掘乱
7 土師器 小形土器	口 7.8 高 3.2 最大 8.4 重 残 69.9	外面は体部に横位と底部に1方向のヘラナデ、体部下位にヨコヘラケズリ、口縁部にヨコナデ。内面はヨコナデ後、上半部に横位と下半部に放射状のヘラミガキ。現状で漆仕上げは認められない。 [注記]9、北東1層、北東1層カマド東	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 灰色・透明粗粒と 黒細粒多、白粗～細粒少 やや硬質	カマド西床土2cmで正位。 北東1層の2片が接合 口5/6周 注記は左欄
8 土師器 小形土器	口 復 8.8 高 底 3.5 底 復 5.1	外底面はナデで平滑に仕上げる。外面体部コビオサエ。内面ヨコヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒細粒少 硬質	中央西部床土10cm 口1/3周、底1/2周 30
9 土師器 鉢	高 残 2.1 底 5.2	外底面は木葉裏面の圧痕が向きを変えて2回または3回付く。外面体部タテヘラナデ。内面底部多方向ヘラナデ。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや緻密 黒粗～細粒少 やや硬質	東西ベルト南側の東半部 底全周 南東Bトレ
10 土師器 甕	高 残 14.3 底 復 7.0	外底面は1方向ヘラケズリ。外面は胴部を縦位、胴下部分を横位のヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ後、胴下端にヨコヘラケズリ。外面胴部が被熱赤化する。	10YR5/3 にぶい黄褐 粗い 白・透明粗～細粒多 軟質	焚口部床土1cm 胴1/4周、底1/3周 8、Dカマド1層
11 土師器 甕	高 残 9.1 底 5.8～6.0 最大 残 18.8	外底面は多方向ヘラケズリで、ごくわずかに凹底状。外面胴部は主に斜位のヘラナデ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ。残存する外面全体がよく被熱して赤色化している。	2.5YR5/6 明赤褐 粗い 白粗～細粒多、白・灰 色礫と黒・透明細粒少 軟質	カマド焚口床土4～5 cmの10片に北東3片と 南東1片が接合 胴1/2周、底11/12周 4、7、南東区、北東1層
12 須恵器 甕	高 残 6.9	外面は縦位の平行叩き目。叩き板の木目は溝と斜行して図示した拓本の水平方向になる可能性をもつが不明瞭。内面は同心円文当具痕が図の下方へ進行する。ただし、破片の天地は逆の可能性もある。破面は暗赤色。	10Y4/1 灰 やや緻密 白粗～細粒多、白 礫少 硬質	北西部上面 胴部1片 北西上面
13 須恵器 甕	高 残 6.5	外面は木目直交の溝を持つ叩き板で縦位の平行叩き。内面は同心円文当具痕で、図の下方へ進行する。 [注記]北東1層、北東上面、Bベルト1層	2.5Y7/4 浅黄 やや緻密 半透明細粒多、白・ 灰色粗粒少 やや軟質	胴部片 注記は左欄
14 須恵器 杯	高 残 2.6	内外面調整時のロクロ回転方向は不明。蓋を被せて焼成した痕跡が受部の上面に残る。古墳中期末の遺物が混入。	5Y4/1 灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	南北ベルト北半部1層 体1/8周 A北半1層
15 土師質 丸玉	径 11.33～ 12.34mm 高 11.13mm	表面は丁寧なナデで焼成前に穿孔し、孔径は上面1.20～1.57mm、下面0.87～1.26mm。表面に炭素を吸着して黒色化する。漆仕上げは見られない。残存重量1.53g。	N2/ 黒 緻密 白微粒少 やや硬質	南東隅床土6cm ほぼ完形 38
16 カマド 構築材?	長 15.1 幅 10.7 厚 8.8	加工のない自然石。図上半部の4側面と上面が被熱赤化し、表面が薄く剥離した箇所もある。また、煤も少し付着している。重量2239.9g。	N6/ 灰 緻密で硬質な流紋岩	焚口床土4cm ほぼ完形 12
17 カマド 構築材	長 38.8 幅 残 11.7 厚 7.5	加工のない自然石。剥離した面も含めて全面が被熱赤化している。残存重量5100g。	10R6/2 灰赤 緻密で硬質な流紋岩	焚口床直上～床土2cmが 接合。西袖先端に立て た石 一部欠 14、15
18 カマド 構築材	長 40.2 幅 15.4 厚 13.8	加工のない自然石。4側面ともに約半分が被熱赤化している。重量12.1kg。	N6/ 黒 緻密で硬質な流紋岩	焚口床土3～4cmが接 合。東袖先端に立てた 石が倒れたもの 一部欠 11、13
19 カマド 構築材	長 残 36.5 幅 14.1 厚 9.0	断面が不整な隅丸三角形で、棒状に長い加工のない自然石。片側縁を中心として被熱赤化し、中央で斜方向に割れた破面も表面と同様に赤化している。残存重量5900g。	N7/ 灰白 緻密で硬質な流紋岩	カマド西床土2cmと中央 西部床直上が接合 一部欠 16、43

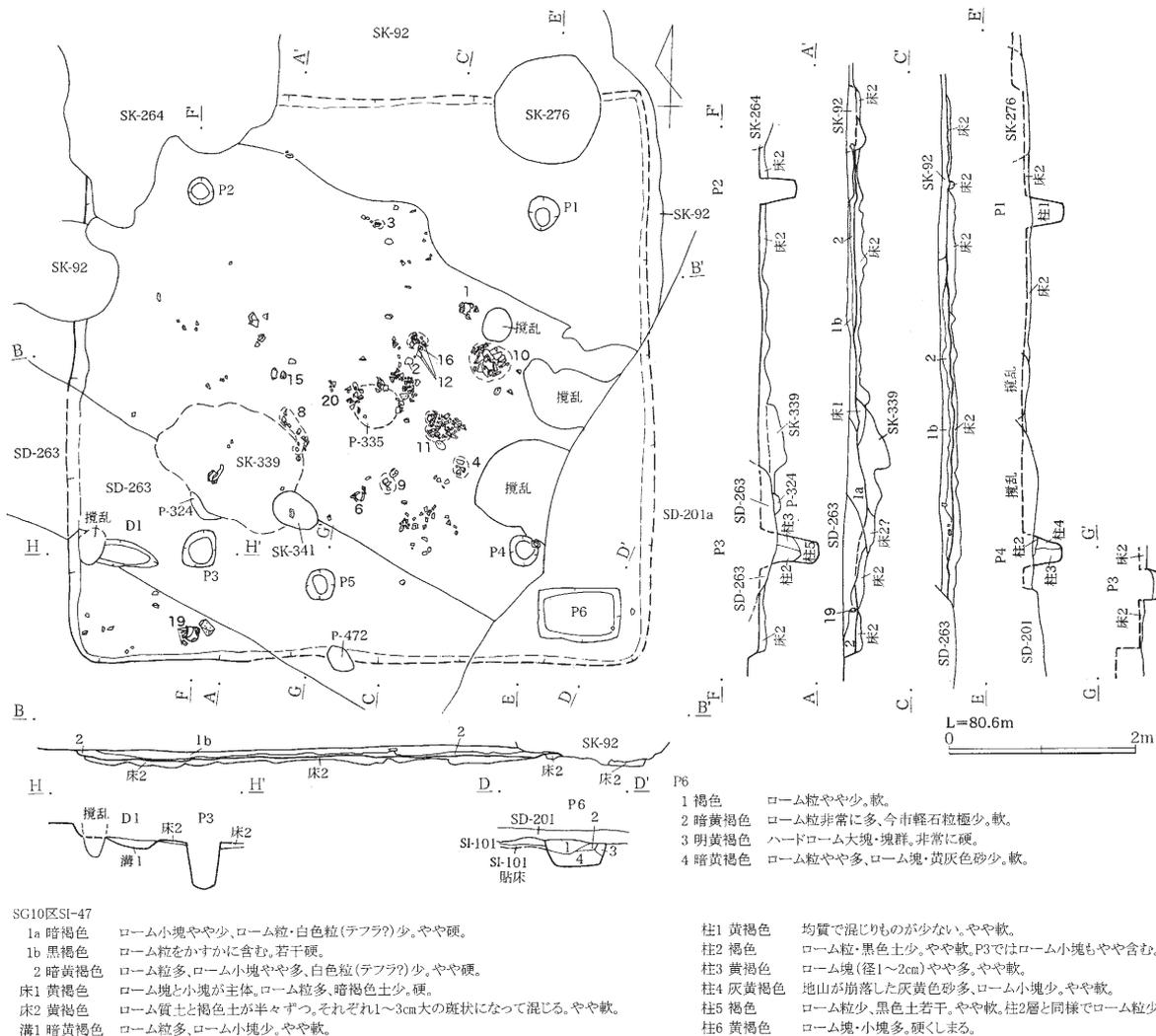
SG10 区 SI-47 (第 75・76 図、写真図版 90・91・173・198)

[位置] SG10 区中央部の 18-17 および 19-17 グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は、北に SI-45、西に SI-34・39、南に SI-34・40・東に SI-51 がある。

古墳中期の SI-101 (断面 D-D') と、古墳時代の SK-339・P-335 を切る。南辺中央で古墳時代の P-472 と重複し、SI-47 が P-472 を切る可能性がある。時期不明柱穴 P-324 とは新旧不明で、P-324 が SI-47 に伴う可能性もある。中世の SK-92 と時期不明の SK-264・276 に北部を切られ (SI-47 → SK-276 → SK-92 → SK-264)、近世の SD-201a と中～近世の SD-263 に南部を切られる (SI-101 → SI-47 → SD-263 → SD-201a)。時期不明の SK-341 に切られると見られるがやや不明確。旧名称 S-98 を SI-47 の P6 に改称した。

[規模と形状] 方形で主軸方位は GN-1° -W。東西 6.36 × 南北 6.08m、残存壁高は南壁西部で 22cm、西壁中央部で 8cm。北・東壁は残らないが、貼床除去後に確認した掘方で壁位置を確定した。貼床はローム塊主体の床 1 層と、褐色土も多い床 2 層がある。下部にある古い土坑 SK-339 埋没土の上を覆うように床 1 層を貼る (断面 A-A')。支柱穴 4 本と貯蔵穴下部は地山ローム層下の灰黄色砂層中に掘り込む。

支柱穴 4 本は南北柱間 3.60m (東側) ~ 3.88m (西側)、東西柱間 3.47m (南側) ~ 3.68m (北側)。床からの深さは P1=41cm、P2=36cm、P3=63cm、P4=35cm で、南西の P3 が深い。P3 の柱 2 層は柱痕径 18cm 前後。P2 覆土は記録不備のため不明だが、最下部に残っていた土質は柱 1 層に近い。入口施設と考えられる P5 は床から深さ 30cm。南東隅の貯蔵穴 P6 (調査時名称 S-98) は東西 90 × 南北 60 × 深さ



35cm。壁溝はない。南西支柱穴 P3 の西側に 1 本ある間仕切溝 D1 は幅 27 × 深さ 16cm (断面 H-H')。[カマド] 不明である。後期中葉の建物なので、東壁または北壁にあったカマドが SD-201 や SK-92 に破壊されたと想定できる。砥石 (19) はカマド構築材を転用したものかもしれない。

[覆土] 2 層や、貯蔵穴 P6 内は自然埋没状堆積。テフラの可能性のある白色粒をの 1a 層と 2 層に含む。

[遺物出土状況] 中央部に多く残る。竪穴の大半が 10cm ほどしか残らないので、どの遺物も床面に近い。SK-92・264・276 に破壊された北部は貼床しか残らないので遺物が不明。貯蔵穴 P6 内は遺物がない。

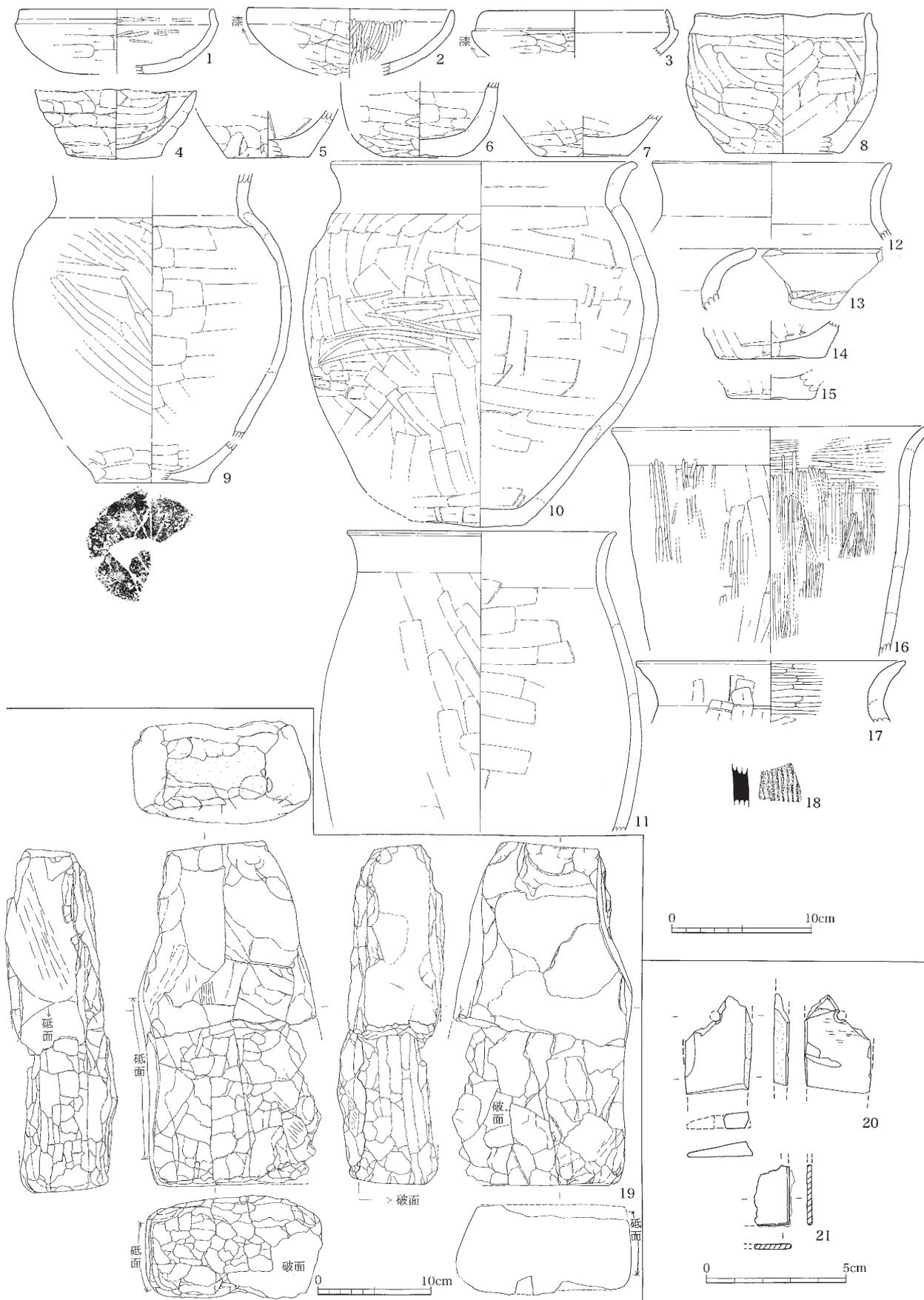
[出土遺物] 遺物は多く、甕甑類主体で、杯・小形土器・鉢・高杯が少量。古墳後期後葉と考えられるが、内面をよく磨く深い杯 (1・2) や橙色胎土の杯・鉢・甑が多く、甕がさほど長胴でない点は後期中葉に近い。10 は外面下位に縄痕跡が僅かに残る。SG5 区 SI-29 と SG10 区 SI-47・57・86 や、宇都宮市成願寺遺跡第 38 号住居 (篠原・杉浦他 2000)・壬生町霞内西遺跡 9 号土坑 (篠原 2003)・足利市田島持舟遺跡 629 号住居 (篠原・藤田 2011,p.243) に縄圧痕の土師器甕がある。また、霞内西遺跡 2 号住居 (前掲)・那須烏山市北原遺跡 SI-1000 (安藤 2008)・真岡市市ノ塚遺跡 1 区 SI-201・355・685・952・954 (藤田・片根 2007・2008) などに籠目痕の甕があり、市ノ塚遺跡は甑・鉢も含む。9 は金色雲母片が多い茨城県産の甕。雲母片を含む土師器は SG10 区 SI-12 などにある。図示以外の土師器合計 631 片・4,597g の内訳は、杯 226 片・1,337g、高杯 10 片・134g、鉢 18 片・231g、壺甕類 345 片・2,053g、甑 32 片・842g。

18 は SI-10 他と同個体の可能性のある混入した古墳中期の須恵器甕小片。20 は粘板岩製有孔剥片 (退化した石製模造品)。粘板岩製模造品が SG5 区 SI-6 や SG10 区 SI-59・64a・101 他、滑石製有孔剥片は SG10 区 SK-621 にある。19 は外周 4 面中 3 面を平らに加工した軟質凝灰岩 (カマド構築材?) で、長側面を砥石に転用する。21 は板状鉄製品の隅部。被熱痕や加工痕がない径約 3 ~ 9cm の円礫が 10 点ほどある。

第 42 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-47 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 4.7 最大 復 14.4	外面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラケズリで、磨滅のためヘラミガキの有無は不詳。内面はヨコナデ後にヨコヘラミガキだが、体部下半は剥落してミガキの有無や方向が不明。現状で漆仕上げは見られない。 [注記]54 付近、74、Cトレ北、Dトレ東半	5YR6/8 橙 粗い 灰色礫~粗粒と赤・黒 粗~細粒多、白・透明粗~細 粒やや多 硬質	中央東部床土 5cmと北東 部トレンチ 口 7/12 周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復 14.6 高 残 4.7	内外面の口縁部ヨコナデ後、外面体部を横~斜位ヘラケズリ。内面体部に放射状ヘラミガキ。外面上半と内面全体に漆仕上げ。	5YR7/6 橙 やや粗い 白・黒細粒多、透 明粗~細粒やや多 硬質	中央東部 4 ~ 9cm 口 1/4 周 49、73
3 土師器 杯	口 復 13.2 高 残 3.2 最大 復 14.6	外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面は口縁部がほとんど剥落しているが、おそらく体部と同様にヨコナデでヘラミガキは行わない。残存する内外面に漆仕上げ。	7.5YR6/6 橙 緻密 赤粗~細粒やや多、 黒・透明細粒少 硬質	中央北部床土 1 ~ 4cm が接合 口 1/36 周、体 1/6 周 63、65
4 土師器 粗製杯	口 復 11.5 高 残 4.9 底 6.6	外底面は緩い凸面で多方向にナデを行い、中央に径 6 × 11mm の小さな凹みを持つ。外面体部は紐積痕を残し、ユビオサエと軽いナデ。内面は底部に多方向と体部に横位の強く雑なヘラナデ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗~細粒多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	南部床土 2 ~ 4cm。南西 床土 10cm の 1 片も接合 口 1/4 周、底 4/5 周 8、81、82
5 土師器 粗製鉢	高 残 3.3 底 復 5.8	外底面は緩い凹面で雑なナデ。外面体部は雑なナデで粘土の亀裂を多く残したまま。内面は横位の強いヘラナデ。	5YR6/8 橙 緻密 白・黒・赤・透明細粒 少 硬質	南東部遺構上面 底 5/12 周 南東上面
6 土師器 鉢	高 残 5.4 底 5.2	外底面は 1 ~ 2 方向のヘラナデでやや雑な平坦面にする。外面体部ヨコヘラナデ。内面体部と底部はナデで、口縁部ヨコナデの下端付近が少し残存している。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗~細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	中央南部床土 8cm 体 1/3 周、底全周 28
7 土師器 鉢	高 残 3.0 底 復 6.4	外底面中央を 1 方向ナデ後、外周に薄く粘土を貼って 1 方向ヘラケズリして中凹みに仕上げる。外面体部ナデ後に体部下端ヨコヘラケズリ。内面は底コビナデ、体部ヨコヘラナデ。	7.5YR7/3 にぶい橙 やや粗い 白・透明粗~細粒 と黒細粒やや多、赤粗粒少 硬質	遺構上面 底 1/3 周 上面
8 土師器 鉢	口 12.4 高 10.1 底 復 8.1 最大 13.6	外底面はおそらく円周方向のヘラケズリ。外面は口縁部ヨコナデ後に体部に斜位および横位のヘラケズリ。内面は下部ヨコヘラナデ、胴上部ナメナデ、口縁部ヨコナデ。内面は褐色 (5YR4/1)。漆仕上げはしていない。 [注記]12、13、36、80、82、上面、南西区上面、東半上面、Cベルト南撓乱	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗~細粒多、赤 礫と白・透明細粒少 やや軟質	中央床直上~床土 5cm の 12 片に遺構上面の 8 片 が接合 口 2/3 周、底 1/6 周 注記は左欄
9 土師器 甕	高 残 22.0 底 復 8.1	外底面は緩い凹面で中央部にカシワまたはトチノキの葉の裏面圧痕を残し、外周部ヘラナデ。外面胴部下端ナデ、肩部ナメナデ後に胴中位以下を幅広いミガキ状のナメヘラナデ。内外面頸部ヨコナデ。内面胴部はナメナデ後にヨコヘラナデ。被熱痕は不明。 [注記]29、30、Cトレ南半、Dトレ西半、南中上西、東半上面	10YR5/2 灰黄褐 やや粗い 白・透明礫と白粗 粒多、金色雲母粗~細粒やや 多 やや軟質	中央南部床土 1 ~ 5cm の 2 片と主に南半部ト レンチの 12 片 頸 1/3 周、底 2/3 周 注記は左欄
10 土師器 甕	口 21.5 高 26.2 底 5.9 最大 25.0	厚く重い。外面胴部は縦~斜位ヘラナデで、中~下位は横位のヘラケズリやヘラナデも見られる。底から高さ 9cm の付近で横方向に縄 (?) の圧痕がわずかにある。外底面は雑な多方向ヘラナデ。内面胴部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。被熱痕は見られない。	10YR7/6 明黄褐 粗い 白・黒・灰色粗~細粒 多、赤粗粒と透明細粒少 硬質	中央東部床土 7cm 口 3/4 周、胴一部欠、 底 2/3 周 75、東半上面
11 土師器 甕	口 復 19.2 高 残 20.6	外面は胴部に縦~斜位ヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面胴部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面口縁部が被熱赤化し、破壊後に被熱したものかもしれない。[注記]32、35、43 ~ 47、53、78 ~ 80、南東上面、東半上面、西半 1 層付近上面、80 付近	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗~細粒 多、灰色礫と赤粗~細粒と黒 細粒やや多 やや硬質	中央床土 4 ~ 10cm と南 東床土 5cm が接合 口 1/12 周、頸 1/3 周 注記は左欄

第5章 権現山遺跡 SG10区



第76図 権現山遺跡 SG10区 SI-47(2) 遺物

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

12 土師器 甕	口 高	復 16.8 残 5.1	内外面口縁部ヨコナデ。胴部は破片が非常に少なく復原できないが、外面タテヘラナデ、内面ヨコヘラナデと思われる。赤色化はしていないが、被熱して脆くなっていると考えられる。 [注記]32、41、43、45、46、80付近、南東上面、南中上面、南半上面、東半上面東	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い、灰色粗粒と赤粗～ 細粒やや多、白・黒粗～細粒 少 やや軟質	中央床土 4～10cmと 南東部遺構上面 口1/2周、頸1/3周 注記は左欄
13 土師器 甕	口 高	復約 20 残 4.4	やや厚い。外面は口縁部ヨコナデ、胴部タテヘラケズリ。内面は胴部がおそらくヨコヘラナデで、口縁部にヨコナデ。口縁が歪んでいると思われるので、正確な復原径は不明。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒粗～細粒と 透明細粒やや多 硬質	東半部遺構上面 口1/9周 東半上面
14 土師器 甕	高 底	残 2.7 復 7.6	外底面は1方向ヘラケズリでほぼ平底状。外面胴部タテヘラナデ(またはヘラケズリ)。内面は多方向ヘラナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い、黒・灰色粗～細粒多、 白細粒少 硬質	西半部1層付近上面 底1/4周 西半1層付近上面
15 土師器 壺か甕	高 底	残 1.8 6.1	外底面は1方向ヘラケズリ。外面胴部は縦位のヘラナデまたはヘラケズリ調整の下端部だけが残る。底面の内面はヘラナデまたはナデ。	10YR3/1 黒褐 粗い、白粗～細粒多、灰色礫 と赤・黒・透明粗～細粒やや 多 やや軟質	底1/2周 15
16 土師器 甕	口 高	復 22.4 残 16.4	外面胴部は中位タテヘラケズリと上位タテヘラナデ後にタテヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面胴部ヨコヘラナデ後タテヘラミガキ、口縁部ヨコヘラミガキ。外面頸部に不規則な煤が付着。 [注記]35、40、43、46、51、52、91、114、上面、東半上面、南中上面、北東上面、Cトレ南半	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 透明細粒多、赤粗 粒と白・赤粗～細粒と黒細粒 少 軟質	中央床土 5～12cm 口1/12周、頸1/2周 注記は左欄
17 土師器 甕	口 高	復 19.0 残 4.4	外面は口縁部ヨコナデ後に頸～胴部タテヘラケズリ(頸は部分的にタテヘラナデも行う)。内面は肩部ナメナデ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 黒・透明細粒やや 多、白・灰色細粒少 硬質	東半部遺構上面 口1/12周、頸1/6周 東半上面
18 須恵器 甕	高	残 3.0	外面は縦位の平行叩き。内面はナデ消しで無文。外面に灰黄白色の自然釉がかぶる。SI-10等で出土した破片と同一個体の可能性あり。古墳中期の遺物が混入。	7.5Y4/1 灰 緻密 白細粒多、白粗粒少 硬質	北東部トレンチ内 胴部片 Dトレ東半
19 石器 砥石	長 幅 厚 重	30.4 15.6 7.4 残 3300	片側の長側面の約半分を砥面に使用して非常に平滑になり、残りの約半分は浅い擦痕がある。反対側の長側面と、小口のうち長いほうの1面はおそらく平坦に加工するが工具痕は不明。小口のうち短いほうの面は自然面と思われ、暗褐色の汚れが表面に付着する。表裏の広い平坦面は2面とも雑に打ち割っていると思われ、一部に擦痕はあるが側面のように平坦には仕上げない。中央で2つに折れた後にその1方が割れて細片化し、その大半は原石の節理に沿って縦に割れる。被熱して細片化したのかもしれないが、被熱痕は不明である。カマド焚口の構築材を砥石に転用した可能性がある。	7.5YR6/8 橙 緻密で軟質な緑色凝灰岩	南西隅床上 1cm 表面の約 1/4は破面 98、上面
20 石製模造品 有孔剥片	長 幅 厚 重	残 34.2mm 23.3mm 5.6mm 残 5.4	節理に沿って板状に割った板石材に右図の面から穿孔し、初孔径 3.25mm、終孔径 3.10mm。右図の面にはわずかに擦痕があるが、ほとんど研磨はしていない。図示した側面は自然面を残し、右図の面に境界部分を面取りするように工具で削っている。	7.5Y4/1 灰 緻密で軟質な粘板岩	中央床土 6cm 両端部欠 39
21 鉄製品 板状品	長 幅 厚	残 2.2 残 1.3 0.2	平坦な板状鉄製品の隅部。残存長が短い面に沿ってX線写真では孔の可能性がある暗い部分が見えるが、その部分の銹を丁寧に除去した結果、孔ではないと考えられた。有機質等は見られない。		隅部残

SG10区 SI-48 (第77図、写真図版91)

【位置】 SG10区中央部の20-17グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、西にSI-49、北にSI-50・106、東にSI-104がある。東部を古墳後期のSI-45に、南部を時期不明のSK-243に切られ、SI-48→SI-45→SK-243の順になる。南西部では古墳時代のP-303を切り、時期不明のP-302に切られる。

【規模と形状】 方形で主軸方位はGN-26°-E。東西5.12×南北5.08m、残存壁高は北隅で最大28cm、東部はSI-45に上部を切られ5～10cmだけ残る。主柱穴4本は南北柱間2.40m。東西柱間は南側が狭く2.55m、北側は2.74mで、南西主柱穴P3が少し東に寄る。底面形から柱径は10～12cm程と推定される。床からの深さはP1=43cm、P2・P3=50cm、P4=47cm。中央部西寄りにある補助柱穴P6は深さ36cm。入口施設と考えられるP7は床から深さ14cmで、床面覆土と同じ2層で埋まる。中央のP8は径18～20×深さ32cmで、貼床除去後に確認したので埋め戻した古期柱穴と見られ、SI-48より古いと考える余地も残る。

土手状の盛土が入口部を半環状に囲む範囲は東西158×南北107cmで、盛土の高さは床面から2～5cm、盛土帯の幅は28～43cm。貯蔵穴P5は南東隅にあり、東西80×南北101×深さ31cm。壁溝D1は西部以外に見られ、幅10～24cm・深さ2～6cm。間仕切溝はない。貼床はローム主体の土。北西隅部付近ではほとんど貼床がなく、地山の礫混じりローム層中にある礫が建物床面に顔を出している。

【炉】 北部にあり、北側は径38×深さ5cm、南側は径46×深さ5cmで、長さ86cmの瓢箪形なので2時期の炉が重複したのかもしれないが、土層断面は同質の層で埋まり重複痕はなかった(断面F-F')。北側の炉は底面に接して細長い自然礫(5)があり、被熱痕は確認できないが、約半分の範囲に煤が明瞭に付着する。この瓢箪形の炉とは別に、その南東側で床面直上に径30～40cmの範囲で焼土がまとまっていた。

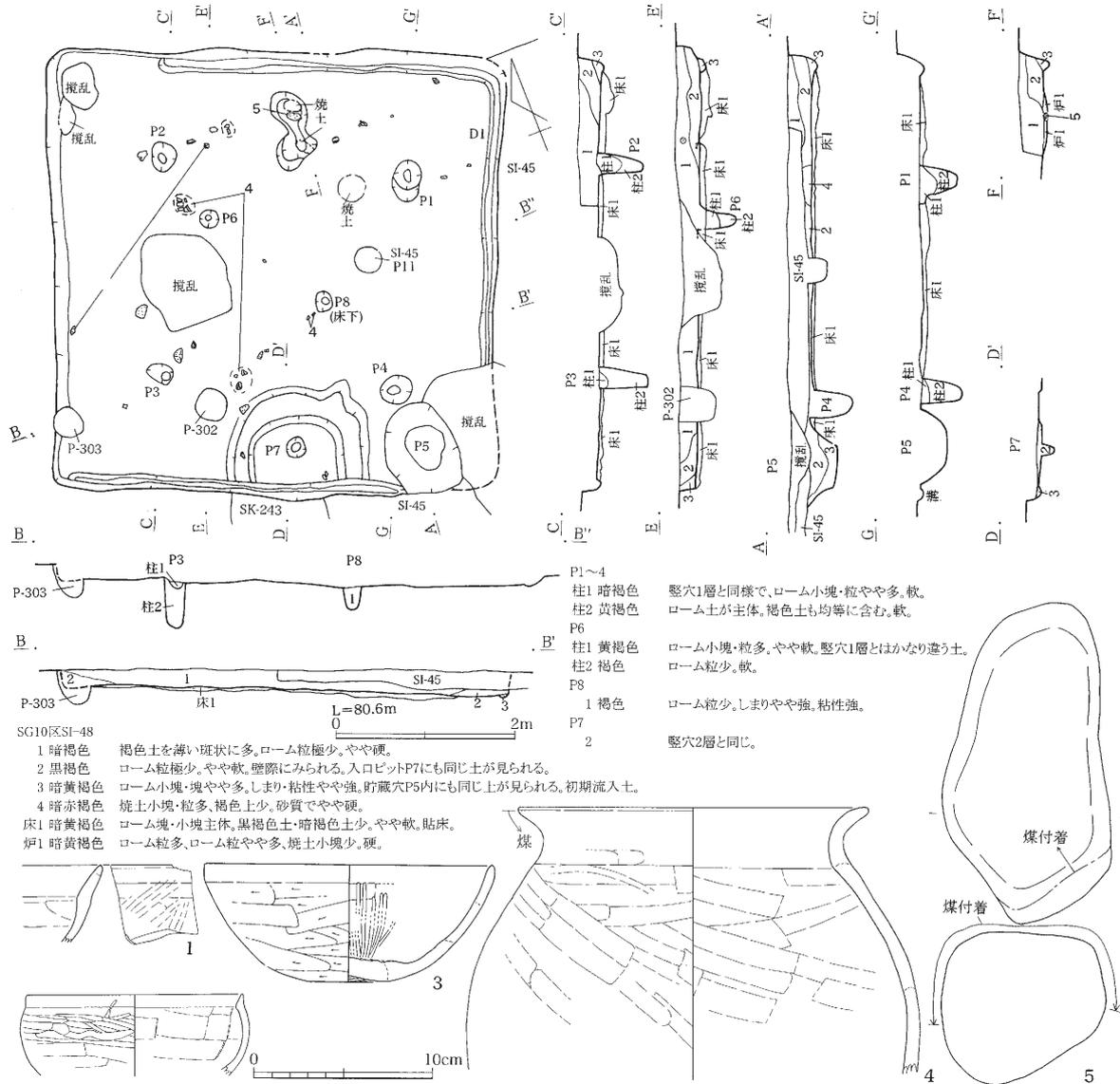
【覆土】 テフラの層や粒はない。壁際と貯蔵穴P5内の初期流入土3層の状況から自然埋没と思われる。

【遺物出土状況】 全域で少量出土した。床付近にある甕(4)は炉使用痕が明瞭で、SI-48に伴うであろう。

【出土遺物】 1は口が外に開き気味で橙色胎土の中期後葉の杯。3は深身で内面をよく磨く凹底の杯で、本遺跡北部のSG1区SI-8や4区SI-6・8、中島笹塚6号墳に例がある。4は外面に煤が多く、炉で使った痕

第5章 権現山遺跡 SG10 区

が明確。5 は炉で使った煤附着礫。遺物は少なく土師器は甕が主体で、杯もやや多く、高杯は少ない。図示以外の土師器合計 191 片・1,293g の内訳は、杯 63 片・211g、高杯 9 片・101g、小形壺 6 片・45g、壺甕類 114 片・936g。縄文早期～前期頃かもしれない大形の剥片が混入していた。



第 77 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-48 遺構・遺物

第 43 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-48 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 4.4	薄く軽い丁寧な製品。外面は口縁部ヨコナデ、体部下半に少し光沢のあるヨコヘラナデ、体部中位にヨコヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 緻密 赤・灰色粗～細粒と白 微粒少 硬質	北西 1 層 口 1/4 周 北西 1 層
2 土師器 杯	口 復 11～13 高 残 4.4	頸部の稜は内面が明瞭で、外面は不明瞭。外面はおそらくナナメハケの後に軽くナデを消して口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 緻密 赤・透明粗～細粒と黒 細粒少 やや硬質	遺構確認面出土 口 1/12 周、頸 1/8 周 北西上面
3 土師器 杯	口 復 15.9 高 6.5 底 4.1	外底面は上げ底状で、外周を円周方向に削った後に多方向ヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。内面はヨコヘラナデまたはヨコナデの後に全体を放射状ヘラミガキ。	5YR4/6 赤褐 粗い、白粗粒多、白・灰色礫 と黒細粒少 やや軟質	北西床上 11cm と北部床 上 2cm。上面の 4 片と 接合 口 1/12 周、底全周 2、9、北中上、北西上面
4 土師器 甕	口 復 19.4 高 残 14.8 最大 復 25.1	内外面ともに胴部ナメヘラナデ後、口～頸部ヨコナデ。外面口縁部より下側の残存する全体に煤が多く附着する。 [注記]4、5、6、13、北西上面、E ベルト北攪乱	10YR6/6 明黄褐 やや粗い、白・黒粗～細粒多、 赤・透明粗～細粒やや少 やや硬質	中央床上直上～床上 2cm が 接合 口 1/4 周、頸 5/12 周 注記は左欄
5 礫	長 17.7 幅 9.5 厚 8.8	加工のない自然礫。縦位にした時のほぼ半分面に煤が明瞭に附着し、反対側には見られない。被熱赤化痕は見られない。重量 1918.9g。	10Y6/1 灰 緻密で少し軟質気味の安山岩	炉底面直上 完形 25

SG10区 SI-49 (第78図、写真図版91・198)

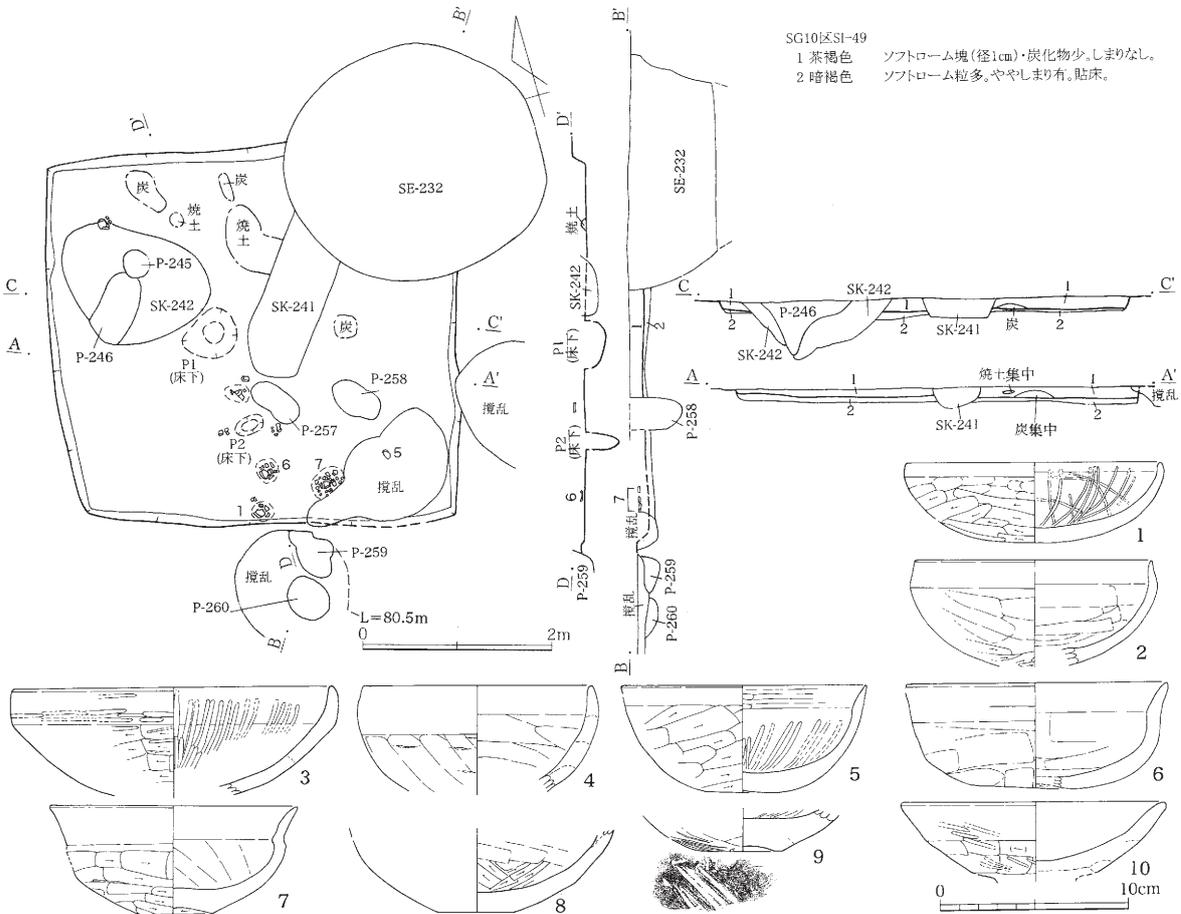
[位置] SG10区中央部の20-17グリッドにある。同じく古墳中期の遺構としては、西にSI-36、東にSI-48、北にSI-50がある。中世の井戸SE-232、時期不明の土坑SK-241・242と時期不明の柱穴状土坑P-245・246・258に切られる。また、時期不明のP-257にも切られる可能性がある。重複関係からみてSI-49→SK-242→P-245・246、およびSI-49→SK-241・SE-232の順になる(SK-241とSE-232との新旧は不明)。P-257とSI-49との重複関係が不明だが、P-257と258はよく似た二連状の穴なので、P-257もSI-49を切ると考えられる(SI-49→P-257・258)。

[規模と形状] 方形の建物跡で主軸方位はGN-14°-E。東西4.32×南北4.00mで東・北側が少し深く残り、もっとも高く残る東壁で残存壁高17cm、西南部は残りが悪く壁高4～6cm。支柱穴は認められない。貼床除去後に確認した柱穴が2本あり、床面から浅いので支柱穴とは考えにくい。短径×長径×床面からの深さは、P1が53×59×20cm、P2は19×31×16cm、2本の柱間は1.10m。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。南東隅部にある攪乱は床面から43cmの深さなので、これで貯蔵穴が消滅したという想定もできる。貼床はソフトローム質で、厚さ2～4cmほどの部分が多く、中央部で最大厚8cm。

[火処] 確認されなかった。炉があったと想定した場合、後世の土坑などに破壊された可能性がある。中央部から北部にかけて、床から5～6cmの厚さで炭や焼土が分布する箇所がある。

[覆土] 貼床以外は単層で、テフラの層や粒などは認められない。覆土中に焼土が多く、床面レベルに炭化物が多く見られる(断面図A-A'とC-C')。

[遺物出土状況] 竪穴の残りが浅いので、出土した遺物はどれも床面に近いものである。南東部にやや多い。北西部を切る時期不明のSK-242や、南東部攪乱に流入した土師器もSI-49の遺物だったことが推定できる。



第78図 権現山遺跡 SG10区 SI-49 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

[出土遺物] 遺物は少なく、杯が主体で壺甕類も少しあり、高杯はほとんどない。図化したもの以外は小破片ばかりである。杯破片は平底が多いが、丸底も一定量あるので中期後葉と考えられる。1～4は初期の模倣杯。5・6・7は外傾口縁で、8・9とともに中期後葉から後期初めに見られる凹底状の杯である（安藤2001）。9は研磨具に転用している。10は杯部が脚部から剥がれ、接合法がよくわかる。図示以外の土師器合計136片・1169gの内訳は、杯59片・318g、壺甕類77片・851g。

第44表 権現山遺跡 SG10 区 SI-49 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復13.4 高 4.2	外面は体部上位ナデ後、底部に1～2方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部にヘラナデと口縁部ヨコナデ後、斜位および放射状のヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 黒・透明粗～細粒 やや多、白・赤細粒少 やや硬質	南端床上4cmの5片と床直上の1片 口1/6周、底付近全周11、攪乱西、床直
2 土師器 杯	口 復12.4 高 残5.6 最大 復13.0	外面は底部ヘラケズリ、体部は横位のヘラケズリまたはヘラナデ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 粗い 白・黒粗粒多、白・灰色礫少 やや硬質	西部攪乱。南部床上4cmに1片 口1/6周、体1/4周2、攪乱西
3 土師器 杯	口 復16.7 高 残5.7 最大 復17.2	外面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラケズリ後、口～体部上位をヨコヘラミガキ。内面は体部ヘラナデと口縁部ヨコナデ後、放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 緻密 白礫と白・灰色粗粒やや多、黒・透明細粒少 やや硬質	1層に5片とSK-242に1片 口1/6周1層、SK-242 1
4 土師器 杯	口 復11.9 高 残5.7	半球状で深身。外面体部はナメヘラケズリまたはヘラナデで、磨耗しているので不明瞭。内面体部はナメナデ。内外面口縁部ヨコナデ。断面に記入した最も下側の接合ラインよりも下では灰白色の粘土を使うので、それより上の橙色とは異なっている。	2.5YR7/8 橙 やや緻密 赤・灰色粗粒と透明細粒少 軟質	1層と西部攪乱中 口1/5周1層、攪乱西
5 土師器 杯	口 12.8 高 5.7 底 3.5	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面口縁部ヨコナデ後に体部ナメヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に放射状ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明細粒やや多、白・赤粗～細粒少 やや硬質	南部床上4cmの2片と攪乱や1層出土の7片 口1/4周、底2/3周2、1層、1攪乱、攪乱西
6 土師器 杯	口 復13.7 高 5.5 底 5.2	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状にする。外面体部は下半ヨコヘラナデ、上半ヨコヘラナデまたはナデ、口縁部ヨコナデ。内面は底部が方向不明のナデ(?)、体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外底面に7cm大の黒斑あり。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	南部床上1cm 口1/2周、頸全周、底3/4周3
7 土師器 杯	口 12.9 高 5.7 底 3.8	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面体部ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗粒と白・黒・透明細粒細粒少 やや硬質	南部床上1～4cm 口1/3周、頸全周、底全周2、3、攪乱西
8 土師器 杯	高 残4.5 底 3.9 最大 復13.9	外面は平底で、外面調整は磨滅しているので不詳。内面は底部に多方向ヘラケズリ後、体部に丁寧なヨコヘラナデ。	2.5YR6/6 橙 やや緻密 黒細粒多、白・透明細粒少 硬質	1層と西部攪乱の各4片が接合体3/4周、底全周1層、攪乱西
9 土師器 杯	高 残2.2 底 4.2	外底面は凹底状で円周方向のやや雑なナデ。外面体部ナメヘラナデ。内面底部に放射状ヘラミガキ。外面体部下端に斜位の深い平行刻線状削痕が焼成前に生じ、転用研磨具の可能性が高い。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗粒と白粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	SE-232 南側で床直上底全周 B-B'セク北床直
10 土師器 高杯	口 復13.9 高 残3.9	厚手で重い。外面底部は杯部と脚部の接合面から剥がれている。接合面は径6.4cmの円形に凹んだ後に、中央が広い平坦面になり丁寧なナデ。外面は口縁部ヨコナデとおそらく体部ヘラケズリの後にナメヘラミガキ。内面は磨滅しているので調整不明。	5YR7/6 橙 緻密 赤粗～細粒と黒・透明細粒やや多、白細粒少 硬質	1層 口1/12周、杯底3/4周1層

SG10 区 SI-50 (第79～84図、写真図版92～94・174・198・199)

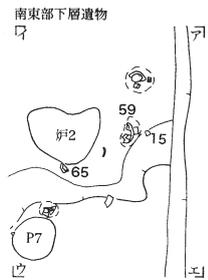
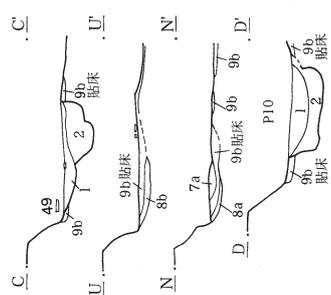
[位置] SG10区中央部の20-17および21-17グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、北にSI-60、南にSI-36・48・49、東にSI-106がある。北西部は重機による過去の採土工事で削平され、竪穴掘方の下部だけが残っていた。時期不明のSD-224に遺構覆土上部を切られている。

[規模と形状] 方形の建物跡で主軸方位はGN-15°30'-W。東西8.60×南北8.72m、残存壁高は南辺で33～36cm、東辺で30～32cm、北辺中央部で21～24cm、西辺南部で16～32cm。支柱穴4本の柱間は南北5.28m×東西5.28mで、正確に配置された正方形。各辺中央に補助柱穴を1本ずつ配置する。ただし東辺中央柱穴P8は北東支柱穴P1の南2.76mの位置で、正確な東辺中央から少し南へ寄る。四隅の支柱穴は深く、床面からの深さはP1=54cm、P3=残存48cm(床面レベルから深さ64cm)、P5=56cm、P7=60cm。各辺中央の補助柱穴は浅く、P2=30cm、P4=36cm、P6=20cm、P8=32cm。北東支柱穴P1の柱痕径22～24cmである。P1の柱裏込土はかなり堅い層で、東側に続く間仕切溝D1aの覆土と同質であった(断面図H-H')。P8の南東にある補助柱穴P9は貼床除去後に確認したもので、上面径39cm、床面レベルから深さ25cm。各柱穴の底面は地山ハードローム層中にある。

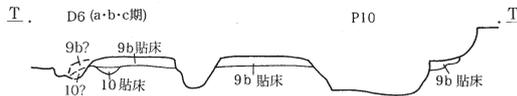
竪穴の床面は北東隅と南西隅でレベルが中央部よりも7～10cm低い。P1-P8-P7を結ぶラインの東側は床面に凹凸が目立つ。竪穴南部から南東部にかけては床面をローム質土で高く盛り上げ、南北194×東西



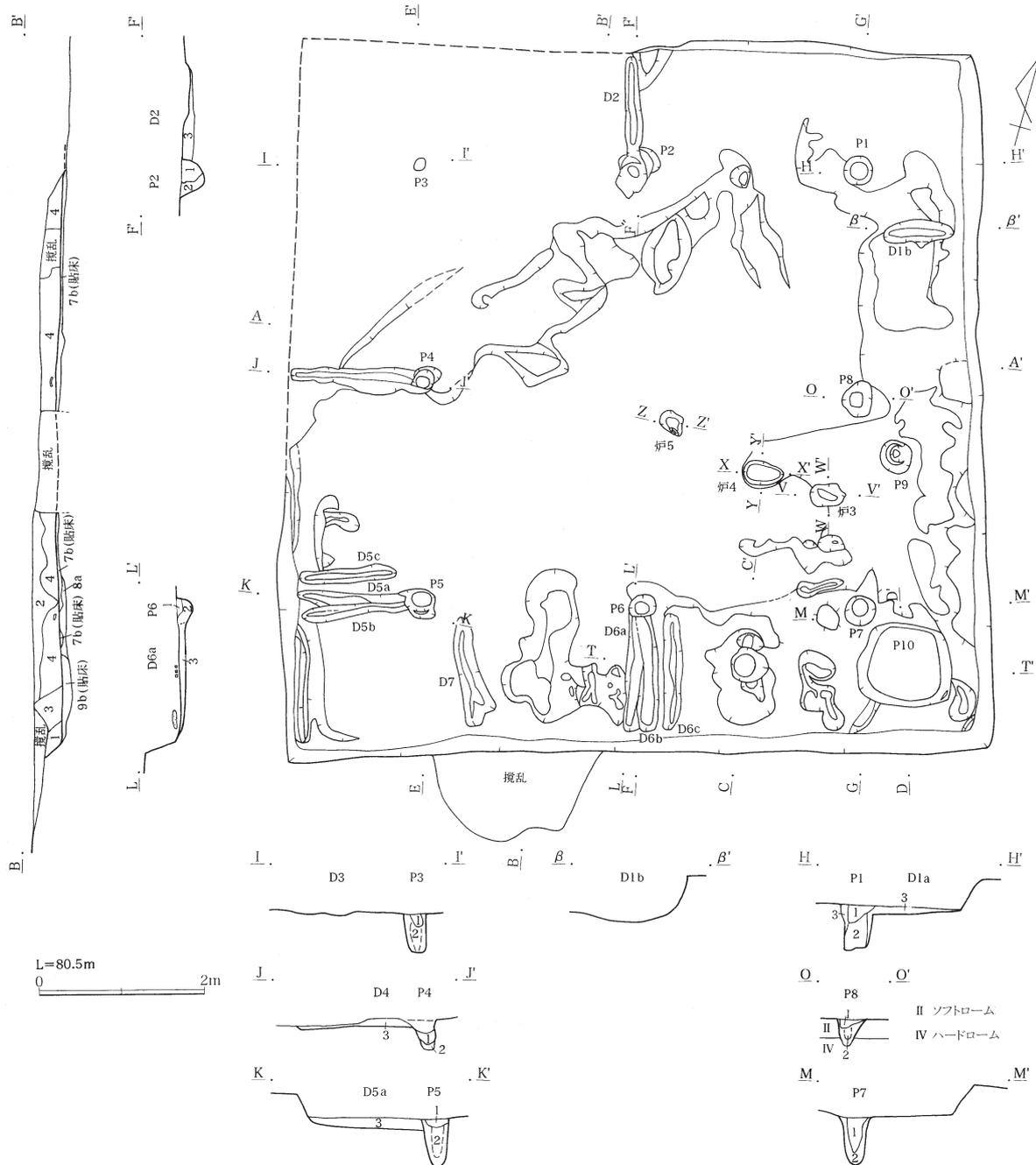
- P10
- 1 暗褐色 ソフトローム粒少、今市軽石粒微量、しまりなし。
 - 2 暗黄褐色 ソフトローム粒多(50%)、しまりなし、周堤の崩落土か。
- 入口施設 C-C'
- 1 暗黄褐色 ソフトローム粒多(50%)、しまりなし、周堤の崩落土か。
 - 2 ソフトローム塊(径1~5cm)少。周堤の崩落土と思われる。



- SG10区SI-50
- 1 暗黄褐色 ソフトローム粒多。軟。しまりなし。
 - 2 暗褐色 ソフトローム粒・白色粒多、炭化物・今市軽石粒少。軟。しまり非常に弱。
 - 3 暗黄褐色 ソフトローム粒・白色粒多。軟。
 - 4 茶褐色 ソフトローム粒・白色粒多。しまりやや有。
 - 5 茶褐色 ソフトローム粒・白色粒多、今市軽石粒微量。しまり有。多数の土器を含む流入土。
 - 6 暗褐色 ソフトローム粒・白色粒多、炭化物少、今市軽石粒微量。しまり有。多数の土器を含む流入土。
 - 7a 黄褐色 ハードローム塊(径2~5cm)多。かなり硬。貯蔵穴南西の盛土。
 - 7b 暗褐色 ハードローム塊(径4~5cm)とハードローム・ソフトローム粒多。しまり有。貼床。
 - 8a 黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)・粒多。しまり有。掘方の埋戻土。暗褐色土の混じりが少ない。
 - 9a 黒褐色 ハードローム塊(径3~5cm)・ソフトローム粒多、今市軽石粒微量。しまり有。C-G'P1付近は、下から3~4cmはハードロームが少なくなり、黒褐色土の黒味が勝る。北東区には、1辺2.4m方形の黒褐色部が認められる。
 - 9b 暗黄褐色 ハードローム塊(径2~5cm)・ソフトローム粒多。しまり有。貼床。
 - 10 淡黄褐色 ソフトローム粒少。しまりなし。粘性有。床下にある古い間仕切溝P5b・P6b・D6cの覆土。

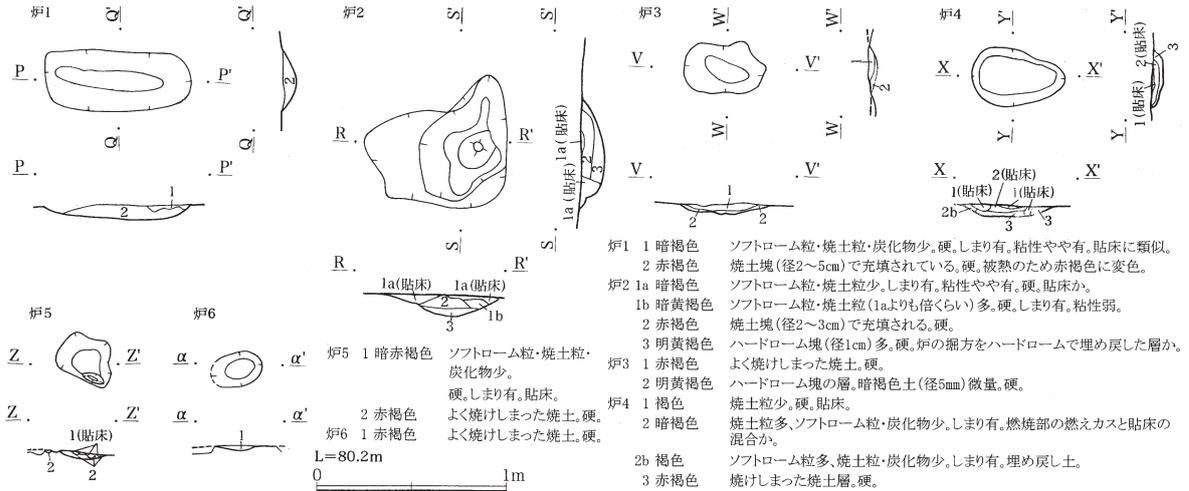


第79図 権現山遺跡 SG10区 SI-50(1) 遺構



- | | |
|---|---|
| <p>P1-D1</p> <p>1 暗褐色 ソフトローム粒多。軟。拔柱後の流入土。</p> <p>2 暗黄褐色 ソフトローム粒多(50%)。軟。拔柱後の裏込の崩落土。</p> <p>3 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)少。かなり硬。裏込土。</p> <p>P2-D2</p> <p>1 暗褐色 ソフトローム粒多、ハードローム塊(径1mm以内)微量。軟。裏込土と拔柱後の流入土の混じったもの。</p> <p>2 暗黄褐色 ソフトローム塊・粒多。しまり有。裏込土。</p> <p>3 暗褐色 ソフトローム粒多、ハードローム塊(径2~3cm)少。しまり有。</p> <p>P3</p> <p>1 暗褐色 ソフトローム粒少。軟。</p> <p>2 暗黄褐色 ハードローム塊(径1~3mm)・ソフトローム粒多。裏込土。壁寄りはしまりがあるが、中央部は拔柱後の裏込の崩落土で、しまりがなく軟らかい。</p> <p>P4-D4</p> <p>1 褐色 ソフトローム粒多。軟。</p> <p>2 灰色 砂質土。P3-P4上面は、ソフトロームとハードロームの漸移層で、とところ砂質土を含むため硬。裏込めにも柱穴掘削時の排土をそのまま利用したものと思われる。</p> <p>3 褐色 ハードローム粒多、ハードローム塊(径0.5~4mm)・砂質塊(径2mm)少。しまり有。</p> | <p>P5-D5a</p> <p>1 暗褐色 ソフトローム粒少。しまりなし。</p> <p>2 暗黄褐色 ソフトローム粒。中央部は軟。壁寄りはしまり有。裏込の残存および崩落土。</p> <p>3 暗黄褐色 2層と類似。柱穴の排土を利用したと見られる。ソフトローム粒の他に、砂質土塊(径2cm)少。しまり有。</p> <p>P6-D6a</p> <p>1 暗褐色 ソフトローム粒多。軟。拔柱後の流入土。</p> <p>2 黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)で充填されている。硬。</p> <p>3 暗褐色 ソフトローム粒多、ハードローム塊(径0.5~2cm)混入。しまり有。</p> <p>P7</p> <p>1 暗褐色 ハード・ソフトローム粒多。軟。拔柱後の流入土。</p> <p>2 暗黄褐色 ハード・ソフトローム塊(0.5~5cm)多。しまり有。裏込土。柱穴北東の壁面には小礫(径1~2cm)が露出している。地山中に小礫を含む部分があるらしい。</p> <p>P8</p> <p>1 暗褐色 ソフトローム粒多。</p> <p>2 暗黄褐色 ハード・ソフトローム塊(径1~3cm)多。中央部は拔柱後の軟らかい裏込崩落土。外周よりは硬い。裏込の残存。</p> |
|---|---|

第80図 権現山遺跡 SG10 区 SI-50 (2) 遺構



第81図 権現山遺跡SG10区SI-50(3)遺構

361cmの範囲が他の床面より1~2cmほど高い。この部分に南東主柱穴P7と貯蔵穴がある。貯蔵穴P10は東西130×南北103×深さ36cmで、覆土下層はソフトロームの割合が多いので周堤が崩れて流入した層とも見られる(断面図D-D')。入口施設と考えられる方形の高まりが貯蔵穴の西側にあり、東西1.90×南北1.36~1.54m、床面からの高さ3~5cm。この高まりの中央は94×122cmの範囲が12~16cm窪んで、その北部は深さ30cmの柱穴状になる。壁溝は全周せず、貼床を除去した下部で西壁の南部が壁溝状に少しだけ窪むことが確認され、床面からの深さは3~7cm。

間仕切溝は東にD1(掘り直しを含めると2本)、北にD2、西にD3・D4・D5(D5の掘り直しを含めると5本)、南にD6・D7(D6の掘り直しを含めると4本)がある。D2~D4とD1a・D5a・D6aは床面で確認した最終期の溝で、D1b・D5b・D5c・D6b・D6c・D7は貼床除去後に確認した旧期の間仕切り溝である。深さはD1a=4~11cm、D1b=18~20cm、D2=11~15cm、D3は残存4cm(採土工事で床が削平)、D4=4~8cm、D5a=10~13cm、D5b=13~16cm、D5c=11~14cm、D6a=7~10cm、D6b=12~13cm、D6c=6~13cm、D7=12~15cm。北東主柱穴P1の柱裏込土と間仕切溝D1aの覆土が同質だという所見(断面図H-H')を尊重すると、最後に柱を立てた時には間仕切溝D1aも埋め戻したことになる。D4・D5a・D6aの埋土中に含まれる砂質土塊やハードローム塊は、柱穴を掘った時に掘削した地山土に由来すると考えられる(断面図JJ'~LL')。

貼床はローム質で、ソフトロームが多い8層の上にハードロームが多い7層が載っている理由は、柱穴や貯蔵穴を掘削する過程で出た土を盛土に利用したためと考えられた。炉1の東側で竪穴東壁部に粘土質の土が貼られていた。

[炉] 南半部を中心として6箇所の炉があり、旧期(炉3・4・5)→新时期(炉1・2)→最新期(炉6)の変遷が考えられる。貼床除去中に確認した炉3・4・5と、貼床除去前に確認した炉1・2・6があり、炉1・2も焼土層の上を薄いソフトロームが覆っていた。炉1は東西に長く78×35×深さ8cmの不整長楕円形で、炉2は東西74×南北70×深さ7cmの不整形。炉1・炉2ともに炉内中央部によく焼けた土があって、その上を薄く覆うソフトローム質土は貼床とよく似たしまりのある土であった。炉2と炉3の最下層は炉掘方の底部を埋め戻した土である。炉3はかなり浅い不整楕円形で東西44×南北27×深さ4cm。炉4は深い不整楕円形で48×31×深さ6cm、炉5は浅い不整形で27×30×深さ4cm。炉4・5の覆土上部は埋め戻した貼床土である。炉6は27×18×深さ2cm。

[覆土] 自然埋没と思われ、1層以外にはテフラと見られる白色粒子を多く含む。東側から建物内に流入した5・6層の中に遺物が多い。貯蔵穴も自然埋没状である(断面図D-D')。

[遺物出土状況] 東壁寄りの5・6層中に遺物が多く、北部中央にも多い。貯蔵穴内よりも、その北側にま

第5章 権現山遺跡 SG10 区

とまる。貯蔵穴周辺には壺甕類が多く、北東部には杯・高杯類が多い傾向がある。二重甕(68)は1片が床面で、もう1片は貼床除去中に床下で出土した。

【出土遺物】遺物が非常に多い。破片量は土師器壺甕類が最も多い。個体数は杯・高杯・小形壺のほうが多いと思われるが、攪乱や削平で破片を失って接合・復元できないものも多い。杯は口が広い内斜口縁杯が主体で、半球状杯もあり、図化品以外も含めた37個体の底部形状は凹底21・平底10・丸底6である。稲粃痕のある土師器(15)は、本遺跡南部ではSG2区SK-103・流路2・遺構外A区、SG15区流路2(TX16)、SG10区SI-30・50・53・55・64a・66・74・78・82・89a・113a・114とSD-43・304b・527とSK-46、北部ではSG1区SI-5などにある。また、SG10区SI-65・110の杯・甕に植物種子圧痕がある。19は内外面を赤彩する。蓋綴じ孔(?)を持つ土器は21の他にSG10区SD-41・42(小破片)や遺跡北部のSG1区SI-1や4区SI-27、北方の砂田姥沼遺跡1区SI-6に有孔鉢があり、砂田遺跡25区SI-25に有孔杯がある(『東谷・中島地区遺跡群』10・11・15)。また、野木町清六III遺跡SI-120(上原他1998)と真岡市市ノ塚遺跡1区SI-1211・1230(藤田・片根2008)にも有孔鉢がある。壬生町霞内西遺跡2号住居跡の有孔鉢には籠の痕跡があり、蓋の材質を考えさせる(篠原2003)。高杯は小形で細い柱状脚が主体で、杯部底破片で数えると図化品以外を含め22個体程ある。23は中実状の脚上部、36は小さな杯体部のヨコナデ、37は脚上端の粘土塊充填が特徴的である。小形壺は中形品と小形品がある。43のように白色針状物質(骨針)を含む搬入品の土師器はSG10区SI-23などにある。44・46は厚い底部の内面調整が不十分で凹凸や亀裂がある。

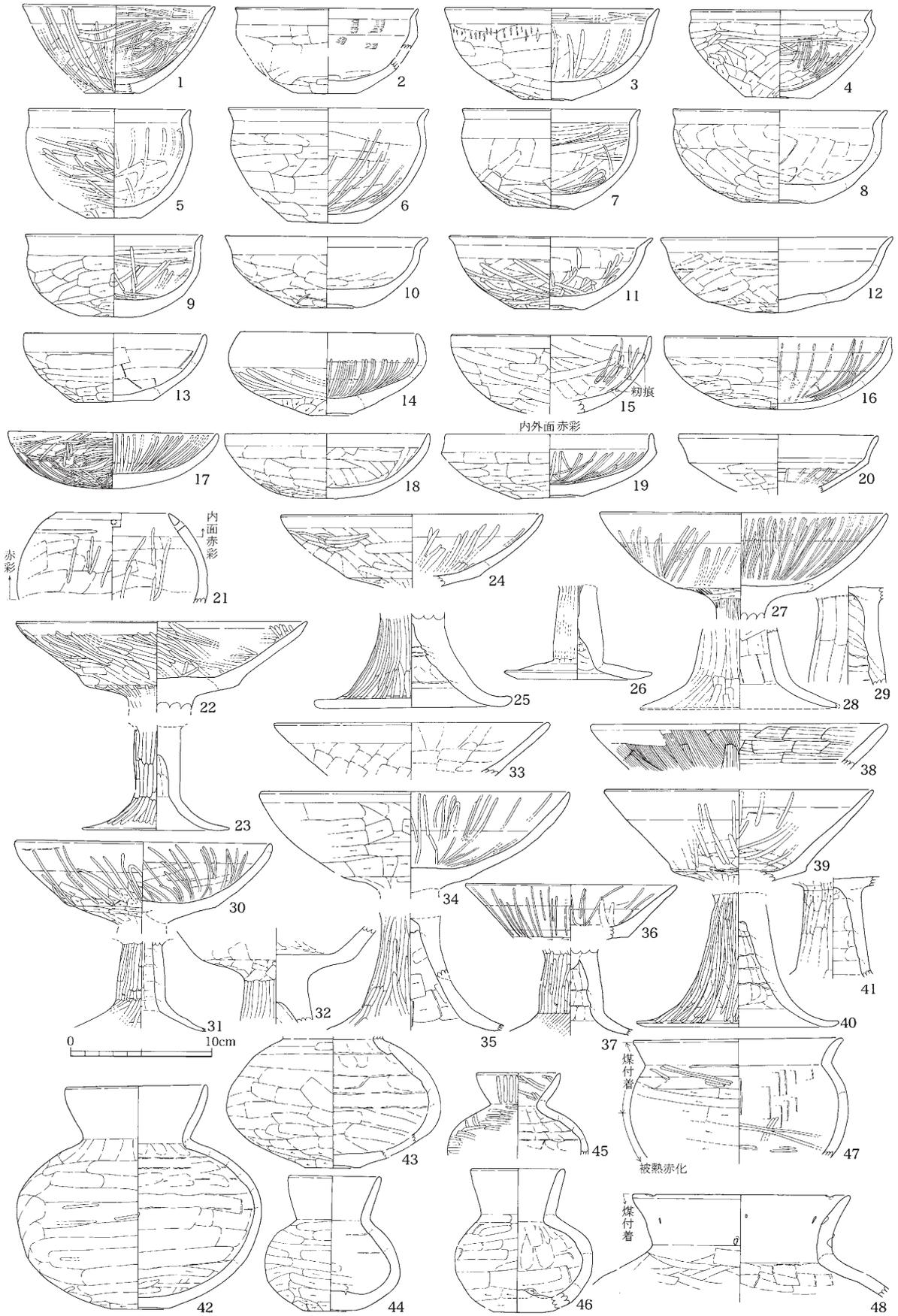
48のキズは小動物が噛んだ痕かもしれない。49はやや長胴の甕で、被熱痕跡がない。54は外面の煤と被熱痕が偏っている甕。50・54のような凸面底の甕はSG10区SI-16などにある。52は使用痕跡が明瞭な小形甕。受口状口縁の壺は、60・65以外に別個体の口縁部小片が1点ある。受口状口縁の壺はSG10区SI-19aなどにある。60は外面をよく磨く。貼付口縁の壺(66)はSG5区SI-100などに例がある。図示以外の土師器合計1,816片・18,336gの内訳は、杯585片・3,815g、高杯371片・4,251g、鉢1片・26g、小形壺57片・819g、壺甕類802片・9,425g。73は土師器甕の破片を転用した研磨具。

須恵器二重甕(68)は、透窓が波状文を切る点で静岡県山ノ花遺跡・長野県金鎧山古墳例に似る(浜松市博物館編1998,p.78;木下1992)。SG10区SI-64a、時期不明の土坑SG10区SK-254、近世の溝SD-201aにある二重甕の破片と同一個体の可能性も持つ。須恵器甕胴部小片が1片あり(67)、SI-10などで出土している甕と同一個体の可能性がある。

含鉄の鉄滓(74)は、『東谷・中島地区遺跡群』10で権現山遺跡の鍛冶関連遺物全体を報告後に確認したため、同書pp.490-498の鍛冶関連遺物集成図に掲載されていない。編物石はなく、径10cm未満の厚手で三角・四角形状の自然礫が見られた。縄文早・前期と弥生中期の土器片(『東谷・中島地区遺跡群10』第36～38図64・180・181・184、第42図60)や平安時代須恵器(69)も少量混入していた。

第45表 権現山遺跡 SG10 区 SI-50 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復13.4 高 6.2 底 復3.8	外底面はナデで凹底状。外面は体部上位ナデ後に中位以下ナメヘラケズリと口縁部ヨコナデ、全体に縦位(一部は横位)のヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後、上半に横位と下半に縦位のヘラミガキ。	5YR4/6 赤褐 やや緻密 白・透明微粒多、 白粗粒少、白礫微量 やや硬質	東西ベルト東半4層と 北東1層 口1/6周、底5/12周 A-A'東半4層、北東1層
2 土師器 杯	口 10.9 高 残5.4 底 4.3	外底面は多方向ヘラナデで平底状。外面体部はヨコヘラナデで少し光沢あり。内面は下半部ヘラナデ、体部上半ヨコハケ後ヨコナデ、口縁部ヨコナデ。 [注記]159、304、330、5・6層北東区、北東1層、北東区2層	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 白・赤粗～細粒と黒細 粒少 やや硬質	北東床上15～32cmで 接合 口1/3周、底3/4周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 14.8 高 6.5 底 3.5 最大 3.8 重 269.2	外底面はおそらくヘラケズリで凹底状にした後ナデ。外面体部は上位ナデ、中位ヘラナデ、下位ヘラケズリ。内外面口縁部はヨコナデ後内面ヨコヘラミガキ。内面体部ヘラナデ後に疎らなタテヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤礫～粗粒多、白・ 黒・透明粗～細粒やや少 やや硬質	南東隅床上6cmで逆位 完形 231
4 土師器 杯	口 12.6 高 6.2 底 4.4 最大 13.0 重 残238.8	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに凹む形に仕上げる。外面は肩部ヘラナデと体部下半ナメヘラケズリの後に体部上半ヨコヘラミガキ。口縁部内外面ヨコナデ。内面体部は下半部に斜位と上半部に横位のヘラナデ後、縦および横位のヘラミガキ。	7.5YR7/8 黄橙 緻密 白・透明粗粒やや多、 赤粗粒と白・黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上16cmで正位 ほぼ完形 口11/12周、底全周 379



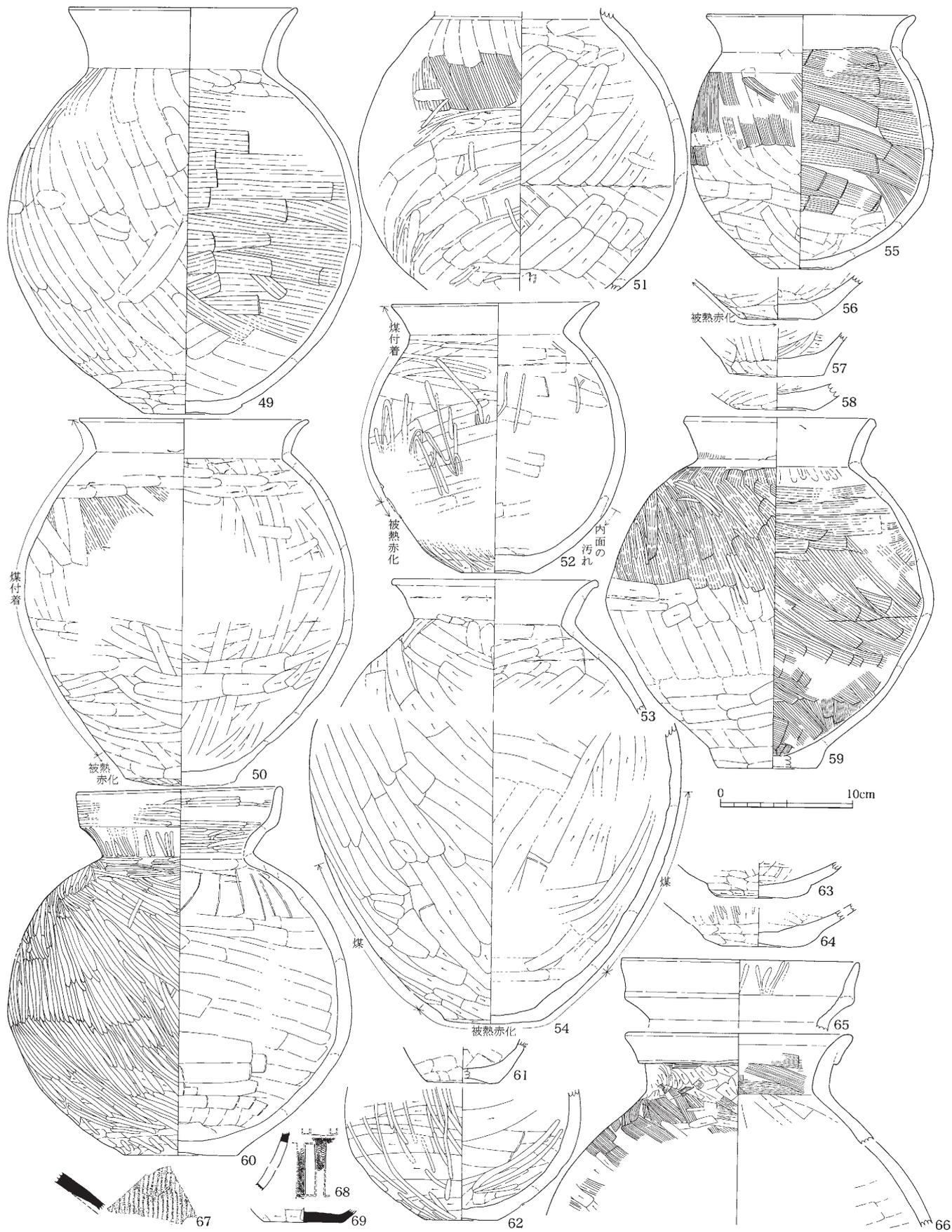
第 82 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-50 (4) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

5 土師器 杯	口 復 11.2 高 7.7 底 3.8 最大 復 11.6	外底面は1方向ヘラケズリで平底状。外面は体部ヨコヘラケズリおよびヨコヘラナデの後に口縁部ヨコナデ、体部ナメヘラミガキ。内面は底部ナデ、体部に斜〜横位ヘラナデ、口縁部ヨコナデの後に体部を疎らにタテヘラミガキ。 [注記]16、18、北東1層、北東区2層	5YR6/8 橙 やや緻密 白・透明粗〜細粒 やや少、赤・黒細粒少 やや硬質	中央床上13〜15cmの2片に北東の2片が接合 口1/6周、底2/3周 注記は左欄
6 土師器 杯	口 復 13.9 高 8.1 底 5.0	やや薄い。外底面は多方向ヘラナデで弱い凸面状。外面は肩部ナメヘラナデ後に体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ後に縦〜斜位ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・黒・透明粗〜細粒多、白・透明礫と赤細粒少 やや硬質	中央南部床上1cm 口1/8周、底全周 341
7 土師器 杯	口 12.3 高 7.0 底 4.5 重 残 269.9	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面体部は上半部にタテナデと下半部に横〜斜位ヘラナデ。内面体部は上位にヨコハケ、中位にヨコヘラナデ、下位〜底面に多方向のヘラナデと粗いヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面底部に10cm大の黒斑あり。	7.5YR6/6 橙 緻密 赤・灰色粗粒と白・透明粗〜細粒と黒細粒少 硬質	中央南部床上3cmで斜位ほぼ完形 体部に小破損 306
8 土師器 杯	口 14.8 高 6.6 底 4.8 重 334.6	外底面は凹底状でナデと軽いヘラナデ。外面体部ナデと下半部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は底部に1〜2方向と体部に横位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 明赤褐 やや粗い 白・黒・透明細粒多、赤・灰色礫〜粗粒少 やや軟質	中央北部床上8cmで逆位完形 353
9 土師器 杯	口 12.3 高 5.8 底 4.0 重 残 213.9	外底面はやや雑な1方向ヘラケズリで平底状。外面口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリで、やや光沢を持つ。内面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラナデ後に疎らな横〜斜位ヘラミガキ。外面体部に10cm大の黒斑あり。	7.5YR7/6 橙 緻密 白・赤粗〜細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南東壁際床上4cmで正位ほぼ完形 口11/12周、底全周 254
10 土師器 杯	口 14.0 高 5.0 底 4.1 重 残 230.3	外底面は凹底状でナデ。外面体部は上位ナデと下位ヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデで、体部上半は磨滅して調整が不詳。外面体部下位に焼成前の浅い刻線「×」がある。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗粒と白・黒細粒少 やや硬質	中央東部床上3cmで正位ほぼ完形 口11/12周、底全周 127
11 土師器 杯	口 復 14.4 高 5.2 底 4.4	外底面は円周方向の雑なヘラケズリで凹凸のある凹底状。外面体部は下半部ヨコヘラケズリと上半部ヨコヘラナデ後にナメヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデと底部多方向ヘラケズリの後にやや不規則なナメヘラミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明細粒多、白・灰色粗粒少 やや硬質	中央北部床上19cm 口1/3周、底2/3周 24
12 土師器 杯	口 16.2 高 5.3	外面体部はヘラナデで、体部上半は少し光沢を持つように仕上げる。外面体部下位は円周方向の雑なヘラケズリで凹凸が多い。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部は磨滅して調整不詳。	5YR5/8 明黄褐 粗い 白・黒・灰色・透明粗〜細粒多、白・灰色礫少 硬質	東中央壁際床上12cm 口7/12周 134
13 土師器 杯	口 12.6 高 4.8 底 5.3	外底面は多方向ヘラケズリで平底状。外面は体部上位ヨコヘラナデと下位ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に体部のヨコヘラナデをやや雑に施し、最後の仕上げ調整を省略したような状況。	2.5YR6/8 橙 緻密 白礫〜細粒と灰色粗粒と透明粗〜細粒少 やや硬質	南東隅床上9cmで横位 口5/6周、底全周 91
14 土師器 杯	口 12.3 高 5.8 底 2.8 最大 13.7	口〜体部境の内面が特に強く内彎する。外底面はナデで少し凹底状。外面体部は下半部ナメヘラケズリと上半部ナメヘラナデ後に口縁部をヨコナデし、外面中位にナメヘラミガキ。内面は口〜体部ヨコナデ後に体部を放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 半透明礫と白細粒やや多、灰色粗粒と黒細粒少 やや硬質	北東床上1cmで正位 口7/12周、底全周 45
15 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 5.5	外面体部はナメヘラナデでやや光沢を持ち、口縁部ヨコナデ。内面は体部に斜位、口縁部に横位と斜位のナデで、部分的に不規則なミガキを行う。稲稈痕が3箇所見られ、うち1箇所は器壁の中に埋没しているため、製作時の粘土に粉が混入されていたと考えられる。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・黒・透明細粒少 硬質	南東床上14〜30cmが接合 口5/12周 212、263、南東区、床直南東区
16 土師器 杯	口 復 15.7 高 5.1	外面は体部上半ナデ後に下半部ヨコヘラケズリ、底部1方向ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデ、全体に疎らで細かいタテヘラナデ。 [注記]60、84、132、263、南東区、床直南東区、北東区2層、A-A' 東半2層、5・6層	2.5YR5/6 明赤褐 緻密 白粗〜微粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南東床上4〜30cm 口7/12周 注記は左欄
17 土師器 杯	口 復 14.6 高 4.0	外面は下半部に多方向ヘラケズリ、上半部に横〜斜位ヘラナデ、口縁部ヨコナデの後、全面に多方向の密なヘラミガキ。内面は底部にナデまたはヘラナデと口〜体部ヨコナデ後、全面を放射状ヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗粒やや多、白粗粒と白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東床上12〜19cmが接合 口1/3周 42、149、北東1層
18 土師器 杯	口 14.2 高 4.6	外面の口〜体部境に弱い稜あり。外面は底部1方向ヘラケズリ、体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤礫〜粗粒多、白粗〜細粒と黒・透明細粒少 硬質	中央東部床上2cm 口2/3周 278、A-A' 東半6層
19 土師器 杯	口 復 14.3 高 4.5 底 4.5 最大 復 14.9	外底面は円周方向のヘラケズリで凹底状。外面は体部ヨコヘラケズリで上半と下半の削る方向が逆になる。内外面口縁部ヨコナデ、内面体部ヘラナデ後、底部に円周方向と体部に放射状のヘラミガキ。内外全面を赤色塗彩する。	2.5YR5/4 にぶい赤褐 やや緻密 白粗〜細粒やや少、黒・透明粗〜細粒少 硬質	南東壁際床上2〜6cmが接合 口1/2周、底全周 242、243、311
20 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 4.2	非常に薄い。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ナデと口縁部ヨコナデ後に体部を疎らな放射状ヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤粗〜細粒と黒・透明細粒少 硬質	貯蔵穴底上7〜9cmと南東区 口1/6周 383、401、貯2層、南東区床下、床直南東
21 土師器 鉢	口 復 7.8 高 残 6.2 最大 復 13.3	内外面ともに体部ヨコヘラナデ後口縁部ヨコナデ、口〜体部に疎らなタテヘラミガキ。焼成前に外面から内面へ径4mmの孔を開ける。外面全面と内面口縁部を赤色塗彩し、孔の内壁には赤色顔料が付着していない。 [注記]174、床直南東区、A-A' 東	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・灰色粗〜細粒少 硬質	南東床直上4片と床上18cm1片と東西ベルト東半1片が同一個体 口1/8周、体1/6周 注記は左欄
22 土師器 高杯	口 復 20.3 高 残 6.2	杯底部外面は外周ヨコヘラケズリ後に放射状ヘラミガキ、杯体部外面はナメヘラナデと口縁部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。内面はおそらく多方向ヘラナデと口縁部ヨコナデの後に、底部多方向と体部斜位のヘラミガキ。	5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗〜細粒多、白粗〜細粒と黒・透明細粒少 硬質	北東床直上〜床上3cmと南東床上7〜9cmが接合 口1/4周、杯底2/3周 50、51、226、230、288、322、323、南東区
23 土師器 高杯	高 残 7.2 脚裾 復 10.2	脚柱部上半が中実になる。外面は脚部タテヘラケズリと脚裾部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は脚柱部タテナデ、脚裾部ヨコヘラナデ後にヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 灰色粗粒と白・赤粗〜細粒と黒細粒少 やや硬質	中央床上2cm。北東1層の1片と接合 脚柱全周、脚裾1/4周 32、北東1層
24 土師器 高杯	口 復 18.2 高 残 5.1	杯部の外底面は横位および放射状のヘラケズリ。外面杯体部ナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデと上部ヨコヘラミガキ。内面は杯体部におそらくヘラナデ後、口縁部ヨコナデ、全体をタテヘラミガキ。	10YR7/6 明黄褐 緻密 赤粗粒と白・黒・透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上29cmと中央東部床上2cmが接合 口1/4周、杯底1/2周 98、268、北東1層
25 土師器 高杯	高 残 6.7 脚裾 13.8	脚部は倒立状態で反時計回りに積み上げる。外面は脚柱部タテヘラケズリと脚裾部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は粘土組織み上げ痕を残したままユビオサエシ、脚裾部にヨコナデ。	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 白礫〜細粒と赤粗粒と黒・透明細粒やや少 やや硬質	北東床上7cm 脚裾3/4周 367

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

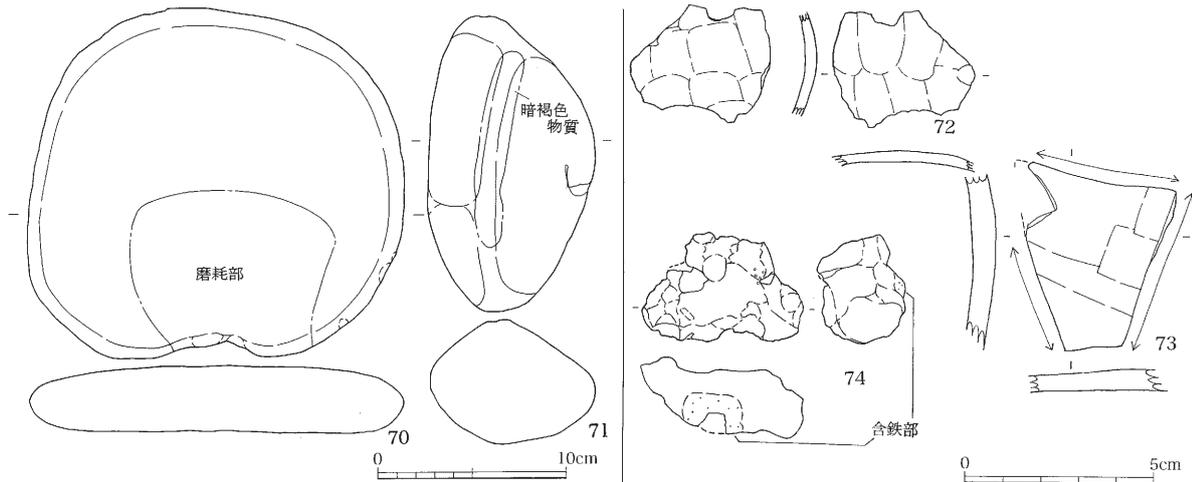
26 土師器 高杯	高 残 6.6 脚裾 復 10.3	脚柱部外面タテヘラミガキ。脚裾部外面はヨコナデと見られるが、磨滅して不明確。脚柱部内面は紐積み痕がなく、中央で脚柱をつぶしてその上下には粘土の縦皺が生じる。脚柱下端内面ヨコヘラズリ、脚裾部内面ヨコナデ。	7.5YR8/6 浅黄橙 緻密 白粗～細粒と赤・黒・ 透明細粒少 軟質	北東隅床上 28cm 脚柱全周、脚裾 1/4 周 157、北東 1 層
27 土師器 高杯	口 復 20.0 高 残 7.5	外面は脚柱部上端と杯底部にタテハケ後、杯底部にヨコヘラズリ。外面杯体部に斜～横位ハケ調整後にナデ消して口縁部をヨコナデし、杯体部ナメヘラミガキ。内面杯体部にヘラナデ後、口縁部をヨコナデし、杯体部タテヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明細粒少 やや硬質	南東床上 8cm～20cmで 接合 口 2/3 周 106、115、215、東壁 中央遺物集中地点、東 壁南半粘土中
28 土師器 高杯	高 残 5.7 脚裾 推 14.0	外面は丁寧なタテヘラナデ。内面は脚柱部に横～斜位のヘラズリとヘラナデ、脚柱部ヨコナデ。 [注記]136、北東区 1 層、北東区 2 層、北東隅	5YR5/8 明黄褐 やや粗い 白・赤粗～細粒と 黒・灰色・透明細粒やや多 硬質	東端床上 13cmの 1 片と 北東部 5 片が接合 脚柱下端全周 注記は左欄
29 土師器 高杯	高 残 6.9	外面脚柱部はタテヘラナデで、ミガキの有無は不明確。脚内面は倒立状態で反時計回りの積み上げ痕をナメナデおよびヨコナデ。杯部内面はヘラナデ(?)で平坦にしている。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤礫と白・赤・灰 色粗～細粒やや多、黒・透明 細粒少 やや硬質	北東床上 7cmの 2 片が 接合 脚柱 1/2 周 352、371
30 土師器 高杯	口 17.8 高 残 5.8	外底面中央の脚部剥離痕は、中央部を最後に塞いだか、または筒状の脚部を杯底面に積み上げた痕跡を示す。杯部外底面は放射状ヘラナデ後に外周ヨコヘラズリ、杯部外面ナメヘラナデと口縁部ヨコナデ後に下端部を横～斜位ヘラズリ。内面は杯体部ヘラナデ後に口縁部ヨコナデ、底部に多方向と体部に斜位のヘラミガキ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒粗～細粒と 透明細粒やや少、白・灰色礫 少 やや硬質	北東隅床上 29cmで逆位 杯部完存 口全周 160
31 土師器 高杯	高 残 6.2	外面は脚裾部ヨコナデ後、脚柱と脚裾にタテヘラミガキ。内面は粘土紐を積み上げながら、または積み上げた後に脚柱部ヨコヘラズリ、脚裾部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒粗～細粒と 透明細粒少 やや硬質	北東床上 17cm 脚柱全周 48
32 土師器 高杯	高 残 6.8	外面は杯底部ナメヘラナデ、杯体部ヨコヘラナデと推定され、脚柱部はタテヘラミガキ。内面は脚柱部ナメナデ、杯底～体部に多方向ヘラナデ。	7.5YR7/8 黄橙 やや緻密 白・黒・透明粗～細粒やや多、 赤粗粒少 やや軟質	南東床上 17cm 杯底 1/4 周、脚柱全周 74
33 土師器 高杯	口 復 19.1 高 残 3.7	外面はナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面はヨコヘラナデと思われるが残りが悪く不明瞭で、口縁部ヨコナデの有無も不詳。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・透明礫と白・ 黒粗～細粒やや多 やや軟質	南東隅床上 27～35cm が接合 口～体 1/5 周 99、236
34 土師器 高杯	口 復 21.5 高 残 6.9	外底面を放射状ヘラナデ、杯部上位ヘラナデと中～下位ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ。内面は中位以下にヘラナデと上位ヨコナデの後に放射状ヘラミガキ。	5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、 白・赤微粒少 硬質	南東 1 層 4 片に北東の 2 片が接合 口 1/6 周、杯底 7/12 周 南東区 1 層、北東上面、 北東 1 層
35 土師器 高杯	高 残 8.4	外面は密なタテヘラミガキ。内面は倒立状態でおそらく反時計回りに積み上げた痕を残し、上部にナデと裾部にヨコナデの後、中位にヨコヘラズリ。 [注記]221、222、253、315、381、東壁中央遺物	5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒と黒細粒や やや少、白・透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 5～25cmと 南東床直上～床上 3cmが 接合 脚柱全周 注記は左欄
36 土師器 高杯	口 復 14.7 高 残 3.8	杯部外底面はヨコヘラズリ、杯体部外面全体をヨコナデ後にタテヘラミガキ。杯体部内面全体をヨコナデ後にナメヘラミガキ。	10YR5/3 にぶい黄褐 緻密 白・黒・透明細粒やや 少、白粗粒と赤粗粒少 硬質	中央北部床上 13cmと北 東 1 層が接合 口 1/6 周、杯底 5/12 周 25、北東 1 層
37 土師器 高杯	高 残 6.1	杯底部外面はおそらくタテヘラズリ、脚部外面タテヘラミガキ。脚部内面は倒立状態で粘土紐を積み上げた痕をよく残す程度のユビオサエと裾部ヨコナデ。脚上端は粘土塊を充填して閉塞する。	2.5YR6/6 橙 緻密 白・赤粗～細粒と黒細 粒少 硬質	南東床上 24cm 脚 3/4 周 75
38 土師器 高杯	口 復 20.7 高 残 3.2	外面は 8 本/cmのタテハケ後、口縁部をヨコナデする範囲が狭い部分が多い。内面は 3～4 本/cmのヨコハケで、口縁部のヨコナデは端面だけに行う。 [注記]172、南東区、東壁中央遺物集中地点、北東 1 層、床直南東区	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒細粒やや多、 白・赤粗粒と透明細粒少 やや軟質	南東床上 17cm。他に南 東に 4 片、北東に 1 片 口 5/12 周 注記は左欄
39 土師器 高杯	口 復 18.7 高 残 6.5	外面杯底部は横位後放射状のヘラズリ。外面杯体部は、下端がやや直立するところを始点にして主に縦位ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ、杯体部全体に疎らなタテヘラミガキ。内面は多方向ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。杯体部に疎らなナメヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒粗～細粒や やや少、灰色粗粒と透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 29cmの 2 片 に南東区 1 片が接合 口 1/36 周、杯底 1/3 周 394、南東区
40 土師器 高杯	高 残 9.4 脚裾 14.1	外面は脚部ナメナデ後に裾部ヨコナデ、脚全体をタテヘラミガキ。内面は倒立状態で反時計回りの積み上げ痕を残し、ユビオサエと裾部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤礫～細粒と 黒・透明細粒少 やや硬質	南西床直上で横位 脚柱全周、脚裾 1/2 周 2
41 土師器 高杯	高 残 7.0 最大 残 6.2	外面は脚柱部と杯底部をタテヘラズリ後、脚部中～下位タテヘラナデ。脚部内面は輪積み状に成形して接合痕をかなりよくナデ消し、裾部内面ヨコナデ。杯底部内面は多方向ヘラナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・透明粗～細粒 やや多、赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	北東床上 20cm 脚柱全周 107
42 土師器 小形壺	口 9.8 高 15.7 底 3.9 最大 17.0 重 残 583.3	外底面は円周方向のヘラズリでわずかに凹底状。外面胴部はヘラナデと下端部ヨコヘラズリで、ヘラミガキも行くと見られるが、非常に不明瞭。内面は底部に横位のヘラナデとヘラズリ、胴部ヨコヘラナデ、肩部は粘土積み上げ痕を残すナデ。内外面口～頸部ヨコナデで、タテヘラミガキをしているかもしれないが不明確。	5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒 と白・赤・灰色細粒少 やや軟質	南西隅床上 7cmで横位 ほぼ完形 口全周、底全周 1
43 土師器 小形壺	高 残 9.3 底 3.6 最大 14.9	外底面は 1 方向ヘラズリで上げ底状。体部外面は下位をヨコヘラズリ後に上～中位をヨコヘラナデ。内面は底部に多方向と体部下半に斜位のヘラナデ、体部上半はナデとユビオサエで粘土紐積み上げ痕を残す。外底面以外の外面全体と内面頸部は酸化気味の焼成によって赤く発色する。 [注記]228、252、390、393、貯蔵穴一括	5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 黒・灰色粗～細粒 多、白・赤・透明細粒と白色 針状物質少 やや硬質	南東床直上。床上 12cm の 1 片と貯蔵穴底上 20 ～21cmの 2 片が接合 肩 5/6 周、底全周 注記は左欄
44 土師器 小形壺	口 6.4 高 9.5 底 3.7 重 322.7	外底面は円周方向のヘラズリで平底状にする。外面体部は下半部ヨコヘラズリと上半部ヨコヘラナデ。内面体～底部はナデまたはヘラナデで、肩部は粘土紐積み痕を残す程度のナデとユビオサエ。内外面口～頸部ヨコナデ。底部が厚いため乾燥時に内面に亀裂が深く生じているが、外面まで貫通はしていない。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 透明粗～細粒やや 多、白・黒粗～細粒少 やや硬質	貯蔵穴底直上で横位 完形 378
45 土師器 小形壺	口 復 5.8 高 残 5.8 最大 9.7	外面は体部上半に密なヘラミガキ。口～頸部ヨコナデ後に図示した 4 本 1 組のタテヘラミガキ。内面は体部下半ナデ、上半は粘土紐積み上げ痕を残してユビオサエ。口～頸部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。	2.5Y6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と黒細 粒やや多 やや硬質	中央床上 2cmと東西ベル ト東半が接合 口 5/12 周、頸 3/4 周 348、A-A' 東半 4 層
46 土師器 小形壺	口 6.5 高 推 10～ 底 3.4 最大 9.5	外底面と外面体部下端はヘラズリで平底状にする。外面体部上～中位にヨコヘラナデ。内面底部は粘土小塊が盛り上がった凹凸状のまま調整せず、体部下半ヨコヘラナデ、肩部タテナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒 多、白・赤粗粒少 軟質	南東床上 3cmで横位 口～肩全周、胴 1/3 周 93、南壁、南東区



第83図 権現山遺跡 SG10区 SI-50(5) 遺物

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

47 土師器 小形甕	口 復 14.6 高 残 8.4 最大 15.2	外面は胴部ヨコヘラケズリと口～頸部ヨコナデ、肩部に疎らなヨコヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデ後に疎らなヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。外面は下半部が被熱赤化、上半部に多量の煤が付着。内面は胴部が汚れた破片が見られるが、汚れない破片もある。 [注記]121、188、229、232、395、南東区、北東区2層、北東1層、床直南東区、入口P1層	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と白細 粒多、黒・透明細粒少 硬質	東部床土0～22cmの4 片と入口施設床土2cmの 5片 口1/3周、頸1/2周 注記は左欄
48 土師器 甕	口 15.2 高 残 7.2	肩部内外面ヨコヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面の表裏対応する位置に2箇所ずつの鋭い刺突痕が焼成前に付けられ、その位置の口縁部も少し歪む。小動物が噛んだ痕かもしれないが断定はできない。外面の残存部全体に煤が少量付着する。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白・黒細粒やや多、白 礫と赤・透明粗～細粒少 硬質	南東隅床土14cmで正位 口2/3周、頸全周 94
49 土師器 甕	口 16.9 高 底 30.7 底 6.4 最大 26.3	外底面は1方向ヘラケズリで平底。外面胴部はナメヘラナデでかすかにハケメ風の条が見える。外面胴下位をナデた後に胴下端が少し外に突出していた部分をヨコヘラケズリ。内面胴部は下位をナメヘラナデ、中位以上を浅いヨコハケ、肩部をナメヘラナデ。内外面の口～頸部をヨコナデ。被熱痕はなく、胴下半外面は約1/3が大きな黒斑。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・赤・透明 粗～細粒やや多、白礫少 やや硬質	南壁際床直上～床土14 cmが接合 ほぼ完形 口全周、胴 2/3周、底全周 237、239、244、245、250、 307、308、309、310
50 土師器 甕	口 復 17.1 高 27.1 底 8.2 最大 24.5	外底面は多方向ヘラケズリで凸面状。外面は胴下半に斜位の浅いハケ後ヘラナデ、胴下半にナデとヘラナデ後、一部にヨコヘラケズリ、肩部ナデと口縁部ヨコナデ。内面は斜位と横位のヘラナデ後に下位ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。外面底部が被熱し、口～胴部に煤付着。内面のコゲは見られない。 [注記]163、175、176、178～180、182～185、188、201、206、207～209、213、215、217、257、南東区、東壁中央遺物集中心地点	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 白粗～細粒多、透 明粗～細粒と赤・黒細粒少 やや軟質	南東床土9～31cm 口2/3周、胴一部欠、 底全周 注記は左欄
51 土師器 甕	高 残 21.1 最大 復 24.5	外面は胴下半に斜位のヘラケズリ後ヘラナデで、ヘラの角が当たった線状痕を多く生じている。胴上位に斜位のハケとヘラナデ、頸部ヨコナデ。内面胴部ヨコヘラナデ後ナメヘラケズリ、頸部ヨコナデ。外面が被熱しているかもしれないが不明確。 [注記]106、117、171、275、405、南東区、東壁中央遺物集中心地点	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤・透明粗粒 やや多、白・黒・赤細粒少 やや軟質	南東床土10～25cm。 P8西貼床中の1片も接 合 頸1/12周、胴1/3周 注記は左欄
52 土師器 小形甕	口 15.5 高 底 20.3 底 5.0 最大 19.1 重 残 1294	外底面は多方向ヘラケズリ後、丁寧にヘラナデして光沢を持つ。外面は胴部に縦位と肩部に横位のナデ、中位以下にヨコヘラケズリ、中～下位にナメヘラミガキ。内面はヨコヘラナデ後に疎らなタテヘラミガキで、中位以下は剥落して調整不詳の箇所が多い。内外面口縁部ヨコナデ。外面下位がよく被熱して、中位以上に煤と吹きこぼれ痕が多く、内面下位が汚れている。 [注記]354～356、358、360、361、366、368～370、南東区、北東区1層	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 赤粗～細粒と白・ 黒細粒多、白・灰色礫少 硬質	北東床土4～10cmで接 合 ほぼ完形 口全周、胴 11/12周、底全周 注記は左欄
53 土師器 甕	口 復 15.4 高 残 10.0	外面は肩部ナメヘラナデ後に胴部ナメヘラケズリ。内面は肩部ヨコヘラナデおよびナデで粘土紐痕を残し、胴部ナメヘラケズリ。内外面の口縁部をヨコナデし、口縁部外部が少し肥厚する。外面胴部に焼成時の黒斑を残す箇所がある。	7.5YR7/8 黄橙 やや粗い 赤粗～細粒多、赤 礫と白・黒・透明細粒少 硬質	北東隅床土3～19cmで 接合 口1/4周、頸5/12周 290、291、297
54 土師器 甕	高 残 22.8 底 7.3	外底面は多方向ヘラケズリで中心に向かってなだらかに突出。外面胴部は斜上方と斜下方にヘラケズリ。内面胴部はヨコヘラナデ後にナメヘラケズリ。外面底部の被熱痕と胴部の煤が明瞭で偏って見られる。内面の汚れは見られない。	10YR7/4 にぶい黄橙 粗い 白・黒・透明粗～細粒 多、白・灰色礫少 やや軟質	北東床土9cm 胴中位1/4周、底全周 351
55 土師器 小形甕	口 15.7 高 底 19.2 底 4.6 最大 18.2	外底面は雑にナデでから外周に粘土を足して凹底状にする。外面胴部は中位ナメナデ後に下位ヘラケズリと上位を浅いタテハケ。内面胴部は底部に多方向ヘラナデ後、上～中位にナメヘラケ。内外面口縁部と外面肩部ヨコナデ。明確な被熱・使用痕はない。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 と黒細粒やや多、赤粗粒少 やや軟質	南東床土12～16cm 口2/3周、胴3/4周、 底全周 190、204、埋土中、南 壁中
56 土師器 甕	高 残 3.5 底 5.7	外底面は2方向程度の雑なヘラケズリ、外面胴部下端は右方向、それより上は左方向のヨコヘラケズリ。内面は底部外周ヨコヘラナデ、胴部タテヘラナデ。外面は被熱赤化。	7.5YR4/6 褐 粗い 白・透明粗～細粒多、 赤・黒細粒少 硬質	貯蔵穴底土2cm 底全周 380
57 土師器 甕	高 残 3.5 底 7.2	外底面はごく弱い凸面状で、おおむね1方向のヘラケズリ。外面胴部タテヘラナデと胴下端ナメヘラケズリ。内面は多方向ヘラケズリ。内外面のヘラケズリはやや光沢を持つように丁寧に施す。外面が被熱しているかもしれないが不明確。	10YR4/1 褐灰 やや緻密 白・赤粗～細粒多、 透明粗粒少 硬質	南東床土2cm 底全周 265
58 土師器 甕	高 残 2.1 底 5.7	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。ヘラケズリする前には木葉痕が付いていた可能性がある。外面胴部はナメヘラナデ。内面底部は多方向の雑なヘラナデ。外面が被熱している可能性があるが、あまり明確ではない。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 黒・透明粗～細粒 やや多、白粗粒と赤粗粒少 硬質	北東床土15cm 底全周 29
59 土師器 甕	口 14.2 高 26.5	外底面は多方向ヘラケズリ後にナデ。外面は胴部下位と中位の積み上げ休止面を境にして変わり、下位がナデ、中位がタテヘラナデ後ヨコヘラケズリ、上位がナメヘラケ後に疎らなヘラミガキ。内面はハケメで、胴部下位の積み上げ休止面で方向が変わる。頸部内面ユビオサエ、口縁部は外面タテハケと内面ヨコハケ後に内外面ヨコナデ。被熱・使用痕は見られない。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白粗～細粒と黒細 粒多、白礫と黒粗粒と透明細 粒少 やや硬質	南東床土6～32cm 口～肩全周、底1/2周 176、189、190、191、 192、194、197カ、198、 200、205、206、208、 209、211、214、北東 1層、南東区、東壁中央 遺物集中心地点
60 土師器 壺	口 15.4 高 底 27.6 底 8.6 最大 25.5	二重口縁状で外面の口～頸部境の稜が明瞭。外底面は多方向ヘラケズリでわずかに中央が凹む。外面胴部は下端ナデと中～上位斜位ヘラケズリ後に斜位ヘラケズリ。内面は底部付近に縦位と胴部に横位のヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ後ヘラミガキ。 [注記]19、27、61、72、170、325、349、350、350カ、362、372、373、北東区1層、北東区2層、A-A'東半4層	7.5YR7/8 黄橙 緻密 白礫と赤粗粒と白・黒 粗～細粒と透明細粒少 やや硬質	中央床土4～10cm、北 部床土5cm、南部床土 15cm、南東床土9cmが 接合 口2/3周、底全周 注記は左欄
61 土師器 壺	高 残 3.4 底 復 5.3	丸味を持つドーナツ状の凹底で、中央部ナデ後に底面外周を円周方向のヘラケズリ。外面胴部は横位のナデ。内面はヨコヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・黒・透明 細粒少 やや硬質	北東1層 底5/12周 北東1層
62 土師器 壺	高 残 10.0 底 5.3 最大 17.5	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに上げ底状。外面胴部ヨコヘラケズリ後にタテヘラミガキ。内面胴部は横～斜位のヘラナデ後に疎らなナメヘラケズリとナメヘラミガキ。被熱使用痕は見られない。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤・透明粗～細粒 多、白・灰色粗～細粒やや多、 灰色礫と黒細粒少 やや硬質	南東隅床直上～床土33 cmが接合 胴下半1/4周、底2/3 周 109、110、256
63 土師器 大形壺	高 残 2.7 底 6.2	外底面は多方向の粗いヘラケズリ。外面胴部ナデ後に胴下端ヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向ヘラナデ後、胴部下位にヨコヘラケズリ。被熱痕は見られない。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明細粒少 硬質	北東床土14cmと東西ベ ルト東半6層が接合 底2/3周 142、A-A'東半6層



第 84 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-50 (6) 遺物

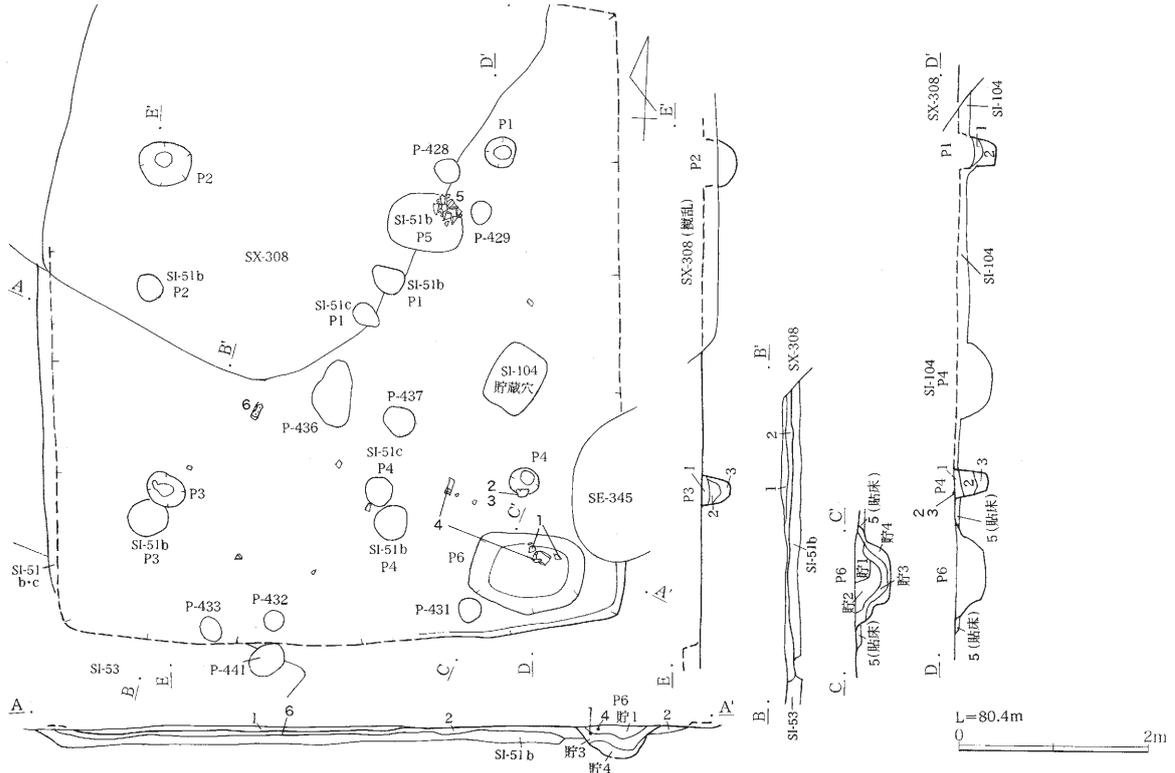
64 土師器 大形壺	高底 残 3.2 8.2	外底面は中央が凹み、ナデ。外面胴部下端ナデ後に胴部タテヘラケズリとタテヘラミガキ。内面胴部ヨコヘラナデ。外面底部外周がかなり磨耗して丸味を帯びている。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白粗粒と黒粗～細粒と透明細粒やや多、赤粗～細粒少 やや硬質	南東隅床直土 底 3/4 周 233
65 土師器 大形壺	口復 17.5 高 残 5.3	二重口縁状で外面ヨコナデ。内面はヨコナデ後に口縁部タテヘラミガキで頸部調整は剥落して不明。煤や被熱痕は見られない。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白・黒・灰色粗粒と黒細粒やや少、透明粗～細粒少 やや硬質	南東隅床上 2cm で接合 口 1/3 周 223、224
66 土師器 大形壺	口復 12.5 高 残 13.2	外面は胴部と頸部にナナメハケ後ナメヘラケズリ。口縁部はヨコハケ後に口縁部粘土帯を貼り付けてヨコナデ。内面胴部はナメヘラナデ、頸部ヨコハケ、口縁部ヨコナデ。 [注記]43、152、168、北東 1 層、北東スミ、B-B' 南、21-17.5 表土	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒と白細～微粒多、赤礫少 やや硬質	北東床上 9～23cm 口 1/6 周、頸 1/2 周 注記は左欄
67 須恵器 甕	高 残 4.0	外面は縦位の平行叩き。内面は無文。SI-10 等で出土した甕片と同一個体の可能性あり。	5PB6/1 青灰 やや緻密 白粗～細粒多 硬質	南東区 1 層 胴部 1 片 南東区 1 層
68 須恵器 二重甕	高 残 4.3 最大 復 12 ～16	体部中位に 1mm 幅の低い突線を持ち、その下側に 5 歯の工具で右から左へ向かって櫛描波状文を回転施文する。体部上半と下半にそれぞれ長方形の透窓が横方向に並ぶ。透窓の長さは約 4cm で幅は不明。2 片が同一個体と考えられる。	5Y5/1 灰 緻密 白細粒微量 硬質	床直上と南東部貼床中 に各 1 片 体 1/24 周 403、床直
69 須恵器 杯	高底 残 1.0 復 6.0	外底面は 1 方向ヘラケズリで平底。外面体部下端に横位の手持ちヘラケズリ。内面は回転ヨコナデ。平安時代前半の茨城県三和窯跡群の製品が混入。	2.5GY6/1 オリーブ灰 やや緻密 白細粒少 硬質	南東隅床上 39cm で正位 底 5/12 周 105
70 石器 石皿	長幅 19.4 19.6 厚 3.9 重 2345.3	両面が平坦で、厚さが均一な板状の自然石をそのまま利用。加工・被熱痕は見られない。片面の中央よりも片側に寄った部分が、図示した範囲で少し磨耗している。ただし、凹んだような状況は認められない。	2.5Y7/2 灰黄 やや緻密で硬質な安山岩	南壁際床上 5cm 完形 39
71 礫	長幅 15.5 8.8 厚 7.0	断面が不整四角形で棒状の自然礫。加工・使用・被熱痕は見られない。図中央に示した稜線は暗褐色の汚れが付着して煤かもしれない。重量 984.6g。	2.5Y7/2 灰黄 緻密で硬質な流紋岩	炬 2 付近床上 1cm 完形 264
72 土師器 不明		厚さ 1.5～2.5mm の非常に薄い土器片。内外面ともにナデ調整。やや還元炎焼成気味で灰色味を帯びている。	2.5Y7/2 灰黄 やや粗い 白礫微量 やや軟質	入口施設内 入口 P1 層
73 土師器 研磨具	長幅 残 4.9 残 3.9 厚 0.7 重 残 12.3	土師器甕の胴部破片を転用。長い 3 辺の破断面を研磨に用いて平坦に磨耗している。土器としての上下方向は図の横方向で、内外面調整はヘラナデ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒と黒細粒少 やや軟質	埋土中 埋土中
74 腕形鍛冶滓 (極小、 含鉄)	長幅 4.2 2.9 厚 2.3 重 残 25.0	平面が隅切三角形の極小で含鉄の腕形鍛冶滓。上面は緩く凹み、一部に錆色を生じる。下部中央が含鉄部で磁着が強く、錆色が目立つ。滓質は密度が高く、上面の一部に少しだけ気孔が見られる。鍛冶関連遺物構成 No なし。	表 黄褐色 地 濃茶褐色 磁着度 4 メタル度 未測定	ほぼ完形 南西区 1 層

SG10 区 SI-51a (第 85 図、写真図版 94・95)

[名称] SI-51c → SI-51b → SI-51a の順に拡張した最終期の建物である。調査時には SI-51b・51c を「SI-109 新期・古期」、SI-51a を「SI-51」と呼称し、整理時に改称した。b・c 期より大きく西壁位置が異なる a 期を別の建物と考えて《(SI-51c → 拡張 → SI-51b) → 埋没 → SI-51a を新築》と理解できる可能性もある。

[位置] SG10 区中央部の 19-18 グリッド。SI-51b を北東側へ拡張建替したと考えられる。同じく古墳後期の建物は、西と北に SI-45・47・58、南に SI-34 がある。古墳中期の SI-53・104 と古墳時代の P-436・437 を切る。攪乱の可能性が高い SX-308 と、時期不明の SE-345 と P-429・432・433 に切られる。北東と南端にある時期不明の P-428・431・441 との新旧関係は不明確だが、これらに切られる可能性がある。

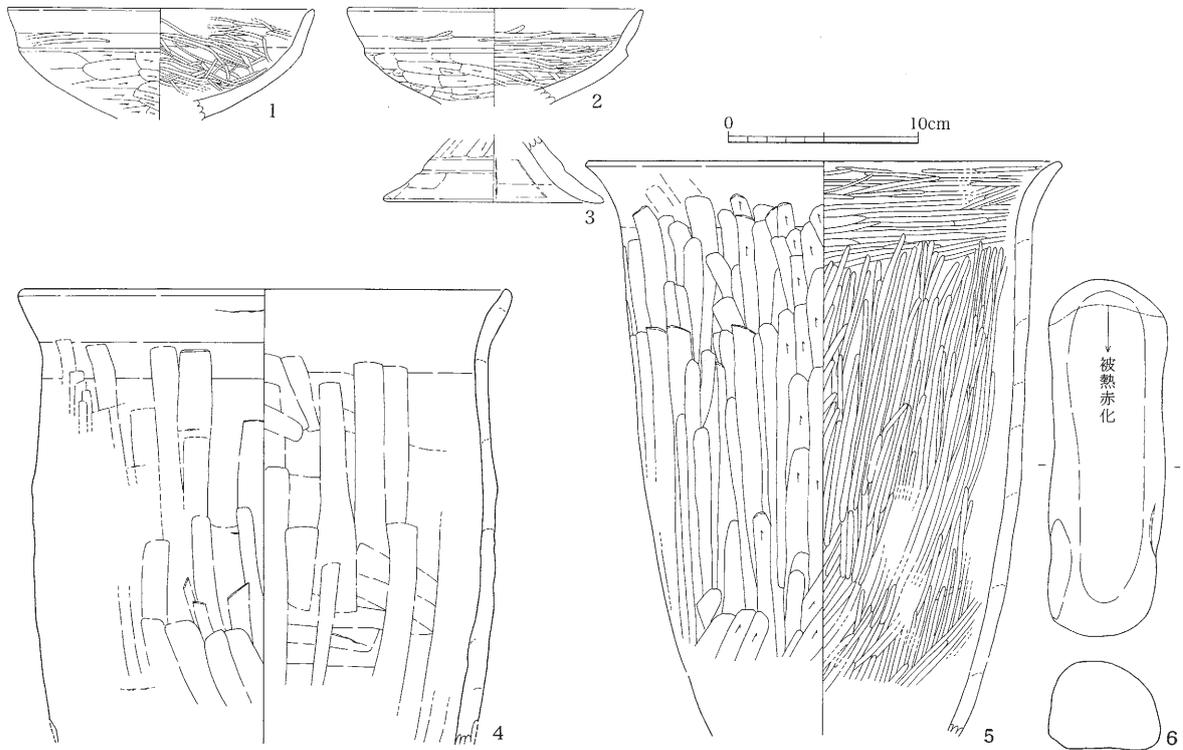
[規模と形状] 方形と推定され、南壁部と支柱穴 4 本と貯蔵穴を確認した。主軸方位は GN-0° 30' -W。支柱穴から四壁までの距離が一定だと仮定した場合、推定規模は東西 5.8 × 南北 7.1m に復元される。残存



SG10区SI-51a

- 1 暗褐色 ローム小塊・粒と焼土小塊極微量。しまりやや強。
- 2 暗褐色 ローム小塊少、ローム粒・炭化物微量、焼土小塊極微量。しまり強。貼床。
- P1 1 暗褐色 ローム粒・炭化物微量、ローム小塊・焼土小塊極微量。しまり強。
- 2 褐色 ローム粒少、ローム小塊微量。しまり強。
- P3 1 暗褐色 ローム小塊・粒と焼土小塊微量、炭化物極微量。しまり強。
- 2 暗褐色 ローム小塊・粒と炭化物極微量。しまり強。
- 3 褐色 ローム粒少、ローム小塊・炭化物微量、焼土小塊極微量。しまり強。

- P4 1 暗褐色 ローム粒極微量。しまりやや強。
- 2 暗褐色 ローム小塊・粒微量、炭化物極微量。しまりやや弱。
- 3 暗黄褐色 ローム小塊・粒多。しまりやや強。
- P6 貯1 黒褐色 焼土小塊微量、ローム粒・炭化物極微量。しまり強。
- 貯2 茶褐色 焼土小塊微量、ローム小塊・炭化物極微量。しまり強。
- 貯3 暗褐色 ローム粒・焼土小塊、炭化物極微量。しまり強。
- 貯4 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、炭化物極微量。しまりやや強。
- 5 暗褐色 ローム小塊・ローム粒微量。しまり強。貼床。(竪穴2層に対応)



第85図 権現山遺跡 SG10区 SI-51a 遺構・遺物

第 46 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-51a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	口 復 15.0 高 残 5.5	外面は口縁部ヨコナデ後に杯体部ヨコヘラケズリ、口縁部に少しヘラミガキ。 内面は杯体部下半に多方向と上半へ口縁部に斜へ横位のヘラミガキ。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 と黒細粒やや多、赤粗粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 20～24cm が同一個体 口 1/3 周 SI-51 1、3
2 土師器 高杯	口 15.5 高 残 5.1	外面は体部上端ナデ後に口縁部ヨコナデ、体部の上端以外をヨコヘラケズリ、 口縁部に少しヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ、杯体部にヨコヘラミガキ。 3 と同一個体の可能性あり。	5YR4/1 褐灰 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや多、白礫と赤粗粒と黒細 粒少 やや硬質	P4 上面の上方 1cm 口 1/2 周 SI-51 10
3 土師器 高杯	高 残 3.6 脚裾 復 11.5	外面は脚柱部タテヘラケズリ、脚裾部は雑なナデ後に軽いヨコナデ。内面は 脚柱部ヨコヘラナデ、脚裾部ヨコナデ。2 と同一個体の可能性あり。	2.5Y7/3 浅黄 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや多、白礫と赤・黒細粒少 やや硬質	P4 上面床上 1cm 脚裾 5/12 周 SI-51 10
4 土師器 甌	口 復 26.0 高 残 23.9	外面は口～頸部ヨコナデ後に胴部タテヘラナデ(または軽いタテヘラケズリ)。 内面は胴部ヨコヘラナデと口～頸部ヨコナデ後に胴部タテヘラナデ。内外面 のヘラナデは平滑でわずかに光沢を持つ。 [注記]SI-51 2、9、東部一括、SI-51・109 一括、SE-345 10 層	7.5YR7/6 橙 緻密 赤粗粒と白・黒・透明 細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 29cm と南東 床上 3cm が接合。 SE-345 に 1 片混入 口 1/4 周、胴 1/6 周 注記は左欄
5 土師器 甌	口 25.0 高 残 30.4	外面は口縁部ヨコナデ後に胴部タテヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に ヨコヘラミガキ、胴部に密なタテヘラミガキ。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 白・透明粗～細粒 多、灰色礫と赤・黒細粒少 やや硬質	北東床上 10cm 口 3/4 周 SI-51 12、S-308 東南、 SI-104 南西一括
6 石器 編物石?	長 18.9 幅 6.2 厚 4.7	断面が不整形で棒状の自然の河原石をそのまま利用。ほぼ全面がよく被熱 して赤～桃色に変色している。図の上端部はあまり被熱していない。加工・ 使用痕は見られない。重量 825.7g。	2.5Y5/2 暗灰黄 緻密で硬質な流紋岩	中央床上 6cm 完形 SI-51 6

壁高は南西部で 7cm、南東部で 3cm。主柱穴は a 期 P1～P4 で、柱間は南北 3.50m、東西 3.58m (北側)～3.80m (南側)。底面形からみて柱径は 15～20cm 程と推定され、床からの深さは南東の P4 が 30cm、北西の P2 が 45cm、P1 と P3 が 40cm。北西 P2 から東側へ幅 10cm 程の溝状に床面が窪んでいたが、SX-308 による攪乱と判断した。入口施設は不明。南東隅の貯蔵穴 P6 は東西 118×南北 85×深さ 29cm。確実な間仕切溝や壁溝はない。貼床は暗褐色土で、貼床土としてはロームが少ない(断面の 2・5 層)。

[火処] 不明である。古墳後期後半の建物なのでカマドを北壁に持っていたことを想定できるが、北壁付近は SX-308 に破壊されている。

[覆土] 1 層だけが薄く南西部に残っている。a 期貯蔵穴 P6 の堆積層は自然埋没と考えられる。テフラの層や粒などは認められない。2 層(貼床)よりも下層にある SI-51b の覆土がやや厚いので、同じ床面レベルのままで壁部を広げたのではなく、SI-51b の初期埋没土層の上に少し高い床面を作り直したと考えられる。SI-51b 覆土層の全体を SI-51a の貼床土層と解釈することも可能である。

[遺物出土状況] 覆土層が残っていたのは主に南東部なので、遺物も南東部を中心として出土した。南西部と北東部の床面がやや低いところに残った遺構覆土中に土師器が少量ある(1～4)。遺構の残りが浅いので、貯蔵穴埋土上方の遺物(1 と 4)以外は床面から 10cm 以内にある。残存度が大きい甌(5)は、拡張前の b 期建物の貯蔵穴(SI-51b の P5)よりも上方にあり、SI-51a の床面から 10cm 浮く。

[出土遺物] 遺物は少なく、甌・高杯が目立つが、それ以外の器種は杯体部や長胴甕の破片が僅かにある。高杯の杯部と脚部(2 と 3)は同一個体の可能性があり、杯部破片の 1 と 2 は同工品である。甌(5)は残存度が大きい。図示以外の土師器合計 178 片・1,429g の内訳は、杯 30 片・175g、高杯 3 片・25g、壺甕類 142 片・1,170g、甌 3 片・59g。須恵器は古墳中期の甕胴部小破片が 1 点混入していただいだけである。

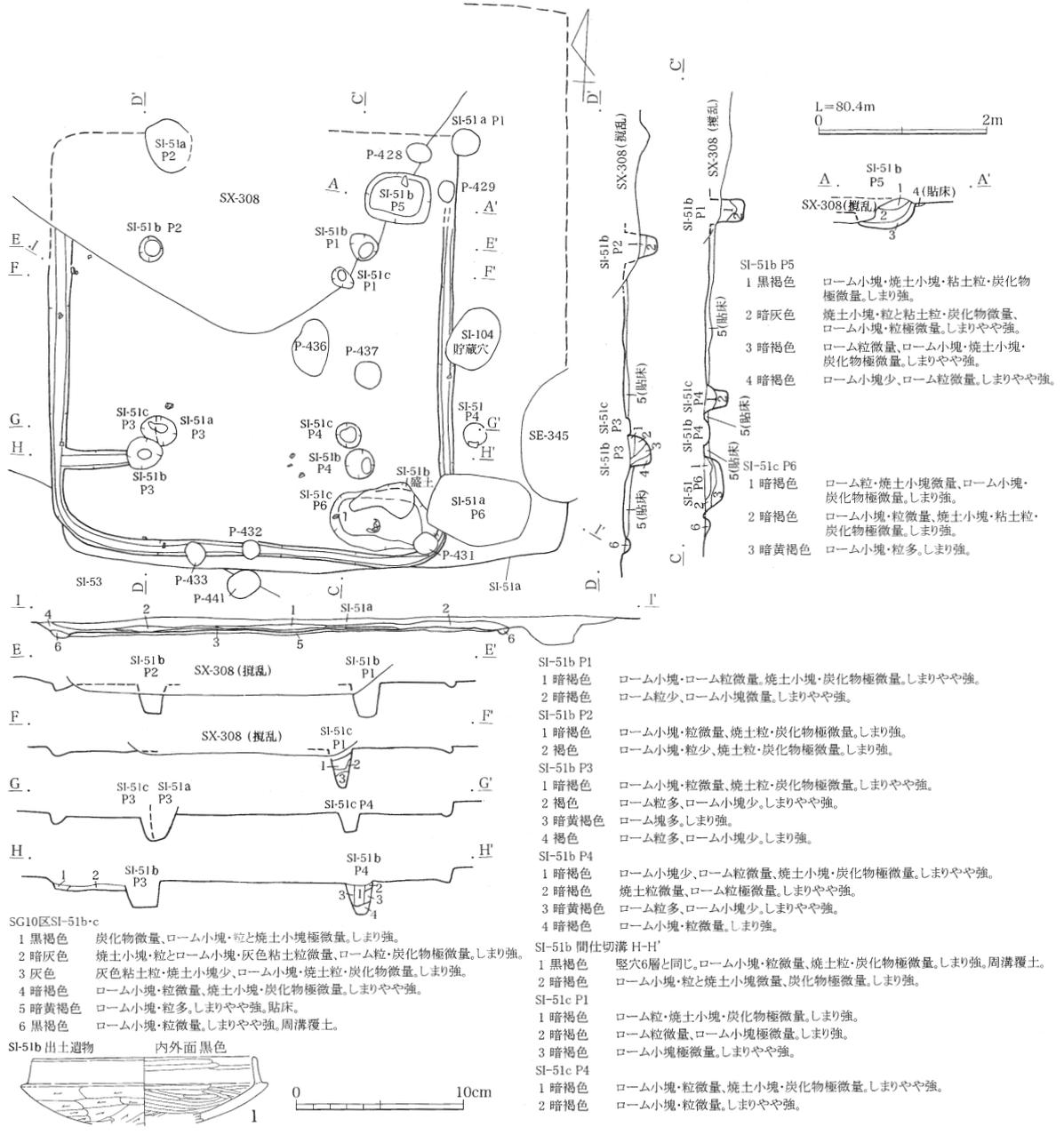
SG10 区 SI-51b (第 86 図、写真図版 94・95)

調査時の遺構名は「SI-109 新期」で、それに旧名称「SK-438」を加えて整理作業時に SI-51b と改称した。SI-51c → SI-51b → SI-51a の順に拡張した 2 時期目の建物である。

[位置] SG10 区 SI-51a と同じ範囲の南西部。SI-51c を拡張建替した建物と考えられる。古墳中期の SI-53・104 を切る。SI-51c・51b の貼床除去後に確認した P-436・437 は、SI-51b・c に切られる古墳時代柱穴である。攪乱の可能性が高い時期不明の SX-308 に北部を切られる。SG10 区中央部柱穴群に含まれる時期不明柱穴 P-428・429・431・432・433 との関係では、P-429 に北東部を切られると推定され、P-431・432・433

に南端部を切られる。P-428 との新旧関係は、SX-308 に切られるため不明だが、P-428 が SI-51b・c を切る可能性を想定できる。調査時旧名称「SK-438」は SI-51b の南東支柱穴 P4 に改称した。

〔規模と形状〕 方形の建物跡で、主軸方位は GN-2° -E。東西 4.90 × 南北 5.16m で、南北に少し長い点は SI-51a と似る。壁の残存高は南東隅部で最も高く (9cm)、西部 (6cm) や北西部 (1cm) では低い。支柱穴は P1 ~ P4 の 4 本で、柱間は南北 256cm、東西 264cm。床面レベルからの深さは P1 が 40cm、P2 が 39cm、P3 が 27cm、P4 が 41cm。柱穴形状からみて柱径は 15cm 前後で、床面からの深さは南西の P3 が



第 86 図 榎現山遺跡 SG10 区 SI-51b・c 遺構・遺物

第 47 表 榎現山遺跡 SG10 区 SI-51b 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.2 高 残 3.9 最大 復 14.6	外面は口縁部ヨコナデ、底部に 1 方向 (?) の後、体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に 1 方向 (?) と体部に横位のヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外全面黒色で炭素吸着。その上に漆仕上げをしているかもしれないが不確実。	7.5YR3/1 黒褐 やや緻密 粗粒と黒・透明細粒少 やや硬質	b 期貯蔵穴底上 14cm 口 1/6 周 SI-109 16

第5章 権現山遺跡 SG10 区

30cm で、他は 38 ～ 40cm。北東隅にある b 期貯蔵穴 P5 は東西 77 × 南北 58 × 深さ 25cm の長方形で、床面で確認できたことと、SI-51b と覆土が共通することから、b 期の貯蔵穴と判断した。壁溝は深さ 4 ～ 9cm で、東壁の北部では 1 ～ 2cm まで浅くなって消滅する。間仕切溝は南西支柱穴 P3 の西側に 1 本あり、幅 17 ～ 20cm ・ 深さ 7cm (断面図 H-H')。入口施設は見られない。

貼床は c 期の項を参照。南東隅部には、c 期貯蔵穴 P6 を埋め戻した b 期床面に 78 × 43 × 高さ 3 ～ 6cm の高まりが認められた。

[火処] 不明である。SX-308 に破壊されている北壁にカマドを持っていたことを、覆土中の粘土・焼土粒から想定できる。

[覆土] 焼土・炭・粘土粒を含む 1 ～ 4 層が薄く入り、水平状に堆積しているので、北壁部(カマド?)を取り壊した土もまぜながら人為的に埋め戻しているかもしれない。その上に a 期(SI-51a)の床面を貼っている。テフラの層や粒などは認められない。

[遺物出土状況] b 期貯蔵穴 P5 内に土師器壺甕類の頸部と長胴甕の胴部があり、c 期貯蔵穴 P6 を埋め戻した位置の床面には土師器壺甕類の胴部破片多数があるが、いずれも図示できなかった。

[出土遺物] 遺物はごく少量で、古墳中期の遺物も少量混入している。図示した杯(1)は b 期貯蔵穴 P5 で出土したもので、炭素吸着と見られるが漆仕上げも行っているかもしれない。図示できなかった土師器甕破片には、やや球胴に近い長胴のものがある。図示以外の土師器合計 96 片・793g の内訳は、杯 17 片・80g、高杯 1 片・59g、鉢 2 片・21g、小形壺 1 片・7g、壺甕類 75 片・626g。

SG10 区 SI-51c (第 86 図、写真図版 94・95)

調査時の遺構名は SI-109 古期で、それに SI-51 柱穴 P3 の一部と SK-430 を加えて、整理作業時に SI-51c に改称した。

[位置] SG10 区 SI-51b に拡張建替する以前の建物である。貼床下で確認した古墳時代柱穴 P-436 と P-437 を切る。南壁の位置が SI-51b と同じであれば、P-431・432・433 に切られることになる。北東隅の位置が SI-51b と同じであれば、同様に P-429 に切られると推定される。P-428 とは新旧不明だが、P-428 が SI-51b・c を切る可能性を想定できる。調査時旧名称 SK-430 をこの建物の北東支柱穴と推定して「SI-51c の P1」に改称した。

[規模と形状] 方形の建物跡で、主軸方位は SI-51b と同じく GN-2° -E と思われるが、壁がわからないため不確定で、東側支柱穴の方向を基準にした場合は GN-0° -E・W となる。正確な規模は不明である。SI-51b に拡張する前なので SI-51b より少し小さいか、あるいは南東部にある貯蔵穴からみて南東隅の位置があまり変わらないので SI-51b とほぼ同規模の可能性もある。c 期から b 期の間で北側柱穴の移動が顕著なので、北壁は b 期よりも南側にあったと見ることもできる。支柱穴は 4 本と考えられる。ただし、北西支柱穴 P2 を確認できなかった。南西支柱穴 P3 は 2 基が重なった形で、土層から新旧を判別できなかったが、配置からみて西半部を c 期、東半部を a 期(SI-51a)の柱穴と判断した。柱間は南北 1.90 × 東西 2.36m。柱穴形状からみて柱径は 15cm 前後で、床面からの深さは南側が浅く(P4=26cm、P3=27cm)、北側が深い(P1=41、P2=37cm)。南東隅にある c 期貯蔵穴 P6 (東西 121 × 南北 74 × 深さ 26cm) は、貼床除去後に確認した。c 期建物(SI-51c)の貯蔵穴を b 期に埋め戻したと考えられる。貼床は 2 ～ 4cm の薄さで、ローム小塊の多い暗黄褐色土を入れている。壁溝・入口施設・間仕切溝は認められない。

[火処] 不明である。SX-308 に破壊されている北壁にカマドを持っていたことを想定できる。

[覆土] SI-51b の項を参照。

[出土遺物] 図示した遺物はない。出土遺物は c 期貯蔵穴 P6 出土の土師器鉢 1 片・8g だけで、中期の混入遺物である。

SG10区 SI-53 (第87図、写真図版95・199・200)

[位置] SG10区中央部の19-18グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、南にSI-101、北にSI-104がある。古墳後期のSI-51a～51cに北側を切られる。縄文時代土坑SK-443・265を切り、時期不明のP-467・468に切られる(SK-443→SK-265→SI-53→P-467・468)。北東部にある時期不明のP-441・442との前後関係は不明瞭だが、貼床除去前にこれらを確認しているため、SI-53が切られると考えられる(SI-53→P-441・442)。

[規模と形状] やや不整な方形の建物跡で、主軸方位はGN-26°-Eだが、東壁の方位が他より少し東へ振れている。東西4.10×南北4.16m、壁の残存する高さは最小5cm(北西部)、最大10cm(東壁南部)。主柱穴は4本で、南東主柱穴P4が不明確である。柱間は東西2.10×南北2.14m。床面からの深さはP1とP2が23cm、P3はやや深く30cm、P4は他の柱穴のように穴として確認できず、数cm程度くぼみだけである。柱痕跡の径は、P2で8～10cm、P3で約8cmである。入口施設と考えられるP5は床面からの深さ23cm。貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。貼床土は南西部で厚く(14cm)、他は厚さ10cm未満で、貼床がほとんど認められない箇所もある。

[炉] 北東主柱穴P1の西側にあり、東西29×南北33cm、床面からの深さ2cm。炉の埋土はローム粒が多く、焼土は少なかった。

[覆土] 水平な堆積層で埋まっている。テフラの可能性のある白色粒などは認められなかった。

[遺物出土状況] 床面より上へ3～7cm浮いたレベルで、炉の上方に土師器がまとまっている状況の拡大図を示した。土師器甕は炉上方(18)とその東西(17・19)に1個ずつある。西側にある甕底部片15は図示していない高杯破片と混在し、15に接合する胴部破片は見られなかった。

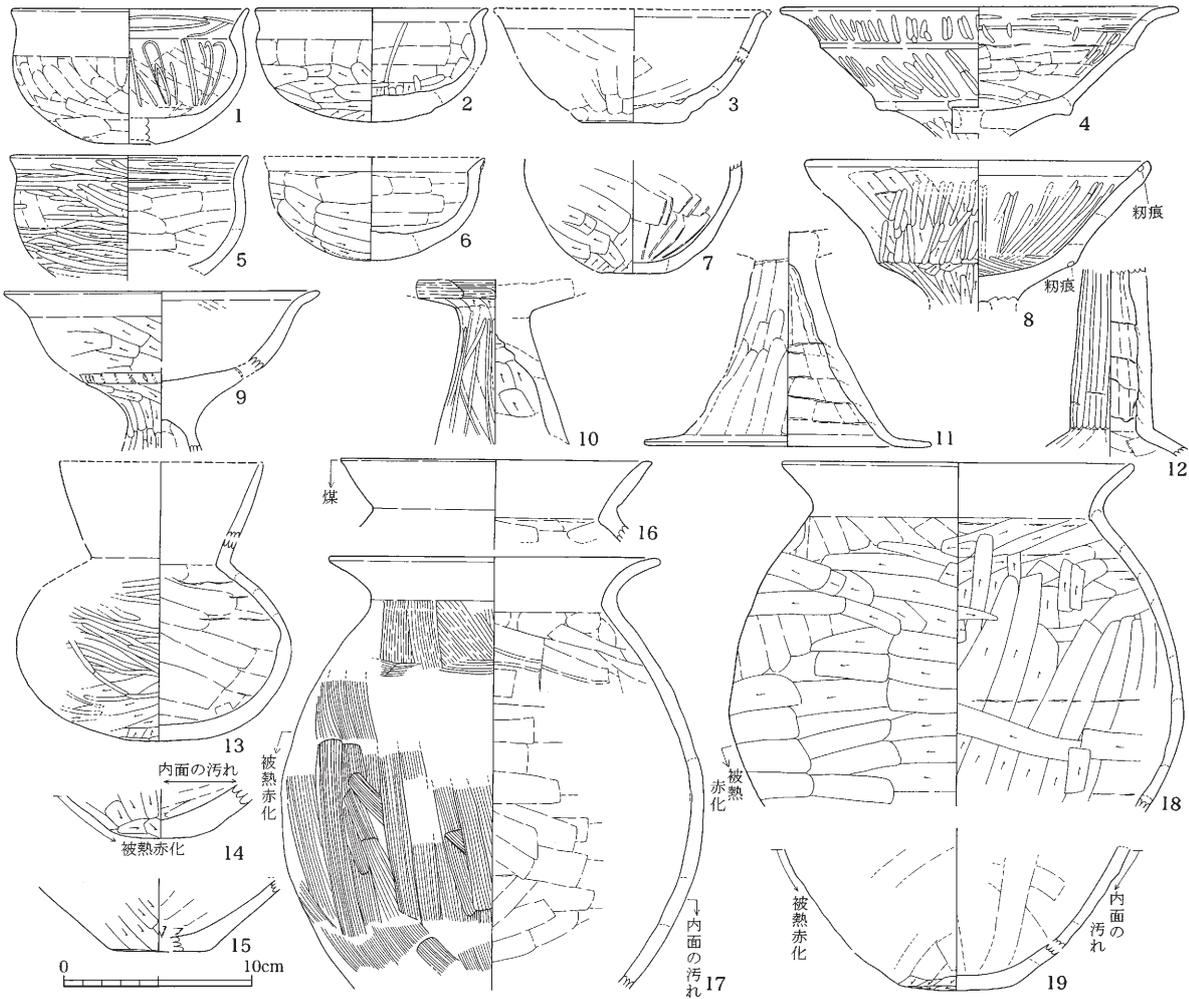
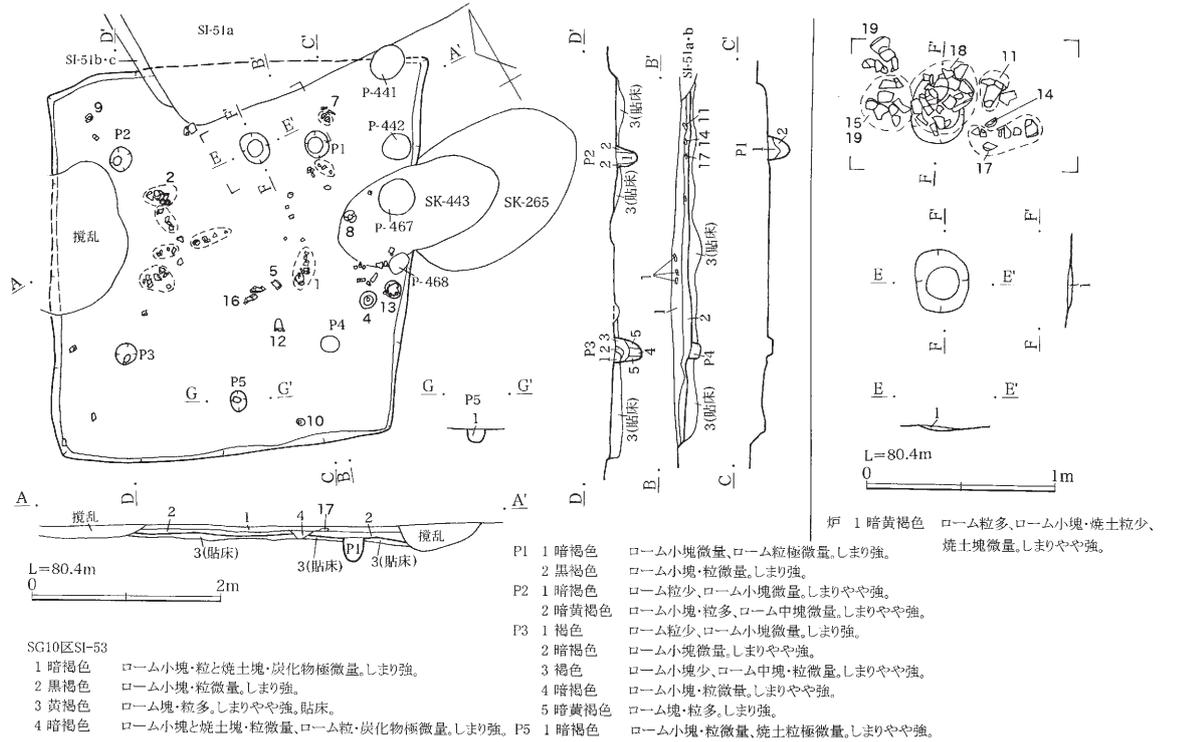
南東部の床上2cmに小形壺(13)があり、床上4～5cmで高杯杯部が上を向いて出土した(4)。被熱痕と煤のある高杯(8)や、煤が付着した杯(2)が見られるが、火災建物のような炭化材や多量の焼土は認められていない。本建物を切る時期不明のP-467(調査時の名称はSK-443に包括)で出土した杯は、本建物からの混入遺物と考えられる(6)。

[出土遺物] 土師器はSG10区でも古い特徴を持つ。4は有段状高杯の杯部が完形で、中央に孔があり、甕に転用することもできる。高杯底部に穿孔した類例は古墳時代居館の溝SG10区SD-221にもある。8は胎土中に混和したと思われる稲糊痕が2箇所ある。SG10区ではSI-50の杯などに稲糊痕がある。杯底部の製作痕を残す高杯は、接合面に刻み(9)や浅いハケ(10)を施している。壺甕類はハケ調整が目立ち、古い様相を持つ。凸面底の甕(14・19)はSG10区SI-16などにある。遺物は比較的多くて、高杯が多く、杯や壺甕類も一定量がある。図示以外の土師器合計277片・2,124gの内訳は、杯101片・288g、高杯42片・482g、小形壺4片・28g、壺甕類130片・1,326g。

第48表 権現山遺跡SG10区 SI-53 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.4 高 7.2 底 3.0	外底面はナデとヘラケズリで小さい上げ底状。外面は体部上半ナデ後に下半ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヘラナデ後にタテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒と白細 粒多、黒・透明粗～細粒少 やや硬質	中央床上8cm 口5/6周、底1/2周 13、南東一括
2 土師器 杯	口 12.2 高 6.1 重 残253.8	底部が厚く重い。外面は体部上位ナデと底部1方向ヘラケズリ、体部下位ヨコヘラケズリ。内面は底部多方向ヘラケズリ、体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。口縁部が少し歪んでいる。外面口～体部と内面口縁部に煤少量付着。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明粗～細粒少 やや硬質	中央床上7cm 口11/12周、体全周 32、北西一括
3 土師器 杯	口 推14.5 高 推6～7 底 5.4	体部に接合点がないので器高は推定。外底面はナデ。外面は体部下端コピオサエ、体部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は底部調整不明、体部ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗粒多、白・黒・ 透明細粒少 やや軟質	南東部 頸1/6周、底全周 南東一括
4 土師器 高杯	口 20.8 高 残6.9	脚との接合部は径約1cmの孔に粘土塊を入れて閉塞した部分が脱落して、孔が現れた状態になっている。外面は杯底部タテヘラナデ、口～杯体部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は杯部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後に疎らな縦位と横位のヘラミガキ。杯部は完形なので、このまま甕として用いることも可能である。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 白礫と白・黒・透 明粗～細粒やや多、赤粗粒少 やや硬質	南東隅床上5cmで正位 口全周、杯部全周 1

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第 87 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-53 遺構・遺物

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

5 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 6.5	外面は体部上半タテナデ、下半ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデの後に全体をヨコヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	7.5YR8/3 浅黄橙 やや緻密 赤粗粒と灰色・透明粗～細粒やや多、白礫～細粒少 やや硬質	中央床上 7～8cmが接合 口 5/6 周、下半全周 17、18
6 土師器 杯	口 復 11.5 高 5.5	外底面はおそらく多方向ヘラケズリで丸底にする。外面体部は上位ヨコヘラナデまたはナデの後に下位ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR5/8 明赤褐 粗い、赤粗～細粒多、白・黒粗～細粒やや多、透明細粒少 やや軟質	SI-53を切るP-467の底 上 6～8cmが接合 頸 5/6 周 SK-443 1、2
7 土師器 杯	高 残 6.0	外面は底部に多方向と体部に斜位のヘラケズリ。内面は底部に円周方向、体部に横位のヘラナデを行い、ヘラを止めた痕跡が深く残るやや雑な仕上げ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白粗粒多、赤粗粒と黒・透明粗～細粒少 やや硬質	中央東部床上 6cm 体 1/3 周 43、北東一括、南東一括
8 土師器 高杯	口 復 17.7 高 残 7.6 底 4.4	外面は杯底部放射状ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、杯体部は斜位のヘラケズリ後ヘラミガキ。杯内面は杯底部 1 方向ヘラミガキ、杯体部タテヘラミガキ。脚内面上端部(杯底部)に雑なナデ。外面が被熱赤化した後に煤付着。胎土中に混和した羽の痕跡が 2 箇所に残る。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・透明粗～細粒と黒細粒やや多 やや硬質	南東床直上～床上 6cm 口 1/3 周、杯底全周 6～9、48、南東一括、一括
9 土師器 高杯	口 復 16.5 高 残 7.6	杯底部外周の製作休止面にヘラ状工具で刻み目を入れた状況が剥離部で確認できる(外面図に記入)。外面杯部に斜位と脚部に縦位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。杯内面は底部ヘラナデ、体部ナメハケ後ヨコナデ、口縁部ヨコナデ。脚柱部内面は雑なナデ。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と黒細粒少 軟質	北隅床上 6cmと北東床上 5cm 口 1/6 周、杯底全周 34、36、37
10 土師器 高杯	高 残 8.8	接合面が剥離して、杯底部を円盤状に成形した形が現れている。円盤状の外周側面は浅いヨコハケ(外面図に記入)。外面は杯底部に放射状ヘラケズリ、脚部タテナデ後タテヘラミガキ。脚内面は倒立状態で時計回りに積み上げた後に軽くナメヘラケズリする。杯内面の最終調整は不明で、円盤状部分の上面はナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・黒・透明細粒少 硬質	東半部床直上 2 片が接合 杯底全周 12、21、北西一括
11 土師器 高杯	高 残 10.4 脚裾 復 15.0	外面は縦位のヘラケズリまたはヘラナデ後、裾部内外面ヨコナデ。内面は脚上半を絞った縦皺を生じ、脚下半は倒立状態で時計回りに粘土組織み上げ痕を残す。杯内底面はナデまたはヘラナデ。	5YR6/8 橙 やや粗い、赤粗粒多、灰色礫と白・黒・透明細粒少 やや軟質	北東床上 3cm 脚柱全周、脚裾 1/8 周 39
12 土師器 高杯	高 残 9.8 脚 4.2	外面は脚裾部タテヘラナデ、脚柱部に密なタテヘラミガキ。内面は脚柱部に紐積み痕を残す程度のタテナデ後絞って縦皺を生じる。内面脚裾部ヨコヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・灰色粗～細粒やや多、黒・透明細粒少 やや硬質	中央床上 3cm 脚柱全周 20
13 土師器 小形壺	口 10.7 高 残 14.7 最大 14.4	外面は底部多方向と体部下半横位のヘラケズリ、体部中位以上ヨコヘラミガキ。内面は底部多方向と体部横位のヘラナデ、肩部ナデ。内外面の口縁部と頸部は磨滅して調整不詳。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 赤粗～細粒多、白粗～細粒と黒細粒少 軟質	南東床直上。床上 6～ 8cmに破片少量 口 1/12 周、頸 2/3 周、 体下半全周 2、3、10、18、南東一括
14 土師器 甕	高 残 2.8 底 5.6	外底面は多方向ヘラケズリで不整な凸面状。外面胴下端ナメヘラケズリ。内面は縦位および斜位のヘラナデ。外面胴～底部全体が弱く被熱し、内面全体が黒色に汚れる。	10YR5/3 にぶい黄褐 緻密 透明粗～細粒と白・黒細粒少 硬質	北部床上 1cm 底 12/5 周 41
15 土師器 甕	高 残 3.8 底 復 5.3	外底面は 1 方向(?)のヘラナデで平坦にする。外面胴部に縦～斜位ヘラケズリ。内面は底部に円周方向と胴部に斜位のヘラナデ。被熱痕や内面の汚れは認められない。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗粒やや多、白・黒細粒少 やや硬質	中央東部床上 5cm 底 2/3 周 37、南西一括
16 土師器 甕	口 復 16.3 高 残 4.3	口縁端面は広く水平に近い。肩部内面にナデ後、肩部外面と口縁部内外面にヨコナデ。外面全体に煤が若干付着する。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗粒と白・黒細粒やや多、赤粗粒少 硬質	中央床上 11cm 口 1/4 周、頸 1/3 周 19
17 土師器 甕	口 17.4 高 残 22.9 最大 復 22.1	外面は口縁部ヨコナデ後に胴部タテハケ、肩部には部分的なヨコハケ。内面は頸部ユビオサエ後に胴部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面は胴部中位以下が被熱している箇所と、それほど被熱していない箇所がある。内面胴部下位に暗褐色の汚れあり。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・黒・赤・透明粗～細粒多、白・透明礫少 やや軟質	中央東部床上 2～7cm が接合 口 3/4 周 27、37、38、40、42、46、 47、南東一括
18 土師器 甕	口 復 18.5 高 残 18.3 最大 復 23.9	外面は胴部ナメヘラナデ後にヨコヘラケズリ、内面は胴部ヨコおよびタテヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。外面胴下位被熱赤化。煤の有無は不明。[注記]37、38、42、北西一括、南西一括、一括、SI-51・109一括	10YR5/2 灰黄褐 やや粗い 白細粒多、赤粗粒と黒・透明細粒やや多、白礫～粗粒少 やや軟質	北東床上 2～7cmと北 西部で接合 口 1/3 周、頸 3/4 周 注記は左欄
19 土師器 甕	高 残 7.4 底 復 6.1	外底面は多方向ヘラケズリで緩い凸面状。外面胴部ナメヘラナデと胴下端ナメヘラケズリ。内面は縦位および斜位のヘラナデ。外面胴～底部全体が被熱赤化し、内面全体が黒色に汚れる。	10YR5/2 灰黄褐 やや緻密 黒・透明細粒やや多、透明粗粒と白細粒少 硬質	中央東部床上 5～7cm と中央床上 3cmが接合 底 5/12 周 36、37、南東一括

SG10 区 SI-55 (第 88・89 図、写真図版 95・96・200)

【位置】SG10 区中央部の 19-18 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、西に SI-53、北に SI-104、南に SI-33 がある。近世と考えられる SD-204 に中央部を切られる。南西にある古墳時代の SD-319 と近接するが重複しないと考えられ、両遺構間には攪乱がある。

【規模と形状】長方形の建物跡で、主軸方位は GN-19° -E。東西 4.36 × 南北 5.20m、残存壁高は最小 10cm (南東部) ～最大 24cm (北西部)。支柱穴は P1・P2 の 2 本で、柱間は 1.83m。柱穴上部は SD-204 に破壊されているが、床面レベルから計測した深さは P1=38cm、P2=39cm で、断面形からみて推定柱径は 16cm 前後。補助柱穴と判断した P3・P4 が東側にある。南東補助柱穴 P3 は、形から見て 2 時期分が重複していると考えられる (P3 西と P3 東)。P3 西は床面から深さ 24cm で、断面形からみた推定柱径は 10～15cm 程度。P3 東は床面から深さ 25cm。P4 は床面レベルから深さ 25cm、断面形からみた推定柱径は 10cm 程度。

東半部のやや南寄りにある貯蔵穴 P5 は、東西 88 × 南北 74 × 深さ 31cm の隅丸長方形で、竪穴と同様に自然埋没している (断面図 H-H')。南東隅部にも貯蔵穴がある可能性を考えて貼床を断ち割ったが、隅部

第5章 権現山遺跡 SG10 区

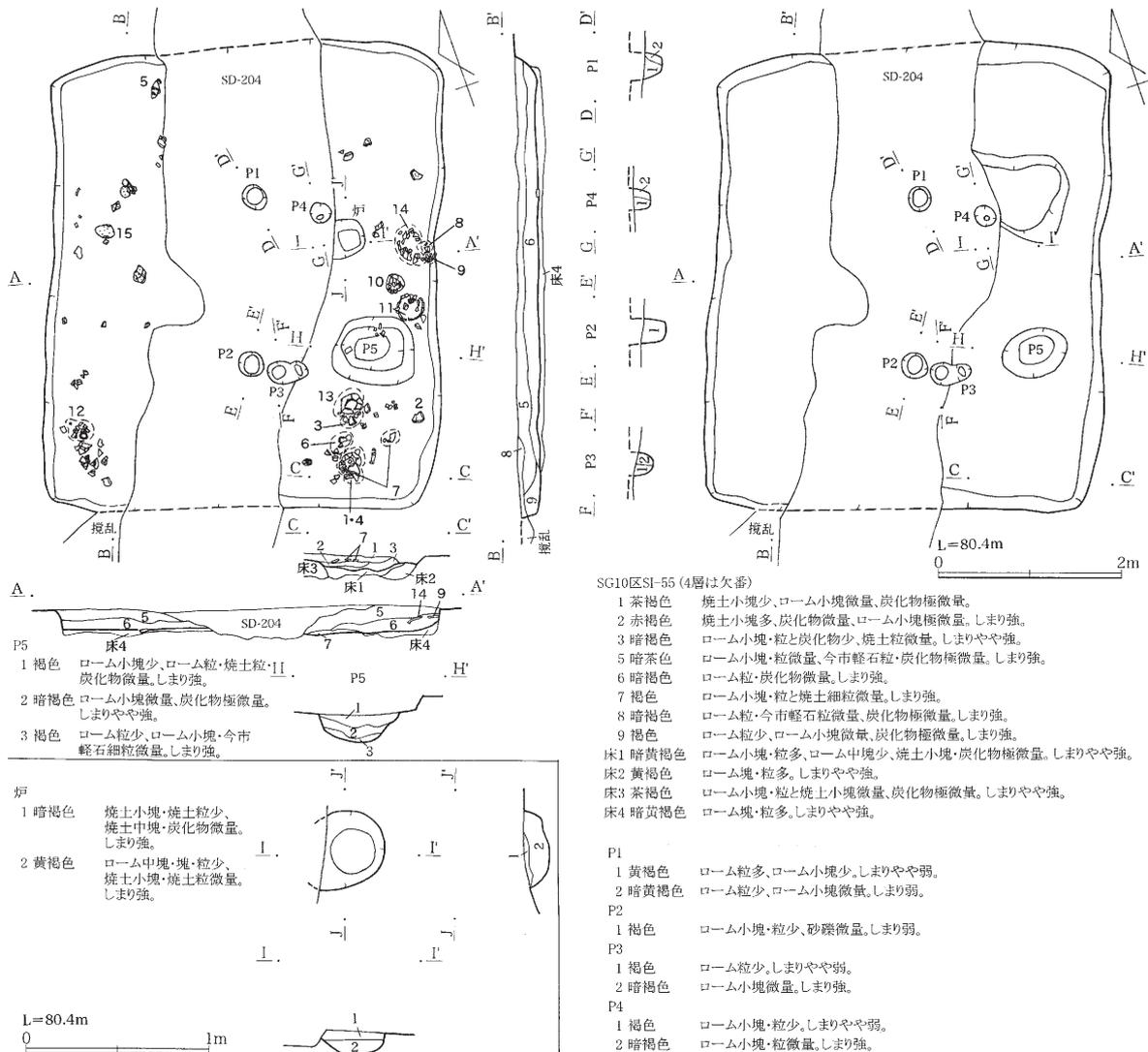
に貯蔵穴はないことが判明した（断面図 C-C'）。入口施設は不明。壁溝や間仕切溝は見られない。貼床は厚さ 2～10cm でローム土が主体であり、南東部では貼床土中に微量の焼土を含む部分もある（断面図 C-C'）。掘方の底面形を見ると、炉の北側の部分が周囲よりも 4～8cm 高くなっている。

[炉] 中央部のやや北東寄りにある。大きさに対してかなり深く、炉覆土の下層に含まれる焼土は僅かである。東西残存 42cm × 南北 41cm × 深さ 13cm。

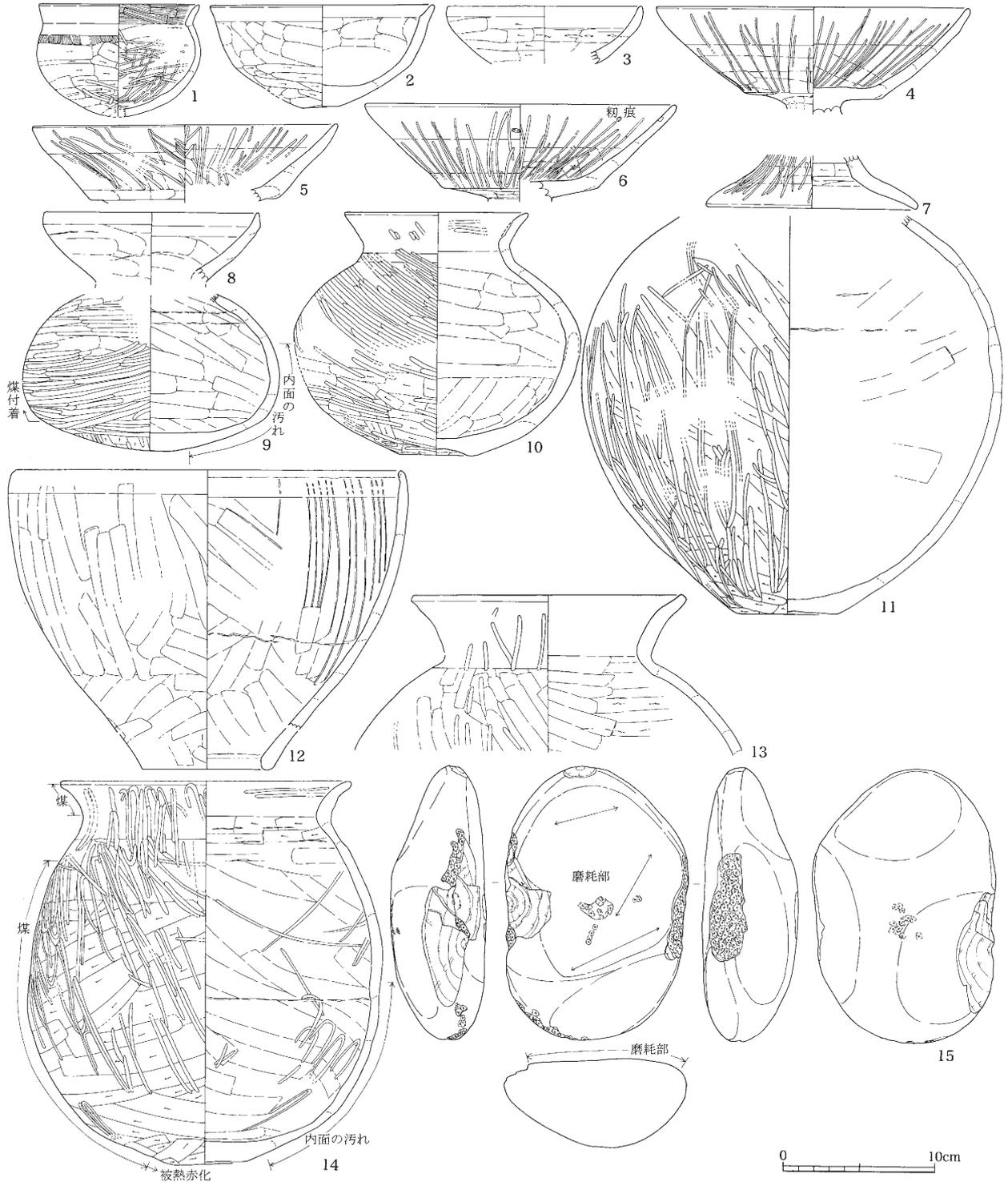
[覆土] 貯蔵穴 P5（断面 H-H'）と同じく竪穴部も自然埋没と思われる。テフラの層や粒などは、混入した縄文草創期の今市軽石だけが認められた。

[遺物出土状況] 残存度の高い土器が、床面直上から床上数 cm までのレベルで、比較的多く出土した。東西両壁に近い位置の遺物は床面から 10cm 程度浮く傾向を持つ。東壁付近の土器は 9・10・14 のように、床から浮いても残存度が高いものがある（断面図 A-A'）。

[出土遺物] SD-204 に壊されているにもかかわらず遺物が多い。粉圧痕のある土師器（6）の事例は SG10 区 SI-50 などにある。9 は本来は火に掛けない小形壺だが、煮炊に使った痕がある。12 は器高が低い独特な大形甕で、内面を磨かない点も特徴的である。硬質緻密なホルンフェルスの砥石（15）は、SG10 区では SI-12 などにある。図示以外の土師器合計 289 片・2,591g の内訳は、杯 142 片・714g、高杯 14 片・178g、鉢 10 片・76g、小形壺 3 片・48g、壺甕類 121 片・1,575g。



第 88 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-55 (1) 遺構



第 89 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-55 (2) 遺物

第 49 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-55 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 10.5 高 残 7.4 最大 復 10.7	やや薄く軽い。外面体部上位タテハケ後に口縁部ヨコナデ、中位ヨコハラケズリ、底部周辺に多方向のヘラナデとヘラミガキでやや光沢あり。内面は体部ヘラナデ後に多方向ヘラミガキ、口縁部ヨコハラケ後に軽いヨコナデ。	7.5YR6/4 にふい橙 やや緻密 白粗～細粒多、赤 粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南東床上 5～8cmが接 合 口～底 1/2 周 37、38
2 土師器 杯	口 復 14.5 高 6.8 底 2.3	外底面はヘラケズリでややいびつな平底状。外面体部ナデ後、下位をヨコハラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコハラケ後に口縁部ヨコナデ。内面体部下位は器面が荒れていて、使用により磨耗した可能性がある。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白礫と黒・透明細粒少 やや軟質	南東隅床直上 口 1/4 周、底全周 47

第5章 権現山遺跡 SG10 区

3 土師器 杯	口 復 12.7 高 残 3.8	外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内外面調整は丁寧であるが、内面に粘土積み上げ痕を残す。	5YR6/6 橙 やや緻密 白粗～細粒と黒細粒 やや多、灰色礫と透明細粒少 やや軟質	南東隅床上 1cm 口 5/12 周 40、炉、貼床一括
4 土師器 高杯	口 20.5 高 残 7.0	外底面と脚部上端に放射状ヘラナデ後、外周をヨコナデ。外面は杯部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後に疎らなタテヘラミガキ。内面は横～斜位ヘラナデと口縁部ヨコナデ後に放射状のタテヘラミガキ。	2.5YR4/6 赤褐 やや粗い 白粗～細粒多、白礫と透明粗粒と黒細粒少 やや硬質	南東隅床上 5cmで伏せた状態 杯部ほぼ完形 口全周 37
5 土師器 高杯	口 復 19.9 高 残 4.7	外面体部ナメナデ後、外底面外周と外面杯部下端にナデ。内外面ともに体部ナメナデまたはナメヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。内面に縦位、外面に斜位の疎らなヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒やや少、赤粗粒と黒・透明細粒少 硬質	北西隅床直上 口 1/3 周、杯底 1/4 周 31
6 土師器 高杯	口 復 20.3 高 残 6.4	杯部外底面ナデ。外面は杯体部タテナデ後に口縁部から体部の大半までをヨコナデし、疎らなタテヘラミガキ。内面は杯体部多方向ヘラナデ後に上半部をヨコナデし、疎らなタテヘラミガキ。素地上に混入した稲稈圧痕が 4 箇所ある。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒と黒細粒やや多、赤粗粒と透明細粒少 硬質	南東隅床上 8cm 口 5/12 周、杯底 1/3 周 38
7 土師器 高杯	高 残 3.5 脚裾 13.8	外面は脚部ナデと裾部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は脚部ナデ後に脚柱部ヨコヘラケズリ、裾部ヨコナデ。	7.5YR4/3 褐 やや緻密 白粗～細粒やや多、赤粗粒と白・透明細粒少 やや硬質	南東隅床上 2～4cm 脚裾 2/3 周 35、46
8 土師器 小形壺	口 復 14.0 高 残 4.6	頸部は外面ナデ、内面ヘラナデ。口縁部は内外面ヨコナデ。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 白・黒・透明細粒やや少、灰色礫と赤粒少 軟質	中央東壁際床上 10～14cmが接合 口 1/5 周 58、59
9 土師器 小形壺	高 残 10.2 最大 16.7	外底面は 2 方向程度のヘラケズリ後ヘラミガキ。外面胴部はヨコヘラナデ後ヘラミガキ。内面は底部に多方向ヘラナデ後、体部に横～斜位ヘラナデ。外面の中位以上に煤が多く、内面の中位～下位が汚れるので、火にかけて使用したと思われる。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒細粒やや多、赤粗粒と透明細粒少 やや硬質	中央東壁際床上 10cm 胴上半 1/2 周、下半全周 58、59
10 土師器 壺	口 復 12.0 高 残 16.0 底 4.6 最大 18.7	外底面はナデで上げ底状。外面胴部に横～斜位ヘラケズリ後、上半部ほど密なナメヘラミガキ。内面は底部に 2～3 方向と胴上半に横位のヘラナデ。口縁部は内外面ヨコナデ後、外面に疎らなナメヘラミガキ。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや緻密 白・灰色粗～細粒多、赤・透明粗～細粒やや多、白・灰色礫と黒細粒少 やや硬質	中央東部床上 8cm 口 1/4 周、頸 1/3 周、底全周 57
11 土師器 壺	高 残 26.4 底 6.7 最大 復 27.5	外底面は 1 方向のヘラケズリ後ヘラミガキでやや上げ底状。外面胴部はナメヘラケズリ後にタテヘラミガキ。内面胴部はヨコヘラナデと思われるが、剥落・磨耗して不明確。被熱痕や汚れは見られない。	5YR6/6 橙 粗い 白・灰色粗～細粒と黒細粒多、白・灰色礫と透明粗粒少 やや軟質	中央東部床直上 肩 1/3 周、底全周 55、56、北東ブ、南東ブ、貯蔵穴一括
12 土師器 甌	口 復 25.8 高 19.7 底 復 8.0 最大 26.3	外面は下位ナメヘラナデ後に中位以上を成形してタテおよびヨコヘラナデ。内面は下半にナメヘラナデ、上半にタテおよびナメヘラナデ。内外面のヨコナデは口縁部が丁寧で底部が雑。 [注記]1、4、7～10、12、13、15、37、A-A' ベルト内、A-A' サブトレ、B-B' 南サブトレ一括、北東、北西、貼床一括	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・黒・透明粗～細粒多、灰色礫と赤粗粒少 軟質	南西隅床直上～床上 12cm 口 1/3 周、底 1/4 周 注記は左欄
13 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 10.6	外面は胴部タテヘラナデと口縁部ヨコナデの後、疎らなタテヘラミガキ。内面は肩部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	10YR8/6 黄橙 やや緻密 赤・灰色・透明粗粒と白・黒細粒やや多、白礫少 やや硬質	南東床上 1cmで倒立 口全周、肩 1/6 周 40、41、貼床一括
14 土師器 甕	口 19.1 高 25.1～ 25.4 最大 23.2 底 4.7	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに上げ底状。外面は肩部タテナデと胴部横～斜位ヘラケズリ後にタテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は胴部ナメヘラナデ後にごく部分的なヘラミガキで、中位に積み上げ休止痕を残す。内面肩部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面は底部が被熱して口・胴部に煤が付着し、内面は胴下半が汚れる。	10YR4/3 にぶい黄褐 粗い 白・透明粗～細粒多、赤粗粒と黒細粒少 硬質	東壁床上 5～10cm 口 5/12 周、胴 2/3 周、底全周 58、60、A-A' ベルト内
15 石器 砥石	長 18.0 幅 12.0 厚 6.2	片面の中央部を砥面に使用し、かなり平滑に磨耗していて擦痕は不明確。側縁の上下左右と両面の中央をそれぞれ敲打に使用し、打痕と剥離が生じている。被熱痕は見られない。重量 1839.8g。	2.5Y7/3 浅黄 緻密で非常に硬質なホルンフェルス	中央西床直上 完形 21

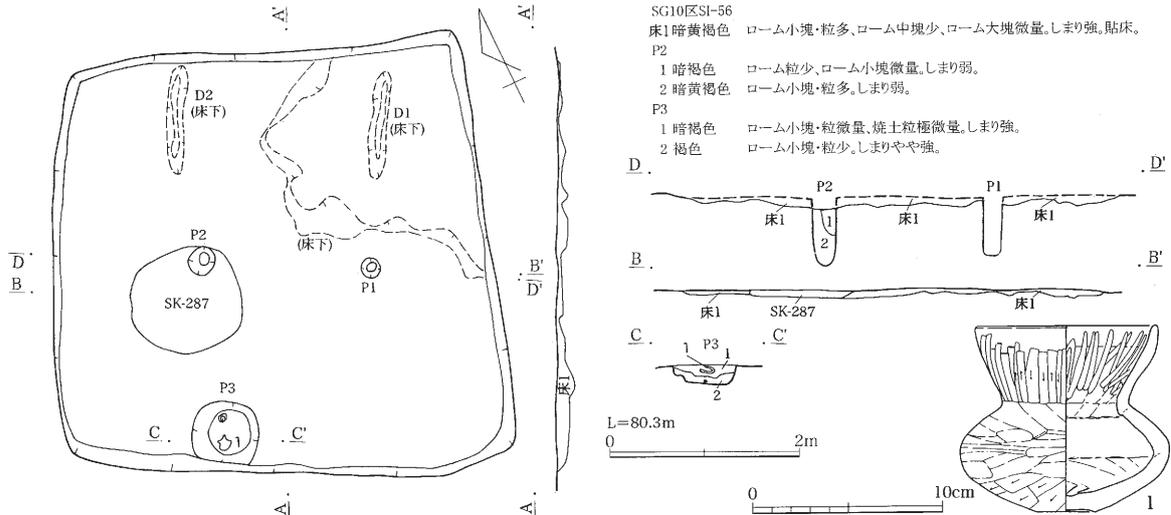
SG10 区 SI-56 (第 90 図、写真図版 96・200)

[位置] SG10 区中央部の 19-20 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は北に SI-57、南西に SI-55 がある。時期不明の SK-287 に切られる。

[規模と形状] 方形の建物跡で、主軸方位は GN-27° -E (支柱穴 2 本を通る軸は GN-53° -W)。東西 4.92 × 南北 4.73m、壁の残存する高さはわずか 1～3cm。支柱穴は 2 本で、柱間は東西 1.75m。床面からの深さは 2 本とも同じく 62cm で、柱穴の底部形状から推定した柱径は 16cm 以下。間仕切溝は床面では確認できず、貼床除去後に確認した 2 本の間仕切溝 D1・D2 は幅 14～18cm、床面レベルからの深さは 9～13cm。貯蔵穴 P3 は南西部にあり、東西 70 × 南北 64 × 深さ 19cm。貯蔵穴 P3 の覆土には極微量の焼土粒を含む。入口施設は認められないが、同種の建物 (SI-106) からみて貯蔵穴の隣にあったことを想定できる。壁溝は認められない。掘方は床面から深さ 6～18cm で、掘方底面の北東部が他の部分よりも 2～13cm 程度高いので、その範囲を破線で図示した。

[火処] 不明である。覆土がほとんどないので焼土の分布もあまり明瞭ではない。時期不明の SK-287 に壊された付近に焼土があり、SK-287 からは煤が付着した楕円形の自然礫が出土しているので、SK-287 の付近に SI-56 の炉があったという想定もできる。

[覆土] 残っていたのはごく僅かなために詳細不明で、ほとんど貼床で堅穴の範囲を推定した程度である。テフラの層や粒の有無も不明。



SG10区SI-56
 床1暗黄褐色 ローム小塊・粒多、ローム中塊少、ローム大塊微量。しまり強、貼床。
 P2
 1 暗褐色 ローム粒少、ローム小塊微量。しまり弱。
 2 暗黄褐色 ローム小塊・粒多。しまり弱。
 P3
 1 暗褐色 ローム小塊・粒微量、焼土粒極微量。しまり強。
 2 褐色 ローム小塊・粒少。しまりやや強。

第90図 権現山遺跡 SG10 区 SI-56 遺構・遺物

第50表 権現山遺跡 SG10 区 SI-56 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 小形壺	口 9.3 高 9.8 底 2.9 最大 10.9 重 残 385.8	外底面は1方向ヘラケズリで浅い凹底状。外面体部はナメヘラケズリ後に上半に斜位、中位に横位のヘラナデ。外面口縁部ヨコナデ後に頸部タテヘラケズリ。内面体部は下半ヨコヘラナデと上半ナデ。内面口縁部ヨコナデと頸部ナデの後にナメヘラミガキ。外面下位に9cm大の黒斑あり。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明粗～細粒 と黒細粒やや多、赤粗～細粒 少 硬質	貯蔵穴底直上で横位 完形 2

[遺物出土状況] 遺構覆土がほとんど残っていない状態なので、遺物は主に貯蔵穴から出土した。他に、本建物を切る時期不明のSK-287に混入していた土師器片と被熱した自然礫も、SI-56の遺物だったことが想定できる。

[出土遺物] 1は貯蔵穴から出土した完形の小形壺。図示以外の土師器合計38片・101gの内訳は、杯3片・15g、壺甕類35片・86g。

SG10 区 SI-57 (第91図、写真図版96・97・200)

[位置] SG10区中央部の20-19グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、南西にSI-56がある。重複する遺構はない。南西部と北東部は攪乱で壊されているが、北東部の遺構は竪穴掘方の底面が攪乱よりも下に残っていた。

[規模と形状] 方形の建物跡で、主軸方位はGN-15°-E。東西4.68×南北4.36m。壁は北西隅で高く残り最大壁高15cm、南東部では低く4～6cm。主柱穴はP1とP2の2本で、柱間は東西2.23m。断面形から想定した柱径は10～15cm、床面からの深さはP1が75cm、P2が67cm。補助柱穴または入口施設と考えられるP5は床面からの深さ10cm。P5と対応する西側部にも補助柱穴があったかもしれないが、攪乱が入っているため不確実である。

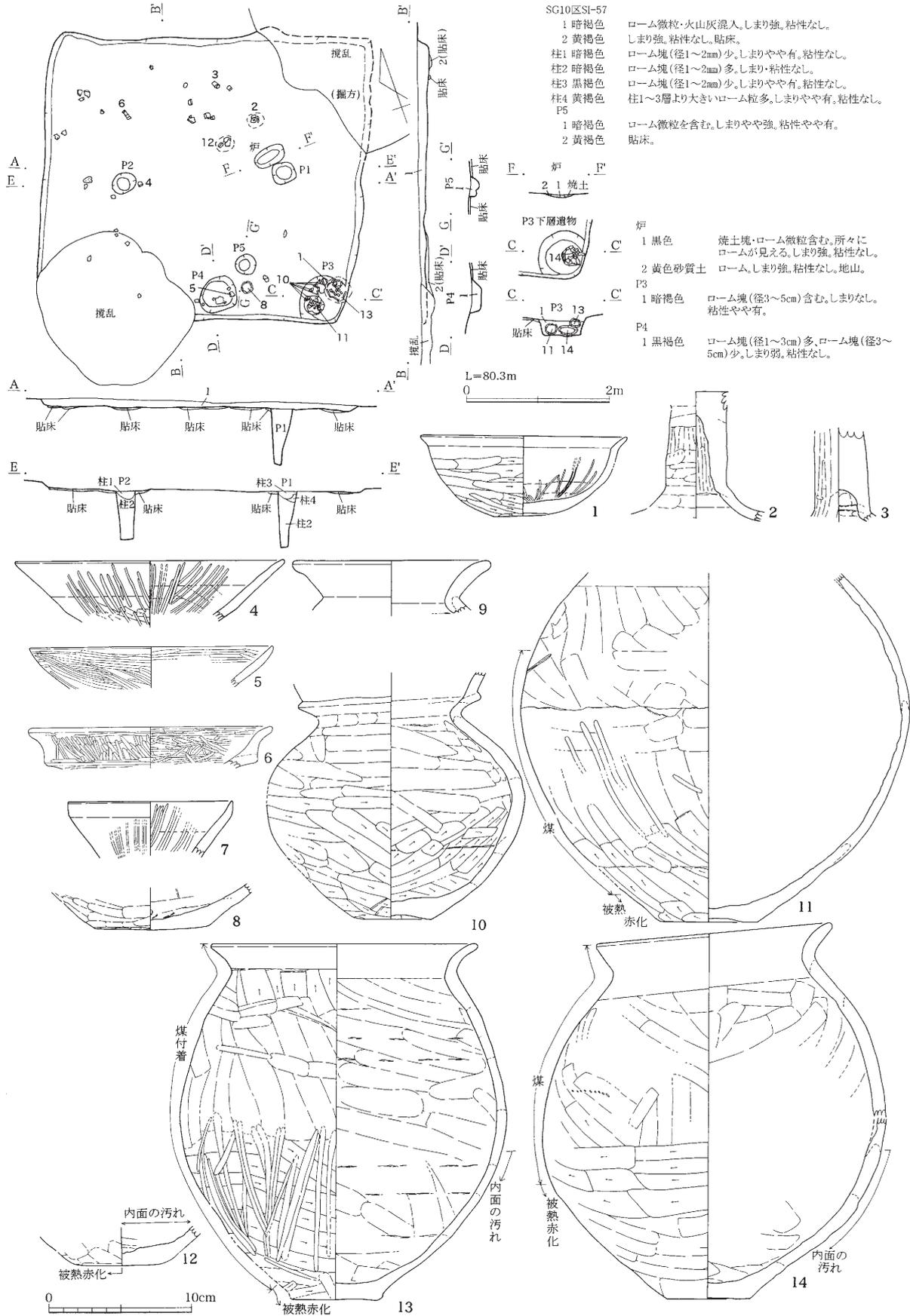
貯蔵穴P3は南東隅にあり、径65×深さ21cm。南部にあるP4は入口施設と考えられるもので、東西50×南北51×深さ15cm。壁溝・間仕切溝は見られない。

[炉] 東側主柱穴P1の北西にあり、柱穴に近すぎるので炉と断定するには疑問もある。長い楕円形で東西45×南北25×床面からの深さ6cm。

[覆土] 貼床を除くと覆土は単層である。火山灰の混入が記録されているのは、古墳中期遺構の覆土にしばしば認められる白色粒と見られ、古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラ粒の可能性が高い。ただし、テフラ集中部を分層することができなかつたので、少量が混入している程度と思われる。

[遺物出土状況] 図示した遺物で出土位置がわかるものは、床から6cm以内の高さで出土したものと、貯蔵

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第91図 権現山遺跡 SG10区 SI-57 遺構・遺物

穴内に納められた遺物で、この建物の時期を示す。貯蔵穴内に残存度の高い甕3点(11・13・14)、壺(10)、完形の杯(1)がある。

[出土遺物] 遺物は比較的多い。口が広く開く杯(1)は、貯蔵穴内にあった完形品。3は脚上部が中実状。脚が大きく広がる高杯は見られず、柱状脚の高杯ばかりで、図示した以外に脚柱部でみて4個体分程度の高杯がある。2は白色針状物質を含む搬入品。SG10区SI-23などに白色針状物質を含む土師器がある。小形壺は7以外に中形品の破片が少量ある。形態の異なる二重口縁状の壺がいくつか見られる(6と10)。図示した6・9・10以外の壺口縁部片は二重口縁状1個体と単口縁6個体分がある。11の外面には縄圧痕が見られる。SG10区SI-47の土師器甕などにも縄圧痕がある。土師器甕には炉で使用した痕跡がよく残る(11・13・14)。土師器は壺甕類が主体で、高杯もやや多く、杯は少ない。図示以外の土師器合計274片・2,347gの内訳は、杯57片・254g、高杯49片・525g、小形壺8片・198g、壺甕類160片・1,370g。

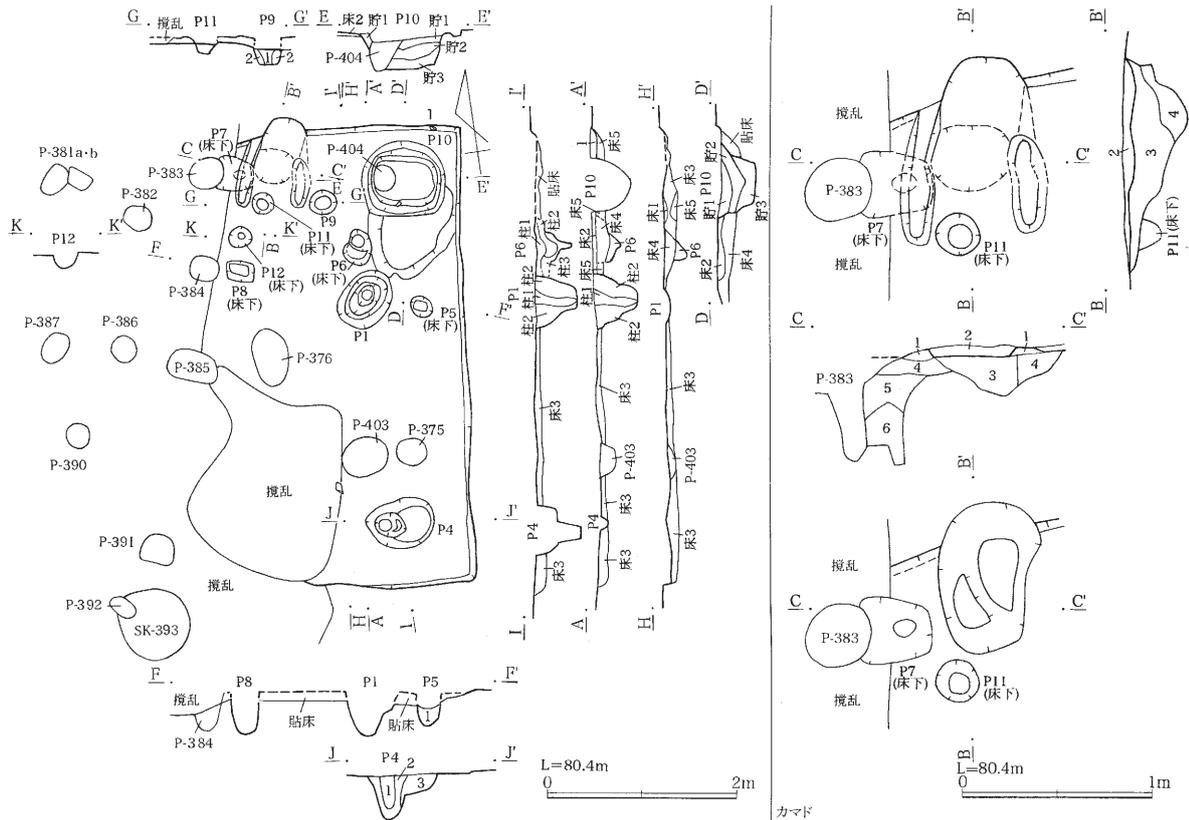
第51表 権現山遺跡SG10区SI-57出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.3 高底 5.6 重 3.8 残 199.9	外底面は中央部ナデで、周縁を少し高くするので上げ底状。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面は中位ナデ、下位ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。体部内面にやや疎なタテヘラミガキ。外面口～体部に9cm大の黒斑あり。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒多、透 明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上12cm ほぼ完形 2
2 土師器 高杯	高 残 9.0	脚外面タテヘラケズリ後に横位のナデ。内面は脚柱部に雑なタテナデ、裾にヨコナデ。杯底部内面にはやや密な放射状ヘラミガキ。	7.5YR4/1 褐灰 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒と白色針状物質 少 やや硬質	中央東部床上4cm 脚柱～中位完存 33
3 土師器 高杯	高 残 6.6	外面は脚柱部にタテヘラナデ。脚柱部は中実で、脚内面をコビナデして積み上げ痕が少し残る。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、白礫と黒・透明細粒少 硬質	中央北部床上6cm 脚柱全周 26
4 土師器 高杯	口 復 18.7 高 残 4.3	外面杯部ナデ後に下位ナメヘラケズリと口縁部ヨコナデ、全体をナメヘラミガキ。内面杯部ヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。全体を縦～斜位ヘラミガキ。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 赤粗～細粒と黒・ 透明細粒やや多、白礫～細粒 少 硬質	P2 西側床上6cm 口1/6周 16、北東Bトシ、南西 Aトシ
5 土師器 高杯	口 復 16.9 高 残 2.9	外面は口縁部に横位と杯体部に斜位の密なヘラミガキ。内面は口縁部ヨコヘラミガキ、体部は器面が剥落して調整不明。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白細粒やや少、灰 色礫～粗粒と白粗粒と赤細粒 少 やや軟質	P4 上方の床上4cm 口1/4周 37
6 土師器 壺	口 復 17.0 高 残 2.9	二重口縁状の丁寧な作り。頸部上半は外面に横位、内面に横位と斜位のヘラミガキ。口縁部は外面に縦位、内面に横位のヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白礫と白・赤粗～ 細粒やや少、黒細粒少 やや硬質	北西床直上。床上3cmに も1片あり 口1/3周 18、23
7 土師器 小形壺	口 復 11.4 高 残 3.9	内外面ともに口縁部ヨコナデ後に口～頸部タテヘラミガキ。内外面に器面が黒色の部分があり、煤が付いている可能性もある。	5YR6/8 橙 やや緻密 白粗～細粒と赤・ 黒細粒少 やや軟質	中央西部床上5cm 口1/24周、頸1/6周 13
8 土師器 壺	高底 残 3.2 8.2～8.5	外底面は2方向のヘラケズリで緩い凸面状。外面胴部下端ナメナデ、内面は円周方向および横位のヘラナデ。被熱痕や汚れは見られない。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・黒・灰色粗～ 細粒やや多、赤・透明粗～細 粒少 やや硬質	P4 底上2cmと東側床上 1cmに各1片 底全周 5、7
9 土師器 壺	口 復 13.8 高 残 3.7	口縁部上半の外面を少し外へ曲げる。頸部内面に粘土接合痕をよく残す。内外面の口～頸部にヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 粗い 白礫～細粒多、赤・灰 色・透明粗～細粒少 やや硬質	北西部 口1/3周 北西
10 土師器 壺	高底 残 17.3 4.7 最大 17.8	外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面胴部に光沢のある斜位ヘラナデ後、胴部下位の積み上げ休止部と胴部下端を横～斜位ヘラケズリ。口縁部上半を追加成形とヨコナデし二重口縁状。内面は胴部下位を斜～横位ヘラケズリして積み上げ休止部を薄くし、上半はヨコヘラナデ、肩部コビオサエとナデ、口～頸部にヨコナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 灰色礫と白・灰色・ 透明粗～細粒多、黒細粒少 硬質	貯蔵穴底上2cm 頸5/6周、底全周 35
11 土師器 甕	高底 残 24.4 6.6 最大 復 27.1	外底面は中央部ナデと外周ヘラケズリで凹底状。外面胴部ナデと下位ナメヘラケズリ、中位に疎なヘラミガキ、頸部ヨコナデ。内面は剥離が著しく調整不明。外面底部が被熱し胴中に煤付着。内面は下半を中心として暗褐色に汚れていた痕が見られる。	7.5YR5/4 にぶい褐 粗い 白礫と白・黒・赤・透 明粗～細粒多 軟質	貯蔵穴底上2cm 頸～胴2/3周、底全周 1、34、南西
12 土師器 甕	高底 残 2.7 6.6	外面は底部に多方向と胴下端に斜位のナデ。内面は器面が少し磨耗しているように見られるので、正確な調整技法が不明。内面全体に暗褐色の汚れが付着する。外面は残存部全体が被熱赤化。	7.5YR6/4 にぶい橙 粗い 白・灰色粗～細粒多、赤粗粒 と黒粗～細粒少 軟質	中央床上6cm 底5/6 周32、西ベルト、東ベ ルト
13 土師器 甕	口 復 18.4 高底 復 6.0 最大 復 23.5	外面は1方向ヘラナデで平滑。外面は下半ヨコヘラケズリ後タテヘラミガキ、肩部タテヘラケズリ後に胴上半タテヘラナデ後ヨコナデ、口縁部ヨコナデ。内面は下半ヨコヘラナデと上半ナデ、口縁部ヨコナデ。外面底部が被熱赤化し、それ以外の外面全体に煤付着。内面下半に黒褐色の汚れが明瞭。	5Y3/1 オリーブ黒 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 灰色粗～細粒と黒細粒やや多、 透明細粒少 硬質	貯蔵穴底上16cm 口1/6周、頸5/12周、 底3/4周 1
14 土師器 甕	口 復 16.4 高底 25.5 5.8 最大 23.9	外底面はおそらく多方向ヘラケズリで平坦に仕上げる。外面は胴部にヘラナデ後、中位の積み上げ休止部付近にヨコヘラケズリ。内面胴部ヘラナデ、内外面口～頸部ヨコナデ。外面の肩部に縄(?)の圧痕が横位に延び、製作時に土器を1周していたと考えられる。縄は1段Lの可能性が。胴下半は外面が被熱して内面に汚れが見られる。胴上半は外面に煤付着。	10YR6/6 明赤褐 やや粗い 白礫と白・黒細粒 多 やや軟質	貯蔵穴底上3cm 口1/8周、胴上半1/2 周、底全周 1、36、北東攪乱、北東、 東ベルト、北ベルト

SG10 区 SI-58 (第 92 図、写真図版 97)

[位置] SG10 区中央部の 20-18 グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は、北に SI-59・110、南に SI-51 がある。現代の攪乱 (SX-308 北側掘り込み) に西部を大きく削られている。時期不明の中央部柱穴群が周辺に多い。時期不明の P-375・376・383・403・404 に切られる。時期不明の P-384・385 と重複するが新旧関係は不明。時期不明の P-381a・381b・382・386・387・390・391 は SI-58 の推定範囲内にあるが、攪乱の底面で確認したので、SI-58 との新旧関係や、SI-58 に伴うかどうかは不明である。

[規模と形状] 方形の建物跡で、正方形または南北に長い長方形のどちらかを想定できる。主軸方位は GN-3°-E。東西残存長 2.9m、南北長 4.92m、残存壁高は北東隅で最大 7cm で、南東部では 2cm 程しか残って

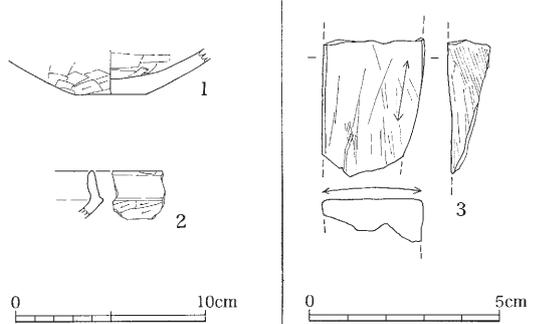


SG10区SI-58

- 1 暗褐色 白色粒多、焼土粒少、しまりなし。覆土。
- 床1 黄褐色 ソフトローム塊、硬、貯蔵穴周囲の盛土。貯蔵穴南側の床2層に相当。
- 床2 暗黄褐色 白色粒多、焼土粒少。ソフトローム塊(径1~2cm)多、しまり有。貯蔵穴南側の盛上、貯蔵穴西側の床1層に相当。
- 床3 暗黄褐色 ソフトローム塊多、しまり有。貼床。
- 床4 暗褐色 ソフトローム粒少(P1と貯蔵穴寄り多)、焼土粒少、しまり有。古い柱穴の埋土または埋め戻し土。P6の柱1層に対応。
- 床5 暗褐色 ソフトローム粒多、今市軽石粒微量、しまり有。貼床。
- P1 ソフトローム粒多、焼土粒微量、やや軟。柱抜取後の覆土。
- 柱1 暗褐色 白色粒多、ソフトローム粒少、焼土粒微量、しまり有。柱裏込土。
- 柱2 暗褐色 白色粒多、ソフトローム粒少、焼土粒微量、しまり有。柱裏込土。
- P4 1 暗褐色 白色粒多、ソフトローム粒多、ソフトローム塊(径1cm)少、ややしまり有。
2 黄褐色 ソフトローム塊(径1~3cm)で充填されている。しまり有。裏込土と思われる。
3 暗褐色 ソフトローム粒多、白色粒少。しまり有。柱を建てる前に埋め戻した層。
- P5 1 暗褐色 ソフトローム粒多、ソフトローム塊(径1cm)壁寄りに少。しまりなし。
- P6 柱1 暗褐色 焼土粒少、軟、床4層に相当。
柱2 暗褐色 ソフトローム粒多、焼土粒微量、軟。
柱3 暗黄褐色 ソフトローム粒多、焼土粒微量、しまり有。裏込土の崩落土。
- P9 1 暗褐色 ソフトローム粒多、軟。
2 黄褐色 ソフトローム塊(径2cm)多、硬。
- P10周辺部 D-D' 貯1 暗褐色 白色粒多、焼土粒・ソフトローム粒少、しまりなし。
貯2 暗褐色 白色粒・焼土粒多、焼土塊(径1cm)・ソフトローム粒少、焼土が特に多。
貯3 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)・白色粒多、しまりなし。粘性有。

カマド

- 1 灰褐色 白色粒少、粘性有。カマドの袖(残りは極めて悪い)。
- 2 暗褐色 白色粒多、ソフトローム粒・焼土粒少、しまりなし。下面が火床面と思われる。
- 3 暗褐色 白色粒多、焼土塊(径1cm)・ソフトローム塊(径2cm)少、しまりなし。古いカマドを壊した時の埋め戻し土。
- 4 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)多、しまり有。カマド掘方の埋め戻し土。
- 5 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2cm)多、かなり硬。P7覆上。
- 6 暗黄褐色 ハードローム塊(径2cm)多、ソフトローム塊(径2cm)少、硬、P7覆上。



第 92 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-58 遺構・遺物

第52表 権現山遺跡 SG10区 SI-58 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高底 残 2.5 復 3.8	外底面は円周方向のヘラケズリで平底。外面体部は斜位のヘラナデ後ヘラケズリ。内面底部は多方向ヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 灰色・透明粗～細 粒やや多、白・赤粗～細粒と 黒細粒少 硬質	北壁際床土 2cm 底 5/12 周 2
2 土師器 杯	口高 復 13～17 残 2.7	内面全体と外面口縁部をヨコナデ後、外面体部ヨコヘラケズリ。内外面を漆仕上げしているかもしれないが不確実。	2.5Y4/1 黄灰 緻密 白・透明細粒少 硬質	貯蔵穴内 口 1/18 周 貯蔵穴
3 石器 砥石	長幅 厚重 残 3.5 2.1～2.6 残 1.1 残 9.0	1面を砥面に使用し、傷状の擦痕がやや目立つ。左側面を使用したかどうかは不明。右側面は図示したとおり深く明瞭な粗い溝状擦痕が多いので、成形時に粗く削った痕と思われる。右側面は図の下部で内側に入ってくるので、砥石の幅は下部が細くなる。	10YR8/3 浅黄橙 緻密でやや硬質な流紋岩質凝 灰岩	床直上 破片 床直

いない。主柱穴は4本と推定され、東側のP1とP4を確認した。北西柱穴P2と南西柱穴P3を攪乱部に想定できるが、確実な遺構としては不明。時期不明の柱穴P-386・P-391をP2とP3に当てるのも一案だが、柱穴が南に寄りすぎて不自然とも考えられる。P1-P4の柱間は2.45m。2本とも同様に床面からの深さ46cm、柱痕径約10cm。補助柱穴のうちP5～P9の5本は貼床除去後に床下で確認した。P7とP8は上部をローム塊で埋め戻され（カマド断面図の5・6層）、P7の上にカマド袖を作っている。床面からの深さはP5=35cm、P6=40cm、P7=60cm、P8=43cm、P9=30cm。貯蔵穴P10は北東隅にあり、東西88×南北79×深さ39cmで、時期不明のP-404に切られている（断面図E-E'）。貯蔵穴の南側へ約70cmの範囲に、周囲の床面よりも1～4cm高い部分がある（断面図D-D'の床2層）。P11とP12は貼床除去後に確認した浅い小穴で、床面からの深さはP11=18cm、P12=17cm。入口施設・壁溝・間仕切溝はない。

【カマド】北壁の東寄りにある。両袖幅77cm、煙道先端から袖先端まで100cm。東西の袖は掘方を埋め戻した整地地面の上に灰褐色土（カマド1層）で造られ、東袖の北部は残りが悪く崩壊・流出したと思われる。カマド下層の掘方は深く、その埋め戻し土であるカマド3層には焼土塊を少し含んでいるので、古い時期のカマドを壊した後に埋め戻した層と推定された。また、西袖は旧期の柱穴P7を埋め戻した上に造られている。この竪穴を正方形に復原した場合、北壁中央よりも東側に偏ってカマドが造られていることが、カマドの作り替えと関連するのかもしれない。

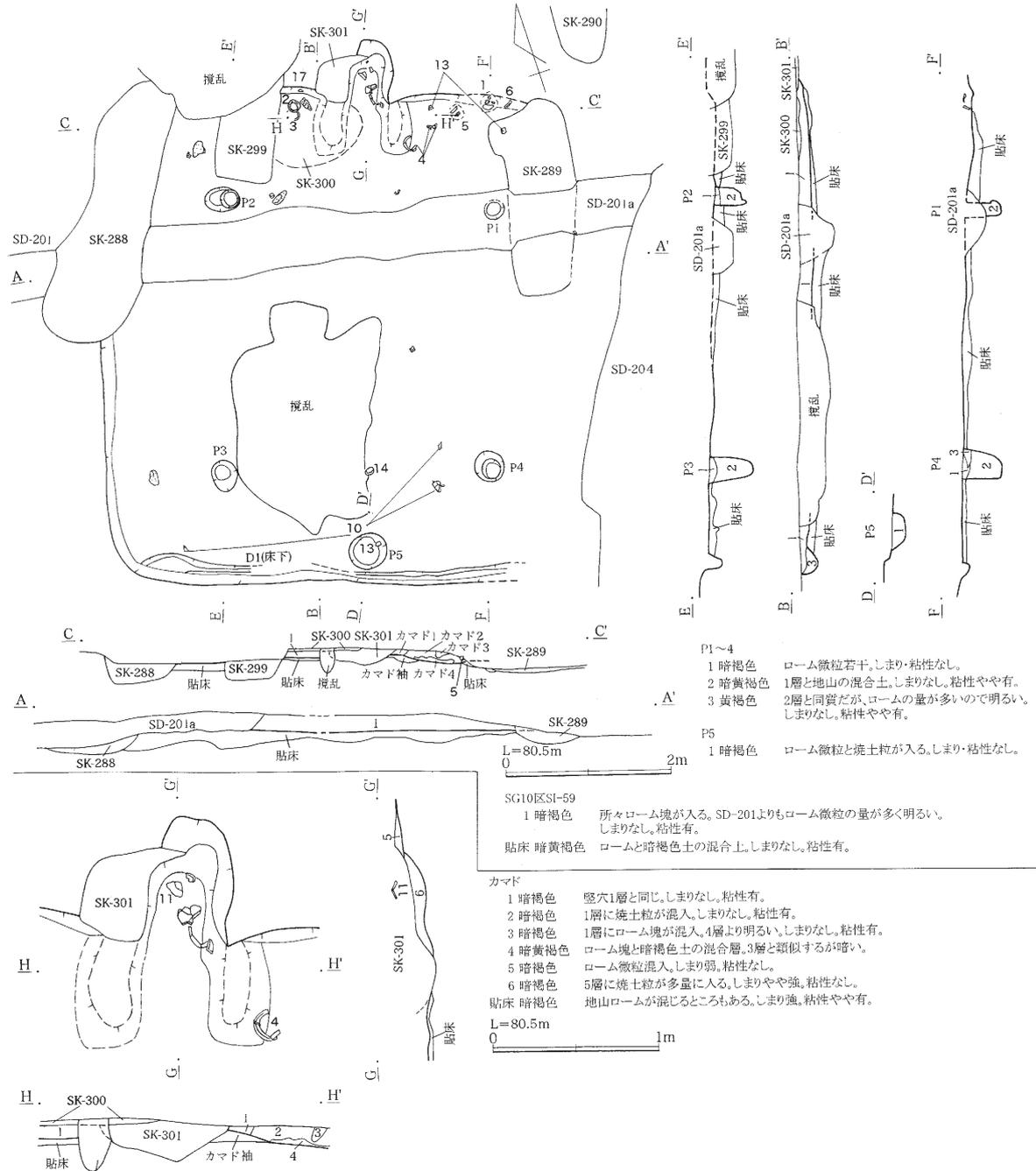
【覆土】竪穴の残りが悪いので覆土は1層だけ残っていた。貼床土の大半はソフトローム塊を主体とする床3層で、貯蔵穴南側の盛土層（床2層）や、古い柱穴P6の埋め戻し土（床4層、断面図I-I'のP6柱1層・柱2層）も認められた。

【遺物および出土状況】遺物は非常に少なく、小破片ばかりである。古墳中期と後期の杯の小破片を図示したうち、貯蔵穴で出土した後期の模倣杯口縁部破片がこの建物の時期を示していると判断した(2)。砥石(3)は比較的硬質。図示した以外に貯蔵穴覆土2層で出土した半球形杯片や大形甌片も、この建物に伴う後期の遺物と考えられた。図示以外の土師器合計30片・227gの内訳は、杯11片・58g、壺甕類18片・160g、甌1片・9g。

SG10区 SI-59（第93・94図、写真図版98・200）

【位置】SG10区中央部の20-18・19グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は西にSI-110、南にSI-58がある。SI-59→SK-301→SK-300の順で、時期不明の円形土坑SK-300・301がカマド付近を切る（カマド断面H-H'）。近世のSD-201と時期不明の不整長方形土坑SK-288・289・299に床面下10～20cmまで壊され、SI-59→SK-288・289→SD-201の順になる。土層の残りが薄いので、SI-59→SK-289の重複関係は推定を含む。攪乱・抜根で北部と南西部を破壊されている。東壁部は削平されて不明だが、SD-201と同時期の近世溝SD-204がSI-59南東隅付近を切っていた可能性がある（SI-59→SD-201・204）。

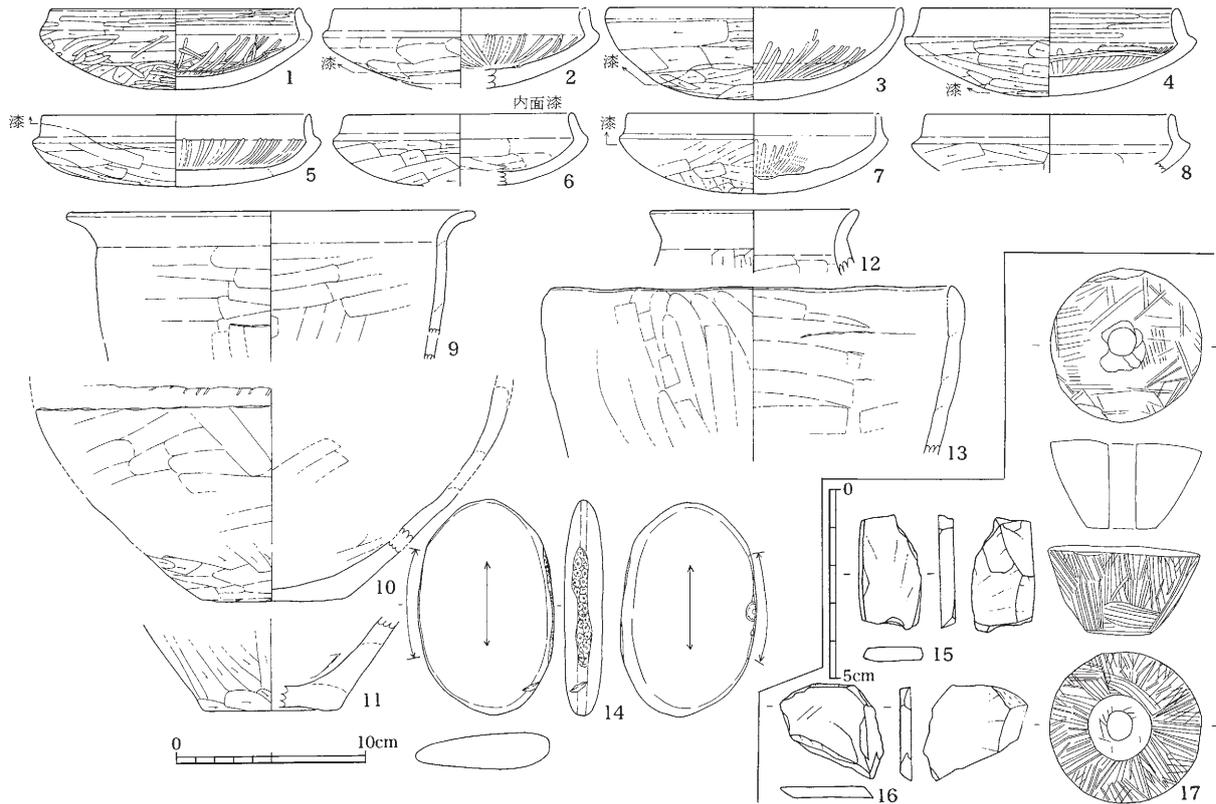
【規模と形状】わずかに東西に長い方形と推定される建物跡で、主軸方位はGN-21°-E。南北長は5.96m。東西両壁から主柱穴までの距離が同様と仮定した場合、推定東西長は6.2m。残存壁高は北壁カマド付近



第93図 権現山遺跡 SG10 区 SI-59 (1) 遺構

で最大 14cm、西壁で 5～10cm。東壁部は削平され確認できない。主柱穴 4 本の柱間は南北 3.15m（東側）～3.30m（西側）、東西 3.20m。P2 や P3 の断面形からみて推定柱径 18cm 前後。床からの深さは P1=40cm、P2=37cm、P3=52cm、P4=47cm。入口施設と考えるには P5 はやや大きく、他の位置に貯蔵穴がないので P5 を貯蔵穴と判断した（径 44～47cm の円形で、床面から深さ 19cm）。SK-289 が SI-58 の床面下へ 13cm までしか壊していないので、北東部にあった貯蔵穴が SK-289 に壊されたと想定するのはやや難しい（断面 C-C'）。深さ 2～6cm の壁溝 D1 を南辺で貼床除去後に確認した。間仕切溝はない。

【カマド】北壁中央にある。両袖推定幅 110～130cm、煙道先端から袖先端まで 138cm。両袖を作る粘土部は残っていない。東袖は下端形状が残るが残存高 3～4cm しかなく、壁穴貼床と同じ土質なので袖基部を構成する最下層と考えられる。西袖全体と煙道西半上部は SK-300・301 と攪乱で消滅する。煙道内は焼



第94図 権現山遺跡 SG10区 SI-59(2) 遺物

土粒が多い。煙道底から9～17cm 浮く甕底部片(11)はカマドを壊すSK-301内にあるが、原図の注記は燃焼部内(断面G-G'の6層)の遺物と記録している。燃焼部からSK-301への流入品と判断した。

[覆土] 残りが薄いのでほとんど単層で、自然埋没と思われる。テフラの層や粒などは認められない。

[遺物出土状況] カマド周辺に最も多い。カマド内の遺物はカマドの項を参照。カマド西側では伏せた杯(3)の上に、口縁部が激しく磨耗した上向きの杯(2)が載り、その北側の床面では、壁に接して紡錘車(17)がある。カマド東側では杯(4)が床上5cmにある。北部を破壊しているSD-201に流入した甕破片もある(9)。南部では床面に砥石がある(14)。

[出土遺物] 遺物は少ない。土師器杯は口縁部が内傾する身模倣杯が主体。6は少量の金色雲母細片を含む。雲母片を含む土師器はSG10区ではSI-12などにある。図示した他に、外傾口縁の模倣杯破片もある。12はきれいな胎土の小形甕。13は口縁部の仕上げナデを行わない特徴的な甕(または鉢)。図示しなかった土師器甕は長胴甕破片が見られ、高杯破片はごく少ない。図示以外の土師器合計241片・1,783gの内訳は、杯137片・558g、高杯9片・98g、小形壺5片・26g、壺甕類89片・1,088g、小形土器1片・13g。須恵器は器種不明(壺?)の小破片がある。紡錘車(17)は、粗い研磨や、泥岩の石材がやや特殊である。SG10区SI-36(鍛冶遺構)・SI-64a・75・SX-308やSG5区SI-4などに紡錘車があり、SG10区SI-36・75の紡錘車には刻線がある。緻密硬質なホルンフェルス製の砥石(14)は、SG10区ではSI-12などに例がある。退化した石製模造品か、またはその素材である粘板岩剥片は、図示した15と16の他に小破片が2点ある。粘板岩剥片はSG10区ではSI-47などに見られる。

第53表 権現山遺跡 SG10区 SI-59 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復13.1 高 残4.3 最大 復14.2	外面は体部ナデ後に底部1方向と体部に横位のヘラケズリ。外面体部に多方向と口縁部に横位のヘラミガキ。内面は体部に放射状ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。漆仕上げは見られない。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 白・灰色・透明粗 ～細粒やや多、赤・黒粗～細 粒少 やや硬質	北東床上12cm。貼床の1片も接合 口1/2周、体2/3周 18、北西貼床

第5章 権現山遺跡 SG10 区

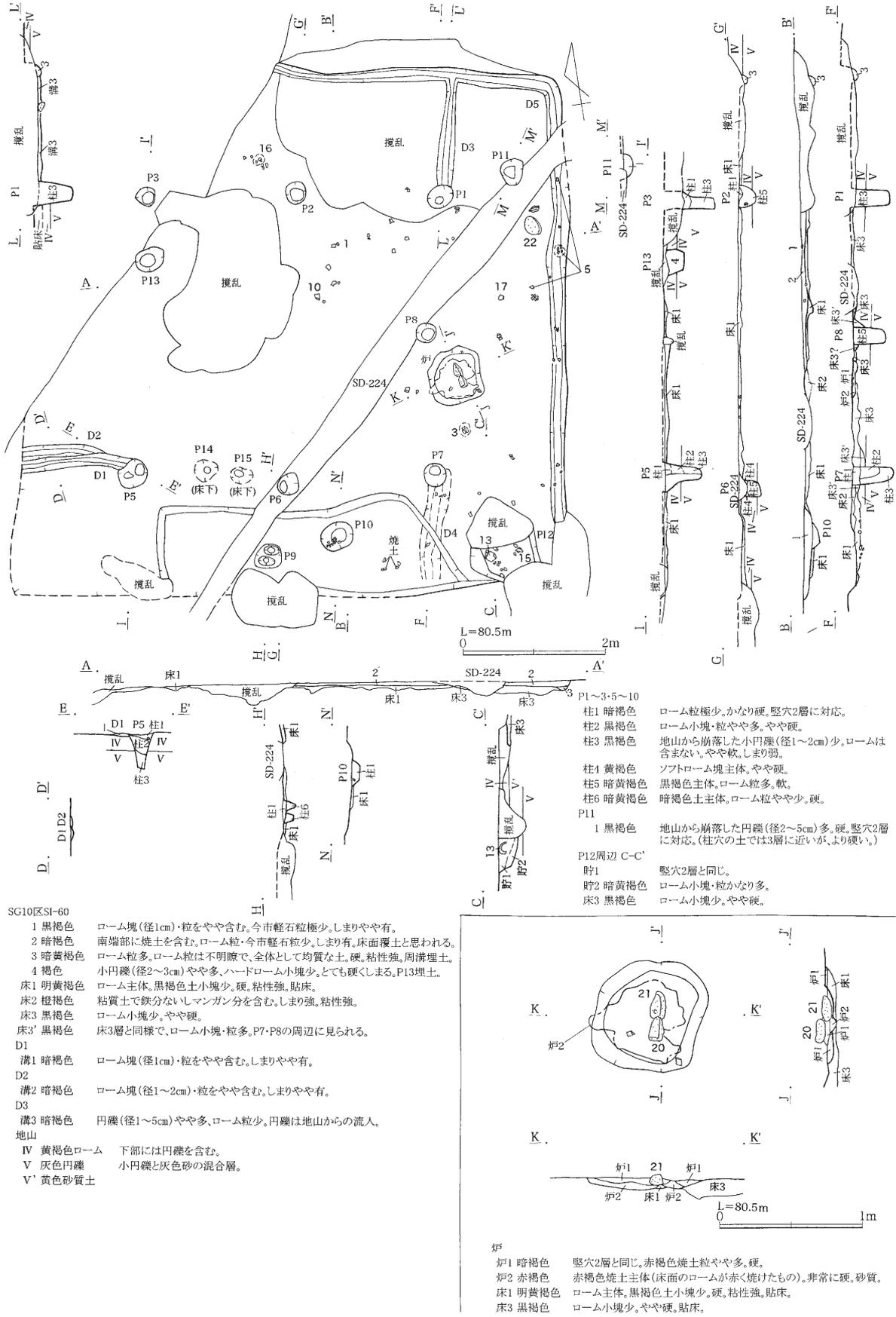
2 土師器 杯	口 13.3 高 残 4.3 最大 復 14.4	外面体部は横位のヘラケズリ後ヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部は密な放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。口縁端部と体部外周の後は使用により激しく磨耗している。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 黒粗～細粒多、白・透明粗～細粒やや多 やや硬質	カマド西床上 3cmで正位口全周、底中央欠 29
3 土師器 杯	口 15.3 高 4.9 最大 15.6 重 残 350.5	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は口縁部を幅広くヨコナデした後に、中～下位に密な放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。	10YR3/1 黒褐 やや緻密 白・黒・透明粗～細粒やや多、灰色礫と赤細粒少 やや硬質	カマド西床上 3cmで逆位ほぼ完形 28
4 土師器 杯	口 13.6 高 4.7 最大 15.3 重 347.4	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は下半部に放射状と上半部に横位のヘラミガキ。外面の底部以外と内面を漆仕上げ。	5YR7/6 橙 やや粗い 黒・透明細粒やや多、白粗～細粒少 やや硬質	カマド東床上 5cm完形 14
5 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 3.8 最大 復 15.1	外面は底部多方向ヘラケズリ、体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面上位と内面に漆仕上げ。ただし、漆は残りが悪く不明瞭。	7.5YR6/3 にぶい褐 やや緻密 黒粗～細粒多、白・透明粗～細粒やや多、灰色細粒少 硬質	北東壁際床上 8cm 口 1/3 周 17
6 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 3.8 最大 復 13.3	外面口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は全体を漆仕上げする。外面は漆仕上げの有無が不明。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒やや少、灰色粗粒と黒・透明細粒と金色雲母細片少 硬質	北東壁際床上 4cm 口 1/6 周、体 1/4 周 20
7 土師器 杯	口 復 13.2 高 残 4.3 最大 復 14.0	外面は底部に 1 方向と体部に横～斜位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面上位と内面に漆仕上げ。口縁端部がほとんど残っていないので端部形状は推定。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 黒粗～細粒と透明細～微粒多、白細粒少 やや硬質	南東部の 12 片が接合し、南西部に 2 片あり 口 1/5 周、体 1/4 周 南東、南西
8 土師器 杯	口 復 12.9 高 残 2.9 最大 復 14.5	外面口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラナデ。内外面を漆仕上げしている可能性もあるが不確実。	7.5YR5/4 にぶい褐 緻密 白・黒細粒やや少、赤・灰色・透明細粒少 硬質	口 1/6 周 南西
9 土師器 甕	口 復 21.4 高 残 7.8	内外面ともに胴上位に横位と中位以下に縦位のヘラナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 灰色粗～細粒と白・黒・透明細粒やや多、白・黒粗粒少 やや硬質	北東部から SD-201 の底上 17cmへ流入。南西部の 1 片も接合 口 1/18 周、胴 1/6 周 3、南西
10 土師器 甕	高 残 12.2 底 7.8 最大 残 24.8	外底面は木葉痕をナデ消している。外面胴部ナデ後、胴部下位ナメヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に斜位のヘラナデ。残存部の上端は積み上げ休止面に鋭い工具で接合強化用の刻みを入れた状態が見える。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・赤・透明細粒やや多、赤粗粒少 硬質	南西床上 3～10cm 胴下半～底 1/2 周 24、25、27、南西、南東、南東 A トレ
11 土師器 甕	高 残 4.9 底 6.9	外底面は凹んだ中央をナデ、外周をヘラケズリ。外面は胴部に斜位と下端に横位のヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 白・灰色細粒多、赤・灰色粗粒と赤・黒・透明細粒少 硬質	カマド煙道部から SK-301へ流入(床上 17cm) 胴～底 1/3 周 3カマド
12 土師器 小形甕	口 復 11.0 高 残 3.4	胴部は外面タテヘラケズリ、内面ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	10YR7/6 明黄褐 緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東部 口 1/8 周、頸 1/4 周 北東
13 土師器 甕	口 復 21.2 高 残 9.0	外面タテナデ後に疎らなタテヘラナデ。内面ヨコヘラナデ。内面は積み上げ痕を少し残す。内外面ともに口縁部のヨコナデ仕上げを行わない。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白・黒細粒やや多、灰色礫と透明細粒少 硬質	カマド東床直上～床上 6cmと P5 底上 4cm 口 5/12 周 16、21、32P5、北西貼床
14 石器 砥石	長 11.3 幅 7.0 厚 2.0	扁平な自然礫をそのまま利用。両方の平坦面と長側縁のうち片方を研磨に使用し、平坦面はかなり平滑に磨耗する。長側縁のうちもう一方は、敲打に使用した痕を顕著に残す。重量 238.8g。	10Y5/1 灰 緻密で非常に硬質なホルンフェルス	中央南部床直上 完形 23
15 石製模造品 剥片	長 3.0 幅 1.6 厚 4.0	両面ともに節理に沿った割れ面で、外周は折れ面。切削や研磨の痕は認められない。重量 2.8g。	7.5Y6/1 灰 緻密で軟質な粘板岩	南西部 完形 南西
16 石製模造品 剥片	長 2.5 幅 2.4 厚 0.3	図の上辺だけがやや風化した自然面で、他の側面と両面は節理に沿った割れ面。切削や研磨の痕は認められない。重量 2.5g。	7.5Y7/1 灰白 緻密で軟質な粘板岩	南西部 完形 南西
17 石製品 紡錘車	径 3.94 × 3.97 厚 2.23 重 38.2	側面は非常に粗い縦方向の擦痕。上面は同様の擦痕を少し消したような浅い多方向擦痕があり、下面はほとんど消されわずかに残る。上面が孔径 7.6～7.8mm、下面が孔径 7.1～7.4mm。上面の孔周囲には穿孔剥離が目立つので、下面から穿孔したと考えられる。	7.5Y4/1 灰 泥岩	カマド西壁際床直上 完形 30

SG10 区 SI-60 (第 95・96 図、写真図版 98・99・200)

[位置] SG10 区中央部の 20-17 グリッドおよび 21-17 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、北に SI-64、東に SI-61、南に SI-50・106 がある。時期不明の SD-224 に切られている。西側は採土工事で破壊されている。後世の攪乱を床面レベルまで受けた部分が、中央部・北東部・南壁中央部・南東隅・貯蔵穴 P12 北側などにある。

[規模と形状] 方形の建物跡で、主軸方位は GN-10° -E。東西 7.68 × 南北 7.46m、壁の残存高は北部で最大 10cm あり、それ以外では 3～9cm しか残っていない部分が多い。北壁も、上部は攪乱されている。

主柱穴は P1～P8 の 8 本と推定されるが、西側中央の P4 だけは推定位置で柱穴を確認できず、欠番にした。柱間は、南北 3.82 (東側)～3.85m (西側)、東西 4.08 (北側)～4.12m (南側)。柱穴径は 20cm 前後 (16～22cm) で、推定柱径は 20cm 弱である。隅柱が深くて中間柱が浅く、床面からの深さは P1=55cm、P2=24cm、P3=70cm、P5=53cm、P6=31cm、P7=61cm、P8=40cm。各主柱穴の下半部は地山ローム層下にある砂礫層 (V 層) に掘り込んでいる。P7 と P8 の周辺にある床 3' 層は、裏込土と考えられる。



SG10区SI-60

- 1 黒褐色 ローム塊(径1cm)・粒をやや含む。今市軽石粒極少。しまりやや有。南端部に焼土を含む。ローム粒・今市軽石粒少。しまり有。床面覆土と思われる。
- 2 暗褐色 ローム粒多。ローム粒は不明瞭で、全体として均質な土。硬。粘性強。周溝埋土。
- 3 暗黄褐色 小円礫(径2~3cm)やや多。ハードローム小塊少。とても硬くしる。P13埋土。
- 4 褐色 ローム主体。黒褐色土小塊少。硬。粘性強。貼床。
- 床1 明黄褐色 粘質土で鉄分ないシマンガン分を含む。しまり強。粘性強。
- 床2 橙褐色 ローム小塊少。やや硬。
- 床3 黒褐色 床3層と同様で、ローム小塊・粒多。P7・P8の周辺に見られる。
- 床3' 黒褐色
- D1 溝1 暗褐色 ローム塊(径1cm)・粒をやや含む。しまりやや有。
- D2 溝2 暗褐色 ローム塊(径1~2cm)・粒をやや含む。しまりやや有。
- D3 溝3 暗褐色 円礫(径1~5cm)やや多。ローム粒少。円礫は地山からの流入。
- 地山
- IV 黄褐色ローム 下部には円礫を含む。
- V 灰色円礫 小円礫と灰色砂の混合層。
- V' 黄色砂質土

- P1~3・5~10 柱1 暗褐色 ローム粒極少。かなり硬。堅穴2層に対応。
- 柱2 黒褐色 ローム小塊・粒やや多。やや硬。
- 柱3 黒褐色 地山から崩落した小円礫(径1~2cm)少。ロームは含まない。やや軟。しまり弱。
- 柱4 黄褐色 ソフトローム塊主体。やや硬。
- 柱5 暗黄褐色 黒褐色主体。ローム粒多。軟。
- 柱6 暗黄褐色 暗褐色土主体。ローム粒やや少。硬。
- P11 1 黒褐色 地山から崩落した円礫(径2~5cm)多。硬。堅穴2層に対応。(柱穴の土では3層に近いが、より硬い。)
- P12周辺 C-C' 貯1 堅穴2層と同じ。
- 貯2 暗黄褐色 ローム小塊・粒かなり多。
- 床3 黒褐色 ローム小塊少。やや硬。

- 炉 炉1 暗褐色 堅穴2層と同じ。赤褐色焼土粒やや多。硬。
- 炉2 赤褐色 赤褐色焼土主体(床面のロームが赤く焼けたもの)。非常に硬。砂質。
- 床1 明黄褐色 ローム主体。黒褐色土小塊少。硬。粘性強。貼床。
- 床3 黒褐色 ローム小塊少。やや硬。貼床。

第95図 権現山遺跡 SG10区 SI-60 (1) 遺構

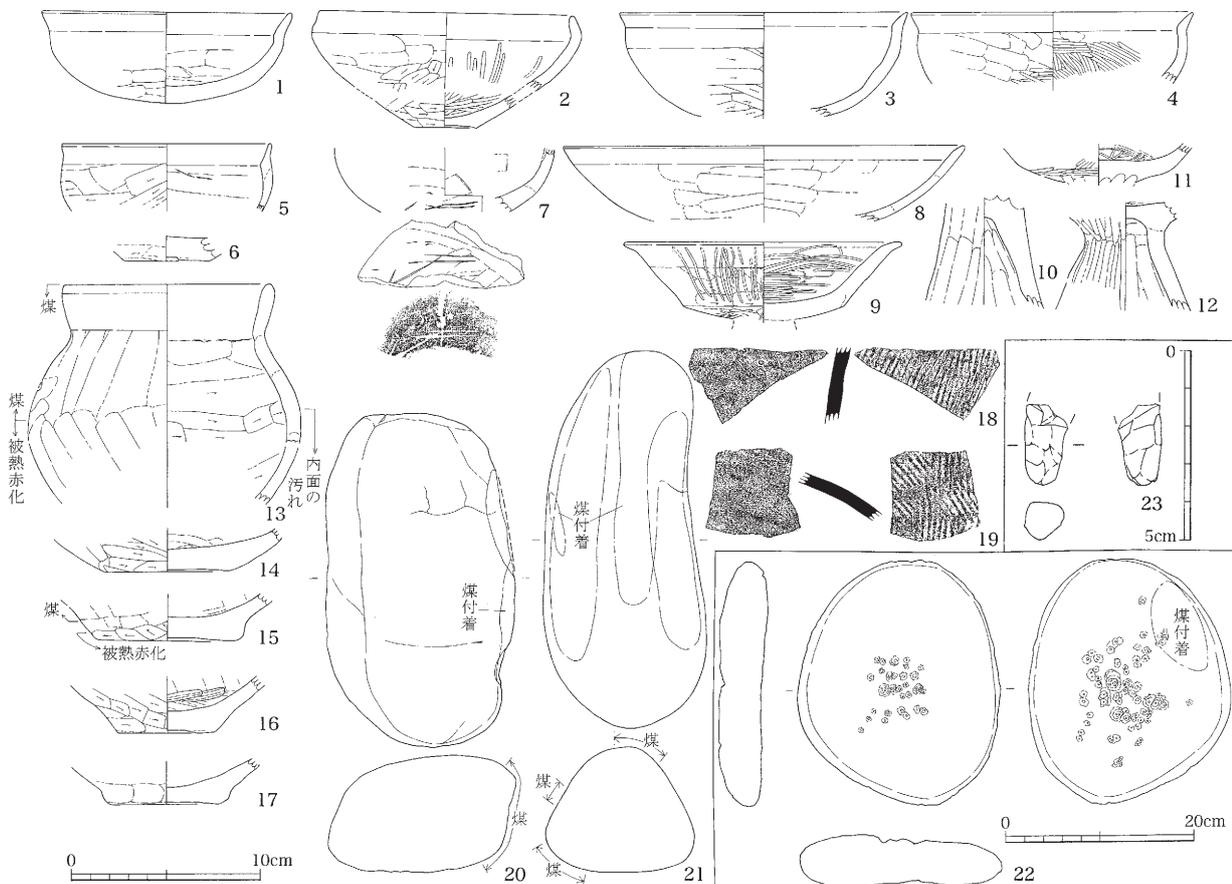
入口部が低くなる点が SI-25 に類似する。東西 4.3 × 南北 1.1 ~ 1.5m の範囲で、南壁寄りの床面が 3 ~ 8cm 低い範囲が入口施設と考えられる。この入口施設周囲に土手状盛土が巡っていたことを想定できるが、この付近では遺構確認面が竪穴床面とほぼ同じなので土手を確認できなかった。入口ピット（梯子穴）の可能性を持つ P9 と P10 がこの範囲内にあり、周囲からの深さは P9 が 16 ~ 19cm、P10 が 12cm。他に、竪穴の北東部に補助柱穴 P11（径 36 × 深さ 18cm）、北西部で P13（径 33 ~ 43cm・深さ 30cm）がある。南西部で貼床除去後に浅い穴 P14（床面から深さ 5cm）と P15（深さ 14cm）が認められた。

南東隅にある貯蔵穴 P12 は東西 95 × 南北残存 64cm（推定 70 ~ 90cm） × 深さ 8cm。壁溝 D5 は北側と東側で認められ、深さ 14 ~ 18cm。P1・P5・P7 に間仕切溝 D1 ~ D4 が接続する。間仕切溝の幅は 20cm 前後（広くても 30cm 未満）で、床面からの深さは D3（P1 北側溝）が 9 ~ 11cm、D1 と D2（P5 西側溝）が 2 ~ 3cm、D4（P7 南側溝）が 11 ~ 13cm。P5 西側の間仕切溝は南溝 D1 が北溝 D2 を切り、D1・D2 の覆土は自然流入土と判断された（断面図 D-D'）。P7 南側の間仕切溝 D4 は床面で確認できず貼床除去後に確認したもので、南端部は入口施設の一段低い部分の下部に入り込んでいる。貼床土中には自然礫が混じっていて、竪穴を掘削した地山 IV 層・V 層に混在している自然礫を貼床に混ぜたと考えられる。

【炉】 南東部にあり、南北 78 × 東西 82cm の隅丸方形で、底面は中央部が周囲よりも少し深い。よく焼けた炉 2 層が底面に広がっている。長さ 18cm 前後の自然礫が 2 点、炉の覆土中に少し重なって置かれている（20・21）。

【覆土】 覆土が薄いのであまり層を分けられなかったが、貯蔵穴 P12 の土層から見て自然埋没と思われる。古墳時代の白色テフラ粒などはなく、縄文草創期の今市軽石が少し混入していた程度である。

【遺物出土状況】 遺構の残りが 10cm 以下なので、遺物はすべて床面に近い。東半部および貯蔵穴 P12 付近にやや遺物が多い。貯蔵穴覆土の上層には口を西に向けた完形に近い小形甕が横転している（13）。北東部



第 96 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-60 (2) 遺物

の床面には台石が置かれていた(22)。

[出土遺物] 7は外面を研磨具に転用した鋭い沈線状の痕跡が残る。やや薄く丁寧で口縁が外反する9や、密に磨く11は、通有の高杯と少し異なる。15のように白色針状物質(骨針)を含む土師器は搬入品で、SG10区SI-23などに見られる。内面を丁寧にナデ消して無文にした須恵器甕破片が2点あり(18・19)、SG10区SI-10などで出土した破片に少し似ているが、別物と判断した。土製品(23)は土製勾玉などの土玉破片かもしれない。土製勾玉はSG10区SI-6にある。台石(22)は床面に置かれていたので、縄文時代の石皿兼凹石を古墳時代に再利用した可能性がある。

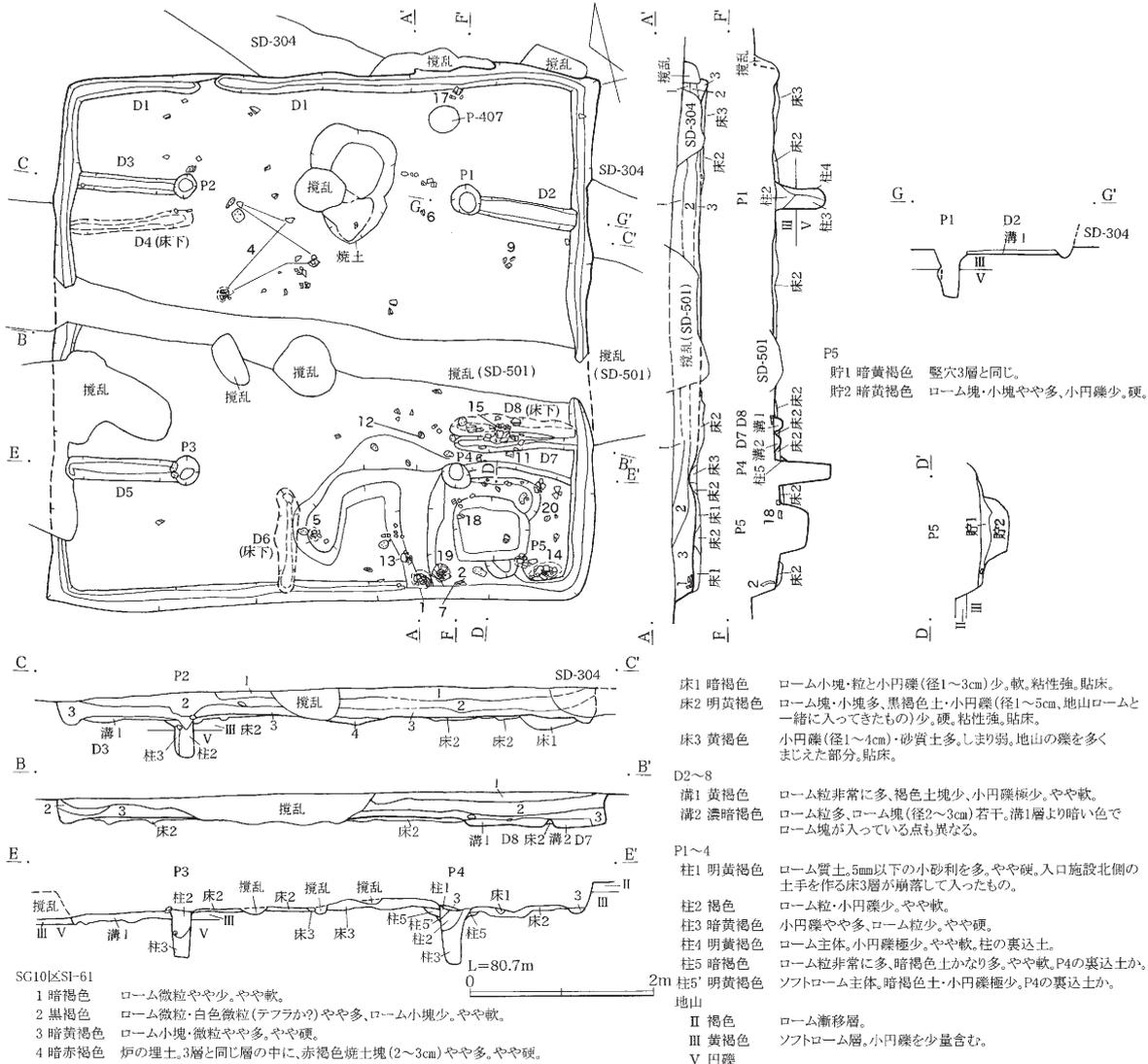
各器種ともに破片数は多いが、あまり接合できなかった。図示した以外の遺物量は少なめで、杯類口縁部は内斜口縁3点以上と半球状1点があり、初期模倣杯破片は図示したものだけである。高杯は脚柱部で数えて6点、壺甕類は図示以外に底部で数えて3点。図示以外の土師器合計449片・3,393gの内訳は、杯147片・656g、高杯64片・583g、小形壺5片・81g、壺甕類233片・2,073g。図示以外の須恵器は頸～甕の胴部小破片が3片ある。これらの他に平安時代の須恵器杯と思われる小破片1片がある。

第54表 権現山遺跡SG10区SI-60出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復13.2 高 4.8	外面は底面に多方向ヘラナデ、口縁部に横位のナデ。内面は体部をヨコヘラナデし、口縁部をヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤礫と白・黒・赤・透明細粒やや少 やや硬質	中央床土2cmと遺構確認 面 口1/8周 55、北西攪乱、上面
2 土師器 杯	口 復13.4 高 推約6 底 復3.2 最大 復14.0	口縁部と底部破片の接合する箇所がないので器高は推定。外面は体部上位に雑なナデ後、中位以下と外底面を主にヨコヘラケズリして凹底にする。外面口縁部と内面ヨコナデ、内面体～底部に縦および斜位のヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 透明粗～細粒と黒 細粒やや少、灰色粗粒と白細 粒少 硬質	貯蔵穴北側の攪乱 口1/6周、底1/3周 Cベルト攪乱、C'東攪 乱
3 土師器 杯	口 復15.0 高 残5.5	口～体部境のラインが内外面で比較的明瞭に屈曲する。外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面はかなり磨耗しているので調整が不明。	7.5YR7/8 黄橙 やや緻密 赤・黒・透明粗粒 やや多、白粗～細粒少 やや硬質	南東床直上と南東隅攪 乱 口1/6周 18、C'周辺攪乱
4 土師器 杯	口 復14.7 高 残3.8	口～体部境の稜が内面で明瞭。外面は口縁部ヨコナデと体部ナメヘラナデの後に体部下位ヨコヘラミガキ。内面は口～頸部ヨコナデ後に体部を横～斜位ヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒少 やや硬質	口1/4周 北東攪乱
5 土師器 杯	口 復11.0 高 残3.6	口～体部境の稜線は内面で明瞭。外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部ナメヘラケズリ。内面は体部に横位のヘラナデまたはナデの後に口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤・透明粗～細粒 多、白・灰色粗粒と白・黒細 粒少 やや硬質	東部床土3cmと壁溝底土 3～6cmが接合 口1/6周 38、40、42
6 土師器 杯	高 残1.3 底 4.4	外底面は中央部ナデ、外周部は粘土貼付後に多方向のヘラナデ。外面の胴部下端はヨコヘラケズリ、内底面は放射状ヘラミガキ。被熱痕は見られない。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 灰色粗粒と白粗～ 細粒やや多、黒・透明細粒少 硬質	底全周 Aベルト西ハシ攪乱、北 東攪乱
7 土師器 杯	高 残3.4 最大 復11.6	外面は主に横位のナデ、内面は横～斜位のヘラナデ。研磨具に転用した鋭い沈線状の痕跡が外面にある。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白 粗～細粒と黒・透明細粒やや 多 やや硬質	中央～西部の攪乱 体1/4周 Aベルト西攪乱
8 土師器 高杯	口 復21.0 高 残4.0	内外面ともに杯体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。ただし磨滅気味なので不明瞭な部分が多い。	5YR6/8 橙 やや粗い、白・黒細粒と灰色 細砂多、灰色礫と透明粗粒と 赤粗～細粒少 やや軟質	北西の攪乱部 口1/6周 Iベルト北攪乱
9 土師器 高杯	口 復14.5 高 残4.1	口縁端が外反する。外面は杯体部ナメヘラナデと下端～底部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、全体をタテヘラミガキ。内面は杯体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後に全体をヨコヘラミガキ。杯底部外面中央に脚を接合した面が剥がれている。	5YR6/6 橙 緻密 黒・透明細粒やや少、 赤粗粒と白細粒少 やや硬質	遺構確認面 口1/12周、杯底1/3 周 上面
10 土師器 高杯	高 残5.8	外面はおそらくタテヘラケズリ後にタテヘラナデで、ヘラミガキをしているかもしれないが磨滅気味なので不明。内面はタテナデ。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや緻密 黒・透明粗粒多、 白・赤粗～細粒やや少、灰色 粗粒少 やや硬質	中央床直上 脚柱全周 52
11 土師器 高杯	高 残2.2	外面は杯底部を縦～斜位ヘラナデ、杯体部に横位と斜位の密なヘラミガキ。内面は多方向の密なヘラミガキ。	5YR6/6 橙 緻密 灰色・透明粗粒と白・ 黒・赤細粒少 硬質	遺構確認面 杯底1/2周 上面
12 土師器 高杯	高 残5.7	外面のタテヘラミガキは脚部がやや密で、杯底部がやや疎らに磨いている。杯内面は杯底部に密な1方向ヘラミガキ。脚内面は横位後に縦位ナデ。	2.5YR6/6 橙 やや粗い 赤・黒細粒多、 黒・透明粗粒と白細粒少 やや硬質	遺構確認面 脚柱全周 上面
13 土師器 小形甕	口 復10.7 高 残11.6 最大 14.2	外面は胴部ナメナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は胴部に斜～横位ヘラケズリ後肩部ナデ、口縁部ヨコナデ。外面胴中位を境にして下が被熱赤化し、上に煤付着。内面胴下半に黒色の汚れが少々見られる。	10YR4/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、赤粗粒と黒細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上10cm 口3/4周、胴2/3周 1
14 土師器 甕	高 残2.3 底 復6.4	外底面は中央部1方向の後に外周部を削り、わずかに凹底状。外面胴部に横～斜位のヘラケズリ。内底面はおおよそ1方向のヘラナデ。被熱痕等は見られない。	2.5Y4/1 黄灰 粗い 透明粗粒と白粗～細粒 多、白・灰色礫やや多、黒細 粒少 硬質	底5/12周 Bベルト北攪乱

第5章 権現山遺跡 SG10 区

15 土師器 甕	高底 残 2.5 6.9~ 7.4	外底面は中央部に1方向と外周部に円周方向のヘラケズリ。外面胴部に横位と縦位のヘラナデ、胴下端にヨコヘラケズリ。内面は多方向ヘラナデ。外面胴部に煤が少量付着し、外底面が被熱する。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗~細粒 多、白粗粒と黒・灰色粗~細 粒やや多、白礫と白色針状物 質少 やや硬質	貯蔵穴底上 5cm 底 3/4 周 10
16 土師器 甕	高底 残 3.0 復 5.0	外底面は中央部に1方向ヘラケズリ、外周に薄く粘土貼付後にヘラナデ。外面胴下端ナメヘラケズリ。内面は多方向ヘラナデと底外周にヨコハケ。外面全体が被熱している可能性あり。	7.5YR4/2 灰褐 やや粗い 白細粒多、透明粗 ~細粒と黒細粒やや多 硬質	北部床上 5cm 底 1/4 周 57
17 土師器 甕	高底 残 2.4 復 5.8	外底面にやや雑なナデ。外面胴部に横~斜位ナデ。内面は磨滅しているため調整不明。被熱痕等は見られない。	10YR6/4 にぶい黄褐 やや粗い 白・黒・透明粗~ 細粒多、灰色礫~粗粒と赤細 粒少 やや軟質	東部床上 2cm 底 1/3 周 32
18 須恵器 甕	高底 残 4.0	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で縦位の平行叩き。内面は横位のナデで無文。19と同一個体かもしれない。	5Y5/1 灰 緻密 白粗粒微量 やや硬質	遺構確認面 胴下半一部片 上面
19 須恵器 甕		外面は木目平行の溝を彫った叩き板で縦位の平行叩き。内面は横位のナデで無文。外面に非常に薄く灰黄色に発色した自然釉がかかる。胴上半の破片。18と同一個体かもしれない。	5Y5/1 灰 緻密 白粗粒微量 やや硬質	胴上半一部片 北東攪乱
20 礫	長幅厚 17.4 9.8 6.2	断面が楕円形で棒状の自然の河原石。図の右上部が薄く剥離破損して、右下部に煤が薄く付着する。明確な被熱赤化部は見られない。重量 1625.4g。	10YR7/4 にぶい黄橙 比較的緻密で硬質な安山岩	炉底上 4cm 完形 62
21 礫	長幅厚 19.9 8.5 6.6	断面が隅丸三角形で棒状の自然の河原石。図上半の稜に近い部分を中心として煤が薄く付着する。明確な被熱痕は認められない。重量 1565.0g。	10YR6/2 灰黄褐 安山岩	炉底上 2cm 完形 63
22 石器 台石	長幅厚重 25.7 21.2 5.6 3478.0	両面の中央がごくわずかに凹む板状の石の両面を使用し、敲打によって「蜂の巣石」状になっている。最も深い凹みは深さ 4~6mm程度。側面使用痕や研磨痕は見られない。片面の図示部に薄く煤が付着する。縄文時代の石皿を古墳時代に再利用した可能性もある。	5B6/1 青灰 非常に多孔質で硬質な安山岩	北東床上 2cm 完形 64
23 土師質 土製品	高重 残 2.1 残 2.0	わずかにカーブする棒状製品の先端部で、全面をユビナデで丁寧に仕上げる。土製勾玉の可能性もある。孔や塗布物は認められない。	10R6/8 赤橙 緻密 白・黒微粒微量 やや硬質	北西攪乱

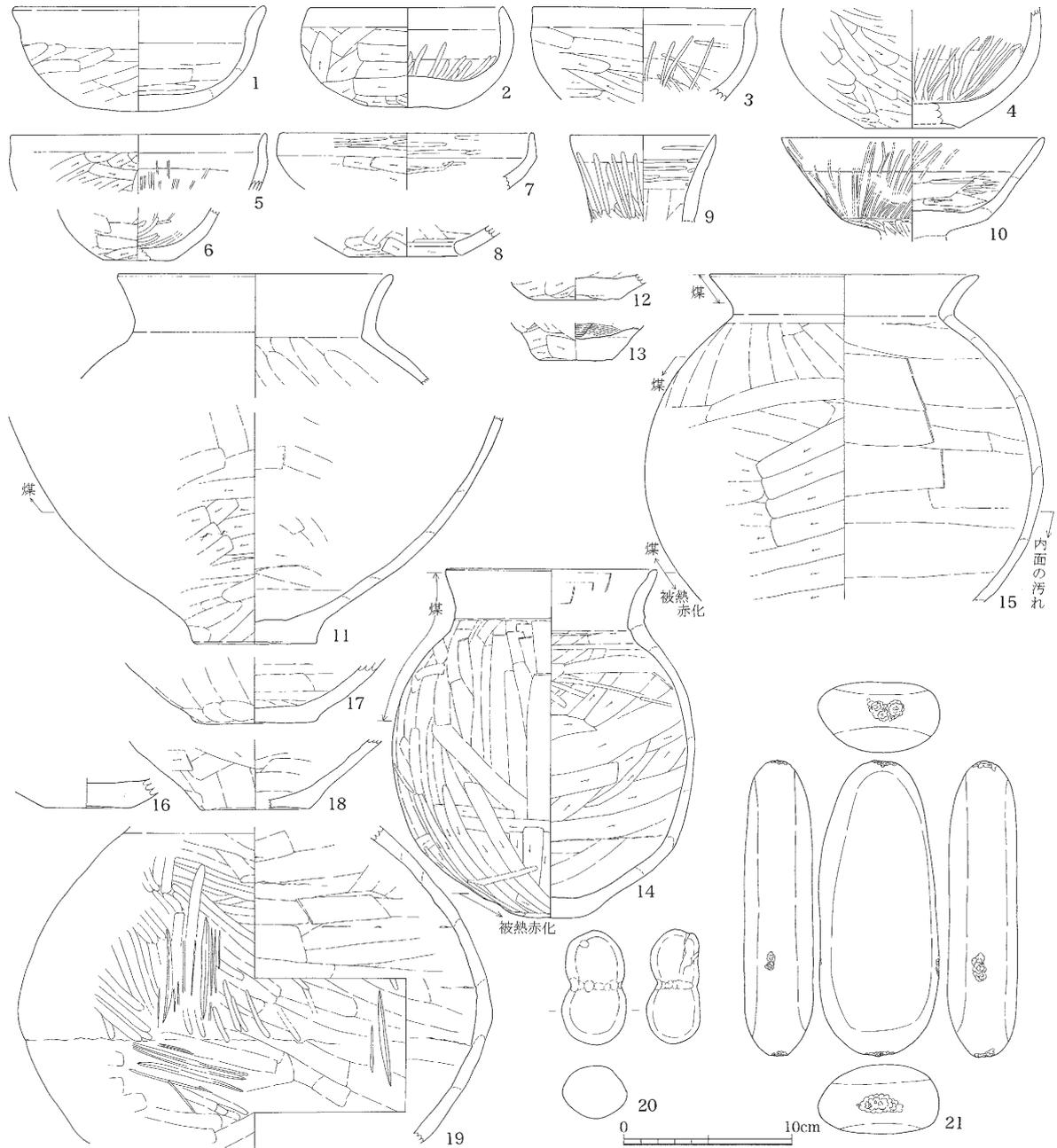


SG10区 SI-61 (第97・98図、写真図版99・100・200)

[位置]SG10区中央部の21-18グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は西にSI-60・64、東にSI-76がある。北東部を古墳中期末葉ころのSD-304bと時期不明のP-407に切れ、SD-61→SD-304b→P-407の順序が考えられる。東西方向の攪乱溝(調査時名称SD-501)に中央部を切られる。

[規模と形状]方形の建物跡で、主軸方位はGN-16°30'-E。東西5.94×南北6.00m、残存壁高は最小17cm(北西部)～最大36cm(南東部)。主柱穴は4本で、柱間は南北2.95m(東側)～3.15m(西側)、東西2.90m(南側)～3.05m(北側)。P1・P2の柱痕からみると柱径は約14cmで、床面からの深さはP1=52cm、P2=43cm、P3=52cm、P4=59cm。各柱穴の中位よりも下部は地山円礫層(V層)に掘り込んでいる。P4の上部外周に、竪穴の貼床施工前に柱裏込土を入れたことがわかる(柱5層と柱5'層)。

貯蔵穴P5は南東隅にあり、東西82×南北69×深さ35cm。P5の西側には入口施設と考えられる土手



第98図 権現山遺跡 SG10区 SI-61 (2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

状盛土がコ字形に巡り、規模は東西 163 × 南北 140 ～ 170cm、床面からの高さが 3 ～ 6cm。この土手は、地山に見られる円礫を多く含む土を貼って作られている（床 3 層）。貯蔵穴を掘る時に地山 III 層から掘り出した礫混じりローム土を、貯蔵穴と入口の周囲に積んだと考えられる。全周する壁溝 D1 は深さ 2 ～ 8cm。間仕切溝は D2 ～ D8 の 7 本があり、幅 20cm 前後。床面で確認した 4 本のうち D2・D3・D7 は床面から深さ 4 ～ 6cm で、南西柱穴 P3 に附属する D5 はやや深い（7 ～ 11cm）。貼床除去後に確認した間仕切溝 D4・D6・D8 は、床面レベルから溝底面までが 8 ～ 17cm の深い溝で、埋め戻された旧期溝の可能性はある。入口施設の西側にある D6 の北端部は床面下 18cm まで深くなる。

〔炉〕 北側支柱穴の間付近にある。北部の幅が広い卵形で、東西 94 × 南北 130cm × 床面から深さ 7cm。炉の南半部では断面図 C-C' の 4 層に焼土が見られるのに対して、炉北半部の底面は焼土・炭・灰が全くみられず、炉北半では火をあまり焚かなかったとも考えられる。北半部の炉底面に見える黒色土が床下まで続き、その下方で掘方底が床面下 24cm まで土坑状に深くなっていたので、古い時期に木根などで床面下まで攪乱された可能性も、調査時の所見で指摘されている。

〔覆土〕 自然埋没と思われる。2 層に含んでいる白色微粒は古墳時代遺構の覆土によくみられるテフラ粒の可能性があり、分析は実施していないが古墳後期初頭に降下した Hr-FA に相当することが考えられる。

〔遺物出土状況〕 貯蔵穴 P5 周辺以外では、遺物が少ない。貯蔵穴の南側では床面上数 cm のレベルに杯・壺・甕があり（2・14・19）、2 と 14 は貯蔵穴 P5 に転落流入した破片と接合した。貯蔵穴北側では D7 周辺の床付近に甕 11・15 がある。高杯（10）は竪穴の北西部で出土し、SD-304 にも破片が混入していた。平安時代の土坑 SK-235 で出土した須恵器大甕片と同一個体と見られる小片が 1 点ある。

〔出土遺物〕 2 と 4 はかなり深い杯。体部境に稜を持ち、口縁部を横に磨く 7 は、須恵器杯の影響を受けた初期模倣杯と考えられる。甕は胴部が丸く、煤が目立つ（14・15）。14 はやや不明瞭な平底。19 は外面を研磨具に転用した大形壺。図示以外の土師器は小片ばかりで合計 332 片・3,049g あり、その内訳は杯 160 片・932g、高杯 11 片・80g、鉢 1 片・42g、小形壺 2 片・20g、壺甕類 157 片・1,960g、甑 1 片・15g。図示した以外の杯底部は 4 点（平底 1・丸底 3）、甕底部は 5 点ある。長さ 7 ～ 10cm くらいの小礫が約 10 点ある。縄文時代の田戸下層式土器片・打製石斧・敲石なども混入していた（『東谷・中島地区遺跡群 10』の第 36 図 47・49・56・58・68・81、第 37 図 91、第 48 図 44）。

第 55 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-61 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 15.0 高 残 6.3	外面は口縁部ヨコナデ、底部に 1 方向と体部に横位のヘラナデ。外面体部はヘラナデの前にヘラケズリをしている可能性がある。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白粗～細粒と黒・透明細粒やや多、赤・灰色粗粒少 軟質	南壁際床上 5cm 口 1/2 周、底全周 36
2 土師器 杯	口 11.5 高 6.0 最大 12.9	底部が非常に厚く重い。外面は体部上位ナデ、底部に多方向と体部中～下位に横方向のヘラケズリ。内面は底部にやや雑なナデと口～体部にヨコナデ後、体部に放射状ヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白粗～細粒と黒細粒やや少、白・灰色礫と赤粗粒と透明細粒少 やや硬質	南東床上 7 ～ 8cm と貯蔵穴底上 20cm が接合 口 3/4 周 2、32、33、北東
3 土師器 杯	口 復 13.2 高 残 5.6	外面体部上半にナデまたはヘラナデ後、中位以下ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデと体部ヘラナデ後、疎らな縦および斜位のヘラミガキ。外面全体に煤付着。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北西部の攪乱溝へ流入 口 1/6 周 北西攪乱 (SD-501)
4 土師器 杯	高 残 7.2 底 復 5.6 最大 復 15.4	下半部が厚く重い。外底面は粗い多方向ヘラケズリで凹底状。外面体部ナメヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ後にタテヘラミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 黒・透明粒やや多、赤粗粒と白細粒少 やや硬質	中央床直上～床上 2cm が接合 底 1/2 周、体 2/3 周 46、47、61、62、66
5 土師器 杯	口 復 15.0 最大 復 15.3	外面は口縁部ヨコナデと体部横～斜位ヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後にタテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・灰色粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	南西床上 5cm 口 1/6 周 41
6 土師器 杯	高 残 2.5 底 復 4.0	外底面は多方向ヘラケズリで平底。外面体部ヨコヘラナデと体部下端ナメヘラケズリ。内面はナメナデ後ナメヘラケズリ。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 白粗～細粒やや多、透明粗粒と黒細粒少 やや硬質	北東床直上 底 5/12 周 72
7 土師器 杯	口 復 15.0 高 残 3.4	残存部分が少ないので、復原径は参考値。外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラケズリ。内面は口縁部から体部までヨコナデ後ヨコヘラミガキで、体部のミガキは少し斜めになる。	2.5YR4/8 赤褐 やや緻密 白細粒多、赤粗粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南東壁際床上 10cm 口 1/6 周 34、A ベルト南端 3 層
8 土師器 甑	底 復 6.2 孔 復 5.6	小破片から復原しているため、復原径は正確ではなく参考値。外面ナメヘラケズリ。孔縁部ヨコヘラケズリ、内面胴部ナメヘラナデ。	7.5YR6/3 にぶい褐 やや緻密 黒・透明細粒やや多、白細粒少 やや軟質	底 1/6 周 南西攪乱

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

9 土師器 小形壺	口 復 8.6 高 残 5.2	頸の接合部で破損した破片。外面はタテヘラケズリと頸下ナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、全体を粗くタテヘラミガキ。内面は頸部にヨコおよびナメヘラナデ、口～頸部上半ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや緻密 赤粗粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	中央東部床上 9cm 口1/3周 12、北壁中央攪乱
10 土師器 高杯	口 復 15.0 高 残 6.0	外面の杯底部は外周ヨコヘラケズリ後に放射状ヘラケズリ。外面杯体部ヘラナデ(?)と口縁部ヨコナデの後にナメヘラミガキ。内面は杯底部多方向ヘラケズリ、杯体部ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデの後に斜～横位ヘラミガキ。 [注記]21.6-18.4上面、北西3層、SD-304 194、200、208、210、215	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒と白細 粒多、白礫と黒・透明粗～細 粒少 やや軟質	北西部の遺構確認面と3 層が接合。SD-304に7 片混入 口1/3周、杯底全周 注記は左欄
11 土師器 甕	口 復 16.4 高 残 17.9 底 7.4	外底面は中央が凹み、外周に薄く粘土を貼ってナデ。外面胴部下端ナメナデ、胴部ヘラナデ後に下半ヨコヘラケズリ。内面は胴部ヨコヘラナデ、肩部ナメナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面肩部は磨滅が著しいため調整不明瞭。外面中に煤付着。 [注記]4、5、8～10、14、15、17、19、20、23、24、44、Bベルト東2層、Bベルト東3層、Bベルト西3層、Bベルト南3層、Bベルト南タン3層、南東、南東区1層、南東2層カ、南西区、P5上面	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 白粗～細粒多、黒・ 透明細粒やや少、白・灰色・ 透明礫少 やや硬質	南東床直上～床上 21cm で接合 口1/3周、胴中～下位 1/3周、底3/4周 注記は左欄
12 土師器 甕	高 残 1.1 底 5.5	外底面は外周に粘土を貼って多方向ヘラナデし、中央が1段凹む。外面胴下ヨコヘラケズリ。内面底部は円周方向の雑なナデ。	5YR5/3 にぶい赤褐 やや粗い 灰色礫～粗粒と 白・透明粗～細粒多、赤粗粒 と黒細粒少 硬質	南東床上 2cm 底全周 21
13 土師器 甕	高 残 2.3 底 4.4	底部が厚く胴部が薄い。外底面は1方向ヘラナデ。外面胴部ナデ後にヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横位のハケメ。外面の胴部から底部にかけて径6cm大の黒斑があるので、煮炊には使っていないと思われる。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・灰色礫～粗粒 と黒・透明細粒多、赤粗粒少 硬質	南東床上 4cm 底全周 38
14 土師器 甕	口 復 12.6 高 25.7 底 3.5 最大 18.0	外底面は多方向ヘラナデで、外周が不明瞭な平底。外面胴部はタテヘラナデ後に胴下位ヨコヘラケズリ後タテヘラケズリ。外面口縁部はヨコナデで、頸部との境に浅い段を持つ。内面は胴下部ナメヘラナデ、胴中位ナメヘラケズリ、肩部ナメ後ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面の底部が少し被熱し、口～胴上位に煤が若干付着する。 [注記]1、2、27、28、32、100、南東区1層、南東1層	5YR4/2 灰褐 やや粗い 透明粗粒と白・灰 色細粒やや多、白・灰色礫と 白粗粒と赤細粒やや少 硬質	南東隅床上 2cm。周辺の 床上 7～15cmと貯蔵穴 底上 20cmの破片と接合 口1/12周、頸1/2周、 底全周 注記は左欄
15 土師器 甕	口 復 16.0 高 残 19.4 最大 復 23.6	外面肩部ナメヘラナデ後に胴中位以上ヨコヘラケズリおよびヨコヘラナデ。内面胴部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面胴下位が被熱して胴中位と口縁部に煤が多量に付着。内面胴下位に黒褐色の汚れが付着。 [注記]6、10～13、57、Bベルト東2層	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白・黒・赤細粒多、 白礫と白・灰色・透明粗～細 粒やや多 やや軟質	南東床上 3～6cmで接 合。北部にも破片あり 口1/3周、頸1/2周、 胴1/6周 注記は左欄
16 土師器 大形壺	底 5.6	外底面は多方向にヘラナデして中央がわずかに凹む。外面胴部ナデ。内面底部ヘラナデまたはヘラミガキで弱い光沢を持つ。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白細粒多、赤粗粒 と黒・透明細粒少 硬質	底 1/2周 北西攪乱坑
17 土師器 大形壺	高 残 3.7 底 7.3	やや突出している外底面を1方向ヘラナデし、中央がわずかに凹む。外面胴部タテナデ、胴部下端ナメユビナデ。内面は底部多方向ナデと胴部ヨコヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明粗～細粒やや多、白 礫と赤細粒少 やや硬質	北壁際床直上 底 1/2周 76
18 土師器 大形壺	高 残 4.2 底 復 6.4	外底面は粗い多方向のヘラケズリで少し凹底状。外面胴部にナメナデと横～斜位ヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ。	2.5YR5/6 明赤褐 緻密 白細粒やや少、赤・ 黒・透明細粒少 硬質	貯蔵穴底上 28cm 底 1/4周 31
19 土師器 大形壺	高 残 18.9 最大 復 28.2	外面は胴下位に斜位のナデとヘラナデ、中～上位にナメヘラナデ後斜～縦位ヘラミガキ、頸部ヨコナデ。内面はヨコヘラナデで、中位の積み上げ休止部より上では擦痕の多い工具を使う。研磨具に転用した平行刻線状痕跡が外面に多い。不規則に煤が少量外面に付着する。	5YR6/6 橙 やや粗い 灰色・透明粗～細 粒やや少、白・黒細粒少 やや軟質	南東隅床上 9cm 胴1/4周 35
20 石器 石錘?	長 6.8 幅 3.8 厚 3.1	自然礫でひょうたん形にくびれることから見て、錘に使用した可能性もある。加工・使用痕は見られない。重量 107.5g。	5GY7/1 明オリーブ灰 緻密で硬質な緑色凝灰岩	南東床上 18cm 完形 84
21 石器 敲石	長 17.5 幅 7.1 厚 4.1	細長い自然の河原石をそのまま利用。両小口面をやや強い敲打に使用。長側辺も左右1箇所ずつの少し敲打した痕がある。重量 838.3g。	5Y6/2 灰オリーブ 緻密でやや硬質な安山岩	西部～南西部の攪乱 ほぼ完形 Bベルト西攪乱

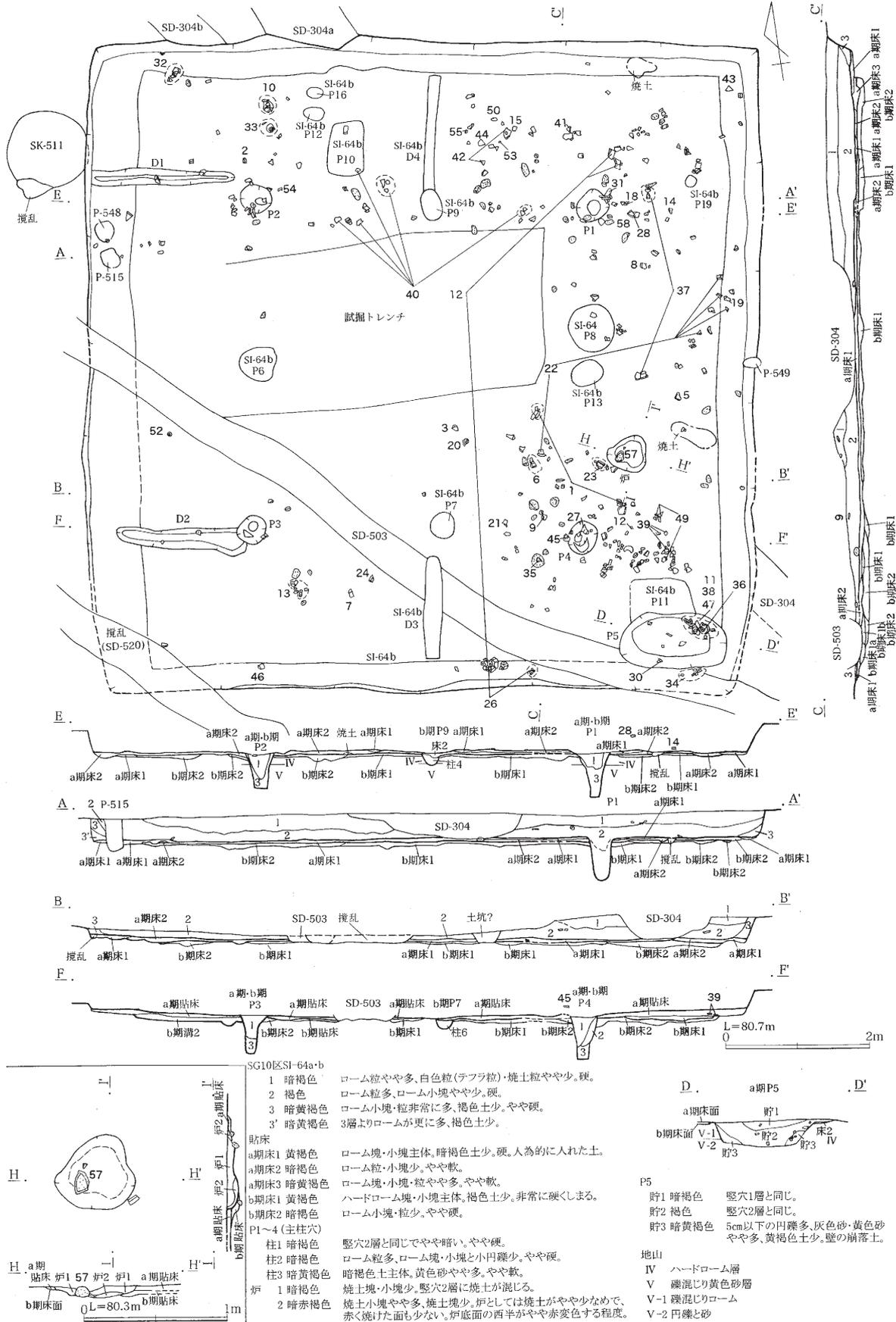
SG10区 SI-64a (第99～101図、写真図版100・101・200・201)

調査時名称はSI-64で、整理時にSI-64aに改称した。先行するb期(SI-64b)から拡張建替したa期建物である。b期竪穴内に自然堆積した土を踏み固めてa期貼床の下半(a期床2層・床3層)にしたと考えられるので、a期とb期の間に短い時間差、つまり建物跡をすぐに利用しなかった期間が考えられる。

[位置] SG10区北部の21-17・18と22-17・18グリッド。同じく古墳中期の遺構は北にSI-66、南にSI-60・61がある。採土と攪乱溝で南西隅は消滅。古墳中期末のSD-304a・304b、近世のSD-503、時期不明のSK-511・P-515・P-548に切られる。時期不明のP-549と東壁部で重複するが、SI-64aとP-549の新旧は不明。攪乱溝(調査時名称SD-520)に南西隅を切られ、中央が確認調査トレンチに切られる。

[規模と形状] 方形の建物跡で、主軸方位はGN-10°-E。東西9.24×南北9.32m、壁残存高は北東部で高く(約38cm)、壁上部が消滅している南部では低い(4～6cm)。b期建物(SI-64b)の壁を外側へ掘り広げて拡張し、b期床面よりも2～4cm高い床面レベルまで薄く貼床を追加している。この人為的に追加したと見られる貼床土が硬いローム質のa期床1層である。a期床2・3層は、土質からみてb期建物に堆積した自然埋没土を踏み固めたもので、a期建物の貼床下半部に使われている。

主柱穴はP1～P4の4本で、SI-64bの主柱穴8本のうち隅4本を再使用したと考えられる。柱間は南北4.58m(西側)～4.68m(東側)、東西4.45m、床面からの深さはP1=58cm、P2=49cm、P3=52cm、P4=63cm。柱穴底面形から推定した柱径は12～14cm前後。南東隅にある貯蔵穴P5は東西149×南北



第99図 権現山遺跡 SG10 区 SI-64a (1) 遺構

75×深さ33cmで、a期貯蔵穴P5がb期貯蔵穴P11の南半を切り、下半は地山礫層中に掘り込まれている(断面図D-D')。P5掘削時に出た地山礫を含むa期貼床土が、b期貯蔵穴P11の上を覆う(SI-64bの貯蔵穴断面図L-L')。入口施設や壁溝はない。間仕切溝はP2・P3の西側にそれぞれD1とD2があり、床面からの深さはD1が6～8cm、D2が4～6cm。

【炉】中央部から東へ寄った位置にある。東西56×南北51cm、深さ7～8cm。礫(57)が、図示した被熱面を下に向けて出土した。この礫の下の部分を中心として炉底面がやや焼けている。

【覆土】竪穴部も貯蔵穴も自然埋没状。竪穴覆土上層(1層)にテフラと見られる白色粒を含む。

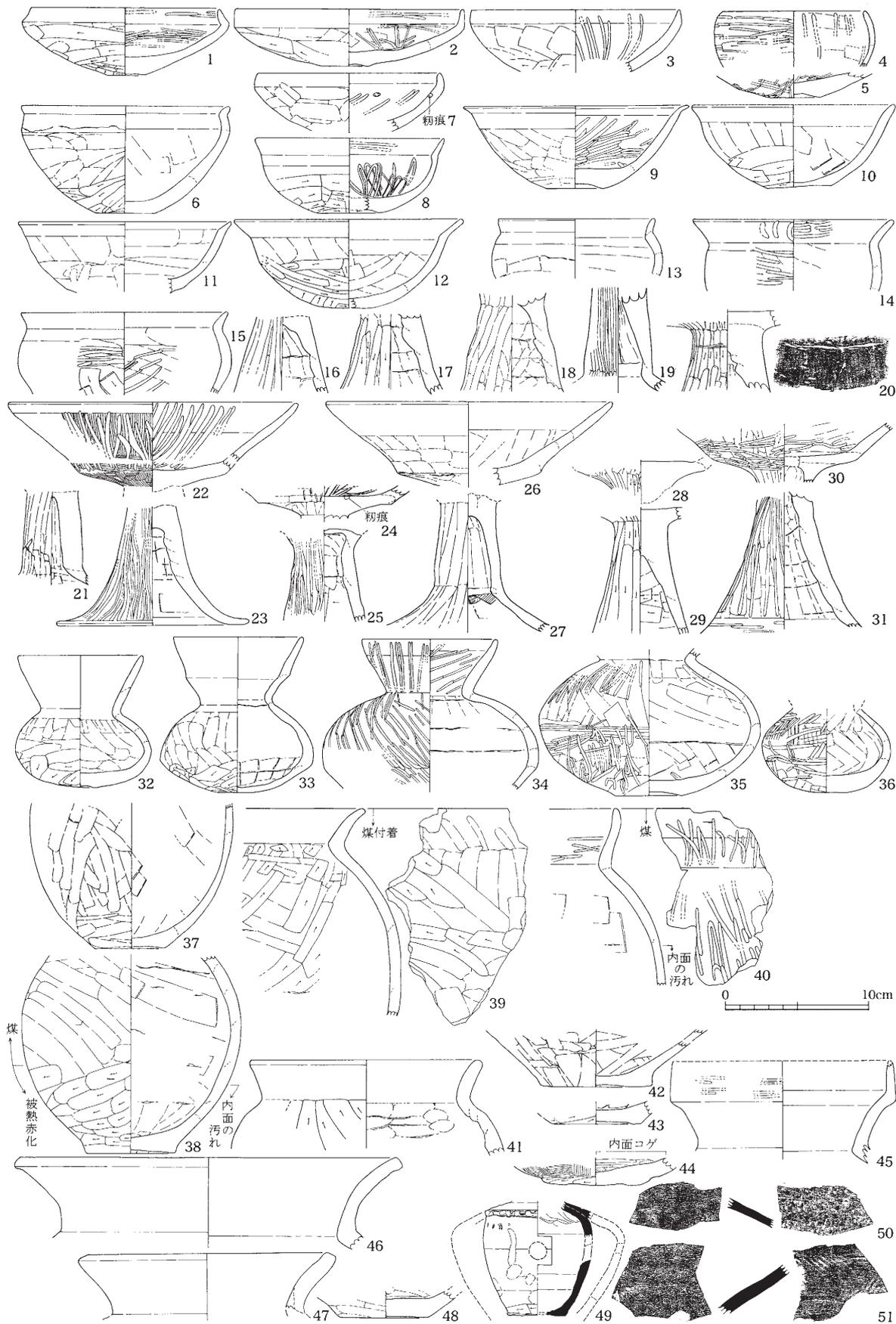
【遺物出土状況】東半部に多い。北東部に多い遺物は、北側から流入または廃棄されたようで、2層中位に最も多く、少量の遺物は床面近くまで見られる。南東部にも多く、高い位置から床面近くまでの各レベルで出土している。南壁近くの初期流入土3層中には伏せた状態の高杯杯部がある(26)。貯蔵穴P5内にまとまっている土師器破片群は底面から浮いているので、貯蔵穴外や推定木蓋上から落ち込んだものであろう。全周が残る高杯脚が南東柱穴P4の上部に入っていた(27)。南西部にある13はb期覆土上面とa期の各1片が接合したもので、b期遺物の可能性もある。北西部のほぼ床面に、完形に近い杯・小形壺と勾玉がある(10・33・54)。他の石製模造品は北部にある(53・55)。

【出土遺物】口が広く開く椀形杯が多い。初期模倣杯も多く(1～4・7)、4は非常に薄い。7は稲粃痕が1箇所、24は胎土に混ぜたと考えられる稲粃痕が3箇所以上ある。土師器の粃痕はSG10区SI-50などにある。小形壺は丁寧な製品がある。34はよく磨き、33は口縁に段を持つ。38は外面に煤が目立つ。特大から中形まで各種の壺が多い。受口状口縁の壺(45)は、SG10区SI-19aなどにある。二重甕(49)はSI-50などに破片がある。紡錘車(52)はSG10区SI-59などにある。滑石製模造品の勾玉形と有孔円板が各1点ある。勾玉形はSG5区SI-100・SG10区SI-72・SG9区中央区南東部低地、有孔円板はSG5区SI-118とSG10区SI-72・101・110・111、SK-46とSD-41・42、時期不明のSG10区SK-226にある。他の滑石製模造品は有孔剥片が古墳時代土坑SK-621に、粘板岩製模造品?(55)はSG10区SI-47などに見られる。軽石質の砥石(56)はSG10区SI-16などにある。ただし56は使用痕がない。遺物量は多く、杯・小形壺・高杯が多い。図示以外の土師器合計960片・8,932gの内訳は、杯304片・1,812g、高杯254片・2,249g、小形壺51片・589g、壺甕類349片・4,214g、甑2片・68g。図示した以外の杯は内斜口縁5点以上と半球状2点(他に後期の混入品3片)、壺底部は9個体分ある。楕円・棒状・卵形など各種の礫があり、10cm以下の小さなものが目立つ。被熱礫や煤付着礫は僅かである。b期の遺物は第103図に示す。

第56表 権現山遺跡SG10区SI-64a出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復13.0 高 4.8 底 2.6 最大 復14.4	外底面は1方向ヘラケズリでわずかに凹底状。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に疎らなヨコヘラミガキ、体部に密なヨコヘラミガキ。内面下半は剥落して調整不明。 [注記]184、201、19.9-18.02層、中東1～2層、Bベルト、SD-304 X22-22.1	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤・灰色・透明粗～細粒やや多、黒細粒少 やや硬質	南東床上10～22cm(1～2層)。SD-304の1片も接合 口1/2周、底全周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復15.8 高 4.0 底 2.8	外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面は口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコヘラナデ後に下位ヨコヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部ヘラナデ後に横～斜位ヘラミガキ。外面に10cm以上の黒斑あり。 [注記]22、23、北西1層、北西2層、Aベルト西1層、Aベルト西2層	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・透明細粒多、白粗粒と赤・黒細粒少 硬質	北西床上7～14cm(2層)が接合 口1/3周、底全周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 復14.4 高 残4.1 最大 復14.7	外面の口～体部境に弱い稜あり。外面体部は上位ナメヘラナデと下位ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面にやや斜位の放射状ヘラミガキ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・赤粗～細粒やや多 やや硬質	中央床上5cm(2層) 口1/6周 186
4 土師器 杯	口 復10.0 高 残3.9 最大 復11.1	薄く軽い。外面は体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデの後に全体をヨコヘラミガキ。内面は強いヨコヘラナデの後にやや疎らなタテヘラミガキ。	10R4/8 赤 やや粗い 白・黒細粒多、赤・灰色・透明粗～細粒少 やや軟質	南部の試掘トレンチとP5が接合 口5/12周 南試掘トレ、P5貯1層
5 土師器 杯	高 残1.6 底 3.4	外底面は凹底でナデ後に少しヘラミガキ。外面体部はやや雑なナデ後にナメヘラミガキ。内面はナデまたはヘラナデ後に放射状ヘラミガキ。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 赤粗粒と白・黒・透明細粒多 やや硬質	東部床上30cm(1層) 底全周 169
6 土師器 杯	口 復14.6 高 7.5 底 4.2	頸部の稜が内面で明瞭。外底面は多方向ヘラケズリで平底状。外面は体部ナメヘラナデ後に下位ナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメヘラナデ後に口～肩部ヨコナデ。内面下位～底部は使用により器面が荒れて調整不明。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明粗～細粒多、半透明・灰色礫と白・黒細粒少 やや硬質	中央床上15cm(2層)と南東床上9～20cm(1層)が接合 口1/6周、体1/4周、底全周 180、200、241

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第100図 権現山遺跡 SG10 区 SI-64a (2) 遺物

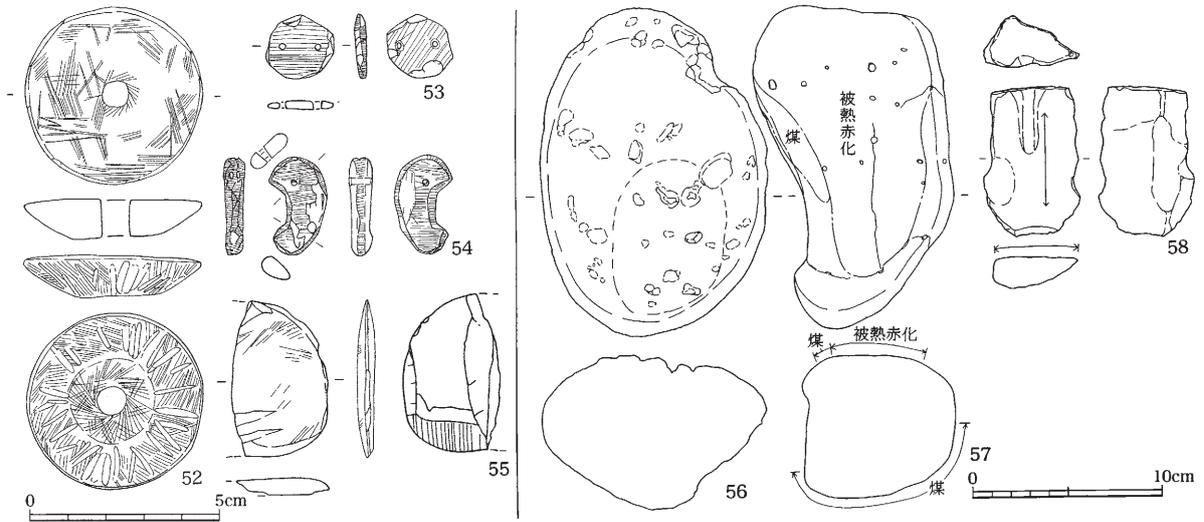
第4節 古墳時代の竪穴建物跡

7 土師器 杯	口 12.8 高 残 4.1 最大 復 13.2	外面は口縁部ヨコナデと体部に横～斜位ヘラナデ。内面は磨滅して不明確だが、ナナメヘラミガキを疎らに施していると思われる。内面体部に稲稈痕1箇所あり。	10YR7/4 にぶい黄褐 やや粗い 赤粗～細粒と黒・ 透明細粒やや多、白細粒少 やや軟質	南西床上3～4cm(2層) が接合 口1/2周、体3/4周 56、61
8 土師器 杯	口 復 13.1 高 5.2 底 復 4.0	外底面はヘラケズリして凹底状。外面は体部ヨコヘラケズリ、口～肩部ヨコナデ。内面は体部ヘラナデ後、縦～斜位ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。 [残存状態]口1/6周、頸1/3周、底2/3周 [注記]66～68、144、中東1層、北部、SD-304Fベルト	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤・透明粗粒と白 粗～細粒やや多、白・赤礫と 黒細粒少 やや硬質	北部床上23～32cm(1層)と東部床上19cm(1層)。SD-304にも混入 残存状態・注記は左欄
9 土師器 杯	口 復 15.6 高 5.8 底 3.9	外底面は雑なヘラケズリで凹底状。外面は体部ナデ後に下半部ヨコヘラナデと下端ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部に斜位と底部に多方向のヘラミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白粗～細粒と黒細 粒やや多、赤粗粒と透明細粒 少 やや硬質	南東床上14cm(2層) 口1/12周、口～底1/4 周、底5/12周 190、191、Cベルト南 2層、試掘トレンチ
10 土師器 杯	口 14.2 高 5.8 底 重 4.6 残 240	薄く軽い。外面は底部ヘラケズリで平底、体部ヘラナデ後下半ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒 やや多、白細粒少 やや硬質	北西床直上(2層) ほぼ完形 口全周、底2/3周 5
11 土師器 杯	口 14.8 高 残 5.1	口～体部境の稜が内面で明瞭。外面は体部上半ナデ後に下半を横位後縦位のヘラナデ。内面は体部ヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内外面口縁部に10cm大の黒斑あり。 [注記]270、南試掘トレ、P5貯1層、21.85-18.15	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤・透明粗～ 細粒やや少、黒細粒少 軟質	貯蔵穴底上20cm(貯1層) 口5/12周 注記は左欄
12 土師器 杯	口 復 16.0 高 6.2	外面は体部ナメナデ後に口縁部ヨコナデ、中位に斜位と下位に多方向のヘラケズリ。内面は口～肩部ヨコナデ後に体部多方向ヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白礫～細粒やや多、 赤・灰色粗粒と黒・透明細粒 少 やや軟質	北東床上4cm(1～2層) と南端床上7cm(3層) が接合 口1/2周 121、267、288
13 土師器 杯	口 復 10.9 高 残 4.1 最大 11.9	外面は体部ヨコヘラナデ、口～肩部ヨコナデ。内面は体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白細粒多、白・灰 色粗粒と透明粗～細粒やや多、 白礫少 硬質	南西床上3cm(2層)。SI- 64bの南東理土上面と 接合 口1/2周、頸11/12周 55、SI-1123
14 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 5.1	外面は肩部ナメヘラナデと体部ヨコヘラケズリ後にヨコヘラケズリとヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は体部ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤・黒・透明粗～ 細粒と白細粒少 やや硬質	北東床上5cm(2層) 口1/12周、肩1/6周 128
15 土師器 杯	口 復 14.4 高 残 5.7 最大 復 14.8	口～体部境の稜は内面で明瞭。外面は口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコヘラナデ後ヘラミガキ。体部下位ナメヘラケズリ。内面は体部ナデ後ナメヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 黒・透明粗～細粒 と赤細粒やや少、白・赤粗粒 少 硬質	北部床上23cm(1層) 口1/12周、体1/6周 72
16 土師器 高杯	高 残 5.3	外面は密なタテヘラミガキ。内面は倒立状態で反時計回りに積み上げた粘土紐をよく残し、軽いタテナデとユビオサエ。	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 白・灰色粗～細粒と 黒・透明細粒少 硬質	試掘トレンチ 脚柱全周 試掘トレンチ
17 土師器 高杯	高 残 5.7	外面は脚上端ナデ後に脚部タテヘラケズリ。内面は積み上げた粘土紐の痕跡を残し、ユビオサエと軽いタテナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・透明細粒やや 多、赤粗粒と黒細粒やや少、 白・灰色礫少 硬質	試掘トレンチ 脚柱全周 231、試掘トレンチ、 南試掘トレンチ
18 土師器 高杯	高 残 6.8	外面ナデ後にタテヘラナデで弱い光沢を生じる。倒立状態で反時計回りに積んだ組痕を内面に残し、軽いナデ。 [注記]124、126、131、138、290、試掘トレ、Cベルト南2層	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒と白細 粒多、黒・透明細粒少 硬質	北東床上1～7cm(1～ 2層)に5片と床上24 cm(1層)に1片 脚柱3/4周 注記は左欄
19 土師器 高杯	高 残 7.2	外面は密なタテヘラミガキ。内面は脚柱部を絞って細くしたために縦皺が生じる。脚裾部内面は磨耗しているが、おそらくナデ。	7.5YR7/8 黄橙 緻密 黒細粒やや多、白・ 赤・透明細粒少 やや軟質	東端床上1cm(2層) 脚柱全周 152
20 土師器 高杯	高 残 5.6	外面は脚柱部を下にヘラケズリし、ヘラ先を当てた痕が脚柱上位に1周巡る。杯部内底面は1方向ヘラミガキ。脚柱部内面は粘土紐積み痕を残し、雑なナデ。	10YR6/6 明黄褐 やや粗い 赤粗～細粒と白・黒・透明脚 粒やや多 やや硬質	中央床上3cm(2層) 脚柱全周 187
21 土師器 高杯	高 残 6.5	外面タテヘラナデ。内面は脚柱部タテナデ、脚裾部ヨコヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・黒・透明細粒やや 少、赤粗粒少 硬質	南端床上2cm(2層) 脚柱全周 258
22 土師器 高杯	口 復 20.0 高 残 6.4	外面杯体～底部間の稜が明確。外面全体タテハケ後に杯体部下位ヨコハケと口縁部ヨコナデ、杯体部タテヘラミガキ。内面はナデまたはヘラナデ後口縁部ヨコナデ、杯体部タテヘラミガキ。外面に煤が付着し、かなり多い部分も見られる。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白粗～細粒と黒・ 透明細粒やや少 やや硬質	東端床上11～19cm(2層)と中央床直上(2層)が接合 口5/12周、底1/3周 150、151、153、156、182
23 土師器 高杯	高 残 8.5 脚裾 復 13.4	外面は脚裾部ヨコナデ後、全体に密なタテヘラミガキ。内面は脚柱部に倒立状態で反時計回りに積み上げた痕を残し、縦位の亀裂が生じる。内面裾部はヨコヘラナデ後ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・ 透明細粒少 やや硬質	南東床上25cm(1層) 脚柱全周、脚裾1/36周 172
24 土師器 高杯	高 残 2.5	外面は杯底部タテヘラナデ後、杯体部下端にヨコヘラナデとタテヘラミガキ。内面は杯体部から杯底部にかけて多方向ヘラナデ後に放射状ヘラミガキ。稲稈痕と見られるものが3箇所あるので、胎土に混和されていたと思われる。	5Y3/2 オリーブ黒 緻密 白・赤・灰色粗粒と白 細粒少 硬質	南西床上7cm(2層) 杯底1/4周 62
25 土師器 高杯	高 残 6.5	外面は密なタテヘラミガキ。脚内面は上端部に斜位と横位のヘラナデおよびナデ後に倒立状態で粘土紐を積み上げてヨコヘラケズリ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・灰色礫～細粒やや多、赤・ 黒細粒少 硬質	試掘トレンチ 脚柱全周 試掘トレンチ
26 土師器 高杯	口 19.7 高 残 5.9	外面は杯底部に横～斜位ナデ、杯体部は主にタテナデで下端は横位にもナデを行い、口縁部ヨコナデ。内面は杯体部ナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒やや多、 白礫と灰色・透明粗～細粒と 黒細粒少 硬質	南端床上2～7cm(3層)が接合 口5/6周 267、277
27 土師器 高杯	高 残 9.7	外面はタテヘラナデ。内面は脚柱部タテナデ、脚裾部ヨコヘラナデおよび上部ヨコハケ。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・黒・透明細粒やや 少、赤・透明粗粒少 硬質	南東主柱穴底上49cm 脚柱全周 293
28 土師器 高杯	高 残 2.9	外面タテヘラケズリ。内底面は多方向ヘラナデ後ヘラミガキで、底面外周は円周方向に磨く。	5YR6/6 橙 やや緻密 白礫～細粒やや多、 赤粗粒と黒・透明細粒少 やや硬質	北東床上22cm(1層) 杯底1/6周 132
29 土師器 高杯	高 残 8.7	外面は脚部を下方へ、杯底部を上方へタテヘラケズリ。杯底部内面は磨滅して不明瞭だが、多方向ヘラナデの可能性あり。脚部内面は上部ナデ、中位以下ナメヘラケズリ。	2.5YR6/8 橙 粗い 白粗～細粒多、灰色・ 透明粗～細粒細粒やや多、白 礫と黒細粒少 やや硬質	試掘トレンチ 脚柱3/4周 TX22

第5章 権現山遺跡 SG10 区

30 土師器 高杯	高 残 4.2	外面はタテヘラケズリ後に杯体部から杯底部にかかる部分をヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向と体部に斜～横位のヘラナデ後、杯体部にヨコヘラミガキ。脚柱部内面タテナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・黒・透明粗～ 細粒やや多、白・黒・赤礫少 硬質	貯蔵穴底上 21cm (2層) 杯底 1/3 周 275、南東貯穴
31 土師器 高杯	高 残 9.6	外面は脚部タテナデかタテヘラナデ後にタテヘラミガキ、裾部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は粘土紐の積み上げ痕を残した状態で上部に雑なナデ、中位タテナデ、裾部ヨコナデ。 [注記]123、129、中東1層、Cベルト北1層、北西1層	10YR8/6 黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と黒細 粒やや多、黒・透明粗粒と白 細粒少 やや硬質	北東床上 19～23cm (1層) が接合 脚柱全周 注記は左欄
32 土師器 小形壺	口 8.6 高 9.2 最大 9.4	外面は肩部に縦位と体部に横位のナデ後、下半部に横～斜位ヘラケズリ。外底面はナデで凹底状。内面は底部に多方向と体部に斜位のナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。 [注記]1、3～5、北西1層、北西2層、北中2層、SD-304 293	7.5YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒少 やや軟質	北西部床直上～床上 24cm (1～2層)。SD-304の1片も接合 口1/2周、体3/4周、底全周 注記は左欄
33 土師器 小形壺	口 9.0 高 10.8 最大 10.7	外面は胴上半に縦～斜位ナデの後に胴下半全体をナメヘラケズリ。内面は胴下半ヨコヘラナデ、胴上半ナデ。内外面口～頸部ヨコナデで、口～頸部境の内外面に弱い段を持つ。	5YR6/6 橙 緻密 白粗粒少、白礫微量 やや硬質	北西部床上 1cm (2層) 斜位 一部欠 6
34 土師器 小形壺	口 復 9.4 高 残 10.2	外面体部中～下位の積み上げ休止面で稜を持つ。外面体部はおそらく横位か斜位のヘラナデ後にナメヘラミガキ。外面口縁部ヨコナデ後に口～頸部タテヘラミガキ。内面体部は紐積み痕を残す程度のナデで、肩部はやや縦皺状になり、口縁部はヨコナデ後斜位ヘラミガキ。 [注記]276、21.85-18、南試掘トレ、中東2層、P5 南側	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 白・透明細粒多、赤粗 粒と黒細粒やや多 やや硬質	南東隅床直上 (3層)。21.85-18グリッドと試掘トレンチの破片が接合 口1/4周、肩1/3周 注記は左欄
35 土師器 小形壺	高 残 10.3 底 4.5 最大 15.3	外底面は中央部ナデで凹底状にして外周を円周方向のヘラケズリ。外面体部ナメヘラナデ後に中位ヨコヘラミガキ後全体をタテヘラミガキ。内面は胴中位以下ナメヘラナデ、肩部タテナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 白粗～細粒と灰色・透 明細粒少 やや硬質	南東床上 6cm (2層) 正位 胴～底全周 257
36 土師器 小形壺	高 残 5.9 底 2.8 最大 8.9	外面体部は上半にタテハケ後ヨコハケ、下半部ヨコヘラナデと底部ヘラケズリで、範囲の不明瞭な小さな底面を作る。体部全体にやや雑なヘラミガキ。内面は体部ナメヘラナデ後に肩部ナメナデ。 [注記]269、南試掘トレ、P5 貯1層、SD-304 132	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 白・赤・灰色・透明粗 ～細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 26cm。試掘トレンチと SD-304 混入破片が接合 頸5/12周、底全周 注記は左欄
37 土師器 小形壺	高 残 10.2 底 4.7 最大 復 14.2	外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面は体部下端に横位と体部に縦位のやや強いヘラナデ。内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラナデ。 [注記]127、168、中東2層、北西2層	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 透明細粒多、灰色・ 透明粗粒と白・黒細粒少 やや硬質	北東床上 29cm (1層) と東部床上 7cm (2層) が接合 体1/6周、底全周 注記は左欄
38 土師器 小形壺	高 残 14.1 底 6.2 最大 復 15.2	外底面は多方向ヘラケズリでやや上げ底状。外面胴部上半ナメヘラナデ後に下半を横～斜位ヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部下位に縦位のやや強いヘラケズリ。中位以上にナメヘラナデ。外面は下半～底面が被熱して、上半には煤が多い。胴下端近くまで煤が付く箇所もある。 [注記]234、270、南試掘トレ、南東貯穴上半、貯穴上面	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白粗～細粒多、灰 色・透明粗粒と黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 23cm (貯1層) と南東部床上 16cm (2層) が接合 胴1/3周、底全周 注記は左欄
39 土師器 壺	口 推 20～25 高 残 14.5	外面は口縁部ヨコナデ後に疎らなナメヘラナデ、胴部に縦～斜位ヘラナデ後ナメヘラケズリ。内面は胴部ナメヘラナデ後ナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。外面全体に煤付着。 [注記]207、208、285、南試掘トレ、貯穴上面	7.5YR7/6 橙 緻密 透明粗粒と白・黒細粒 多、白・灰色礫少 やや軟質	南東部床上 15～17cm (2層) と試掘トレンチ口1/12周、頸1/6周 注記は左欄
40 土師器 壺	口 推 14～16 高 残 12.4	胴部破片が他に5片あるが接合位置が不詳。外面は肩部ヘラナデ後に縦～斜位ヘラミガキ、頸部タテヘラナデと口縁部ヨコナデ後に縦～斜位ヘラミガキ。内面は肩部ヨコヘラナデ、頸部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面全体に煤が若干付着。内面中位以下に暗褐色の汚れ(コゲ)付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明礫～細粒やや 少、白粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	北部中央床 1～11cm (2層) が接合 口1/24周、頸1/8周 27、31,44、45、88、89
41 土師器 壺	口 復 15.8 高 残 6.8	外面は口縁部ヨコナデ後に肩部ナメヘラケズリ。内面は肩部に積み上げ痕を残してユビオサエ、口縁部ヨコナデ。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 白・透明細粒やや 少、白粗粒と赤・黒細粒少 やや硬質	北東部床上 27cm (1層) 口1/12周、頸1/6周 94
42 土師器 壺か壺	高 残 3.8 底 7.8	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに凹底状。外面胴部は主に縦方向のヘラナデ。内面は多方向ヘラナデ。	7.5YR2/1 黒 やや緻密 白礫～細粒やや多、 赤・灰色粗粒と黒・透明細粒 少 やや硬質	北部中央床 上 3cm (2層) と試掘トレンチ 底全周 73、76、80、Cトレ南 1層
43 土師器 壺	高 残 1.6 底 復 6.0	外底面は軽いナデで凹底状。外面胴下端に斜～横位ヘラケズリ。内面は円周方向のヘラナデ。外面が被熱している可能性があり、内面も汚れているように見えるが、どちらも不確実。	10YR5/2 灰黄褐 やや緻密 白・透明粗～細粒 多、黒細粒少 やや軟質	北東床上 17cm (2層) 底2/3周 109
44 土師器 壺	高 残 1.9 底 復 7.4 最大 残 11.2	外底面外周に薄く粘土を貼った後に底面を多方向へ調整し、外周がはみ出したと見られる部分をヨコヘラケズリ。胴部外面はヨコハケ後タテハケ。内面は円周方向のナデ。内面全体にコゲ付着。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや緻密 白・透明粗～細粒 やや多、黒細粒少 硬質	北部床上 17cm (2層) 底7/12周 76
45 土師器 壺	口 復 15.2 高 残 7.1	口縁部は外面に明確な稜を持って受口状になる。外面はヨコナデ後に口縁部ヨコヘラミガキ。内面は磨滅しているため調整不明瞭。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒と白細 粒多、白礫～粗粒と黒・透明 細粒やや多 硬質	南東部床上 11cm (2層) 口1/6周 254
46 土師器 壺	口 復 27.1 高 残 6.4	頸～肩部境の稜が内面で明瞭。外面口～頸部ヨコナデ。内面肩部ナデ、頸部ヨコナデ。 [注記]60、試掘トレンチ、UT-SG-X調査区南半排土中	2.5YR6/4 にぶい黄 やや緻密 白・灰色礫と白・ 黒・透明細粒少 硬質	南西部床上 1cm 口1/3周、頸1/4周 注記は左欄
47 土師器 壺	口 復 18.0 高 残 4.2	残存部が少ないので復原径は参考値。頸部内面に補充粘土あり。内外面の口縁部にヨコナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒と黒・ 透明細粒やや多、赤粗～細粒 少 硬質	貯蔵穴底上 23cm (貯1層) 口1/9周 270
48 土師器 壺	高 残 1.9 底 6.1	外底面はヘラケズリ後ナデで少し凹底状。外面胴下端ナデ。内面多方向ヘラナデ。外底面の外周が使用によってかなり磨滅している。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白礫と白・透明粗 ～細粒やや少、白・灰色礫と 赤粗粒と黒細粒少 硬質	試掘トレンチ TX22 埋土中 底全周 試掘トレンチ
49 須恵器 二重甕	高 残 7.9 最大 復 7.6	二重甕の体部内側をロクロ右回転で成形し、体部下端ヨコヘラケズリ後にロクロから外して底面は不調整。体部外面に指頭痕跡あり。肩部内面にヘラオサエ痕あり。孔は復原径12mm程でかなり斜上方へ向かう。肩部で外側と接合し、肩部から体部への境に浅い沈線をも1条入れてその下側に幅5～6mmの透窓を残す約1/3周の間に8～9箇所開けていた痕を残す。外面肩部に自然釉。SI-50、SK-254、SD-201a出土破片と同一個体の可能性あり。	5Y6/1 灰 破面 :2.5Y5/1 赤灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	南東床上 7～17cm (2層) が接合 肩1/3周、底5/12周 205、219
50 須恵器 壺		外面は縦位の平行叩き、内面はナデ。外面に暗緑色の自然釉がやや多く付着。	5Y4/1 灰 緻密 灰色礫と白細粒少 硬質	北部床上 31cm (1層) 肩部1片 70
51 須恵器 壺		外面はやや不定方向の平行叩き後にヨコナデ。内面はナデ。内面にごく薄い自然釉が付着。	2.5Y6/2 灰黄 緻密 白細粒少 硬質	遺構確認面 胴部または底部1片 北部上面

52	石製品 紡錘車 有孔円板	長径 4.57 短径 4.55 厚 1.07 重 31.1	孔径は上面7.0mm、下面7.6～8.0mmで、下面から穿孔。上面は研磨して光沢を持ち、研磨痕を少し残す。下面は中央部平坦面(径2.1cm)をよく研磨し光沢を持つ。側面の斜面は放射状に幅狭く切削加工後に斜放射方向研磨擦痕をよく残し、光沢は弱い。上下面とも孔外周に接する斜放射状接線が上面にはごく少なく下面に多い。	10Y2/1 黒 緻密でやや軟質な蛇紋岩	西部床上2cm(2層) 完形 49
53	石製模造品 有孔円板	長径 1.65 幅 1.73 厚 0.28	両面をそれぞれ1方向に研磨し、細かい擦痕が残る。側面は穿孔と同じ方向に研磨し、形割時の剥離痕も少し残る。左図面から穿孔し、対面に穿孔剥離。初孔径1.85mm、終孔径1.50mm。残存重量1.15g。	10Y4/1 灰 緻密で軟質な滑石	北部床上27cm(1層) 完形 74
54	石製模造品 勾玉形	長径 2.58 幅 1.47 厚 0.62	右図面から穿孔し、初孔径1.60mm、終孔径1.35mm。板状剥片の外形を勾玉形に切削加工し、両面をほぼ1方向、側面を穿孔と同方向に磨き粗い擦痕を残す。ごく一部だけに弱く光沢あり。重量3.10g。	5GY3/1 暗オリーブ灰 緻密で軟質な滑石	北西床直上(2層) 完形 34
55	石製模造品 ?	長径 4.01 幅 残2.50 厚 0.46	片面は緩い凸面で滑らかに研磨。反対面は粘板岩の節理に沿った剥離面で、平行線状の痕跡を残す部分もあるが、研磨痕ではなく剥離時に生じたと思われる。側面加工はない。残存重量6.28g。	10Y4/1 灰 緻密で軟質な粘板岩	北部床上32cm(1層) 一部欠 67
56	軽石	長径 17.2 幅 12.0 厚 8.5	横断面が隅丸三角形の自然礫。明確な敲打や研磨の痕は見られない。図示した大きな凹部の他に、細かい気孔状の孔も多い。水には浮かばない。重量1146.4g。	10YR8/3 浅黄橙 多孔質でやや軟質な安山岩	北東部の南半 完形 22.10-18.15 付近
57	長 幅 厚 礫	16.8 9.8 7.5	自然の河原石。加工・使用痕はない。図示した面がよく被熱している。反対の面はあまり被熱していないが、煤が薄く広く付着している。重量1698g。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密で比較的硬質な流紋岩	炉底面 完形 291
58	石器 砥石	長径 7.7 幅 4.9 厚 2.6	横断面が三角形の石片を利用し、最も広い長側面を砥面として使用。縦方向に研磨した痕が弱く残る。図の中央上半部が使用によって縦長方向に浅く凹んでいる。水には浮かばない。重量58.7g。	N6/0 灰 多孔質でやや軟質な安山岩の 軽石	北東床上16cm(2層) 完形 125



第101図 権現山遺跡 SG10 区 SI-64a (3) 遺物

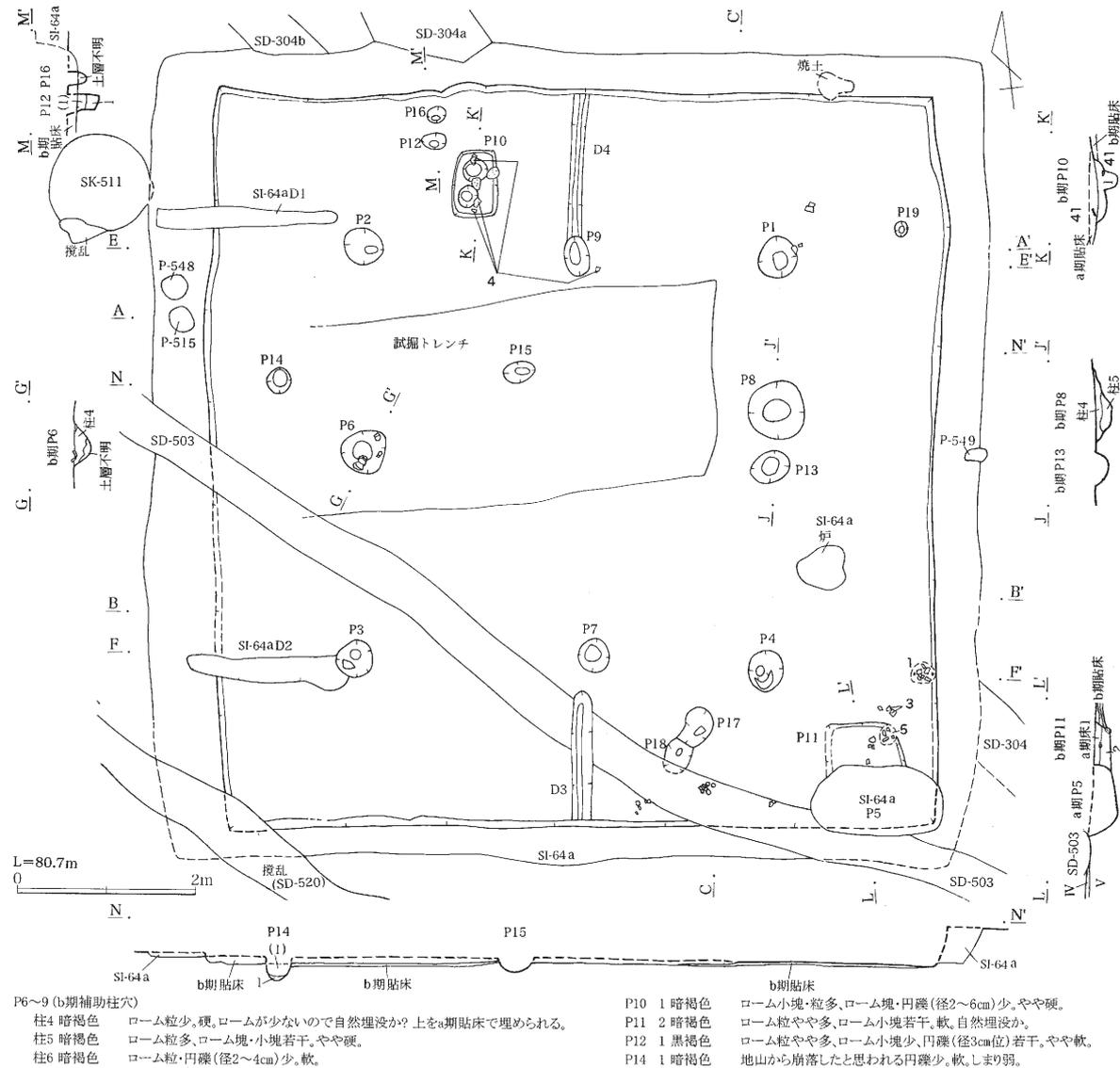
SG10 区 SI-64b (第102・103図、写真図版101)

調査時の遺構名は SI-112 で、整理作業時に SI-64b に改称した。SI-64a に拡張する前の、b 期(旧期)の建物である。a 期貼床の下部は SI-64b 竪穴内の自然堆積土を踏み固めたとみられる層なので(a 期床 2・3 層)、b 期竪穴を a 期に建て替えるまで短い時間差が考えられる。

【位置】 SI-64a と同じ位置の内側。古墳中期末葉ころの SD-304a・304b と近世の SD-503 に浅く切られる。南西部は土採り工事と攪乱溝(調査時名称 SD-520)に壊され、中央が確認調査時の試掘トレンチに切られる。

【規模と形状】 方形で、支柱穴 4 本が共通する SI-64a と同じく主軸方位は GN-10° -E。竪穴四辺を重視した場合、SI-64a より西へ約 2° 振れる。東西 8.10 × 南北 8.38m。床は a 期(SI-64a)より 2～4cm ほど低く、a 期床より明確に低いところと、余り低くない(a 期貼床を上)に厚く貼らないところがある。支柱穴は 8 本で、SI-64a と同じ P1～P4 の間に浅い P6～P9 を配する。P7～P9 の上を a 期貼床が覆う。P6 を覆うと推定される a 期貼床土は確認調査トレンチで失われている。床面レベルからの深さは、P1～P4 は SI-64a より a 期貼床の厚さ約 3cm だけ浅く、P6=16cm、P7=17cm、P8=17cm、P9=22cm。b 期貼床除去後に確認した補助柱穴 8 本(P10 と P12～P19)は埋め戻された可能性がある。P10 は長方形の下部が円形に 2 箇所窪む。P8 南側の P13 は柱穴というよりも浅い穴状。床からの深さは P10= 南部 22～北部 26cm、P12=23cm、P13=17cm、P14=20cm、P15=9cm、P16=27cm、P17=20cm、P18=18cm、P19=12cm。

貯蔵穴 P11 は SI-64a の貯蔵穴 P5 に南半部を切られ、自然流入と思われる黒色土で埋まった上に a 期貼床が貼られていた。P11 は東西幅 90 × 南北残存長 49cm、床面からの深さ 17cm で、地山礫層中に掘り込



第 102 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-64b (1) 遺構

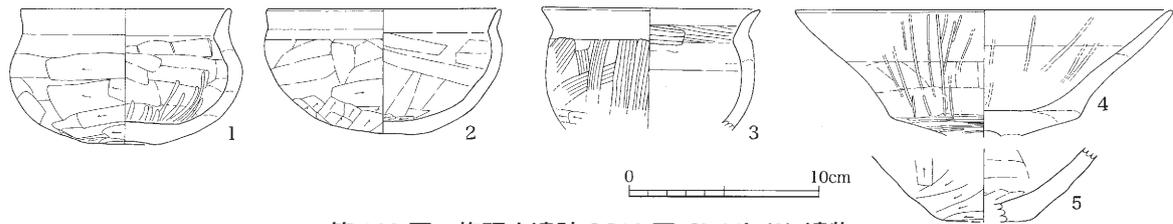
んでいる。入口施設や壁溝はない。間仕切溝は P7 と P9 に伴う位置で南北に 1 本ずつあり、床面からの深さ 11 ~ 13cm。掘方底面は、四隅が深く、周辺部が浅くて中央部が深い傾向を持つ。

[炉] SI-64a と同様に炉があったことを想定できるが、確認できなかった。試掘トレンチ内に焼土がみられたので、試掘トレンチで炉が消滅した可能性がある。また、SI-64a の炉は SI-64b の床面よりも深いので、a 期と同じ位置の竪穴南東部で、b 期にも炉を使っていたと考えることもできる。

[覆土] SI-64a 貼床土の下層 (a 期床 2・3 層) は、SI-64b に自然流入した初期埋没土を踏み固めた層と考えられる。テフラ粒は見られない。

[遺物出土状況] 高杯 (4) は a・b 期竪穴出土破片が接合し、SI-64b 北西部の P10 内に破片があるので、下層 (b 期) の遺物破片が a 期竪穴に混入したと推定した。ただし、4 は破片の 70% が SI-64a で出土し、SI-64a 貼床下で出土した SI-64b 出土破片は 3 点 (重量では 15%) である。西側柱列中央の補助柱穴 P6 の覆土上層には、土師器高杯脚片や同一個体の内斜口縁杯 4 片が入っていた。

[出土遺物] b 期に伴うことがわかる遺物はごく少なく図示以外は小片で、こなごなに割れたものもあり、建替え時に踏まれたのかもしれない。内斜口縁の椀形杯は丸底 (2) と凹底 (1) がある。図示以外の土師器合計 62 片・302g の内訳は、杯 17 片・78g、高杯 3 片・14g、小形壺 1 片・8g、壺甕類 41 片・202g。



第103図 権現山遺跡 SG10区 SI-64b(2) 遺物

第57表 権現山遺跡 SG10区 SI-64b 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 11.0 高 6.9 底 復 3.8 最大 復 12.1	外底面は1方向ヘラケズリで不明瞭な平底または凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコヘラケズリ後に放射状ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。外底面に7cm大の黒斑あり。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒と白細粒多、透明粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	南東床直上(2層) 口5/12周、底1/2周 SI-112 10
2 土師器 杯	口 12.1 高 6.6 最大 12.4	外面は上半ナメヘラナデ後、下半をヨコヘラケズリと底部を1方向ヘラケズリ。内面は体部ナメヘラナデ、底部多方向ヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤・透明粗～細粒やや多、灰色粗粒と黒細粒少 やや硬質	西部補助柱穴P6内 口1/3周、肩1/2周 SI-64 50、G-G 南半
3 土師器 杯	口 復 11.4 高 6.5	頸部内面の稜が明確。外面体部タテハケ後に口縁部ヨコナデ、再び体部タテハケ。外面下位ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコナデ、頸部ヨコハケ、口縁部ヨコナデ。外面体部が被熱した可能性あり。	10YR4/2 灰黄褐 やや緻密 白・赤細粒少 やや硬質	南東床上5cm 口1/18周、頸1/6周 SI-112 16
4 土師器 高杯	口 復 19.8 高 6.7	外底面はおそらく多方向のヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。外面杯体部は斜位と横位のナデ後、内外面口縁部にヨコナデ。内面体部下位は器面が荒れて調整不詳。 [注記]SI-64 24～26、46、北西1層、北西2層、南西区、北西区、中東1層、中東2層、東南1層、南東貯穴、Aベルト西、Aベルト西1層、南試掘トレ、P1内、19.9-18、SI-112 12、13、SD-304 375、376、378付近	2.5YR4/8 赤褐 やや緻密 白粗～細粒やや少、白礫と黒微粒少 やや硬質	北部床上1cmとP10底上8cm。破片のうち7割はSI-64a北西部出土。SD-304にも混入 口1/3周 注記は左欄
5 土師器 甕	高 残 3.9 底 復 4.8	外面がかなり剥落・破損しているので復原径は参考値。外底面はおそらく多方向ヘラケズリで弱い凸面状。外面胴下位ナメヘラケズリ。内面は多方向ヘラナデ。外面の残存部全体が被熱している。	7.5YR3/2 黒褐 やや粗い 白・透明粗～細粒多 やや硬質	南東床上2cm 底1/4周 SI-112 9、P11

SG10区 SI-65 (第104・105図、写真図版101・102・201)

[位置] SG10区北部の22-17グリッド。近くに同じ古墳後期の遺構がなく、北に離れてSI-69・70がある。SI-65 → SD-503・SK-517の順で、北東部を近世のSD-503に切られ、時期不明のSK-517に浅く切られる。SD-503とSK-517の新旧関係は不詳。南西側1/2が採土工事で削平され、南半は確認調査時の試掘トレンチで床下まで削平される。攪乱溝(調査時名称SD-520)により中央を斜めに切られる。

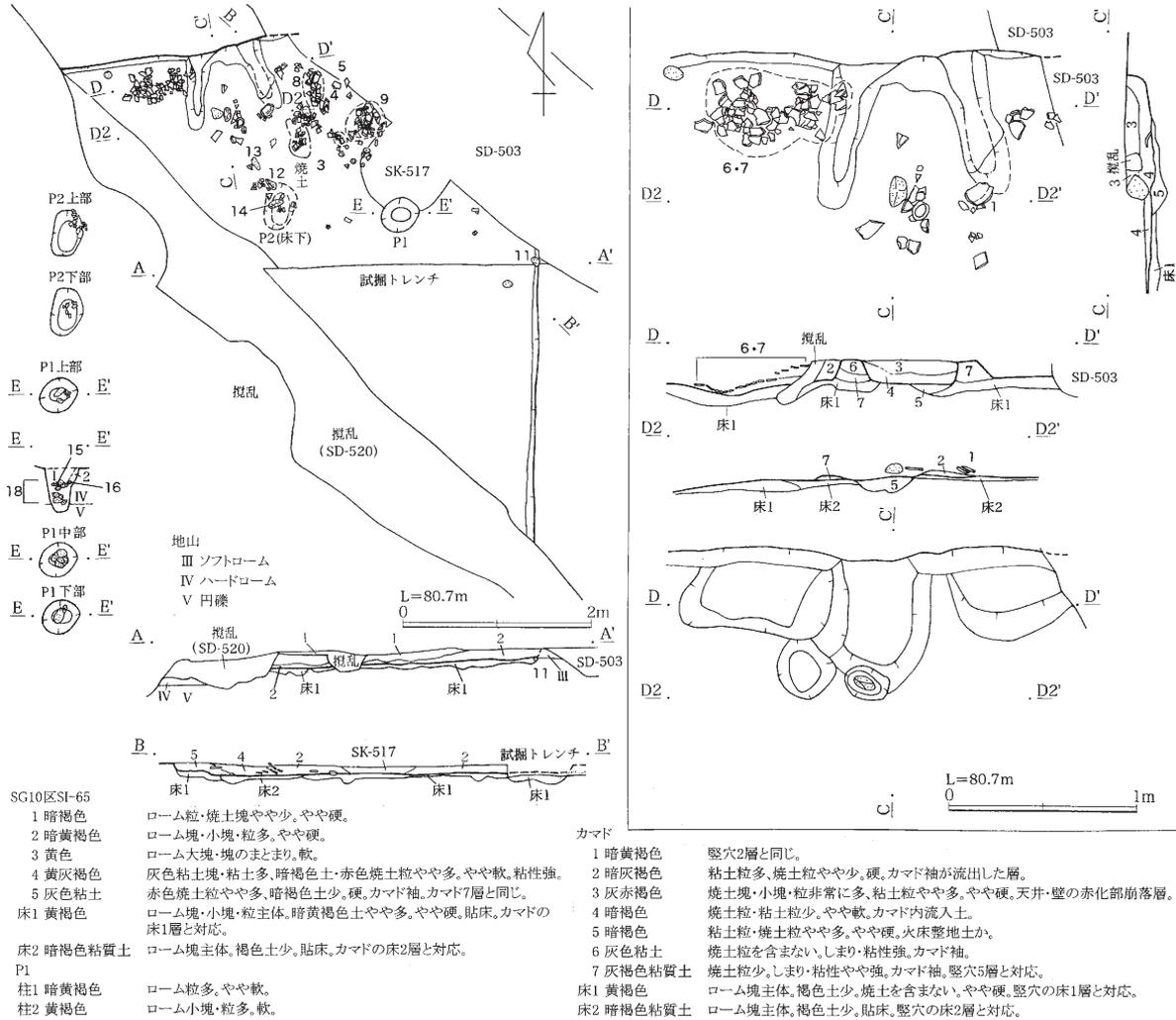
[規模と形状] 方形の建物跡。東壁と北壁が必ずしも直交方位をなさないが、両者から推定した平均的な主軸方位はGN-2°-W。カマドを北壁中央と仮定した場合の推定東西長は6.2m前後(6.0～6.4m)、残存長は東西5.06×南北5.52m。残存壁高は北壁で5～12cm、東壁は最大12cmだが東壁南部は試掘トレンチで破壊され貼床だけが残る。主柱穴は4本想定され、北東柱穴P1が残る。北壁からP1まで(推定約2m)が、東壁からP1まで(1.5m)より長い。P1は床からの深さ47cmで、底面形状からみて推定柱径は16～20cm。貼床除去後に確認した小土坑P2は床から深さ19cm、掘方底面から深さ11cm。P1に砥石とカマド構築石材片、P2に土師器甕片がある。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝は不明。

[カマド] 北壁にある。両袖推定幅102cm、煙道先端から袖先端まで82cm。東袖の粘土は焼土粒を含む7層、西袖上半の粘土は焼土を含まない6層。西袖は西へ、東袖先端は南へ崩れて流出し(2層)、西袖の西側は木根で攪乱されている。破片化した土師器甕(6)がカマドから西へ流れるように出土し、その中には別個体の甕底部片(7)も含む。焚口前面の東半に遺物が多く、赤く被熱した川原石がある(C-C'とD2-D2'の交点)。東袖先端付近では、同一個体の杯破片の内面を上に向けて2枚重ねる(1)。袖と貼床を除去した掘方には、地山を1～6cm掘り残した低い高まりが2箇所あり、袖の位置より少し東側にずれる。貼床下にある深さ13cmの小穴に、長さ13cmの川原石が1個入れている(C-C'とD2-D2'の交点の北西側)。

[覆土] 自然埋没と思われる。テフラの層や粒は認められない。

[遺物出土状況] カマド周辺の遺物はカマドの項で説明した。カマドの南東側に遺物が多い。編物石がカマド南方の床面に3点(12・13・14)、東壁付近の床面に1点ある(11)。11は被熱しているためカマド支脚に使ったものかもしれない。北東主柱穴P1内の中部には砥石(16)、下部にはカマド構築材の可能性が

第5章 権現山遺跡 SG10 区



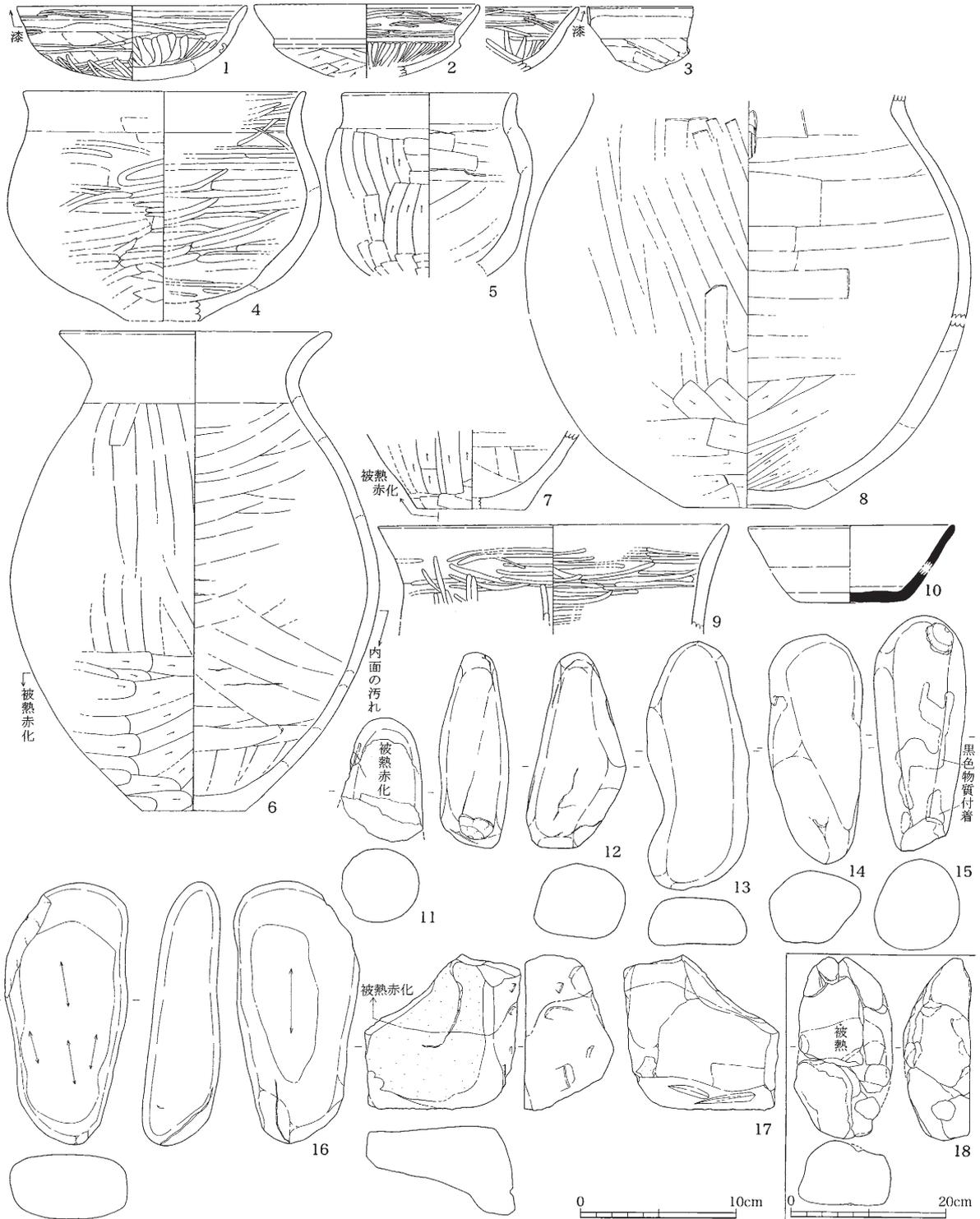
第 104 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-65 (1) 遺構

ある被熱凝灰岩破片 (18) が重なって入る。P1 内下部の被熱凝灰岩は 18 の他に 1 個体分程度の破片があるが、接合・復原できない。床下にある小穴 P2 内の上半には土師器甕胴部が 6 片あり、P2 下半には同一個体の土師器甕胴部 8 片が入っていた。

[出土遺物] 外傾口縁・外反口縁の杯が目立ち、身模倣形杯は小破片しかない。内面赤彩の杯片もある。1・3 は漆仕上げ杯の古い事例。1 は種子か昆虫 (?) の圧痕または混和痕が器壁中にある。6 はカマドで使用痕が明確な長胴甕。8 は丸甕で、被熱痕は不明確だが、カマド南東側で出土した底部片の外面に焼土が着く。硬質緻密なホルンフェルスの砥石 (16) は周辺各遺跡に比較的多く、SG10 区では SI-12 などにある。カマド構築材の可能性を持つ被熱凝灰岩は、大きな 2 点が P1 内 (うち 1 点が 18)、小さな 17 が遺構確認面でも出土した。図示以外の土師器と焼粘土塊合計 287 片・2,179g の内訳は、杯 110 片・487g、高杯 18 片・117g、壺甕類 158 片・1,564g、焼粘土塊 1 点・11g。平安時代初めの須恵器杯が混入している (10)。

第 58 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-65 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.6 高 4.8	外面は体部ナメヘラナデ後に横位と縦位のヘラミガキ。口縁部内外面ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面全体に漆仕上げと思われる褐色付着物が薄く残る。胎土中に混入した種子または昆虫 (?) の 8mm 大の圧痕があり、断面図に記入した。	5YR6/6 橙 緻密 白・赤粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	カマド焚口床上 4cm で破片を 2 枚重ねた状態 口 7/12 周 4
2 土師器 杯	口 復 14.4 高 残 4.6	薄く軽い。内面口縁端部が丸く肥厚する。外面は口縁部ヨコナデ、体部ナメヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部に密な放射状ヘラミガキ。漆仕上げは見られない。	2.5YR4/8 赤褐 緻密 白細粒やや多、赤粗～細粒と黒細粒少 硬質	カマド 4 層 (床上 3cm) と北部床上 3cm が接合 口 1/3 周 19、28 ノ下、K 東床面



第105図 権現山遺跡 SG10区 SI-65(2) 遺物

3 土師器 杯	口 復 12~14 高 残 4.2	外面は体部ヘラケズリ後ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部ナメヘラナデ後放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面全面漆仕上げ。	5YR5/6 明黄褐 やや緻密 白・赤・透明粗～ 細粒と黒細粒少 硬質	北部床上 2cm 口 1/6 周 38
4 土師器 大形鉢	口 復 18.0 高 14.8 底 復 4.6 最大 復 20.0	外面胴部ヨコヘラナデ後、上半を中心としてヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面全体ヨコヘラミガキ。外面中に 9cm 大の黒斑があり、被熱痕はない。	2.5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒少 硬質	北部床上 2～5cm が接 合 口 1/8 周、底 1/12 周 29、31
5 土師器 小形甕	口 復 10.8 高 残 11.8 最大 復 13.2	外面胴部タテヘラケズリ後に底付近と肩部をヘラナデ。内面胴部に横～斜位ヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。底部外面が被熱赤化した破片もあるが、破片化した後に被熱したものである。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白粗～細粒と黒・ 透明細粒少 やや硬質	北部床上 4cm。カマド西 側の 1 片も接合 口 1/6 周 1、34

第5章 権現山遺跡 SG10 区

6 土師器 甕	口 復 17.4 高 残 30.9 底 復 6.6 最大 復 23.1	外底面は円周方向のヘラナデで平坦。外面胴部タテヘラナデ後に下位をヨコヘラケズリ。内面は底部ナナメヘラナデ後に胴下位の積み上げ休止面を強いナデ。胴上～中位はヨコヘラナデで非常に浅く目の粗いハケメのようにも見える。内外面口縁部ヨコナデ。胴下位～底面の外面が被熱赤化し、内面に暗褐色のコゲ痕あり。	10YR7/4 にぶい黄橙粗い 白粗～細粒と透明細粒多、黒粗～細粒やや多軟質	カマド西側床直上～床上9cm 口全周、胴 2/3 周、底 2/3 周 1、64、1ノ下、K面2層
7 土師器 甕	高 残 5.1 底 復 6.9	外底面は1方向ヘラケズリ。外面胴下端ヨコヘラナデと胴部タテヘラケズリ。内面多方向ヘラナデ。外面胴部と底面外周が被熱赤化。内面底部が暗褐色気味。	2.5Y4/2 暗灰黄粗い 白・灰色粗粒と透明粗～細粒やや多、灰色礫少やや硬質	カマド西側床直上～床上9cm 底 1/3 周 1
8 土師器 甕	高 残 26.5 底 復 8.0 最大 復 28.4	外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面胴部タテヘラナデ後に下位を斜～横位ヘラケズリ。内面は底部に1方向と胴下位に斜位のヘラケズリ、中位以上ヨコヘラナデ、頸部ヨコナデ。外面下位は弱い被熱痕かもしれないが不明瞭で、少し焼土が付着する。 [注記]2、3、8、11～13、23～25、32、33、42、67、12ノ下、33ノ直下、Kフキン、K南方上層、K南上面、北西区1層、北西攪乱、Bベルト貼床、低地攪乱	10YR7/3 にぶい黄橙やや粗い 白・透明細粒多、赤・黒細粒少やや軟質	カマド南東床上5～8cmと北部床直上～床上4cmが接合 頸 1/4 周、底 1/2 周 注記は左欄
9 土師器 甕	口 復 22.4 高 残 7.1	内外面口縁部と内面胴部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面胴部タテヘラミガキ。胴部破片もあるが、量が不足して接合できない。 [注記]14、31、36、41、42、K南上面、SK-517	5YR7/6 橙緻密 赤粗～細粒やや多、黒細粒少やや硬質	北部床上2～7cmとカマド西床上1cm、SK-517の2片が接合 口 1/2 周 注記は左欄
10 須恵器 杯	口 復 13.1 高 推 5.0 底 復 6.7	体部中位が接合できない。外面底部はヘラ切り離し後に軽いナデ。ロクロナデ時もヘラ切り離し時もロクロは右回転(時計回り)。益子窯跡群産。平安時代初め頃の遺物が混入。	7.5Y6/1 灰やや粗い 灰色礫と白・灰色粗粒と白細粒少 硬質	口 1/18 周、底 1/6 周
11 石器 編物石?	長 残 7.8 幅 残 5.2 厚 残 4.6	断面が円形で棒状の自然礫を利用。全体がやや被熱して亀裂が入り、図の下端で折損している。カマド支脚の可能性もある。使用痕は不明。残存重量 212.7g。	5Y7/1 灰白緻密で硬質な安山岩	東壁付近床直上約 1/2 残 47
12 石器 編物石	長 12.5 幅 6.3 厚 4.5	断面が隅丸方形で棒状の自然礫をそのまま利用。図示した側面に1箇所だけ剥離面がある。これ以外には加工・使用痕は見られない。重量 443.3g。	7.5Y7/2 灰白わずかに多孔質気味で硬質な安山岩	北部床直上 完形 21
13 石器 編物石	長 15.9 幅 6.6 厚 3.0	細長く上下面が平坦な自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 487.8g。	2.5Y6/3 にぶい黄2～3mm大の石英斑晶が目立つ緻密で硬質な流紋岩	北部床上2cm ほぼ完形 20
14 石器 編物石	長 14.6 幅 5.9 厚 4.8	断面が不整多角形で棒状の自然礫をそのまま利用。全面が橙色気味だが、被熱しているのかどうかは不明確。加工・使用痕は見られない。重量 576.8g。	7.5YR7/4 にぶい橙緻密で硬質な流紋岩	北部床直上 完形 22
15 石器 編物石	長 15.1 幅 5.9 厚 6.4	図の上部が薄く下部が厚くなる棒状の自然礫を利用。図下端は自然の折損と見られる。図上端に浅い剥離がある。主に図示した面にタール状の黒色物が付着、下端の折れ面にも及ぶ。重量 762.3g。	7.5Y6/1 灰緻密で硬質な安山岩	P1 底上 30cm 一部欠 48
16 石器 砥石	長 16.7 幅 7.9 厚 5.0	断面が長方形の自然礫をそのまま利用。両面の中央部を縦位の研磨に使用して、細かい擦痕とわずかなツヤが認められる。剥離が1面だけあり、人為的なものかどうかは不明。重量 902.8g。	10YR5/3 にぶい黄褐非常に緻密で硬質なホルンフェルス	P1 底上 30cm 一部欠 49
17 カマド 構築材?	長 残 9.9 幅 残 9.9 厚 残 5.4 重 残 363.9	平面形や断面形がやや不整なので破片と見られるが、図示した被熱部が全周に見られるので破片の状態でカマド構築材に使用したと推定される。風化した自然面も残しながら、本来は直方体状に加工していたであろう。図の側面と下面(右図下)に工具の刃による加工痕がある。被熱してやや桃色気味に全周が赤化する。	2.5Y7/2 灰黄軟質で砂質気味な凝灰岩	カマド付近遺構確認面 破片? 上面

SG10 区 SI-66 (第 106・107 図、写真図版 102・103・173・201・202)

[位置] SG10 区北部の 22-17 グリッド。同じく古墳中期の遺構は、西に SI-67、南に SI-64 がある。古墳中期後～末葉の SD-304a・304b に北東隅と東部を、近世の SD-503 に南西隅を切られる。時期不明の SK-523・524・536・537 が覆土上部を切る。SK-523・524 は南東部で SI-66 → SK-524 → SK-523 の順に重複し、SK-536・537 は北西部にある。P1 の東側で、先行する倒木痕を SI-66 が切る。

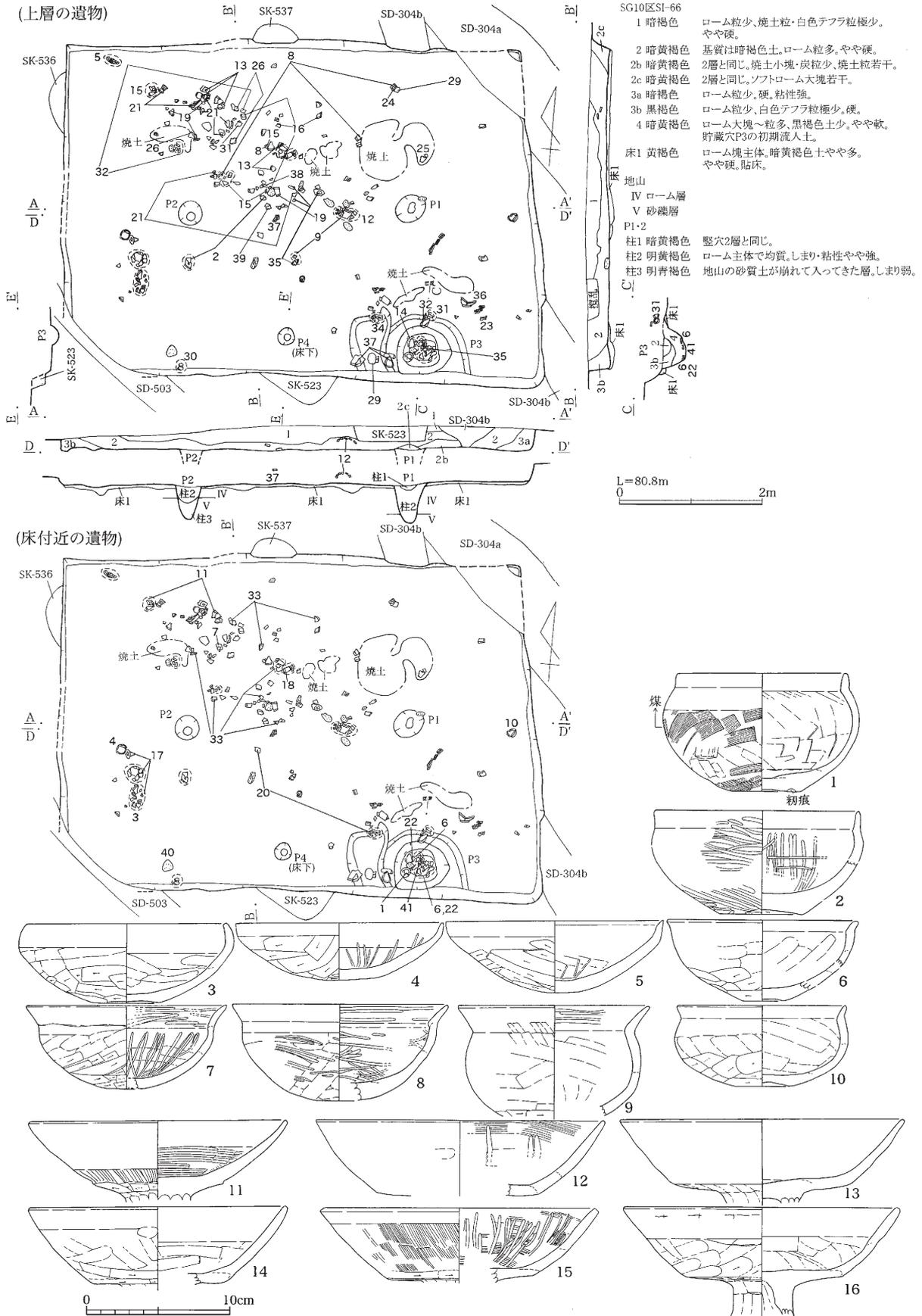
[規模と形状] 長方形で主軸方位は GN-3° -W。東西 6.78 × 南北 4.54m、残存する壁は東半で高く最大 33cm、西壁は残りが悪く 12～16cm。主柱穴 2 本の柱間は東西 3.08m。底面形から推定した柱径は 10～14cm で、床からの深さは P1=51cm、P2=44cm。P1・P2 の下部は、地山 IV 層(ローム層)を掘り抜いた下の V 層(青灰色砂と円礫の混合層)にある。P1 の大半と P2 上半はほとんどがローム質土の柱 2 層で埋まり、柱穴を確認しにくかった。P2 下半は、地山から崩れた砂質土の柱 3 層で埋まっている。

南東部にある貯蔵穴 P3 は東西 68 × 南北 67 × 深さ 26cm で、貼床土を盛った幅 20～30cm の周堤がめぐる。P3 の西にある窪みは南北 88 × 東西 56 × 床から深さ約 10cm で、貼床除去後に確認・図化した。入口施設の可能性がある P4 は貼床除去後に確認し、床面レベルから深さ 9cm。壁溝・間仕切溝はない。

[火処] 不明である。炉やカマドは認められなかった。重複する SD-304b や SK-523・524・536・537 は SI-66 の床面に達していないので、これらが炉を破壊したとは考えられない。

[覆土] 自然埋没状に堆積しているが、壁際流入土(3層)の上に乗る 2 層はロームが多い不自然な土質なので、2 層で埋め戻した可能性もある。テフラと考えられる白色粒が 1 層と 3b 層に認められ、2 層には白色粒がない。この建物は火災にあったと考えられる。北半と南東部に焼土のまとまりが複数あるが、いずれも床面

第4節 古墳時代の竪穴建物跡



第106図 権現山遺跡 SG10区 SI-66(1) 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

から 10cm 前後の高さで覆土 2 層や 2b 層にあるので炉ではない。南東部にある焼土の周囲 3 箇所に見られる炭化材も床から数 cm 浮く。火災建物は SG10 区 SI-66・74・84・104 や SG5 区 SI-11 がある。

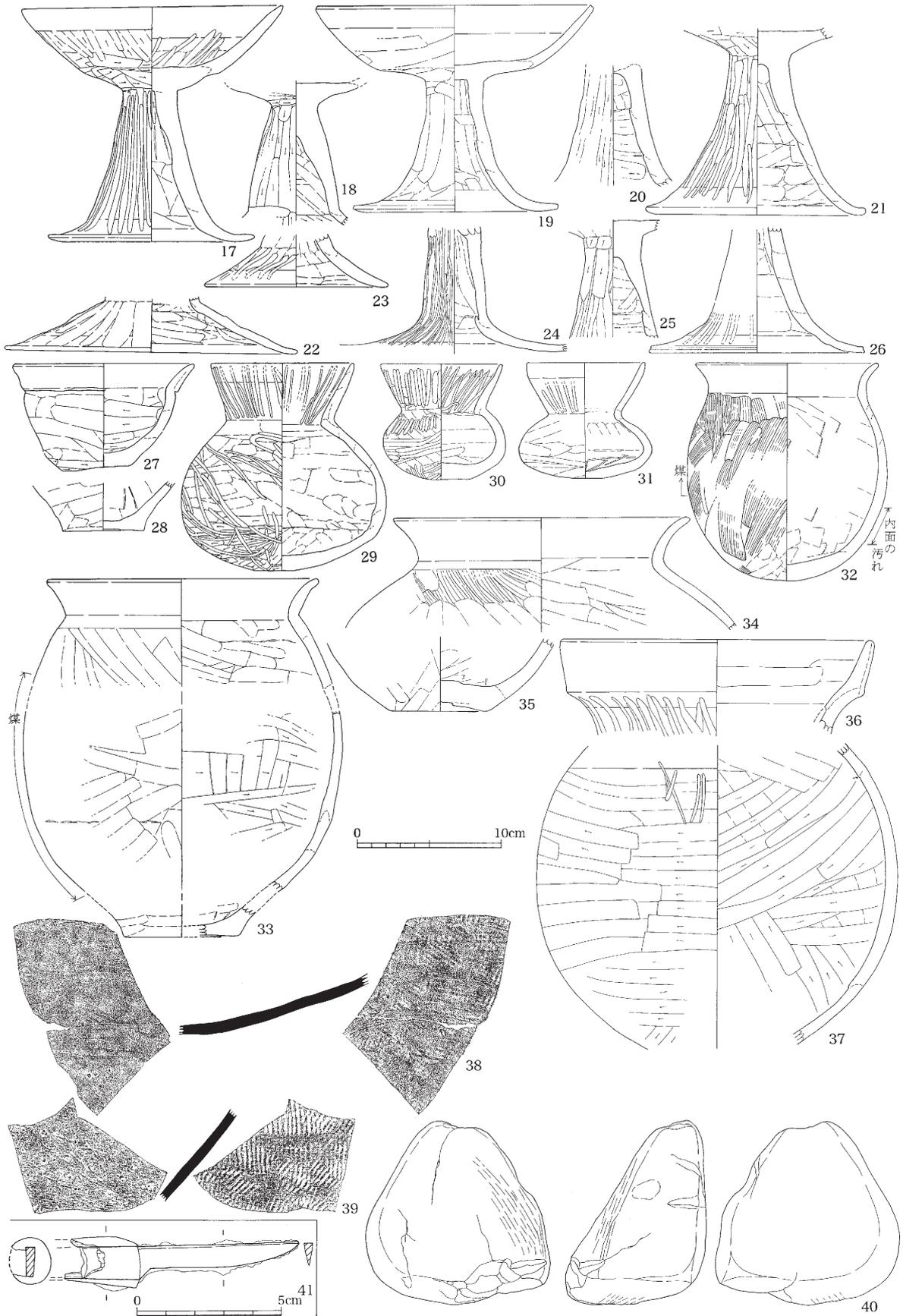
〔遺物出土状況〕 全域に多い。南壁際にある初期流入土 3b 層中に、遺棄品とみられる完形の土師器が多い。貯蔵穴 P3 の底付近で初期流入土 (C-C' の 4 層) に遺物が多い。北西部で 2・11・13・15・21 が 2 層上面に、7・18・33 はそれより下位にある。南西部では 3・4・17・20 が 2 層中で床面にある。SI-66 上層の破片 27 が、SI-25 床付近の遺物 36 と遺構間接合した。SI-25 の遺物片が 65m 離れた SI-66 上層に廃棄または流入したと言える。SD-503 の 22.5-17.2 グリッド出土遺物に、SI-66・67 からの流入品を含むとみられる。

〔出土遺物〕 粗痕のある土師器 (1) は、SG10 区 SI-50 などにある。内斜口縁杯が多い。7 は外面口縁部に粘土紐接合痕を意図的に残す。貼付口縁の鉢 (27) は SI-25 との遺構間接合品で、同工品が SI-25 にもう 1 点ある。高杯は比較的長い脚の内面下半に粘土紐痕を残し、上半に紐痕がないものが目立つ。小形壺は頸部が少し短くなっている。32 はハケ調整・丸底の特徴的な小形甕で、炉で使ったような煤が薄く付着する。受口状口縁の壺 (36) は SG10 区 SI-19a などにある。須恵器甕片の 38 と 39 は同一個体で内面無文。刀子 (41) は本遺跡北半の SG1 区低地にもある (『東谷・中島地区遺跡群』10, p.469)。台石に擦痕がある (40)。

図示以外の土師器は小破片が多い。不掲載の杯類は内斜口縁 2 点と平底底部がある。壺甕類は底部で数えて 3 点、中形壺は 1 点、高杯脚上半部 5 点。合計 281 片・2,429g の内訳は、杯 109 片・650g、高杯 88 片・907g、壺甕類 84 片・872g。図示以外の須恵器は、外面平行叩き・内面無文の甕胴部が 4 片・70g あり、38・39 と同一個体かどうかは不詳である。

第 59 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-66 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.0 高 8.2 底 4.8 最大 13.6 重 331.4	外底面は雑なナデで、周縁が少し高くなり、稲籾の圧痕が 1 箇所あり。外面は体部ナメナデ後に口～肩部をヨコナデし、体部に非常に浅いナメハケ。内面は底部と肩部にナメヘラナデ、体部にヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面全周の口～肩部に多量の煤付着。体部下半が被熱しているかもしれないが不明確。	7.5YR6/6 橙 緻密 灰色粗粒と白・透明粗 ～細粒やや多、黒細粒少 硬質	貯蔵穴底上 17cm (3 層) 完形 4
2 土師器 杯	口 復 14.0 高 7.2 底 5.5 最大 復 14.6	外底面は斜放射状のヘラケズリで凹底。外面はおそらく体部ヘラナデ後に口～体部を密なヘラミガキ。内面は底部に多方向と体部に縦位の密なヘラミガキ。外底付近に 9cm 大の黒斑あり。 [注記]91、122、139、南東 1 層、B ベルト南 1 層	5YR6/6 橙 緻密 白・赤粗粒と白・透明 細粒少 やや硬質	中央床上 17cm と南西床 上 28cm (1 層) と北西床 上 18cm が接合 口 1/4 周、底全周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 14.1 高 5.5 底 4.0 最大 14.9	外底面は 1 方向ヘラケズリで凹底状。外面は口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコヘラナデと下位ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。内面底部は器面が剥離し、使用痕と思われる。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 と黒細粒多、赤粗～細粒少 硬質	西部床直上 (2 層) ほぼ完形 口 3/4 周、底全周 136
4 土師器 杯	口 14.1 高 4.1	外面は底部に 1 方向と体部に横～斜位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部におそらくヘラナデ後に口縁部ヨコナデ、内面全体に放射状ヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と透明細粒 やや多、黒細粒少 やや硬質	西部床直上 (2 層) ほぼ完形 口 11/12 周 133
5 土師器 杯	口 15.0 高 5.0	外底面は丸味が強く多方向ヘラケズリ、外面口縁部ヨコナデと体部横～斜位ヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラナデ。	5YR6/6 橙 粗い 赤粗～細粒多、白・透 明粗～細粒と黒細粒やや多、 白・灰色礫少 やや軟質	北西部床上 8cm (2 層) と遺構確認面と 1 層が 接合 口 7/12 周 88、北西 1 層、上面
6 土師器 杯	口 13.2 高 残 6.6 底 2.9	口～体部境の稜は内面で明瞭。外底面はヘラケズリで凹底状。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデかナデ、下半部ヨコヘラケズリ。内面は体部ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ。口縁部内外面に煤が付着する箇所も見られる。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や や少、黒・透明細粒少 やや軟質	南東部 4 層 (貯蔵穴底 面～底上 5cm が接合) 口 1/2 周、底 3/4 周 6、9、157
7 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 5.8	外面の口縁部下端に粘土紐接合痕を明瞭に残している。外底面はヘラケズリで平底またはわずかな凹底状。外面は口縁部ヨコナデ、体部上半部ナメヘラナデ、体部下半ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後にタテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや少、赤・黒細粒少 硬質	北西部 2 層 (床直上) と 1 層 (床 12cm) が接合 口 5/12 周、底 1/2 周 75、81、104、北東 1 層、B トレ北 1 層
8 土師器 杯	口 復 14.9 高 残 6.7	外面は体部下半に斜位のヘラケズリ後ヘラナデ、体部上位にヨコヘラナデ、体部ヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデ後に横～斜位ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。 [注記]46、48、65、77、113、114、150、北東 1 層、北東 2 層、北西 2 層、南東 2 層、A トレ東 2 層	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・赤粗～細粒や や多、黒・透明細粒少 やや硬質	北東部 2 層 (床 3～ 15cm) と北西部 1～2 層 (床 3～21cm) が接合 口 1/2 周、体下部 3/4 周 注記は左欄
9 土師器 杯	口 復 13.2 高 残 7.7	外面は口縁部ヨコナデ後に肩部にかけてナメヘラナデ、体部ヨコヘラナデ後に下位ヨコヘラケズリ。内面は体部下半を縦位と上半を横位のやや強いヘラナデ、口縁部ヨコナデ。被熱痕や内外面の汚れは見られない。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、 白・黒・透明細粒やや多 やや硬質	中央部 2 層 (床 8～ 10cm が接合) 口 1/9 周、体 1/4 周 26、28、南東 2 層
10 土師器 杯	口 11.8 高 5.8 底 3.6 最大 12.0	口～体部境の稜は内面で明瞭。外底面はナデで凹底状。外面は口～肩部ヨコナデ、体部ナメヘラナデ、下半部ヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	5YR7/8 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や や多、黒・透明細粒少 やや硬質	東部床直上 (3 層) 口 5/6 周、底全周 42
11 土師器 高杯	口 復 16.8 高 6.7	外面杯底部はナデ後に外周ヨコヘラケズリ。外面体部タテハケと内面体部ヨコヘラ後に内外面口縁部ヨコナデ。内面杯底部はナデ。 [注記]70、89、北西 2 層、B トレ北 2 層	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白 粗～細粒やや少、黒・透明細 粒少 やや硬質	北西部床上 13～21cm が接合 (2 層) 口 1/36 周、杯底 2/3 周 注記は左欄



第107図 権現山遺跡 SG10区 SI-66(2) 遺物 27番の遺物は第51図36を再掲載

第5章 権現山遺跡 SG10区

12 土師器 高杯	口 復 20.0 高 残 5.0	外面は磨滅して調整不明。内面は斜～横位ハケ後にタテヘラミガキ。	5YR7/8 橙 やや緻密 白・黒・赤粗～細粒 やや多、透明細粒少 軟質	中央部床上 10cm (2層) 口 1/2 周、杯底 1/2 周 28
13 土師器 高杯	口 19.8 高 5.8	外面杯底部と脚部はおそらくタテヘラケズリ。外面杯体部と内面は磨滅して調整不明。脚上端内面はナデ。外面口縁部に 5cm 大よりも広い黒斑あり。 [注記]59、63、66、72、145、B 区トレンチ北 1 層	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒と 白・透明細粒やや多、灰色粗粒 少 軟質	北西部床上 9～22cm (2層)と中央部床上 2～17cm (1～2層)が接合口 1/4 周 注記は左欄
14 土師器 高杯	口 復 18.0 高 残 5.5	外面は杯体部と杯底部を放射状または斜位にナデ後に杯体部下端と杯底外周をヨコヘラケズリ。内面は杯体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・黒細粒やや少、 赤・透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 3～5cm が接合 (4層) 口 1/3 周 5、6
15 土師器 高杯	口 復 19.2 高 残 5.2	外面は杯底部タテハケ後タテヘラナデ、杯体部ナメハケ後口縁部ヨコナデ、杯体部下端と杯底外周をヨコヘラケズリ。内面は杯体部ヨコハケ後、杯体～底部タテヘラミガキ。内面の口縁部ヨコナデは非常に弱く、ハケメをほとんど消していないか、またはヨコナデ後にハケメを施している。 [注記]54、55、80、87、89、107、109、120、150、北東 1 層、北東 2 層、北西、B トレ北 2 層、B ベルト北 1 層、SK-523 西半	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒と 白・透明細粒少 やや軟質	北西部床上 5～13cm (2層)と北部床上 3～21cm (2層)と中央部床上 4～8cm (1～2層)が接合 口 5/6 周 注記は左欄
16 土師器 高杯	口 復 19.2 高 残 7.7	外面は杯体部ナメヘラナデと杯底部タテヘラナデ、体下端から底外周をヘラケズリ。脚柱に縦位と横位のナデ。内面杯部ナメヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。脚内面上端は縦皺状。 [注記]47、50、56、76、119、北東 1 層、北西 2 層、B トレ北 1 層、B トレ北 2 層、A ベルト西 1 層、B ベルト北 1 層	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒と 白・透明細粒少 やや硬質	北部床上 12～19cm (1～2層)と中央部床上 7cm (2層)が接合 口 3/4 周、脚柱 1/2 周、杯底 7/12 周 注記は左欄
17 土師器 高杯	口 18.0 高底 14.2	外面は杯下半ヨコヘラケズリと上半ナメヘラケズリ後ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面脚部はタテナデと裾部ヨコナデ後にタテヘラミガキ。杯内面はヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデと底～杯体部に放射状ヘラミガキ。脚内面は上部を絞って下部ナメナデ、裾部ヨコナデ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや少、黒・透明細粒少 やや硬質	南西部床直上 (2層) 口 2/3 周、脚柱全周、 脚裾 7/12 周 134～136
18 土師器 高杯	高 残 10.0 脚裾 10.0	脚柱部が厚くて重く、中程が外へ膨らむ。外面は脚部タテヘラケズリ後に脚柱部下端ナデ、杯底部ヨコヘラケズリ。杯底部内面はヘラケズリ後に 2～3 方向のヘラミガキ。脚柱部内面ナメナデ、脚裾部内面ナメヘラケズリ。	2.5YR4/3 にぶい赤褐 やや粗い 白・赤・透明粗～ 細粒多、黒細粒やや多 硬質	中央部床直上 (2層) 脚柱全周 61
19 土師器 高杯	口 復 19.2 高 14.4 脚裾 復 14.2	外面は磨滅して調整不詳で、おそらく縦位と斜位のヘラナデかヘラケズリ。内外面の口縁部と脚裾部にヨコナデ。脚内面はタテナデと部分的なヨコナデで、上部に絞りの跡と下部に粘土積み上げ痕を残す。杯内面はヘラナデと思われるが磨滅して不明瞭。 [注記]95、97、121、146、上面、A トレ西	7.5YR7/6 橙 緻密 白・黒・赤・透明細粒 少 軟質	北西部床上 3～13cm (1～2層)と中央部床上 18cm (1層)が接合 口 5/12 周、脚柱 1/2 周、脚裾 1/4 周 注記は左欄
20 土師器 高杯	高 残 8.4	外面タテヘラケズリ。脚内面は上端を雑にナデした後、中位以下を成形してヨコヘラケズリ。脚上端は杯底との接合部で割られたものかもしれない。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 赤粗～細粒と透明細粒多、 白・黒粗～細粒少 やや硬質	2層 (中央部床直上と 南東部床上 8cm が接合) 19、131、南東上半
21 土師器 高杯	高 残 13.0 脚裾 15.2	外面は杯底～脚部タテヘラケズリ後に杯底外周ヨコヘラケズリと脚裾ヨコナデ。脚全体タテヘラミガキ。脚内面は上部タテナデと下部斜～横位ナデ、裾部ヨコナデ。脚下半の内面には倒立状態で右回り (時計回り) に紐を積んだ痕を残す。 [注記]67、79、90、96、98、112、129、147	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・赤粗～細粒 多、白礫と透明細粒少 やや硬質	中央～北西部 2層 (床 上 6～19cm)と 1層 (床 上 16～24cm)が接合 杯底 1/2 周、脚裾 7/12 周 注記は左欄
22 土師器 高杯	高 残 3.7 最大 復 20.4	外面は脚柱部をおそらくタテヘラナデ、脚裾部ヨコナデ後に放射状ヘラナデ。内面は脚柱部ナメユビナデ、脚裾部ナメヘラナデ後に裾部端をヨコナデ。裾部に長 8cm 以上の黒斑あり。	5YR7/8 橙 やや緻密 黒・透明粗粒と 白・黒細粒少 やや軟質	南東部 4層 (貯蔵穴底 ～底上 3cm が接合) 脚裾 1/4 周 5、9、157、貯穴西半
23 土師器 高杯	高 残 3.7 脚裾 復 12.7	外面は脚柱部と脚裾部をナメヘラケズリ後ナメヘラナデ、脚裾ヨコナデ後ナメヘラミガキ。内面は脚柱部を少し絞ってタテナデ。脚裾部の上半をタテナデと下半をヨコナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや粗い 白礫と透明粗粒と 白・黒・赤細粒少 軟質	南東部床上 18cm (2層) 脚柱 1/2 周、脚裾 1/36 周 16、南東区上面、南東 2層
24 土師器 高杯	高 残 8.7	外面は脚柱部ナデと脚裾部ヨコナデ後に全体をタテヘラミガキ。内面は脚柱部上半を弱く絞った後にタテナデし、裾部を成形してヨコナデ。	5YR6/6 橙 緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東部床上 3cm (2層) 脚柱全周、脚下半 1/6 周 46
25 土師器 高杯	高 残 8.1	外面は杯底～脚柱部タテヘラナデ後に脚柱上半をタテヘラケズリ。脚内面は上半を横～斜位ナデ後に中位以下を倒立状態で反時計回り (?) に積み上げてナデおよびヨコヘラケズリ。杯部内面は磨滅して調整不明。	5YR6/6 橙 やや粗い 白粗～細粒多、灰 色礫と赤・黒・透明細粒少 やや軟質	北東部床上 6cm (2層) 脚柱全周 40、127
26 土師器 高杯	高 残 10.2 脚裾 14.8	脚裾の端面は凹線状で、端部内外面が細く肥厚する。外面はナデまたはヘラケズリの後に脚裾をヨコナデして全体をタテヘラミガキ。内面は上部に雑なタテナデ、下部にヨコヘラナデ、裾部にヨコナデ。器面が磨滅して調整不詳の部分が多い。 [注記]73、82、100、108、北東 1 層、上西、B ベルト、PN 北 2 層	5YR7/8 橙 緻密 赤粗～細粒と黒細粒や やや少、白・透明細粒少 やや軟質	北西部床上 7～21cm (1～2層)と中央部床上 22cm (1層)が接合 脚裾 7/12 周 注記は左欄
27 土師器 鉢	口 復 12.5 高 残 7.2 高底 復 4.8	下半部が厚くやや重い。外面は体部ナデの後に下端部ヨコヘラケズリ、外底面多方向ヘラケズリ。口縁部外面に粘土帯を付けて貼付口縁にし、内外面ヨコナデ。内面は体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。SI-25 の 37 と同工品。SI-25 出土破片 (口 1/2 周、底 5/12 周) と SI-66 出土破片 (口 1/3 周、底 1/12 周) が接合。 [注記]SI-25 297、388、東コーナー、貯蔵穴一括、SI-66 A ベルト東 1 層	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒多、 白・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	SI-25 の南東隅床上 1cm と貯蔵穴底上 9cm、SI- 66 の東半部覆土 1 層出 土破片と接合 口 5/6 周、底 1/2 周 注記は左欄
28 土師器 鉢	高 残 3.4 高底 復 5.6	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに上げ底状。外面体部ナメナデ、内面体部ナメヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白粗～細粒と黒・ 透明細粒少 硬質	遺構確認面 底 1/4 周 上面
29 土師器 小形壺	口 9.7 高 14.6 最大 14.1 重 残 582.3	体部は橙色、口～肩部は黄褐色の粘土で製作している。外面は体部ヨコヘラナデと底部横～斜位ヘラケズリ、口～頸部ヨコナデ。全体を縦～斜位ヘラナデ。内面は下半ユビナデと肩部ヨコヘラナデ。口～頸部ヨコナデ後タテヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤・透明粗～細粒 多、白・灰色礫と白・黒細粒 少 やや硬質	南東部床上 7cm (3層) と北東部床上 3cm (2層) が接合 ほぼ完形、口縁 端部 1/2 周欠 1、46
30 土師器 小形壺	口 8.3 高 8.0 高底 3.0 最大 8.4	外底面 1 方向ヘラナデで平底。外面体部ヘラナデと下部ヨコヘラケズリ後に体部全体ヘラミガキ、頸部下位タテヘラケズリと口縁部ヨコナデ後に頸部タテヘラミガキ。内面はナデ後に口縁部ヨコナデ、頸部ナメヘラミガキ。体部外面に 6cm 大の黒斑 1 箇所あり。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒やや多、 赤粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南西部床上 16cm (3層) 口 1/2 周、底全周 141
31 土師器 小形壺	口 8.2 高 8.0 高底 2.4 最大 9.2	外底面はあまり整わない平底で、底面と外面体部下位はヘラケズリ後ナメヘラナデ。外面体部上半ナメナデ、口縁部ヨコナデと頸部タテヘラミガキ。内面体部下位ヨコヘラナデと上～中位ナデ、口～頸部ヨコナデ。器面が磨滅し調整不明瞭。残存重量 172.7g	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 灰色粗～細粒と白・黒細粒や やや少、赤粗～細粒と透明細粒 少 やや硬質	南東部床上 8cm (2層) 口 11/12 周、底全周 13

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

32 土師器 小形甕	口 復 12.6 高 残 15.2 最大 復 14.6	外底面に多方向の雑なヘラナデ後、外面胴部に浅いタテハケ。内面は底部に多方向と胴部に斜位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面胴上半と口縁部に少量の煤付着。内面胴部下位に暗褐色の薄い汚れが少量あり。外面の被熱痕は不明。 [注記]69、71、83、94、99、147、148、156、北東1層、北西1層、北西2層、南東2層、南西1層、南西区、Bトレ北1層、Bトレ北2層	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 白細粒多、透明粗 ～細粒と黒細粒少 やや硬質	北西床土3～14cm(2層)と南東床土10cmが接合 口1/2周、頸1/2周 底全周 注記は左欄
33 土師器 甕	口 復 18.8 高 推約 25 底 復 7.8 最大 復 22.2	外底面は1方向ヘラケズリ後ヘラナデでわずかに凹底状。外面胴部に横～斜位ヘラナデ。内面胴部ヨコヘラナデで、胴下位の積み上げ休止面周辺はヨコヘラケズリ。口～頸部の内外面をヨコナデ。外面胴部中～下位に煤が多く付着する。 [注記]49、57、60、74、78、80、84、85、101、115、118、142、144、151、153、上面、南東1層、北西2層、北東1層、Aベルト東2層、Bベルト北1層、Bトレ北1層、Bトレ北2層	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白細粒多、白・灰色礫～粗粒と赤・透明細粒少 軟質	北部床直上～18cm(1～2層)と中央部床土3～18cm(1層)が接合 口1/2周、底1/3周 注記は左欄
34 土師器 甕	口 復 20.5 高 残 7.8	外面は肩部ナメハケ後に胴部に斜位(?)のナデ、口～頸部ヨコナデ。肩部から頸部下端の間だけナメハケが消されずに残る。内面は肩部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	2.5Y8/3 淡黄 やや粗い 白・黒・透明細粒多、白粗粒少 軟質	南部床土8cm(2層) 口1/9周、頸1/4周 18、一括
35 土師器 甕	高 残 5.1 底 6.6	外底面は上げ底状で、外周に粘土を貼って更に顕著にしている。底面外周をヘラケズリ、胴下端外面ナメヘラナデ。内面は底部に多方向ヘラナデ、胴部に斜位のヘラケズリ。 [注記]7、25、32、128、130、南東1層、南東2層、Aベルト東1層、Aベルト東2層、Aトレ東2層	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗粒やや多、白粗～細粒と黒・透明細粒少 硬質	中央部床土8～15cm(1～2層)と南東部床土3cm(4層) 底2/3周 注記は左欄
36 土師器 壺	口 21.2 高 残 6.5 最大 21.6	口縁部の外面に粘土を貼って厚くする。口～頸部内外面ヨコナデ後、頸部外面タテヘラミガキ。 [注記]17、20、21、30、南東2層	5YR6/6 にぶい橙 やや緻密 黒細粒多、透明粗粒と白・赤粗～細粒やや多、灰色粗粒少 やや硬質	南部2層(床土3～15cm)が接合 口2/3周 注記は左欄
37 土師器 壺	最大 25.0	外面は全体を主に横位にヘラケズリした後、肩～胴上位をヨコナデ。内面は斜位のヘラナデ後ヘラケズリ。外面胴上位に図示した縦沈線が5本あるが、意図して描いたものではないかもしれない。被熱・使用痕は見られない。 [注記]2、3、5、8、143、南東2層、北東2層、Aトレ東2層、貯穴西半	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白礫～細粒多、灰色・透明粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	南部3層(床土3～8cm)が接合 胴1/6周 注記は左欄
38 須恵器 大甕		外面は破片上部に縦位、下部に横位の平行叩き後に回転ヨコナデ。内面は横位のナデで無文。39と同一個体。	5Y4/1 灰 緻密 白・半透明礫～細粒少 硬質	中央部床土19cm(1層) 底部付近の2片 117
39 須恵器 大甕		外面は縦位～斜位の平行叩き後に間隔を空けた横位のナデ。叩き板は木目に平行する溝を彫っている。内面は横位のナデで無文。38と同一個体。	7.5Y5/1 灰 緻密 白・半透明礫～粗粒少 硬質	中央部床土20cm(1層) 胴部1片 124
40 石器 台石	長 12.8 幅 12.7 厚 9.8	断面が三角形の自然礫で、図に記入した2箇所にやや幅広く浅い擦痕がある。全体が被熱赤化し、図手前側の破損部は特によく被熱して剥離破損したと考えられる。重量1743.0g	2.5Y6/2 灰黄 緻密でやや軟質な安山岩	西部床直上(3層) 完形 140
41 鉄製品 刀子	長 残 7.6 刃幅 0.8 茎幅 1.2	刃部はよく使用して低ぎ減りしている。茎部は刃側で厚さ0.21cm、棟側で厚さ0.28cm。棟厚さ0.30～0.34cm。木製の柄が主に表面近くで残っていて、断面は径1.4～1.7cmの楕円形状。柄の表面に樹脂等を塗っていた可能性がある。重量10.3g。		貯蔵穴底上3cm 茎部下半欠 158

SG10区 SI-67 (第108図、写真図版103・104・202)

【位置】 SG10区北部の22-17グリッド。同じく古墳中期のSI-66が東にある。近世のSD-503と南西部の採土工事に破壊されている。

【規模と形状】 方形で主軸方位はGN-16°-E、東西5.40×南北5.24m。残存壁高は西壁中央で最大28cm、南壁東部と東壁北部で17～18cm。主柱穴は4本で南西柱穴P3が少し内側にある。柱間は南北1.94(西側)～2.16m(東側)、東西2.12(南側)～2.24m(北側)。床からの深さはP1=35cm、P2=39cm、P3=30cm、P4=41cm。柱穴断面形から推定した柱径は15～20cm。不手際によりP2は土層の記録がない。

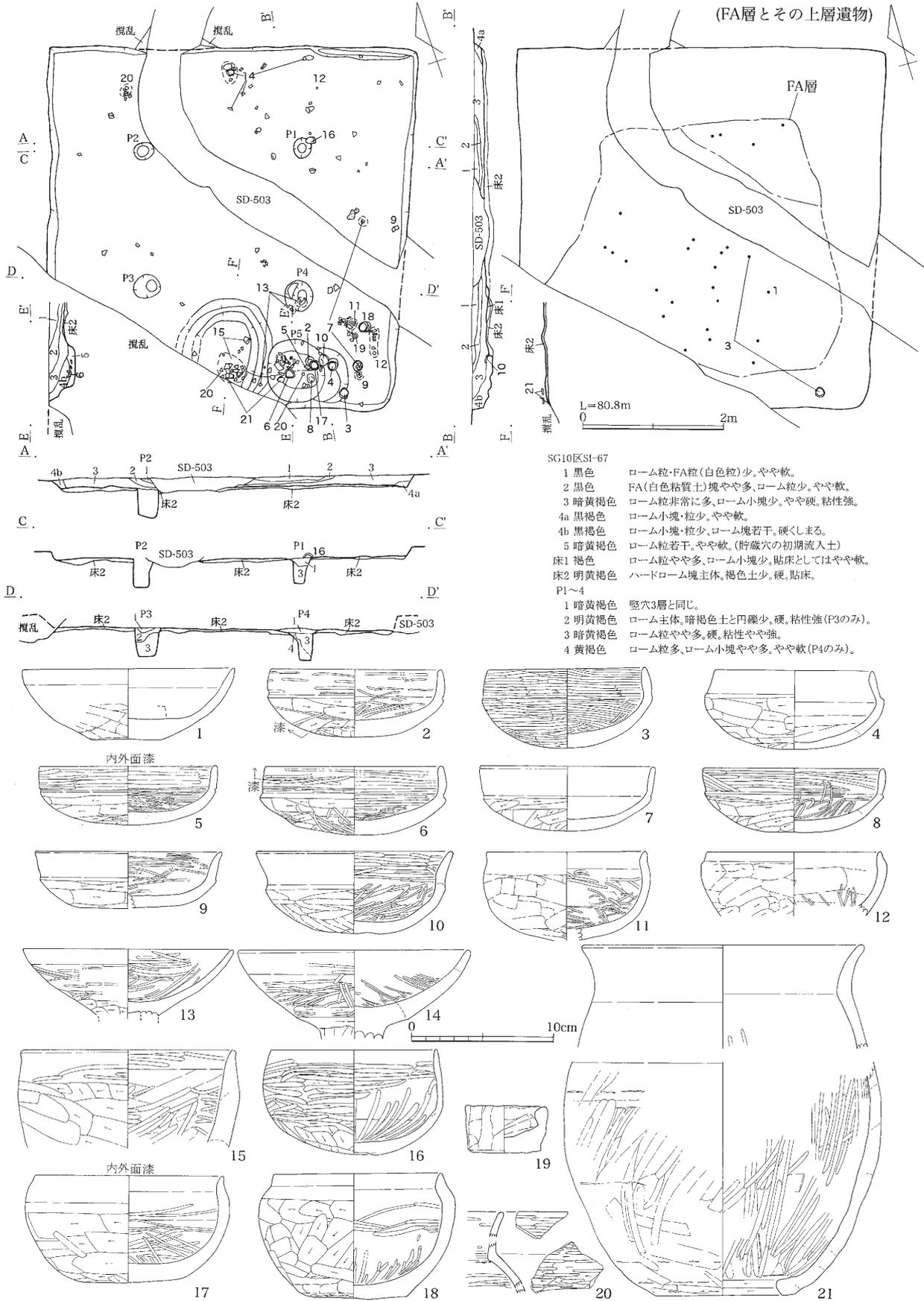
南中央にある入口関連のU字形土手状盛土は床から高さ2～7cmで、土手部の地山を少し掘り残した上に貼床土を貼る(F-F'の床2層)。南東部の貯蔵穴P5は東西82×南北88×深さ21cmで、東側に蓋受けとも見られる浅い窪み(東西長32cm、床から深さ4～6cm)が付く。P5周囲には土手状盛土がない。壁溝は北壁東部だけで確認し、床から深さ1～6cm。間仕切溝はない。掘形下面はローム層下の円礫層中。

【火処】 不明で、SD-503に破壊されたことが考えられる。カマドが一般化した古墳中期末の建物であるが、東壁や北壁にあったカマドが壊されたような焼土・粘土まじりの覆土は把握できなかった。

【覆土】 自然埋没で、埋没途中で降下したテフラ塊を含む覆土2層が面的に認められた。SI-67ではテフラを分析していないが、SG5区(第8章第2節)や北部のSG1区・2区・4区と、周辺遺跡(杉村遺跡北関東自動車道調査区、磯岡1区・3区、立野5区)のテフラ分析結果から、古墳後期初頭に降下したHr-FAと考えられる。テフラの量はやや少ない。断面A-A'とB-B'が通る位置より南西のP4西側付近でテフラのレベルが最も低く、床面を2層が覆う。テフラ降下よりも僅かにさかのぼる時期の建物と見られる。

【遺物出土状況】 南東部の貯蔵穴周辺に遺物が多い。完形に復原できる古墳中期末の模倣杯が床面にある(4)。貯蔵穴内では、壁際の初期流入土4b層より先に流入した5層中に土師器杯(5)などの破片が面的に広がる。

第5章 権現山遺跡 SG10区



第108図 権現山遺跡 SG10区 SI-67 遺構・遺物

それより上の4b層に集中する残存度の高い杯や鉢は、貯蔵穴周囲や蓋上から落ちたのかもしれない(2・6・8・10・17)。北東部でもほぼ完形の鉢が床面にある(16)。FA層の上層にも遺物があるので、火山灰および上層遺物の出土状況を示した(図右上の1・3)。FA下層(P5東側)の3に接合した小破片もFA層上にあり、本建物から周辺に廃棄した土器片が、FA降下後に竪穴内の窪地へ再流入したと推定される。

[出土遺物] 土師器は橙色の胎土でよく磨くもので、3は特によく磨いている。古墳中期末ころの須恵器模倣杯が見られる。2・5・6・17は漆仕上げとしては古い時期の資料である。高杯は脚が太いので短脚とみられ、13は漆仕上げかもしれない。小形土器(19)は紐積みではなく手捏ね成形。胴部上位に横位の沈線または段を持つ土師器大形甔(21)の事例は立野遺跡5区SI-46にある(『東谷・中島地区遺跡群』5)。

図示以外の土師器杯は身模倣形・直立口縁・外傾口縁が各1個分以上、小形土器は1個分、甔は1~2個分(大形甔と底部一孔の小形甔)がある。壺甕類は復原できない破片が多い。図示以外の土師器合計334片・3,399gの内訳は、杯158片・884g、高杯27片・231g、壺甕類89片・1,196g、甔55片・1,066g、小形土器5片・22g。このうちFA層より上層は小破片ばかりで計42片・364gあり、内訳は杯12片・62g、高杯1片・12g、甔10片・47g、甕壺類19片・243g。テフラの上下で器種や時期が大きく異なる状況はない。

第60表 権現山遺跡SG10区SI-67出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復14.9 高 5.0 底 5.2	外底面は平底でナデ調整。内外面体部の調整は磨滅して不明だが、おそらく横～斜位のヘラナデと口縁部ヨコナデ。	10R6/6 赤橙 緻密 白粗～細粒やや少、白 礫と黒・透明粗～細粒少 やや軟質	遺構確認面。南東部FA 上8cmの1片が接合 口1/36周、底全周 10、上面
2 土師器 杯	口 11.8 高 4.8 最大 12.5 重 残 255.2	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後、体部に疎らなヨコヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に斜～横位の密なヘラミガキ。外面の口～体部と内面全体に漆仕上げ。	5YR3/1 黒褐 やや緻密 白・黒・赤・透明 粗～細粒やや少 やや硬質	貯蔵穴底上8cm(4層) 口3/4周、体全周 104
3 土師器 杯	口 11.1 高 5.7 底 2.0 最大 12.0	外底面は多方向ヘラケズリ。内外面の口縁部と体部に密なヨコヘラミガキ。内外面にそれぞれ6～9cm大の黒斑あり。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒少 やや硬質	南東部床土5cm(4層) と貯蔵穴底上5cm(5 層)。中央部FA上2cmの 1片が接合 口3/4周 26、101、116
4 土師器 杯	口 11.2 高 5.6 最大 12.6 重 216.1	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。	5YR7/8 橙 やや緻密 白・赤・透明粗～ 細粒やや多、灰色礫と黒細粒 少 軟質	南東部床直上(4層) ほぼ完形 口全周 102
5 土師器 杯	口 12.5 高 4.2	外面の口～体部境に凹線1本。外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面底部に1方向と体部に斜～横位の密なヘラミガキ。内外全面漆仕上げ。	7.5YR3/3 暗褐 緻密 赤粗～細粒と白細粒や やや多、透明細粒少 硬質	貯蔵穴底直上(5層) 口1/4周 108
6 土師器 杯	口 12.3 高 4.9 最大 13.0	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後に多方向ヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に密なヨコヘラミガキ。外面口縁部と内面全体に漆仕上げ。	5YR6/8 橙 緻密 白・黒・透明細粒やや 少、白粗粒と赤細粒少 硬質	貯蔵穴底上10cm(4層) 口3/4周、体全周 107
7 土師器 杯	口 復12.3 高 4.6	薄く軽い。外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。器面が磨耗しているため内面体部や内外面口縁部にヘラミガキを施しているかどうかは不明。外面体部に8×5cm大の黒斑あり。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒少 やや軟質	南東部床土5cm(3～4 層)。東部床土4cm(3～ 4層)の1片も接合 口1/2周、体全周 50、125
8 土師器 杯	口 12.5 高 4.7 最大 12.8 重 残 181.6	外面は底部1方向と体部横位のヘラケズリ、体部に少量のヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に放射状または斜位のヘラミガキ。内面は炭素分が多く灰色だが、意図的かどうか不明。口縁部外面漆仕上げかもしれないが不確実。	7.5YR6/8 橙 緻密 赤粗粒と白・黒・透明 細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上10cm(4層) ほぼ完形 口11/12周 106
9 土師器 杯	口 復13.2 高 4.0	口縁端部を弱く外へ折る。外面は口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラケズリ。内面は全体にやや密なヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	東部床土2cmと南東隅床 上9cm(3～4層) 口1/6周、体1/4周 49、123、Bベルト南3 層
10 土師器 杯	口 13.8 高 5.9 底 3.7	外底面は1方向ヘラケズリで不明瞭な平底。外面の体部に斜～横位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は下半ナデと上半ヨコナデの後、口縁部に横位、体部に斜位、底部に多方向のヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや緻密 透明細粒多、白粗～ 細粒と黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上15cm(4層) 口2/3周、底全周 105
11 土師器 杯	口 復11.2 高 6.3 最大 復 11.7	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラナデ、底部ヨコヘラナデまたはヘラケズリ。内面は体部に多方向ヘラナデ後ヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	2.5Y5/3 黄褐 やや粗い 赤粗粒と白粗～細 粒やや少、白礫と透明粗～細 粒少 やや軟質	南東部床土3～4cm(3 ～4層) 口3/4周 32、33
12 土師器 杯	口 復12.2 高 残 4.5 最大 復 13.0	外面は口縁部ヨコナデと体部ナデ、底付近ヨコヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラナデ後に疎らなタテヘラミガキ。 [注記]32、67、124、126	5YR4/4 にぶい赤褐 やや緻密 赤粗～細粒やや多、白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	南東部床土3～8cm(3 ～4層)。北東部床土1 cmにも1片あり 口5/12周 注記は左欄
13 土師器 高杯	口 復14.8 高 残 4.7	やや薄く、脚柱部は中空。外面杯部は中位にナデ、下位ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、中位以上にヨコヘラミガキ。杯内面は体部ヘラナデ(?)と口縁部ヨコナデの後に、底部に1方向と口～体部に横位のヘラミガキ。脚柱部内面の上端は雑なナデ。内面に少量の煤(?)が付着し、漆仕上げの可能性もある。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白粗～細粒やや多、 赤・黒・透明細粒少 やや硬質	南部床土2cmと柱穴底上 29～38cmが接合 口1/3周、杯底全周 36、37、40、P5
14 土師器 高杯	口 復16.3 高 残 6.4	厚くて重く、脚柱部は中実。外面は杯底部ナデと脚柱部タテヘラナデ、杯体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。杯内面は底部に1方向と杯体部に横位の密なヘラミガキ。内外面に煤が薄く不規則に付着する。	5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、 白・黒・透明細粒少 やや軟質	北部3～4層(床直上 ～床土3cmが接合) 口5/12周、脚柱全周 56、59、61、62

第5章 権現山遺跡 SG10 区

15 土師器 鉢	口 復 14.8 高 残 7.0 最大 復 15.6	厚く重い。外面は口縁部ヨコナデ後にやや疎らなヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ナメナデと口縁部ヨコナデの後に全体をヨコヘラミガキ。[注記]38、42、43、上面、P3 西方貼床	25YR5/6 明赤褐 緻密 赤粗～細粒と白細粒や やや多、黒・透明細粒少 硬質	南部 3～4 層 (床直上 ～床 2cm が接合) 口 5/12 周 注記は左欄
16 土師器 鉢	口 11.7 高 7.2 底 2.3 最大 12.5	外底面は外周に粘土を貼って凹底状。体部下位タテヘラケズリ、体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデの後にヨコヘラミガキ。内面は底部円周方向ナデと体部ヨコヘラナデ後に口～体部ヨコナデ。体部タテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。残存重量 296.5g	10R5/8 赤 緻密 半透明粗～細粒やや多、 白・黒細粒少 やや硬質	北東部床直上 (3～4 層) ほぼ完形 口 11/12 周、底全周 69
17 土師器 鉢	口 13.2 高 7.7 最大 14.3 重 511.2	外底面多方向ヘラケズリ、外面口縁ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面底部多方向と体部横位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。内外面全体漆仕上げ。内面口縁が磨耗するので、器を置く台などに使ったとも考えられる。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・透明粗～ 細粒やや多、灰色粗粒と黒細 粒少 硬質	貯蔵穴底上 9cm (4 層) ほぼ完形 103
18 土師器 鉢	口 11.8 高 9.0 底 7.5 最大 13.8	外底面は多方向ヘラケズリ。外面は体部下端にナデと口縁部ヨコナデ後に体部を横～斜位ヘラケズリ。内面は体部にヘラナデと口～肩部ヨコナデ後、底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。重量 535.2g。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明粗～細粒少 硬質	南東部床 上 2cm (3～4 層) 完形 127
19 土師器 小形土器	口 5.5 高 3.4 底 5.0 最大 5.9	外底面は軽い多方向ナデ。外面体部にやや雑なナメナデ。内面はおそらく手捏ね成形時の雑な多方向コピナデ痕を残し、凹凸が激しい。重量 78.1g。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・赤粗多、黒・ 透明細粒少 やや硬質	南東部床 上 4cm (3～4 層) 完形 28
20 土師器 壺	口 復 8～10	外面は体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。外面口縁部と内面口～体部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。非常に丁寧に仕上げられている。 [注記]42、「42、43」、75、116、B トレ南 2～3 層	2.5YR6/6 橙 緻密 赤粗粒と白細粒少 やや硬質	北西部床 上 5cm と入口部 床面～床 上 2cm (3～4 層)。貯蔵穴底 上 5cm (5 層) にも小片 1 点 口 1/18 周 注記は左欄
21 土師器 甌	口 復 19.8 高 残 23.0 孔 復 7.6 最大 復 22.3	破片が不足し、胴部と口縁部を接合・復原できない。外面は胴部に斜～縦位ヘラナデで、胴部上位に沈線または段を明瞭に入れる。内面は孔端面ヨコヘラケズリ、胴部ヨコヘラナデ後にタテヘラミガキ。内外面口～頸部ヨコナデ。	7.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴底直上 (4 層) と 床 上 9cm (3～4 層) が 接合 口 1/12 周、底 1/2 周 42、43、51、111、120

SG10 区 SI-69 (第 109 図、写真図版 104・105)

[位置] SG10 区北部の 23-17 グリッド。同じく古墳後期の遺構は東に SI-70 がある。時期不明の SK-68、中世の P-574、長方形攪乱坑に切られる。カマド南側床面で確認した P-580 は覆土が SI-69 と異なり P-574～578 に近いので、P-580 が SI-69 を切る可能性が高い。北東部には先行する時期の倒木痕がある。

[規模と形状] 5.60m 四方の方形で主軸は GN-8°-E。残存壁高は東壁北半で高く、最大 15～17cm。北～北西部は遺構確認面が低くて竪穴壁が残らず、中央～北西部は床面まで攪乱される。支柱穴 4 本の柱間は南北 2.84m、東西 2.86 (南側)～3.04m (北側)。断面形から推定した柱径は 10～12cm、床から P1=42cm、P2=34cm、P3=45cm、P4=50cm の深さで下部の地山はローム (IV 層) より下層の砂礫まじりローム (IV' 層) に達する。P1～4 の 2・3 層はロームが多いので埋め戻したか、裏込土が崩れたのだろう。

入口に関わる土手状高まりは床から高さ 1～2cm で、ごく低いので断面 G-G' にうまく現れない。この土手で囲む内部に P5・P7、北側に P8 があり、床からの深さは P5=8cm、P7=10cm、P8=10cm。P5・P7・P8 の埋土は、竪穴 1 層と同質の黒褐色土。南東隅にある貯蔵穴 P6 は東西 88×南北 82×深さ 42cm で、貼床除去後の掘方底面が P6 の周囲で高い(図の破線部)。北東部にある壁溝は深さ 3～7cm。間仕切溝はない。南西支柱穴 P3 の西側で貼床除去後の掘方底面が周囲より深い、溝状ではない。

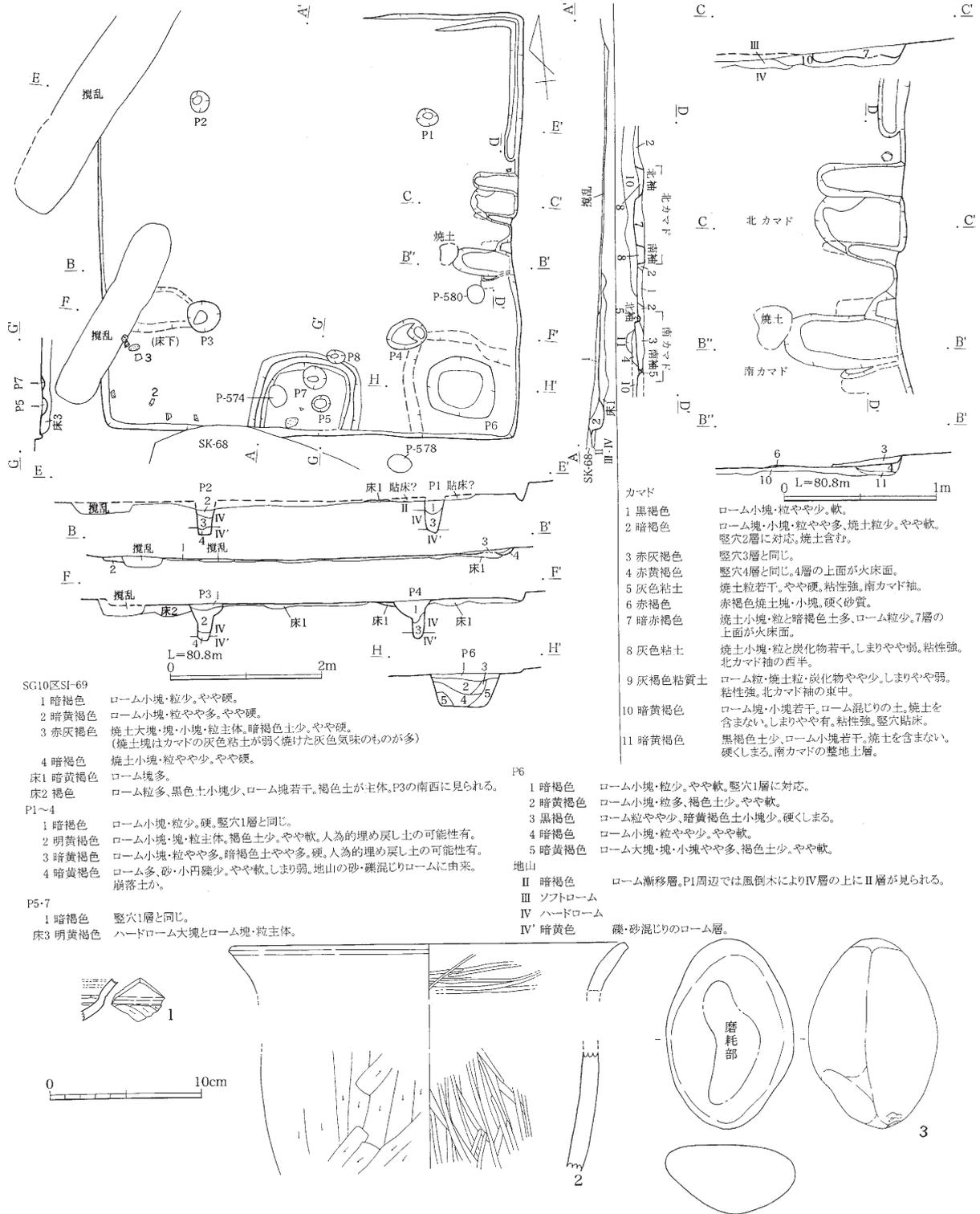
[カマド] 東壁に 2 基ある。南の古期カマドは両袖推定幅 60cm (残存 52cm)、東壁から袖の残る先端まで長さ 42cm。北の新期カマドは両袖幅 68cm、東壁から袖先端まで 58cm。両カマドの下に掘方はほとんどなく、貼床面に袖を貼り焼部を浅く窪めた程度である。両カマドともに残存壁高の範囲内に煙道はなく、壁の残りが悪いので煙道部が消失したと想定される。両カマド内の遺物は僅少で、南カマド 3 層(焼土集中層)の上面レベルに径 3～4mm の滑石製白玉が 1 点あるが、冬期の霜柱で紛失してしまった。北カマドは南袖残存部上に土師器壺類の胴部 1 片、北袖北側で床上 1cm に土師器甕胴部が 1 片ある。

南カマド(古期)は袖の残りが悪い。南袖は床面スレスレに高さ 1cm 程の最下部がかるうじて残り(5 層)、それより上部は焼部から続く焼土塊層に覆われていた(2・3 層)。北袖は先端部が残らず、壁に取り付く基部だけが残っていた。焼部は東壁へ向かって緩く下り、壁に当たるとまっすぐに立ち上がる。南カマド下部の貼床を断ち割ったところ、北袖の下部で地山が高まっていたが、袖内部まで地山が入ることはない。竪穴掘削時に南カマドの袖位置を計画していた(=北カマドより古い)ことを示している。

北カマド(新期)は両袖の基部付近が灰褐色粘質土(9 層)で、それよりも先は灰色粘土(8 層)を貼って作る。焼部の焼土塊がやや多い(7 層)。北カマドの西方では攪乱で床面が低くなっている。

[覆土] 残りが浅いので自然埋没か判断が難しい。テフラの層や粒はない。P6 は自然埋没状(断面 H-H')。

第4節 古墳時代の竪穴建物跡



第109図 権現山遺跡 SG10区 SI-69 遺構・遺物

[遺物出土状況] 南西隅を中心にごく少量ある。カマドの項で述べたとおりカマド付近の遺物も少ない。
 [出土遺物] 遺物はごく僅かで、甑片が多く、杯・壺甕類は少ない。内外面をよく磨く外傾口縁の杯片(1)と、他に形状不明の有稜模倣杯片がある。大形甑破片(2)と磨石(3)では時期を決めにくい。杯小片の特徴から古墳後期前~中葉であろう。図示以外の土師器合計30片・194gの内訳は、杯4片・19g、鉢2片・10g、壺甕類24片・165g。白玉はカマドの項で述べた。滑石製白玉はSG10区SI-30などにある。

第 61 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-69 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 2.8	口～体部境に段を持って口縁部が外傾し、ヨコナデ調整。外面体部ナメヘラケズリ。内面はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	南西部貼床中 F ベルト P4 東貼床
2 土師器 甕	口 復 25.4	外面は胴部タテヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は胴部タテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・透明粗～細粒やや 多、赤・灰色細粒少 やや軟質	南西部床上 2～10cm 口 1/12 周 4～7、入口施設
3 石器 磨石	長 12.5 幅 8.5 厚 4.4	断面が隅丸三角形の自然礫。比較的平坦なほうの面の中央部がわずかに磨耗している。重量 598g。	5Y6/2 灰オリーブ 緻密だがわずかに多孔質気味 な安山岩	南西部床直上 完形 11

SG10 区 SI-70 (第 110・111 図、写真図版 105・106・174・202・203)

[位置] SG10 区北部の 23-17 グリッドにある。同じく古墳後期前葉の SI-69 が西にあるが、接近しているので同時存在とは考えにくい。後期前葉の SI-70・72・74 が東西に並び、北側の SI-78 とともに同時存在の可能性もある。中世の柱穴状土坑群 P-584・587・588・589・593 に南～東部と北部中央を切られる。P-584・588・589・593 は SG10 区北部柱穴群に含まれる (第 203 図)。

[規模と形状] 方形の建物跡で、主軸方位は GN-13°-E。東西 5.20 × 南北 5.32m。残存壁高は南東部で高く (最大 29cm)、北壁で低い (最小 15cm)。

主柱穴は 4 本。竪穴のプランに対して、柱穴の配置が時計回りに振れている。東側の主柱穴 P1 と P4 は建て替えがあり、北側の深い柱穴が旧期、南側の浅い柱穴が新期である。P2 と P3 は建て替えによる柱抜取穴が上部で東側へ大きく広がり、新期柱の掘方になっている。裏込土の柱 3 層と柱 4 層もよく残る。P3 の柱の東西の裏込土はロームが主体で、柱 3 層に円礫多数や土師器 2 片を混ぜてあった。P4 の旧期柱穴はロームの塊と粒を主体とする黄褐色土で埋め戻されていたので、床面で確認することが難しかった。新期柱穴は明瞭に確認できた。旧期柱穴の柱間は、P1 旧-P4 旧の間で 2.90m。新期柱穴の柱間は南北 2.84m (東側)～3.13m (西側)、東西 2.94m (南側)～2.98m (北側)。旧期の断面形や、新期の土層からみて新旧両期の推定柱径は 12～14cm 程である。旧期柱穴のほうが新期よりも深く、P1 旧=52cm、P1 新=38cm、P2=46cm、P3=46cm、P4 旧=51cm、P4 新=35cm。新期柱穴は西側 (P2・P3) が東側 (P1 新・P4 新) よりも深いので、P2・P3 とともに旧期柱穴の深さを継承していることが推定できる。

貯蔵穴 P5 は南東隅にあり、東西 85 × 南北 58 × 深さ 37cm で、P5 の北西隅は柱穴 P4 を避けるように隅切形になっている。西側の主柱穴 P2 と P3 からそれぞれ西壁側へ伸びる間仕切溝 D2 と D3 は、貼床を除去した後に確認した。一方、P2 から北へ延びる間仕切り溝 D1 は、P2 の柱 2 層と同質の覆土で埋まっていた。床面でやや明瞭に確認できた (断面図 H-H')。床面からの深さは D1=5cm、D2=7cm、D3=13cm。入口施設と壁溝は見られない。貼床除去後の掘方底面は、南～東部に比べて中央部が、段差を持たないでゆるやかに低くなる (平面図に記入した破線部)。

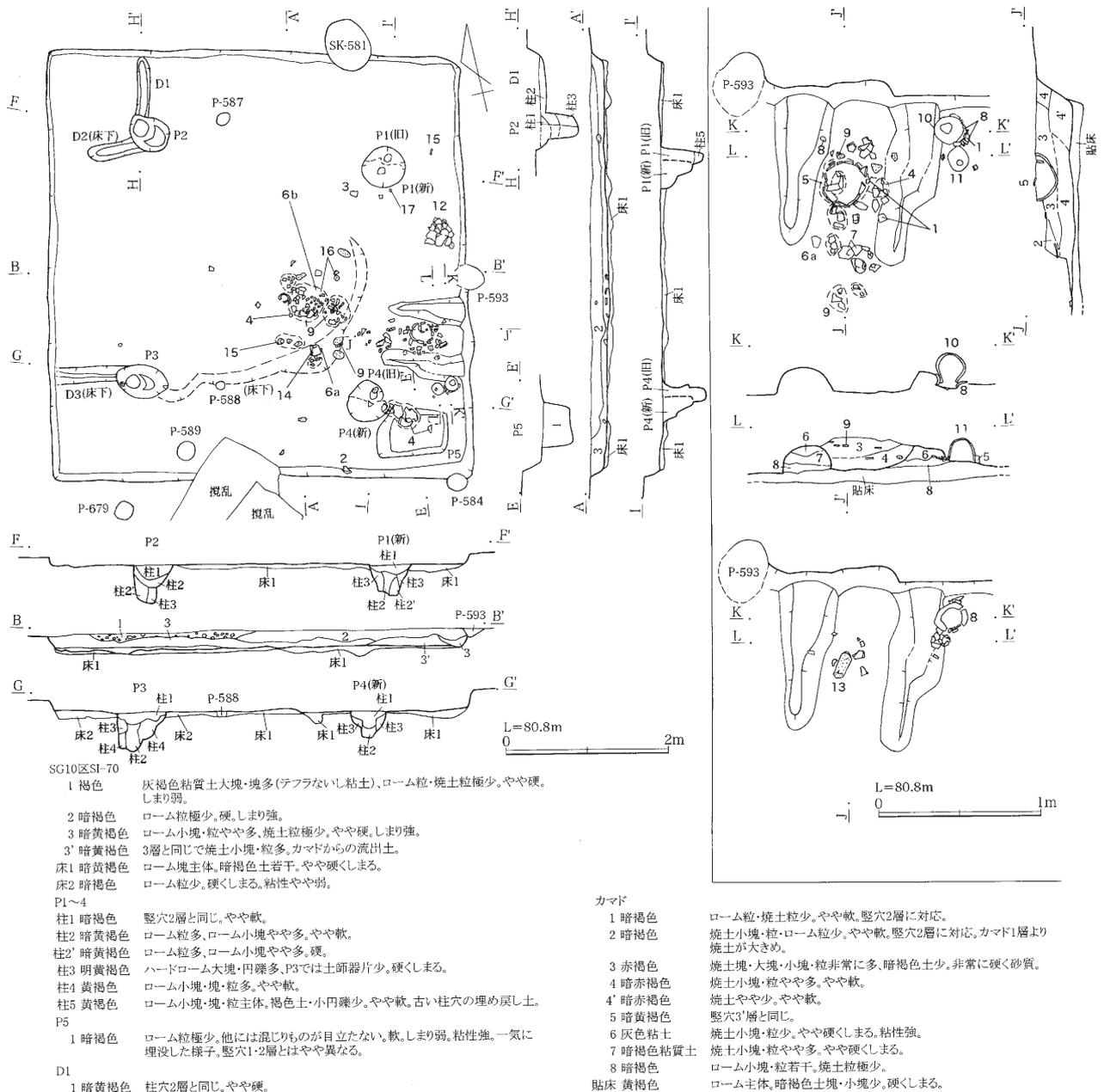
[カマド] 東壁の南部にある。両袖幅 101cm、煙道先端から袖先端まで 114cm。両袖の下部には特別な掘方がなく、周囲の床と同じレベルで平らに貼床をした上に、カマドを作る。柱穴と同様に、カマドも竪穴の主軸より少し時計回り方向へ振れている。カマドの南袖が P4 に近いので、カマドを P4 から離すために角度をつけたとも考えられるが、そうであればカマドをもう少し北側に作ればよさそうに思える。カマドに掛けた土師器甕の胴部下半が残されていた (5)。南袖の南に接して土師器甕頸部を床に埋め込んだ転用器台がある (8)。器台の北半下部を南袖の粘土に埋め込んで据え付け、器台の上に倒立した小形甕 (10) が載っていた。そのさらに南側には倒立した小形甕が床面に置かれている (11)。燃烧部には支脚石がある (13)。カマド南袖内からも土師器片が出土した (断面図 L-L' およびカマド下図)。6 と 9 はカマド内と竪穴中央部床付近に破片が分かれている。

[覆土] 自然埋没と思われる。1 層は紫色を帯びた灰色粘質土塊を多く含む層で、竪穴の西半部に分布する。火山灰ではなく、SI-73 で Hr-FA 火山灰層の下層に見られた粘土塊にむしろ類似している。カマド構築用な

どの粘土が上層に廃棄されたのかもしれない。貯蔵穴は一気に埋没した様子で単層で(断面図E-E')、竪穴部の覆土1・2層と異なる。

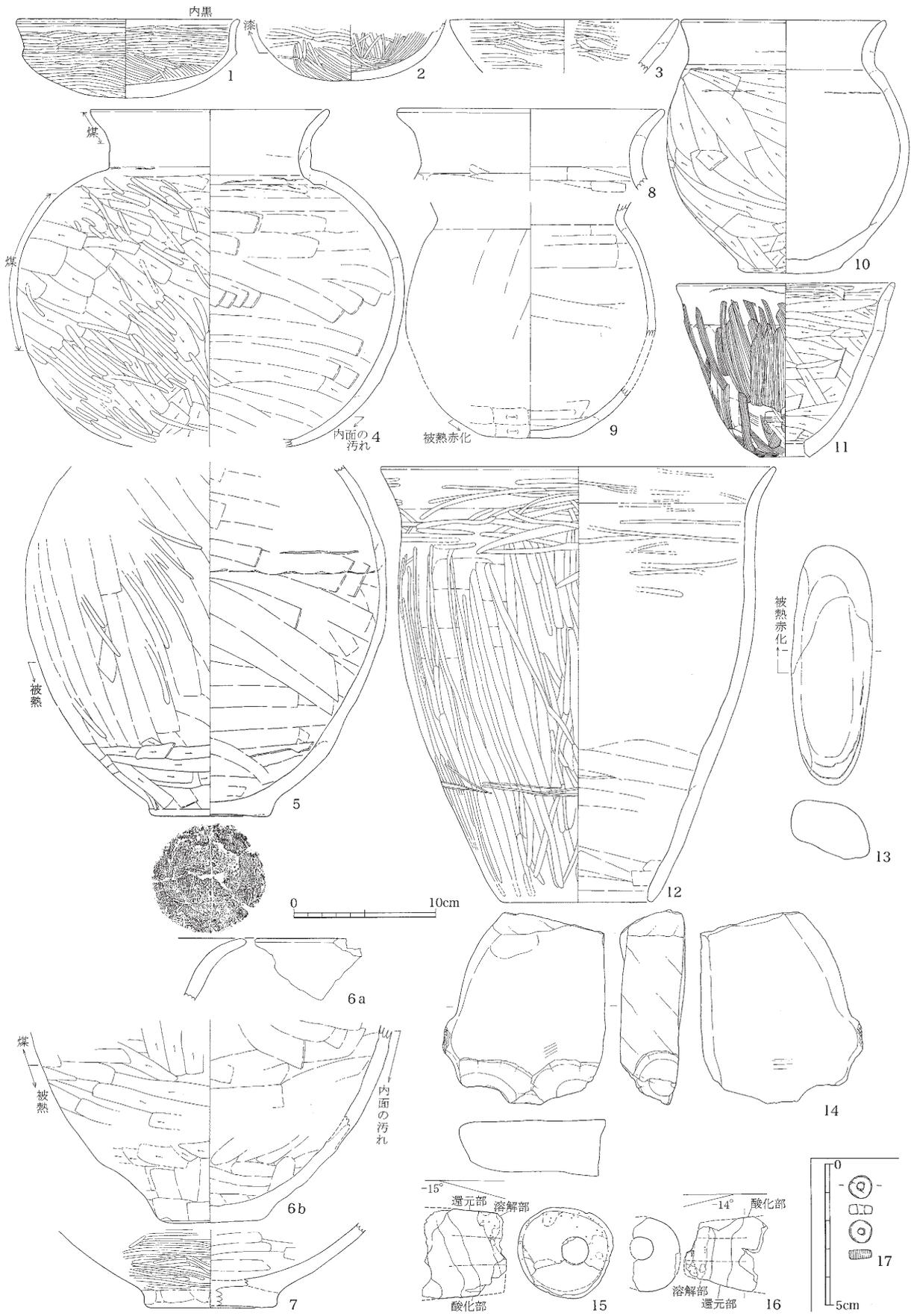
〔遺物出土状況〕 中央部から南東部に遺物が多い。カマドの西側から北西側で、床面直上および2cm程浮いて専用羽口が計3片出土した(15・16)。周囲の床面をよく見ても鉄滓・炭・焼土集中などがなく、SI-70自体は鍛冶遺構ではないので、集落内でこの付近に存在していた鍛冶遺構から遺物が廃棄されたと考えられる。P1南側の床面に白玉がある(17)。カマド北側の床面には完形の甕が横転してある(12)。カマド内の遺物はカマドの項で述べた。

〔出土遺物〕 SI-70・72・74には類似した土器が見られる。1は炭素吸着による内面黒色処理で、SI-74・78に類似品がある。2はミガキ後漆仕上げの杯。カマドを持つ建物だが、4と6は炉で使ったような煤が外面上部に見られ、特に4は煤が多い。甕・甕類と高杯は橙色の胎土が多い。5は甕の外底面に刻線「一」がある。7は底部が円盤状に突出する大形壺。10は被熱使用痕がなくて内面が剥落している完形の小形甕。台石(14)



第110図 権現山遺跡 SG10区 SI-70(1) 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第111図 権現山遺跡 SG10 区 SI-70(2) 遺物

は敲石にも使ったらしい。本遺跡の羽口で最も大形の専用羽口2点(15・16)は、『東谷・中島地区遺跡群』10で権現山遺跡の鍛冶関連遺物全体を報告後に確認したため、同書 pp.490-498 に掲載されていない。粘板岩製白玉(17)の類例はSG10区SI-20などにある。遺物量は多く、甕・甌が主体で杯・鉢が少しある。明確な長胴甕は破片も見られない。図示以外の土師器および焼粘土塊合計204片・1,364gの内訳は、杯74片・417g、高杯9片・39g、小形壺1片・13g、壺甕類117片・834g、甌2片・52g、焼粘土塊1点・9g。

第62表 権現山遺跡SG10区SI-70出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 15.5 高 5.6 最大 15.8	口縁部上端が少し反外する。外面は底部ヘラナデ、体部に密なヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向と口～体部に横位の密なヘラミガキ。内面を炭素吸着の黒色処理。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 透明粗～細粒やや多、白粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	火床面上11～16cmとカマド南側床土2cmが接合 口2/3周 5、14～16、27、北西2層
2 土師器 杯	高 残4.2	外面は底部に1方向と体部に横位の密なヘラミガキ。内面は底部に多方向と体部に縦位の密なヘラミガキ。外面の上半と内面に漆仕上げ。外面底部全体に大黒斑あり。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 透明粗～細粒と白細粒少 硬質	南端床直上。貼床の1片も接合 片1/2周 63、貼床
3 土師器 高杯	口 復16.1 高 残3.8	口縁部内外面ヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。外面口縁部上位に煤が付着する。	2.5YR6/6 橙 緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	北東部床土4cm 口1/6周 39、北東1層、北東2層
4 土師器 壺	口 復16.8 高 残23.8 最大 復27.2	外面胴部はナメヘラケズリ後、下半に密で上半に疎らなナメヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデで胴下位にはヨコヘラケズリも行い、肩部ナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面の胴中位に多量と口縁部に少量の煤付着。内面胴下部に黒褐色の汚れ(コゲ)が明瞭。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色粗～細粒やや多、赤・黒・透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上38～43cm。 中央床土20cmに小片1点あり 口1/3周、胴5/12周 42、64、65、P5東上半部
5 土師器 甕	高 24.7 底 8.2	外底面は多方向ナデ後、外周に薄く粘土を貼ってから円周方向に外周をヘラケズリし、焼成前の沈線1本を描く。外面胴部は縦～斜位のヘラナデとともに棒状工具で浅い斜凹線を入れる。内面胴部はヨコヘラナデで胴部下位と中位上半に粘土紐積み上げ痕を残す。外面下半が被熱しているかもしれないが不明瞭。	2.5YR4/4 にぶい赤褐 やや粗い 白・灰色粗～細粒多、灰色礫と透明粗～細粒と黒細粒少 やや軟質	火床面上8cmでカマドに掛けた状況 胴1/2周、底全周 13
6 土師器 甕	口 復22～25 高 残13.8 底 7.6	外底面は多方向ヘラケズリで弱く突出する平底。外面胴下ナデと胴中位タテおよびヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面胴部は下位～底面が被熱し、中位に煤少量。内面胴部はやや薄く暗褐色に汚れている。胴上半～頸部は破片が不足して復原できない。 [注記]2、4、6、7、9、13、51、51ノ下、70、上面、カマド西1層、カマドソデ間、Aベルト南2層、Aトレ南下半	7.5YR6/6 橙 粗い 白・灰色粗～細粒多、白礫と黒・透明細粒少 硬質	中央部床土2cm。中央部床土4cmと火床面上14cm(2層)に破片あり 口1/12周、底全周 注記は左欄
7 土師器 大形壺	高 残6.0 底 9.0	外底面は無調整または軽いナデ。外面胴下ナデコビオサエ、胴部ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラナデ。 [注記]31、32、51ノ下、Aトレ南下半	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・黒・透明細粒多、白・透明細粒少 やや軟質	火床面の直上と上1cmが接合 底1/2周 注記は左欄
8 土師器 甕	口 18.8 高 残5.8	外面口～頸部ヨコナデ後に肩部ヨコヘラナデ。内面肩部ヨコヘラナデ後に口～頸部ヨコナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・灰色粗～細粒やや多、赤・透明粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	カマド南側床面上向きで設置し、器台に転用 口5/6周、頸全周 27、71
9 土師器 甕		外底面は丸味を持つ平底で、剥落して調整不詳。外面体部下位ヨコヘラナデまたはヨコヘラケズリ、体部上半タテヘラナデ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面底部周辺が被熱赤化。 [注記]1、2、4、13、24、51、52、54、カマド西方、上面、北東2層、Aトレ南下半	10YR4/2 灰黄褐 粗い 白・灰色・透明礫～細粒多、黒細粒やや多、赤粒少 やや硬質	火床面上3～15cmと中央床土1～2cmが接合 頸1/4周、底全周 注記は左欄
10 土師器 小形甕	口 14.5 高 17.9 底 5.0 最大 17.1	外底面は多方向ヘラケズリでやや凸面状にする。外面口縁部ヨコナデ後に胴部ナメヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデで、胴部は器面が剥落して調整不詳。被熱痕は見られない。重量983.9g。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗粒と白・黒細粒少 硬質	カマド南側で甕頸部を転用した器台の上に倒立 完形 26
11 土師器 小形甌	口 15.4 高 12.4 底 3.4 孔 2.8	外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部タテハケ(10本/cm)。内面は口縁部ヨコナデと孔端面ナデの後に体部ヨコヘラケズリ。重量554.3g。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	カマド南側の床直上に倒立 完形 28
12 土師器 甌	口 27.7 高 31.0 底 10.7 孔 9.3 重 残2661	外面は胴部タテナデおよびヨコヘラナデ後タテヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面下位に焼成前の横位擦痕が全周に浅く付く。内面は胴部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの後、口～胴上位にヨコヘラミガキ。内外面の半周程度に暗褐色の薄い付着物があり、煤または漆仕上げ痕かもしれないが不確実。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 赤粗～細粒やや多、白粗～細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	東部床直上 ほぼ完形 口5/6周、底全周 40
13 支脚	長 16.9 幅 5.6 厚 4.5	断面が不整形の自然礫をそのまま支脚として使用したもの。図の上部が約1/3位被熱しわずかに赤色化。これと同じ範囲に焼けた粘土も少し残存し、カマド粘土がかぶさったと見られる。重量595.6g	N7(B) 灰白 緻密で硬質な安山岩	火床面直上 完形 78
14 石器 台石	長 13.4 幅 11.3 厚 4.6	板状の自然石で、側面のうち1面は自然面のままで、最も突き出た部分で敲打を行った痕がある。他の側面は割れ面である。両面に明瞭な使用痕は見られず、ごく浅い擦痕がある。重量948.5g。	2.5Y7/3 浅黄 大粒の石英斑晶がやや目立つ 緻密で硬質な流紋岩	中央部床土5cm 一部欠 57
15 土製品 専用羽口 (鍛冶)	長 残5.9 幅 残5.4 厚 1.5～2.4 重 残166.1	やや太身の専用羽口の先端部破片。通風孔の径は先端部で1.9cm、基部寄りでは2.2cm。丸棒を基部側へ引き抜いて製作したと見られる。先端部全体が溶損してガラス質の滓に覆われている。使用時の下方へ滓が垂れていたはずの部分は欠損して不明。径1.4cm大の礫も含むので、土師器の胎土とは異なる。鍛冶関連遺物構成Noなし。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色・透明粗～細粒やや多、白礫少 軟質 磁着度4 メタル度未測定	北東部床土7cmと中央部床土2cmが接合 先端2/3周 37、59
16 土製品 専用羽口 (鍛冶)	長 残5.8 幅 残5.3 厚 1.6～2.2 重 残65.5	先端部の推定径約3.7cm程度まで先が細くなる専用羽口の先端部破片。通風孔の径(1.6cm)は基部寄りではかわからないが、先端まで同様の大きさと見なして図に記入した。先端は溶損して暗緑色ガラス質の滓に覆われる。羽口先端が下に溶けて垂れる部分は破損して現存しない。通風孔内部の先端から17mmまでの範囲に鉄錆色の酸化土砂が薄く付着する。鍛冶関連遺物構成Noなし。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色・透明礫～細粒やや多、3～12mm大の白色小石少 軟質 磁着度4 メタル度未測定	中央床土2～3cmが接合 1/4～1/2周 48、51、Bトレ南下半
17 石製模造品 白玉	径8.0～8.1mm 厚2.2～3.5mm 重 0.25	上下両面は節理に沿って割ったきれいな平坦面で研磨なし。側面は縦方向(穿孔と同じ方向)のやや粗い研磨痕。断面図に示したように孔径は一方がわずかに大きく、初孔径2.6mm、終孔径2.4mm。穿孔剥離がないので、長い素材に穿孔後に分割した可能性もある。	5Y4/1 灰 緻密で軟質な粘板岩	北東部床直上 完形 36

SG10 区 SI-72 (第 112・113 図、写真図版 106・203)

[位置] SG10 区北部の 22・23-18 グリッド。同じく古墳後期前葉の SI-70・72・74 が東西に並び、北の SI-78 も同時存在であろうか。時期不明の SK-582・583 (断面 B-B') と南西部の攪乱が SI-72 覆土を切る。

[規模と形状] 南壁にカマドを持つ特徴的な方形建物で、主軸方位は GN-13° -E。東西 5.78 × 南北 5.48m (張出部を含め南北 6.50m)、残存壁高は最小 18 (北壁中央) ~ 最大 28cm (南西隅)。主柱穴 4 本の柱間は南北 3.56m、東西 3.40 (北側) ~ 3.64m (南側)。柱穴底面形から推定した柱径は 12 ~ 16cm 程で、床から P1=29cm、P2=40cm、P3=31cm、P4=45cm の深さ。P3 は形・深さが他の柱穴と異なり疑問が残るが、他に候補がない。南東柱穴は、開口部付近の外周に地山と同質の黄褐色ローム塊を入れる (P4 の 3 層)。

北側主柱穴 P1-P2 間にある P7 は径 13cm・床から深さ 11cm で、貼床除去後に確認した。入口施設の P6 も貼床除去後に確認し、床面から深さ 22cm。入口関連と見られる高さ 4 ~ 7cm の土手状の高まりが P6 の北側を半円形に囲む。この土手状施設は、貼床除去後の掘方形状も高い (断面 B-B')。貯蔵穴は南壁中央にある張出ピット P5 で、南壁から幅 102 × 長さ 110cm で張り出した内部に東西 66 × 南北 102 × 深さ 39cm の穴がある。張出ピットは SG10 区 SI-72・75・110、SG5 区 SI-4 などにある。壁溝 D4 は貼床除去後に南東部以外で確認し、床からの深さが南・西壁で 3 ~ 5cm、北・東壁で 4 ~ 11cm。貼床除去後に確認した間仕切溝 3 本は P1・P2 の南に D1・D2、P3 の北に D3 があり、床からの深さは 5 ~ 9cm。

[カマド] 南壁東部にある。南に張出ピットとカマドを持つ点は、権現山遺跡南西にある百目鬼遺跡 SI-063 に似る (谷中・大島編 2001)。南壁カマドは、磯岡遺跡の上三川町教委 1 次調査区 SI-30 にあるが (深谷・高野 2004)、権現山遺跡南部・北部では他に例がない。SG10 区 SI-83 は東壁南部にカマドがある。

両袖幅 82cm、煙道先端から袖先端まで 86cm。支脚 (21) を埋めた貼床上に袖を造ったような断面だが、実際は袖構築後に貼床を掘って支脚を据えたのだろう。西袖の西は P5 を取り巻く土手状盛土があるので、床が少し高い (カマド断面 C-C')。この 6 層は貼床上部にも見えるが不明確である。カマド内に伏せた杯を 3 個重ね (上から順に 5・1・2)、下の 2 枚とよく似た杯 (3) が火床面上 7 ~ 8cm のカマド 4 層にある。

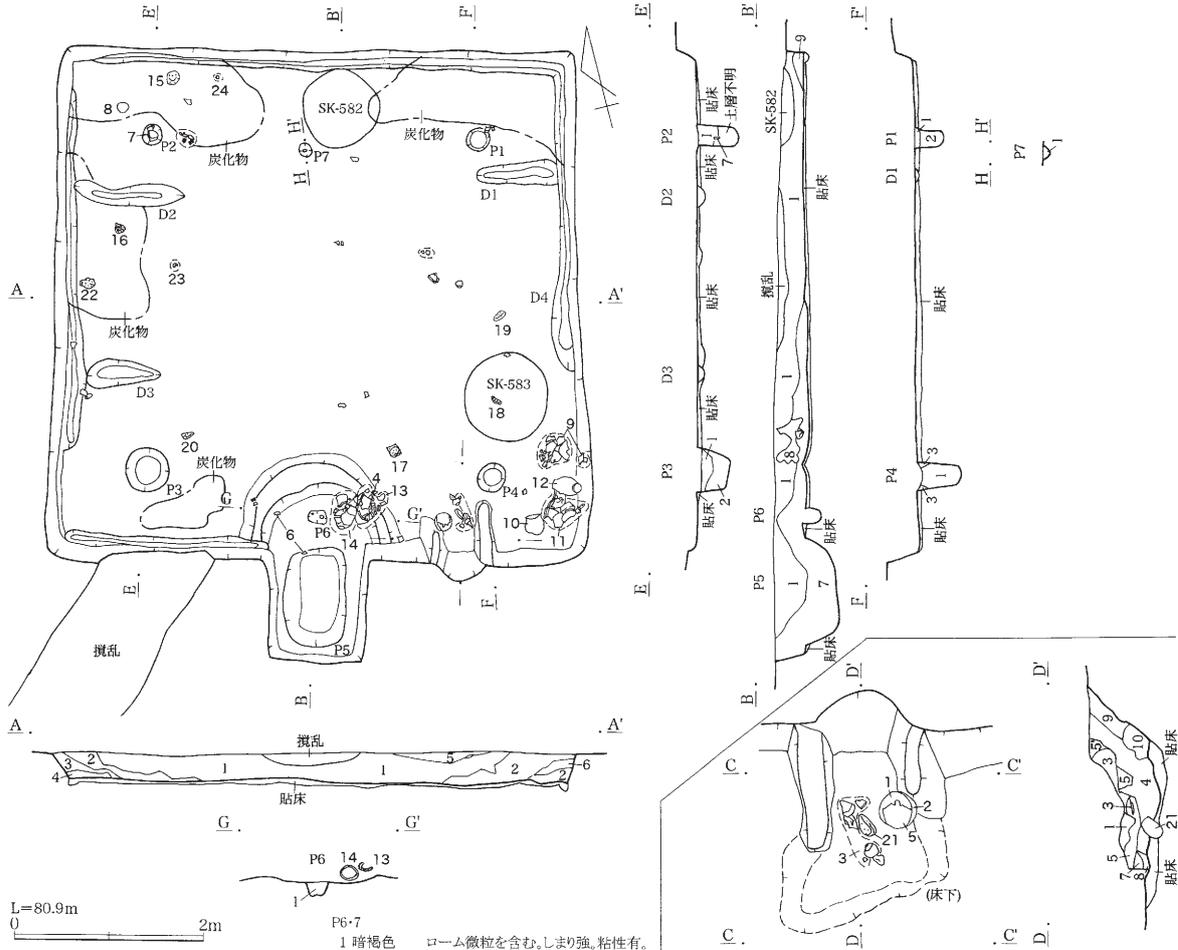
[覆土] 張出ピットと一緒に自然埋没している。テフラの層や粒は認められない。北東・北西・南西部に多く見られた炭化物は、東西土層断面図の 3 層中で、床面から 4 ~ 10cm の高さまで分布していた。

[遺物出土状況] 床面に遺棄した残存度の高い遺物が、南東部と北西部に多い。南東隅に完形の甑と小形甕 (10 ~ 12)、その北に大形壺 (9) がある。張出ピット北側の土手状盛土部分に土師器甕 2 個と杯 (4・13・14)、その北東の床面に被熱した台石 (17)、北西部床面には上面が窪む台石 (15) と伏せた完形の杯 (8) がある。口縁部が少し破損した杯を P2 の中位へ上向きで入れる (7)。

[出土遺物] SI-70・72・74 に似た土器がある。漆仕上げが厚い杯が多い。1 ~ 3 は同工品。4 は深身で内外を磨き、漆仕上げも行う。5 ~ 8 は口縁が薄く、白・金色雲母を含む。雲母を含む土器は SG10 区 SI-12 他や隣接する SI-73・74 にもある。SI-72 から SI-73 上層へ雲母を含む杯 (SI-73 の 13) を廃棄した可能性もある。10 は被熱痕がない小形甕。13 は煤や被熱粘土が不規則に着く。14 は使用痕が目立つハケ調整甕。17 は敲打・被熱・剥離のある台石で、金床石のような鍛造剥片や鉄分はない。石製模造品の勾玉と有孔円板は SG10 区 SI-64a にもある。遺物量が多いが、大半は甕・甑と口が外傾する杯で、図示以外の土器は少ない。古い時期の混入品 (?) の高杯が極少量ある。図示以外の合計 180 片・1,110g の内訳は、杯 61 片・252g、高杯 7 片・64g、鉢 3 片・34g、小形壺 2 片・16g、壺甕類 103 片・708g、甑 4 片・36g。

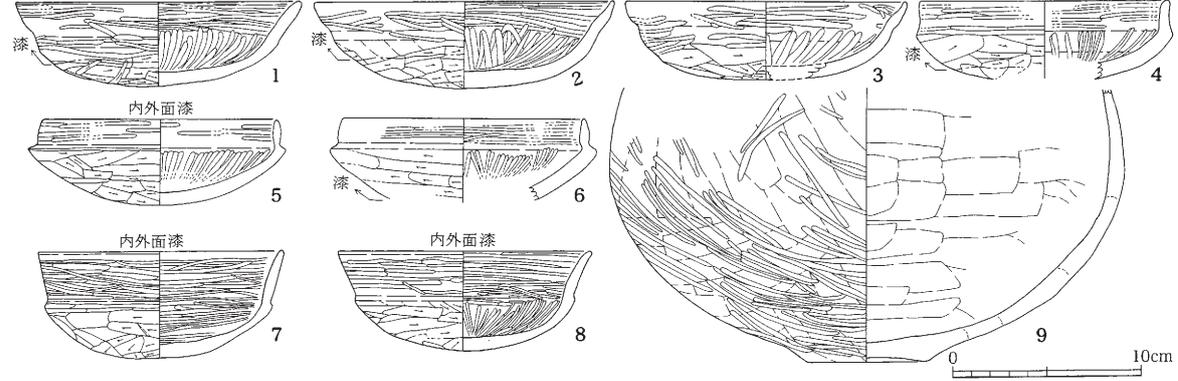
第 63 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-72 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.8 高 4.5 重 208.1	外面の口~体部境に弱い稜あり。外面は底部に 1 方向ヘラケズリと体部ヨコヘラケズリの後に疎らなヨコヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面上半と内面全面を漆仕上げ。2 同工品。	2.5Y3/1 黒褐 やや緻密 赤粗粒多、白粗~ 細粒と透明細粒少 やや硬質	カマド火床上 17cm。伏せて 3 枚重ねた杯の 2 枚目 完形 1K、カマド 2

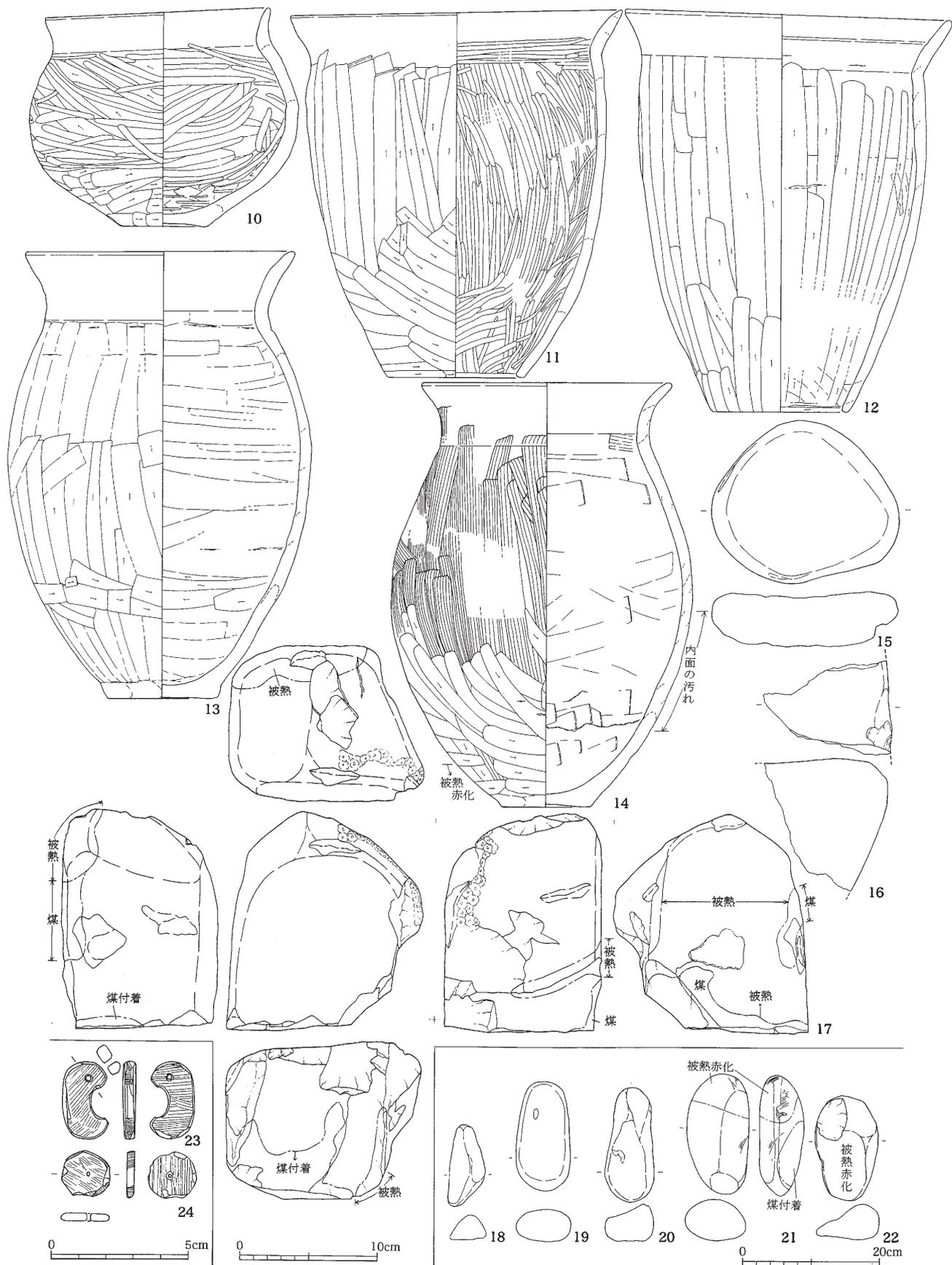


- SG10区SI-72
- 1 暗黄褐色 暗褐色土主体、ローム塊とローム微粒多、黒色土塊少、しまりやや強、粘性なし。
 - 2 黄褐色 ローム微粒多、ローム塊少、しまり弱、粘性なし。
 - 3 暗黄褐色 ローム微粒極少、底部に近いところでは炭化物も混じる。しまり強、粘性有。
 - 4 黄褐色 ほぼ2と同質で、ローム塊の混入が少ない。しまり強、粘性有。
 - 5 暗黄褐色 ローム微粒やや多、しまり強、粘性有。
 - 6 暗黄褐色 ローム微粒と非常に小さいローム塊混入。黒色土も若干混入。しまりやや弱、粘性有。
 - 7 黄褐色 おそらく2層と同質、しまりやや弱、粘性なし。
 - 8 黄褐色 おそらく2・7層と同質で、それらよりもロームの混入が多く、色も明るい。しまりやや強、粘性有。
 - 9 暗褐色 3層と同質、炭化物なし。しまりやや強、粘性有。
- P1・4
- 1 暗褐色 ローム塊(径2~3cm)多、しまりやや弱、粘性有。
 - 2 明黄色 ロームだけが軟らかく塊状になっている。しまりやや弱、粘性有。埋め戻し土と推定される。
 - 3 黄褐色 ローム塊。
- P2
- 1 暗褐色 ローム微粒やや多、しまりやや弱、粘性有。
- P3
- 1 暗褐色 ローム(径1~2mm)を含む。しまりやや強、粘性有。
 - 2 明黄色 礫(2~5cm)が混じる。しまりやや弱、粘性有。

- カマド
- 1 暗褐色 ローム微粒・焼土粒少、しまりやや強、粘性有。
 - 2 黒褐色 ローム・焼土粒の混入なし。しまりやや強、粘性有。カマド軸。
 - 3 灰色 ローム微粒若干、しまりやや強、粘性有。
 - 4 黒褐色 焼土粒多、ローム微粒少、しまりやや弱、粘性有。燃焼部と火床部。
 - 5 暗灰褐色 3・4層の混合土。しまりやや弱、粘性有。
 - 6 暗褐色 詳しい記録なし。貼床の上部かもしれない。
 - 7 赤褐色 焼土塊、しまり強、粘性なし。
 - 8 黒褐色 炭化物塊、焼土粒若干。
 - 9 暗灰色 しまり強、粘性有。煙道にたまった煤混じり土層か?
 - 10 暗黄褐色 ローム塊(2~3cm)が入り、焼土粒若干。しまり弱、粘性有。
 - 11 灰色 しまり強、粘性なし。軸の補強土または流出土。
- 貼床 暗褐色 ロームと焼土の混入なし。しまりやや弱、粘性有。



第112図 権現山遺跡 SG10区 SI-72(1) 遺構・遺物



第113図 権現山遺跡 SG10区 SI-72(2) 遺物

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

2 土師器 杯	口高 15.6 4.6 重 250.1	外面の口～体部境に弱い稜あり。外面は底部1方向ヘラケズリ、体部ナデ後にココヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ココヘラミガキ。内面体部ナデ後に密な放射状ヘラミガキ。内外面を漆仕上げしている可能性もあるが不確実。1と同工品。	2.5YR6/8 橙 緻密 赤粗粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	カマド火床上16cm。伏せて3枚重ねた杯の3枚目 完形 3K
3 土師器 杯	口高 14.7 4.2	外面の口～体部境に弱い稜あり。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ココヘラミガキ。内面体部にナデ後、放射状ヘラミガキ。内面を漆仕上げしている可能性もあるが不確実。1・2と類似する。外面側から強い力が加わって底部が破損している。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	カマド火床上7～8cm が接合 口3/4周 4K、カマド、カマド6
4 土師器 杯	口高 復13.0 残 4.2 最大 復13.4	外面は口縁部ヨコナデ後ココヘラミガキ。体部はココヘラケズリでやや光沢を持つ仕上げ。内面はヨコナデ後、体部に放射状と口縁部に横位のヘラミガキ。外面中位以上と内面全体に漆仕上げ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗粒と白細粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	南部床上4cm 口1/12周、体1/6周 34
5 土師器 杯	口高 12.2 4.6 最大 13.5	口縁部が薄い。外面は底部に1方向と体部に横・斜位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ココヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。内外全面に漆仕上げ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白雲母と金色雲母の細片多 やや硬質	カマド床上19cm。伏せて3枚重ねた杯の1枚目 口1/2周、体3/4周1K
6 土師器 杯	口高 復12.6 残 4.4 最大 復14.0	外面体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ココヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。残存する内外面全体に漆仕上げ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・金色雲母やや少、白・黒・赤細粒少 やや硬質	南部床直上 口1/12周、体1/4周 15、南西
7 土師器 杯	口高 12.8 5.6 重 188.0	薄く、外面口～体部境の段が明瞭。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部にヨコナデ後、密なココヘラミガキ。内面は体～底部に1方向ヘラミガキ後、底部に渦巻状の疎らなミガキ。内外全面に漆仕上げ。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 白雲母細片多、白粗～細粒少 やや硬質	北西主柱穴P2底面上 17cmで上向き ぼぼ完形 口11/12周 36P2
8 土師器 杯	口高 13.2 5.3 重 198.8	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後、密なココヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。内外面全体に漆仕上げ。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白雲母やや少、白・透明細粒と細砂少 硬質	北西部床直上に伏せる 完形 6
9 土師器 大形壺	高底 残 14.2 最大 復 26.9	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面胴部は主に斜位のヘラナデ後、中～下位を中心としてナメヘラミガキ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明粗～細粒多、黒細粒少 やや硬質	南東部床直上2cmと東壁際 床上15cmで接合 胴中位1/3周、底全周 27、35、貼床
10 土師器 小形甕	口高 16.2 15.5 底 6.0 最大 19.3 重 1199.8	外底面は1方向ヘラケズリで少し凹底。外面は下位ココヘラケズリ、上～中位はおそらくナメヘラケズリの後にココヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面胴部は底部ナメヘラナデと胴部ヨコヘラナデ後にココヘラミガキ。使用・被熱痕はない。外面中位に10cm大の黒斑あり。	2.5Y7/8 橙 やや緻密 白・黒礫と赤・黒細粒少 やや硬質	南東部床直上に横転 完形 31
11 土師器 甕	口高 23.8 26.5 底 9.8 底 8.8 重 残 1932	外面は口縁部ヨコナデ後に胴部を縦位と下部を斜位のヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデと孔縁部ヨコヘラナデの後に胴部全体をタテヘラミガキ、頸部ヨコヘラミガキ。	2.5Y7/2 灰黄 やや緻密 白・灰色礫と白・赤・透明粗～細粒少 やや軟質	南東部床直上 ぼぼ完形 口全周、胴上位5/6周、 底全周 32
12 土師器 甕	口高 復23.5 底 28.8 底 9.7 底 8.9	外面は胴部タテヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は胴部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデの後に胴部タテヘラケズリ。孔縁部ヨコヘラケズリ。外面に幅10cm×高さ24cmの大黒斑あり。	7.5YR7/8 黄橙 緻密 白・黒・透明細粒と赤粗～細粒少 やや軟質	南東部床直上で東壁に 立て掛ける 口1/2周、底全周 33、Bトレンチ南、南 部表採
13 土師器 甕	口高 19.4 32.6 底 7.6 最大 21.8 重 残 2274	外底面は1方向ナデで平底状。外面胴部の上位と下位にタテヘラナデ、中位タテヘラケズリ。中～下位の境付近で内外面にココヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヨコヘラナデ。外面全体に不規則な煤や被熱粘土が付着する。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒多、白・灰色礫やや多、黒細粒少 やや硬質	南部の主手状高まりより 上6cm ぼぼ完形 口11/12周、底全周 30、南東
14 土師器 甕	口高 復18.0 残 22.74 底 30.8 底 6.3 最大 復21.6	外底面は1方向ヘラケズリで平底。外面胴部タテヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面胴部ヨコヘラナデ後に頸部ヨコヘラケズリ後ナデ消し、口縁部ヨコナデ。外面胴部下位～底面が被熱赤化、内面胴中位下半に暗褐色の汚れあり。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白粗～細粒多、黒・透明細粒やや多、灰色礫少 やや硬質	南部床直上 口5/6周、胴下半全周、 底全周 29、カマド
15 石器 台石	長幅 11.9 13.5 厚 3.7	扁平な自然礫を利用し、上面が緩く凹む。明確な擦痕や磨耗痕は石材が多孔質なので不明。石皿のような用途が想定できる。重量819.6g。	5Y5/3 灰オリーブ 多孔質な安山岩	北西部床直上 完形 7
16 石器 敲石	長幅 残 6.6 残 8.8 厚 9.5	断面が三角形に近い自然礫破片で、上下が破面。自然面を残す二面の堺付近を敲打に使用し、側面が図の下側から剥離を受けている。隅角部が潰れたような状況ではない。重量574.2g。	2.5GY7/1 明オリーブ灰 緻密で硬質な安山岩	西部床直上 破片 5
17 石器 台石	長幅 15.9 14.1 厚 11.3 重 3818.1	断面が隅丸方形の自然礫。右側面の稜部に敲打使用痕。下側面は大半が破面で、人為的に割った面も含むと見られる。裏面図の中央付近を中心として被熱赤化する。その周縁部には煤が付着し、破面にも被熱痕と煤を確認できる。酸化鉄分や鍛造剥片は認められない。	2.5Y6/2 灰黄 5mm大の斑晶が目立つ緻密で硬質な流紋岩	南部床直上 完形 16
18 石器 編物石?	長幅 11.7 5.4 厚 3.5	断面が三角形の自然礫。加工・使用・被熱痕は見られない。重量233.5g。	2.5Y5/2 暗灰黄 緻密で硬質な石英斑岩	東部床直上 完形 26
19 石器 編物石?	長幅 15.8 7.8 厚 4.6	細長い自然礫をそのまま利用。被熱・加工痕や付着物は見られない。重量869.3g。	7.5Y6/1 灰 やや緻密で硬質な安山岩	東部貼床中 完形 37 貼床
20 石器 編物石?	長幅 16.5 6.9 厚 5.9	細長い自然礫をそのまま利用。加工・使用痕は見られない。表面がわずかに赤色味を帯びるので、弱く被熱しているかもしれない。重量794.8g。	2.5Y7/3 浅黄 緻密で硬質な安山岩	南西部床直上 完形 12
21 支脚	長幅 17.3 8.8 厚 5.0	細長い自然の河原石。側面に平行線状の擦痕あり。図の上端が弱く被熱赤化し、下位で1面だけ煤が付く。図示した側面を中心として浅い擦痕あり。重量1235.8g。	10YR6/2 灰黄褐 やや緻密で硬質な安山岩	カマド床上3cm 完形 カマド5
22 被熱礫	長幅 15.2 9.0 厚 6.2	図右半が厚くなる自然の河原石。全面が被熱して赤色になり、細かい亀裂が少し入っている。図の左上と左側縁中位の破損部もおそらく被熱によるもので、破面もよく赤色化している。重量733.4g	7.5Y6/4 にぶい橙 5～16mm大の捕獲岩を多く含む石英斑岩	西部床直上 一部欠 4
23 石製模造品 勾玉形	長幅 2.76 1.59 0.45 厚 3.18	側面は穿孔と同じ方向(横方向)に細かく研磨し、腹部は縦方向の切削痕のままで、背部側面にも長さ16mmの大きな側面調整(割れ痕)を残す。両面はそれぞれ1方向に研磨し、細かい擦痕を残す。左図の面から穿孔して、対面に穿孔剥離を生じる。初孔径1.78mm、終孔径1.60mm。	5B4/1 暗青灰 滑石	北西部床直上 完形 11
24 石製模造品 有孔円板	長幅 1.74 1.64 0.31 厚 1.60	側面は穿孔と同じ方向(横方向)に細かく研磨し、外周の約半分は側面調整時の切削痕をそのまま残している。両面はそれぞれ1方向に研磨し、細かい擦痕を残す。左図の面から穿孔して、対面に穿孔剥離を生じる。初孔径と終孔径はともに1.40mm。	7.5GY5/1 緑灰 滑石	北部床直上 完形 9

SG10 区 SI-73 (第 114 図、写真図版 107・203)

[位置] SG10 区北部の 22-18 グリッドにある。同じく古墳中期後葉の SI-113a・113b が北にある。時期不明の溝 SD-560 と重複するが新旧関係は不明。SI-73 と SD-560 の新旧について調査時点の記録に矛盾があり、SD-560 東端が僅かに重複する程度なので確実な新旧関係を把握できなかったと考えられる。南東隅に長方形攪乱 (近代以降の農業関連土坑) があり、南西部に古い時期の倒木痕がある。

[規模と形状] 方形の建物跡で、主軸方位は GN-24° -E。東西 5.26 × 南北 5.26m。残存壁高は北隅で最大 36cm あり、残存高が低い南西部では 19 ~ 22cm。主柱穴は 4 本で、柱間は南北 2.04m (西側) ~ 2.22m (東側)、東西 2.50m (北側) ~ 2.70m (南側)。南東柱穴 P4 が少し南東に寄る。P1・P2 の底面形から推定した柱径は 14 ~ 16cm 程度で、床面からの深さは P1=36cm、P2=46cm、P3=31cm、P4=46cm。柱穴覆土の下層は裏込の崩壊土である。南中央にある逆 U 字形の土手状高まりは床面からの高さ 2 ~ 5cm で、入口関連施設と考えられる。貼床除去後の掘方底面でもこの高まりをよく確認できるので、掘方を掘る段階で高まり部分の地山ロームを削り残したことがわかる。貯蔵穴 P5 は南東隅にあり、東西 76 × 南北 76 × 深さ 40 ~ 44cm。壁溝や間仕切溝はない。

[カマド] 東壁の南部にある。両袖幅 87cm、煙道先端から袖先端まで 122cm。貼床層の上に、火床面を作るための整地土がある (カマド 16 層)。倒立して支脚に用いた高杯 (4) の下側では地山が高くなり、貼床層とカマド整地土がない。カマド内の遺物は破片化した後に被熱しているものが多いので、支脚の高さ調節などに土器片を用いたのかもしれない。カマド北袖の北側には小形甕の胴下部がある (9)。袖の内部から出土した土師器甕破片 (11 と 12) は、カマド南側の床上 2 ~ 10cm にもあるので、袖構築土に混せた土師器甕破片が袖崩壊により南側へ流出した可能性があろう。

[覆土] 自然埋没で、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラを 2 層に多く含む。3 層中に灰色粘土塊を含む部分があるので、断面図 A-A' に図示した。SI-70 の最上層で確認した灰色粘土塊と同種の粘土かもしれない。

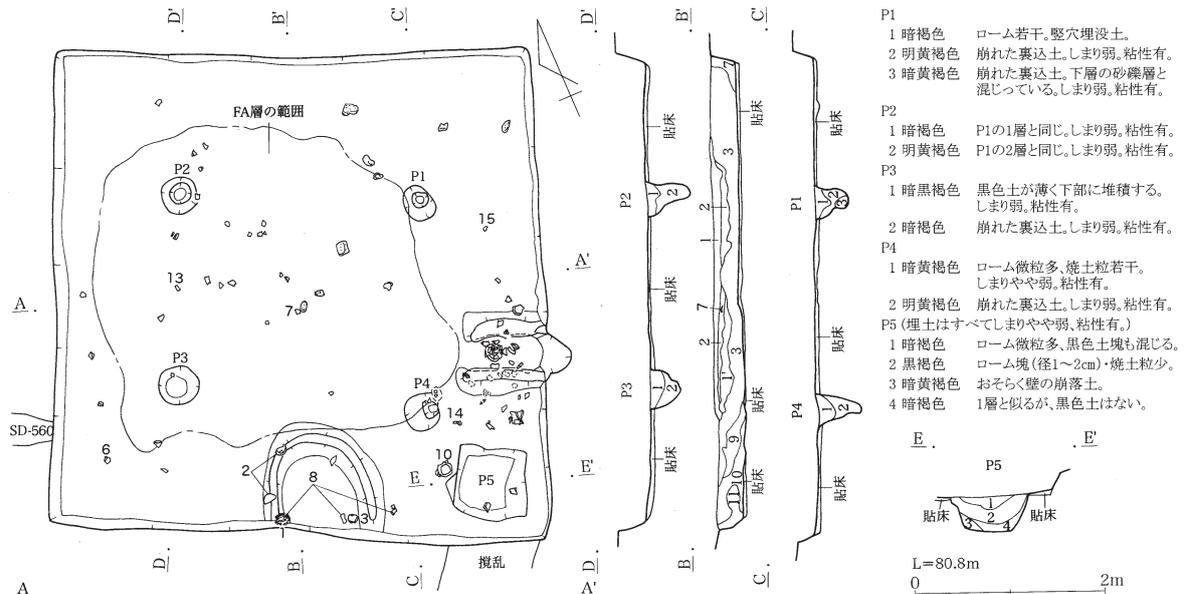
[遺物出土状況] Hr-FA テフラ (2 層) より上にも小破片の遺物が少量ある。テフラより下層でも覆土中の遺物は小片が多い。貯蔵穴西側の床上 2cm レベルで全周する土師器甕頸部が口縁部を下に向けて置かれ、転用器台の可能性もある (10)。南部では入口施設周辺に残存度の高い遺物があり、南壁に近いものは高い位置にあるので初期流入土 (10・11 層) の後に入った遺物である。竪穴中央部から北東部にかけての遺物はやや深く床面に近いレベルにある。

[出土遺物] 口縁部外面下端を凹線状にする厚い杯 (1 ~ 3) があり、3 は削って平底にする。口縁部が全周する甕 (10) は、口縁端が細かく破損していて、器台に転用したのであろう。7 は TK-23 ~ 47 型式の高杯。剣形石製模造品は SG10 区では SI-2 などにある。図示以外の土師器および焼粘土塊は小片ばかりで合計 306 片・2,590g あり、内訳は杯 149 片・778g、高杯 18 片・164g、鉢 10 片・156g、壺甕類 127 片・1,472g、甑 1 片・11g、焼粘土塊 1 点・9g。13 は雲母細片を含む搬入品の薄い杯。雲母を含む土師器は SG10 区では SI-12 などにあり、隣接する SI-72 に多いので、SI-72 から SI-73 覆土上層に廃棄された古墳後期遺物と考えられる。

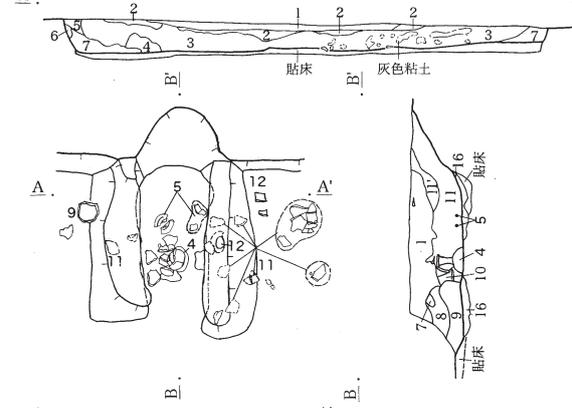
第 64 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-73 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.0 高 4.4 最大 復 12.7	外面の口縁部下端が凹線状に凹む。外面は底部に 1 ~ 2 方向と体部に横位のヘラケズリで丁寧に平滑に仕上げる。口縁部内外面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面の体部もヨコヘラミガキで底部は剥落してミガキの方向が不詳。漆仕上げの可能性もあるが不確実。	7.5YR8/6 浅黄橙 緻密 白・黒・赤粗~細粒と 透明細粒少 やや硬質	南部床上 21cm 口 1/3 周、体 2/3 周 23
2 土師器 杯	口 11.8 高 4.6 最大 12.7 重 残 250	外面の口縁部下端が広い凹線状に凹む。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリと口縁部ヨコナデ後に全面をヨコヘラミガキ。外面体部に 7cm 大の黒斑あり。	7.5YR6/6 橙 緻密 赤・黒粗~細粒と白・ 透明細粒少 やや硬質	南部床上 8cm ほぼ完形 口 5/6 周 24
3 土師器 杯	口 推 12.5 高 推 5.3 底 5.5 最大 復 13.1	外面の口~体部境に浅い段あり。外底面は 1 方向ヘラケズリで平底。外面体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ後に中位以上をヨコヘラミガキ。内面は体部を放射状と口縁部に横位のヘラミガキ。口縁端は欠失しているので口径と器高は推定。外面上半と内面に漆仕上げが見られ、外面下半と底面まで漆仕上げの可能性もある。	7.5YR4/2 灰褐 やや粗い 白・赤粗~細粒多、 黒・透明細粒やや多 やや軟質	南部床上 3cm 頸 1/4 周、底全周 25

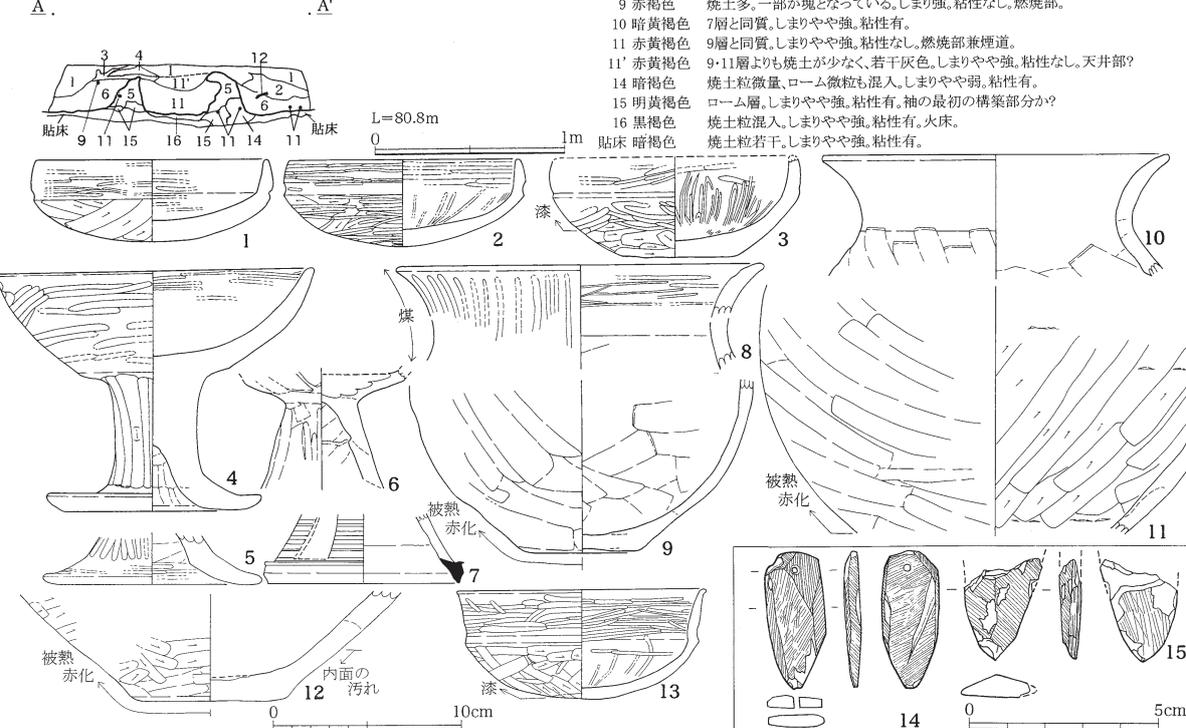
第4節 古墳時代の竪穴建物跡



- P1
 - 1 暗褐色 ローム若干。竪穴埋没土。
 - 2 明黄褐色 崩れた裏込土。しまり弱。粘性有。
 - 3 暗黄褐色 崩れた裏込土。下層の砂礫層と混じっている。しまり弱。粘性有。
- P2
 - 1 暗褐色 P1の1層と同じ。しまり弱。粘性有。
 - 2 明黄褐色 P1の2層と同じ。しまり弱。粘性有。
- P3
 - 1 暗黒褐色 黒色土が薄く下部に堆積する。しまり弱。粘性有。
 - 2 暗褐色 崩れた裏込土。しまり弱。粘性有。
- P4
 - 1 暗黄褐色 ローム微粒多。焼土粒若干。しまりやや弱。粘性有。
 - 2 明黄褐色 崩れた裏込土。しまり弱。粘性有。
- P5 (埋土はすべてしまりやや弱。粘性有。)
 - 1 暗褐色 ローム微粒多。黒色土塊も混じる。
 - 2 黒褐色 ローム塊(径1~2cm)・焼土粒少。
 - 3 暗黄褐色 おそらく壁の崩落土。
 - 4 暗褐色 1層と似るが、黒色土はない。



- SG10区SI-73 (8層は欠番)
- 1 暗褐色 ローム微粒少。しまりやや弱。粘性有。1層は1層と同様でしまり強。
 - 2 暗褐色 1層と同質だが、FAを含むので区別した。しまりやや弱。粘性有。FAはしまり強。
 - 3 暗黄褐色 ローム塊(径1~2cm)・ローム微粒多。しまりやや強。粘性有。
 - 4 暗褐色 基本的に3層と同じで、ロームが少なく、黒色土塊を含む。しまりやや弱。粘性有。
 - 5 暗褐色 ローム微粒極微量。しまりやや弱。粘性有。
 - 6 暗黄褐色 壁が崩落したような土。しまり弱。粘性有。
 - 7 暗黒褐色 ローム微粒少。しまりやや弱。粘性有。
 - 9 暗黒褐色 3層に黒色土の塊を含む。おそらく4層と同質。
 - 10 暗褐色 3層と同質だが、少し大きめのローム塊を含む。しまりやや弱。粘性有。
 - 11 暗黄褐色 ローム(径1~2cm)多。しまりやや弱。粘性有。
- カマド (12・13層は欠番)
- 1 暗褐色 ローム微粒・灰が若干。しまりやや弱。粘性有。
 - 2 暗褐色 1層と同質だが、焼土粒(径1~2cm)の塊が入る。しまり弱。粘性有。
 - 3 暗灰色 1層と同質だが、灰が全体にしみているらしく、灰色に近い。しまり弱。粘性有。
 - 4 明赤褐色 1層に微細な焼土粒多。しまり弱。粘性有。煙道?
 - 5 灰色粘土 カマド袖部分。しまりやや弱。粘性有。
 - 6 黄褐色 1層と同質の竪穴埋没土。しまりやや強。粘性有。
 - 7 暗黄褐色 ローム微粒多。しまりやや弱。粘性有。
 - 8 暗褐色 ローム微粒少。しまりやや弱。粘性有。
 - 9 赤褐色 焼土多。一部が塊となっている。しまり強。粘性なし。燃焼部。
 - 10 暗黄褐色 7層と同質。しまりやや強。粘性有。
 - 11 赤黄褐色 9層と同質。しまりやや強。粘性なし。燃焼部兼煙道。
 - 11' 赤黄褐色 9・11層よりも焼土が少なく、若干灰色。しまりやや強。粘性なし。天井部?
 - 14 暗褐色 焼土粒微量。ローム微粒も混入。しまりやや弱。粘性有。
 - 15 明黄褐色 ローム層。しまりやや強。粘性有。軸の最初の構築部分か?
 - 16 黒褐色 焼土粒若干。しまりやや強。粘性有。火床。
 - 暗褐色 焼土粒若干。しまりやや強。粘性有。



第114図 権現山遺跡 SG10区 SI-73 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

4 土師器 高杯	口 16.6 高 12.7 脚裾 復 11.2 重 残 707.0	厚く重い。外面は脚柱部タテヘラケズリ、脚裾部ヨコナデ、杯部ヨコヘラミガキ。杯内面は口縁部がヨコヘラミガキで、中位以下は器面が荒れて調整不明。脚柱内面ナデ、脚裾内面ヨコナデ。全体が被熱して荒れている。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明粗～細粒と黒細粒多、赤透明粗～細粒少 やや軟質	カマド火床面に倒立口全周、脚裾 2/3 周 6K
5 土師器 高杯	脚裾 11.4	外面脚部タテヘラミガキ。内外面の脚裾部にヨコヘラミガキ。内面脚柱部ナメナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 赤粗～細粒多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	カマド火床上 2～3cm が接合 脚裾 7/12 周 2K、3K
6 土師器 高杯	高 残 6.3	外面は杯底部にやや雑なナメヘラナデ、脚柱部に丁寧なタテヘラナデ。脚柱部内面はタテナデと粘土紐積みを繰り返している。	5YR6/6 橙 緻密 赤粗～細粒やや多、白・透明粗～細粒と黒細粒少 硬質	南西部床上 9cm 脚上 5/6 周 20、南西
7 須恵器 高杯	高 残 3.7 脚裾 復 10.0	外面は施文方向不明のカキメの後に、透窓を下から上へ切って 3 方に開け、面取りはしない。脚裾部外面の上寄りに鋭い突線 1 本あり。透窓の下辺幅がわかる破片はないが、脚部の円周長との関係から下辺幅 1.8cm程が推定される。	5Y6/1 灰 緻密 白細粒少 硬質	中央床上 4cm 脚裾 1/4 周 29、北 B トレンチ FA 下層
8 土師器 甕	口 復 19.2 高 5.4	外面は口縁部ヨコナデ後に 5～10mm 間隔のタテヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。胴部上端はナメナデをしていた部分がわずかに残る。外面に煤が多く付着する。 [注記] 23、26、47、22.3-18.9 イモ穴	5YR6/6 橙 緻密 白細粒少 やや硬質	南部床上 3～21cm が接合 口 1/6 周 注記は左欄
9 土師器 大形鉢	高 残 9.1 底 5.7 最大 復 18.0	胴部が薄い。外底面の外周に粘土を貼り足して弱く上げ底状にする。外面胴部ナメヘラナデ。内面も底部の外周に粘土を貼り足して 1 方向ヘラナデし、内面胴部は斜～横位のヘラナデ。外面全体が被熱赤化する。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・透明細粒やや多、白礫と灰色粗粒少 やや軟質	カマド火床上 5cm とカマド北側床上 6cm が接合 底全周 1K、5K、南西
10 土師器 甕	口 復 18.1 高 残 6.7	口縁部内外面ヨコナデ後、胴部内外面をナメヘラナデ。口縁部上端に小さな破損や磨耗が多く生じている。11 と同一個体の可能性あり。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 黒細粒と透明多、白礫～粗粒少 やや軟質	南東部床上 2cm に倒立口全周 44
11 土師器 甕	高 残 13.2	外面ナメヘラナデ、内面ナメヘラケズリ。外面が少し被熱している。10 と同一個体の可能性あり。 [注記] K、5K、6K、10K、11K、13K、14K、15K	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 透明粗粒と黒細粒多、白・灰色粗粒少 やや硬質	カマド両袖内と火床上 5cm とカマド南側床直上～床上 2cm が接合 胴下半 1/3 周 注記は左欄
12 土師器 甕	高 残 5.6 底 復 8.2	外底面は多方向ヘラケズリ。外面胴部は下端ナデ後にヨコヘラケズリ。内面はナデと思われるが剥落してほとんど調整が不明。外面が被熱赤化し、内面底部に暗褐色の汚れあり。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白礫～細粒と黒・透明粗～細粒多 軟質	カマド南袖内。カマド南側床上 5cm の 1 片も接合 底 3/4 周 5K、9K、13K
13 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 5.8	薄く軽い。口縁部を外へ折る。外面は口～体部境の稜が明瞭。外面底部から体部までのヘラケズリは底面が 1 方向、体部が横位で少し光沢を持つ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部にやや粗い放射状ヘラミガキ。外面底付近を除く内外全面に漆仕上げ。SI-72 から廃棄された可能性あり。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 白雲母細粒多、白細粒少 やや硬質	遺構確認面と FA 層上方の各 1 片が接合 口 1/4 周、体 1/3 周 北 B トレンチ FA 上、SI-73 が 74 上面
14 石製模造品 剣形	長 3.60 幅 1.55 厚 0.36 重 3.08	背面は 5 面をそれぞれほぼ 1 方向に研磨し、腹面は全体を 1 方向に研磨する。側面は斜位に研磨する。研磨痕はどれもやや粗い。図の腹面から穿孔して背面に穿孔剥離を生じ、初孔径 1.65mm、終孔径 1.50mm。	10YG2/1 緑黒 滑石	南東部床上 15cm 完形 43
15 石製模造品 剣形	長 残 2.68 幅 1.95 厚 0.59 重 残 2.79	背面中央の鑄を境にして、左側と右側をそれぞれ 1 方向に研磨し、腹面は 1 方向に研磨する。両側面は縦方向に研磨する。研磨痕はどれもやや粗い。	10GY3/1 暗緑灰 滑石	東部床上 15cm 鋒部分の破片 39

SG10 区 SI-74 (第 115・116 図、写真図版 107・108・204)

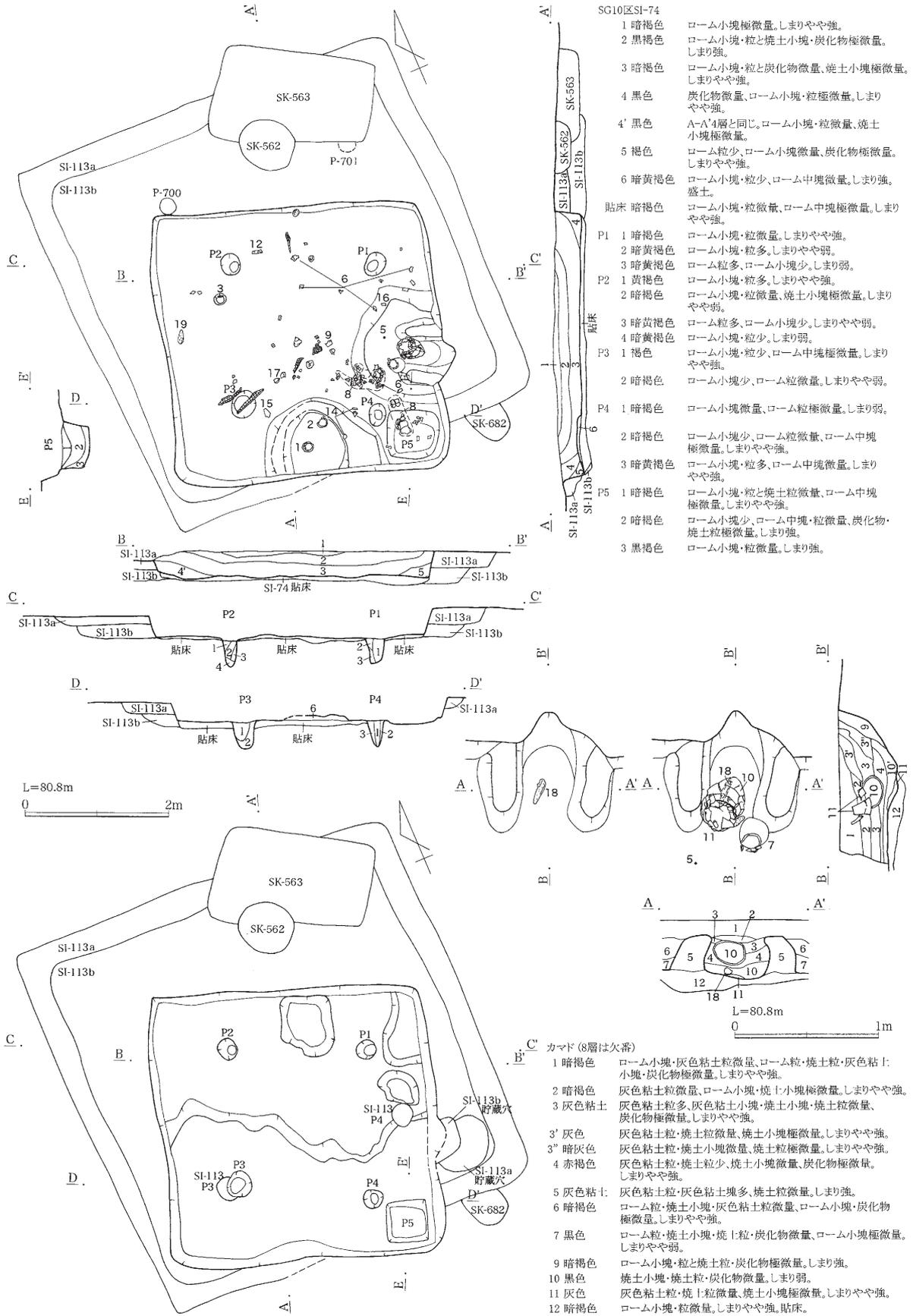
[位置] SG10 区北部の 22-18・19 グリッド。同じく古墳後期の SI-72 が北西にある。後期前葉の SI-70・72・74 が東西に並び、北側の SI-78 とともに同時存在の可能性もある。古墳中期末の SI-113a・113b を切り、SI-113b → SI-113a → SI-74 の順になる。時期不明の柱穴 P-700 が北西に近接する。

[規模と形状] 方形で主軸方位は GN-20° -E。東西 4.02 × 南北 3.90m、残存壁高は 0.25～0.38m。主柱穴 4 本は床面から P1=33cm、P2=40cm、P3=41cm、P4=38cm の深さ。東西・南北の柱間 1.90m で均一だが、東側の P1-P4 間は 2.08m で少し長く、P4 をカマドから南へ遠ざけたことがわかる。柱の抜取痕を反映する土層が各柱穴にあり、推定柱径は 10～15cm。

南中央の入口施設と考えられる U 字状盛土は東西 1.70 × 南北 1.04m × 床から高さ 4～9cm (断面 A-A' と D-D' の 6 層)。南東隅の貯蔵穴 P5 は東西に長い方形 (東西 73 × 南北 69 × 深さ 44cm) で、自然埋没状態で最下層以外にカマドから焼土粒が流入する (断面 E-E')。壁溝や間仕切溝はない。貼床は厚さ 4～14cm で、掘方底は南半が 3～10cm、北東部が 2～6cm、北中央部が 2～11cm 深くなるように一段下がる。

[カマド] 東壁南部にある。カマドの周囲は床面が 2～5cm ほど高く盛り上がる。盛土上にカマドを作る例は北側の立野遺跡 3 区 SI-9 と 5 区 SI-9・24・64 にある (『東谷・中島地区遺跡群』5)。盛土は竪穴の貼床と一連で、その上面で両袖下部を少し高くした後に、灰色粘土で袖を作る。煙道は東壁から少し外へ出る。両袖幅 170cm、煙道先端から袖先端まで 183cm。自然礫の支脚が燃焼部底面に倒れ (18)、上に掛けた土師器甕 (10) が落ち込んで、10 の上に甕 (11) の破片が上下逆位で被っていた。南袖先端の西側にも傾いた土師器甕 (7) がある。これらの土器は、カマド廃絶時に人為的に配置した状況と思われる。

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

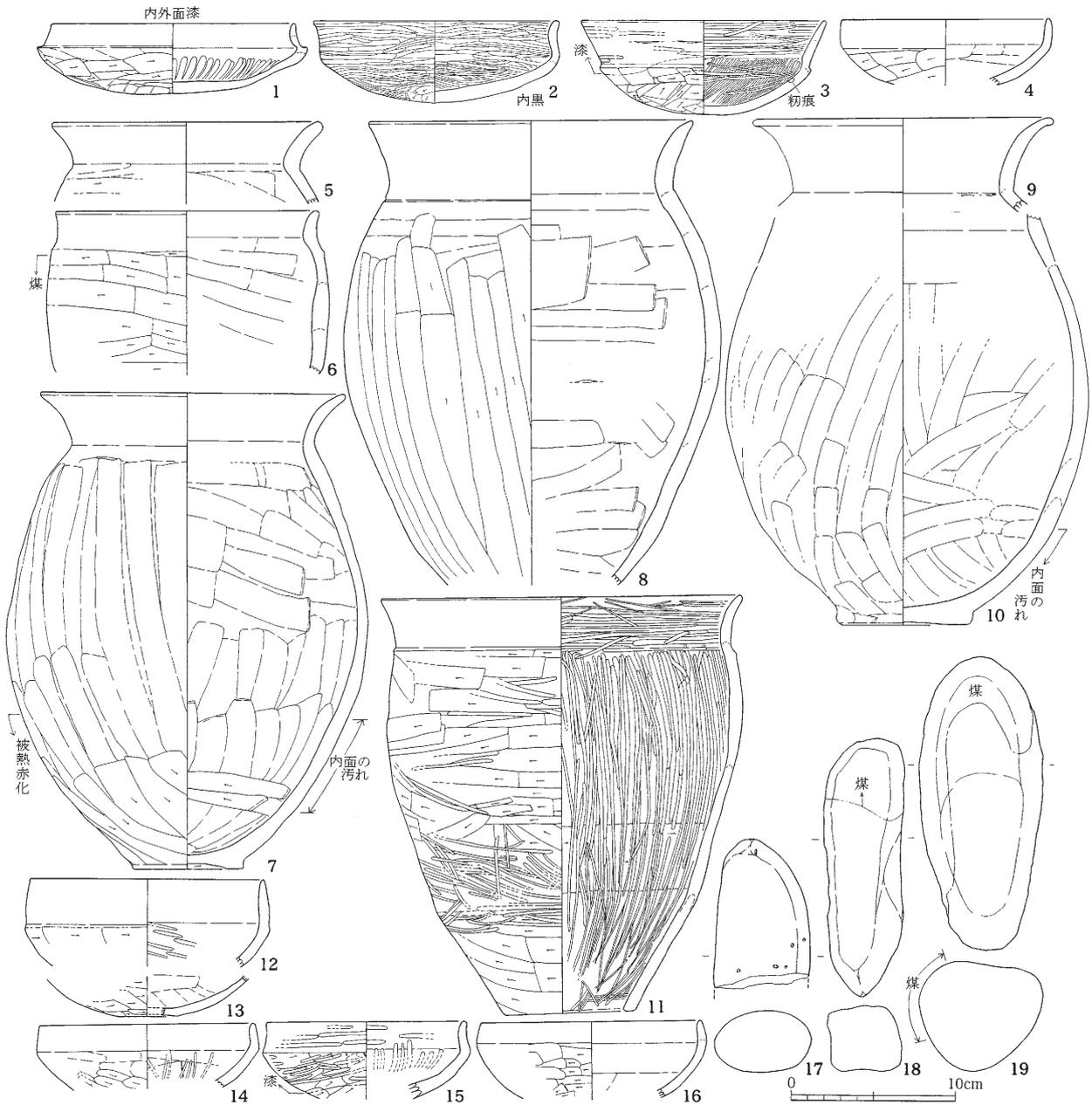


第115図 権現山遺跡 SG10区 SI-74(1) 遺構

[覆土] 竪穴部と貯蔵穴 P5 内は自然埋没状で、テフラの塊や粒は見られない。中央～南西部と北部の低いレベルに炭化材と焼土があり、火災建物とも考えられる。SG10 区では SI-66 などが火災建物である。

[遺物出土状況] 東半に多い。カマド内の遺物はカマドの項で述べた。貯蔵穴 P5 内には遺物がなく、P5 の上方に甕(8)の大破片がある。8 の小破片はカマド西方まで広がる。完形の土師器杯が竪穴南部で上を向き(1・2)、竪穴北部で伏せられていた(3)。1 は床上 14cm、西部では被熱礫か編物石が床上 26cm にある(19)。古墳中期末の SI-75 に、後期の SI-74 から混入したと思われる同一個体の土器片がみられた。

[出土遺物] SI-70・72・74 に似た土器がある。外傾・直立・内傾口縁の杯があり、外反口縁の杯はない。1・3・15 は漆仕上げ。ただし 15 は SI-113a から流入した破片であろう。2 は炭素吸着による内面黒色処理で、SI-70・78 に類似品がある。床面から 14cm 浮いていた 1 は他の杯より新しく見えるが、完形品なので混入と考えるかどうかは難しい。3 は金色雲母細片を含む搬入品の薄い杯。雲母を含む土師器は SG10 区 SI-12 などであり、隣接する SI-72 に多い。4 も薄い異質な杯で、他地域産かもしれない。6 は煮炊具ふうではな



第 116 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-74(2) 遺物

い緻密な胎土だが、外面に煤が多い。靱圧痕のある土師器(3)は、SG10区SI-50などに事例がある。12～16は古墳中期後葉の模倣杯小片で、SI-113a・bから流入した可能性が高い。図示以外の土師器合計297片・2,099gの内訳は、杯155片・784g、高杯4片・43g、壺甕類118片・857g、甌20片・415g。

第65表 権現山遺跡SG10区SI-74出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.6 高 4.3 最大 16.2	外面体部ナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラナデ後に放射状ヘラミガキ。内外面全体に漆仕上げ。重量285.3g。	2.5Y3/2 黒褐 緻密 白粗～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	南部床土14cm 完形 7
2 土師器 杯	口 14.7 高 5.1	外面は底部1方向ヘラケズリ、体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面底部に1方向と体部に横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明粗～細粒 と黒細粒やや多、赤粗粒少 やや硬質	南部床直上 口4/5周、体全周 6
3 土師器 杯	口 14.6 高 5.7 重 223.5	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面底部に1方向と体部に疎らな横位のヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げ。内面に稲稈痕が1箇所あり、胎土中に混和されていた可能性がある。	7.5YR5/4 にぶい褐 緻密 金色雲母細片多、白・ 透明粗～細粒と黒細粒少 やや軟質	北西部床土5cm 完形 44
4 土師器 杯	口 復 12.1 高 残 3.9	薄く軽い。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒少 やや硬質	北東部 口1/4周 北東
5 土師器 小形甕	口 復 15.6 高 残 4.9 最大 復 16.2	外面は肩部ナデとヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面肩部ナメナデ。	5YR4/8 赤褐 やや粗い 白粗～細粒多、赤 粗粒と黒・灰色・透明粗～細 粒少 硬質	カマド火床土6cm 口1/6周 58
6 土師器 小形甕	口 15.8	内外面口縁部をヨコナデ後、外面胴部ヨコヘラケズリ、内面胴部ヨコヘラナデ。外面胴部に煤が非常に多い。 [注記]4、28、33、36、39、北東、北西	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と黒細 粒やや少、白・透明細粒少 やや硬質	南東部床直上と東部床 土10～20cmと北部床 土3cmが接合 口1/8周、頸1/6周 注記は左欄
7 土師器 甕	口 18.2 高底 28.9 底 6.6 最大 21.6 重 残 1685	外底面は多方向ヘラケズリで凹面状。外面は胴部タテヘラナデ後に胴下位ナメヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面胴部下位タテヘラナデ後に積み上げ休止部と思われる付近をヨコヘラケズリで薄くし、胴上半部はヨコヘラナデ。胴下位～底面の外面が被熱赤化して内面に汚れが付く範囲は、火前部の1/3周が特に顕著で、それ以外の部分ではあまり目立たない。	2.5YR7/4 浅黄 やや粗い 白・透明粗～細粒 と黒細粒多、白礫と赤細粒少 軟質	カマド焚口部床面。南 東部床土14cmの小破片 1点が接合 口1/4周、胴全周、底 全周 3、52、K周辺
8 土師器 甕	口 復 19.4 高 残 28.2 最大 残 22.6	胴部は外面ナデ後タテヘラケズリ、内面ヨコヘラナデ。口縁部は内外面ヨコナデ。残存する破片では被熱痕が認められず、外面胴中位や内面胴下半に縦長の黒斑が残る。	10YR7/4 にぶい黄橙 粗い 白・灰色礫～細粒と透 明粗～細粒多、黒細粒やや多 軟質	南東部床土14cm(貯蔵 穴底上48cm) 口1/4周、頸1/2周 3、南東、北西、K周辺
9 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 5.7	口～肩部の内外面をヨコナデ。	10YR4/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・灰色粗～細粒 多、赤・透明粗～細粒と黒細 粒少 硬質	中央部床土4cm 口1/18周、頸1/6周 19
10 甕	高 推 25 底 7.8～8.1	外底面はナデで弱い凹底状。外面胴部タテヘラナデ。内面はタテヘラナデで、胴下位の積み上げ休止部が厚い部分を強くヨコナデして周囲の厚さに合わせている。内面頸部ヨコナデ。全面が被熱して劣化している。内面胴下位～底部に黒褐色の汚れが付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、赤・灰色粗～細粒と黒細 粒少 軟質	カマド火床土10cm 頸1/6周、底全周 54
11 土師器 甌	口 21.6 高底 25.2 底 7.9 孔 6.6 重 残 1504	外面は口縁部ヨコナデ。胴部ヨコヘラケズリ後に胴下位の積み上げ休止部を中心とするヨコヘラミガキ。内面は積み上げ休止部にヨコヘラケズリ後、胴部タテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。孔縁部はおそらくヨコヘラケズリ。胴部下位の積み上げ休止部より下は黄褐色、上は橙色で、粘土の種類を途中で変える。 [注記]53、54、K周辺、南東	5YR6/8 橙 やや粗い 白・黒・透明粗～ 細粒多、赤・灰色粗～細粒少 やや硬質	カマド火床土10～29 cmが接合。カマド内の 土師器甕の上にかぶる 口全周、胴全周、底3/4 周 注記は左欄
12 土師器 杯	口 復 14.1 高 残 5.3 最大 残 14.7	外面の口～体部境に浅い段あり。外面体部ヨコヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ後ヨコヘラミガキ。内外面口縁部や外面体部も磨いていたかもしれないが、現状では確認できない。古墳中期後葉の遺物が混入。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒少 やや硬質	北部床土29cm 口1/6周 40、北西
13 土師器 杯	高 残 2.4 底 復 3.6	外底面は円周方向のヘラケズリで上げ底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内面はナメヘラナデ。古墳中期後葉の遺物が混入。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗粒やや多、 白・灰色粗～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	貼床中 底2/3周 床下
14 土師器 杯	口 復 12.8 高 残 3.9 最大 復 13.4	外面は体部上半無調整で、下半ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後に体部タテヘラミガキ。古墳中期後葉の遺物が混入。	2.5YR4/4 にぶい赤褐 やや緻密 白粗～細粒多、白 礫と灰色粗粒と透明細粒少 硬質	南部床土20cm 口1/6周 8
15 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 4.6 最大 復 12.5	外面体部ヨコヘラケズリ後に上半を中心としてヨコヘラミガキ。内外面の口縁部をヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部ヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。古墳中期後葉の遺物が混入。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・透明細粒少 やや硬質	南部床土16cm 口1/6周、体1/3周 11
16 土師器 杯	口 復 13.2 高 残 4.7 最大 復 13.8	薄く軽い。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向か1方向のナデまたはヘラナデ、口～体部ヨコナデ。古墳中期後葉の遺物が混入。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・灰色・透明粗 ～細粒やや多、黒細粒少 硬質	東部床土15cm 口1/6周 29
17 石器 編物石?	長 残 8.8 幅 5.8 厚 3.7	細長い自然礫をそのまま利用。下半部が折損している。加工・使用・被熱痕は見られない。残存重量310.2g。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや多孔質だが緻密で硬質な 安山岩	中央部床土10cm 1/2欠 47
18 支脚	長 15.6 幅 4.9 厚 3.9	断面が四角形で細長い自然礫をそのまま利用。図の上端部に煤が付着する。明確な被熱赤化部は見られない。重量436.1g。	N7/(B) 灰白 緻密で硬質な礫岩	カマド床直上 完形 55
19 石器 編物石?	長 17.5 幅 7.4 厚 6.3	図上方が厚く下方が薄い自然礫を利用。加工・使用痕は見られない。重心が偏ることと、煤が明瞭に付くので、編物石以外に用いた可能性も大きい。明瞭な被熱赤化部は見られない。重量865.9g。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや粗粒で崩れやすい花崗岩	西部床土26cm 完形 46

SG10 区 SI-75 (第 117 図、写真図版 109・204)

[位置] SG10 区北部の 22-19 および 23-19 グリッド。同じく古墳中期末の遺構は西に 73・SI-113a・113b がある。近世の SD-503 と時期不明の SK-545 に中央と北西部を、近代以降の長方形攪乱坑 (調査時名称 SK-530) に南東部を切られる。床面で確認した時期不明の柱穴状土坑 P-579 は SI-75 の貼床に覆われないので、SI-75 を切ると考えられる。調査時旧名称「SK-586」を SI-75 の張出ピット P5 として吸収した。

[規模と形状] 方形の建物跡で、主軸方位は GN-18° -E。東西 5.78 × 南北 6.14m (張出部を含めると南北 6.55m)、残存壁高は北西部で最大 34cm、南西部で最小 14cm。主柱穴は 4 本で、柱間は南北 2.55m、東西 2.64m。底面形から推定した柱径は 10 ~ 14cm 程度。床面レベルからの深さは西側柱穴よりも東側柱穴が深く P1=55cm、P2=37cm、P3=35cm、P4=51cm。貯蔵穴は南壁中央に張出ピット P5 があり、東西 76 × 南北 117 × 床面レベルからの深さ 29cm。SG10 区では SI-72 などの建物が張出ピットを持つ。入口施設と考えられるピットや、壁溝・間仕切溝はない。

[火処] 不明である。カマド (または炉) が SD-503 に破壊されたと考えられる。

[覆土] 自然埋没状の堆積で、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラのやや大きな塊が、西半部の覆土 2 層中にまとまって認められた。

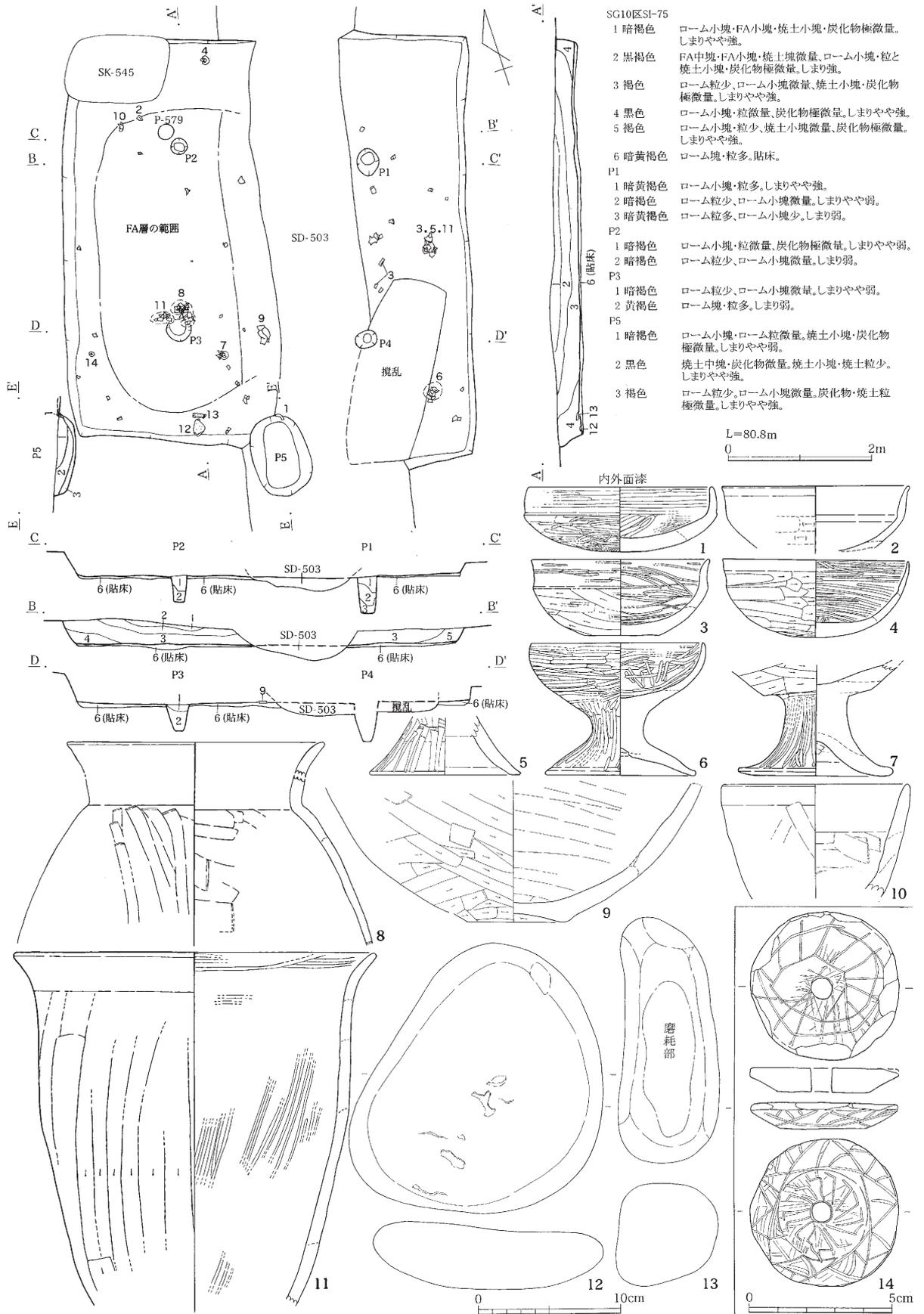
[遺物出土状況] 南部の杯・高杯・壺 (1・6・7・9)、北部の杯と鉢 (2・4・10)、南壁近くの台石と磨石 (12・13) は床面付近にある。床から 10cm 以上浮いた破片もある (3 の一部破片と 5)。Hr-FA テフラ層より上でも遺物が出土した (8・11)。文様のある紡錘車 (14) は床面から大きく浮いていたが、FA 層よりは下位である。古墳後期の SI-74 から中期末の SI-75 跡地へ流入したと思われる同一個体の土器片がみられた。

[出土遺物] 橙色胎土の土器が多い。不掲載の破片も見ると内斜口縁の杯は少なく、直立口縁 (1) と外傾口縁 (2・3・4) の古式な模倣杯が目立つ。よく磨く杯が多く、平底の杯もある (3)。短脚高杯もよく磨いている (5・6・7)。紡錘車は SG10 区 SI-59 などに、線刻紡錘車は SG10 区 SI-36 に例がある。台石と磨石は使用痕跡が不明瞭で、あまり使っていないようである (12・13)。図示した以外に杯類は直立口縁 1 点・内傾口縁 3 点・赤彩杯破片などがあり、甑は大形甑が 1 個体、壺甕類は底部が 3 点ある。図示以外の土器器は各器種ともにわずかで、合計 179 片・2,032g の内訳は、杯 58 片・342g、高杯 2 片・29g、鉢 11 片・120g、壺甕類 94 片・1,273g、甑 13 片・264g、小形土器 1 片・4g。混入した縄文土器も目立ち (『東谷・中島地区遺跡群』10 の第 36 図 38 と第 40 図の一部)、弥生土器もある (前掲書の第 43 図 75)。南東部の攪乱坑 (旧名称 S-530) へ SI-75 から混入したと見られる不掲載土器が合計 19 片・183g あり、内訳は杯 4 片・27g、壺甕類 13 片・102g、甑 2 片・54g。

第 66 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-75 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.8 高 4.5 最大 13.4	外面の口~体部境に浅い段。外面は底部に多方向のヘラケズリ後ヘラミガキ。体部に横位のヘラナデ後ヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面の体部に斜~横位ヘラミガキ。内外面全体に漆仕上げ。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 黒細粒やや多、赤粗~ 細粒と白・透明細粒少 やや硬質	南部床直上 口 1/4 周 23、SK-586 一括
2 土師器 杯	口 復 12.9 高 残 4.5	内外面の口縁部はヨコナデ。外面体部はヨコヘラケズリと思われる。内外面ともに磨滅しているのでミガキの有無は不詳。外面体部に大きな黒斑あり。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗~細粒多、 白・透明粗~細粒と黒細粒少 軟質	北西部床 上 3cm 口~体 1/5 周 43
3 土師器 杯	口 復 12.4 高 5.3 底 5.0	外底面は多方向ヘラケズリで平底。外面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラケズリの後にヨコヘラミガキ。ただし、外面体部はミガキの有無が不詳な部分が多い。内面はヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内底面中央は 1 方向ヘラミガキ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗~細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	東部床 上 2 ~ 13cm が接合 口 1/4 周、底全周 14、16、17
4 土師器 杯	口 12.8 高 5.4	内外面の口~体部境に弱い段あり。底が厚く体部は薄い。外面は口縁部ヨコナデ後に体部を丁寧にヨコヘラケズリして光沢あり。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・灰色礫と黒・ 透明細粒少 硬質	北部床直上 口 1/2 周 44
5 土師器 高杯	高 残 4.1 脚裾 復 10.4	内外面をヨコナデ後、脚外面にタテヘラナデ。内面はヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒粒と赤細粒 多 やや硬質	東部床 上 13cm 脚裾 1/6 周 14
6 土師器 高杯	口 11.8 高 9.2 脚裾 復 10.3 最大 12.1	脚柱部は中実。外面は脚柱部から杯底部までタテヘラケズリと口縁部・脚裾部ヨコナデの後に杯部横位と脚部縦位の密なヘラミガキ。内面は杯体~底部に多方向と口縁部に横位のヘラミガキ。脚裾部内面には幅の広い粘土帯を脚柱部に貼り付けてヨコナデした痕を残す。	5YR7/8 橙 緻密 赤粗粒と黒細粒少 やや軟質	南東部床 上 3 ~ 4cm が接合 口 1/4 周、杯底全周、 脚裾 1/2 周 19、20、東

第4節 古墳時代の竪穴建物跡



第117図 権現山遺跡 SG10区 SI-75 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

7 土師器 高杯	高底 残 7.7 10.8	外面は脚部タテヘラミガキ、杯底ヨコナデ、杯体部ヨコヘラケズリ。杯内面は器面が荒れて調整不明。脚部は断面に破線で記入したように付け足して成形し、内面ナデと脚部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と黒細粒やや多、白・透明細粒少 やや軟質	南部床上 2～3cmが接合 杯底全周、脚部 1/2 周 28、29
8 土師器 甕	口復 17.9 高 残 14.2 最大 残 24.6	口～頸部の残存度が少ないので、復原径は参考程度。外面胴部タテヘラナデ、内面胴部ヨコヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 黒・透明細粒やや多、白細粒少 やや軟質	南西部 FA 上面より上 15～22cmが接合 口 1/18 周、頸 1/9 周 1～4、南西、北西上面
9 土師器 壺	高底 9.5 6.6	外底面は多方向ヘラケズリで深い上げ底状。外面胴部ヨコヘラケズリ。内面は底部多方向ヘラケズリ、胴部ヨコヘラナデ。外面には破片化した後の不規則な被熱痕と煤痕がある。内面は黒褐色気味。	7.5YR6/4 にぶい橙 粗い 白・灰色・透明粗～細粒多、赤粗粒と黒細粒少 硬質	南部床上 2cm 底 5/6 周 32
10 土師器 鉢	口復 12.8 高 残 8.0	やや厚く重い。外面は体部ナデと口縁部ヨコナデ。内面は体部に斜～横位ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。明確な漆仕上げは見られない。	5YR5/6 明赤褐 緻密 赤粗～細粒と白・黒細粒少 軟質	北西部床直上 口 1/4 周、体 3/4 周 42
11 土師器 甌	口復 25.2 高 残 24.5	外面胴部タテヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ。内面は胴部に縦位と口縁部に横位のヘラミガキ。 [注記]1、南西、北西上面、西部、S530 一括	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 灰色・透明粗～細粒やや多、白粗～細粒と黒細粒少 やや軟質	南西部 FA 上面より上 17cm 口 1/4 周、頸 1/3 周 注記は左欄
12 石器 台石	長幅厚 18.8 17.6 4.8	扁平で片面の中央がわずかに凹む自然石をそのまま利用。凹んだ方の面に、薄く剥落した箇所が図示したように見られるが、使用によるものかどうかは不明。重量 2026.7g。	2.5Y7/1 灰白 やや緻密で硬質な安山岩	南部床直上 完形 33
13 石器 摺石	長幅厚 17.1 7.1 7.2	横断面が隅丸方形の自然礫をそのまま利用。図の左上部が手前に少し盛り上がっている。図示した範囲が少し磨耗して滑らかになっている。加工・被熱痕は見られない。重量 1340g。	2.5Y7/2 灰黄 やや緻密で硬質な安山岩	南部床直上 完形 34
14 石製品 紡錘車	径 51.55～ 52.70mm 厚 8.65mm 重 35.53	図上面は弱く研磨して光沢を少し持ち、内外に二重の多角形状と放射状刻線を描いた後に、使用に関わる細かい傷が孔の接線方向に生じる。図下面中央部の平坦面は研磨して光沢を持ち、「L」字形刻線を 14 個描いた後に、使用に関わる細かい傷が孔の接線方向に生じる。図下面外周部の斜面は、放射状に切削した後に星形に似た刻線を描いて、図の左～下部では更に細かい刻線を追加して描く。孔径は上面 7.15～7.30mm、下面 7.15～7.25mm でほとんど差がない。剥離破損が特に上面の外縁部が目立つ。	7.5Y3/1 オリーブ黒 緻密でやや硬質な蛇紋岩	南西部床上 23cm (FA よりは下位) 完形 38

SG10 区 SI-76 (第 118 図、写真図版 109・204)

[位置] SG10 区北部の 21-19 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は西方に SI-61 がある。近世の SD-503 に南東部を破壊され、時期不明の土坑と溝 (SK-519 と SD-508・518) によって中央部・南東隅・北部の遺構上部を切られる。

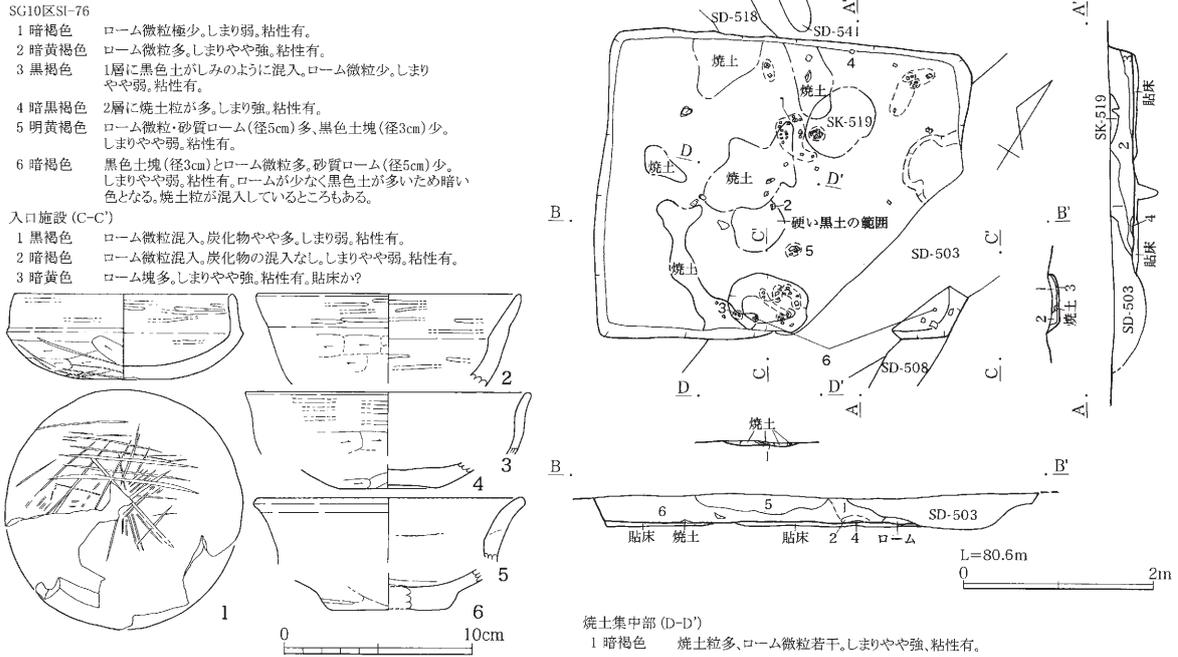
[規模と形状] 長方形の建物跡で、主軸方位は GN-28°-W(東西軸方向は GN-62°-E)。東西 3.94 × 南北 3.28m、残存壁高は最大 25cm (北西隅)～最小 18cm (南西隅)。床面に確実な柱穴はない。断面図 A-A' の中央部で竪穴掘方にある窪みは、床面レベルから深さ 24cm あるので柱穴のようにも見えるが、現地調査時には掘方底面の窪みと判断されている。壁溝・間仕切溝はない。入口施設と推定される東西 83 × 南北 61 × 深さ 15cm のくぼみが南部中央にある。入口施設の窪みとしてはやや深さがあるが、貯蔵穴と見なすには浅すぎる。竪穴中央から少し南に寄った床面に、一点鎖線で示した径 60cm 弱の範囲で、硬い黒色土がまとまっている。東壁際中央の破線で示した範囲は、掘方底面が周囲より 2～5cm 低い。

[火処] 不明である。東部にあったカマドまたは炉が SD-503 に破壊されたとも考えられる。中央部で床面が 2cm ほど窪んだところに焼土塊と暗褐色土が入るが (断面図 D-D')、炉の形状はとらえられず、現地調査時の記録でも炉と認定していない。

[覆土] 焼土が特に多い 4 層が床面にある。北部にある 1～3 層は自然埋没状の堆積である。不自然にロームの多い土が上部にまとまる 5 層は、西部にある 6 層とともに、人為的に埋め戻したか、土屋根に由来することも考えられる。断面図 B-B' で 2 層が 6 層に載る状況も不自然である。1 層と 6 層の境界は、原図に未記入のため推定線で示した。SI-76 にテフラの層や粒などは認められないが、SI-76 を切る時期不明の SK-519 には火山灰の可能性のある白色粒子が記録されている。

[遺物出土状況] 中央部と東部に多い。床面付近や床面直上にある遺物が目立つ。特に 1 が北部中央の床面直上にまとまっている。入口施設の窪み内にある遺物も、底面から 5cm 以内のレベルにある。

[出土遺物] 遺物はわずかで、大半は小破片である。明確に模倣杯と言えるものは、図示した 1 の他に破片 1 点だけみられた。1 は外面を研磨具に転用している。2 は古墳中期後葉に見られる内斜口縁の杯。図示していない甕胴部破片は、やや球胴気味である。図示以外の土師器合計 89 片・552g の内訳は、杯 42 片・174g、鉢 2 片・9g、壺甕類 42 片・329g、甌 3 片・40g。



第67表 権現山遺跡 SG10区 SI-76 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 11.7 高 4.5 最大 復 12.5	外底面の中央が少し凹み、体部外面ヨコヘラケズリ。口縁部内外面にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。体部内面も磨いていると思われるが、磨滅して不明瞭。外面の体～底部を研磨具に転用しているため、焼成後の鋭い平行刻線が交差して数多く見られる。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒細粒やや多、 赤・透明細粒少 軟質	南部床直上 口 3/4 周 8、24、24 貼床
2 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.9	外面体部はヨコヘラケズリで、その後に磨いている可能性もある。内外面口縁部と内面体部はヨコナデ後にヨコヘラミガキ。全体の表面が暗褐色に汚れていて、漆仕上げの疑いも残る。	10YR4/3 にぶい黄褐 緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央部床上 3cm 口 1/6 周 4
3 土師器 杯	口 復 15.0 高 残 3.1	やや薄い。外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデで、ヘラミガキをしているかどうかは不詳。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや少、 白・透明細粒少 やや硬質	入口部床上 2cm 口 1/6 周 入口ピット
4 土師器 杯	高 残 1.3 底 復 5.0	外底面は多方向ヘラケズリで上げ底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内底面は多方向のハケメ後ナデ消し。内面ハケメは杯にあまり見られないので、杯ではなく鉢の可能性もある。	5YR6/8 橙 緻密 赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	北部床上 9cm 底 1/3 周 12
5 土師器 小形甕	口 復 14.2 高 残 3.4	口縁部内外面ヨコナデ。外面の口縁部直下に弱い稜を持つ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白 粗～細粒と黒細粒やや多、透 明粗粒少 やや硬質	南部床直上 口 1/4 周 21 貼床
6 土師器 甕	高 残 2.1 底 復 6.2	突出する平底で、外底面はナデのようであるが磨滅して不明瞭。外面胴下端ナデ。内面底部に多方向ナデ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、黒細粒少 やや硬質	南東部床上 2cmと入口部 床上 3cmが接合 底 1/2 周 16、4 入口P

SG10区 SI-78 (第119・120図、写真図版110・204・205)

[位置] SG10区北部の23-18・19グリッドにある。同じく古墳後期前葉のSI-70・72・74が南に並び、東に後期末のSI-81がある。北東部で古墳中期のSI-79を切る。

[規模と形状] 南北軸の方形で、主軸方位はGN-8°-E。東西4.66×南北5.34m、残存壁高は10～20cmのところが多く、最も低い南西部で3～5cm、最も高い北東隅部で30cm。主柱穴4本の柱間は南北3.24m、東西2.26m(南側)～2.42m(北側)。床からの深さは46～48cmでほぼ一定し、P1・P3・P4の柱痕径は約10cm。北東柱穴P1は貯蔵穴周囲の土手状盛土に周囲を囲まれ、北側はP5の斜面につながる(断面E-E')。貯蔵穴P5は北東隅にあり、東西78×南北66×深さ35cm。P5の周囲には、床から2～4cmの高さで幅30～40cmの広い土手状盛土(6層)がめぐる。間仕切溝は西側主柱穴P2・3に連結する位置で各1本を貼床除去後に確認し、幅20～27cm、床から深さ16～18cm。入口施設や壁溝はない。

[カマド] 北壁の中央にあり、両袖幅94cm、煙道先端から袖先端まで125cm。煙道の奥壁にも貼床土を施している。灰色粘土のカマド4層で貼床上に袖を作る。燃烧部の火床面には脚裾部を失い倒立した高杯(6)

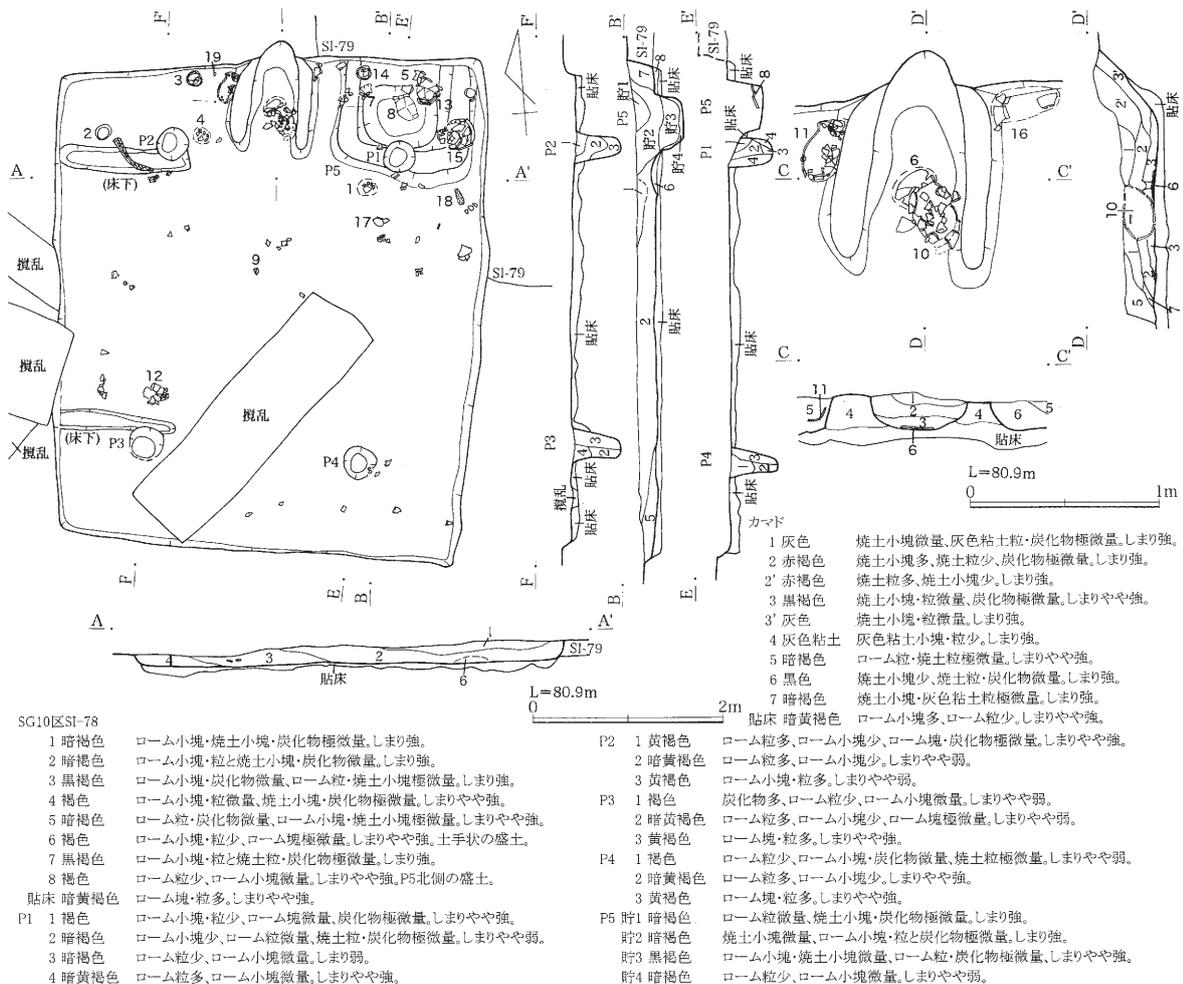
第5章 権現山遺跡 SG10 区

を支脚にし、その上に掛けた土師器甕（10）が南側へ倒れて出土した。これらと一緒に高杯（5）の杯部・脚裾部破片も出土している。カマド西袖の西側には土師器甕（11）が1個倒れている。

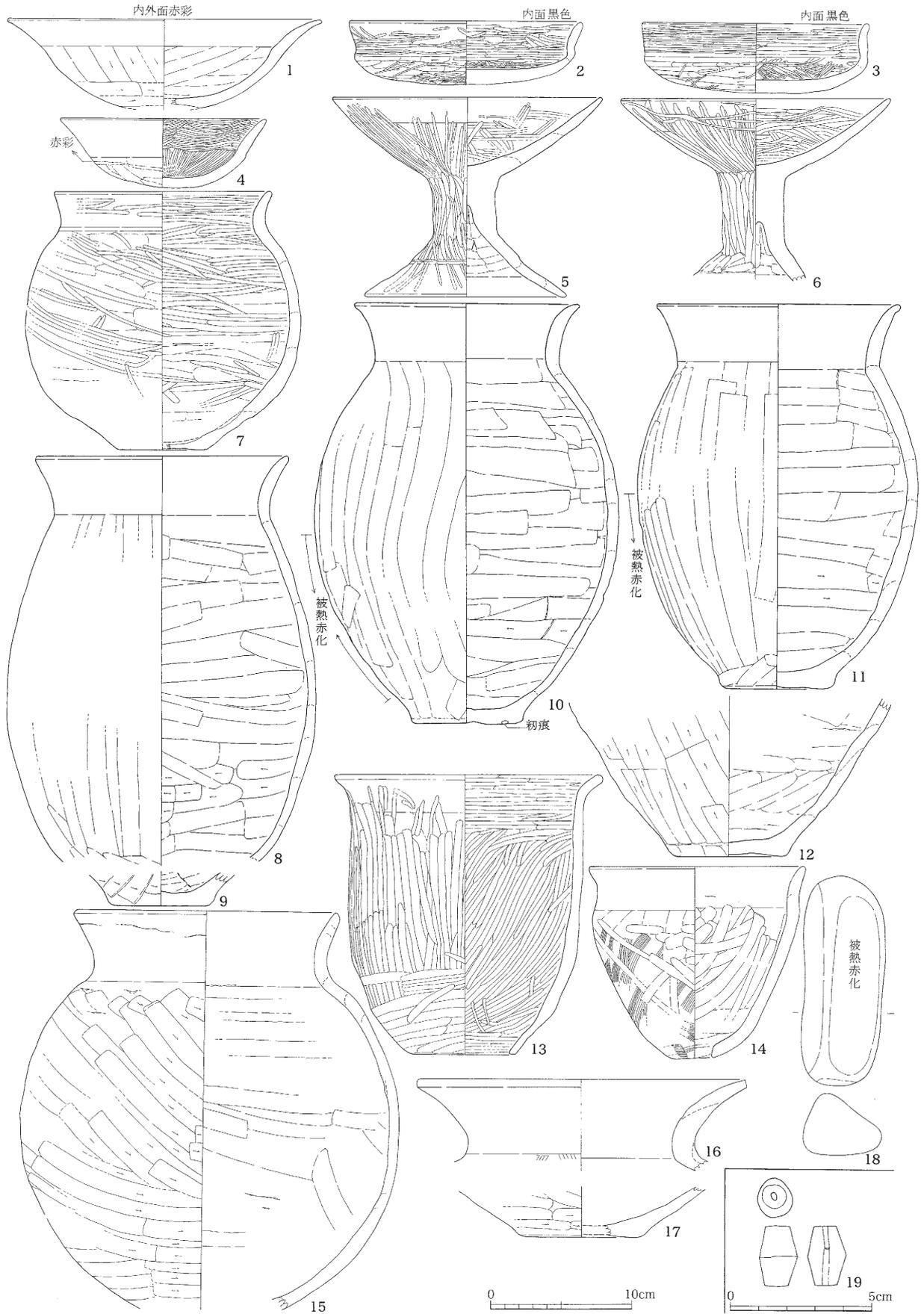
[覆土] 自然埋没と思われる。貯蔵穴の部分はかなり遅くまで窪地として残っていたことが土層断面でわかる。各層に焼土と炭を少しずつ含む。テフラの層や粒などは認められない。

[遺物出土状況] カマドの項で説明した遺物以外では P5 周辺に遺物が多い。P5 内に完形に近い甕（8）と甑（13）、P5 東側床面に壺（15）、P5 北西の床に倒立した小形甑（14）がある。北東支柱穴 P1 の南にある 1・17 は床面からかなり浮く。北西部で床から 1cm 以内のレベルに完形の杯が正位である（2・3）。P2 の西では床上 10cm 以内で炭化材が 1 本出土した。P3 の北では床上 7cm に甕片がある（12）。

[出土遺物] 甕以外の土師器は橙色胎土が目立つ。大形（1）と通常（4）の赤彩杯があり、1 は高杯の可能性もある。2 と 3 は内面黒色処理の同工品で、口縁を意図的に同程度欠いたのかもしれない。南の SI-70・74 などに似た内面黒色処理の杯がある。漆仕上げの杯は直立口縁と外傾口縁の小片が数点だけ見られた。5・6 は中期末より少し長脚化している。図示以外の杯・高杯・甑は小破片だけである。土師器甕はいずれも半周前後の破片から図上復元したもので、胴径が口径より大きい。粉圧痕のある土師器（10）は、SG10 区 SI-50 などに例がある。13 は外面まで密に磨く大形甑。16 は厚く重い大形壺。図示以外の土師器合計 347 片・3,325g の内訳は、杯 94 片・564g、高杯 18 片・175g、壺甕類 233 片・2,546g、甑 2 片・40g。甕破片がやや多く、口縁部でみると図示以外に 4 個体分ほどある。埋木製の棗玉（19）は、古墳後期に出現する畿内系の玉と考えられている（大賀 2002, pp.313,320）。SG10 区 SI-20 に土製棗玉がある。



第 119 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-78 (1) 遺構



第120図 権現山遺跡 SG10区 SI-78(2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

第 68 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-78 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 22.0 高 残 6.4	外面は体部に縦位と底部に横位のヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内外全面を赤彩。 [注記]44、45、北東、SI-78・79 上面	7.5YR7/4 にぶい橙 緻密 白・透明粗～細粒と黒 細粒少 やや硬質	北東部床上 7～14cm が 接合 口 1/3 周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 16.0 高 4.5 最大 残 292.5 重 残 292.5	外面の口～体部境に緩い段あり。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内面は底部に1方向または多方向と体部に横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。3 と同工品。	10YR5/1 褐灰 やや緻密 白・透明粗～細粒 多、赤粗粒と黒細粒少 硬質	北西部床直上 口 5/6 周 2
3 土師器 杯	口 15.6 高 5.0 最大 15.9 重 残 315.1	外面の口～体部境に緩い段。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ後、多方向ヘラミガキ。内面は底部のヘラミガキが使用により磨耗して消え、体部にヨコヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。2 と同工品。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明粗～細粒 やや多、赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	北部床上 1cm 口 3/4 周 1
4 土師器 杯	口 復 14.5 高 4.9	外面は体～底部に多方向と体部上端に横位のヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。内面は体部に放射状と口縁部に横位の密なヘラミガキ。外面上半と内面全体を赤彩。[注記] 3、58、北西、南貼床	5YR6/6 橙 緻密 白粗～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	北部床直上。カマド火 床上 3cm の 1 片も接合 口 3/4 周 注記は左欄
5 土師器 高杯	口 18.8 高 14.2 脚裾 復 14.2	外面は脚柱と脚裾の間に段を持ち、脚裾はヨコナデ後タテヘラミガキ、脚柱部はタテヘラケズリ後に密なタテヘラミガキ。杯部ナデと口縁部ヨコナデ後にタテヘラミガキ。杯部内面は口縁部ヨコナデ後に杯底部を中心として横位および多方向のヘラミガキ。脚内面にやや強いヨコヘラナデと裾部ヨコナデ。 [注記]10、54、59、60、K、南東、南西、南貼床	5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 軟質	貯蔵穴北床上 4cm の脚柱 部とカマド火床上 3～ 11cm の杯部・脚裾部に、 北西部床上 4cm の 1 片 も接合 口 1/3 周、脚裾 5/12 周、脚柱全周 注記は左欄
6 土師器 高杯	口 18.9 高 残 13.1	外面脚柱と脚裾の境が緩い段になり脚裾と口縁部ヨコナデ、杯～脚部に密なタテヘラミガキと口縁に少しヨコヘラミガキ。脚下半にナメヘラナデ。杯内面底部に多方向と杯体部に横位のヘラミガキ。脚内面は脚柱部の細長い孔内部をタテナデ、脚裾部ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	カマド火床上 3cm に倒立 して支脚に転用 口～脚柱全周 59
7 土師器 小形甕	口 復 15.3 高 18.3 最大 復 19.4	外底面はおそらくナデで、少し凹底状に仕上げる。内外面ともに胴部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの後に全体ヨコヘラミガキ。胴部下位の内外面は器面が荒れて調整不詳。確実な被熱痕は認められない。	2.5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒やや少、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴北半外周の床面 直上 口 1/5 周、底 1/2 周 48、50、51
8 土師器 甕	口 復 17.8 高 残 28.8 最大 復 21.7	外面は胴部タテヘラナデと胴下端ナメナデ。内面は胴部ヨコヘラナデと、胴下位の積み上げ休止部が厚い部分にヨコヘラケズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ。外面の全体が被熱して脆弱。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明粗～ 細粒多、白礫少 やや軟質	北東部貯蔵穴底上 11cm 口 1/3 周 56、SI-78・79 上面
9 土師器 甕	高 残 2.5 底 復 6.8	外底面は多方向ヘラケズリで平底状。外面胴部ナメヘラケズリ。内面底付近に多方向のヘラナデ。被熱・使用痕は不明。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明細粒やや 多、白・赤細粒少 硬質	南西部床上 8cm と中央部 床上 7cm の各 1 片が接 合 底 1/2 周 14、24
10 土師器 甕	口 復 15.7 高 底 29.7 底 7.7 最大 復 21.3	外底面は雑なナデで、稲稈圧痕が1箇所現れている。外面胴部タテヘラナデと内外面の口～頸部ヨコナデ。内面胴部はヨコヘラナデで、胴部下位にヨコヘラケズリするところもある。外面胴部下位が被熱赤化し、胴部上～中位もやや被熱して器面が荒れている。	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 白・黒・透明礫～細粒 多 軟質	カマド床上 11cm 口 1/2 周、底 3/4 周 60、79、上面
11 土師器 甕	口 復 17.0 高 27.3 最大 復 19.6	外面口縁部端が少し外へ肥厚する。外底面は多方向ヘラケズリでほぼ平底状。外面胴部タテヘラナデと胴下端ナメヘラナデ、内外面口～頸部ヨコナデ。内面胴部はヨコヘラナデで、胴下位の積み上げ休止部が厚くなったところをヨコヘラケズリ。外面の胴中位から底面までが広く被熱赤化する。 [注記]17、47、58、62、貯、K、北西、南東、南西、SI-78・79 上面	7.5YR6/4 にぶい黄橙 粗い 黒・透明粗～細粒多、 白細粒やや多 軟質	カマド西床上 3cm。北東 部床直上とカマド東床 上 9cm の破片も接合 口 1/3 周、底 3/4 周 注記は左欄
12 土師器 甕	高 残 11.4 底 7.6	外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面胴部タテヘラケズリ。内面は胴下段に横～斜位ヘラナデ後、積み上げ休止部の厚くなっている付近を縦にヨコナデし、それよりも上方をヨコヘラナデ。被熱・使用痕は明確には認められない。	5YR5/6 明赤褐 粗い 赤・灰色礫～細粒と白・ 黒・透明粗～細粒やや多、 白礫少 やや硬質	南西部床上 8～9cm 底全周 13、14
13 土師器 甕	口 18.8 高 19.7 底 7.4 重 残 1001	外面は口縁部ヨコナデ、胴部に縦位と下部に横位の密なヘラミガキ。内面は口縁部と下端面に横位、胴部に斜位の密なヘラミガキ。内面全体が少し黒褐色気味で、使用により汚れたものかもしれない。	5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 16～22cm。 北側床面の破片と接合 ほぼ完形 口 11/12 周、底 5/6 周 53、54、55
14 土師器 小形甕	口 15.2 高 13.7 底 2.8 底孔 2.7 重 残 537.0	外面は体部にナメハケ後ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ナデ、体部にやや強い縦～斜位ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明細粒少 軟質	北東部床直上に倒立。 床面～床上 11cm の破片 が接合 口 2/3 周、底全周 48、50、54、56、貯
15 土師器 甕	口 18.6 高 残 28.2 最大 26.5	外面胴部に横～斜位ヘラケズリ。内面胴部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。被熱・使用痕は見られない。	5YR7/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 灰色粗粒と白・黒細粒少 やや軟質	P5 東床直上。P5 北西 の床面にも小片 2 点あ り 口 11/12 周、肩全周 50、52、北東、貯
16 土師器 大形壺	口 復 23.0 高 残 6.5	厚く重い。外面肩部タテハケ後、口縁部内外面ヨコナデ。頸部に粘土を貼り足して補強しながら製作している。破片化した後に少量の煤が付着する。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明粗～細粒 やや多、黒細粒少 やや軟質	カマド東床上 12cm。北 西部床上 8cm の 1 片も 接合 口 7/12 周 6、61、K、貯
17 土師器 壺	高 残 3.5 底 9.0	円板状に突出した底面をヘラケズリして中凹み状にする。外面胴部ヨコヘラケズリ。内面は剥落して調整不明。	2.5Y6/3 にぶい黄 粗い 白・黒粗～細粒多、灰 色・透明粗～細粒やや多 硬質	北東部床上 4～15cm 底 1/6 周 29、30
18 石器 編物石?	長 15.8 幅 5.8 厚 4.4	断面が隅丸三角形の細長い自然礫をそのまま利用。全面が被熱し、特に縦位の稜に沿ってやや強く被熱する傾向がある。加工・使用痕は見られない。重量 586.6g。	2.5Y7/1 灰白 緻密で硬質な安山岩	北東部床直上 完形 40
19 石製品 環玉	長 2.12 幅 1.31～ 1.33 小口径 0.86～0.88	最大径部分に明瞭な稜を持つ。表面に木目痕を残し、破面は光沢のある黒褐色。両面から穿孔し、孔径は 0.20mm。中央から 2 つに縦方向に割れているので、穿孔の状況がよく観察できる。重量 2.55g。	2.5Y3/1 黒褐 埋木製	カマド西床直上 ほぼ完形 57

SG10区 SI-79 (第121図、写真図版110・111)

[位置] SG10区北部の23-18・19グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は北・東にSI-80・82、南にSI-114がある。南西部を古墳後期のSI-78に切られる。東端部の床面で確認した時期不明のP-702はSI-79の貼床に覆われていないので、P-702がSI-79を切ると推定される。

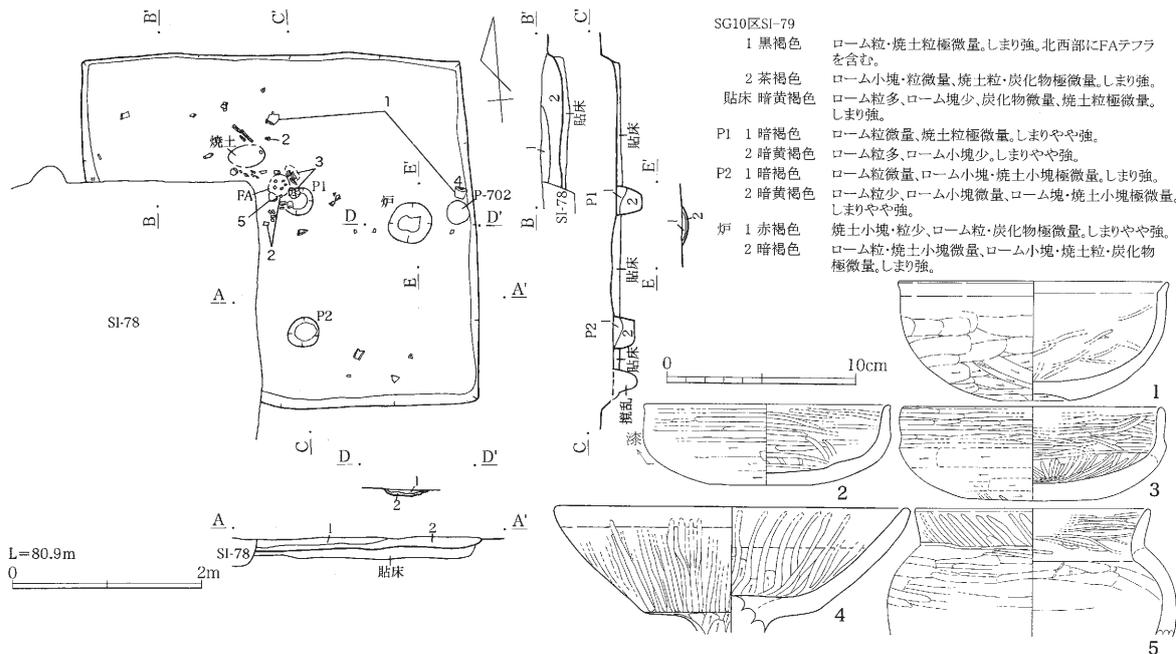
[規模と形状] 少し東西に長い方形の建物跡。柱穴方位を主軸方位とすると、GN-4°-Eである。東西4.17×南北3.78m、残存壁高は西壁の北半部で最大23cmあるが、ほとんどの壁は高さ8～10cmしか残っていない。主柱穴は2本で、柱間は南北1.40m。柱穴の形状から推定した柱径はP1が14cm程、P2が20cm程で、床面からの深さはP1=26cm、P2=22cm。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。貼床は厚さ5cm前後の部分が多く、中央から南東部ではやや厚くなり最大10cm程度である。

[炉] 東部にあり、円形で東西46×南北42cm、床面からの深さ6cm。

[覆土] 自然埋没と思われる。古墳後期初めに降下したHr-FAと見られるテフラが、北主柱穴P1北西で、床から約20cm浮いて覆土上面にまとまって認められた(1層)。竪穴埋没途中の窪地に堆積したテフラ層の最も深い部分が、遺構確認面レベルに少しだけ残ったものであろう。これよりさらに北西では、床面より上へ3～4cmレベルで焼土が見られた。

[遺物出土状況] 中央部で覆土中位以上に遺物がまとまっている。2と3はこの付近に確認されたHr-FAテフラ上面とほぼ同じレベル、5はFA上面よりも僅かに低いレベルにある。床面に近いレベルの遺物は北西部・南東部・東壁部に少量ずつ見られ、1と4が床面上6～10cmで出土した。南北に隣接するSI-79(床付近遺物)とSI-80(残存壁高20cm)に、同個体の大形壺破片があるので、同時に埋没したと考えられる。

[出土遺物] 杯や鉢は橙色の胎土を使い(1・2・3)、上層のFA付近で出土した2と3はよく磨く。2の漆仕上げは、早い時期の事例である。下層出土の1と4を重視すれば古墳中期後葉までさかのぼる可能性もある。遺物はわずかで、図示以外の土師器は小破片ばかりで合計68片・1,074gある。内訳は、杯18片・78g、高杯5片・84g、小形壺5片・100g、壺甕甗類40片・812g。超大形壺と見られる厚手の破片が10片ほどあり、北に隣接するSI-80出土破片と同一個体と見られる破片を含む。また、受口状口縁の壺の口縁部片がある。甗破片は少ない。



第121図 権現山遺跡 SG10区 SI-79 遺構・遺物

第 69 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-79 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.2 高 6.3 底 3.8	外底面と外面下半はヨコヘラケズリで凹底にする。外面口縁部ヨコナデと体部上半ヨコヘラナデ。内面体部はおそらくヘラナデ後に疎な縦～斜位のヘラミガキ。	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒やや少、黒細粒少 硬質	北部床上 10cm。東部床 上 6cmの小片 1 点も接合 口 1/6 周、底全周 4、21
2 土師器 杯	口 復 12.0 高 復 4.3	外面は底部に 1 方向 (?) と体部に横位のヘラケズリ。口縁部は内外面にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はタテ後ヨコヘラミガキ。外面上半と内面全面に漆仕上げ。	2.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒やや多、 白・黒粗～細粒少 硬質	中央部床上 13～16cm と北部床上 14cmが接合 口 1/6 周 7、12、19
3 土師器 杯	口 復 13.6 高 5.0 最大 復 14.0	外面は体部に横位と底部に 1 方向のヘラケズリと思われるが、磨滅して不明確。外面体部と底部にヘラミガキも行っていた可能性があり、底部に少し認められる。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部に放射状と底部に 1 方向の密なヘラミガキ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒・透明粗～ 細粒少 やや硬質	中央部床上 17～18cm が接合 口 1/4 周、体 1/3 周 13、15
4 土師器 高杯	口 復 18.5 高 残 6.6	外面は杯体部ナデと口縁部ヨコナデ後にタテヘラミガキ、杯底部タテヘラケズリ。内面は杯体部下位から底面にかけてタテヘラケズリ後に、口縁部までタテヘラミガキ。杯底面は開放して成形した後に粘土を充填している可能性あり。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白・灰色礫～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	東部床上 6cm 口 1/36 周、杯底 1/2 周 4
5 土師器 鉢	口 復 12.2 高 残 6.9 最大 復 15.1	外面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ後ナメヘラミガキと頸下端ヨコヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。使用・被熱痕は見られない。口縁部内面が暗褐色気味に少し汚れる。	2.5YR6/6 橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒細 粒少 やや硬質	中央部床上 14cm 口 1/6 周、肩 1/3 周 9

SG10 区 SI-80 (第 122 図、写真図版 111・205)

【位置】 SG10 区北部の 23-18・19 グリッドと 24-18・19 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は北東に SI-86 や円筒形土坑 SK-550、南に SI-79・82 がある。北東の上部を時期不明の SK-555 に切られる。

【規模と形状】 小形の長方形建物で、貯蔵穴だけでなく炉も南東部にある点が通常と異なる。主軸方位は GN-5° -E。東西 3.48 × 南北 3.82m、残存壁高 20～25cm。主柱穴は P1 と P2 で、穴の平面形は東西軸の隅丸長方形。柱間は 1.26m、床面からの深さは P1 が 35cm、P2 が 43cm。裏込土が残り、柱径は約 10cm。

北側にある P3 (98 × 100cm) と P4 (82 × 74cm) は、どちらも方形の掘り込みで床面から深さ 10cm しかないので、貯蔵穴と考えるのは疑問である。南東部にある貯蔵穴 P5 は東西 68 × 南北 64 × 深さ 13～17cm。P5 の西側にある P6 は床面からの深さ 15cm。P6 の南側には土手状の盛土があり (断面図 F-F' の 2 層)、幅 27～40cm・床面からの高さ 5～8cm で、平面図の破線 (P5 南側から P7 に向かうライン) よりも東側は地山ローム層を掘り残して作っている。P7 は西から東側に向かってオーバーハングするように掘り込まれている柱穴状土坑で、床面からの深さは 21cm。

掘方はやや深さに差があって底面に緩い凹凸を持ち、暗黄褐色のロームで厚さ約 10cm 以内の貼床を行う。主柱穴 2 本の間中部と周囲で床面のローム土が非常に硬くなっている。壁溝や間仕切溝はない。

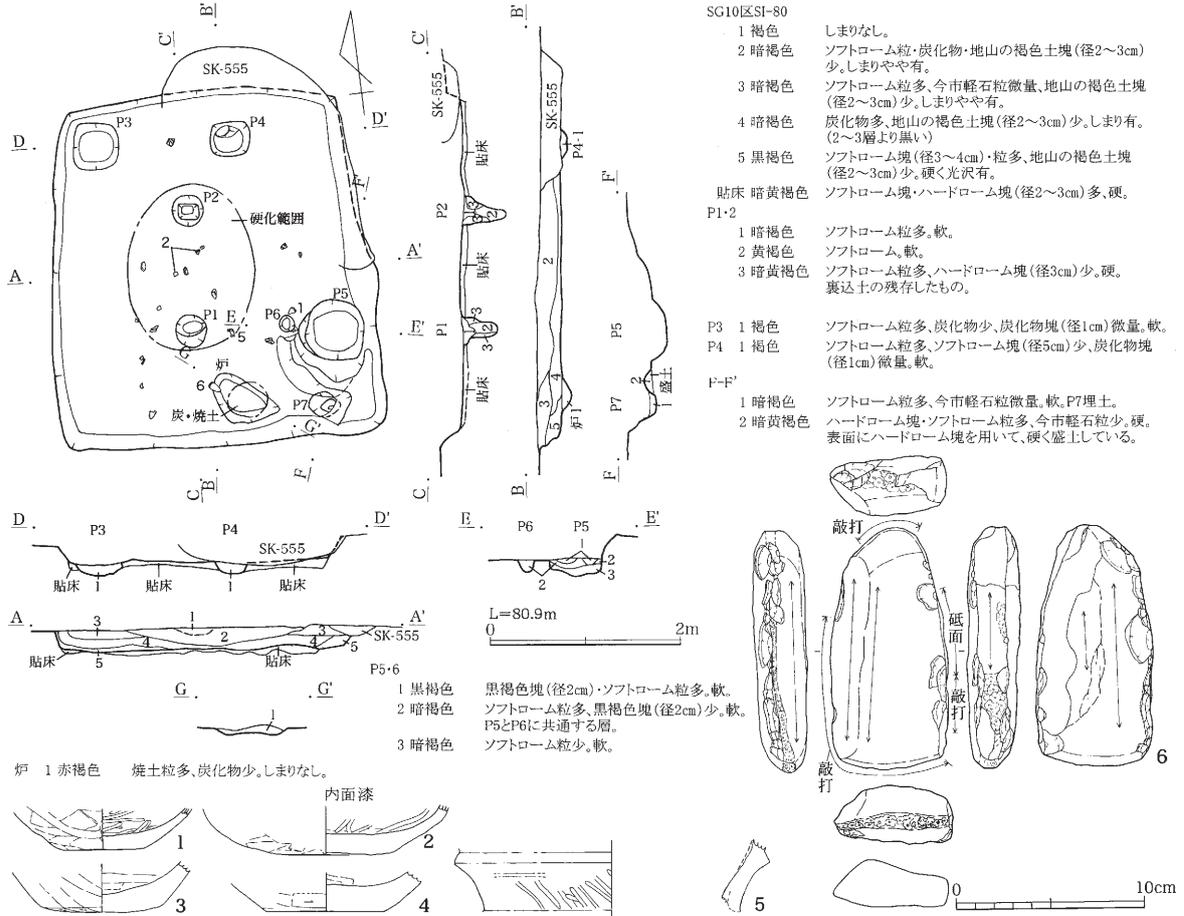
【炉】 南壁際の東部にあり、東西 74 × 南北 44cm、床面からの深さ 3～4cm。

【覆土】 自然埋没状である。古墳後期初めに降下した Hr-FA と見られるテフラが、竪穴の中央部で覆土上面に少量まとまって見られた。竪穴埋没途中の窪地に堆積したテフラ層の最も深い部分が、1 層より上の遺構確認面レベルに少しだけ残ったものであろう。床面直上よりも少し上方の 4 層に炭化物を多く含む。他に炭化物が P3 と P4、焼土が炉の覆土に含まれている。縄文草創期に降下した今市軽石粒が 3 層に混入している。

【遺物出土状況】 西部で床からやや高いレベルに、中央部ではやや低い位置に遺物がある。南北に隣接する SI-79 (床付近遺物) と SI-80 (残存壁高 20cm) に同個体の大形壺破片があるので、同時に埋没したと考えられる。南東にある SI-82 と遺構間接合する土器があり、SI-80 出土破片が高いレベルにあるので、わずかに先行する SI-82 の遺物が SI-80 の覆土に流入したと考えられる (SI-82 の遺物 2 などを参照)。古墳時代の円筒形土坑 SK-550 と遺構間接合した土師器 (杯・小形壺) が南東部と南西部に計 3 例あるので、SI-80 と SK-550 は同時に埋没した可能性がある。遺構間で接合した土師器杯は、破片の大半を出土した SK-550 の遺物として図示した。

【出土遺物】 遺物は少なく、小破片ばかりである。壺甕類が多く杯鉢類もあり、高杯や甌はない。内面を

第4節 古墳時代の竪穴建物跡



第122図 権現山遺跡 SG10区 SI-80 遺構・遺物

第70表 権現山遺跡 SG10区 SI-80 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 2.2 底 復 4.4	外底面は円周方向のヘラケズリで平底状。外面体部に横～斜位の強いヘラナデで、ややヘラケズリに近い。内面は底面に多方向と体部に斜位のヘラミガキ。出土レベルの記録だけが有り、平面的な出土位置は不詳。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・黒・透明細粒少 硬質	南東部床上 23cm 底 1/3 周 20
2 土師器 杯	高 残 2.5 底 復 15.4	外底面に1方向(?)ヘラケズリで、中央が弱く凹む。外面体部に横～斜位ヘラナデ。内底面は多方向ヘラナデ後ヘラミガキ。内面が褐色で漆仕上げと思われる。 [注記]4、6、23、A-A'ベルト西東、B-B'ベルト、トレンチ西半分、北西区	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや少 白・黒・透明細粒少 やや軟質	中央部床上 14～19cm が接合 底全周 注記は左欄
3 土師器 甕	高 残 2.7 底 復 6.4	外底面は多方向ヘラケズリで凸面状。外面胴下位ナメヘラナデ、内面はヨコヘラナデ。	7.5YR6/4 に近い橙 粗い 白・透明粗～細粒やや 多、白礫少 やや硬質	西半部中央 底 1/3 周 A-A'トレンチ西半分
4 土師器 甕	高 残 2.1 底 復 6.2	外底面はおそらくヘラケズリで平底。外面胴下端ヨコヘラケズリ、内面胴下端ヨコヘラナデ。全体が被熱して脆く、外面は黒く煤または炭素分が全面に見られる。	2.5Y3/1 黒褐 やや粗い 白・透明粗～細粒 と黒細粒やや多 軟質	南東部 底 1/3 周 2～4層、A-A'、A-A'ト レンチ
5 土師器 大形壺	高 残 3.9	口～頸部間の外面を突帯状に隆起させて、その上を受口状口縁にしていたと考えられる。頸外面ヨコナデ後ナメヘラミガキ。内面はナデと考えられるが、剥落して調整不詳な部分が多い。	7.5YR7/6 橙 緻密 灰色粗粒と白・黒・赤 細粒少 やや硬質	南部床上 11cm 頸 1/6 周 12
6 石器 砥石兼敲石	長 12.6 幅 6.2 厚 2.9 重 335.7	隅丸長台形の扁平な自然礫の外周側面の多くを敲打に使用し、そのうち一部だけは敲打の後に底面に使用している。敲打に伴って両平坦面に剥離が生じている。左図の平面の左半部と左斜面、右図の平面の中央部と右縁部を研磨によく利用して平滑化している。	5Y6/1 灰 緻密で非常に硬質なホルンフ ェルス	南部床上 6cm 完形 17

よく磨く橙色の杯(1・2)からみて、中期後葉～中期末ころの可能性がある。2は漆仕上げとしては早い時期の事例。5のような受口状口縁の壺は、SG10区ではSI-19aなどにある。図示以外の土師器合計51片・441gの内訳は、杯13片・44g、壺甕類38片・397g。硬質緻密なホルンフェルス製の砥石(6)は、SG10区ではSI-12などにある。5～10cm大の自然礫が少量ある。縄文中期の加曾利E式土器片も混入していた(『東谷・中島地区遺跡群』10, p.83の228)。

SG10 区 SI-81 (第 123 図、写真図版 112・205)

[位置] SG10 区北部の 23-19 グリッドにある。同じく古墳後期の遺構としては、北に SI-84、西に SI-78 がある。時期不明の SK-613 に西側を切られ、近世の SD-503 に東端を切られる。

[規模と形状] 方形で、主軸方位は GN-10° -E。東西 4.46 × 南北 4.57m、残存壁高がかなり高く、最大 50cm(北西隅付近)、最小 33cm (南壁東部)。主柱穴 2 本の柱間は東西 2.03m。柱径 10 ~ 15cm、床面からの深さは P1=11cm、P2=16cm で、柱穴としては非常に浅い。入口施設と考えられる P3 は 2 個が連結した形で南北 60 × 東西 34cm の浅い穴が同時に埋没し、床からの深さは P3 北が 23cm、P3 南が 15cm。貯蔵穴はない。壁溝の深さは 1 ~ 5cm で、北半部は貼床除去後に掘方面で確認したが、本来はすべて床面から掘られていたものという現地調査の所見がある。間仕切溝はない。カマド東袖の南東に接する部分の床面が周囲よりも約 5cm 高い。掘方底面は、周囲よりも北西隅部が 3 ~ 5cm 低く、南西隅部が 4 ~ 8cm 低くなる。

[カマド] 北壁の東部にある。両袖幅 97cm、煙道先端から袖先端まで 111cm。暗灰色土で構築した袖の基部が、壁面から北側へ掘った掘方内まで入り込み(カマド断面 A-A'), この箇所では竪穴貼床土やカマド整地土(5 層)が見られない。カマド構築材と考えられる被熱した河原石 3 点が南方で出土した(15 ~ 17)。

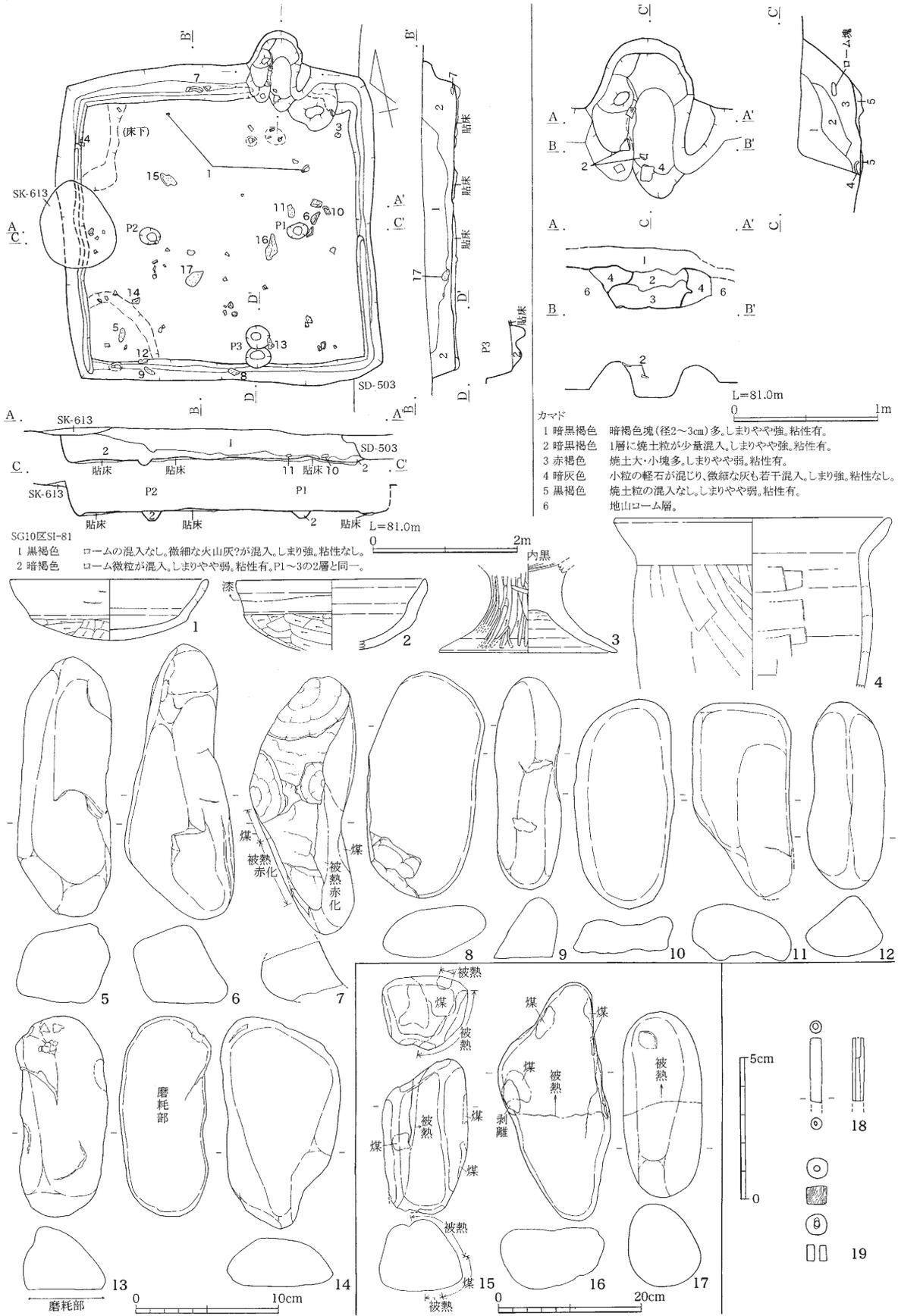
[覆土] 自然埋没状。上層に含む微細なテフラは、古墳時代テフラが二次的に流入したテフラ粒であろう。

[遺物出土状況] 北西部は遺物が少ない。西半では床からかなり浮いたレベルに、東半では比較的低いレベルに、遺物が多い傾向がある。床面の遺物はごく少ない。カマド南側の床上 8 ~ 22cm に残存度の高い杯 1・2 がある。茨城県産の甕(4)は、カマド床付近と北西部床上 40cm で各 1 片、北西部で 8 片出土した。自然石のカマド構築材 15 ~ 17 は中央部の床上 5 ~ 11cm にある。編物石は床上 10cm 以内に多いが、9 と 12 はやや浮く。玉 18 と 19 は出土地点不詳で、竪穴覆土を掘り下げた 2000 年 2 月 7・8・10 日のうち 8 日にカマド西側で白玉、10 日に出土位置不明の管玉が出土したので、竪穴中~下位の遺物であろう。

[出土遺物] 内彎口縁杯(1・2)の出現期である。炭素吸着で内面を黒色処理する高杯(3)の脚がまだ長いので古墳後期末頃。4 は金色に発色する雲母が多い茨城県産の甕。雲母片を含む土師器は SG10 区 SI-12 他にある。図示以外の土師器合計 1,337 片・7,707g の内訳は、杯 475・1,960g、鉢 1 片・21g、壺甕類 860 片・5,714g、甌 1 片・12g。滑石製白玉と両面穿孔の碧玉製管玉は、古墳中期の混入品か伝世品であろう(18・19)。滑石製白玉・管玉は SG10 区 SI-30 他にある。編物石らしい自然礫が多い。13・14 は砥石や台石に使ったらしい。長さ 21 ~ 33cm の 15 ~ 17 はカマド構築材と推定される。

第 71 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-81 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.7 高 4.2	外面は口縁部ヨコナデ後に底部 1~2 方向と体部横位のヘラケズリ。内面は底部に多方向ナデ後、口~体部にヨコナデ。漆仕上げは見られない。 [注記]4、56、南東、北(ベルト)	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 白粗~細粒と黒細粒 やや多、赤粗~細粒と透明細粒少 やや軟質	北部床上 22cm と北東部床上 8cm が接合 口 3/4 周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 5.0	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は口~体部ヨコナデ。外面上位と内面全面に漆仕上げ。 [注記]2 カマド、南東、南西、北東、表探	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 黒細粒少 軟質	カマド火床上 20cm 口 7/12 周 注記は左欄
3 土師器 高杯	高 残 6.2 脚裾 12.4	外面は脚部タテヘラケズリと裾部ヨコナデ後、全体をタテヘラミガキ。杯内面は多方向の密なヘラミガキ。脚内面は斜~横位ナデの後に裾部ヨコナデ。杯部内面に炭素吸着の黒色処理。	2.5YR6/3 にぶい黄 緻密 白粗粒と白・黒・透明細粒少 硬質	北東部床上 16cm 脚柱全周、脚裾 1/12 周 58、北西、北東
4 土師器 甕	口 復 19.0 高 残 12.0	やや薄い。外面胴部に縦~斜位ヘラナデ、内面胴部にヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。茨城県産。 [注記]2、4(カマド)、カマド一括、北西、北東、北(ベルト)、東(ベルト)	5YR4/6 赤褐 粗い 白粗粒と金色雲母粗~細片多、透明粗粒と白・黒細粒少 やや硬質	北西部床上 40cm とカマド火床上 5cm が同個体 口 1/3 周、頸 1/6 周 注記は左欄
5 石器 編物石	長 18.1 幅 6.5 厚 5.5	断面が隅丸多角形で、図の上半部が 2cm ほど下半部よりも薄くなる形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 811.8g。	5Y6/2 オリーブ灰 やや粗粒で硬質な流紋岩	南西部床上 5cm 完形 17
6 石器 編物石	長 19.2 幅 7.7 厚 6.8	断面が隅丸方形の自然礫をそのまま利用。図の上部が厚く、下部は厚さ約 3cm まで薄くなる。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 918.5g。	5Y8/2 灰白 緻密で硬質な安山岩	東部床上 4cm 完形 52
7 石器 編物石	長 17.8 幅 7.4 厚 4.6 重 残 498.0	「く」の字形に弱く曲がった棒状の自然礫をそのまま利用。図示した面に広く割れ面があり、図にリングを入れた 3 面は打撃により剥離している。この対面も全長の約 1/2 周が割れ面。割れ面も含めて全体が被熱赤化し、煤も少量ずつ各所に見られる。使用痕は不明。	5CY7/1 明オリーブ灰 緻密で硬質な安山岩	北部床上 2cm 一部欠 6
8 石器 編物石	長 15.7 幅 8.2 厚 5.5	扁平な自然礫を利用。図の左下部が剥離し、図の反対面には剥離がない。人為的に剥離した可能性があるが確実ではない。使用・被熱痕はない。縦方向に薄く 2 枚に割れた状態で出土。重量 662.2g。	5Y6/1 灰 わずかに多孔質気味で硬質な安山岩	南部床直上 端部欠 33



第123図 権現山遺跡 SG10区 SI-81 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

9 石器 編物石	長 幅 厚 4.8 4.6 4.2	断面が不整三角形で中央が少しくびれる自然礫をそのまま利用。図の反対面は、断面図に示したように節理に沿った平坦な割れ面。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 374.7g。	2.5Y6/3 にぶい黄 緻密で硬質な流紋岩	南部床上 22cm 完形 22
10 石器 編物石	長 幅 厚 14.6 6.9 3.8	厚さ約 2～4cm の扁平な自然礫をそのまま利用。両面はかなり凹凸を持つ。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 369.9g。	2.5Y6/2 灰黄 緻密で硬質な安山岩	東部床上 1cm 完形 53
11 石器 編物石	長 幅 厚 残 13.6 6.9 4.5	断面が不整多角形の自然礫をそのまま利用。図の下端部は少し折損している。これ以外に加工・使用・被熱痕は見られない。残存重量 468.2g。	2.5Y6/2 灰黄 緻密で硬質な安山岩	東部床上 1cm 完形 55
12 石器 編物石	長 幅 厚 13.1 5.3 4.5	断面が扇形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 377.4g。	2.5Y6/2 灰黄 硬質で石英斑晶の目立つ流紋 岩	南西部床上 17cm 完形 21
13 石器 編物石 または 砥石	長 幅 厚 14.0 6.4 4.3 470.6	断面が隅丸三角形で、片面が非常に平らな形の自然礫を利用。平坦な面は全体を研磨に利用して明瞭な光沢を持ち、石材が硬いので擦痕は見えない。加工・被熱痕は見られない。	2.5Y5/4 黄褐 硬質でやや石英斑晶の目立つ 流紋岩	南部床上 9cm 完形 44
14 石器 編物石 または 台石	長 幅 厚 重 14.7 8.2 3.8 560.7	厚さ約 2～4cm の扁平な自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。編物石と考えるには重心が 1 端に偏っていて扁平なので、台石と考えたほうがよいのかもしれない。	5Y7/2 灰白 緻密でやや軟質な流紋岩質 凝灰岩	南西部床上 9cm 完形 19
15 カマド 構築材	長 幅 厚 重 21.5 11.8 10.2 3549	断面が隅丸台形状で、厚さ 9～10cm の自然石をそのまま利用。長側面全体の約半周部分がやや明瞭に被熱赤化し、赤化範囲の所々に煤も見られる。残る半周は赤化していないので、カマド構築土に覆われたか、または火の当たらない側に向いていたと考えられる。	2.5Y7/2 灰黄 捕獲岩の目立つ硬質な石英斑 岩	北西部床上 11cm ほぼ完形 8
16 カマド 構築材	長 幅 厚 重 33.2 15.5 9.6 5800	断面が隅丸長方形で、厚さが 7～10cm 前後の自然石をそのまま利用。赤化部分が明瞭で、全周にわたって同様に見られるが、石の半分だけに限られる。煤も各所に散見される。下半部を埋めて焚口の袖石に用いたことが推定される。	2.5Y6/3 にぶい黄 捕獲岩の目立つ硬質な石英斑 岩	東部床上 8cm 完形 41
17 カマド 構築材	長 幅 厚 重 25.8 10.9 11.8 4400	断面が楕円形で図の手前側が厚くなる形の自然石をそのまま利用。全周にわたって図の上半部がやや明瞭に被熱赤化し、赤化範囲の所々に煤も少量見られる。下半部を埋めて焚口の袖石に用いたことが推定される。	2.5Y6/3 にぶい黄 比較的緻密で硬質な流紋岩	南西部床上 5cm 完形 31
18 管玉	長 径 残 22.04mm 3.78～ 3.86mm	側面と小口を丁寧に磨いて光沢を持つ。両面から穿孔する。小口が残っている側で孔径 1.75mm、反対側の折れ面で孔径 1.48mm。残存重量 0.49g。	5G5/1 緑灰 緻密で良質な碧玉	片端折損、側面に剥離 破損 000210
19 石製模造品 白玉	長 径 重 6.00mm 7.20～ 7.35mm 0.56	両小口面は平滑に研磨してほとんど擦痕を残さない。側面は穿孔と同じ方向に粗い研磨痕を残す。片面から穿孔して対面に穿孔剥離を生じる。孔径は初孔径・終孔径ともに 1.90mm。	10Y4/1 灰 緻密で軟質な滑石	完形 000208

SG10 区 SI-82 (第 124 図、写真図版 112)

[位置] SG10 区北部の 23-19 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は北に SI-80・84・86、西に SI-79 がある。重複する遺構はない。西半が大きく削平され、西壁推定位置付近に方形攪乱坑がある。

[規模と形状] 西半部はほとんど削平されているので不明瞭だが、方形の建物跡と推定した。主軸方位は GN-9°-E。東西は残存 3.6m 以上、南北 3.62m。壁の残存高は北東部で最大 10cm あり、南東部では 5cm しかない。柱穴・入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。

[火処] 不明である。

[覆土] 残存する覆土が薄い南西部を避けて、竪穴中央よりも北部と東部に土層断面観察ベルトを設けた (A-A' と B-B')。上下 2 層が薄く残る。北部と東部の堆積は自然埋没状である。テフラの層や粒などは認められない。

[遺物出土状況] 竪穴の残りが浅いので、遺物はすべて床に近いレベルにある。北東部に多い。東部では床から数 cm 浮いたレベル (6・7)、西部ではより低いレベルに遺物がある (5・8)。2 は SI-80 の床上 19cm 出土破片と SI-82 の床上 5cm 出土破片が接合したもので、SI-82 の遺物が SI-80 に混入したと考えられる。

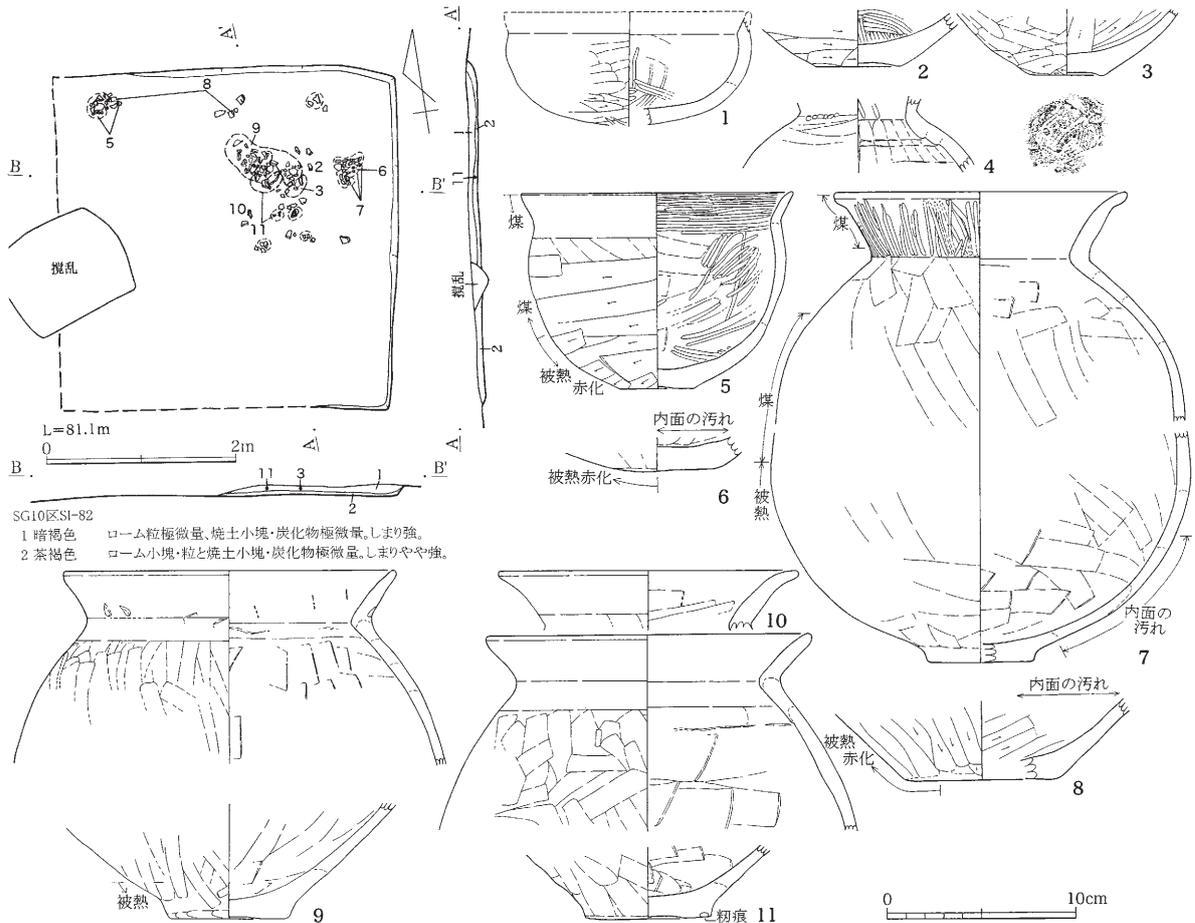
[出土遺物] 丸底でやや浅い杯 (1) と、凹底でやや深くなりそうな杯 (2・3) がある。7 と 9 は炉で使用した痕跡のある土師器甕。刳圧痕のある土師器 (11) の類例は、SG10 区 SI-50 などにある。図示以外の土師器合計 181 片・1,959g の内訳は、杯 61 片・268g、壺甕類 120 片・1,691g。

第 72 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-82 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 5.7 最大 復 12.8	外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラナデ、底外周ヨコヘラケズリ。外底面に平行線状の凹線 2 本あり。内面は体部ヨコヘラナデ後に疎らなタテヘラミガキ、底部多方向ヘラミガキ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒細粒やや少 赤・透明粗～細粒少 やや硬質	南東、南西上面 頸 1/8 周、体 1/6～ 1/12 周 上面、南東一拵、南西 一拵
2 土師器 杯	底 4.3	外底面は弱い凹底状で 1 方向ヘラケズリ。外面体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコヘラケズリ後に底部 1 方向、体部斜位の密なヘラミガキ。 [注記] SI-80 19、SI-82 5	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや多、白・赤・透明粗粒少 やや硬質	SI-82 北東部床上 5cm と SI-80 の P5 西床上 19cm が接合 底 1/2 周 注記は左欄

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

3 土師器 杯	高 残 3.5 底 3.8	外底面は雑なナデまたはハケメで凹底状。外面体部ナメヘラナデ後に下端ヨコヘラケズリ。内面はタテヘラナデで、強くヘラケズリ状に施すものが多い。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや粗い 白礫と白・黒・赤 粗～細粒少 やや軟質	北東部床上 3～5cmが 接合 底 5/6 周 21～23
4 土師器 小形壺	高 残 4.0 頸径 6.3	外面は肩部ヨコヘラナデ後、頸部タテヘラミガキのヘラが頸下端に当たった 痕跡と思われる粒状痕が見られる。内面は肩部に粘土積み上げ痕を残してコ ビオサエ、頸部ナデ後タテヘラミガキ。	7.5YR5/8 明褐 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや多、白・透明粗粒と赤細 粒少 やや硬質	表採 3片と遺構確認 面の1片が同一個体 頸 2/3 周 上面、表採
5 土師器 鉢	口 14.2 高 10.4 底 3.8	外底面は雑な多方向ヘラケズリ。外面体部斜位ナデ後、中位以下ヨコヘラケ ズリ、体部下端斜位ヘラケズリ。内面体部斜位ヘラナデ後、不規則にまとま る斜位ヘラミガキを複数箇所に行う。内外面口縁部ヨコナデ。外面下位が被 熱赤化し、中位以上に煤が付着する。	5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白粗～細粒と黒・ 透明粗粒少 硬質	北西部床直上 口 1/2 周、底全周 56、59
6 土師器 甕	高 残 1.8 底 5.2	外底面は多方向ヘラケズリで平底状。外面胴部は縦位のヘラケズリまたはヘ ラナデで、磨滅気味のため調整が不明瞭。内面は底部外周に沿って円周方 向のヨコヘラナデ。外面全体が被熱赤化し、内面に黒褐色の汚れあり。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒や や多、黒・透明粗～細粒少 やや軟質	北東部床上 6cm 底 5/6 周 60
7 土師器 甕	口 復 15.4 高 推 約 25 底 復 5.4 最大 復 22.0	外底面は多方向ヘラケズリで平底。外面は胴部に縦～斜位ヘラナデ。内外面 口縁部はヨコナデ後に外面タテヘラミガキ。内面胴部に横～斜位ヘラナデ。 外面は底面から胴下半まで被熱赤化し、肩部と口縁部に煤が多く付着。内面 胴部下位に暗褐色のコゲ痕。 [注記] 7～9、60、上面、表採、北西、一括、北西一括、北東一括、南西一括	5YR4/6 赤褐 粗い 白細粒多、白礫と白・ 灰色粗粒やや多、黒・透明粗 ～細粒少 やや硬質	北東部床上 6～8cm 口 1/2 周、底 1/3 周 注記は左欄
8 土師器 甕	高 残 4.2 底 7.9	外底面は多方向ナデ。外面胴部タテヘラケズリ、内面胴～底部ナメヘラケ ズリ。外面は被熱赤化し、内面はコゲ痕に由来すると思われる黒褐色。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 黒・透明粗～細粒 やや多、赤粗粒と白細粒少 軟質	北部床直上と北西部床 上 7cmが接合 底 1/2 周 54、58
9 土師器 甕	口 復 17.6 高 残 16.4 底 6.4 最大 残 22.8	外底面は突出する平底で、多方向ヘラナデ。外面胴部タテヘラナデ後に口～ 頸部ヨコナデ。頸部外面に図示した2箇所の深い刺突痕あり。内面は底部に 多方向と胴部に横位のヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。外面口～肩部に煤付着。 外底面が弱く被熱した可能性が高い。[注記] 25、29、30、32、33、35～ 40、42、44、45、64、66、67、表採、一括、北西一括、南西一括	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白粗～細粒多 やや硬質	北東部床直上～床上 5cm が接合 口 2/3 周、頸 3/4 周、 底 2/3 周 注記は左欄
10 土師器 壺	口 復 15.7 高 残 3.1	外面は頸部タテヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に 頸部ナメヘラナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや粗い 赤・黒粗粒と白・ 透明細粒やや多、灰色礫少 やや硬質	中央部床直上 口 1/6 周、頸 1/3 周 51、床付近、表採
11 土師器 壺	口 復 16.8 高 残 14.2 底 6.6	外底面は多方向ヘラナデで中央がわずかに凹む。外面胴部に縦～斜位ヘラナ デ後、口～頸部ヨコナデ。内面はヨコヘラナデ後に口～頸部ヨコナデ。外底 面に稲稈圧痕(?)が1箇所ある。被熱・使用痕や煤は見られない。 [注記] 4、20、24～28、31～33、36、62、北東、南西、一括、北西一括、 北東一括、南西一括、南東一括	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 灰色礫と白粗～細粒や や少、黒・透明細粒少 硬質	北東部床直上～床上 4cm 口 2/3 周、頸 3/4 周、 底全周 注記は左欄



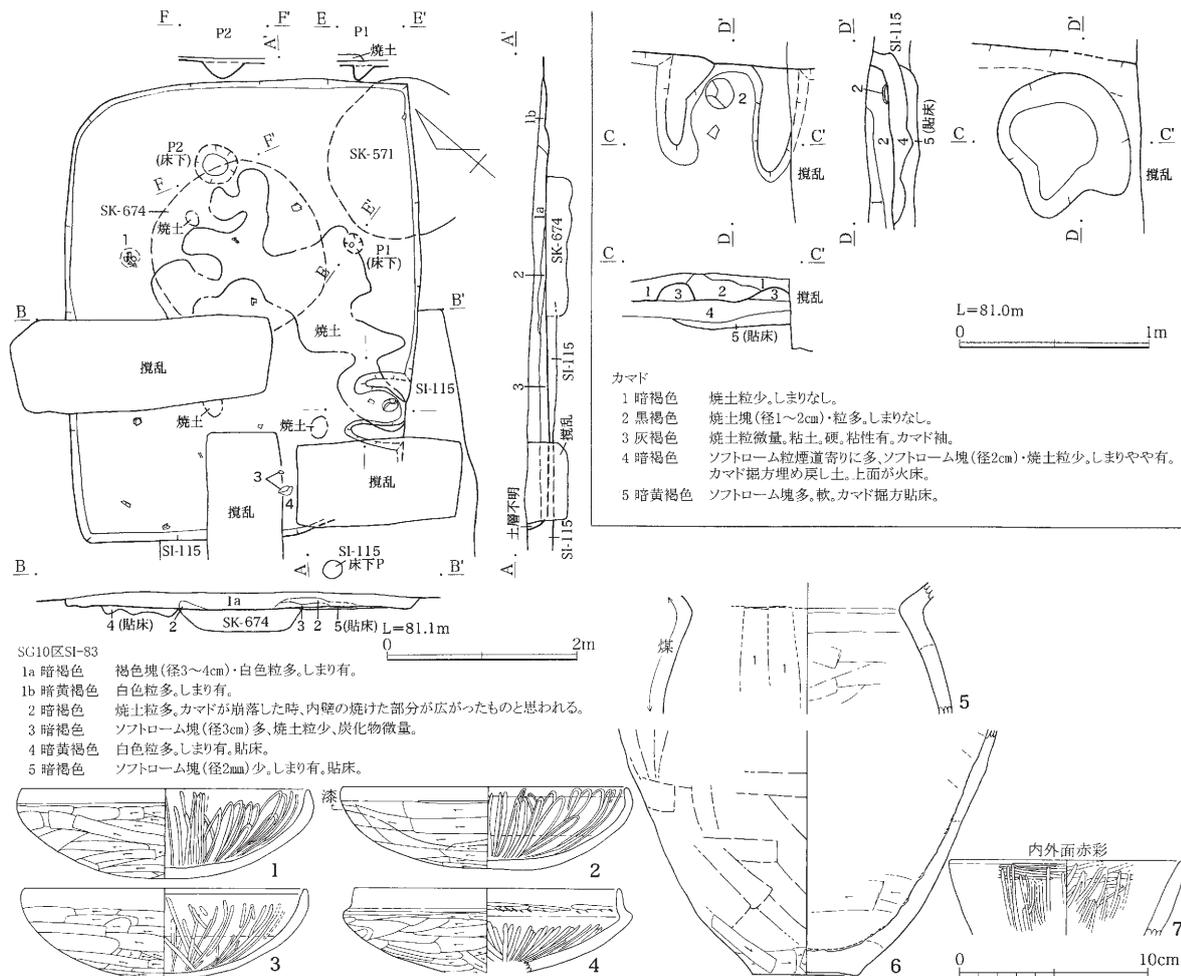
第124図 権現山遺跡 SG10区 SI-82 遺構・遺物

SG10 区 SI-83 (第 125 図、写真図版 112・113・205)

[位置] SG10 区北部の 23-19 および 24-19 グリッド。同じく古墳後期の遺構は、南に SI-81 がある。古墳時代(中期?)の SI-115 を床面近くまで切り、古墳中期の円筒形土坑 SK-571・674 の上部を切る。SK-674 と SI-115 の新旧関係は不明である(断面図 A-A')。長方形攪乱坑(近現代の農業関連土坑)に切られる。西隅部で SI-83 より古い倒木痕を切る。

[規模と形状] 北隅がやや丸くなる長方形で、東壁南部にカマドを持つ変わった建物。主軸方位は GN-49°-E。東西 3.76 × 南北 4.91m、残存壁高は 8cm (北隅) ~ 15cm (西隅)。床面で確認できなかった柱穴 P1 と P2 が貼床除去下で認められ、いずれも浅いので主柱穴とはみられない。P1 は直径 20cm × 床面からの深さ 16cm、P2 は直径 41 ~ 43cm × 床面からの深さ 16cm。柱穴の土層断面は記録されていない。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。入口施設と貯蔵穴は南部の長方形攪乱坑に破壊されたことも考えられる(断面図 A-A')。床面はおおよそ平坦であるが、北壁から約 50cm の範囲が一段高い平坦面になる。断面図 A-A' の北端部を地山まで断ち割って調査した結果、この部分に貼床を高く貼ったのではなくて地山を掘り残していることが判明した。

[カマド] 東壁の南部にある。両袖幅は推定 80cm、煙道先端から袖先端まで 62cm。灰褐色粘土(カマド 3 層)を貼床上に貼って袖を作る。火床整地土(カマド 4 層)で煙道先端部のカマド掘方を埋め戻し、完成した煙道は東壁の外へ突出しない。煙道部の火床面に伏せた状態の土師器杯がある(2)。南側にカマドを持つ建物は、SG10 区 SI-72 にある。



第 125 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-83 遺構・遺物

[覆土] 自然埋没と思われる。覆土1層中の白色粒は古墳時代テフラの可能性もある。カマドから流出したとみられる焼土が中央部から東部の床面に広がっている(2層)。

[遺物出土状況] 遺物は全域で少量ずつ認められた。残存度の高い杯を伏せた状態のものが、床から数cm浮いた状態で、南西部(4)とカマド内(2)にある。遺構間で接合した古墳中期の混入遺物として、SI-81覆土中の小片と接合した赤彩小形壺片(7)や、西側にあるSK-621の須恵器脚付壺と接合した破片がある。

[出土遺物] 遺物は少ない。土師器は杯・甕片が多い。浅い身模倣形杯(4)と深い半球形杯(1~3)が中心で、漆仕上げ(2)はごく少なく、大半の杯破片はミガキ調整である。土師器甕は長胴と見られるが、全形は復元できない(6)。図示以外の土師器合計242片・2,155gの内訳は、杯99片・722g、鉢2片・13g、壺甕類141片・1,420g。古墳中期の混入遺物もあり(7)、先行する時期の重複遺構(SI-115やSK-571・674)や周辺遺構(SI-81など)からの流入品と見られる。北西に隣接する古墳中期の円筒形土坑SK-621および古墳中期土坑SK-553aと同一個体の須恵器脚付壺がSI-83の遺構確認面にも1片あるが、混入品であろう(第180図15)。

第73表 権現山遺跡SG10区SI-83出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復15.0 高 5.8 最大 復15.6	外面は口縁部ヨコナデ、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ、全体に放射状ヘラミガキ。漆仕上げは現状では認められない。	5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明粗~細粒 やや多、白・灰色粗~細粒や やや少 やや硬質	北部床土3cmとカマド周辺および1層の破片が接合 口1/2周 13、A-A'カマド周辺、B-B'1層
2 土師器 杯	口 14.8 高 4.4 最大 15.4 重 218.7	外面は口縁部ヨコナデ、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は中位以上に丁寧なヨコナデ、全体に放射状ヘラミガキ。外面上半と内面全体を漆仕上げ。	10YR5/3 にぶい黄褐 緻密 黒・透明粗~細粒やや 少、灰色粗粒と白細粒少 硬質	カマド火床上6cm ほぼ完形 16
3 土師器 杯	口 復14.8 高 残4.8 最大 復15.2	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は上半部をヨコナデし、口端部に浅い明瞭な段を作る。内面全体を放射状ヘラミガキ。漆仕上げは現状では認められない。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 黒・透明粗~細粒 やや多、灰色粗粒と白・赤細 粒少 やや硬質	南部床直上~床上3cmが接合 口2/3周 6、8、イモ穴、イモ穴2 南半
4 土師器 杯	口 復13.8 高 残4.4 最大 復15.2	外面は口縁部ヨコナデ後に底部1方向と体部横位のヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に体部を放射状ヘラミガキし、そのヘラが口縁部下位に当たった痕跡のある付近をヨコヘラミガキしているが、あまり消去できていない。漆仕上げは現状では認められない。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い、白・黒細粒多、透 明粗~細粒やや多 やや硬質	南部床土8cm 口5/12周 7
5 土師器 小形甕	高 残17.0 頸 復12.1	外面胴部タテヘラケズリ、内面胴部ヨコヘラナデ。外面は剥落が激しく、残った器面には煤が見られる。	5YR5/4 にぶい赤褐 粗い、灰色・透明粗~細粒多、 白礫~細粒と黒細粒少 やや硬質	遺構確認面 頸5/12周 上面
6 土師器 甕	高 残13.0 底 5.5	外底面はほぼ1方向ヘラケズリで凹底状。外面胴部に横~斜位ヘラナデ後、胴下端に横~斜位ヘラケズリ。内面が剥落して調整不詳の部分が多いが、上位で斜位ヘラナデと下位で横~斜位ヘラケズリを確認できる。外面に不規則な煤の付着するところもある。	10YR5/3 にぶい黄褐 粗い、白細粒多、白粗粒と黒・ 透明粗~細粒やや多、赤細粒 少 やや硬質	北西掘乱坑と東半部 胴1/4周、底全周 イモ穴3、北東部分、東 半
7 土師器 小形壺	口 復12.2 高 残4.0	内外面ともに口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、口~頸部タテヘラミガキ。密に磨いて丁寧に仕上げる。内外全面を赤彩する。古墳中期後葉の遺物が混入。[注記]A-A'カマド周辺、SI-81	10R4/4 赤褐 やや緻密 赤粗~細粒多、白 細粒少 やや硬質	カマド周辺。SI-81出土 の小片1点と接合 口1/6周 注記は左欄

SG10区SI-84(第126図、写真図版113・114・205)

[位置] SG10区北部の24-19グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は西にSI-86、南西にSE-552がある。SK-550・551・561などの古墳時代の円筒形土坑が周囲に多い。近世のSD-503に切られる。

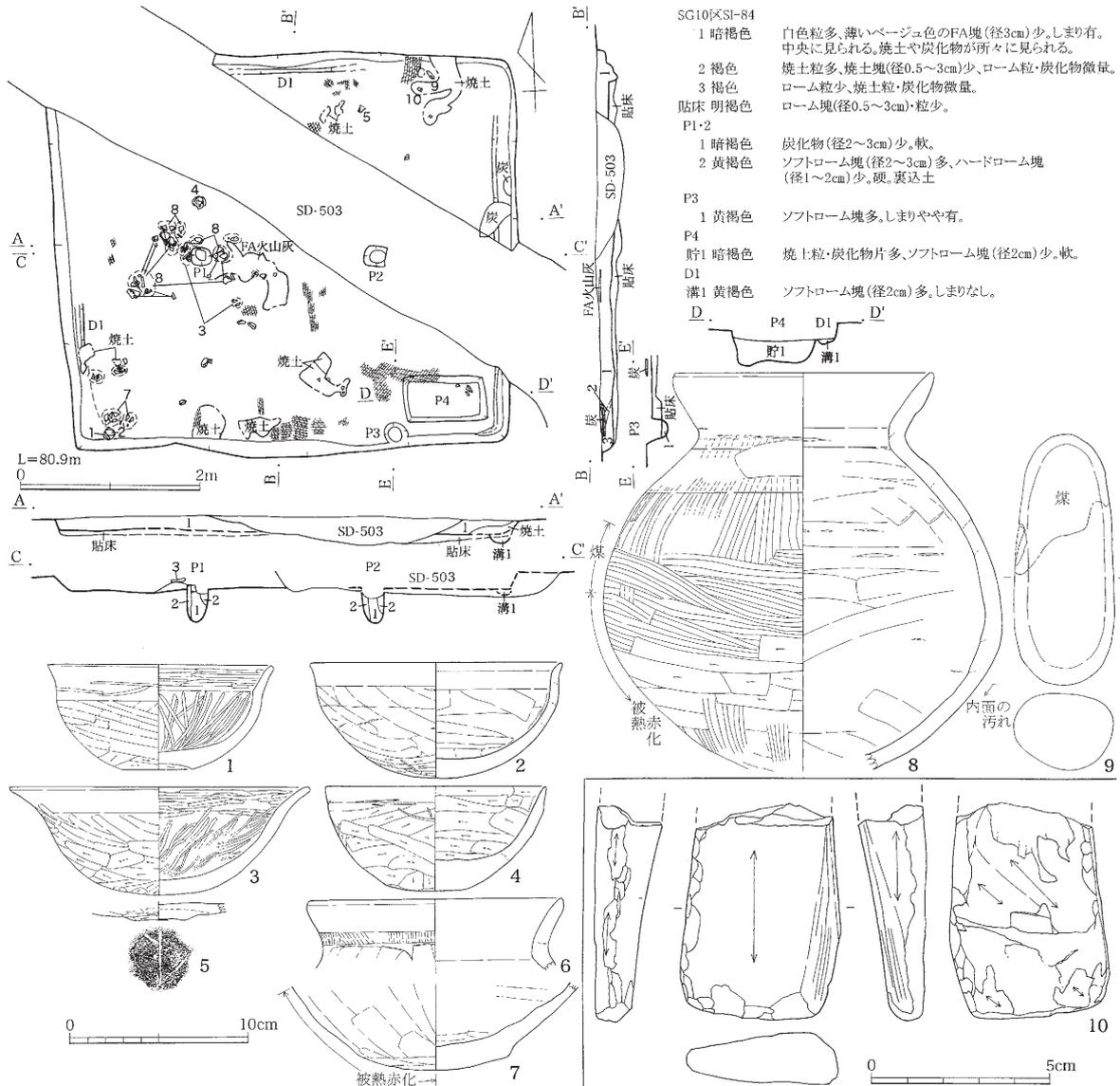
[規模と形状] 長方形の建物跡。南に入口施設を確認したわけではないが、主軸を南北方向と考えた場合の主軸方位はGN-2°-E。主柱穴2本を通る東西ラインはGN-88°-W。東西5.26×南北4.52m、残存壁高は南西部で最大25cm、南東隅部で最小5cm。主柱穴は2本の柱間は東西1.96m。柱痕から推定した柱径は16~18cm、床面レベルからの深さは42cm(西側のP1)~46cm(東側のP2)。床面から深さ9cmの浅い柱穴P3は、南壁に接する部分の土が掘り足らなかったために床面では確認できず、貼床除去後に確認した。同様に床面では確認できなかった貯蔵穴P4は南東隅にあり、東西93×南北52×深さ34cmの整った長方形。壁溝D1は床面では確認できなかったが、貼床を除去した後に、貯蔵穴の東側(断面図D-D')や、北辺・東辺の中央部と南東・南西隅部付近で部分的に確認された。壁溝D1の深さは1~10cm。入口施設は不明で、P3を入口の梯子穴と考えるには壁や貯蔵穴に近すぎるであろう。間仕切溝は見られない。

[火処] 確認されなかった。中央部に炉（あるいは東壁にカマド）を持っていたのが、SD-503に破壊されたと想定することもできる。

[覆土] 炭化材と焼土が覆土中に多く、火災建物と考えられる。SG10区ではSI-66などが火災建物である。覆土は大半が1層で、東・南壁付近が自然埋没状堆積。古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラ塊が1層中にあり、中央部に多くまとまる範囲を断面B-B'と平面に示した。西側のSI-86にもHr-FAテフラが多い。

[遺物出土状況] 中央部の西半に遺物が多い。北東部・南西部にも見られる。中央部では低いレベル、西部ではやや高いレベルの遺物が多い。南西隅付近の床面で、2点重ねた杯が少し傾いて出土した(1・2)。南壁際にある炭化材は、現地の所見によると断面円形か半円形で、柱材が炭化したものと見られている。ただし、取り上げて現存している炭片を見ると、板状の可能性もある。

[出土遺物] 遺物は少ない。残存度が高い遺物(1・3・8)には口が開く内斜口縁杯を含み、図示以外の破片を含めると丸底と平底が同数程度で、古墳中期後葉と考えられる。甕(8)は、炉で使ったような使用痕がある。図示以外の土師器合計72片・654gの内訳は、杯23片・135g、高杯3片・14g、小形壺1片・9g、壺甕類45片・496g。杯と壺甕類が主体で高杯が少ない。砥石(10)は緻密硬質なホルンフェルス製で、SG10区ではSI-12などに事例がある。



第126図 権現山遺跡 SG10区 SI-84 遺構・遺物

第74表 権現山遺跡 SG10区 SI-84 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.6 高 5.9 底 3.5 重 204.3	外底面は円周方向のヘラケズリで凹底状。外面下位ナナムヘラケズリと中位ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデと疎らなヘラミガキ。内面は体部ナデ後に放射状ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面口縁部に不規則な煤が見られ、火災によるものかと考えられる。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗粒と白粗～細粒 やや多、灰色礫と黒・透明 細粒少 やや硬質	南西部床直上に上向きの杯を2枚重ねたうちの下側 ほぼ完形 口5/6周 1
2 土師器 杯	口 13.8 高 6.5 重 239.4	外面体部上位は軽いナデで積み上げ痕を残す。外面体～底部にナナムヘラケズリ、内面体部ナナムヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ。内外面に不規則な煤が薄く見られ、火災によるものかと考えられる。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒と白・赤細粒 多、黒・透明細粒少 やや軟質	南西部床直上に上向きの杯を2枚重ねたうちの上側 完形 2
3 土師器 杯	口 16.8 高 6.0	口～体部境の稜は内面でやや明瞭。外底面は多方向ヘラケズリで丸底状。外面下位ヨコヘラケズリと中位ナナムヘラケズリ、口縁部にやや雑なヨコナデ。内面は体部ナデ後にナナムヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面に煤や被熱痕が見られ、火災によるものかと考えられる。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒多、灰色 ・透明粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	南西部床土 12cmと中央部床土 7cmが接合 口 1/2周、頸 5/6周 13、19
4 土師器 杯	口 12.1 高 5.8 底 4.3	やや重い。外底面は雑な多方向ヘラケズリで、やや丸味を持つ平底状。外面体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ、外面上位に横～斜方向のヘラケズリ、ヘラ先で横～斜位の浅い沈線を全周に入れる。内面はヨコヘラケズリ。内外面に少しづつ煤が付着する。	2.5Y4/1 黄灰 やや緻密 白・赤・透明細粒 多、白・赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	北西部床土 4cm 口 11/12周、底 1/2周 21、北西区、SD-503
5 土師器 小形壺	高 残 0.9 底 3.2	外底面が少し突出して木葉痕がやや薄く付くので、葉の裏面を使った可能性がある。外面体部ヨコヘラケズリ、内面体～底部は丁寧な多方向ヘラケズリ。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 透明細粒多、白・黒・赤粗～細粒少 やや硬質	北部床土 13cm 底全周 39
6 土師器 小形甕	口 復 14.2 高 残 3.3	外面は頸部タテハケ後に口縁部ヨコナデ、肩部タテヘラケズリ。内面は頸～肩部を少し雑にナデた後に口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・透明粗～細粒 やや少、白礫と赤粗～細粒少 やや軟質	上層 口 1/4周 上層
7 土師器 甕	高 残 4.9 底 8.1	外底面は少し突出する凸面状で多方向ヘラケズリ、胴外面ナナムヘラケズリ。内面は底部に1方向または多方向と胴部に横位のヘラケズリ。外面が被熱して脆弱化している。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白粗～細粒と黒・透明細粒多、白礫と灰色粗粒 少 やや軟質	南西部床土 14～15cm が接合 底 1/2周 3、5
8 土師器 甕	口 14.4 高 残 22.2 最大 22.1	外面胴下位は雑なヨコヘラケズリ後にタテハケ。胴上位タテハケ後に中位ヨコハケ、胴下位ヨコヘラケズリ、口～肩部ヨコナデ。ハケは5～6本/2cmで粗い。内面は胴部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。外面胴下位に被熱痕と胴中位に煤がやや目立ち、胴下位へ不規則に付く煤もある。内面下位にコゲ痕が付く。 [注記]14、16、18、22～24、26～30、41～44、56、1層	2.5Y7/2 灰黄 やや粗い 灰色礫と白・灰色粗～細粒やや多、赤・黒・透明細粒少 やや硬質	中央部床土 7cmと西部床土 1～13cmが接合 口 5/6周、胴はほぼ完存 注記は左欄
9 礫	長 14.0 幅 5.5 厚 4.3	断面が楕円形の細長い自然礫をそのまま利用。一端の1/3位の範囲に煤が付着する。図の左側縁部に小剥離破損が1箇所見られ、煤付着後に生じている。残存重量 512.9g。	2.5Y6/3 にぶい黄 緻密で硬質な安山岩	北東部床直上 ほぼ完形 38
10 石器 砥石	長 残 6.0 幅 4.2 厚 残 1.5 重 残 55.3	表裏と両側縁の計4面を砥面として使い、平滑に磨耗している。緻密なので研磨痕は不詳。裏面の右寄りだけは研磨時に細い平行線状の傷を明確に生じている。各砥面の外周部や裏面の主に下半部は、砥面に使う以前の割れ面や剥離面が残っている。	5Y6/2 灰オリーブ 緻密で硬質な泥岩起源のホルンフェルス	北東部床土 8cm 破片 37

SG10区 SI-85 (第127・128図、写真図版114)

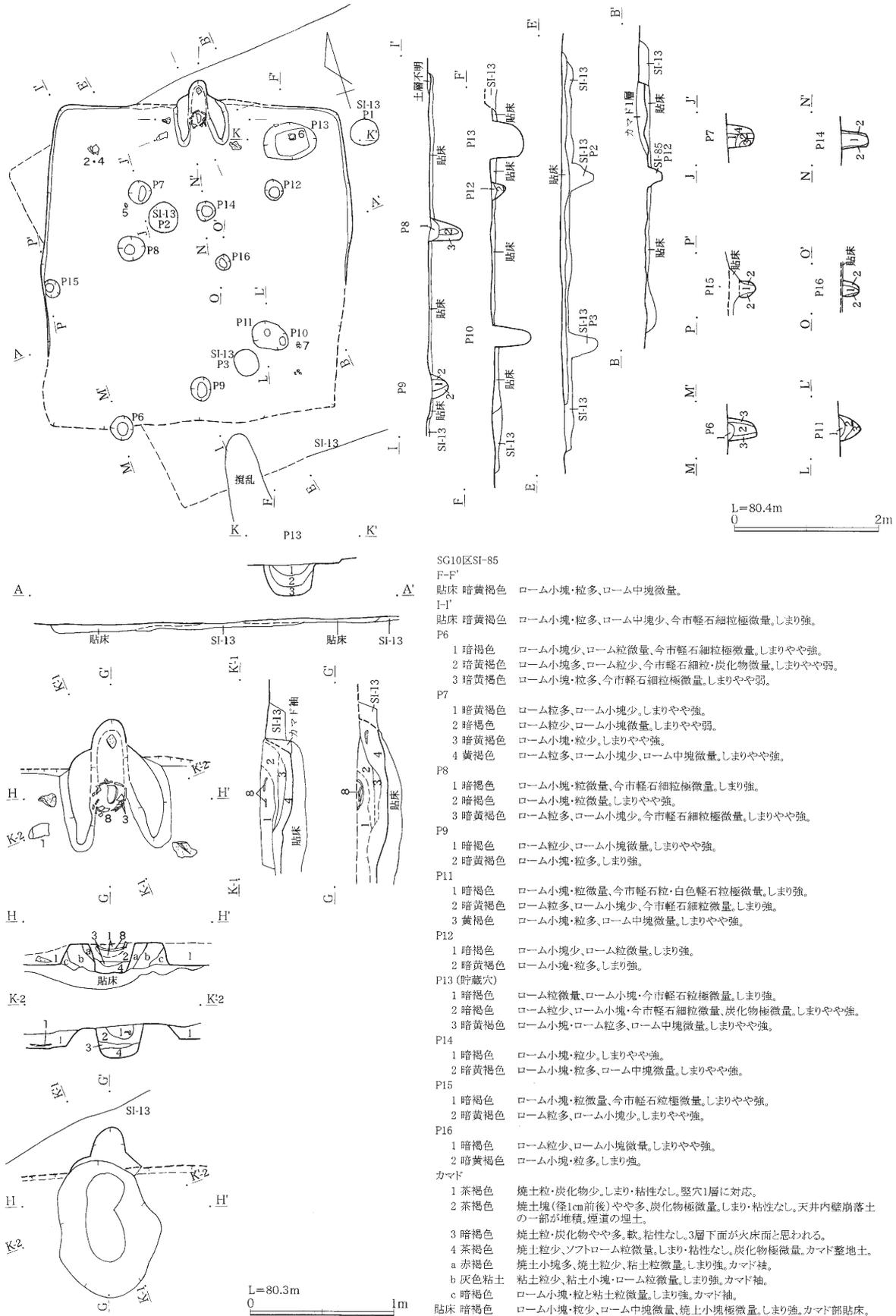
[位置] SG10区南部の台地平坦面、17-16グリッド所在。同じく古墳後期の建物はSI-14が北にあり、東に後期のSI-6と近世のSD-201a・201bがある。古墳中期のSI-13を切る。古墳中期の建物は北にSI-19a・19bがある。

[規模と形状] ほぼ方形で、中軸線はN-18°-E。東西4.29×南北4.52m。残存壁高は0.04～0.05mで、南壁以外はかろうじて壁が確認できた。壁が失われた南壁部分も掘方の存在から規模・形状がわかる。カマドの東西両側部分では、先行するSI-13覆土中に掘り込まれたSI-85の北壁をうまく確認できなかった。

柱穴の内、西部と中央部のP15・P16はSI-85の貼床を除去した後に確認したもので、埋め戻した古い柱穴か、またはSI-85よりも古い遺構の可能性もある。P15の周囲で掘方底面が深くなることは、P15がSI-85に伴うことを示しているのかもしれない(断面図P-P')。床面レベルからの深さはP15が37cm、P16が28cm。

P15とP16以外の柱穴8本は、SI-85の床面で確認したもので(P6～P12とP14)、SI-85よりも新しい穴を含むかもしれない。深さに違いがあり配置もそろわないので、SI-85の主柱穴を明確に指摘することは難しい。P7・P10・P12の3本は、柱間寸法が2.1mで一定し、建物主軸ともそろっている。しかし、これらに対応する南西主柱穴が確認できず、P12はかなり浅い。P10とP11は柱を建て替えているのかもしれないが、そう考えるにはP11がやや浅いようである。P9が入口ピットと思われる。床面から柱穴底までの深さはP6=41cm、P7=37cm、P8=43cm、P9=24cm、P10=48cm、P11=30cm、P12=18cm、P14=36cm。なお、P1からP5までが欠番の理由は、重複するSI-13の柱穴と現地調査時に区別するための措置である。

北東にある貯蔵穴P13は東西73×南北52×床面から深さ43cm(西側から深さ40cm、東側から



第 127 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-85 (1) 遺構

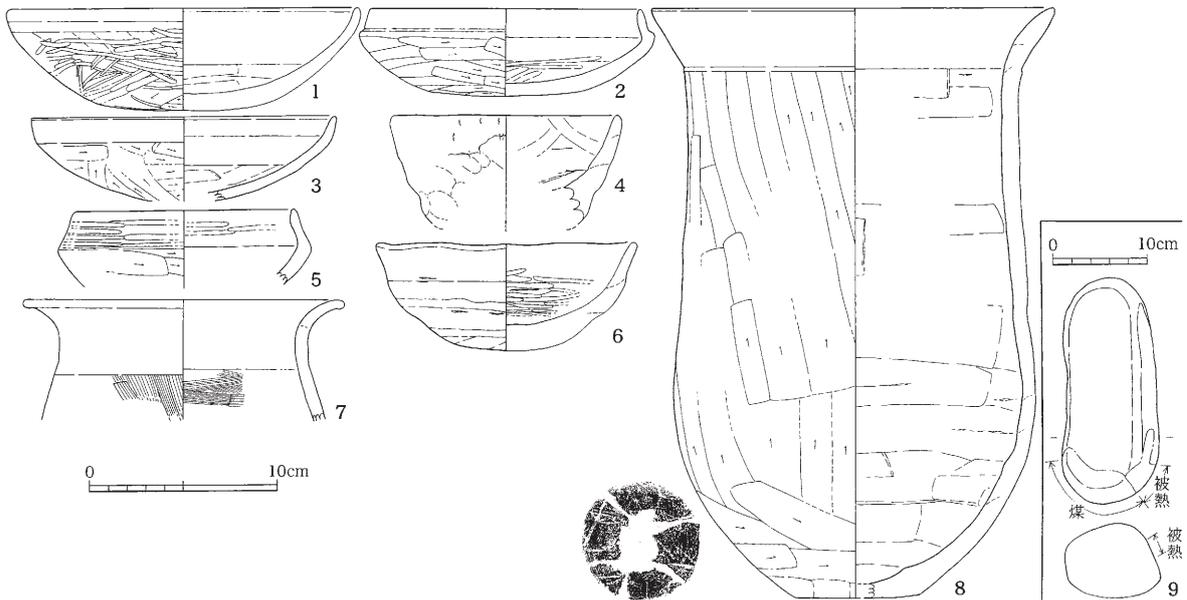
46cm)の楕円形で、覆土は自然埋没状に堆積する。竪穴の掘方底面には細かな凹凸があり、ロームの塊と粒が主体の土層で残存部全体を貼床する。

[カマド] 北壁にカマドを持つ。両袖幅76cm、焚口から煙道までの長さは約86cm。燃焼部内堆積土の最下層(カマド4層)は、焼土の混入量がやや少ない。この点から、燃焼部内を人為的に埋めて火床面を高くした層で、カマド火床面の整地土層だと現地調査時に判断されている。しかし、煙道部分やカマド両袖との連続性からみると、当初の火床面はカマド4層下面であった可能性が高い。カマド4層が整地土ならば、最初の火床面に4層を加えて、火床面と煙道底面を高く改造したと解釈できる。カマド燃焼部の最上層に土師器長胴甕(8)があり、カマドに掛けた甕であろう。カマド構築材の可能性のある被熱した石(9)は、「SI-13カマド」の注記があるので、SI-13とSI-85の表土除去時にカマド付近で出土したと考えられる(SI-13にはカマドがない)。

[覆土] カマド部分は覆土が比較的残っているが、それ以外の大半は貼床土しか残っていない。貯蔵穴P13は自然埋没状である(K-K')。

[遺物出土状況] 主に北半部と南東部で出土した。北東部では貯蔵穴上面に粗製の杯の破片(6)があり、カマド内に土師器甕(8)と杯(3)がある。これ以外の遺物は、覆土の残りが浅いので、床面近くで出土した。カマド西側に杯(1)、北西部に杯と小形土器(2・4)がある。

[出土遺物] 覆土があまり残っていないので、遺物も少ない。杯と甕がほとんどで、粗製土器も2点ある(4・6)。1は白雲母細片を少量だけ含み、茨城県産の可能性もある。雲母を含む土師器はSG10区SI-12などにある。古墳後期末に多いハケ調整甕はふつう粗いハケを使うが、7は細かいハケを使う。8は木葉底。図示以外の土師器合計72片・549gの内訳は、杯34片・138g、高杯5片・42g、鉢1片・27g、小形壺2片・20g、壺甕類30片・322g。SI-13や周辺遺構から混入したと考えられる古墳中期の土師器もある(5・6)。



第128図 権現山遺跡SG10区SI-85(2)遺物

第75表 権現山遺跡SG10区SI-85出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復17.8 高 5.4	外面は体部ナデ後に底部多方向ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、体部横～斜位ヘラミガキ。内面は体～底部ナデと上半部ヨコナデ。内外全面が黒色気味の部分が多く、更に内面は漆仕上げ(?)の可能性もあるが不明確。雲母の量は少ない。	2.5Y5/3 黄褐 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや多、灰色粗粒と黒細粒と 白雲母細片少 軟質	カマド西側床上2cm 口1/3周 1カマド
2 土師器 杯	口 復14.0 高 4.6 最大 復15.3	外面は口縁部ヨコナデ後、体～底部ヨコヘラケズリ。内面は口～体部上半ヨコナデ、下位～底部多方向ナデ。現状で漆仕上げは認められない。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・黒・赤・透明細粒 極少 やや軟質	北西部床上2cm。北部床 上5cmにも1片あり 口1/3周 14、18、床下一括、 A-A'北1層

第5章 権現山遺跡 SG10 区

3 土師器 杯	口 復 16.0 高 残 4.5	やや薄く軽い。外面は口縁部ヨコナデ後、体部下位に多方向と上位に横方向のヘラケズリ。内面は体部多方向ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。現状で漆仕上げは認められない。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・透明粗粒と白・黒 細粒少 やや軟質	カマド火床上 12cmで甕 破片と一緒 口 1/6 周 4 カマド
4 土師器 小形土器	口 復 11.6 高 残 5.8 最大 復 12.2	外面は雑なクビオサエとナデで、成形時の積み上げ痕とヒビを明確に残す。内面はナメナデで、やはり積み上げ痕を下位に残す。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 透明細粒少 やや硬質	北西部床上 2cm 口 1/8 周 18
5 土師器 杯	口 復 11.6 高 残 4.0 最大 復 13.2	外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後に口縁部中位をヨコヘラミガキ。外面全体に煤付着。古墳中期末の遺物が混入。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 白・黒細粒やや多、 赤・黒細粒少 やや硬質	北西部床直上 口 1/12 周、体 1/6 周 17
6 土師器 杯	口 復 13.7 高 5.8	厚く重い。外面体部ナデ、内外面口縁部ヨコナデ、内面体部ヨコヘラミガキ。口縁部のヨコナデが雑なので、口があまり水平でない。古墳中期末の遺物が混入。	10YR5/2 灰黄褐 やや緻密 赤粗粒と白・赤・ 透明細粒やや多 やや軟質	北東部貯蔵穴底上 21cm 口 1/4 周、底 1/3 周 13
7 土師器 甕	口 復 16.8 高 残 6.4	残存部が少ないので復原径は参考程度。外面は胴部に 16 本 /2cmの細かい縦～斜位ハケ調整後、口～頸部にヨコナデ。内面は胴部に同様の細かいヨコハケ後、口～頸部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 緻密 白・透明細粒やや少、 赤・黒細粒少 硬質	南東部床直上 口 1/12 周 19
8 土師器 甕	口 21.0 高 31.3 底 6.3	外底面は木葉痕で、葉の裏面圧痕の可能性あり。外面は胴部タテヘラケズリ後に下位を斜～横位ヘラケズリと下端ヨコヘラナデ。内面はヨコヘラナデで、胴下位の積み上げ休止部にはやや強いヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面胴部に広く煤が付着し、下半部に目立つ。被熱痕は不詳で、狭い外底面には煤がない。	2.5Y6/2 灰黄 粗い 白・赤・灰色礫～細粒 多、黒・透明細粒やや多 軟質	カマド火床 12cm 口 1/3 周、底 3/4 周 4 カマド、SI-13 カマド
9 自然石	長 23.8 幅 10.1 厚 8.1	断面が楕円形の自然の河原石。全面がやや平滑だが、特定の面を砥面等に使ったといえるような痕はない。一端部が被熱赤化して煤も見られる。重量 2895.3g。	2.5Y6/1 黄灰 やや緻密で硬質な安山岩	カマド 完形 SI-13 カマド

SG10 区 SI-86 (第 129・130 図、写真図版 114・115・205・206)

〔位置〕 SG10 区北部の台地平坦面、24-19 グリッド所在。古墳中期の建物は南に SI-80・82、東に SI-84、南東に SE-552 がある。SK-550・621 などの円筒形土坑が周囲に多い。時期不明の SK-564 に東部を床面まで少し達するように切られ、近世の SD-503 に北西部を切られる。北壁中央部を浅い攪乱に壊されている。

〔規模と形状〕 長方形の建物跡。東西 4.94 × 南北 3.60m、壁の残存高は最小 17cm (北西部)、最大 27cm (南東部)。入口部を通る南北ラインの主軸方位は GN-13° -W。東西の柱穴軸線 (GN-44° -E) は、竪穴長軸 (GN-47° -E) よりも少し西に振れている。主柱穴は 2 本で、東柱穴 P2 (床面から深さ 48cm) が西柱穴 P1 (83cm) よりもかなり浅い。柱間 2.10m、柱穴底面の径からみて柱径は 16 ～ 18cm 程。入口施設の可能性がある P4 は径 18 × 25cm、床面からの深さ 16cm。

貯蔵穴 P3 は南側中央から少し東に寄り、東西 69 × 南北 72 × 深さ 38cm。南西部の P5 と南東部の P6 は貼床除去後に確認した旧期貯蔵穴。P5 は径 39 × 47cm、床面からの深さ 19cm。P6 は径 38 ～ 42cm、床面からの深さ 19cm で、埋め戻した上に炉 2 が載っている。P6 の埋土中には炉の焼土が入らない。複数貯蔵穴を持つ建物は、SG10 区では SI-6 などがある。間仕切溝は D1 ～ D5 の 5 本で、すべて貼床を除去した後に確認した。D3 の上を貼床で埋めた状況が断面 B-B' でわかる。ただし D3 埋土の特徴は記録不備により不明である。北側 2 本 (D1 と D2) は幅 17 × 深さ 3 ～ 8cm、西側の D3 は幅 9 ～ 14 × 深さ 12cm、南側の D4 は幅 9 ～ 14 × 深さ 10cm、東側の D5 は幅 12 ～ 16 × 深さ 16cm。D5 を埋めた後に炉 1 が作られている (断面図 G-G')。壁溝はない。

〔炉〕 南東部に 2 箇所ある。北側の炉 1 は東西に長い (71 × 28cm、床面から深さ 4 ～ 11cm)。南側の炉 2 (東西約 40 × 南北 62cm × 床面から深さ 2 ～ 3cm) は、明確な下端ラインを持たない浅い凹みにおいて火を焚いた状態で、周囲の床面に焼土が広がる。旧期貯蔵穴 P6 を埋め戻した上に炉 2 が載る。複数の炉を持つ建物は権現山遺跡北部の SG1 区 SI-1 などにある。

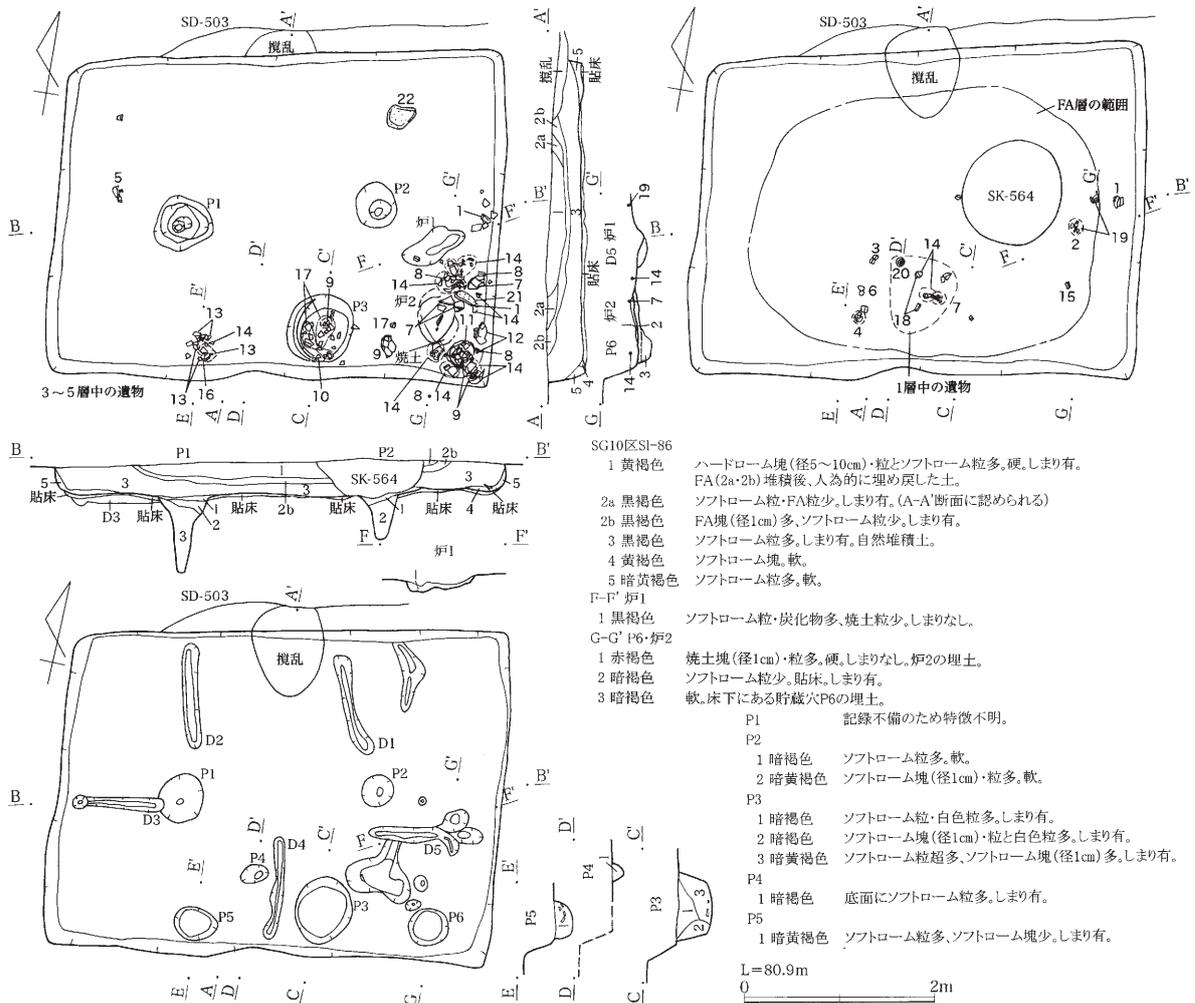
〔覆土〕 下部は自然埋没で、古墳後期初めに降下した Hr-FA が覆土上部の 2b 層に入る。調査時の所見によると、1 層は人為的に埋め戻されていた。遺構確認プランでは、円形に Hr-FA 層があり、その内側 (上層) がローム質土で人為的に埋められて、後に時期不明の土坑 SK-564 が掘られている。東側にある SI-84 にも Hr-FA テフラが多い。

〔遺物出土状況〕 Hr-FA 層の上 (18・20) と、FA 層中 (19) にも遺物が少量ある。FA より下層の遺物は貯蔵穴 P3 と南東隅に多い。南東隅部床面の遺物は、P6 を埋め戻した床面とその上方にある。杯・鉢・高杯 (1・7・8) と壺 (9・11) と甕 (12・14・17) と砥石 (21) が南東部にあり、甕 (17) の破片は貯蔵穴 P3 内にもある。7 と 14 に接合する破片は上層にも少し分布している。埋め戻された旧期貯蔵穴 P5 中には甕 (13・

16)、北東部の床面に大きな自然石(22)がある。

[出土遺物] 遺物は比較的多い。土師器壺甕類と杯が多く、高杯は少ない。これ以外の器種は見られない。覆土中のHr-FA層より上層の遺物は古墳中期末ころ、下層の遺物は中期後葉頃に相当する。

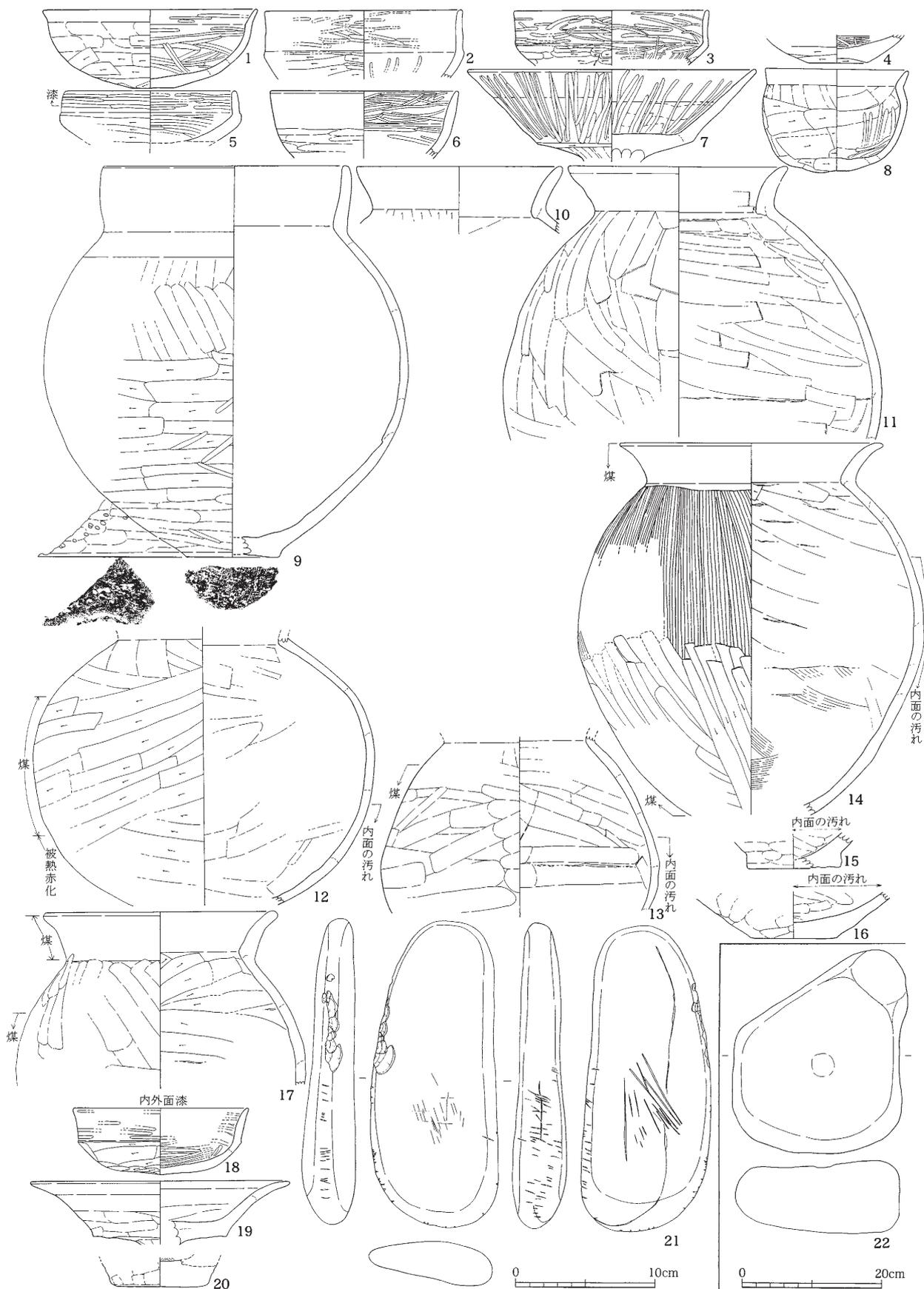
口が外へ広く開く杯(1・6)と古式の模倣杯(2・3・5とFA上層の18)が多い。18は早い時期の漆仕上げ杯。8は深い鉢状。外面のヨコナデ範囲が広い高杯(19)の例は、SG10区SI-50の遺物No.36にもある。土師器甕類は炉で使った痕跡が明瞭である。縄圧痕のある土師器甕(9)の事例はSG10区SI-47などにある。12は壺の器形だが、甕のように煮炊きした痕跡がある。図示以外の土師器合計169片・1,381gの内訳は、杯43片・314g、高杯3片・26g、壺甕類123片・1,041g。は、SG10区SI-12などにある。ホルンフェルス製の砥石(21)はSG10区ではSI-12などにある。22は自然石。



第129図 権現山遺跡SG10区SI-86(1)遺構

第76表 権現山遺跡SG10区SI-86出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 15.2 高 5.6 底 2.9 重 残 258.0	口~体部境の稜が内面で明瞭。外面は上半部ナデ後に下半部ヨコヘラケズリ、底面1方向ヘラケズリ。内面体部ヘラナデ後に内外面口縁部ヨコナデ、内面全体に横~斜位のヘラミガキ。 [注記]46、52、55、74、79	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・灰色粗~細粒多、赤粗粒 と黒・透明細粒少 硬質	南東部床上1~2cmと東部床直上が接合 ほぼ完形 口5/6周、 底全周 注記は左欄



第130図 権現山遺跡 SG10 区 SI-86 (2) 遺物

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

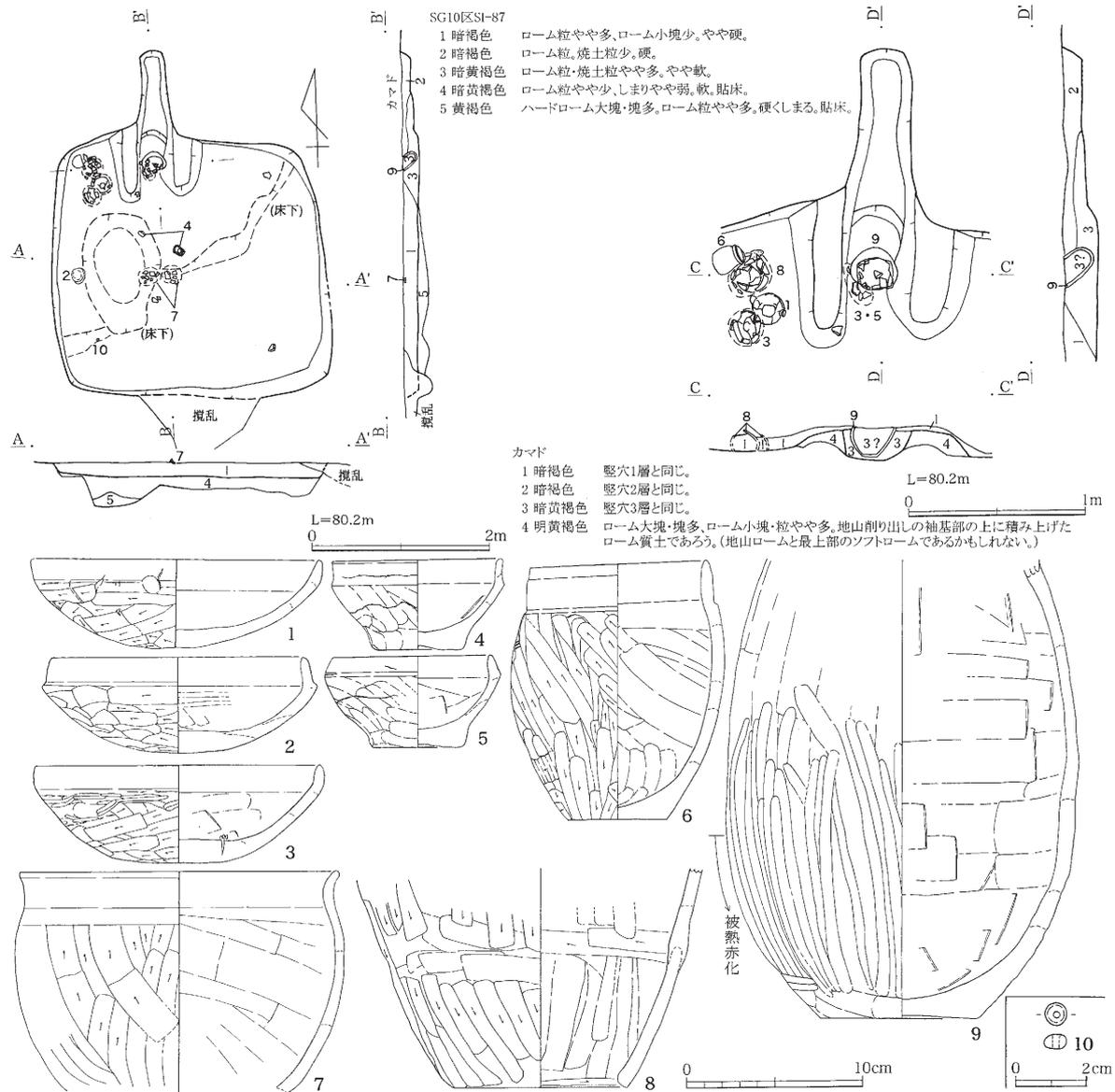
2 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.9 最大 復 14.2	大きさに比べて薄い。外面体部ヨコヘラケズリ後に体部上端付近をヨコヘラミガキ、内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部ヨコヘラミガキ後に疎らなタテヘラミガキ。確実な漆仕上げは見られないが、口縁上端に暗褐色の部分が見えるのでその可能性もある。	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 赤粗粒やや少、白細粒少 やや硬質	東部床土 24cm 口 1/6 周 9
3 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.0 最大 復 13.7	外面体部ヨコヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、内面体部はナデと横位の後に縦位のヘラミガキ。確実な漆仕上げは見られないが、外面の口縁部上半に暗褐色の部分が見えるのでその可能性もある。	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 白・黒・透明細粒少 硬質	南部床土 19cm 口 1/4 周 15
4 土師器 杯	高 残 2.0 底 4.4	外底面は円周方向のヘラケズリで凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は底部におおよそ1方向と体部に横位の密なヘラミガキ。	2.5YR6/6 橙 緻密 白・赤粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南部床土 27cm 底全周 12
5 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 3.6 最大 復 12.8	外面体部ヨコヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部もヨコヘラミガキ。外面口縁部上半に漆仕上げらしい暗褐色物がある。内面も漆仕上げしていた可能性があるが、体部にはあまり残っていない。 [注記]16、21、北西区3、B-B'ベルト面	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒やや少、黒・透明細粒少 やや硬質	西部床土 18～22cmが 接合 口 1/2 周 注記は左欄
6 土師器 杯	口 復 13.4 高 残 4.8	口～体部境の内面に弱い稜あり。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラナデ。内面は密なヨコヘラミガキ。	2.5YR4/8 赤褐 緻密 白礫・細粒と赤粗～細粒少 硬質	南部床土 24cm 口 1/6 周、口～体 1/6 周 14
7 土師器 高杯	口 20.4 高 残 6.6	外面は杯底面を外方へ向かって放射状にヘラナデした後、底外周ヨコヘラケズリ。外面杯体部ナデと口縁部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は底部多方向ヘラナデ、体部ヨコヘラナデ(または浅いヨコハケ?)の後に体部タテヘラミガキ。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒多、白礫と赤・黒・灰色粗～細粒少 硬質	南東部床土 1～19cmが 接合 口 11/12 周、杯底全周 11、29、34、35、42
8 土師器 鉢	口 10.0 高 7.3 底 2.4 最大 10.3 重 残 171.2	外底面は小さい平底で軽いヘラナデ。外面肩部タテナデ後に口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面体部に横～斜位ヘラナデ後、やや雑な縦～斜位ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 白・黒細粒少 やや硬質	南東部床直上～床土 10 cmが接合 口 5/6 周、底全周 33、40、47、60、72、 76、78、南東区3
9 土師器 壺	口 復 17.2 高 28.0 底 復 7.0 最大 復 25.8	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面胴下位はナデとヘラナデ後に纏圧痕あり。胴上半タテヘラナデ後に中位をヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面胴部はヨコヘラナデと思われるが大半が剥落して不詳。被熱使用痕はない。 [注記]37、48、62～66、69～71、73、84、南東区東壁4層	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と黒細粒多、白・赤礫少 やや硬質	南東部床直上～14.7cm と貯蔵穴底土 1cmが接合 口 1/3 周、口～頸 1/3 周、底 1/2 周 注記は左欄
10 土師器 壺	口 復 14.3 高 残 4.8	外面は肩部タテヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。内面は肩部ナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白粗～細粒と黒・透明細粒やや少、赤細粒少 軟質	貯蔵穴底土 17cm 口 1/8 周、頸 1/5 周 91
11 土師器 壺	口 15.6 高 残 19.6 最大 26.8	外面は胴部タテヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。内面は胴部タテヘラナデ、口～頸部ヨコヘラナデ後ヨコナデ。頸部が厚い。内面中位に積み上げ休止痕あり。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・灰色・透明粗～細粒やや多、白・灰色礫と赤細粒少 硬質	南東部床直上 口全周、肩全周、口～ 胴部中位はぼび完存 68、南東区東壁4層
12 土師器 甕	高 残 19.2 最大 24.2	外面は肩部ナメヘラナデ後に中位以下を横～斜位ヘラケズリ。内面は横～斜位ヘラナデで、剥落して不明な部分が多い。外面中位に煤が少量あり、下位が被熱している可能性あり。内面下位に暗褐色の汚れあり。	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白粗～細粒多、赤礫～粗粒と灰色・透明細粒少 やや硬質	南東部床土 10cmと P3 東半分が接合 胴上半～下半 1/3 周 58、60、入口 P 東半分
13 土師器 甕	高 残 12.6 最大 復 19.6	外面は胴部ヨコヘラナデと肩部タテヘラナデ。内面は肩部に斜位と胴部に横位のヘラナデ。外面胴部に煤が多く、内面中位以下に暗褐色の汚れあり。 [注記]100、103、104、106、108、110、112、113、117～120、P5 東半分、南西区3層、南東区3	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・透明細粒多、白礫～粗粒少 やや硬質	P5 底面～底土 11cmが 接合 胴 2/3 周 注記は左欄
14 土師器 甕	口 復 18.6 高 残 26.6 最大 復 24.4	外面胴部上位タテナデ後に下位ナメヘラケズリ。内面胴部下位ナメヘラナデ、上～中位ナメヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面の残存部全体に煤多量付着。内面中位以下に暗褐色の汚れが付着する。 [注記]4、6、23、25～28、30～33、40、44、49～51、53、61、63、64、67～69、76、78、80、116、P5 西半分、炉跡、北東区、南東区3層、南東区東壁4層、南東区東ベルト4層、A-A'ベルト3層、B-B'ベルト3層	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白粗～細粒と透明細粒多、黒粗～細粒やや多 やや軟質	南部床土～床土 5cmと南 東部床土～床土 15cmが 接合 口 1/3 周、頸 2/3 周 注記は左欄
15 土師器 甕	高 残 2.5 底 復 6.6	突出する平底で、外底面は弱くヘラケズリする。外面胴下端ナデ、内面ナメヘラナデ。内面に黒褐色のコゲ状の汚れが付着する。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 白・灰色・透明粗～細粒少 やや硬質	南東部床土 25cm 胴下端～底部 1/3 周 10
16 土師器 甕	口 残 15.7 高 残 3.4 底 復 6.0	外底面は丁寧なヘラナデで平底。外面胴部はナメヘラナデ、内面底部は横～斜位ヘラナデ。内面に黒褐色のコゲ状の汚れが付着する。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗粒と白・透明粗～細粒と黒細粒少 硬質	P5 底土 4cm 底 1/2 周 111
17 土師器 甕	口 復 16.6 高 残 12.5 最大 残 20.5	胴部は外面ナメヘラナデ、内面ナメヘラケズリ。口縁部内外面ヨコナデ。外面胴中位と口縁部に煤付着。 [注記]20、32、82、84、89、92～96、98、99	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明細粒多、白・黒・赤・透明粗粒少 やや軟質	南東部床土 1～11cmと 貯蔵穴底土 3～6cmが 接合 口 3/4 周、頸 2/3 周 注記は左欄
18 土師器 杯	口 12.4 高 4.8	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に斜～横位の密なヘラミガキ。内外面全体に漆仕上げ。FA降下後の混入品。	10YR5/6 赤 やや緻密 赤粗～細粒やや少、白・黒細粒少 やや硬質	南部 FA 上面～FA 上 19 cmが接合 口 1/2 周、体 3/4 周 5、6、11、南東区
19 土師器 高杯	口 復 18.4 高 残 4.6	外面は杯底部タテナデ後に外周ヨコナデ、杯体部ヨコナデ。内面杯体部を斜～横位ナデ後に内外面口縁部ヨコナデ。FA降下後の混入品。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤礫～粗粒と白・透明細粒少 硬質	東部床土 20～24cm (FA 層中) 口 1/6 周、杯底 1/3 周 8、9、南東区 FA 中
20 土師器 鉢	高 残 1.8 底 6.4 最大 残 8.2	外底面は多方向ヘラケズリで緩い凸面状。外面体部下端に雑なナデ。内底面は丁寧な多方向ヘラミガキ。FA降下後の混入品。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒と黒・透明細粒少 硬質	中央部 FA 層上面 底全周 7
21 石器 砥石	長 21.8 幅 9.1 厚 4.0 重 1035.6	扁平な自然礫をそのまま利用。両面と外周側縁に傷および擦痕を生じ、また両面と長側縁のうち1方が砥面に使った結果として平滑になっている。平滑化していないほうの長側縁には、主に片面側からの打撃で剥離を生じているので、敲打に用いたと考えられる。	5Y7/2 灰白 非常に緻密で硬質なホルンフェルス	南東部床土 2cm 45
22 自然石	長 27.8 幅 24.1 厚 10.7 重 11.7kg	断面が隅丸長方形で大形不整形の自然石。台石として使用したことが考えられる。図示した面の中央部が小さい範囲で浅く凹む。使用・被熱痕や付着物は認められない。自然石なので実測図だけを作成し、現物は収納・保存しない。	5GY6/1 オリーブ灰 緻密・硬質で表面の珪晶が脱落した凹凸がやや見られる流紋岩	北東部床直上 完形 24

SG10 区 SI-87 (第 131 図、写真図版 115・116・206)

[位置] SG10 区南端の 16-18 グリッドにある。同じく古墳後期の建物は、北西に SI-6 がある。重複する遺構はない。東壁中央に浅い大きな攪乱、南壁に土坑状攪乱がある (断面図 A-A' と B-B')。

[規模と形状] 煙道が長い、小さな建物である。方形で、主軸方位は GN-1°-W、南北 3.15m (煙道を含めると 3.99m) × 東西 3.32m。残存壁高は 14 ~ 17cm で、北東隅で最も高い。床下を最大約 30cm の深さまで掘って、ローム混じりの貼床土で埋め戻している (断面図 A-A')。柱穴・入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。

[カマド] 北壁中央の西寄りにある。両袖幅 84cm、煙道先端から袖先端まで 168cm。長くて傾斜が少ない煙道を持つ。煙道の南端から北端までの長さ約 90cm に対して、煙道底面の高低差は 2 ~ 3cm しかない。カマドには粘土層などが残っていない。カマド袖は地山ローム層を掘り残して、上にローム質土を積んだと考えられる。ただし、このカマド 4 層は地山ソフトロームの可能性もある。燃烧部に掛けた甕 (9) が、南へ傾いた状態で残る。火床面には、カマド北側の杯 (3) に接合する小破片 2 点と、残存度の高い小形粗製杯 1 点 (5) がある。



第 131 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-87 遺構・遺物

第77表 権現山遺跡 SG10区 SI-87 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 16.1 高 5.2 最大 16.5 重 331.8	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリで、体部上位に粘土積み上げ痕を残す。内面体部をおそらくヘラナデ後に内外面口縁部ヨコナデ。漆仕上げは見られない。	5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒やや少、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北西部床上 3cm ほぼ完形 口 11/12 周 13
2 土師器 杯	口 14.2 高 5.5 最大 15.4 重 残 297.2	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は体部ヘラナデ後に少しヘラミガキをしているかもしれないが不確実。体部下位にだけ白色の胎土を使うので、組織の痕跡が明瞭にわかる。漆仕上げは見られない。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤礫～粗粒多、 白・黒・透明細粒少 やや軟質	西部床上 13cm ほぼ完形 口 11/12 周 1
3 土師器 杯	口 15.9 高 5.5 最大 16.4 重 337.6	外面は底部に多方向と体部下半に横位のヘラケズリ、体部上半ナデ後に粘土積み上げ痕を消そうとするためのヨコヘラミガキ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部下位に焼成前の亀裂が生じた部分をヘラミガキで補修しているが、焼成後は幅 1.5mmの亀裂になってしまっている(断面図参照)。漆仕上げは見られない。	5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒やや少、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北西部床上 3cm。カマド 火床直上の小破片 2点 が接合 ほぼ完形 口全周 12、15、Bトレ北
4 土師器 小形土器	口 9.6 高 5.1 底 4.8 最大 9.7	外底面は中央が凹み、外周に雑なナデ。外面体部はユビオサエとナデで、粘土積み上げ痕を残す。内面体部ヨコヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。主に外面が被熱した可能性が高い。残存重量 137.5g。	10YR6/6 明赤褐 緻密 白粗～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	中央部床上 1～8cmが 接合 口 5/6 周、底全周 2、3
5 土師器 小形土器	口 8.8 高 5.2 底 5.2 最大 9.9	外底面は中央が凹み、外周に草本植物の茎または葉の圧痕あり。外面体部はユビオサエとナデで、粘土積み上げ痕を残す。内面体部に横～斜位ヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。不規則に被熱した可能性がある。残存重量 124.6g。	7.5YR7/6 橙 緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	カマド火床直上 口 5/12 周、底全周 15
6 土師器 鉢	口 10.0 高 14.6 底 5.6 最大 12.0	外底面は多方向の丁寧なヘラケズリで平底。外面体部は上半と下半を上向きと下向きにヘラケズリ。内面体部ナメナデ。内外面口縁部はヨコナデで、外面口縁部上位に浅い段を持つ。残存重量 482.1g。	10YR2/1 黒 やや粗い 白礫～細粒多、灰 色礫と赤粗粒と黒細粒少 やや粗い	北西部床直上 ほぼ完形 口 11/12 周、底 5/6 周 10、Bトレ北
7 土師器 鉢	口 復 18.0 高 残 13.5 最大 復 18.6	外面胴部タテヘラケズリ、内面胴部ナメヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面上半に少量の煤が付く破片も 1点だけがあるが、火にかけて使用した器ではないと考えられる。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・灰色・透明粗 ～細粒多、白礫と黒細粒少 やや硬質	中央部床上 15～17cm が接合 口 5/12 周 4、5、Aトレ東、北東 1層
8 土師器 甌	高 残 11.8 底 9.7	外面はヨコヘラナデ後にタテヘラケズリ。内面はタテヘラナデ後に積み上げ休止痕の厚い部分と下端の孔縁部にヨコヘラケズリ。	2.5YR7/8 橙 緻密 赤粗～細粒多、白粗～ 細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	北西部床直上 底 5/6 周 11
9 土師器 甕	高 残 26.0 底 8.8 最大 20.1	外面は胴部タテヘラナデと胴下端ヨコヘラナデ後に下半部をタテヘラミガキ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ。外面胴下位から外底面までが被熱赤化するが、火から速い側の胴下位は被熱が少ない。	10YR4/2 灰黄褐 やや緻密 白礫～細粒と透明 粗～細粒多、灰色礫～粗粒と 黒細粒少 やや硬質	カマド火床 上 4cm 底 11/12 周 14、Bトレ北
10 土製品 小玉	長 0.65 厚 0.37 重 0.18	おそらく焼成前に穿孔する。孔径は 1.60mm で一定し、穿孔方向が不明。孔内を除く全面に黒褐色の漆を塗布し、弱い光沢を持つ。	10YR3/1 黒褐 緻密 混和材が見られない やや軟質	南西部床直上 完形 19

【覆土】 竪穴部分の大半は単層である。カマド南側部分の堆積状況からみて自然埋没と思われる。テフラの層や粒などは認められない。

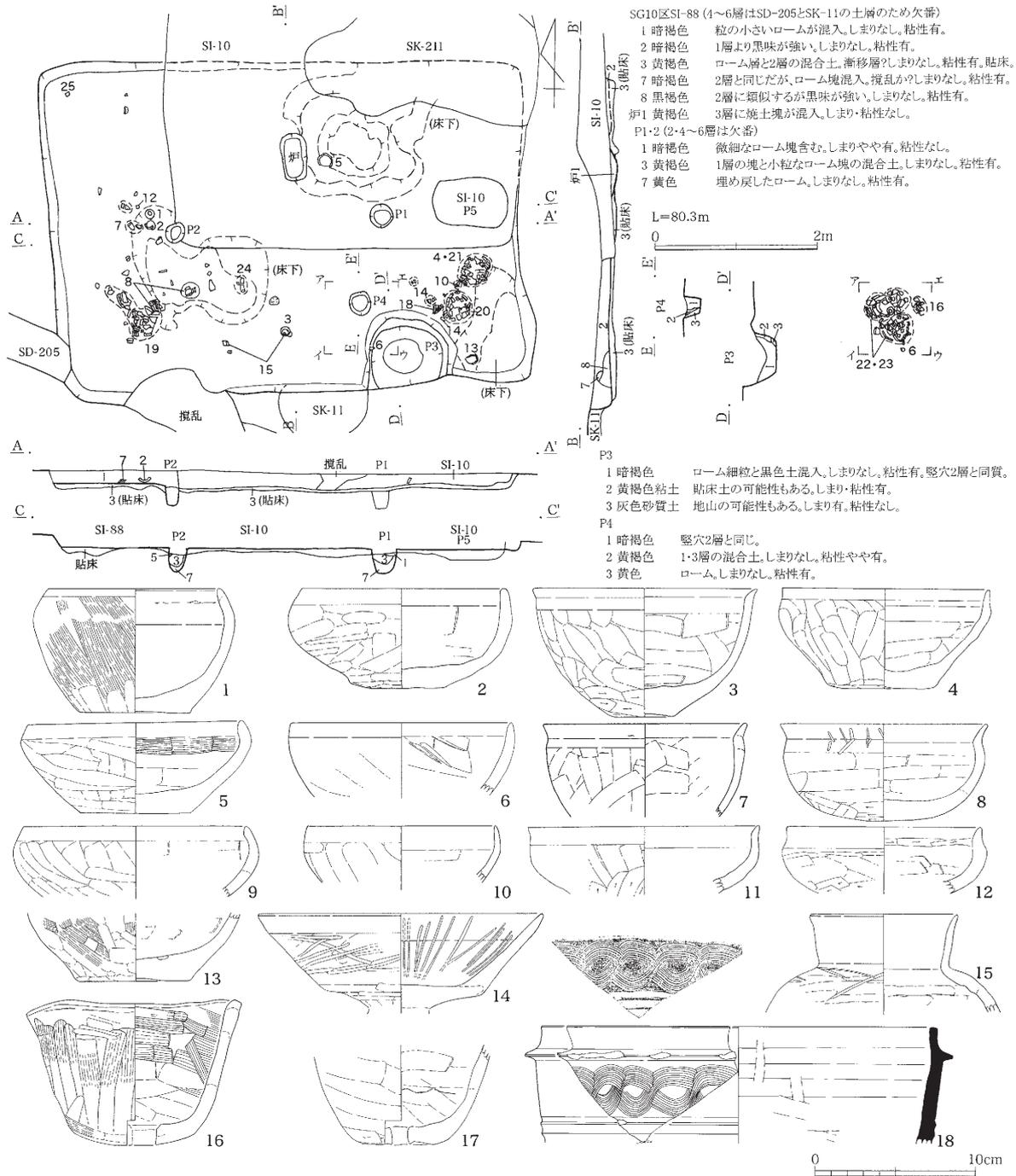
【遺物出土状況】 カマド内の遺物はカマドの項で説明した。カマド西側で床面にまとまる土器群は、甌の底部(8)と長い鉢(6)が北側に、上向きの杯2点(1・3)が南側にある。竈から南へ離れた遺物は床面より上方にあり、中央部の小形粗製鉢(4)は床上 8cm、西部の杯(2)は床上 13cm。

【出土遺物】 遺物量はわずかだが、完形に近いものが多い。復原可能な土師器以外は小破片ばかりである。杯・小形粗製土器・甌・甕があり、甌と甕はほとんど長胴である。小形粗製土器2点は同工品で、ともに被熱していると考えられる(4・5)。鉢2点のうち1点は長い筒形で外面を浅い有段口縁にする(6)。8は全くミガキを行わない甌。9は幅広いヘラナデに近い独特な調整で胴部外面下半を磨き、常総型甕のような雲母は含まない。図示以外の土師器合計 40片・291gの内訳は、杯 22片・61g、高杯 2片・11g、壺甕類 15片・159g、甌 1片・60g。土玉が1点あり、漆塗の小玉である(10)。

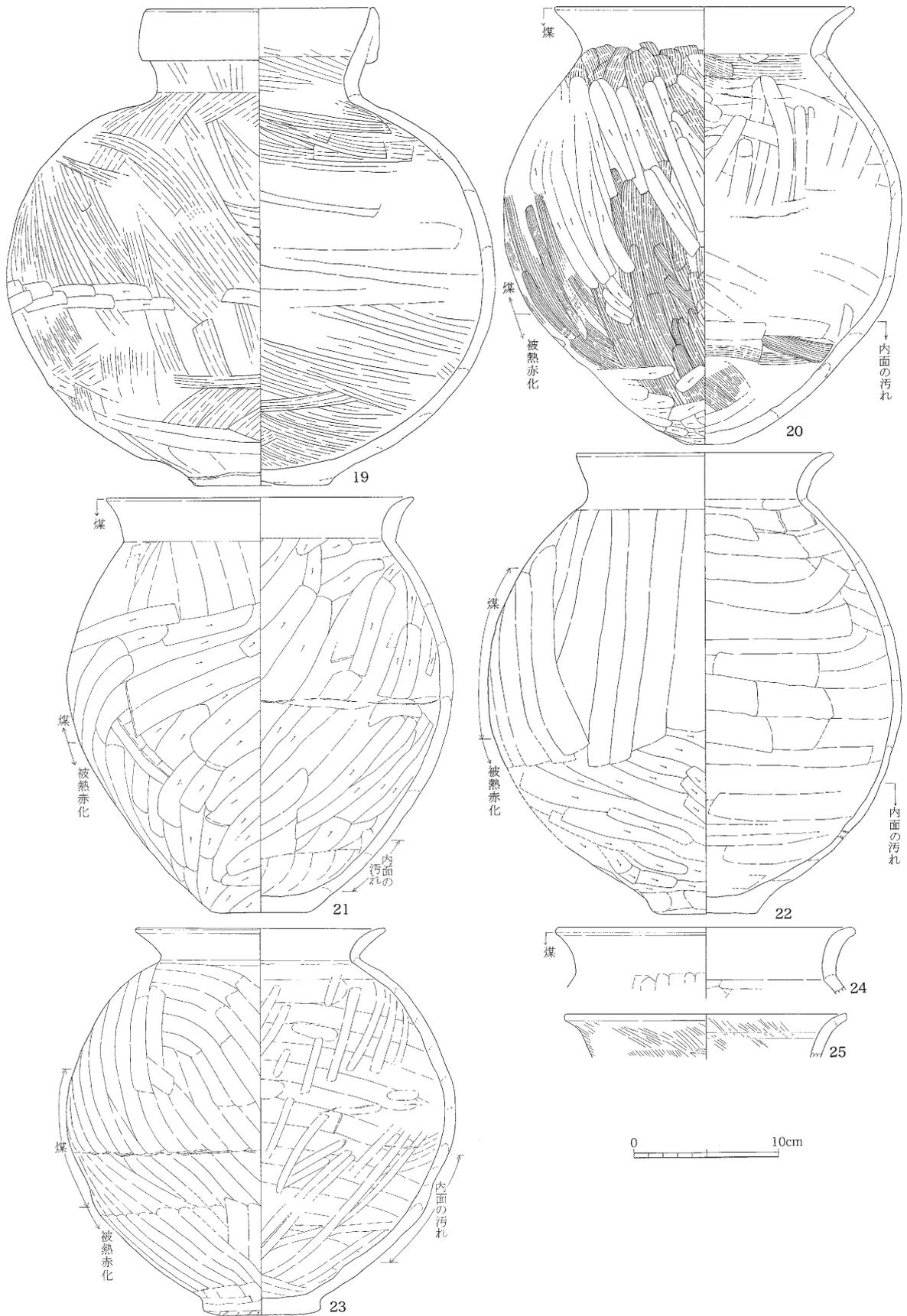
SG10区 SI-88 (第 132・133 図、写真図版 116・206)

【位置】 SG10区南部の 18-17 グリッド。同じく古墳中期の遺構は南に SI-9、北東に SI-33 がある。北と北東に古墳後期の SI-12 と SI-32 がある。古墳中期の SK-11 → SI-88 → 古墳後期の SK-211 → 古墳後期の SI-10 → 時期不明(中世?)の SE-352 という順に重複する。南部で古墳時代中期の SK-11 を切り、北部が古墳後期の SK-211 と SI-10 に切られ、南西部が時期不明の SD-205 に切られる。床面は SI-88 より SI-10 が少し高いが、SI-10 の掘方が SI-88 の床面を破壊した部分もある。SI-10 の覆土・貼床が SI-88 の覆土と区別しにくいために重複部で SI-10 床面を明瞭に捉えられなかったので、南北方向の土層断面 B-B' で SI-10 の掘方底が SI-88 床面を壊している状況はやや不明確である。

[規模と形状] 東西軸の長方形で、東西 5.92m、南北 4.28m。南壁中央に入口施設を想定し、主軸を南北方向と考えた場合の主軸方位は N-4° -30' -E。主柱穴 2 本を通る東西ラインは N-85° -30' -E。壁は外傾し、残存壁高は最大 20cm。掘方は床面から深さ 3~12cm で、北東部と南西部が少し浅く、南東隅は深い。地山のローム漸移層に似た貼床土で掘方を埋め戻している。主柱穴は P1 と P2 の 2 本で径 20~30cm・床面からの深さ 37~41cm で、東柱穴のほうが少し深く、柱間は 2.57m。主柱穴 P1 と P2 の最下層 (C-C' の 7 層) は埋め戻したロームであると観察されているので、柱の裏込土が崩れたものであろう。南東部にある貯蔵穴 P3 は、東西 96×南北 74×深さ 30cm の断面逆台形で、竪穴部と同質の土で自然埋没している。貯蔵穴の周囲は床面が 1~3cm ほど土手状に高くなる。貯蔵穴 P3 の北西にある P4 は径 28×30cm・柱



第 132 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-88 (1) 遺構・遺物



第133図 権現山遺跡 SG10区 SI-88(2)遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

痕径 13cm・床面からの深さ 20cm で、柱痕部の覆土は堅穴と同質である（現地名称「P8」を整理作業時に P4 へ改称した）。入口は P3 の西側が考えられるが、具体的な施設痕は不明である。周溝や間仕切溝は見られない。

[炉] 北部中央にあり、径 60 × 31 × 深さ 4cm。埋土は、貼床土と似た土質の中に焼土塊が混じる（炉 1 層）。

[覆土] ほぼ全体が同じ暗褐色土で埋まる。南部では少し異質な埋土も混在する。重複している SI-10 の埋土との区別が難しかった。

[遺物出土状況] 貯蔵穴の周囲で床から 10cm 以内のレベルに横転した甕が 4 個つぶれている（20～23）。初期須恵器壺破片（18）は貯蔵穴の北東側で床面から 12cm 浮くので、堅穴内に流入してきた可能性もある。この他の遺物は西半部でやや多く、床面付近から床上 10cm までの範囲に多い。ただし大形壺（19）は床上 13cm にある。ほぼ完形品の杯 3 点は西半部の床面にある（1～3）。後期の SI-10 に切られているので、SI-10 へ流入・混入した遺物もある。5 は SI-10 のほぼ床面レベルに混入していたほぼ完形の杯である。

[出土遺物] 遺物はやや多く、土師器のほとんどは甕と杯で、高杯・壺・甑は少ない。土師器杯は内斜口縁杯と半球状杯だけが見られた。

18 は断続する S 字形の波状文を組み合わせて変形した組紐文を描く須恵器有蓋壺で、TK-73 号窯よりも一段階古く、ON-231 号窯段階（西口 1994）に相当する。SG10 区では SI-23 などに須恵器長頸壺がある。土師器杯のうち 3・4・7 は口縁部の屈折が弱い内斜口縁状で深身。8・11・12 は浅い。1・2・5・6・9・10 は口縁部がやや強く内彎する平底の杯。類似した粗製小形甑が 2 点あり、16 は口縁部ヨコナデを行わない。15 は口径に対して口縁部が短い小型壺。19 は受口状口縁にやや近い形の貼付口縁壺。受口状口縁壺は、SG10 区では SI-19a などにある。20 は尖底状の甕。凸面底の甕は SG10 区 SI-16 などにある。23 の甕も底面がわずかに凸面状である。凶化した遺物以外は小破片ばかりである。高杯は不掲載の破片もごく少ない。壺類では、薄手でやや大形のハケ調整破片が少量ある。図示以外の土師器合計 160 片・1,764g の内訳は、杯 71 片・399g、高杯 8 片・95g、小形壺 5 片・35g、壺甕類 76 片・1,235g。

第 78 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-88 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 10.6 高 7.7 底 6.7 最大 12.4 重 324.4	外底面は主に 1 方向のナデ。外面は非常に浅いハケ調整で、体部下半ナメハケ、体部上半ナメハケとナメナデ、体部下端タテヘラナデ。内面体部は器面が荒れて調整不詳。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 粗い 赤粗～細粒と白細粒や やや多、白・灰色礫と白粗粒と 黒・透明細粒少 やや硬質	西部床直上に伏せた 状態 完形 41
2 土師器 杯	口 12.4 高 6.2 底 5.8 最大 13.8	外底面は主に 1 方向のヘラナデで緩い凸面状。外面は体部にナデと横～斜位ヘラナデ。内面は体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にやや弱いヨコナデ。外底面に 8cm 大の黒斑あり。残存重量 331.7g。	10YR6/6 明黄褐 粗い 赤粗～細粒と白細粒多、 白・赤・灰色礫と透明粗～細 粒少 やや軟質	西部床直上で正立 ほぼ完形 口 5/6 周、底全周 40
3 土師器 杯	口 13.8 高 8.0 底 3.8	体部は薄手だが底部は厚みがある。外底面はほぼ 1 方向ヘラケズリで凹底状。外面体部は上位ナメナデ、中位ヨコヘラナデ、下位ヨコヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面の約半分は黒斑。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南部床直上 ほぼ完形 口 11/12 周、底全周 17
4 土師器 杯	口 12.8 高 6.2 底 6.6 最大 13.1	わずかに内斜口縁状。外底面は多方向、外面体部は縦位のヘラナデまたは浅いハケメ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。残存重量 209.7g。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南東部床直上 口 2/3 周、底全周 1
5 土師器 杯	口 13.3 高 5.6 底 6.7 最大 14.2	外底面は 1～2 方向のヘラナデで平底状。外面体部はタテ後ヨコヘラナデ。内面は体部ヨコヘラナデと口～体部境に浅いヨコハケ。内外面口縁部ヨコナデ。外面体部に約 10cm 大の範囲で煤が不規則に付着する。残存重量 344.0g。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤・透明粗～細粒 と白細粒やや多、白・灰色粗 粒と黒細粒少 やや硬質	SI-10 の南部に混入 ほぼ完形 口 11/12 周 SI-10 125
6 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.5	外面は器面が荒れて調整が不明瞭だが、おそらく体部ナメヘラナデの後に口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメヘラナデ調整時の凹凸を多く残し、口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤 粗～細粒と白・灰色・透明細 粒少 やや硬質	南東部床直上 7cm 口 1/8 周 16
7 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 5.8	外面体部は主に縦位のヘラナデ、内面体部は横～斜位ヘラナデ。内外面口縁部にヨコナデ。口～体部境の稜が外面では弱く、内面でやや明瞭。	7.5YR7/6 橙 粗い 赤粗～細粒と白細粒多、 灰色・透明粗粒と黒細粒少 やや硬質	西部床直上 4cm 口 1/4 周 39
8 土師器 杯	口 復 12.8 高 6.0	外面は上半ナデと下半ヨコヘラナデの後に底部を多方向ヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面底部はおそらく使用により器面が荒れて調整不明。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 黒・透明細粒やや多、白礫少 やや軟質	南西部床直上 5～13cm。 SI-10 混入破片も接合 口 1/4 周、体 1/3 周 26、31、33、SI-10 南 西
9 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 4.4 最大 復 15.1	外面は体部上半ナメナデと下半ナメヘラナデの後に口縁部ヨコナデ。内面は剥落して不明な部分が多く、体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデと推定される。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒や やや多、灰色粗粒と黒・透明細 粒少 軟質	貯蔵穴内 口 1/3 周 貯蔵穴

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

10 土師器 杯	口高 復 11.6 残 3.6 最大 復 12.1	外面体部ナメナデと内面体部ヨコヘラナデの後、内外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・透明粗粒と黒・透 明細粒少 やや硬質	南東部床土 11cm 口 1/3 周 2、南東
11 土師器 杯	口高 復 14.2 残 4.1	外面体部ナデ後に下位をナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部が磨滅して調整不明で、口縁部にヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 灰色礫と白・黒・ 透明細粒少 硬質	南西部 口 1/8 周 南西
12 土師器 杯	口高 復 11.8 最大 復 12.6	外面は体部ナデ後に体部上端ヨコヘラナデ、体部下位ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は体部にヨコヘラナデ、口へ体部境にヨコヘラケズリ。	2.5YR6/4 橙 やや緻密 赤・黒粗粒やや多、 白・黒・赤・透明細粒やや少 硬質	西部床土 4cm 口 1/6 周 42
13 土師器 杯	高底 残 4.3 6.5	外底面は非常に浅い1方向のハケ調整で、少し凹底になる。外面体部は非常に浅い斜位のハケ後ナデ。内面は底部の器面が荒れて調整不詳で、体部ヨコヘラナデ。断面図に記入した植物種子(?)の圧痕が内面底部に1箇所ある。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤・透明粗粒 細粒やや多、黒細粒少 硬質	南東部床土 5cm 底全周 9
14 土師器 高杯	口高 残 17.6 5.9	外底面は放射状ヘラナデ後に外周ヨコナデ。杯体部内外面はおそらくヘラナデ後に、外面は疎らなヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は少し密なタテヘラミガキ。 [注記]4、7、SI-10 107、126、163、164、南東Aトレ	5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒・透明細粒 少 やや硬質	南東部床直上～3cmが接 合 口 3/4 周 注記は左欄
15 土師器 小形壺	口高 復 9.1 残 6.0	外面体部ヨコヘラナデ後、横～斜位の疎らなヘラミガキ。内面体部コビオサエトナデ。内外面口縁部ヨコナデ。 [注記]19、21、南西、SI-10 南東、南東Bトレ、南西、北西	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒少 やや軟質	南西部床土 8～16cmが 接合。南半中央にも5 片 口 5/12 周、肩 5/6 周 注記は左欄
16 土師器 小形甗	口高底 残 13.2 9.0 7.6 復 1.5	外底面に多方向のやや雑なナデ、外面体部に非常に浅いハケ調整。内面は下位を円周方向コビナデ、上～中位をやや浅いヨコハケ。内外面の口縁部ヨコナデをほとんど行わない。底部に1孔を開けた時の粘土の盛り上がり、孔の内外縁に少し見られる。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 白・赤礫と黒・透明細粒少 やや軟質	南東部床直上。SI-10 混 入の3片と接合 口 3/4 周、底 1/3 周 10、SI-10 南東
17 土師器 小形甗	高底 残 6.2 復 4.2 1.1	外底面から体部下端に円周方向のヘラケズリ、外面体部ナメヘラナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。底部の孔端面をタテナデして孔の内外に粘土が盛り上がる。	7.5YR6/6 橙 粗い 白・赤礫粗～細粒多、 白・赤礫と黒・透明細粒少 やや軟質	南西部 底 1/3 周 SI-10 南西
18 須恵器 有蓋壺	口高 復 24.0 残 7.2 最大 復 25.9	内外面ともに丁寧な回転ヨコナデで、口縁部端面が平坦。口縁部に長い蓋受けと頸部に2条以上の低い突線区画を持つ。9～10歯の工具で右から左へ断続的な櫛描波状文を描き続けて組紐文に似せている。ヨコナデ時と施文時のクワは左回転(反時計回り)。破片の下端にも文様がわずかに残る。	7.5Y6/1 灰 緻密 白細粒少 硬質	南東部床土 12cm 口 1/6 周 5
19 土師器 大形壺	口高底 復 15.6 33.0 8.3 最大 復 35.0	受口状にやや近い形の貼付口縁。外底面は外周に粘土を貼ってやや雑なナデ。外面は胴部ナメハケと中位ヘラケズリ、下位ナデ、頸部タテハケ後口縁部を貼り付けてヨコナデ。内面は下位ヨコハケ、中位ヨコヘラナデ、肩～頸部ヨコハケ、口縁部ヨコナデ。ハケは非常に粗く、5本/2cm。	5YR6/8 橙 やや緻密 黒・透明細粒多、 白粗～細粒やや多、赤粗～細 粒少 硬質	南西部床土 13cm 口 1/12 周、頸 1/3 周、 底全周 32、南西、南西Aトレ
20 土師器 甗	口高底 復 20.6 30.3 最大 27.3	外面はタテハケ後に疎らなタテヘラケズリ。外底部はヨコヘラケズリで尖底状。内面は下位ハケ後に中位以上を成形してヘラナデ、肩部ヨコハケ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面中位以上に煤が多く、下位は外面が被熱して内面にコゲが明瞭。	10YR4/2 灰黄褐 白・透明粗～細粒と黒細粒多 やや硬質	南東部床土 13cm 口 3/4 周、底全周 8、14、 SI-10 南東、北東
21 土師器 甗	口高底 復 21.0 28.7 6.7 最大 26.4	外底面は多方向ヘラケズリで平底。外面は肩部タテヘラナデと中位以下ナメヘラケズリ。内面はナメヘラナデ後にナメヘラケズリで、胴中位の積み上げ休止痕付近にナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面下位が被熱赤化して上～中位に煤が明瞭。内面胴部下位にコゲ痕の汚れが残る。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色粗粒と黒 細粒多、白・灰色礫と赤・透 明粗～細粒少 やや軟質	南東部床直上 口～上半 1/4 周、下半 ～底全周 1、SI-10 南東
22 土師器 甗	口高底 復 17.7 31.9 6.9 最大 28.4	外底面はナデで平底。外面胴部は下位ナメヘラケズリと上～中位タテヘラナデ、胴下端ナデ。内面胴部はヨコヘラナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面は下位に煤が見られ、下位～底面が被熱赤化する。内面は下位にコゲ付着。 [注記]11～14、南西、SI-10 南東	2.5Y7/8 橙 粗い 白粗～細粒と黒・透明 細粒やや多 やや軟質	南部床土 12cm。2～14 cmの破片も少量接合 口 1/2 周、底全周、胴 下位 1/2 欠 注記は左欄
23 土師器 甗	口高底 復 17.2 26.6 8.0 最大 25.8	外底面はほぼ1方向ヘラケズリで、弱い凸面状。外面胴部はナメヘラナデ後に下端を軽くヨコヘラナデ。内面胴部は横のち縦位のヘラナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ。下位の外面が被熱赤化して内面にコゲ痕が付着、外面中位に煤が多い。	10YR6/3 にぶい黄橙 粗い 白・灰色・透明粗～細 粒多、赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	南部床土 2～10cmが接 合 口全周、胴下位 1/2 周、 底全周 11、12、14、貯蔵穴
24 土師器 甗	口高 復 20.5 残 4.8	外面は胴部タテヘラナデ、内面は胴部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面に煤が明瞭に付着する。	10YR6/3 にぶい黄橙 粗い 灰色礫と白・透明粗～ 細粒と黒細粒やや多 やや硬質	中央部床土 5cm 口 1/4 周 20
25 土師器 甗	口高 復 19.4 残 3.0	口縁部内外面ともにナメハケ後、弱いヨコナデでハケを軽く消しているが、ハケが薄く見える。口縁部が明瞭な面をなして整っているため、やや強いヨコナデ→ナメハケ→弱いヨコナデの順に調整したと考えられる。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・灰色礫～細粒 と黒・透明粗～細粒やや多 やや硬質	北西部床土 10cm 口 1/3 周 17 付近、48、南西

SG10区 SI-89a (第134・135図、写真図版117・118・206・207)

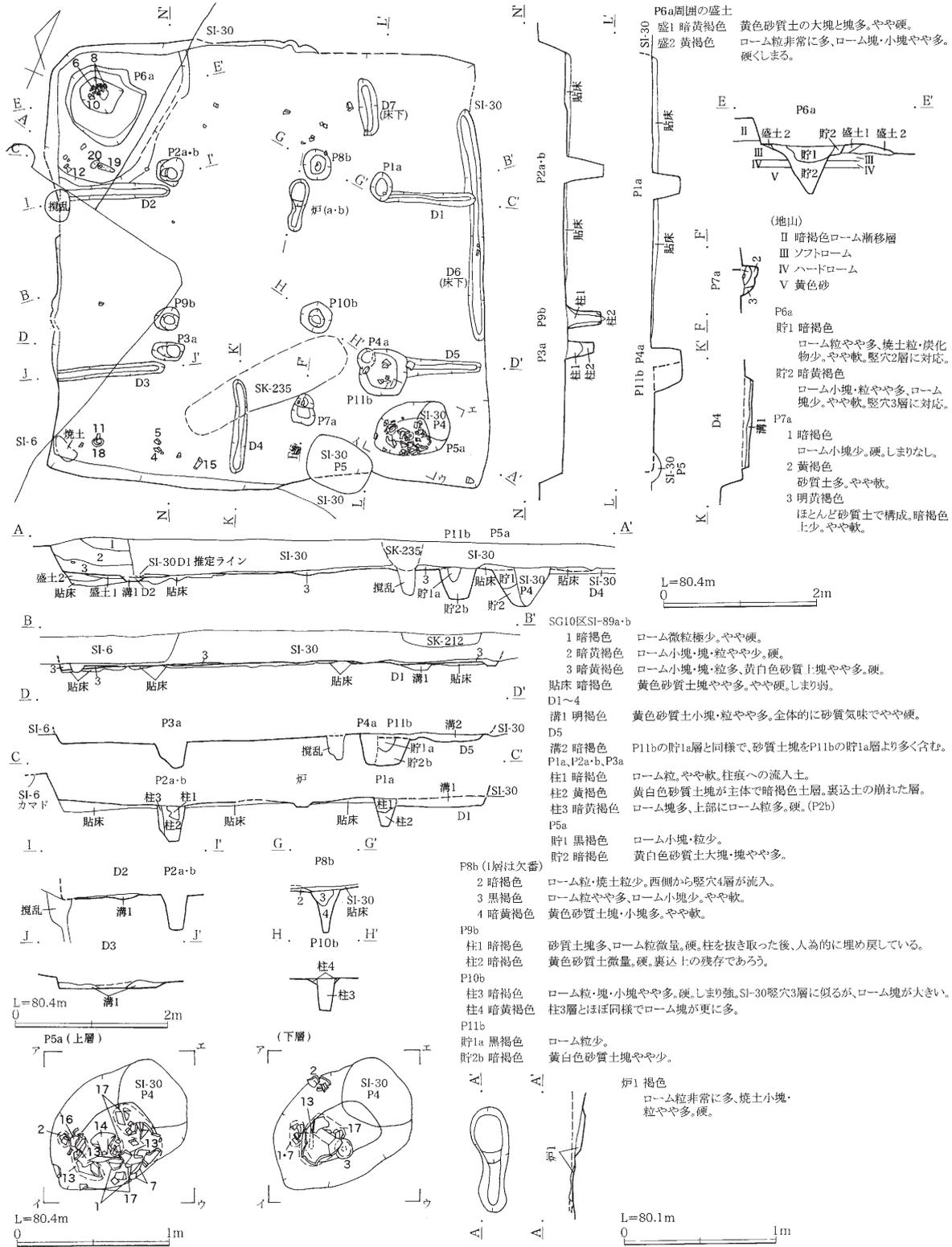
【位置】SG10区南半中央部、東側低地に向かう台地平坦面の17-17グリッド所在。同じく古墳中期の建物は南にSI-2、北にSI-9がある。SI-89bを拡張した建物がSI-89aである。古墳中期のSI-30、後期のSI-6、平安時代のSK-235に切られる。SI-89b→(拡張)→SI-89a→SI-30→SI-6(→)SK-235の順序で重複し、SK-235はSI-6ではなくてSI-30を切る。

【規模と形状】柱穴の状況からみて、拡張建て替えを行っている。旧期をSI-89b、新期をSI-89aと呼ぶ。

SI-89aは方形で、主軸方位はGN-21°-W、規模は東西5.70m、南北5.94m。残存壁高は北壁西半と南壁西半で最大38cmあり、西壁中央や東壁はSI-6・30に切られてほとんど残っていない。床面は、北西部隅にある最新時期の貯蔵穴P6a周辺が3～8cm高く、その他は平坦である。掘方は四隅が床面からの深さ4～8cmでやや深い。それ以外の部分では貼床がごく薄く、掘形底面がそのまま床面になるところがほとんどである。

第5章 権現山遺跡 SG10 区

a 期の主柱穴は 4 本 (P1a・P2a・P3a・P4a)。柱間は南北 2.26m、東西 2.55m (南側) ~ 2.70m (北側)。断面形状から推定した柱径は 12 ~ 16cm、床面からの深さは P1a=41cm、P2a=48cm、P3a=34cm、P4a=42cm。北西の P2a は先行する b 期の P2b と同じ位置で、P2b は西端部だけが残る。他の 3 本は南 ~ 南東側へ移動して建て替えている。P4a は先行する b 期の貯蔵穴 P11b を切る。

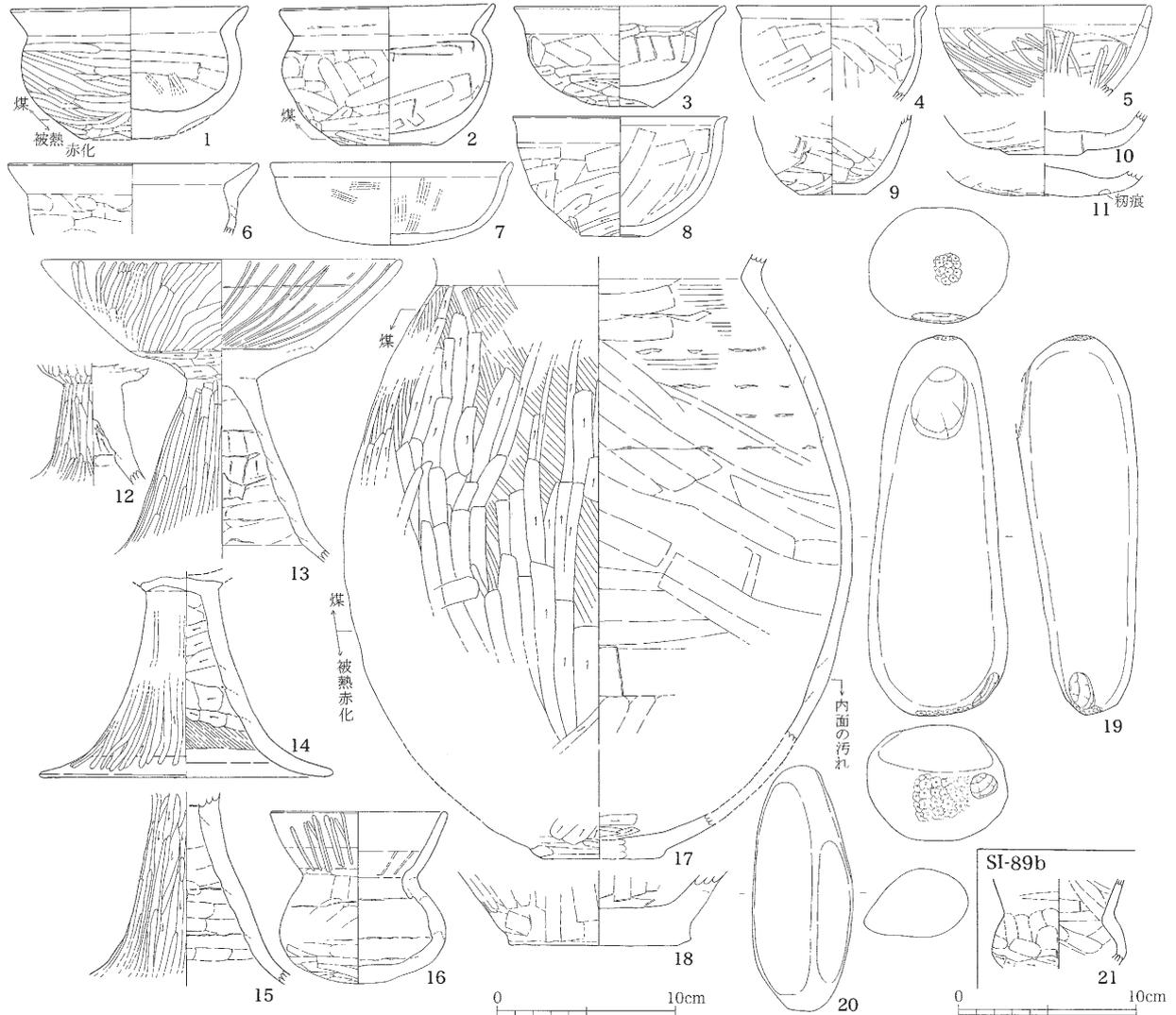


第 134 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-89a・b (1) 遺構

入口施設と考えられるピット P7a が、a 期建物では南部中央からやや東に寄って確認された(断面図 F-F')。P7a の底面は南半が一段高く、床面からの深さは北部で 20cm、南部で 18cm。b 期建物の入口施設ピットは見られない。a 期建物の貯蔵穴には、P5a (a 期旧貯蔵穴) と P6a (a 期新貯蔵穴) の 2 時期がある。SI-89a に伴うと考えられる貯蔵穴 P5a 内部に竪穴覆土 3 層が流入しないで、P5a 埋土の上を貼床土が覆うので、P5a を人為的に埋め戻したことがわかる(断面図 A-A')。複数の貯蔵穴を持つ建物跡は SG10 区 SI-6 などがあり、SI-89a・104 のように作り替えて複数になった事例も含むであろう。貯蔵穴 P5a は南東隅にあり、東西 105 × 南北 69 × 深さ 47cm。貯蔵穴 P6a は北西隅にあり、東西 61 × 南北 52 × 深さ 50cm。

床面から深さ 3 ~ 6cm の壁溝 D6 は、東壁際で貼床除去後に確認し、床面調査時に見落とししたと考えられる。間仕切溝は 6 本ある (D1 ~ D5・D7)。間仕切溝 D1 ~ D5 は柱穴や壁との関係からみて a 期建物に伴うことが確実で、床面からの深さは 7 ~ 11cm。南東部の間仕切溝 D5 は b 期貯蔵穴を切ると考えられる(断面図 D-D' の P11b)。床面で見落としとして貼床下で確認した北東部の間仕切溝 D7 は、短くて P1a まで連結しないが、P1a に向かう位置なので a 期と考えられ、床面からの深さは 6cm。

[炉] a 期建物の北部中央で瓢箪形の炉を 1 箇所確認した。南北長 69cm、東西幅 17cm(南部) ~ 25cm(北部)、床面からの深さ 2cm(南部) ~ 4cm(北部)。b 期の炉がないので、この炉を b 期から a 期まで使ったと考えられる。南半部が b 期からの炉で、b 期柱穴 P8b に近い北半を a 期に付け足した可能性もある。



第 135 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-89a・b (2) 遺物

[覆土] 覆土が残る北西部をみると、自然埋没であろう。ただし a 期の旧貯蔵穴 P5a は埋め戻されたと考えられる。

[遺物出土状況] 先行する b 期の遺物は貯蔵穴 P11b や b 期柱穴から出土したもので (21)、それ以外は SI-89a の遺物として扱う。ただし a 期貯蔵穴 (南東の P5a と北西の P6a) のうち埋め戻された P5a 内の遺物は、SI-89a の遺物としては古い時期のものと考えられる。a 期旧貯蔵穴 P5a に 1・2・3・7・13・14・16・17、a 期新貯蔵穴 P6a に 6・8・10 がある。北西部では床面よりやや上に高杯・敲石・編物石がある (12・19・20)。南東支柱穴 P4a に杯底部がある (9)。

[出土遺物] 遺物は少なめだが、一定量がある。杯・高杯・小形壺・壺甕類が主体で、特に杯が多い。薄い小形の杯 (4・5・8・9) と、少し大きめで火に掛けたような痕のある杯 (1・2) がある。7 は薄く、軟質の明橙色胎土が他の土器とかなり異なる。10 は焼成前に亀裂が生じた可能性があり、内面には達していないので失敗作ではない。不良品の土師器は、SG10 区では SI-6 などにある。11 のように靱痕がある土師器は、SG10 区 SI-50 などにある。14 は支脚に転用したかのような高杯脚部だが、この建物にはカマドがない。17 は粗いハケ調整で、古墳中期の甕としては胴部が長い。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 251 片・1,772g の内訳は、杯 124 片・646g、高杯 20 片・297g、小形壺 4 片・34g、壺甕類 101 片・778g、小形土器 1 片・10g、焼粘土塊 1 点・7g。

SG10 区 SI-89b (第 134 図・第 135 図右下、写真図版 117・118)

SI-89b は SI-89a と同じく方形で、主軸方位は GN-24° -W。推定規模は東西約 4.7m、南北約 4.4m。この推定値は、南東支柱穴 P10b から東壁まで 1.4m、南壁まで 1.2m の距離を (貯蔵穴 P11b の位置から) 推定し、柱間の規模に壁までの距離を加えて算出した。床面レベルや残存壁高は SI-89a とほぼ同じと考えられる。b 期の支柱穴は 4 本 (P2b・P8b・P9b・P10b)。柱間は南北 1.96m、東西 1.90m。断面形状から推定した柱径は 14 ~ 16cm、床面からの深さは P2b=44cm(?), P8b=58cm, P9b=50cm, P10b=41cm。北西の P2b は拡張後の柱穴 P2a として再利用され、P2b の西端部だけが残る。他の 3 本は人為的に埋め戻されていた (P8b・9b・10b)。南東隅にある貯蔵穴 P11b は東西 63 × 南北 61 × 深さ 38cm で、a 期の南東支柱穴 P4a に切られている。b 期建物には入口施設・壁溝・間仕切溝がない。

[炉] a 期で説明した炉の南半部 (東西幅 17 × 深さ 2cm) を、b 期から a 期まで使い続けた可能性がある。炉の北半部は b 期の柱穴 P8b に近すぎるので、a 期に付け足した部分であろう。

[遺物および出土状況] 旧期建物である SI-89b の遺物は、貯蔵穴 P11b や b 期支柱穴で少量だけ出土した。図示できたのは P11b 出土の小形壺である (第 135 図右下の 21)。図示以外の土師器は鉢 2 片・22g のみである。

第 79 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-89a・b 出土遺物

1 ~ 20 は SI-89a、21 は SI-89b の遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.2 高 7.3 底 5.2	口~体部境の稜が内面で明瞭。外面は体部におそらく斜位ヘラケズリ後に斜~横位ヘラミガキ、口~頸部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデ後に下半部斜位ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。外面底部が被熱して内外面の底部がひどく剥離し、外面口~体部に煤付着。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤粗~細粒や やや多、黒・透明細粒やや少 やや硬質	a 期旧貯蔵穴 P5a 底上 33 ~ 35cm が接合 口 1/2 周 12、15、67
2 土師器 杯	口 12.1 高 7.8 底 5.5 重 268.5	外底面は 1 方向ヘラナデ後に外周に薄く粘土を付け足して軽いナデ。外面体部ナデ後に下位ヨコヘラケズリと口~肩部ヨコナデ。内面は体部と肩部に斜位と横位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面は底部以外の口~体部に煤が多い。外底面が被熱している可能性もあるが不確実。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白粗~細粒やや多、 赤・黒・透明細粒と白・灰色 礫少 硬質	a 期旧貯蔵穴 P5a 底上 7 ~ 37cm が接合 ほぼ完形 口 5/6 周、底全周 4、5、65
3 土師器 杯	口 11.7 高 5.5 底 3.4 重 162.3	口~体部境の稜が内面で明瞭。外底面は円周方向のヘラケズリで凹底状。外面は上半ナデ後に下半ヨコヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデ後、体部上位ヨコヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗粒と白細 粒やや多、黒粗粒と赤・透明 細粒少 軟質	a 期旧貯蔵穴 P5a 底上 12cm で伏せた状態 完形 69

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

4 土師器 杯	口 復 10.6 高 残 5.3	薄く軽い。外面上位をナデおよびナメヘラナデ後、下位ナメヘラケズリ。内面体部ナメヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・灰色粗～細粒やや少、 黒・透明細粒少 硬質	a 期南西部床上 13cm 口 1/5 周 24
5 土師器 杯	口 復 11.9 高 残 5.0	内外面の口～体部境に浅い段あり。外面ヨコヘラナデ、内面ヨコヘラナデ後に下位ヨコヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ。体部の外面に斜位と内面に縦位のヘラミガキ。外面に7cm大の黒斑あり。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 黒粗～細粒と白・ 透明細粒少 やや硬質	a 期南西部床上 8cm 口 1/4 周 25
6 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.0	外面は体部に軽い雑なナデで、粘土積み上げ痕を少し残す。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部は磨滅して調整不明。	7.5YR7/6 橙 緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 軟質	a 期新貯蔵穴 P6a 底上 22cm 口 1/6 周、頸 1/4 周 36
7 土師器 杯	口 復 13.4 高 4.6	薄く軽い。口～体部境の稜は内外面ともにやや不明瞭。内外面の口縁部ヨコナデ後、体部は外面に斜～横位と内面に縦位のヘラミガキ。体部全面が剥落しているため、観察できる部分が極めて少ない。	2.5YR6/8 橙 緻密 白・黒・赤・透明細粒 少 軟質	a 期旧貯蔵穴 P5a 底上 33～36cmが接合 口～底 1/3 周 11、12、67
8 土師器 杯	口 11.9 高 6.7 底 3.5	薄く軽い。外底面は雑なナデで平底状。外面上半を横～斜位ヘラナデ後に下位をナメヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ。内面体部はナメヘラナデ。	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒やや多、黒細粒少 硬質	a 期新貯蔵穴 P6a 底上 17cm 口 1/2 周、底 1/3 周 37、72
9 土師器 杯	高 残 4.5 底 復 3.8	小形で薄く軽い。外底面は1～2方向のヘラケズリで平底状。外面体部は下位ナデと中位ヨコヘラナデ、下端ヨコヘラケズリ。内面はナメナデ。外面に6cm大の黒斑あり。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白細 粒少 硬質	南東部の新期主柱穴 P4 底 1/2 周 P4-151
10 土師器 杯	高 残 2.5 底 4.0	やや突出する平底で、底部が厚いために乾燥・焼成時に亀裂が生じた可能性がある。外底面はやや丁寧にナデしているが、突出する底部の外周は整えられていない。外面体部ナデ。内面はヘラミガキを行っていた可能性が高いが、大半が剥落して不明。	7.5YR6/6 橙 緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 軟質	a 期新貯蔵穴 P6a 底上 10cm 底全周 39
11 土師器 杯	高 残 1.7	外底面は多方向ヘラケズリで緩い丸底状に仕上げ。稲籾(?)の圧痕を残す。外面体部ナデ。内面底部は円周方向のナデ。	2.5Y6/2 灰黄 緻密 白・赤粗～細粒やや少、 白礫と黒・透明細粒少 軟質	a 期南西部床上 32cm 底全周 28
12 土師器 高杯	高 残 6.7	脚部上位は中実状。外面は脚部と杯底部をタテヘラナデ後、杯体部と脚部をタテヘラミガキ。杯部内面は調整不詳。脚部内面は上半に絞目状の皺が多く、下半をナデ。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・赤粗～細粒と黒・ 透明細粒少 硬質	a 期北西部床上 13cm 杯底 1/2 周、脚柱全周 32
13 土師器 高杯	口 復 20.0 高 残 16.4	外面は脚部タテヘラミガキ、杯底部ヨコヘラケズリ、杯体部に幅広いナメヘラミガキ。杯内面は口縁部に横位と全体に斜位のヘラミガキ。 [注記]7、14、68、SI-30 6、東南 1a 層、C ベルト東 2 層	7.5YR7/6 橙 緻密 赤粗粒少 軟質	a 期旧貯蔵穴 P5a 底上 32～41cm。SI-30 混入 破片も 4 片接合 口 1/3 周、脚柱全周 注記は左欄
14 土師器 高杯	高 残 11.2 脚裾 16.4 最大 16.4	外面はタテヘラケズリ後に裾部ヨコナデ、全体をタテヘラミガキ。脚内面は上～中位ナデと下位ナメハケの後にヨコヘラケズリ、裾部ヨコナデ。上端はすり減っており、この状態で使用された可能性あり。	10YR6/6 明黄褐 やや粗い 白・黒・赤粗粒と 白・黒・透明細粒多、白礫少 軟質	a 期旧貯蔵穴 P5a 底上 35cm 脚部全周 9
15 土師器 高杯	高 残 10.7	外面はタテヘラケズリ後にタテヘラミガキ。内面はヨココピナデで、粘土の積み上げ痕を残す。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、 白・透明粗～細粒と黒細粒少 硬質	a 期南部床上 13cm 脚柱全周 22
16 土師器 小形壺	口 9.8 高 9.6	外面は体部ナデ後に底部を多方向の軽いヘラナデ、頸部タテナデ後に口縁部ヨコナデと粗いタテヘラミガキ。内面は体部ナデで粘土積み上げ痕を残し、頸部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白粗～細粒と黒・透明 細粒やや多、白礫と赤細粒少 やや硬質	a 期旧貯蔵穴 P5a 底上 38cm 口 1/2 周、体全周 6
17 土師器 甕	高 残 30.1 底 7.0 最大 復 28.3	外底面は多方向ヘラケズリで弱い凸面状。外面胴部ナメハケ後にタテヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向ヘラケズリ、胴部ナメヘラナデ、肩部ヨコハケ後ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。胴下位の積み上げ休止部が少し厚い。下位の外面が被熱赤化して内面はコゲ付着。中位以上の外面に煤付着。 [注記]2、10、13、17、20、52、66、111、P5 下層、西南、C トレ南、G トレ南、G ベルト北半 3 層、SI-30 32、34、85、東南 2～3 層、東南 3 層、東南 16 層、東中 2 層、A トレ中 1c 層、A トレ中南、C トレ中央、C トレ東、C トレ東擾乱、D トレ西	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 白・赤・透明粗～ 細粒と黒細粒多、白・赤礫少 やや軟質	a 期底上 2～46cmが接 合 頸 1/6 周、底 1/2 周 注記は左欄
18 土師器 大形壺	高 残 4.2 底 9.3	厚く重い。外底面はほぼ 1 方向のヘラナデで平底状。外面胴部は縦および斜位のヘラナデで、底部が円板状にやや出る。内面は底部に 1 方向と胴部に縦位のヘラナデ。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 透明粗～細粒と白 細粒やや多、白・灰色礫少 硬質	a 期南西部床上 28cm 底全周 29
19 石器 敲石	長 21.2 幅 7.8 厚 6.6	厚さ・幅に差がある棒状の自然礫をそのまま利用。上下両端面に敲打痕が集中する。図に記入した小剥離破損が 2 箇所にある。重量 1561.8g。	N7/ 灰白 やや緻密で硬質な安山岩	a 期北西部床上 19cm 完形 63
20 石器 編物石	長 13.7 幅 5.6 厚 4.0	不整な楕円形で棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 414.0g。	7.5Y6/1 灰 緻密でやや硬質な安山岩	a 期北西部床上 27cm 完形 62
21 土師器 小形壺	高 残 4.8	外面は体部ナデと頸部ヨコナデ、体部下位ヨコヘラケズリ。内面は体部コピナデ、頸部ヨコナデとナメナデ。	10YR6/2 灰黄褐 緻密 白・黒・透明細粒と赤 粗～細粒少 やや軟質	b 期貯蔵穴 P11 底上 32 cm 頸 1/6 周 57

SG10 区 SI-100 (第2分冊の第329図、写真図版40)

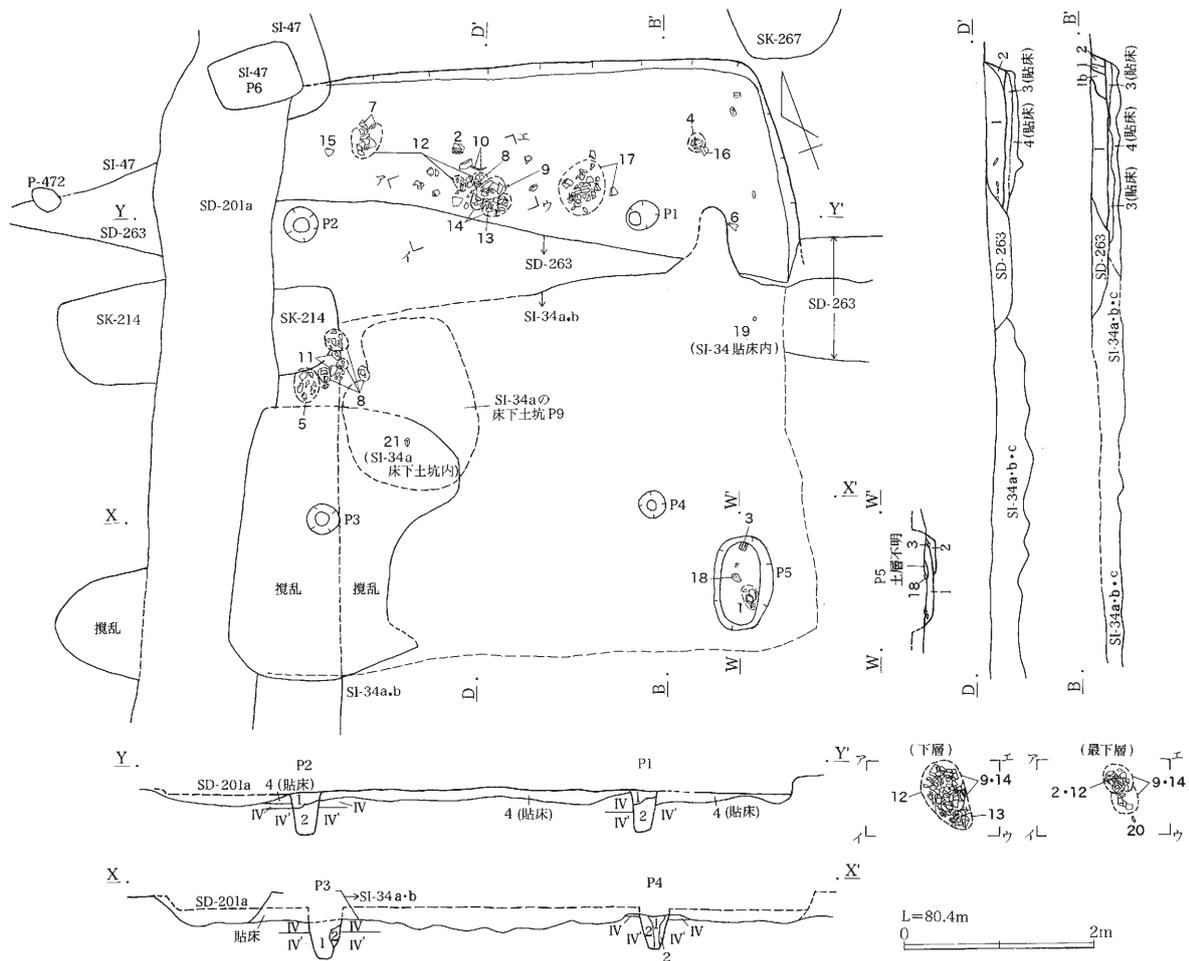
[位置] SG10 区南西端部の台地平坦面、16.5-16.5 グリッド所在。SG5 区 SI-100 と同一の古墳中期の建物である。大半を SG5 区で調査した。SG10 区で調査した範囲は建物の東北隅だけなので、遺構図および説明は SG5 区 SI-100 の項にまとめて掲載した。SG10 区内では重複する遺構はない。

[出土遺物] SG10 区の範囲から出土した遺物は土師器合計 7 片・81g しかない。内訳は、小形壺 3 片・18g と、壺甕類 4 片・63g である。図示した遺物はない。

SG10 区 SI-101 (第 136・137 図、写真図版 119・207)

[位置] SG10 区中央部の 19-17・18 グリッド所在。同じく古墳中期の建物は北に SI-53、南に SI-33 がある。SI-101 の南部は古墳後期の SI-34a・b・c に掘方まで破壊され、残っていた SI-101 の柱穴 P4 と貯蔵穴 P5 を SI-34a の貼床除去後に確認した。古墳後期の SI-47 に北西隅部を切られる (SI-101 → SI-47 → SD-201a)。時期不明の土坑 SK-214 と、近世の溝 SD-201a・263 に切られる。SI-101 → SI-34 (c 期 → b 期 → a 期)・SI-47 → SD-263 → SD-201a → SK-214 の順序になる。

[規模と形状] 方形の建物跡で、主軸方位は GN-18° -E。主柱穴 4 本から各壁までの距離を (P1 から東・北壁までの長さと同じく) 1.70m として規模を復原すると、東西推定 6.9 × 南北推定 6.5m 程度になる。現状は破壊されているので、東西残存 6.20 × 南北残存 6.30m である。中央より南側は SD-263 と SI-34 に大半が破壊されている。SI-101 掘方がわかる範囲 (SI-34 掘方よりも凹凸が激しくて凹部が深い傾向がある範囲) を、破線で平面図に示した。残存壁高は北壁で 10 ~ 23cm、東壁北部で 4 ~ 17cm。主柱穴は 4 本で、柱間は南北 3.04m (東側) ~ 3.14m (西側)、東西 3.48m (南側) ~ 3.52m (北側)。P3・P4 の柱痕反映土層 (1 層) や底面形からみて推定柱径は 6 ~ 12cm 前後。床面レベルからの深さは P1=39cm、P2=42cm (残存



SG10区SI-101

- 1 暗褐色 ソフトローム粒多、しまりなし。北壁近く上層に炭化物和焼土粒がみられる。
- 1b 暗褐色 ソフトローム粒・炭化物多。しまりなし。
- 2 暗黄褐色 ソフトローム塊 (径2~3cm) 多。ややしまり有。北壁の崩落土。
- 3 暗黄褐色 ソフトローム粒多、ソフトローム塊 (径2~3cm) で充填されている。硬。貼床。
- 4 暗黄褐色 ソフトローム塊 (径1~10cm) 多、ソフトローム多。しまり有。硬。貼床。
- P1-2
 - 1 暗褐色 ソフトローム粒多、しまりやや有。
 - 2 暗褐色 ソフトローム塊 (径1cm) 少、ソフトローム粒少、しまりやや有。

P3・4

- 1 暗褐色 ソフトローム粒・炭化物少。軟。
- 2 黄褐色 ソフトローム塊 (径2cm) 多。しまりやや有。

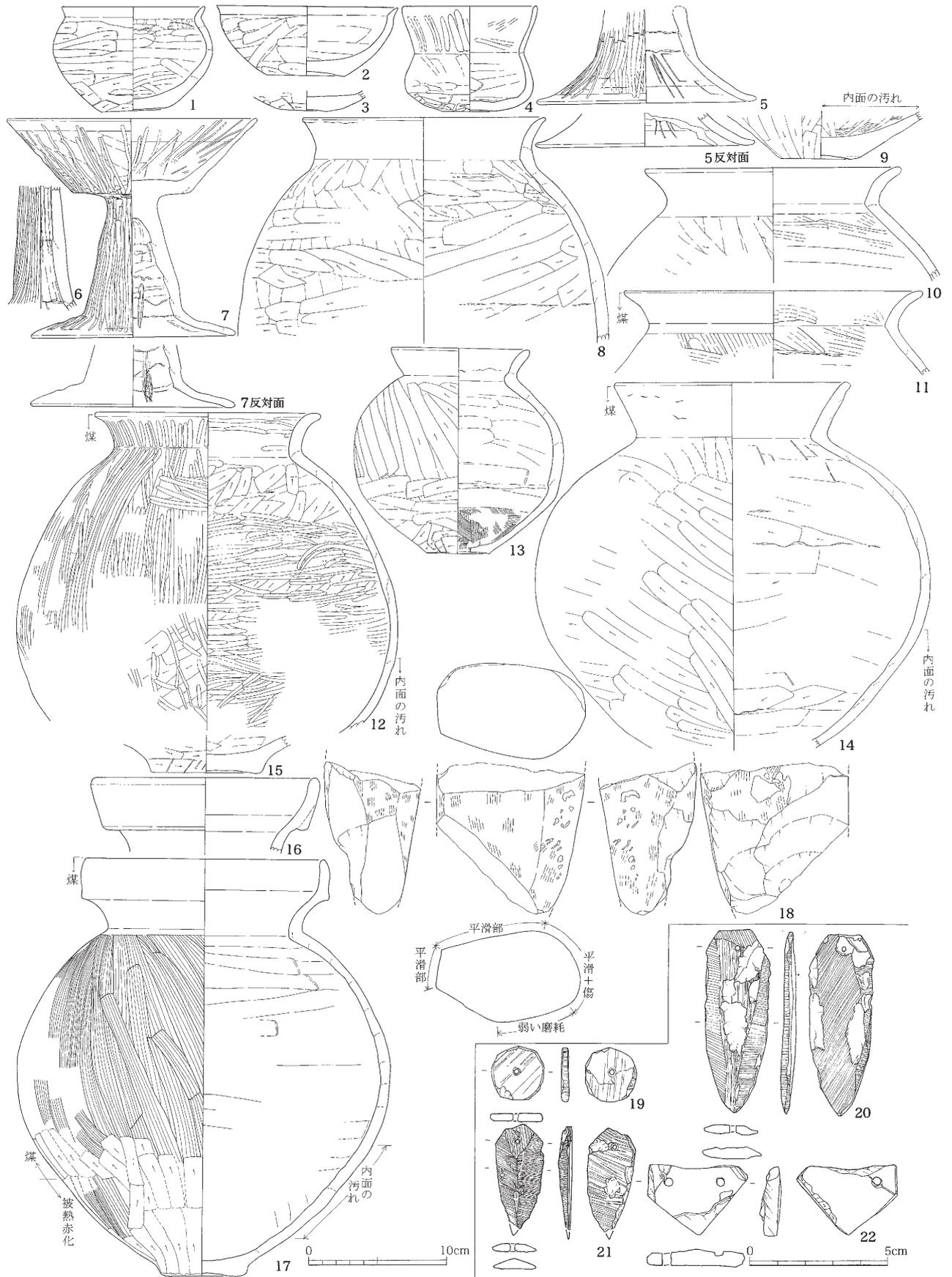
P5

- 1 茶褐色 砂質土塊 (径5cm)・ソフトローム粒少、しまりなし。
- 2 黄褐色 ソフトローム粒多、砂質土塊 (径1cm) 少。軟。

地山

- IV ハードローム
- IV' 砂質混じりローム

第 136 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-101 (1) 遺構



第137図 榎現山遺跡 SG10区 SI-101(2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

40cm)、P3=50cm (残存 37cm)、P4=40cm (残存 32cm)。P2 と P4 は上部をそれぞれ SD-263 と SI-34 掘方で壊され、P3 は上部に攪乱を受けているので、それぞれの深さは復原値である。各柱穴の下部は、地山ローム (IV 層) よりも下層の砂質混じりローム (IV' 層) 中にある。南東隅にある貯蔵穴 P5 は、上部を SI-34 に壊されて下部が残り、隅丸長方形で東西 62 × 南北 100 × 残存する深さ 9cm、推定床面レベルからの深さは 20cm。入口施設ピットなどの補助柱穴や、壁溝・間仕切溝はない。

[火処] 不明である。SI-34a・b・c や SD-263 に破壊された床面に炉が存在していたことが想定される。

[覆土] 北壁際の 2 層や貯蔵穴 P5 内の堆積から自然埋没と思われる。テフラの層や粒などは見られない。

[遺物出土状況] SD-263 破壊部よりも北側に遺物集中地区が残っていた。東半では二重口縁の大形壺 (17) が床上 3 ~ 18cm で潰れている。西半では床上 4cm に単口縁の大形壺 (12) と甕 (10)、その南東で床上 1cm に剣形模造品 (20) がある。10 と 12 の上には大形の甕 (14) が載り、模造品 (20) の上には壺 (13) が載る。14 の北西にも別個体の壺甕類破片が床上 5 ~ 15cm のレベルで散在している。北西部では完形の高杯 (7) が床上 7 ~ 10cm で倒れていた。石製模造品の剣と有孔円板 (19・21) は SI-34 貼床と SI-34a 床下土坑で出土したので、SI-101 の古墳中期遺物が SI-34 の貼床に混入したと考えられる。

[出土遺物] 4 は薄くて頸部が広い小形壺。5 と 7 は高杯脚内面に縦位の沈線がある。全周が残る高杯脚柱部 (6) には、羽口に転用したような溶解・還元痕は見られない。受口状口縁の大形壺 (16・17) は SG10 区 SI-19a などに例があり、16 は外面が貼付口縁状。12 と 17 は頸径が狭い器形なので壺に分類されるが、甕と同様に火に掛けて使っている。ホルンフェルス製の砥石 (18) は、SG10 区では SI-12 などに例がある。石製模造品の剣形品は SG10 区 SI-2 など、有孔円板は SG10 区 SI-64a などにある。剣形品 (20) は片面に鑄を持ち、SI-101 から重複する SI-34 へ混入した剣形品 (21) と類似する。この剣形品 2 点は三波川帯の滑石片岩製品である。19 は白雲母細片が非常に多い絹雲母片岩で、SG10 区 SD-42・201a に各 1 点あるが、この地域で一般的な石材ではない。篠原祐一氏の御教示によれば、砂田遺跡 4 区の石製模造品工房跡 (津野・篠原・今平 2007) で同種の石材が少し含まれる。2 孔の内 1 個が貫通していない粘板岩製模造品 (22) は、古墳後期以降の遺物が混入した可能性が高い。粘板岩製品の例は SG10 区 SI-47 などにある。

遺物が多い。土師器は壺甕類と小形壺が主体で、杯・高杯も少し見られる。壺と分類した破片の中には小形壺もまだ含まれているであろう。図示以外の土師器合計 149 片・1,768g の内訳は、杯 15 片・80g、高杯 23 片・240g、小形壺 15 片・161g、壺甕類 96 片・1,287g。

第 80 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-101 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 10.2 高 7.6 底 4.5 最大 復 11.4	内斜口縁。外面は口縁部ヨコナデ後体部ケズリ、底部はケズリで平底。底部はほぼ円形だが、ケズリによる凹凸が目立つ。内面は口縁部ヨコナデ、体部上半は強いナデで、体部上端に指頭圧痕を残し、体部下半ヨコヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒と透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 2cm 口 5/12 周、肩 1/2 周、 底全周 71
2 土師器 杯	口 復 13.0 高 5.0 底 復 5.4	内斜口縁。外面は口縁部に軽いヨコナデ後、体～底部ナデ。体部下端と底部は軽いヘラケズリで上げ底状。内面は体部が丁寧なヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒やや多、白・ 黒・赤細粒少 やや硬質	北部床直上～床上 5cm が 接合 口 1/4 周、底 1/3 周 67、73A、74A
3 土師器 杯	高 残 1.4 底 4.2	外底面は 1 方向のヘラケズリで、中央がわずかに凹む。外面体部下端ヨコヘラケズリ。内面は体部に多方向のミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤 礫と白・赤粗～細粒多、黒・ 透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 6cm 底全周 68
4 土師器 小形壺	口 9.6 高 7.7 底 3.6	小形で薄く、調整が粗い。表面が磨滅する部分が多い。外面は口縁部上端ヨコナデ後縦方向の疎らな幅広のミガキ。体部上半の頸部に近い部分にヘラナデ後軽いナデで、部分的に粘土の皸が残る。体部下半～底部ケズリ。底部はケズリのみによって作出されており、形状はいびつで浅く凹む。内面は口縁部ヨコナデ後わずかなナメヘラミガキ、体～底部は粗いヘラナデで凹凸が目立つ。	7.5YR7/4 にぶい橙 緻密 白・赤粗粒と白・黒・ 赤・透明細粒少 軟質	北東部床上 9 ~ 12cm が 接合 口 1/3 周、頸 1/2 周、 底全周 5、57
5 土師器 高杯	高 残 7.0 脚裾 15.8	外面は脚裾ヨコナデと脚部中～下位にタテヘラケズリ後ミガキ。ミガキは中位では密に、下位では疎らで、中位にはミガキに伴うヘラ状工具の当たりが残る。また、組積み痕が確認できる。内面は脚部中位ナデで、組積み痕が明瞭。下半はヘラナデ後裾部ヨコナデ。下半には先端の鋭い工具による細かい刻線が最も長いところで 4.8cm あり、左下から描き始めてジグザグに一気に描いている。脚部内面の相対する位置にも同様の刻線があるが、下半のみの破片であるため、全体の様相はつかめない。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明細粒少 やや硬質	西部床上 9cm 脚裾 5/6 周 73、SD-201 19-17.5
6 土師器 高杯	高 残 8.9	外面脚柱部は縦方向の密なミガキ。内面は脚柱部上半は絞りが顕著で、下半はタテナデ、脚裾部ヨコヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 白・灰色細粒やや少、 黒・透明細粒少 硬質	北東部床上 9cm 脚柱全周 1

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

7 土師器 高杯	口 17.9 高 15.9 脚裾 14.6	外面は杯口縁部ヨコナデ後、口～体部に縦方向の疎らなミガキ。体部外面の調整は甘く、組積みの凹凸が明瞭。杯底部はケズリ。脚部下端はヨコナデ後、脚柱部主体のミガキ。脚柱部は密に、脚部下半は疎らに施される。内面は杯口～体部にヨコナデ後、縦ないし斜方向の疎らなミガキ。杯底部に1方向の密なミガキ。脚柱部の内面はナデで、組積み痕が明瞭に残り、下半には相対する2箇所細い棒状の工具を使用したと見られる条線が引かれる。条線は1方は1本、他方は5本引かれる。脚裾部はヘラナデ後ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤礫～細粒や やや多、黒・透明細粒少 やや硬質	北西部床上7～10cmが 接合 ほぼ完形 口5/6周、脚柱全周、 脚裾1/2周 53、54
8 土師器 甕	口 復17.4 高 残15.3 最大 残26.5	外面は胴部に縦～斜位ヘラナデ後、積み上げ痕に沿った厚い部分を薄くするための横～斜位ヘラケズリ。内面は胴中位ナメヘラナデ、胴上位ナデ後ナメヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面胴部に20cm以上の広い黒斑あり。 [注記]75、76、80、82、83、北区中央部 他に SI-34・SD-263・SK-214	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 白・灰色粗～細粒 多、白・灰色礫と黒・透明細 粒少 やや硬質	西部床直上～床上 14cmとSI-34・SD- 263・SK-214の破片が接 合 口7/12周、肩2/3 周 注記は左欄
9 土師器 甕	高 残3.5 底 5.1	外底面は多方向ヘラケズリ後に外周に粘土を貼って凹底状にする。外面胴部タテヘラケズリ。内面はヨコハケ後に放射状のヘラナデ。内面全体にコゲ痕と思われる黒褐色の汚れがある。外面が被熱しているかもしれないが不明確。	10YR5/3 にぶい黄褐 粗い 白・灰色礫～粗粒と白 細粒多、透明粗粒と黒細粒少 硬質	西部床上2～7cmが接 合 底全周 77、81
10 土師器 甕	口 復18.4 高 残8.2	口～体部境の稜が内面で明瞭。外面肩部ナメヘラナデ。内面肩部にごく浅いヨコハケまたはヘラナデの後に内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白粗～細粒と黒・ 透明細粒多、透明粗粒と赤粗 ～細粒少 やや軟質	北部床上4～9cmが接 合 口5/12周 61、62、64、67、北 区中央、D-D'北部
11 土師器 甕	口 復21.4 高 残6.1	外面は肩部に粗いナメハケ、内面は同様のハケ後に軽いナデ。内外面口縁部はヨコナデで、頸部はナデ前にハケメを施していた痕が残る。外面に煤が多く付着する。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明粗粒と黒粗～ 細粒多、白・透明細粒少 やや硬質	北部床上18cm 口1/3周、肩1/4周 30
12 土師器 大形壺	口 復16.2 高 残23.0 最大 復27.4	胴部中位に積み上げ休止部がある付近の内面側が厚い。内外面をおそらくナデ後、外面下半と内面中位・肩部をナメヘラケズリして、全体を密なヘラミガキ。口縁部は内外面ヨコナデ後に、外面は密なタテヘラミガキ、内面はやや疎らなヨコヘラミガキ。外面全体に煤、内面下位にコゲの汚れが付着する。	7.5YR4/2 灰褐 やや緻密 白粗～細粒と黒・ 透明細粒多、灰色粗粒と赤粗 ～細粒少 やや硬質	北部床上4～10cm 口11/12周、頸11/12 周、胴3/4周 32、46、61、62、67、D- D'北部
13 土師器 壺	口 9.9 高 14.8 底 4.6 最大 15.1	内外面の口縁部にヨコナデ。外面は胴下端ケズリ後胴部下半に軽いナデ。胴部下半にある積み上げ休止部より上位に、ナメおよびヨコヘラケズリ。内面は胴部上半ナデ、胴部下半は7本/1cmのハケ後胴部中位ヘラナデ。底部は外底面を削って薄く仕上げる。内面口～底部にクレター状の剥落が著しい。内外面の胴部下半～底部は暗褐色に変色する。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白粗粒多、赤・灰 色・透明粗～細粒と黒細粒や やや多 やや硬質	北部床直上～床上9cmが 接合 口7/12周、頸3/4周、 底全周 36、60、D-D'北部、北 区中央部
14 土師器 甕	口 復17.0 高 残26.3 最大 復28.4	外面は肩部ナデと胴部ナメヘラケズリ。内面は胴部ヨコヘラナデ後に積み上げ休止部の厚くなっている部分をヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面胴部下位にコゲが多量付着。外面全体に薄く煤が見られる。 [注記]33、34、36、37、40～42、44、61～63、66、67、北区中央部、D-D'北	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 黒・透明粗～細粒少 やや軟質	北部床上4～15cmが接 合 口1/2周、頸5/6周 注記は左欄
15 土師器 大形壺	高 残2.7 底 復7.9	外底面はナデ後に中央を浅く削って凹底状にする。外面は横および斜位のヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒多、半透明礫～粗粒と黒 細粒少 硬質	北東部床上19cm 底1/3周 4
16 土師器 大形壺	口 16.4	外面口縁部下端に粘土を付け足して縁帯状に作り、その下縁は少し整っていない。それ以外は内外面全体に丁寧なヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・灰色礫～細粒 と黒・透明粗～細粒やや多 硬質	北西部床上9cm 口1/6周 55
17 土師器 大形壺	口 復17.2 高 復30.2 底 6.0 最大 残26.7	外底面は外周に薄く粘土を貼って凹底状にする。外面は胴部タテハケ後に胴下端と底上8cm付近を中心にタテヘラケズリ。内面は胴部ヨコヘラナデ。内外面の口～頸部はヨコナデで受口状にする。外面中位以上に煤が多く付く。下位の外面が被熱赤化し、内面にコゲ痕跡の汚れが付着する。 [注記]6、8～20、22～24、26、28、58、59、64、北区中央部、北区D-D'	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 白・赤・透明粗～細粒 と黒細粒多、白・赤礫少 軟質	北部床上3～18cmが接 合 口1/12周、頸5/6周、 底全周 注記は左欄
18 石器 砥石	長 残10.9 幅 残10.6 厚 残6.9 重 残763.0	自然礫の全周を底面に利用する。石材が硬質なので研磨痕は不明瞭。横断面図に記入したように、よく磨耗して平滑になっている部分と、それに加えて敵いたような傷が目立つ部分と、あまり磨耗していない部分がある。図の下端が折損して、その破面の外周が少し丸くなっているため、折損後にも研磨に使っていたと考えられる。被熱痕や付着物は見られない。	5Y5/1 灰 緻密で非常に硬質なホルンブ エルス	貯蔵穴底上4cm 両端部欠 70
19 石製模造品 有孔円板	長 2.0 幅 1.8 厚 0.29 重 2.1	表裏両面ともに1方向に研磨されており、やや粗い擦痕が見られる。縁部には形割時のものと見られる剥離面が残る。側面は穿孔と同方向に研磨されており、細かな擦痕がある。表側からの穿孔と見られ、初孔径1.77mm、終孔径1.61mmで、裏側の孔外周には穿孔時の剥離がある。茨城県筑波山系の石材を使用。	2.5GY5/1 オリーブ灰 緻密で硬質な絹雲母片岩	東部の掘方底上9cm (SI- 34床内) 完形 95
20 石製模造品 剣形品	長 6.53 幅 2.31 厚 0.4 重 9.9	断面台形。大半はやや細かい研磨痕を残す。表面の左右縁辺は粗い条線状の研磨痕となる。表側中央と裏側左右縁辺に形割時の剥離面が残る。側面は部分的に穿孔と同方向に研磨されており、先端部が最も入念。穿孔は表側からと見られ、初孔径1.76mm、終孔径1.68mmで、裏側の孔の周囲は穿孔時に大きく剥離している。	5G3/1 暗緑灰 緻密な滑石片岩	北部床上1cm 完形 65
21 石製模造品 剣形品	長 残3.77 幅 1.68 厚 0.45 重 残3.03	表側の三叉状筋が明瞭で、各面ともほぼ1方向に研磨され、細かな条線が見られる。裏側右側縁および左上方には形割時の剥離面が残る。側面は基部縁を中心に、穿孔と同方向に部分的に研磨される。穿孔は表側からと見られ、初孔径1.64mm、終孔径1.51mmで、裏側の孔の周囲は穿孔時にわずかに剥離している。	N3/(B) 暗灰 緻密な滑石片岩	SI-34aの貼床下の土坑 P9内 先端部欠 70、SI-34B
22 石製模造品 有孔刺片	長 2.48 幅 3.61 厚 0.73 重 6.88	平面三角形で、やや厚い板状。表側は剥離面。裏側は全体に酸化した鉄分が付着しており、節理面から形割したものと思われ、左側縁に工具による切削痕がある。側面は形割時の剥離面と工具による切削痕が明瞭で、黒色物質が付着。孔は2箇所あり、右側は径3.0mmで貫通しておらず、表側から深さ1.5mmで止まっている。左側は貫通しており、穿孔は表側からと見られ、初孔径3.10mm、終孔径2.30mmで、裏側の孔の周囲はわずかに剥離している。	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密で軟質な粘板岩	完形

SG10区 SI-104 (第138図、写真図版119・120)

[位置] SG10区中央部の19-18グリッドにある。同じく古墳中期の建物は南にSI-53・55、東にSI-56・57がある。古墳後期のSI-51a・b・cと、攪乱の可能性が高いSX-308と、時期不明のSE-345(中世?)

と P-429 に切られる。時期不明の P-428 に切られる可能性がある (SI-104 → SI-51abc → P-428?・429・SE-345)。時期不明の SK-328・329 が SI-104 を切る。北西部の掘り込みは砂利が多く入り、SI-104 に伴う土坑ではなくて攪乱の可能性が高い (断面 E-E')。南壁付近の上部は SI-51b (旧名称 SI-109) に破壊され消滅しているが、SI-51b の下層に SI-104 掘方の下部がわずかに残る (断面 E-E')。

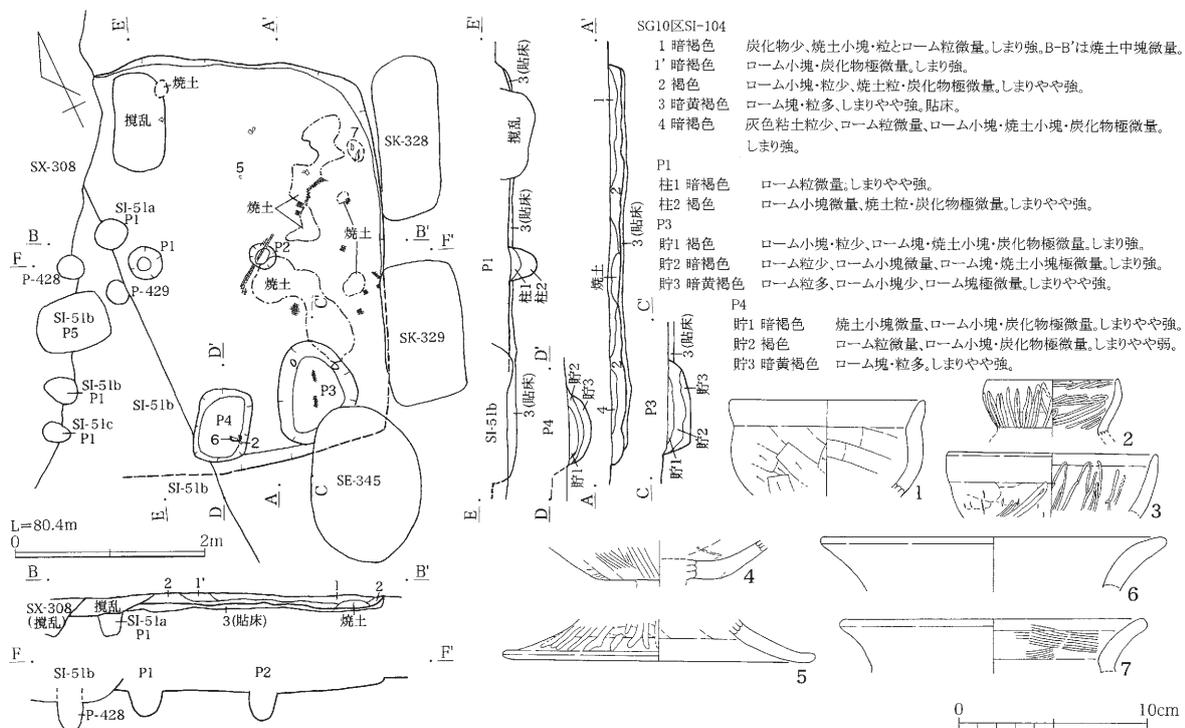
[規模と形状] 長方形の建物跡で、主軸方位は GN-24° -E、主柱穴 P1 と P2 を結ぶ方位は GN-66° -W。東西残長 3.14 × 南北 4.46m で、東西の復原長は 3.80m (P2-東壁間の距離 1.27m が、P1-西壁間の距離と同じ場合)。残存壁高は南壁で最小 6cm、北東隅で最大 12cm。主柱穴は 2 本で、P1-P2 の柱間は東西 1.26m。底面形から推定した柱径は 12 ~ 14cm 程度で、床面からの深さは P1=28cm、P2=34cm。梯子穴などの入口施設は見られない。貯蔵穴は南東隅の P3 と南中央の P4 がある。SG10 区では SI-6 などに複数貯蔵穴がある。P3 は不整楕円形で東西 84 × 南北 108 × 深さ 21cm。P4 は隅丸長方形で東西 56 × 南北 76 × 深さ 23cm。P3 は貯蔵穴としては少し不整形で、遺物もなく、埋め戻して上に貼床をしたように見える。SI-84a のように P3 から P4 へ作り替えたとも考えられる。壁溝・間仕切溝はない。

[火処] 確認されなかった。建物の時期から考えると炉を持っていた可能性がある。

[覆土] 自然埋没と思われる。テフラの層や粒などは認められない。焼土と炭化材が多いので、火災建物の可能性がある。SG10 区の火災建物は SI-66 などがある。

[遺物出土状況] 東半部の床面付近や貯蔵穴 P4 の底面上 17 ~ 20cm で、少量の土師器小破片が出土した。重複する時期不明 (中世?) の SE-345 内で残存度の高い土師器壺が出土し、SI-104 から流入した可能性がある (第 221 図)。

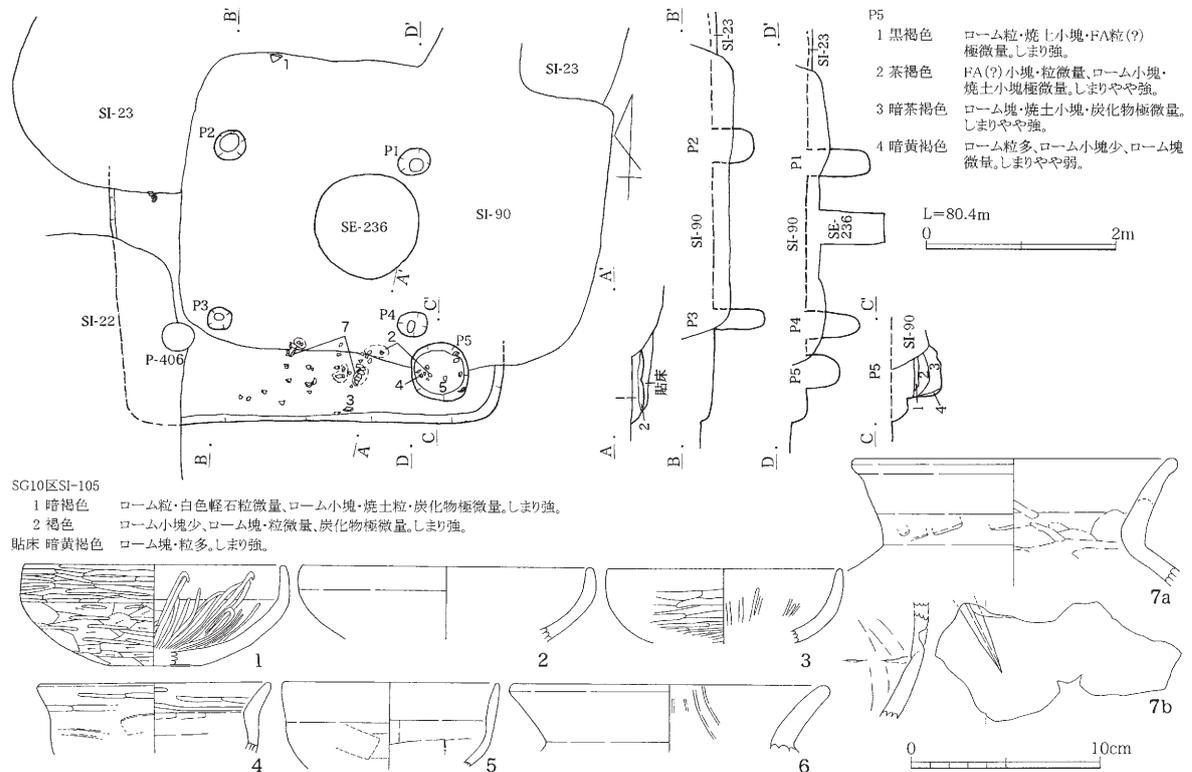
[出土遺物] 遺物はごく少ない。小形壺 (2) の口縁部が短縮化しているのが、古墳中期後葉とみられる。土師器は壺甕類が主体で杯・高杯・小形壺も混じる。重複する SI-51a ~ c から混入した古墳後期の遺物もある。SE-345 で出土した古墳中期の遺物は SI-104 から流入した可能性が大きい。図示以外の土師器合計 89 片・693g の内訳は、杯 70 片・381g、高杯 2 片・22g、小形壺 1 片・12g、壺甕類 16 片・278g。



第 138 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-104 遺構・遺物

第81表 権現山遺跡 SG10区 SI-104 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復10.3 高 残5.1	口～体部境の稜は内面でやや明瞭。外面は体部ナデ後ナメヘラケズリ。内面は体部ナメヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。破片が小さいので復原径は参考値。	5YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 白・黒・灰色粗粒と黒・透明 細粒やや多 軟質	口 1/12 周、頸 1/6 周 一括
2 土師器 小形壺	口 復6.9 高 残3.0 最大 復7.4	内彎する短い口縁部の内外面にナメナデ後ヨコナデして、外面に縦位と内面に横位のヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・黒・赤細粒やや少 やや硬質	貯蔵穴 P4 底上 17cm 口 1/4 周 11
3 土師器 小形壺?	口 復11.2 高 残3.4	外面は軽いナデで粘土のヒビを少し残し、口縁部ヨコナデ後に疎らなナメヘラミガキ。内面はおそらくヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ、全体をタテヘラミガキ。小形壺の口縁部と見られるが、杯の可能性もある。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白細粒少 やや軟質	口 1/6 周 一括
4 土師器 高杯	高 残1.7	外面は杯底部を横～斜位ナデ後に杯体部ナメハケ。内面は縦～斜位のヘラナデ。	7.5YR6/8 橙 緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	杯底 1/4 周 一括
5 土師器 高杯	高 2.2 脚裾 復16.4	外面は脚部ナデ後に脚裾をヨコナデして全体をタテヘラミガキ。内面は脚部ナメナデ後に裾部ヨコナデ。	10YR4/6 褐 やや緻密 白礫と白・黒・赤・ 透明細粒少 やや硬質	北部床土 2cm 脚裾 1/8 周 2
6 土師器 甕	口 復18.2 高 残2.9	口縁部内外面ヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 透明粗～細粒多、 白・黒細粒やや多、赤粗粒少 やや軟質	貯蔵穴 P4 床土 20cm 口 1/6 周 12
7 土師器 甕	口 復16.2 高 2.9	内面口～頸部境に稜あり。内面口縁部ヨコハケ後に内面上端と外面口縁部をヨコナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白礫と白・透明粗 粒多、白・黒・透明細粒少 硬質	北東部床直上 口 1/3 周 7



第139図 権現山遺跡 SG10区 SI-105 遺構・遺物

SG10区 SI-105 (第139図、写真図版120・207)

[位置] SG10区南部の18-16・17グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、北にSI-25・28・30がある。古墳後期のSI-22・23、平安時代のSI-90、時期不明(中世?)のSE-236に切られる(SI-105→SI-22、SI-105→SI-23→SI-90→SE-236)。時期不明のP-406がSI-105とSI-22を切ると推定される。新旧関係は不明。現地調査時にSK-279・280・281・282と呼称した柱穴を、このSI-105の主柱穴P1～P4に改称した。

[規模と形状] 方形で主軸方位はGN-2°-E。東西4.20m、南北残存長2.46m以上。残存壁高は西壁中央で最小3cm、南東部で最大14cm。主柱穴4本の柱間は南北1.75m(東側)～1.90m(西側)、東西1.95m(北

第 82 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-105 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.9 高 5.2 底 3.3	外底面は円周方向のヘラケズリで凹底状。外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラケズリ後に疎らなヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後にナナメヘラミガキ。	2.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗粒やや多、 白・黒細粒少 やや硬質	北西部の SI-23 に流入 (床 1cm) 口 1/3 周、底 1/2 周 SI-23 173
2 土師器 杯	口 復 15.4 高 残 3.9 最大 復 15.8	器面が磨耗して調整が不詳。外面体部はおそらくやや雑なケズリまたはナデで、外面口縁部と内面は丁寧に調整されていた可能性がある。ミガキの有無は不明。 [注記]7、12、13、貼床一括、SI-90 2	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗粒やや少、白 細粒と灰色粒少 軟質	南東部床直上と貯蔵穴 底上 19cm が接合 口 1/4 周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 4.0	特に内面で表面が磨減しており、調整が不明確な部分がある。外面は口縁部ヨコナデ、体部ナデ後にヨコヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデと体部ナデ後疎らな放射状のミガキ。	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 赤粗粒と軟質白粗 粒やや多、灰色粗粒と黒・透 明細粒少 やや硬質	南部床直上 口 1/12 周、体 1/6 周 21
4 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 3.7	口～体部境の稜が内面で明瞭。内外面ともに体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 赤粗粒やや少、 白・黒・赤・透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 26cm 口 1/4 周 11、一括
5 土師器 杯	口 復 11.5 高 4.6	口～体部境の内面に稜を持つ。器面が磨耗して調整が不明確だが、内外面の体部はヨコヘラナデの可能性あり。口縁部はヨコナデで、ヘラミガキをしているかどうかは不詳。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤礫～粗粒多、黒 細粒少 軟質	貯蔵穴底直上 口 1/8 周 5
6 土師器 甕	口 復 16.2 高 残 3.6	内外面ヨコナデ。内面口縁部に浅い沈線状の傷が焼成前に付いている。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白粗～細粒と黒・ 透明細粒やや多、灰色粗粒少 軟質	口 5/12 周 一括
7a 土師器 大形壺	口 復 16.8 高 6.7	外面は頸部ナナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は肩部ナデ、口縁部ヨコナデ後に頸部ナナメヘラナデ。7b と同一個体の可能性あり。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・灰色粗～ 細粒多、白礫と赤・透明細粒 少 やや軟質	南部床 上 13cm 口 1/4 周、頸 1/3 周 34、一括、一括ベルト 面
7b 土師器 大形壺	高 残 6.6 最大 復約 25	外面はナデまたはヘラナデと見られるが、磨耗して不明確で、断面 V 字形の加工が焼成後に行われている。土器片を研磨具に転用したものかもしれない。内面はナナメヘラナデで、粘土紐の積み上げ痕を残す。7a と同一個体の可能性あり。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒粗～細粒と 赤・透明細粒やや多 軟質	南部床 上 3cm 胴 1/6 周 19、一括

側) ～ 2.03m (南側)。柱穴の土層断面記録がない。柱穴底面形からみた推定柱径は 10 ～ 15cm。推定床面レベルからの深さは P1=68cm、P2=46cm、P3=60cm、P4=58cm で、北東の P1 と南西の P3 がやや深い。貯蔵穴 P5 は南東隅にあり、東西 60 × 南北 62 × 深さ 33cm。入口施設・壁溝・間仕切溝はない。

[火処] 不明である。古墳中期後葉なので炉を持っていた可能性があり、SI-90 などに破壊されたと考えられる。

[覆土] 南壁部および貯蔵穴の土層からみて自然埋没と思われる。古墳後期初めに降下した Hr-FA テフラの可能性を持つ白色塊や粒が、竪穴覆土 1 層や貯蔵穴 P5 の 1・2 層に見られる。

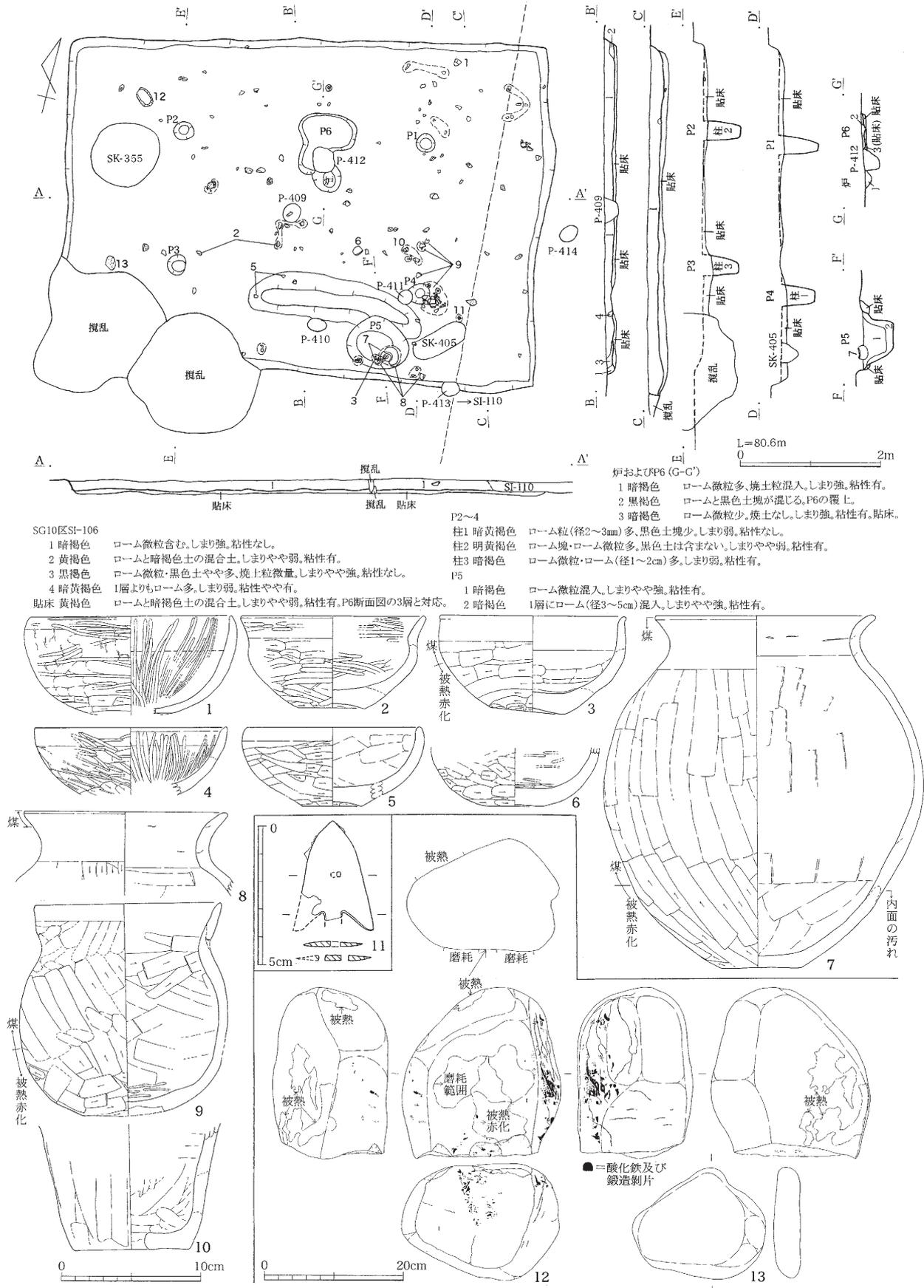
[遺物出土状況] わずかに残っていた竪穴南端と貯蔵穴に破片がやや多く、柱穴には遺物がない。残存度の高い遺物はない。1 は重複する古墳後期の SI-23 に流入していた。重複する古墳後期の SI-22 に混入する古墳中期の土師器高杯と須恵器甕も、SI-105 から流入したのかもしれない (SI-22 の遺物番号 11・12)。

[出土遺物] 遺物は少なく、小破片がほとんどで、大きな破片がない。本来は遺物が多かっただろうが、他の建物に大半が壊されて減ったと考えられる。土師器は杯と壺が多く、小形壺と甕が次ぐ。杯は内斜口縁の 4・5 と半球状の 1～3 があり、口縁部を横方向によく磨き (4)、深い (1～3)。鉢形に口が開く杯は見られない。凹底(1)の模倣杯からみて古墳中期後葉である。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 183 片・1,556g の内訳は、杯 53 片・286g、高杯 4 片・24g、壺甕類 121 片・1,221g、焼粘土塊 5 点・25g。

SG10 区 SI-106 (第 140 図、写真図版 120・121・173・174・207・208)

[位置] SG10 区北部の 20-17・18 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、北に SI-60、西に SI-50、南に SI-48 がある。古墳後期の SI-110 に東端部を切られ、その下層に SI-106 の掘方が残る (断面図 A-A')。時期不明の SK-355・405 と P-412・413 に切られる。中央部～南部の床面で確認した時期不明の P-409・410・411 は、SI-106 の貼床に覆われていないので SI-106 を切る可能性が高い。P-411・413 は SG10 区中央部柱穴群 (第 204 図) に含まれ、P-409・410・412 も同様の性格が考えられる。SG10 区中央部柱穴群は時期不明の柱穴群で、一定数の中世柱穴を含む。

[規模と形状] 長方形で、主軸方位は GN-10° -W (建物の長軸は GN-80° -E)。東西 6.84 × 南北 5.00m、残存壁高は 12 ～ 18cm。主柱穴 4 本の柱間は南北 1.94 (西側) ～ 2.14m (東側)、東西 3.46m。柱穴底面形



第140図 権現山遺跡 SG10区 SI-106 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

から推定した柱径は 13～18cm 程で、床からの深さは P1=48cm、P2=48cm、P3=41cm、P4=43cm。

南東部の貯蔵穴 P5 は楕円形で東西 88×南北 72×床面からの深さ 43cm。P5 の北にある土手状高まりは東西長 252cm で、入口と貯蔵穴を「コ」や「ヨ」字形に囲む施設だった可能性が高い。この土手状施設の中心が、地山ロームを掘り残して作られていることは珍しい（断面 B-B' と F-F'）。平坦な貼床上にローム質土を貼って土手状施設を作る場合が一般的である。炉の北側にある P6 は東西幅 46cm（南部）～84cm（北部）、南北長 92cm、床面からの深さ 2～4cm で、焼土を含まない。壁溝・間仕切溝はない。

〔炉〕中央部の少し北にある。東西 40×南北残存 40×床から深さ 4～10cm で浅く、焼土粒を含むがその量は少ない。炉の北側にある P6 と連続する部分の状況は後世の P-412 に切られて不詳（断面 G-G'）。

〔覆土〕壁際の堆積状況からみて自然埋没と思われる（断面 B-B'）。テフラの層や粒などは見られない。

〔遺物出土状況〕南東部に多い。南東柱穴 P4 の北東側でほぼ床面に土師器小形甕がある（9）。貯蔵穴 P5 の埋土中には、正立した土師器甕 1 個（7）と、別個体の甕の口～胴部破片（8）がある。西部の床面に大きな金床石（12）と台石（13）がある。貼床中にも遺物が少しあり、北東隅付近に目立つ。

〔出土遺物〕古墳中期後葉の、口が開く杯（2）や内外面を磨く初期模倣杯（1・4）がある。10 は珍しい円筒形の小型甕。7・8・9 は炉で使った痕跡がわかる甕で、7 はほぼ完形。

遺物は多いが小片が大半で、形を復原できるものは少ない。古墳後期の SI-110 に切られるので、SI-110 からの混入品を含む可能性がある。破片は壺甕類が最も多い。杯も破片数が多く、図示した以外に 3 個体分はある。内斜口縁杯より半球形杯が多く、ほとんど平底である。内斜口縁杯の口縁部が開くので古墳中期後葉と考えられる。図示以外に二重口縁状の壺破片や、9 に似た小形甕がある。高杯・小形壺・甕は破片が少なく、小形甕（10）以外は接合・図示できなかった。図示以外の土師器合計 493 片・3,439g の内訳は、杯 173 片・732g、高杯 27 片・221g、小形壺 7 片・111g、壺甕類 284 片・2,313g、甕 2 片・62g。

11 は有孔の短柄鏝で、SG10 区 SD-527 にも破片があり、中島笹塚 12 号墳や琴平塚 14 号墳にもある（『東谷・中島地区遺跡群』4・9）。金床石（12）は、『東谷・中島地区遺跡群』10 で権現山遺跡の鍛冶関連遺物全体を報告後に確認したため、同書 pp.490-498 には掲載していない。他に鍛冶関連遺物がないので、周辺の鍛冶関連遺構から金床石を SI-106 に廃棄したと考えられる。礫も出土したが、小さめで形も統一性がない。河川礫でなく地山礫層に由来する礫を含むと想定される。中世の土師質小皿（かわらけ）が混入していて、P-411・413 を含む SG10 区中央部柱穴群（中世の可能性はある）との関連が考えられる。

第 83 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-106 出土遺物

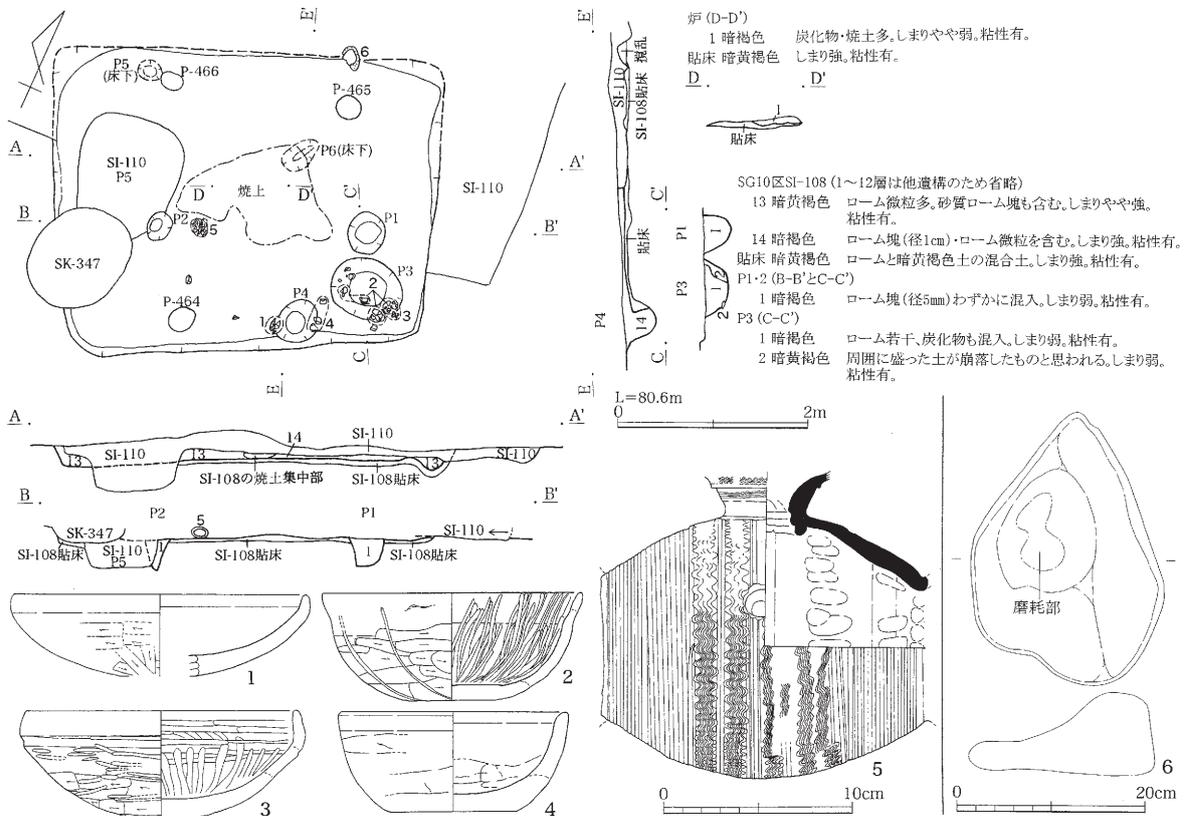
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.4 高 残 7.0 最大 復 15.2	外面は口縁部ヨコナデと体部に軽いナデ後、口～体部に疎らなミガキ。体部には粘土の皸が残る。体部下半はケズリで、ミガキが施された可能性もある。内面は口縁部ヨコナデと体部におそらくヨコヘラナデ後疎らな放射状ヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒少 やや軟質	北東部床直上 口 1/6 周 22
2 土師器 杯	口 13.0 高 6.6 底 4.5	外底面はヘラケズリで凹底状にした後、ヘラナデで丁寧に仕上げる。外面は体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ後、ヘラミガキまたはヘラナデ。内面は体部ナデ後に横～斜位ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗粒と白細粒や やや多、赤・黒・透明細粒少 やや軟質	南西部床直上 口 1/6 周、底 1/2 周 69、南西
3 土師器 杯	口 復 13.3 高 6.8 底 5.3	外底面は多方向のナデで凹底状。外面は上位ナデ後に中～下位ヨコヘラケズリ。内底面に 1～2 方向の軽いヘラケズリと内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面に被熱痕と煤が見られる。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒やや多、黒・透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 40cm 口 1/3 周、底全周 P5-1-991025
4 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 4.8	外面は口縁部に軽いヨコナデと体部上半に軽いナデ、体部下半ケズリ後口～体部に疎らなヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデと体部にヘラナデ後口～体部に密な放射状ヘラミガキ。外面の口～体部に煤が付着する。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、灰色粗粒と黒・透明細 粒少 やや硬質	北西部 2 片と北東部 1 片と貼床内 5 片 口 1/6 周 北西、貼床内、北東ト レンチ
5 土師器 杯	口 復 12.2 高 5.7 底 復 4.3 最大 復 13.0	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に多方向のやや雑なヘラナデ。体部と底部の破片間に接点がないので、器高は推定値。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・透明粗～細粒 と赤・黒細粒少 やや軟質	南部床直上～床上 5cm が 接合 口 1/3 周、底 5/12 周 92、103、南西、貼床内
6 土師器 杯	高 残 4.2	外面は体部に横～斜位ヘラナデ後、下位～底部を主とするヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向ヘラナデ、体部ヨコヘラナデ後にヘラミガキ。底部が厚く黄橙色粘土を使い、体部には明赤褐色粘土を使う。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白礫と白・黒粗～ 細粒やや多、赤・透明粗粒少 やや軟質	中央部床上 10cm 底全周 84
7 土師器 甕	口 14.8 高 25.2 底 5.7 最大 22.8 重 残 1960.5	外底面は軽いナデ。外面は胴部タテヘラナデ後、積み上げ休止部の厚い部分より下方の胴下位をナメヘラケズリ。内面は胴下位をナメナデ後に中位以上をヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。胴下位の外面が被熱して内面に汚れが付き、中位以上の外面に煤がやや付着する。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・透明礫～粗粒 多、灰色粗粒と白・赤・透明 細粒やや多 やや軟質	貯蔵穴底上 29cm ほぼ完形 口 1/3 周欠 P1-2、P5-1-991022、 東トレ、南

8 土師器 甕	口 復 14.5 高 残 6.0	肩部に外面タテヘラケズリと内面ヨコヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部上位の外面に少量の煤が付着する。胴部は破片数が少ないため、接合・復原ができない。 [注記]90、P1-2、P1一括、P5-1-991022、南、南東、貼床内	7.5YR4/6 褐 粗い、白礫～細粒多、灰色・透明粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	南部床土 3cmと貯蔵穴底土 40cmが接合 口 1/4 周、頸 1/3 周 注記は左欄
9 土師器 小形甕	口 13.4 高 15.2 最大 14.9	外面は下位ヨコヘラケズリ、中位ナメヘラケズリ、頸部ナメナデ。内面はヨコヘラナメヘラナデ後に肩部ヘラケズリと底付近に雑なヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い、白・赤・灰色礫と白・黒粗粒多 やや軟質	南東部床直上 一部欠 50、53、54、94、南
10 土師器 小形甕	残 9.0 高 復 8.0 底 復 1.8	外底面は多方向のナデ。外面胴部はタテヘラナデ。内面は底部に円周方向と体部に斜位のヘラナデ。底面中央に1孔を持ち、孔縁部もナデ。	10YR5/8 黄褐 やや緻密 白・黒・赤・透明 細粒少 やや硬質	南東部床土 8cm 底 1/6 周 55
11 鉄製品 鉄鎌	長 3.9 幅 復 2.9 厚 0.2	短柄腸扶柳葉形身鎌。縦2mm×横3mm程の孔を1孔持つことがX線写真で観察され、その孔の左半分が錆で見えない現状。鎌身部や短柄部に木質等の付着物はない。残存重量3.4g。		南東部床土 8cm 片方の逆刺欠損 49
12 石器 金床石	長 24.6 幅 22.6 厚 16.2 重 12.2kg	図の下手側が大きく欠けている自然石を用いた金床石。図の正面と右側面を打面に利用している。正面は赤化磨耗が顕著であるが、鍛造剥片や鉄錆の付着は少ない。右側面から正面にかけての部分に、鉄錆(茶褐色)と鍛造剥片(暗灰色)が最も多く付着するが、被熱痕は不明。これ以外の各面にも被熱痕と鉄錆がそれぞれ付着している。鍛冶関連遺物構成Noなし。	2.5Y7/3 浅黄 緻密で硬質な流紋岩 磁着度 2 メタル度 不計測	北西部床直上 完形 77
13 石器 台石	長 19.0 幅 16.0 厚 3.8	扁平な自然礫をそのまま利用。図示した面は平坦で、裏面には緩い凹凸が少しある。加工・使用痕や付着物は見られない。重量1619.0g。	7.5Y6/1 灰 緻密で硬質な安山岩	南西部床直上で図示した面を上に向ける 完形 75

SG10区 SI-108 (第141図、写真図版121・122・208)

[位置] SG10区北部の20-18グリッド。古墳後期のSI-110と時期不明のSK-347に切られる。SI-108の貼床除去後に古墳時代のP-464・465・466を確認したが、SI-108とP-464～466の前後関係は不明瞭で、この3基がSI-108より新しい可能性もある。SI-108とP-465～466→SI-110→SK-347の順序になる。P-465・466の上にSI-110の遺物が載るので、SI-110よりもP-465・466が古いことは間違いのないと思われる。

[規模と形状] 長方形で、南側に建物入口を想定した場合の南北主軸方位はGN-21°-W(東西軸の方向はN-69°-E)。東西4.08×南北3.30mで、北壁上部が不明確なので南北長は推定値。残存壁高は南西部で最大14cm。主柱穴はP1とP2の2本で、柱間は東西2.24m。P1の断面形状から推定すると柱径は12～15cm程度で、床面からの深さはP1=30cm、P2=39cm。貼床除去後に確認した小穴2基は、P5が径26cm・床面からの深さ12cm、P6が径43×26cm・床面からの深さ17cm。



第141図 権現山遺跡SG10区 SI-108 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

貯蔵穴を2箇所持つ。南東隅にある貯蔵穴 P3 は東西 75 × 南北 62 × 深さ 25cm で、P3 の覆土 2 層は周囲に設けた土手状盛土が崩れて北側から流入した可能性が現地で記録されている。貯蔵穴 P4 は東西 49 × 南北 42cm × 床から深さ 31cm で、建物の貼床と同質の土が北壁部にも貼られている（断面図 E-E'）。P4 は堅穴と同じ覆土 14 層と一緒に埋没している。P4 を入口施設の梯子穴と考える余地もあるが、やや深く大きいので貯蔵穴と判断した。貯蔵穴が複数ある建物跡は、SG10 区では SI-6 などがある。床面東端に窪んだ部分がある（断面図 A-A'）。壁溝・間仕切溝はない。

〔炉〕 明確な掘り込みを持たないが、床面中央部を炉に使用したと考えられる。中央部床面で東西 168 × 南北 109cm の範囲に広く焼土と炭化物粒があり、断面図 D-D' の部分に焼土が最も多い。

〔覆土〕 ほとんどが暗黄褐色の 13 層だが、中央部から南部にかけては土質が少し異なる（14 層）。テフラの層や粒などは認められない。SI-108 の覆土上部が SI-110 に切られるところでは、SI-108 覆土と SI-110 貼床土の区別が困難であった。

〔遺物出土状況〕 床直上に樽形甕がある（5）。南東部に遺物が多い。貯蔵穴 P3 の上部から南側床面直上に掛けて土師器杯が多い（2・3）。貯蔵穴 P4 内の上部にも杯がある（1・4）。台石（6）は、堅穴床レベルの約 10cm 下まで床面を掘り窪めて据えていた。ここは北壁が不明確な位置で、北壁も外側へ掘り広げていた可能性がある。

〔出土遺物〕 遺物は少ない。1・3 のように白色針状物質（骨針）を含む搬入品の土師器は SG10 区 SI-23 などにある。TK-208 型式の須恵器樽形甕は、口縁端と体部両端が欠損したために遺棄された土器であろう。樽形甕は磯岡北 1・3 号墳にある（『東谷・中島地区遺跡群』7）。土師器は壺甕類と杯類が中心で、それ以外の器種は僅少である。図示以外の土師器合計 34 片・345g の内訳は、杯 10 片・55g、高杯 2 片・5g、小形壺 1 片・3g、壺甕類 21 片・282g。台石（6）は、窪んだ部分が少し磨耗するので、石皿つまり製粉具のような用途が想定される。

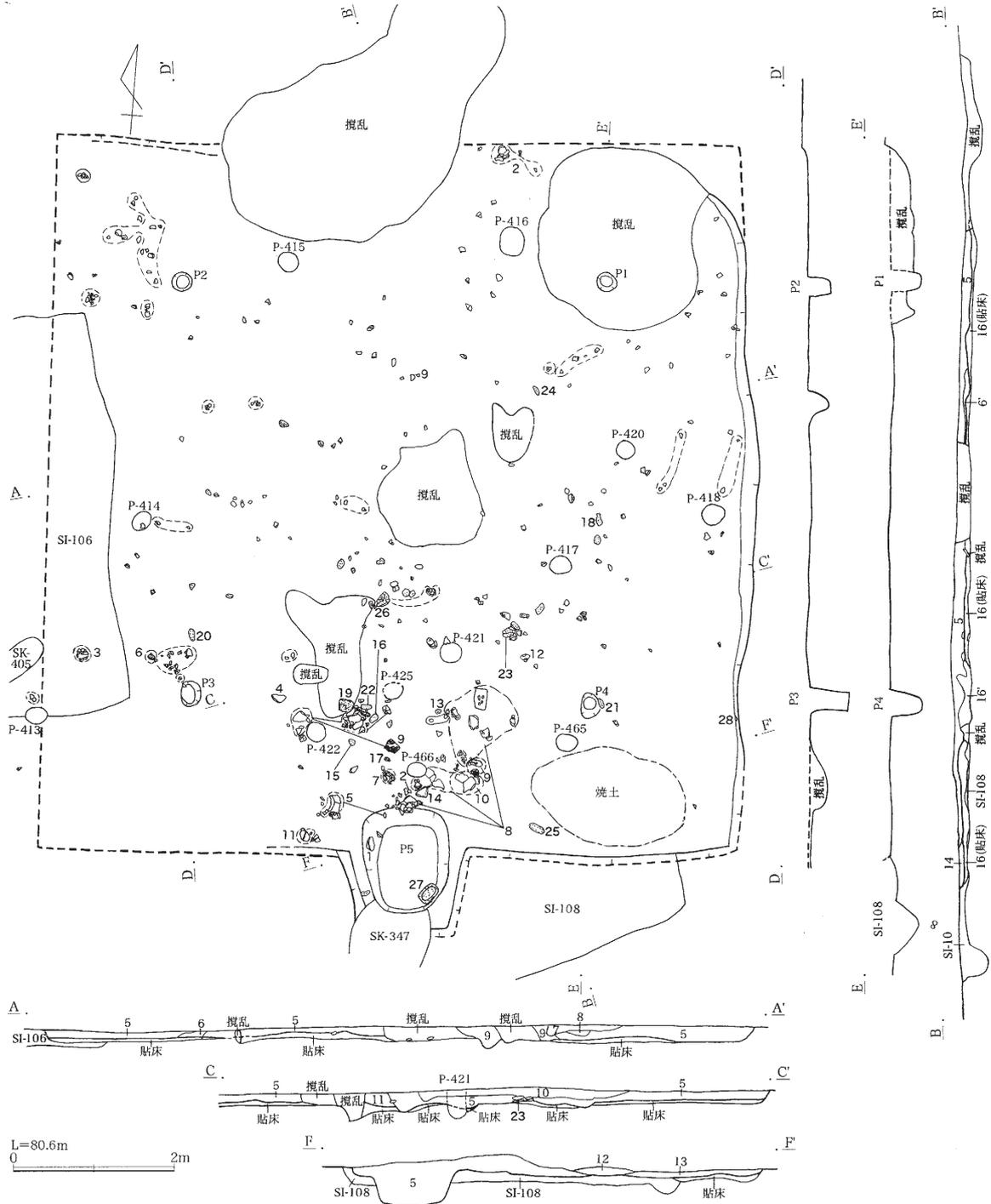
第 84 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-108 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 15.4 高 残 4.3 最大 復 15.9	外底面に縦位と外面体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部は磨耗して調整不詳で、放射状にヘラミガキしていた可能性もある。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・黒・赤・ 灰色・透明粗粒やや多、白色 針状物質少 やや硬質	南東部床土 2cm 口 1/6 周 5
2 土師器 杯	口 復 13.7 高 5.7 底 4.4	口～体部境の稜は、内面が明瞭で外面には稜がない。外底面ナデと口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ、外面全体に疎らな放射状ヘラミガキ。内面は口～体部にヨコナデ後、密な放射状ヘラミガキ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南東部 P3 底上 7～25 cm が接合 口 2/3 周、底全周 P3-1、(P3)2、P3-4
3 土師器 杯	口 14.2 高 5.8 最大 15.0	外面は底部に多方向と体部中位に横方向のヘラケズリ。口縁部はヨコナデで、外面体部上位が凹む。外面体部中位と内面上半をヨコヘラミガキ、内面体部に斜放射状のヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・黒・透明粗～ 細粒やや多、赤・灰色粗粒と 白色針状物質少 やや軟質	P3 底上 24cm 口 2/3 周 P3-1
4 土師器 鉢	口 復 11.8 高 5.3 底 6.6 最大 復 12.2	外底面はナデで平底。内外面は体部ナデ後に口縁部ヨコナデと見られるが、磨滅して不明瞭。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・透明細粒多、 赤粗～細粒と黒細粒少 軟質	南東部床土 5cm と P4 底 土 33cm。SI-110 に小片 1 点混入 口 1/36 周、底 11/12 周 6、SI-110 南東トレンチ
5 須恵器 樽形甕	高 残 16.2 長径 残 17.0 短径 14.3 孔 1.3 重 残 1185.6	体部長軸を上下に向けた状態で、縦位の平行叩き調整後にカキメ。体部中央・左・右の 3 箇所に沈線を入れて体部を 4 分割し、左半に 2～3 周、右半に 2～4 周の櫛描波状文。工具は 5～9 歯で、施文方向は左半が図の下→上方向、右半が上→下方向。図の右端面は体部成形後に閉塞した板が外れる。頸部は 4 歯工具で右→左方向へ波状文を口縁部と頸に描く。体部内面は緩い回転ヨコナデとユビオサエ痕。頸部内面はわずかに絞り目状。全体の上半部に緑灰色の自然釉。	7.5YR4/1 灰 緻密 白礫～細粒と黒色湧出 粒少 硬質	中央部床直上 左端外周・右端面・口 縁部が欠 2
6 石器 台石	長 28.6 幅 20.0 厚 9.5	片側が厚い自然石をそのまま利用。円形の凹みを持ち、その内側の中央が磨耗している。加工痕や付着物は見られない。重量 6200g。	7.5Y7/2 灰白 緻密な珩岩	北東部床下 10cm のくぼ み内 完形 1

SG10 区 SI-110 (第 142～144 図、写真図版 121・122・208)

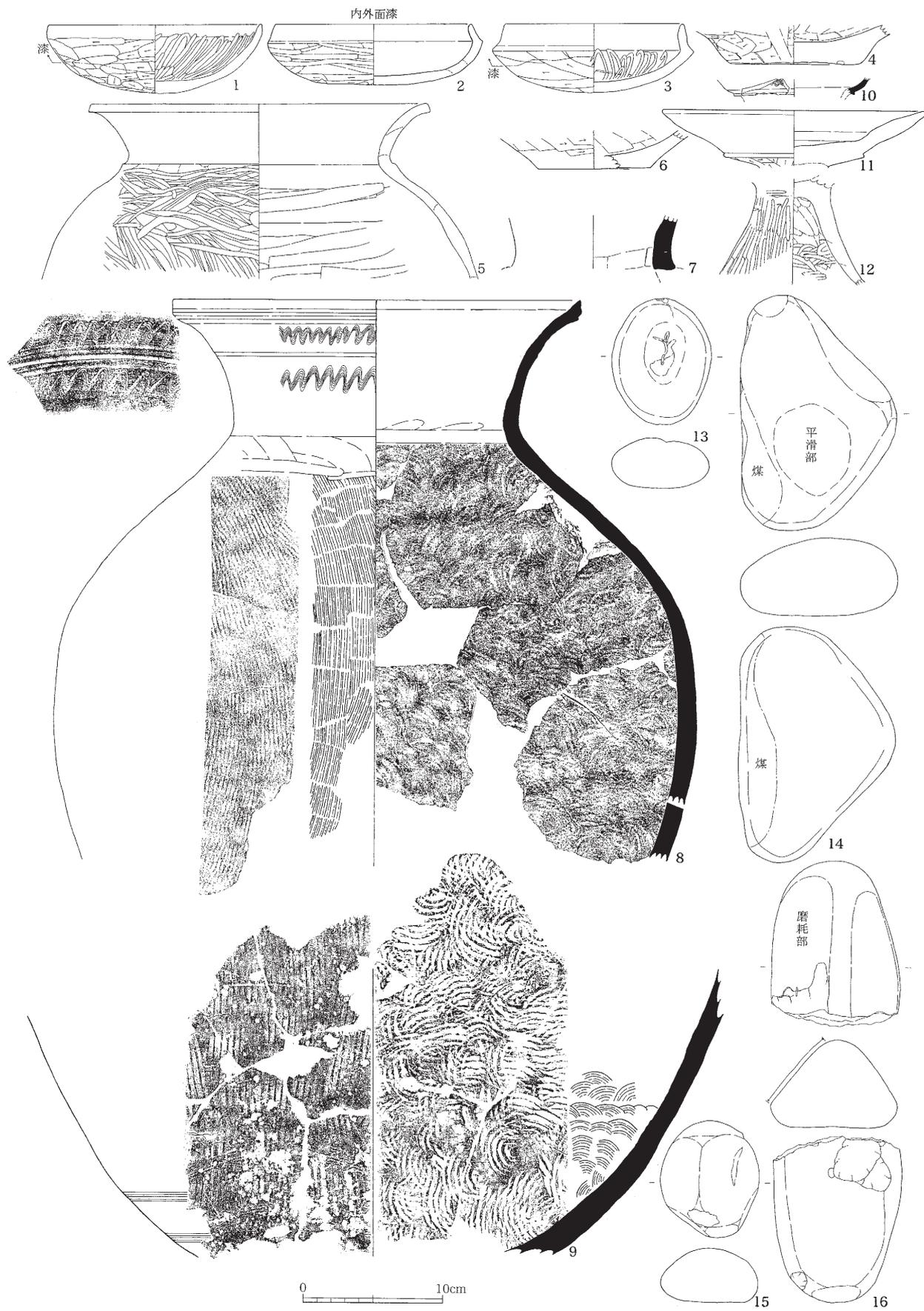
〔位置〕 SG10 区北部の 20-18 および 21-18 グリッド。同じく古墳後期の遺構は、南に SI-45・58 がある。SI-106 と重複する SI-110 西壁の平面形を確認できなかったが、古墳中期の SI-106 を古墳後期の SI-110 が切ると考えられる。南部では古墳中期の SI-108 と古墳時代の P-465・466 を切る。P-465・466 の上に SI-110 の遺物が載るので、SI-110 より P-465・466 が古いことは確かである。SI-108 と P-464・465・466

の新旧関係は不確定である。中世のP-425と時期不明のSK-347に南部を切られる。ピット3基(P-464～466)とSI-108→SI-110→SK-347とP-425の順になる。時期不明の柱穴状土坑8基(P-414～418・420～422)に切られる可能性がある。SI-110床面で確認したP-414～418はSI-110を切る可能性が高い。



- SG10区SI-110 (1～4・15層は欠番)
- | | | | |
|---------|------------------------------------|----------|--|
| 5 暗褐色 | ローム微粒混入。しまり強。粘性なし。SI-106の1層と類似。 | 10 黒褐色 | 8層と類似。しまりやや強。粘性なし。攪乱の可能性有。 |
| 6 暗黄褐色 | ロームと5層の混合土。しまり強。粘性なし。 | 11 暗黄褐色 | 5層にロームがしみのように混入。しまりやや強。粘性有。 |
| 6' 暗黄褐色 | ロームと5層の混合土。しまりやや弱。粘性有。 | 12 暗褐色 | ローム微粒極少。焼土・炭化物混入。しまり強。粘性有。 |
| 7 黒褐色 | 暗褐色土に黒色土が混入。しまりやや弱。粘性なし。攪乱の可能性有。 | 13 暗黄褐色 | ローム微粒多。砂質ローム塊も含む。しまりやや強。粘性有。 |
| 8 暗黒褐色 | 若干のくぼみにたまった腐葉土。しまりやや弱。粘性有。攪乱の可能性有。 | 14 暗褐色 | ローム(径1cm)・ローム微粒を含む。しまり強。粘性有。 |
| 9 暗黄褐色 | ローム微粒多。木の根混入。しまりやや弱。粘性有。攪乱の可能性有。 | 16 暗黄褐色 | ローム微粒多。砂質ローム塊も含む。しまりやや強。粘性有。貼床。 |
| | | 16' 暗黄褐色 | ローム微粒多。砂質ローム塊も含む。しまりやや弱。粘性有。16層が攪乱された可能性有。 |

第142図 権現山遺跡SG10区 SI-110(1) 遺構



第143図 権現山遺跡 SG10区 SI-110(2) 遺物

P-420～422はSI-110との新旧関係が不明確である。抜根時の攪乱坑が多い。SI-110が大形建物であることを把握するまでに時間を要したので、調査途中ではSI-110の北部を「SI-107」と呼称した。

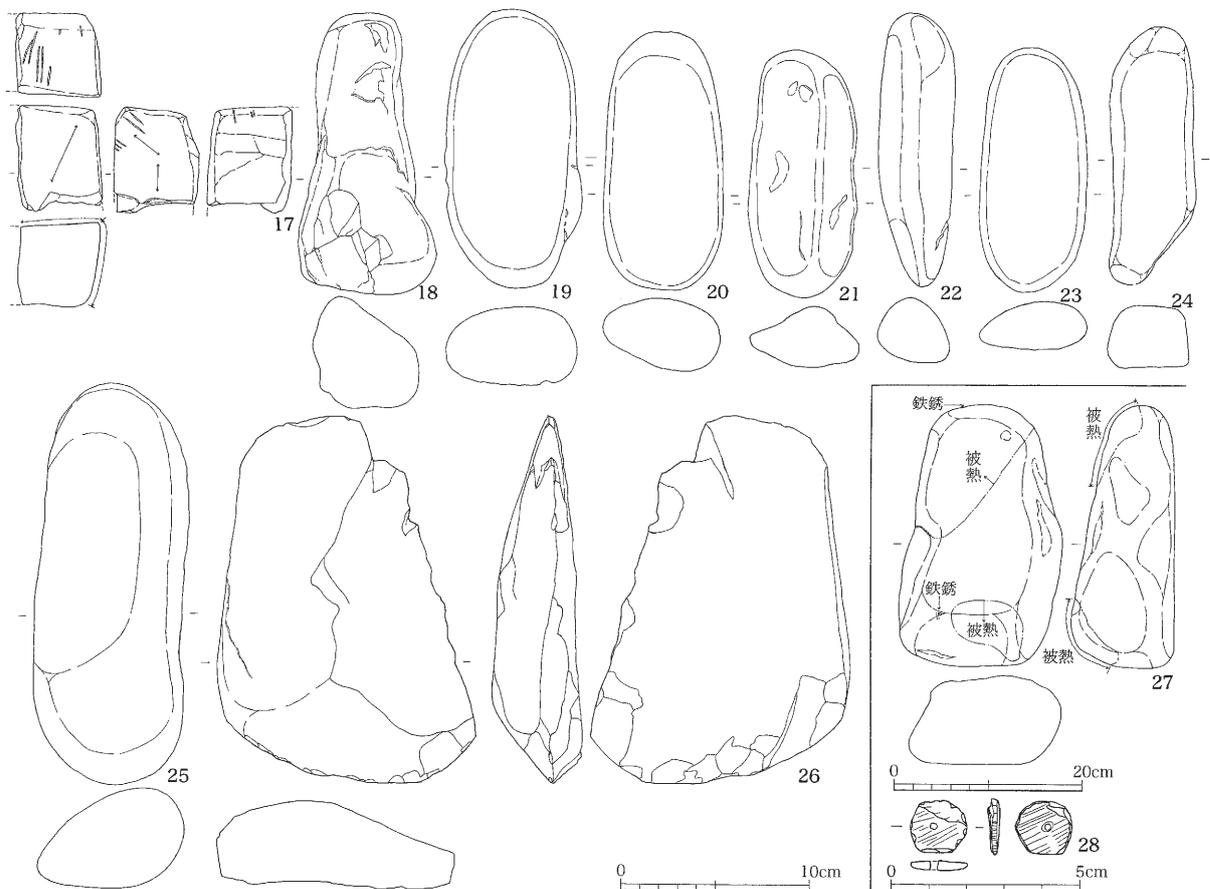
【規模と形状】 方形で、南北方向の中軸線はN-5°-Wである。東西長推定8.8m、南北長推定9.0m。壁の残りが浅く、残存壁高は最大13cm（東壁中央部）。東壁は確認できたが、北・西壁の大半と南壁西半は、削平されて消滅している。主柱穴は4本で、柱間は南北5.56m（東側）～5.28m（西側）、東西4.96m（南側）～5.22m（北側）。柱径は14～20cm、床面からの深さはP1=38cm、P2=30cm、P3=48cm、P4=38cm。入口施設は不明。南辺中央にある張出ピット（貯蔵穴）は、東西108×南北130×深さ41cm。張出ピットを持つ建物はSG10区SI-72などがある。壁溝・間仕切溝はない。

【カマド】 不明である。古墳後期の建物なので、北側にカマドがあったことを想定できる。カマドを壊した痕跡と断定するほどではないが、北壁中央の攪乱部分に極少量の焼土粒が混じっていた。

【覆土】 東半部に残った覆土5層の堆積状況からみて自然埋没と思われる。テフラの層や粒は認められない。床面から高さ7cm程度の焼土が南東部で見られた（F-F'の12層）。7～10層と16'層は攪乱層の可能性はある。

【遺物出土状況】 竪穴の残りが悪く、特に西半部が浅いにもかかわらず、全域に遺物がみられる。残存壁高が低いので、どの遺物も床面に近いレベルにある。張出ピットに近い南部に多い傾向がある。目立つのは須恵器甕の破片で（8・9）、遺構上部が残っていればこの甕破片がさらに多く出土したであろう。形や大きさに統一性がない自然の礫・石が多く、10cm未満の小礫から、カマド構築材のような被熱・剥離痕のある大石（27）まで含む。大きな石は竪穴南部に多い。

【出土遺物】 遺物量が多いが、完形に近く残存する遺物は土師器杯3点だけである。体部内面をよく磨く深い杯を含む（1・3）。4は外底面に植物種子圧痕がある。イネ籾圧痕の事例はSG10区SI-50などにある。



第144図 権現山遺跡SG10区SI-110(3)遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

図示した以外にも各器種があるが、復原図化できるような破片は少ない。7 は焼成が甘くて積み上げ痕を少し残す須恵器壺。須恵器大甕は 2 個体で、8 および 9 とそれぞれ同一個体の須恵器甕破片が多い。石器類は編物石 (18 ~ 25) の他に、磨石 (13 ~ 16) と砥石 (17) と敲石 (26) がある。カマド構築材の可能性のある被熱石 (27) は、鉄錆もわずかに付着しているが敲打・剥離痕や鍛造剥片がないので、SG10 区 SI-36・106 のような金床石とは考えにくい。

図示以外の土師器合計 822 片・5,938g の内訳は、杯 186 片・717g、高杯 45 片・481g、鉢 12 片・139g、小形壺 4 片・56g、壺甕類 571 片・4,475g、甌 3 片・65g、小形土器 1 片・5g。内傾口縁杯 1・鉢 1・壺甕類底部 10・大形甌底部 1 や、SI-106 や 108 から混入した可能性のある古墳中期後～末葉の土師器杯 (内傾口縁杯 3 個体・初期模倣杯 1 個体分)・高杯 (杯部で 1 個体分)・小形壺 (1 個体分) も含む。図示した遺物中では須恵器甕 (10)・高杯 (11・12)・滑石製模造品 (28) が中期の混入品である。滑石製有孔円板は SG10 区 SI-64a などに例がある。

第 85 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-110 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 15.1 高 5.0 最大 15.3 重 317.1	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部と内面ヨコナデ後に、内面体部を密に放射状ヘラミガキ。外面の中心以上と内面に漆仕上げ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白粗粒多、黒・透明粗～細粒やや多、赤・灰色粗粒少 やや軟質	南部床上 19cm 完形 貯蔵穴 1
2 土師器 杯	口 14.0 高 4.4 最大 15.2	外面は体部ナデ後に上半ヨコヘラナデ、外底面に 1 方向と体部下半に横位のヘラケズリ。内面は丁寧なヨコナデ。内外全面に漆仕上げ。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 白粗～細粒やや多、赤・透明・灰色粗～細粒と黒細粒少 やや軟質	北部床上 3cm 口 1/2 周、体 5/6 周 169
3 土師器 杯	口 復 12.5 高 4.9 最大 復 14.2	外面の体～底部全体に、ほぼ 1 方向のヘラケズリ。内面体部に多方向ヘラナデ→ヨコナデ→放射状ヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面上半と内面に漆仕上げ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明粗～細粒多、赤・灰色粗～細粒少 やや硬質	南西部床上 1cm 口 1/3 周、体 1/2 周 136
4 土師器 大形壺	高 残 2.8 底 復 9.2	大形。外面は胴部下端に粗いケズリ後一部ナデ。外底面はナデで、外周寄りがドーナツ状にわずかに高い。内面胴部下端～底部は丁寧なヘラナデ。植物種子 (?) の圧痕が外底面に 1 箇所あり、断面図に記入した。外面に 9cm 大の黒斑あり。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒と黒細粒やや多 硬質	南部床上 10cm 底 1/2 周 52
5 土師器 大形壺	口 復 24.2 高 残 12.5	大形品であるが器壁はやや薄い。口縁部の内外面にヨコナデ。胴部外面に密なヨコヘラミガキ、胴部内面にヨコヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒多、灰色粗粒と黒細粒やや多 やや硬質	南部床上 6 ~ 9cm が接合 口 1/3 周、頸 1/3 周 22、58
6 土師器 甕	高 残 2.7 底 復 8.0	外面胴部ヨコヘラケズリ。外底面は中央部がやや雑なナデで、外周寄りがドーナツ状にわずかに高く丁寧なナデ。内面は多方向ヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・黒・透明粗～細粒多 やや硬質	南西部床上 7cm 底 1/3 周 68
7 須恵器 壺	頸 11.0 高 残 3.9	胴部の上に頸部を載せた接合面が剥がれている。頸部最下部は紐積み痕を残す。外面はおそらく回転ナデ、内面はおそらくヨコヘラナデ。器面が磨耗して調整が不明瞭。	2.5Y7/2 灰黄 やや粗い 白・灰色粗粒多、白礫と灰色細粒少 軟質	南部床上 11cm 頸全周 24
8 須恵器 甕	口 復 28.7 高 残 39.7 最大 復 45.4	木目平行の溝を持つ叩き板で、縦～斜位の平行叩きを施して、頸に接する部分にナデ。頸部中心の凹線より上と下にそれぞれ 6 歯の工具で右から左へ櫛描波状文を描く。口縁部外面に凹線状の凹みが 2 条。内面はやや不明瞭な同心円状の凹線が上から下方向へ進行する。破面の心部は暗赤褐色の狭い部分をサンドイッチ状に残す。	5Y4/1 灰 やや粗い 白細粒多、白・透明粗粒やや多、白礫少 硬質	南部床上 10 ~ 17cm が接合 口 1/12 周、頸 5/12 周 2、5、7 ~ 9、11 ~ 14、17、34、135、一括
9 須恵器 大甕	高 残 20.2 最大 復 49.2	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で、縦位の平行叩き後に 5 本 1 組の工具で横線を 2 周描く。内面は同心円状の凹線が 6 歯の工具で右から左へ進行する可能性があり、破片中心以下の底部叩き時には上から下へ進行する。内外面と破面中心部は灰色で、その間に橙色の部分部分をサンドイッチ状に 2 枚挟んでいる。[注記]1、6、7、16、17、27、34、36、41、48、49、54、160、一括	5Y5/1 灰 やや粗い 白・赤・透明粗～細粒やや多、黒・灰色細粒少 やや硬質	南部床上 1 ~ 19cm と中央部床上 6cm が接合 胴下位 1/4 周 注記は左欄
10 須恵器 甕	高 残 1.2	頸部上端の突線が高い。丁寧に回転ヨコナデを行う。7 歯以上の工具で右から左方向へ櫛描波状文を回転施文する。内面には暗緑色の自然軸がやや厚く付着する。破面の心部はわずかに灰褐色～赤灰色気味。古墳中期末葉の遺物が混入。	N5/(B) 灰 緻密 白細粒少 硬質	南部床上 15cm 頸上端 1/8 周 2
11 土師器 高杯	口 復 18.7 高 残 4.1	厚く重い。外面はヨコナデする口縁部と、主に縦位ヘラケズリする杯底部との境に、高さ 2 ~ 3mm の明瞭な段を持つ。脚部は接合面で外れてしまっている。内面は中央部に多方向ナデ後、底外周をヨコナデで凹ませ、口縁部もヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と黒・灰色細粒やや多 やや軟質	南部床上 9cm 口 1/3 周、杯底 5/12 周 60
12 土師器 高杯	高 残 7.3	外面は脚柱部をタテヘラケズリ後にタテヘラミガキ。内面は杯底部に多方向ヘラミガキ。脚内面は上部にナメナデ、中部に横～斜位ヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤・黒粗～細粒多、白・透明粗～細粒やや多、白礫少 やや硬質	南部床上 5cm 脚柱全周 222
13 石器 磨石?	長 8.9 幅 7.0 厚 3.5	平面形と断面形が楕円形の自然礫をそのまま利用。表面全体が磨耗している。図示した面は中央が浅く凹んでいるが、これは人為的な加工ではないと考えられる。重量 301.1g。	2.5Y6/2 灰黄 やや多孔質気味で硬質な安山岩	南部床上 7cm 完形 30
14 石器 磨石?	長 16.8 幅 11.1 厚 5.6	磨石に使った可能性があるが断定できない。図中の破線で囲んだ部分は他にも滑らかであるが、これも使用によるものかどうかは不明。図に記入した範囲は煤で暗褐色に変色。重量 1447.5g。	5Y6/1 灰 緻密でやや硬質なデイスイト	南部床上 9cm 完形 15
15 石器 磨石?	長 8.2 幅 7.0 厚 3.9	図示した面に丸味を持ち、反対面は丸味が少ない。表面全体が磨耗している。図の右上部には割れ面があるが、人為的に加工したものかどうかは不明。重量 323.1g。	N7/ 灰白 緻密でやや硬質な安山岩	南部床上 9cm 完形 43
16 石器 磨石	長 残 11.8 幅 9.0 厚 6.3	断面が隅丸三角形の自然石を利用。断面図の左半に示した範囲が磨耗する。他の面も少し使用しているかもしれない。図の下部が折損した後全面が強く被熱して赤色化。残存重量 879.4g。	7.5YR5/3 にぶい褐 緻密で非常に硬質な安山岩	南部床上 6cm 破片 1/2 位? 37

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

17 石器 砥石	長 5.6 幅 4.4 厚 4.4 重 167.8	6面のうち2面は破面。残存する4面のうち2面が砥面で、残る2面は線状の浅い加工痕を一部に残す。砥面はかなり平滑に磨耗して、ごくわずかな擦痕から研磨方向を推定して図に記入した。破面以外は各面の表面から2～5mmの深さまでが褐色になっていて、鉄分などが浸透したかまたは被熱による変色と思われる。	7.5YR5/4 にぶい褐織密でやや硬質な砂岩	南部床上 1cm 隅部残 26
18 石器 編物石	長 14.9 幅 7.2 厚 6.0	細長く図の下半が太く厚い自然礫をそのまま利用。図の左下部に破損があるが、使用の結果として生じたかどうかは不明。加工・被熱痕や付着物は見られない。重量 671.8g。	10Y4/1 灰砂岩起源の緻密で硬質なホルンフェルス	東部床上 10cm 一部欠 126
19 石器 編物石	長 14.8 幅 7.2 厚 4.4	棒状で扁平な自然礫をそのまま利用。加工・使用痕は見られない。表面全体が弱く被熱して、薄い桃色を帯びている。重量 518.7g。	2.5Y5/2 暗灰黄やや多孔質で硬質な安山岩	南部床上 5cm 完形 44
20 石器 編物石	長 13.6 幅 6.2 厚 4.0	棒状でやや扁平な細長い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 443.5g。	2.5Y5/1 黄灰多孔質で硬質な安山岩質溶岩	南西部床上 6cm 完形 70
21 石器 編物石	長 13.1 幅 5.8 厚 3.2	断面が扁平で隅丸四角形の細長い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 312.1g。	10YR7/4 にぶい黄橙織密で硬質な流紋岩	南東部床直上 完形 1
22 石器 編物石	長 14.5 幅 4.0 厚 4.2	断面が隅丸三角形の細長い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 333.7g。	7.5Y7/1 灰白緻密でやや多孔質な安山岩	南部床上 7cm 完形 42
23 石器 編物石	長 12.9 幅 5.6 厚 3.0	薄い棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 303.0g。	2.5GY8/1 灰白緻密で硬質な安山岩	中央部床上 14cm 完形 112
24 石器 編物石	長 13.6 幅 4.7 厚 3.7	断面が方形で細長い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 357.1g。	5Y7/3 浅黄緻密・硬質で石英斑晶が目立つ流紋岩	北東部床上 6cm 完形 194
25 礫	長 21.3 幅 7.8 厚 5.2	図の上部で左側が薄くなる棒状の自然礫。表面が少し研磨している可能性もあるが不明瞭。加工・被熱痕は見られない。重量 1418.9g。	10Y6/1 灰織密でやや多孔質な安山岩	南部床上 3cm 完形 244
26 石器 敲石	長 19.4 幅 13.7 厚 4.9	扁平な割石で、人為的に剥離した剥片ではない。図の下半が厚く重量感があり、下縁には敲打によって生じた剥離が連続して生じている。重量 1378.8g。	5Y6/2 灰オリーブ織密で非常に硬質なホルンフェルス	中央部床上 8cm 完形 92
27 カマド 構築材?	長 27.7 幅 16.1 厚 10.9 重 7400	上下面に広い平坦面を持ち、断面が隅丸方形の自然石をそのまま利用。図上部の広い範囲と図下部の狭い範囲が被熱して薄く赤変する。表面に鉄錆が少量だけ付着するところがあるが、敲打剥離痕や鍛造剥片は見られないので、金床石とは考えにくい。	7.5Y6/2 灰オリーブ礫岩	南部床上 9cm 完形 66
28 有孔門板	長径 1.45 短径 1.39 厚 0.25 重 0.73	節理に沿って割った素材の両面をそれぞれ1方向に研磨した擦痕がよく残る。側面は穿孔と同じ方向に研磨した痕が粗く残る。左図の面から穿孔して反対面に穿孔剥離を生じる。孔径は 1.75mm で、初孔と終孔の差はほとんどない。古墳時代中期の遺物が混入。	5G3/1 暗緑灰節理の発達した緻密な滑石片岩	南東部床直上 完形 225

SG10 区 SI-111 (第 145・146 図、写真図版 122～124・208)

【位置】 SG10 区東部の 18-18・19 グリッドに所在する。古墳時代集落の中心地から、低地近くへ降りた地点にある。重複する遺構はない。

【規模と形状】 長方形の建物跡で、主軸方位は GN-8° -W (主柱穴を結ぶ方位は GN-92° -E)。東西 4.11 × 南北 3.44m、残存壁高は西壁中央 (27cm) と北壁中央 (29cm) が高く、南東部が浅い (20cm)。主柱穴は 2 本で、柱間は東西 1.58m。柱径は 10cm 前後、床面からの深さは P1=37cm、P2=40cm。東柱 P1 の柱痕は西へ傾き、西柱 P2 の柱痕は東へ傾いて見えるので、2 本の主柱穴を建物中央部側へ傾けるようにして抜き取ったことが推定された。入口施設と考えられる P4 は貯蔵穴 P3 の北側にあり、径 18 × 床面からの深さ 27cm。

貯蔵穴は、南壁中央の P3 と南東隅の P5 がある。P3 は東西 54 × 南北 42cm ・ 床面からの深さ 26cm で、P3 西側にある土手状の高まりは床面から 5～10cm の高さを持つ。P5 は東西 47 × 南北 33 × 深さ 12cm。P3 は単層で、P5 は自然埋没状。SG10 区では SI-6 などに複数の貯蔵穴がある。

壁溝は、板材を壁際に立てた痕跡と見られる幅 3cm ほどの細い溝で、西辺溝底面では竪穴床面からの深さに 2～5cm のバラツキが認められた。横幅 20cm 前後 (10～27cm) で下端が隅切方形の板材を壁面に沿って埋め、溝底部で板材の下端面を支えたところが深くなっていると考えられた。間仕切溝はない。

低地近くに立地するために地山が通常のローム層ではなく、上から黄色砂質ローム層 - 褐色粘土層 - 七本桜軽石層 - 赤褐色鉄分集積層 - 黄色層、の順で地山層が見られる。掘方底面は褐色粘土層中にある部分が多い。東端部付近では掘方底面が他より 3～5cm 深いので、下にある七本桜軽石層まで達している。砂質ロームと七本桜軽石が混在する硬い貼床土で埋め戻して床面が作られていた (8 層と 8b 層)。

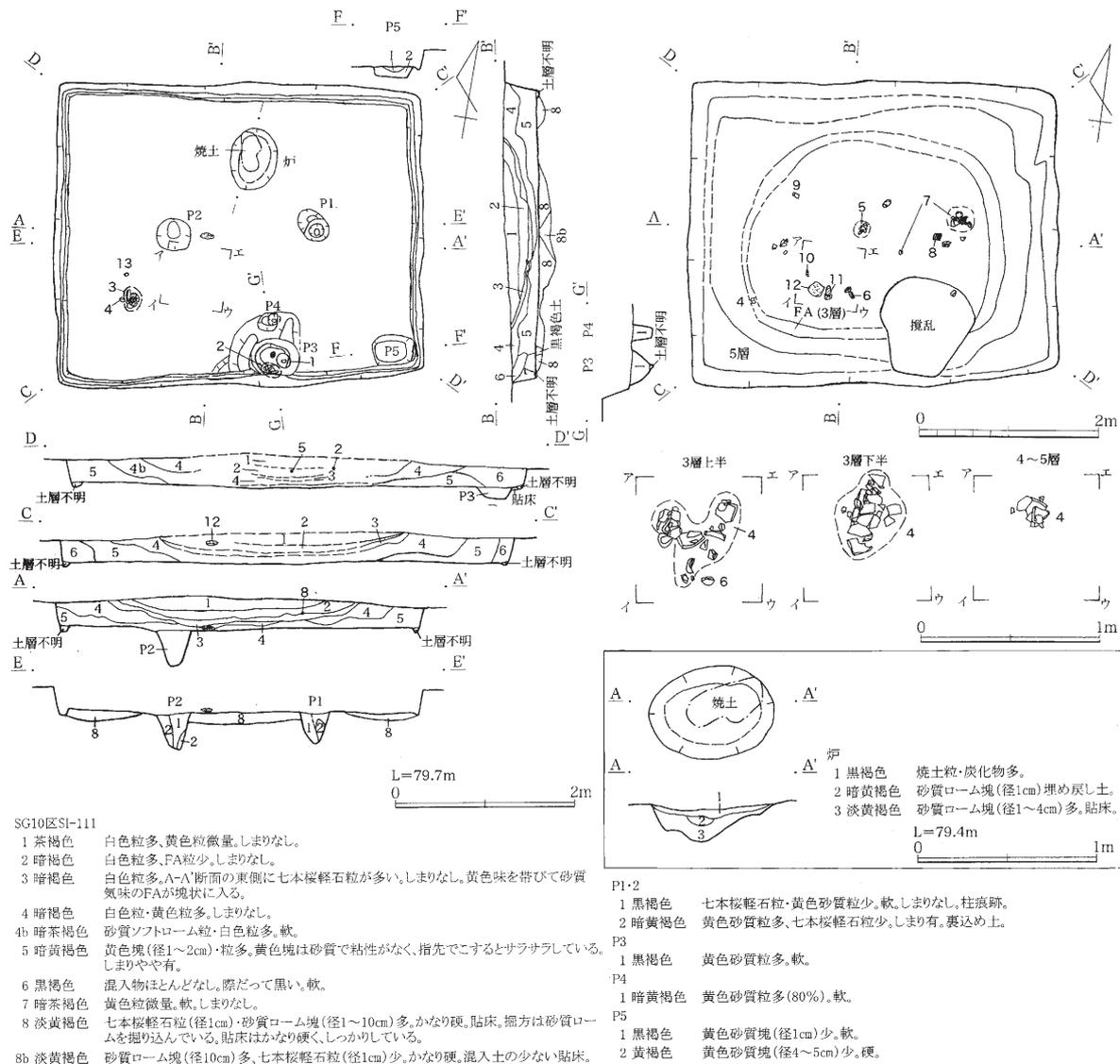
【炉】 北部中央にある。東西 41 × 南北 59cm。床面から深さ 12cm まで貼床 (炉断面図の 3 層) を掘り下げた後に、下部を炉 2 層で埋め戻して炉底面を構築し、床面から炉底面までの深さは 8cm。炉底面には焼土と炭化物がみられた。

[覆土] 自然埋没と思われる。上層部を掘り下げると、自然堆積による椀形の窪地に Hr-FA テフラ塊を多く含む3層が堆積している状況を明瞭に把握できた。壁際にはローム塊を含む5層が目立つ。

[遺物出土状況] 古墳後期初頭に降下したFA テフラが覆土中に入る。FA 層より上層の遺物(5~12)は、竪穴中央部にまとまって出土した。FA 層より下層の遺物(1~4)では、脚が欠けて杯部が完存する高杯(3)が床面にあり、残存度の高い甕(4)も床面近くにある。また、貯蔵穴P3内の上部に伏せた杯(1)、P3よりも上方に杯片(2)がある。

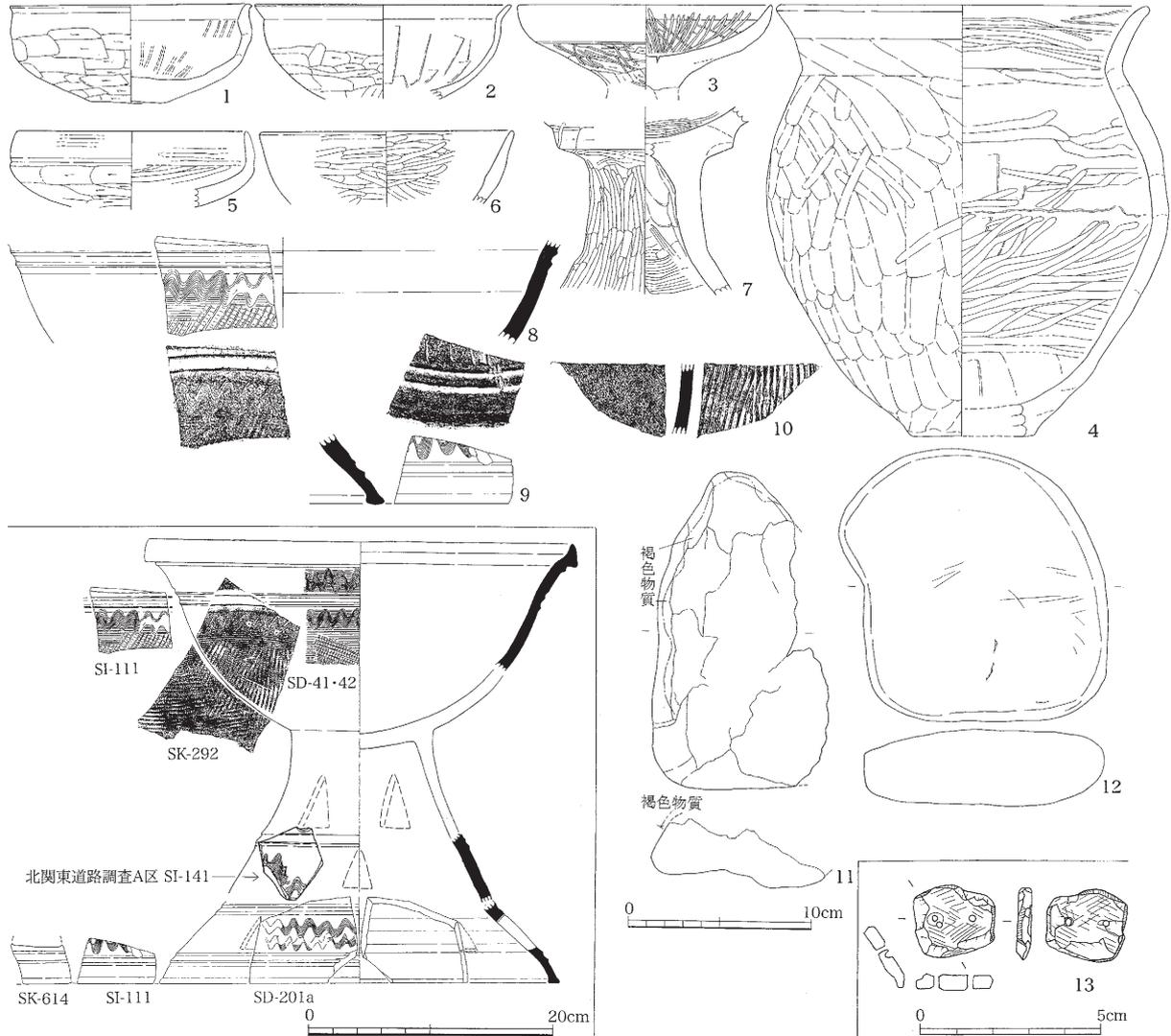
[出土遺物] 遺物は比較的多いが、小破片が多いので、実際の個体数は少ないであろう。土師器甕または壺甕類の破片が最も多く、高杯もやや目立つ。杯類はやや少ない。甕(4)と高杯(7)は意図的に割ったようにも見られる。

図示以外の土師器合計 118 片・1,023g の内訳は、杯 12 片・79g、高杯 35 片・198g、壺甕類 71 片・746g。土師器杯類は口が広い中期後葉の内斜口縁杯がある(1・2)。短脚だったとも考えられる3は、焼成前に杯底部内面に生じた亀裂をヘラミガキで補修した可能性がある。補修痕のある土師器は SG10 区 SI-6 などにある。4 は甕のようにきれいな胎土で煮炊痕のない甕。13 は穿孔がうまく行かず、反対面から穿孔しなおした石製模造品。有孔円板は SG10 区 SI-64a などに例がある。



第 145 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-111 (1) 遺構

FA層をはさんだ上層には新しい模倣杯もみられる(5)。橙色胎土で密に磨く7は後期の長脚高杯で、器形はSG10区SI-114の高杯によく似るが胎土は全く異なる。同一個体の可能性が高い須恵器器台がSI-111の上層に2片ある(8・9)。SI-111の南西10mのSD-41・42出土口縁部片、古墳時代のSK-292出土杯部片、時期不明土坑SK-614と近世溝SD-201aと北関東自動車道調査A区SI-141の脚部片と同一個体の可能性が高い。SK-614は北方に108mも離れている。脚部が内彎しはじめるIV式である(高橋・小林1990)。別個体の器台破片がSG5区低地包含層(第357図)や本遺跡北部SG1区居館SD-95周辺にある。



第146図 権現山遺跡SG10区SI-111(2)遺物

第86表 権現山遺跡SG10区SI-111出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.3 高 5.4 底 4.0 重 残 248.6	外表面はナデまたはケズリで中央がわずかに凹む。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は、口縁部ヨコナデと体部ナデまたはヘラナデの後に放射状ヘラミガキ。被熱した可能性があり、外面に煤と内面体部表面の剥離痕が目立つ。	7.5YR5/4 にぶい褐 白・赤粗～細粒や やや粗い や多、黒・透明細粒少 やや軟質	P3底上21cmで伏せた 状態 口5/6周、体全周 57
2 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 5.2	薄く軽い。外面口～体部ヨコナデ後に中位以下ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 白・黒・透明粗～ 細粒やや少 軟質	P3底上26cm(P3覆土 上方の竪穴7層) 口1/3周 21、南西区 1
3 土師器 高杯	口 13.9 高 残 4.5	脚内面の頂部がわずかに残るので、脚部が中空ではなく中空になることがわかる。外面は口縁部ヨコナデ、杯体部ナメヘラケズリ後ヘラミガキ、脚部タテヘラケズリ後わずかにヘラミガキ。外面の口～杯体部境に浅い段を持つ。内面は口縁部ヨコナデ後に杯体部ナメヘラケズリと縦～斜位ヘラミガキ。内面底部に、焼成前の亀裂が生じてヘラミガキで補修した可能性あり。脚が欠けた状態で杯に用いたと考えることもできる。	7.5YR5/3 にぶい褐 白・赤粗～細粒や やや粗い や多、黒・透明細粒少 やや硬質	南西部5層(床直上) 口全周 32、A～F、H、南西区 5層

第5章 権現山遺跡 SG10 区

4 土師器 甕	口 20.4 高 23.6 底 復 6.7 最大 22.1 重 推約 1840	外底面は雑なナデ。外面は胴部下半にタテヘラナデ、胴部上半にナナメナデ(またはナメヘラナデ)、頸部ナナメナデ、口縁部ヨコナデ。内面は胴部に斜～横位ヘラナデ後、胴中位に斜～横位ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。胎土は混和材が少なく、甕に類似する。被熱痕や煤は見られない。内面胴下位の器面が少し荒れている。 [注記]1、12、35～51、53A、53B、54、54A～54D、54F～54H、55、55A～55U、56、56A、56B、A-A'ベルト東3層、B-B'ベルト、B-B'ベルト南3層、北、南	5YR6/6 橙 緻密 白・赤粗～細粒やや多、 黒・透明細粒少 やや硬質	中央部床土 2～27cm。 上部は3層(FA)中、下部は4層直上 口5/6周、胴上半全周、 底1/3周 注記は左欄
5 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 4.2 最大 復 13.4	外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部は下端が少し凹むようにヨコナデしてヨコヘラミガキ。内面の口～体部に密な横～斜位ヘラミガキ。[注記]16、北東区1・2層、A-A'トレンチ東半、A-A'ベルト	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒細粒やや多、 赤・透明細粒少 軟質	中央部2層(FA上9cm) 口1/3周 注記は左欄
6 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.0	口～体部境は外面に稜を持たず、内面に緩く浅い段を持つ。内外面ともにヨコナデ後、密なヨコヘラミガキ。底部破片は接合できないが、外面はヨコヘラケズリで内面は多方向ヘラミガキ。[注記]7、33、B-B'ベルト南、B-B'ベルト南1層、B-B'ベルト南2層、B-B'セク	5YR5/6 明赤褐 緻密 赤粗粒と透明微粒少 硬質	南西部1・2層(FA直上) と3層(FA中)が同一 個体 口1/8周 注記は左欄
7 土師器 高杯	高 残 10.3 最大 残 9.6	厚く重い。外面は杯底部に横位と脚部に縦位のヘラケズリ後、密なヘラミガキ。杯体部下端の外面はヨコヘラケズリ後に疎らなヨコヘラミガキ。杯底部内面は密な多方向ヘラミガキ。脚柱部内面に強いタテナデ後、脚下半内面に主に横位のハゲ調整。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、黒細粒少 やや硬質	東部2層(FA直上～FA 上23cm) 杯底1/3周、脚柱2/3 周 8、25～31
8 須恵器 器台	口 復 34.6 高 残 5.6	木目直交の溝を彫った叩き板で、杯部下位に擬椀形叩きの後、カキメと突線2条を付けてから、11～12歯の櫛描波状文を右から左へ描く。内外両面に濃緑色および黄色の自然釉がかぶる。9およびSD-41・42・201a・SK-292・614出土破片と同一個体。	N5(B) 灰 緻密 白粗～細粒少 軟質	東部2層(FA上13cm) 体1/12周 24
9 須恵器 器台	高 残 3.7 脚裾 復約 33	低い突線2条で区画した上側に、11歯以上の櫛描波状文を右から左へ描く。8およびSD-41・42・201a・SK-292・614出土破片と同一個体。	N6(B) 灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	北西部1層(FA上15cm) 脚裾1/18周 10
10 須恵器 甕	高 残 3.8	木目直交の平行溝を彫った叩き板で外面を叩く。木目の浮き出しが弱いので明瞭な擬椀形にならず、ほとんど平行叩きと同じように仕上がっている。内面は無文で、無文当具を使ったかまたはスリケン。破面の芯部は赤灰色。	N4(B) 灰 やや緻密 半透明粗～細粒と 白細粒やや多、赤粗粒少 硬質	西部FA直上 胴1片 5
11 礫	長 17.4 幅 9.7 厚 3.7	図示した面の上半～中位に褐色土状の付着物が固着。中央～右半部に大きな破面があって、褐色付着物もこの破面で除去されている。その他の付着物や加工・使用痕はない。重量640.5g。	5Y6/2 灰オリーブ 5mm以上の斑晶が多く、やや 緻密で硬質な石英斑岩	南西部2層(FA上23cm) 一部欠 19
12 石器 台石	長 14.9 幅 14.7 厚 4.2	扁平な自然石をそのまま利用。図示面の中央から右半に、浅い擦痕が少し認められる。また、この面全体がわずかに磨耗して、裏面に比べて少し平滑になる。加工・被熱痕は見られない。重量1386.1g。	5Y6/1 灰 緻密で硬質な安山岩	南西部2層(FA上20cm) 完形 20
13 石製模造品 有孔円板	長 2.22 幅 1.96 厚 0.40 重 3.02	両面をそれぞれ2方向に研磨する。外周は工具で切削または打割したままの部分が多く、研磨している部分は穿孔と同じ方向に研磨する場合が主体である。左図の面から2孔を穿孔しているが、左側の孔は対面まで貫通しないで、再度ここに反対面から穿孔し直した孔が貫通に成功している。それぞれ貫通時に穿孔剥離を対面に生じている。孔径は初孔径1.65～1.70mm、終孔径1.60mm。	10YR3/2 オリーブ黒 緻密で節理の発達した滑石片 岩	西部床直上 完形 13

SG10 区 SI-113a (第147図、写真図版107・124・125)

[位置] SG10 区北部の22-18・19グリッドにある。同じく古墳中期後葉の遺構として、南にSI-73、東にSI-75、北にSI-114がある。

[重複関係] 現地調査時の旧名称「SI-113」から「SI-113a」に改称した。先行するSI-113bから拡張建替したか、または113bの上部を切る建物である。古墳後期のSI-74に切られ(SI-113b→SI-113a→SI-74)、また時期不明のSK-562・563・682に切られる(SI-113b→SI-113a→SK-562・563・682)。時期不明の柱穴P-700・701はSI-113bよりも新しい可能性を持つが、SI-113aとの新旧関係は不明である。SI-113aの床面ではP-700・701を確認できなかったが、見落としたことも考えられる。

[規模と形状] 方形の建物跡で、主軸方位はGN-1°-W(主柱穴の南北方向軸)。東西5.60×南北5.63m、残存壁高は南壁で最小5cm、東壁で最大21cm。

主柱穴4本の柱間は東西2.61m・南北2.78mで南北に少し長い。柱痕を反映する土層はない。柱穴下部径(約18cm)より少し細いであろう。入口施設は不明。南東隅にある貯蔵穴P5は東西82×南北72×深さ50cm。壁溝はない。北西部にある間仕切溝D1は幅16～18cm、床から深さ4～10cm。床面は南壁付近が少し深い(断面A-A'の5層北半)、それ以外は標高80.4～80.5m前後ではほぼ平坦である。通常の竪穴建物にあるような貼床はなく、ローム主体ではない褐色土の貼床が一部に見られただけである。SI-113bの床面中央部をSI-74が破壊する。SI-74の掘形底がSI-113a掘形底まで壊している部分が多い。

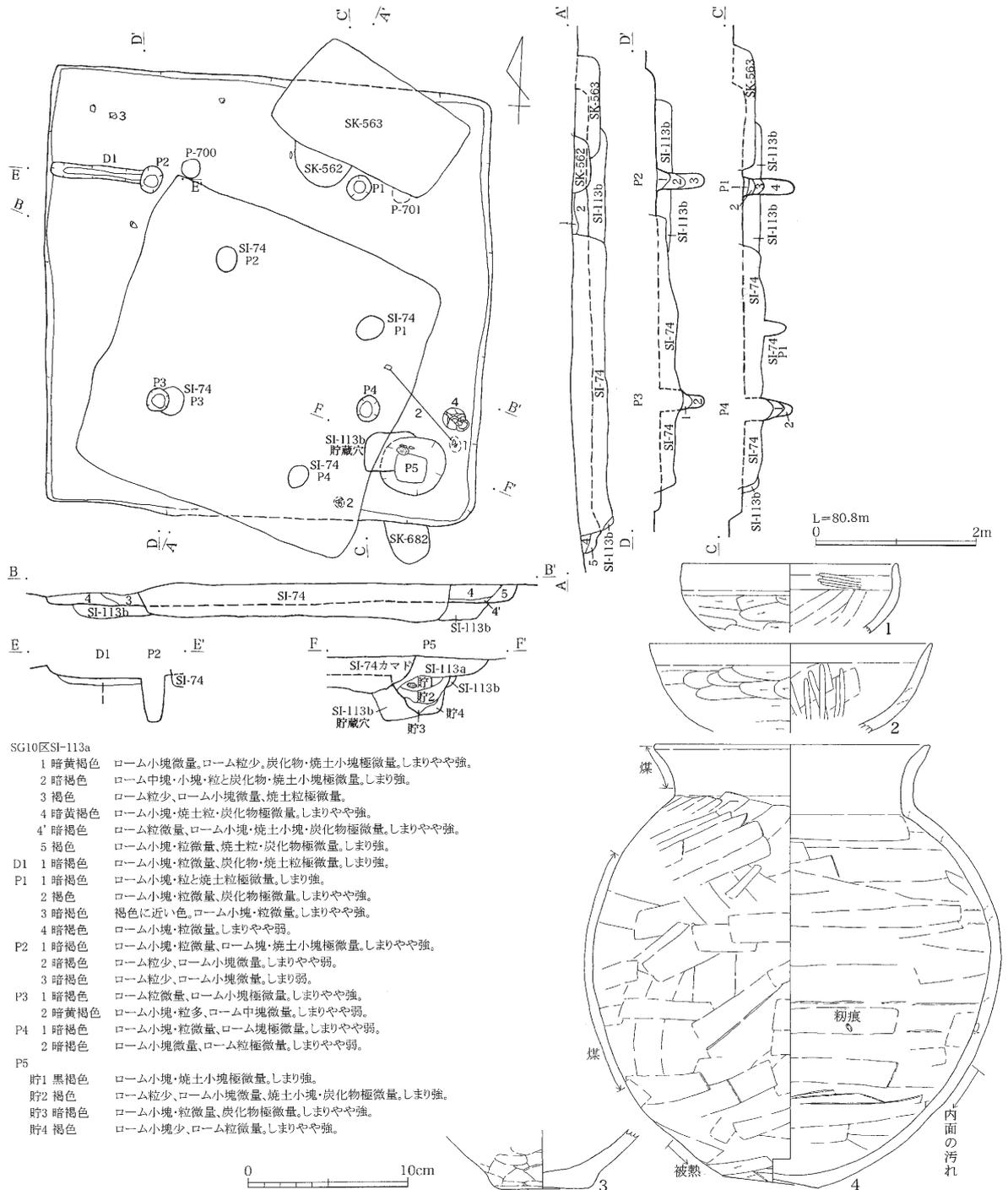
[火処] 確認できなかった。

[覆土] 遺構確認面の北部で、覆土1層中のローム粒がやや不自然に多く認められた。ただし、3～5層の堆積状態から、埋め戻しではなくて自然埋没と推定される。

[遺物出土状況] 南東部の東壁際では床土8cmのレベルで完形の土師器甕があり(4)、その南に杯(1・2)がある。貯蔵穴内では底土4～5cmに土師器杯体部片と甕(?)胴部片があり、貯蔵穴1層中に自然礫(13.8×11.7×5.8cm・重さ1445.4g)がある。北西部では土師器杯・壺片と、混入した縄文後期土器片が床か

ら数 cm 浮いて出土した。重複する古墳後期の SI-74 に古墳中期の杯類がいくつかあり、SI-113a・b の遺物が混入している可能性が高い。

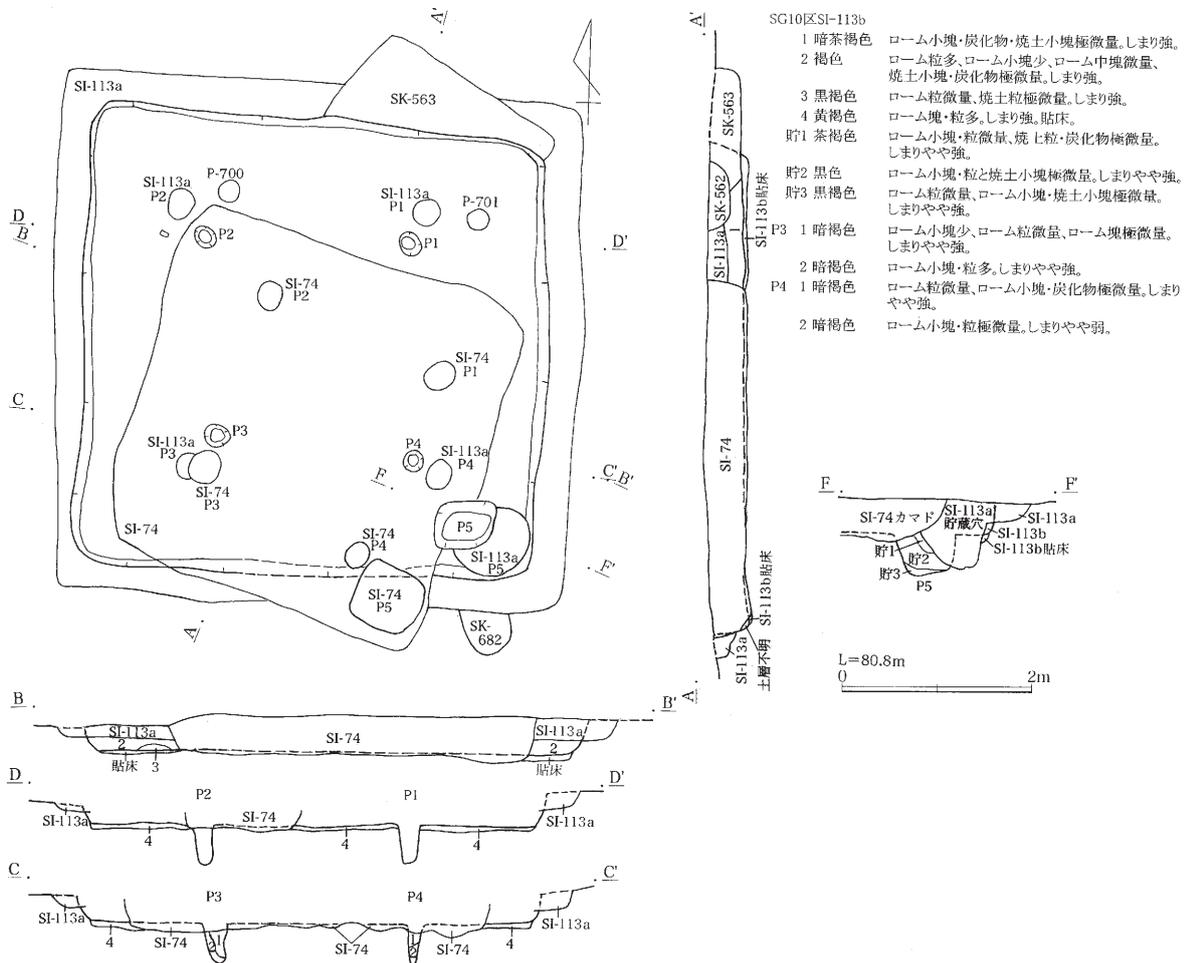
[出土遺物] 遺物は少なく、土師器甕(4)以外は全体形を復原できるものがない。古墳中期後葉～末葉の初期模倣杯があり、1 からみて中期末葉的とみられる。ただし甕(4) はあまり長胴化しない中期中葉的な形状で、カマドでなく炉で用いた痕跡がある。この甕のように粉痕のある土師器は SG10 区 SI-50 などにある。図示以外の土師器合計 71 片・512g の内訳は、杯 47 片・409g、壺甕類 24 片・103g。縄文後期の土器片も混入していた(『東谷・中島地区遺跡群 10』p.84 の 262・272 番)。



第147図 権現山遺跡 SG10区 SI-113a 遺構・遺物

第 87 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-113a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.3 高 残 4.2 最大 復 13.8	外面の口～体部境にわずかな凹みあり。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ナメヘラナデ、口縁部上半ヨコナデと下半ヨコヘラナデ後に下半ヨコヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗粒やや少、白 礫と黒・透明細粒少 やや軟質	南東部床上 10cm 口 1/6 周 SI-113 1B、2
2 土師器 杯	口 復 17.6 高 残 5.6	内面の口～体部境にわずかな稜あり。外面は体部ヨコヘラケズリ。内面体部ナメヘラナデと内外面口縁部ヨコナデ後に体部タテヘラミガキ。 [注記]SI-113 2、南東区東半、SI-74 1、31	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 白礫と白・灰色粗 ～細粒やや多、赤粗粒と黒・ 透明細砂少 硬質	南東部床上 10cm。SI-74 出土の 2 片が同一個体 口 1/4 周 注記は左欄
3 土師器 壺	高 残 3.7 底 復 6.0 最大 残 12.0	底部が円板状に突出して、外底面は多方向ヘラケズリでわずかに凹底状。外面胴部はやや強いヘラナデ。内面はナデまたはヘラナデと見られるが、器面が荒れて詳細不明。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・灰色粗～細粒 やや多、赤粗粒と黒・透明細 粒少 硬質	北西部床上 8cm 底 1/3 周 SI-113 9
4 土師器 甕	口 17.2 高 底 27.7 底 5.9 最大 25.4 重 残 2288.1	外底面は 1 方向ヘラケズリで凹底状にし、底面の器厚は 3～4mm。外面胴部ナメヘラナデ、胴下端ヨコヘラケズリ。内面胴部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面胴中に稲稈痕が 1 箇所あり、胎土中に混ぜたものかもしれない。胴下位の外面が被熱して内面に黒褐色のコゲ痕。外面胴中位から口縁部にかけて煤が多い。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 白・灰色粗～細粒 と黒細粒多、白礫と赤・透明 粗～細粒少 やや硬質	南東部床上 8cm ほぼ完形 口 1/6 周欠 SI-113 1A～1C



第 148 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-113b 遺構

SG10 区 SI-113b (第 148 図、写真図版 107・125)

[位置] SG10 区北部の 22-18・19 グリッドにある。同じく古墳中期後葉の遺構として、南に SI-73、東に SI-75、北に SI-114 がある。

[重複関係] 現地調査時の旧名称「SI-116」から「SI-113b」に改称した。SI-113b から SI-113a へ拡張建替したか、または 113a が SI-113b の上部を切る。その後に古墳後期の SI-74 に切られ (SI-113b → SI-113a → SI-74)、

また時期不明のSK-562・563・682に切られる(SI-113b→SI-113a→SK-562・563・682)。床面で確認した時期不明の柱穴P-700・701は埋土・形状が類似した詳細不明の柱穴状土坑で、SI-113bに伴うと考える余地もあるが床面から浅い点が不自然なので、P-700・701がSI-113bを切る可能性がある。

[規模と形状] 方形の建物跡で主軸方位はGN-0° 30′ -W。東西5.02×南北4.96mで、上部がSI-113aで失われているので、残存壁高は10～16cmまで浅くなっている。主柱穴は4本で、柱間は東西2.12m(南側)～2.16m(北側)、南北2.12m(西側)～2.30m(東側)。南西主柱穴P3には裏込土を反映する土層が残り、柱径10cm前後と推定できる。床面からの深さは北側のP1・P2がやや浅く(41～42cm)、南側のP3・P4がやや深い(46cm)。入口施設は不明。貯蔵穴は南東隅にあり、東西62×南北51×床面からの深さ42cm。壁溝や間仕切溝はない。

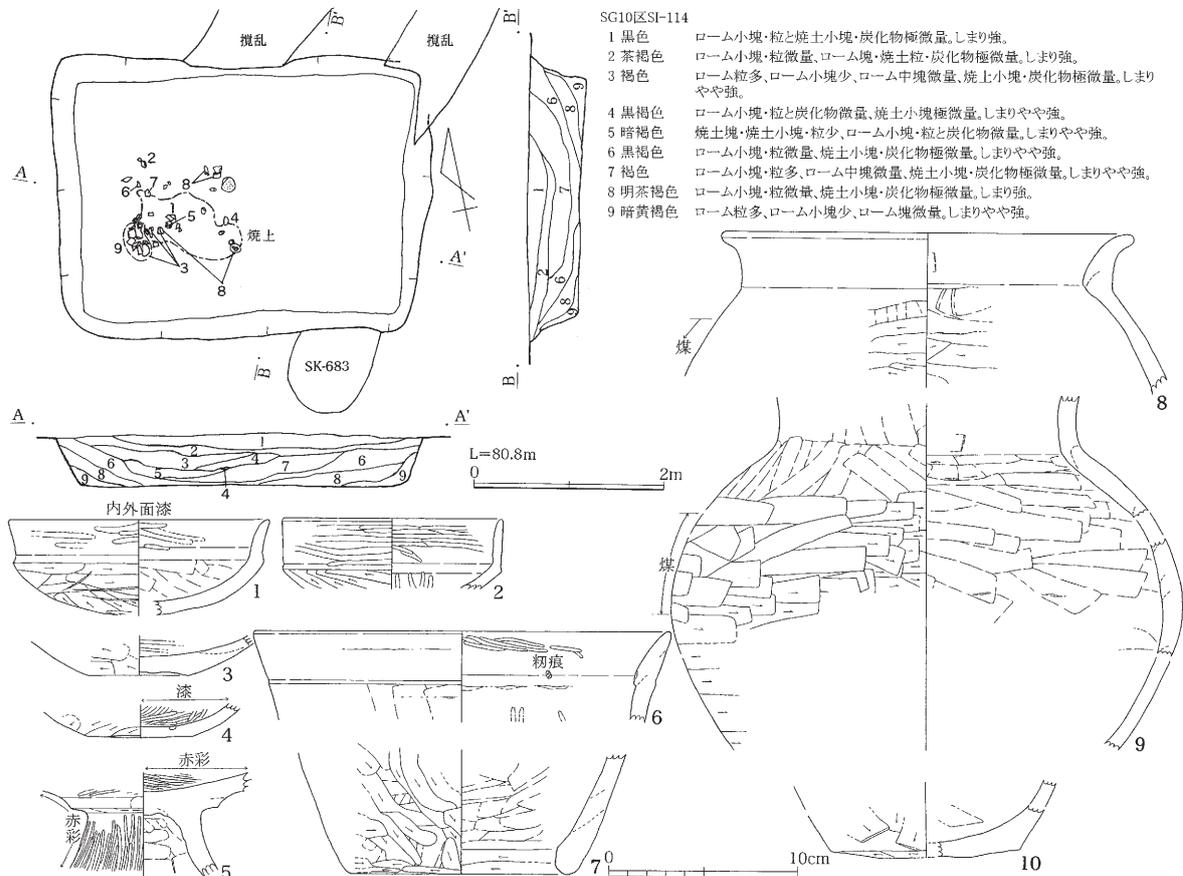
[火処] 確認できなかった。カマドは確認できない。

[覆土] 北側が1層(断面図A-A′)、東側と西側は主に2層で埋まる(断面図B-B)。

[遺物および出土状況] 貼床中から少量の土師器片と混入縄文土器片が出土しただけである。図示した遺物はない。土師器合計17片・68gの内訳は、杯16片・59g、小形壺1片・9g。縄文後期の土器片も混入していた(『東谷・中島地区遺跡群10』p.84の255)。遺物がごく少ないので時期を特定しにくい。SI-113bから113aへ拡張したと考え、拡張後の建物SI-113aと近い時期でわずかに先行する建物ということになるので、中期末葉の時間幅の中でSI-113bからSI-113aへ建て替えた可能性がある。

SG10区SI-114(第149図、写真図版125)

[位置] SG10区北部の23-18・19グリッド。同じく古墳中期の遺構は南にSI-113a・bとSI-75がある。古墳時代のSK-683を切る。2基の長方形攪乱坑に北壁を切られる。



第149図 権現山遺跡SG10区SI-114遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

【規模と形状】 長方形の小さい建物跡。南に入口施設を確認したわけではないが、主軸を南北方向と考えた場合の主軸方位はGN-9° -E。東西 3.98 × 南北 3.09m、残存壁高は東壁北部で最大 52cm、南東隅で最小 43cm。柱穴・入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。貼床も見られない。

【火処】 不明である。西半部の焼土は床から浮いているので、これを炉とは考えにくい。いっぽう、カマドもみられない。

【覆土】 自然埋没と思われる。覆土中位の 2・3 層にローム塊・粒がやや多く、焼土も含む。テフラの層や粒は認められない。床上 11～18cm のレベルで南西部の覆土下層中に焼土が見られた（5 層）。調査時の層番号を極力変えない方針により、6・7 層の数字が堆積順と一致しない。

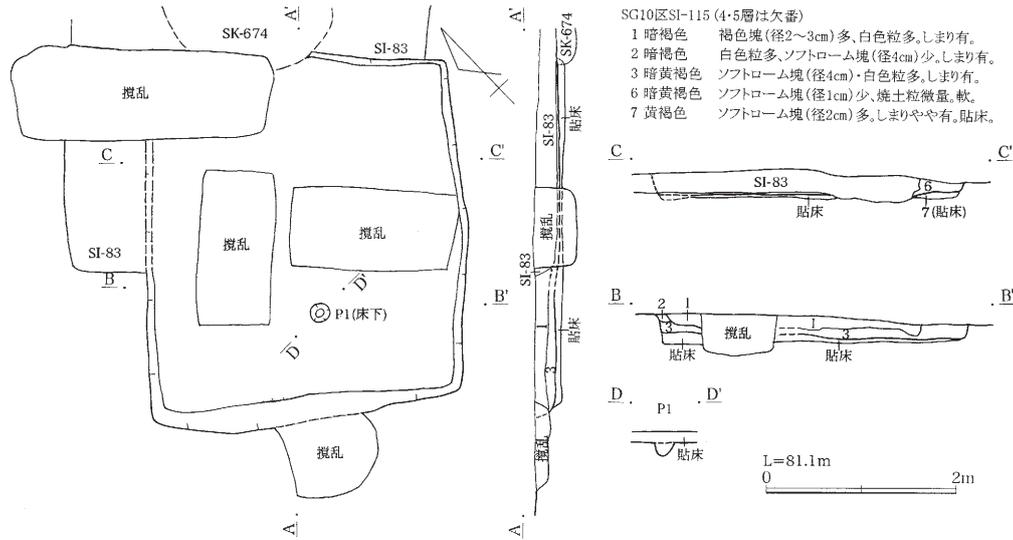
【遺物出土状況】 西半部で床面から 10～20cm 浮いたレベルに遺物が多い。床面から 30cm 以上浮く破片もある（2・3・9）。床面直上の遺物はほとんどない。5 層の焼土よりも上方に遺物がある。遺物の多くは流入品かと思われる。

【出土遺物】 遺物はわずかで、壺甕類と杯が多く、甑・高杯もある。ミガキを行う模倣杯が多く、漆仕上げの杯（1）も含む。掲載した以外に、内斜口縁状の杯小破片もわずかにある。遺物は床から浮いた流入品ばかりと思われるが、時期の異なるものは少ないように見える。

1 は後期初めころの漆仕上げ杯。3 と 4 は平底模倣杯（安藤 2001）の破片。黒雲母や白雲母を含む茨城産土師器は SG10 区 SI-12 などにもあり、5 に白雲母細片が多い。5 の器形は SG10 区 SI-111 の高杯によく似るが、胎土は全く異なる。6 のように靱痕がある土師器は、SG10 区 SI-50 などにある。8 は炉で使ったような煤が付く甕。図示以外の土師器合計 101 片・986g の内訳は、杯 28 片・166g、高杯 4 片・98g、壺甕類 60 片・575g、甑 9 片・147g。

第 88 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-114 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.7 高 残 5.1	内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部は横～斜位のヘラナデ。内外全面に漆仕上げ。	10YR7/6 明黄褐 緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒細粒少 やや硬質	西部床上 19cm 口 1/6 周、体 1/3 周 6
2 土師器 杯	口 復 11.4 高 残 3.8 最大 復 11.6	やや薄い。口縁部内外面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部ナデ後にタテヘラミガキ。	7.5YR6/6 橙 緻密 赤粗粒やや多、白・黒・赤細粒少 やや軟質	北西部床上 30cm 口 1/8 周、体 1/4 周 14
3 土師器 杯	高 残 2.1 底 5.1	外底面は 1 方向ヘラケズリでわずかに上げ底状にする。外面体部ヨコヘラケズリ。内底面は多方向ヘラナデ後に不定方向の疎らなヘラミガキ。	5YR4/4 にぶい赤褐 緻密 赤粗粒やや多、白・黒・赤・透明細粒微量 やや軟質	南西部床上 14～36cm が接合 底 7/12 周 1、3、4、西一括
4 土師器 杯	高 残 1.8 底 5.6 最大 残 10.4	外面の体～底部境に稜を持ち、外底面は弱い凸面状で斜放射状のヘラケズリ。外面体部に横～斜位のヘラケズリ。内面底部は多方向のヘラミガキで、内面を漆仕上げする。断面図の内面に示した凹みは靱痕かもしれないが不確実。	10YR4/3 にぶい黄褐 緻密 白・灰色粗粒と白・透明細粒少 硬質	中央部床上 18cm 底 2/3 周 21
5 土師器 高杯	高 残 5.6	外面はナデ後、脚部に縦位、杯体部に斜位のヘラミガキをして赤彩。杯内面は 1 方向ヘラミガキ後に赤彩。脚内面は上部ナメナデ、下部ヨコヘラナデ。茨城県産。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒と白雲母細片多、白・赤細粒少 やや軟質	南西部床上 10cm 杯底～脚柱全周 5
6 土師器 甑	口 復 21.8 高 残 4.8	外面の口～胴部境が浅い段になる。外面胴部タテヘラナデ。内面胴部はナデかヘラナデの後に、おそらくタテヘラミガキ。内外面口縁部をヨコナデした後に内面口縁部ヨコヘラミガキ。内面の口～胴部境に稲刷圧痕あり。	7.5YR4/3 褐 緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	西部床上 27cm 口 1/8 周 12
7 土師器 甑	高 残 6.4 底 復 11.2 孔 復 9.8	外面は斜位のヘラナデ後ヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ。孔縁部とそれに接する内外面下端に面取り状のヨコヘラケズリ。	7.5YR5/6 明褐 緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	西部床上 19cm 底 1/6 周 10
8 土師器 甕	口 復 21.6 高 残 8.5	破片が小さいので復原径は参考値。外面は肩部に粗いタテハケ後ヨコヘラケズリ。内面は肩部ヘラナデ後に少しヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面肩部に煤が多い。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 白粗～細粒多、灰色・透明粗粒と黒細粒少 硬質	南西部床上 14cm と中央 床上 21～22cm と南部 床上 18cm が接合 口 1/12 周、頸 1/6 周 4、16、18、24、東一括
9 土師器 甕	高 残 18.8 最大 復 26.8	胴下位が薄くなる。外面は頸部と肩部を縦～斜位ヘラナデ後、胴中～下位をヨコヘラケズリ。内面全体をヨコヘラナデした後に頸部ヨコナデ。胴中位外面に煤多量。胴下位は残存部が少ないので不明確だが、被熱している可能性がある。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、白礫と黒細粒少 やや硬質	南西部床上 36cm 頸 1/12 周、肩 1/3 周 1
10 土師器 甕	高 残 4.1 底 復 10.0	外底面が弱く突出して、体部との境の稜が強い。外底面の外周は円周方向ヘラケズリ。外面胴部タテヘラケズリ。内面底部に多方向のヘラナデ。外面が少し被熱している可能性もあるが不確実。	2.5Y5/2 明灰黄 粗い 白・灰色・透明粗～細粒多、白・灰色礫少 硬質	南西部床上 17～20cm が同一個体 底 1/2 周 9、27



第150図 権現山遺跡 SG10区 SI-115 遺構

SG10区 SI-115 (第150図、写真図版125)

[位置] SG10区北部の23-19および24-19グリッド。同じく古墳中期の遺構は、西にSI-82・86、北にSE-552がある。古墳後期中葉のSI-83がSI-115覆土を床面近くまで切る。長方形攪乱土坑(近現代の農業関連土坑)に切られる。北壁が古墳中期の円筒形土坑SK-674と重複するが、重複関係を示す図や記録がなく、新旧関係は不明である。カマドを持たない古墳中期のSI-115を、中期末のSK-674が切ること想定できるが、不確定である。

[規模と形状] SI-83調査との関係でSI-115の形状把握が遅れて平面図が作成できなかったため、掘方平面図だけを掲載した。方形の小さな建物で、建物長軸を主軸とみた場合の主軸方位はGN-43°-E。東西3.64×南北3.99m。壁は西隅で最もよく残り(掘方底までの残存高26cm)、南隅の残りが悪い(掘方底まで12cm)。床面までの深さは土層断面図からみて22~24cm。柱穴は径20cmの1本だけを貼床除去後に確認し、深さは掘方底から16cm、床面推定レベルから24cmである。SI-83のカマド土層断面図などからみてSI-115の床面は標高80.75m前後かと考えられる。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝は見られない。

記録不備のため、貼床層の土質・特徴が不詳である。3層は貼床土の可能性もあることが調査時の土層図に記載されているが、遺構覆土下層と判断した。床面の状況を図化・レベル計測した図面が所在不明のため、この点が不明確である。

[火処] 確認されなかった。カマドを持たない可能性がある。

[覆土] 自然埋没と思われる。1~3層に多い白色粒は、古墳前期のAs-Cや後期初めのHr-FAなどのテフラが二次的に流入した可能性が考えられる。

[遺物および出土遺物] 遺物は僅少で、土師器は合計2片・21gしかなく、内訳は杯1片・9gと壺甕類1片・12gである。図示できる遺物はない。他に安山岩剥片2点と弥生中期末頃の土器7片が混入していた。この建物が弥生時代と考えられるわけではなく、SG10区北東部の古墳時代遺構(SI-74・81とSD-527)や、近世のSD-503などにある中期後半の弥生土器片と同様の流入品であろう。これらは、『東谷・中島地区遺跡群』10で報告した権現山遺跡出土弥生土器の第6群1類(SI-74出土例)および第7群1・3類(SD-527出土例)に相当する。

第5節 古墳時代の竪穴鍛冶遺構

SG10 区 SI-36 (第 151・152 図、写真図版 87・173・174・197)

〔位置〕 SG10 区中央部西端の 20-17 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、北に SI-50、東に SI-49 がある。中央よりも北西側は重機による現代の採土工事で破壊されている。重複する遺構はない。

北側の SI-50 と SI-106 は SI-36 と同じ中期後葉(権現山編年 3 段階)で、それぞれ鉄滓と金床石(第 153 図下段)を出土したので、この鍛冶遺構と関係を持つ建物であろうか。東方にある時期不明の SK-317 にも鉄滓がある(第 237 図)。南側の SI-34・SI-40 にも鉄滓(第 64 図 64・65)や羽口(第 153 図左上)があるが、SI-34・40 は後期末(7 段階)なので、SI-36 との関係を考える必要はないかもしれない。

〔規模と形状〕 方形建物の南東部が残り、他は消滅している。主軸方位は GN-16° -W。東西残長 2.38 × 南北残長 4.35m、残存壁高 13 ~ 20cm。P1 は 22 × 27 × 深さ 22cm で床面に開口していた。4 本柱穴の南東主柱穴か、または 2 本柱穴の南主柱穴が残ったものかもしれない。金床石(52)と鍛造剥片が床面にあるので、北西の消滅部に鍛冶炉が存在したと推定できる。現存する部分には、炉・入口施設・貯蔵穴・間仕切溝は見られない。東壁寄りにある周溝状の細長い窪み D1 は、床面レベルからの深さ 4 ~ 9cm。残存する狭い床面を精査した時には確認できず、貼床除去後に確認したので、D1 は掘方に伴う窪みと考えられる。掘方底面は東部と南部が低くなる傾向があり、9 ~ 15cm 大の窪み(掘削工具痕?)も見られた。

〔覆土〕 単層で、自然埋没と思われる。テフラの可能性のある白色粒を含んでいる。

〔遺物出土状況〕 残存した南東部の中央床面に金床石がある(52)。その南側に甕類など多くの土師器がまとなり、鉄滓や羽口も土師器と一緒にある。滑石製白玉は篩い掛け作業で P1 内から発見した(22)。紡錘車(21)は床上 13cm で、土器上ではなく覆土中にある。南北方向の土層観察ベルトを中央に挟んで、東側と西側をそれぞれ南北の 2 区画に分け、北東部・北中部・北西部をそれぞれ 1・2・3 区、南東部・南中部・南西部をそれぞれ 4・5・6 区と呼称した。床面覆土および貼床土を採取して水洗しながら篩いに掛けた後に乾燥させ、全区画から一定量の鍛造剥片を、3・4・6 区と P1 から少量の粒状滓を検出した。

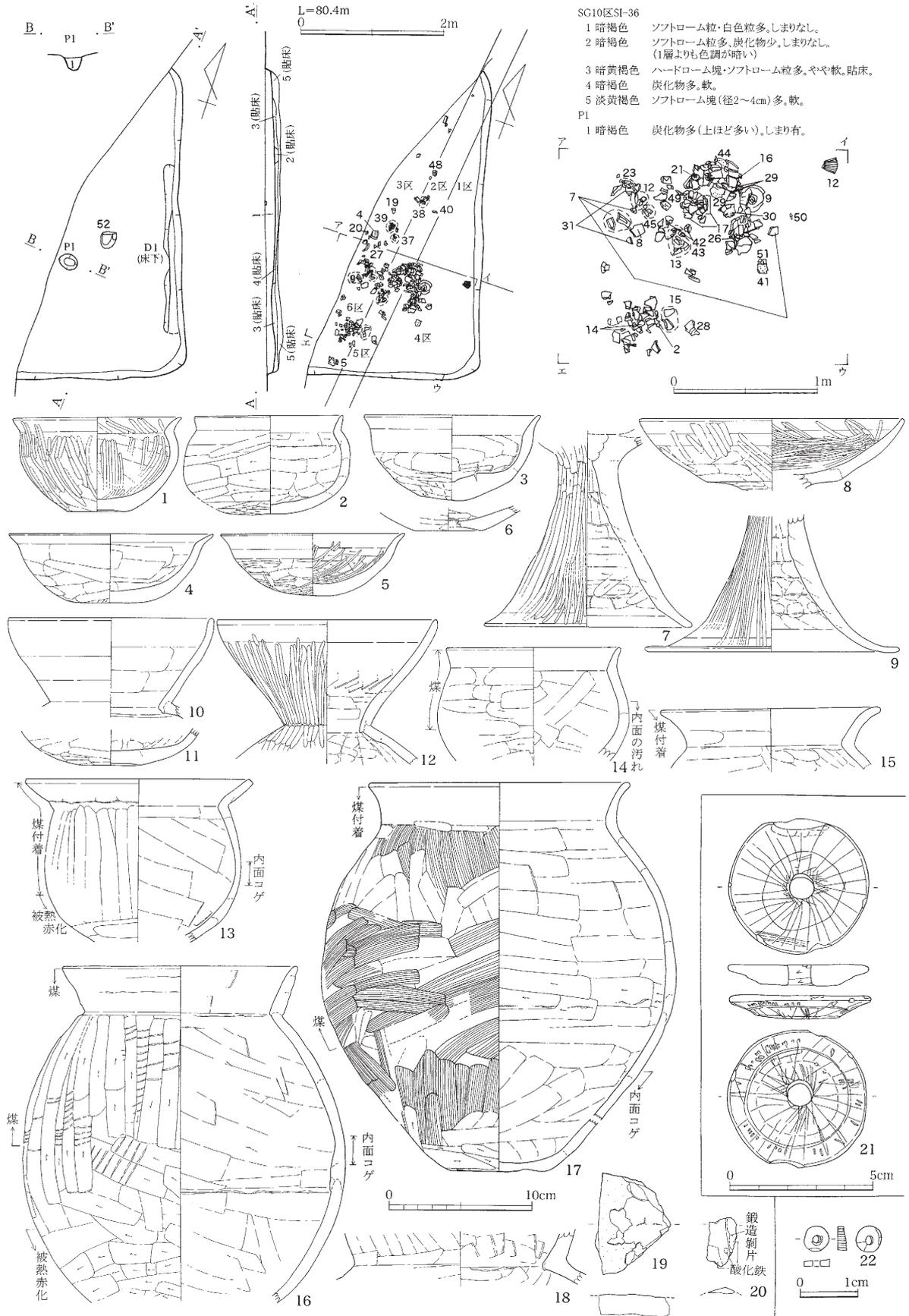
〔生活関連遺物〕 建物の大半が消滅していたのに、土師器の出土量が多い。1 は内斜口縁の椀形杯の内外面を縦方向に磨く点が珍しい。3 は内面に焼成前か焼成時の亀裂があり、外面下半分が黒斑になるので、やや不良品の椀形杯。不良品の土師器は SG10 区では SI-6 などにある。10・12 は非常に丁寧に製作した小形壺。高杯(8)も丁寧である。13 ~ 17 は外面の煤や内面の汚れが明瞭な甕類で、紡錘車とともに、この鍛冶遺構が生活の場でもあったことを示す。土師器は杯・高杯・小形壺・甕の破片が同じくらいの量出土した。大破片や残存度の高い杯類が多い。図示以外の土師器合計 157 片・1,684g の内訳は、杯 26 片・178g、高杯 48 片・345g、小形壺 8 片・86g、壺甕類 75 片・1,075g。

権現山遺跡南部では SG10 区 SI-59 や SG5 区 SI-4 などに紡錘車がある。緑灰色の蛇紋岩製で表裏面に線刻のある紡錘車(21)は SG10 区 SI-75 にもある。本遺跡 4 区に紡錘車が多く、線刻紡錘車は 4 区 SI-1・24・28 や周辺遺跡に比較的多い。他に、上三川町殿山遺跡 KT-36・75(大川他 1995)、那須烏山市北原遺跡 SI-834(安藤 2008)、真岡市市ノ塚遺跡 1 区 SI-158(藤田・片根 2007)・同市曲田遺跡 SI-26(藤田・仲山 2009)などに線刻紡錘車がある。滑石製白玉は非常に小形で薄い(22)。滑石製玉は SG10 区 SI-30 などにある。

第 89 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-36 床面採取土と鍛造剥片・粒状滓の量

	1 区	2 区	3 区	4 区	5 区	6 区	P1
採取土の乾燥前重量 (g)	2,420	2,170	3,960	5,210	1,520	2,980	3,560
水洗・乾燥後の土量 (g)	574	1,364	2,541	2,708	351	1,980	1,626
鍛造剥片の出土重量 (g)	計測不可	計測不可	0.30	0.15	0.28	2.01	0.42
鍛造剥片の出土点数	1	13	65	30	56	347	110
鍛造剥片の密度 (点/乾燥土 1kg)	2	10	26	11	160	175	68
粒状滓の出土点数	0	0	2	1	0	7	3
粒状滓の密度 (点/乾燥土 1kg)	0	0	0.8	0.4	0	3.5	1.8

第5節 古墳時代の竪穴鍛冶遺構



第5章 権現山遺跡 SG10 区

第90表 権現山遺跡 SG10 区 SI-36 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 11.7 高 6.6 底 4.2	外面は底部と体部をナデ後に口縁部ヨコナデ、体部全体と口縁部の一部にタテヘラミガキ。内面は体部ナメナデ後にタテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 赤・黒粗～細粒や やや多、白粗～細粒少 軟質	南壁攪乱中 口2/3周、底全周 一括、南壁攪乱
2 土師器 杯	口 復 10.2 高 6.8 最大 11.4	外面は肩部ナデ後に口縁部ヨコナデ、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面底部に多方向と体部に横位のやや強いナデ、肩部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 [注記]5、6、8、11、13、19、上層一括	7.5YR7/8 黄橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白 粗粒と白・黒細粒少 やや硬質	南東床上1～9cmが接 合 口5/12周、体7/12周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 復 12.1 高 6.1 底 2.8～3.5	底部が厚く重い。外面は底部ナデと体部ナメナデの後に口～頸部ヨコナデ。内面は丸味のあるヘラまたは筒状工具で体部をヨコヘラナデし、底面中央を突いて凹ませる。内面口縁部はヨコナデ。焼成前または焼成時に内面底付近に生じた亀裂が長さ6cmあり目立つ。外面の下半部全体に黒斑あり。	2.5Y8/4 淡黄 やや緻密 赤・黒粗～細粒と 透明細粒少 やや硬質	口1/4周、底全周
4 土師器 杯	口 14.1 高 4.8	外面は底部に多方向ヘラケズリ、体部にナデ、口縁部ヨコナデ。内面は体部に横位のナデまたはヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤・黒粗～細粒多、 黒曝と白・透明細粒少 やや硬質	南東床上7～8cm 口7/12周 32、63、上層一括、1 層西区
5 土師器 杯	口 復 12.7 高 4.3	外面は体～底部に多方向ナデの後、主に横位のヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ、体部に斜放射状ヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 硬質	南壁際床上7cm 口1/4周、頸1/3周 1
6 土師器 杯	高 残 1.7 底 復 4.4	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面体部はおそらくヨコヘラケズリの後に全体をヨコヘラナデ。内面は多方向ヘラナデ。	10R5/8 赤 やや緻密 灰色粗～細粒多、 赤・黒・透明細粒少 硬質	西攪乱中 底1/2周 西攪乱
7 土師器 高杯	高 残 13.4 脚裾 14.3	外面は脚柱部タテヘラケズリと脚裾部ヨコナデの後に中位以下をタテヘラミガキ。杯内面は残りが悪くて調整不明。脚内面は上位に粘土積み上げ痕をよく残し、絞り目状になる。中位ヨコヘラケズリ、下位ヨコヘラナデ、脚裾部ヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒多、 黒・透明細粒少 硬質	南東床直上～床上11cm が接合 脚柱3/4周、脚裾1/4 周 16、27、70、一括
8 土師器 高杯	口 復 18.2 高 残 4.9	杯体部の下端に稜あり。外面は横位または斜位ヘラナデ後に口縁部をヨコナデし、外面杯体部にもう一度ナメヘラナデを行う。内面は口縁部ヨコナデ後にナメヘラミガキ、杯体部下に密なヨコヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや少、赤粗粒少 やや硬質	南東床上3～6cmが接 合 口5/12周 17、19、23、83、A-A'
9 土師器 高杯	高 残 9.5 脚裾 17.5	外面は裾部にヨコナデ後、脚部全体にタテヘラミガキ。内面は上～中位に粘土積み上げ痕を残し、上位は弱く絞った縦皺状で、中位にユビオサエ、下位にナメナデ、裾部にヨコナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒と 黒 細粒やや多、白細粒少 やや軟質	南東床上5cmで正位 脚柱1/2周、脚裾3/4 周 110、127
10 土師器 小形壺	口 復 14.2 高 残 7.0	外面は頸部におそらくナメナデの後、口縁部から頸部・肩部までの全体をヨコナデ。内面も外面と同様で、口縁部から肩部までの全体をヨコナデ。非常に丁寧な製品。	2.5YR5/4 にぶい赤褐 やや粗い 白粗～細粒多、灰 色粗粒と黒細粒少 やや硬質	口～頸1/4周 一括
11 土師器 小形壺	高 残 2.6 底 4.0	外底面は斜放射状の丁寧なヘラナデで凹底にする。外面体部ヨコヘラナデ。内面底～体部に多方向ヘラナデ。	2.5YR4/8 赤褐 緻密 白細粒多、赤粗粒と黒・ 透明細粒少 やや硬質	南壁攪乱中 底全周 一括、南壁攪乱
12 土師器 小形壺	口 復 15.2 高 残 10.1	外面は口縁部ヨコナデ後に頸部タテヘラミガキ、肩部タテヘラミガキ。内面は肩部ヨコナデ後に少し絞った痕跡の縦皺が入る。内面頸部は下端ヨコヘラナデ、中位タテヘラナデ、口縁部ヨコナデ。非常に丁寧な製品。	5YR5/6 明赤褐 緻密 赤粗～細粒と白・透明 微粒少 やや硬質	南東壁際床上13cmと南 東床上1～6cm 口～頸2/3周 26、68、89、一括
13 土師器 小形甕	口 15.6 高 残 11.3	外面は体部下位にある積み上げ休止部よりも下方がヨコヘラナデ、それよりも上方がタテヘラナデ。内面は体部ナメヘラナデ。内外面口縁部はヨコナデで、外面は粘土積み上げ痕を残しているため貼付口縁に似た外見になる。外面の下位が被熱赤化し、上～中位に煤が多く付着する。内面は中位にコゲ少量付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗粒多、赤粗粒 と白・黒・透明細粒少 やや軟質	南東床上4～9cm 口5/6周、胴1/3周 20、21、46、120、122、 上層一括、東区
14 土師器 小形甕	口 復 12.0 高 残 7.9 最大 復 13.2	外面は体部ヨコヘラケズリの後にヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は体部下位ヨコヘラナデと上位ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面上半に煤が多い。内面中～下位に暗褐色の汚れが付着する。 [注記]1、9、10、15、85、86、一括	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 白細粒やや多、赤・黒・ 透明細粒少 硬質	南壁際床上7cmと南東1 ～6cm 口1/8周、肩1/3周 注記は左欄
15 土師器 甕	口 復 15.1 高 残 4.3	外面は肩部に斜～横位ナデ、口縁部ヨコナデ後に頸部をやや強いヨコナデ。内面は肩部ナメナデ、口縁部ヨコナデ。外面全体に煤付着。 [注記]3、5、12、19、87、上層一括、東区一括、1層西	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い白・透明粗～細粒多、 黒粗～細粒少 やや硬質	南東床上1～4cm 口3/4周、頸11/12周 注記は左欄
16 土師器 甕	口 16.3 高 残 23.3 最大 22.8	外面は中位ヘラナデとヨコヘラケズリの後に下位ヨコヘラケズリと上位タテヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は下部に多方向ヘラナデの後に中位以上を積み上げてナメヘラナデ、口縁部ヨコヘラナデ後にヨコナデ。外面上半に煤多量。内面中位にごく少量のコゲ(?)付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色粗～細粒 多、黒・透明粗～細粒少 硬質	南東床上4～14cm 口～胸中位はぼ完形、 胴下半1/3周 13、24、44、46、99、101 ～107、112～123、 125、一括、上層一括
17 土師器 甕	口 復 18.0 高 27.3 底 6.8 最大 復 24.4	外面は肩部タテハケ後ナデ、胴中位ヨコハケと下位タテハケ後に胴下端と底面をヨコヘラケズリ。内面は下位に斜位ヘラナデと上～中位にヨコヘラナデ後、中位の積み上げ休止部が厚いところをヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。外面上～中位の煤と内面下位のコゲが明瞭に残る。外面の被熱痕は不明確。 [注記]2、13、33、34、35、37、38、40、42、43、44、74、75、76、77、95、97、98、108、109、129、上層一括、A-A'	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明細粒少 やや硬質	南東床上1～16cm 口5/12周、頸7/12周、 底全周 注記は左欄
18 土師器 壺	高 残 3.8	外面は頸部ナメヘラナデ後に頸～肩部を横位ナデ。内面肩部に不定方向のナデとヘラナデの後、頸部ヨコヘラナデ。	2.5Y6/2 灰黄 やや粗い 白細粒多、白粗粒 と黒・透明細粒少 硬質	西側攪乱中 頸1/4周 西攪乱
19 石器 金床石 破片	長 残 7.0 幅 残 5.0 厚 残 1.4	より厚い大きな石が破損した厚手の破片。表面には1～2mm程の薄い剥離が繰り返し生じている。また、表面全体が被熱して褐色を帯びている。鉄や鍛造剥片の付着は認められない。残存重量75.6g。鍛冶関連遺物構成Noなし。	5Y6/1 灰 緻密で硬質な流紋岩 磁着度 2 メタル度 未計測	中央東部床上3cm 図示した面以外は破面 62
20 石器 金床石 破片	長 残 3.3 幅 残 1.9 厚 残 4.0	石の表面が剥離した小片。表面の中央にある縦位の稜線を挟んで、右側と左側の面にそれぞれ酸化鉄が付着する。特に右半部の面で厚く付着し、ここには1.8×0.6mm大の鍛造剥片も1箇所認められる。残存重量3.1g。鍛冶関連遺物構成Noなし。	2.5Y6/1 黄灰 緻密で硬質な安山岩 磁着度 2 メタル度 未計測	中央床上5cm 図示した面以外は破面 64

第5節 古墳時代の竪穴鍛冶遺構

21 石製品 紡錘車	長径 47.64mm 短径 48.58mm 厚 7.67mm 重 24.3	穿孔後に孔の内壁面を工具でヨコヘラケズリするので穿孔方向不明で、孔径は上面 8.15～8.35mm、下面 8.14～8.45mm。図上面から外周側面は研磨痕をわずかに残して光沢を持つ。図上端は製作時の剥離面を工具で削って段差を少なくした痕がわかる。放射状刻線の後に径 26×29mmの円形刻線を描く。図下面は平坦面をよく研磨し光沢を持つ。斜面は放射状に切削加工後に径 34～35mmの段を全周させ、円周方向に研磨し光沢は弱い。上下面とも孔の外周に接する斜放射状接線があり、使用痕の可能性が高い。	7.5GY5/1 緑灰 緻密でやや軟質な蛇紋岩	南東床上 13cm。平らな面を上に向けて斜位 完形 81
22 石製模造品 白玉	径 4.56mm 厚 1.26mm 重 0.03	両面は剥離面のままで研磨なし。側面は穿孔と同じ擦痕方向 1 段横 (横方向) の細かい擦痕を残す。片面から穿孔し、反対面に穿孔剥離を生じる。孔径 1.12～1.21mm。	5Y5/2 灰オリーブ 緻密な滑石	P1 内 完形 P1
23 炉壁 (鍛冶炉、 滓付き)	長残 3.8 幅残 3.8 厚残 2.1 重残 8.3	内面が部分的に錆色となった鍛冶炉の炉壁内面破片。側面破面の内面寄りには発泡し、外面には褐色に被熱した炉床土が露出する。実測部分 8.3g の他に破片 1 点 4.8g あり。鍛冶関連遺物構成 No. 29。	磁着度 1 メタル度 なし	南東床直上 全周が破面 88
24 土師器 転用羽口	長残 3.6 幅残 3.7 厚残 0.8 重残 5.3	高杯の脚部を転用した (土器) 転用羽口の先端部小破片。最大長が 3.6cm 程の破片で、外面の上手側が薄皮状に滓化して発泡している。下手側にかけでは被熱により灰色からくすんだ紫紅色、さらには褐色と熱変化している。内面の通風孔部は狭い範囲が残っている。上手側の羽口先端部はほぼ生きており、外面の発泡状態が続く。羽口の厚厚は約 7mm を測る。高杯の脚部としては、体部が比較的直線状で基部がラッパ形に開く形態を想定できる。胎土は土器そのもので、キメが細かくわずかな軽石と赤色の微細な混和物を含んでいる。色調は表面が前記の通りで、地は淡赤褐色から灰褐色となる。分析資料 No. 6、鍛冶関連遺物構成 No. 30。	5YR7/4 にぶい橙 緻密 赤細粒やや多、 白・透明細粒と黒細粒少 やや軟質 磁着度 1 メタル度 なし	南東床上 3cm 破面 3 面 60 1 層西区
25 土師器 転用 (?) 羽 口	口復 4.7 高残 3.7 重 29.5 (5 片 合計)	全体に灰色に被熱して上手側端部外面がわずかに発泡する (土器) 転用羽口。薄手の高杯の脚部上端寄りの破片で、外面には縦方向のハケメが、内面は輪積み痕が確認される。同一袋中には他に 4 片あり。鍛冶関連遺物構成 No. 31。	5B5/1 青灰 緻密 白・赤細粒やや多、黒・ 透明細粒少 やや硬質 磁着度 1 メタル度 なし	南東床上 3～6cm が接 合 1/3 周 (先端 1 片、途中 4 片) 20、26、111、1 層西 区
26 土師器 転用 (?) 羽 口	高残 5.2 脚裾復 7.5 重残 17.7	外面は脚部タテハケ、裾部ナメハケ。内面はナデで粘土積み上げ痕を残し、裾部はハケメ。薄作りの高杯脚部破片。8 片が接合する。羽口としての明瞭な被熱痕は認められないが、SI-36 は転用羽口が多出していることから構成に加えた。鍛冶関連遺物構成 No. 32。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤・白・黒粗～細 粒少、赤微 やや硬質 磁着度 1 メタル度 なし	南東床上 12～13cm 脚 1/6 周 36、77、一括
27 土師器 転用羽口	口 2.8 高残 4.7 最大残 5.2 重残 24.1	外面が灰色に被熱して上手側端部が強く発泡する (土器) 転用羽口破片。羽口としては先端部破片にあたり、厚は 8mm 前後を測る。外面は縦方向のケズリで、内面には輪積み痕がかるうじて認められる。高杯としては基部側が急激に開く形態と推定される。鍛冶関連遺物構成 No. 33。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤・白粗～細粒多、 白微少 やや軟質 磁着度 1 メタル度 なし	南東床上 7～9cm 脚 1/2 周 66、67
28 土師器 転用羽口	高残 7.1 脚裾復 15.7 重残 56.0	外面は縦位のナデ後ヘラミガキ。内面はナデで積み上げ痕を残す。内外面の脚部部にヨコナデ。基部に向かってラッパ状に開く形態の (土器) 転用羽口破片。外面は縦方向のナデが丁寧に施され、基部はヨコナデによる。上手側端部外面の一部が灰色に被熱して羽口であることを示す。内面には 4 段の輪積み痕が残されている。鍛冶関連遺物構成 No. 34。	2.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明細粒少 硬質 磁着度 1 メタル度 なし	南東床上 2cm 脚 1/6 周 127
29 土師器 転用羽口	高残 4.9 脚裾復 8.0 重残 33.6	外面はタテハケ。内面は積み上げ痕を残すユビオサエとナデで、裾部はナメハケ。外面の右上手側が灰色に被熱した薄作りの (土器) 転用羽口破片。高杯脚部の中段破片で外面は縦方向のハケメ、内面には 5 段の輪積み痕が確認される。同一袋中には他に 3 片が含まれる。25・26 も同一形態である。鍛冶関連遺物構成 No. 35。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白細粒多、赤粗～ 細粒と黒・透明細粒少 やや軟質 磁着度 1 メタル度 なし	南東床上 2～7cm 脚 5/12 周 115、132、133、134
30 土師器 転用羽口	高 6.6 脚裾復 16.1 重残 80.1	外面は裾部にヨコナデ後、脚部にタテヘラミガキ。内面は脚部に粘土積み上げ痕を残す程度のナデの後、裾部にヨコナデ。基部に向かいラッパ状に開く形態の (土器) 転用羽口破片。径の 1/4 強が残り、本遺跡としては唯一の先端部から基部が残る転用羽口である。外面の 8 割以上が灰色に被熱して、先端部寄りでは強く発泡する。内面は 4 条の輪積み痕が確認され、先端部寄りの 2cm 程の範囲が灰色に被熱し、端部には小範囲で滓が突出する。鍛冶関連遺物構成 No. 37。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明細粒少 やや硬質 磁着度 2 メタル度 なし	南東床上 2cm 脚下半 1/3 周 100、西タン、1 層西区
31 土師器 転用羽口	高残 6.4 最大残 6.7 重残 43.9	内外面は発泡のため調整不明。内外面が強く被熱して全体に灰色基調となっている (土器) 転用羽口破片。外面の右下手側は発泡が強い。また左上手側端部には錆色の滓が薄く固着する。厚は 9mm 前後を測る。高杯脚部の部位としては中段上半相当。内面に 3 条の輪積み痕が確認される。かなり長期間使用された可能性が高い。鍛冶関連遺物構成 No. 36。	5Y5/1 灰 やや粗い 赤粗～細粒と白細 粒多、黒・透明細粒少 やや硬質 磁着度 1 メタル度 なし	南東床上 3～11cm 上部 1/2 周 18、28
32 土師器 転用羽口	高残 6.5 最大残 9.8 重残 113.9	外面はタテヘラケズリとタテナデ後にタテヘラミガキ。内面はナデで、粘土積み上げ痕を少し残し、裾部ヨコナデ。先端部と裾部を欠く (土器) 転用羽口破片。外面は縦方向のケズリとナデにより整形されており、先端部側の外面の一部が灰色基調で被熱して小範囲が発泡する。被熱範囲の外周部は淡い灰褐色となる。内面には 3 単位の輪積み痕が残り、先端寄りとは基部寄りでは微妙に被熱色が異なっている。鍛冶関連遺物構成 No. 38。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明細粒少 やや軟質 磁着度 1 メタル度 なし	南壁攪乱中 脚上半全周 南壁攪乱
33 土師器 壺肩部 (?) 滓付き	長残 1.8 幅残 2.1 厚 0.6 重残 3.4	内面下手側から端部に薄皮状の滓が貼り付いている (土器) 転用羽口または壺の肩部小破片。側面 4 面が破面で外面上手側がわずかに反り返る。また全体が灰色に被熱する。鍛冶関連遺物構成 No. 39。	5Y6/1 灰 緻密 白細粒少 やや硬質 磁着度 1 メタル度 なし	破面 4 面
34 土師器 転用 (?) 羽 口	高残 2.5 最大残 5.2 重残 6.2	内面に厚さ 4mm 程の鍛冶滓が固着する (土器) 転用羽口破片。厚は 5mm 程で高杯脚部上端寄り破片と推定される。全体が灰色に被熱して表層が発泡し始めている。鍛冶関連遺物構成 No. 40。	7.5Y6/1 灰 白微粒少 硬質 磁着度 1 メタル度 なし	南西部 1/6 周 南西

第5章 権現山遺跡 SG10 区

35 土師器 転用羽口 (被熱土器 片?)	長 幅 厚 重	残 3.6 残 4.4 1.0 残 12.2	被熱により調整が不明瞭だが、外面がナデ、内面が絞り目およびユビオサエと推定される。内外面が褐色から灰色に被熱して右側部の破面が強く発泡する(土器)転用羽口破片。土器としては側部4面が破面で上手側端部が絞られた形態となっている。それに応じて内外面が小さく反り返る。元の土器は身厚が1.2cm前後と厚いため、壺または甕の肩部から口縁部にかけての破片の可能性を持っている。その意味では被熱土器片のほうが正確な評価となるかもしれない。5世紀代前後の(土器)転用羽口を用いる鍛冶にしばしばこうした被熱土器片が伴っており、土器片を鍛冶炉の壁代わりに用いる場合も想定できよう。鍛冶関連遺物構成No.41。	2.5Y5/2 暗黄灰 やや粗い 白・褐色粗～細粒やや多 硬質 磁着度 1 メタル度 なし	北東床上 15cm 破面 4面 53
36 土師器 転用羽口 (鍛冶、先 端部、滓化)	長 幅 厚 重	残 1.8 残 4.6 残 1.8 残 9.9	内外面が薄皮状の滓に覆われた(土器)転用羽口先端部破片。土器としては高杯脚部先端部にあたり、欠け落ちた後鍛冶炉に落下したもののか。他に2片が同一袋中にあり。図示した1片の重量は9.9g、3片合計では13.4g。鍛冶関連遺物構成No.42。	5Y4/2 灰オリブ 表 暗緑灰色 地 灰色 やや粗い 白細粒少 やや硬質 磁着度 3 メタル度 なし	南東床上 4cm 先端部残 59
37 椀形鍛冶滓 (小、工具 痕付き)	長 幅 厚 重	残 3.4 残 4.3 2.6 残 40.0	下面に短軸方向に向かう幅1.5cm程の工具痕を残す小形の椀形鍛冶滓破片。最大厚みは2.3cm程度で滓質は緻密。上面はかすかに木炭痕を残す平坦気味な面となる。鍛冶関連遺物構成No.43。	表 褐色 地 灰色 磁着度 2 メタル度 なし	中央東部床上 16cm 破面 3面 57
38 椀形鍛冶滓 (小、炉床 土付き)	長 幅 厚 重	残 8.0 残 6.3 残 2.9 残 109.6	左下手側の側部が連続する3面の破面となった小形の椀形鍛冶滓平欠品。上面はやや粘皮状の滓に覆われており、波状の面となる。右上手側の側部が不規則に凹み、凹凸を生じている。下面は浅い椀形で全体に鍛冶炉の炉床土の剥離痕となっている。上手側には1.5cm程の範囲で炉床土そのものの固着もあり。滓質は中小の気孔が乱雑に残る状態となっている。下面下手側が部分的に錆色で磁着もややあり。鍛冶関連遺物構成No.44。	表 にぶい黄褐色 地 灰色 磁着度 4 メタル度 なし	南東床直上 破面 3面 71
39 椀形鍛冶滓 (小、含鉄、 炉床土付 き)	長 幅 厚 重	残 10.2 残 7.2 2.8 残 179.3	側部3辺が小破面となった小形の椀形鍛冶滓。全体に扁平で短軸方向に伸びており、左右の側部の中間部分がくびれている。上面は浅い木炭痕を残す平坦気味の面で錆色となっており、磁着範囲も広い。下面は短軸方向に伸びる浅い舟底状で部分的に灰色に被熱した炉床土が確認される。また、滓の一部が粒状となって突出する。椀形鍛冶滓としては、下層に滓部が形成された後に上半部に含鉄の滓部が重層した形で比重が高い。図示した個体の重量は179.3g、小片を含めると合計180.0g。鍛冶関連遺物構成No.45。	表 褐色 地 灰色 磁着度 3 メタル度 錆化(△)	中央東部床上 16cm 破面 3面 55
40 椀形鍛冶滓 (小、含鉄)	長 幅 厚 重	残 5.1 残 6.6 残 2.5 残 103.8	上下面と下手側の側部の一部が生きている、厚さ2.5cmほどの小型の椀形鍛冶滓の平欠品。左側部が主破面で、弧状に巡る右寄りの側部は全周が細い破面となっている。上面の中央寄りに含鉄部が残されているため、放射割れが入り始めており、黒錆の滲みも生じている。上面は全体的に平坦気味で、肩部に向かって木炭痕と滓の突出部が菊花状に広がる。下面は浅い椀形で全体が炉床土の剥離面となっており、2箇所に径1.3mm大の粒状の滓が顔を出す。滓質は中層を中心に緻密で、上下面に沿った部分ではやや気孔が目立つ。左側部下手側の酸化土砂中には青光りする鍛造剥片が1点含まれている。また、上手側の側部の窪みにも鍛造剥片らしき遺物が認められる。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は濃茶褐色、地は濃茶褐色から黒褐色となる。分析資料No.7、鍛冶関連遺物構成No.46。	表 茶褐色～濃茶褐色 地 濃茶褐色～黒褐色 磁着度 3 メタル度 錆化(△)	南東床上 7cm 破面 4面 61
41 椀形鍛冶滓 (極小)	長 幅 厚 重	残 1.7 残 2.1 残 1.2 残 5.4	厚さ1.2cm程の極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上下面と下手側の側部が生きており、残る側部3面が破面となっており、滓質は緻密。鍛冶関連遺物構成No.47。	表 黄褐色 地 黒褐色 磁着度 1 メタル度 なし	破面 3面
42 椀形鍛冶滓 (極小)	長 幅 厚 重	残 3.8 残 2.9 1.8 残 13.6	左側部が破面となる極小の椀形鍛冶滓の側部破片。上面は平坦気味で下面は乱れた椀形となる。生きている側部の発達が弱く、母体となる椀形鍛冶滓の滓量の少なさを物語る。図示した1片の重量は13.6g、小片2点を含めると15.0g。鍛冶関連遺物構成No.48。	表 にぶい黄褐色 地 灰色 磁着度 2 メタル度 なし	南東床上 2cm 破面 1面 78
43 椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	長 幅 厚 重	残 3.8 残 2.9 残 2.1 残 17.1	左側部が破面となった極小の椀形鍛冶滓肩部破片。上面中央部には滓が突出し、下半の滓は一部が錆色となっている。含鉄部が下半の滓の中核部と推定される。滓質は気孔が疎らで密度はやや低め。浅い皿状の下面には粉炭痕が並ぶ。鍛冶関連遺物構成No.49。	表 明褐色 地 灰色 磁着度 3 メタル度 錆化(△)	南東床上 1cm 破面 1面 78
44 椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	長 幅 厚 重	残 4.1 残 3.9 残 1.7 残 27.2	平面、不整多面形をした含鉄で極小の椀形鍛冶滓。左上手側の端部が小塊状となり、上面が錆ぶくれの欠けとなっている。含鉄部はこの部分と、右側の小塊状の部分の2箇所に分かれている。そのため、全体の2/3の部分が含鉄部で、一見、側部から下面が段をなす椀形になっているが、実際は径2cm大前後の小塊状の含鉄の滓が接した形ともとれる。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部が表面・地とも濃茶褐色から黒褐色となっている。分析資料No.8、鍛冶関連遺物構成No.50。	表 茶褐色～濃茶褐色 地 濃茶褐色～黒褐色 磁着度 3 メタル度 錆化(△)	南東床上 15cm 破面 1面 82
45 椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	長 幅 厚 重	4.4 5.6 1.4 残 25.0	左側部が破面となった扁平でやや特異な形状の極小の椀形鍛冶滓破片。左側の反対部分から右上手側が3cm程の範囲で横に突出する。上面はザラザラした感じの平坦面で左下手側にかすかに工具による当たりが生じている。下面は浅い皿状で、左側半分が炉床土に接している。滓中には気孔が多め。含鉄部は右側の突出部上半と推定される。図示した個体の重量は25.0g、小片2点を含めると28.8g。鍛冶関連遺物構成No.51。	表 褐色 地 暗青灰色 磁着度 3 メタル度 錆化(△)	南東床上 6cm 破面 1面 80
46 鍛冶滓	長 幅 厚 重	残 2.9 残 2.2 残 1.9 残 7.2	右側部が小破面となった鍛冶炉または極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上面は浅く凹み、側部や下面は木炭痕により不規則な凹凸状態となる。鍛冶関連遺物構成No.52。	表 黄褐色 地 青灰色 磁着度 2 メタル度 なし	南東床直上 破面 1面 131
47 鍛冶滓	長 幅 厚 重	残 3.3 残 3.5 残 1.7 残 15.4	左側部が破面となった平面・正三角形をした鍛冶滓破片。右側に向かい薄くなる形態で正面下手側には羽口の頸部の可能性の高い粘土質の破面が残されている。現状では鍛冶滓様となっているが、本来は極小の椀形鍛冶滓であった可能性が高い。鍛冶関連遺物構成No.53。	表 黄褐色 地 オリブ黒色 磁着度 1 メタル度 なし	南東床上 15cm 82
48 鍛冶滓 (極小、含鉄)	長 幅 厚 重	6.2 7.3 2.7 残 48.5	一見、椀形鍛冶滓破片様の鍛冶滓破片。浅い皿状の滓で上半2/3が粘土質の滓に覆われており、下面は灰色に被熱した炉床土が点々と固着する。滓自体の密度も低く、内部に隙間も生じている。鍛冶炉の炉壁に近い資料といえるが、滓主体のため鍛冶滓とした。図示した個体の重量は48.5g。小片を含めると52.2g。鍛冶関連遺物構成No.54。	表 にぶい黄褐色 地 灰色 磁着度 2 メタル度 錆化(△)	北東床上 17cm 破面 1面 52

第5節 古墳時代の竪穴鍛冶遺構

49 鍛冶滓 (含鉄)	長幅厚重 3.0 3.0 2.1 17.1	歪んだ形態の完形の鍛冶滓。下面の中央部のみが小さな梯形を示し、側部や上面は木炭痕により変形が生じている。含鉄部は下面寄りの芯部と見られ、錆色も目立つ。鍛冶素材の遊離品の可能性もあり。鍛冶関連遺物構成No.55。	表 黄褐色 地 褐灰色 磁着度 2 メタル度 錆化(△)	南東床直上 完形 90
50 鉄製品 (鍛造品)	長幅厚重 残 2.9 残 2.1 残 0.1 残 6.8	上半のコブ状の突出部が錆ぶくれとなっている鉄製品表面破片。下面全体が錆ぶくれから遊離した状態で板状の鉄製品が母体と見られる。構成No.57の鉄地銅張の鉄製品が同一遺構からの出土品で、この資料の表面破片の一部である可能性を持っているが、直接の接合はしないため別扱いとした。鍛冶関連遺物構成No.56。	表 明褐色 地 褐色 磁着度 6 メタル度 錆化(△)	南東床上 16cm 表面破片 69
51 鉄製品 (鉄地銅張)	長幅厚重 残 3.9 2.7 0.4 残 11.6	最大幅が2.7cmを測る扁平な鉄製品破片。2片が接合しており、左右端部が破面となっている。見かけ上は酸化土砂のため8mm近い厚みを持つが、実際の鉄製品の厚みは3.5mm程度と見られる。破面の端部に3箇所、緑青が吹いた部分が小範囲で確認され、加えて右側部の破面上手側の緑青に接して、淡い赤銅色の金属銅の疑いを持つ斑点状の発色部がある。表裏面とも錆ぶくれや酸化土砂により凹凸が生じているが、本体は上面の中央部がわずかに盛り上がった形の薄板状の金属製品である可能性が高い。破面の一部に黒褐色の酸化液が固化している。透過X線像では筋状の鍛造痕がほとんど確認できず、錆化の程度が異なる状態の炭素量の低い鉄板状である。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、鉄部は濃茶褐色から黒褐色、さらに銅部分の錆色は緑青色となる。分析資料No.9、鍛冶関連遺物構成No.57。	表 茶褐色～濃茶褐色～緑青色 地 濃茶褐色～黒褐色～緑青色 磁着度 6 メタル度 錆化(△)	南東床直上の2片が接合 破面2面 72、73
52 石器 金床石	長幅厚重 残 22.6 残 18.7 残 17.4 残 10800 (10.8kg)	下手側の側部が大きな直線状に欠けている金床石の半欠品。転石を母材としたもので、側部4面のいずれもが打面として用いられている。左側面が最も広範囲に用いられており、表面は跳ねが生じて点々と濃茶褐色の錆色をした鍛造剥片が固着している。次いで使用頻度の高いのは上面の打面で、残る2面については使用頻度が低い。奈良・平安時代の鍛冶遺跡から出土する金床石に比べて打面の赤化が弱く、古墳時代の鍛冶の特色を持っている。石質は安山岩。鍛冶関連遺物構成No.60。	10Y6/1 灰 安山岩 磁着度 1 メタル度 なし	南東床直上 下部欠 58
鍛造剥片		方形の竪穴住居址の隅の部分が長さ4.3m・幅2.7mの三角形に残った調査範囲から出土した資料である。鍛冶関連遺物が多出することから、中央に幅30cmの南北方向の土手を残し、その左右と南北を6区分した上で、床面直上の土を採取して水洗した。鍛冶関連の微細遺物としては粒状滓・鍛造剥片のいずれもが出土しているが、粒状滓様の資料はきわめて少なく、またいびつだったり磁着しない粘土質の滓が確認されている。分析資料としては構成No.60とした安山岩の転石を用いた金床石の南西に位置するP1としている窪み、および3区からの出土である。資料化に際しては水洗された鍛冶関連の微細遺物を粒状の滓と鍛造剥片に分けた後に、分析資料の選択時に磁着の強弱でさらに二分した中から代表化している。鍛造剥片は各区とも比較的出土量が多く、厚みも様々であることから、磁着傾向で二分した上で代表的な厚み資料を合計6点選択している。分析資料No.11、鍛冶関連遺物構成No.59。	メタル度 なし	
粒状滓		方形の竪穴住居址の隅の部分が長さ4.3m・幅2.7mの三角形に残った調査範囲から出土した資料である。発掘調査の折に覆土中から鍛冶関連遺物が多出することから、中央に幅30cmの南北方向の土手を残し、その左右と南北を6区分した上で、床面直上の土を採取して水洗した。鍛冶関連の微細遺物としては粒状滓・鍛造剥片のいずれもが出土しているが、粒状滓様の資料はきわめて少なく、またいびつだったり磁着しない粘土質の滓が確認されている。分析資料としては構成No.60とした安山岩の転石を用いた金床石の南西に位置するP1としている窪み、および3区からの出土である。資料化に際しては水洗された鍛冶関連の微細遺物を粒状の滓と鍛造剥片に分けた後に、分析資料の選択時に磁着の強弱でさらに二分した中から代表化している。粒状滓は母体の資料数が限られるため、2点を選択した。分析資料No.10、鍛冶関連遺物構成No.58。	メタル度 なし	

【鍛冶関連遺物】 鍛冶関連遺物は、他遺構の資料とともに『東谷・中島地区遺跡群 10』で一度報告したものである(23～52)。金床石破片2点を、今回追加掲載した(19・20)。

羽口には高杯転用品と専用品がある。「転用羽口」としたうちの25・26・29・34は、非常に薄くて外面をハケ調整する独特な製品で、このような在地の土師器高杯が見られないので、専用羽口の可能性もある。しかし器厚が薄くて溶けやすい点は、専用羽口と考えるには不自然で、鍛冶関連遺物を観察した穴沢義功氏の見解では高杯転用羽口と判断された。他に類例の少ない独特な羽口である。これに対して24・27・28・30・31・32・36は通常の高杯転用羽口である。33と35は転用羽口というよりも被熱した土師器(壺?)の破片と思われる。

鉄製品は2点出土した。51(分析資料9)は緑青を一部に生じている含銅鉄製品で、鉄地銅張(鉄地金銅張)の製品や再生素材に由来する可能性を持つ(『東谷・中島地区遺跡群 10』, p.513)。50は鉄製品から表面が剥離した破片。金床石は、前回報告にも図示した完形品があり、4面を使用している(52)。この他に、別個体と思われる金床石破片を2点確認したので、今回追加報告した(19・20)。また、北6mと北東15mにある同時期の建物跡SI-50とSI-106の鉄滓と金床石もSI-36の鍛冶作業に関わって持ち込まれた遺物の可能性があるもので、今回追加報告した(第153図下段)。

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第 152 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-36 (2) 遺物

羽口 (24)、鍛冶滓 (40・44)、銅粒を内部に含む鉄製品 (51) および粒状滓・鍛造剥片の金属学的調査結果は、大澤正己 2010「権現山遺跡・杉村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」(『東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』)で権現山遺跡北部の資料とともに報告された。始発原料が鉄鉱石の鍛錬鍛冶滓で、故鉄使用の可能性はある。羽口 (24) からは低温操作が指摘された (大澤前掲, p.511)。

また、第 152 図 40 と 51 (GON-7・9) の中性子放射化分析結果を、権現山遺跡北部の SG1 区 SI-33・71 出土資料 (GON-2・5) とともに、本章次節の 5.6.3. 項で報告する。この分析結果によると、As/Sb 濃度比 (アンチモンに対するヒ素の比率) は 1 以上であるが、As (ヒ素) と W (タングステン) が高濃度であることから、朝鮮半島から舶載された鉄を原料に用いていることが考えられている。

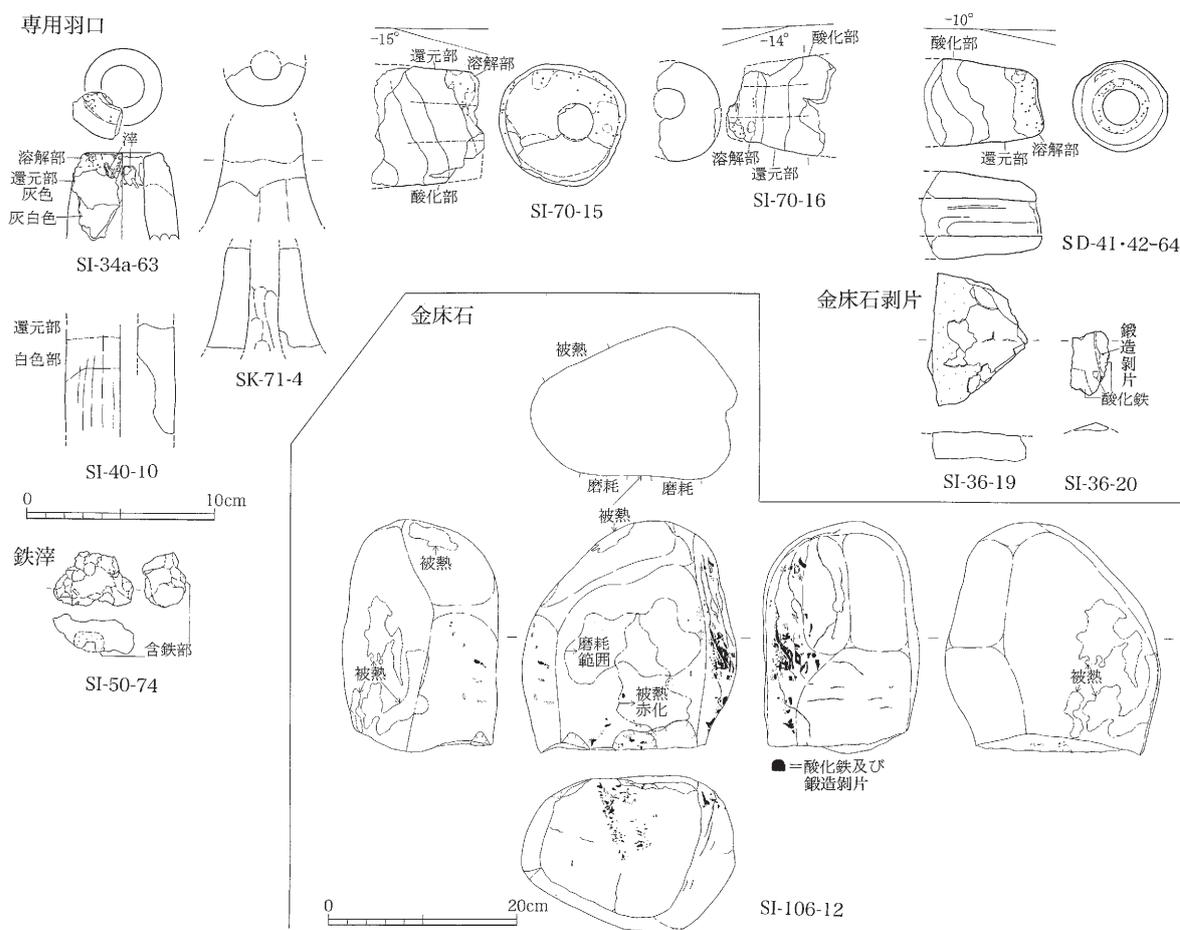
第6節 権現山遺跡の鉄関連遺物と自然科学分析

5.6.1. 鉄関連遺物の追加報告

権現山遺跡の南部と北部から出土した鉄関連遺物は、北部の報告書である『東谷・中島地区遺跡群』10のpp.490-498にまとめて掲載し、構成番号1～81を与えた。大澤正己氏による金属学的分析結果も同報告書に掲載してある。SG10区SE-569から出土した椀形鍛冶滓1点（第200図12）だけは中世の遺物であるが、それ以外はすべて古墳時代中期および後期の鍛冶関連遺物である。

ここでは、前回の報告書『東谷・中島地区遺跡群10』に掲載後に確認したため、同書に掲載されていない鉄関連遺物を第153図に示す。すべて古墳時代中期および後期と考えられる。SG10区SI-34aの63番・SI-40の10番・SI-70の15・16番（専用羽口合計4点）、SG10区SI-50の74番（椀形鍛冶滓1点）、SG10区SI-36の19・20番（金床石剥片2点）、SG10区SI-106の12番（金床石）、SG10区SD-41・42の64番（専用羽口）、SG10区SK-71の4番（近世土坑に混入した古墳時代の専用羽口）の合計10点である。この他に権現山遺跡SG9区7.5-22.5グリッドの確認調査トレンチに鉄滓類似品があるが、鉄滓ではなく低地に集積した酸化鉄分の可能性が高い。

SG10区SI-34aは古墳後期末（7段階）、SG10区SI-36は古墳中期中頃～後葉（2段階新相～3段階古相）、SG10区SI-40は古墳後期末（7段階）、SG10区SI-50は古墳中期後葉（3段階）、SG10区SI-70は古墳後期前葉（5段階）、SG10区SI-106は古墳中期後葉（3段階）の建物である。また、SG10区SD-41・



第153図 権現山遺跡南部の鉄関連遺物(追加報告分)

42 は、古墳中期末葉（4 段階）の SD-42 を後期後葉（6 段階）の SD-41 が掘り直した溝状遺構である。2 段階は TK73 ～ TK216 型式期、3 段階は TK208 型式期、4 段階は TK23 ～ TK47 型式期、5 段階は MT15 ～ TK10 型式期、6 段階は TK43 型式期、7 段階は TK209 型式期にそれぞれ相当する。

古墳中期は高杯転用羽口が主体で、古墳後期には転用羽口が消滅して専用羽口になる（SI-34a・40・70 と SD-41・42）。古墳中期末に短脚化した土師器高杯は羽口に転用することが難しくなり、古墳後期には高杯が再び長脚化するが器種組成における高杯の数量が少なくなることが背景にある。また、土師器を転用した羽口よりも専用羽口の方が厚いので耐火度も高いことが考えられる。

5.6.2. 中性子放射化分析および自然科学分析結果の概要と考古学的評価

権現山遺跡の鍛冶関連遺物を分析し、結果として朝鮮半島産の原料を使用していることが推定された。分析対象は、今回報告する SG10 区 SI-36（古墳中期中葉～後葉、2 段階新相～3 段階古相）と、北半部の報告書『東谷・中島地区遺跡群』10 で既に報告した古墳中期の鍛冶遺構（SG1 区 SI-33、古墳中期中葉、2 段階）および古墳後期の鍛冶関連遺物出土遺構 SG1 区 SI-71（後期中葉、5 段階新相）の出土遺物である。分析方法は、中性子放射化分析および顕微鏡観察・EPMA 調査を実施した。目的は、元素の種類と含有量を定量して、鉄の原産地を推定することである。分析作業と結果の解析、報告書作成は東京都市大学工学部原子力安全工学科の平井昭司氏に依頼した。

平井昭司氏は国立歴史民俗博物館の共同研究「日本・韓国の鉄生産技術」において製鉄・鍛冶関連遺物の中性子放射化分析結果から原料の違いや産地を議論している。栃木県域では小山市西裏遺跡および壬生町新郭遺跡で古墳時代中期の鍛冶関連遺物に中性子放射化分析を実施し、朝鮮半島の鉄原料が使用されていることを明らかにした（平井 1996・1998）。これらの中性子放射化分析結果においては、ヒ素とアンチモンの濃度比（As/Sb）が 1 以下であることから、朝鮮半島の鉄原料が使用されたことを推定している。

今回の権現山遺跡の分析結果では、As/Sb 比がいずれも 1 以上の値となった。しかし、ヒ素（As）およびタングステン（W）の濃度が高いことから、朝鮮半島産の原料を使用していることが推定されている。6 世紀以前の韓国出土鉄器にも As/Sb が 1 以上で、As が数 100 μ g/g、W の濃度が数 10 ～数 100 μ g/g のものがあるということである。

As/Sb が 1 以上なので、平井他（1994b）の分類では「高 As・低 Sb の系列」に属すると思われる。加耶・新羅地域の古墳出土鉄器に対比すると、福泉洞・七山洞・鶴巢台・礪溪堤・玉田・蓮山洞古墳群の鉄器と同じ群に入り、蔚山下垵・金海礼安里古墳群の鉄器では別群に属するものが多い（平井他 1994b, p.315）。As/Sb が 1 以上で、As が数 100 μ g/g、W の濃度が数 10 ～数 100 μ g/g の鉄器を拾い出すと、釜山市七山洞古墳群 1A・1B（铸造斧形品）、釜山市福泉洞 21 号墳 1（鍛造鉄斧）、陝川礪溪堤が A 号墳 5（鏡板）、釜山市蓮山洞 8 号墳 3（挂甲小札）が該当する（平井他 1994b）。同様な原料を用いた鉄器が釜山市域の古墳に多いことがわかるが、慶尚南道陝川地域にも認められる。現時点では資料数に限界があるので、韓国で釜山・陝川以外の地域に同種の鉄が分布するかどうかを明らかにできない。

（註）

平井昭司 1994a「中性子放射化分析法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 58 集 日本・韓国の鉄生産技術《調査編 1》国立歴史民俗博物館 佐倉, pp.29-31.

平井昭司他 1994b「韓国出土鉄器の分析科学的特徴」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 59 集 日本・韓国の鉄生産技術《調査編 2》国立歴史民俗博物館 佐倉, pp.314-325.

平井昭司 1996「西裏遺跡から出土の製鉄関連遺物の中性子放射化分析」『西裏遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 180 集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 宇都宮, pp.265-272.

平井昭司 1998「新郭遺跡から出土の製鉄関連遺物の中性子放射化分析」1998『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 214 集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団 宇都宮, pp.529-538.

5.6.3. 権現山遺跡から出土の鍛冶関連遺物及び鉄製品の自然科学的分析

平井昭司（東京都市大学）

1. はじめに

権現山遺跡は、栃木県宇都宮市東谷町に所在する5～6世紀（古墳時代中期～後期）の巨大集落で、このうち区画整理事業関連調査で94,000㎡を発掘して、古墳時代の竪穴住居跡207棟の調査を行った。そのうち、SG1区SI-33とSG10区SI-36からは古墳時代中期後葉（5世紀中葉～後葉）に比定される竪穴鍛冶遺構が見いだされ、そこからは鉄滓や鉄製品が出土した。また、SG1区SI-71からは古墳時代後期中葉（6世紀中葉）に比定される鍛冶遺構ではない遺構からも鉄滓が出土している。

2. 分析試料

分析に供した試料は4点で、それぞれの写真を第154図の図1、図2、図3及び図4に示す。図中にある直線は、金属組織観察のための埋め込み用試料の採取箇所、ダイヤモンド刃の自動切断器（BUEHLER社製：Isomet LOW SPEED SAW、潤滑・冷却液：エチルアルコール）とハンディー用のカッター（（株）ミニター製：M25H）を用いて行った。丸印は放射化分析のために切断した箇所である。特に、分析試料の採取においては、あらかじめ一般に使われている磁石を使用し、反応を感覚により着磁力を調べ、できるだけ着磁性が強いところを分析に供した。

分析した試料4点は、椀形鍛冶滓と鉄製品と分類されているが、それらの試料番号は、GON-2、GON-5、GON-7及びGON-9である。それぞれの外観の概略を以下に示す。

GON-2は、薄板状の鉄製品の破片で表面は褐色な錆に覆われている。切断した内部は黒色であり、層状になっていることが観察される。磁石による着磁性は強い。

GON-5は、椀形鍛冶滓で無数の小さい空孔がみられ、表面は灰色部分と褐色部とになっている。試料の大きさにしては、軽くかつ硬い。切断した面では黒く細かい空孔が密になっている。磁石による着磁性は弱かった。

GON-7は、椀形鍛冶滓で表面には細かい空孔が多数みられ、全体的にこげ茶色になっている。重量感はあるが、硬くはない。切断面は黒く光沢があり、大小の空孔が観察される。磁石による着磁性は強い。

GON-9は、板状の鉄製品の破片で表面は褐色の錆に覆われ、脆くなっている。切断した内部は黒色で、層状になっている。

分析した試料の資料重量及び出土位置を第91表上段に、また、中性子放射化分析用に供した試料重量を第91表下段に示す。

第91表 分析試料一覧

	GON-2	GON-5	GON-7	GON-9
	鉄製品	椀形鍛冶滓	椀形鍛冶滓	鉄製品
資料重量 (g)	20.7	85.0	103.8	11.6
出土位置	SG1区SI-33	SG1区SI-71	SG10区SI-36	SG10区SI-36
放射化分析用 試料重量 (g)	0.0901	0.0525	0.0508	0.0621

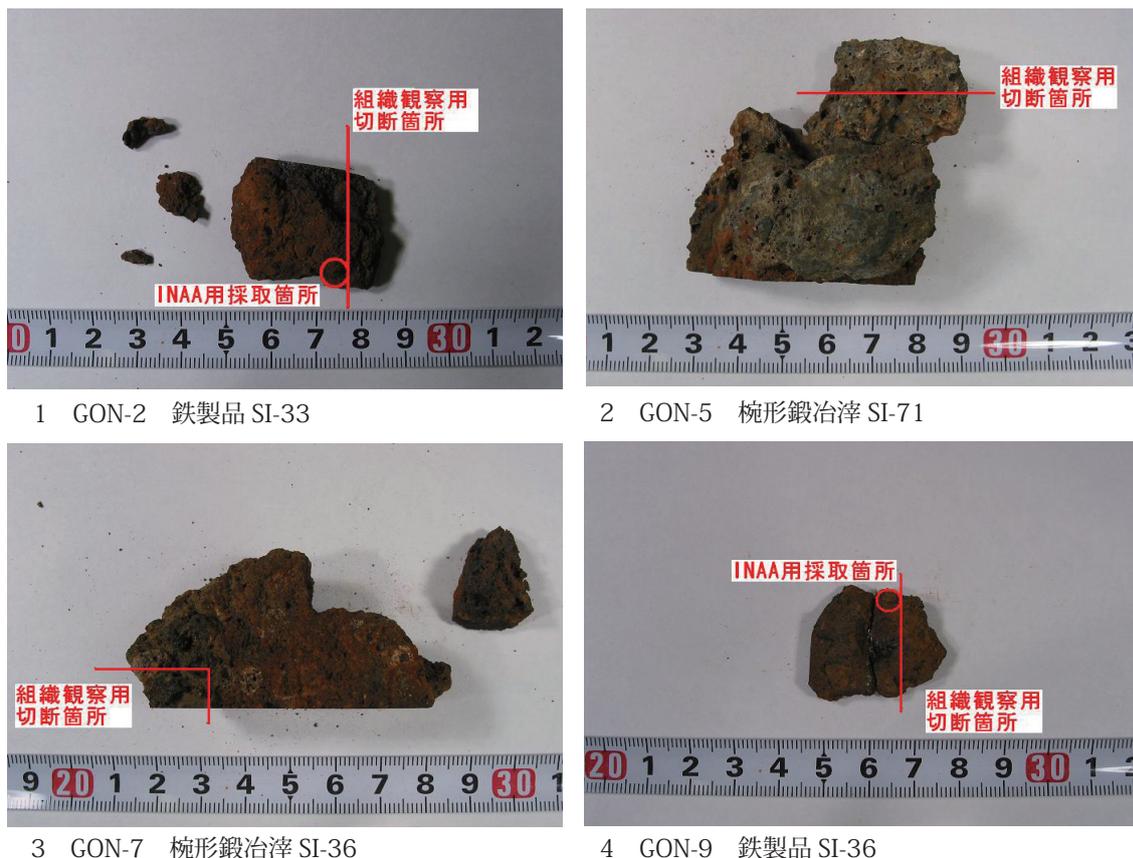
3. 自然科学的分析方法

3-1 光学顕微鏡法による組織観察

切断採取した試料を直径1インチの大きさの型に入れ、ウッドメタル（Bi-Pb-Sn-Cd合金）で埋め込み、硬化させた後に研磨を行い、顕微鏡観察を行った。観察には倒立型金属顕微鏡（Nikon製：EPIPHOT300）を使用し、拡大倍率100倍で行った。

3-2 EPMAによる元素分布調査

電子プローブマイクロアナライザ（日本電子製：JXA-8200）を使用してEPMA分析を行った。顕微鏡観察を終えた試料をEPMA分析のために、再度試料表面の研磨を行い、非導電体による帯電の影響を防ぐため、分析面にAuの蒸着を行った。測定は、加速電圧：15kV、照射電流： 1.3×10^{-7} A、ビーム径：1 μm



第 154 図 権現山遺跡の放射化分析・自然科学分析試料 (SG10 区 SI-33・36・71)

φの条件で行い、計 15 元素 (C、O、Na、Al、Si、P、S、Cl、Ca、Ti、Fe、Co、Cu、As、Sb) のマッピングの画像を解析した。マッピングの条件は、測定視野：400 × 400 μ m、画素サイズ：1 μ m、画素数：16 万 pixel、計測時間：10msec/1pixel である。マッ

ピング像の明るさは、測定視野内で最も高い強度 (count) を最高値とし、0(count) を最低値として各元素の分布と存在量を示した。

3- 3 中性子放射化分析法による元素分析

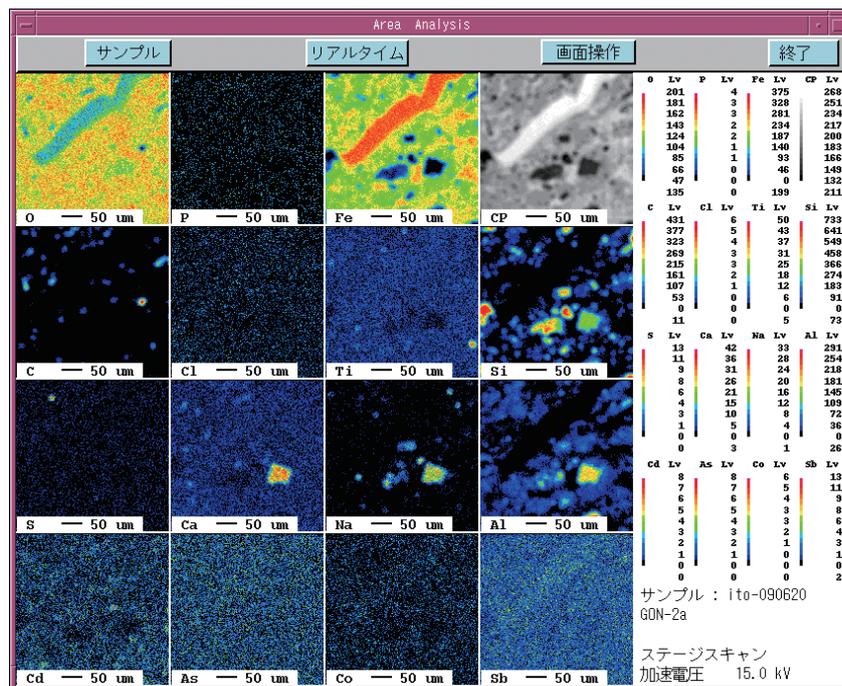
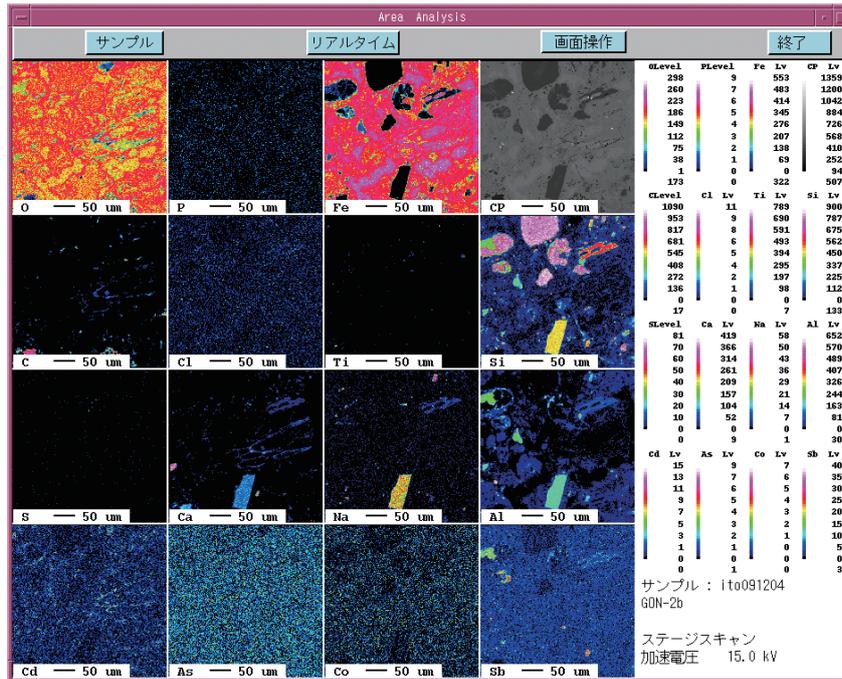
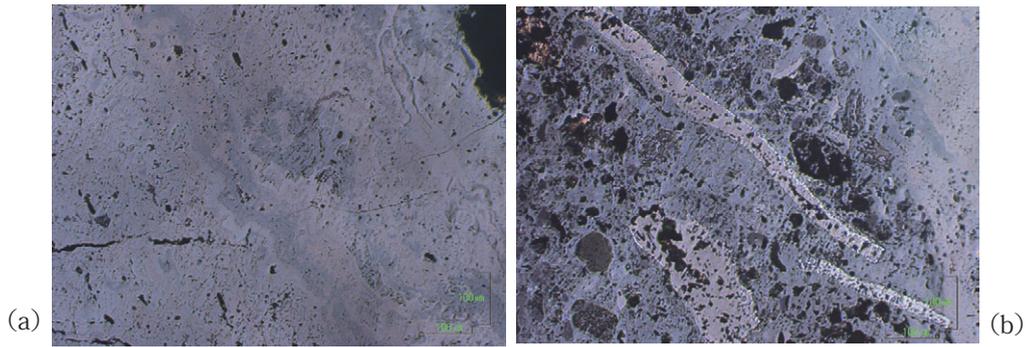
ダイヤモンドカッターにより切片を削りだした 50 ~ 90mg をそれぞれ秤量してポリエチレン袋に二重詰めたものを照射・分析試料用とした。定量のためには Au 線を同時に照射し、Au の放射化量から他の元素の放射化量を見積もる k0 法により元素量を算出した。分析試料の中性子照射には日本原子力研究開発機構の研究用原子炉：JRR-3 (出力：20MW) の PN-1 照射設備を使用した。放射化した試料の γ 線測定は、高純度 Ge 検出器と 4096

第 93 表 測定に使用した核データ

元素	核種	半減期	γ 線エネルギー (keV)
Na	²⁴ Na	14.9 h	1368.6
K	⁴² K	12.36 h	1524.7
Sc	⁴⁶ Sc	83.8 d	889.3
Cr	⁵¹ Cr	27.7 d	320.1
Fe	⁵⁹ Fe	44.6 d	1099.3, 1291.6
Co	⁶⁰ Co	5.271y	1173.2, 1332.5
As	⁷⁶ As	26.3 h	559.1
Rb	⁹⁷ Rb	2.88 d	215.7
Sb	¹²² Sb	2.7 d	564.2
La	¹⁴⁰ La	40.27 h	1596.2
Ce	¹⁴¹ Ce	32.5 d	145.4
Sm	¹⁵³ Sm	46.7 h	103.2
Eu	¹⁵² Eu	13.3 y	1408
Tb	¹⁶⁰ Tb	72.3 d	298.6
Yb	¹⁷⁵ Yb	4.19 d	396.3
Lu	¹⁷⁷ Lu	6.71 d	208.4
Hf	¹⁸¹ Hf	42.39 d	482.2
W	¹⁸⁷ W	23.9 h	685.7
Th	²³³ Pa	27 d	311.9

第 92 表 中性子照射条件及び γ 線測定条件

中性子束密度 (原子炉, 照射設備)	照射時間	冷却時間	測定時間
2 × 10 ¹⁷ m ⁻² s ⁻¹ (JRR-3 炉, PN-1)	10m	1 回目 2-4d 2 回目 9-16d	1 回目 1500s 2 回目 3000s



第155図 GON-2 鉄製品の光学顕微鏡観察像 (a)、(b) 及び EPMA 解析像 (c)、(d)

チャンネル波高分析器からなる γ 線スペクトロメトリーにより行った。放射化するための中性子照射条件及び γ 線測定するための条件を表 2 に示し、元素定量のため着目する放射性核種及び γ 線エネルギー等の核データを表 3 に示す。分析の原理は、定量すべき元素が構成する安定核種を原子炉からの中性子により、主に (n, γ) の核反応を起こさせ、質量数が 1 多い放射性核種を生成させる。この放射性核種の放射能を測定することで、元素含有量を定量することができる。この核反応が起きるときに、ときに (n, p) 反応や (n, α) 反応も起き、これが (n, γ) 反応から生成する核種と同一なものを生成し、定量において妨害反応となる。妨害反応の一例として、 ^{27}Al (n, α) ^{24}Na 、 ^{46}Ti (n, p) ^{46}Sc 、 ^{56}Fe (n, p) ^{56}Mn 、 ^{54}Fe (n, α) ^{51}Cr 、 ^{60}Ni (n, p) ^{60}Co 、 ^{63}Cu (n, α) ^{60}Co などがあり、過去の分析結果から Fe の値 100% に対して Cr の値は 35ppm、Mn の値は 21ppm 高い値になることが知られている。今回、中性子放射化分析の照射と γ 線測定に関し、住重試験検査株式会社に委託しており、これらの元素の妨害反応の影響の補正を行っていない。

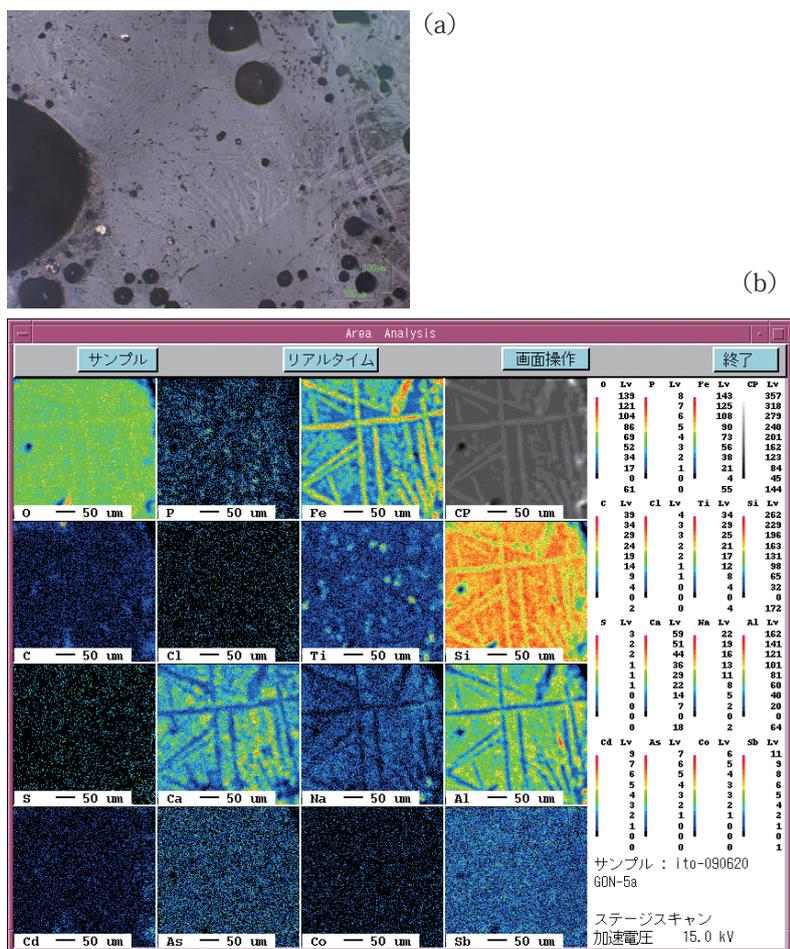
また、今回定量した元素は、放射化して生成する放射性核種が短寿命（数分～数時間）核種は分析できないので、分析対象から除外している。

4-1 光学顕微鏡観察像及び EPMA 解析像

1 インチの型枠の中に埋め込んだそれぞれの試料の複数個所を光学顕微鏡及び EPMA で観察を行った。本報告では代表的な 1～2 箇所の光学顕微鏡観察像及び EPMA 解析像を示す。

* GON-2 鉄製品

第 155 図に GON-2 鉄製品の光学顕微鏡観察像及び EPMA 解析像を示す。図の (a) と (b) は光学顕微鏡



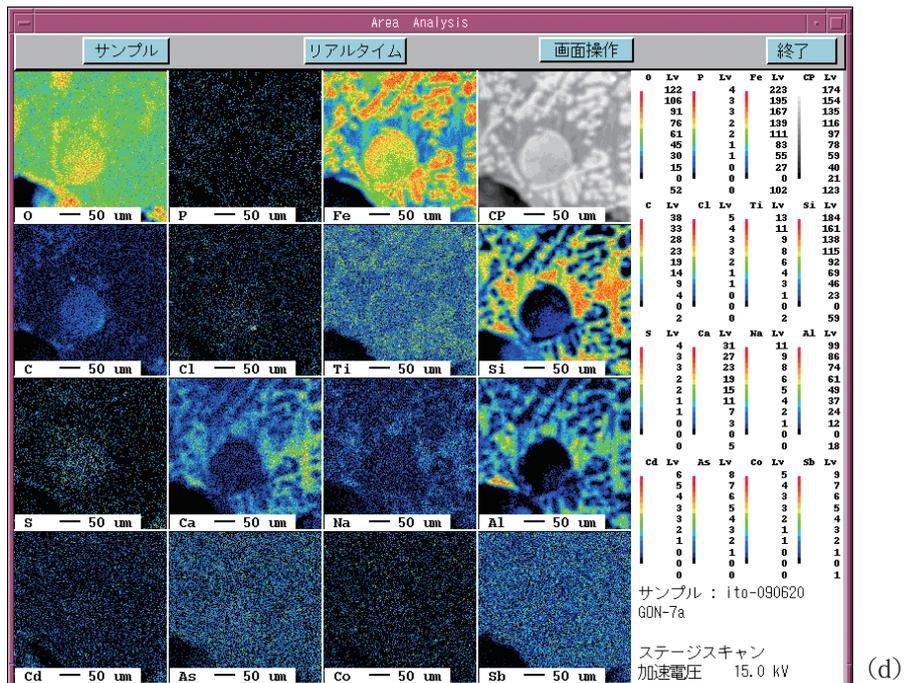
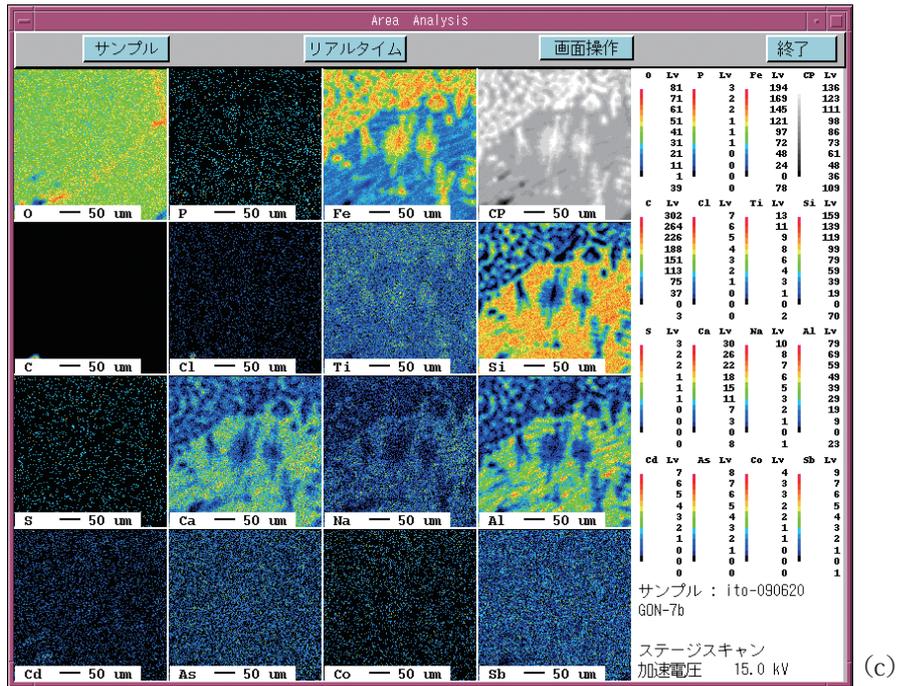
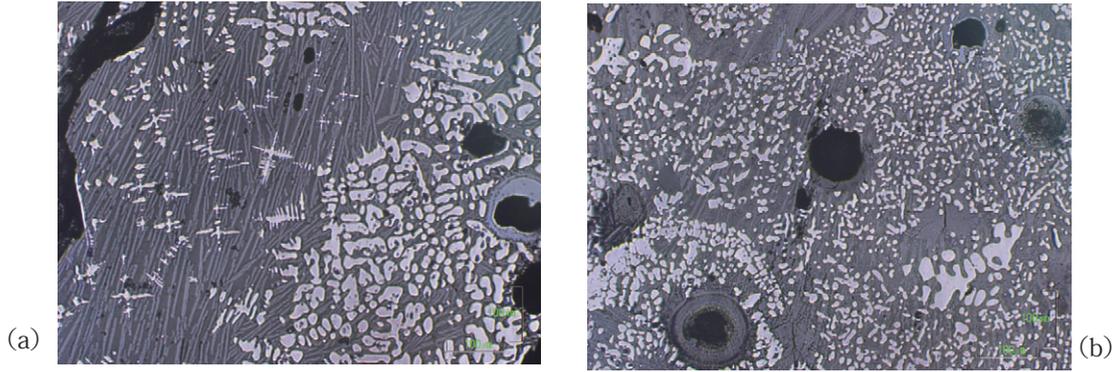
鏡観察像であり、(c) と (d) は EPMA 解析像である。(a) と (b) の光学顕微鏡観察像より層状になっていることがわかるとともに、3 種類の相からできていることがわかる。(c) と (d) の EPMA 解析像からは視野全体が Fe の酸化相となっているが、場所によりその程度が異なっている。さらに、その酸化相の中に錆化が進んでいない鉄金属部が残存している ((d) 図参照)。

また、これらの Fe 酸化相の中には角ばったガラス質 (SiO_2 、 Al_2O_3 、 Na_2O 、 CaO) の非金属介在物が不純物として存在しているのがわかる。このような非金属介在物が角ばって混入していることは、鉄加工時にはさほど高温になっていないことが推察される。

* GON-5 椀形鍛冶滓

第 156 図に GON-5 椀形鍛冶滓

第 156 図 GON-5 椀形鍛冶滓の光学顕微鏡観察像 (a) 及び EPMA 解析像 (b)

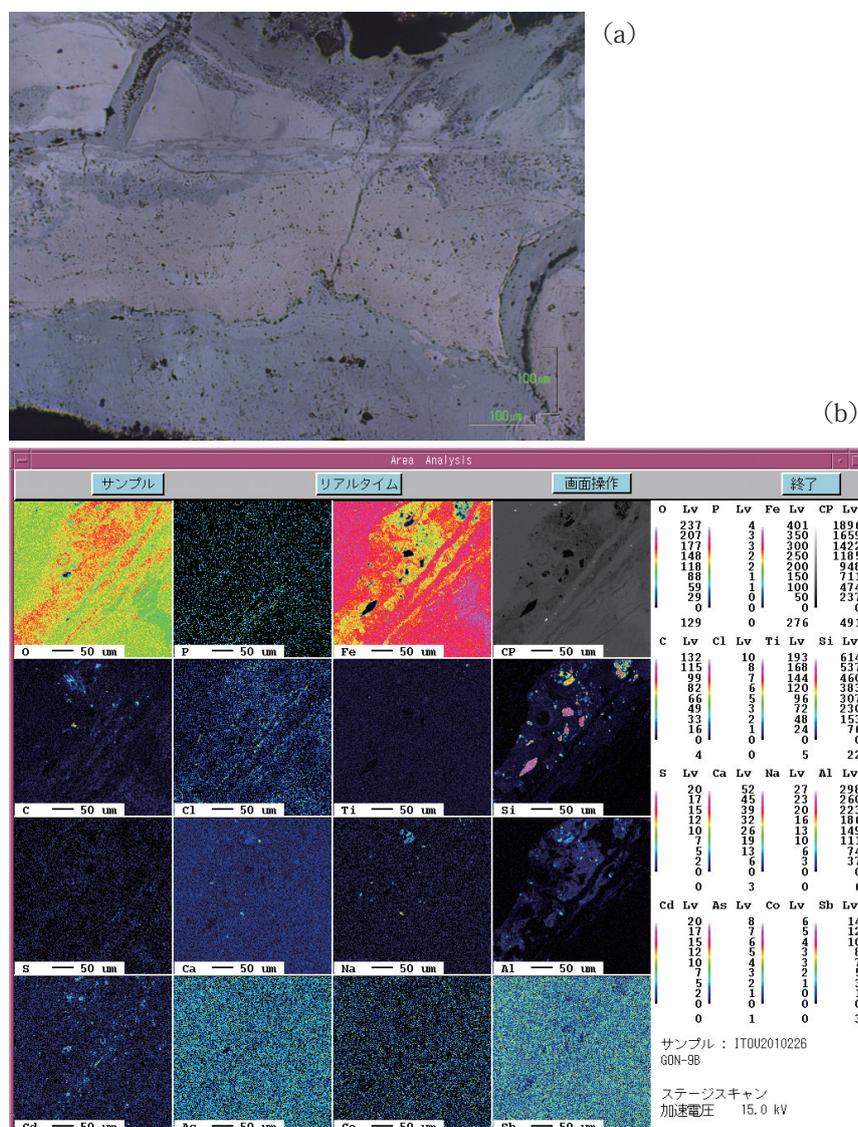


第157図 GON-7 椀形鍛冶滓の光学顕微鏡観察像 (a)、(b) 及び EPMA 解析像 (c)、(d)

の光学顕微鏡観察像及び EPMA 解析像を示す。図の (a) は光学顕微鏡観察像であり、(b) は EPMA 解析像である。観察像をみると全体的に灰色のところに白い線状の結晶がみれる。黒いところは空孔である。灰色のところは Si、O、Al、Ca が多く検出されていることからガラス質 (SiO₂、Al₂O₃、CaO) と推察される。また、白い線状部分は、Fe、O、Si からなるファイヤライト (Fe₂SiO₄) と思われる。

* GON-7 椀形鍛冶滓

第 157 図に GON-7 椀形鍛冶滓の光学顕微鏡観察像及び EPMA 解析像を示す。図の (a) と (b) は光学顕微鏡観察像であり、(c) と (d) は EPMA 解析像である。観察像をみると灰色の背景の中に多少白っぽい灰色の帯状の部分と、白色の樹枝状部分と繭状部分が観察された。解析像をみると灰色部分は主に SiO₂ であり、白っぽい灰色の帯状部分は、SiO₂、Al₂O₃、CaO からなるガラス質成分と推察される。また、白色の樹枝状部分と繭状部分はウスタイト (FeO) とが観察され、本試料が鍛冶に関連した滓であることがわかる。さらに、これらの滓の中に微小な鉄粒が錆化したもの ((d)) やファイヤライト (Fe₂SiO₄) も観察された。



第 158 図 GON-9 鉄製品の光学顕微鏡観察像 (a) 及び EPMA 解析像 (b)

* GON-9 鉄製品

第 158 図に GON-9 椀形鍛冶滓の光学顕微鏡観察像及び EPMA 解析像を示す。図の (a) は光学顕微鏡観察像であり、(b) は EPMA 解析像である。観察像をみると層状になっていることが明らかになるとともに、表面部は錆化していることがわかる。その様子が解析像にも表れている。このことは、解析像の O の個所について全体的に検出されていることにもよる。Fe の錆化部であるが、ところどころ Si が検出されているところがある。これらは鉄づくりにおいて残存した非金属介在物であり、それぞれの大きさからすると鍛造過程においてこれらをあまり多く除去されなかった表れと思われる。

4-2 中性子放射化分析

4 試料の中性子放射化分析した結果を第94表に示す。表中のFeは(%)で、その他の元素は、($\mu\text{g/g}$)の単位で濃度を表示している。元素記号に*が付いているのは、妨害反応の影響を補正していないので、高めの値になっている。表中の最下段にはAs/Sb濃度比をも示している。また、本法の真度を確かめるために日本鉄鋼連盟が作製した標準鉄鉱石JSS 805-1を同時に定量した値を第95表に参考で示す。同一試料を二つ(A、B)作り、分析した結果が表に示されている。表中に示されている文献値は、以前われわれが中性子放射化分析したときの値(鈴木章悟・平井昭司:「機器中性子放射化分析法による高純度鉄及び鉄鉱石標準物質中の微量元素の定量」、分析化学、44巻、p633-644(1995))である。妨害反応の影響の補正を行わなかった元素は、文献値より高いことが分かるが、それ以外の元素は概ね10~20%以内で一致していることが明らかである。

この知見をもとに、第94表の分析値をみたとき、Feの濃度はGON-5の試料を除いて60~70%とFeが錆化あるいは酸化していることを示している。GON-5は鍛冶滓であるが、Fe濃度が非常に低いことを考えると、試料の採取時に鉄滓部ではなく粘土の焼結部を切り取って分析してしまったものと思われる。Fe金属が錆化あるいは酸化した場合、Feは Fe_3O_4 、 Fe_2O_3 、 FeOOH 等のように変化し、Fe濃度は、100%から72%、70%、63%と減少してくる。さらに不純物として他の成分が含有してくると、Fe

第94表 中性子放射化分析の結果

	$\mu\text{g/g}$			
	GON-2 鉄製品	GON-5 椀形鍛冶滓	GON-7 椀形鍛冶滓	GON-9 鉄製品
Na *	140	20000	1300	93
K	190	28000	9700	<330
Sc *	0.64	17	5.7	0.21
Cr *	13	20	10	11
Fe(%)	64	6.3	59	70
Co *	65	22	62	110
As	730	5.6	43	480
Rb	<24	180	37	<25
Sb	61	0.32	20	4.5
La	0.35	26	3.6	<0.44
Ce	1.4	48	7.7	<1.2
Sm	0.13	3.7	0.64	<0.11
Eu	<0.10	0.58	0.13	<0.071
Tb	<0.28	0.78	<0.30	<0.28
Yb	<0.30	2.4	0.51	<0.36
Lu	<0.067	0.63	0.13	<0.073
Hf	<0.43	4.7	0.90	<0.44
W	170	<8.7	21	31
Th	<0.33	13	1.3	<0.33
As/Sb	12	17	2.1	107

* 妨害核反応による補正なし

第95表 標準鉄鉱石における分析値と文献値との比較

	JSS805-1 *	JSS805-1 *	平均値	文献値	平均値/文献値
	A	B			
Na	93.6	91.5	92.6	31	2.99
K	<610	<610		43	
Sc	2.12	2.17	2.15	1.4	1.57
Cr	84.6	60.2	72.4	24	3.02
Fe(%)	73.1	75.5	74.3	69	1.08
Co	15.0	15.2	15.1	9.6	1.57
As	12.7	13.8	13.3	11.5	1.15
Rb	<30	<24		<3	
Sb	3.66	3.45	3.56	3.8	0.94
La	5.84	5.89	5.87	6.0	0.98
Ce	13.9	12.8	13.35	12.2	1.09
Sm	1.54	1.54	1.54	1.68	0.92
Eu	0.358	0.344	0.351	0.44	0.80
Tb	0.322	0.304	0.313	0.34	0.92
Yb	0.794	0.739	0.767	0.67	1.14
Lu	0.221	0.263	0.242	0.15	1.57
Hf	<0.42	<0.39		0.156	
W	48.5	48.7	48.6	43	1.13
Th	0.507	0.481	0.494	0.35	1.41

*MBR赤鉄鉱

妨害核反応の影響

Na: $^{27}\text{Al} (n, \alpha) ^{24}\text{Na}$

Sc: $^{46}\text{Ti} (n, p) ^{46}\text{Sc}$

Cr: $^{54}\text{Fe} (n, \alpha) ^{51}\text{Cr}$

Co: $^{60}\text{Ni} (n, p) ^{60}\text{Co}$, $^{63}\text{Cu} (n, \alpha) ^{60}\text{Co}$

濃度はこれらの値よりもさらに低くなっていく。このような観点で、GON-2 と GON- 9 の鉄製品をみると、微量の分析試料に限定されるが、GON- 9 のほうが Fe_3O_4 に近い形で錆化しているものと思われ、逆に GON-2 は FeOOH に近い形で錆化しているものと思われる。

今回定量した元素のうち、Fe、Co、As、Sb、W の元素は、鉄原料からの製鉄過程で金属 (Fe) 中に濃集する元素であり、また、Fe が錆化することで一緒に濃度が減少する元素である。一方、鉄滓では鉄原料のときの濃度よりは低くなることが知られている。このような視点で GON-5 を除く 3 試料をみると、As 濃度が数 $100 \mu\text{g/g}$ とかなり高濃度であることは一つの特徴となる。また、W 濃度も比較的高濃度であると思われる。このように As や W 濃度が高い鉄原料は、砂鉄よりは鉄鉱石であることが推測できる。

さらに、これらの試料の産地を推定するとき、As/Sb 濃度比は有力な指標となる。この値が 1 以下であれば、朝鮮半島の鉄原料が使用された試料であることが明らかとなるが、第 94 表の値をみるといずれも 1 以上の値となっている。しかしながら、6 世紀以前の韓国での鉄器には、As/Sb 濃度比が 1 以上で、As 濃度が数 $100 \mu\text{g/g}$ であり、さらに W 濃度が数 $10 \sim$ 数 $100 \mu\text{g/g}$ の鉄器が出土している (日本・韓国の鉄生産技術〈調査編〉補遺：藤尾慎一郎・斎藤努、「国立歴史民俗博物館研究報告第 66 集」、1996 年)。なお、我が国においても同時代には同様な成分をもつ鉄器が出土しているが、舶載品として評価されている。また、我が国独自の鉄鉱石を利用した鉄器であれば As 及び W がこのように高濃度になることはないと推論できる。以上のことから、これら 3 試料は韓半島からの舶載品と考えるのが妥当と思われる。

5. おわりに

GON-2 鉄製品、GON-5 椀形鍛冶滓、GON-7 椀形鍛冶滓及び GON-9 鉄製品を自然科学的分析法で観察と分析を行った。椀形鍛冶滓の 2 試料では、ウスタイト (FeO)、ファイヤライト (Fe_2SiO_4)、ガラス質成分 (SiO_2 、 Al_2O_3 、 Na_2O 、 CaO) を観察することができた。鉄製品の 2 試料では層状になっている錆化した Fe を観察するとともに、非金属介在物として角ばったガラス質成分 (SiO_2 、 Al_2O_3 、 Na_2O 、 CaO) や錆化が進んでいない Fe の金属片を観察できた。

中性子放射化分析の結果、鉄製品はすべて錆化し、Fe 濃度が 60 ～ 70% であった。GON-5 の試料では切削箇所を粘土焼結箇所としてしまったので、元素濃度から鍛冶滓の特徴を把握することができなかった。鉄製品の 2 試料と GON-7 の試料から、As と W 濃度が特徴的に高濃度であるとともに、As/Sb 濃度比がいずれも 1 以上であった。高濃度な As と W であることから、鉄製品の鉄原料は鉄鉱石であり、また、韓半島からの舶載品であることが示唆された。

第7節 古墳時代の居館外郭の溝状遺構

SG10区 SD-43 (第159・160図、写真図版126・208・209)

[位置] SG10区南部の16-16・17グリッドにあり、西はSG5区へ続く。古墳中期中～後葉のSI-100を切り、ほぼ平行する古墳後期のSD-44に南側を切られる。約3.6mの間(陸橋?)をあけて、東側に隣接するSG10区SD-221と対応する。この溝が権現山遺跡南部居館(SG5区SA-151方形柵列遺構)の北側を区画し、SD-43とSD-221の間の陸橋部が出入口と考えられる。

[規模と形状] 長さはSG10区で15.2m、SG10区を含めると30.3mで、さらに西へ延びる。断面形は浅い皿状で、底面は平坦な部分が多いが、図示したような凹凸もあり、A-A'の東側は10cmほど底面が高くなる。SG10区では溝幅1.7～2.5m、底面幅は1.2～2.1m、残存する深さは10～45cmで東側が僅かに深い傾向があり、底面標高はSG10区西端で79.55m、東端の最深部で79.41m。

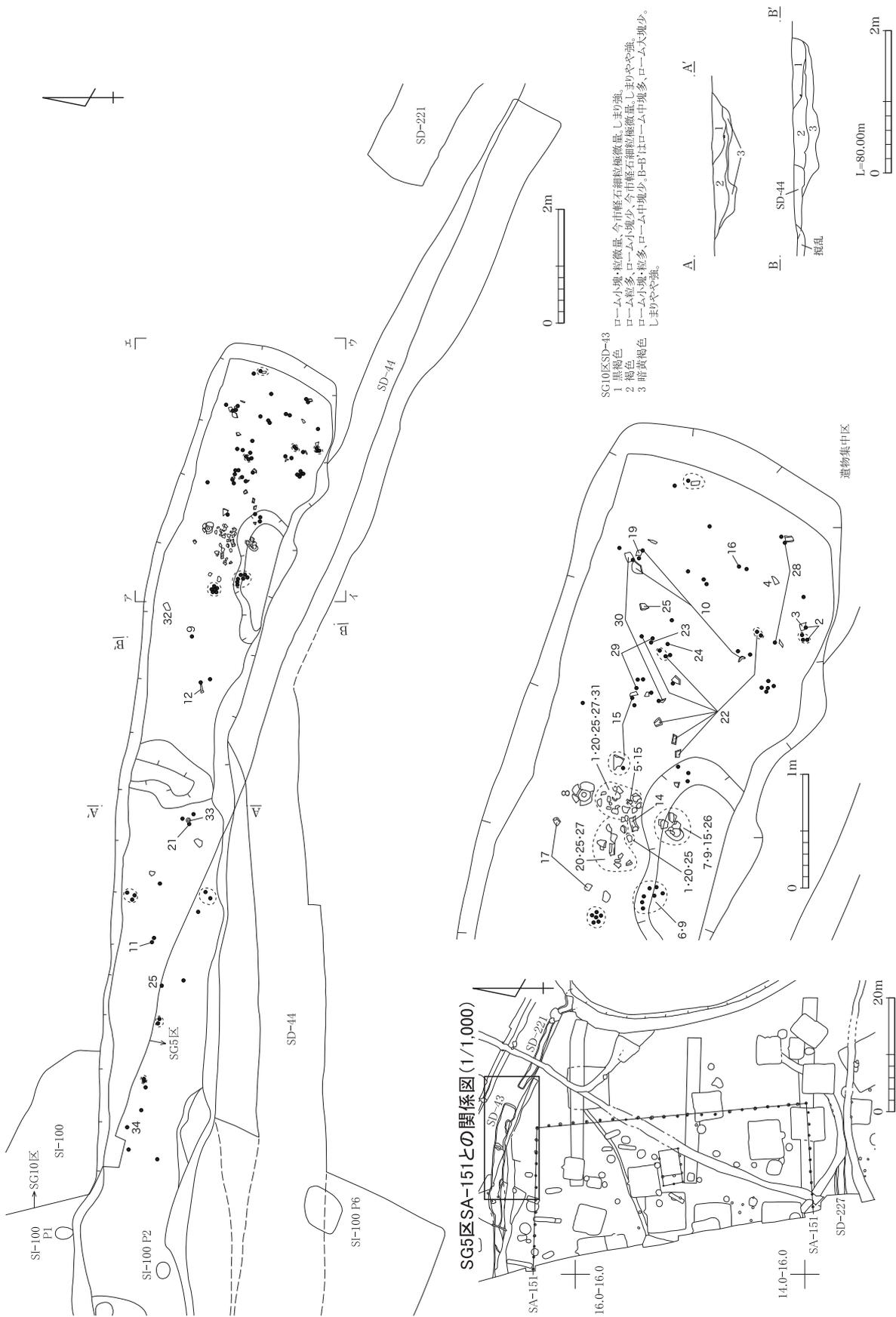
[覆土] 自然堆積である。西側に続くSG5区では最上層に白色粒子(火山灰か)を多く含むことが記録されている。SG5区のテフラ検出分析結果から、上層部で確認された白色軽石が古墳後期初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)である可能性が高い(第8章第2節)。

[遺物出土状況] 東部ほど遺物が多くなるので、SD-221との間で廃棄行為が多く行われたと考えるならば、そこを通路と考える推定を支持するかもしれない。SI-100から古墳中期中葉～後葉の遺物が混入した可能性もある。

[出土遺物] SG5区で調査した時の遺物と同様で、初期模倣杯と、口が外へ開く平底・凹底の内斜口縁杯から、古墳中期中葉とみられる。高杯は脚が少し低く(9・10)、小形壺は口縁部が少し短くなっている(19・20)。脚中位が膨らむ中期中葉的な高杯(12)はSI-100から混入したか、そうでなければSD-43の上限が中期中葉の新相でSI-100が中期中葉の古相と考えることになる。粉痕のある土師器(2)の事例は、SG10区SI-50などにある。12のように白色針状物質(骨針)を含む搬入品の土師器は、SG10区ではSI-23などにあり、東側のSD-221にもある。土師器壺(18)は、権現山遺跡南部ではSG5区SX-118・SD-227とSG9区西区遺構外にあり、権現山南部居館の北辺溝SG10区SD-43と南辺溝SG5区SD-227で各1点出土したことになる。他に北関東自動車道A区SD-225(権現山北部居館の南辺溝)・B区4号墳・SG1区SI-6にも土師器壺がある。21は弱い受口状口縁の壺で、SI-19aなどの事例とは形が異なる。貼付口縁の壺(22・23)のうち、22は頸が広くて煮炊痕があるので甕と呼んだ方がよいかもしれない。34は小形甕としては古い時期の例。小片で図示していないが、SG5区SI-22等と同一個体の陶質土器壺がSG10区SD-43にも1片ある。図示以外の土師器合計277片・4,034gの内訳は、杯62片・284g、高杯35片・547g、小形壺3片・33g、壺甕類172片・2,967g、甕5片・203g。

第96表 権現山遺跡SG10区SD-43出土遺物

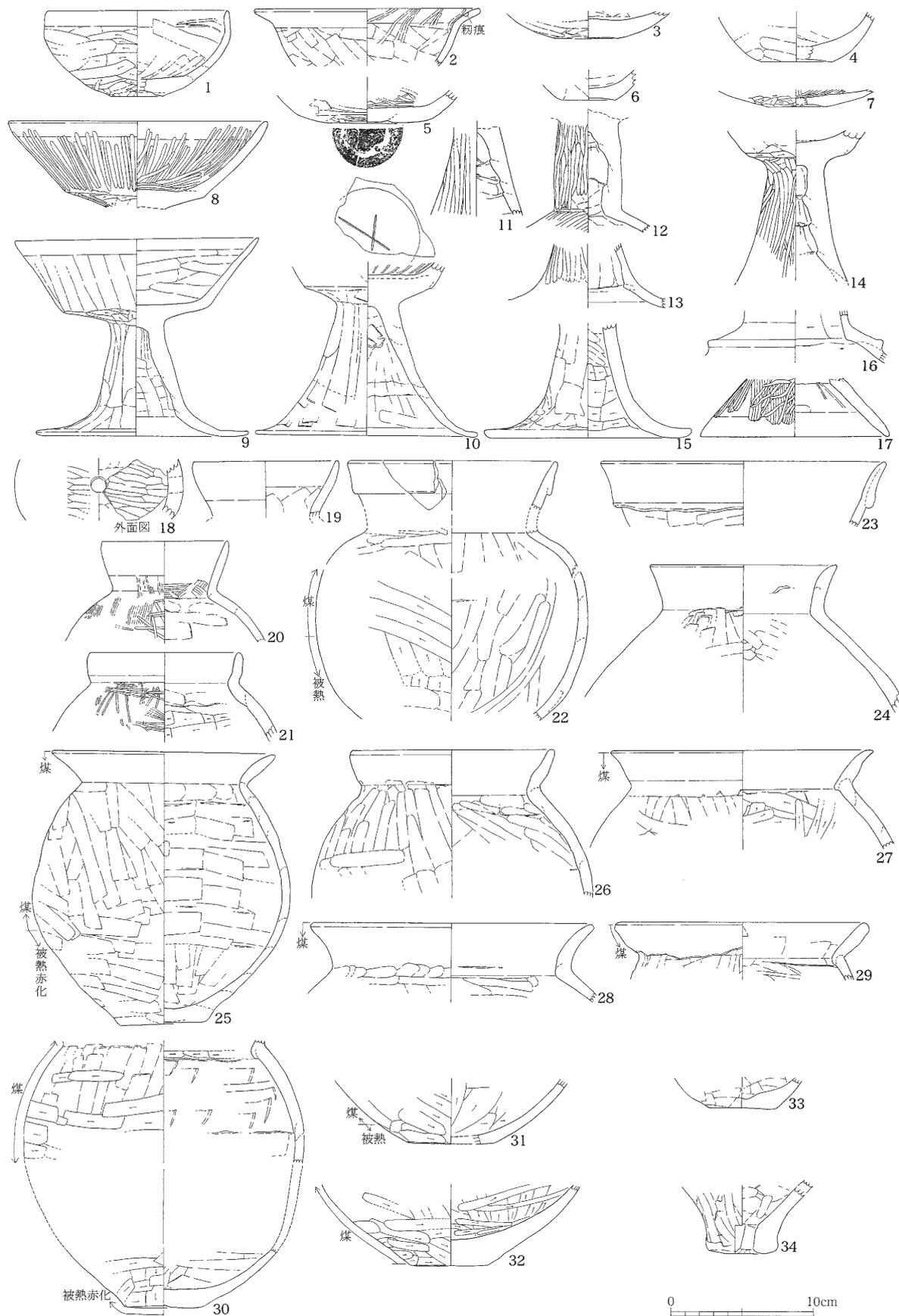
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復12.8 高 残6.0 底 3.9 最大 復13.0	外面は体部にナデおよびヘラナデ後ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。外底面はナデ後に外周を貼り足して凹底状。内面は口縁部ヨコナデ、底部に1方向と体部に斜位のヘラナデ。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや軟質	底上29～32cmが接合 口1/2周、底1/2周 67、69、70、一括
2 土師器 杯	口 復15.8 高 残4.0	内外面に弱い稜を持って口縁部が外へ折れる。外面は体部ナデ後ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は体部にやや雑なナメヘラナデと口縁部ヨコナデ後、口～体部に幅の狭い擦痕。胎土中に混じっていた稲粉痕が口縁部内面に1箇所現れている。内外面全体に不規則な煤が付着し、破面にも及んでいる。	2.5Y3/3 暗オリーブ灰 やや緻密 赤粗粒やや多、 白・黒・赤・透明細粒少 やや硬質	底上10～15cmが接合 口1/3周 9、87B
3 土師器 杯	高 残1.9 底 復4.8	外底面はおおよそ1方向のヘラケズリで凹底状。外面体部はヨコヘラケズリ。内面底部は多方向ヘラケズリ。	5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	底上30cm 底1/3周 8
4 土師器 杯	高 残3.5 底 復4.8	外底面はヘラケズリにより凹底状にする。外面体部は丁寧なナデ。内面底部はおそらく1方向のナデ。	5YR7/8 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、透明細粒少 やや軟質	底上32cm 底1/3周 10



第159図 権現山遺跡 SG10 区 SD-43 (1) 遺構

第7節 古墳時代の居館外郭の溝状遺構

5 土師器 杯	高底 残 2.4 4.8	外底面中央に径3.3cmの丸い凹みを持つ平底で、凹面の中央は中高状に下へ膨らむ。体部と底部の境が不明瞭。外底面に軽いナデ、外面体部ヨコヘラケズリとヨコヘラナデ。内面は底部に多方向と体部に斜～横位のヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・黒・赤粗～細 粒と透明細粒少 硬質	底上 13～32cmが接合 底 1/2 周 58、66
6 土師器 杯	高底 残 2.1 3.6	外底面はおそらくヘラケズリで凹底状にした後ナデ。内外面の体部に横～斜位のナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗粒多、白粗粒 と黒・透明細粒少 軟質	底上 25cm 底 7/12 周 84
7 土師器 杯	高底 残 1.2 復 4.0	外底面はヘラケズリで凹底状。外面体部に斜～横位のヘラケズリ。内面底部はヘラナデまたはヘラケズリの後に放射状ヘラミガキ。内底面が広いので、碗形杯でなく初期模倣杯かもしれない。	5YR4/6 赤褐 緻密 白・赤粗～細粒と黒・ 透明細粒少 やや硬質	底上 22cm 底 5/12 周 68
8 土師器 高杯	口高 残 17.9 6.2	杯部外底面は放射状ヘラナデ後に外周をナナメヘラケズリ。杯部外面はナデまたはヘラナデ後に口縁部ヨコナデと杯体部タテヘラミガキ。杯部内面は底部1方向ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後に杯体部タテヘラミガキ。内外面の杯体部に煤があり、火災に遭っているかもしれない。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・透明粗～ 細粒と赤粗粒やや少 軟質	底上 18cm 口全周 杯部完存 64
9 土師器 高杯	口高 脚裾 重 残 17.0 13.8 14.8 579.7	外面杯体部と脚部にタテヘラナデ(非常に浅いたテハケの可能性もある)、杯底部ナナメヘラケズリ、脚裾と杯口縁にヨコナデ。杯内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。脚内面は脚柱部にやや雑なナデ後タテヘラナデ、脚裾部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・灰色礫～粗粒 と白細粒やや多、黒・透明細 粒少 やや軟質	底上 9～25cmが接合 口3/4周、杯底～脚柱 全周、脚裾 1/3 周 68、75、84
10 土師器 高杯	高脚裾 残 12.1 15.3	外面は脚部と杯底部をタテヘラナデ後に、杯体部の組織み成形と脚裾部をヨコナデ。外面杯体部はナナメヘラナデかもしれないが、残存部が少なく不詳。杯底部内面はヘラナデ後放射状ヘラミガキし、焼成前の刻線「×」あり。脚内面は上位ヘラナデ、中位に組織み痕を残すタテナデ、裾部ヨコナデ。脚柱部は倒立状態で反時計回りに積み、裾部は輪積み状。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、 白・透明粗～細粒やや多 軟質	底上 14～20cmが接合 杯底 1/3 周、杯底 3/4 周 23、29、35
11 土師器 高杯	高 残 6.2	外面は密なタテヘラミガキ。内面は粘土組織み上げ痕を残し、軽いタテナデ。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 白・透明細粒やや 多、赤粗～細粒少 やや硬質	底上 5cm 脚柱全周 89
12 土師器 高杯	高 残 8.6	外面は脚柱部タテヘラミガキ、裾部ナナメヘラミガキ。脚柱部の内面は輪積み状の組織み痕をよく残しユビオサエ。裾部の内面はヨコヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒少、白色針状物質極 少 硬質	底直上 脚柱全周 77
13 土師器 高杯	高 残 4.5	脚径が大きいのにに対して薄い。外面は脚柱部タテヘラミガキで、脚裾部はおそらくナデ。内面は脚柱部タテナデの後に脚裾部を成形してナデオよびヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・透明細粒多、赤粗粒と黒 細粒少 やや硬質	脚柱 5/12 周 一括
14 土師器 高杯	高最大 残 10.6 復 9.6	脚部は巻き上げでなく輪積み状に成形する。外面は脚部に密なタテヘラミガキ、杯体部と杯底部にナナメヘラナデ後、杯体部下端ヨコヘラケズリまたはヘラナデ。杯部内面はナデかもしれないが、大半が剥離して不詳。脚内面は積み上げ痕と縦皺をそのまま残す。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 白・黒細粒やや多、 白・赤・透明粗粒少 やや硬質	底上 19cm 脚柱全周 65
15 土師器 高杯	口高 復 14.4 残 8.0	外面は脚柱から脚裾までタテヘラナデ。内面は裾部ヨコナデと脚上位ナナメナデ、脚下部ヨコヘラケズリ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒多、 黒・灰色粗粒と白細粒少 やや軟質	底上 10～32cmが接合 脚柱 11/12 周、脚裾 1/3 周 28、47、55、57、66、68
16 土師器 高杯	高 残 3.6	脚裾部が有段形になる。外面はヨコナデでミガキの有無は不明。内面は裾部にやや異質の粘土を継ぎ足して成形し、裾部ヨコナデ後に脚柱部ヨコヘラケズリ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明粗～細粒少 軟質	底上 36cm 脚下半 1/5 周 11
17 土師器 高杯	高底 残 4.1 復 13.0	直線的に開く形の脚部で、接地面の調整から見て壺の口ではなく高杯の脚である。外面は裾部ナデ後に浅いたテハケを施し、部分的にナナメヘラミガキ。内面はヨコヘラナデ後に裾部ヨコナデで、脚柱部と脚裾部の境界に稜を持つ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤・透明 粗～細粒少 硬質	底上 13～22cmが接合 脚裾 1/3 周、杯底 63、71、一括
18 土師器 壺	高最大 残 4.2 復 11.8	外面は密なヨコヘラミガキ、内面はヨコユビナデ。焼成前に開けた孔は復原径約1.1cm。孔の右側が残っているので、中軸線の右側に外面を図示している。	10YR5/8 黄褐 緻密 赤粗～細粒と白・黒細 粒少 やや硬質	断面 A-A' より東の北半 部表土 体 1/6 周 16.5-16.5 表土
19 土師器 小形壺	口高 復 10.1 残 3.8	外面は口～頸部をヨコナデ。内面は頸部に横～斜位ヘラナデと口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	底上 25cm 口 1/4 周 34
20 土師器 小形壺	口高 復 8.8 残 7.1	外面は頸～肩部に4～5本/cmの浅いたテハケ後に肩部を少しヘラミガキ。内面は肩部にヨコヘラナデ、頸部に浅い横～斜位ハケとユビナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	2.5YR6/3 にぶい橙 やや緻密 白・透明粗～細粒 多、赤粗粒と黒細粒少 やや軟質	底上 25～32cmが接合 口 1/6 周、頸 3/4 周 67、69、70、84、一括
21 土師器 壺	口高最大 復 10.4 残 6.2 残 15.6	口縁部はわずかに受口状で頸部が少し狭い。外面は肩部ナデ後に多方向ヘラミガキ。内面は肩部ナデ後に下部をヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。破面はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)。	5YR4/1 褐灰 やや粗い 赤粗～細粒と白細 粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	底上 18cm 口 1/6 周、頸 1/6 周 82
22 土師器 壺	口高最大 復 14.2 残 16.8 復 19.0	外面は胴部ナナメヘラケズリと肩部ナデ、脚下部の厚い部分を横位ヘラナデ(?)、口縁部貼付帯と頸部をヨコナデ。内面は胴部に縦～斜位ヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。外面の同下位が被熱赤化し、胴中に煤付着。[注記]13、17、18、22、25、30、50、53、56、57、86B、16.5-17.5、一括	7.5YR5/6 明褐 粗い 白・赤・透明粗～細粒 多、黒・灰色細粒少 軟質	底上 10～30cm 口 1/12 周、頸 1/6 周、 脚下半 1/6 周 注記は左欄
23 土師器 大形壺	口高 復 19.8 残 4.5	頸部ナデ、口縁部は広い貼付帯をヨコナデし、貼付口縁部の下縁はやや整っていない。内面はヨコナデと推定されるが、器面全体が細かく剥落して不詳。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明礫～細粒 やや多、赤・灰色粗粒少 硬質	底上 15cm 口 1/24 周、頸 1/5 周 85B
24 土師器 大形壺	口高 復 13.0 残 10.3	頸があまり大きく開かない。外面は口縁部ヨコナデ後に肩部タテヘラナデおよび横位の軽いナデ。内面は肩部にナナメナデ、口縁部ヨコナデ	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、 白・黒・透明細粒やや少 やや硬質	底上 32cm 口 1/6 周、頸 1/4 周 10、一括
25 土師器 小形壺	口高最大 底 6.0 残 17.8 重 残 861.8	外底面は外周部に薄く粘土を貼り、多方向ヘラケズリで凹底状。外面胴部は下半ナナメヘラナデ後に上半タテヘラナデ。内面胴部は下半タテヘラナデ後に上半ヨコヘラナデ、肩部上端ナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面は下位が被熱赤化し、中位から口縁部までに煤が付着する。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・灰色礫～粗粒 と白・黒・透明細粒多 やや硬質	底上 8～32cmが接合 口 11/12 周、頸全周、 底 7/12 周 36、67、69、90
26 土師器 壺	口高最大 残 14.2 10.3 復 19.5	口縁がわずかに内彎する。外面は胴部に主として縦位のヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。内面は胴部にナナメナデ後、口縁部ヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 白・赤礫～細粒多、 黒・透明粗～細粒やや多 やや軟質	底上 22cm 口～肩全周 68



第160図 権現山遺跡 SG10区 SD-43(2) 遺物

第7節 古墳時代の居館外郭の溝状遺構

27 土師器 甕	口 復 18.3 高 残 7.0	外面は肩部ナナメヘラナデの後に口縁部ヨコナデ。内面は肩部ヨコヘラナデとナナメヘラナデの後に口縁部ヨコナデで、頸部に接合痕の低い段を残す。外面の口縁部と肩部に煤がやや多く付着する。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白粗～細粒多、灰色・透明粗粒と黒細粒やや多 やや硬質	底上 29～31cmが接合 口 1/6 周、頸 1/4 周 67、70、一括
28 土師器 甕	口 復 19.4 高 残 5.5	外面は肩部にタテヘラナデと頸基部にコビナデ、口縁部ヨコナデ。内面は肩部にヨコヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。外面口縁部に煤付着。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白粗～細粒やや多、黒・透明細粒少 軟質	底上 21～37cmが接合 口 1/4 周、頸 1/3 周 5、14
29 土師器 甕	口 17.6 高 残 4.0	外面は肩～頸部に雑なタテヘラナデ後、口縁部をヨコナデし、口～頸部間の接合痕を消さない程度でやめている。内面は肩部ナナメヘラナデ、口縁部ヨコヘラナデ後ヨコナデ。外面に煤付着。[注記]39、46、74、UT-SG-V SD-44	10YR5/3 にぶい黄橙 粗い 白・透明礫～細粒やや多、赤・黒粗～細粒少 やや硬質	SD-43の底上 7～17cm。 SG5区 SD-44の1片も 接合 口 5/6 周 注記は左欄
30 土師器 甕	高 残 4.2 底 5.6 最大 復 14.6	外底面は弱く凹む中央部とドーナツ状に高い外周部のそれぞれをヘラケズリ。外面は胴下位を縦～斜位にヘラケズリ。胴上位をタテヘラナデ後ヨコヘラケズリ。内面は底部多方向ヘラケズリ、胴部ヨコヘラナデで、肩部は特に強いヘラナデ、頸部ヨコナデと下端ヨコヘラケズリ。外面の胴下位と底部が被熱赤化し、胴上位に煤が多く付着する。胴中位と口縁部の破片がない。	10YR5/3 にぶい黄褐 粗い 白礫～細粒と赤・透明 粗～細粒やや多、黒細粒少 硬質	底上 17～21cm 断面 A-A' 以東の表土に 2片あり 頸 1/5 周、底 2/3 周 32、52、16.5-17.5 表 土
31 土師器 甕	高 残 4.6 底 6.2	やや薄く軽い。外底面は多方向ヘラケズリ。外面胴下位はナナメヘラケズリ。内面は胴部と体部の境界が不明確で主に斜位のヘラケズリ。外面胴周辺が被熱赤化し、外面胴下位の一部に煤付着。	7.5YR4/3 褐 粗い 白・透明礫～細粒多、 赤・黒・灰色粗～細粒少 やや軟質	底上 31cm 底全周 67
32 土師器 甕	高 残 5.7 底 5.3	外底面は多方向ヘラケズリで弱い丸味を持つ平底。外面胴部は主に横位のヘラケズリで、胴下端は特に底面外周を小さくするように削る。内面は底部に多方向、胴部に縦位の後に横位のヘラケズリ。外面胴部に煤が多く、しかも厚い。底面の被熱痕は不明瞭。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白・透明粗～細粒多、 灰色粗粒と黒細粒少 やや軟質	底上 17cm 底全周 74
33 土師器 甕	高 残 2.2 底 4.5	外底面は軽い1方向ナデ。外面は胴下端ナデ後にヨコヘラナデ。内面は底部中央が指先で押したように深く凹み、その周囲は多方向ヘラナデ。外面が被熱している可能性もある。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・灰色礫～ 細粒と黒・透明細粒少 硬質	底上 11cm 底全周 81
34 土師器 小形甕	高 残 5.2 底 5.0 孔 0.8～0.9	底部が厚く重い。外底面は雑なナデ。外面体部タテナデ。内面ナナメナデ。焼成前に丸棒状工具で内面から外面へ1孔を開ける。	5YR4/8 赤褐 緻密 白・赤粗～細粒と黒・ 透明細粒少 やや硬質	底上 8cm 底全周 93

SG10区 SD-221 (第161図、写真図版 126・127・209)

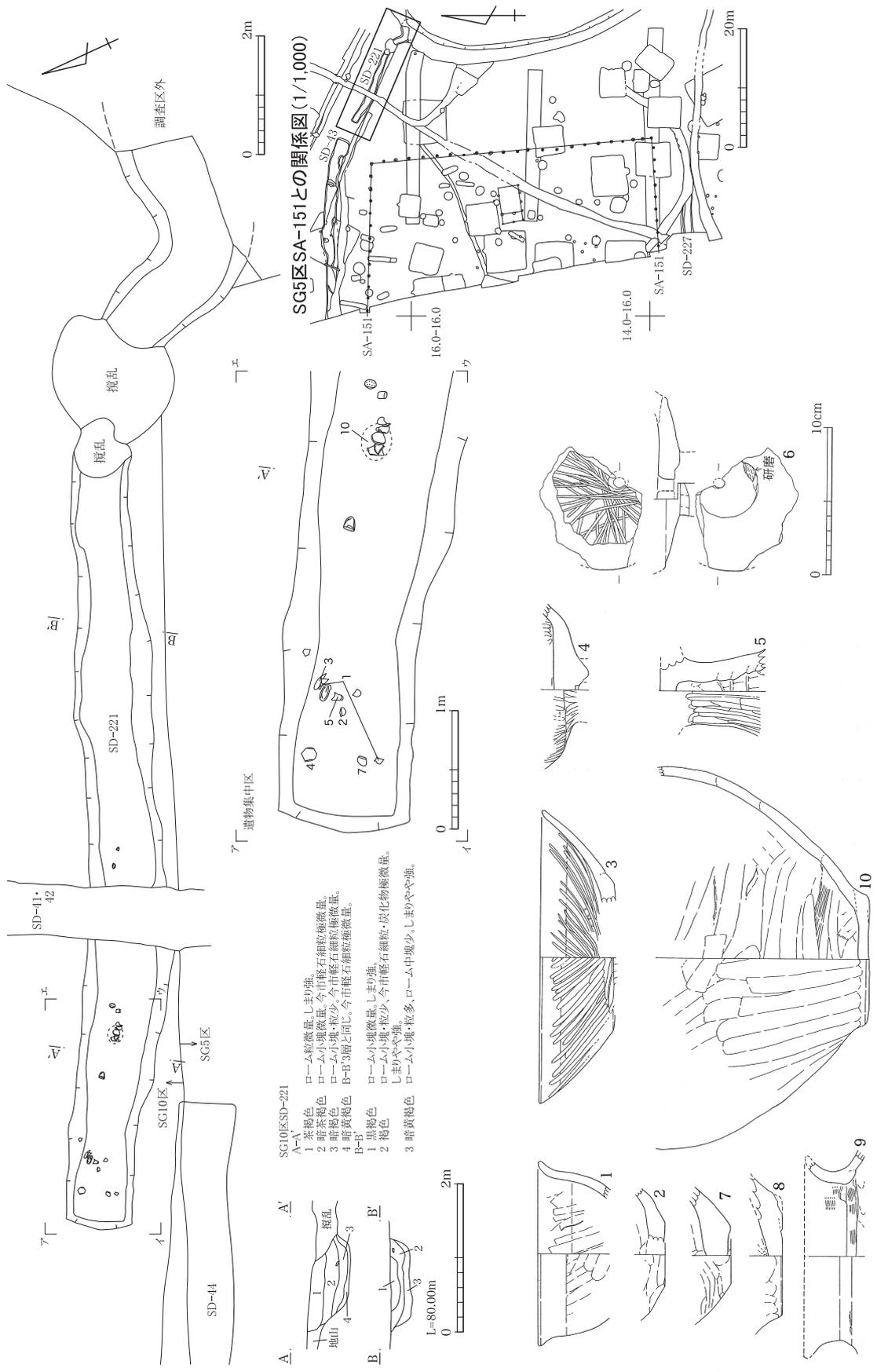
【位置】 SG10区南部の16-17および16-18グリッドにあり、SG5区の方形柵列遺構(居館跡) SA-151の外郭施設の可能性を持つ。SA-151の北側にSG5区SD-43からSG10区SD-43へ続いた溝がいったん途切れて、約3.6mの間をあけて東側にSG10区SD-221がある。SD-43とSD-221が居館北側の区画溝で、その中間を掘り残して陸橋(通路)にしている可能性がある。SG10区SD-221の東端はごくわずかに調査区外へ伸びるが、SG10区の東側は低地へ下る斜面なので、SD-221が台地東端斜面に開口して終わると考えられる。古墳時代後期のSD-41・中期のSD-42に切られる。

【規模と形状】 幅92～148cmで、おおむね直線的に延び、調査区東端の台地斜面へ取り付く部分は少し屈曲する。溝西端から台地東端までの溝の長さは18.5m。遺構確認面からの残存する深さは10～31cm。遺構確認面より上方の地山がよく残る部分が記録された断面図A-A'の位置で測ると最大深さ58cmである。底面標高はSD-41・42よりも西側で79.57～79.62m、東側では79.59～79.73m。SD-41・42に切られる付近で底面標高79.57～79.59mまで低くなり、調査区東端の台地斜面に取り付く部分で再び底面標高が低くなる(79.53～79.56m)。

【覆土】 自然埋没状で、古墳時代のテフラはみられない。縄文草創期に降下した今市軽石の細粒が地山層から僅かに流入している。

【遺物および出土状況】 西部ほど遺物が多くなるので、SD-43との間が通路として使われて廃棄品も多かったことを示唆するとも考えられる。

【出土遺物】 口が開く古墳中期後葉の内斜口縁杯がある(1)。穿孔した高杯杯部(6)はSG10区SI-53にも事例がある。折損した脚が残る部分の下端面を削ったようにみられる。甑のように使用したものかもしれない。7のように白色針状物質(骨針)を含む搬入品の土師器は、SG10区ではSI-23などにあり、西側のSD-43にもある。図示以外の土師器合計47片・681gの内訳は、杯8片・89g、高杯4片・69g、壺甕類35片・523g。



第161図 権現山遺跡 SG10区 SD-221 遺構・遺物

第97表 権現山遺跡 SG10区 SD-221 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 4.8	外面は体部ナメナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に体部ナメヘラナデ。	10YR8/4 浅黄橙 緻密 赤粗粒と白・透明粗～ 細粒と黒細粒少 やや軟質	底上 5～12cmが接合 口 1/4 周 12、18
2 土師器 杯	高 残 2.0 底 復 4.2	外底面は平底で磨滅しているので調整不詳。外面体部に横～斜位ヘラナデ。内面は底部に多方向ヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、 白・黒・透明細粒やや少、灰 色粗粒少 やや軟質	底上 3cm 底 5/12 周 13
3 土師器 高杯	口 復 19.8 高 残 5.0	外面は杯底部を放射状ヘラケズリ、杯体部ナデと口縁部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。内面は杯体部ヘラナデ(?)の後に口縁部ヨコナデ、全体をナメ方向のヘラミガキ。外面の残存部全体に煤が多く、内面に煤はない。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・透明細粒少 軟質	底上 16cm 口 1/3 周、底 1/6 周 17
4 土師器 高杯	高 残 3.3	外面は杯底部タテヘラケズリと杯体部下端ヨコヘラケズリの後にタテヘラミガキ。杯内底面は多方向ヘラミガキ、杯体部下端はナメヘラミガキ。脚部内面はナデで、杯底部上端に狭い凹みを持つ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒多、 白・透明粗～細粒やや多、灰 色粗粒と黒細粒少 やや硬質	底上 3cm 杯底全周 10
5 土師器 高杯	高 残 7.1	脚外面は密なタテヘラミガキ。杯底部内面は1方向の密なヘラミガキ。脚内面には倒立状態で反時計回りに巻き積みした痕をそのまま残し軽いユビオサエ。脚内面の最上部はおそらくユビナデ。	5YR7/6 橙 緻密 白・赤粗～細粒と黒・ 透明細粒少 硬質	底上 16cm 脚柱全周 15
6 土師器 高杯	高 残 2.2	外面は脚部タテヘラケズリまたはヘラナデ、杯底部に横位のナデ。内面は杯底部ナデ後に放射状ヘラミガキ。脚の折れた下端面を研磨する。杯底部に内面側から穿孔し、初孔径11.3mm・終孔径6.9mm。甕のような用途に転用したと考えられる。紡錘車と考えるにはやや径が大きすぎる。	5YR6/6 橙 緻密 白・黒・赤・透明粗～ 細粒少 やや硬質	脚上端 1/2 周 一括
7 土師器 壺?	高 残 2.7 底 3.8	外底面は1～2方向のヘラケズリで凹底状。外面は体部下位に幅の狭いヘラナデ。内面底部に多方向のやや雑なヘラナデ。内面全体に暗褐色物質が薄い膜状に付着し、漆の可能性もあるが不確実。	10YR4/1 褐灰 粗い 白・赤粗～細粒多、 黒・透明粗～細粒やや多、白 色針状物質極少 軟質	底上 6cm 底全周 11
8 土師器 大形壺	高 残 2.2 底 8.0	厚く重いので大形品と考えられる。外底面は外周に粘土を貼り足して中央に不整形の凹みを少し残し、全体をヘラナデ。内底面は底部中央を支点にして回転する方向のヨコヘラナデ、内面胴部にタテおよびヨコヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色礫～粗粒 と白・黒・透明細粒やや多 硬質	底全周 一括
9 土師器 壺	口 推 13～14 高 残 3.7	外面は頸～肩部ヨコナデ。内面は肩部ヨコヘラナデ後に頸を成形して12本/cmの細かいヨコハケ後、口～頸部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・赤・透明 粗～細粒やや多 軟質	頸 5/6 周 一括
10 土師器 甕	高 残 14.3 底 8.8 最大 復 25.7	外底面の外周に薄く粘土を貼り足してから平坦にナデ。外面胴部タテナデ。内面は底部に多方向ヘラナデ、胴下位ナメヘラケズリとヨコハケ後に胴中位を成形してヨコヘラナデ。被熱痕や付着物は見られない。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明粗～ 細粒やや多、赤・灰色粗粒少 やや軟質	底上 24cm 胴 1/6 周、底 1/2 周 7

第8節 古墳時代の溝状遺構

SG10区 SD-41・42 (第162～164図、写真図版127・128・173・174・209・210)

【位置】 SG10区南部の16-17・18、17-18、18-18グリッドにまたがる。南側のSG5区SD-41・42へ続く溝なので、名称を統一してSG10区SD-41・42とした(調査時の旧名称はSG10区SD-42)。古墳中期末葉の溝SD-42の北部を、古墳後期後葉にSD-41として掘り直したことがSG5区の調査結果から分かっているので、SG10区SD-41・42と総称する。古墳中期後葉のSI-2・SD-221(居館の外郭溝)と古墳中期のSK-210・216を切り、近世のSD-201ab・SD-204に切られる。第11図の全体図等高線からわかるように、断面図C-C'の位置付近よりも北側は低地へ降りた位置にある。

【規模と形状】 最も広いC-C'付近で幅320cm、最も狭い北端部付近で幅20～35cm。幅100～180cmの部分が多い。先行するSI-2と円筒形土坑SK-210を壊して掘った部分(E-E'の南側)も、溝幅が少し広い。残存する深さは、低地にあり周囲が低いA-A'からB-B'付近で10～20cm、台地上にあるC-C'からE-E'付近で40～60cm、それよりも南側では20～40cm程度である。溝底面は傾斜しないので、底面標高には大きな差がなく、北端(A-A'付近)で79.47～79.59m、拡大図1付近で79.48～79.59m、拡大図2付近で79.35～79.67m、E-E'から拡大図3付近で79.49～79.64m、南端で79.56～79.66m。SG10区南部のSD-201aと重複する部分で、SD-41・42の底面に長方形土坑状の落ち込みがある(102×41×溝底面から深さ1～5cm)。これはSD-41・42の溝底面に付属する落ち込みで、あるいは先行する別の土坑と考える余地も残るが、後世の遺構や攪乱ではない。北部の溝底面(拡大図1およびその南側)にみられる凹凸は掘削時の工具痕跡と観察され、この中にも土師器片が見られた。

【覆土】 埋土は自然埋没状で、上層部に含む白色粒はテフラの可能性を持つ。縄文草創期以降に降下した今市軽

石塊も流入しているの、同じく草創期の七本桜軽石粒や、古墳後期初めの Hr-FA テフラ粒が二次的に流入したと考えられる。Hr-FA テフラの層状堆積が見られないことは、古墳中期末葉の SD-42 を後期後葉の SD-41 に掘り直したという所見と整合する。

〔遺物出土状況〕 溝の各所で出土した土器は小破片が多く、特に拡大図 1 の範囲は小破片ばかりである。遺物は全域で多く、古墳中～後期の土師器がある。重複する SI-2 や SK-210 から古墳中期の土師器も流入したと考えられるが、SI-2 の遺物が少ないのに対して SD-41・42 には遺物が多く、SI-2 と重複しない南部でも古墳中期末葉の土師器がやや多いので、中期の土師器をすべて SI-2 からの混入品とみることは難しい。この溝で中期の遺物が移動した例として、中期末の 3 や 61 は同個体の破片が離れた位置にあり、中期の須恵器器台（拡大図 1 の 63）は同一個体を出土した SG10 区 SI-111 から約 10m 離れている。古墳後期後葉の杯 8～11 が溝底面にあるので、後期に溝 SD-41 として掘り直したという SG5 区の所見と一致する。SG10 区南端付近には、残存度の高い鉢や小形甕が多い（40・43・46・47・54）。

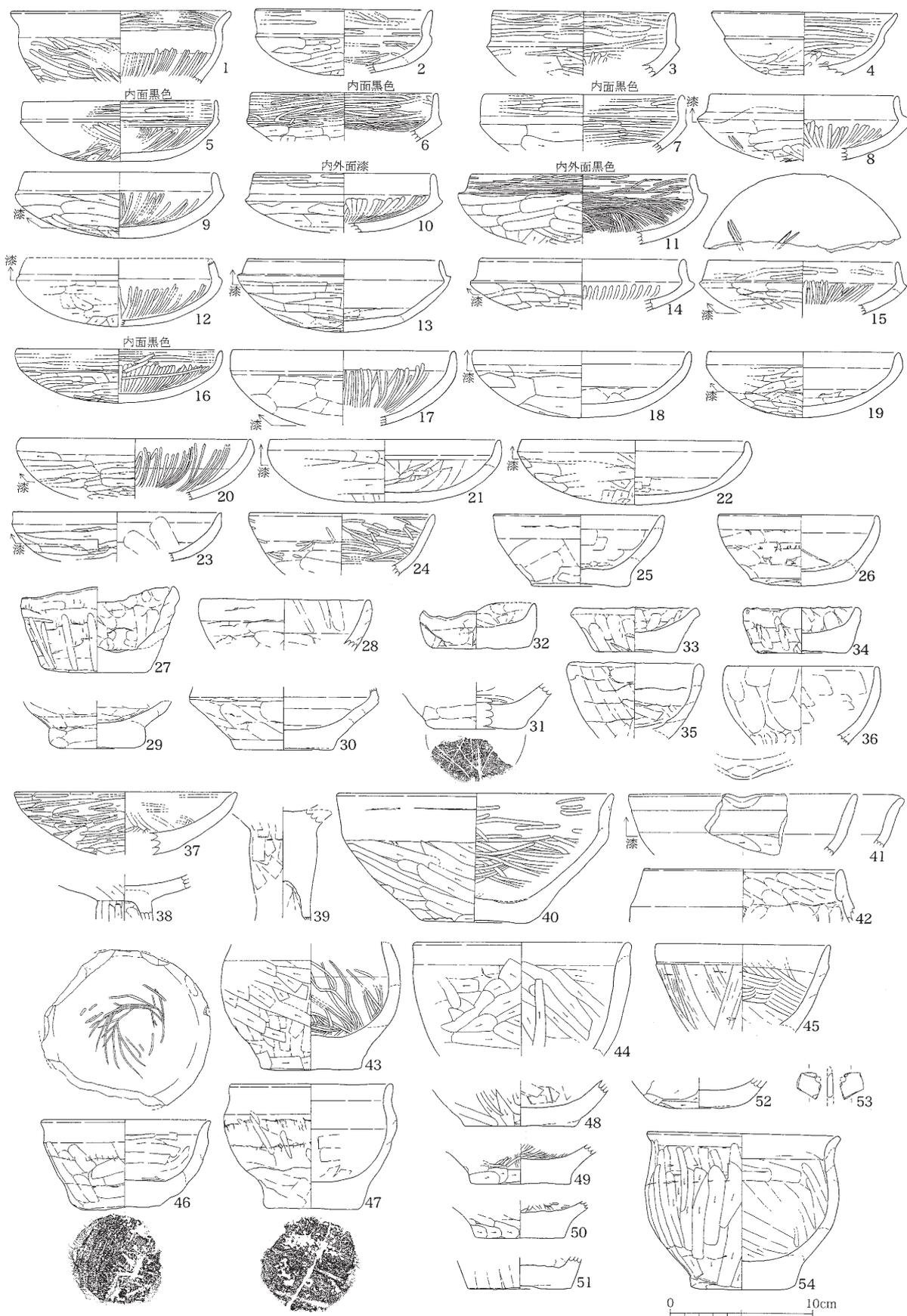
〔出土遺物〕 漆仕上げおよび炭素吸着を行う後期の模倣杯が多く、中期の土師器杯は少ない。古墳中期末から後期前葉までの遺物が掘り直す前の SD-42 に由来し、後期後葉以後の遺物が掘り直した SD-41 に伴うと考えられる。古墳中期後葉の遺物が少量あるのは、重複する SG10 区 SI-2 や SG5 区 SI-11 に由来する可能性がある。大形の鉢（40）は、本遺跡北部にある中期末～後期初頭の 4 区 SI-7 出土例に類似する（『東谷・中島地区遺跡群』10）。有孔鉢（53）は SG10 区 SI-50 等に例がある。粗製杯や小形土器が多い。須恵器甕破片（62）は内面を磨り消す古墳中期の遺物であるが、古墳後期の SG10 区 SI-10 などで出土した破片と類似し、同一個体かもしれない。須恵器器台（63）は、SG10 区 SI-111 などで出土した破片と同一個体である。有孔砥石（65）は SG10 区 SI-37 などに例がある。

鉄関連遺物では、専用羽口 1 点と椀形鍛冶滓 3 点がある（64・66～68）。また、南側に続く SG5 区 SD-41・42 にも鉄滓が 1 点ある。専用羽口（64）は、鍛冶関連遺物を『東谷・中島地区遺跡群 10』で報告後に確認したため、同書 pp.490-498 に掲載されていない。SG10 区では後期の SI-34a・40・70 に専用羽口がある。また、本遺跡北部 SG1 区 SI-71 と 4 区 SI-18（『東谷・中島地区遺跡群』10）や、砂田遺跡 12 区 SI-6（『同前』13）にも古墳後期前葉～中葉の専用羽口がある。64 も転用羽口が衰退した古墳後期の遺物かもしれない。石製模造品は滑石製（71・73）と雲母片岩製（72）と粘板岩製（74～76）がある。有孔円板（有孔方板）は、SG10 区 SI-64a などに例がある。土器片製円板（77）は縄文時代にもみられる遺物で、古墳時代遺構外遺物（第 191 図）にもあるが、事例は多くない。形や大きさに統一性がない礫がやや多く出土した。図示した 78～80 には鍛造剥片などが見られないので、鉄鍛冶関連遺物とは言いにくい。遺物は土師器杯と壺甕類が主体で、粗製杯・鉢・小形甕もあり、高杯・甌・須恵器甕・石製模造品は僅かである。図示以外の土師器合計 3,600 片・26,724g の内訳は、杯 1,604 片・9,330g、高杯 80 片・888g、鉢 35 片・665g、小形壺 17 片・153g、壺甕類 1,788 片・14,224g、甌 71 片・1,364g、小形土器 5 片・100g。

第 98 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-41・42 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 15.4 高 残 5.1	外面は体部ナデと口～頸部ヨコナデ後に体部をナナメヘラミガキ。内面は体部ナデと体部上位～口縁部ヨコナデ後に、体部を縦位と口縁部を横位のヘラミガキ。古墳中期。 [注記]SD-42 52、82、13.9-18.0 下層	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白細粒多、赤粗粒と黒・透明細粒少 硬質	北部 3 層（底上 2～3 cm）。16.9-18.0 グリッド下層の 3 片と接合口 1/9 周、体 1/4 周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 4.6 最大 12.3	外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面はヘラナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラミガキ。漆仕上げは行わない。古墳中期末。 [注記]SD-42 330、331、374、386、451、463、482、489、E-E' 南、E-E' 南トレンチ、E ベルト底面	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒細粒少 やや軟質	北部底直上～底上 2cm。断面図 B-B' 付近の 3 片も接合口 1/3 周、体 1/2 周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 復 12.8 高 残 4.5 最大 復 13.4	外面口～体部境に高い稜あり。外面体部ヨコヘラケズリ後に疎らなヨコヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はおそらくヘラナデの後に横位と放射状のヘラミガキ。漆仕上げは行わない。古墳中期末。 [注記]SD-42 22、325、426、459、486、E-E' 南、E-E' ベルト 1 層	2.5YR6/8 橙 やや粗い 白粗～細粒多、赤粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	北部底直上～底上 1cm が接合。南部拡大図 3 の底直上にも 1 片あり 口 1/3 周、体 1/2 周 注記は左欄

第5章 権現山遺跡 SG10区



第163図 権現山遺跡 SG10区 SD-41・42 (2) 遺物

第8節 古墳時代の溝状遺構

4 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 4.4	外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデと体部におそらくヘラナデの後、口～体部に横位と体部に多方向のヘラミガキ。漆仕上げは行わない。古墳後期初め。 [注記]SD-42 Bベルト 1層、17.5～18.0、17.55～17.65	5YR5/6 明赤褐 緻密 白・赤・透明細粒少 やや軟質	X17.5～18.0間と断面 図D-D'の1層の各2片 が接合 口1/6周、体1/5周 注記は左欄
5 土師器 杯	口 復 13.4 高 4.3 最大 復 13.9	外面は底部に1方向ヘラケズリ、体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。内外面の口縁部をヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。内面体部を1～2方向の密なヘラミガキ。内面を炭素吸着で黒色処理。古墳後期。 [注記]SD-42 16.9-18.0下層、X17.2～17.3	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤・透明粗粒 と白・黒・透明細粒やや多 やや硬質	16.9-18.0グリッド下層 とX17.2～17.3間13 片が同一個体 口1/4周、体5/12周 注記は左欄
6 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 3.4 最大 復 13.6	外面は体部ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面全体に密なヨコヘラミガキ。内面を炭素吸着で黒色処理し、外面口縁部も少し炭素を吸着している。古墳後期。	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 硬質	X17 ライン以北 口1/4周、体1/4周 SD-42 X17.0
7 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 4.0 最大 復 14.4	外面体部ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面全体にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面を炭素吸着で黒色処理。古墳後期。 [注記]SD-42 201、X17.55～17.65	2.5YR3/3 暗オリーブ灰 やや緻密 白・黒・透明粗粒 細粒少 やや硬質	中央底上11cmと X17.55～17.65間が接 合 口1/6周、体1/4周 注記は左欄
8 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 4.6 最大 残 14.8	外面は体部ヨコヘラナデと中位以下に多方向ヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面体部に放射状ヘラミガキ。外面に焼成前の刻線が少し残り、「X」を描いたものかもしれない。外面口縁部と内面全面に漆仕上げ。古墳後期。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・透明粗粒～細粒 と黒細粒やや多、黒・灰色粗 粒少 やや軟質	中央部底直上 口1/3周 SD-42 98、トレンチ
9 土師器 杯	口 13.4 高 4.6 最大 14.6	外面は底部に1～2方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面体部はナデまたはヘラナデ後に放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。古墳後期。 [注記]SD-42 39、59、16.5-18.0	7.5YR6/6 橙 やや緻密 黒粗～細粒やや多、 白・透明粗粒～細粒やや少 やや硬質	北部3層(底直上)と1 層(底上17cm)が接合 口1/3周 注記は左欄
10 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 4.1 最大 復 13.8	外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後に口縁上半ヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後、体部に密な放射状ヘラミガキ。内外全面に漆仕上げ。古墳後期。[注記]SD-42 211、16.3～16.52層、X17.4～17.52～3層、16.8-17.9下層	2.5Y3/2 黒褐 やや緻密 赤粗粒と白・黒細 粒少 やや軟質	中央底直上。X16.3～ 17.5間の出土片と接合 口5/12周 注記は左欄
11 土師器 杯	口 復 15.6 高 残 4.9 最大 復 17.4	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部は上部にヨコヘラミガキ、下部はナメヘラミガキ。ヘラミガキは内外面ともに密に行っている。内外の全面を炭素吸着で黒色処理。古墳後期。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明粗粒～細粒 やや多 やや硬質	中央部底直上 口1/4周、体1/3周 SD-42 234
12 土師器 杯	口 推 13 高 推 4.8 最大 14.4	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面全体に漆仕上げ。古墳後期。 [注記]SD-42 209、210、217、X17.5	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明粗粒～ 細粒やや多 やや硬質	中央部底上2～11cmが 接合。X17.5付近で2 片出土 体7/12周 注記は左欄
13 土師器 杯	口 13.4 高 5.1	外面は口縁部ヨコナデ後に底部を1方向と体部を横位のヘラケズリ。内面は底部に円周方向のナデ、体部上半と口縁部にヨコナデ。外面上位と内面全体に漆仕上げ。外面底部に9cm以上の黒斑あり。古墳後期。[注記]SD-42 235、17.5～18、17.6～17.72層、17.25～17.30攪乱、Bベルト	7.5YR7/4 にぶい橙 緻密 白・黒・赤細粒少 軟質	中央部底直上。X17.25 ～18の間に8片あり 口1/3周、体1/4周 注記は左欄
14 土師器 杯	口 復 14.2 高 残 3.6 最大 復 15.6	外面は体部上半ナデと下半ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデ後に体部を放射状ヘラミガキ。外面上半と内面を漆仕上げ。古墳後期。	10YR2/2 黒褐 やや緻密 白・黒・透明粗粒～ 細粒少 やや硬質	北部底上4cm 口1/6周、体1/4周 SD-42 412
15 土師器 杯	口 復 12.5 高 残 3.4 最大 復 13.4	外面の体部上位はナデで粘土積み上げ痕を少し残し、体部下位はヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。残存する内外面全体に漆仕上げ。古墳後期。 [注記]SD-42 Aベルト 2層、16.9-18.0下層	2.5YR7/8 橙 緻密 赤・黒粗～細粒と白・ 透明細粒少 やや硬質	17.1-18.0グリッドで 断面E-E'の2層。16.9- 18.0下層にも1片あり 口1/9周、体1/4周 注記は左欄
16 土師器 杯	口 復 14.4 高 3.8	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。内面を炭素吸着で黒色処理。古墳後期。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白～細粒と赤・ 黒・透明粗粒～細粒やや多 やや硬質	中央部底上4cm 口1/12周、体1/2周 SD-42 127
17 土師器 杯	口 復 15.4 高 残 5.3 最大 復 15.8	外面はおそらくヘラケズリ後にヨコヘラナデ。内外面の口縁部をヨコナデ。内面は底部ヘラナデと体部ヨコナデの後に放射状ヘラミガキ。内外の残存する全面に漆仕上げ。古墳後期。	2.5Y3/1 黒褐 やや粗い 白・黒・透明粗粒～ 細粒やや多 やや軟質	断面図E-E'付近 口1/24周、体1/3周 SD-42 Aベルト 2層、 17.3～17.43層
18 土師器 杯	口 復 15.0 高 4.7	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部にヨコナデ。内面は底部ナメヘラナデ、口～体部ヨコナデ。外面上位と内面全体に漆仕上げ。 [注記]SD-42 96、123、143、347、X17.4-17.5、16.8～17.9下層、16.9～18.0下層、17.0-18.03層、Bベルト 2層	10YR4/2 灰黄褐 緻密 白・黒細粒少 軟質	南部・中央部底直上と 北部底上4cm。X16.8～ 18.0間に破片あり 口1/2周 注記は左欄
19 土師器 杯	口 復 13.2 高 4.6	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部ヘラナデ。口～体部ヨコナデ。外面上半と内面全体に漆仕上げ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明粗粒～細粒 と黒細粒やや多 やや軟質	X16.38～17.0間 口1/8周、体1/6周 SD-42 16.8～17
20 土師器 杯	口 復 16.2 高 残 4.3 最大 復 16.6	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は口縁部から体部上半までをヨコナデし、全体を放射状ヘラミガキ。外面上半と内面全体に漆仕上げ。古墳後期。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明粗粒と黒 細粒やや多 やや硬質	中央部底上3cm 口1/6周、体1/5周 SD-42 247b99621
21 土師器 杯	口 復 16.0 高 4.4 最大 復 16.3	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面体～底部に多方向のヘラナデ。外面上位と内面全体に漆仕上げ。外面中位以下は磨耗して漆の有無が不明。古墳後期。 [注記]SD-42 95、Aベルト 2層、X17.4～17.5、X17.0～、Bベルト	2.5Y7/2 灰黄 緻密 白粗～細粒と黒・透明 細粒少 軟質	南部拡大図3の底上4 cm。X17～18間および 断面C-C'とD-D'付近に 破片あり 口1/4周 注記は左欄
22 土師器 杯	口 復 15.6 高 4.1 最大 復 16.4	外面は体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は底部に円周方向のナデまたはヘラナデ、口～体部ヨコナデ。外面上位と内面全体に漆仕上げ。 [注記]SD-42 120、144、149、227、17.0-18.0～18.1、Cベルト 2層	5YR7/6 橙 緻密 赤・黒・透明細粒少 軟質	中央部底直上～底上4cm。 X17.0・Y18.0～18.1グ リッドと断面C-C'2層の 各1片も接合 口1/12周、体5/12周 注記は左欄
23 土師器 杯	口 復 14.6 高 残 3.4	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデと一部にナメナデ。外面上半と内面全体に漆仕上げ。古墳後期。 [注記]SD-42 2047、225、252、17.2-18.01層、17.25～17.30攪乱、17.4～17.5	7.5YR7/6 橙 緻密 赤・黒細粒少 軟質	中央底直上～底上24cm。 X17.2～18.0間に破片 あり 口1/3周 注記は左欄

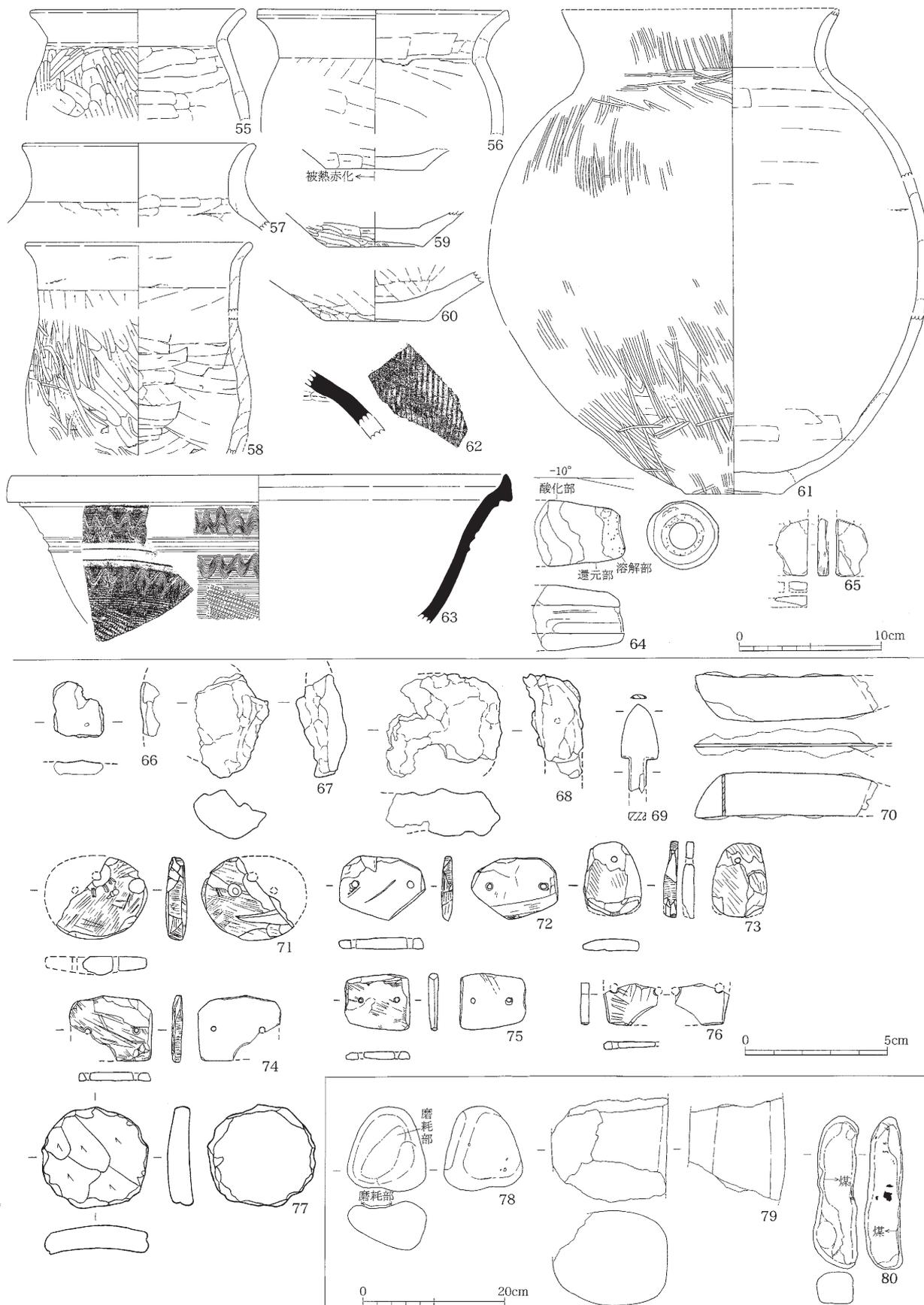
第5章 権現山遺跡 SG10 区

24 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 4.3	外面は体部に軽いナデと口縁部にヨコナデ後、全体に疎らなヨコヘラミガキ。内面は口縁部にヨコナデ後疎らなヨコヘラミガキ、体部に密なヨコヘラミガキ。 [注記]SD-42 222、16.9-18.0 下層	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗粒多、白・黒 細粒少 やや硬質	中央底直上。16.9-18.0 グリッド下層の1片が 接合 口1/3周 注記は左欄
25 土師器 粗製杯	口 11.8 高 5.0 底 6.7	突出する平底で、外底面は無調整。外面は体部に横～斜位ナデ後、口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向の強いヘラナデで凹凸が目立ち、体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。古墳後期。 [注記]SD-42 16、22、41、42、52、Aベルト2層、17.0-18	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや少、黒・透明細粒少 やや硬質	南部底直上～底上14cm。 17.0-18.0グリッドに 1片とE-E断面付近に2 片あり 口3/4周、底全周 注記は左欄
26 土師器 粗製杯	口 11.0 高 5.0 底 7.2 最大 11.3	凸面状の底部で外周に雑なヘラケズリ。外面は体部に横～斜位ナデで粘土の亀裂を多く残し、口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。古墳後期。 [注記]SD-42 250、Aベルト2層、17.2～18.0 3層	5YR5/4 にぶい赤褐 やや粗い 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明細粒少 やや軟質	中央底上4cmとE-E断面 の2層と17.0～ 18.0グリッドの2～3 層が接合 口5/6周、底全周 注記は左欄
27 土師器 粗製杯	口 10.6 高 6.1 底 7.2 最大 11.1	外底面はナデで中央が少し高い。外面の体部はユビオサエで接合痕をよく残し、間隔を空けたタテナデ。内面もユビオサエで接合痕を非常によく残し、体部に軽くナメナデ。 [注記]SD-42 133、17.4-18.1 1層、X17.4～17.5 1層	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや少、黒・透明細粒少 硬質	中央底上29cm。X17.4 ～17.5間の1層出土2 片と接合 口1/2周、底2/3周 注記は左欄
28 土師器 粗製杯	口 復 11.7 高 残 3.6 底 6.8 最大 復 12.1	外面は体部に軽いナデで粘土積み上げ痕を少し残す。内外面の口縁部にヨコナデと内面ナメナデ。内面体部にナメヘラナデ。 [注記]SD-42 46、86、17.0-18.0～18.1	5YR7/8 橙 やや緻密 白・透明細粒多、 赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	南部底直上～底上3cm。 X17.0-Y18.0～18.1 グリッドの1片と接合 口1/3周 注記は左欄
29 土師器 粗製杯	高 残 3.3 底 6.5	外面は円板状に突出する平底で底面に雑なナデ。外面体部は軽いナデで粘土粗積み上げ痕を残す。内面は底部に円周方向、体部に横位のナデ。古墳後期。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒少 やや軟質	中央底上36cm 底1/2周 SD-42 228
30 土師器 粗製杯	高 残 4.4 底 6.7 最大 13.1	厚く重い。外底面は外周に薄く粘土を貼り足してナデを行い、軽いナデおよび浅い圧痕(草本植物?)あり。外面は体部ナデで粘土接合痕を少し残し、口縁部ヨコナデ。内面は底部に2方向、体部に横～斜位のナデ、口縁部ヨコナデ。通常の杯の外周ヘラケズリを省略したものかもしれない。古墳後期。	2.5YR5/6 明赤褐 緻密 白・赤粗～細粒と黒・ 透明細粒少 硬質	中央部底上3cm 体1/4周、底全周 SD-42 122
31 土師器 粗製鉢	高 残 3.3 底 6.8 最大 残 10.4	外底面は木葉裏面の圧痕が少しズレながら2回付いている。内外面の体部に横位のナデ。古墳後期。 [注記]SD-42 17.4-18.1 1層	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 赤粗粒と黒・透明細粒 少 やや軟質	17.4-18.1グリッド1層 底1/3周 注記は左欄
32 土師器 小形土器	口 8.0 高 2.4～3.4 底 6.8 最大 8.1	外底面は雑なナデで、草本植物の茎のような圧痕もある。外面体部は横～斜位の雑なナデ。内面は非常に雑な斜放射状ナデを体～底部に指先で施す。残存重量123.7g。 [注記]SD-42 17.4-18.1 1層	7.5YR7/3 にぶい橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	17.4-18.1グリッド1層 口3/4周、底3/4周 注記は左欄
33 土師器 小形土器	口 復 8.5 高 残 3.1 底 5.9 最大 復 9.0	手捏ね成形。外底面はナデで、ごく浅い棒状(?)の圧痕あり。外面体部ナメナデ、内面底～体部を斜放射状ナデ。口縁部はヨコナデ仕上げをしていないので凹凸が見られる。古墳後期。残存重量123.5g。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・赤粗～細粒と透明 細粒少 硬質	中央部底上7cm 口1/6周、体全周 SD-42 113
34 土師器 小形土器	高 残 3.2 底 復 6.2 最大 復 8.2	外底面はほぼ平坦で軽いナデ。外面体部と口縁部に横位ユビナデ後、縦の疎らなナデ。内面は底部に斜位ユビナデ。古墳後期。	10YR5/2 灰黄褐 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・透明細粒少 やや硬質	中央部底上27cm 口1/3周、底2/3周 SD-42 125
35 土師器 粗製小形土器	口 復 9.1 高 残 5.3 最大 復 10.6	外面はナメナデで全体に粘土積み上げ痕をよく残す。内面は下半ナメヘラナデ、上半ナメナデでやはり粘土積み上げ痕を残す。 [注記]SD-42 17.2-18.0 1層、トレンチ	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明細粒やや 多、赤・黒細粒少 やや軟質	17.2-18.0グリッドの1 層 口5/12周 注記は左欄
36 土師器 小形壺	口 復 10.4 高 残 5.5 底 5.5 最大 復 11.0	頸部下端の外周側を補強するように粘土を貼り足している。外面は頸部下位ヨコヘラナデ後に口～頸部ナデ。内面は丁寧なナデまたはヘラナデ。古墳中期。 [注記]SD-42 11、17.0-18.0～18.1	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 黒粗～細粒やや多、白 ・透明細粒少 やや軟質	中央部底上21cm。 X17.0-Y18.0～18.1 グリッドの1片と接合 口1/4周、頸1/3周 注記は左欄
37 土師器 高杯	口 復 15.6 高 残 4.4	杯底部が厚い。外面は口縁部ヨコナデと杯体～底部ヨコヘラケズリの後にヨコヘラミガキ。内面は底部に1～2方向と杯体～口縁部に横位の密なヘラミガキ。内外面の器面が暗褐色で、煤または漆仕上げの可能性もある。古墳中期末。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒と白・赤・ 透明細粒少 やや硬質	中央部底上34cm 口1/6周、体1/3周 SD-42 106
38 土師器 高杯	高 残 3.2	外面は杯底部ナメヘラケズリ、脚柱部タテヘラケズリ。杯内面はおそらく多方向ヘラナデだが磨滅して不詳。脚内面は雑なヘラナデ。古墳中期。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤・灰色粗粒 と黒・透明細粒少 やや軟質	南部底上33cm(1層) 杯底1/3周、脚柱全周 SD-42 30
39 土師器 高杯	高 7.5	外面はナメおよびタテヘラナデ後に軽いナデ。杯底部内面は多方向ナデ。脚部内面はタテナデ。古墳中期。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 白・赤粗～細粒と黒・ 透明細粒やや少 硬質	中央部1層(底上41cm) 脚柱全周 SD-42 12
40 土師器 鉢	口 19.3 高 9.1 底 7.6 重 残 756.5	外底面は外周が少し高く、主に外周部に雑なナデおよび雑なヘラケズリ。外面は口縁部ヨコナデ、体部ナメヘラケズリ。内面は体部にナデ後密なヨコヘラミガキ、口縁部にヨコナデ後疎らなヨコヘラミガキ。内面の底部外周は磨滅・剥離が著しいため調整が不明瞭。内面に14cm大の黒斑あり。古墳後期初頭頃。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤細粒やや少、 白・赤粗粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南部底上16cm。16.6- 17.9グリッドの1片も 接合 口11/12周、底全周 SD-42 70、16.6-17.9
41 土師器 鉢	口 復 15.6 高 残 4.2	外面の口～体部境と口縁部中位に浅い段を持つようにヨコナデし、体部はヨコヘラケズリ。内面の口～体部にヨコナデ。口縁部の1箇所を片口状に外へ曲げる。外面口縁部と内面全体に漆仕上げ。古墳後期。	7.5YR4/2 灰褐 緻密 白・透明細粒やや少、 赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	断面E-E'北側の1層 口1/12周、体1/8周 SD-42 17.4-18.1 1層
42 土師器 鉢	口 復 13.8 高 残 3.7	外面は口～肩部をヨコナデ。内面は肩部にタテナデとヨコヘラナデ、口縁部ナメ～ヨコナデで、口～肩部の境に粘土積み上げ痕を明瞭に残す。古墳後期。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	断面E-E'南側東半部の 1層 口1/3周 SD-42 17.2-18.1 1層
43 土師器 鉢	高 残 8.9 底 7.0 最大 復 14.4	厚く重い。外底面は1～2方向のヘラケズリ。外面の体部にタテヘラナデ後ナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面はナデまたはヘラナデと上位ヨコナデの後にナメヘラミガキ。古墳後期。 [注記]SD-42 57、67、16.6-17.4、17.2-18.0 1層、X16.6～17.8 上面	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒やや多 やや軟質	南部底上6cm(3層)～ 17cm(1層)とX16.6～ 17.2間が接合 頸1/6周、底全周 注記は左欄

第8節 古墳時代の溝状遺構

44 土師器 鉢	口 復 14.8 高 残 8.0 最大 残 15.2	内外面は口縁部ヨコナデ。外面は体部ナメヘラケズリ。内面は体部ナデ後に上部をナメヘラケズリ。古墳後期。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・透明細粒少 やや軟質	中央部底上 7cm 口 1/12 周、体 1/4 周 SD-42 171
45 土師器 鉢	口 復 12.2 高 残 6.1	外面口縁部下端に段がある。体部はナメヘラナデまたは木目が浮き出る前の工具による不明瞭なハケメ。内面は体部下位ナデ、中～上位に 3 本 / cm の粗いナメハケ。内外面の口縁部にヨコナデ。古墳後期。	5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・赤・透明 細粒少 やや硬質	中央部底上 25cm の 4 片 が接合 口 1/3 周、体 1/2 周 SD-42 4、8
46 土師器 粗製鉢	口 復 11.5 高 底 6.1 底 5.6	外底面はおそらく木葉痕があった痕をナデと 1 方向ヘラケズリで雑に消す。外面は体部が雑なナデで積み上げ痕をかなり残し、口縁部ヨコナデ後体部に強いタテヘラナデを行う。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ、内面底部に斜放射状の非常に細いミガキ。古墳後期。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒やや多 硬質	南部底上 8 ～ 21cm が接 合 口 1/2 周、体 2/3 周、 底全周 SD-42 67 ～ 69、74
47 土師器 鉢	口 11.4 高 8.8 底 6.4 最大 12.1	外底面はナデと思われる無文状態で、2mm 大の丸棒の浅い圧痕が 2 本ある。外面は体部がナデで粘土積み上げ痕を明瞭に残し、軽いナデ。口縁部外面から体部上半内面までヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデ。古墳後期。重量 361.0g。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒少 軟質	南部底上 8 ～ 11cm が接 合 ほぼ完形 SD-42 73 ～ 75
48 土師器 鉢	高 残 3.2 底 7.7	外底面は外周に粘土を薄く貼り足した後に 1 方向ヘラケズリ、外面下端部に縦位と斜位のヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラナデ。外面の大半が黒斑。古墳後期。	5YR7/6 橙 やや粗い 白・赤・透明粗～ 細粒やや多、黒細粒少 やや硬質	中央部底上 27cm 底全周 SD-42 248b99621
49 土師器 鉢	高 残 2.8 底 復 7.0	外底面は 1 方向のヘラケズリ後ヘラミガキ。外面は下端部ヨコヘラケズリと体部ナメヘラミガキ。内面底部は多方向ヘラミガキ。外面の大半に黒斑あり。古墳後期。	5YR3/4 暗赤褐 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒と黒・透明細粒やや多 硬質	中央部底上 8cm 底 1/2 周 SD-42 231
50 土師器 鉢	高 残 2.6 底 復 6.2	外底面は 1 方向ヘラケズリ。外面体部はナメナデとナメヘラナデの後に下端部をヨコヘラケズリ。内面底部に 1 方向の強い密なヘラミガキ。古墳後期。	5YR4/6 赤褐 やや緻密 赤・透明粗～細粒 と白細粒少 やや硬質	SD-221 の北側 底 5/12 周 SD-42 16.6-17.8
51 土師器 鉢	高 残 2.2 底 7.2	外底面は外周に粘土を貼り足して平坦にし、中央は無調整の凹面として残す。外面体部下端に縦～斜位ヘラナデ。内面底部は多方向のやや雑なナデ。古墳後期。	5YR6/6 橙 緻密 白・透明粗～細粒やや 少、赤・灰色粗粒と黒細粒少 硬質	中央部底上 7cm 底全周 SD-42 249
52 土師器 鉢	高 残 2.2 底 復 4.0	厚く重い。外底面は外周に薄く粘土を貼り足して凹底状にし、外周をヘラケズリ。外面体部は横～斜位ヘラケズリ。内面はおそらく丁寧なヘラナデ。古墳後期。 [注記] SD-42 124、X17.55 ～ 17.65	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒やや多 軟質	中央部底直上。X17.55 ～ 17.65 間に 1 片あり 底 2/3 周 注記は左欄
53 土師器 有孔鉢 (?)	高 残 1.7	薄い小破片なので、口縁部付近に焼成前穿孔がある有孔鉢かと見られる。内外面ナデ。古墳中期。 [注記] SD-42 E-E' ベルト 1 層	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 白・黒・赤細粒少 やや軟質	断面図 B-B' 付近 1 層 小破片 1 点 注記は左欄
54 土師器 小形甕	口 13.4 高 残 10.9 底 7.1 最大 13.5 重 残 575.8	底部が厚い作りで重い。外底面は緩い凸面で 1 方向ヘラナデ。外面口縁部はヨコナデ後に疎らなタテナデ、体部タテヘラケズリ。内面は体部に横～斜位ヘラナデ、底部に 1 方向ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。被熱使用痕は見られない。古墳後期。 [注記] SD-42 74、75、16.6-17.8	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	南部底上 10 ～ 11cm。 16.6-17.8 グリッドの 1 片も接合 口 3/4 周、底全周 注記は左欄
55 土師器 甕	口 復 15.2 高 残 5.9 最大 残 15.7	外面は頸部に浅い段を持ち、口縁部ヨコナデ後に胴部タテヘラケズリと幅の狭いやや雑なタテヘラナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。古墳後期。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒やや多 軟質	中央底上 34cm。X17.3 ～ 17.4 間 1 層が接合 口 1/6 周、頸 1/3 周 SD-42 106、17.3 ～ 17.4 1 層
56 土師器 甕	口 18.5 高 残 8.8 底 復 6.8	外面は胴部に丁寧なナメナデ、頸～口縁部ヨコナデ。内面は胴部にナメヘラナデ、頸部ヨコヘラナデ後頸～口縁部ヨコナデ。接合できない胴～底部片は被熱赤化する。古墳後期？ [注記] SD-42 251、305、320、321、351、360、400、401、433、487、A トレンチ、E-E' 南、E-E' ベルト 1 層、グリッド少数 (数字不明)	7.5YR3/3 暗褐 やや緻密 白・透明粗～細粒 やや多、赤・黒粗粒少 やや硬質	北部底直上～底上 4cm と 断面図 B-B' 付近が接合 口 1/18 周、頸 1/6 周、 底 1/4 周 注記は左欄
57 土師器 甕	口 復 16.4 高 残 6.2	外面肩部に斜～横位ナデ、内面肩部に横位ナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。古墳後期。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白・黒・灰色礫～細粒 多 硬質	中央底上 12cm 口 1/3 周 SD-42 224、226
58 土師器 小形甕?	口 復 16.0 高 残 15.0 最大 復 15.8	外面は胴部に縦～斜位ヘラケズリの後にタテヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデで、粘土積み上げ痕をよく残す。内外面の口～頸部にヨコナデ。口縁部・頸部・胴部破片の間に接合点がないので、器形復原はやや不確実な部分を持つ。古墳後期。 [注記] SD-42 2、4、5、101、17.2-18.0 1 層、17.2-18.1、17.2-18.1 1 層	2.5Y7/3 浅黄 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒多 やや硬質	中央部底上 25 ～ 42cm と 17.2-18.1 グリッド 周辺の 1 層が接合 口 1/9 周、胴 1/3 周 注記は左欄
59 土師器 壺	高 残 2.4 底 6.8	外底面は凹底状で 1 方向ヘラミガキ。外面胴下端ヨコヘラケズリ後に少しナメヘラミガキ。内面は器面が荒れて調整不明。古墳中期?	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白礫と白・黒・ 赤・透明粗～細粒少 やや硬質	中央底上 5cm 底全周 SD-42 237
60 土師器 大形壺	口 残 15.0 高 残 3.6 底 8.4	外底面はおそらくヘラケズリ後にヘラナデ。外面の胴下端をナメヘラナデ。内面は底部に多方向と胴部に斜～横位のヘラナデ。被熱痕は見られず、外底面は大きな黒斑。古墳後期。 [注記] SD-42 17.55 ～ 17.65、17.55 不明、B ベルト 1 層	10YR7/2 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明粗～ 細粒やや多、白礫と赤細粒少 やや軟質	X17.55 ～ 17.65 間。断 面図 D-D' の 1 層にも破 片あり 底 5/6 周 注記は左欄
61 土師器 壺	高 残 34.0 底 6.8 最大 30.9	外底面は中央を 1 方向に削って凹底にし、外周も円周方向のヘラケズリ。外面胴部はヘラナデとヨコヘラケズリの後に密なタテヘラミガキ。外面頸部ヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。胴下面外面は鉄分が均一に付着しているが、人為的な塗彩ではないと見られる。古墳中期。 [注記] SD-42 40、59、62、81、111、148、176、180 ～ 183、191、206、213、218、230、255、259、263、247a99615?、248a(99615)、16.5-17.5、17.5-18.1、17.0-18.0-18.1、17.3-17.4、17.4-17.52 3 層、X17.25-17.30 墳乱、X17.55-17.65 1 層、X17.55-17.65 2 層、X17.55-17.65 3 層、A ベルト 2 層、B ベルト、C ベルト 2 層	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明礫～粗粒 と黒粗～細粒多、赤粗粒少 やや硬質	南部 3 層 (床直上) ～ 1 層 (底上 30cm) と中央 底直上 ～ 14cm が接合 頸 3/4 周、底全周 注記は左欄
62 須恵器 甕	高 残 4.7	外面平行叩きで、灰緑色の自然釉が薄くかかるため細部は不明瞭。内面はシリケンによる無文で、粘土接合痕を反映する凹みが縦に伸びる。SG10 区 SI-10 等の甕と同一個体の可能性あり。古墳中期。	N5/0 灰 緻密 白礫～細粒と透明細粒 やや多 硬質	北部底直上 胴部片 SD-42 437
63 須恵器 器台	口 復 34.6 高 残 10.5	外面はカキメ後に下段 11 ～ 12 歯と上段 14 ～ 15 歯の櫛描波状文を右から左へ描く。下位波状文→中位突線 2 条→上位波状文の順で、上位突線 1 条は上位波状文よりも先に作っている。杯部下半の握格子叩きはカキメ後。内面に黄緑色の自然釉がかぶり、外面口縁部に黒色の自然釉が付く。SI-111・SD-201a・SK-292・SK-614 出土破片と同一個体。古墳中期。	5Y5/1 灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	北部底上 2cm と X18 ラ イン付近出土の各 1 片 が接合 口 1/24 周、体 1/12 周 SD-42 425、E-E' 北ト レンチ

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第164図 権現山遺跡 SG10 区 SD-41・42 (3) 遺物

第8節 古墳時代の溝状遺構

64 土師質 専用羽口 (鍛冶)	長孔 1.7 ~ 1.9 最大 残 4.7 重 残 89.4	専用羽口の先端部破片。通風孔は正円形の直孔で径 1.7 ~ 1.9cmあり、棒を引き抜いて成形した痕がある。先端部はやや斜めに溶損してガラス質の滓に覆われ、5mm以下のコブ状突出も見られる。羽口の身厚は 0.6 ~ 1.5cmで、先端側が薄くなる。側面の還元部(灰色部)と酸化部(明褐色部)の境界がかなり明瞭である。鍛冶関連遺物構成Noなし。古墳後期か。	10YR5/4 にぶい黄褐色 やや緻密 白・透明粗～細粒 やや多、黒細粒ややや硬質 磁着度 3 メタル度 未計測	南部底直上(3層) 全周 SD-42 36
65 石器 砥石?	長幅 残 4.0 厚 残 2.3 厚 0.85 重 残 8.0	節理面に沿って割った板状の石で、両面の研磨痕は不明確。直角に交わる側面2面のうち、長辺は研磨して平坦になる。径 3.5mm程度と推定できる孔が1/3周程度残っている。有孔砥石の破片と思われるが、退化した石製模造品(有孔剥片)の可能性もある。古墳時代か。	2.5Y6/2 灰黄 緻密で軟質な泥岩	X17.55 ~ 17.65 間の2層 破片 SD-42 X17.55 ~ 17.65 2層
66 椀形鍛冶滓 (極小)	長幅 残 1.9 厚 残 1.8 厚 残 0.7 重 残 1.4	厚さ 7mm程の極小の椀形鍛冶滓表面破片。滓内部には気孔が目立ち、側部は4面とも破面となっている。66 ~ 68は同一個体の可能性も持っているが、取り上げ単位が別で接合もできなかったため別扱いとした。図示した個体は重量 1.4g、小破片を含めると合計 2.9g。鍛冶関連遺物構成No 68。	表 黄灰色 地 灰褐色 磁着度 1 メタル度 なし	底上 19cm 表面の小破片 SD-42 196
67 椀形鍛冶滓 (極小)	長幅 残 3.7 厚 残 2.6 厚 残 1.8 重 残 9.3	厚さ 1.6cm程の極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上下面と右側部が生きており、左寄りの側部3面が破面となっている。滓質はほぼ緻密ながら部分的に気孔が目立つ。鍛冶関連遺物構成No 69。	2.5Y5/3 黄褐 磁着度 1 メタル度 なし	底上 33cm 破面3面 SD-42 189
68 椀形鍛冶滓 (極小)	長幅 残 3.7 厚 残 4.1 厚 残 2.1 重 残 19.9	厚さ 1.8cm程の極小の椀形鍛冶滓肩部寄り破片。上下面と右側部の一部が生きており、小破面が点在する。上面は木炭痕を残す平坦面で椀形の下面の一部に灰色に被熱した炉床土が固着する。図示した破片は 19.9g、他の3片を含めると合計 21.4g。鍛冶関連遺物構成No 70。	表 にぶい黄褐色 地 灰褐色 磁着度 2 メタル度 なし	底上 34cm 9片中6片接合・約半周が破面 SD-42 190
69 鉄製品 鎌	長幅 残 3.06 厚 1.3 厚 0.3 重 残 1.76	頸部が幅 6.2 × 厚 3.0mmで薄いことから見て、古墳後期の長頸鎌と見られる。鎌身部の錆が厚いため確実ではないが、図の裏面の平坦度が高いので、片丸になる可能性あり。残存する頸部は潰れるように破損しているため、断面形は推定復原。		北部底上 34cm 先端部残 SD-42 175
70 鉄製品 小形鎌 または 刀子	長幅 残 6.4 厚 1.6 厚 0.1 重 残 7.13	厚さが均一な薄い鉄板製品、刀子や実用の鎌よりは、ミニチュアの鎌形品の可能性がある。両側縁ともに明確な刃部にならないと見られる。ただし、厚い錆のために刃部の有無がよくわからない部位が多い。図の右端部が曲がっているが、破損によるものか、鎌の折返部を表現したものかは不明。有機質は見られない。古墳中～後期。		北部底上 32cm 端部欠 SD-42 126
71 石製模造品 有孔円板	長短 残 3.2 厚 残 2.93 厚 0.74 重 残 8.02	両面にそれぞれ2方向の粗い研磨痕。側面は横方向(穿孔と同方向)の粗い研磨。図の上部は原石に硬質の脈が入るので、両面および側面に研磨痕がほとんどなく、自然の凹凸が皺状に入る。孔は2孔が残存し、推定3孔。全体が残る方の孔は初孔径 2.05mm、終孔径 1.90mmで裏面に穿孔剥離を生じる。半周が残る方の孔は径 2.55mmで、裏面から孔を開けて表面に穿孔剥離を生じる。古墳中期。	10YR7/4 にぶい黄褐色 緻密で軟質な滑石	X17.4 ~ 17.5 間 1/2 残 SD-42 X17.4 ~ 17.5
72 石製模造品 有孔円板	長短 残 2.98 厚 残 2.25 厚 0.48 重 残 4.39	両面は石材の節理に沿って薄く割った面で、右図の下部をやや薄くしている以外はわずかしら研磨をしない。外周の側面は横方向(穿孔と同方向)の細かい研磨痕。ただし、側面図に示した下半は、縦方向の浅い研磨痕。左図の面から穿孔し、左孔は初孔径 2.45mm・終孔径 2.06mm、右孔は初孔径 2.01mm・終孔径 1.71mm。古墳中期。	7.5Y4/1 灰 緻密で軟質な雲母片岩	南部底直上 完形 SD-42 51
73 石製模造品 有孔円板(?)	長幅 残 2.6 厚 残 2.0 厚 0.4 重 残 3.51	隅丸台形状で1孔だけを持つ。両面をそれぞれ1方向に細かく研磨する。節理に沿って剥離した面も多く残る。側面は横方向(穿孔と同方向)にやや粗く研磨する。図の下縁部に剥離破損が目立つ。孔径は 1.80 ~ 1.85mmで、左図の面から穿孔した可能性もあるが、右図の面は破損剥離のために穿孔剥離の有無が不明。古墳中期。	10Y4/1 灰 節理が発達した緻密で軟質な滑石片岩	中央底直上 下部欠 SD-42 102
74 石製模造品 有孔円板	長幅 2.9 厚 2.28 厚 0.3 重 2.28	節理に沿って薄く割った剥片の片面に斜位方向の粗い研磨痕。反対面は研磨しない。側面を横方向(穿孔と同方向)に粗く研磨して方形に成形。左図の面から穿孔し、左孔は初孔径 2.20mm・終孔径 1.95mm、右孔は初孔径 2.40mm・終孔径 2.05mm。穿孔終了時の対面側に剥離はない。左図の右上部と左下部に破損あり。古墳後期前半。	5Y4/1 灰 緻密で軟質な粘板岩	中央部底上 17cm 一部欠 SD-42 141
75 石製模造品 有孔円板	長幅 2.31 厚 1.98 厚 0.35 重 2.24	節理に沿って薄く割った剥片の片面に浅い研磨痕を残す。反対面は研磨していない。側面の全周には擦痕がないが、工具で切削または研磨して方形に成形する。左図の面から穿孔し、左孔は初孔径 1.85mm・終孔径 1.70mmで対面に穿孔剥離あり。右孔は初孔径 1.90mm・終孔径 1.65mm。古墳後期前半。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密で軟質な粘板岩	中央部底上 40cm 完形 SD-42 116
76 石製模造品 有孔円板	長短 残 1.94 厚 残 1.39 厚 0.31 重 残 1.04	節理に沿って薄く割った剥片の片面にやや粗く浅い研磨痕あり。反対面は研磨しない。側面には擦痕がないが、工具で切削または研磨して方形に成形したと見られる。左図の面から穿孔し、孔径は 1.6 ~ 1.7mmで2箇所残存する。古墳後期前半。	5Y5/1 灰 緻密で軟質な粘板岩	隅部を含む2側辺が残存 SD-42
77 土師質 土器片製 円盤	長短 3.67 厚 3.53 厚 0.8 重 11.2	外面(左図)はナメヘラケズリ、内面はヘラナデ。土師器壺類の胴部破片の外周を打ち欠いて円形に成形している。研磨痕は見られない。古墳中～後期。[注記]SD-42 17.2-18.0 1層	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・黒・透明細粒少 やや硬質	17.2-18.0グリッドの1層 完形 注記は左欄
78 礫	長幅 11.9 厚 11.1 厚 7.2	厚い楕円形で、断面が丸味を帯びた三角形の自然礫。加工・被熱痕は見られない。断面図に示したように凹部が磨耗している。重量 1170g。	5Y6/1 灰 緻密でやや硬質なデイサイト	中央部底上 10cm 完形 SD-42 162
79 礫	長幅 16.4 厚 14.4 厚 13.6	棒状大形礫が輪切りに折れたような大形礫で、断面は厚い円形。水の作用で付着したと思われる橙褐色の鉄錆が全面に多い。加工・使用・被熱痕はなく、鉄滓や鍛造剥片等もない。重量 4900g。	2.5GY6/1 オリーブ灰 緻密で硬質な安山岩	中央部底上 5cm 完形 SD-42 241
80 礫	長幅 21.5 厚 6.3 厚 5.4	棒状で断面が四角形に近い自然礫。加工・被熱痕はないが、全周の側面のうち半分程の範囲に煤が付着し、図中の黒塗部分には炭化物が貼り付いている。重量 1039.8g。	2.5Y7/2 灰黄 緻密で硬質な流紋岩	中央部底上 35cm 完形 SD-42 161

SG10 区 SD-43 → 古墳時代の居館関連溝（前節）を参照

SG10 区 SD-44（第2分冊の第342図、写真図版43・44）

〔位置〕 SG10 区南端部の16-17グリッドでごく一部分を調査した。古墳時代後期の溝で、大半をSG5区で調査した（SG5区SD-44）。

〔規模・形状・覆土〕 SG10 区で調査した範囲は東端部北半の一部だけなので、SG10 区SD-44の平面図と土層断面図はSG5区SD-44の項にまとめて掲載した。古墳中期の遺構（SI-100と居館北側区画溝SD-43）を切る。

〔出土遺物〕 図示できる遺物はない。古墳時代後期末の溝であるが、SG10 区の範囲で出土した土師器35片は古墳中期後葉で、後期のものではなく、重複するSG10 区SD-43から混入したものと考えられる。

SG10 区 SD-221 → 古墳時代の居館関連溝（前節）を参照

SG10 区 SD-304a・304b（第165～168図、写真図版128・129・210）

〔位置〕 SG10 区北部から中央部北端のX=20～23間、Y=17～20間にある。SD-304aを掘り直した溝がSD-304bなので、調査した部分の大半はSD-304bである。北半部のX22～X23間では、SD-304bの東側に旧期のSD-304aが残っている（断面図C-C'）。SD-304aが古墳中期後葉のSI-64a・64b・66を切る（SI-64a・64b・66→SD-304a→SD-304b）。また、時期不明のSK-526を切る（SK-526→SD-304a→SD-304b→SK-525・566）。

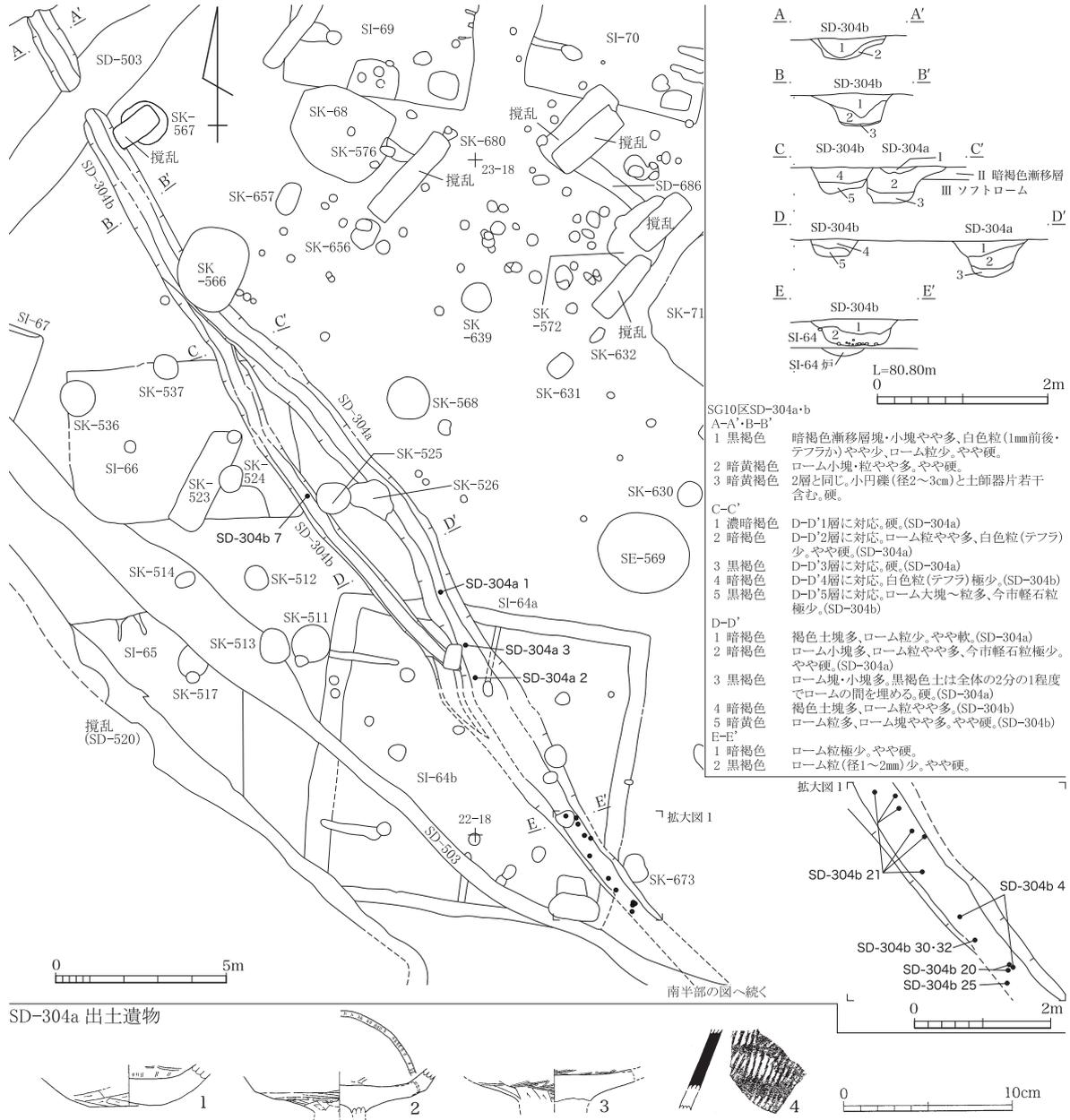
SD-304bの重複関係は非常に多い。竪穴建物跡では、縄文晩期のSI-63と、古墳中期後葉のSI-61・64a・64b・66をSD-304bが切る。近世のSD-204・503にSD-304bが切られ、また攪乱溝SD-501にも切られる（SD-304b→SD-204・501・503）。南端付近で合流するような位置関係にある古墳時代のSD-305とは、確実な新旧関係が不明だが、溝のあり方からSD-304bとSD-305が同時存在の可能性がある。土坑や柱穴との関係では、北半部にある時期不明のSK-525・566がSD-304bを切る（SK-526→SD-304a→SD-304b→SK-525・566）。北半部の南端にある時期不明のSK-673をSD-304bが切る可能性がある（SD-304bを掘った後にSK-673の所在を確認した）。南半部にある時期不明のP-407とSD-304bの重複関係は不確実だが、SD-304bがP-407に切られることが推定される（SI-61→SD-304b→P-407）。

〔規模と形状〕 SD-304aはSI-64・66と重複する付近で長さ約15mの範囲で確認できた。SD-304a・bが合流する部分に関しては、SD-304aの方がSD-304b底面よりも8～18cmほど深い傾向がある。幅80～118cm、残存する深さ33～49cmで、底面はわずかに北へ傾斜し、底面の標高は南端で80.30m、北端で80.24m。

SD-304bは北半部で幅50～150cm・残存する深さ18～39cm、南半部で幅50～120cm・残存する深さ10～30cm。底面はあまり高低差を持たないが、南端部が低地側へ向かって少し低くなる。底面の標高は北端で80.2～80.3m、SD-304aの西側付近では80.3～80.4m、北半部の南端付近では80.2～80.3m。南半部の北端付近では80.2～80.3m、SI-63と重複する付近では80.2m前後、南端で80.1～80.2m。

〔覆土〕 SD-304a・bの埋土はともに自然埋没で、SD-304bの上部にテフラとみられる白色粒を含む。断面図C-C'の2層では、SD-304aにも白色粒を含む。

〔SD-304a 出土遺物〕（第165図下段）SD-304aが残る部分が少ないので、遺物も少ない。高杯破片と凹底の杯破片、内面無文の須恵器甕破片からみて古墳中期で、SD-304bと同様の時期と考えられる。図示以外の土師器合計133片・1.016gの内訳は、杯55片・305g、高杯8片・68g、小形壺2片・18g、壺甕類68片・625g。

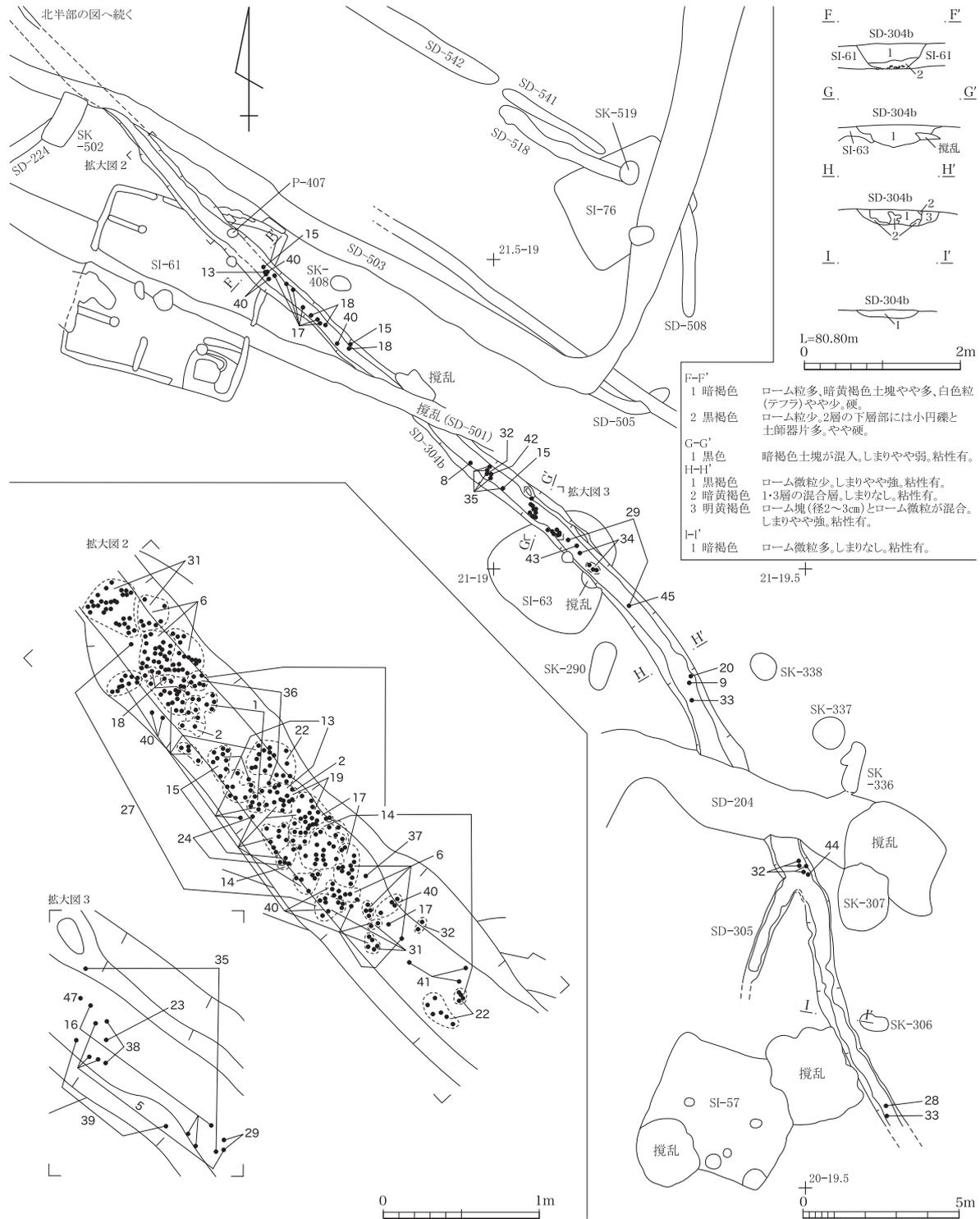


第165図 権現山遺跡 SG10区 SD-304a 遺構・遺物 SD-304b (1) 北半部遺構

第99表 権現山遺跡 SG10区 SD-304a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 2.4 底 3.4 最大 復 9.9	外底面は円形の凹底状にし、ナデ仕上げ。外面体部は横～斜位へラケズリ。内面は底部に多方向または放射状、体部に横位のヘラミガキと見られるが、磨滅して不明確。古墳中期。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・赤・透明 細粒やや多、白・灰色粗粒少 硬質	北半部1層(底上33cm) 体下半～底全周 377
2 土師器 高杯	高 残 2.6	杯底～体部境の接合部で剥がれている。径約9cmの杯底部円板の外周側面に縦位の刻みを1～3mm間隔で入れてから杯体部を成形したことがわかる。外面は杯底部に放射状へラナデ、杯底外周から杯体部にヨコへラナデ。内面は杯底部にへラナデ、杯体部はへラミガキかもしれないが不明確。内面脚柱上端ナデ。古墳中期。	5YR7/8 橙 緻密 白粗～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	北半部3層はば底面(底上1cm) 杯底1/2周 373
3 土師器 高杯	高 残 1.9 最大 復 9.5	外面は杯底部を放射状へラケズリ後に疎らなヨコへラミガキ。杯部内面はおそらくへラケズリとへラナデで平らに整えた後に多方向のやや密なへラミガキ。古墳中期。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・透明粗～ 細粒やや多、灰色礫～細粒少 硬質	北半部3層はば底面(底上1cm) 杯底1/3周 374
4 土師器 甕	高 残 4.9	おそらく木目平行の溝を彫った叩き板で外面を平行叩き後、間隔を空けたヨコナデによる幅1cm前後の無文帯が2本見られる。内面は多方向の丁寧なナデで無文。古墳中期。	5Y4/1 灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	断面図C-C'の1層(SI-66の北東側) Hライン上1層

第5章 権現山遺跡 SG10区



第166図 権現山遺跡 SG10区 SD-304b(2) 南半部遺構

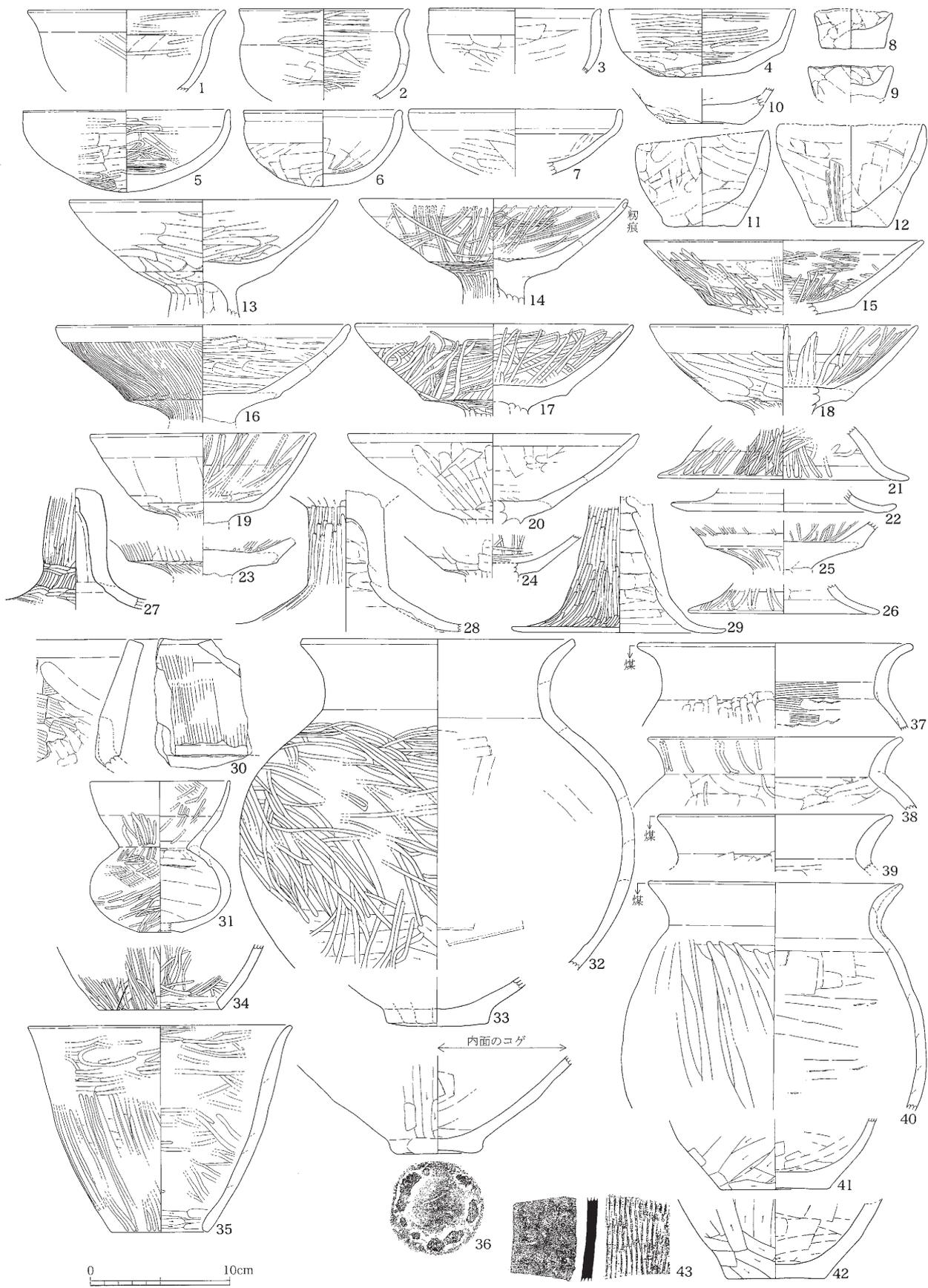
[SD-304b 出土遺物] (第167・168図) 遺物量が非常に多い。特に多いのはSI-64b南東付近(第165図の拡大図1)とSI-61付近(拡大図2およびその東側)であり、ここでは溝下層の下半部(つまり底面近く)で土師器の中小破片と円礫がびっしりと密接して出土した。地山中の円礫混じりローム層がSD-304b底面に露出している箇所がSD-501・503の中間付近にあるので、そうした円礫を土師器中小破片と一緒に溝底に捨てたものと推定される。溝底面に接して円礫が載り、その上に土器片が載る場合が多い。重複するSI-

64b や SI-61 よりもはるかに遺物の密度が高く、溝底面から浮いた遺物があまりないので、重複する建物から混入・流入した遺物は少ないと考えられる。断面図 H-H' の北側から SI-63 に重複する位置までの間では、粗製の鉢および小形土器（いわゆる「手捏ね土器」）がやや目立つ。

古墳中期後葉の溝で、古墳後期の土器は混入と考えられる程度の量である（44～47）。中期後葉の複数の建物を切るの、それよりも新しい。遺物は中期末よりも中期後葉のものが目立つ。中期末の指標となる、模倣杯（4・5）や短脚化を始めた高杯（27・28）は少ない。重複する竪穴建物から溝内へ入ってきた遺物も含むではあろうが、中期後葉の新段階には機能していた溝と考えられる。33のように白色針状物質（骨針）を含む土師器は SG10 区 SI-23 などに、14 のような稲稈痕は SG10 区 SI-50 などにある。43 が、SI-10 などで出土した須恵器甕片と同一個体かどうかは不明確。44 は SK-264・275・SD-263 の須恵器甕破片と類似する。図示以外の土師器合計 2,192 片・18,802g の内訳は、杯 282 片・4,624g、高杯 213 片・2,136g、鉢 5 片・82g、小形壺 29 片・182g、壺甕類 1,589 片・11,060g、甌 24 片・431g、小形土器 50 片・287g。混入した縄文土器があり（『東谷・中島地区遺跡群』10 の第 36～41 図 45・67・72・78・85・87・90・155・279・280・286）、そのうち晩期土器は重複する SI-63 から流入した可能性がある。弥生中期土器も混入していた（前掲書第 42 図 25～27）。

第 100 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-304b 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 5.8 最大 復 14.0	口～体部境には内外面ともに稜を持たない。外面は体部にヘラケズリ(?)の後ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。内面は体部にナメヘラナデと口縁部にヨコナデの後、全体をやや密なヨコヘラミガキ。外面に広く煤が付着する。古墳中期後葉。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤・黒・透明細粒 やや少、灰色礫と白細粒少 軟質	南半部底上 2cm の 2 片 が接合 口 1/9 周 201、215
2 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 6.5	外面の頸～体部境と内面の頸部に弱い稜。外面は体部に斜位のヘラナデ後少しヘラミガキ。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はヘラナデ(?)後ヨコヘラミガキ。古墳中期後葉。	2.5YR5/6 明赤褐 緻密 白・黒・赤粗～細粒と 透明細粒少 やや硬質	南半部底直上～底上 2 cm が接合 口 1/4 周 194、200、208 付近、222
3 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 4.6 最大 残 12.3	外面は体部中位ナデと下位ヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面体部にナメヘラナデ。外面に煤付着。古墳中期後葉。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 赤粗粒と黒・透明細粒 少 軟質	北半部 SI-64・66 間の遺 構確認面 口 1/6 周 22.4・17.8 上面
4 土師器 杯	口 復 13.2 高 4.8 底 6.3	外面体部は多方向ヘラケズリで、底～体部境がやや不明瞭。外面体部上半ヨコヘラナデ。内外面口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部ヨコヘラナデ後ヨコヘラミガキ、底部多方向ヘラミガキ。古墳中期末。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒少 硬質	北半部底上 2cm 口 1/6 周、底全周 264、290、22.0-18
5 土師器 杯	口 復 14.7 高 5.8	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後ヘラミガキ(または光沢のあるヘラナデ)。内外面の口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。古墳中期後葉～末。	2.5YR6/6 橙 緻密 赤粗粒と白・黒・赤・ 透明細粒少 やや硬質	南半部底上 2～3cm が 接合 口 1/8 周、底全周 82、95、100、101、(5)、(6)
6 土師器 杯	口 復 11.1 高 5.4 最大 11.3 重 残 197.0	外面は体部にヘラナデおよびナデの後に上位ヨコナデと底部多方向ヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。古墳中期中葉または後葉。 [注記]168、182、185、189、190、222、226、21.55-18.50 攪乱坑	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・透明粗粒と 白・黒・赤・透明細粒少 やや硬質	南半部底直上～底上 2cm が接合 ほぼ完形 注記は左欄
7 土師器 杯	口 復 14.8 高 残 4.7 最大 復 15.2	内外面ともに体部は横位または斜位ヘラナデの後にヘラミガキしている可能性があるが、器面が磨耗して不明確。内外面の口縁部をヨコナデ。古墳中期後葉。	2.5YR6/8 橙 緻密 白・黒・透明細粒少 やや軟質	北半部底上 9cm 口 1/3 周 1、X22.4
8 土師器 小形土器	口 復 5.5 高 2.8 底 4.5	紐積みではなく、手捏ね成形。外底面はナデかヘラナデで緩い凸面状。内外面ともにナメユビナデ。外面の体部から底部にかけて剥離破損部があり、焼成時の破損かもしれない。古墳中～後期。	5YR7/6 橙 緻密 赤・黒細粒少 やや硬質	南半部底上 10cm 口 1/4 周、底 2/3 周 79
9 土師器 小形土器	口 復 6.0 高 残 2.3	紐積みではなく、手捏ね成形。内外面ともにナメユビナデ。外底面は面的に剥離破損して残っていない。胎土が緻密なので、焼成時に底面が剥離したものかもしれない。古墳中～後期。	7.5YR6/8 橙 緻密 赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	南半部底上 4cm 口 5/6 周 33
10 土師器 粗製鉢	高 残 2.5 底 5.5	外底面は多方向ナデで中央が緩く凹む。外面体部ナメナデ。内面は底部から体部にかけて円周方向のナデ。古墳中～後期。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白細 粒やや少、黒・透明細粒少 やや硬質	南半部で SI-63 東側と SD-204 北側の 6 片が接 合 底 2/3 周 (4)、(5)
11 土師器 粗製鉢	口 復 9.5 高 5.9～6.8 底 5.0	2～3 段の粘土紐を積み上げて成形する。外底面は雑な多方向ナデで凹凸がややある。外面体部は軽雑なナメナデ。口縁部内外面のヨコナデは行わない。内面は底部に多方向、体部に横～斜位の雑なヘラナデ。外面体部の約半周が黒斑。古墳中～後期。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 赤粗粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや軟質	南半部で SI-63 東側と SD-204 北側 口 1/3 周、底全周 (4)、(5)
12 土師器 粗製鉢	口 復 10.6 高 7.3 底 復 5.0	外底面は雑なナデで少し凹凸あり。外面体部は雑なナデと雑なハケメ(?)。内外面の口縁部にヨコナデを行わない。内面体部はやや雑なナメヘラナデ。古墳中～後期。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒やや少 やや軟質	南半部で SI-63 東側と SD-204 北側 口 1/12 周、底 1/6 周 (4)、(5)
13 土師器 高杯	口 復 18.9 高 残 8.4	外面は杯底～脚部タテヘラケズリ、杯底外周と杯体部ヨコヘラケズリ。内面は杯底部に多方向と杯体部に斜位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。脚内面ナデ。古墳中期。 [注記]129、189、195、200、203、205、206、208 付近、211、221	7.5YR8/4 浅黄橙 やや粗い 赤・透明粗～細粒 やや多、白・黒粗～細粒少 やや軟質	南半部底直上～底上 3cm が接合 口 1/12 周、杯底 11/12 周 注記は左欄
14 土師器 高杯	口 復 18.8 高 残 7.4	外面は脚部を縦位のヘラケズリ後ヘラミガキ、杯底部タテヘラケズリ後ヨコヘラミガキ、杯体部はナメヘラケズリと口縁部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。内面はタテヘラケズリと口縁部ヨコナデ後に全体をナメヘラミガキ。内面の杯底部は剥離して調整不明。外面の口縁部に稲稈痕が 1 箇所ある。古墳中期。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒細粒少 やや硬質	南半部底直上～底上 3cm が接合 口 5/12 周、脚柱全周 158、188、193、197、 208 付近、211、220、254

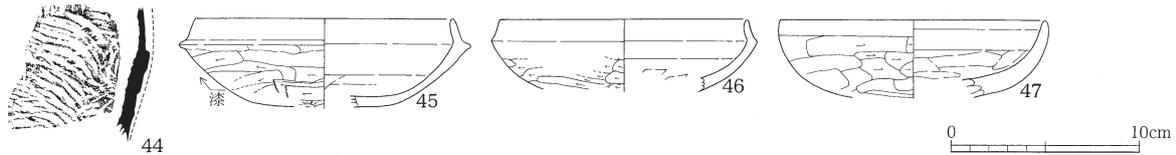


第167図 権現山遺跡 SG10区 SD-304b(3) 遺物

第8節 古墳時代の溝状遺構

15 土師器 高杯	口 19.5 高 残 5.3	外面は杯底部が主に放射状ヘラケズリ、杯体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデの後にナメヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ、杯体～底部に密なタテおよびヨコヘラミガキ。古墳中期。 [注記]175、106、133、167、190、194、197、208、(6)、21.50-18.60 攪乱	5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒多、 透明粗～細粒と黒細粒やや少 やや軟質	南半部底直上～底上 3cm が接合 口 5/12 周、杯底 1/3 周 注記は左欄
16 土師器 高杯	口 20.6 高 残 7.0 最大 20.9	外面は杯体～底部に 6～8 本/cm のタテハケ後、口縁部ヨコナデ。内面は底部に 1 方向、体部に 3～4 本/cm の横位の粗いハケで、口縁部のヨコナデは軽くナデる程度。古墳中期。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒やや少、灰色礫 少 軟質	南半部底上 4～5cm が 接合 口 5/12 周、杯底全周 61、63、93、(4)～(6)
17 土師器 高杯	口 19.4 高 残 6.9 最大 19.7	外面は杯底～脚柱部タテヘラケズリ後に杯底部をナメヘラミガキ、杯体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデの後にナメヘラミガキ。内面は杯底部と杯体部を多方向および縦位のヘラケズリと口縁部ヨコナデの後に、横～斜位ヘラミガキ。古墳中期。 [注記]113、114、119、121、125、132、138、178、180、189、206、244、255、(4)、21.55-18.7	5YR6/6 橙 緻密 赤粗粒と白・黒・赤・ 透明細粒少 やや硬質	南半部底直上～底上 6cm が接合 口 2/3 周、杯底全周 注記は左欄
18 土師器 高杯	口 18.7 高 残 6.5 最大 18.9	外面は杯底部を放射状ヘラケズリ、杯体部ヨコヘラケズリ後に少しヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は杯底部と杯体部にヘラナデ(または非常に浅いハケメ)の後に、口縁部をヨコナデして杯体部をタテヘラミガキ。古墳中期。	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 白・赤粗～細粒や や多、白礫と黒・透明粗～細 粒少 やや軟質	南半部底上 1～9cm が 接合 口 1/2 周、杯底 5/12 周 107、112、117、212、216
19 土師器 高杯	口 復 15.8 高 残 6.2	外面は杯底部ナデ、口縁部ヨコナデ、杯底部タテヘラケズリ後に外周ヨコヘラケズリ。内面は杯底部に多方向と杯体部に斜位のヘラケズリおよびヘラナデ後に、口縁部ヨコナデと全体にナメヘラミガキ。古墳中期。 [注記]138 周辺、176、195、200、205、206、208、222	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 黒・透明粗～細粒やや多 やや軟質	南半部底直上～底上 3cm が接合 口 1/4 周、杯底 3/4 周 注記は左欄
20 土師器 高杯	口 復 20.4 高 残 6.4	外面は杯底部にヘラナデまたはヘラケズリ、杯体部タテヘラナデ後タテヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は斜位および横位のヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。古墳中期。	5YR7/8 橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒 やや多、白・赤粗～細粒やや 少 軟質	南半部底上 2～10cm 口 1/4 周、杯底 1/3 周 35、265
21 土師器 高杯	高 残 3.8 脚裾 復 17.8	内外面の脚裾部をヨコナデ後、外面タテヘラミガキ、内面は縦および斜位ヘラミガキ。古墳中期。 [注記]306、317、321、333、341、343、353	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・灰色粗～細粒 と赤・黒・透明細粒少 軟質	北半部底上 1～3cm が 接合 脚裾 5/12 周 注記は左欄
22 土師器 高杯	高 残 1.6 脚裾 復 16.0	外面の脚部をナデ後に内外面の脚部をヨコナデ。古墳中期。	2.5Y7/4 浅黄 緻密 白・黒・赤細粒少 やや軟質	南半部底直上～底上 2cm が接合 脚裾 1/3 周 158、161、193、205
23 土師器 高杯	高 残 2.8	外面杯底部に放射状および外周横位のヘラケズリ後、放射状ヘラミガキ。外面杯体部ナメヘラナデ後タテヘラミガキ。内面は底部におおむね 1 方向と体部に縦位のヘラミガキ。古墳中期。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白粗～細粒と黒・透明 細粒少 硬質	南半部底上 4cm 杯底全周 98、(5)
24 土師器 高杯	高 残 3.1	外面は杯底部を求心状ヘラケズリ、杯体部ヨコヘラケズリ。内面は密な多方向ヘラミガキ。古墳中期。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 白・黒・赤細粒少 やや硬質	南半部底直上～底上 2 cm が接合 杯底 1/2 周 197、208、221
25 土師器 高杯	高 残 3.5	杯底部中央に粘土を充填して成形した可能性がある。外面は杯底部に浅く不明瞭なハケ(ナデ消したハケと思われる)、杯体部ナデ、杯体～底部の境界付近をヨコナデ、杯体部に粗いナメヘラミガキ。内面はナデ後杯底部に多方向と杯体部に斜位の粗いヘラミガキ。古墳中期。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・透明粗～細粒やや 少、赤・黒細粒少 やや硬質	北半部底直上 杯底 1/4 周 261
26 土師器 高杯	高 残 2.1 脚裾 復 13.6	外面は脚柱部タテヘラケズリ(?)と脚裾部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は脚柱部ナデと脚裾部ヨコナデ。 [注記]21.35-18.75 下半分、21.55-18.50 攪乱坑	7.5YR6/6 橙 やや緻密 透明粗～細粒やや 多、白・赤粗～細粒やや少 軟質	南半部で SI-61 重複部と その東側下層 脚裾 1/6 周 注記は左欄
27 土師器 高杯	高 残 8.5	細い柱状脚の脚中位が少し膨らむ。脚柱部外面はおそらくタテヘラケズリ後密なタテヘラミガキ。内面は上端部を深く抉ってから脚柱部をヨコヘラナデ、裾部ヨコナデ。古墳中期後葉。	2.5YR4/6 赤褐 緻密 白礫～粗粒と白・黒・ 赤細粒少 硬質	南半部底直上が接合 脚柱全周 185、225
28 土師器 高杯	高 残 9.9	外面は脚柱部ナデと脚裾部および杯底部タテヘラケズリ、脚柱～脚裾部タテヘラミガキ。内面はユビナデで脚柱部に輪積み状の積み上げ痕を残し、脚裾部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。古墳中期後～末葉。	5YR6/6 橙 緻密 白・赤粗～細粒と黒・ 透明細粒少 やや硬質	南半部底上 1～12cm が 接合 脚上半全周、 脚下半 1/6 周 3
29 土師器 高杯	高 残 9.6 脚裾 15.1	倒立状態で反時計回りに積み上げる手順を繰り返して成形する。外面は脚裾部ヨコナデ、脚全体を密なタテヘラミガキ。内面は脚柱部ユビオサエ、脚裾部ヨコヘラナデ後ヨコナデ。古墳中期。 [注記]44、54、56、82、192、205	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤粗粒と赤・黒細粒少 やや軟質	南半部底直上～底上 4cm が接合 脚柱全周、脚裾 5/6 周 注記は左欄
30 土師器 大形壺	口 復約 25 ～35 高 残 9.2	非常に大形で厚い。外面は頸部下端に接合痕を残し、口～頸部ヨコナデ後に 4～5 本/cm の浅いハケメ。内面は口縁部ヨコナデと頸部ナメハケ。ハケ調整後、にぶい橙色の粘土を内面の頸下端に付け足して雑なナメナデをしている。古墳中期。	2.5Y6/2 灰黄 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや少、赤粗粒と白・灰色礫 少 やや硬質	北半部底直上 口 1/18 周 174、175、287
31 土師器 小形壺	口 復 10.0 高 残 10.7 底 復 2.8	外底面はナデで小さな凹底状。外面は体部ナメハケ後に斜～縦位ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、頸部ナデ後タテヘラミガキ。内面は体部ナデで肩部に粘土紐積み痕を残す。内面頸部ナデ、口縁部ナメハケ後ヨコナデ、口～頸部ナメヘラミガキ。外面の約半周が黒斑。古墳中期中葉。[注記]160、178、181、185、194、208、221、222、224 付近、228、21.55-18.50 攪乱坑	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 白・赤粗粒と黒・透明 細粒少 やや軟質	南半部底直上～底上 3cm が接合 口 1/6 周、頸 5/12 周、 底 1/3 周 注記は左欄
32 土師器 壺	口 復 19.2 高 残 23.4 最大 復 28.0	外面胴部ヘラナデと胴下位ヨコヘラケズリ後に胴部全体をヘラミガキ。内面は胴部ヘラナデで下位は強く、上位は弱く行う。内外面の口～頸部ヨコナデ。被熱痕や付着物はない。古墳中期。 [注記]1～3、86、166、194、228、331、(1)、(5)、22.0-18.05、22.0-18.05 上面、22.0-18.1 2 層、X22～22.1 1 層	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤礫～細粒と 黒・透明粗～細粒やや多 やや硬質	北半部底上 2～8cm 口 1/18 周、頸 5/12 周 注記は左欄
33 土師器 壺	高 残 3.5 底 7.0	外底面は丁寧なヘラナデで凸面状にする。外面胴下端に縦～斜位ヘラナデ。内面は器面全体が剥落して調整不詳だが、ナデかヘラナデと思われる。	5YR5/6 明赤褐 粗い 白・透明粗～細粒多、 灰色粗～細粒少、白色針状物 質極少 軟質	南半部底上 1cm 底全周 26、(1)
34 土師器 甗	高 残 4.6 底 8.7	外面は胴部にナデまたはヘラナデと胴部下端にヘラケズリの後に密なタテヘラミガキ。内面は胴部にナデまたはヘラナデ後に密な縦～斜位ヘラミガキ。内面胴部下端から底面の孔縁部にかけてヨコヘラケズリ。古墳中期後葉～末。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白・透明粗～細粒やや 多、赤・灰色粗～細粒と黒細 粒少 やや硬質	南半部底上 3～10cm が 接合 底 1/2 周 48、81、(5)
35 土師器 小形甗	口 復 17.2 高 残 14.6 底 復 5.4	外面は胴部下位ナデと胴部上位ヨコヘラケズリ後にタテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデ後にナメヘラミガキ、胴下部から底部までヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。古墳中期末。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白粗～細粒やや多、 赤・黒細粒少 やや軟質	南半部底直上～底上 5cm が接合 口 1/3 周、底 7/12 周 54、57、72、75、77、78、 84、86、(6)

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第 168 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-304b (4) 古墳後期の遺物

36 土師器 甕	高 残 6.9 底 6.5	外底面はナデ調整の凹底状で、底面外周に粘土塊がつぶれて付着している。外面胴部タテヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横～斜位のヘラナデ。内面全体に明瞭なコゲが付着する。古墳中期。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 透明粗～細粒と黒細粒 やや多、白細粒少 軟質	南半部底直上～底上 3cm が接合 底全周 202、220
37 土師器 甕	口 復 19.6 高 残 6.2	外面は口縁部ヨコナデ後に肩部タテヘラナデ。内面は肩部ヨコハケ後ナデ、頸部ヨコハケ、口縁部ヨコナデ。外面に煤付着。古墳中期。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 赤・透明粗～細粒 と白・黒細粒少 やや軟質	南半部底上 1cm 口 1/8 周 245
38 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 5.2	外面は肩部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの後に疎らなタテヘラミガキ。内面は肩部にやや強いヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。煤や被熱痕等は見られない。古墳中期。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒やや少 やや軟質	南半部底上 1～3cmが 接合 口 1/12 周、頸 1/4 周 94、99
39 土師器 甕	口 復 16.3 高 残 4.1 最大 復 16.7	外面は肩部ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は肩部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面に煤付着。古墳中期。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 白・黒粗～細粒や やや多、灰色礫～粗粒と透明細 粒少 軟質	南半部底直上と底上 8cm に各 1 片 口 1/4 周 64、70
40 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 16.2 最大 残 21.6	外面は口～頸部ヨコナデ後に胴部ナメヘラケズリ。ヘラケズリの工具に凹凸があり、粗いハケメに似た仕上がりになっている。内面は胴部ヨコヘラナデで、粘土紐接合痕を少し残し、口～頸部ヨコナデ。外面全体に煤が多く付着する。内面は胴部中位以下が少し暗褐色に汚れている可能性あり。古墳中期後葉。 [注記]109、126、128、173、178、181、185、190、192、194、194 付近、195、200、201、205、206、208 付近、214、217～219、223、224、242、243、21.55-18.50 攪乱坑	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・赤粗粒と白・ 黒・赤・透明細粒少 やや軟質	南半部底直上～底上 6cm 口 1/2 周、頸 3/4 周 注記は左欄
41 土師器 甕	高 残 5.0 底 7.5	外底面は 1 方向ヘラケズリで平底にする。外面胴部ナメヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。外面の被熱痕は不明。破面はにぶい橙色 (5YR7/4)。 [注記]160、239、240、(3)、31.35?	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・黒・透明細粒 多、白・赤・灰色粗粒少 やや軟質	南半部底直上～底上 1cm が接合 底全周 注記は左欄
42 土師器 甕	高 残 5.7 底 7.1	外底面は 1 方向ナデで平底。外面胴部はナメおよびタテヘラケズリ。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラナデ。外面の被熱痕は不明確。内面胴部の一部分が少し暗褐色に汚れている。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや多、灰色粗～細粒少 硬質	南半部底上 3～23cmが 接合 底 2/3 周 76、85、(4)
43 須恵器 甕	高 残 6.0	おそらく木目に直交する溝を彫った叩き板で縦位の平行叩きを外面に施す。内面は当具痕を磨り消しか、又は無文当具を使っている。SI-10 等の須恵器甕片と同一個体かどうかは不詳。古墳中期。	7.5Y2/1 黒 やや緻密 白粗～細粒多、白 礫少 硬質	南半部底上 12cm 胴部片 51
44 須恵器 甕	高 残 7.0	外面は表面が剥離して不明。内面は同心円文当具痕で、当具の木質は同心円状ではなく平行線状に木目が走る可能性がある。破面は灰オリーブ色とにぶい橙色の互層状の色調。古墳時代の SK-275 と時期不明の SK-264 と中～近世の SD-263 出土破片とやや類似する。古墳後期。	5Y5/2 灰オリーブ やや粗い 白・黒・赤・透明 粗～細粒少 やや硬質	南半部底直上 胴部片 7
45 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.6 最大 復 15.3	外面は体部上位ナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部と内面上半ヨコナデ。内面下半はナデまたはヘラナデ。外面の中位以上と内面に漆仕上げ。古墳後期後～末葉。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白粗～細粒と赤・黒細 粒少 やや硬質	南半部底上 2cm 口 5/12 周 44、(1)、(4)、(5)
46 土師器 杯	口 復 12.9 高 残 3.8 最大 復 14.0	残存する口縁部が小さいので復原径は参考値。外面体部上位ナデ、中位ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部と内面体部上位ヨコナデ。内面体部下半ナメヘラナデ。漆仕上げはない。古墳終末期前半。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 白・透明細粒多、白・ 赤粗粒と黒細粒少 硬質	南半部 (SI-63 の東側) 口 1/12 周、肩 1/12 周 (5)
47 土師器 杯	口 復 13.9 高 残 4.1 最大 残 14.1	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。漆仕上げは見られない。古墳後期末。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・透明細粒やや少、 赤・黒細粒少 やや硬質	南半部底上 2cm 口 1/6 周 71、(5)

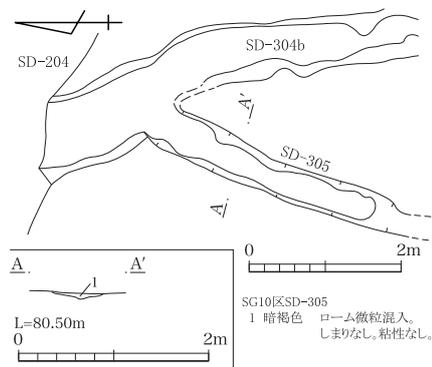
SG10 区 SD-305 (第 169 図、写真図版 129)

[位置] SG10 区中央部の 20-19 グリッドにある。北側は古墳中期の SD-304b に合流する状況だが、同時存在か、SD-304b に切られるのかを確定できなかった。両溝の底面に段差がなく連続することや、SD-304b の北東側に SD-305 がないことを重視すると、SD-304b に合流する同時存在の溝である可能性が考えられる。南端は低地部の斜面に入ると浅くなり確認できなくなる。

[規模と形状] 幅 42～64cm で、南端部は幅 28cm。残存する深さは 3～10cm。底面は中央部がやや高く (標高 80.24m)、北端 (80.19m) と南端 (80.19～80.22m) がわずかに低くなる。

[覆土] 単層で、テフラの層や粒は見られない。

[出土遺物] 図示した遺物はない。遺物は土師器壺甕類 1 片・7g だけで、時期を判断することはできない。SD-304b に合流する可能性からみて、古墳中期後葉の溝であろうか。



第 169 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-305 遺構

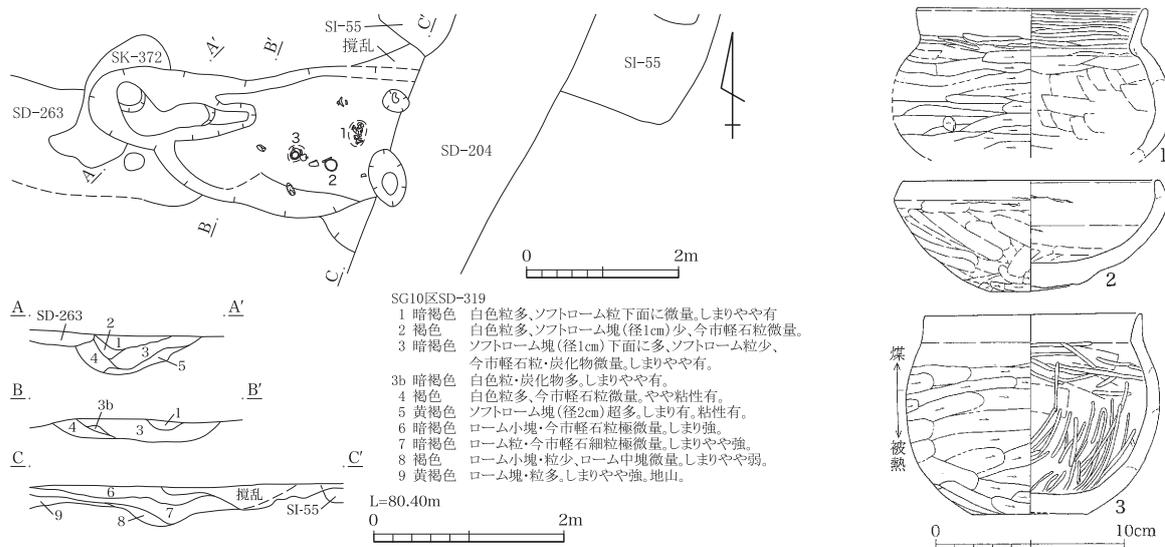
SG10区 SD-319 (第170図、写真図版130・210)

[位置] SG10区南部の19-18グリッド。古墳中期のSI-55と重複する可能性もあるが、両遺構間に攪乱とSD-204があるので前後関係は不明。東側を近世のSD-204が切り、その東は地形が下がるためSD-319が確認できない。西端には時期不明の土坑SK-372が重複し、SD-319の上部を中～近世のSD-263が切る。SK-372はSD-319・SD-263との新旧が不明で、SD-319西半部底面が明瞭に確認できず、その下にSK-372があることが判明した。SK-372と重複するSD-319西端部は推定形を示した。覆土の軟らかいSK-372が新しいと仮定すると、SD-319とSD-263を切ることも想定できる。

[規模と形状] 幅117～170cm。残存する深さ13～20cm。底面は特定方向に傾斜しないが、西端部底面の狭い範囲が20cmほど一段深く、最深部は確認面から40cm(ただし、SD-319西端をSK-372が壊していた場合は、SK-372埋没途中の状況をSD-319底面と誤認したことになる)。SD-204に切られる付近の底面2箇所がピット状に深く、溝底からの深さは北側穴が41cm、南側穴が28cm。断面C-C'では南側の溝上端が不明瞭で、覆土7層と同質の土が遺構外まで続く。

[覆土] 自然埋没状で、テフラと見られる白色粒を含む層が多い。遺物は、全域からやや多く出土している。

[遺物および出土状況] 古墳中期後葉の初現的な模倣杯がある(2)。残存度が高い2と3の遺物出土状況は北側が高いので、北から流れ込んだ覆土3層の上に流入した可能性がある。図示以外の土師器合計48片・354gの内訳は、杯13片・88g、高杯11片・15g、壺甕類24片・251g。SI-34から混入したとみられる土師器長胴甕破片も少量ある。また、縄文早期の条痕文土系器片(『東谷・中島地区遺跡群10』の第37図113・121・122)や、磨製石斧未製品(本書の第10図12)も混入していた。

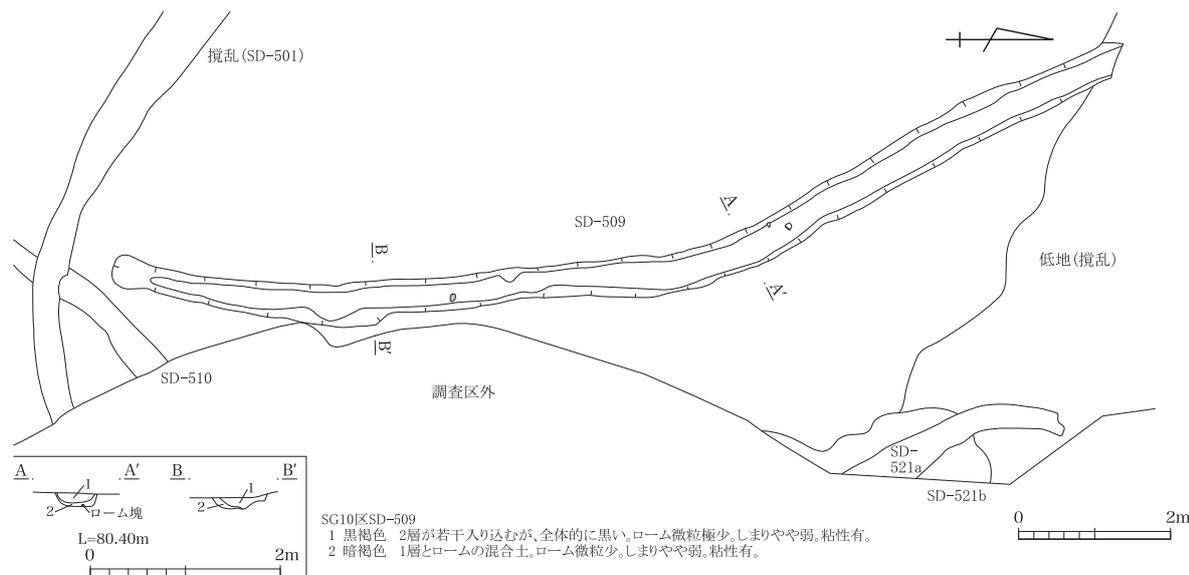


第170図 権現山遺跡 SG10区 SD-319 遺構・遺物

第101表 権現山遺跡 SG10区 SD-319 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 12.0 高 残 7.9 最大 14.7	外面は肩部ヨコヘラナデ後に体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後に頸部ヨコヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。外面胴下位に不規則な範囲で煤が付着。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・ 透明粗～細粒少 軟質	底上11～15cmが接合 口5/12周、胴全周 1、2、7
2 土師器 杯	口 13.3 高 5.9 底 4.5 最大 14.4 重 337.2	外底面は中央が凹んだ状態で外周をヘラケズリ、底面の範囲は不明瞭。外面体部ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は底部に円周方向のヘラナデ、体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	7.5Y8/4・10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 赤粗粒と黒・透明 粗～細粒と白細粒やや多、 白・灰色粗粒少 やや硬質	底上6cm 完形 4
3 土師器 小形甕	口 11.4 高 10.6 底 6.0 最大 13.3 重 残 486.3	外底面ナデ後、出ている部分だけを軽くヘラケズリし、中央がわずかに凹む。外面は口～肩部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの後に、底部多方向・体部縦位・肩部横位のヘラミガキ。外面上位に煤が付着し、中位以下が被熱している可能性が高い。内面は暗褐色で、使用による汚れかどうかは不詳。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白粗～細粒多、 黒・透明粗～細粒少 やや硬質	底上5～15cmが接合 口11/12周、胴全周、 底2/3周 2、8

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第 171 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-509 遺構

SG10 区 SD-509 (第 171 図、写真図版 130)

〔位置〕 SG10 区北部の 20-20 と 21-19・20 グリッドにまたがる。溝の北端部は、東側から湾入してきた低地部へ入り、その先が確認できなくなる。この低地部に下りる通路として古墳時代の SD-534・535 が取り付けられている。低地の北側にある古墳中期の SD-527 と関連する可能性や、南側で時期不明の SD-510 と合流していた可能性もある。重複する遺構はない。

〔規模と形状〕 幅 34～59cm、残存する深さは 4～12cm。底面は中央部が高く北端と南端へ向かって傾斜し、底面標高は中央部で 80.12m、北端で 80.05m、南端で 79.99m。

〔覆土〕 自然埋没状で、テフラの層や粒は見られない。

〔出土遺物〕 図示できる遺物はない。出土した土師器合計 39 片・232g の内訳は、杯 16 片・54g、高杯 3 片・11g、壺甕類 20 片・167g。古墳後期になりそうな遺物はなく、古墳中期の遺物であるように見られる。他に、縄文早期土器(『東谷・中島地区遺跡群 10』の第 36 図 79) や縄文時代石器も混入していた。

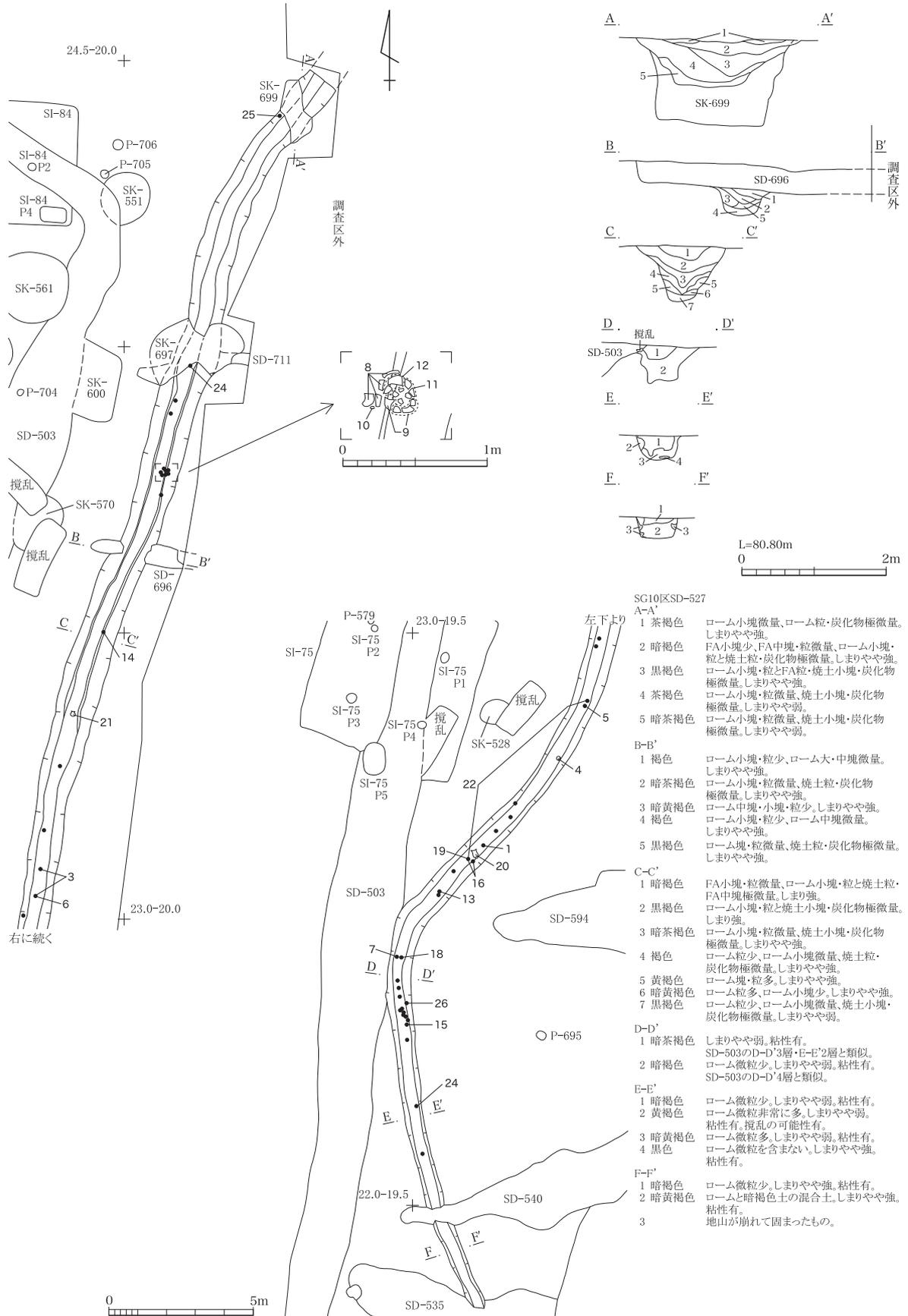
SG10 区 SD-527 (第 172・173 図、写真図版 130・131・173・210・211)

〔位置〕 SG10 区北部の 21-19 から 24-20 グリッドまで延びる。Hr-FA テフラ降下前の古墳中期に、集落東端を区画した溝の可能性を持つ。

SD-527 の北端は、調査区のすぐ外で、低地へ向かって落ちる斜面まで掘り抜いていたと考えられる。SD-527 の南端部は、東側から湾入してきた低地部へ入る。この低地部に下りる通路として、古墳時代(後期?) の SD-535 と古墳中期末の SD-540 がある。この SD-535・540 が SD-527 の南部を切る。SD-540 との関係は、SD-527 (途中まで埋没した状態) → SD-540 → Hr-FA テフラ降下 → SD-540 底部掘り直し、という順になる。SD-527・540 の最終埋没期は、Hr-FA テフラ降下後の古墳後期前半であろう。SD-535 や低地よりも南側では、古墳時代の SD-509 が SD-527 と連続する可能性もある。

縄文時代の SK-697・699 を SD-527 が切り、SD-527 が古墳時代の SD-696・SD-711 と近世の SD-503 (断面 D-D') に切られる。SK-697 (縄文時代) → SD-527 → SD-711 → Hr-FA テフラ降下、の順で SD-711 が SD-527 の覆土下部を切り、SD-711 と SD-527 の覆土上部は FA テフラを含む同種の層で埋没している。

〔規模と形状〕 溝幅は約 70～140cm (北部で幅 100～120cm、中央部 120～140cm、南部 70～100cm、南端部 40～70cm)。遺構確認面標高が高い北部で深く、残存する深さは北端部で約 50cm、南端部で約 20～25cm。底面は特定方向に傾斜を持たず、底面標高は南端で 80.07m、中央部で 80m 前後 (X24



第172図 権現山遺跡 SG10区 SD-527(1)遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区

付近 =79.93m、X23 付近 =80.01m、X22 付近 =80.06m)、北端で 80.03m。

[覆土] 埋土は自然埋没である。中央部 (D-D' の北側付近) と北部 (断面図 A-A' の 2 層と C-C' の 1 層) では、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラが最上部に入る。テフラ塊がまとまって入る状況で、遺構確認面付近でよく認められた。遺物の大半は FA よりも下層にある。ただし、7・18・24 は FA 混在層、8～12 と 17 は FA 混在層よりも上で出土した。

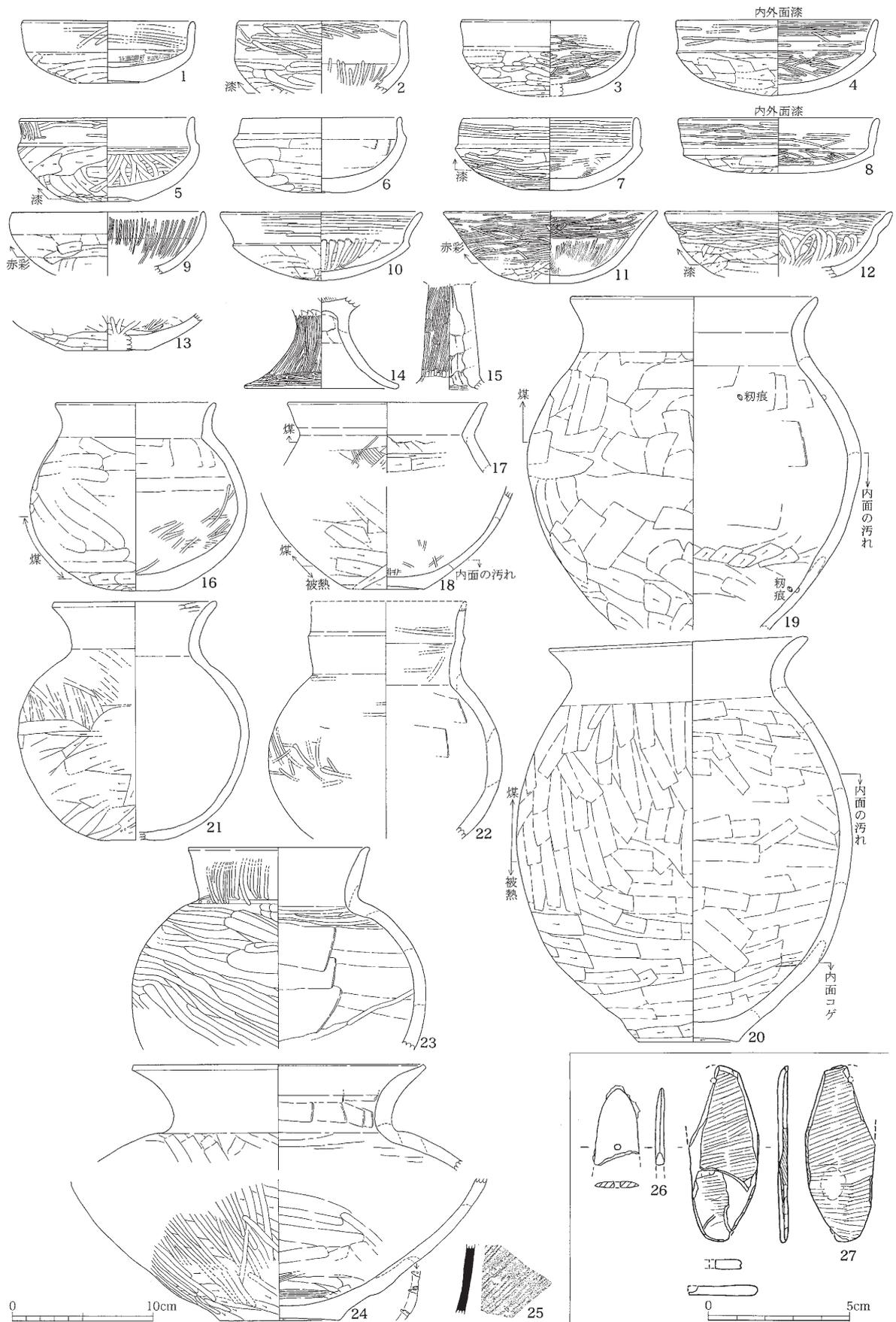
[遺物出土状況] 4・20・21 は残存度の高い遺物が底面上 40～50cm レベルに廃棄されている。北部では溝底面より上 70cm レベルに遺物 8～12 がまとまる。ただし、8・10 に接合する破片は底上 30cm レベルにもある。南部では、断面 D-D' 付近で底面上 30～40cm に遺物がややまとまり、自然礫も多く含むが 7 のように残存度の高い土師器もある。これらの他にも、全域に遺物がある。残存度の高い遺物が廃棄されたようなものが目立つ。

[出土遺物] 溝としては遺物が多く、中期末の土師器が主体である。2・4・5・7・8・12 は漆仕上げの杯として早い時期の例。後期前半の赤彩杯 (9・11) や浅い杯 (8・10) も少し含む。高杯は短脚化しつつある (14・15)。24 は胴部の接合面に刻みを入れている。稲粃圧痕のある土師器 (19) は、SG10 区 SI-50 などに例がある。石製模造品の剣形品 (27) は SG10 区 SI-2 などに例がある。有孔の鉄鏃 (26) は、SG10 区 SI-106 と同種の短柄鏃か、または無柄鏃の破片。25 は南方へ遠く離れた平安時代の SK-235 などにある須恵器甕と同一個体で、後世の混入遺物。図示以外の土師器合計 288 片・2,861g の内訳は、杯 67 片・328g、高杯 13 片・94g、壺甕類 194 片・2,219g、甌 14 片・220g。縄文早～後期と弥生中期の土器も混入していた (『東谷・中島地区遺跡群 10』第 36～40 図 41・118・119・137・156・186・193・197・199・213・224・245・252、第 42 図 38・43・49・71)。

第 102 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-527 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.0 高 4.4 底 5.0	外底面は 1 方向ヘラケズリで少し凹底状。外面体部ヨコヘラナデ。外面口縁部と内面はナデ後にヨコヘラミガキ。 [注記]21、22.5,23-19.5、22.5,23-19.5 一括、23.5-?(? 以下不明)	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・透明細粒少 やや軟質	南部底上 35cm 口 1/2 周、底全周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復 11.6 高 残 5.1 最大 復 12.2	外面は体部にヘラケズリ後、幅の広いヨコヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後、内面上半と外面をヨコヘラミガキ。内面の体部はナデまたはヘラナデ後に縦～斜位のヘラミガキ。内外面全体に黒色付着物があり、漆仕上げと見られる。	5YR6/8 橙 緻密 白・透明細粒少 やや硬質	中央部 (C-C' と D-D' の間) 口 1/4 周、体 1/3 周 22.5-19.5 一括、22.5,23-19.5 一括
3 土師器 杯	口 復 12.3 高 残 5.4 最大 復 12.6	外面は体部ナデ後ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体～底部をナデまたはヘラナデ、口縁部ヨコナデ、底部に 1 方向と口～体部に横位のヘラミガキ。 [注記]32、33、22.5,23-19.5 一括	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 赤粗～細粒と白・黒細粒少 やや硬質	北部底上 42～50cm が接合 口 1/12 周、体 1/3 周 注記は左欄
4 土師器 杯	口 14.0 高 5.3 最大 14.2 重 257.2	外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に 1 方向または多方向、体部に横位の密なヘラミガキ。内外全面に黒色付着物があり、漆仕上げと見られる。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや軟質	南部底上 37cm 完形 25
5 土師器 杯	口 復 12.2 高 5.9 底 4.0 最大 12.7	外底面はヘラケズリで抉って凹底にする。外面体部は横位と斜位のヘラケズリ。内外面口縁部はヨコナデ後、外面に少しヘラミガキ。内面は体部に斜位、体部上端に横位の密なヘラミガキ。外面体部以上と内面全体に漆仕上げ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 軟質	南部底上 36cm 口 1/3 周、体 1/2 周、 底全周 27
6 土師器 杯	口 11.2 高 5.3 最大 12.1	外底面はナデまたはコビオサエでわずかに凹む。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内外面が磨耗気味なので調整が不明瞭。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	南部底上 42cm 口 1/3 周、体全周 32、22.5-?(? 以下不明)
7 土師器 杯	口 12.2 高 5.1 底 4.1 最大 13.1	外底面は円周方向ヘラケズリで、体部との境は弱い稜。外面体部はヨコヘラケズリ後に密なヨコヘラミガキ。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に密なヨコヘラミガキ。外面上半と内面全体をおそらく漆仕上げと思われ、暗褐色が各所に残っている。	10YR6/4 明黄褐 やや緻密 白・黒・赤・透明細粒少 やや硬質	南部底上 45cm (FA 混在層) 口全周、底 1/2 周 49
8 土師器 杯	口 復 13.9 高 3.9 最大 復 14.1	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキで、外面は密に磨く。内面は体部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外全面に漆仕上げ。 [注記]39、41、23.5-20.0 一括	2.5Y5/2 暗灰黄 やや緻密 白・透明粗～細粒と黒細粒少 やや軟質	北部底上 30cm の 2 片と底上 67cm (FA 上) の 2 片が接合 口 1/3 周 注記は左欄
9 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.4 最大 復 13.8	外面体部は上半ナデと下半ヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部を放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面全体を赤彩。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒やや多、 赤・灰色・透明粗粒少 やや硬質	北部底上 69～72cm が接合 (FA 上) 口 5/6 周 42、44、47、23.5-20.0 一括
10 土師器 杯	口 復 14.2 高 4.8	外面は底部ヘラケズリと体部ナデ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面の体部はヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。 [注記]40、23.5-20.0FA 上	5YR5/6 明赤褐 緻密 黒粗粒と白・黒・透明細粒少 やや軟質	北部底上 31cm の 1 片と FA より上層の 6 片が接合 口 1/4 周 注記は左欄

第8節 古墳時代の溝状遺構



第173図 権現山遺跡 SG10区 SD-527(2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

11 土師器 杯	口 15.0 高 5.2	外底面に多方向と外面体部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後に外面上半ヨコヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部に放射状ヘラミガキ。ヘラミガキの単位がやや細い。外面中位以上と内面全体を赤彩。	2.5YR4/8 赤褐 やや緻密 白細粒多、灰色粗粒と黒・透明細粒少 やや軟質	北部底上 69cm (FA 上) 口全周、底 1/2 周 47、23.5-20.0 一括
12 土師器 杯	口 復 15.8 高 残 4.6 最大 復 16.0	外面は体部ナデ後ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後口～体部上位にヨコヘラミガキ。内面は口縁部ヨコヘラミガキ後に体部を放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面全体に漆仕上げ。	7.5YR6/6 橙 緻密 赤粗粒と白・黒・赤細粒少 やや軟質	北部底上 67cm (FA 上) 口 7/12 周 43、23.5-20.0FA 上、 23.5-20.0 一括
13 土師器 杯	高 残 2.5 底 復 6.0	外底面は 1 方向ヘラケズリで平底にする。外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部は斜～横位ヘラケズリの後にタテヘラミガキ。	5YR4/6 赤褐 緻密 赤粗～細粒と白・透明細粒少 やや硬質	南部底上 39cm 底 1/3 周 19、22.5-23.19.5 一括、 23.7(?) 以下不明)
14 土師器 高杯	高 残 6.2 脚裾 10.8	外面は脚柱部タテヘラケズリ後タテヘラミガキ、脚裾部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は脚柱部ナデ、脚中位ヨコヘラナデ後、脚内面全体をヨコナデ。杯底部内面は 1 方向の密なヘラミガキ。	10YR5/4 にぶい黄褐 緻密 白・黒・透明細粒やや多、白・黒・赤粗粒少 やや硬質	北部底上 51cm 脚柱全周、脚裾 5/6 周 37
15 土師器 高杯	高 残 7.3	外面は 8～9 本 /cm の細かいタテハケを上から下へ施し、脚柱部下端に少しだけタテヘラナデ。内面は粘土紐を輪積み状に積んでから絞ったために縦皺が多く生じる。脚裾部内面はヨコハケ。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・灰色細粒多 硬質	脚柱上 38cm 脚柱全周 4
16 土師器 小形甕	口 11.2 高 13.3 底 4.4 最大 15.2	外面は体部ナデ後に底部を多方向ヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後、主に下半部をナメヘラミガキ。内外面の口縁部をヨコナデ。外面の体部中～下位に煤がやや多く、底部の被熱痕は不明。 [注記]17、18、22.5.23-19.5 一括、22.60-19.60 上面、一括	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・黒・赤・透明粗～細粒やや少 やや軟質	南部底上 39～44cm と 遺構確認 口 2/3 周、底全周 注記は左欄
17 土師器 甕	口 復 14.0 高 残 5.0 最大 復 14.9	外面は肩部ナメヘラケズリとナメヘラケズリ、口～頸部ヨコナデ。内面は肩部ナメヘラナデとヨコヘラケズリ、口～頸部ヨコナデ。外面口縁部に煤が少量付着。 [注記]23.5.24-20.0FA 上、24.0-20.0FA 上一括、23.5.24-20.0(?) 以下不明)	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・赤・透明粗～細粒やや多 硬質	SD-696 重複部分付近以 北で FA 層より上 口 1/3 周 注記は左欄
18 土師器 甕	高 残 7.2 底 5.2 最大 復 17.5	薄く軽いので、成形過程で外面全体を削っていると思われる。外底面は弱い凹底状でヘラナデまたはヘラミガキ。外面胴部ヘラナデと下端ヘラケズリ。内面はヘラナデ後ヘラミガキと思われるが、剥落が酷いので不明確。底部の外面が被熱して内面に黒褐色の汚れが見られ、胴部の外面に煤が付着する。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明粗～細粒多、赤・灰色粗～細粒少 軟質	南部底上 42cm (FA 混在層) 底全周 50、22-19
19 土師器 甕	口 17.1 高 残 23.5 最大 23.3	外面は下位ナメヘラケズリ、胴部ヘラナデ。内面は体部ヨコヘラナデ、体部下位をナメヘラケズリ。内外面の口～頸部ヨコナデ。内面の肩部 2 箇所と下位 1 箇所に稲稈痕があり、胎土中に混和されていたと見られる。外面上位に煤が多く、内面下半が暗褐色に汚れる。 [注記]17、22.60-19.60 上面、22-19(?) 以下不明)	7.5YR6/4 にぶい橙 粗い 白・黒・透明粗～細粒多、赤粗粒少 やや軟質	南部底上 39cm。22.6- 19.6 グリッド遺構確認 口 1/2 周、頸 1/2 周 注記は左欄
20 土師器 甕	口 18.1 高 28.1 底 7.0 最大 23.6	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。内外面の胴部はヘラナデで、胴下位の積み上げ休止面付近をヨコヘラケズリで薄くする。外面胴下端ヘラケズリ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面上半に煤付着、外面下半に被熱赤化、内面下位にコゲ、内面中位に暗褐色の汚れ。 [注記]16、17、22.60-19.60 上面、23.5.24-20.0FA(?) 以下不明)	7.5YR8/6 浅黄橙 粗い 白・黒・透明粗～細粒多、白礫少 軟質	南部底上 39～40cm。 22.6-19.6 グリッド遺構 確認 口 5/6 周、底全周 注記は左欄
21 土師器 壺	口 11.6 高 16.8 最大 16.2 重 残 846.1	外底面は多方向ヘラケズリで平底。外面は胴部上半ナメヘラナデ後に中位以下を横～斜位ヘラケズリ。口縁部は内外面ともにヨコナデで、内面はヨコヘラミガキをしている可能性あり。内面全体の器面が剥落して調整が不詳。	7.5YR7/6 橙 緻密 白粗～細粒やや少、赤・透明粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	北部底上 48cm 口 2/3 周、頸全周 36、22.5-19.5 一括
22 土師器 壺	高 残 16.2 最大 復 16.4	外面頸部中位の段と内面頸～胴部境の稜が明確。外面は胴部に横～斜位のヘラミガキ、口～頸部にヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ、口～頸部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。口縁端は欠損しているが、薄くなって終わるものと見られる。内外面の器面が磨滅して調整が不明瞭。	5YR6/6 橙 やや粗い 白細粒多、赤粗粒と白・黒・透明細粒少 やや硬質	南部底上 39～42cm が 接合 頸全周、胴 1/3 周 17、28、一括、22.5.23- 19.5 一括
23 土師器 壺	口 復 12.6 高 残 14.2	外面は胴部に斜～横位の幅広いヘラミガキ、口～頸部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデと主に頸部をヨコヘラミガキ。内面の口～頸部にミガキを行っているかどうかは器面が荒れているので不詳。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白・赤粗粒と白・黒・赤細粒少 やや軟質	SK-697 重複部分付近より 北側 口 2/3 周、頸 5/12 周 24.0-20.0 表採周辺一括
24 土師器 大形壺	口 復 20.1 高 残 17.4 底 8.4 最大 残 29.2	胴部破片が非常に少なく、肩～底部までの間は復原できない。胴部下位の積み上げ休止面にヘラで刻みを入れた後に上部を成形している。外底面は多方向ヘラケズリで中央が緩く凹む。外面は胴部下位にナメヘラケズリ後タテヘラミガキ、肩部ナメヘラケズリ、口～頸部ヨコナデ。内面は胴部下位ヨコハケおよびヨコヘラナデ、肩～頸部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面の口端がわずかに上へ出るが、場所によっては不明確。 [注記]22.0-19.5、24.0-20.0 表採周辺一括、23.9 付近埋土中、23.9 付近上面、SK-697 1	2.5Y6/2 灰黄 やや緻密 白・黒・透明粗～細粒多、白・赤粗粒少 軟質	底上 66cm (FA 混在層)。X22～24 間に同一 個体 口 11/12 周、頸全周、 底 2/3 周 注記は左欄
25 須恵器	高 残 4.4	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で縦位または斜位の平行叩き。内面は無文で、おそらく無文当具を使用している。SK-235 等で出土している破片と同一個体。平安時代の遺物が混入。	2.5Y3/1 黒褐 緻密 白礫～粗粒と赤・黒色湧出粒少 硬質	北部底上 30cm 48
26 鉄製品 鉄鏃	長 残 2.7 幅 残 1.6 厚 0.23 重 残 2.2	図示した面に比べて反対面の丸味が少ないので、やや丸造りになる。孔は 1 箇所あり、X 線写真で観察した径は 2.0～2.5mm。有機質の痕跡等は認められない。無柄鏃(無茎鏃)または短柄鏃(短茎鏃)の破片。		南部底上 32cm (確認面 付近)
27 石製模造品 剣形品	長 6.2 幅 残 2.4 厚 3.5 孔 1.7mm 重 残 8.55	平坦で鑄を持たない。両面ともそれぞれ 1 方向に研磨する。側面調整は、図示した長側面の中央で斜方向の研磨、左下の側面では縦方向の研磨を確認できる。他は側面研磨が不明か、または切削工具で成形したままの状態。孔は径 1.50mm の 1 孔だけで、左図の面から穿孔し、裏面に小さな穿孔剥離を生じる。	5G1.7/ 緑黒 緻密で節理が発達した緑泥片岩	SK-697 より北側で FA より下層の 2 片が接合 左図の表面下半と左側 縁が剥離破損 24.0-20.0FA 下

SG10 区 SD-533 (第 174 図、写真図版 131)

[位置] SG10 区北部の 21-19 グリッド。東側にある古墳時代の SD-534 と連続していた可能性がある。

[規模と形状] 幅 26～37cm、残存する深さは 4～5cm で、底面標高は 80.3m。

[覆土] 単層で、ロームと黒色の混合土なので人為的に埋め戻した可能性もあるが、残っている深さが非常に浅いので断定はできない。SD-540 のようなテフラは見られない。

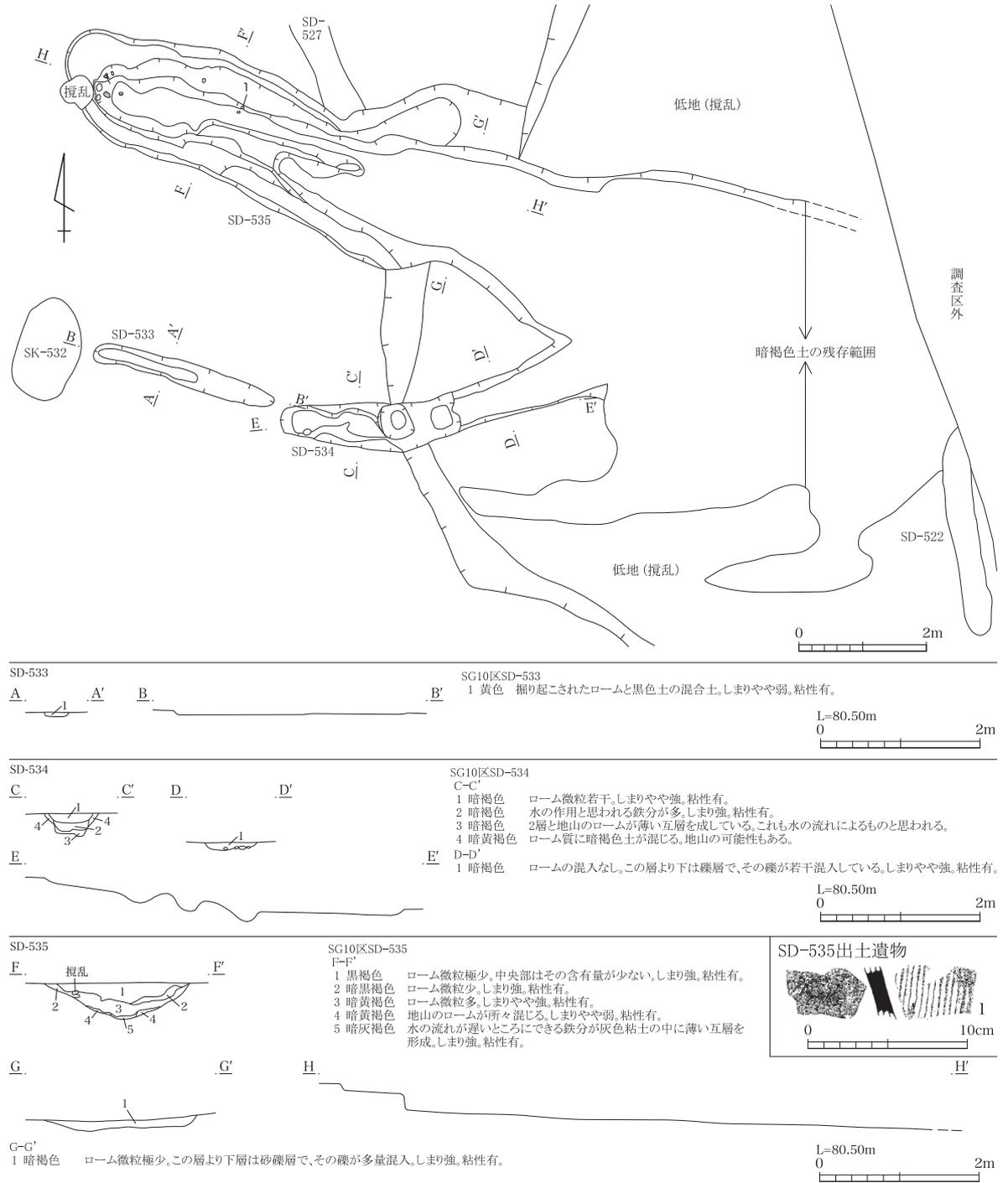
[出土遺物と性格] 遺物はない。SD-534 に連続する可能性から、古墳時代の溝と考える。

SG10区SD-534 (第174図、写真図版131・132)

〔位置〕 SG10区北部の21.5-19.5グリッド所在。東側低地部で古墳時代のSD-535へ合流する。また、西にある古墳時代のSD-533と連続していた可能性がある。

〔規模と形状〕 底面が凹凸状になりながら、東側の低地へ向かって下る溝。低地部に降りる通路として作られた可能性が高い。北側のSD-535・540・594と形状が似る。幅41～92cm、残存する深さは6～46cm。底面標高は、西端部で80.26m、東端にある最も深い窪みの底で79.77m。

〔覆土〕 地山の可能性がある南北両側の4層を除外すれば、自然埋没状である。下半は鉄分を含む水成堆積



第174図 権現山遺跡 SG10区 SD-533・534・535 遺構 SD-535 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

と考えられる。SD-540 のようなテフラは認められない。SD-534・535 の東端部を埋める暗褐色土 (B-B' の 1 層) が東側の低地部まで広がっている範囲を図に示した。

[出土遺物と性格] 遺物はない。SD-540・594 などと類似するので、これも古墳時代 (中期?) の遺構と推定した。

SG10 区 SD-535 (第 174 図、写真図版 132)

[位置] SG10 区北部の 21-19 グリッド。東側低地部で古墳時代の SD-534 と合流する。古墳中期末の SD-527 の南端部を切る。調査区東端の低地部にある時期不明の溝 SD-522 との新旧関係は不明。

[規模と形状] 南側の SD-534 や、北側の SD-540・594 と形状が似る。ただし底面が凹凸面にならない点が、これらの溝と異なる。低地部に降りる通路として作られた可能性が高い。西部では幅 170～190cm で、東部では幅 2.8m まで広がり、SG10 区の東側から湾入する低地部へ続く。残存する深さは西部で 32cm、東部で 54cm まで深くなり、底面が東へ傾斜する。底面標高は西部で 80.05m、東部で 79.80～79.84m。平面図に示したように弱い段状に見えるが、土層断面 (A-A') では溝を掘り返した状況は認められなかった。

[覆土] 自然埋没状で、最下層は鉄分を含む水成層。SD-540 のようなテフラは認められない。SD-534・535 の東端部を埋める暗褐色土 (G-G' の 1 層) が、東側の低地部まで広がる範囲を図に示した。

[出土遺物] 遺物はごく少ない。図示した須恵器甕破片 (1) は内面の当具痕跡を磨り消していると考えられ、古墳時代中期の遺物である。SD-594 に比べて遺物が少ないのは、上部を削平されたためかもしれない。図示以外の土師器合計 27 片・145g の内訳は、杯 13 片・40g、壺甕類 14 片・105g。

第 103 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-535 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 甕	高 残 3.2	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で深い平行叩き。内面は横位のナデで当具痕は確認できない。	N6/(B) 灰 やや緻密 白粗～細粒やや少、 黒色湧出粒少 硬質	底土 38cm 1

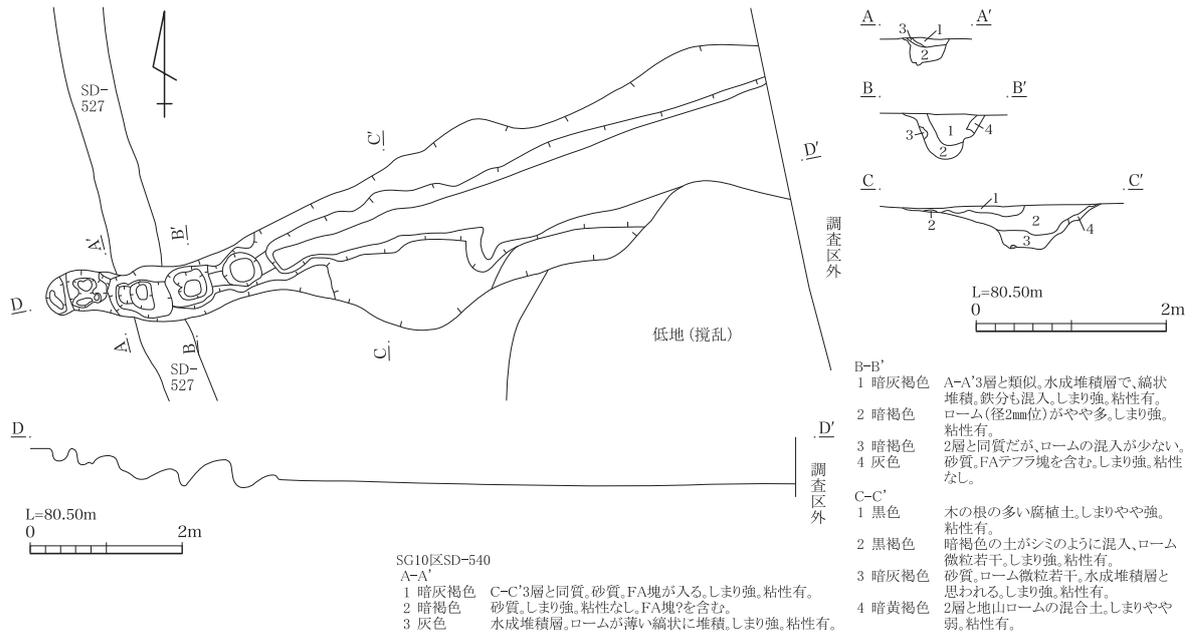
SG10 区 SD-540 (第 175 図、写真図版 132・133)

[位置] SG10 区北部の 22-19 グリッド。古墳中期末の SD-527 の南部を切る。先行する SD-527 の覆土上部にも古墳後期初頭に降下した Hr-FA と考えられるテフラが堆積していて、SD-527 (途中まで埋没した状態) → SD-540 → テフラ降下 → SD-540 (底部掘り直し) の順になる。

[規模と形状] 南側の SD-534・535 や北側の SD-594 と形状が似る。低地部に降りる通路として作られた可能性が高い。幅 55～210cm で、溝の西部では底面に凹凸があり、西端部では凹凸の高低差が小さく (9～14cm)、東へ行くと高低差が大きくなる (22～38cm)。残存する深さは、西部では底面の窪みを除くと 8～9cm (窪みを含めると 22～47cm) で、東部では 30～41cm。凹凸のある西部は東の低地へ降りてゆく (D-D' 図左半)。東へ降りた後は凹凸や傾斜がなくなり、その底面は地山の礫混じり層になる (D-D' 図右半)。底面標高は西部の窪み底面で 79.82～80.18m、中央部で 79.85m、調査区東端で 79.95m。

[覆土] 自然埋没状で、流水の影響による細かい砂を含む水成層。古墳後期初頭に降下した Hr-FA と考えられるテフラ塊が断面図 A-A' 上層および B-B' にみられ、C-C' 付近より東側では認められなくなる。南北両側縁にテフラ塊が多く (B-B' の 4 層)、溝中央の深い部分にテフラがない。テフラ降下後に SD-540 の凹凸状底面を掘り返して、中央部のテフラ堆積層が失われたのだろう。古墳後期初めに Hr-FA テフラが降下した後も SD-540 がしばらく機能していたと考えられる。

[出土遺物] 図示した遺物はない。SD-594 の FA テフラ上で出土した内外面赤彩の杯 (SD-594 の 10) に接合する体部片と、内外面を磨く杯体部片がある。出土した土師器合計 25 片・166g の内訳は、杯 8 片・42g、高杯 1 片・5g、壺甕類 16 片・119g。



第175図 権現山遺跡 SG10区 SD-540 遺構

SG10区 SD-594 (第176図、写真図版133・211)

【位置】 SG10区北部の22-19・20グリッドにあり、東側は調査区外まで伸びる。古墳時代中期の同種遺構として、南にSD-534・535・540がある。SD-594と同様にHr-FAテフラが入る古墳中期のSD-527が北側から西側に曲がって延びるので、SD-527の配置がSD-594を避けたか、あるいは同時に計画されたと考えられることもできる。

【規模と形状】 南側のSD-534・535・540と形状が似る。底面に凹凸面があるので、低地部に降りる通路として作られた可能性が高い。幅約100～340cm。溝の西部では底面に凹部が3箇所あり、西側の2箇所は凹凸の高低差が10～19cmで、東端の1箇所は高低差が61cm。残存する深さは、西部では底面の窪みを除くと12～18cm(窪みを含めると15～58cm)で、東部では51cm。底面が東へ傾斜し、凹凸のある西部は東の低地へ降りてゆく(C-C'図左半)。東へ降りた後は凹凸や傾斜が緩くなり、底面に地山の礫層が少し見える。底面標高は西端の窪み底面で80.25m、中央部で79.90m、調査区東端で79.79m。

【覆土】 自然埋没状で、下部は砂礫を含む水成堆積。古墳後期初頭に降下したHr-FAの可能性が高い灰白色テフラ塊が、平面図に記入した範囲で、遺構確認面付近に認められた(断面図A-A')。遺物10がFA層より上にあり、それ以外で出土位置のわかる遺物はFA層上面よりも下のレベルにある。

【出土遺物】 この種の溝(SD-534・535・540・594)のうちでは最も遺物が多い。FA層より上で出土した10は赤彩する後期初めの杯で、SD-540出土破片と接合した。これ以外は、内外面をよく磨く古式の模倣杯がある。1の内面をケズリ調整しているのは異例である。図示以外の土師器合計250片・1,469gの内訳は、杯113片・382g、高杯9片・29g、壺甕類125片・1,011g、甑4片・47g。他に、縄文早・中・後期土器片も混入していた(『東谷・中島地区遺跡群』10の第37～40図120・202・261・265)。

第104表 権現山遺跡 SG10区 SD-594 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復14.6 高 4.8	外面は口縁部下位にナデと上位にヨコナデ、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体～底部を放射状ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒多、透 明粗～細粒と白・黒細粒少 やや軟質	底上3～15cmが接合 口1/4周 12、14、28
2 土師器 杯	口 復14.2 高 4.8	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は磨耗して調整不詳。	5YR6/6 橙 やや粗い 黒・透明細粒少 やや軟質	口5/12周

SG10区 SD-696 (第177図右上、写真図版133)

[位置] SG10区北部の23-20グリッドにあり、東側は調査区外まで伸びる。古墳中期のSD-527の上部を切る。

[規模と形状] 調査区東端に接する北東部は調査できなかった部分がある。幅45～74cm、残存する深さは25～41cmで、底面が東へ傾斜し、底面標高は西端で80.41m、中央部で80.31m、調査区東端で80.18m。

[覆土] 自然埋没状の堆積で、古墳後期初頭に降下したHr-FAの可能性が高い灰白色テフラの粒や塊が覆土各層に認められた。先行するSD-527の上部にも同種のテフラが見られるので、SD-527を切るSD-696に二次流入した可能性がある。また1層に白色軽石粒が含まれると記録され、FA粒とは記載されていないので、縄文草創期の七本桜軽石などが地山から二次的に流入したことが考えられる。

[出土遺物] 図示できる遺物はない。出土した土師器は、甕1片・16gのみ。

SG10区 SD-711 (第177図中段、写真図版134)

[位置] SG10区北部の23.5-20.0グリッドにあり、東側は調査区外まで伸びる。縄文時代のSK-697と、古墳中期のSD-527の覆土下部を切る。SK-697→SD-527→SD-711の順序になる。SD-711とSD-527の覆土上部は同種の層で埋没している。古墳後期初めのHr-FAテフラが覆土中位に降下しているため、SD-527と711は古墳中期後葉の溝と推定される。

[規模と形状] 中央部はSD-527を先に掘り下げてしまったので、平面図は東側と西端だけしか図化できていない。溝の西先端がトンネル状に横へ22cm掘り進んで終わっていることや、途中まで埋まりかけたSD-527を横切って掘られている点から見て、SD-711を東側低地へ降りる通路状遺構と考えることは難しい。西側は幅10～47cm、東側は幅37～42cm、残存する深さは西側で44cm、東側で29cm（東端部は低地に近いために遺構確認面が低いので、計測値が浅くなる）。底面標高は東側で80.16～80.25m、西側で80.22～80.25m。

[覆土] 自然埋没状で、SD-711とSD-527の覆土上部は同種の層で埋没している（断面図A-A'の2層と4層）。古墳後期初めに降下したHr-FAテフラの塊や粒が中位以上に認められる（断面A-A'の4層以上、断面B-B'の3層以上）。テフラが降下した層準はA-A'の4層と考えられる。

[出土遺物] 図示できる遺物はない。出土遺物は、土師器高杯1片・29gと椀形杯または鉢1片・4gの計2片・6gのみである。

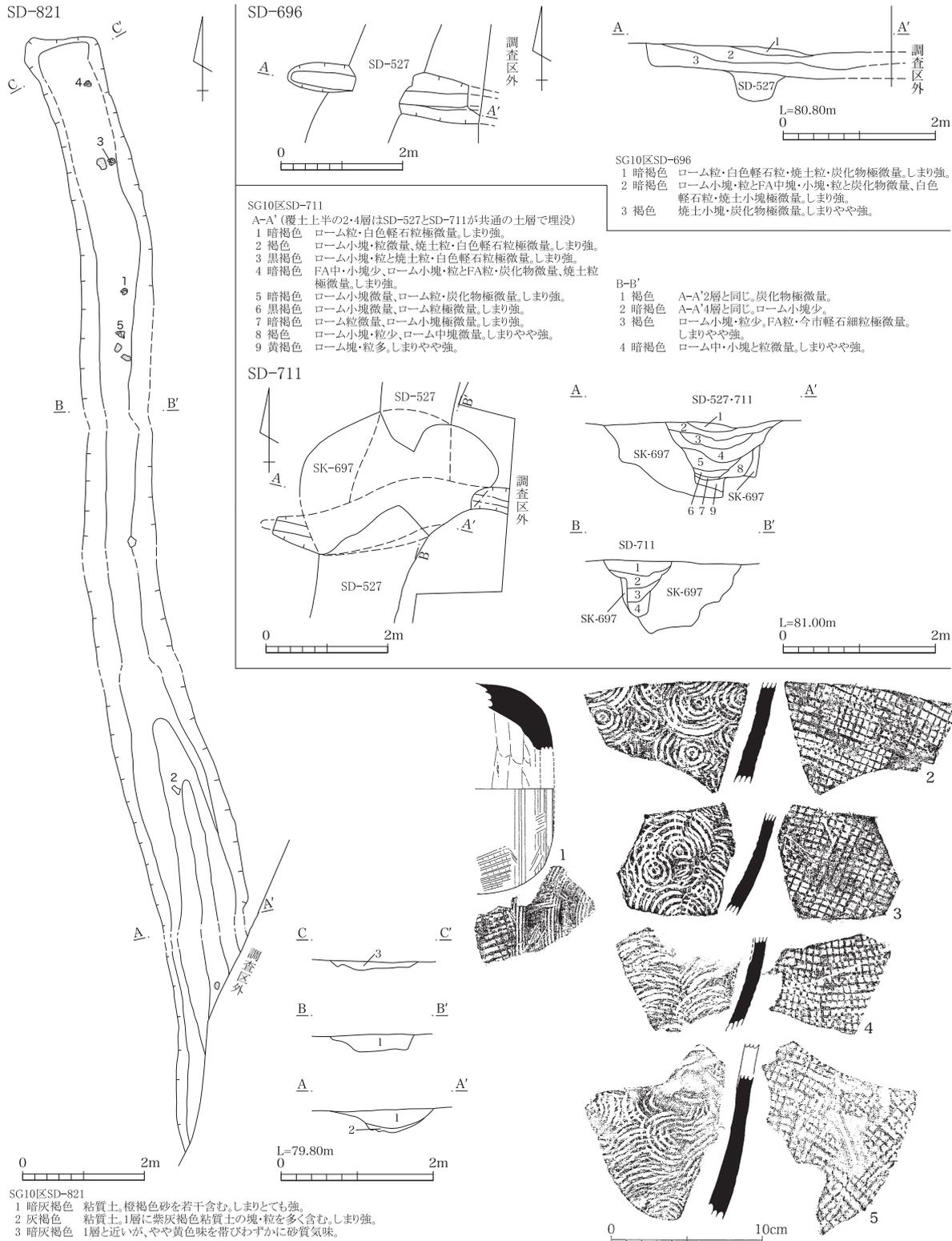
SG10区 SD-821 (第177図、写真図版134・211)

[位置] SG10区中央部東半の低地部、19-20グリッドにあり、南東は調査区外まで伸びる。重複する遺構はない。

[規模と形状] 調査区内の長さは18m以上。溝幅99～160cm、残存する深さは16～20cmで南部でやや深く、北部では浅くなって消滅する。底面が南へ傾斜し、底面標高は南端で79.24m、北端で79.40m。

[覆土] 砂を含む粘質土で自然埋没状に堆積しており、水成堆積の可能性はある。溝を掘り込んでいる地山も、低地の粘質土層（紫灰褐色粘質土）である。

[出土遺物] 1は須恵器瓶類で、提瓶か横瓶、または平底瓶の可能性はある。古墳後期末～終末期の在地産須恵器である真格子叩き調整甕の破片は同一個体である（2～5）。図示以外の土師器合計106・666gの内訳は、杯57片・197g、高杯13片・96g、壺甕類36片・373g。



第177図 権現山遺跡 SG10区 SD-696・711 遺構 SD-821 遺構・遺物

第105表 権現山遺跡 SG10区 SD-821 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 提瓶?	高 残 5.1 底 復 10.1	非常に厚いので、横瓶の端部や平底瓶の底部になることも考えられる。木目に直交する平行溝を彫った叩き板で擬格子叩き成形。端面には間隔を空けたカキメ。内面は速度の遅いナデ。端の破損部は粘土円板閉塞が外れた状態かもしれない。	7.5Y5/2 灰オリーブ 緻密 白粗～細粒やや少、白 礫少 硬質	底上 7cm 底 1/6 周 3
2～5 須恵器 甕		4片が同一個体。外面は縦横に溝を彫った叩き板で真格子叩き。内面は同心円文当具痕。表裏面は灰色になるが、全体としては淡黄色～黄灰色の軟質焼成で、三甕窯産の可能性もある。	2.5Y8/3 淡黄 N4/0 灰 やや緻密 白・透明細粒やや 少、黒細粒少 軟質	底上 11～22cm 胴部 4片 1、2、4、6

第9節 古墳時代の井戸

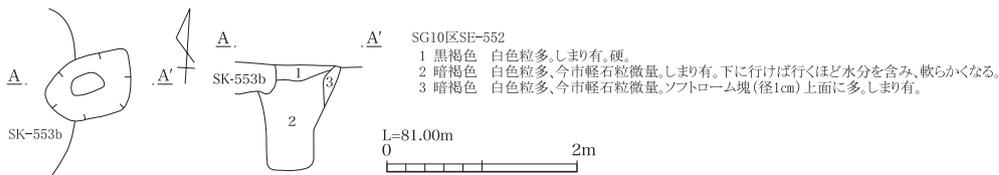
SG10区 SE-552 (第178図、写真図版134)

〔位置〕 SG10区北端部の24-19.5グリッド。古墳中期のSK-553bとSK-553aが西側へ並んで重複し、SK-553bに切られる(SE-552・SK-553a→SK-553bの順)。周辺に井戸跡はない。古墳中期の建物としてはSI-84・86が近接し、SI-115も古墳中期かもしれない。

〔規模と形状〕 断ち割らないで、底面まで手掘りで調査をおこなった。確認面で東西0.92m、南北0.67mの不整五角形で、深さ1.10m。底面標高は79.69m。確認面から南側で深さ0.6～0.7mまでは傾斜をもって断面形が漏斗状に少し細くなり、それ以下は急傾斜で筒状になる。底面は若干鍋底状の平底である。底面は長径38～40cm、短径20cmの楕円形である。

〔覆土〕 古墳時代テフラの可能性のある白色粒子が各層に多い。また縄文草創期の今市軽石粒も地山からわずかに流入している。大半を占める2層は一気に埋まったような暗褐色土で締まりがある。3層にローム塊を含む。地下水位が低い1月下旬にこの遺構を調査したにもかかわらず、2層の下部は水分を含んで軟らかい状態であった。

〔性格〕 遺物は出土しなかった。古墳時代集落内で中期の建物が多いSG10区北端部にあり、古墳時代(中期後葉以後)の土坑であるSK-553bに切られるので、SE-552も古墳時代の遺構と判断した。



第178図 権現山遺跡 SG10区 SE-552 遺構

第10節 古墳時代の円筒形土坑 (第179・180図、写真図版135・136)

栃木・茨城・福島県域で古墳中期～後期にみられる、貯蔵穴と考えられている土坑である。周辺の杉村・立野・磯岡・磯岡北・砂田・中島笹塚遺跡でも確認されている(『東谷・中島地区遺跡群』5～10・13)。

SK-210・216・217・550・551・561・571・621・674の9基が円筒形土坑と考えられ、SG10区の北端部に多い。古墳時代土坑のうちSK-211・553a・553b・600も円筒形土坑と類似した貯蔵用土坑と見られるが、平面が円形でないので円筒形土坑には含めない。SK-211は、円筒形土坑SK-210・216・217とともにSG10区南部にある。SK-553a・553b・600は、SG10区北端部の円筒形土坑群SK-550・551・561・571・621・674と同じ地区にある。各遺構の詳細は下の第106表にまとめた。

遺物が豊富なのはSK-621である。この土坑の底面上31～59cmで出土した須恵器脚付壺は、古墳時代土坑SK-553a(底面上2～11cm)およびSI-83遺構確認面出土破片と遺構間接合した。古墳後期のSI-83にとっては混入品と考えられるが、SK-621とSK-553aは同時期に埋没した可能性もある。類例としてはSG10区SI-23に古墳後期の脚付壺、SI-88に須恵器初現期の有蓋壺がある。SK-621の模倣杯には平底杯が多く(5・7・8)、高杯(13)が短脚化していて、古墳中期末と考えられる。滑石製有孔剥片もある(16)。SK-550の土師器片も中期末葉であろう。他の円筒形土坑も遺物やFAテフラとの関係から考えて古墳中期の可能性が高い。

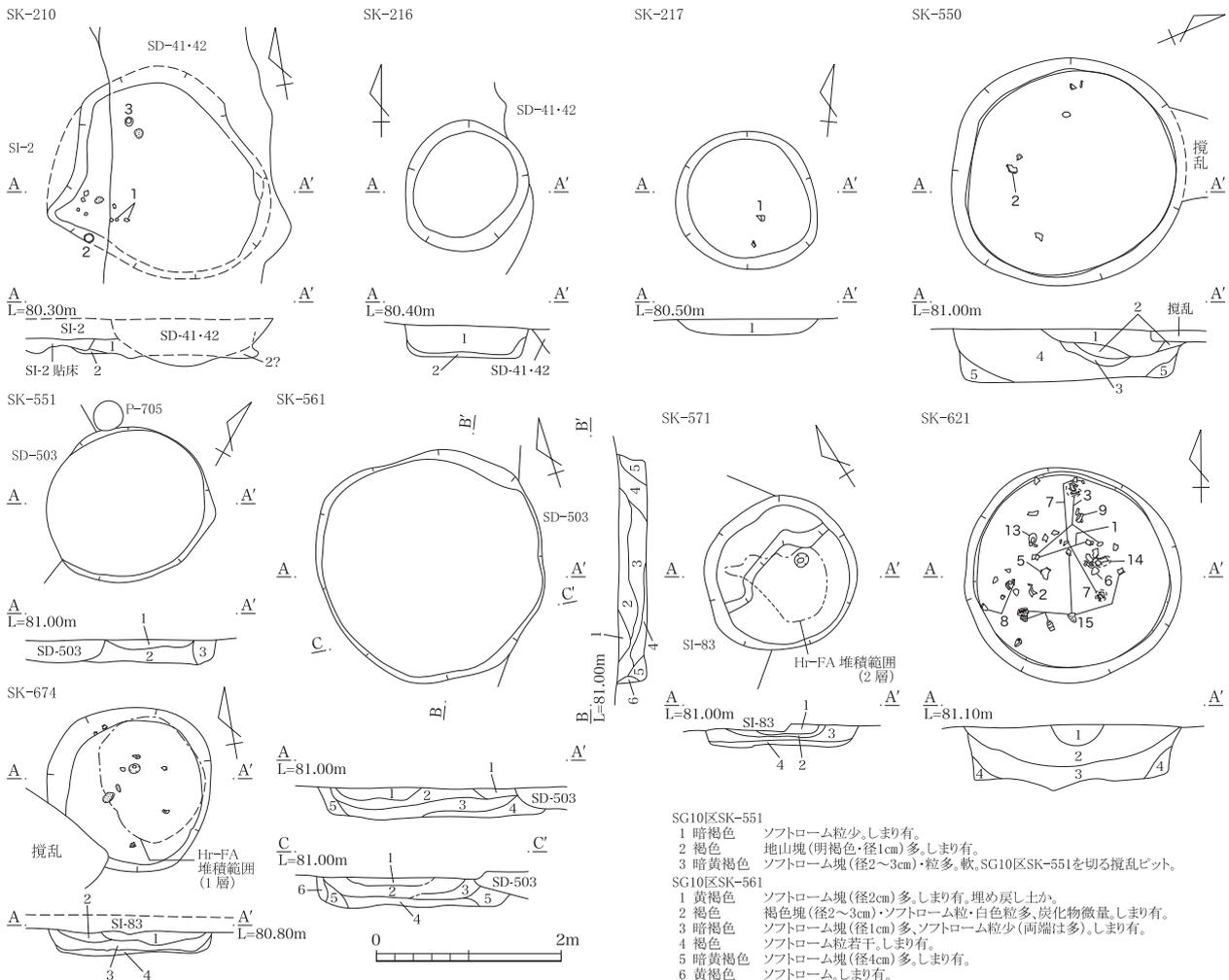
第106表 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の円筒形土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸	覆土
SK-210	17.0-18.0	円筒形	SI-2・SD-41・42より古	2.45	2.32	0.52	N-90°-E	自然埋没

古墳中期のSI-2と古墳中～後期のSD-41・42に切られる。東壁の下端部がオーバーハングする。南西部で完形の粗製小形土器が上を向いて出土した。遺物は古墳後期のSD-41・42から混入した疑いもある。

第5章 権現山遺跡 SG10 区

SK-216	17.5-18.0	円筒形	SD-41・42 より古	1.44	1.35	0.36	N-40°-E	自然埋没	白色粒あり
古墳中～後期の SD-41・42 に切られる。図示できる遺物は無い。土師器杯・高杯・小形壺・壺類の小破片から見て、古墳中期の土坑と考えられる。									
SK-217	19.0-17.0	円筒形	重複なし	1.62	1.52	0.20	N-75°-W	単層	白色粒あり
時期不明の焼土 SX-218 と同一平面上にある。古墳中期の椀形杯の底部破片が出土。									
SK-550	24.0-19.5・24.0-20.0	円筒形	長方形攪乱坑と重複	2.70	2.54	0.58	N-40.5°-W	1層は埋め戻し状	
Hr-FA 層なし。西方にある中期の SI-80 と遺構間接合する土器片が3例あるので、同時に埋没したと見られる。古墳中期後葉の土師器杯片あり。土師器以外に縄文中期土器も混入。									
SK-551	24.0-19.5	円筒形	SD-503・P-705 より古	1.84	1.70	0.30	N-66°-E		
近世の SD-503 に切られる。時期不明の P-705 にわずかに切られる。遺構が円筒形であることから時期を古墳時代と推定した。遺物は土師器壺類の小破片3点だけ出土。									
SK-561	24.0-19.5	円筒形	SD-503 より古	2.63	2.53	0.38	N-58°-W	白色粒あり	1層は埋め戻し状
近世の SD-503 に切られる。壁が内傾する大きな円形土坑。大きさは SK-550 や 621 に近く、これらの円筒形土坑と近い時期かと見られるので古墳時代と判断した。遺物は土師器壺類4片しかない。									
SK-571	23.5-19.5	円筒形	SI-83 より古	1.70	1.67	0.26	N-41°-E	自然埋没	FA 塊と白色粒あり
古墳後期の SI-83 に切られる。4層以外の覆土に Hr-FA テフラの塊と粒が入る。2層に FA が集中するので古墳中期後葉～末の遺構。遺物は土師器杯2片だけで時期不詳。縄文土器も2片出土。									
SK-621	24.0-19.0	円筒形	重複なし	2.40	2.33	0.73	N-49°-W	自然埋没	白色粒あり
重複なし。土師器杯が SK-553a 北半1層と遺構間接合。SK-553a と同一個体の須恵器脚付壺出土。遺物が多く、内傾口縁や直立口縁の模倣杯が主体で、鉢・壺類もある。									
SK-674	23.5-19.5・24.0-19.5	円筒形	SI-83 より古	1.90	1.68	0.30	N-52°-W		
古墳後期の SI-83 の床下にあり、SI-83 に上部を切られる。古墳中期の SI-115 と重複するが前後関係は不明。覆土の上部に Hr-FA テフラ層が入るので古墳中期後葉～末の遺構。遺物は土師器壺類の破片が少量だけしかない。他に縄文土器4片混入。									

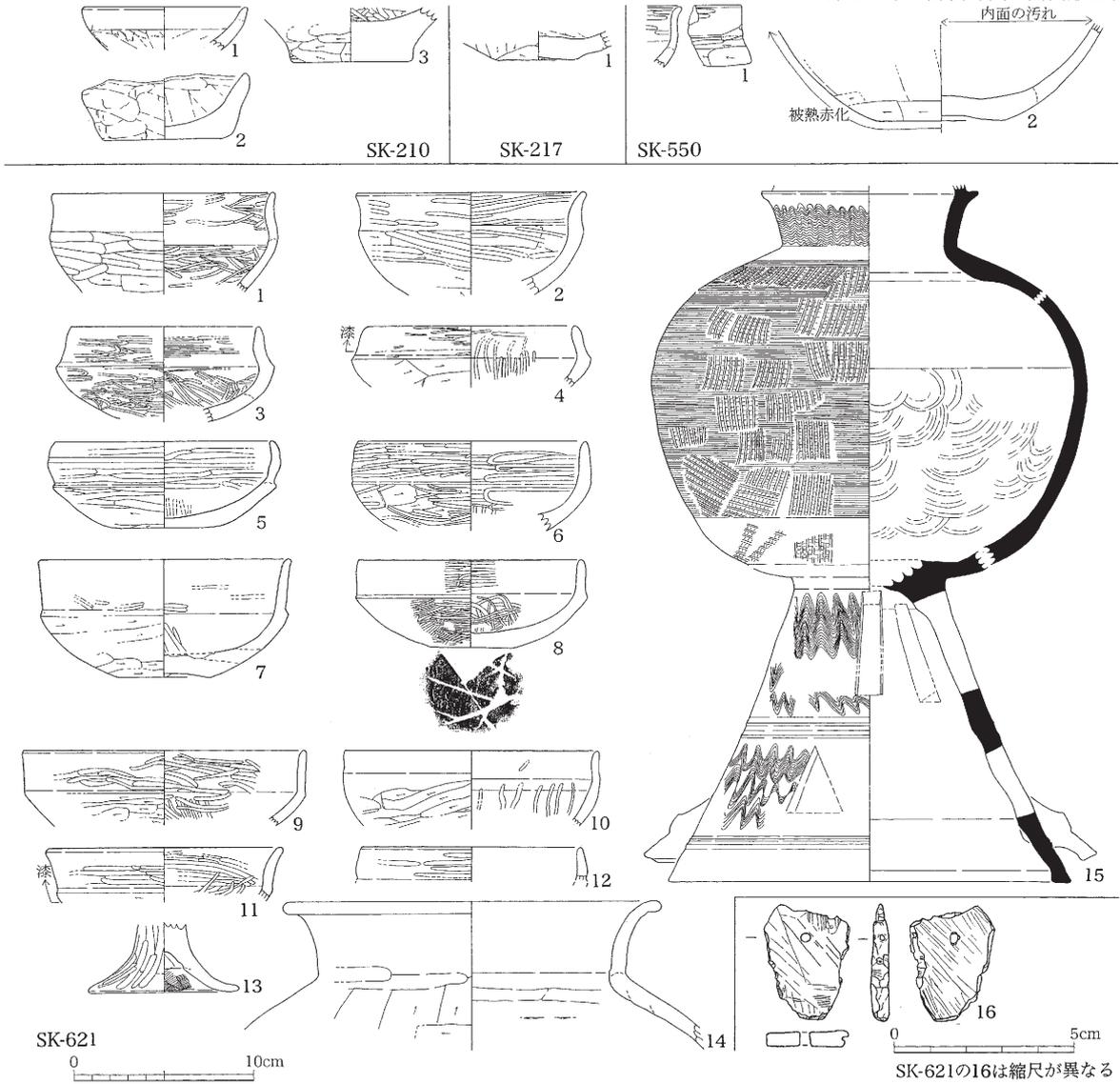


- SG10区SK-210
 1 暗褐色 ローム塊・粒若干有。硬。しまり強。
 2 黄褐色 ローム塊・粒多。ローム塊少。硬。しまり強。
- SG10区SK-216
 1 暗褐色 白色微粒やや少、ローム粒少。しまり強。
 2 黄褐色 ローム大塊・塊多。しまりやや強。
- SG10区SK-217
 1 茶褐色 ソフトローム粒・白色粒多。下面にローム塊(径1cm)やや多。しまり有。
- SG10区SK-550
 1 黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)粒多。しまり有。SK-86に見られるような埋め戻し土と思われる。
 2 褐色 今市軽石粒微量。しまり有。
 3 暗褐色 ソフトローム粒少。今市軽石粒微量。しまり有。4層より暗い。
 4 暗褐色 ソフトローム粒・褐色土塊(径2cm)多。今市軽石塊(径2cm)微量。しまり有。
 5 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)多。しまり有。

- SG10区SK-551
 1 暗褐色 ソフトローム粒少。しまり有。
 2 褐色 地山塊(明褐色・径1cm)多。しまり有。
 3 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)・粒多。軟。SG10区SK-551を切る攪乱ピット。
- SG10区SK-561
 1 黄褐色 ソフトローム塊(径2cm)多。しまり有。埋め戻し土か。
 2 褐色 褐色塊(径2~3cm)・ソフトローム粒・白色粒多。炭化物微量。しまり有。
 3 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。ソフトローム粒少(両端は多)。しまり有。
 4 褐色 ソフトローム粒若干。しまり有。
 5 暗黄褐色 ソフトローム塊(径4cm)多。しまり有。
 6 黄褐色 ソフトローム。しまり有。
- SG10区SK-571
 1 暗褐色 白色粒・ソフトローム粒多。FA粒少。軟。しまりなし。
 2 暗褐色 白色粒・ソフトローム粒・FA塊(径1cm)少。軟。しまりなし。
 3 暗褐色 褐色塊(径2cm)・ソフトローム粒・白色粒多。軟。しまりなし。
 4 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2cm)多。軟。しまりなし。粘性やや有。
- SG10区SK-621
 1 褐色 白色粒・褐色塊(径2cm)多。しまり有。
 2 暗褐色 白色粒多。褐色塊(径2cm)少。しまり有。
 3 暗褐色 白色粒・褐色塊(径2cm)多。しまり有。
 4 暗黄褐色 白色粒・ソフトローム塊(径2cm)多。しまり有。
- SG10区SK-674
 1 暗褐色 白色粒・ソフトローム粒・炭化物粒多。FA塊(径1cm)・粒少。軟。しまりなし。
 2 暗黄褐色 白色粒・ソフトローム粒多。ソフトローム塊(径2cm)少。軟。しまりなし。
 3 暗褐色 白色粒・ソフトローム粒多。軟。しまりなし。
 4 暗褐色 ソフトローム塊(径2cm)多。軟。粘性やや有。

第179図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の円筒形土坑(1) 遺構

第10節 古墳時代の円筒形土坑



第180図 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の円筒形土坑 (2) 遺物

第107表 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の円筒形土坑 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG10区 SK-210				
1 土師器 小形土器	口 復9.2 高 残2.4	外面に粘土の積み上げ痕を残し、外面体部ナデ後に口縁部内外面ヨコナデ。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒やや多 やや軟質	底直上～底上3cmが接合 口5/12周 3、4、Bベルト
2 土師器 小形土器	口 8.2～ 9.1 高底 3.6 6.9	紐積みを行った接合痕が見えないので、手捏ねで成形した可能性もある。外底面は丁寧なナデ、外面体部は雑なナデ。内面は横～斜位の雑なヘラナデと上部に軽いナデ。最大径9.3cm。重量151.7g。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・透明細粒やや 多、赤・黒細粒少 やや硬質	底上3cm 先形 2
3 土師器 鉢	高底 残3.0 6.8	円板状に突出する厚く重い平底で、底面はおおよそ1方向のヘラケズリ。外面ヨコヘラケズリ、内面底部はおおよそ1方向の密なヘラミガキ。	10YR8/4 浅黄橙 緻密 白・黒・赤細粒少 やや硬質	北部底上15cm 底全周 1
SG10区 SK-217				
1 土師器 杯	高底 残1.6 4.6	外底面は多方向ヘラケズリで弱い上げ底状。外面体部下端にタテおよびナメヘラケズリ。内面底部は多方向ヘラナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒や や多、白・透明粗～細粒少 やや軟質	中央底上5cm 底3/4周 1
SG10区 SK-550				
1 土師器 杯	口 復11～13 高 残3.4	口～体部境に稜を持たないで外反する。外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラケズリ後に上位をヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後に口縁部ヨコヘラミガキ。 [注記]SK-550 2・3層、西半分下半、SI-80 南東区	7.5YR6/6 橙 緻密 赤粗粒と白・黒・赤細 粒少 やや軟質	西半分下部の4片と2・3 層の1片。SI-80 南東区 の1片も同個体 口1/6周 注記は左欄
2 土師器 甕	高底 残5.4 6.7	外底面は中央を深く削って凹底状にし、外周を円周方向のヘラケズリ。外面胴部はおそらくタテヘラナデと下端部ヨコヘラケズリ。内面調整は不明瞭でおそらくヨコヘラナデ。外面全体が被熱赤化し、内面全体に暗褐色の汚れが付着する。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・透明粗～細粒 多、白礫と赤・黒粗～細粒少 やや軟質	底上35cm 底3/4周 SK-550 1、4層、西半 分、西半分下半、東半 分、トレンチ

第5章 権現山遺跡 SG10区

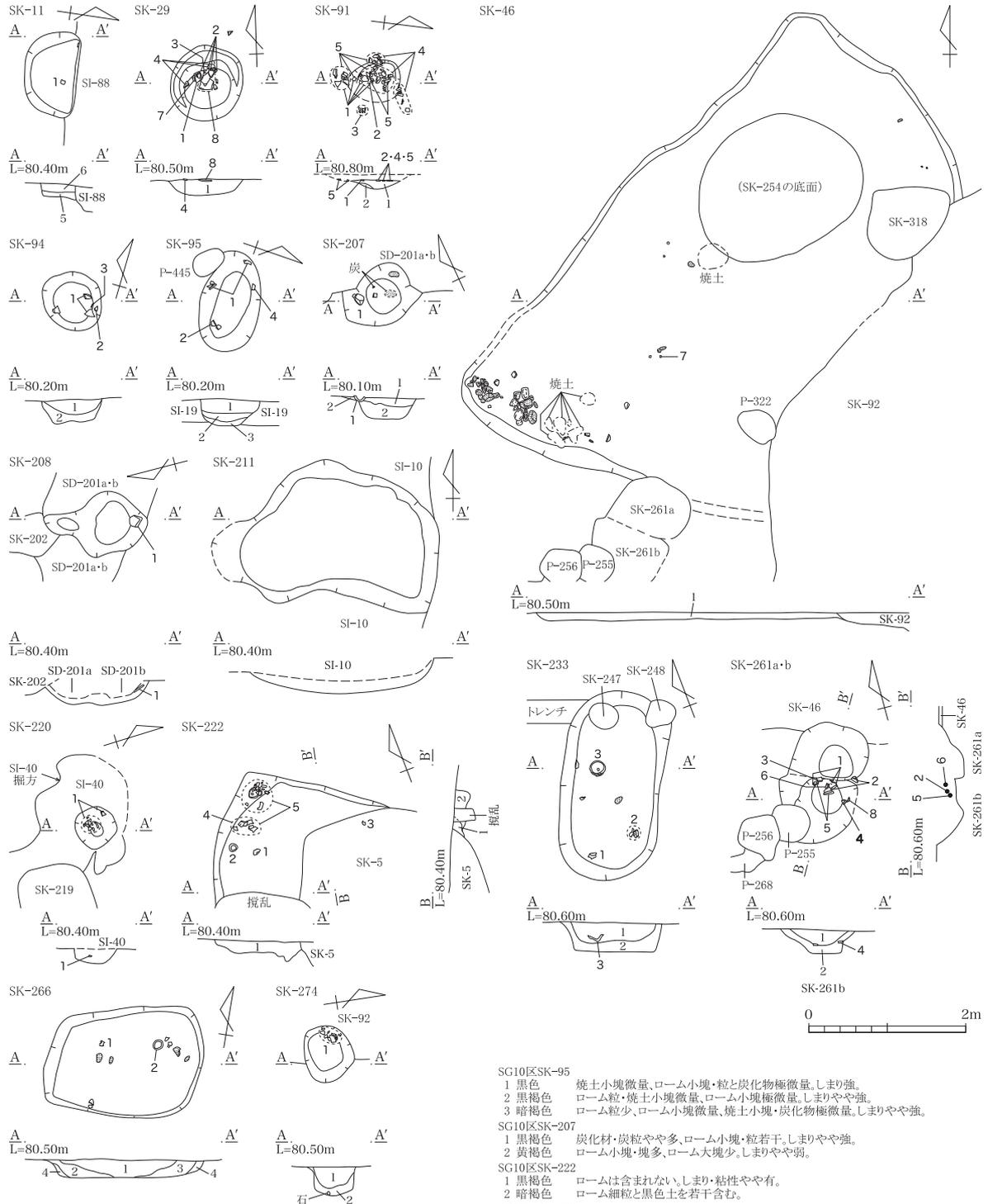
SG10区 SK-621

1 土師器 鉢	口 復 12.4 高 残 5.5 最大 復 12.8	外面は体部にナデと下位ヨコヘラケズリ後にヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。内面は体部にナデと口縁部にヨコナデ後、全体に横～斜位ヘラミガキ。	5YR4/6 赤褐 やや緻密 赤粗粒と白細粒少 やや硬質	底上 33～43cmと北半 2層の1片が接合 口 1/3周 11、26、北半2層
2 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 5.7	外面は体部ヨコヘラケズリ後にヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデ後にヨコヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗粒と白・黒・ 赤細粒少 硬質	底上 24cm 口 1/6周 28、サブトレ一括
3 土師器 杯	口 復 10.5 高 残 5.3 最大 復 12.0	内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面は体部ヨコヘラケズリ後にヨコおよびナメヘラミガキ。内面は体部にナデまたはヘラナデ後、体部に横～斜位と底部に多方向のヘラミガキ。 [注記]20、21、36、北半2層、上層攪乱	10YR5/6 黄褐 やや緻密 白礫～細粒やや多、 黒・透明細粒少 やや硬質	底上 1～51cm。北半2 層と上層攪乱が接合 口 1/2周、体 2/3周 注記は左欄
4 土師器 杯	口 復 11.6 高 残 3.4 最大 復 13.2	外面体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部タテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後に横および斜位のヘラミガキ。外面口縁部と内面に漆仕上げをしている可能性が高い。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白粗～細粒やや多、 灰色礫と赤粗粒と黒・透明細 粒少 やや硬質	北半2層 口 1/6周 北半2層
5 土師器 杯	口 復 12.0 高 4.8 最大 復 12.9	外底面は1方向ヘラナデで平坦に近く仕上げる。外面体部ヨコヘラケズリ後に上部ヨコヘラミガキ。内外面の口縁部をヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に1方向と体部に横位のヘラミガキ。	7.5YR5/6 明褐 緻密 白・透明粗～細粒やや 少、赤・黒細粒少 やや硬質	底上 58cm 口 1/6周、体 5/12周 27
6 土師器 杯	口 12.6 高 残 5.0 最大 13.2	外面の口～体部境に明瞭だが浅い段あり。外面体部はヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面の体部は下位タテヘラミガキ後に上位ヨコヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	底上 30cm 口全周 15
7 土師器 杯	口 復 14.0 高 6.5 底 5.2	口縁部が薄く、口～体部境の外面に明確な段がある。外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面の体部をヘラナデし、底部に多方向と体部に斜位のヘラミガキ。接合面に沿った剥離・破損が顕著。内外面の口縁部に漆仕上げをしているかもしれないが不確実。 [注記]8、17、19、37～39、北半2層、北半分3層、上の攪乱	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 赤粗～細粒多、白 粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	底上 9～47cm。北半2 層と上の攪乱の1片が 接合 口 7/12周、底 2/3周 注記は左欄
8 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 4.9 底 4.6 最大 復 12.8	外面の口～体部境に明瞭だが浅い段あり。外底面は木葉痕で、カンワまたはトチノキの裏面圧痕。外面体部ヨコヘラケズリ後に密な横～斜位ヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に多方向ヘラナデ後、縦～斜位と横位のヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白粗～細粒と黒・透明細粒や や少 やや硬質	底上 32～57cm 口 1/4周、底 3/4周 6、31、2・3層南半分、 南半、上の攪乱、サブ トレ一括
9 土師器 杯	口 復 15.5 高 残 4.2 最大 復 15.7	外面の口～体部境にわずかな段あり。外面体部ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部は下位タテヘラミガキ後に上位ヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8 橙 緻密 白細粒やや少、赤粗～ 細粒と黒・透明細粒少 硬質	底上 25cm 口 1/6周 19
10 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.2	外面の口～体部境に弱く緩やかな段あり。内外面の口縁部にヨコナデ。外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部はナデまたはヘラナデの後に疎らなタテヘラミガキ。	5YR6/8 橙 緻密 赤粗粒と白・黒・透明 細粒少 やや軟質	北半2層 口 1/6周 北半2層
11 土師器 杯	口 12.8 高 残 3.0	外面は体部ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部ナメヘラナデ。残存する内外全面に漆仕上げ。	5YR3/3 暗赤褐 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒少 やや軟質	北半部2～3層が接合 口 1/6周 北半2層、北半3層
12 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 1.9	口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。ただし内面のミガキは有無不明。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 黒細粒やや少、白・ 赤・透明細粒少 やや硬質	北半1層とSK-553aの 各1片が接合 口 1/8周 北半1層、SK-553A
13 土師器 高杯	高 残 4.0 脚裾 8.3	外面は脚根部ヨコナデと脚柱部タテヘラケズリ後にタテヘラミガキ。内面は脚下半ナメハケ後に裾部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 緻密 白・赤細粒少 やや硬質	底上 49cm 脚裾 11/12周 25、サブトレ
14 土師器 甕	口 復 20.9 高 残 8.3	外面は肩部に縦位のヘラケズリおよびヘラナデ後、部分的にヨコヘラケズリ。内面は肩部にヨコヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。外面に少量の煤が付着。	7.5YR4/3 褐 やや緻密 透明礫～細粒多、 白粗～細粒と赤・黒細粒少 やや硬質	底上 31～32cmが接合 口 1/4周、頸 5/12周 13、35
15 須恵器 脚付壺	高 残 38.8 脚裾 復 22.2 最大 復 24.0	外面は頸部に16歯以上の波状文。胴部に擬格子叩き後、カキメと底付近を回転ヨコナデ。脚は2本1組の低い突線で上部・下部・裾部に区分して、上部と下部に16歯以上の波状文を2周または3周巡らす。脚の透窓は3方向の千鳥配置で上段が長方形、下段が三角形。内面は胴部に同心円文当具痕の後にならナデ消している。内面脚部はロクロナデ。外面全体と内面底部に暗緑色の自然釉が多い。釉の状況から見て焼成時に蓋を被せていない。破面は赤灰色。 [注記]SK-621 1～4、9、12、16、22、上の攪乱、北半分2層、サブトレ一括、SI-83上面、SK-553 A-1、A-6、トレンチ、UT-TN-SG-TX24-19	N6/(B) 灰 緻密 黒色湧出粒多、白粗～ 細粒やや少 硬質	底上 31～59cm。SK- 553aの3片(底上2～ 11cm)とSI-83上面の1 片も接合 頸 1/6周、肩 5/12周、 脚上部 3/4周、脚裾 1/24周 注記は左欄
16 石製模造品 有孔剥片	長 3.27 幅 2.31 厚 0.51 重 5.44	片面は2～3方向、対面は1方向に粗く研磨した擦痕を残す。側面は全周を工具で雑に切削した痕が剥離状および切削痕跡状になっていて、研磨はしていない。左図の面から穿孔し、初孔径2.37mm、終孔径2.19mm。	5Y7/1 灰白 緻密で軟質な滑石片岩	南半分2層 完形 南半分2層

第11節 古墳時代の土坑(第181～187図、写真図版137～141・211・212)

SG10区における古墳時代の土坑は46基を確認した。この他に古墳時代の円筒形土坑が9基ある。各遺構の詳細は下記の表にまとめた。SK-553a・553bとSK-600は平面形が方形、SK-211は平面形が不整形で、平坦な底面と垂直な壁面を持つ円で円筒形土坑と類似した貯蔵用土坑と見られる。

SK-46の7のような古墳中期の滑石製有孔円板は、SG10区SI-64aなどに出土例がある。SK-94の3は群馬・埼玉県域に見られる土師器杯である。SK-261bにある貼付口縁の鉢(5)は、SG10区SI-25に類例がある。SK-292で出土した須恵器器台の杯部破片(3)は、東方のSI-111やSD-41・42などに同一個体の破片があり、SI-111の第146図で復原図を示した。SK-346の小形壺(4)は、藁を敷いて焼成した痕跡が外底面にあるので、

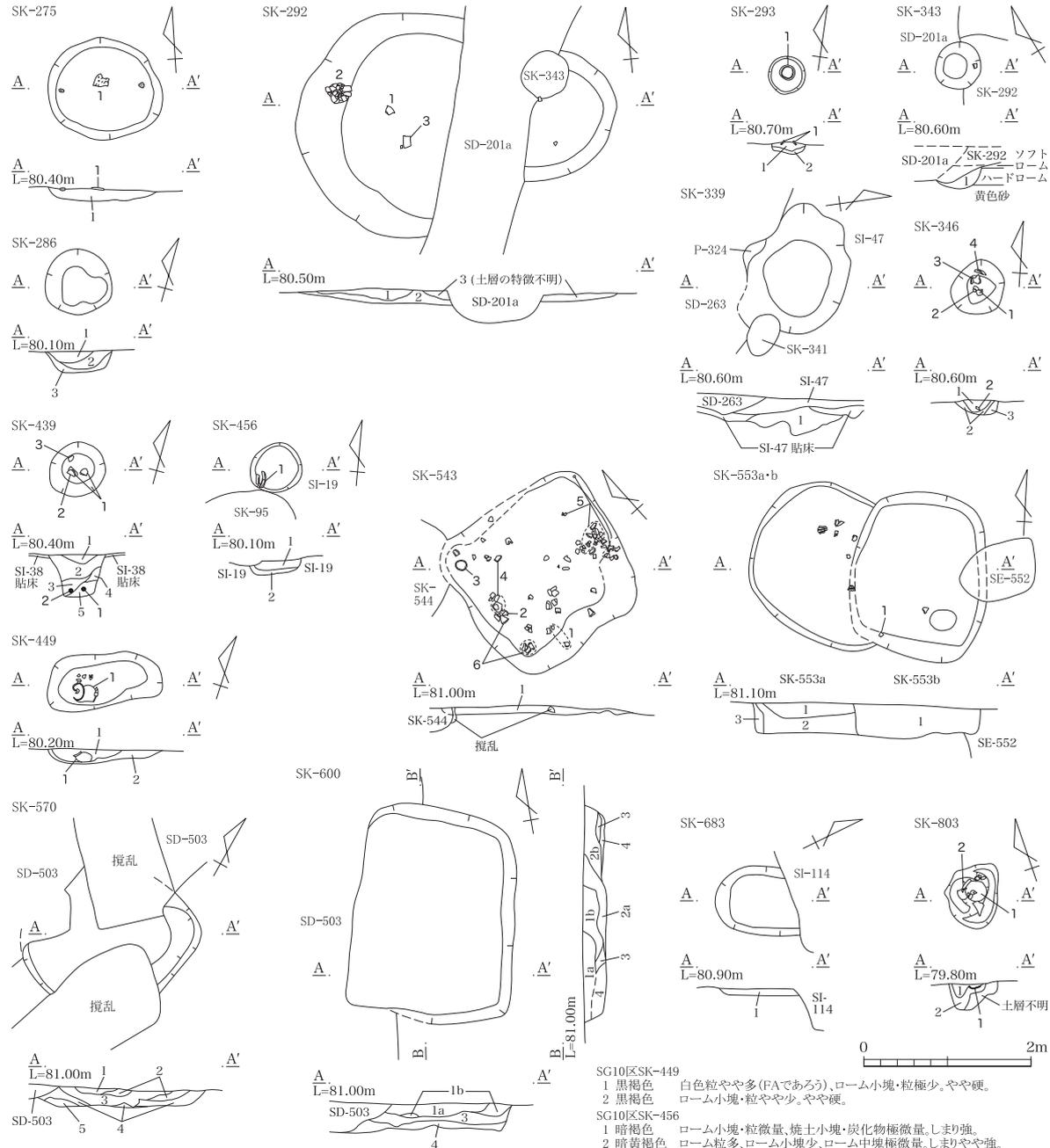


- SG10区SK-11 (1~4層は他遺構のため省略)
 5 黄褐色 ロームに火山灰混入の黒褐色土と暗褐色土が混じる。しまりなし。粘性有。
 6 暗褐色 粒の小さいローム混入。しまりなし。粘性有。
- SG10区SK-29
 1 暗褐色 ソフトローム粒・白色粒と下面にソフトローム塊(径1cm)多。しまり有。
- SG10区SK-46
 1 暗灰褐色 斑状の薄褐色土塊多。ローム粒少。硬。
- SG10区SK-91
 1 暗褐色 白色粒・地山褐色土塊(径1cm)少。軟。
 2 暗褐色 白色粒・地山褐色土塊(径1cm)多。軟。
- SG10区SK-94
 1 黒色 焼土小塊微量、ローム粒・炭化物極微量。しまり強。
 2 黒褐色 ローム小塊・粒微量。しまりやや強。

- SG10区SK-95
 1 黒色 焼土小塊微量、ローム小塊・粒と炭化物極微量。しまり強。
 2 黒褐色 ローム粒・焼土小塊微量、ローム小塊極微量。しまりやや強。
 3 暗褐色 ローム粒少、ローム小塊微量、焼土小塊・炭化物極微量。しまりやや強。
- SG10区SK-207
 1 黒褐色 炭化材・炭粒やや多、ローム小塊・粒若干。しまりやや強。
 2 黄褐色 ローム小塊・塊多、ローム大塊少。しまりやや弱。
- SG10区SK-222
 1 黒褐色 ロームは含まれない。しまり・粘性やや有。
 2 暗褐色 ローム細粒と黒色土を若干含む。
- SG10区SK-233
 1 暗褐色 白色粒多、ソフトローム塊(径1cm)少。しまりなし。
 2 暗黄褐色 ソフトローム塊(径1cm)粒多。軟。粘性有。
- SG10区SK-261b (SK-261aの土層は記録なし)
 1 黒褐色 ローム粒・小塊少。やや硬。
 2 暗褐色 ローム塊・小塊やや少。やや硬。
- SG10区SK-266
 1 暗褐色 ローム粒・今市軽石粒・炭化物極微量。しまりやや強。
 2 黒褐色 ローム小塊・粒と炭化物極微量。しまりやや強。
 3 褐色 ローム小塊・粒微量。しまりやや強。
 4 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少。しまり強。
- SG10区SK-274
 1 暗褐色 ローム粒少。しまりやや強。白色粒は見られない。
 2 暗黄褐色 ローム小塊・粒と暗褐色土小塊やや多。しまりやや強。白色粒は見られない。
 ※SK-208・211・220の土層の特徴は不明。

第 181 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (1) 遺構

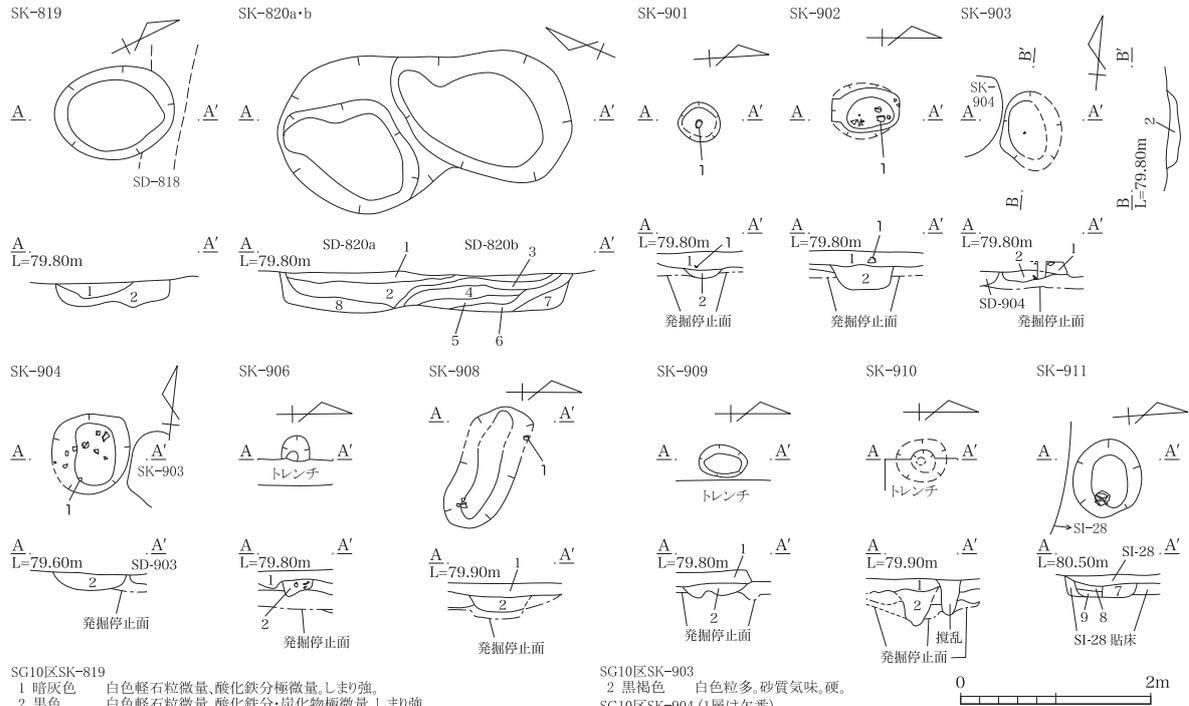
第5章 権現山遺跡 SG10区



- SG10区SK-275
1 暗褐色 ローム粒多、ローム塊・小塊少、七本桜軽石小塊極少、硬。
- SG10区SK-286
1 黒褐色 ローム小塊・粒微量、炭化物極微量、しまり強。
2 暗褐色 ローム粒少、ローム小塊微量、しまり強。
3 褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しまりやや強。
- SG10区SK-292
1 暗褐色 白色軽石粒微量、今市軽石細粒極微量、しまり強。
2 褐色 ローム粒微量、しまり強。
- SG10区SK-293
1 暗褐色 地山(褐色)の塊(径1cm)多、白色粒少、軟、しまりなし。
2 暗褐色 白色粒少、地山塊が1層より少ない、軟、しまりなし。
- SG10区SK-339
1 暗褐色 暗褐色土多、ローム塊・小塊やや多、ローム粒少、やや硬。
- SG10区SK-343
1 黄褐色 1~4mmのローム粒少、均質でよくしまる、やや硬。
- SG10区SK-346
1 黒褐色 今市軽石粒極少、しまり有。
2 黒褐色 ソフトローム粒多、しまり有。
3 褐色 ソフトロームと黒褐色土の混合、基本はソフトロームと思われる。
- SG10区SK-439
1 黒褐色 ローム粒・炭化物極微量、しまり強。
2 暗褐色 ローム小塊・粒少、炭化物極微量、しまり強。
3 暗褐色 ローム小塊・粒微量、炭化物極微量、しまりやや強。
4 褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しまりやや強。
5 暗黄褐色 ローム小塊・粒多、しまりやや強。
- SG10区SK-449
1 黒褐色 白色粒やや多(FAであろう)、ローム小塊、粒極少、やや硬。
2 黒褐色 ローム小塊、粒やや少、やや硬。
- SG10区SK-456
1 暗褐色 ローム小塊・粒微量、焼土小塊・炭化物極微量、しまり強。
2 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、ローム中塊極微量、しまりやや強。
- SG10区SK-543
1 暗黒褐色 ローム微粒極微量。
- SG10区SK-553a
1 暗褐色 白色粒・褐色塊(径2~3cm)多、しまり有。
2 暗褐色 白色粒多、褐色塊(径1cm)少、しまり有。
3 暗褐色 白色粒多、ソフトローム塊(径1~3cm)少、しまり有。
- SG10区SK-553b
1 暗褐色 白色粒・褐色塊(径2cm)多、ハードローム塊(径5cm)少、しまり有。
- SG10区SK-570
1 暗褐色 ソフトローム粒・FA粒多、しまり有。
2 灰褐色 FA粒多、しまり有。
3 暗褐色 ソフトローム粒・FA粒多、しまり有。
4 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)・粒多、FA粒極微量、しまり有。
5 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)多、FA粒極微量(4層より少ない)、しまり有。
- SG10区SK-600
1a 黄褐色 ハードローム塊(径3~4cm)少、ソフトローム塊(径2~3cm)しまり有。
1b 暗黄褐色 ハードローム粒・ソフトローム粒(径2~3cm)少。
2a 黒褐色 ソフトローム粒少、硬。
2b 黒褐色 ソフトローム粒多、今市軽石粒微量、硬。
3 黒褐色 FA塊(径1cm)・ソフトローム粒少、今市軽石粒微量、硬。
4 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)多、軟。
- SG10区SK-683
1 黒褐色 ローム粒微量、ローム小塊・焼土粒極微量、しまり強。
- SG10区SK-803
1 暗褐色 ソフトローム粒下半に少、軟。
2 茶褐色 ソフトローム塊(径1~2cm)少、軟。

第182図 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑(2) 遺構

韓国南部梁山江流域または加耶地域の陶質土器の可能性もある。SK-346・SK-903 には透孔を持つ土師器高杯があり、SG10 区 SI-25 などにも例がある。SK-275 の須恵器甕 (1) は時期不明土坑 SK-264 出土破片と同一個体で、SD-304b や SD-263 にも類似した破片がある。SK-553a には、古墳時代中期の円筒形土坑 SK-621 の須恵器脚付壺 (第 180 図の SK-621 参照) と同一個体の破片があり、SK-553a と SK-621 が同時期に埋没したことがわかる。ただし、同一の脚付壺破片は古墳後期の SI-83 遺構確認面にも 1 片だけ混入している。



- SG10区SK-819
 1 暗灰色 白色軽石粒微量、酸化鉄分極微量、しまり強。
 2 黒色 白色軽石粒微量、酸化鉄分・炭化物極微量、しまり強。
- SG10区SK-820a-b
 1 暗茶褐色 白色軽石粒微量、酸化鉄分極微量、しまり強。
 2 黒褐色 白色軽石粒・ローム小塊微量、ローム粒極微量、しまり強。
 3 暗茶褐色 ローム小塊・粒微量、ローム中塊・白色軽石粒・酸化鉄分極微量、しまり強。
 4 黒褐色 ローム小塊・粒と白色軽石粒・酸化鉄分極微量、しまり強。
 5 黒色 ローム中塊・小塊・粒微量、ローム大塊・白色軽石粒・酸化鉄分極微量、しまり強。
 6 黒色 ローム小塊・粒と白色軽石粒・酸化鉄分極微量、しまり強。
 7 黒褐色 ローム小塊・粒極微量、しまり強。
 8 黒色 ローム中塊・小塊・粒微量、しまり強。
- SG10区SK-901~910 低地土師器包含層と共通の1層
 1 濃暗褐色 白色粒 (FAデフラク) 非常に多。暗褐色の細かい斑 (鉄分?) ややや有。砂粒が混じる。硬。粘性やや有。
- SG10区SK-901
 2 黒褐色 白色粒極少。硬。しまり強。
- SG10区SK-902
 2 濃暗褐色 白色粒少。硬。しまり強。
- SG10区SK-903
 2 黒褐色 白色粒多。砂質気味。硬。
 SG10区SK-904 (1層は欠番)
 2 黒褐色 白色粒やや多。硬。やや粘性有。
- SG10区SK-906
 2 濃暗褐色 白色粒少。硬。しまり強。
- SG10区SK-908
 2 黒褐色 白色粒少 (1層よりずっと少ない)。低地土層の6層から混入したと思われる七本桜軽石粒少。
- SG10区SK-909
 2 濃暗褐色 白色粒やや多。やや砂質気味。硬。1層と大差ないが、白色粒がやや少ない。
- SG10区SK-910
 2 黒褐色 七本桜軽石粒少 (径5~10mm、低地土層の6層から混入してきたもの)。その他の混入物は目立たない。やや硬。
- SG10区SK-911 (1~6層は他遺構のため省略)
 7 茶褐色 ソフトローム粒多、FA小塊 (径2cm)・白色粒・今市軽石粒・炭化物少。しまりやや有。
 8 茶褐色 ソフトローム・ハードローム小塊 (径1~2cm)とソフトローム・ハードローム粒多。
 ソフトローム・ハードロームが混入しているため、黄色い帯状に見える。
 9 暗茶褐色 ソフトローム小塊 (径1cm)・粒多、炭化物粒少。しまりやや有。

第 183 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (3) 遺構

第 108 表 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	中軸	覆土
SK-11	18.0-17.5	円形	SI-88 より古	1.10	残 0.68	0.24		テフラ混入土が混在する
古墳中期中頃の SI-88 に切られる。								
SK-29	19.0-17.0	円形	重複なし	1.00	0.95	0.22		単層 白色粒あり
有段円形の土坑。内面を上に向けた土師器甕の大破片が確認面付近にある。古墳中期の土器片がやや多い。								
SK-46	19.5-17.0・19.5-17.5・20.0-17.5	不整形	SK-92・251・254・261a・318と P-322 に重複	7.00	3.48	0.20	N-67°-E	
中世の SK-92・251 と時期不明の SK-254 に切られる。古墳時代の P-322 と時期不明の SK-318 を切る可能性がある。土層断面図はないが、古墳時代の SK-261a に切られる可能性が高い。浅く、土坑底は平坦である。古墳中期の土師器片がやや多く、石製製造品の有孔円板もある。SI-10 等と同一個体と考えられる須恵器甕の胴部小片が 1 点出土している。古墳後期の漆仕上げ杯破片も少量あり、混入と思われる。								
SK-91	21.5-15.0	推定円形	重複なし	0.67	0.53	0.20	N-26°-W	自然埋没状? 白色粒あり
東半はトレンチに削られている。遺構確認面より少し上部から土師器高杯破片がまとまって出土した。高杯以外の遺物は出土しなかった。								
SK-94	18.0-16.5	円形	SI-19・20 より新	0.83	0.72	0.30		自然埋没状 焼土・炭あり
古墳中期の SI-19 と古墳後期の SI-20 を切ると考えられる。位置や遺物から見て、古墳後期の SI-21a・b の張出ビットかもしれないが、円形なのでその可能性は低い。杯のうち 1 点は群馬・埼玉県域から搬入されたと考えられる。								
SK-95	17.5-16.5・18.0-16.5	楕円形	SI-19 より新、P-445 と重複	1.30	0.74	0.35	N-90°-W	自然埋没状 焼土・炭あり
古墳中期の SI-19 を切ると考えられる。時期不明の P-445 と重複するが新旧不明。現地調査時には、SK-95 が野蔵穴で P-445 が北東主柱になる竪穴建物の可能性が考えられていた。古墳時代の SK-456 と近接する。								
SK-207	16.5-17.5	不整形	SD-201b より古	1.02	0.80	0.28	N-48°-W	ローム塊と炭が多い
土層断面図はないが、近世の SD-201b に切られる。径数cmの枝の炭化物の層が覆土上層にある特異な土坑。古墳後期初め頃の土師器杯や関東地方産と見られる須恵器片あり。								

第5章 権現山遺跡 SG10 区

SK-208	16.5-17.0	不整形	SK-208 → SD-201a・b → SK-202	1.33	0.82	0.62	N-34°・E	土層の特徴不明
近世のSD-201a・b、時期不明のSK-202との土層断面図はないが、SD-201a・bとSK-202に切られる可能性が高い。古墳終末期の杯の大破片あり。								
SK-211	18.0-17.5・18.5-17.5	不整形	SI-88 → SK-211 → SI-10	2.70	1.82	0.54	N-76°・W	土層の特徴不明
古墳中期のSI-88を切り、古墳後期のSI-10に上部を切られて下半が残る。平面形は不整形だが円筒形土坑とやや似ている。調査時にSI-10の床をとばしてSK-211を掘り下げてしまった。SI-10と接合する土師器片があるので、これが取上時の混入でなければ、SI-10をSK-211が切っていた可能性も残る。SK-211の時期を示す遺物はない。写真はSI-10・88を参照。								
SK-220	19.0-17.5	円形	SI-40より古	0.56	0.53	0.16		土層の特徴不明
古墳後期のSI-40内にあり、上部をSI-40に切られる。SI-40の貼床と覆土中に古墳中期の土師器片がやや多く混じるのは、SK-220から混入したものを含むと考えられる。SK-220の周囲でSI-40の掘方が不整形に窪んでいて、SK-220の一部分かもしれない。								
SK-222	18.0-18.0	方形	SK-5より古	2.54	1.40	0.25		
底面があまり平坦ではない。攪乱および時期不明のSK-5に切られる。遺物がやや多く、杯・鉢片ばかりで裏破片がない。古墳後期末に内鬚口縁杯が出現する例。								
SK-233	20.0-17.5	楕円形	P-247・248より古	2.45	1.26	0.38	N-41°・E	自然埋没状 白色粒あり
時期不明のP-247・248に切られる。古墳中期後葉の高杯出土。壺甕類もあるが小破片しかない。								
SK-261a	19.5-17.5	不整形	SK-46より新?	0.71	0.91	0.40	N-48°・E	
SK-261bと同時に存在の可能性もあり。古墳中期のSK-46を切る可能性が高い。北部の深い部分をSK-261aとする。								
SK-261b	19.5-17.5	不整形	長方形 P-255より古	1.00	0.82	0.37	N-48°・E	
SK-261aと同時に存在の可能性もあり。時期不明のP-255に切られる。南部の浅い部分をSK-261bとする。遺物が多い。古墳中期中葉の土師器あり。中～近世のSD-263出土須恵器甕に接合する。小破片も出土している。								
SK-266	19.5-18.0	長方形	重複なし	2.04	1.40	0.24	N-62°・W	自然埋没状 炭粒あり
重複なし。古墳中期後葉の土師器杯あり。								
SK-274	19.5-17.5・19.5-18.0	楕円形	SK-92より古	0.73	0.60	0.36	N-70°・W	自然埋没状 白色粒なし
中世のSK-92に上面が切られていた可能性がある。古墳中期後葉の残存度が高い土師器杯が出土。他に小破片の小形土器・鉢・壺甕類が13片ある。								
SK-275	19.5-18.0	楕円形	重複なし	1.40	1.22	0.17	N-77°・W	単層
遺物は古墳後期または終末期と見られる須恵器甕の大破片1点だけが出土。他に礫破片あり。								
SK-286	18.0-16.5	円形	SI-20より古	0.81	0.78	0.48	N-55°・E	炭粒あり
古墳後期のSI-20貼床下で確認、SI-20に切られる。古墳時代以前の可能性もある。								
SK-292	18.0-17.0・18.0-17.5・18.5-17.5	不整形	SK-343 → SK-292 → SD-201a	3.86	2.70	0.14	N-82°・E	白色粒あり
近世のSD-201aに切られる。古墳時代のSK-343を切るものと見られる。ただし、SK-343がSK-292の下部に付属していた可能性もある。底面の中央が低く、外周寄りが高い。覆土3層は断面図作成時に攪乱と判断したので特徴が記録されていないが、遺構全体を掘り上げた結果として東半部は攪乱でないことが判明した。								
SK-293	21.5-15.0	円形	重複なし	0.48	0.45	0.15		自然埋没状? 白色粒あり
古墳中期と見られる土師器甕の倒立した口縁部が最上層中に入れられている。肩部破片も少しあるが、胴部以外は確認面よりも上方なので不明。								
SK-339	19.5-17.5	不整形	楕円形 SI-47・SK-341・SD-263・P-324より古	1.58	1.20	0.38	N-74°・W	自然埋没状?
古墳後期のSI-47、中～近世のSD-263、時期不明のSK-341・P-324に切られる。古墳後期のSI-47よりも古いことから、古墳時代土坑と考えた。遺物は出土しなかった。								
SK-343	18.0-17.5	円形	SK-343 → SK-292 → SD-201a	0.58	0.53	0.27		単層
SD-201aに切られる。古墳時代のSK-292に切られるものと見られる。ただし、SK-343がSK-292の下部に付属する可能性もある。遺物は土師器壺甕類の胴部1片だけ。								
SK-346	18.0-16.5	円形	重複なし	0.67	0.60	0.19		自然埋没状
円形土坑。遺物量は少ないが、図示した他に杯の体部片や裏の底部片があり、大きめの破片が少量ずつある。土師器杯は古墳中期後葉の浅くなった内斜口縁杯が見られる。								
SK-439	19.5-16.5	円形	SI-38と同時期かそれ以降	0.72	0.65	0.53		自然埋没状 炭粒あり
古墳中期のSI-38内にある。遺物はSI-38より少し古く見えるが、SI-38の貼床に覆われないので、SI-38と同時期か少し新しい。調査時にSI-38の貯蔵穴の可能性も考えられている。深い円形。								
SK-449	17.0-18.0	楕円形	重複なし	1.40	0.64	0.20	N-59°・E	自然埋没状 白色粒やや多
覆土上層にHr-FAと見られる白色土あり。西半部で底面より少し浮いたレベルに土師器甕の上半部が入っている。								
SK-456	17.5-16.5	円形	SI-19a・bより新	0.66	0.60	0.18		自然埋没状 炭粒あり
古墳中期のSI-19a・b内にあり、SI-19a・bを切る。古墳時代のSK-95と近接する。下部は円形だが上部の形状は少し方形気味。出土した杯から見て古墳後期後葉。								
SK-543	22.0-19.0	不整形	SK-544より新	1.98	1.94	0.12	N-60°・E	
現地調査時は、弥生時代のSK-544に切られると考えられていた。ごく浅い土坑で、覆土の上部に土師器の大・小破片が多い。土器集積遺構と考えることもできる。古墳中期後葉の杯や小形壺を含む。								
SK-553a	24.0-19.0・24.0-19.5	隅丸方形	SK-553bより古	残 2.00	1.80	0.36	N-5°・E	自然埋没状 白色粒あり
古墳中期のSK-553bに切られる。隅丸方形。断面形は円筒形土坑と似ている。古墳時代の円筒形土坑SK-621と同一個体の須恵器脚付壺あり。土師器杯が古墳時代の円筒形土坑SK-621と遺構間接合。縄文中期土器も混入。								
SK-553b	24.5-19.5	隅丸方形	SK-553a・SE-552より新	1.99	1.68	0.42	N-5°・W	単層 白色粒あり
古墳中期のSK-553a・SE-552を切る。隅丸方形。断面形は円筒形土坑と似ている。古墳中期後葉以降。橙色の胎土の粗製小形土器と壺甕類が9片出土。縄文中期の加曾利E式も混入。								
SK-570	23.5-19.5	隅丸方形?	SD-503より古	2.92	2.35	0.38	N-58°・W	自然埋没状 白色粒多
Hr-FAテフラ粒が入る。近世のSD-503と近代以降の農業関連土坑2基(イモ穴、現地調査時名称S-546・547)に切られる。土師器壺甕類3片と縄文土器2片出土。								
SK-600	23.5-19.5・24.0-19.5	方形	SD-503より古	2.60	1.96	0.38	N-11°・E	自然埋没状 白色テフラ塊あり
近世のSD-503に切られる。Hr-FAテフラ塊が中位に入る。方形土坑だが、円筒形土坑と断面形がよく似ている。古墳中期の半球状杯や柱状脚高杯破片と壺甕類破片が少量出土。								
SK-683	23.0-19.0	不整形	SI-114より古	0.92	0.83	0.08	N-17°・E	単層 焼土粒あり
古墳中期のSI-114に切られる。遺物は土師器杯1片だけ。写真で見ると古墳時代の円筒形土坑にやや類似している。								
SK-801	17.5-18.5・17.5-19.0	不明	重複なし	不明	不明	不明		不明
東側低地にあったが、遺構確認作業時に消滅したので遺構の図面はない。浅い土坑だったと考えられる。遺物はポリ袋1枚分の裏・高杯・杯・壺がある。18.0-19.0杭から南4.6mの地点で、SK-803と804の中間。SK-803と接合する遺物があるので、同時に埋没した土坑か、またはSK-803の東半部の浅い部分と考えられる。								
SK-803	17.5-18.5・17.5-19.0	不整形	重複なし	0.82	0.63	0.33	N-20°・E	自然埋没状
東側低地に所在。二段掘り込み。球胴壺出土。SK-801と接合する遺物があるので、同時に埋没したと考えられる。								
SK-819	17.0-19.5	楕円形	SD-818と重複	1.28	1.00	0.30	N-26°・E	自然埋没状 白色粒あり
東側低地に所在。時期不明のSD-818と重複するが新旧不明。SK-820aまたはbと接合する遺物があるので、同時に埋没したと考えられる。								
SK-820a	17.0-19.5	楕円形	SK-820bより新	1.68	残 1.38	0.46	N-62°・E	自然埋没状 白色粒あり
東側低地に所在。SK-820bの北西部を切る。SK-819を参照。								
SK-820b	17.0-19.5	楕円形	SK-820aより古	残 1.82	1.38	0.44	N-12°・W	自然埋没状 白色粒あり
東側低地にある楕円形土坑。SK-820aに切られる。SK-819を参照。								
SK-901	19.5-20.0	円形	重複なし	0.45	0.41	0.37		白色粒あり
東側低地、遺物集中部にある小土坑。土坑の上を覆う1層は、SK-902、Fトレンチ、Bトレンチの1層と連続する層でFA粒が多い。								
SK-902	20.0-20.0	楕円形	重複なし	0.75	推 0.58	0.27	N-23°・W	白色粒あり
東側低地、遺物集中部にある。土坑の上を覆う1層は、SK-901、Fトレンチ、Bトレンチの1層と連続する層でFA粒が多い。								
SK-903	20.0-20.0	楕円形	SK-904と重複?	0.85	0.65	0.16	N-26°・E	白色粒あり
東側低地、遺物集中部所在。SK-904と重複する可能性が大きい。断面図では重複しない。古墳中期後葉の土師器小破片が非常に多く、周囲の包含層出土破片と接合する物が目立つ。								

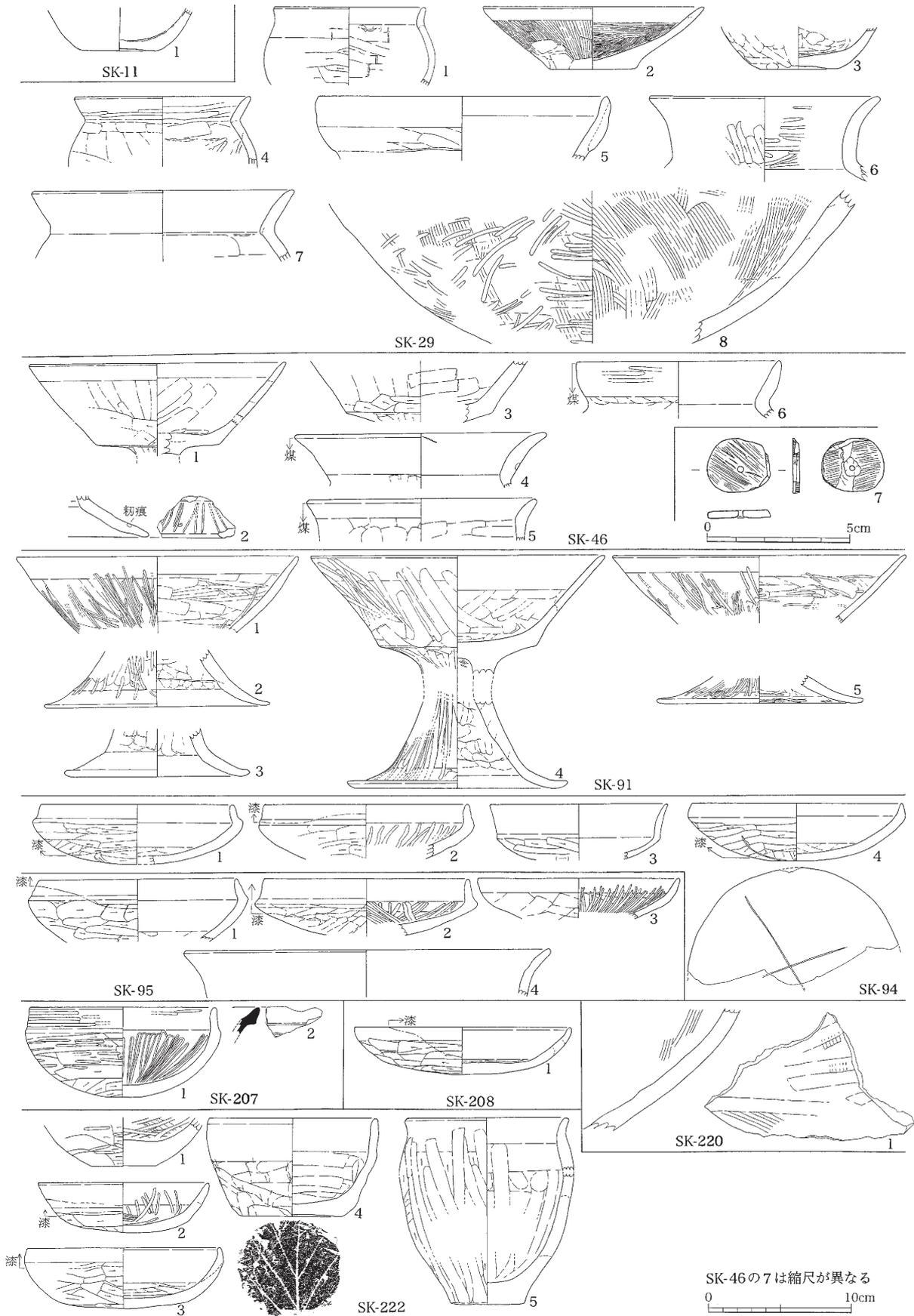
第 11 節 古墳時代の土坑

SK-904	20.0-20.0	円形	SK-903 と重複?	0.94	0.83	0.20	白色粒あり
東側低地、遺物集中部所在。底面が楕円形の小土坑。SK-903 の項目を参照。古墳中期後葉～末頃の土師器杯・高杯破片あり。図示した以外にやや浅身の内斜口縁杯も 2 片ある。							
SK-906	20.0-20.0	円形	重複なし	残 0.33	0.28	0.28	白色粒あり
東側低地、遺物集中部所在。ピット状だが、遺物集中部としてのまとまりを構成する遺構の一つで、柱穴とも限定できないため、土坑として扱う。遺物は土師器壺類 5 片と高杯 5 片があり、古墳中期と見られる。							
SK-908	20.0-20.0	楕円形	重複なし	1.40	0.60	0.32	N-60° -W 単層 白色粒あり
東側低地、遺物集中部所在。プランは不明瞭で、土坑と認定するか迷うような浅い凹み。遺物は土師器 4 片のみで、土坑の上を覆う土層から出土した。							
SK-909	19.5-20.0	楕円形	重複なし	0.52	0.35	0.34	N-15° -W 白色粒あり
東側低地、遺物集中部所在。楕円形の小さい土坑で、底面の中央が少し高い。平面図を作成した遺構確認面が低いので、断面図よりも平面図のほうが一回り小さく図化されている。遺物は出土しなかった。							
SK-910	20.0-20.0	円形	重複なし	推 0.53	推 0.45	0.50	
東側低地、遺物集中部所在。ピット状だが、遺物集中部としてのまとまりを構成する遺構の一つで、柱穴とも限定できないため、土坑として扱う。遺物は出土しなかった。							
SK-911	19.5-17.5	楕円形	SI-28 より新	0.86	0.73	0.25	N-70° -W
古墳中期の SI-28 内にあり、その入口ピットとされていた遺構。SI-28 を切ると考えられるので整理作業時に SK-911 の名称を与えた。遺物は杯 1 点があり古墳中期末頃。							

第 109 表 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG10 区 SK-11				
1 土師器 鉢	高 残 3.1 底 5.1	外底面は丸味を持ち、弱い上げ底状で多方向ヘラナデ。外面体部ナデ。内面体～底部はナデまたはヘラナデで、器面が激しく剥離しているため詳細不明。	7.5YR5/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・赤・透明 粗～細粒少 やや硬質	中央底上 14cm 底 1/2 周 1
SG10 区 SK-29				
1 土師器 杯	口 復 10.5 高 残 5.5 最大 復 11.9	口～体部境の稜は外面でほとんどなく、内面ではやや明瞭。外面体部ヨコヘラケズリ、内面体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部ヨコナデ。外面に少量の煤が付着している。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤・灰色粗～ 細粒やや多、黒・透明細粒少 やや軟質	中央底上 3cm 口 1/6 周 10
2 土師器 杯	口 復 15.4 高 4.3 底 6.0	外底面は丁寧なナデ。外面体部タテハケと下端ナデ。内面全体に多方向のハケ。内外面ともにハケは浅く不明瞭。内外面の口縁部にヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒や や多、灰色礫と黒・透明細粒 少 やや軟質	中央底上 1～3cm が接 合 口 1/2 周、底全周 10、14
3 土師器 杯	高 残 3.0 底 5.4	外底面はナデ後に 1～2 方向の軽いケズリで、少し上げ底状。外面体部に斜位と横位のナデ。内面はやや強い多方向のヘラナデ。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や や多、黒・透明細粒やや少 やや軟質	中央底上 10cm 底 5/6 周 2
4 土師器 小形甕	口 復 12.2 高 残 4.9 最大 復 13.2	薄く軽い。外面は胴部ナメナデと中位ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデと肩部ナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ後に少しヘラミガキ、口縁部ヨコナデに粗いヨコヘラミガキ。煤や被熱使用痕は見られない。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・赤細粒や や少、灰色礫と黒・透明粗粒 少 やや硬質	西部底上 19cm と中央底 上 1cm が接合 口 1/6 周 4、14
5 土師器 大形壺	口 復 20.6 高 残 4.5	外面頸部ナデ後、口縁部外面に粘土帯を貼り付けて下半ナメナデ、上半ヨコナデ。内面はヨコナデと見られるが、器面が著しく剥離しているため詳細不明。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・黒細粒多、白・ 透明粗粒少 やや軟質	遺構確認面 口 1/8 周 1 990609
6 土師器 壺	口 復 16.2 高 残 6.0	残存する円周がわずかなので、復原径は参考値。外面は肩部ナメヘラナデ、口～頸部ヨコナデ後に頸部ナメヘラケズリ。内面は肩部ヨコヘラナデ、口～頸部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、灰色粗粒少 やや硬質	遺構確認面 口 1/12 周 1 990609
7 土師器 甕	口 復 18.4 高 残 5.0	外面は肩部が剥離して調整不明で、内面は肩部に横位のナデ後、頸部以上を積み上げている。内外面の口縁部にヨコナデ。外面は黒色を帯びるが、煤ではなく黒斑の可能性が高い。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・透明礫～ 細粒多、黒粗～細粒やや多 やや軟質	中央底上 5cm 口 1/8 周、頸 1/6 周 6
8 土師器 大形壺	高 残 10.7	3 本 /1cm の粗いハケを使う。外面はタテハケ後にその大半を横～斜位のナデで消してから、やや粗い横～斜位ヘラミガキ。内面はナメハケ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、黒粗～細粒やや多 やや硬質	北部底上 20cm 胴 1/6 周 1 990614
SG10 区 SK-46				
1 土師器 高杯	口 復 18.0 高 残 6.4	外面は杯底に放射状および外周部横位ヘラケズリ。外面体部は上半タテヘラナデと下半ナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。接合できない箇所があるので、杯部の深さは確実ではない。外面に煤が付着する破片と付着しない破片がある。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 軟質	南西部上面と 1 層 口 1/6 周、杯底 1/3 周 南西部上面、南西 1 層
2 土師器 高杯	高 残 2.9 底 復 12～16	外面の裾部ヨコナデ後にやや疎らなタテヘラミガキ。内面は裾部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ。胎土中に混和された稲粒の圧痕が、器面がはじけた結果として外面に現れている。	7.5YR5/4 にぶい褐 緻密 白粗～細粒やや多、黒・ 透明細粒少 硬質	南西部の遺構確認面 脚底 1/12 周 南西部上面
3 土師器 高杯	高 残 4.7	外面は杯底部を放射状ヘラケズリ、杯体部タテヘラナデ後に下端ヨコヘラケズリ。内面は杯体部ヨコヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤・黒粗～細粒や や多、白・透明細粒少 やや軟質	南西部上面と 19.9- 17.1E トレンチ 杯底 2/3 周 南西部上面、19.9-17.1E トレンチ
4 土師器 甕	口 復 17.6 高 残 3.8	外面は肩部タテヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は肩部ナデ後に口縁部ヨコナデ。外面下位に長円形の圧痕があるが、稲粒痕かどうかは不明。内面上位に焼成前の浅い斜位沈線あり。外面に煤がやや多い。	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 白・黒・透明粗～細粒 やや多、灰色礫と赤細粒少 硬質	南西部周辺の遺構確認面 口 1/6 周 付近南半
5 土師器 甕	口 復 15.7 高 残 3.0	外面は頸部タテヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に頸部ヨコヘラナデ。外面に少量の煤が付着する。	7.5YR4/6 褐 やや緻密 黒・透明粗粒やや 多、白細粒少 硬質	南西部の表土 口 1/6 周 南西部表土
6 土師器 甕	口 復 14.2 高 残 4.0	外面は肩～頸部に縦～斜位のヘラナデ後、口縁部ヨコナデおよびヨコヘラミガキ。内面は器面が荒れて調整不詳。外面に煤が少量付着する。	7.5YR6/6 橙 粗い 赤粗～細粒多、白粗粒 と白・黒細粒やや多、透明細 粒少 やや軟質	南西部の遺構確認面 口 1/8 周、頸 1/6 周 南西部上面
7 石製模造品 有孔門板	長 幅 21.9mm 厚 18.5mm 重 2.4mm 1.86	右図の面の上部に、側面調整時のやや大きな切削痕を残す。それ以外は穿孔と同じ方向に研磨し、2 段に分けて磨く箇所もある。両面ともにほぼ 1 方向に研磨した細かい擦痕を残す。左図の面から穿孔して対面に大きな穿孔剥離を生じる。初孔径 1.60mm、終孔径 1.55mm。	10Y4/1 灰 緻密でやや軟質な滑石片岩	中央床 上 7cm 完形 10

第5章 権現山遺跡 SG10区



第184図 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑(4) 遺物

第 11 節 古墳時代の土坑

SG10 区 SK-91

1 土師器 高杯	口 19.8 高 残 5.4	外面は杯体部タテヘラナデと口縁部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は杯体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデで、ヨコヘラナデは少し光沢を持つヘラナデも含んでいる。内外面に 5～10cm 大の黒斑が目立つ。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや緻密 赤粗粒多、白粗～ 細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	1 層上面と床上 3cm が接 合 口 3/4 周 1、3、7、8、15
2 土師器 高杯	高 残 3.9 脚裾 復 15.8	外面はタテヘラケズリと裾部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は粘土紐積み上げ痕を残してユビオサエと上部ヨコヘラケズリ、裾部ヨコナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒多、白 粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	1 層上面 脚裾 5/12 周 1、2
3 土師器 高杯	高 残 3.3 脚裾 復 12.9	脚裾部を上へ少し折り上げる。脚柱部の内外面にタテヘラナデ後、脚裾部の内外面にヨコナデ。	5YR4/8 赤褐 やや緻密 赤・透明粗～細粒 多、黒・灰色細粒少 やや軟質	1 層上面 脚裾 1/6 周 4
4 土師器 高杯	口 復 20.4 高 復 16.3 脚裾 復 15.3	外面は杯底部に縦位と杯体部に斜位のヘラナデ、口縁部にヨコナデ。外面脚部は脚部タテヘラケズリと裾部ヨコナデ後に全体をタテヘラミガキ。杯部内面は多方向ヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。脚部内面は頂部にヘラ先の傷があり、脚柱部ナデと裾部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	1 層上面と床上 4～5cm が接合 口 2/3 周、脚裾 1/6 周 1、2、5、11、13、16、17
5 土師器 高杯	口 復 20.6 高 杯部 残 4.8 脚部 残 2.0 脚裾 復 14.4	破片が不足して杯部と脚部の間が接合できない。杯部は外面タテヘラナデと口縁部ヨコナデ後にタテヘラミガキ、内面ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。脚部は外面タテヘラケズリと裾部ヨコナデ後にタテヘラミガキ、内面ヨコヘラナデと裾部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 赤粗粒やや多、白 粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	1 層上面 口 1/2 周、脚下半 1/4 周 1～3、7、9、10、14

SG10 区 SK-94

1 土師器 杯	口 13.3 高 残 4.2 最大 14.7	外面は底部多方向と体部横位ヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面は底部に多方向ナデと体部ヨコナデ。外面中位以上と内面全面に漆仕上げ。	10YR5/2 灰黄褐 緻密 白・黒・透明細粒少 軟質	北東部底上 14cm 口 1/2 周 2、3
2 土師器 杯	口 復 14.2 高 残 3.8 最大 復 15.0	外面は体部ナデ後に横～斜位ヘラケズリ。外面口縁部と内面全面ヨコナデ後、内面体部に放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	2.5Y4/2 暗灰黄 緻密 白 粗～細粒やや多、透明粗粒と 黒細粒少 やや硬質	底上 8cm 口 1/3 周 5、貯蔵穴周辺一括
3 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 3.9	かなり薄く軽い。外面は口縁部下端の段より下をヨコヘラケズリして、口縁部ヨコナデ。内面は全面ヨコナデ。北西関東地域からの搬入品。 [注記]4、貯蔵穴周辺、貯蔵穴周辺一括	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白細粒少 やや軟質	底上 8cm 口 5/12 周 注記は左欄
4 土師器 杯	口 復 14.8 高 4.1 最大 復 15.2	外面の口～体部境に弱い稜あり。外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面底部に多方向ナデ。外面口縁部と内面口～体部にヨコナデ。外面中位以上と内面全面に漆仕上げ。外面底部を中心として体部に「×」の浅い刻線を焼成後に描いている。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 白・黒・透明細粒少 やや軟質	口 5/12 周 貯蔵穴周辺一括

SG10 区 SK-95

1 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.4 最大 復 15.4	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は口～体部上半にヨコナデで、体部下位にナメヘラナデが少し見られる。外面口縁部と内面全面に漆仕上げ。	10YR6/2 灰黄褐 緻密 白礫と白・透明粗～細 粒少 やや硬質	西部底上 18cm と南部底 上 22cm が接合 口 5/12 周 SI-95 1、3
2 土師器 杯	口 復 16.1 高 残 4.0 最大 復 15.4	外面は体部ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面はおそらく体部ヘラナデ後に体部上位と口縁部をヨコナデ。内面体部に斜放射状のヘラミガキ。外面上半と内面全面に漆仕上げ。	5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・透明細粒やや 多、白・灰色礫と白・透明粗 粒少 やや硬質	北部底上 31cm 口 1/12 周、体 1/6 周 SI-95 5、貯蔵穴周辺一 括
3 土師器 杯	口 復 14.2 高 残 2.8	外面は体部ナメヘラナデ(一部ヘラケズリ)、口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメナデ? と口縁部ヨコナデの後、放射状ヘラミガキ。漆仕上げの有無は不詳。	2.5Y4/2 暗灰黄 やや緻密 白粗～細粒やや少、 黒・透明細粒少 やや軟質	口 1/3 周 SI-95 貯蔵穴周辺一括
4 土師器 甌	口 復 25.6 高 残 3.3	薄く軽い。口縁部は内外面ともにおそらくヨコナデで、器面が剥離しているのでミガキの有無が不明瞭。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明細粒やや 多、灰色・透明粗粒少 やや軟質	北西部底上 6cm 口 1/6 周 SI-95 2、貯蔵穴周辺一 括

SG10 区 SK-207

1 土師器 杯	口 12.9 高 6.3	外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ後、体部ヨコヘラミガキ。内外面の口縁部をヨコナデ後ヘラミガキし、内面のヨコヘラミガキは少ない。内面体部はヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。主に外面に広く煤が付着する。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 透明粗～細粒と黒 細粒やや多、白・灰色礫～粗 粒少 やや硬質	西部底上 20cm 口 1/2 周、体 7/12 周 1
2 須恵器 甌?	口 復 25～30 高 残 2.1	口縁部外面は断面が三角形に肥厚して、その外面側の下端が明確な稜を持つ。頸部の残存下端に櫛描波状文の上端部が 3 本分だけわずかに見える。	5Y6/1 灰 緻密 白・黒・透明細粒少 軟質	口 1/24 周 1 層

SG10 区 SK-208

1 土師器 杯	口 復 15.1 高 3.3	外面は口縁部ヨコナデ後に体～底部ヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向と口～体部に横位のナデ。外面上位と内面に漆仕上げ。底部は内外面ともに器面が荒れている。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・灰色粗粒と白・黒・透明 細粒少 やや硬質	南部底上 11cm 口 5/12 周、底全周 1
---------------	-------------------	--	---	--------------------------------

SG10 区 SK-220

1 土師器 大形壺	高 残 9.0	厚く重い大形壺の破片。外面はタテハケ後にヨコヘラナデ。内面は大半が剥落して調整不明だが、タテハケが認められる。 [注記]11～7、SI-40 13、16、19、20、73 南西貼床、74 北西貼床、北西区 1・2 層、南西区 5 層、A-A' 西 2 層、D-D' セク北、カマド、貯一括	7.5YR6/3 にぶい褐 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、黒細粒やや多、赤粗～細 粒少 やや軟質	底直上～底上 12cm SI-40 にも 19 片が混入 胴部片多数 注記は左欄
-----------------	---------	---	--	---

SG10 区 SK-222

1 土師器 杯	高 残 3.4 底 4.4	厚く重い。外底面は円周方向のヘラケズリ。外面体部ヨコヘラケズリ後に粗いヨコヘラミガキ。内面はナデ後、底部に多方向と体部に横位のやや密なヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤粗粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	底上 18cm 口 2/3 周 4
2 土師器 杯	口 12.1 高 3.5 重 163.3	口縁が弱く内彎し、外面の口～体部境にわずかな段あり。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部多方向ヘラナデと口縁部ヨコナデ後に疎らなナメヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色礫～粗粒 と黒・透明粗～細粒やや多 硬質	底上 22cm ほぼ完形 3
3 土師器 杯	口 復 13.4 高 4.3 最大 復 13.9	外底面に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ、内面底部に多方向ナデ、内外面口縁部ヨコナデ。外面口縁部と内面全面に漆仕上げ。 [注記]1、黒色土層 (I)、SK-5 攪乱	7.5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明細粒少 やや硬質	SK-5 より下層の SK-222 覆土中。底上 24.7cm 口 1/6 周、体 1/4 周、底 全周 注記は左欄
4 土師器 粗製鉢	口 復 11.6 高 6.9 底 6.9	厚く重い。外底面にカシワの裏面の木葉痕。外面体部に雑なナデ。内面に丁寧なナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 粗い 白・黒・灰色礫～粗粒 多、黒・透明細粒少 やや硬質	底上 17cm。SK-5 にも小 片 1 点混入 口 1/3 周、底全周 6、SK-5 北西
5 土師器 鉢	口 11.4 高 復 13.1 底 5.1 最大 12.2	外底面は雑なナデで、木葉痕を消した可能性あり。外面胴部は主にタテ(一部ヨコ)ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ→胴部タテヘラナデ。内面胴部タテナデと肩部ユビオサエ後、口～肩部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・透明粗～ 細粒少 やや硬質	底上 17～25cm が接合 口 2/3 周、胴 1/2 周、 底 2/3 周 5、6

第5章 権現山遺跡 SG10 区

SG10 区 SK-233

1 土師器 鉢	高底 残 3.2 復 5.4	外底面は 1 方向ヘラケズリで平底状。外面はタテナデ後に下端をヨコヘラケズリ。内面ヨコヘラナデ。	5YR4/3 にぶい赤褐 やや粗い白・赤礫～粗粒と白・黒・赤・透明細粒少 硬質	底上 33cm 底 3/4 周 6
2 土師器 高杯	高 残 8.0	外面はタテナデ後タテヘラミガキ。内面は横～斜位ナデで、粘土組織み上げ痕をやや残している。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 白粗～細粒やや少、黒・透明細粒少 やや硬質	底上 31cm 脚中位全周 5
3 土師器 高杯	高脚裾 残 9.6 18.4 重 残 598.7	脚が中実で重い。脚柱部は外面タテヘラケズリ、内面上半ナデと下半ナメヘラナデ。内面上半の接合痕が明瞭。脚裾部は内外面ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤粗粒と白・黒・透明細粒やや多 やや硬質	底上 14cm 脚裾 5/6 周、脚柱全周 1

SG10 区 SK-261b

1 土師器 杯	口高 11.8 残 6.1 最大 12.6	外面は底部に 1 方向または多方向と体部に斜位のヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ、底部に多方向ヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面の全体に煤が付着する。 [注記]SK-261 6 覆土、8 覆土、24 覆土、D トレ 990728、D ベルト上層、北半 1 層	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒と白・透明粗～細粒やや多 やや硬質	底上 15～21cmが接合 口 2/3 周、肩 1/2 周 注記は左欄
2 土師器 杯	高底 残 4.0 4.4	薄く軽い。外底面は多方向ヘラケズリ、外面体部ヨコヘラナデ後に体部下端ナメヘラケズリ。内面にヨコハケ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と黒・透明細粒やや多 やや軟質	底上 11～25cm 体 1/3 周、底 5/6 周 SK-261 14 覆土、16 覆土最上層
3 土師器 高杯	口高 復 22.0 残 4.3	外面は杯体部ナデと口縁部ヨコナデ後、杯体部ナメヘラナデでわずかに光沢を出している。内面は杯体部ヘラナデと口縁部ヨコナデ後、全体をヨコヘラミガキ。 [注記]SK-261 5 覆土、22 覆土、D トレ 990728、北半 1 層、D ベルト 2 層	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白粗～細粒やや少、黒・灰色・透明粗～細粒少 やや硬質	底上 27cmと SK-261b の 北部 1～2 層が接合 口 1/3 周 注記は左欄
4 土師器 高杯	高 残 4.1	外面の杯体～底部境に稜を持ち、杯体部ナメヘラナデ後に杯底部を縦および斜位のハケメ。内面は横位のやや強いヘラナデ後、杯体部タテヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・赤粗～細粒やや少、黒・透明細粒少 やや軟質	床上 14cm。北半部 1 層 に同一個体が 1 片 杯底 1/3 周 SK-261 11 覆土、D ベルト 1 層
5 土師器 鉢	口高 復 13.3 残 9.1	外面は体部にナメナデ後、肩部を中心としてナメヘラミガキ、口縁部は粘土貼り付け痕を残してユビオサエ後、弱いヨコナデ。外底面外周ナメヘラケズリ。内面は肩部ハケメ後に体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコヘラナデ後弱いヨコナデ。外面下位は黒斑。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒やや多、黒・透明細粒少 やや軟質	底上 8～11cm 口 1/3 周、底 1/6 周 SK-261 20 覆土、28 覆土最下部
6 土師器 鉢	口高 復 11.2 残 5.0 最大 復 14.4	やや薄い。外面は肩部ナメハケ後に体部ナメナデと口縁部ヨコナデ。内面は体部に斜～横位のナデと口縁部にヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明細粒やや多、白・黒細粒少 やや硬質	底上 13cm 口 1/6 周 SK-261 7 覆土、北半
7 土師器 鉢	口高 復 14.8 残 3.4	やや厚い。口～体部境の稜は内面で明瞭、外面で不明瞭。外面は肩部にやや強いタテヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は肩部にナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面肩部のヘラナデは、非常に浅いハケメかもしれない。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 赤粗～細粒と白・黒・透明細粒やや多 硬質	南半最上層 口 1/6 周 SK-261 南半最上層
8 土師器 甕	口高 復 18～22 残 4.2	口～胴部境の稜は内面でやや明瞭。内面頸部ヨコヘラナデの後に内外面の口～頸部をヨコナデ。外面に煤が多く付着する。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白粗～細粒と黒・透明細粒やや多 硬質	底上 14cm 口 1/12 周 SK-261 12 覆土

SG10 区 SK-266

1 土師器 小形壺	頸高 復 7.3 残 4.4	外面は肩部に 12 本 /cm の細かいタテハケ後に疎なタテナデ。外面頸部はおそくナデ。内面肩部はナメヘラナデで粘土組織痕を残し、頸部ナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・黒粗～細粒と透明細粒やや多、灰色礫と赤細粒少 やや硬質	底上 20cm 頸 1/6 周 7
2 土師器 杯	口高底 12.0 5.8 3.1 重 残 218.6	口～体部境の稜は内面で明瞭。外底面はナデで、非常に弱い凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラナデで少し光沢を持つ。外面口縁部ヨコナデ後、口～肩部にヨコヘラミガキ。内面は底部に 1 方向と体部に横～斜位のヘラナデ後、体部に横～斜位ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 黒・透明細粒多、赤粗粒と白粗～細粒少 やや硬質	底上 12cm 口 3/4 周、体全周 10

SG10 区 SK-274

1 土師器 杯	口高 14.5 6.4	口～体部境の稜は、内面で明瞭で外面で弱い。外面は底部に円周方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部はヨコヘラケズリ後ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向と体部に縦位のヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。	2.5YR5/6 赤褐 やや緻密 灰色粗粒と白・透明粗～細粒やや多、赤粗粒と黒細粒やや少 やや硬質	底上 9cm 口 7/12 周、体 5/6 周 1、西半
---------------	-------------------	--	--	------------------------------------

SG10 区 SK-275

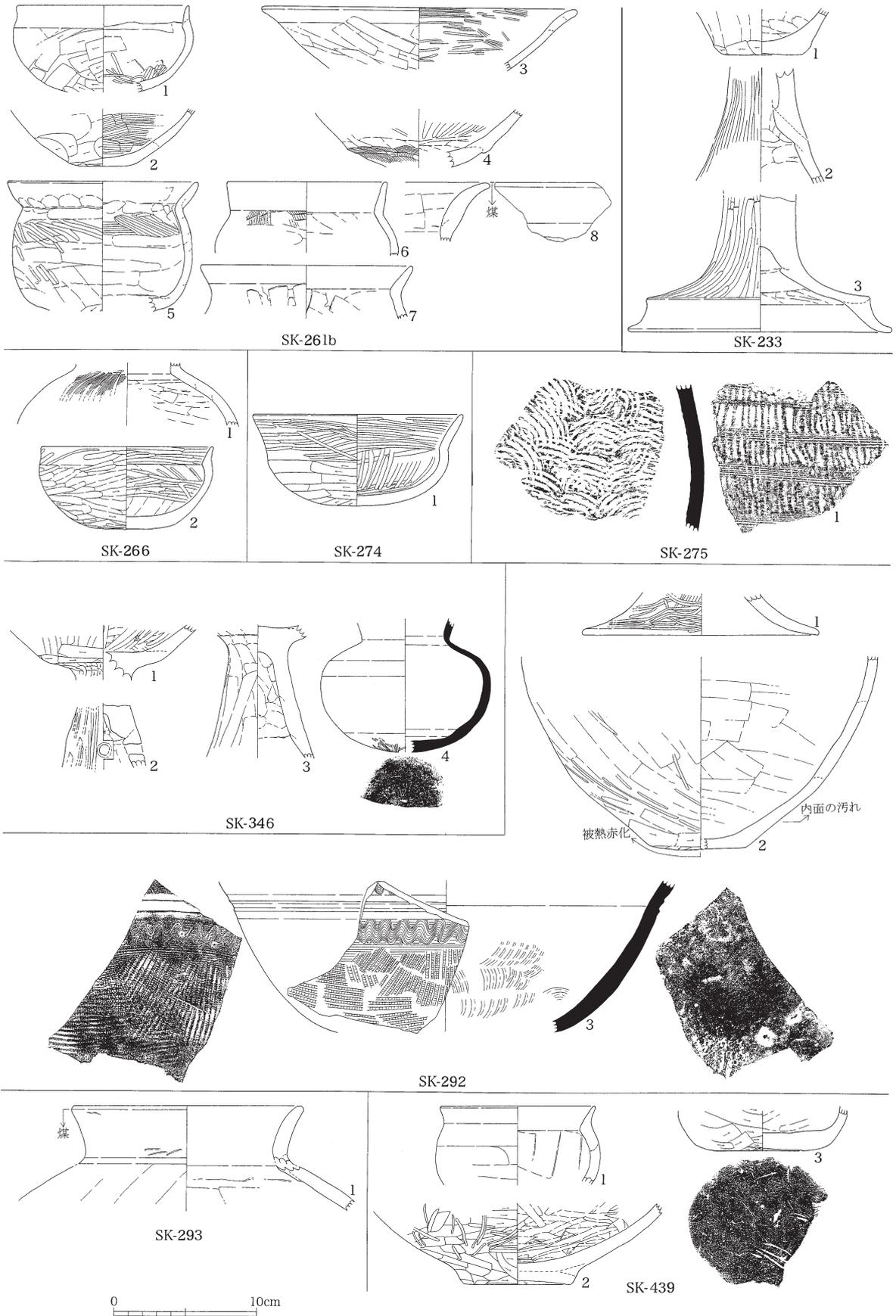
1 須恵器 甕	高 残 10.3	外面は縦位の平行叩き後に 8 本 1 組の櫛状工具で回転による平行沈線を 4 周入れている。内面は同心円文当具痕が下方向へ進行する。ただし、破片の天地は逆の可能性もある。外面は灰褐色で内面は灰色。破面は橙色と灰色のサンドイッチ状。時期不明の SK-264 に同一個体の破片があり、古墳時代の SD-304b と中～近世の SD-263 出土破片ともやや類似する。	5YR6/2 灰褐 やや粗い 白細粒やや少、白・透明粗粒少 やや硬質	底上 13cm 胴部片 1
---------------	-------------	---	---------------------------------------	---------------------

SG10 区 SK-292

1 土師器 高杯	高脚裾 残 2.9 復 16.4	脚端部の内面側がわずかに肥厚気味。脚端部の内外面をヨコナデ後、外面に密なヨコヘラミガキ。脚部上位はタテヘラミガキも行。非常に丁寧な製品。	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 白・透明粗～細粒と白細粒少 やや硬質	底直上 脚裾 1/6 周 2
2 土師器 甕	高底 残 13.5 6.4	外底面は 1 方向ヘラケズリで緩い凸面状。外面は胴部ナメヘラナデ後に少しヘラミガキ、胴下端ヨコヘラケズリ。内面は横～斜位ヘラナデ。胴部・底部の外面が少し被熱赤化し、底部付近を除く内面に暗褐色の汚れが少し付着する。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや粗い 白礫～細粒と黒・透明粗～細粒やや多、赤粗粒少 やや軟質	底直上 胴下端 3/4 周 1
3 須恵器 器台	高 残 10.6	外面はカキメ後に下位波状文→中位突線 2 条→上位波状文の順に施文する。波状文は右から左へ描き、下位波状文は 16 歯以上の工具を使うが、11～12 本しか器面に当たらないところが多い。杯部下半の握り舌叩き目はカキメ後。内面下半部は同心円文当具痕。内面に暗緑色の自然釉がかぶる。SI-111 他で出土した破片と同一個体。	5Y4/2 灰オリーブ 緻密 白粗～細粒少、白礫極少 硬質	底直上 杯部中位 1/12 周 4

SG10 区 SK-293

1 土師器 甕	口高 16.2 残 7.4	外面は肩部ナメヘラナデ後に口～頸部ヨコナデで、頸部にヘラの当たった痕を残す。内面は肩部ヨコヘラナデで粘土組織み上げ痕をやや残し、口～頸部ヨコナデ。外面に煤が少し付着する。	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 白粗～細粒多、半透明粗～細粒と透明細粒少 やや軟質	1 層上面 口全周 1、上面一括
---------------	---------------------	---	---	------------------------



第 185 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (5) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10区

SG10区 SK-346

1 土師器 高杯	高 残 3.8	外面は全体をタテヘラナデ後、杯部下端ヨコヘラケズリ、脚部タテヘラケズリ。杯内部内面はナナメハケ後ナナメヘラナデ後ナナメヘラミガキ。杯底部内面はおそらくナデ。	7.5YR4/6 褐 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	底上 9cm 杯底 1/4 周 6
2 土師器 高杯	高 残 4.4	外面はタテヘラケズリ後にタテヘラミガキ。内面は紐積み痕をそのまま残しユビオサエ。径7mmの孔を焼成前に穿孔する。残存する孔は1個だけで、3方向に孔を持つ可能性は低く、2方向に持っていたことが考えられるが、対面が破損しているので想定にとどまる。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白 礫と白・黒・透明細粒少 やや硬質	底上 8cm 脚全周 5
3 土師器 高杯	高 残 9.3 最大 残 7.5	外面は杯底～脚部にタテナデまたはタテヘラナデ、杯底部外周に縦位のやや強いヘラナデ。杯内面はナデで、外周に粘土接合痕を残す。脚内面は倒立状態で反時計方向に紐積みした痕をよく残し、斜～横位ユビナデと一部にヨコヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白・灰色粗～細粒と黒・透明 細粒少 硬質	底上 7cm 脚柱全周 2
4 須恵器 または 陶質土器 小形壺	高 残 9.4 最大 復 11.8	左回転(反時計回り)のロクロで内外面を回転ヨコナデ。内面の体～底部境に緩い段があり、対応する外面が平底状に作られていたことを示すかもしれない。外面は最終的に丸底に仕上げている。外面底部は丁寧な多方向ナデで、ヘラケズリ等の痕を残さない。外底面には蓋を放射状に重ねた上にのせていた痕が焼成により明瞭に残されている。破面は灰赤色で、外面の器面は黒味が強い。	N5(B) 灰 緻密 白・透明粗～細粒やや 多 硬質	底上 4cm 頸 1/4 周、体 1/2 周 3、一括

SG10区 SK-439

1 土師器 杯	口 復 10.8 高 残 5.5 最大 復 11.4	外面は体部ヨコヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデでヘラの痕をやや強く残し、口縁部ヨコナデ。外面全体に煤が多く、内面にも少し見られる。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少 やや硬質	底直上～底上 13cmが接合 口 1/3 周、体 1/3 周 SI-38 2、3
2 土師器 大形壺	高 残 5.7 底 復 7.4	外底面は多方向ヘラケズリで凹面状にする。胴外面を横～斜位ヘラケズリ後に疎らなミガキ。内面は多方向のヘラナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白礫～細粒と透明 粗～細粒やや多、赤粗～細粒 と黒細粒少 硬質	底直上 底 3/4 周 SI-38 2
3 土師器 壺	高 残 3.1 底 6.4	底が厚く重い。外底面は多方向ナデ。外面の体～底部境に円周方向のヘラケズリ、外面体部に横～斜位のヘラケズリ。拓本で示した短い平行沈線が外底面の外周部に焼成前に描かれている。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白礫～細粒と赤粗 ～細粒と黒・透明細粒やや多 やや軟質	底上 6cm 底全周 SI-38 1

SG10区 SK-449

1 土師器 甕	口 復 18.8 高 残 16.0 最大 復 26.7	外面は胴部に縦位後横～斜位のヘラナデで、胴中位の接合休止部付近をヨコヘラケズリ。内面は胴部ヨコヘラナデ後、胴中～上位をヨコヘラケズリ。内外面の口縁部をヨコナデ、口～肩部の外面に極少量の煤が見られる。	2.5Y4/2 暗灰黄 やや粗い 白礫～細粒多、灰 色・透明粗～細粒やや多、赤・ 黒粗～細粒少 やや硬質	底上 3cm 口 3/4 周 1
---------------	-----------------------------------	---	--	------------------------

SG10区 SK-456

1 土師器 杯	口 復 13.9 高 4.5 最大 復 14.8	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部はヨコナデ後に疎らなヨコヘラミガキ。内面体部はヨコナデ後に密な放射状ヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。 [注記]SI-19 66、SI-95 貯蔵穴周辺	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤・灰色粗粒 と白・黒・赤・透明細粒やや 多 硬質	底上 7cm。南に近接する SK-95 周辺出土の1片 も接合 口 5/12 周 注記は左欄
2 土師器 甕	高 3.3 底 6.2	凹底状で薄い。外底面は円周方向のヘラケズリ。外面胴部はやや強いナナメヘラナデ。内面胴部はヨコヘラナデ。外面全体が被熱赤化。	7.5YR8/6 浅黄橙 粗い 白・透明粗粒と白・黒・ 赤・透明細粒多 軟質	底 5/12 周 一括

SG10区 SK-543

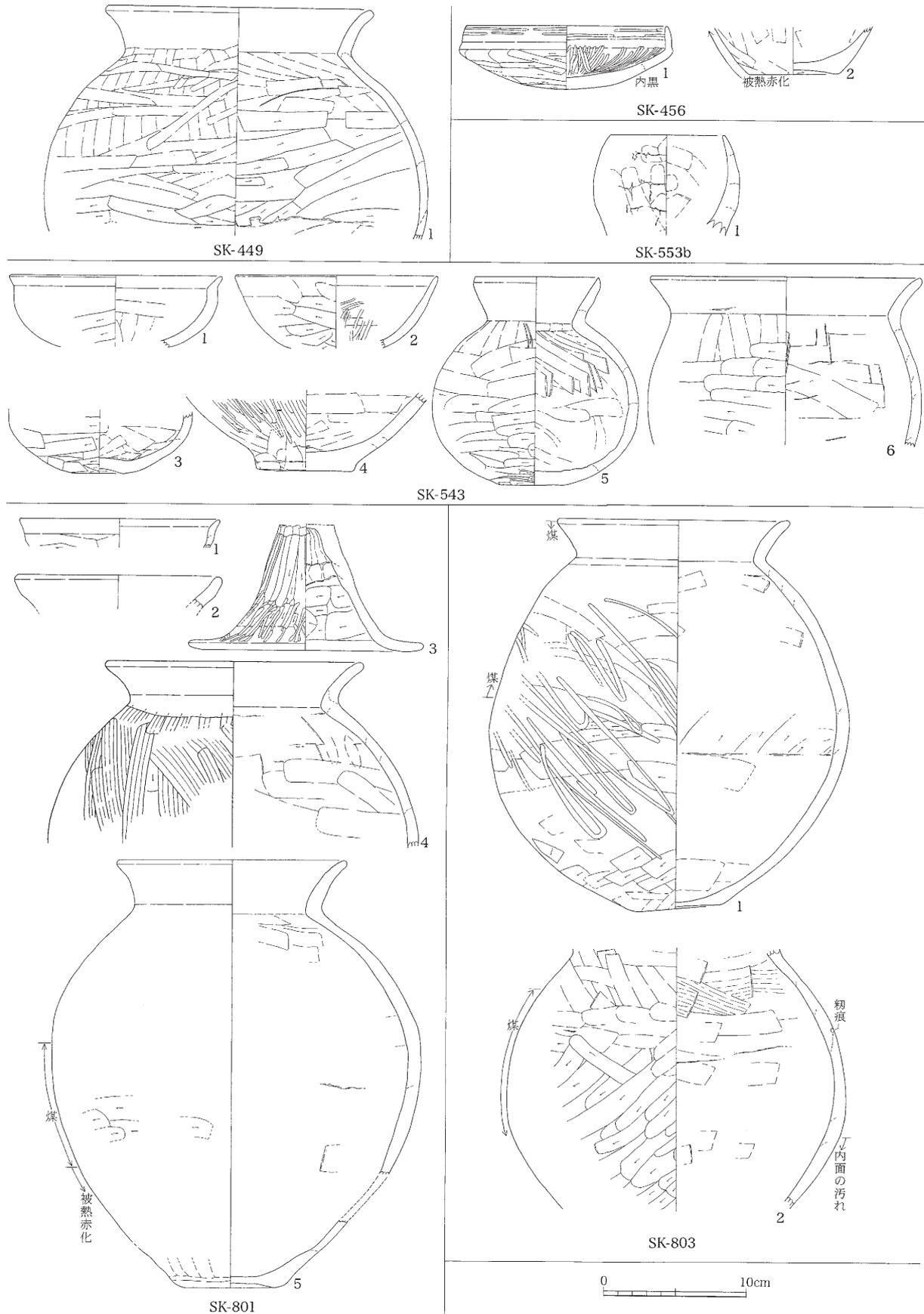
1 土師器 杯	口 復 14.9 高 残 5.0	口～体部境の稜が明瞭。外面は上半部にヨコナデ、下半部にヨコヘラケズリ。内面は下半部に1方向ヘラナデ、上半部にヨコナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	5YR4/4 にぶい赤褐 やや粗い 白礫～細粒多、赤・ 黒・透明粗～細粒少 硬質	底上 3cm 口 1/6 周 8
2 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 5.1	外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデとユビオサエ。内面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラナデ後に縦～斜位ヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い 灰色礫と白・黒・ 赤・透明細粒少 軟質	底上 11cm 口 1/12 周、体 1/6 周 2
3 土師器 小形壺	高 残 4.4	外底面は円周方向のヘラケズリで凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は円周方向および横～斜位のヘラナデ。	5YR6/4 にぶい橙 粗い 白・赤・灰色・透明粗 ～細粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	底上 9cm 底全周 19
4 土師器 壺	高 残 5.6 底 6.8	外底面は多方向ヘラケズリ。外面は胴部にナナメナデ後タテヘラミガキ、胴下端に横位の軽いナデ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ。外面の胴下位全体に煤が見られるが、底部に被熱痕はない。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白・黒・透明細粒少 軟質	底上 9～11cmが接合 底全周 18、24
5 土師器 小形壺	口 復 8.6 高 14.6 底 4.4 最大 復 14.3	外底面は円周方向のヘラケズリで平底状。外面体部は上半にタテ後ナナメヘラナデ、下半ヨコヘラケズリ。口～頸部内外面はヨコナデで、口外面に弱い稜あり。外面の肩部に焼成前の浅い刻線または傷がある。内面体部は下半に多方向および横位ヘラナデ、上半に強いナナメヘラナデ。内面下半の器面が著しく剥落している。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 白粗～細粒多、黒・ 透明細粒少 やや硬質	底上 6cm。底上 11cmの 1片も接合 口 1/12 周、頸 1/3 周、 底 5/6 周 30、35
6 土師器 甕	口 復 19.0 高 残 11.9 最大 復 19.2	外面は胴部タテヘラナデ後ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部ヨコナデ。内面胴部ヨコヘラナデ。胴部外面に不規則な被熱赤化痕と煤が見られる。	10YR6/6 橙 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒多、白礫と赤粗粒と黒 細粒やや多 やや軟質	底上 6～9cmが接合 口 1/8 周、頸 1/5 周 4、5

SG10区 SK-553b

1 土師器 小形土器	口 復 7.9 高 残 7.1	外面は軽いユビオサエとナデで、粘土紐積み痕をよく残す。内面はそれよりもやや丁寧なナデとヘラナデで、粘土紐積み痕は残していない。全体の調整が粗雑。	2.5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒やや多、白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	底上 13cm 口 1/12 周、体 1/3 周 2 000203、上半部、ト レンチ
------------------	--------------------	--	---	--

SG10区 SK-801

1 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 2.0	外面体部は上位にヨコヘラナデ、中位にヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ。	10YR4/2 灰黄褐 やや粗い 白細粒多、白・赤 粗粒と黒・透明細粒少 やや軟質	口 1/6 周
2 土師器 壺	口 復 14.6 高 残 2.3	口縁部上半が弱く内彎する。内外面ヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白細粒やや多、赤・ 黒・透明細粒少 やや軟質	口 1/6 周
3 土師器 高杯	高 残 8.9 脚裾 復 16.4	外面はタテヘラケズリと裾部ヨコナデ後に下位を中心としてタテヘラミガキ。内面は粘土紐の3段重ねた痕をよく残して上部タテナデ、下部ヨコヘラケズリ、裾部ヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・灰色礫～細粒 と透明粗～細粒やや少、黒細 粒少 やや硬質	脚柱全周、脚裾 1/4 周



第 186 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑(6) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

4 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 13.0 最大 復 25.6	外面は肩部タテハケ後に口～頸部ヨコナデ。内面は胴部ナデ、肩部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 赤粗～細粒多、白・黒・ 透明粗～細粒やや多 軟質	口 1/4 周、頸 2/3 周
5 土師器 甕	口 16.0 高 30.0 底 復 6.2 最大 25.6	外底面中央はおそらくヘラケズリで凹底状にする。外面胴部タテヘラナデとヨコヘラケズリ。内面胴部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。下位の外面が被熱し、中位に煤が少量見られる。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗粒と白・透明 粗～細粒やや多、黒細粒少 やや軟質	大半はSK-801出土。SK-803の底上5cmにも1片あり 口 2/3 周、頸 3/4 周、 底 1/2 周 SK-803 9
SG10 区 SK-803				
1 土師器 甕	口 16.2 高 27.2 底 5.9 最大 25.1 重 残 2336	外底面は1方向ヘラケズリで少し凹底状。外面胴部はナメヘラナデ後に中位と下位をヘラケズリし、中位にナメヘラミガキ。内面胴部はヘラナデ後に中位の積み上げ休止部が厚くなっていた部分をナメヘラケズリ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面の胴部上位から口縁部に煤が付着する。被熱痕は不詳。	7.5YR8/8 黄橙 粗い 白・黒・透明粗～細粒 多、赤・灰色細粒やや多 やや軟質	SK-803の底上6～19cm。破片のうち約半数はSK-801で出土 ほぼ完形 口 5/6 周、底全周 1～4、SK-801
2 土師器 甕	高 残 18.4 最大 復 23.6	外面は上位にヘラナデとナデの後、中位以下をナメヘラケズリ。内面はヨコヘラナデで、肩部には浅いハケメも用いる。外面に稲籾圧痕が1箇所あり、胎土に混ぜられていたものが器面調整で現れたものと見られる。外面の中位に煤が多く、内面の下位に暗褐色の汚れが明瞭に付着する。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、赤粗～細粒やや多、半透 明細粒少 やや軟質	底上13～14cmの2片が接合 胴 1/3 ～ 1/4 周 10、11
SG10 区 SK-819				
1 土師器 壺	口 復 15.8 高 残 6.4	外面は口縁部ヨコナデ後に肩部ナメヘラナデ。内面は肩部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。 [注記]一括、SK-820 17.40-19.60 上面	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 黒細粒少 軟質	SK-820の遺構確認面出土の1片がSK-819の3片と接合 口 1/12 周、頸 1/6 周 注記は左欄
SG10 区 SK-820a・b				
1 土師器 粗製鉢	口 残 10.8 高 残 4.7 底 6.5	口縁部の小片が1点あるが、接合できないので器高は不明。外底面は木葉の裏面圧痕。外面体部は非常に雑なコビオサエとナデ。内面底部はやや雑な1方向コビナデ、内面体部はやや雑な横位ナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗粒やや多、白 細粒少 硬質	底全周 一括
SG10 区 SK-901				
1 土師器 小形壺	高 残 3.7 底 5.8 最大 復 12.4	外底面は円周方向にヘラケズリして平底にする。外面体部ヨコヘラケズリ。内面底部はおそらく多方向ヘラナデ、内面体部ヨコヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 黒・透明粗～細粒 やや多、赤粗粒と白細粒少 軟質	底上10cm 底 1/6 周 1
SG10 区 SK-902				
1 土師器 高杯	口 復 18.0 高 残 5.8	外面は杯底部ナメヘラケズリ、杯体部ナデと口縁部ヨコナデ後にタテヘラミガキ。内面はナデまたはヘラナデと口縁部ヨコナデ後に杯体部タテヘラミガキ。 [注記]2か3、4、西半1層、2層、2層下半	2.5YR6/8 橙 緻密 白礫～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	底上9～28cm。西半1層と2層と2層下半の破片も接合 口 1/4 周、杯底 1/3 周 注記は左欄
SG10 区 SK-903				
1 土師器 杯	高 残 1.8 底 復 4.4	外底面はナデでやや上げ底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は円周方向の密なヘラミガキ。内面は剥落して調整が不明瞭。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白・灰色礫と白粗 ～細粒と黒細粒少 やや硬質	南半部1層 底 2/3 周 南半1層
2 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 4.1 最大 復 13.2	口～体部境の稜が内面で明瞭。外面体部ナデ、内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面に7cm大の黒斑あり。 [注記]24、20.0-20.3 1層、Bトレ	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 赤・透明粗～細粒 やや多、白・黒粗～細粒少 やや硬質	底上7cm。20.0-20.3グリッドの1層とBトレ各1片が接合 口 1/4 周 注記は左欄
3 土師器 高杯	口 復 17.2 高 残 4.7	外面は口縁部ヨコナデ後に杯底～体部をタテヘラナデ。内面は杯体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後にタテヘラミガキ。 [注記]2層、南半1層、S-907 1、S-907 20.0-20.3 1層、3層、20.1-20.3 1層	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗粒と白粗～細 粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	1～2層。20.0-20.3グリッド周辺の1～3層の5片が接合 口 5/12 周、杯底 2/3 周 注記は左欄
4 土師器 高杯	高 残 2.5	高杯でない可能性もある。やや厚く重い。外面はタテヘラミガキ。杯部外底面は放射状ケズリ後に体部下端の隆帯を付ける。内面は多方向ヘラナデ。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白 粗～細粒少 やや硬質	底上11cmと20.1-20.3グリッド遺構確認面の各1片が接合 口 1/3 周、杯底 2/3 周 1、20.1-20.3 上面
5 土師器 高杯	高 残 8.8	外面は裾部ヨコナデと脚柱部タテヘラケズリ。内面は倒立状態で反時計回りの粘土積み上げ痕を明瞭な段として残し、また脚径を細く絞った縦皺が顕著。 [注記]南半1層、S-907 20.0-20.3、20.0-20.3 1層、Bトレ、20.1-20.3 1層、北半2層	5YR6/6 橙 粗い 赤粗～細粒多、白・黒・ 透明細粒少 やや硬質	南半1層。20.0-20.3グリッド周辺のBトレンチ・1層・2層が接合 脚柱 3/4 周 注記は左欄
6 土師器 高杯	高 残 7.5	外面は裾部ヨコナデと脚柱部にナデ(?)の後タテヘラミガキ。内面は粘土積み上げ痕を明瞭な段として残し、脚を絞った縦皺と軽いタテナデ痕をよく残している。内面裾部はヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白 粗～細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	底上6cm。1層下半の2片が接合 脚柱上半 1/6 周、下半 全周 23、1層下半
7 土師器 高杯	高 残 10.7 最大 残 18.1 孔 0.69	脚に推定3方向の円形透が2箇所残存する。外面は脚部タテヘラミガキ、杯底部ヨコヘラナデ、杯体部に横～斜位ヘラナデ後ヨコヘラミガキ状で光沢を持つ調整を少し行う。脚内面は上部が絞目状で下部がナメナデ。杯内面は底面に多方向のヘラケズリ後ヘラミガキ。杯体部はヨコヘラナデで、ヘラミガキ状に光沢を持つ調整を少し行う。 [注記]10、S-907 20.0-20.3 1層、3・4層、20.1-20.3 1層	2.5YR6/6 橙 やや粗い 白粗～細粒多、赤・ 黒・透明粗～細粒やや多 硬質	底上15cm。20.0-20.3周辺の1～4層の9片が接合 杯底 3/4 周、脚柱 1/2 周 注記は左欄
8 土師器 甌	口 復 23.0 高 推約 22 底 復 4.0 最大 復 24.2	破片が少ないので、器高と底部径は推定復原。外面は下半ナデと上半ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は下端から口縁部にかけてヨコヘラケズリ、胴部に斜位のヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。口縁部の仕上げナデを最後に十分行わない状況が外面に見られる。外面全体に煤がやや多く付着する。 [注記]9、16、1層下半、2層、3層、南半1層、SK-902 1、SK-906 2層、19.8-20.6、19.9-20.3 Aトレ、20.0-20.2 1層、20.0-20.3 1層、Bトレ、上面、20.1-20.3 1層、3層、上面、S-907 4、北半2層、S-907 20.1-20.3 1層、3層下半	10YR5/4 にぶい黄褐 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒やや多 やや硬質	底上3～17cmと1層下半～2層。SK-902・906の各1片や20.0-20.3グリッド周辺の1～3層の約60片と接合 口 3/4 周、底 1/8 周 注記は左欄

SG10 区 SK-904

1 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 2.8 最大 復 13.9	外面は体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	10YR6/2 灰黄褐 やや粗い 黒・透明粗～細粒 やや多、灰色礫と赤粗粒と白 細粒少 やや軟質	底上 2cm 口 1/6 周 6
2 土師器 高杯	高 残 1.9 脚裾 復 15.8	内外面の裾部をヨコナデ後、外面にタテヘラミガキ。 [出土状態] 下部 2 層と 20.0-20.3 グリッド 1～2 層が接合。19.9-20.2 グリッドの 3 層にも破片あり [注記] 下部 2 層、19.9-20.2 A トレ 3 層、C トレ、20.0-20.3 B トレ、S-907 20.0-20.3 1 層	7.5YR6/6 橙 緻密 白粗～細粒やや少、赤・黒・透明細粒少 硬質	脚裾 5/12 周 出土状態および注記は左欄
3 土師器 高杯	高 残 4.7	脚柱部が中実でやや重い。外面はナデ後にタテヘラミガキ。内面は上部タテナデ後に下部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 灰色粗粒多、赤・透明粗～細粒と白・黒細粒少 やや硬質	南半 1 層 脚中位全周 南半 1 層
4 土師器 小形甌	高 残 5.5 底 復 4.6 孔 2.2	底部が厚く重い。外底面は雑なナデで、草本植物の莖らしい圧痕も少し見られる。外面体部に斜～横位ヘラナデ。内面は孔縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラナデ(または浅いハケメ)。 [注記] 下部 2 層、19.9-20.3 1 層上面、20.1-20.3 1 層、S-907 20.1-20.3 1 層	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒やや多、白・黒粗～細粒少 軟質	下部 2 層の 1 片が周辺 包含層の 3 片と接合 底全周 注記は左欄

SG10 区 SK-906

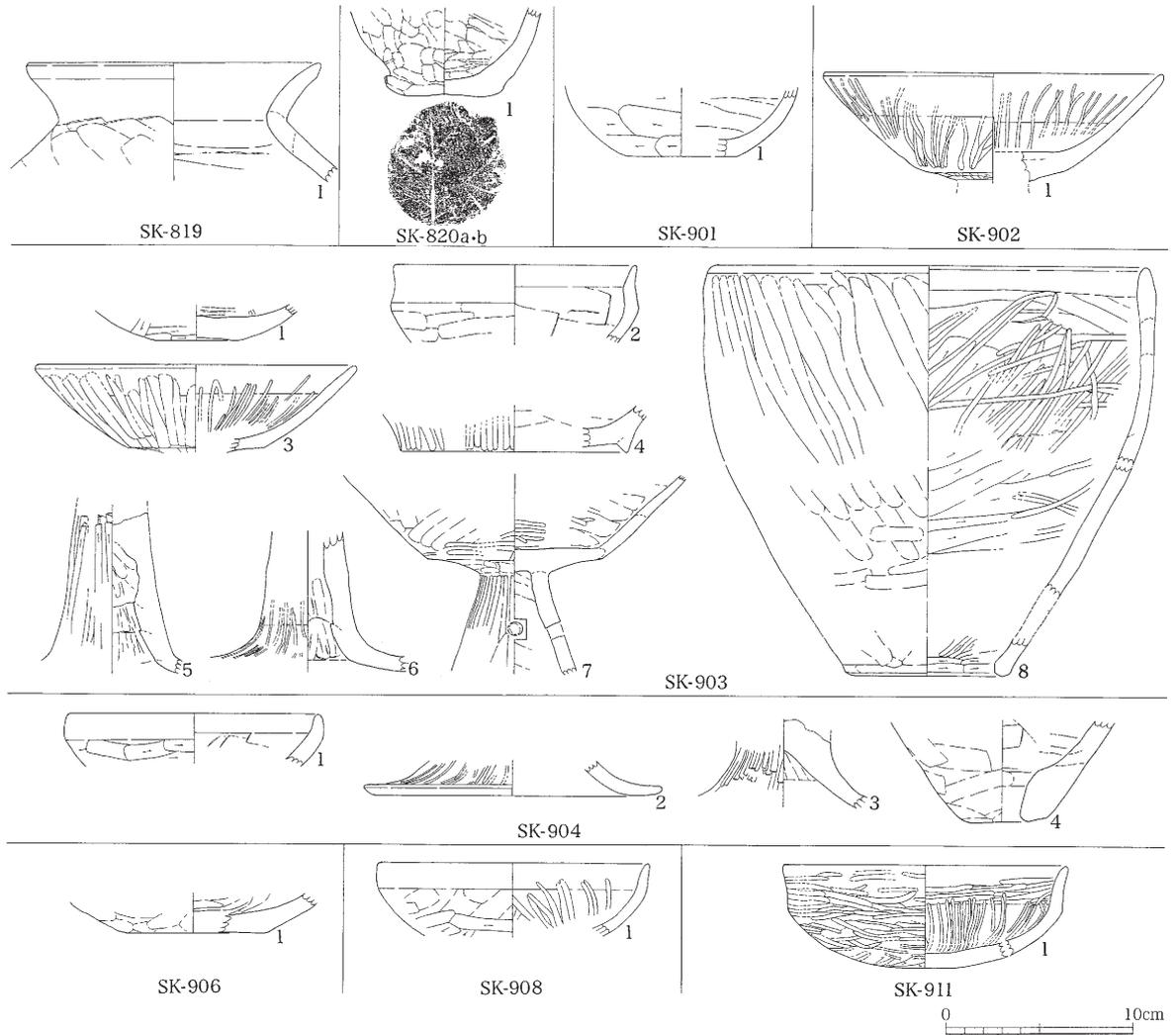
1 土師器 大形壺	高 残 2.1 底 復 8.0	外底面は円周方向のヘラケズリで中央部がわずかに凹む。外面胴下端にやや強いナメヘラナデ。内面底部に多方向のヘラナデ。	10YR6/2 灰黄褐 粗い 灰色・透明粗～細粒多、白・黒細粒少 硬質	2 層 底 1/4 周 2 層 000314
-----------------	--------------------	---	--	------------------------------

SG10 区 SK-908

1 土師器 杯	口 復 14.4 高 残 3.9	やや薄い。外面体部は上半ナメナデと下半ヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面体部はヨコナデ後に斜放射状のヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	底上 11cm。20.0-20.2 グリッド 1 層の 1 片が 接合 口 1/6 周 4、20.0-20.2 1 層
---------------	---------------------	--	--	---

SG10 区 SK-911

1 土師器 杯	口 復 15.2 高 推 5.5	底部片と体部の接点がないので、器高は図上復原による。外面は底部に 1 方向ヘラケズリ、体部ヨコヘラナデ後ヨコヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はナデ後に放射状ヘラミガキ。外底面に 9cm 大の黒斑あり。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 白・黒・赤・透明細粒少 やや硬質	SI-28 の入口ピットと当初考えられた土坑内 口 5/12 周、底 1/3 周 SI-28 入口 P、B-B'
---------------	---------------------	---	---	--



第 187 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (7) 遺物

第 12 節 古墳時代の低地遺物包含層 (第 188・189 図、写真図版 212)

【位置】 SG10 区中央部西半の 19.5-20 グリッドから 20-20 グリッドの、集落から東に下った低地部分で土師器片を含む層を調査し、古墳中期を中心とする土師器と小土坑 8 基 (SK-901 ~ 904・906・908 ~ 910) を確認した。最初は土師器の散布範囲に幅 30cm の A トレンチ～F トレンチを設定して掘り下げた。その後、北半部の E から F トレンチまでの間と、南半部の B から C トレンチまでの間で遺物包含層を平面的に掘り下げた。D・E トレンチ付近は遺物が少ない。遺物は A トレンチよりも北側に多く、特に遺物が多い B と C トレンチの間では一般的な竪穴建物跡と同程度の密度で土師器片が出土した。

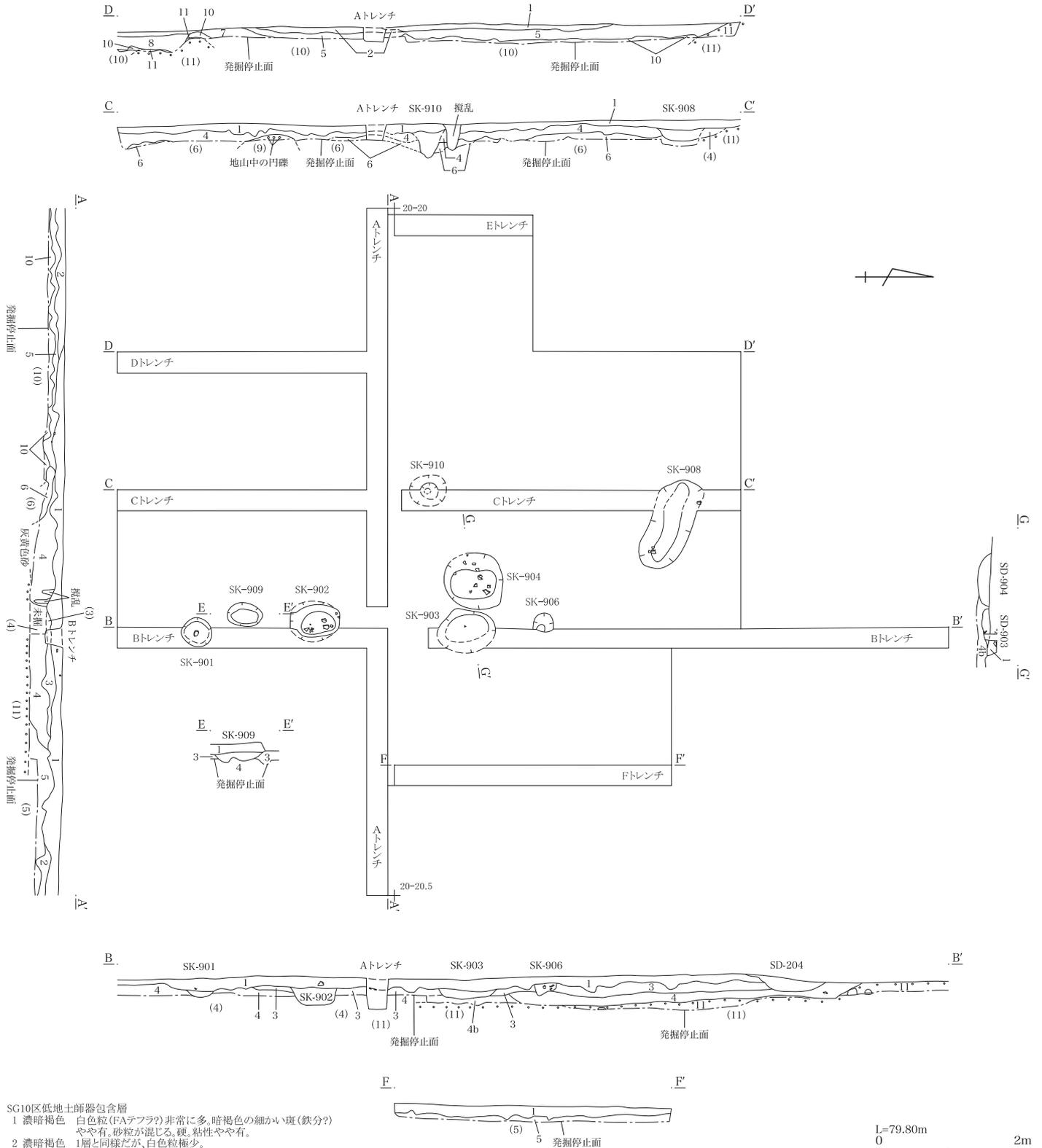
【覆土】 遺物を含む黒褐色の 1 層は厚さ 20cm 程で古墳後期初頭の Hr-FA と見られる白色粒が非常に多い。3・4 層に少量の遺物があり、中期前半と見られる棒状脚気味の高杯を含む (31)。下の 5・6・8 層は無遺物で、灰色粘土塊や縄文草創期の男体 - 七本桜軽石粗粒を含む。深く掘り下げた A トレンチで確認した基盤層は、水成堆積の灰紫褐色粘質土 (10 層) と礫混じり層 (9・11 層) で、東へ低く傾斜する傾向がある。

【小土坑】 小土坑は、上を 1 層が覆うので古墳中期頃の土坑である。詳細は第 108 表で説明した。SK-908 は土坑と認定するか迷う浅いくぼみである。SK-904 の南側は現地調査時に「S-905」と仮称したが、1 層下部が少し深い部分で、土坑ではない。SK-906 東側も遺物が多いので「S-907」と仮称したが、土坑は存在しなかった。古墳時代の遺物を使用・遺棄・廃棄し、浅い土坑を設ける地区であったと考えられる。

【出土遺物】 古墳中期中葉 (1・3・24)・後葉 (2・37) の土師器が多く、中期末葉もあるが (34・35)、後期の遺物は僅かである (7・8)。高杯が多く、脚を絞ったタテジワが脚内面に目立つ。内外面赤彩の杯部 (17) と外面赤彩の脚 (18) は同個体かもしれない。24 は脚がやや薄く、推定 3 方の円形透孔を持つ。透孔を持つ土師器高杯は SG10 区 SI-25 などにある。35 は黄灰色胎土の薄く軽い短脚高杯で、他地域産の疑いがある。44 は白色針状物質 (骨針) を含む搬入品で SG10 区 SI-23 などに例がある。47 は二重口縁状。

第 110 表 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の低地遺物包含層 出土遺物

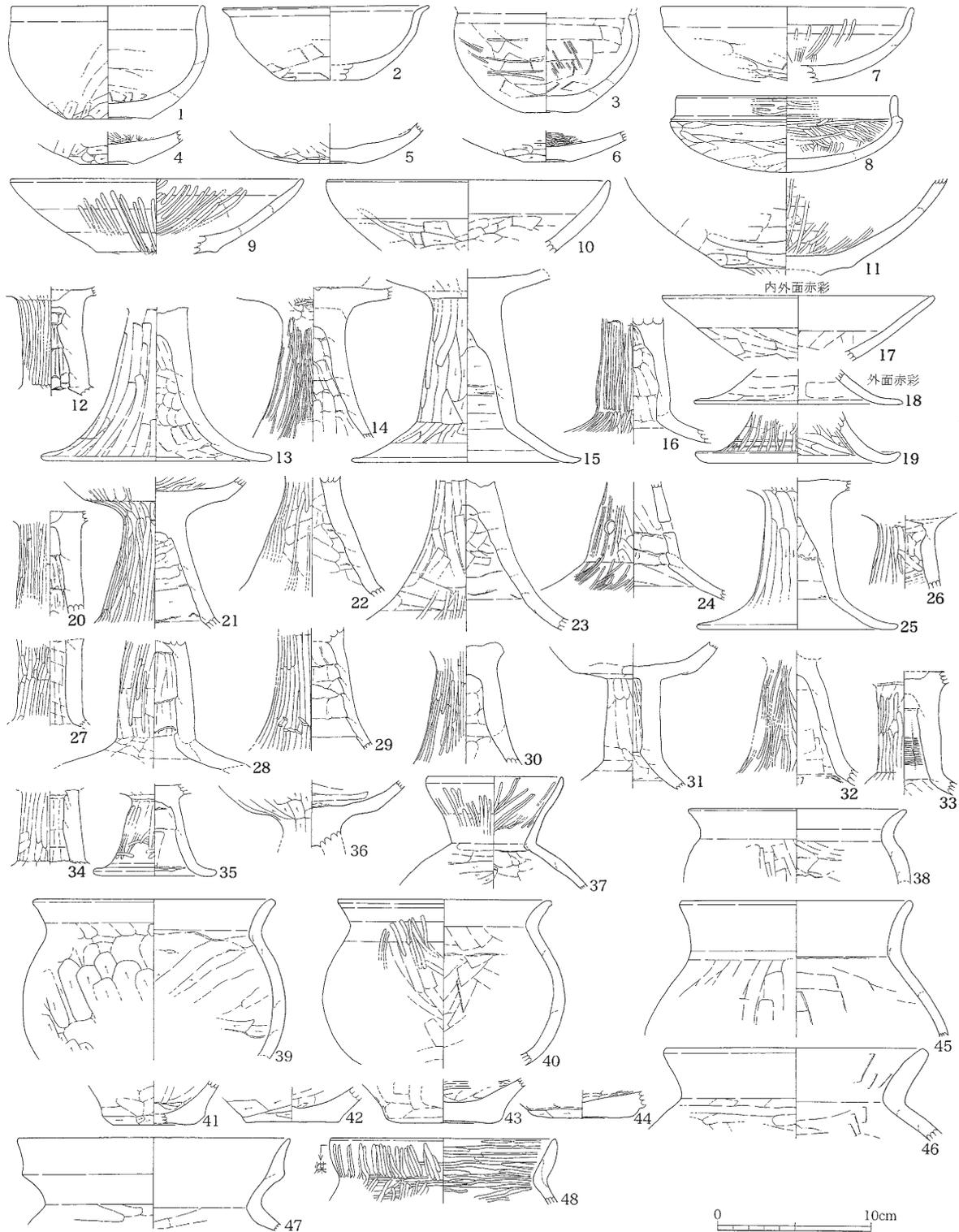
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 7.4 底 5.3 最大 復 13.0	外底面は軽く雑にナデただけでほとんど無調整の弱い凹底状。外面体部ナメナデ後に下端ナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は底部に円周方向のヘラナデ、体部にヨコナデまたはヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗粒と透明細粒多、灰色粗粒と白・黒細粒少 やや硬質	口 1/18 周、底全周 20.0-20.3 1 層、20.1-20.3 1 層、S-907 20.0-20.3 1 層
2 土師器 杯	口 復 13.4 高 4.8 底 復 5.2	口縁部破片が小さいので復原口径は参考値。外底面と外面体部にヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。内面は体部ヘラナデと口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	口 1/40 周、頸 1/18 周、 底 7/12 周 20.0-20.1 1 層
3 土師器 杯	高 残 6.5 底 3.5 最大 復 12.0	外底面は軽いナデ。外面体部はナメヘラナデ後にヨコヘラミガキ、口～頸部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ後、体部に疎らなナメヘラミガキ。 [注記]19.8-20.3 上面、20.0-20.3 1 層、20.1-20.3 1 層、S-907 20.0-20.3 1 層、20.1-20.3 1 層	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白細粒多、白・灰色粗粒と赤・透明細粒少 やや硬質	底 1/2 周、頸 1/6 周 注記は左欄
4 土師器 杯	高 残 2.1 底 3.5	外底面は凹底状でナデ。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は多方向または斜放射状の密なヘラミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明細粒多、白・灰色礫と白粗粒少 やや硬質	底全周 20.1-20.2 1 層 20.1-20.2 X20.2
5 土師器 杯	高 残 2.4 底 3.8	外底面はナデで少し凹底状。外面体部に横位と斜位のヘラケズリ。内面はヘラミガキしていたかもしれないが、大半が剥落しているため調整不明。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・赤粗～細粒多、黒細粒少 やや軟質	底全周 20.1-20.2 X20.1 ベルト 1 層
6 土師器 杯	高 残 2.0 底 3.0	外底面は凹底状で、丁寧なナデの後に軽くヘラミガキを疎らに行う。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は多方向のヘラナデ後ヘラミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒と透明細粒やや多、灰色粗粒と黒細粒少 やや硬質	底全周 20.1-20.1 1 層
7 土師器 杯	口 復 16.1 高 残 4.9 最大 復 16.4	外面体部は下位ナメヘラケズリ、上位ヘラケズリかヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面底部多方向ヘラケズリ後に体部ナデまたはヘラナデと口縁部ヨコナデ、体部放射状ヘラミガキ。器面が磨耗して調整がやや不明瞭。現状で漆仕上げは見られない。 [注記]20.0-20.3 1 層、S-907 20.0-20.3 1 層、20.1-20.3 1 層、北半 2 層	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・黒粗～細粒やや多、赤・透明粗～細粒少 やや硬質	口 1/12 周、体 1/8 周 注記は左欄
8 土師器 杯	口 復 14.0 高 5.0 最大 復 15.1	外面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面の体部に斜位と横位、底部に多方向のヘラミガキを密に行う。現状で漆は見られない。 [注記]19.8-20.2 1 層、19.8-20.3B トレ、19.9-20.2 1 層、19.9-20.2C トレ、20.0-20.2C トレ、20.1-20.3 1 層	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	口 1/24 周、体 5/12 周 注記は左欄



- SG10区低地土器包含層
- 1 濃暗褐色 白色粒 (FAデフラ?) 非常に多。暗褐色の細かい斑 (鉄分?) やや有。砂粒が混じる。硬。粘性やや有。
 - 2 濃暗褐色 1層と同様だが、白色粒極少。
 - 3 暗灰褐色 暗褐色の細かい斑やや有。白色粒なし。硬。粘性やや有。4層よりやや灰色気味。
 - 4 濃暗褐色 暗褐色の細かい斑やや有。白色粒なし。硬。粘性やや有。
 - 4b 黒褐色 白色粒なし。硬。粘性強。
 - 5 濃暗褐色 灰色粘質土混じり。4層に10層の塊・小塊がかなり多く混じる。やや粘性強。硬。
 - 6 灰褐色 砂質土。白色軽石粒 (径3~10mm・七本椀軽石粒) 多。
 - 7 暗灰褐色 暗褐色のやや大きい斑やや多。砂質気味。やや硬。
 - 8 濃暗褐色 5層に類似。暗褐色の細かい斑と10層の小塊少。やや硬。粘性やや有。
 - 9 灰白色 礫層。小円礫 (1~3cm) 多。灰白色砂少。硬。しり強。
 - 10 灰紫褐色 粘質土。硬。粘性強。
 - 11 濃暗褐色 礫混じり層。黄色砂の大塊・円礫 (径3~10cm) やや多。やや砂質気味。硬。

第188図 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の低地遺物包含層調査区と SK-901~910

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第 189 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の低地遺物包含層 遺物

9 土師器 高杯	口 復 19.0 高 残 4.9	外面は杯底部を放射状ヘラケズリ、杯体部ナデ後に中位以上をヨコナデして杯体部タテヘラミガキ。内面は杯底部ヘラケズリ、杯体部ナメナデ、口縁部ヨコナデ後、杯体部ナメヘラミガキ。 [注記]19.9-20.2C ベルト、20.0-20.1 1 層、20.0-20.1C ベルト一括、20.0-20.2 1 層	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、 白・黒粗～細粒やや多、透明 細粒少 やや硬質	口 1/3 周 注記は左欄
10 土師器 高杯	口 復 18.3 高 残 4.6	外面はナデ後に体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部に横～斜位ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、 白・黒粗～細粒少 やや硬質	口 1/5 周 20.0-20.3 1 層、S-907 北半 2 層

第 12 節 古墳時代の低地遺物包含層

11 土師器 高杯	高 残 6.3 最大 残 20.8	外面に口縁部ヨコナデが見えないので、あと 1～2cm の高さが推定される。外面は杯底部を放射状ヘラケズリ、杯体部はヨコヘラナデと下位ヨコヘラケズリ。内面は横位ナデの後、縦位ヘラミガキ。 [注記]20.0-20.3 1 層、20.1-20.3 1 層、S-907 北半 2 層	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒多、 白・黒・透明細粒少 やや軟質	杯底 7/12 周 注記は左欄
12 土師器 高杯	高 残 7.1 脚柱 3.9	外面は脚柱部にタテヘラケズリ後タテヘラミガキ、杯底部に放射状ヘラケズリ。杯内面は剥落して調整不明。脚内面は粘土組積み痕をよく残し、脚柱を絞って細くしたために縦皺が多い。	5YR4/6 赤褐 やや緻密 白・赤・灰色粗粒多、 白・黒細粒少 硬質	脚柱全周 20.1-20.2 上面
13 土師器 高杯	高 残 10.0 脚裾 復 15.0	外面は脚部タテヘラナデ、裾部ヨコナデ後タテヘラナデ。内面は上部ユビオサエとやや雑なナデ、下部ヨコヘラナデと裾部ヨコナデ。 [注記]20.0-20.3 1 層、20.1-20.3 1 層、S-907 20.0-20.3 1 層	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と 透明細粒多、黒細粒少 硬質	脚上半 1/2 周、脚裾 1/4 周 注記は左欄
14 土師器 高杯	高 残 9.8	外面は脚部に密なタテヘラミガキ、脚上端と杯底部ナデ後に杯底部を少しヘラミガキ。杯部内底面はおそらくヘラミガキ。脚部内面はタテナデで粘土組積み痕が少し残る。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒多、 白粗～細粒やや多、黒・透明細 粒少 硬質	脚柱全周 20.0-20.2A ベルト 1 層、 20.1-20.3 1 層
15 土師器 高杯	高 残 12.7 脚裾 復 14.8	外面は全体をタテヘラケズリして脚上端ナデ、脚裾ヨコナデ。杯内面は磨耗して調整不詳。脚内面は脚柱部ヨコヘラケズリ、脚裾部ナデとヨコナデ。 [注記]20.1-20.3 1 層、20.1-20.3B トレ下半、S-907 20.1-20.3 1 層、20.2-20.3 1 層	5YR6/8 橙 やや粗い 白・赤・透明粗～ 細粒多、黒粗～細粒少 やや軟質	脚柱全周、脚裾 1/12 周 注記は左欄
16 土師器 高杯	高 残 8.2 脚柱 4.0	外面はナメナデとタテナデの後に密なタテヘラミガキ。脚内面はタテナデで、頂部がやや雑だが中位以下は丁寧にナデている。脚裾部内面はヨコナデ。	2.5YR5/8 赤褐 やや緻密 赤粗粒と白・黒・ 赤・透明細粒少 やや硬質	脚裾全周 20.0-20.1 5 層、20.0- 20.2A ベルト
17 土師器 高杯	口 復 17.6 高 残 4.2	内外面ともに杯体部を横～斜位ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。内外面全体を赤彩する。18 と同一個体の可能性あり。 [注記]19.3-20.4 上面、20.0-20.3 1 層、20.0-20.3F ベルト、20.1-20.3 1 層、20.1-20.4F トレ 5 層、S-907 北半 2 層	2.5YR5/4 にぶい赤褐 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや多、灰色礫と黒・透明粗 粒少 やや軟質	口 7/12 周 注記は左欄
18 土師器 高杯	高 残 2.3 脚裾 復 13.6	内外面ともに脚裾部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラナデまたはヨコナデ。外面だけ赤彩。外面のナデ痕は赤色塗彩時に生じた痕かもしれない。17 と同一個体の可能性あり。	10YR5/4 赤褐 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや多 やや軟質	脚裾 1/4 周 20.1-20.3 1 層、 S-907 20.1-20.3 1 層
19 土師器 高杯	高 残 3.3 脚裾 復 11.4	内外面ともに脚部ナデ後に裾部ヨコナデ。外面の裾部ヨコナデは浅い 2 本の凹線を生じていて、ヨコナデの後にタテヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒と白細 粒やや多、黒・透明細粒少 やや硬質	脚裾 1/6 周 20.0-20.0 上面
20 土師器 高杯	高 残 6.6	外面は脚柱部タテヘラケズリ後にタテヘラミガキ。杯部の内底面は磨いてあるかもしれないが不確実。脚部内面は粘土組を積んで成形した後に、絞って細くしたために縦皺が多く生じている。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・灰色粗～細粒 と透明細粒多、赤粗～細粒少 硬質	脚柱全周 20.1-20.1 1 層
21 土師器 高杯	高 残 9.8	外面は脚部と杯底部をタテヘラケズリ後タテヘラミガキ、杯体部タテヘラナデ後に疎なタテヘラミガキ。杯内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラミガキ。脚柱部内面は上部ナデ、中位ヨコヘラケズリ。 [注記]20.0-20.1 1 層、20.0-20.1 上面、20.1-20.1 上面	7.5YR4/6 褐 やや緻密 白・透明粗～細粒 やや多、赤・黒細粒少 やや硬質	杯底 1/4 周 注記は左欄
22 土師器 高杯	高 残 7.9	外面にタテおよびナメヘラナデ後、疎なタテヘラミガキ。脚内面はユビナデで、粘土積み上げ痕が少し残る。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒細粒やや多、透明細粒少 やや硬質	脚上半 3/4 周 19.9-20.1D トレ
23 土師器 高杯	高 残 9.9	外面はタテおよびヨコヘラナデ後に裾部ヨコナデ。下位にタテヘラミガキを確認できるが、中位以上では不明。内面は上位ナデ、中位ヘラナデ、下位ヨコナデ。	7.5YR5/3 にぶい褐 やや緻密 白・透明粗～細粒 多、灰色粗粒と黒細粒少 硬質	脚上半全周 20.0-20.3 1 層、 S-907 20.0-20.3 1 層
24 土師器 高杯	高 残 7.7	やや薄く軽い。径 7～8mm の孔を 3 方に持っていたうちの 2 方向が残る。外面は脚柱部タテヘラケズリと脚裾部ナデの後、全体をタテヘラミガキ。内面は脚柱部が雑なナメナデで、下半に組積みをよく残し、脚裾部は斜位ヘラナデ後に端部ヨコナデ。 [注記]19.9-20.1 上面、20.0-20.3 1 層、20.0-20.3B トレ	2.5YR4/6 赤褐 やや緻密 白粗～細粒多、赤・ 黒・透明細粒少 やや硬質	脚上半 1/2 周、脚下半 1/3 周 注記は左欄
25 土師器 高杯	高 残 9.8 脚裾 復 13.0	外面は脚部タテヘラケズリ、杯底部ナメヘラケズリ、杯裾部はヨコナデと推定されるが、磨耗して不明確。杯内面はミガキの有無が磨耗して不詳。脚内面は上部ナメナデ後に下部を成形して下部ヨコヘラナデ、裾部ヨコナデ。 [注記]20.0-20.3 1 層、S-907 20.0-20.3 1 層、20.1-20.3 1 層	2.5Y5/8 明赤褐 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、黒粗～細粒と赤細粒少 やや軟質	脚上半全周、脚裾 1/6 周 注記は左欄
26 土師器 高杯	高 残 4.8 脚柱 3.8	外面は杯底部ヨコヘラケズリ、脚部に密なタテヘラミガキ。脚内面はやや雑なタテナデとヨコナデ。 [注記]20.0-20.1A ベルト、20.0-20.2 1 層	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・灰色礫～細粒 と黒細粒少 硬質	杯体～底一部、脚上半 1/2 周 注記は左欄
27 土師器 高杯	高 残 5.7 脚柱 4.2	外面は密なタテヘラミガキ。内面は横位のユビナデ後に脚を絞って細くしたと見られる縦皺状の絞り目を生じている。内面の脚裾部はナデ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒やや多、黒細粒少 硬質	脚柱全周 S-907 20.0-20.3 1 層
28 土師器 高杯	高 残 8.3	外面はタテヘラナデで、脚柱部はタテヘラミガキも行う。脚部内面は絞って細くしたために縦皺が生じ、粘土組積み痕を明瞭に残す。内面裾部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤・透明 細粒やや多、白粗粒少 やや硬質	脚柱全周、下半 1/2 周 20.1-20.2B ベルト 1 層
29 土師器 高杯	高 残 8.1	やや薄い。外面は密なタテヘラミガキ。内面は粘土組積み。単位ごとにユビオサエと軽いナデを行い、積み上げ後は仕上げ調整を行わない。	7.5YR4/3 褐 やや緻密 白粗～細粒やや多、 赤粗粒と透明細粒少 やや硬質	脚上半全周 20.0-20.3 1 層、 S-907 20.0-20.3 1 層
30 土師器 高杯	高 残 7.6	外面に密なタテヘラミガキ。脚内面にユビナデ。内面の粘土組積み痕はよく消されている。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒細粒やや多、透明細粒少 硬質	脚上半全周 19.5-20.3 上面
31 土師器 高杯	高 残 9.6	杯底～脚部は赤褐色、杯体部は黄灰色の胎土を使う。外面は脚部タテナデと裾部ヨコナデ。外面杯部はおそらくナデで、杯底と杯体部の間に接合痕をよく残す。杯部内面は器面が荒れて調整不詳。脚部内面は細く絞ったために縦皺が多く生じ、脚裾部はナデと下位にヨコナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや硬質	脚柱全周 20.0-20.2、 20.1-20.2 1 層、20.1- 20.2 3 層
32 土師器 高杯	高 残 8.1 最大 残 7.8	脚外面はタテナデ後にやや密なタテヘラミガキ。脚柱部内面はやや強いヘラナデまたはヘラケズリで、少し光沢を持つ。脚裾部内面にヨコヘラナデ。	2.5YR4/6 赤褐 やや緻密 赤粗～細粒多、 白粗～細粒と黒細粒やや多、透 明細粒少 硬質	脚上半一部欠 20.0-20.3 1 層、20.1- 20.3B トレ

第5章 権現山遺跡 SG10 区

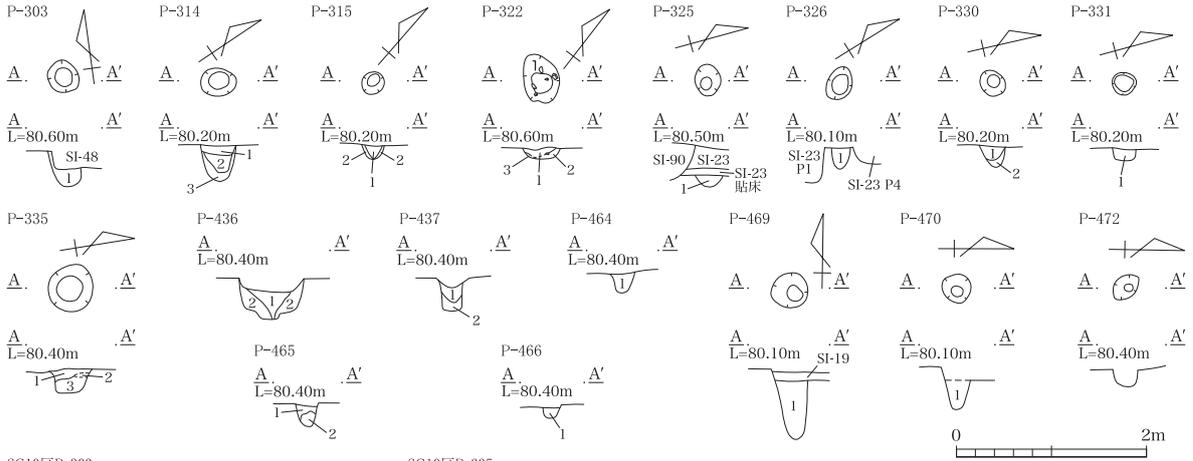
33 土師器 高杯	高 残 8.1 脚柱 4.1	外面は脚柱部ナナムヘラナデ後にタテヘラミガキを下半から裾部にかけて密になるように行い、脚上端ヨコヘラミガキ。杯部内底面に多方向ヘラミガキ。脚部内面はヨコハケの後に絞って細くしたために縦皺が生じ、脚裾にナナムヘラナデ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒多、黒・透明細粒少 硬質	脚柱全周 20.0-20.3 4層 A ベルト
34 土師器 高杯	高 残 4.8	外面は細かく丁寧なタテヘラナデ。内面は粘土組織み痕をヨコナデでおおよそ消してから脚柱を細く絞ったために縦皺状の絞りが生じている。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤・灰色粗～ 細粒やや多、黒・透明細粒少 硬質	脚柱全周 S-907 20.0-20.3 1層
35 土師器 高杯	高 残 6.0 脚裾 復 7.0	薄く軽い。外面は脚部タテナデと裾部ヨコナデの後に疎らなタテおおよそヨコヘラミガキ。内面は脚部ヨコヘラナデと裾部ヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 透明細粒少 やや硬質	脚柱全周、脚裾 1/12 周 20.1-20.2 1層
36 土師器 高杯	高 残 4.4 最大 残 12.0	外面脚柱タテヘラケズリ。杯体～底部までタテヘラケズリで、体～底部の境の稜が弱い。脚内面上端は丸い頂部形でナデ。杯体部内面はヨコヘラナデ。 [注記] 20.1-20.2 1層、20.1-20.3 1層、20.1-20.3B トレ、20.2-20.3 上面	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・赤・透明細粒 やや多、白礫と黒・灰色粗～ 細粒少 やや軟質	杯底 1/2 周、脚柱 1/2 周 注記は左欄
37 土師器 小形壺	口 復 9.0 高 残 7.3 最大 残 12.1	外面は肩部ヨコヘラナデ後に体部ヨコヘラケズリ、頸部タテヘラナデ後に口縁部ヨコナデとタテヘラミガキ。内面は肩部ユビオサエとナデ、口～頸部ヨコナデとナナムヘラミガキ。 [注記] 19.8-20.4 4層、19.8-20.4 土師器包含層、19.9-20.2A トレ、19.9-20.4C トレ	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・灰色粗粒と白・ 黒・赤・透明細粒やや少 やや硬質	口 1/3 周、頸 1/4 周 注記は左欄
38 土師器 小形甕	口 復 14.1 高 残 4.8	外面は胴部タテヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデで、粘土組接合痕をやや残し、口縁部と頸部の境に稜を持つようにヨコナデ。	10YR5/2 灰黄褐 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒多、赤粗～細粒と黒細 粒少 やや硬質	口 1/12 周、頸 1/6 周 S-907 20.1-20.3 1層
39 土師器 小形甕	口 復 15.4 高 残 10.4	外面は頸部ナナムヘラナデ後に胴部タテヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は胴部を軽くヨコヘラケズリした後、肩部ナナムヘラナデ、口縁部ヨコナデ。胴部外面が被熱している可能性もあるが不確実。	2.5YR4/4 にぶい赤褐 やや粗い 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒やや多 やや硬質	口 1/12 周、肩 1/6 周 20.0-20.3 1層、20.0- 20.3 4層
40 土師器 小形甕	口 復 13.8 高 残 10.8 最大 復 15.7	外面は体部ナナムヘラナデ後に口～頸部をヨコナデし、肩部に斜位のヘラミガキまたは狭いヘラナデ。内面は胴部ナナムヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。 [注記] 20.0-20.3 1層、20.0-20.3 上面、S-907 20.0-20.3 1層	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒多、灰 色・透明粗粒と黒細粒やや多、 赤粗～細粒少 硬質	口 1/8 周、頸 1/6 周 注記は左欄
41 土師器 小形甕	高 残 2.9 底 復 5.3	外底面に 1 方向ナデと外面体部ナナムヘラナデの後に体部下端ヨコヘラケズリ。内面は多方向の雑なヘラナデ。被熱痕の有無は不明確だが、内面が雑なので小形甕と判断した。	7.5YR5/6 明褐 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや多、灰色粗粒と赤・黒細 粒少 硬質	底 5/12 周 20.1-20.2 上面、20.1- 20.3
42 土師器 甕	高 残 2.3 底 復 6.0	外底面は多方向ヘラケズリで平底にする。外面胴部下端ナナムヘラケズリ。内面は多方向の雑なヘラナデ。外面が被熱している可能性あり。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 白・黒・灰色細粒 多、赤・灰色礫少 硬質	底 1/2 周 S-907 北半 2層、20.0- 20.3 1層
43 土師器 甕	高 残 2.9 底 7.6	厚く重い。外底面は 1 方向ナデ。外面胴部タテヘラナデ。内面は底部を多方向ヘラナデ後、胴部に浅いヨコハケ。外面の胴～底部に 7cm 以上の黒斑があり、被熱使用痕は見られない。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒や やや多、白・灰色礫と黒・透明 粗～細粒少 やや軟質	底全周 19.8-20.4
44 土師器 甕	高 残 1.8 底 6.4 最大 残 8.2	外底面は外周が少し高い部分を削って平底に近づけている。外面体部下端をヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向ヘラナデ。外面が被熱しているようにも見えるが不確実。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・黒・透明粗粒 多、白色針状物質少 硬質	底全周 S-907 8
45 土師器 甕	口 復 14.7 高 残 8.9	外面は胴部タテヘラナデ後に口～頸部をヨコナデし、肩部に再度タテヘラナデを行う箇所もある。内面は肩部に強い横～斜位のヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。煤はない。 [注記] 20.0-20.3 1層、20.1-20.3 1層、S-907 20.1-20.3 1層、北半 2層	10YR4/2 灰黄褐 やや粗い 白粗～細粒と透明 細粒多、赤・黒粗～細粒少 硬質	口 1/12 周、頸 5/12 周 注記は左欄
46 土師器 甕	口 19.2 高 残 6.0	厚く重い。外面肩部にナナムヘラナデ後ヨコナデ。口縁部は内面ヨコヘラナデ後に内外面ヨコナデ。内面肩部にユビオサエ後ヨコヘラナデ。口縁部外面に煤が付着するが、量が少なく範囲も狭い。 [注記] 20.0-20.3 1層、S-907 20.0-20.3 1層、20.1-20.3 1層	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・黒・透明粗～ 細粒多、赤細粒少 硬質	口 11/12 周、頸全周 注記は左欄
47 土師器 壺	口 復 17.6 高 残 6.1	内外面ともに肩部ヨコヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。	10YR6/2 灰黄褐 やや粗い 白・黒・透明粗～ 細粒やや多、赤細粒少 やや軟質	口 1/36 周、頸 1/3 周 S-907 20.0-20.3 1層
48 土師器 壺	口 復 14.4 高 残 4.2	外面は肩部に縦位後横位のヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後、外面に縦位と内面に横位のヘラミガキ。内面のミガキは密で肩部まで磨いている。外面に煤が多く付着する。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	口 1/4 周 20.0-20.3 1層、 S-907 20.1-20.3 1層

第 13 節 古墳時代の柱穴状土坑 (第 190 図)

SG10 区における古墳時代の柱穴状土坑は 17 基を確認した。P-465・466 は古墳後期の SI-110 に切られ、同様に P-436・437 は古墳後期の SI-51 (a～c 期) に切られるので、古墳時代柱穴と考えられた。P-436・437・464・465・466 の 5 基が分布する「中央部柱穴群」の範囲内には、中世の柱穴 P-425 も含む (平面図は第 204・205 図)。P-425 (中世) と P-436・437・464・465・466 (古墳時代) を除く残りの中央部柱穴群は時期を確定できないので、時期不明の柱穴状土坑として扱った。各遺構の詳細は第 112 表にまとめた。図示できる遺物は P-322 の 1 点だけである。

第 111 表 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の柱穴状土坑 P-322 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 2.0 底 3.2 最大 残 8.8	外面底部は器面が荒れて調整不詳だが凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内面底部は 1 方向か多方向のやや密なヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・黒・透明細粒 多、白礫少 やや硬質	底上 16cm 底全周 SK-322 1



- SG10区P-303
1 褐色 ローム小塊・粒やや多。硬。粘性強。
- SG10区P-314
1 暗褐色 ローム粒微量。しまりやや強。
2 暗褐色 ローム小塊・粒微量。しまり弱。
3 暗黄褐色 ローム小塊・粒多。しまり弱。
- SG10区P-315
1 暗褐色 ローム粒微量。今市軽石小粒極微量。しまり強。
2 暗黄褐色 ローム粒多。ローム小塊少。しまりやや強。
- SG10区P-322
1 暗褐色 ローム粒極微量。硬くしまる。
2 暗黄褐色 ローム小塊・粒若干。硬くしまる。
3 黄褐色 ローム小塊・粒やや多。硬くしまる。
- SG10区P-325
1 褐色 ローム粒やや少。軟。
- SG10区P-326
1 暗黄褐色 ローム粒多。ローム小塊少。しまりやや弱。
- SG10区P-330
1 暗褐色 ローム小塊・ローム粒微量。しまり強。
2 暗黄褐色 ローム塊・粒多。しまりやや強。
- SG10区P-331
1 褐色 ローム粒多。ローム小塊少。

- SG10区P-335
1 暗褐色 ローム塊多。
2 暗褐色 黒褐色土塊多。
3 暗褐色 ローム小塊若干。
- SG10区P-436
1 暗褐色 ローム小塊・粒微量。焼土小塊・炭化物極微量。しまり強。
2 暗黄褐色 ローム小塊・粒多。ローム中塊微量。しまりやや強。
- SG10区P-437
1 暗褐色 ローム小塊・粒と焼土粒極微量。しまり強。
2 暗黄褐色 ローム粒多。ローム小塊少。しまりやや強。
- SG10区P-464
1 暗黒褐色 ローム塊(径2~3mm)・砂質塊が下部に少量。しまり強。粘性やや有。
- SG10区P-465
1 暗褐色 ローム微粒やや多。しまりやや強。粘性有。
2 黒褐色 ロームの混入は少ない。しまりやや弱。粘性有。
- SG10区P-466
1 暗褐色 ローム塊(径3~5mm)・砂質塊を含む。しまりやや強。粘性有。
- SG10区P-469
1 暗褐色 ローム粒やや多。軟。
2 黒色 ハードローム塊若干。非常に硬。
- SG10区P-470
1 黒褐色 ローム小塊・粒微量。しまりやや強。

※P-436～466の平面図は中央部柱穴群の図を参照



第 190 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の柱穴状土坑 遺構・遺物

第 112 表 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の柱穴状土坑

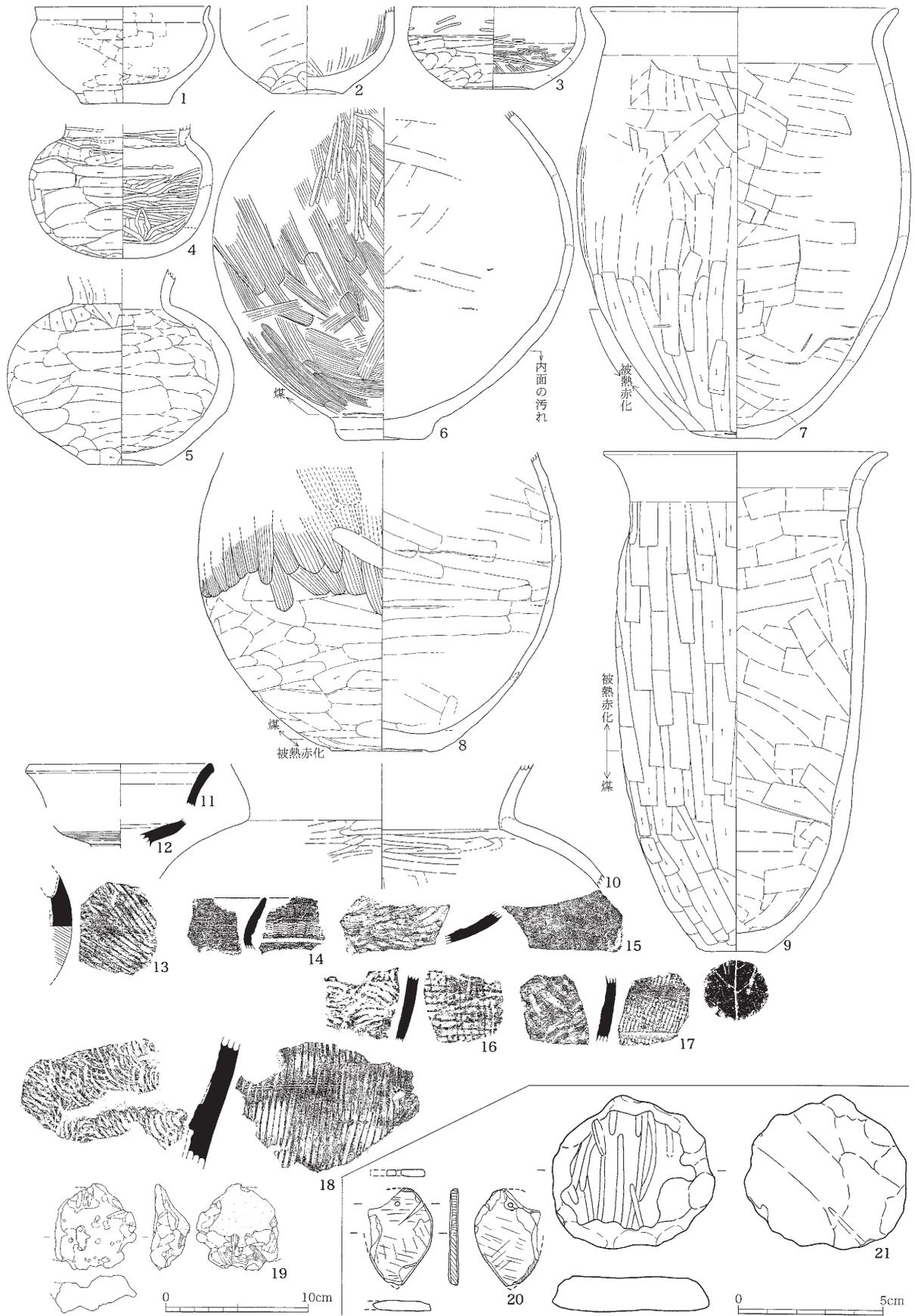
遺構名	グリッド	平面形	重複	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	覆土
P-303	20.0-17.5	円形	SI-48 より古	0.36	0.34	0.38	単層
古墳中期の SI-48 に切られるので、古墳中期以前の、古墳時代の可能性あり。遺物なし。							
P-314	18.5-16.5	円形	SI-23 と重複	0.38	0.31	0.40	
古墳後期の SI-23・24 との新旧は不明。周囲のピットの状況から古墳時代の可能性がある。古墳時代の P-315・325・326・330・331 と近い時期と見られる。遺物なし。							
P-315	18.5-16.5	円形	SI-23 と重複	0.26	0.24	0.18	
古墳後期の SI-23 との新旧は不明。周囲のピットの状況から古墳時代の可能性がある。古墳時代の P-314・325・326・330・331 と近い時期と見られる。遺物なし。							
P-322	19.5-17.5	不整形	SK-46 より古?	0.54	0.38	0.13	
古墳時代の SK-46 を掘って確認したため、SK-46 より古い可能性もある。古墳時代の可能性もあるが、木の根の痕跡かもしれない。古墳中～後期の土師器杯・甕 4 片出土。							
P-325	18.5-17.0	円形	SI-23 より古、SI-24 と重複	0.34	0.28	0.24	単層
古墳後期の SI-23 貼床下で確認。SI-23 に切られる。古墳時代の可能性大。古墳後期の SI-24 との新旧は不明。遺物なし。P-314 を参照。							
P-326	18.5-17.0	円形	SI-23 より古	0.37	0.26	0.34	単層
古墳後期の SI-23 内。土層断面図はないが、上面に SI-23 の遺物があることなどから見て、SI-23 より古い。古墳時代の可能性大。古墳後期の SI-24 との新旧は不明。遺物なし。P-314 を参照。							
P-330	18.5-16.5	円形	SI-23 より古	0.30	0.24	0.24	覆土や石の入り方が P-331 と同様。
古墳後期の SI-23 に切られ、SI-23 貼床下で確認。古墳時代の可能性大。古墳後期の SI-24 との新旧は不明。遺物なし。P-314 を参照。							
P-331	18.5-16.5	円形	SI-23 より古	0.26	0.24	0.15	覆土や石の入り方が P-330 と同様。
古墳後期の SI-23 に切られ、SI-23 貼床下で確認。古墳時代の可能性大。古墳後期の SI-24 との新旧は不明。遺物なし。P-314 を参照。							
P-335	19.5-17.5	円形	SI-47 より古	0.52	0.47	0.27	
古墳後期の SI-47 に切られる。古墳時代の可能性あり。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-436	19.5-18.0	不整形	SI-51b・c より古	0.69	0.43	0.44	焼土・炭あり
古墳後期の SI-51b・c(調査時名称 SI-109)の床下で確認。南北に長い。土師器壺類の胴部 2 片出土。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-437	19.5-18.0	円形	SI-51b・c より古	0.34	0.30	0.38	焼土あり
古墳後期の SI-51b・c(調査時名称 SI-109)の床下で確認。土師器壺類の胴部 2 片と飯胴部 1 片が出土。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-464	20.5-18.0	円形	SI-108 より新(?)	0.48	0.44	0.45	単層
古墳中期の SI-108 貼床除去後に確認したが、SI-108 より新しい可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-465	20.5-18.0	円形	SI-108(?) → P-465 → SI-110	0.46	0.45	0.46	
古墳中期の SI-108 貼床除去後に確認したが、SI-108 より新しい可能性もある。古墳後期の SI-110 と重複し、SI-110 の遺物が上部にあることから見て、SI-110 より古い。古墳時代の可能性あり。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-466	20.5-18.0	円形	SI-108(?) → P-466 → SI-110	0.44	0.40	0.15	単層
古墳中期の SI-108 貼床除去後に確認したが、SI-108 より新しい可能性もある。古墳後期の SI-110 と重複し、SI-110 の遺物が上部にあることから見て、SI-110 より古い。古墳時代の可能性あり。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-469	18.0-16.5		SI-19a・b より古	0.40	0.37	0.76	単層
古墳中期の SI-19a・b に切られる。深くしっかりしたピットで、古い建物跡の柱穴かもしれない。遺物なし。整理作業時に発番。							
P-470	18.0-16.5		SI-19a・b より古	0.32	0.30	0.46	単層
古墳中期の SI-19a・b を掘って確認したので、SI-19a・b に切られると見られる。遺物なし。整理作業時に発番。							
P-472	19.0-17.5		P-472 → SI-47 → SD-263(?)	0.33	0.24	0.22	土層の記録なし
古墳後期の SI-47 より古い可能性もある。中～近世の SD-263 と重複し、おそらく SD-263 より古い。整理作業時に発番。							

第 14 節 古墳時代の遺構外遺物 (第 191 図、写真図版 174・212)

1 は大きな平底面を持つ内斜口縁杯。2・3 も中期の杯で、やはり底面が大きい。3・4・5 は残存度の大きな 3 個が試掘トレンチで一緒に出土し、古墳中期末葉の SD-527・540 などに関わる遺物かもしれない。6・8 は炉で用いた煤が付着する甕、7・9 はカマドで用いた甕。12 は脚柱部までカキメがある後期の高杯で、琴平塚 8 号墳に類例がある (『東谷・中島地区遺跡群』4)。13 は提瓶か横瓶の閉塞円板。15 と 17 はおそらく古墳中期の須恵器、14 は後期の在地 (関東) 産須恵器であろう。16 は真格子叩き調整を行う古墳終末期の在地製品で、三毳窯産の胎土に近い。18 は灰色と酸化焼成の橙色が互層状になる甕で、古墳時代溝 SD-304b 出土破片に似る。19 は椀形鍛冶滓。土器片製円板 (21) は縄文時代にもみられる遺物で、古墳時代の SD-41・42 にもあるが、事例は多くない。剣形石製模造品 (20) は SG10 区 SI-2 などにある。

第 113 表 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の遺構外出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.2 高 6.8 底 6.1 最大 復 12.8	外底面は多方向ヘラナデ。外面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は底部に 1 方向、体部に横位のヘラナデ。内面口縁部ヨコヘラナデ後ヨコナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒やや多 やや硬質	SG10 区南東低地 SK-803～806 周辺 口 1/12 周、頸 1/6 周、 底全周 17.5-19.0 表土
2 土師器 杯	高 残 6.2 最大 残 12.1	外底面はヘラケズリ状に抉って上げ底状にする。外面は体部下端ナメヘラケズリ、体部はおそらくヨコヘラナデ。内面は底部に 1 方向と体部に縦位のヘラミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗粒多、白・黒・ 透明粗～細粒少 やや軟質	SI-32～34 付近 底全周 18.5-18.0 表土
3 土師器 杯	口 11.6 高 5.8 底 5.6 最大 12.3	外底面は円周方向のヘラケズリで凹底状。外面口縁部ヨコナデ後に疎らなヨコヘラミガキ、外面体部に光沢のあるヨコヘラナデ。内面はヨコナデ後に底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	22-19 グリッド試掘ト レンチ 口 3/4 周、底全周 UT-TN-SG TX22-19 2
4 土師器 壺か鉢	高 残 9.4 底 2.4 最大 12.8	外底面は多方向ヘラケズリで丸底にする。外面は肩部タテヘラナデ後に中～下位ヨコヘラケズリ、頸部ヨコナデと頸～肩部ヨコヘラミガキ。内面は下位タテヘラミガキと中位ヨコヘラミガキ、頸～肩部ナデ後に頸部ヨコヘラミガキ。内面頸部に接合痕がよく残っている。内面をよく磨いていることから見て、口縁部が短い壺または鉢と推定できる。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・黒・透明粗～ 細粒やや多、赤粗～細粒少 やや軟質	22-19 グリッド試掘ト レンチ 肩 5/6 周、底全周 UT-TN-SG TX22-19 1
5 土師器 小形壺	高 残 13.8 底 5.1 最大 15.8	外底面は 1 方向ヘラケズリで凹底状。外面は頸～肩部をナメヘラケズリ後に体部中位ヨコヘラナデと下位ヨコヘラケズリ。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラナデ、肩部コビナデとコビオサエ、頸部ヨコナデ。外面下位に 8×11cm 大の黒斑あり。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗粒多、透明粗 ～細粒と白・黒細粒やや多 やや硬質	22-19 グリッド試掘ト レンチ 頸 1/2 周、底全周 UT-TN-SG TX22-19 3
6 土師器 甕	高 残 23.1 底 5.0 最大 25.1	外底面は 1 方向ヘラケズリで緩い凸面。外面は胴部縦～斜位ハケ後下位ナメハケ、上位タテヘラミガキ。胴内面ナメヘラナデ。底以外の外面に煤が非常に多い。内面下位が暗褐色に汚れる。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、黒細粒少 やや硬質	SI-9・88 付近 胴 3/4 周、底全周 18.0-17.5 溝の東表土
7 土師器 甕	口 復 21.5 高 30.2 底 5.8 最大 復 23.2	外底面は 1 方向ヘラケズリで緩い凸面。外面は胴部タテヘラナデ後に下位タテヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面の胴下位が被熱赤化。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤・透明粗～ 細粒多 やや軟質	SI-34・40 付近の SD-201a 表土 口 1/12 周、頸 1/6 周、 底 3/4 周 19.0-17.5 溝表土
8 土師器 甕	高 残 20.9 底 7.0 最大 25.3	外底面は雑な 1 方向ヘラケズリで中央が凹む。外面下半は横～斜位ナデ後に積み上げ休止部の厚い部分をヨコヘラケズリ。外面上半に浅いタテハケ。内面は底部に 1 方向ナデ、胴部にヨコヘラナデ。	2.5Y5/2 暗灰黄 粗い 白・灰色礫～細粒多、 赤・透明粗～細粒と黒細粒や やや多 やや軟質	SI-55 付近の SD-201a 表土 胴下半と底全周 19.0-18.5 溝表土
9 土師器 甕	口 19.7 高 35.0 底 4.5	外底面は葉の裏面による木葉痕で、おそらくカシワの葉。外面は胴部タテヘラケズリで胴下位だけ下向きに削る。内外面の口縁部をヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデで、胴部下位のヨコヘラケズリは粘土組織積み上げ休止部の厚いところを薄くするために行っている。胴部下位の煤と胴部上～中位の被熱痕が全周の約半分において明瞭なので、カマド構築材に用いたものと推定される。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・灰色礫～ 細粒と黒・透明細粒多 軟質	口 1/6 周、頸 3/4 周、 胴～底全周
10 土師器 大形壺	高 残 8.8 最大 残 31.0	胴～肩部は破片が不足して接合できない。外面は肩部ヨコヘラナデ。内面は肩部ヨコヘラケズリ後に胴部ヨコヘラナデ。内外面の頸部にヨコナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・黒・透明粗～ 細粒やや多、白礫少 やや軟質	SD-41・42・221 が重複 する付近の表土 頸 1/6 周 16.5-17.7 表土
11 須恵器 壺	口 復 12.6 高 残 3.0 最大 復 13.2	内外面ともに回転ヨコナデで、ロクロは右回転 (時計回り) かもしれないが不確か。	2.5YR5/1 赤灰 やや緻密 白細粒少 やや硬質	SD-41・42 北端付近 口 1/8 周 18.5-18.5 表土
12 須恵器 高杯	高 残 1.9 最大 残 9.2	内外面ともにロクロナデの後に外面底部～脚柱部にカキメ。内面ナデ時、倒立して外面カキメ施文時ともにロクロは右回転 (時計回り)。	7.5Y5/1 灰 やや緻密 白粗～細粒少 やや硬質	SI-14～16・19～21 付 近 杯体 1/4 周 18.0-16.5 表土
13 須恵器 提瓶?	高 残 1.5	閉塞円板が外れたもの。外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面はやや雑なコビオサエ。	5P7/1 明紫灰 緻密 白粗～細粒やや多、半 透明細粒少 硬質	SD-814・821・823 付近 19.5-20.5 表採
14 須恵器 壺	口 復 10～12 高 残 3.6	外面は頸部に凹線 1 条、口縁部下半に 6 歯の工具で右から左へ櫛描波状文。内面は回転ヨコナデで、ロクロは右回転 (時計回り) かもしれない。内面頸部は凹凸があり、ロクロナデをきちんとしていないようである。	5Y4/1 灰 やや緻密 白細粒と黒色湧出 粒少 やや硬質	SG10 区南東部で低地に 近い位置 口 1/12 周 17.3-18.7
15 須恵器 甕		外面はナデ、内面は浅い同心円文当具痕。外面に黒色の自然釉が明瞭にかかっている。破面は暗赤灰色。	N5/0 灰 やや粗い 白粗～細粒やや多 硬質	SG10 区南端の隣接地 胴部 1 片 16.5-18.0 川の南



第 191 図 榎現山遺跡 SG10 区 古墳時代の遺構外出土遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

16 須恵器 甕	高 残 4.8	縦横に溝を彫った叩き板で外面に真格子叩き目。内面は同心円文当具痕。	2.5Y7/4 浅黄 緻密 白細粒少 やや軟質	SI-58・59・110 付近の遺 構確認面 胴部 1 片 20.2-20.4 上面
17 須恵器 甕	高 残 4.6	外面は擬格子叩きの後に浅い横位の凹線。内面は浅い同心円文当具痕。外面に黒色の自然釉が明瞭で、上部は釉が黄色味を帯びる。破面は暗赤灰色。	N3/0 暗灰 やや粗い、白粗～細粒やや多、 透明粗粒少 硬質	SG10 区南東部で低地に 近い位置 胴部 1 片 17.2-18.8 表土
18 須恵器 甕	高 残 9.2	木目平行の溝を彫った叩き板で外面に平行叩きの後、5～6 本以上の工具で横位のカキメ。内面は同心円文当具痕。外面は灰褐色 (5YR5/2) に発色し、破面は浅黄橙色 (7.5YR8/4) と灰白色のサンドイッチ状。	10YR8/1 灰白 やや緻密 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒少 硬質	胴部 1 片 表採 20-18
19 椀形鍛冶滓 (小)	長 6.0 幅 5.7 厚 2.7 重 99.7	左側部が破面となった小形の椀形鍛冶滓。上面は平滑で右側の肩部が傾斜する。下面は上手側側部が炉床土に接しており、下手側は 1cm 大前後の木炭痕に覆われる。滓質は緻密で気孔はやや肥大気味。鍛冶関連遺物構成 No. 73。	磁着度 2 メタル度 なし	23-18 グリッドの確認 調査トレンチ 破面 1 面 UT-TN-SG TX23-18
20 石製模造品 剣形品	長 残 3.4 幅 残 2.3 厚 0.34 重 残 3.69	両面は節理に沿って割った面で、2 方向程度の研磨を浅く施す。外周は横位および斜位の粗い研磨痕がよく残る。孔は左図の面から穿孔し、右図の面に穿孔剥離を生じる。孔径は 1.35～1.40mm で、初孔径と終孔径に明確な大きさの違いは見られない。	10Y4/2 オリーブ灰 節理の発達した緻密で軟質な 滑石片岩	SG10 区西半の削平部分 約 1/4 欠 20.8-16.3
21 土師器 土器片製 円板	高 5.5 厚 1.2	外面はヘラナデか軽いヘラケズリ。内面は 1 方向のヘラミガキで、炭素を吸着し黒色になるが、意図的なものかどうかは破片が小さいので不詳。破片のカーブがあまりないので、甕のような大きめの器種と思われる。外周を折り取って円形に加工している。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤・透明 粗～細粒少 やや硬質	SD-201a 南西隅付近 胴部 1 片 17.3-17.0

第 15 節 平安時代の竪穴建物跡

SG10 区 SI-90 (第 192 図、写真図版 142・143・212)

【位置】 SG10 区南部の 18-16・17 グリッドにある。同じく平安時代の遺構としては、南東に 22m 離れて SK-235 がある。北西約 40m にある古代道路遺構 SG1 区 SD-301 は東山道と推定され (『東谷・中島地区遺跡群』3)、この道路遺構が北方の SG10 区 SD-250a・b (本章第 17 節) へ続く。古墳時代の SI-23・105 を SI-90 が北部と南部で切り、時期不明の SE-236 に切られる (SI-105 → SI-23 → SI-90 → SE-236)。貼床下に SI-105 の P1～P4 がある (断面図 B-B')。古墳後期の SI-22 と時期不明の P-406 が南西に近接し、古墳時代の P-325 がすぐ北にある。

【規模と形状】 長方形の建物跡で、主軸方位は GN-4°-E。東西 4.48 × 南北 3.20m、最も高く残る南東隅付近で残存壁高 29cm。柱穴・入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝が床面に認められない。

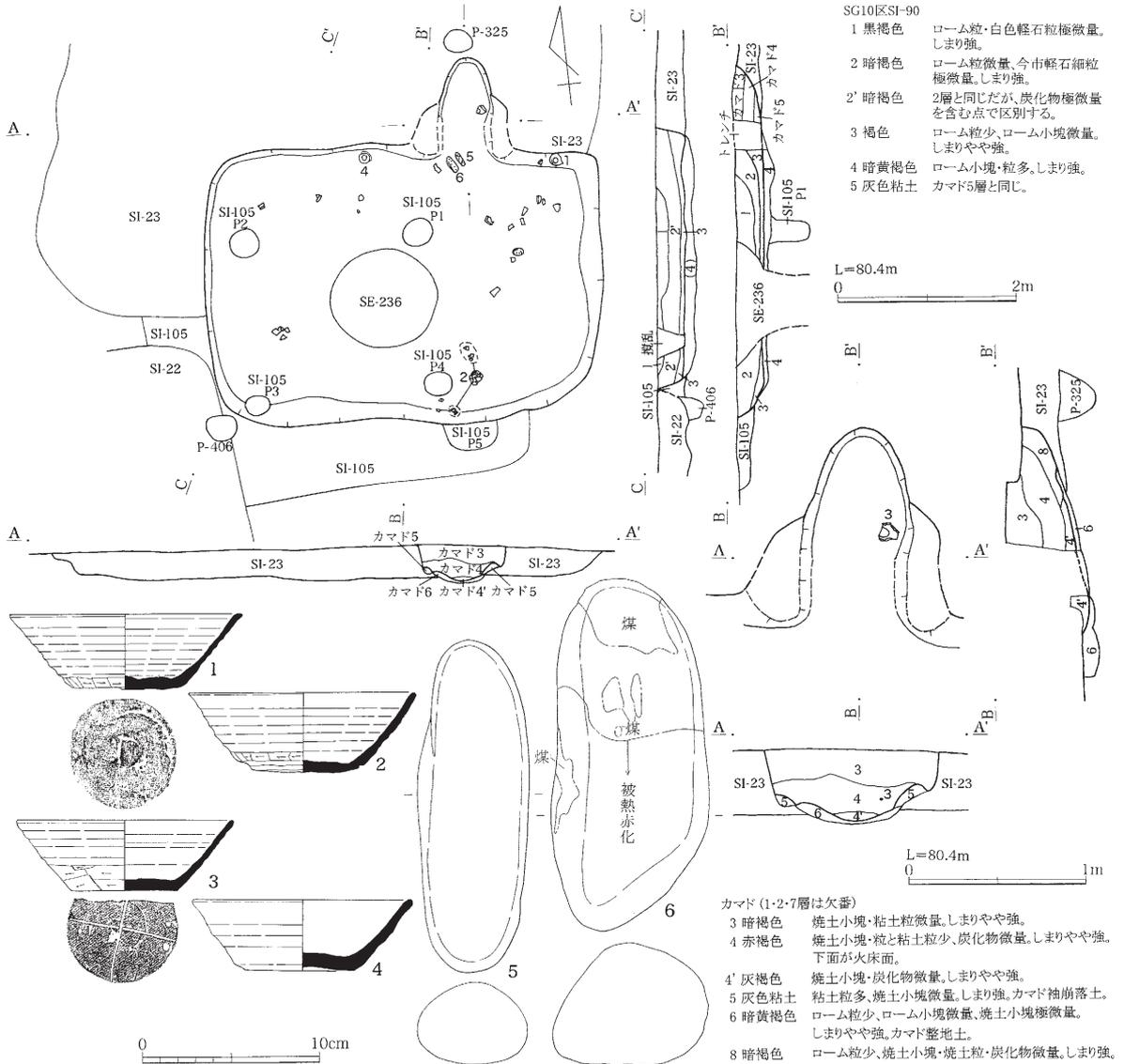
【カマド】 北壁の東寄りにある。カマドの主要部分は北に張り出した掘方の中に入り込んで作られている。ただし、周囲にある古墳時代の SI-23 を SI-90 カマドよりも先に掘り下げたために、写真ではカマドが高く残されているように見える。東西土層断面 (カマド A-A') によると、煙道に入り込んだ部分のカマド袖粘土であるカマド 5 層は、掘方の下部に少し確認できる程度である。この層はカマド袖を壊したか又は崩れた残土層であろう。このように袖粘土や焼土が少なかったため、SI-90 カマド袖の南半を SI-23 調査時のトレンチで切断してしまい、袖の推定形を平面図に破線で示した。両袖幅は推定 112cm、煙道先端から袖先端まで推定 114～120cm。煙道底面より上 10cm のカマド 4 層中に須恵器杯 (3) 破片がある。

【覆土】 自然埋没と思われる。1 層中にごく少量含む白色軽石粒は、SI-105 覆土から流入した古墳時代テフラ粒であろうか。2 層には縄文草創期の今市軽石粒 (Nt-I) が地山から流入している。

【遺物出土状況】 全域で少量ずつ出土した。北壁ぎわの床面付近に残存度の高い杯がある (1 と 4)。カマド南側の床面に支脚の可能性のある石 (6) と編物石 (5) がある。

【出土遺物】 遺物は少ない。須恵器杯と土師器杯がほとんどで、土師器甕 (あるいは鉢?) の破片が少し混じる程度である。図示した須恵器杯は 4 が三毳窯産である。他の杯 1～3 は雲母が少ない新治窯製品かもしれない。図示以外の土師器合計 172 片・1,625g の内訳は、杯 71 片・391g、高杯 15 片・210g、壺甕類 86 片・1,024g。須恵器は杯 4 片・29g と甕 1 片・8g。このうち須恵器杯は益子窯産で同一個体。須恵器甕 1 片は古墳時代須恵器甕片の混入と思われ、SI-10・12 他にある須恵器甕片と同一個体の可能性もある。重複する古墳時代建物から混入したと考えられる古い遺物が多く見られる。

第 15 節 平安時代の竪穴建物跡



第 192 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-90 遺構・遺物

第 114 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-90 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 杯	口 13.0 高 4.3 底 6.2	体部内外面の凹凸が強く出るように回転ヨコナデをロクロ右回転で行う。外底面はヘラ切り離し後に軽い1方向ヘラケズリ。外面体部下端に横位の非回転(手持ち)ヘラケズリ。茨城県新治窯産の可能性ある。ただし、雲母片は確認できない。	7.5YR4/2 灰褐 緻密 白・半透明粗～細粒やや少、白礫少 硬質	北東部床土 25cm 口 7/12 周、底全周 15
2 須恵器 杯	口 12.7 高 4.5 底 5.8	体部外面の凹凸が強く出るように回転ヨコナデをロクロ右回転で行う。外底面はヘラ切り離し後に軽い1方向ヘラケズリ。最初に切り離そうとした位置を途中で中止して、約5mm下方で切り離している。外面体部下端に横位の非回転(手持ち)ヘラケズリ。茨城県新治窯産の可能性ある。ただし、雲母片は確認できない。	10Y5/1 灰 やや緻密 白粗～細粒やや多、透明粗～細粒少 硬質	南東部床直上～床上 3cm が接合 口 5/6 周、底全周 1、4、5
3 須恵器 杯	口 復 12.1 高 4.0 底 6.0	体部外面の凹凸が強く出るように回転ヨコナデをおそらくロクロ右回転で行う。外底面はヘラ切り離し後に多方向の軽いナデで、体部外面に「十」の刻線あり。外面体部下端に横位の非回転(手持ち)ヘラケズリ。茨城県新治窯産の可能性あり。	2.5Y7/2 灰黄 緻密 透明粗～細粒と白・黒細粒少、雲母細片極少 やや軟質	カマド火床上 10cm 口 1/12 周、底 7/12 周 26
4 須恵器 杯	口 12.3 高 4.0 底 6.0 重 155.2	内外面におそらくロクロ左回転のヨコナデ。外底面は弱く二次底部面を持ち、回転糸切り離し後に不調整。三義窯産。	5Y7/1 灰白 やや緻密 灰色礫と白粗～細粒やや少、灰色粗粒少 硬質	北部床土 3cm 完形 20
5 石器 編物石	長 18.7 幅 6.2 厚 4.7	断面が楕円形で棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 837.1g。	5Y8/2 灰白 緻密で硬質な安山岩	北部床直上 完形 19
6 支脚?	長 19.4 幅 8.7 厚 6.7	棒状の厚い自然礫をそのまま利用。被熱痕が図の下半で顕著。煤が図の中心と上端近くにそれぞれまとまって見られる。重量 1786.8g。	10YR6/2 灰黄褐 緻密で硬質な流紋岩	北部床直上 完形 18

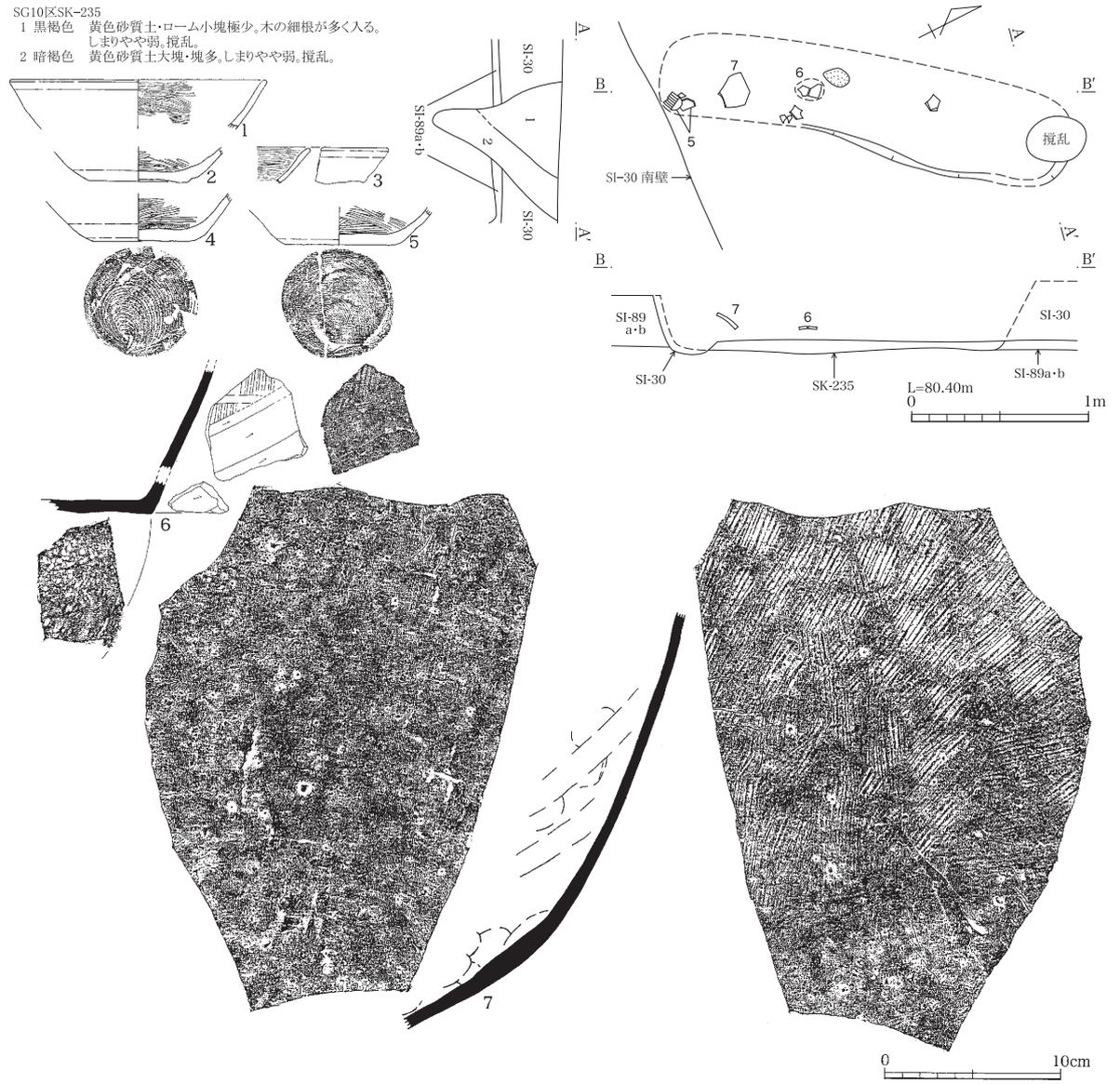
第16節 平安時代の土坑

SG10区 SK-235 (第193図、写真図版143)

SG10区南部の17.5-17.5グリッド。同じく平安時代の遺構は、北西に22m離れてSI-90がある。古墳時代の建物跡SI-30・89a・89bを切り、SI-89(a・b) → SI-30 → SK-235の順に重複する。

SI-30の床面近くでかろうじて把握した平面形は長楕円形で推定長径2.40×短径0.54m、中軸はN-51°-E。遺構確認面からの深さは33～38cmで、周囲にあるSI-30床面より2～3cm深い。SI-30の土層ベルトで断面A-A'を観察した部分は木根痕?が重複し、本来の遺構断面形が不明である。断面A-A'では遺構確認面から深さ73cmだが、この値は攪乱で深くなっている。断面図の1・2層も攪乱されしまりが弱い。

SI-30覆土中に掘り込まれたSK-235の遺構を把握することが遅かったので、SK-235の遺物と同時期や同個体の平安時代遺物がSI-30の遺物として取り上げられている。SK-235の6と同一個体の須恵器平底甕片が、SK-235から北西へ3m離れた位置で、SI-30の竪穴西端付近の覆土下位にもあるので、SK-235に関連する別の平安時代遺構がSI-30覆土中に掘り込まれていたと考える余地も残る。



第193図 権現山遺跡 SG10区 SK-235 遺構・遺物

第 115 表 権現山遺跡 SG10 区 SK-235 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.6 高 残 2.8	内外面を回転ヨコナデ後、内面を横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 黒・透明細粒少 やや硬質	SI-30 西南部の 1c 層 口 1/6 周 SI-30 西南 1c 層
2 土師器 杯	高 残 2.1 底 5.7	内外面に回転ヨコナデ。外底面は回転糸切りで、切り離し時のロクロは右回転。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。 [注記] SI-30 西南 3 層、P3 南 1c 層、C ベルト西 3 層	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	SI-30 南部と南西部で SK-235 付近の 4 片が接 合 底 1/3 周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 復 13～15 高 残 2.1	内外面を回転ヨコナデ後、内面を横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	10YR6/6 明黄橙 緻密 白・黒・透明細粒少 やや軟質	SI-30 口 1/12 周 SI-30
4 土師器 杯	高 残 2.6 底 5.7	内外面に回転ヨコナデ。外底面は回転糸切りで、切り離し時のロクロは右回転。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。 [注記] SI-30 南東 3 層、P3 南 1c 層、C トレ東西半	7.5YR5/3 にぶい褐 緻密 赤粗～細粒と白・黒・ 透明細粒少 やや硬質	SI-30 の南部で SK-235 付近の 7 片が接合 底 11/12 周 注記は左欄
5 土師器 杯	高 残 2.2 底 6.1	内外面に回転ヨコナデ。外底面は回転糸切りで、切り離し時のロクロは右回転。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	5YR5/6 明赤褐 緻密 赤粗～細粒と白・黒細 粒少 硬質	南部底上 8～9cm。SI- 30 東南部 1c 層の小破 片が接合 底全周 3、9、SI-30 東南 1c 層
6 須恵器 甕	高 残 8.1 底 復 20～30	外底面は平底で不規則な凹凸が多い。外面胴部に縦位の平行叩き後に軽いヨコナデを少し施し、胴下端を横～斜位ヘラケズリ。内面は横位のナデと見られるが、剥落して調整不明の部分が多い。土師質に近い色調。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白雲母粗～細片多、 白・赤・灰色・透明粗～細粒 少 やや硬質	底上 8cm。SI-30 の西部 床 6cm にも 1 片あり 底 1/24 周 6、SI-30 56
7 須恵器 甕		胴径 50cm 以上と思われる大形品。外面は木目平行の溝を彫った叩き板で、胴部に縦～斜位の平行叩き、底部に回転を利用しないナメナデ。内面は無文当具痕の後に部分的な軽いナメナデ。内面底部に当具痕の凹凸が目立つ。外面上半と内面底近くに暗灰色～黄灰色の自然釉が薄く付着する。	7.5Y5/1 灰 緻密 白礫と赤・黒湧出粒や や多 硬質	底上 2cm 胴下半 1/8 周 4

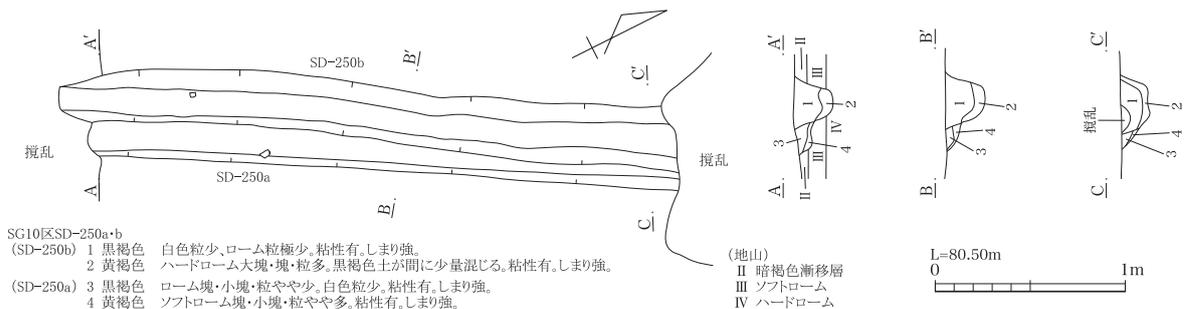
平安時代（9 世紀中葉～後葉）のロクロ成形土師器杯や須恵器甕片がある。1 片だけ出土した須恵器甕大破片（7）と同一個体の小破片が広域に見られる。その分布は、重複する SI-30、遠く離れた古墳時代の SI-61（北へ 75m）と SD-527（北へ 145m）および時期不明の SX-308、北東 50m の中世井戸 SE-252 にあり、北 48m の時期不明土坑 SK-254 にも 2cm 大の小片がある。遺構は希薄だが、SG10 区を平安時代に利用したことがわかる。図示以外に古墳時代土師器片が少量あり、SI-30 などから流入・混入したと見られる。

第 17 節 古代の道路跡

『東谷・中島地区遺跡群 3』で「推定東山道」として報告した道路側溝に続く一部を、SG10 区で調査した。ただし、古代の溝であることを確認できるような出土遺物はない。隣接する権現山遺跡 SG1 区および杉村遺跡 SG1 区で調査した古代道路側溝との位置関係を、SG10 区全体図に示す（第 11 図左上）。『東谷・中島地区遺跡群 3』（藤田 2003,pp.32,35）で報告した、推定東山道左側溝である杉村遺跡 SG1 区 SD-300 の延長線上にあることがわかる。周囲は現代の重機による採土工事で遺構が消滅している。SD-250 のある付近だけは送電線用鉄塔の直下だったので削平を免れたものである。土層断面からみて掘り直しを行っているので、幅の広い旧期溝を SG10 区 SD-250a、幅の狭い新期溝を SD-250b とした。

SG10 区 SD-250a・b（第 194 図、写真図版 143）

SG10 区北西部の 21-15 グリッドにあり、南北両端は土採り工事の攪乱で消滅する。重複する遺構はない。埋土は自然埋没状で、広い旧期溝→狭く深い新期溝への掘り直しを 1 回確認できる。



第 194 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-250a・b 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区

新期 (SD-250b) は溝幅 56 ～ 62cm、残存する深さは 30 ～ 43cm。旧期 (SD-250a) は溝幅 96 ～ 112cm、残存する深さは 16 ～ 21cm。溝底面は特定方向へ傾斜しない。旧期・新期ともに覆土中に少量みられる白色粒子は、テフラの可能性もある。新期溝と旧期溝の覆土が類似しているため、同様な条件下で埋没したと考えられる。旧期溝の埋没後、それほど長い時間をおかないで溝を掘り直したことがわかる。

新期の SD-250b からは土師器合計 15 片・103g (杯 7 片・39g、壺甕類 8 片・64g) だけが出土し、旧期の SD-250a からは土師器合計 5 片・66g (杯 3 片・34g、壺甕類 2 片・32g) が出土した。どれも少量の破片で、古墳時代集落から古墳中期と後期の遺物が混入したものと見られる。図示した遺物はない。

第 18 節 中世の井戸

遺物から中世であることを確定できた井戸は 6 本である。この他に時期不明の井戸 5 本 (SE-236・316・345・352・455) が中世の井戸を含む可能性もある。各井戸は最下部または上層までの埋土を 1mm メッシュのふるいで水洗して遺物を検出した。木の小片・細片が若干出土した程度で、何も検出できなかった井戸も多い。SE-569 は木製遺物が豊富で、木の細片もやや多い。

SG10 区 SE-232 (第 195 図、写真図版 144)

【位置】 SG10 区中央部の 20.0-17.0・17.5 グリッド。古墳中期後葉の SI-49 を切る。時期不明の土坑 SK-241 と重複するが、新旧関係は不明である。

【規模と形状】 確認面で東西 2.73m、南北 2.52m の円形で、深さ 3.18m。途中で径 110cm 程度まで狭くなり、その下部は壁面砂層の崩壊で広がる。下部の平面形が楕円形状になるのも、壁面崩壊の変形による部分が大いといと推測される。底面標高は 77.28m。

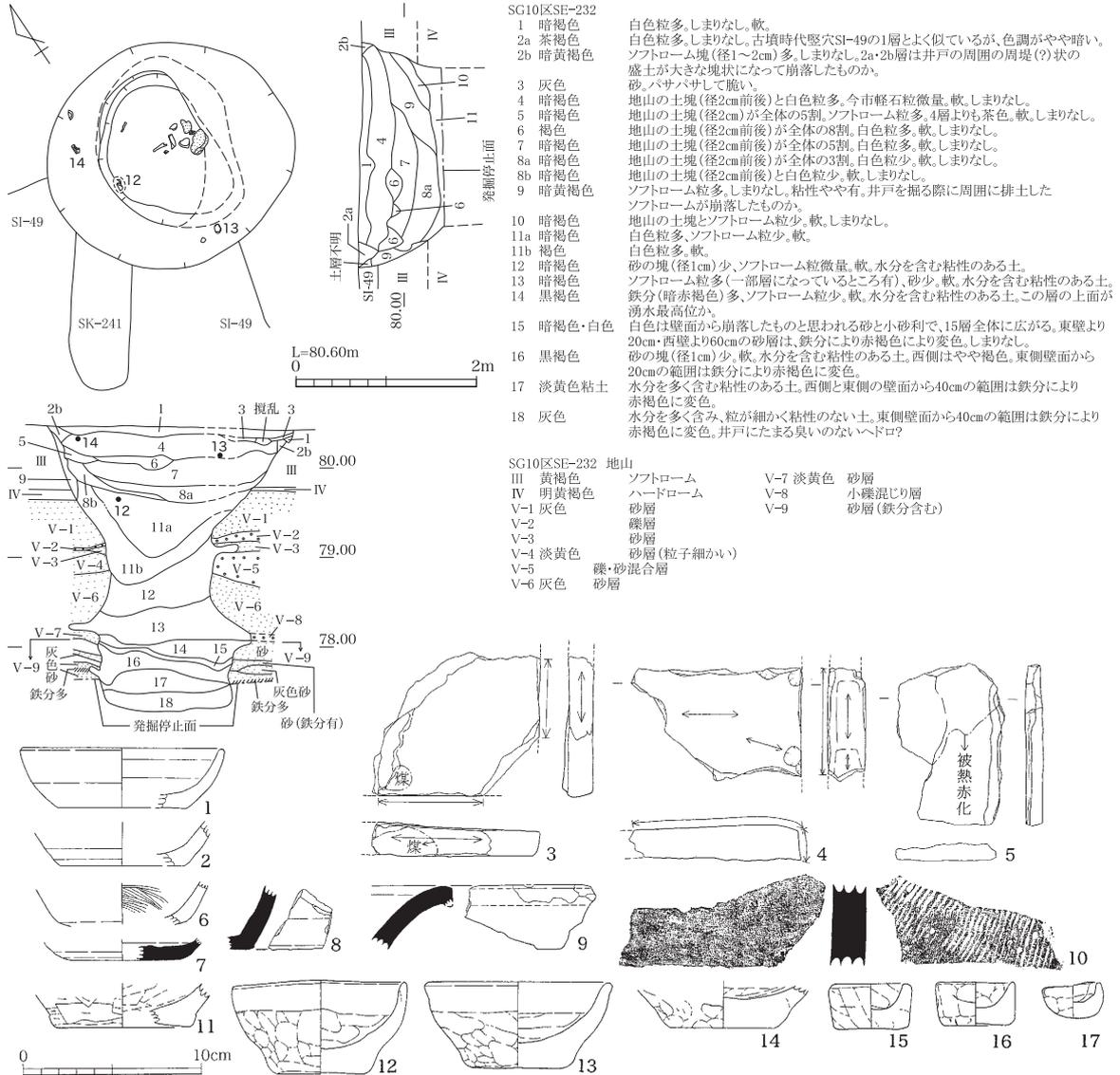
【覆土および地山層】 夏季の 7 月下旬には標高 79.6m 付近で湧水したので、ここまですを手掘りで調査した (断面図 B-B')。10 ～ 15cm 大の丸石が入らない点で、時期不明の SE-236 や中世の SE-237 に似ると観察されている。地下水位が低くなる冬季に、標高 77.6m 付近まで南西部を重機で断ち割った。上部には白色粒子の多い層が認められる (1 ～ 11 層)。下半部は水分の多い粘質土層が主体である。鉄分が多い 14 層の最上部が湧水位かと思われた。地山の鉄分は 16 層に対応する壁面の砂層に多い。最下層である 18 層は井戸底に堆積した粘性の弱い層で、臭くないヘドロという印象を受けた。

周囲の地山を見ると、礫層よりも砂層がずっと厚い点が、SE-569 や SE-377 の地山と異なる。西方 10m 付近の削土攪乱部底面で観察できる地山も、礫層よりも砂層になっている。

【出土遺物】 井戸底面から 10 ～ 20cm 浮いた位置で、平面図中央部に記入してある自然礫・炭片・径 1cm ほどの木枝が出土した。遺物量は少ない。土師質土器 (1・2) や砥石 (3・4・5) がこの遺構に伴う中世遺物と考えられる。奈良時代後半から平安時代の須恵器・土師器 (6 ～ 9) と、古墳時代の須恵器・土師器・粗製小形土器 (10 ～ 17) もあるが、小破片であり、12 ～ 14 の出土位置をみても混入品とみられる。重複する古墳中期の SI-49 から流入した遺物が多いと考えられる。

第 116 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-232 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師質 杯	口 復 11.2 高 3.3 底 復 7.2	内外面は回転コナデ。外底面は不明瞭で、回転糸切り離しの可能性がある。軟らかめの酸化炎焼成。	7YR7/4 にぶい橙 緻密 黒細粒やや多 やや軟質	北半部 16 層 口 1/8 周、底 1/12 周 北半 16 層
2 土師質 杯	高 残 2.5 底 復 6.8	内外面は回転コナデ。外底面はナデおよび乾燥時に付いた平行線状の圧痕。軟らかめの酸化炎焼成。	10YR7/2 にぶい黄橙 緻密 白・黒・灰色細粒少 軟質	北半部 13 層 底 1/8 周 北半 13 層
3 石器 砥石	長 残 9.1 幅 残 8.0 厚 1.9 重 残 174.1	板状石材の 2 側辺を底面に使用して、やや平滑に磨耗している。破面以外の側縁と両面に薄く煤が見られ、図示した部分に多くまとまっている。破面も含めて酸化鉄分が埋没中に付着している。	5Y4/1 灰 板状の節理を持つ粗粒の硬砂 岩	北半部 3 層 2 側辺残 北半 3 層
4 石器 砥石	長 残 9.5 幅 残 2.0 厚 2.0 重 残 167.9	板状石材の 1 面を 1 側辺を底面に使用して、かなり平滑に磨耗している。図示した面の裏面は少し凹凸のある破面で、突出した高い部分だけがごくわずかに磨耗しているので、砥石に使用しようと試みた程度と思われる。	5Y5/1 灰 板状の節理を持つ粗粒の硬砂 岩	北半部 14 層 1 側辺残 北半 14 層



5 石器 砥石	長 残 9.0 幅 残 5.6 厚 残 1.0	板状の破片で、砥面は残っていない。被熱して折損した後に、更に被熱が継続したような状況が認められる。残存重量 65.2g。 [注記]SI-49 1層、SK-232 南西区	2.5Y6/3 にぶい黄 板状の節理を持つ粗粒の硬砂岩	SI-49 の 1 層と SE-232 南西区の各 1 片が接合 全周欠損 注記は左欄
6 土師器 杯	高 残 2.3 底 復 7.2	外底面は回転系切り離し。外面体部は回転ヨコナデ。内面はヨコヘラミガキ後に炭素吸着の黒色処理。平安時代前葉の遺物が混入。	5YR5/4 にぶい赤褐 緻密 白・黒・灰色細粒少 やや硬質	北半部 16 層 底 1/6 周 北半 16 層
7 須恵器 杯	高 残 1.3 底 復 6.8	平底の外周に少し腰を持つ。内外面体部に回転ヨコナデ。外底面はヘラ切り離し後に軽いナデ。ヘラ切り離し時にロクロ左回転の可能性もあるが不確実。奈良時代後葉の益子窯製品が混入。	7.5Y5/1 灰 やや緻密 白粗〜細粒やや少 硬質	出土層不明(注記が読めない) 底 1/4 周 北半...
8 須恵器 鉢	高 残 3.4 底 復 20~30	外底面は雑なナデ。内外面体部は回転ヨコナデ。平底裏の可能性もある。奈良〜平安時代の混入遺物。	7.5YR5/2 灰褐 緻密 白・透明細粒少 硬質	北半の 11a 層 底 1/24 周 北半 11a 層
9 須恵器 裏	口 20~40 高 残 3.5	裏の口縁部としてはやや薄いので、小形の裏と考えられる。奈良〜平安時代の混入遺物。益子窯跡群製品の可能性あり。	N5/(B) 灰 緻密 白細粒多、白礫少 硬質	北半 12 層 口 1/24 周 北半 12 層
10 須恵器 裏	高 残 5.5	外面はおそらく木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面は無文当具痕およびナデ消し。厚手なのでかなり大形品。古墳時代(中期?)の遺物が混入。	N5/(B) 灰 やや粗い 白粗〜細粒多、白礫やや多 硬質	A-A' 断面 脚部片 SK-232 D-D' セク
11 土師器 裏	高 残 2.4 底 復 7.7	外底面は 1 方向ヘラケズリでやや凹凸のある平底状。外面脚下部ヨコヘラケズリ。内面底部は多方向ヘラナデ。被熱赤化痕が見られないので壺の可能性もある。古墳時代の遺物が混入。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白・灰色粗〜細粒多、赤・透明粗粒と黒細粒少 硬質	南西区 底 1/2 周 SK-232 南西区
12 土師器 小形土器	口 復 9.4 高 復 5.1 底 復 4.9	外底面はやや丁寧なナデで、ナデ以前には木葉痕があったかもしれないが不詳。外面体部ユビオサエと内面体部ナデの後に内外面口縁部ヨコナデ。古墳時代の遺物が混入。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・黒・透明細粒少 軟質	11a 層(底上 236cm)。4 層にも小片あり 口 5/12 周、底 7/12 周 2、4 層、SK-232 南西区
13 土師器 小形土器	口 復 10.0 高 復 4.8 底 復 4.8	外底面はやや丁寧なナデ。外面体部ユビオサエと内面体部ナデの後に内外面口縁部ヨコナデ。古墳時代の遺物が混入。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・透明細粒少 やや硬質	4 層(底上 283cm) 口 1/6 周、底 1/3 周 5

第5章 権現山遺跡 SG10 区

14 土師器 小形土器	高底 残 2.4 復 6.0	外底面はやや雑なナデ。外面体部ユビオサエ。内面多方向ナデ。古墳時代の遺物が混入。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白・黒・透明細粒やや多、赤粗粒少 硬質	4層(底上 350cm) 底 1/2 周 3
15 土師器 小形土器	口高底重 復 4.6 残 2.5 4.2 残 31.0	外底面は雑なナデで、素材の粘土塊の境界が皺状に見える。体部はおそらく1段だけ粘土を積んで、外面ナナメユビナデ、内面は横～斜位のユビナデ。古墳時代の遺物が混入。	5YR6/6 橙 やや粗い 黒粗～細粒やや多、赤粗～細粒と白細粒少 やや硬質	北半部 12層 口 1/4 周、底全周 北半 12層
16 土師器 小形土器	口高底重 復 4.4 残 2.4 3.6 残 36.6	外底面は丁寧なナデ。外面体部ユビオサエ。内面ナナメユビナデ。粘土紐を積み上げないで、手捏ねで成形していると考えられる。古墳時代の遺物が混入。	10YR5/2 灰黄褐 緻密 白・黒・赤粗粒少 やや硬質	北半部 11a層 口 1/3 周、底 2/3 周 北半 11a層
17 土師器 小形土器	口高底重 3.3 1.8 2.2 残 15.5	外底面は丁寧なナデ。内外面体部ユビオサエ。粘土紐を積み上げないで手捏ねで成形している。古墳時代の遺物が混入。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 白・赤・透明細粒少 やや硬質	口 1/2 周、底全周 SK-232 B-B'

SG10 区 SE-237 (第 196 図、写真図版 144・212)

【位置】 SG10 区南部の 18.5-17.0 グリッド。時期不明の土坑 SK-353 を切る。西側に時期不明の井戸 SE-236 がある。

【規模と形状】 確認面で東西 2.65m、南北 2.27m の円形で、深さ 3.16m。底面標高は 77.12m。途中で径 130cm 程度まで狭くなり、下部は壁面崩落によって再び広がる。

【覆土】 現地調査時の所見では、最上層中に 10～15cm 大の丸石が多い点が時期不明の SE-236 に似ると観察されている。東側から大量の土を入れて埋め戻した様子が読み取れる。標高 79.2m 付近までを手掘りで調査した後、標高 77.2m 付近まで重機で南半部を断ち割った。

【出土遺物】 この遺構の時期を示す遺物は、出土層不明の常滑産陶器甕 1 片だけである (1)。還元焰焼成ではあるが焼成がやや軟質なので、中世でも後半期になるかもしれない。他に、周囲の古墳時代遺構などから混入したとみられる古墳中期の土師器片が多い。2 も古墳中期の須恵器甕片で、SI-10・12 出土破片と同一個体であろう。植物性遺物では棒状の木片が 3 点あり、そのうち変形の少ない 1 点を図化した。人為的に加工しているかどうかは不明である (3)。他に木片、笹類の枝片、植物の枝・茎の小片を主にフルイで検出した。また、片面に煤が付着した自然礫が 2 点、1 層中から出土している。

第 117 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-237 出土遺物

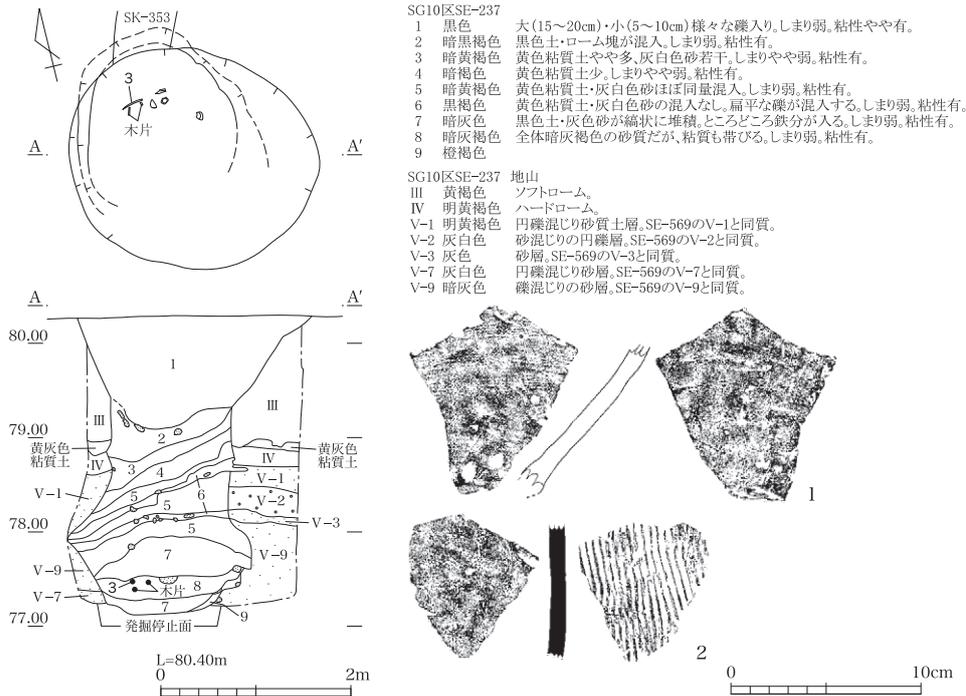
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 甕	高 残 9.3	外面は縦位のナデで、下半部はナデが弱いので成形時の凹凸を少し残す。内面は破片の中～下位にナナメナデの後、上位にヨコナデ。内外面の器面はにぶい褐色で、破面は黄灰色 (2.5Y6/1)。常滑産。	7.5YR5/4 にぶい褐 緻密 白・灰色粗～細粒と透明細粒少 やや軟質	胴下半 1 片
2 須恵器 甕	高 残 7.5	叩き板には木目直交の溝を彫っているが、木目の浮き出しが非常に弱い。内面は当具痕スリケシ。古墳時代の遺物が混入。	N4/ 灰 やや粗い 白・透明粗～細粒と黒色湧出粒やや多 硬質	胴部 1 片 1 層
3 木片 棒状品	長 残 7.4 径 0.7	棒状の木の枝で、加工の有無は不明。被熱痕や付着物は見られない。長さ約 9cm の同様な破片が他に 2 片あるが、変形が著しいため図示できない。	10YR6/4 にぶい黄橙	底上 11cm 両端欠 5

SG10 区 SE-252 (第 197 図、写真図版 145・212)

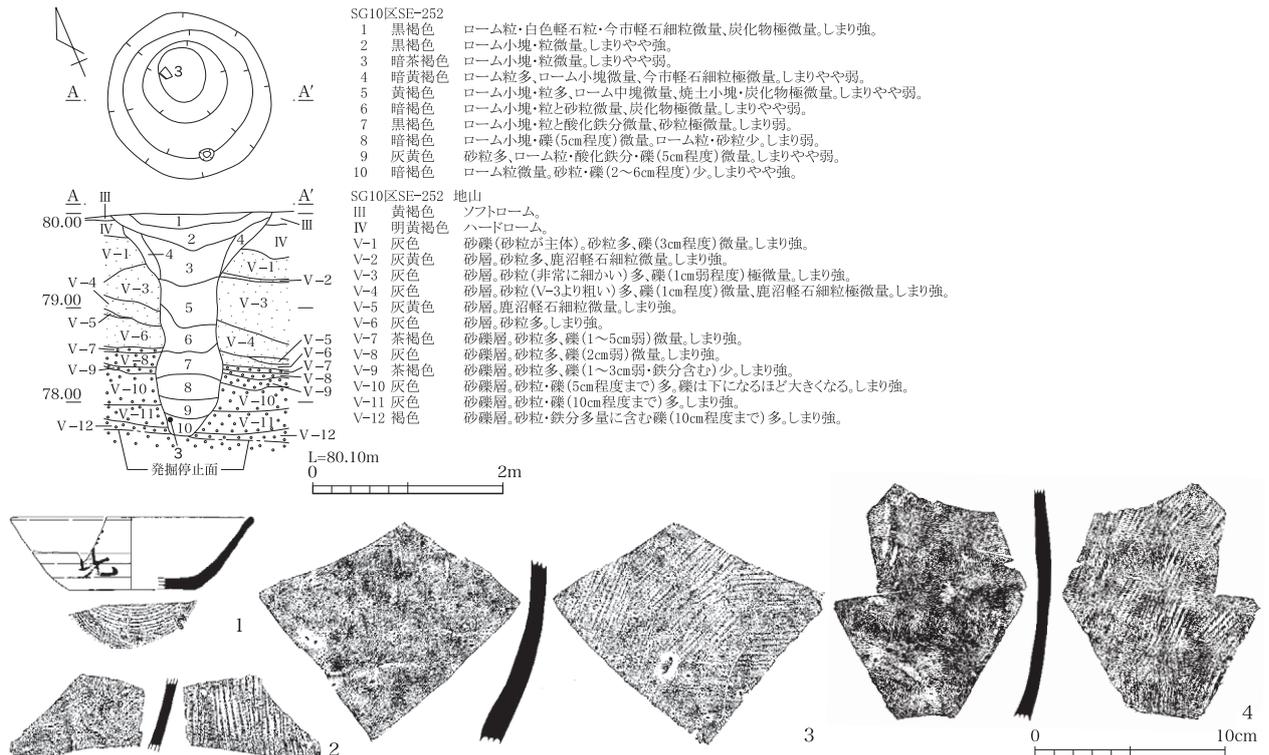
【位置】 SG10 区中央部の 19.5-18.5 グリッド。西方に時期不明の井戸 SE-345 がある。すぐ西にある近世区画溝 SD-204 と、東側低地との間にある。北西 9m に中世の井戸 SE-344 がある。重複する遺構はない。

【規模と形状】 確認面で東西 1.70m、南北 1.76m の円形で、深さ 2.36m。底面標高は 77.62m。途中で径 60～80cm 程度まで狭くなり、その下側は地山砂礫層の壁面崩落によって少し広がる。地山のうち V 層 (砂と礫の互層) は上半の V-6 層までが砂層で、V-7 から V-12 までは礫が多い砂礫層である。

【覆土】 上面から 8 層までの埋土は暗褐色～黒褐色土にロームが少し混じる。ローム塊・粒が多くて焼土・炭も含む 5 層は人為的に入れた土であろう。8 層以下に礫を含み、下部ほど礫が多くなる傾向がある。標高 79.24m 付近までを手掘りで調査した 1999 年 8 月 9 日の段階で、このレベルまで湧水してきたので、掘り下げをいったん中止した。その後、地下水位が低い 3 月上旬に標高 77.6～77.7m 付近まで重機で南半部を断ち割った。



第 196 図 権現山遺跡 SG10 区 SE-237 遺構・遺物



第 197 図 権現山遺跡 SG10 区 SE-252 遺構・遺物

〔出土遺物〕 遺構の配置からみて中世と考えられるが、その時期を示す遺物は出土していない。覆土中位で出土している須恵器杯 (1) は 9 世紀前半の益子窯跡群産と見られるもので、外面に墨書がある。古墳中期を主体とする土師器や、平安時代の可能性がある内面無文の須恵器甕の同一個体の破片 (2~4) が混入し、最下層でも出土している (3)。これらと同一個体とみられる須恵器甕片は、9 世紀中~後葉とみられる平安時代土坑 SK-235 や古墳中期の SI-30 (第 57 図 33) など複数の遺構に入っていて、広範囲に分布する。

第 118 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-252 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 杯	口 復 12.6 高 底 3.8 復 6.6	内外面回転ナデ時のロクロは右回転(時計回り)。外底面は回転系切り離し後無調整。体部外面に判読できない墨書あり。「□見」かもしれない。益子窯産。	N5/ やや緻密 白粗～細粒やや少、 白礫少 やや硬質	6 層 口 1/24 周、底 5/12 周 6 層
2 須恵器 甕	高 残 3.9	3・4 と同一個体で、特徴も同じ。	5Y3/1 暗赤灰 やや緻密 赤・黒色湧出粒多、 白礫～細粒やや多 硬質	10 層 胴部 1 片 10 層
3 須恵器 甕	高 残 9.7	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面は無文で、無文当具の可能性もある。2・4 と同一個体。平安時代の遺物が混入。	N5/(B) 灰 やや緻密 赤・黒色湧出粒多、 白礫～細粒やや多 硬質	10 層(底上 12cm) 胴部 1 片 1
4 須恵器 甕	高 残 8.5	2・3 と同一個体で、特徴も同じ。	2.5Y5/1 黄灰 やや緻密 赤・黒色湧出粒多、 白礫～細粒やや多 硬質	8 層と出土位置不明の各 1 片が接合 胴部 2 片 8 層、一括

SG10 区 SE-344 (第 198 図、写真図版 145・212)

[位置] SG10 区中央部の 20.0-18.0 グリッド。SX-308 (攪乱と考えられる掘り込み) に上部を切られる。近世の区画溝 SD-204 の東西にそれぞれ SE-252 と SE-344 がある。

[規模と形状] 確認面で東西 1.82m、南北 1.70m の不整円形で、深さ 2.40m。底面標高は 77.49m。

[覆土] 埋土の最上層に礫が多い。それより下部は、黒色～黄褐色の互層になる。標高 79m 付近までを手掘りで調査した後、重機で東半部を断ち割った。その際に、中位以下の土層断面は崩落してしまったので断面図を作成できなかった。井戸底部付近は礫を少し含む黒褐色・黒色土層であることを記録できた。最下層からまとも出土した礫は、持ち込まれたものではなくて、ほとんどが地山の礫層から混入したものと考えられる。遺物検出のためのふるいかけ作業で回収した礫は径 1～2mm 大から 40mm 大くらいまであり、石質はホルンフェルス(チャート起源・砂岩起源・泥岩起源)と安山岩・礫岩・流紋岩が認められた。地山の土層の詳細は、記録不備のため不明である。

[出土遺物] 常滑産鉢片(1)は、西方 15m の SK-46・92 に同一個体が各 1 片ある。古墳時代土坑 SK-46 表土で出土した小破片が SE-344 出土破片と接合し、中世土坑 SK-92 にも同一個体の体部小破片がある。SK-92 から SK-46 表土へ混入したものであろう。常滑産鉢からみて 14 世紀後半頃の井戸と考えられる。古墳時代の須恵器提瓶(2)や土師器片も混入している。植物性遺物では、平面図・断面図に記入した長 48cm・径 3.3cm の枝または棒が 1 点と、木材・葉の小片が下層部で出土した。

第 119 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-344 出土遺物

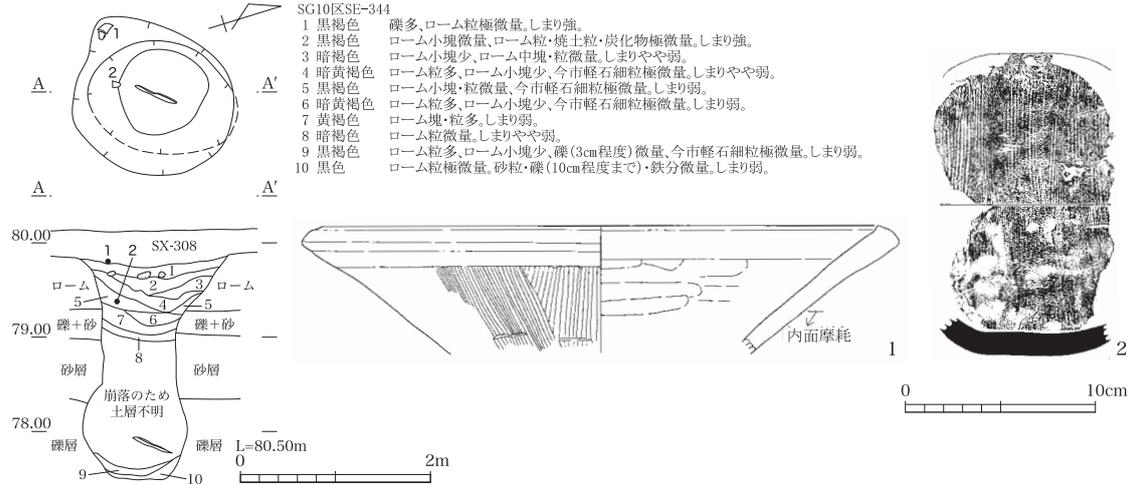
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 中世陶器 こね鉢	口 復 31.0 高 残 6.8	外面は浅いタテハケ状調整痕の後に口縁部ヨコナデ。内面はヨコハラナデ状痕跡の後にヨコナデ。内面下位は使用により磨減。常滑窯産。古墳時代土坑 SK-46 出土破片と接合。中世土坑 SK-92 出土破片と同一個体。	やや粗い 白礫多、白・ 灰色・透明粗～細粒やや少 硬質	1 層上面(底上 228cm)。 SK-46・92 にも破片あり 口 1/6 周 1、SK-46 南西表土
2 須恵器 瓶		提瓶の胴部片の可能性はある。外面胴部カキメ。内面はヨコナデで、図の左端付近の凹凸は閉塞部が近いことを示しているかもしれない。古墳後期の遺物が混入。	7.5Y5/1 灰 やや粗い 白礫～細粒多 硬質	5 層(底上 189cm) 胴 1/4 周 3

SG10 区 SE-377 (第 199 図、写真図版 145・146・212)

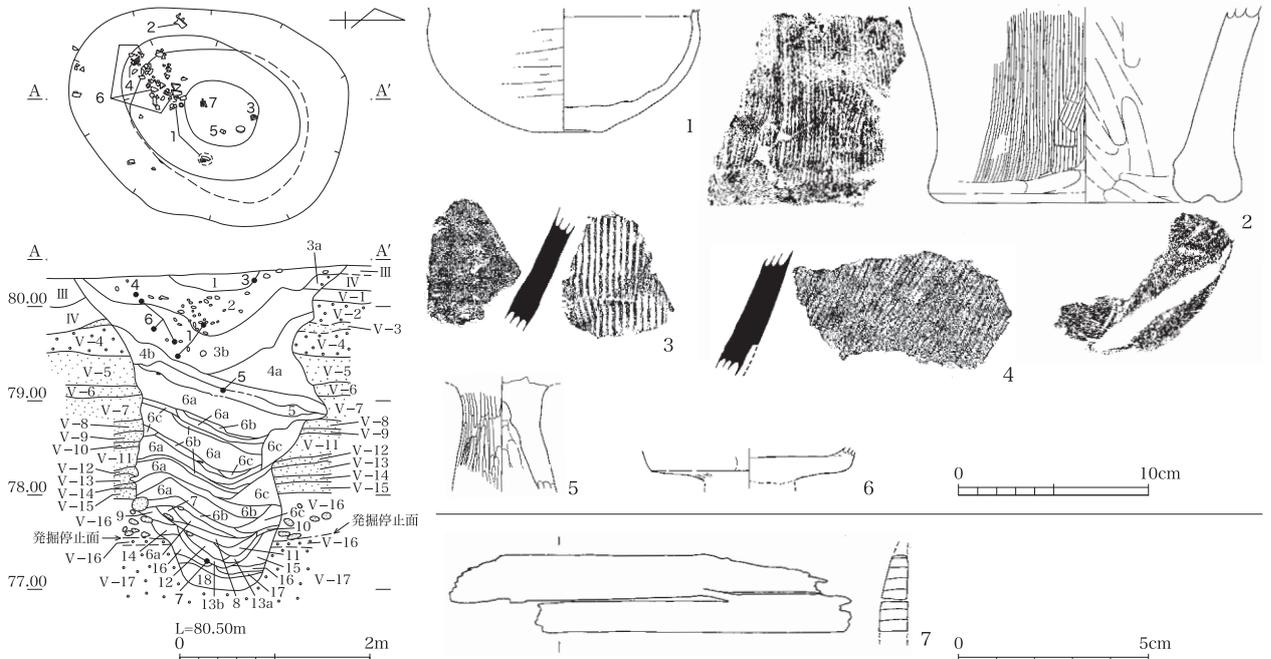
[位置] SG10 区中央部の 21.0-18.0 グリッド。重複する遺構はない。古墳時代の SI-60 に近接する。

[規模と形状] 確認面で東西 2.24m、南北 2.96m の楕円形で、深さ 3.35m。確認面から下へ約 1m の付近で径 2.00 × 1.38m 位まで狭くなる。この部分は地山が堅くて崩れにくい礫層なので、本来の直径に近い規模を保っているとも考えられる。底面標高は 76.98m。井戸底面は赤橙褐色の砂礫層で、SG10 区の他の井戸に比べると帯水層にやや深く掘り込んでいるようであり、調査した 3 月上旬でも井戸底面より 10cm 上に水面が来るほど湧水していた。

[覆土] 上部の埋土は礫や丸石を多く含む。標高 79.0m 付近までを手掘りで調査した後、標高 77.6m 付近まで重機で東半部を断ち割った。埋土上部は礫混じりの埋め戻し土が主体で、5 層は混入した古墳時代土器



第 198 図 権現山遺跡 SG10 区 SE-344 遺構・遺物



第 199 図 権現山遺跡 SG10 区 SE-377 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

片などがやや多い。埋土中位は礫の多い層とローム塊の多い層とが交互に入る状況で、壁面のローム層や礫層が崩れた土と見られる。埋土下部の8層付近より下位は自然流入土の可能性はある。最下部の16～18層は水分の多い粘質土で、木片を含む。

〔遺物出土状況〕確認面から下へ10～90cmの範囲で土器片を含み、主に混入・流入品の古墳時代土師器・須恵器・円筒埴輪破片である(1～6)。SE-569で出土した中世陶器こね鉢に接合する破片も含む。底付近では、長径20～30cm・厚さ10～15cmの大きな石が16層中に複数ある。この16層から18層までの井戸底面覆土(暗灰褐色粘質土)に木片を含み、その量はSE-569よりはるかに少ない。木片は現地でも2点を観察したが1点は不手際により紛失し、もう1点は3点に割れて出土した。ふるいで検出した木片もごく少量である。

〔出土遺物〕SE-569最上層出土こね鉢(第200図9)と接合する常滑産の陶器こね鉢破片が1片出土したので、埋没時期が近いと考えられ、どちらも中世の井戸と考えられる。植物性遺物では板状木製品破片がある(7)。混入遺物として、古墳中期の土器片を中心に古墳後期土器、縄文土器、埴輪片などが出土した。埴輪(2)や須恵器甕(3・4)は古墳中期の混入品。外面下端に横位の工具擦痕を残す埴輪は、近辺では琴平塚1号墳と磯岡北古墳群(『東谷・中島地区遺跡群』4・7)や東谷笹塚古墳(宇都宮市教委2012・今平2012)に類例がある。権現山遺跡南部や北部の古墳時代集落で埴輪が出土した事例がないので、中世の人々が埴輪破片を持ち込んだことが考えられる。

第120表 権現山遺跡 SG10 区 SE-377 出土遺物

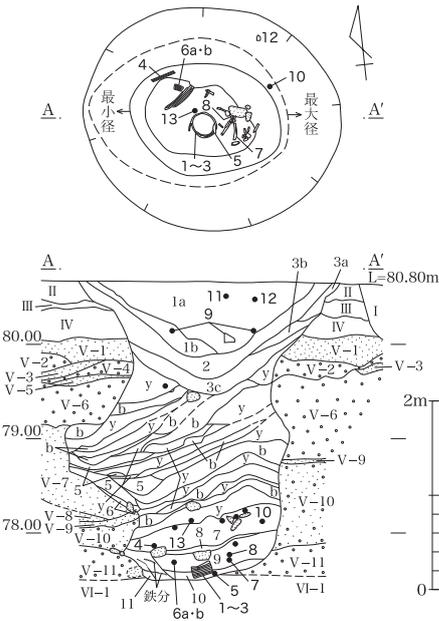
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 6.4 底 3.6 最大 残 14.1	内外面の器面が磨滅して調整が不明瞭。外面の体部と底部はおそらくヘラケズリで、外底面はわずかに凹面状。内面はナデまたはヘラナデの可能性ある。古墳中期の遺物が混入。 [注記]2、3、4、12、東半3層、東上半	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗粒やや多、 白・赤礫と白・黒粗～細粒少 やや硬質	2層(底上281cm)と 3b層(底上248cm)が 接合 類1/36周、底全周 注記は左欄
2 円筒埴輪	高 残 10.3 底 復 16.2	外面タテハケ後、最下段外面下端に横方向のナデまたは工具擦痕。内面ナメユビナデ。底面はササ類と思われる植物圧痕で円棒状に深く凹む。ハケメは11本/2cm。古墳中期の遺物が混入。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白粗～細粒多、白 礫と灰色・透明粗粒やや少、 黒細粒少 やや硬質	2層(底上326cm) 底1/6周 20
3 須恵器 甕	高 残 6.4	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面はナデによる無文。古墳中期の遺物が混入。	10Y6/1 灰 やや緻密 白粗粒少 硬質	2層(底上328cm) 胴部1片 1
4 須恵器 甕	高 残 6.6	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面は全体が剥落して調整不明。古墳中期の遺物が混入。	7.5Y5/1 灰 やや粗い 白礫～細粒多、透明 礫～細粒やや多、赤粗粒と 赤・黒細粒少 硬質	2層(底上313cm) 胴部1片 18
5 土師器 高杯	高 残 6.0	外面は脚柱部タテナデ後タテヘラミガキ。内面は脚柱部上端から下がったところが一旦狭くなって、そこより下に縦位のユビナデとヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・灰色・透明粗 ～細粒やや多、黒細粒少 硬質	5層(底上212cm) 脚柱全周 3
6 土師器 高杯	高 残 2.1	外面杯体～杯底部ヨコナデ後、杯底部に放射状ヘラミガキを行う可能性あり。内面は杯底部を1方向と杯体部に横位のナデ。古墳中期の遺物が混入。 [注記]19、27、34、東半3層	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・黒・透明細粒少 軟質	2層(底上312cm)と 3b層(底上258～273 cm)が接合 杯底1/2周 注記は左欄
7 木製品 板状品	長 残 10.3 幅 残 2.0 厚 残 0.4～ 0.7	片側へ向かって厚さが薄くなる製品の破片。長側縁は両側ともに年輪に沿った割れ面。縦方向に割れが生じていて、両端も欠損している。被熱痕・付着物・墨書等は認められない。同一個体と思われる小破片が2点あり、最下層(暗灰褐粘層)出土の細片2点も同一個体の可能性が高い。	7.5YR4/3 褐	16層(底上27cm) 全周を欠損 42

SG10 区 SE-569 (第200～202図、写真図版146・213・214)

〔位置〕SG10区北部の22.0-18.0グリッド。重複する遺構はない。

〔規模と形状〕円形で大形の井戸。確認面で東西2.74m、南北2.35mの楕円形で、深さ3.15m。底面標高は77.5m。砂・礫層が崩れた部分の壁面がオーバーハングする。井戸底面は黄灰色粘土層(VI-1層)である。

〔覆土および地山層〕上部の埋土1層と2層には円礫が多く、土師器片も含む。4層から6層までは壁面のローム塊と砂・礫が崩れて埋まった層である。標高79.2m付近までを手掘りで調査した後、標高78.0m付近まで重機で南半部を断ち割った。標高77.6～78.3m付近は井戸使用時に堆積したような黒色粘質土で(7層と9層)、中間に薄い粘土をはさむが(8層)、短い時期に水成堆積したとみられる。この黒色粘質土中に小形の木片・木屑や中世こね鉢片を含み、古墳時代土師器片も混入している。この下が埋土最下層の灰色粘質

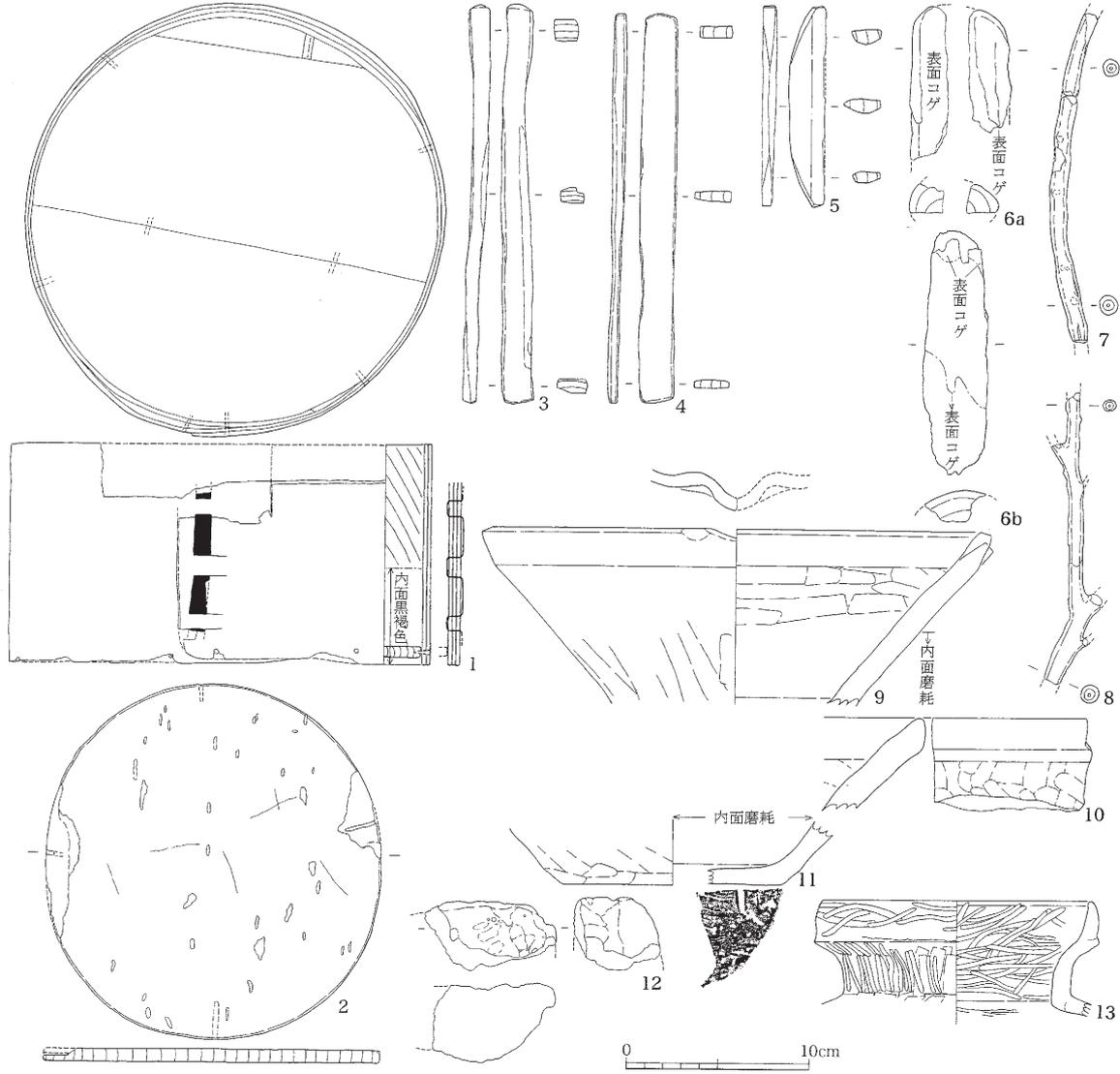


SG10区SE-569

- 1a 黒褐色 礫混じりの層。円礫(5~50mm)多、ローム粒少。軟。土器片含む。
- 1b 暗褐色 礫混じりの層。円礫(5~20mm)やや多、ローム粒やや少。軟。土器片含む。
- 2 暗褐色 円礫(20~40mm)・ローム粒少。軟。
- 3a 褐色 暗褐色漸移層が主体。黒褐色土・ローム粒少。やや硬。
- 3b 暗黄褐色 褐色土が主体。ローム小塊・粒やや多。やや軟。
- 3c 黒褐色 ローム塊・小塊・粒少。軟。
- 4 黄褐色(y)と黒褐色(b)の互層 ローム小塊・粒少と河原石・円礫(3~10cm)少。やや軟。
- y 黄褐色 ローム主体。黒褐色土多。軟。
- 5 灰白色 礫混じりの砂層。砂が主体。円礫(2~7cm)多。地山の砂層と礫層から崩れて入った土。しまり弱。
- 6 黒褐色 粘質土。砂混じり。硬くしまる。砂を若干混じえる。
- 7 黒色 粘質土。小円礫(2~3cm)少。軟。水分多。遺物(土器片・木片)多い。上面付近は4aのローム層塊・小塊がわずかに混じる。
- 8 黄灰色 粘土。黒色粘質土主体。黄灰色粘土小塊・粒多。黄灰色粘土塊少。軟。水分多。7-9層の堆積中に薄く粘土が流れてしまった層。地山VI-1層と同じ。
- 9 黒色 粘質土。小円礫(2~3cm)少。軟。水分多。遺物(土器片・木片)多い。
- 10 灰色 粘質土。11層の灰色砂もやや多く混じる。水とともに砂と粘土がたまった層。鉄分少。軟。水分多。
- 11 灰色 砂層。1~2cm大の円礫やや多。鉄分が数条・1~2cm幅の帯状に沈着する。しまりやや強。水分多。

SG10区SE-569

- 風倒木で逆転して入った腐植土層。今市・七本椏軽石粒(1cm以下)が均等に若干入る。硬くしまる。
- I 黒褐色 ローム漸移層。やや硬。今市・七本椏軽石粒は含まない。
- II 暗褐色 ソフトローム。硬。
- III 黄褐色 ハードローム。非常に硬。特に上半では黄色砂が若干混じり。光る細砂粒も少量見られる。
- IV 明黄褐色 円礫混じり砂質土層。ローム土と灰白色砂が均等に混じった黄褐色砂質土。円礫(1~8cm)多。
- V-1 明黄褐色 砂混じりの円礫層。1~5cm大の円礫が主体で、灰白色砂も多。硬。
- V-2 灰白色 砂層。5mm前後の薄い暗灰色砂が20~30枚重なる。硬。しまり強。上下の礫層より保水がやや良い。
- V-3 灰色 砂混じりの円礫層。V-2と同質。
- V-4 灰白色 砂層。V-3と同質。
- V-5 灰色 砂混じりの円礫層。V-2と同質。
- V-6 灰白色 円礫混じり砂層。灰白色砂が主体。鹿沼軽石粒・円礫(1~3cm)少。鹿沼軽石粒(径5mm前後)が水でかき回されたように所々に入る。やや硬。流されてきたものか?
- V-7 灰白色 砂層。灰色砂が主体。鹿沼軽石粒少量。やや硬。
- V-8 灰色 礫混じりの砂層。暗灰色砂が主体。小円礫(1~3cm)やや多。黄褐色砂少。硬。
- V-9 暗灰色 砂層。鉄分含む赤褐色砂主体。灰白色砂も1~3cmの葉層として多く挟まる。円礫(1~5cm)も砂と同量位含む。鉄分が付着し赤褐色のものが多い。硬。
- V-10 赤褐色 砂混じりの礫層。径3~10cmの大礫多。黄褐色砂を間に若干挟む。鉄分が付着し赤色気味。しまり強。
- V-11 赤黄褐色 粘土。水分多。灰色粘土若干。軟。井戸内8層に入る粘土と同じ。
- VI-1 黄灰色



第 200 図 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

土層（10層）で、井戸底面と同じ黄灰色粘土も含んでいる。

地山の礫層を断ち割って観察すると、井戸よりも東側では真っ赤になるほど鉄分が付着しているのに対して、西側には鉄分がまったくない。この井戸を作ったことが原因となって、両側の礫層における鉄分のあり方に違いが生じたものであろう。

〔遺物出土状況〕 最上層にも遺構の時期を示すこね鉢片を含む（9）。7層以下に木製遺物が多いが、古墳時代集落から流入した13などの土師器片も少し混在している。井戸底部から曲物などの木製品がまとまって出土し、井戸の廃棄に伴う儀礼行為を示すものかもしれない。曲物桶（1）は、最下層の灰色粘質土層の上に載り、上向きで出土した。桶（1）の内部に入っていた棒（3）は、割れそうな桶底板を補強するために支持材として入れたものかもしれない。この桶の裏側（つまり底板の下側）には、ひとまわり小さい別個体の曲物底板（2）が接している。さらにその下でD字状の木製品（5）が出土した。

〔出土遺物〕 陶器鉢などからみて中世の井戸と考えられる。常滑産こね鉢（9）は、SE-377で出土した1片がSE-569の3片と接合したので、SE-377・569の埋没時期が近いと考えられる。在地産こね鉢（10・11）は比較的軟質な焼成。13はSI-19aなどにある受口状口縁壺で、古墳中期の混入遺物。

曲物桶（1）は側板内面下半と底板内面に黒褐色の付着物があり、漆の容器に使用していたことがわかる。この桶の底板は、板2枚を木釘2本で接合している。さらに厚さが異なる転用材の補充底板（図の手前側）を底板に付け足して、この補充板だけは内面の漆が付着していないので、修理後は漆容器以外に用途を変更したとも考えられる。この補充板は、図示した溝を片面に持つことからみても転用材である。側面図の右上部で、最外周の側板が割れてきた部分を截断して処理した可能性があること、補強用の支持棒？（3）を中に入れていたことからみて、かなり使い込んだことがわかる。2は別個体の曲物底板で、1の底板を補強するために下面に付け足した可能性もある。ただし、桶底板の下に別の板を取り付けた方法が不明なので、別個体として扱う。他の木製品は、別個体の曲物桶底板の部品と見られるD字状木製品1点（5）と、板状品（4）と棒状品（7・8）がある。焦げた棒状品（6）は折れた杭の破片かもしれない。

SE-569から出土した遺物のうち、完形の曲物桶1点の各部品（第122表11・14・15）およびその補強材？（第122表13）と、別個体の曲物桶底板2点（第122表の12・16）について、樹種同定を実施した。また、完形の曲物桶の内部下半に付着していた黒褐色物質が漆であることを確認するために断面観察を実施した（第122表の14漆）。パリノ・サーヴェイ株式会社から提出された分析結果を次節に掲載する。

第121表 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 木製品 曲物桶	口 23.3 高 12.1 底板径 21.0	厚さ約2mmのヒノキの薄板を曲げて二重にする。縦じ合わせ部だけは三重になり、幅9mmの樺か桜の樹皮で縦じる。樹皮の上下端の処理方法は不詳。縦じ部の右上では最も外側の板が縦位に切り込まれていて、破損部を切断する処理が行われたとも考えられる。側板の内面上半に斜平行線状のケビキを入れる。底板は2枚を2本の木釘で接合した厚さ6mmのヒノキだが、端部は長11×幅2cm×厚9mmの半月形のスギ材板で補充している。この補充板は幅4.5mm、深さ2.0mmの溝が片面に彫られていて、側板と結合する釘孔も見られないので、転用材の可能性がある。2.5～14cmの間隔で木釘を6箇所打って底板を止める。側板内面下半部と底板の内面は黒褐色で、側板内面の最下縁まで黒褐色になっているので、漆を保管した容器と考えられる。底板のうちスギ材の補充板には黒褐色の付着物がないので、底板を補修した後は用途が変わったと見られる。	樹種 ヒノキ 底板の補充板はスギ	底上 4cm 口 3/4 周、底全周 15
2 木製品 曲物底板	短径 18.3 長径 19.4 厚 0.7～0.8 木釘径 0.25	曲物桶の底板で、外周の四方に木釘孔がある。両端が割れている2箇所は本体に釘で結合されていた部分に力加わって破損した可能性がある。残る2箇所は釘孔に打ち込まれた木釘が残っている。図示した面に細かい凹凸と傷が多い。桶に使った時に生じた傷か、あるいは他用途の品から転用したことを示す。図示した面をもう1個体の曲物桶の底面側に接した状態での出土したので、他の曲物桶の底板を補強するために、紐等で固定していたのかもしれない。	樹種 ヒノキ	10層（底上2cm）。1の底板のすぐ下について出土 完形 15
3 木製品 棒状品	長 20 幅 1.0 厚 0.6	断面が不整形の角棒状。曲物桶の底板の内面に接していたので、底板に亀裂が入った曲物桶を補強するために内面に入れてあったものかもしれない。ただし、桶に固定するための孔や紐等はない。	樹種 エノキ属	10層（底上2cm）。曲物桶底板の内面に載って出土 完形 15

第 19 節 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 で出土した曲物桶の材質と付着物

4 木製品 板状品	長幅厚 21.4 1.9 0.5~0.8	長方形の薄い板状。厚さは一端がやや厚く、他端がやや薄くなる。傷などの使用痕や付着物は見られない。		9層(底上30cm) 完形 24
5 木製品 D字状品	長幅厚 11.0 2.0 0.8	細長い「D」字形。図示した面は中央が厚く、左右両側縁が少し薄くなる。図の対面は中央が平坦になる。曲物桶底版の部品と考えられる。	樹種 エノキ属	10層(底上1cm)。曲物桶の下で出土 完形 27
6a 木製品 不明品	長幅厚 残 8.4 約 5~6 残 1.6	本来は幅 5~6cm×長さ 10cm程の木片 1点であったが 2片に割れ、表面や外形も破損が著しい。もとは径 5~6cmの厚みがあった可能性があり、残存する表面は焦げている。腐食防止のために表面を焼いた杭等の端部かもしれない。6bと同一個体。		9層(底上18cm) 破片 2点 23
6b 木製品 不明品	長幅厚 残 13.4 3.6 残 1.7	本来は幅 7~8cm×長さ 39cmの長い木製品であったが、破片化が進行して原形をとどめていない。表面が残る部分の形状から見て、本来は丸棒状だった可能性がある。残存する表面が焼け焦げている部分が目立つ。腐食防止のために表面を焼いた杭等の破片かもしれない。6aと同一個体。		9層(底上38cm) 破片 13点 22
7 木製品 棒状品	長幅厚 残 18.1 0.8~1.1	木枝の細枝を除去し、その痕を軽く削っているかもしれない。両端を人為的に切断した可能性もあるが不確実。		7層(底上30cm) 両端部欠 18
8 木製品 棒状品	長幅厚 残 16.0 0.7~1.0	自然木の枝。分かれる小枝がそれぞれ切断され、または折り取られている。図上端部で左に出る小枝と図下端の木口部は、それぞれ切断した面と見られる。		9層(底上27cm) 両端部欠 26
9 陶器 こね鉢	口復高 27.6 残 9.7	外面体部タテナデ、内面体部ナデ後ヨコナデ、内外面口縁部ヨコナデ。口縁部に片口を持ち、その両脇は器壁を内側へ押し凹めている。内面体部下半は使用によって少し磨減している。常滑産。	5YR5/3 にぶい赤褐 粗い 白・半透明礫~細粒多、 灰色粗粒やや多 硬質	SE-377の2層(1片)と SE-569の1a層(3片) が接合 口1/5周、底1/3周 1、3、5、SE-377 13
10 中世土器 こね鉢	口復高 約 25 ~30 残 5.2	還元炎焼成の須恵質土器。外面体部はヨコナデ後に不定方向のナデおよびコピオサエ。内面体部はナメナデ。内外面口縁部ヨコナデ。11と同一個体の可能性もある。	2.5Y7/2 灰黄 やや緻密 灰色・透明粗~細 粒と白・黒細粒少 やや軟質	7層(底上62cm) 口1/12周 10
11 中世土器 こね鉢	高底復 残 3.5 12.1	還元炎焼成の須恵質土器。外面体部はヨコナデ後に下端部ヨコヘラナデ。外底面は回転糸切り離し後に軽いナデ。内面ヨコナデ。10と同一個体の可能性もある。	N7/(B) 灰白 緻密 灰色粗粒と白・黒細粒 少 やや硬質	1a層(底上302cm) 底1/6周 2
12 椀形鍛冶滓 (極小、工 具痕付き)	長幅厚重 残 3.8 残 7.2 厚 4.7 重 180.7	厚さ 4cm前後で密度の高い中形の椀形鍛冶滓。左側部と下手側側部がシャープな破面となっており、上手側側部は急激に立ち上がる椀形となっている。上面はほぼ平坦で一部に木炭痕あり。上手側側部は中段に凹みを生じ、下半が独立した様なきれいな椀形をなす。表面には炉床土の圧痕が全面に残されている。破面の気孔は外周部にやや目立つが、芯部では極めて少ない。本資料を出土した遺構は中世の井戸で、他の古墳時代の鍛冶関連遺物とは時期が全く異なるが、例外的に構成中に含めている。鍛冶関連遺物構成No.78。	表 明褐色 地 黒褐色 磁着度 3 メタル度 なし	底上269cm 破面2面 4
13 土師器 壺	口復高最大 14.5 残 6.3 復 15.4	口縁部は受口状で、外面は肩部タテヘラナデ、頸部タテヘラナデ後タテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は肩部ナデ、口~頸部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。古墳中期の遺物が混入。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白礫~細粒と黒・ 透明細粒やや多、赤粗~細粒 少 硬質	4a層(底上62cm)と標 高78m付近(7層)が接 合 口1/2周、頸7/12周 7、L78.0m付近黒粘層

第 19 節 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 で出土した曲物桶の材質と付着物

パリーノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

権現山遺跡 SG10 区で検出された、中世の井戸跡 (SE-569) からは、曲物桶が出土している。1 点が底板、側板、補強材の各部材が出土し、これとは別個体の底板が他に 2 点ある。このうち、底板、側板、補強材が出土した曲物桶は、下半部内面に黒色付着物が見られ、漆を入れた容器の可能性が推定されている。

今回の分析調査では、井戸跡から出土した曲物桶の樹種同定を行い、木材利用を推定する。また、黒色付着物の薄片作製・鑑定を行い、付着物の由来を推定する。

2. 木製品の樹種

(1) 試料

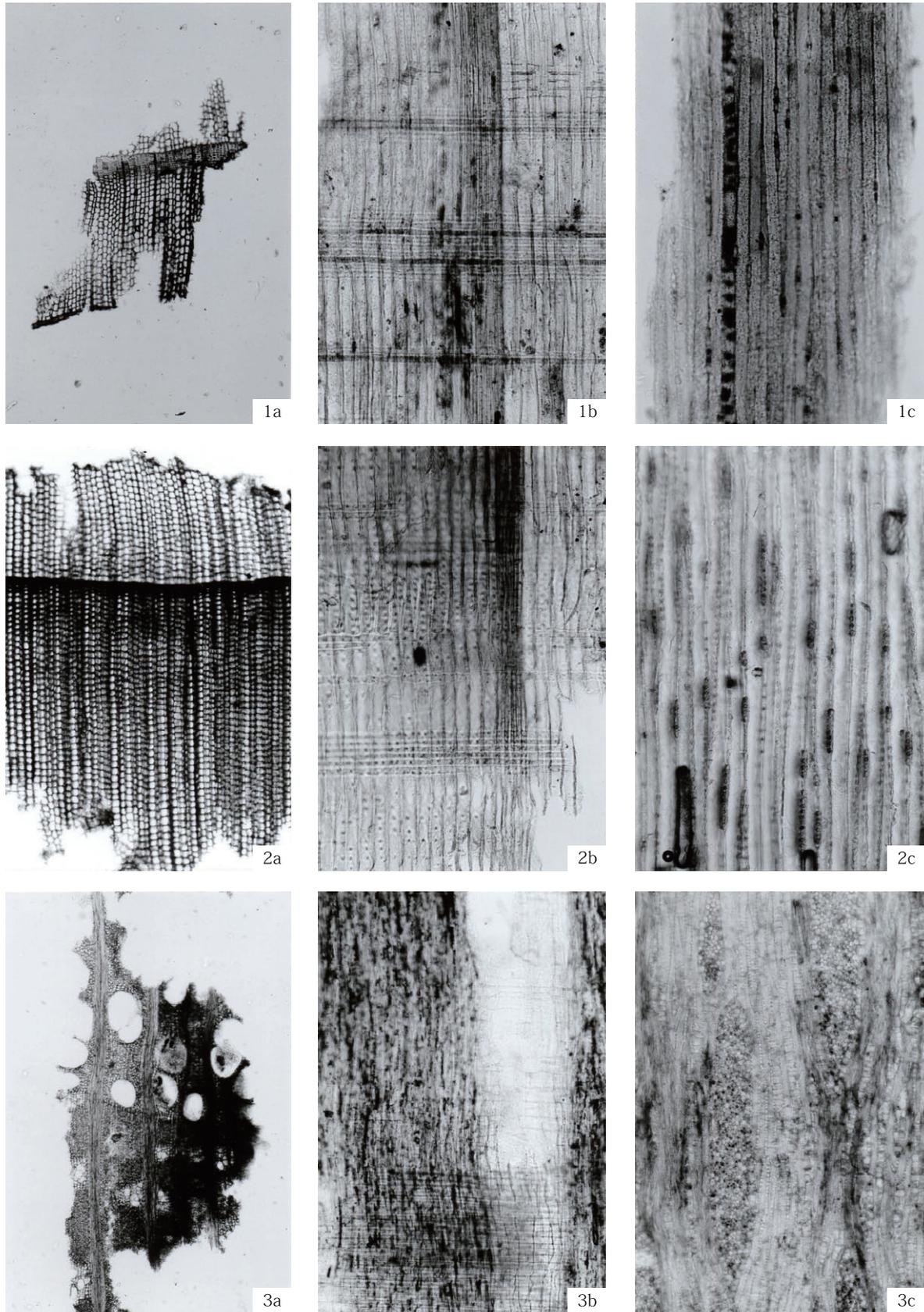
試料は、中世の井戸跡 (SE-569) から出土した曲物桶の部材 6 点 (試料番号 11 ~ 16) である。このうち、試料番号 11,13,14,15 が同一製品 (曲物 15) の部材で、試料番号 12,16 はそれぞれ別個体の底板である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口 (横断面)・柁目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の徒手切片を作製し、ガ

第 122 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 分析対象資料一覧

番号	遺跡・地区	遺構	注記	遺物の種類・部位	分析資料に対するコメント
11	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物桶の側板	中世の井戸の底、曲物 15 の部品。下半部内面に漆?付着。図の 1 番。
12	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物桶の底板 2	曲物 15 の直下で出土した別個体の底板。図の 2 番。
13	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物桶の補強材?	曲物 15 の桶の中に入れていた支持棒か。図の 3 番。
14	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物の底板 1a	曲物 15 の部品。1b と結合して使用。内面に漆? 図 1 番の手前。
14 漆	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物の底板 1a	同上の内面の漆 (?) 部分。断面観察を試みる。
15	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物の底板 1b	同上。1a と結合して使用。片面に溝 (他品を加工転用か)。図 1 番の上端。
16	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.27	曲物の底板 3	中世の井戸の底。No.15 とは別個体。図の 5 番。



1. スギ (試料番号 15)
2. ヒノキ (試料番号 11)
3. エノキ属 (試料番号 13)

a: 木口, b: 柃目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

第 201 図 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 曲物桶の底板・側板・補強材の組織

第 123 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 樹種同定結果

番号	遺構	位置	時期	遺物番号	種類	樹種
11	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.15	曲物桶 (曲物 15) の側板	ヒノキ
12	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.15	曲物桶 (曲物 15 とは別個体) の底板 2	ヒノキ
13	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.15	曲物桶 (曲物 15) の補強材? (支持棒?)	エノキ属
14	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.15	曲物桶 (曲物 15) の底板 1a	ヒノキ
15	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.15	曲物桶 (曲物 15) の底板 1b (転用品?)	スギ
16	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.27	曲物桶 (曲物 15 とは別個体) の底板 3	エノキ属

ム・クロラル (抱水クロラル, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液) で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を第 123 表に示す。木製品は、針葉樹 2 種類 (スギ・ヒノキ) と広葉樹 1 種類 (エノキ属) に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 ~ 4 個。放射組織は単列、1 ~ 15 細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1 分野に 1 ~ 3 個。放射組織は単列、1 ~ 15 細胞高。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

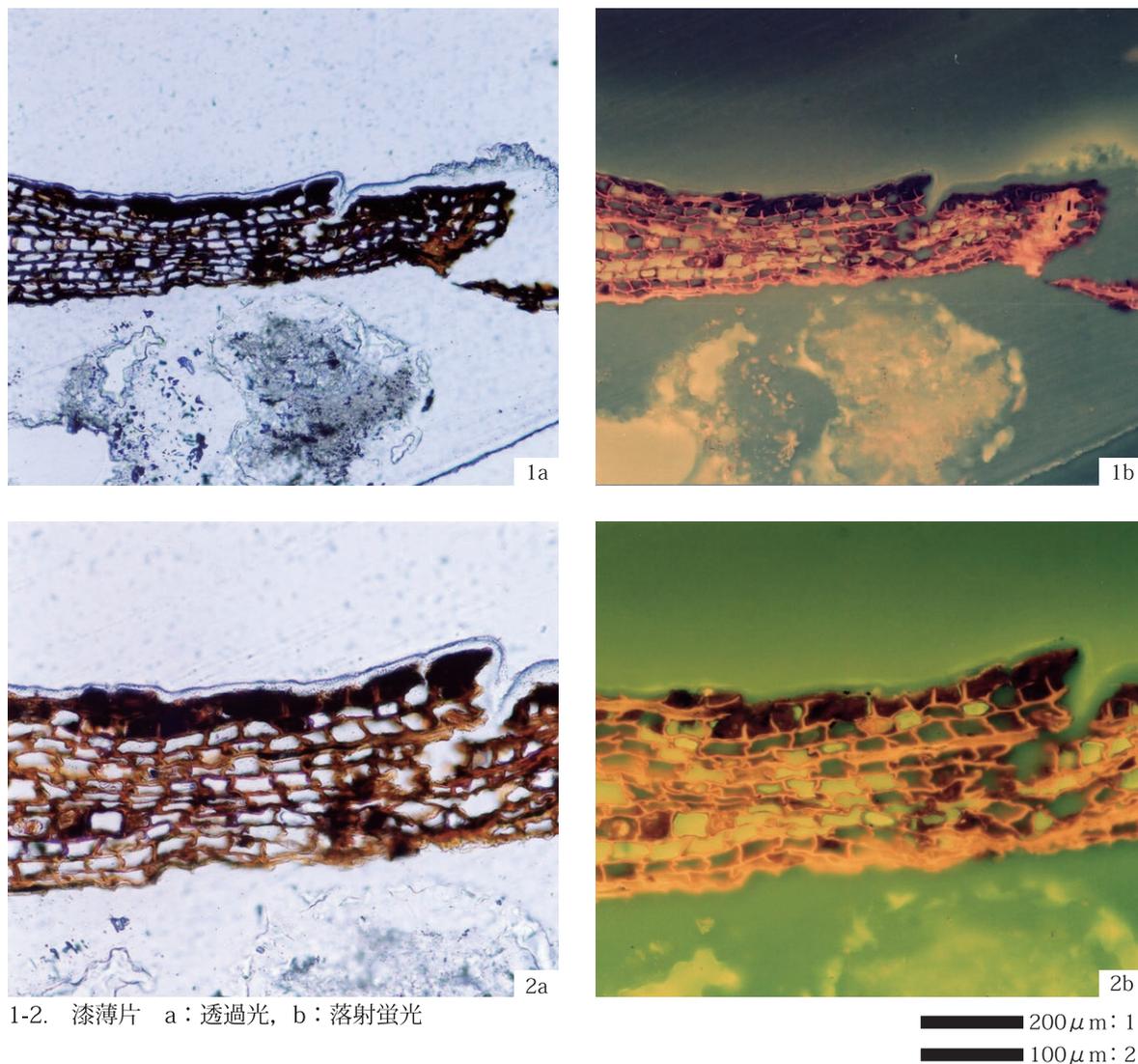
環孔材で孔圏部は 1 ~ 3 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1 ~ 15 細胞幅、1 ~ 50 細胞高で鞘細胞が認められる。

(4) 考察

曲物 15 は、底板の一部に別材が使用され、内部の下半部には黒色の付着物がみられる。側板と底板の大きな方の部材がヒノキ、底板の小さな部材がスギ、内部の補強材? がエノキ属であった。ヒノキの使用は、西刑部西原遺跡 3 区の結果とも一致しており、古代と同様に耐水性や殺菌性を考慮した用材選択が推定される。一方、底板の小さな部材はスギであり、他の底板・側板とは種類が異なる。この部材は、表面に黒色の付着物がみられず、片面には溝もみられることから、修理の際に他品を転用した可能性がある。スギも耐水性や殺菌性を有することから、元々使用しているヒノキに近い材質を有する種類が選択された可能性がある。ヒノキが用いられなかった背景には、周囲に転用可能なヒノキ製品が無かったこと等が考えられる。

補強材は広葉樹のエノキ属であった。1 点のみ広葉樹材が使用され、他の部材と傾向が異なる。この背景には、容器の本体である底板や側板に比較して、耐水性などはあまり考慮されず、補強のための強度等が考慮されたこと等が考えられる。エノキ属は、関東地方の河道沿いなどに普通に見られる種類であることから、周辺で入手可能な木材を使用した可能性もある。

曲物 15 とは別個体の曲物桶底は、底板 2 がヒノキ、底板 3 がエノキ属であった。底板 2 の結果は、曲物 15 と一致しており、同様の木材利用が推定される。一方、曲物底板に広葉樹材が使用される例は、福島県御山千軒遺跡のケヤキの例 (嶋倉, 1983) 等が知られているが、一般的にヒノキなどの針葉樹材の利用が多く、広葉樹材の利用例はほとんどない (島地・伊東, 1988)。しかし、薄い板が制作可能で、曲げた時の強度も重要な側板に比較すれば、円形の板の製作が可能で耐水性等があればどのような木材でも利用可能と考えられ、側板よりも利用できる木材の幅は広がった可能性がある。



第 202 図 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 曲物桶底板の漆塗膜

3. 黒色付着物の同定

(1) 試料

試料は、曲物桶（曲物 15）の底板（試料番号 14）に付着していた黒色物質 1 点である。木質と共に黒色部分を薄く削いで試料とした。

(2) 方法

試料を樹脂で包埋し、固化させた後、黒色物質の断面が出るように切断する。切断面を研磨したのち、スライドガラスに接着し、もう一方も切断し、厚さが 0.03mm ~ 0.4mm になるように研磨してプレパラートとする。

生物顕微鏡、落射蛍光顕微鏡、反射顕微鏡等を用いて断面を観察する。

(3) 結果

黒色物質は、木質の表面に薄く認められる。残存している場所は、ほとんどが仮道管の壁が壊れて窪みができている部分等である。透過光観察では、かろうじて光が透過して茶褐色を呈する部分と、光を透過せず不透明となる部分とがある。落射蛍光による観察では、黒色部分は茶褐色を呈する。

これらの特徴から、混和剤を含まない漆の酸化した層の可能性はある。

(4) 考察

漆は、湿度の高い環境で乾燥する物質であり、一度固まってしまうと再利用することは不可能なため、保管時には湿度の低い環境を維持する必要がある。曲物はヒノキで作られており、耐水性の高い容器に漆を入れて保管していたことが推定される。

4. まとめ

東谷・中島地区遺跡群の西刑部西原遺跡 3 区 (※)、権現山遺跡 SG1 区 (※) および 10 区から出土した木材は、曲物の部材が多く、他に櫛や用途不明の加工木、加工痕の認められない木材が各 1～2 点あった。曲物の部材についてみると、ヒノキの利用が多く見られる。この結果は、ヒノキの耐水性や殺菌性などの材質を考慮した木材利用と考えられ、古代・中世を通して同様の利用が行われたことが推定される。

ヒノキは、関東地方では、山地の尾根筋などに生育しており、平野部には生育していない。したがって、これらの曲物は、木材または曲物として持ち込まれた可能性がある。曲物については、これまで行われた樹種同定結果で、地域に関わらずヒノキが多い傾向が見られる。このことから、用途と用材が確立しており、周辺で木材を入手したのではなく、木材あるいは製品として地域間を移動していたことも想定される。

※ (報告書編者註) 報告の原文は西刑部西原遺跡 3 区の井戸 (SE-23・75) および権現山遺跡 SG1 区の井戸 (SE-169) 出土遺物と一緒に報告になっているため、「まとめ」ではこれらの木材を含めた記述になっている。

引用文献

嶋倉巳三郎 (1983) 御山千軒遺跡から出土した木質遺物。「福島県文化財調査報告書第 109 集 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告 VI 御山千軒遺跡」, p.9-30, 福島県教育委員会・日本国有鉄道。
島地 謙・伊東隆夫編 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧。296p., 雄山閣。

第 20 節 中世の柱穴状土坑と中央部・北部柱穴群 (第 203～208 図、写真図版 173・214)

中世と推定される柱穴状土坑 82 基をここで報告する。このうち、中世の遺構であることを遺物で確定できた柱穴状土坑は 3 本である (P-425・627・640)。P-627・640 の周辺に群在している北部柱穴群は、大半が中世の遺構である可能性が高いと判断し、ここで扱う (第 203 図)。北部柱穴群の中には、遺物や重複関係からみて古墳時代集落に伴うものが認められない。P-425 周辺に分布する中央部柱穴群 (第 204・205 図) の中にも中世の柱穴が多く含まれていると推定できる。しかし、中央部柱穴群の場合は、古墳時代の柱穴状土坑 (P-464・465・466) も分布しているため、そのすべてを中世と見ることはできない。各遺構の詳細は下記の表にまとめた。また、中央部柱穴群の多くは時期不明の柱穴状土坑なので、本章第 29 節で報告する。

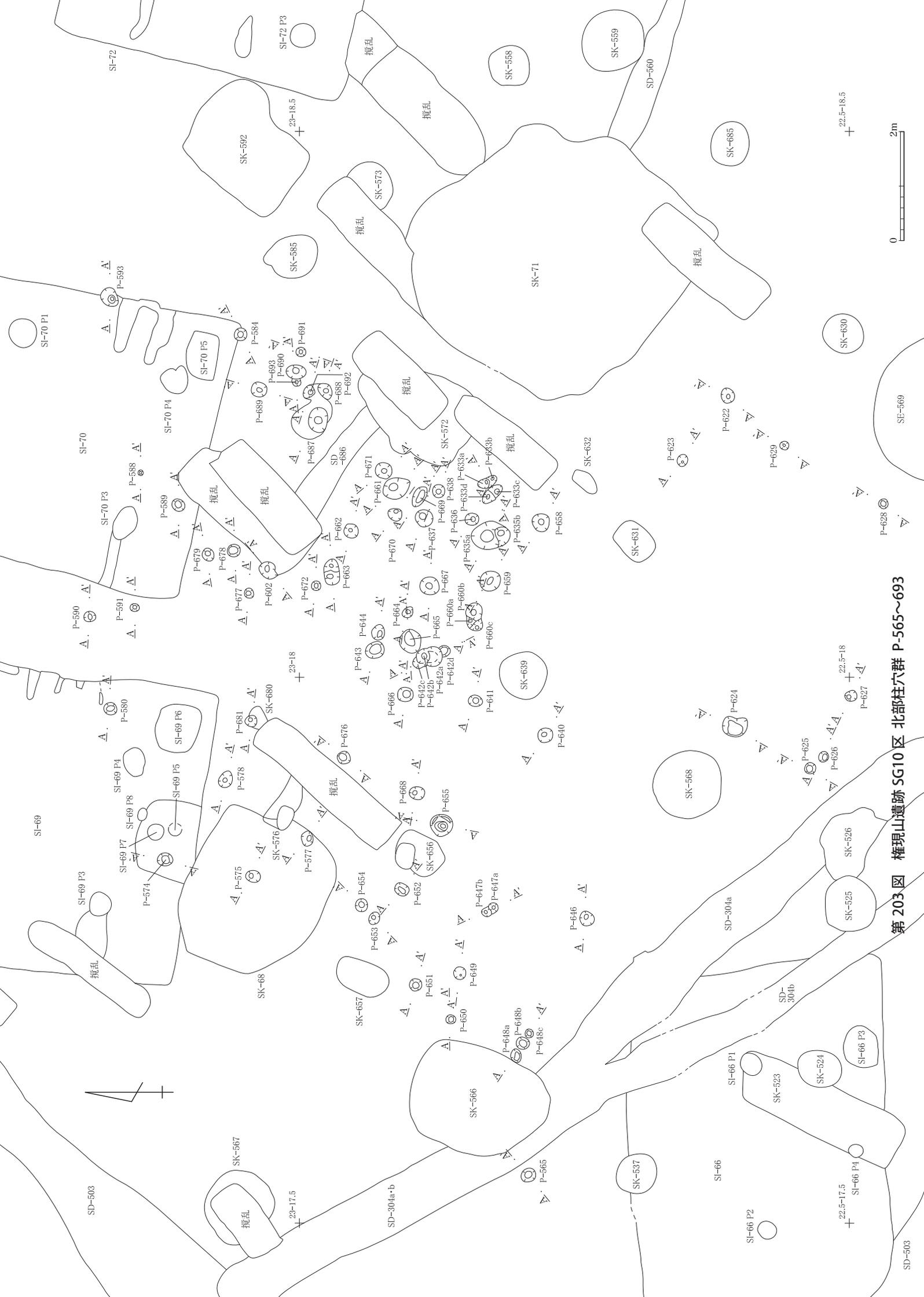
中世の遺物を出土した遺構は、P-425・627・640 がある。P-425 の青磁破片 (1) は龍泉窯系青磁椀 I-5b 類で、13 世紀後半に多いものである (山本 1995, p.480)。P-627 では皇宋通寶 (1039 年初鑄) と「□元□寶」(銭名不詳の破片) が出土した。P-640 には還元炎焼成の山茶碗系鉢破片があり (1a)、古墳時代竪穴 SI-114 に混入していた同一個体とみられる破片 (1b) とともに図示した。

第 124 表 権現山遺跡 SG10 区 中世の柱穴状土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	覆土
P-425	20.5-18.0	円形	SI-110 より新	0.24	0.22	0.38	単層
古墳後期の SI-110 を切る。中世 (13～15 世紀) の鎧連弁文青磁碗片出土。中央部柱穴群の分布域に所在し、周辺の柱穴群に中世の柱穴を含むと考えられる。							
P-565	22.5-17.5	円形	重複なし	0.28	0.24	0.18	
時期不明の SK-566 の南東にあり。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-574	23.0-17.5	円形	SI-69 より新	0.28	0.24	0.26	単層
古墳時代の SI-69 を切る。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-575	23.0-17.5	円形	SK-68 より新	0.27	0.22	0.56	単層
時期不明の SK-68 を切る。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-577	22.5-17.5	円形	SK-68 より新?	0.28	0.23	0.50	上層にローム塊が多い
新旧不明だが、P-575 と同様の穴なので時期不明の SK-68 を切ると推定する。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-578	23.0-17.5	円形	重複なし	0.32	0.23	0.39	単層 ローム塊が多い
遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-580		円形	SI-69 より新	0.24	0.22	0.23	単層 ローム塊が多い
古墳時代の SI-69 床面で確認。埋土は SI-69 のものとは異なり P-574～578 に近いので、SI-69 を切る可能性が高い。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-584	23.0-18.0	円形	SI-70 より新	0.24	0.22	0.25	単層
古墳時代の SI-70 を切る。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							

第5章 権現山遺跡 SG10区

P-587	23.0-18.0	円形	SI-70より新	0.20	0.16	0.44	単層
古墳時代のSI-70を切る。遺物なし。P-587～593は同一の群をなす可能性あり。P-640の群の北側に続くので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群分布域の北側に隣接して所在。							
P-588	23.0-18.0	円形	SI-70より新	0.16	0.50	0.21	単層
古墳時代のSI-70を切る。遺物なし。P-587～593は同一の群をなす可能性あり。P-640の群の北側に続くので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-589	23.0-18.0	円形	SI-70より新	0.28	0.26	0.40	単層
古墳時代のSI-70を切る。遺物なし。P-587～593は同一の群をなす可能性あり。P-640の群の北側に続くので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-590	23.0-18.0	円形	重複なし	0.22	0.19	0.25	
遺物なし。P-587～593は同一の群をなす可能性あり。P-640の群の北側に続くので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-591	23.0-18.0	円形	重複なし	0.18	0.14	0.28	
遺物なし。P-587～593は同一の群をなす可能性あり。P-640の群の北側に続くので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-593	23.0-18.0	円形	SI-70より新	0.34	0.32	0.60	単層 焼土あり
古墳時代のSI-70を切る。遺物なし。P-587～593は同一の群をなす可能性あり。P-640の群の北側に続くので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-602	23.0-18.0	円形		0.35	0.28	0.43	柱痕と裏込土あり
東半分をイモ穴(近代以降の農業関連土坑)に切られる。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-622	22.5-18.0	円形		0.28	0.25	0.31	
遺物なし。P-627と近接するので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-623	22.5-18.0	円形		0.23	0.19	0.24	単層でP-628の1層と同じ
遺物なし。P-627と近接するので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-624	22.5-18.0	円形		0.46	0.40	0.18	
遺物なし。P-627と近接するので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-625	22.5-18.0	円形		0.21	0.21	0.15	
遺物なし。P-627と近接するので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-626	22.5-18.0	円形		0.21	0.18	0.14	
遺物なし。P-627と近接するので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-627	22.5-18.0	円形		0.22	0.20	0.14	単層
確認面で中世の渡来鏡2枚出土。周辺の柱穴群を中世と見る証拠のひとつ。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-628	22.0-18.0	円形		0.19	0.18	0.20	1層はP-623と同じ 柱痕と裏込土あり
遺物なし。P-627と近接するので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-629	22.5-18.0	円形		0.17	0.16	0.08	単層
遺物なし。P-627と近接するので、中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-633a	22.5-18.0	円形	P-633bと重複	0.25	0.18	0.26	単層
P-633bと重複するが新旧不明。土師器小破片あり。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-633b	22.5-18.0	円形	P-633aと重複	0.24	0.18	0.35	土層の記録なし
P-633aと重複するが新旧不明。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-633c	22.5-18.0	円形	P-633dと重複	0.22	0.19	0.26	単層
P-633dと重複するが新旧不明。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-633d	22.5-18.0	円形	P-633cと重複	0.22	0.20	0.36	土層の記録なし
P-633cと重複するが新旧不明。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-635a	22.5-18.0	円形	P-635bと重複	0.52	0.44	0.35	自然埋没状
P-635bと重複するが新旧不明。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-635b	22.5-18.0	円形	P-635aと重複	0.32	0.26	0.36	土層の記録なし
P-635aと重複するが新旧不明。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-636	22.5-18.0	円形	重複なし	0.25	0.21	0.47	柱痕と裏込土あり
土師器小破片あり。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-637	22.5-18.0	円形	重複なし	0.32	0.32	0.34	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-638	22.5-18.0	円形	重複なし	0.22	0.22	0.21	柱痕あり
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-640	22.5-17.5	円形	重複なし	0.30	0.27	0.30	
中世陶器片出土。周辺の土坑群を中世と見る証拠のひとつ。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-641	22.5-17.5	円形	重複なし	0.26	0.22	0.28	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-642a	22.5-18.0	円形	P-642dより新、642bと重複	0.37	—	0.32	
P-642dを切る。P-642bと重複するが新旧不明。土師器が2片出土したが、混入と見られる。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-642b	22.5-18.0	円形	P-642cより新、642aと重複	0.30	—	0.37	
P-642cを切る。P-642aと重複するが新旧不明。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-642c	22.5-18.0	円形	P-642c→642b	0.20	—	0.20	
P-642bに切られる。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-642d	22.5-18.0	円形	P-642d→642a	0.21	—	0.08	
P-642aに切られる。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-643	22.5-18.0	円形	重複なし	0.34	0.30	0.26	単層
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-644	22.5-18.0	円形	重複なし	0.28	0.24	0.09	単層
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-646	22.5-17.5	円形	重複なし	0.27	0.27	0.22	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-647a	22.5-17.5	円形	P-647a→647b	0.16	0.16	0.23	単層
P-647bに切られる。重複部分のごくわずか。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-647b	22.5-17.5	円形	P-647a→647b	0.18	0.16	0.26	単層
P-647aを切る。重複部分のごくわずか。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-648a	22.5-17.5	円形	P-648a→648b	0.24	0.20	0.18	
P-648bに切られる。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-648b	22.5-17.5	円形	P-648a→648b	0.24	0.23	0.22	
P-648aを切る。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-648c	22.5-17.5	円形	重複なし	0.15	0.15	0.06	単層
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-649	22.5-17.5	円形	重複なし	0.24	0.22	0.32	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-650	22.5-17.5	円形	重複なし	0.18	0.16	0.10	単層
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-651	22.5-17.5	円形	重複なし	0.23	0.23	0.12	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-652	22.5-17.5	円形	重複なし	0.27	0.22	0.44	
土師器裏胴部1片が出土し、混入と見られる。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。							

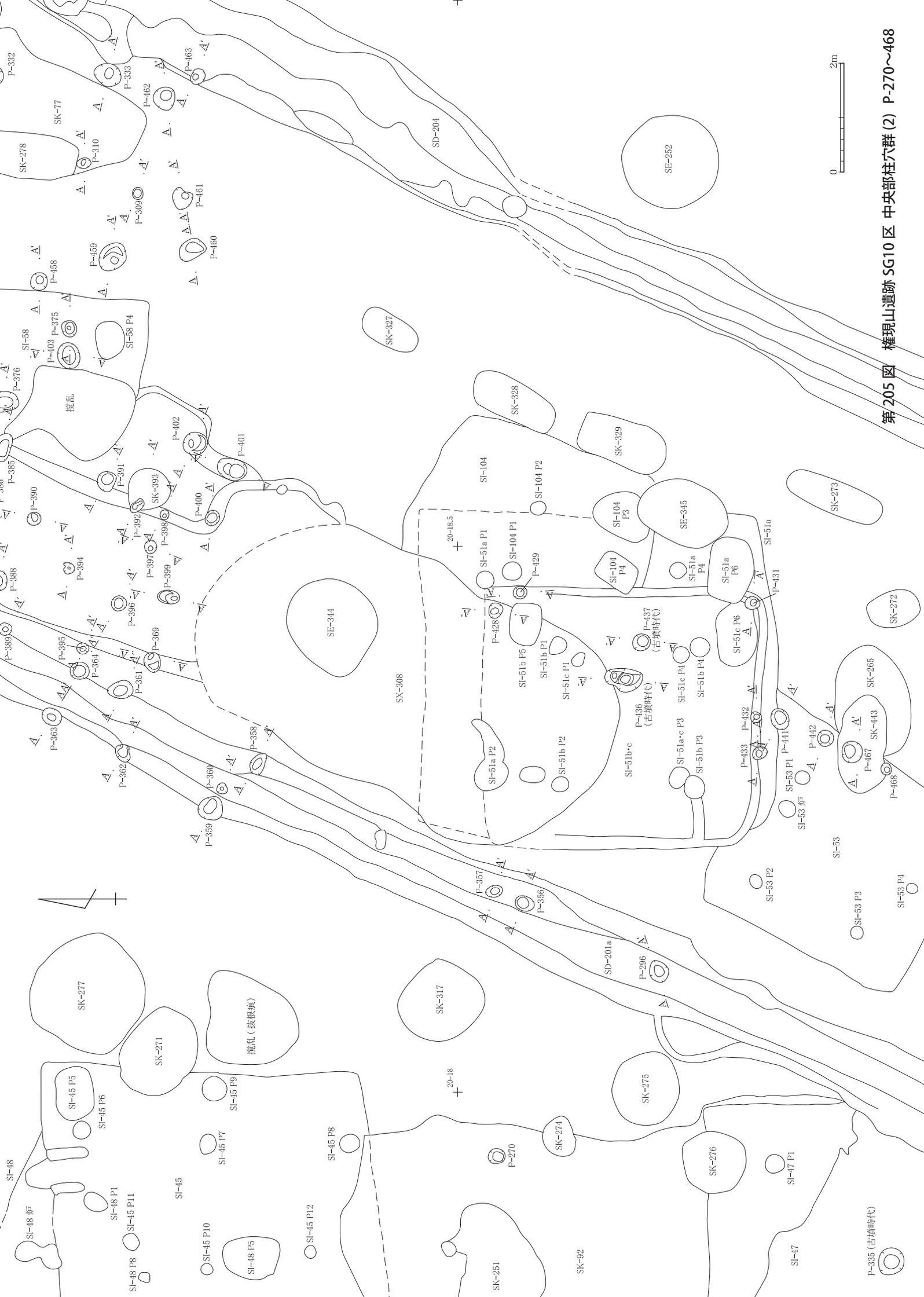


第203图 榑現山遺跡 SG10区 北部柱穴群 P-565~693

SD-503
SI-66 P2
22.5-17.5
SI-66 P4
SK-524
SK-523
SI-66 P1
SK-537
P-565
P-648a
P-618b
P-618c
P-647b
P-647a
P-649
P-650
P-651
P-652
P-653
P-654
SK-567
攪乱
23-17.5
SK-566
SK-568
SD-304a
SD-304b
SD-304c
P-642a
P-642b
P-642c
P-668
P-669
P-670
P-671
P-672
P-673
P-674
P-675
P-676
P-677
P-678
P-679
P-680
P-681
P-682
P-683
P-684
P-685
P-686
P-687
P-688
P-689
P-690
P-691
P-692
P-693
SK-569
SK-570
SK-571
SK-572
SK-573
SK-574
SK-575
SK-576
SK-577
SK-578
SK-579
SK-580
SK-581
SK-582
SK-583
SK-584
SK-585
SK-586
SK-587
SK-588
SK-589
SK-590
SK-591
SK-592
SK-593
SK-594
SK-595
SK-596
SK-597
SK-598
SK-599
SK-600
SK-601
SK-602
SK-603
SK-604
SK-605
SK-606
SK-607
SK-608
SK-609
SK-610
SK-611
SK-612
SK-613
SK-614
SK-615
SK-616
SK-617
SK-618
SK-619
SK-620
SK-621
SK-622
SK-623
SK-624
SK-625
SK-626
SK-627
SK-628
SK-629
SK-630
SK-631
SK-632
SK-633a
SK-633b
SK-633c
SK-634
SK-635a
SK-635b
SK-635c
SK-636
SK-637
SK-638
SK-639
SK-640
SK-641
SK-642
SK-643
SK-644
SK-645
SK-646
SK-647
SK-648
SK-649
SK-650
SK-651
SK-652
SK-653
SK-654
SK-655
SK-656
SK-657
SK-658
SK-659
SK-660
SK-661
SK-662
SK-663
SK-664
SK-665
SK-666
SK-667
SK-668
SK-669
SK-670
SK-671
SK-672
SK-673
SK-674
SK-675
SK-676
SK-677
SK-678
SK-679
SK-680
SK-681
SK-682
SK-683
SK-684
SK-685
SK-686
SK-687
SK-688
SK-689
SK-690
SK-691
SK-692
SK-693
SD-503
SI-66 P1
SI-66 P2
SI-66 P3
SI-66 P4
SI-66 P5
SI-66 P6
SI-66 P7
SI-66 P8
SI-69 P3
SI-69 P4
SI-69 P5
SI-69 P6
SI-69 P7
SI-69 P8
SI-70 P1
SI-70 P2
SI-70 P3
SI-70 P4
SI-70 P5
SI-70 P6
SI-70 P7
SI-70 P8
SI-72 P1
SI-72 P2
SI-72 P3
SD-569
SD-570
SD-571
SD-572
SD-573
SD-574
SD-575
SD-576
SD-577
SD-578
SD-579
SD-580
SD-581
SD-582
SD-583
SD-584
SD-585
SD-586
SD-587
SD-588
SD-589
SD-590
SD-591
SD-592
SD-593
SD-594
SD-595
SD-596
SD-597
SD-598
SD-599
SD-600
SD-601
SD-602
SD-603
SD-604
SD-605
SD-606
SD-607
SD-608
SD-609
SD-610
SD-611
SD-612
SD-613
SD-614
SD-615
SD-616
SD-617
SD-618
SD-619
SD-620
SD-621
SD-622
SD-623
SD-624
22.5-18.5
22.5-17.5
22.5-18



第204图 榑現山遺跡 SG10 区 中央部柱穴群 (1) P-309~466

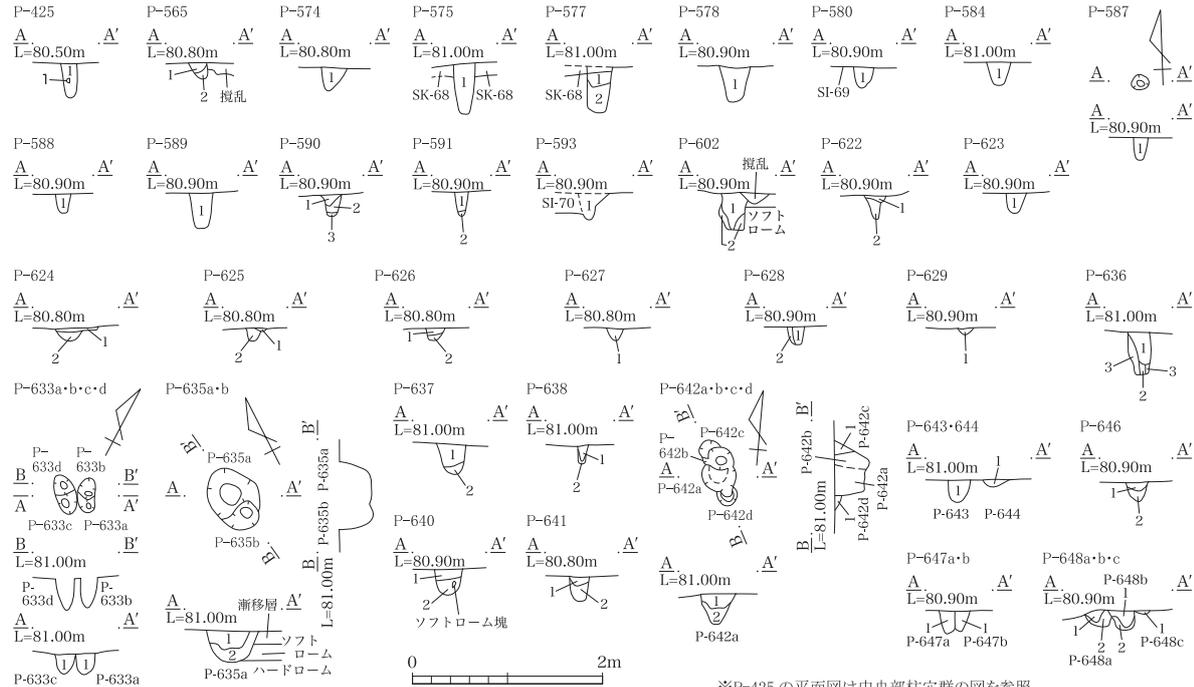


第205図 権現山遺跡 SG10区 中央部柱穴群(2) P-270~468

P-335 (古墳時代)



第5章 権現山遺跡 SG10区



※P-425の平面図は中央部柱穴群の図を参照
 P-587は北部柱穴群より北側でSI-70と重複する位置に所在
 他の平面図は北部柱穴群の図を参照

- SG10区P-425
1 暗褐色 ロームと暗褐色の混合土。しまりやや弱。粘性有。
- SG10区P-565
1 黒褐色 混入物がなく均質。硬。しまり・粘性強。
2 暗黄褐色 ローム小塊多、黒褐色土少。
- SG10区P-574
1 黒褐色 ローム小塊・粒少。やや軟。
- SG10区P-575
1 黒褐色 ローム小塊・粒やや多。やや軟。
- SG10区P-577
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粒やや多。やや硬。
2 暗褐色 ローム粒少。やや硬。
- SG10区P-578
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粒多。やや硬。
- SG10区P-580
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粒やや多。
- SG10区P-584
1 黒褐色 ローム塊・暗褐色土塊・小塊少。軟。しまり弱(指先ですぐへこむ)。
- SG10区P-587
1 黒褐色 ローム小塊・粒少。軟。しまり弱(指先ですぐへこむ)。
- SG10区P-588
1 黒褐色 ローム粒極少。軟。しまりやや弱(指先ですぐへこむ)。
- SG10区P-589
1 黒褐色 ローム粒少。軟。しまりやや弱(指先ですぐへこむ)。
- SG10区P-590
1 黒褐色 ローム小塊・粒少。やや硬。
2 黄褐色 ローム小塊・粒多。黒褐色土やや多。やや軟。
3 黒褐色 混入物が目立たず均質。非常に硬。
- SG10区P-591
1 黒褐色 ローム小塊・粒少。やや軟。
2 暗褐色 ローム粒やや多。やや軟。
- SG10区P-593
1 黒褐色 ローム小塊・粒やや多。焼土小塊極少。やや軟(指先で強く押すとへこむ)。
- SG10区P-602
1 暗黄褐色 ローム粒多。ローム小塊極少。軟。
2 暗褐色 ローム小塊・粒やや多。やや硬。
- SG10区P-622
1 暗褐色 地山暗褐色土(漸移層)塊・小塊が主体。混入物があまり目立たない。やや軟。
2 黒褐色 ローム小塊・粒やや少。やや軟。
- SG10区P-623
1 黒褐色 P-628の1層とほとんど同じ。
- SG10区P-624
1 黒褐色 ローム小塊やや多。やや軟。
2 暗黄褐色 ソフトロームが主体。黒褐色土塊やや多。軟。
- SG10区P-625
1 黒褐色 ローム粒極少。やや軟。
2 黒褐色 ローム粒多。軟。
- SG10区P-626
1 黄褐色 ソフトローム大塊・塊主体。黒褐色土少。やや軟。
2 暗褐色 ローム粒多。地山暗褐色土(漸移層)が崩れて入ったような土。軟。
- SG10区P-627
1 黒褐色 ソフトローム小塊・粒やや多。軟。

- SG10区P-628
1 黒褐色 ローム微粒極少。硬。しまりやや強。均質で混入物が目立たない。柱痕か。
2 暗褐色 地山暗褐色土(漸移層)に似る。黒褐色土塊若干。硬。しまりやや強。
- SG10区P-629
1 黒褐色 ローム粒極少。やや軟。
- SG10区P-633a
1 暗黄褐色 ローム小塊・地山暗褐色土(漸移層)小塊多。黒褐色土少。やや硬。
- SG10区P-633c
1 黒褐色 ローム粒少。とても硬。しまり強。
- SG10区P-635a
1 黒褐色 暗褐色土やや多。ローム小塊・粒やや少。やや硬。
2 暗黄褐色 ソフトローム塊やや多。ローム塊少。ローム粒極少。やや硬。
- SG10区P-636
1 黒褐色 ローム粒多。ローム小塊・塊やや多。硬。
2 黒褐色 ローム粒極少。軟。
3 暗黄褐色 褐色土が主体。ローム塊・小塊・粒多。やや軟。裏込土。
- SG10区P-637
1 黒褐色 ローム小塊・粒少。やや硬。
2 暗褐色 ローム塊・小塊・粒やや多。硬。
- SG10区P-638
1 暗褐色 ローム粒少。やや軟。
2 黒褐色 ローム小塊・塊・粒やや多。硬。
- SG10区P-640
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粒若干。やや軟。
2 褐色 ローム粒やや少。ソフトローム塊少。やや軟。
- SG10区P-641
1 褐色 ローム粒・小塊やや多。やや硬。
2 暗褐色 ローム粒やや多。やや硬。
- SG10区P-642a
1 褐色 ローム粒やや少。ローム小塊少。やや硬。
2 黒褐色 ローム粒やや多。やや硬。
- SG10区P-642c
1 暗褐色 ソフトローム小塊少。やや硬。
- SG10区P-642d
1 暗褐色 ローム粒少。やや硬。
- SG10区P-643
1 暗褐色 ローム粒やや多。ローム小塊少。やや硬。
- SG10区P-644
1 黒褐色 ローム小塊・ソフトロームやや多。やや硬。
- SG10区P-646
1 黒褐色 ローム粒極少。軟。
2 黒褐色 ローム塊・小塊・粒やや多。軟。
- SG10区P-647a
1 黒褐色 ローム小塊・粒やや多。やや硬。
- SG10区P-647b
1 黒褐色 ローム粒極少。やや硬。
- SG10区P-648a
1 暗褐色 ローム粒・今市軽石粒極少。硬。
2 褐色 ローム塊・小塊・粒やや多。やや硬。
- SG10区P-648b
1 黒褐色 ローム小塊・粒多。やや硬。
2 黄褐色 ローム塊・小塊主体。暗褐色土少。やや硬。
- SG10区P-648c
1 暗褐色 ローム塊・小塊多。やや硬。

第206図 権現山遺跡 SG10区 中世の柱穴状土坑(1) 遺構

第 20 節 中世の柱穴状土坑と中央部・北部柱穴群

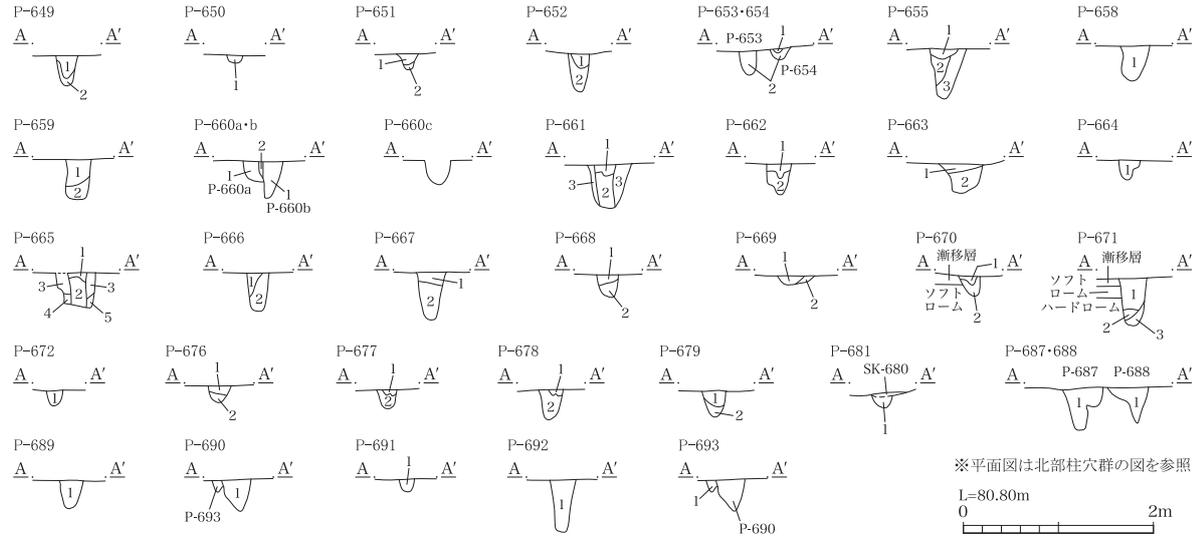
P-653	22.5-17.5	円形	重複なし	0.24	0.18	0.32	単層	P-654 の下層と同質
土師器杯体部 1 片が出土し、混入と見られる。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-654	22.5-17.5	円形	重複なし	0.24	0.22	0.16	下層	P-653 と同質
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-655	22.5-17.5	円形	重複なし	0.40	0.40	0.54		
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-658	22.5-18.0	円形	重複なし	0.32	0.30	0.38	単層	
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-659	22.5-18.0	円形	重複なし	0.38	0.36	0.44		
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-660a	22.5-18.0	円形	P-660c(?) → 660a → 660b	0.20	0.16	0.23	単層	
P-660b に切られる。P-660c と重複するが新旧不明。P-660c の項を参照。遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-660b	22.5-18.0	円形	P-660c(?) → 660a → 660b	0.33	0.30	0.40		
P-660a を切る。P-660c と重複するが新旧不明。P-660c の項を参照。遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-660c	22.5-18.0	円形	P-660c(?) → 660a → 660b	0.22	0.16	0.26		土層の記録成し
P-660a・b と重複。P-660a・b を調査後に確認したので、P-660c が最も古い可能性あり。遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-661	22.5-18.0	円形	重複なし	0.53	0.39	0.48		柱痕と裏込土あり
しっかりした柱穴。裏込土あり。土師器杯口縁部 1 片が出土し、混入と見られる。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-662	22.5-18.0	円形	重複なし	0.26	0.26	0.33		
土師器壺頸部 1 片が出土し、混入と見られる。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-663	22.5-18.0	円形	重複なし	0.47	0.28	0.35		
土師器杯体部 1 片が出土し、混入と見られる。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-664	22.5-18.0	円形	重複なし	0.36	0.20	0.21	単層	
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-665	22.5-18.0	円形	重複なし	0.44	0.38	0.38		柱痕と裏込土あり
しっかりした柱穴。裏込土あり。遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-666	22.5-17.5	円形	重複なし	0.28	0.26	0.42		人為埋戻し
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-667	22.5-18.0	円形	重複なし	0.34	0.32	0.52		
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-668	22.5-17.5	円形	重複なし	0.29	0.24	0.25		
縄文時代の剥片 1 点が混入。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-669	22.5-18.0	円形	重複なし	0.42	0.23	0.10		
図面に「土坑」と記載あり。遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-670	22.5-18.0	円形	重複なし	0.26	0.20	0.26		
土師器杯体部 1 片が出土し、混入と見られる。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-671	22.5-18.0	円形	重複なし	0.30	0.30	0.52		
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-672	22.5-18.0	円形	重複なし	0.17	0.16	0.18	単層	
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-676	22.5-17.5	円形	重複なし	0.24	0.23	0.20		
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-677	23.0-18.0	円形	重複なし	0.18	0.17	0.22		
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-678	23.0-18.0	円形	重複なし	0.24	0.24	0.62		
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-679	23.0-18.0	円形	重複なし	0.24	0.22	0.30		
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-681	23.0-17.9	円形	SK-680 より古	0.21	0.22	0.21	単層	
時期不明の SK-680 に上面を浅く切られる。遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-687	22.5-18.0	円形	重複なし	1.07	0.50	0.46	単層	P-688 と同質
P-687 ~ 693 は 1 箇所に集中している。遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-688	22.5-18.0	円形	P-692 と重複	0.32	0.22	0.38	単層	P-687 と同質
P-692 と重複するが新旧不明。遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-689	23.0-18.0	円形	重複なし	0.28	0.26	0.30	単層	
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-690	22.5-18.0	円形	P-693 より新	0.33	0.26	0.36	単層	
P-693 を切る。土師器壺頸部 2 片が出土し、混入と見られる。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-691	22.5-18.0	円形	重複なし	0.18	0.18	0.14	単層	
遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-692	22.5-18.0	円形	P-688 と重複	0.26	0.20	0.57	単層	
P-688 と重複するが新旧不明。遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								
P-693	22.5-18.0	円形	P-690 より古	0.16	0.13	0.14	単層	
P-690 に切られる。遺物なし。P-640 と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴群の分布域に所在。								

※ P-425・587 以外は北部柱穴群に所在。

第 125 表 権現山遺跡 SG10 区 中世の柱穴状土坑 出土遺物

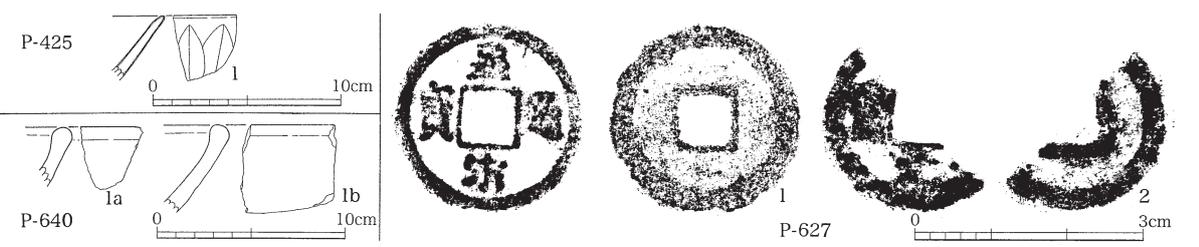
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG10 区 P-425				
1 青磁 椀	口 復 14 ~ 16 高 残 3.4	口縁部はごく弱く外反する。外面に鑄蓮弁文。気泡が多く厚い釉を内外面に施す。外面に貫入がやや見られる。	5Y5/3 灰オリープ 緻密 黒細粒極少 硬質	底上 15cm 口 1/18 周 SK-425 1
SG10 区 P-627				
1 銅銭		皇宋通寶(1039年初鑄)。鑄径は縦 25.04 × 横 25.00mm、外縁内径は縦 20.63 × 横 20.74mm、銭厚は 1.26 ~ 1.40mm。量目は 2.92g。		遺構確認面 完形
2 銅銭		銭名不詳(○元○寶)。鑄径は 24.60mm、外縁の幅は 2.76 ~ 3.18mm、銭厚は 1.20 ~ 1.32mm。量目は残存重量 1.81g。		遺構確認面 1/2 欠
SG10 区 P-640				
1a・1b 陶器 鉢	高 残 3.2	山茶碗系の鉢。体部が内彎し、口縁部が内面側へ丸く肥厚する。口縁部の内外面が自然釉でわずかに光沢を持つ。使用による磨滅痕の有無は不明。北東へ 23m 離れた古墳時代の建物 SI-114 に、同一個体の可能性がある口縁部破片が 1 点混入している(図の 1b)。	7.5Y4/1 灰 やや粗い 白礫~粗粒多、白 細粒と黒色湧出粒少 硬質	確認面下 20cm。SI-114 にも 1 片あり SK-640、SI-114 25

第5章 権現山遺跡 SG10 区



- SG10区P-649
1 黒褐色 ローム粒極少、やや軟。
2 暗褐色 ローム小塊若干、やや軟。
- SG10区P-650
1 暗褐色 地山暗褐色土(漸移層)塊が主体、黒褐色土少。
- SG10区P-651
1 黒褐色 ローム粒少、硬。
2 暗褐色 ソフトローム小塊若干、硬。
- SG10区P-652
1 暗褐色 ローム粒やや多、やや軟。
2 黒褐色 ローム塊・小塊・粒若干、軟。
- SG10区P-653・654
1 褐色 地山暗褐色土(漸移層)と同質、やや軟。
2 黒褐色 ローム粒極少、やや硬。
- SG10区P-655
1 暗褐色 ローム小塊・今市軽石粒極少、やや軟。
2 暗褐色 ローム小塊やや多、やや軟。
3 黒褐色 ローム小塊・粒少、やや軟。
- SG10区P-658
1 黒褐色 ローム粒をごくわずかに含む、やや軟、しまり弱。
- SG10区P-659
1 黒褐色 地山暗褐色土(漸移層)小塊少、ローム粒極少、やや硬。
2 暗褐色 ローム塊・小塊・粒若干、軟、しまり弱。
- SG10区P-660a
1 褐色 黒褐色土・ローム小塊少、やや硬。
- SG10区P-660b
1 褐色 黒褐色土・ローム小塊若干、軟。
2 明黄褐色 ハードローム塊主体、硬、裏込土。
- SG10区P-661
1 褐色 ローム粒少、ローム小塊若干、やや軟。
2 暗褐色 ローム小塊・塊・粒やや多、軟。
3 暗黄褐色 ローム塊・小塊・粒非常に多、黒褐色土少、やや軟。
- SG10区P-662
1 黒褐色 ローム粒少、硬、粘性強。
2 暗褐色 黒褐色土が主体、ローム塊・小塊やや多。
- SG10区P-663
1 黒褐色 ローム粒若干、やや軟。
2 黒褐色 ローム粒やや多、ローム塊少、やや軟。
- SG10区P-664
1 暗褐色 地山暗褐色土(漸移層)塊・小塊やや多、ローム粒若干、やや軟。
- SG10区P-665
1 褐色 ローム小塊・粒やや多、やや軟、柱痕。
2 暗黄褐色 ローム小塊・塊・粒多、やや軟、柱痕。
3 黒褐色 ローム小塊・粒やや少、やや硬くしまる、裏込土。
4 暗黄褐色 ローム小塊主体、黒褐色土若干、軟、裏込土。
5 黄褐色 ローム塊主体、硬、裏込土。
- SG10区P-666
1 暗褐色 地山暗褐色土(漸移層)塊やや多、ローム粒・黒褐色土少、硬、人為埋め戻し。
2 暗黄褐色 ハードローム塊・小塊非常に多、黒褐色土小塊やや少、暗褐色土若干、硬。人為埋め戻し。
- SG10区P-667
1 暗褐色 地山暗褐色土(漸移層)と同質、ローム粒極少、黒褐色土も混じる、やや硬。
2 黒褐色 ローム小塊極少、やや軟。
- SG10区P-668
1 暗褐色 ローム粒やや少、今市軽石粒極少、硬。
2 暗黄褐色 ローム小塊やや多、黒褐色土少、硬くしまる。
- SG10区P-669
1 褐色 今市軽石粒極少、やや軟。
2 褐色 地山暗褐色土(漸移層)と同質、黒褐色土少、やや硬。
- SG10区P-670
1 黒褐色 ローム粒極少、やや硬。
2 濃暗褐色 混入物が目立たない均質な土、非常に硬、粘性強。
- SG10区P-671
1 褐色 ローム小塊・粒若干、やや軟。
2 明黄色 ソフトローム塊、褐色土少、やや軟。
3 暗黄褐色 ローム小塊やや多、ローム粒やや少、硬。
- SG10区P-672
1 黒褐色 ローム粒少、やや硬。
- SG10区P-676
1 黒褐色 ローム粒・小塊少、硬。
2 黒褐色 ローム粒・今市軽石粒極少、やや硬。
- SG10区P-677
1 黒褐色 地山暗褐色土(漸移層)と同質が主体、黒褐色土少、ローム粒極少、やや硬。
2 暗褐色 混入物が目立たない、やや硬。(1層より少し軟)
- SG10区P-678
1 黒褐色 ローム塊・小塊多、ローム粒少、やや硬。
2 黒褐色 ローム粒極少、やや硬。
- SG10区P-679
1 黒褐色 ローム粒多、ローム小塊少、やや軟。
2 黒褐色 ローム小塊・粒多、軟、しまり弱。
- SG10区P-681
1 黒褐色 ローム粒やや多、ローム小塊少、やや軟。
- SG10区P-687・688
1 暗黒褐色 ローム塊(径1~2cm)・ローム微粒・黒色土塊・暗褐色土が混在、しまりやや弱、粘性有。
- SG10区P-689
1 暗褐色 ローム・黒色土・暗褐色土が混在、ローム微粒微量、しまりやや強、粘性なし。
- SG10区P-690
1 暗褐色 ローム微粒微量、P-693の1層と類似するが、ローム塊の混入有、しまりやや強、粘性有。
- SG10区P-691
1 黒褐色 ロームの混入なし、しまり強、粘性有。
- SG10区P-692
1 暗黒褐色 ローム塊(径1~2cm)・ローム微粒・黒色土塊・暗褐色土が混在、しまりやや弱、粘性有。
- SG10区P-693
1 暗褐色 ローム微粒微量、炭化物若干、しまりやや弱、粘性有。

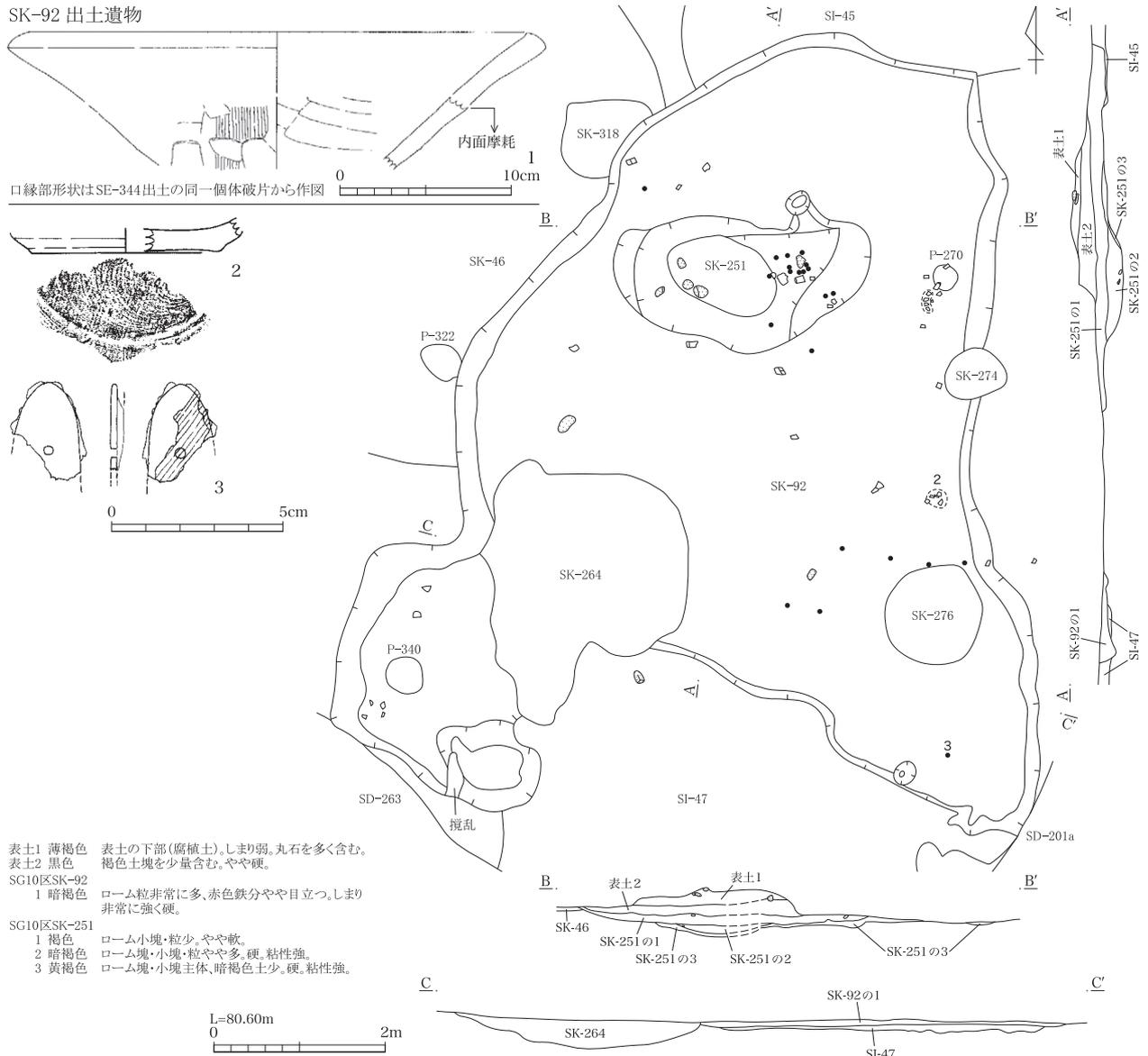
第 207 図 権現山遺跡 SG10 区 中世の柱穴状土坑 (2) 遺構



第 208 図 権現山遺跡 SG10 区 中世の柱穴状土坑 (3) 遺物

第21節 中世の土坑

中世の土坑は2基ある。SK-251はSK-92に付属する同時存在の土坑で、この両土坑が一連の土層で同時に埋没している。



第209図 権現山遺跡 SG10区 SK-92・251 遺構・遺物

第126表 権現山遺跡 SG10区 SK-92 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 中世陶器 こね鉢	高 残 4.2 最大 復 31.0	外面はごく浅いタテハケ状調整痕で、下位にやや強いタテナデ。内面はヨコヘラナデ状痕跡で、内面下位が使用により磨滅。常滑窯産。古墳時代土坑SK-46および中世井戸SE-344出土破片と同一個体。口縁部形状はSE-344出土破片により作図。	5YR4/3 にふい赤褐 やや粗い 白礫と白・灰色・ 透明粗～細粒やや多 硬質	南半部の遺構確認面 体 1/8 周 南半上面
2 土師質 小皿	高 残 0.7 底 復 5.4	内外面ともに体部をロクロナデ。外面底部は回転糸切り離し。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・黒・赤・透明 細粒少、金色雲母細片極少 軟質	東部底上 2cm 底 1/3 周 17
3 鉄製品 不明	長 残 2.9 幅 残 1.8 厚 0.2 重 残 2.52	均一な厚さの鉄板で、刃部は持たない。径 2.5～3.0mmの孔が1箇所ある。片面に錆および銹混じり附着土を介して木質が附着する。この他に、接合できない10～17mm大の破片が2片あり、それを加えた残存重量は3.72g。		南部底直上 端部残 37

SG10 区 SK-92 (第 209 図、写真図版 146・173・214)

SG10 区中央部の 19-17 グリッド。不整形の広い土坑で、北部に同時存在の少し深い土坑 SK-251 が付属する。北と南にある古墳後期の SI-45・47 と、西にある古墳中期の SK-46 と、南東部にある時期不明の SK-276 を切る。中世～近世の SD-263 と時期不明の SK-264・297 に南西部を切られる。古墳時代の SK-274 および時期不明の P-270・340 との前後関係は不詳だが、この 3 基を SK-92 が切る可能性がある。

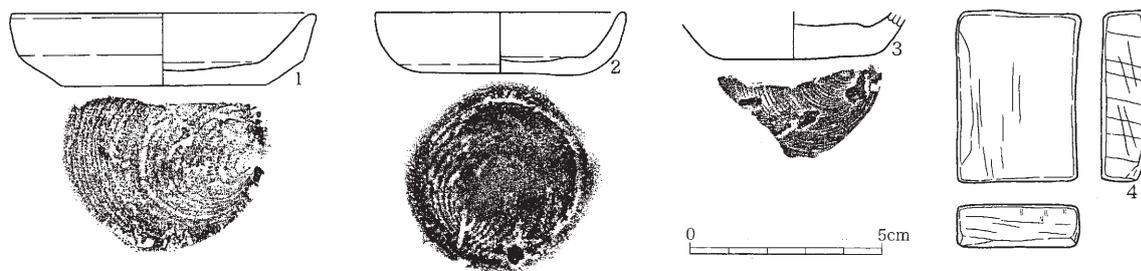
不整形で南北 950 × 東西 830cm、残存する深さ 15 ～ 20cm。SK-92 と SK-251 が連続する層と一緒に埋没し、中世遺構としては埋土が硬い。確実なテフラはない。常滑産こね鉢 (1) は中世の SE-344 と古墳時代の SK-46 表土に同個体破片があり、14 世紀後半頃。土師質小皿 (2) は金色に発色する雲母細片をごく少量含む。重複する時期不明の SK-264 にある小皿 (かわらけ) も SK-92 から混入した可能性がある。

SG10 区 SK-251 (第 209 図、写真図版 146)

SG10 区中央部の 19-17 グリッド。中世土坑 SK-92 の底面に付属する同時存在の土坑。SK-92 の付属施設で、重複関係も SK-92 と同じである。土層断面図に表土が示されているのは、礫を含むので、表土除去時にこの部分を高く残していたためである。平面は不整形で、北に付き出す部分がピット状に深く、土坑中央部底面より約 5cm 深い。不整形で南北 194 × 東西 300cm、底径 133 × 80cm、残存する深さは 1 層上面から計測して 23cm。SK-92 と同じ土層と一緒に埋没し、テフラの層や粒はない。SK-251 には中世遺物がないが、SK-92 と同じく中世遺構である。古墳中期を主として後期までの土師器・須恵器片がやや多く、古墳時代土坑 SK-46 などから SK-92 を経て流入した破片が多いと見られる。平安時代頃の須恵器杯小破片も含む。

第 22 節 遺構外出土の中世遺物 (第 210 図、写真図版 214)

SG10 区で中世以外の各遺構から出土した中世遺物を報告する。古墳時代の竪穴建物跡に混入しているので、古墳時代遺構の覆土中に中世の土坑・柱穴のような小遺構がつくられていたのかもしれない。1・2 は土師質の小皿 (かわらけ)。2 は滑石製品で、関東地方で産出する三波川帯の滑石とは石質が異なる。中世の石鍋 (高田 2001) を転用加工した可能性もある。用途は温石・砥石・錘などが想定できるが、温石には



第 210 図 権現山遺跡 SG10 区 中世の遺構外出土遺物

第 127 表 権現山遺跡 SG10 区 中世の遺構外出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師質 小皿	口 7.9 高 1.9 底 5.3	内外面ともに回転ヨコナデ。底部は回転系切り離しで、切り離し時のロクロは右回転 (時計回り)。	7.5YR8/3 浅黄橙 緻密 赤・黒細粒やや少、白粗粒と透明細粒少 軟質	古墳時代の竪穴建物に混入 口 1/2 周、底 7/12 周 SI-15 4
2 土師質 小皿	口 6.7 高 1.6 底 4.5	内外面ともに回転ヨコナデ。内面の底部中央に軽い 1 方向ナデ。底部は回転系切り離しで、切り離し時のロクロは右回転 (時計回り)。	10YR8/2 灰白 緻密 黒・透明細粒やや少、黒粗粒と白細粒少 軟質	古墳時代の竪穴建物に混入 口 5/6 周、底全周 SI-106 14
3 土師質 小皿	高 残 1.2 底 復 3.8	内外面ともに回転ヨコナデ。底部は回転系切り離しで、切り離し時のロクロは右回転 (時計回り)。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・黒・赤・透明細粒少 やや軟質	SD-304・501 と SI-61 付近 底 1/4 周 21.40-18.65 攪乱坑
4 石製品 不明品	長 4.5 幅 3.2 厚 1.2 重 残 40.3	直方体に加工して各面を平坦に仕上げている。長側面では刃部を持つ工具で長軸方向に切削加工した後に、軽く研磨した痕がわかる。砥石に使ったような曲面はない。全体が薄い桃色を帯びているので、被熱したとも考えられる。	2.5YR7/1 明赤灰 緻密で軟質な滑石	古墳時代の竪穴を切る 長方形攪乱 完形 SI-72 南西攪乱

やや小さく、砥石のように磨耗した曲面はない。この滑石製品は古墳時代竪穴 SI-72 の南西部の攪乱から出土した。SI-72 から南西へ 6m にある時期不明土坑 SK-572 は調査時に「蠟石」が出土して近代以後の土坑と判断した記録があり、この「蠟石」も同種の遺物だったのかもしれない。

第23節 中世～近世の溝状遺構

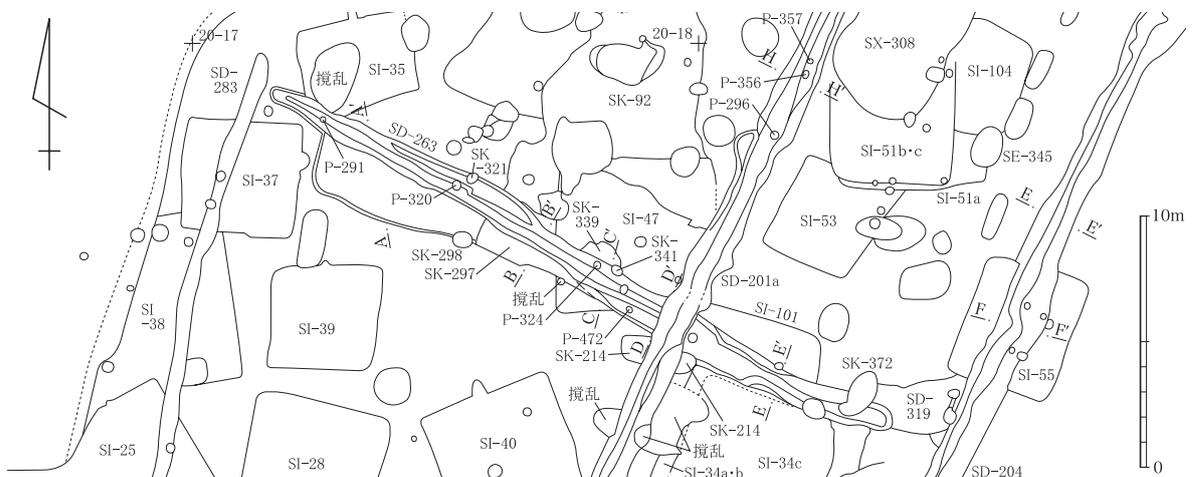
SG10 区 SD-263 (第 211・212 図、第 213 図左上部、写真図版 147・173)

[位置] SG10 区南半部の 19-17 と 19-18 グリッドにある。時期不明の SK-297 を切る。SK-297 が南側に残る状況は SD-263 の南側ラインと位置がそろうので、SK-297 が SD-263 の一部分 (SD-263 を掘り返す以前の古い覆土) である可能性を持つが、現地調査時の判断に従い、SK-297 は別遺構として扱っている。土層断面 B-B' の観察所見では SK-297 と SD-263 の覆土がよく似ているので、SK-297 と SD-263 の時期は接近している。

近世の SD-201a に切られるので、SD-263 はそれ以前の溝である。古墳時代の各遺構 (SI-34a・34b・35・47・101、SK-339、SD-319、P-472) を切り、SK-339 → SI-47 → SD-263 の順序になる (断面図 C-C')。中世の SK-92 と時期不明の SK-297 と P-324 を切る。同じく時期不明の SK-341 を切ると考えられる。時期不明の SK-214・298 に切られ、SI-101 → SD-263 → SD-201a → SK-214 の順序になる。時期不明の SK-321 と P-291・320 は、SD-263 の底面で確認したので、SD-263 より古い可能性がある。時期不明の SK-372 との新旧関係は不明で、覆土が軟らかい SK-372 のほうが新しいと想定することもできる。

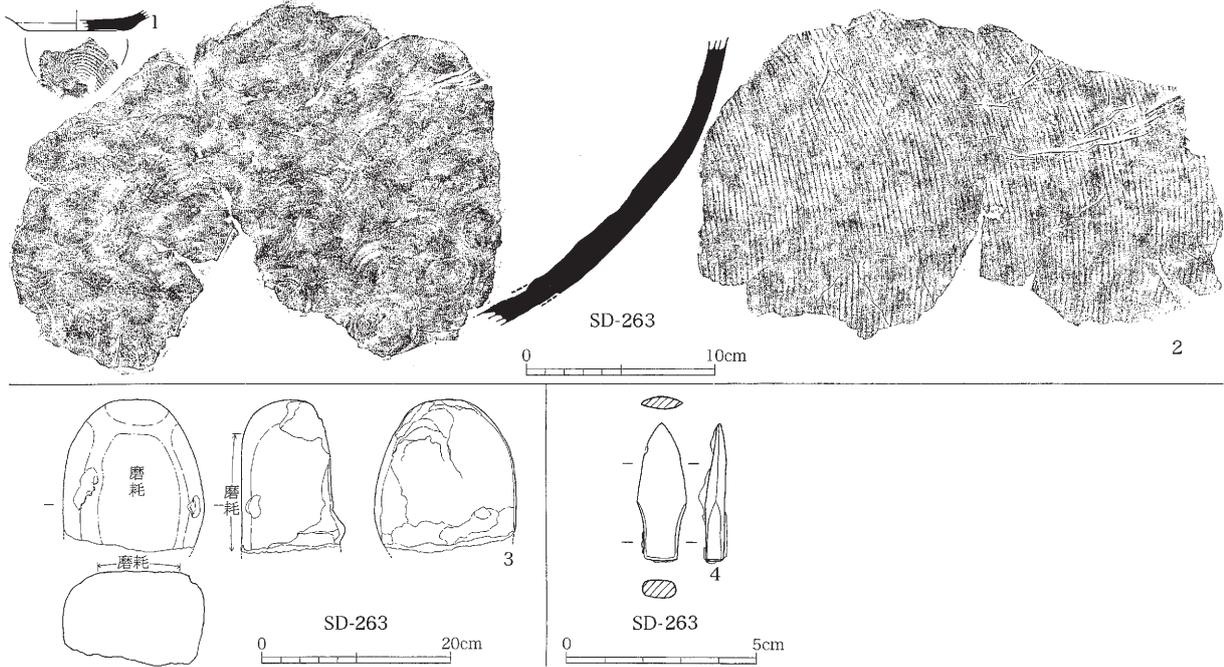
[規模と形状] 西半部では溝幅 70～140cm、残存する深さは 12～16cm の部分が多く、深い部分では 24cm。底面は西へ傾斜し、標高は西端で 80.25m、中央部で 80.10m。南側に幅 100～210cm・深さ 3～5cm の浅い段状掘り込み部が付帯する。段状掘り込み部の底面は平坦で、東側は SK-297 に連続するよう見えるが、SK-297 は少し深くて SD-263 に切られるので別遺構である。東半部では溝幅 90～170cm、残存する深さは 14～17cm、底面標高はほぼ一定で 80.06～80.12cm。埋土は自然埋没で、混入した縄文草創期の今市軽石粒の他にも、テフラの可能性のある白色粒を含む。

[出土遺物] 遺物は大きなものから小さな破片まで古墳時代土師器少量や須恵器甕破片があるが、ほとんどが周辺の古墳時代集落からの流入品と思われる。礫も多い。須恵器甕片 (2) は、古墳時代土坑 SK-275 など出土した破片と類似し、また古墳時代の SK-261b で出土した小破片と接合している。糸切りの平安時代須恵器杯 (1) や、時期不明の工具? (4) もある。台石 (3) はよく被熱しているが、鍛造剥片や鉄銹はないので、金床石の可能性は低い。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 335 片・3,856g の内訳は、杯



第 211 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-201a・201b・204・263 (1) SD-263 平面図

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第 212 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-263 遺物

第 128 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-263 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 杯	高 残 1.1 底 復 5.4	回転ヨコナデおよび底部回転糸切り離し時のロクロは右回転(時計回り)。三 毘羅産の平安時代遺物。残存する底面外周が糸切り離し時に少し歪んでいる ので、復原径値は参考程度。	2.5Y7/1 灰白 緻密 白・灰色粗～細粒と黒 細粒少 軟質	断面 E-E' の西側 2m の 範囲 底 1/6 周 19-18D～B
2 須恵器 大甕		外面はおそらく木目平行の溝を彫った叩き板で縦位の平行叩き。内面は同心 円文当具痕で、当具の凹凸はよくわかるが同心円の溝がやや浅くて不明瞭。 破面は暗赤色と暗緑灰色のサンドイッチ状。古墳中～後期の遺物が混入。 [注記]9、14、16、19.5-17.0、19.6-17.5、SK-261 D トレ 990728	5G4/1 暗緑灰 やや粗い 白粗～細粒多、白 礫と透明粗粒やや少 やや硬質	西半部中央の底直上～ 底上 8cm。SK-261b の 小破片 1 片も接合 注記は左欄
3 石器 台石	長 残 16.1 幅 15.0 厚 残 10.0 重 残 3811.7	厚い楕円形の自然石を利用。平坦な 1 面を作業面に使って良く磨耗して、そ の裏面はやや凹凸がある破面。図の下端も破面で、作業面を使った後に破損 したと見られる。各破面も含めて全面が強く被熱して赤色化している。鍛造 剥片や鉄分が全く見られないので、金床石の可能性は低い。	10YR7/6 明黄褐 粗粒で硬質な花崗岩	西半部中央の底直上 18cm 端部欠 36
4 鉄製品 工具?	長 3.64 幅 1.24 厚 約 0.5 重 4.27	先端は鎌や鉈(やりがんな)のように刃部を持って尖る。刃部は基部に比べて 薄く、横断面は図の裏面が扁平で表面のほうが丸味が強い。基部は断面が 隅丸方形。X線写真でも孔は認められない。木目等の有機質も見られない。		SK-372 の西側で SI-34a より上層 完形 E-E' より 30cm 西 3 層

112片・781g、高杯 23片・777g、鉢 2片・95g、小形壺 1片・28g、壺甕類 192片・2,128g、小形土器 1片・35g、焼粘土塊 4点・12g。また、現地調査時に「SI-34・SD-263 上面」出土遺物として取り上げた土師器合計 88片・773g の内訳は、杯 22片・143g、高杯 14片・97g、鉢 1片・23g、壺甕類 50片・423g、小形土器 1片・87g。

第 24 節 近世の溝状遺構

SG10 区 SD-201a・201b (第 213～215 図、写真図版 147・214)

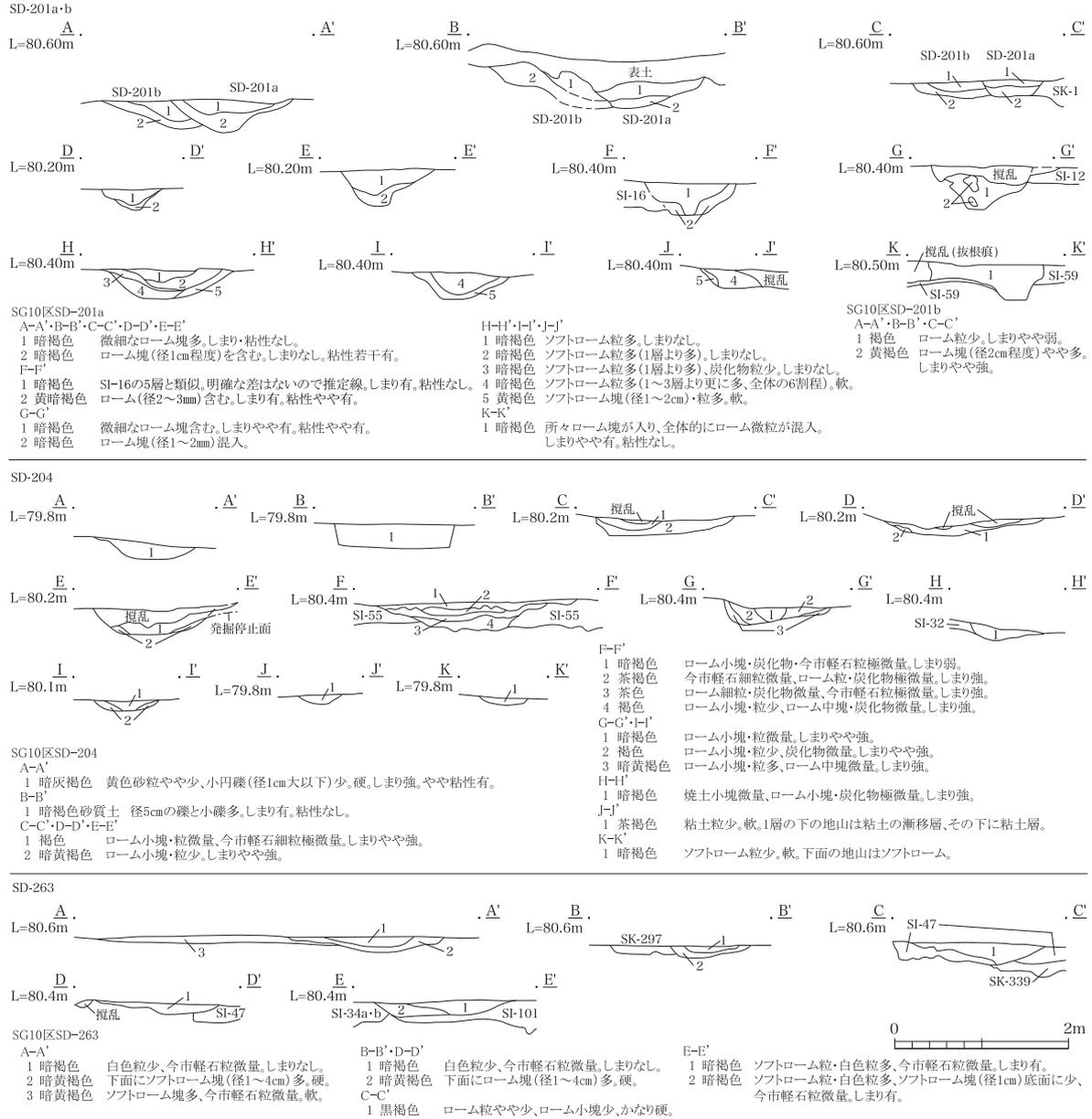
[位置] SG10 区南半部の全域を巡り、X16～X21 間、Y17～Y21 間に所在する。調査前の地表面の窪みとして方形区画を確認できた。南辺溝の東側は調査区外まで伸びるが、すぐ東側の台地東端斜面で溝が終了すると考えられる。北辺溝の東端部で連結する SG10 区 SD-204 と同時に機能した区画溝である。SD-201a と SD-204 の間に中央部柱穴群(第 204・205 図)が多く、中世の井戸 SE-252・344 や時期不明の井戸 SE-345 が区画内にある。ただし中央部柱穴群や井戸のすべてが中世かどうかは不明で、時期不明の遺構もある。SD-201a の土器と近世磁器(1・2)および連結する SD-204 からみて、近世の溝と考えられる。

SD-201b を掘り直した新期の溝が SD-201a である。SD-201a は古墳時代竪穴 SI-12・13・16・40・47・



第213図 権現山遺跡 SG10区 SD-201a・201b・204・263 (2) 平面図

第5章 権現山遺跡 SG10区



第214図 権現山遺跡 SG10区 SD-201a・201b・204・263 (3) 断面図

59・101を切る。古墳時代のSK-208・292・343、古墳時代の溝SD-41・42、中世の土坑SK-92、中世～近世の溝SD-263、時期不明の土坑SK-1・288・289を切る。時期不明のSK-202とSK-214に南辺と西辺をそれぞれ切られる。P-296・356～366・368・389と重複し、新旧関係は不明だが、SD-201に伴う柱穴状土坑かもしれない。SD-201bの重複関係はSD-201aとほぼ同様であり、それに加えて南辺でSD-201bがSK-207を切り、SD-201aにSD-201bが切られる(SK-207→SD-201b→SD-201a)。

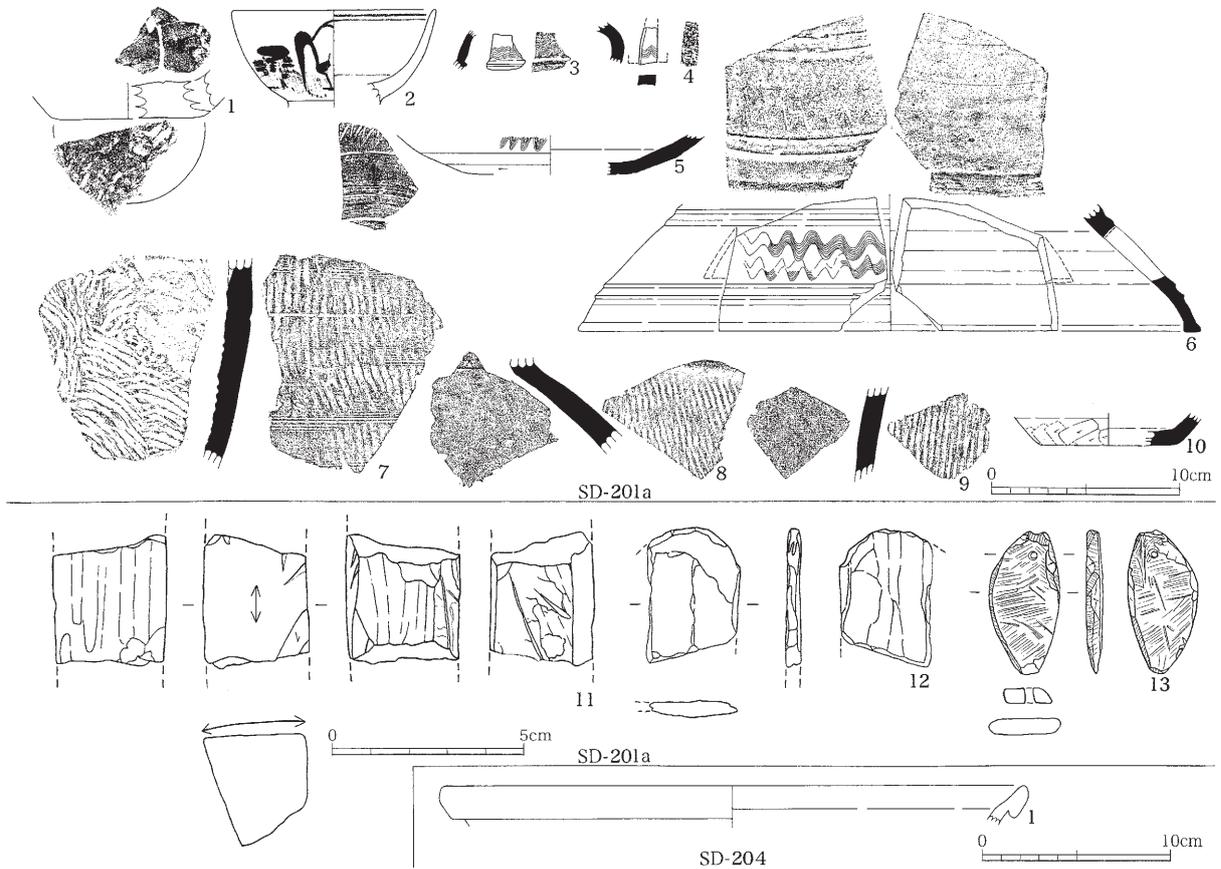
【規模と形状】 方形の区画溝で、内部の規模は南北82×東西38m。北半部では平行するSD-204との東西方向の間隔が10～11m。

SD-201aは西辺溝幅130～210cm、北辺溝幅55～60cm、南辺溝幅29～34cm。残存する深さは南辺で14～26cm、西辺で35～60cm、北辺で23～33cm。南辺では断面図B-B'からC-C'までの付近が深く、底面も低くなる。西辺は底面が南へ少し傾斜する傾向があり、またX19ライン付近では西辺溝底面が少し深いので7月の降雨後に雨水がたまっていた。北辺では底面に傾斜がほとんどない。底面標高は、西辺溝が北端で標高79.95m、南端で79.53m。南辺溝は標高79.58～79.82m。北辺溝は標高79.98～80.02m。

埋土は自然埋没で、テフラの層や粒はみられない。

南辺の SD-201b は SD-201a の南に接して残る。SD-201b の北・西辺は SD-201a に掘り直されたと考えられる。南辺の幅 68 ～ 90cm、残存する深さ 9 ～ 15cm で、断面 B-B' を見ると本来は 30cm 以上の深さであろう。底面標高は 79.57 ～ 79.78m で、D-D' 付近で最も低い。自然埋没で、テフラはみられない。

〔出土遺物〕 SD-201a に伴う遺物は、山水文の染付碗がある (2)。軟質の土器 (1) と砥石 (11) も近世の可能性がある。古墳時代集落から流入した土師器・須恵器 (二重甕・甕・器台・高杯片) と石製模造品、平安時代の須恵器 (10) もある。須恵器器台 (6) は、東にある SG10 区 SI-111 や重複する SK-292 などの破片と同一個体である。二重甕 (4) の破片は SI-50・64a や SK-254 などに、剣形石製模造品 (13) は SI-2 などに事例がある。絹雲母片岩 (12) は、SG10 区 SI-101 と SD-42 の石製模造品に例があるが、この地域で一般的な石材ではない。SD-201a・201b の判別ができない土師器の合計 148 片・396g の内訳は、杯 56 片・255g、高杯 5 片・41g、小形壺 5 片・18g、壺甕類 82 片・865g。SG10 区 SD-201a の図示以外の土師器合計 3 片・86g の内訳は、杯 1 片・17g、壺甕類 2 片・69g。SG10 区 SD-201b は図示した遺物はなく、土師器合計 11 片・133g の内訳は、杯 6 片・64g、高杯 2 片・20g、壺甕類 3 片・49g。



第 215 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-201a・204 遺物

第 129 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-201a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 中～近世 土器 甕?	高 残 1.9 底 復 8～9	厚く重みがある。外底面は雑なナデで、乾燥時に置いた場所の凹凸痕が残る。内底面は雑なユビナデの後に焼成前の刻線 1 本。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや緻密 白・透明細粒多、 白粗粒少 やや軟質	西辺の中央 底 1/6 周 4 19-17.5
2 磁器 碗	口 復 10.8 高 残 5.1	染付丸碗。外面文様は呉須により筆で山水文を描く。内面に呉須で横線を口縁部に 2 本、見込みに 1 本。染付文様はいずれも手描き。	白 緻密 硬質	西辺の中央 口 1/8 周、体 1/6 周 19-17.5
3 須恵器 甕	高 残 2.1	外面は 6 歯の施文具で右から左へ波状文を描く。口縁部下端は強い凸線状。古墳時代中期の遺物が混入。	7.5Y5/1 灰 緻密 白・黒細粒少 やや硬質	北西隅 頸 1/12 周 20.5-18.5 北コーナー

第5章 権現山遺跡 SG10 区

4 須恵器 二重甕	高 残 1.7	両側は透窓の下端部。5 歯の工具で右から左へ向かって櫛描波状文を回転施文する。外面肩部に自然釉。SI-50・64a、SK-254 出土破片と同一個体の可能性あり。古墳時代中期の遺物が混入。	5Y4/1 灰 やや緻密 白細粒微量 硬質	南辺の東部 胴部のスリット部分の 小破片 16.0-18.0
5 須恵器 高杯	高 残 3.1	残存部分が少ないので復原径は参考値。外面は杯底部に回転ヨコヘラケズリ、杯体部にごく浅い段で区画した後に 7 歯以上の櫛歯状施文具で波状文を回転施文する。杯底部には脚部に透窓を開けた時のヘラ先で浅い沈線が冊(よんじゅう)状に生じている。古墳時代中期末の遺物が混入。	N5/(B) 灰 やや粗い 白粗～細粒やや多、 白礫少 硬質	北西隅 杯体 1/8 ～ 1/12 周 20.5-18.5 北コーナー
6 須恵器 器台	高 残 6.7 脚裾 復 32.6	低い突線 2 条ずつで区画した内部に、11 ～ 12 歯前後の櫛描施文具で右から左へ櫛描波状文を描く。おそらく三角形の透窓の側縁部が 1 箇所だけ残る。残存破片の大きさから見て、透窓は 8 方向以内と考えられる。脚成形時の回転ヨコナデは、波状文を描く方向と逆の可能性がある。外面全体に黄緑色～黄色の自然釉がかぶる。SI-111 他出土破片と同一個体の古墳中期の遺物が混入。	2.5Y6/1 黄灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	西辺の中央底上 11cm 脚裾 1/18 周 18.5-17.5 1
7 須恵器 甕	高 残 11.0	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で縦位の平行叩き調整後、9 歯以上の工具で横位の平行沈線(カキメ)。内面は同心円状当具痕。内面の破片右上部は器壁内面が層状に薄く剥落する。破面は芯部がにぶい橙(7.5YR7/4)、器表付近は主に灰白(7.5YR8/1)になる互層状。古墳時代(後期?)の遺物が混入。	色調は左欄を参照 やや粗い 白・赤粗～細粒や やや多、透明粗～細粒少 硬質	西辺の中央 胴部片 1 19-17.5
8 須恵器 甕	高 残 5.0	木目平行の溝を彫った叩き板で肩部に平行叩き後、頸部の下端に軽いヨコナデ。内面は横位のナデで、当具痕は磨り消したかまたは最初から無文。古墳時代中期の遺物が混入。	5GY4/1 暗オリーブ灰 やや緻密 白粗～細粒と黒細 粒少 硬質	西辺の中央 胴部片 19.75-18.0
9 須恵器 甕	高 残 5.0	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面はナデで無文。古墳時代中期の遺物が混入。	5B4/1 暗緑灰 やや緻密 白粗～細粒少 硬質	西辺の中央 19-17.5
10 須恵器 杯	高 残 1.7 底 復 7.2	外底面は 1 方向の手持ちヘラケズリを軽く行う。回転ヨコナデ後、外面の体部下端を手持ちヘラケズリ。平安時代の遺物が混入(新治窯産)。	5Y5/1 灰 やや緻密 白・透明粗～細粒少、 白雲母細片極少 やや軟質	西辺北部 H-H' と I-I' の間 底 1/4 周 X20 ～ 20.2
11 石器 砥石	長 残 3.6 幅 残 3.0 厚 残 3.0 重 残 37.3	側面 4 面のうち 1 面だけを砥面に使い、平滑に磨耗する。砥面には工具等の刃部によると見られる傷と切削痕がある。砥面以外の 3 側面は刃部で縦方向または斜方向に切削加工して、刃部の傷に由来する平行条線痕が生じている。上下両端の破面に比べて 4 側面は暗褐色を帯びている。	2.5Y5/3 黄褐 緻密でやや硬質な流紋岩質凝 灰岩	南辺の東半 両端部欠 16.5-18
12 剥片	長 残 3.6 幅 残 2.4 厚 残 0.38 重 残 5.36	節理に沿って剥離した薄い石片で、外周が残存する部分は側面を研磨してある。破面でも研磨されている箇所が左図の右下部に見られる。石製模造品の可能性もあるが、石材が異質なので断定できない。	5G4/1 暗緑灰 節理が発達した緻密で硬質な 絹雲母片岩	西辺の南部 端部残 17.5-17.0
13 石製模造品 剣形品	長 3.71 幅 1.82 厚 0.41 重 4.76	両面ともに 2 ～ 3 方向に研磨して明瞭な擦痕を残す。孔径は両面とも 1.80 ～ 1.86mm で、右図の面は孔が少し斜めに開口しているため孔の長径だけが 2.10 mm になる。このことから見て、右図の面から穿孔したと考えられる。側面は横方向(穿孔と同じ方向)に研磨して、縦方向に 2 面程度に分割して磨いている。	10BG3/1 暗青灰 緻密で軟質な滑石片岩	西辺北部底上 8cm (20.5- 18.5 杭の南西) 完形 91

第 130 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-204 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 鉢	口 復 30.6 高 残 2.2 最大 復 31.0	鉄釉播鉢の可能性あり。外面は口縁部を「折り返し」状にする。内面は口～体部境に明瞭な稜を持つ。内外全面に鉄釉。播目部分は残っていない。 [注記] A-A' 南一括、SI-55 セク	7.5YR4/3 褐 やや緻密 白・黒細粒少 やや硬質	中央部 SI-55 重複地点 口 1/12 周 注記は左欄

SG10 区 SD-204 (第 213 ～ 215 図、写真図版 147・148)

[位置] SG10 区南半部の X18 ～ 21 間、Y17 ～ 21 間にあり、南は低地部分で浅くなって消滅する。北辺溝は SG10 区 SD-201a・b の北辺と連結し、同時に機能した区画溝と考えられる。古墳時代の各遺構 (SI-32・33・55、SD-41・42・304a・304b・319) を切る。縄文時代の SK-307 および時期不明の SD-506 と重複する部分には抜根の攪乱があり、これらの重複関係は不明である。時期不明の SK-336 および SD-510 の南端部に少し重複するが、新旧関係は不明。

[規模と形状] 北辺溝は幅 90 ～ 210cm で、西端が狭く (幅 120cm)、東端が低地に降りた部分も狭い (幅 90cm)。北辺溝は残存する深さ 20 ～ 30cm で、底面が東へ傾斜し、底面標高は西端で 79.77m、東端で 79.27m。西辺溝は幅 110 ～ 260cm、残存する深さ 10 ～ 30cm で、底面が僅かに南へ傾斜し、底面標高は北端で 79.77m、南端で 79.63m。南端部は平面形がクランク状に屈曲して低地部分に下り、溝底面標高も 79.44m 前後まで低くなる。南端部は溝幅 60 ～ 120cm で、最南端は周囲よりも浅くなり、溝が確認できなくなる。埋土は自然埋没で、テフラは縄文草創期の今市軽石粒が混入しているだけである。

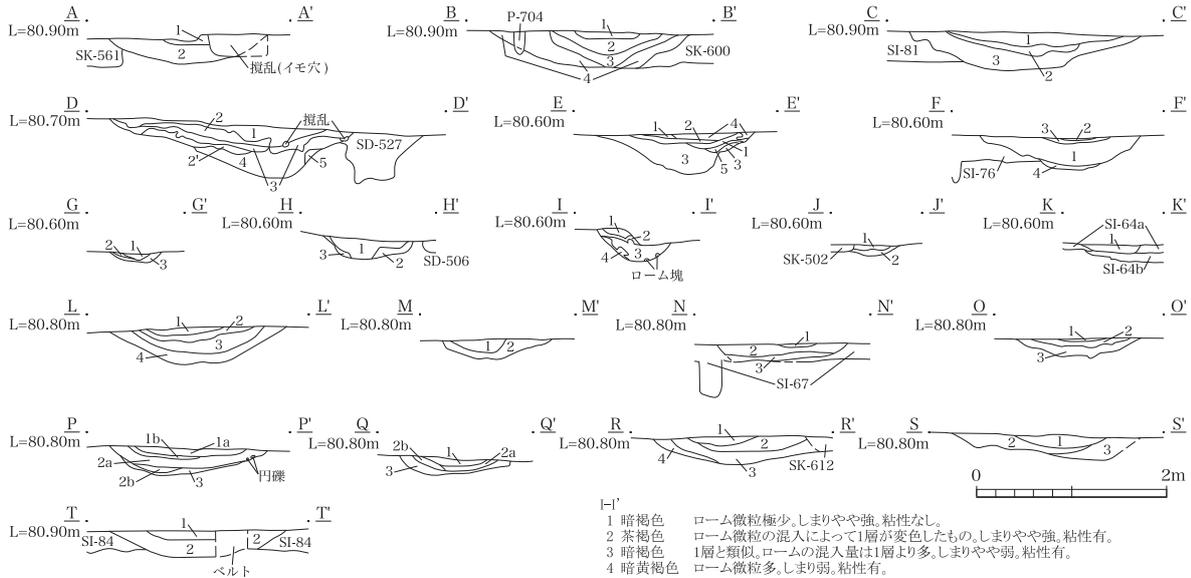
[出土遺物] 近世の遺物として、鉄釉播鉢かと思われる陶器が 1 片ある (第 215 図下段右)。図示以外の土師器合計 95 片・917g は古墳時代集落からの混入品と見られ、内訳は杯 7 片・48g、高杯 10 片・117g、小形壺 1 片・54g、壺甕類 74 片・654g、小形土器 3 片・44g。



第216図 権現山遺跡 SG10区 SD-503 (1) 平面図

第5章 権現山遺跡 SG10 区

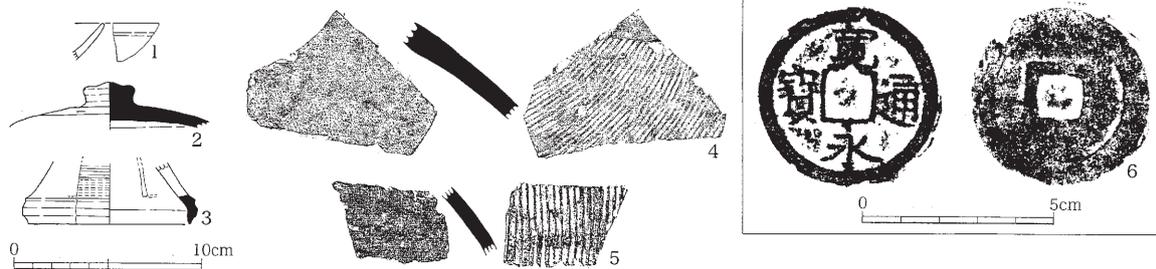
SD-503



SG10区SD-503

- A-A'
- 1 暗褐色 地山塊(褐色土・径2cm)と炭化物少。しまり有。
 - 2 暗褐色 ソフトローム塊(径2cm・西端に)・粒と炭化物多。しまり有。
- B-B'
- 1 暗褐色 ソフトローム粒少。しまり有。
 - 2 暗褐色 炭化物多、ソフトローム粒少。しまり有。
 - 3 暗褐色 ソフトローム粒少、今市軽石粒微量。しまり有。
 - 4 暗褐色 ソフトローム粒多。しまり有。
- C-C'
- 1 暗褐色 ソフトローム粒少、今市軽石粒微量。しまり有。
 - 2 暗褐色 炭化物粒多。しまり有。
 - 3 暗褐色 ソフトローム粒多、今市軽石粒微量。しまり有。
- D-D'
- 1 褐色 ロームを含まず枝根が多。しまりやや弱。粘性なし。耕作土。
 - 2 暗褐色 ローム微粒若干。しまり弱。粘性有。
 - 2' 暗褐色 2層と類似。しまりやや強。粘性有。
 - 3 暗茶褐色 E-E'の2層と同じ。しまりやや弱。粘性有。
 - 4 暗褐色 ローム微粒少。しまりやや強。粘性有。
 - 5 暗褐色 ローム微粒少(3層より多)。しまりやや弱。粘性有。
- E-E'
- 1 暗黄褐色 ローム微粒多。しまり弱。粘性有。
 - 2 暗茶褐色 この層より上部には茶褐色土が篩状に堆積する。しまりやや弱。粘性有。
 - 3 暗茶褐色 ローム微粒やや多。下部には塊状の暗褐色土が入る。しまり弱。粘性有。
 - 4 暗茶褐色 ローム微粒少。しまりやや強。粘性有。
 - 5 黒褐色 ローム微粒少。しまりやや弱。粘性有。
- F-F'
- 1 暗褐色 ローム微粒極少。しまりやや弱。粘性有。E-E'の3層およびG-G'の1層と対応。
 - 2 黒褐色 基本的に1と同質だが炭化物がぎっしり入る。しまりやや弱。粘性有。
 - 3 暗茶褐色 2層の炭化物の影響で1層よりも若干暗い。しまりやや弱。粘性有。
 - 4 記録不備のため特徴不明。
- G-G'
- 1 暗褐色 ローム微粒少。しまりやや強。粘性有。
 - 2 暗褐色 1層よりもやや多くローム微粒を含む。しまりやや弱。粘性有。
 - 3 暗黄褐色 1層とロームの混合土。しまりやや弱。粘性有。
- H-H'
- 1 暗褐色 ローム微粒少。しまりやや強。粘性有。
 - 2 暗黄褐色 ローム(径1~3mm)少。しまり弱。粘性有。
 - 3 暗黄褐色 2層と同質と思われるが、ロームの量が多い。しまり弱。粘性有。
- I-I'
- 1 暗褐色 ローム微粒極少。しまりやや強。粘性なし。
 - 2 茶褐色 ローム微粒の混入によって1層が変色したもの。しまりやや強。粘性有。
 - 3 暗褐色 1層と類似。ロームの混入量は1層より多。しまりやや弱。粘性有。
 - 4 暗黄褐色 ローム微粒多。しまり弱。粘性有。
- J-J'
- 1 褐色 ローム粒少。やや軟。
 - 2 暗黄褐色 ローム粒・小塊やや多。やや硬。
- K-K'
- 1 暗黄褐色 ソフトローム塊(斑状でぼんやりとする)やや多。やや硬。
- L-L'
- 1 暗褐色 ローム粒極少。やや軟。
 - 2 黒色 暗褐色やや多。ローム粒少。やや軟。
 - 3 褐色 焼土やや多。ローム小塊・粒少。やや軟。
 - 4 暗黄褐色 ローム小塊・塊・粒やや多。やや軟。
- M-M'
- 1 暗褐色 ローム粒少。硬。しまり強。
 - 2 暗黄褐色 ソフトローム小塊・粒多。ソフトローム大塊若干。硬。しまり強。
- N-N'
- 1 黒色 M-M'の1層と同じ。
 - 2 暗褐色 均質で混じりもの少ない。ローム粒極少。軟。(SI-67の埋土から流入した層)
 - 3 暗黄褐色 M-M'の2層と同じ。(地山ロームの崩れた塊がやや多い層)
- O-O'
- 1 黒色 炭粒(径1~5mm)やや多。砂(径2mm前後)少。硬。
 - 2 暗黄褐色 ローム粒やや多。やや硬。粘性強。
 - 3 暗褐色 ローム小塊・粒と円礫少。硬。
- P-P'
- 1a 黒色 ローム粒少。粘性強。硬。
 - 1b 黒色 1aと同じだが炭小塊・粒やや多。O-O'の1層と対応。
 - 2a 暗褐色 ローム粒多。炭粒少。焼土粒極少。やや硬。
 - 2b 暗褐色 2aと同じだが1~3cm大の炭片多。
 - 3 暗黄褐色 ローム小塊・ローム粒多。焼土や炭は含まない。
- Q-Q'
- 1 褐色 ローム粒少。やや軟。粘性強。炭や焼土は見られない。
 - 2a-2b P-P'の2a・2b層と同じ。
 - 3 暗黄褐色 ローム粒多。ローム小塊少。やや軟。炭や焼土は見られない。
- R-R'・S-S'
- 1 暗褐色 炭化物粒少。しまり有。
 - 2 暗褐色 ソフトローム粒多。しまり有。
 - 3 褐色 ソフトローム粒多。ソフトローム塊(径1cm)少。しまり有。
 - 4 黄褐色 ソフトローム塊(径1cm)・粒多。しまり有。粘性有。
- T-T'
- 1 暗褐色 炭化物多。しまりなし。
 - 2 明褐色 ソフトローム粒多。炭化物少。しまり有。

第 217 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-503 (2) 断面図



第 218 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-503 (3) 遺物

SG10 区 SD-503 (第 216 ~ 218 図、写真図版 149・150・173)

[位置] SG10 区北部に広く展開する環状の溝。X21 ~ X25 間、Y17 ~ Y20 間を三角形に巡る。古墳時代建物 SI-64a・64b・65・66・67・75・76・81・84・86 を切る。古墳時代溝 SD-304a・304b・527 と

第 131 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-503 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 椀	口 復約 13 ～ 15 高 残 1.9	外面は白塗の後に透明釉。内面は少し厚い緑色釉。	外:10YR7/1 灰白 内:10Y5/2 オリーブ灰 緻密 混和材なし 硬質	東辺北端。SK-561 の東 口 1/12 周 B-B' 1m 北
2 須恵器 蓋	高 残 2.5 鈕径 2.7 鈕高 1.3	外面は中央部を回転ヘラケズリした後に鈕を貼り付けて回転ヨコナデ。ヘラケズリ時のロクロは左回転(反時計回り)。内面は回転ヨコナデ後に中央部を不定方向の軽いナデ。内面を上に向けて成形・調整した時のロクロは右回転(時計回り)。益子窯産の平安時代遺物が混入。	10Y4/1 灰 やや粗い 白粗～細粒やや多 硬質	東辺北部。SI-81・83 の 東側 天井 1/2 周、鈕 2/3 周 1 23.5-19.5
3 須恵器 高杯	高 残 3.2 脚裾 復 8.5 最大 復 9.3	脚部外面の下位に細突線を持ち、その上はカキメを施していたと見られるが、緑黄色の自然釉に覆われているのでよく観察できない部分が多い。長方形と想定される透窓の右側縁部を確認できる。透窓が 3 方向か 4 方向かは不明。古墳時代中期の遺物が(SI-75 から?)混入。	5Y7/1 灰白 緻密 白・黒細粒少 やや硬質	東辺中央部。SI-75 の北 側 脚 1/6 周、脚裾 1/12 周 23.0-19.5 一括
4 須恵器 甕	高 残 7.0	肩部の破片。外面は斜位の平行叩き後に頸部下端をヨコナデ。内面は無文でわずかにヨコナデが認められるので、当具痕をナデ消した可能性がある。破面の芯部は暗赤灰色を帯びる。古墳時代中期の遺物が混入。	5B5/1 青灰 緻密 白粗～細粒やや多、白 礫少 硬質	東辺北半。SI-81 の北東 側 肩部片 3
5 須恵器 甕	高 残 3.5	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で縦位の平行叩き。内面は無文で、当具痕をナデ消した可能性がある。破面の芯部は暗赤灰色。古墳時代中期の遺物が混入。	7.5Y5/1 灰 緻密 白礫～細粒と黒色湧出 粒多 硬質	東辺北半。SI-81 の北東 側 胴部片 2
6 銅銭 寛永通寶	重 1.72	寛永通寶の一文銭。銭径は縦 23.97mm×横 23.96mm、外縁内径は縦 19.79mm×横 19.73mm、銭厚は 1.02～1.23mm、量目は 1.72g。		東辺南端(SI-76 周辺) 遺構確認面 完形 21.5-19 上面

古墳時代土坑 SK-551・561・570・600 を西部と北東部で切る。時期不明溝 SD-505・506・508・510・518 を切る。ただし、SD-505・506・510・518 と重複する状況の土層断面図はない。SD-503 の底面で確認した時期不明土坑 SK-514 を切る可能性が高い。時期不明土坑 SK-502・513・612 と、時期不明の柱穴状土坑 P-704・709 に切られる。時期不明土坑 SK-517 との新旧関係は不明だが、SK-517 に切られるかもしれない。時期不明建物 SB-603 の北西柱穴と重複するが、新旧関係は不明である。

【規模と形状】 三角形状に一周する平面形。溝幅は、東辺で 80～300cm、北辺で 90～220cm、南辺で 40～190cm。残存する深さは、東辺で深く 44～47cm、南辺ではやや浅く 25～39cm。東辺の南端部と北辺では浅く、北辺が 10～35cm、東辺の南端部が 25～36cm。底面の標高は北東隅が高く南東隅が低い。北辺では東側が高く、東端で標高 40.42m、西端で 80.26m。東辺では北側が高く、北端で標高 40.42m、南端で 80.06m。南辺では西側が高く、西端で標高 80.28m、東端で 80.06m。

【覆土】 埋土は自然埋没で、縄文草創期に降下した今市軽石が B-B' と C-C' に地山から混入している以外には、テフラの層や粒はほとんど見られない。近世の区画溝と考えられる。

【出土遺物】 遺物は僅かで、古墳時代中期を主体とする土師器片が主で須恵器片もあり、縄文早期～後期と弥生中期の土器片も少量ある(『東谷・中島地区遺跡群 10』の第 36～40 図 75・222・240・250・257・264 と第 42 図 46)。SD-503 の時期を示す遺物は陶器片(1)と寛永通寶(6)がある。図示以外の土師器合計 460 片・3,502g は古墳時代集落から混入したもので、内訳は杯 181 片・861g、高杯 18 片・278g、小形壺 2 片・9g、壺甕類 251 片・2,272g、甌 5 片・58g、小形土器 3 片・24g。

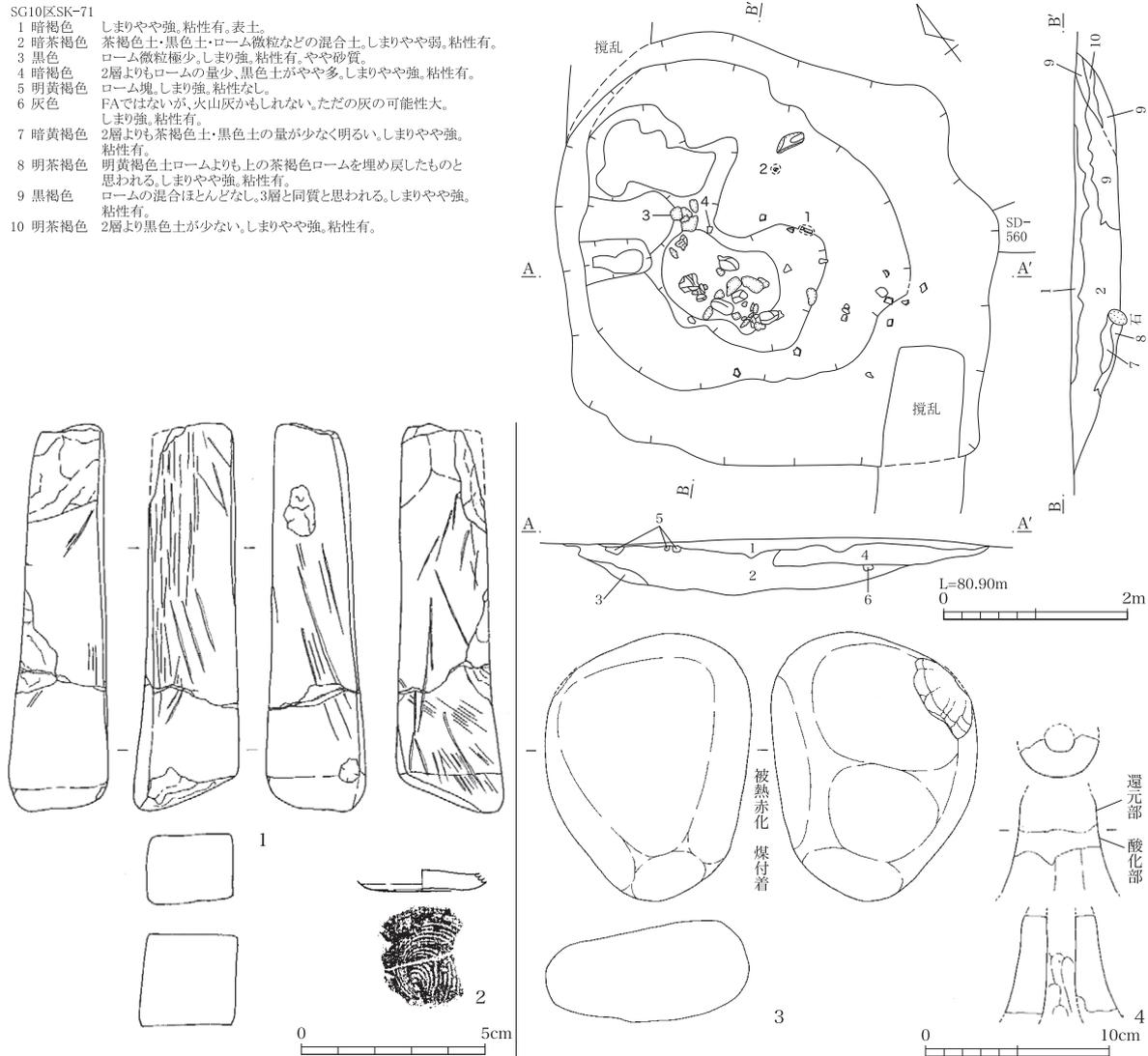
第 25 節 近世の土坑

SG10 区 SK-71 (第 219 図、写真図版 147・174)

SG10 区北部の 22-18 グリッドにある、大形の深い土坑。時期不明の溝 SD-560 を切る。西壁上端が土層断面にかかる部分は少しオーバーハング状だが、土坑全体がそうになっているわけではない。不整楕円形で口径は南北 567×東西 505cm、土坑中央部における確認面から底面までの残存する深さは 62cm。埋土は 1 層(表土の下部)を除くと人為的に埋め戻した可能性があり、確実なテフラは見られないが 6 層の灰色粘質土は現地調査時にテフラの可能性も考えられている。キメの細かい胎土で底径が小さな 2 は、中世ではなく近世の土師質小皿(かわらけ)であろう。専用羽口は、『東谷・中島地区遺跡群』10 で権現山遺跡の鍛

第5章 権現山遺跡 SG10 区

治関連遺物全体を報告後に確認したため、同書 pp.490-498 に掲載されていない。近世の土坑に古墳時代集落から羽口などが混入したものであろう。



第219図 権現山遺跡 SG10 区 SK-71 遺構・遺物

第132表 権現山遺跡 SG10 区 SK-71 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 石器 砥石	長 10.6 幅 2.8 厚 2.7 重 残 97.8	断面が四角形の長方形砥石。4 側面を使用して、いずれもおおむね縦方向に使用した擦痕を少し残しながら平滑に摩耗している。やや深い傷状の擦痕も含む。上下両端の小口面は砥面に使っていない。	2.5Y7/2 灰黄 やや緻密で軟質な流紋岩質凝灰岩	中央底上 33cm ほぼ完形 4
2 土師質 小皿	高 残 0.6 底 2.4	内外面をロクロナデ。底部は回転糸切り離し。	10YR5/2 灰黄褐 緻密 白・透明細粒少 やや軟質	東部底直上 底 2/3 周 1
3 被熱礫	長 14.5 幅 11.1 厚 5.0	やや薄い楕円形の自然礫で、1 箇所にだけ剥離あり。全体が被熱赤化した後に、タール状の煤が明瞭に全体を覆っている。重量 1077.8g。	2.5Y4/2 暗灰黄 緻密で硬質な流紋岩	中央底上 2cm 完形 18
4 土師器 専用羽口 (鍛冶)	長 残 5.4 孔 復 1.6 ~ 2.0	先端に近い部分の破片。先端側も基部側も破面となっている。通風部は整った円形で、基部側が少し広がる。羽口の厚は 0.9 ~ 2.0cm で、基部が厚くなる。側面の中位は灰白色に変色し、それよりも先端側は灰色に還元して少量の滓と酸化土砂が付着する。内外面ともに縦方向のナデ調整で、内面はその痕をよく残す。古墳時代の遺物が混入。鍛冶関連遺物構成Noなし。	2.5Y8/2 灰白 やや緻密 白・黒・透明細粒 やや多、白礫少 やや硬質 磁着度 1 メタル度 未計測	中央底上 8cm 脚上半 1/2 周 17

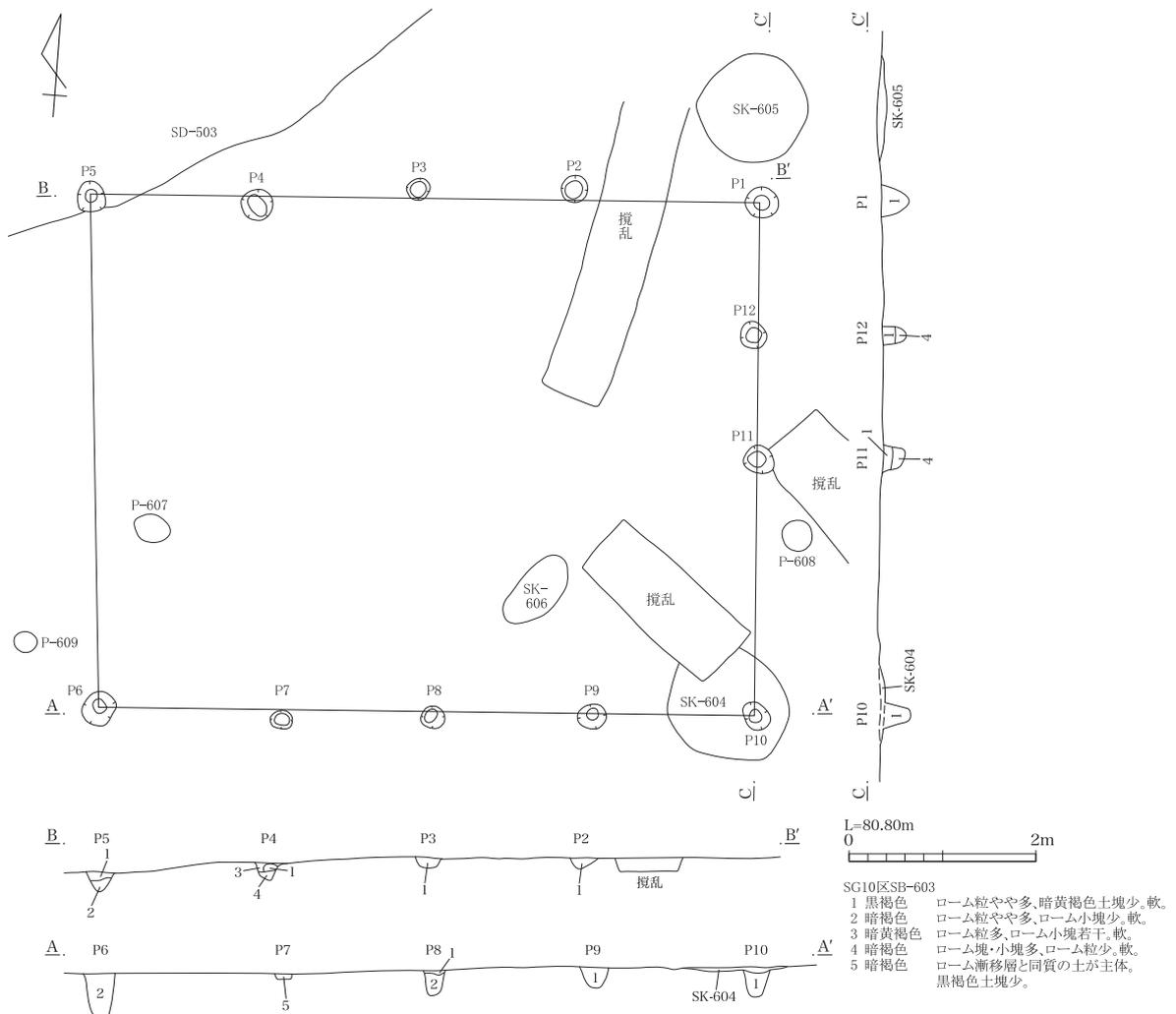
第 26 節 時期不明の掘立柱建物跡

SG10 区 SB-603 (第 220 図、写真図版 150)

[位置] SG10 区北部の 23-18 グリッド。北西柱穴が近世の溝 SD-503 と重複するが、両遺構の新旧関係は不明である。SD-503 よりも埋土が軟らかい SB-603 のほうが新しい可能性も調査日志に記載されているが、確定はできない。南東隅柱穴 P10 が時期不明の SK-604 に切られる。

[規模と形状] 東西棟で 4 間× 3 間の側柱建物である。ただし西辺は中間の柱穴が認められない。桁行総長は 7.06m(南辺)～7.20m(北辺)で、桁行の柱間は 1.58～2.00m のバラツキがある。梁行総長は 5.52m で、梁行方向の柱間は北二間分が 1.40m で、南一間分が 2.70m。柱筋はよく通り、P2・3・4・7・12 が少しだけずれる。主軸方位は GN-86° 30' -E。柱穴の掘形形状は円形で径 20～37cm である。北西隅 (P5) 以外の隅柱 (P1・6・10) が深くなる傾向があり、遺構確認面からの深さは P1=30cm、P2=10cm、P3=8cm、P4=20cm、P5=20cm、P6=46cm、P7=6cm、P8=25cm、P9=21cm、P10= 推 定 30cm、P11=24cm、P12=25cm。

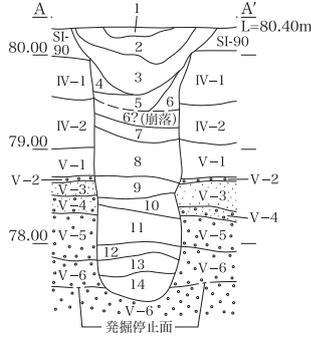
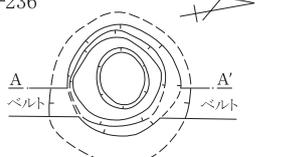
[覆土と時期] 柱痕跡や、確実な抜き取り穴は見られない。P1 にだけ焼土粒が少量認められた。P4 の上層部には黒褐色土 (1 層) が 12cm 大の塊状になって入るので、柱を抜いた後に人為的に埋め戻したと考えられる。1～4 層が軟らかいので、中世以降の建物であろう。近世の SD-503 との新旧関係が分からないこと



第 220 図 権現山遺跡 SG10 区 SB-603 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区

SE-236



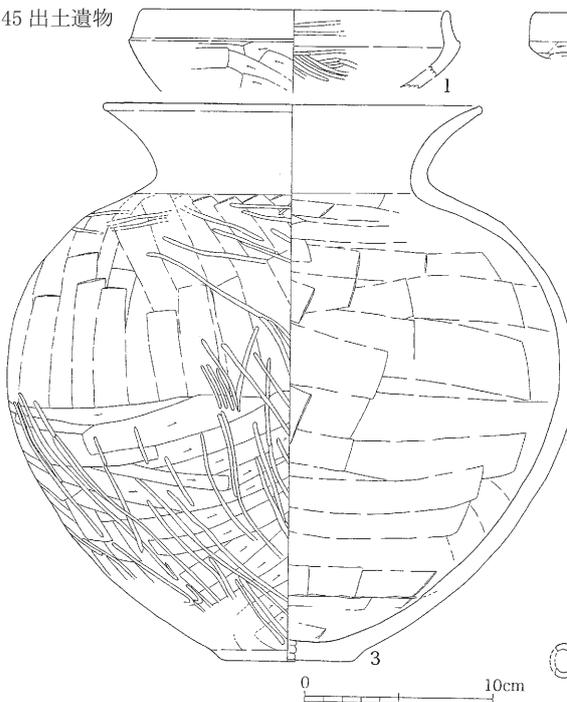
SG10区SE-236

- 1 暗褐色 ローム小塊微量、しまりやや強。
- 2 褐色 ローム小塊、粒少、礫(5cm程度まで)微量、焼土小塊・炭化物極微量、しまりやや弱。
- 3 黒褐色 礫(10cm程度)少、ローム小塊微量、しまり弱。
- 4 褐色 ローム小塊少、ローム粒微量、しまり弱。
- 5 暗褐色 ローム小塊、礫(5cm程度まで)微量、しまり弱。
- 6 暗黄褐色 ローム小塊、粒多、しまり弱。
- 7 黒褐色 ローム小塊、粒少、ローム中塊・礫(3cm程度まで)微量、しまりやや強。
- 8 暗褐色 ローム粒多、ローム小塊少、礫(5cm程度まで)微量、ローム中塊極微量、しまりやや強、オレンジ色微量、11層に類似。
- 9 暗褐色 ローム小塊、粒と粘土粒・礫(5cm程度まで)微量、しまりやや強、オレンジ色微量。
- 10 黒色 粘土塊、粒少、ローム小塊、粒微量、焼土粒・炭化物・礫(1cm弱)極微量、しまりやや弱、オレンジ色極微量。
- 11 明黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、ローム中塊・礫(5cm程度まで)・鉄分微量、しまりやや強。
- 12 黒色 ローム小塊、粒と礫(1cm程度)微量、今市軽石細粒極微量、鉄分多、しまり弱。
- 13 黒色 ローム小塊、粒微量、今市軽石細粒極微量、しまり弱。水分含む。
- 14 黒色 礫(10cm程度まで)少、鉄分微量、ローム小塊、粒極微量、しまり弱。水分含む。

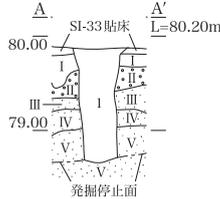
SG10区SE-236 地山

- III 黄褐色 ソフトローム。
- IV-1 明黄褐色 ハードローム。
- IV-2 黄褐色 ハードローム(砂層混じり)・ローム塊多、砂粒微量。
- V-1 黄褐色 粘土塊、粒多、砂粒微量。
- V-2 灰白色 砂粒・礫(1cm弱)多。
- V-3 灰色 砂粒多、礫(1cm弱)少。
- V-4 灰白色 砂粒・礫(5cmまで)多、オレンジ色の色調を帯びる。
- V-5 灰白色 砂粒・礫(5cmまで)多。
- V-6 褐色 砂粒・礫(10cmまで)多、鉄分含む。

SE-345 出土遺物



SE-316



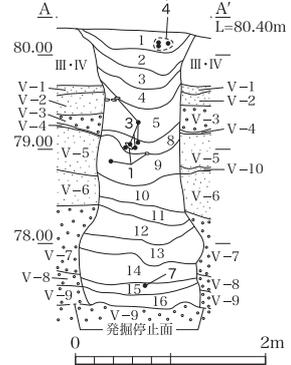
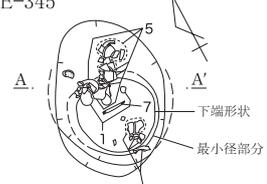
SG10区SE-316

- 1 暗褐色 水分が非常に多、粘性有。

SG10区SE-316 地山

- I 黄褐色 礫(径1~5cm)とソフトロームが混在。硬。
- II 灰色 砂層と礫(径3~4cm)が混在。硬。
- III 灰褐色 砂層(礫周辺は、黄褐色の砂層)と礫が混在。硬。
- IV 暗灰色 砂層に淡褐色砂と濃灰色砂の筋が縞状に入る。硬。
- V 暗灰色 やや淡黄褐色を帯びる。砂の粒がかなり細かい。硬。

SE-345



SG10区SE-345 (6・7層は欠番)

- 1 茶褐色 ローム粒・焼土粒・炭化物極微量、しまり強。
- 2 暗茶褐色 ローム小塊、粒と焼土粒・炭化物極微量、しまり強。
- 3 暗褐色 ローム粒・焼土粒・炭化物極微量、しまりやや強。
- 4 黒褐色 ローム小塊、焼土小塊・炭化物極微量、しまりやや強。
- 5 黒色 ローム粒・炭化物極微量、しまりやや弱。
- 8 暗茶褐色 焼土小塊、粒微量、ローム細粒・炭化物極微量、しまりやや弱。
- 9 黒色 焼土粒微量、ローム小塊、焼土小塊・炭化物極微量、しまり弱。
- 10 黒褐色 ローム小塊、粒と焼土小塊、粒と炭化物極微量、しまりやや弱。
- 11 黒褐色 焼土小塊、粒とローム粒・炭化物微量、ローム小塊極微量、しまりやや弱。
- 12 暗茶褐色 焼土小塊極微量、しまり弱。
- 13 黒褐色 ローム中、小塊微量、ローム大塊、粒と焼土小塊極微量、しまりやや弱。
- 14 黒色 酸化鉄分微量、ローム粒・焼土小塊極微量、しまり弱。
- 15 暗灰色 ローム粒・酸化鉄分・礫(2cm程度)・黄灰色粘土(小)・黄灰色粘土粒微量、ローム小塊極微量、しまり弱。
- 16 黒色 酸化鉄分・礫(5cm程度)微量、ローム粒極微量、しまり弱。

SG10区SE-345 地山

- III-IV ローム層。
- V-1 灰白色 砂礫層、砂粒多、礫(3cm程度)少。
- V-2 灰色 砂層、砂粒多。
- V-3 灰色 砂礫層、砂粒・礫(3cm弱まで)多。
- V-4 灰黄色 砂層と軽石粒が混在、砂粒多、鹿沼軽石細粒少。
- V-5 灰色 砂礫層、砂粒多、礫(3cm弱まで)微量。
- V-6 暗茶褐色 砂礫層、砂粒多、礫(1cm程度)微量。
- V-7 灰色 砂礫層、砂粒(粗V)・礫(5cm程度まで)多。下になるほど大きくなる。
- V-8 灰色 砂礫層、砂粒(粗V)・礫(10cm程度まで)多。
- V-9 褐色 砂礫層、砂粒・礫(10cm超まで)・鉄分多。
- V-10 暗茶褐色 砂と軽石粒が混在、砂粒多、鹿沼軽石細粒少。

第 221 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の井戸 (1) SE-236・316・345 遺構 SE-345 遺物

が残念だが、SD-503 より覆土が軟らかいことを重視すれば、近世または近代の建物かもしれない。

【出土遺物】この建物に伴うと判断できる遺物はない。P1 に土師器破片（甕口縁部と内外面赤彩杯）、P10 に凹底状の土師器杯底部片がある。いずれも周囲の古墳時代集落から混入した古墳中期後葉から末葉の遺物であろう。

第 27 節 時期不明の井戸

SG10 区では、時代を特定することができない時期不明の井戸を 5 本調査した。SG10 区内には中世の井戸が SE-232・237・252・344・377・569 の 6 本ある。他時代の井戸としては古墳時代の SE-552 があり、小形である点が他時代の井戸とは異なる。時期不明の井戸にも中世の井戸を含むことが考えられる。また、SE-316 は古墳時代の可能性もある。SE-316 以外は下部を重機で断ち割って調査し、最下部または上層までの埋土を 1mm メッシュのふるいで水洗した。木の小片・細片や竹（SE-345）が若干出土した程度で、何も検出できなかった井戸も多い。

SG10 区 SE-236（第 221 図左、写真図版 158）

【位置】SG10 区南部の 18.5-17.0 グリッド。9 世紀の SI-90 を切り、古墳中期（SI-105）→古墳後期（SI-23）→平安時代（SI-90）→SE-236 の順に重複する。東側に中世の井戸 SE-237 がある。

【規模と形状】SI-90 に設けた土層観察用ベルトの上面でみると、径 1.48m の円形である。ただし、ベルト部分以外は SI-90 の床面まで掘り下げた結果として、径 1.2m の規模になってしまった部分が多い。確認面から深さ 20cm 付近までは、最上部が漏斗状に開く。深さ 2.83m。底面標高は 77.46m。

【覆土】現地調査時の所見では、10～15cm 大の丸石が 3 層中に多い点が、東側にある中世の SE-237 に似ていることが観察されている。標高 79.4m 付近までを手掘りで調査した後、標高 77.6m 付近まで重機で西半部を断ち割った。断面図は反転して掲載した。下部を調査した 3 月上旬の時点では、最下部の 3 枚の層に鉄分・水分が多い。底面は砂礫層（V-6 層）の中にある。地山の V-6 層に鉄分が見られる。

【出土遺物】この井戸の時期を示す遺物はない。主に古墳時代と考えられる土師器片がいくつか出土しているが、SI-23 や SI-105 などから流入したと考えられる。

SG10 区 SE-316（第 221 図中央、写真図版 158）

【位置】SG10 区南部の 18.5-18.0 グリッド。古墳中期の SI-33 の貼床を切るので、SI-33 より新しい。

【規模と形状】確認面で東西 0.52m、南北 0.47m の円形で、深さ 1.20m。底面標高は 78.66m。断面は径約 40cm の細い筒状で、壁面はほぼ垂直である。小規模で浅い点が SE-552 に似るので、古墳時代の可能性もある。SG5 区の低地にある古墳中期土坑群の中にも似た遺構があり、それよりもさらに細い。

【覆土】暗褐色土の単層。南半部を手掘りで断ち割り、底面まで調査を行った。10 月上旬の地下水位では標高 79.2m 前後で湧水し、12 月上旬には湧水しないで底面まで掘り下げることが出来た。底面は地山暗灰色砂層（V 層）の中にある。

【出土遺物】この井戸の時期を示す遺物はない。土師器 5 片（高杯杯部と脚部、杯、鉢 2 片）が出土した。おそらく SI-33 から混入した古墳時代遺物と見られる。

SG10 区 SE-345（第 221 図右、写真図版 158・159）

【位置】SG10 区中央部の 19.5-18.5 グリッド。東方と北西に、中世の井戸 SE-252 と SE-344 がある。中世の SE-252・344、時期不明の SE-455、近世の区画溝 SD-204 が付近にあることを参考にすれば、中世または近世の可能性もある。古墳後期の SI-51a と古墳中期の SI-104 を切り、SI-104 → SI-51a → SE-345 の順序になる。

第5章 権現山遺跡 SG10 区

[規模と形状] 確認面で東西 1.14m、南北 1.66m の円形で、深さ 2.97m。底面標高は 77.28m。径 80～90cm 前後まで一度細くなり、それより下部は壁面礫層の崩落によりやや広がっている。標高 78.7m 付近までを手掘りで調査した後、標高 77.34m 付近まで重機で北半部を断ち割った。断面図は反転して掲載した。

[覆土] 焼土を少し含む覆土層が目立つ。下部を調査した 3 月上旬の時点では、最下部の 3 枚の層に酸化鉄分と水分が多く、下から 2 層目のレベルにある標高 77.6m 前後で湧水した。底面は地山の褐色礫層 (V-9 層) の中にある。

[出土遺物] 確認面から 130cm くらいまでの深さに土器片が多い。植物性遺物では竹が 3 片と葦類の茎が 1 片あるが、人為的な加工などは見られない。竹のうち最大の 1 点を図示した (7)。中世の可能性もあるが、確定できる遺物はない。古墳中期を主として古墳後期までの土師器・須恵器が多く、上下に重なって出土したので、SI-51 や SI-104 から流入したことが考えられる。特に破片が大きな 3・4 などは、SI-104 からの流入品であろう。土師器は壺甕類破片が主体で、杯・甌も含み、高杯はほとんどない。須恵器は甕片がある。

第 133 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-345 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 16.0 高 残 4.3 最大 復 17.4	外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面は体部に斜位と口縁部に横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理をしているかもしれないが不明確。古墳後期の遺物が混入。	2.5Y3/1 黒褐 緻密 白・透明細粒やや多 軟質	8 層 (底上 170cm) と 9 層 (底上 156～164cm) が同一個体 口 1/6 周、体 1/3 周 8、25、26、16 層
2 土師器 杯	口 復 11.6 高 残 2.4 最大 復 12.0	外面体部ナデ後に下位ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面口～体部ヨコナデ。	5YR7/6 橙 緻密 白細粒やや少、黒・透 明細粒少 硬質	10 層 口 1/4 周 10 層、一括
3 土師器 壺	口 復 20.0 高 29.4 底 復 6.8 最大 復 30.0	外底面は 1 方向ヘラケズリ。外面は下半部ナメヘラケズリと上半部縦～斜位ヘラナデの後にナメヘラミガキ。内面はヨコヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。SI-104 から混入した可能性が高い。 [注記]1、3～6、20、24、一括	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒 多、灰色粗粒と黒細粒少 やや硬質	4 層 (底上 224cm) と 5 層 (底上 198cm) と 8 層 (底上 171～177cm) が接合 口 3/4 周、頸全周、底 5/12 周 注記は左欄
4 土師器 壺	口 復 18.6 高 残 14.9 最大 復 26.8	外面は肩部タテヘラナデ後に胴部ヨコヘラナデ。内面は肩～胴部ヨコヘラナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ。SI-104 から混入した可能性が高い。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 灰色・透明粗～細 粒と白・黒細粒少 やや軟質	1 層 (底上 279～282cm) の 4 片が接合 口 1/6 周、頸 1/4 周 10、12、13
5 須恵器 甕	高 残 6.7	外面は木目直交の溝を彫った叩き板で擬格子状の叩き。内面は同心円文当具痕。古墳中～後期の遺物が混入。	N4/0 灰 やや粗い 白礫～細粒やや多 硬質	16 層 胴部 1 片 16 層
6 須恵器 甕	高 残 2.5	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面はおそらくナデにより無文。古墳中期の遺物が混入。	5Y5/1 灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	胴部 2 片 一括
7 竹	長 残 27.1 径 2.2	自然遺物。図の反対面は縦位に割れて約 1/3 周が欠損する。人為的な加工・切断・被熱痕は見られない。図および計測値は乾燥した現状のもの。同種の竹破片が 14 層と 16 層からも 1 点ずつ出土している。	2.5Y6/2 灰黄	底上 24cm 両端欠、2/3 周残 29

SG10 区 SE-352 (第 222 図上、写真図版 159)

[位置] SG10 区南部の 18.5-17.5 グリッド。古墳後期の SI-10 を切る。

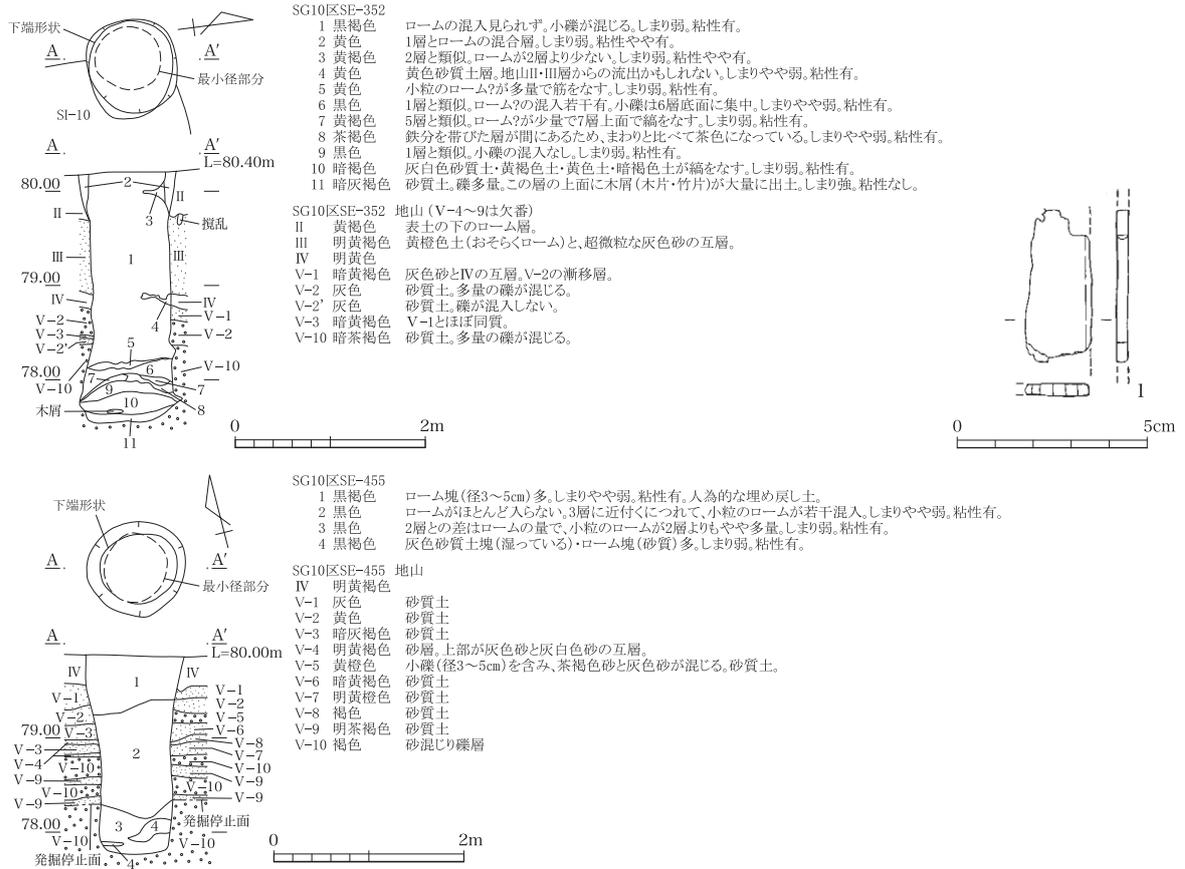
[規模と形状] 確認面で東西 0.98m、南北 0.92m の円形で、深さ 2.66m。円筒状で、最下部は地山砂礫層の壁面が崩れているために少し外へ広がる。底面標高は 77.54m。

[覆土] 上部の埋土は黒褐色土の単層で、一気に埋まったようである。標高 79.1m 付近までを手掘りで調査した後、重機で東半部を標高 77.8m 付近まで断ち割った。最下層の上面に木片・竹片が多い。

[出土遺物] 植物性遺物として、板状木製品破片がある (図の右端)。他に小さな木片・竹片と炭化材片がごく少量ある。古墳時代の土師器・須恵器も少し混入している。須恵器甕片は SI-10 出土破片と同一個体で、SI-10 から流入したものであろう。

第 134 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-352 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 木製品 板状品	長 残 4.0 幅 残 1.7 厚 0.3	薄い板状の製品が折れた小破片。厚さが均一で、残存する側縁が直線的なので人為的に加工していると見られる。被熱痕・付着物・墨書等は認められない。同一個体の可能性がある小片が他に 5 点あり。	7.5YR5/4 にぶい褐	1 側縁残、両端欠 9 層フルイ検出 000308



第 222 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の井戸 (2) SE-352 遺構・遺物 SE-455 遺構

SG10 区 SE-455 (第 222 図下、写真図版 159)

【位置】 SG10 区中央部東端の 20.5-20.0 グリッド。重複する遺構はない。中世の SE-252・344、時期不明の SE-345、近世の区画溝 SD-204 が分布することを参考にすれば、中世または近世の可能性もある。

【規模と形状】 確認面で東西 1.05m、南北 1.03m、深さ 2.12m の円形。壁面の砂・礫層が崩れないで円筒状を保っている。底面は径 70cm の正円形で、底面標高は 77.76m。

【覆土】 最上層はローム塊が多い人為的な埋め戻し土である。遺構確認面から約 1.5m 付近まで手掘りで調査した後、重機で北半部を断ち割った。断面図は反転して掲載した。下部を調査した 3 月上旬の時点では、4 層付近よりも下位に水分を含んでいた。

【出土遺物】 この遺構の時期を示す遺物はない。最上層に縄文時代の分銅形打製石斧 1 点や古墳時代の土師器小片 21 点が混入していた。打製石斧は砥石などとして後世に転用した擦痕が顕著だが(『東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』の pp.104-105)、古墳時代の土師器と一緒に最上層から出土した混入品で、SE-455 との関係は薄いと思われる。覆土下部をふるいで水洗した結果、植物質遺物は木の根のような小片が 1 点だけ認められた。

第 28 節 時期不明の溝状遺構

時期不明の溝状遺構は 22 条を調査した。平面図を第 223 図、断面図は第 224 図にまとめて示す。

SG10 区 SD-205 (第 223 図左下・第 224 図、写真図版 151)

[位置] SG10 区南部の 18-17 グリッド。古墳中期の SI-88 を切り、時期不明の SK-5 に切られる。西端は攪乱で破壊されているが、近世の溝 SD-201 に連結するか、または SD-201 の東側で終わっていた可能性がある。そうであれば、SD-201 と関連する近世の溝と考えることもできる。東端は時期不明の SK-5 に切られる付近で低地部に入り、その東側では確認できなくなる。古墳時代後期の SK-222 との前後関係は、間に攪乱が入るので不明である。

[規模と形状] 幅 42～60cm、残存する深さは 9～16cm。底面標高はほぼ一定で、80.0～80.1m。

[覆土] 単層で、火山灰の混入が記録され、白色テフラ粒を含んでいたと考えられる。Hr-FA テフラであれば古墳時代溝の可能性もあるが、12 世紀の浅間 B テフラや、縄文草創期の七本桜軽石粒（地山から流入）も考えられる。

[出土遺物] 図示した遺物はない。重複する SI-88 など古墳時代の集落から混入したとみられる土師器が合計 28 片・198g ある（杯 13 片・53g、壺甕類 15 片・145g）。

SG10 区 SD-224 (第 223 図左上・第 224・225 図、写真図版 151)

[位置] SG10 区中央部の 21-17・18 グリッドにまたがる。北東は近世溝 SD-503 の南側に接する位置で長方形攪乱坑に切られる。SD-503 に切られていたか、または合流していたことが想定できる。南西は、SI-50 の西部で土取り工事によって消滅している。古墳中期の SI-50 と SI-60 を切ることが遺構確認面で明確に認められた。攪乱溝（SD-501）に北部を切られる。

[規模と形状] SI-50 調査前に SD-224 を掘り下げた所見では、攪乱溝の可能性が高いと判断されている。幅 36～54cm、残存する深さは 5～14cm。底面は北東部と南西部で高く（標高 80.25m 前後）、攪乱溝 SD-501 に切られる付近で低い（80.15m）。SD-501 の北東側では、地山に含まれる礫層が溝の底面と法面に露出していた。

[覆土] 自然埋没状の堆積で、テフラの層や粒はみられない。

[出土遺物] SI-60 を切っている付近の覆土 1 層中に、溝底面から 7～11cm ほど浮いた状態でまとまって礫が入っている。また、下層（2 層）に入る礫もある。焼けて割れた礫も含まれていた。図示した遺物は砥石 1 点だけである（第 225 図左）。他に、SI-50 や SI-60 から混入した古墳中期土師器片や、古墳時代集落から混入したと思われる古墳後期の遺物がある。図示以外の土師器合計 20 片・179g の内訳は、杯 9 片・38g、鉢 1 片・8g、壺甕類 10 片・133g。

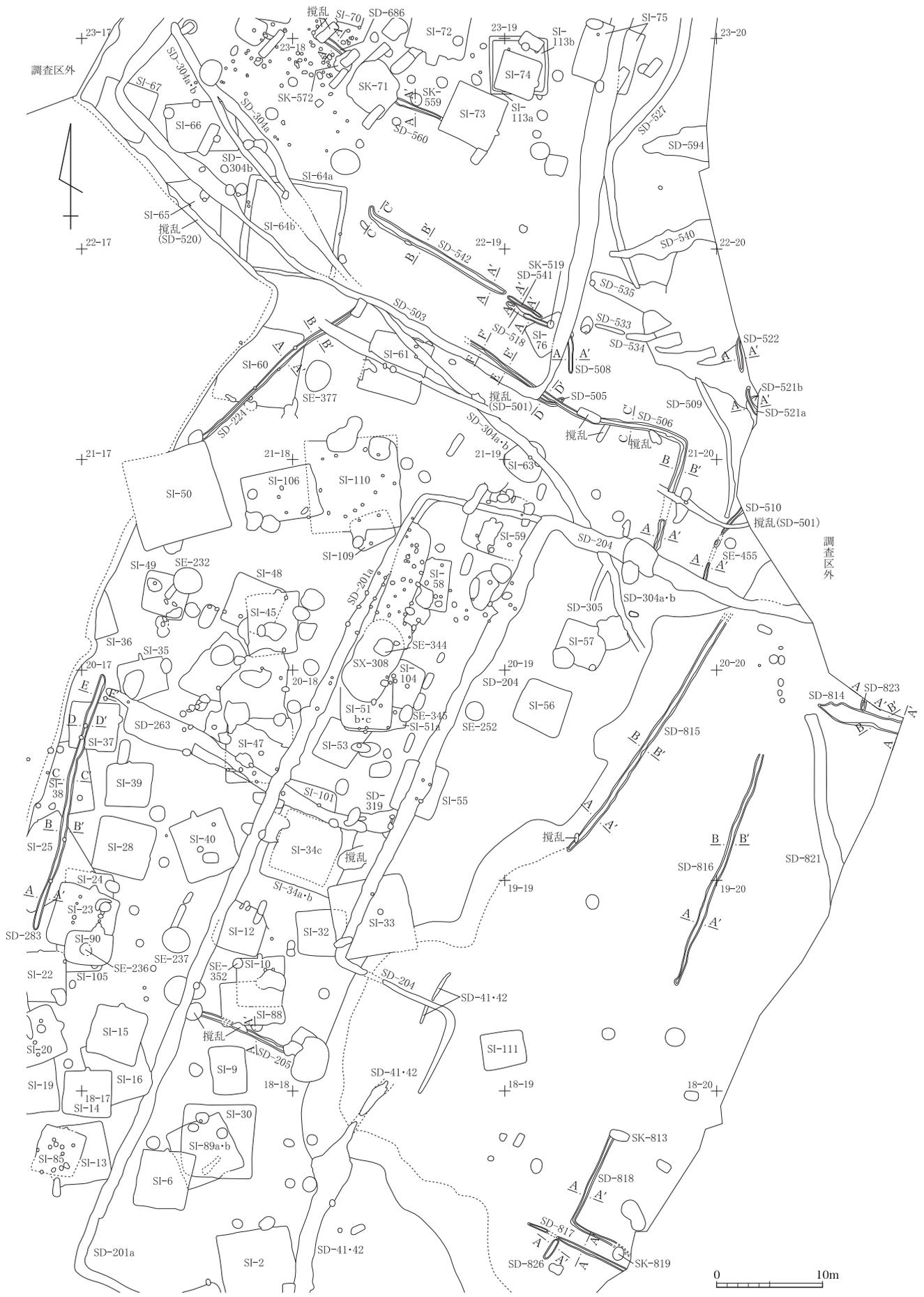
第 135 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-224 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 石器 砥石	長 残 8.2 幅 4.4 厚 2.2 重 残 98.2	表裏と両側面の 4 面を砥面に利用し、かなり平滑に磨耗する。1 面だけは深い溝状の研磨痕が 2 条、主軸に対して斜めに付けられている。この面がやや灰色 (5Y5/1) になるので、煤が薄く付着したものかもしれない。中央部の折損面には煤が見られない。	2.5Y8/3 淡黄 緻密で軟質な流紋岩質凝灰岩	21.5-18.0 杭の南西 1.2m 底直上 (SI-60 より 上層) 約 1/2 欠 7

SG10 区 SD-283 (第 223 図左端中央・第 224 図、写真図版 151・152)

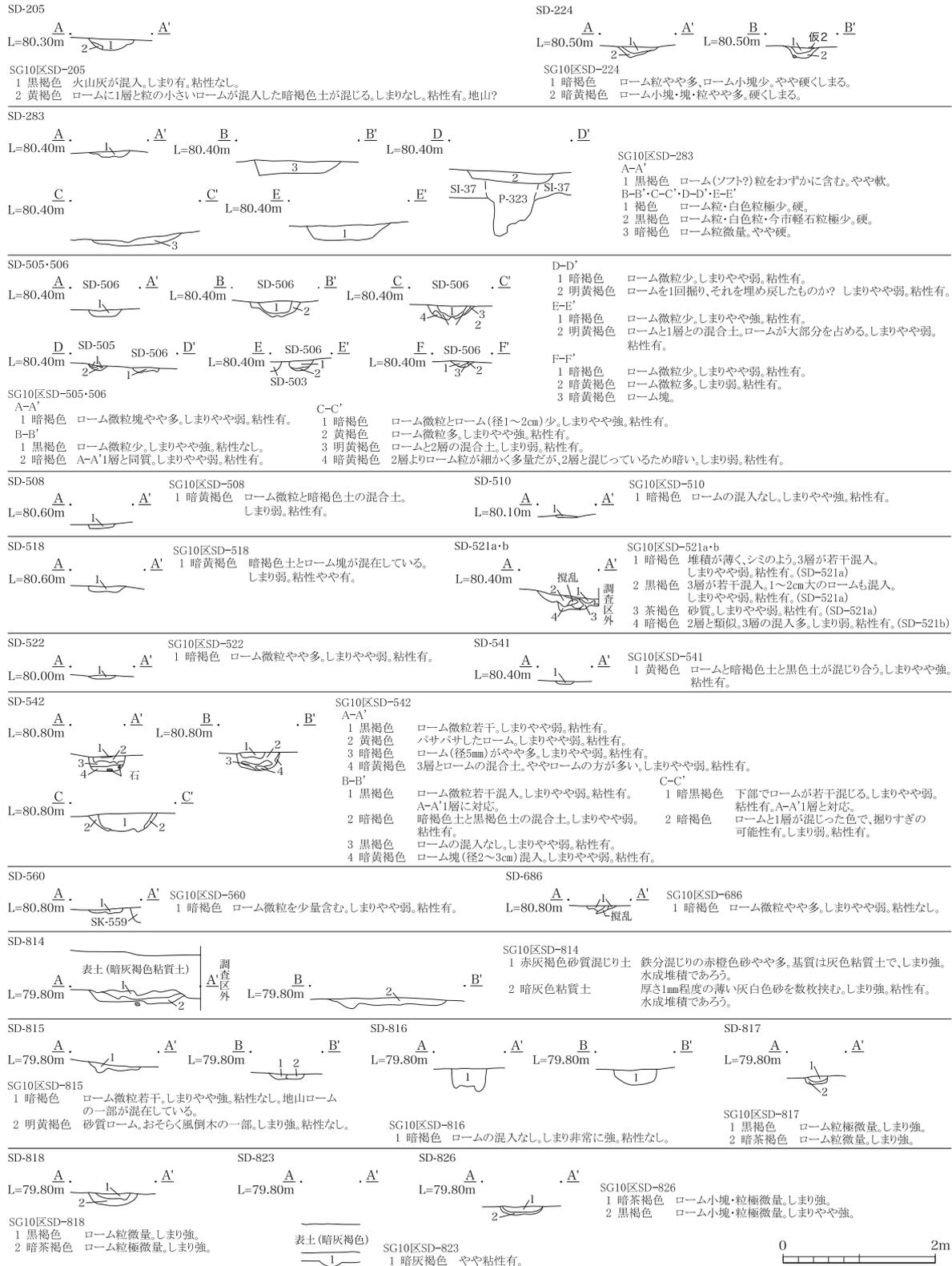
[位置] SG10 区南部の 18-16 および 19-16・17 グリッドにまたがる。古墳時代の SI-25・37・38 と時期不明の P-323 を切り、SI-37 → P-323 → SD-283 の順序である。

[規模と形状] 南北長約 25m、幅 44～74cm、残存する深さは 3～15cm で、深さ 10cm 前後の部分が多い。底面標高は北端でやや高く（80.26m）、それ以外は 80.11～80.25m で特定方向への傾斜はみられず、



第 223 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構 (1) 平面図

第5章 権現山遺跡 SG10区



第224図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の溝状遺構(2) 断面図

南端で80.11m。

【覆土】単層で、テフラの可能性のある白色粒も見られる。

【出土遺物】図示した遺物はない。土師器や礫が出土したが、重複する各遺構から流入した遺物ばかりで、

この溝に伴うものはないと考えられる。土師器合計 149 片・1,110g の内訳は、杯 95 片・415g、高杯 9 片・121g、小形壺 5 片・33g、壺甕類 42 片・541g。

SG10 区 SD-505 (第 223 図中央上部・第 224 図、写真図版 152)

〔位置〕 SG10 区北部の 21-19 グリッド。西側は近世溝 SD-503 に切られるので近世以前の溝であることがわかる。時期不明の SD-506 の上部を切る。

〔規模と形状〕 幅 26～39cm、残存する深さは 4～10cm で、底面標高は 80.22m でほぼ一定している。

〔覆土〕 調査時の所見によると、ローム質の土で埋め戻した可能性が指摘されている。テフラの層や粒はない。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-506 (第 223 図中央上部・第 224・225 図、写真図版 152・153)

〔位置〕 SG10 区北部の 21-18・19 および 20-19 グリッドにあり、北西端で確認面より浅くなって終わる。南端は近世の SD-204 と重複する可能性があるが、重複位置付近が攪乱されているので、SD-204 との前後関係は不明である。近世の SD-503 に切られることから、近世以前の溝であることがわかる。時期不明の SD-505 に上部を切られ、攪乱溝 (SD-501) に切られる。

〔規模と形状〕 幅 34～76cm、残存する深さは北西部で 7～15cm、中央部から L 字形に曲がる位置付近で 5～17cm、南端部で 7～16cm。底面標高は北西部で 80.13～80.22m、中央部で 80.03～80.23m、南端部で 80.10～80.11m。

〔覆土〕 自然埋没状で、テフラの層や粒はみられない。

〔出土遺物〕 遺物はごくわずかで、ほとんどは周囲の古墳時代集落から混入したものとみられる。土師器は古墳中期が主体で、模倣杯や長胴甕は見られない。古墳中期の石製模造品を図示した (第 225 図中央上)。剣形品は、SG10 区 SI-2 などに例がある。図示以外の土師器合計 41 片・247g の内訳は、杯 14 片・55g、小形壺 1 片・39g、壺甕類 26 片・153g。

第 136 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-506 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 石製模造品 剣形品	長 残 2.59 幅 残 1.56 厚 0.34 重 残 1.88	両面ともに平坦で、おおよそ 1 方向に研磨して細かい擦痕を残す。形割時の剥離面も両面に少しずつ残る。側面は図示したように縦方向に 2 面ほどに分割してそれぞれを横方向に研磨する。古墳時代中期の遺物が混入。	N3/O 暗灰 緻密で軟質な滑石	底上 18cm 約 1/2 残 2

SG10 区 SD-508 (第 223 図中央上部・第 224 図、写真図版 153)

〔位置〕 SG10 区北部の 21-19 グリッドにあり、北側は近世の SD-503 に切られることから、近世以前の溝であることがわかる。古墳中期の SI-76 を切る。西側の SD-541・542 に続く可能性もある。

〔規模と形状〕 幅 34～50cm、残存する深さは 2～9cm。底面標高は南端で 80.28m・北端で 80.26m で大きな差はないが、僅かに北側が低い。

〔覆土〕 覆土は単層で、テフラの層や粒はみられない。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-510 (第 223 図中央右・第 224・225 図、写真図版 153)

〔位置〕 SG10 区北部の 20-19・20 グリッドにあり、北側は調査区の外まで伸びる。南側は近世の SD-204 と重複するが、両者の新旧関係は不明である。攪乱溝 SD-501 に切られる。中央部では、確認面よりも浅くなって確認できない部分がある。古墳時代 (中期?) の SD-509 と近接する状況からみて、古墳時代溝の可能性もある。

〔規模と形状〕 北部では幅 26～45cm、南部では幅 28～33cm。残存する深さは北部 3～12cm・南部

第5章 権現山遺跡 SG10 区

5cm。底面標高は北部で 79.9～80.0m、南部では 79.9m。

【覆土】 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。

【出土遺物】 古墳時代中期の土師器高杯の脚柱部 1 点だけが出土した（第 225 図右上）。この遺構の時期を示す遺物かどうかは不明である。これ以外の遺物はない。

第 137 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-510 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	高 残 5.4 最大 5.0	中空の柱状脚。脚柱外面はやや狭の狭いタテヘラケズリで、少し光沢を持っている。倒立状態で見ると、左回り（反時計回り）方向に粘土紐を巻き上げている。内面は凹凸が目立ち、絞っているため縦位の皺が多い。脚柱部は外面タテヘラケズリ、内面ナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・黒・赤礫～細 粒多 やや硬質	底直上 脚柱部全周 1

SG10 区 SD-518（第 223 図中央上部・第 224 図、写真図版 153）

【位置】 SG10 区北部の 21-19 グリッドにあり、北側にある時期不明の SD-541 と並列する。古墳中期の SI-76 の覆土上部を切る。時期不明の SK-519 に東端付近を切られる。また、その東側がさらに SD-503 にも切られていたかもしれない。

【規模と形状】 残存長 4.6m、幅 32～59cm、残存する深さは 4～16cm で、底面が南東へ傾斜し、底面標高は北西端で 80.38～80.41m、南東端で 80.22m。

【覆土】 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。しまりが弱いので、それほど古い時期の遺構ではないとも考えられる。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-521a・521b（第 223 図右上・第 224・225 図、写真図版 154）

【位置】 SG10 区北部の 21-20 グリッドの低地部にある。東は調査区外まで伸びる。SD-521b → SD-521a の順序で切られる。上面は土取りで攪乱されている。周辺で古墳中期末ころの溝状遺構が多いので、これも古墳時代溝の可能性はある。SD-521a は北側の SD-522 に続く溝の可能性もある。

【規模と形状】 SD-521a は幅 28～54cm、残存する深さは 28cm で、底面に明確な傾斜を持たず、底面標高は 79.86～79.90m。SD-521b は幅 130cm 以上で東側が調査区外になり、残存する深さは 30cm で、底面標高は 79.93～79.95m。

【覆土】 自然埋没状で、SD-521a の下層は砂質。テフラの層や粒は見られない。

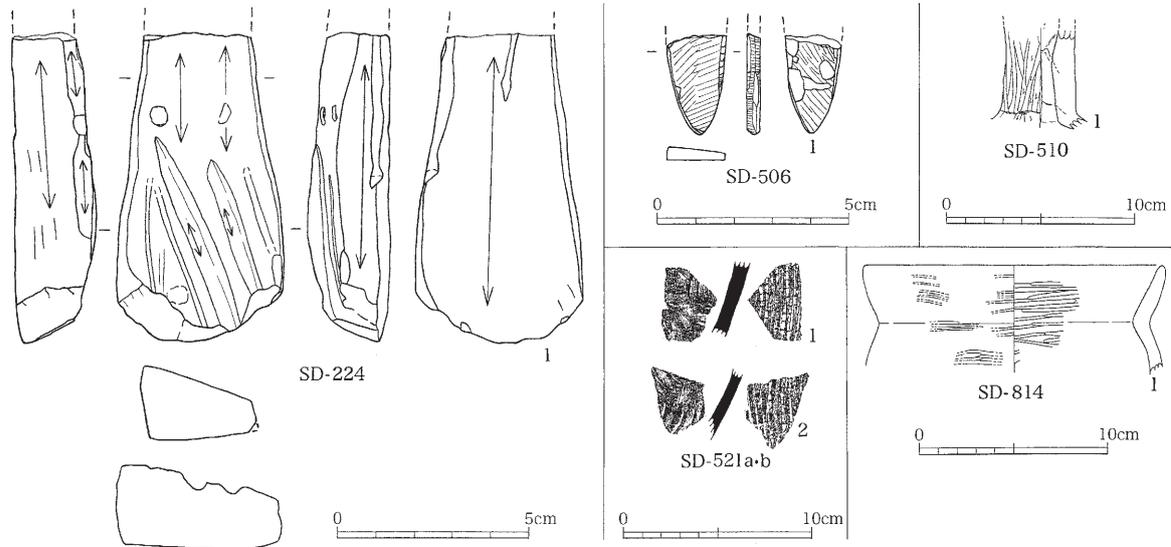
【出土遺物】 遺物は「SD-521」として取り上げたため、SD-521a・521b の判別ができない。ここでは SD-521b の可能性がある遺物も SD-521a として掲載し、掲載以外の遺物も SD-521a とする。土師器壺甕類 5 片・22g、須恵器甕 2 片、縄文土器 2 片のみである。須恵器甕（第 225 図中央下 1・2）のように古墳時代後期の遺物があるが、この溝の時期を示すかどうかは不明である。

第 138 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-521a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1・2 須恵器 甕		2 片が同一個体。外面は木目直交の溝を彫った叩き板で縦長の擬格子叩き。内面は少し浅めの同心円文当具痕。	10Y5/1 灰 やや緻密 白細粒多、白粗粒 少 やや硬質	胴部 2 片 南一括

SG10 区 SD-522（第 223 図右上・第 224 図、写真図版 154）

【位置】 SG10 区北部の 21-20 グリッドの低地部にある。北東部は調査区外まで伸びる。SD-521a と SD-522 が続く溝の可能性もある。古墳時代の SD-535 東側に続く低地部に SD-522 北端部が重複するが、SD-522 と SD-535 の新旧関係は不明。上面は土取りで攪乱されている。古墳中期末ころの溝状遺構が周辺に多いので、これも古墳時代溝の可能性はある。



第 225 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構 (3) 遺物

[規模と形状] 幅 40～44cm、残存する深さは 3～10cm で、底面が北へ傾斜し、底面標高は南端で 79.85m、北端で 79.77m。

[覆土] 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。

[出土遺物] 図示した遺物はない。土師器合計 8 片・41g (杯 4 片・20g、壺甕類 4 片・21g) と、縄文時代の剥片 1 点だけが出土した。土師器はすべて小破片で、内斜口縁の杯片を含み古墳中期の遺物に見えるが、この溝に伴う確証はない。

SG10 区 SD-541 (第 223 図中央上部・第 224 図、写真図版 154)

[位置] SG10 区北部の 21-19 グリッドにあり、南側にある時期不明の SD-518 と並列する。西側の SD-542 や東側の SD-508 に続く可能性がある。重複する遺構はない。東端が古墳時代の SI-76 北壁まで 10cm の位置にある。

[規模と形状] 幅 25～29cm、残存する深さは 2～5cm で、底面に明確な傾斜はなく、底面標高は 80.34～80.37m。

[覆土] 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-542 (第 223 図中央上部・第 224 図、写真図版 154・155)

[位置] SG10 区北部の 21-19 グリッド。東側の SD-541 や SD-508 に続く可能性がある。重複する遺構はない。

[規模と形状] 長さ 15.2m、幅 58～99cm、残存する深さは 16～23cm で、底面が北西から南東へ傾斜し、底面標高は北西端で 80.49m、南東端で 80.18m。

[覆土] 覆土はやや不規則な堆積状態で、テフラの層や粒は見られない。

[出土遺物] 図示した遺物はない。SI-64a・64b などの周辺遺構から混入したと思われる古墳中期主体の土師器が 6 片・141g 出土し、内訳は杯 2 片・32g、高杯 2 片・73g、壺甕類 2 片・36g。

SG10 区 SD-560 (第 223 図中央上部・第 224 図、写真図版 155)

[位置] SG10 区北部の 22-18 グリッド。近世の SK-71 に西端を切られるので、それ以前の溝である。東端が古墳時代の SI-73 と重複するが新旧関係は不明。SI-73 と SD-560 の新旧について調査時点の遺構台帳の記載が矛盾し、SI-73 の土層断面図に SD-560 が登場しないので、新旧を確定できない。SK-572・71 を

第5章 権現山遺跡 SG10 区

はさんで北西にある SD-686 と同一遺構かもしれない。SK-559 と近接するが、重複はしていない。

[規模と形状] 東西方向の浅い溝で幅 19～58cm、残存する深さは西半部が 8～13cm・東半部が 1～9cm で、東半部の方が浅い。底面は東端と西端で高く中央が低く、底面標高は西端で 80.65m、中央で 80.57m、東端で 80.59m。

[覆土] 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-686 (第 223 図左上・第 224 図、写真図版 155)

[位置] SG10 区北部の 22-18 グリッドにあり、東側は SK-572 と重複するが新旧関係は不明。SK-572・71 をはさんで南東にある SD-560 と同一遺構かもしれない。西端は長方形攪乱土坑に切られ、それより西側では確認されていない。

[規模と形状] 幅 46～58cm、残存する深さは 3～6cm で、底面標高はほぼ一定で 80.66～80.69m。

[覆土] 単層で、テフラの層や粒はみられない。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-814 (第 223 図右端中央・第 224・225 図、写真図版 155・156)

[位置] SG10 区南部東端の 19-20 グリッドの低地部にあり、東は調査区外まで伸びる。時期不明の SD-823 と重複するが前後関係は不明。

[規模と形状] 浅くてやや幅広い溝で、西端は浅くなって消滅する。調査区内の長さは約 7m 以上。幅 110～174cm、残存する深さは 12～15cm で、底面が僅かに西へ傾斜し、底面標高は東端で 79.58m、西部で 79.50m。地山の土質が軟らかくて溝底面を把握するのが難しく、発掘調査時には溝底面を下の地山まで掘りすぎてしまっているため、上記の深さや底面標高値は断面図から計測した。

[覆土] 単層で、テフラの層や粒はみられない。白色砂を挟む状況から水成堆積と思われる。この溝が掘り込んでいる地山も、水成堆積と考えられる砂混じり灰褐色土である。

[出土遺物] 古墳中期を主体とする土師器破片がごく少量出土しているが、古墳時代集落からの混入品と考えられる。図示した古墳時代中期末の甑 1 点(第 225 図右下)以外の土師器は、合計 5 片・57g (小形壺 2 片・13g、壺甕類 3 片・44g) だけしかない。

第 139 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-814 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甑	□ 復約 16 高 残 5.0 最大 復 15.8	小片なので復原径は参考程度。内外面を密なヨコヘラミガキ。口～頸部の外面が丸味を持つ。	5YR6/8 橙 赤粗～細粒と白・黒・透明細 粒少 やや硬質	底直上 □ 1/12 周 1

SG10 区 SD-815 (第 223 図中央右側・第 224 図、写真図版 156)

[位置] SG10 区南部東半の低地部、19-19 および 20-19・20 グリッドにある。重複する遺構はない。溝の位置からすると、古墳時代中期～後期の SD-41・42 と同一遺構の可能性もある。

[規模と形状] ごく浅い溝で、南北両端は浅くなって確認できなくなる。幅 42～69cm、残存する深さは 4～16cm で、底面は中央が低くて(底面 79.43m) 南北両端が浅い(南端標高 79.60m、北端標高 79.62m)。

[覆土] 単層でしまりが強く、テフラの層や粒はみられない。

[出土遺物] 図示した遺物はない。遺物は古墳中期を主体とする土師器片 31 片・209g (内訳は、杯 5 片・

34g、高杯 5 片・46g、小形壺 1 片・12g、壺甕類 20 片・117g) と、ほかに縄文土器も 1 片ある(『東谷・中島地区遺跡群 10』の第 38 図 159)。遺物はすべて小破片で、混入品と思われる。SD-41・42 と連続する場合は、古墳中期～後期の遺構と考えることもできる。

SG10 区 SD-816 (第 223 図右下・第 224 図、写真図版 156・157)

[位置] SG10 区南部の東側低地、18-19 と 19-20 グリッド。重複する遺構はない。南方にある SD-818 と連続する可能性もある。

[規模と形状] 南端は急に立ち上がり、北端は浅くなって消滅する。幅 28～63cm、残存する深さは 14～30cm で、北部ほど浅くなる傾向がある。底面標高も南部ほど低く、南端で標高 79.28m、北端で 79.61m。

[覆土] 覆土は単層で、しまりが強く、テフラの層や粒は見られない。この溝が掘られている地山は水成堆積と見られる灰白色砂質土である。

[出土遺物] 図示した遺物はない。古墳中期ころと思われる土師器小破片 9 片・62g (内訳は杯 2 片・6g、壺甕類 7 片・56g) だけで、この溝の時期を示す遺物とはいえない。

SG10 区 SD-817 (第 223 図右下・第 224 図、写真図版 157)

[位置] SG10 区南部の東側低地の 17-19 グリッドにあり、東は調査区外まで伸びる。重複する遺構はない。SD-817・818 は 1.33～1.45m の間隔で平行しているので同時存在(例えば道の側溝)の可能性を持つ。SD-826 も SD-817・818 と覆土や溝形状が似ているので、相互に関連する区画溝などの性格が想定できる。

[規模と形状] 幅 18～43cm で、30～50cm 幅ば部分が多い。残存する深さは 7～10cm で、SD-826 の北端に接する付近で底面が一度浅くなって途切れた後に、その西側で深さ 2～4cm の浅い溝として再び確認できる。底面に明確な傾斜はなく、底面標高は西端で 79.41m、東端で 79.39m。

[覆土] 自然埋没状で、テフラの層や粒は見られない。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-818 (第 223 図右下・第 224 図、写真図版 157)

[位置] SG10 区南部の東側低地の 17-19 グリッドにあり、東は調査区外まで伸びていたことが想定されるが、浅くなるので確認できない。北方にある SD-816 と連続する可能性もある。北端で時期不明の SK-813 に切られる。SK-819 と重複する位置であるが新旧関係は不明。SD-817・818 は 1.33～1.45m の間隔で平行しているので同時存在(例えば道の側溝)の可能性を持つ。SD-826 も SD-817・818 と覆土や溝形状が似ているので、相互に関連する区画溝などの性格が想定できる。

[規模と形状] 平面形が L 字状で、南辺は幅 25～52cm、西辺は幅 30～52cm。残存する深さは南辺が 6～11cm、西辺が 10～19cm。底面標高は南辺が 79.47m 前後で、西辺は北へ傾斜し底面標高は南端で 79.46m、北端で 79.35m。

[覆土] 自然埋没状で、テフラの層や粒は見られない。

[出土遺物] 図示した遺物はなく、古墳中期ころの土師器小破片が合計 3 片・34g (杯 2 片・29g、高杯 1 片・5g) だけでこの溝に伴うものではないと思われる。

SG10 区 SD-823 (第 223 図右端中央・第 224 図、写真図版 157)

[位置] SG10 区南部東端の 19-20 グリッドにあり、北は調査区外まで伸びる。時期不明の SD-814 と重複するが前後関係は不明。低地土層の状況から、古墳時代よりは後の遺構かと推定される。

[規模と形状] 浅く狭い溝で、幅 36～41cm、残存する深さは 8cm で、底面標高は 79.64m。北部は溝底

第5章 権現山遺跡 SG10 区

面が高くなり、調査区北壁面では遺構確認面よりも高いところに溝底面がある。地山の土質が軟らかくて溝底面を把握するのが難しく、発掘調査時には溝底面を下の地山まで掘りすぎてしまっているため、上記の深さや底面標高値は断面図から計測した。

[覆土] 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。覆土の土質が表土と似ているので、あまり古い時期の溝ではない。覆土の1層も、この溝の両側に広がっていて、古墳時代の溝状遺構を確認した面を覆っている。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-826 (第 223 図右下・第 224 図、写真図版 157)

[位置] SG10 区南部の東側低地、17-19 グリッドにある。重複する遺構はない。SD-817・818・826 は覆土や溝形状が似ているので、これらと関連する区画溝などの性格が想定できる。

[規模と形状] 長さ 217cm の土坑状の溝。幅 52～58cm、残存する深さは 2～9cm で、底面に大きな傾斜や凹凸は見られない。底面標高は 79.36～79.38m。

[覆土] 自然埋没状で、テフラの層や粒は見られない。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

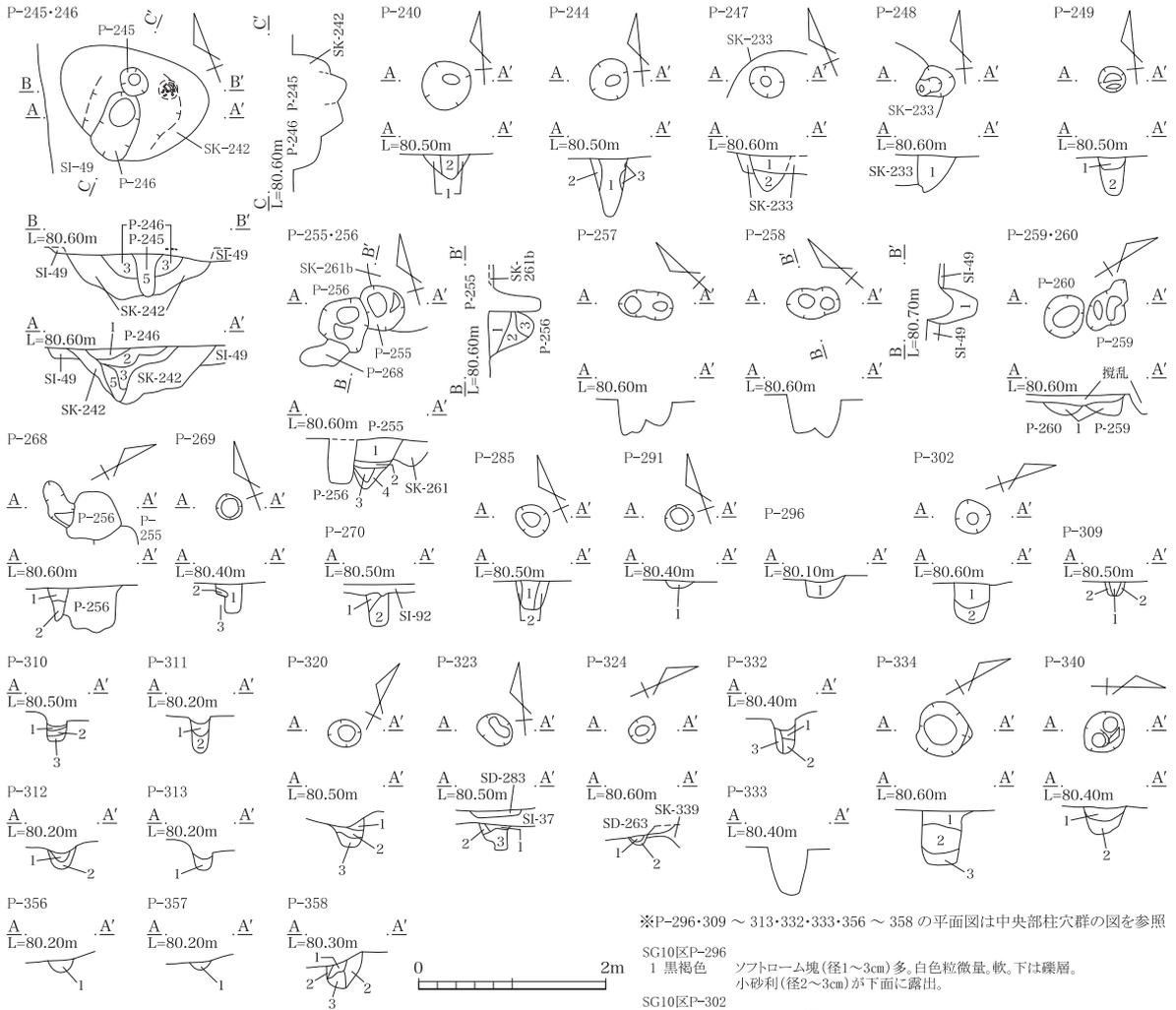
第 29 節 時期不明の柱穴状土坑 (第 226～228 図)

SG10 区における時期不明の柱穴状土坑として 132 基をここで報告する。このうち中央部柱穴群とした一群には、中世であることが確実な P-425 を含む (第 204・208 図)。しかし、古墳時代の柱穴状土坑 (P-464・465・466) もこの区域に分布している。したがって、P-425・464・465・466 の 4 基を除く残りの中央部柱穴群は時期を確定できないので、時期不明の柱穴状土坑としてここで扱った。同様に SG10 区で柱穴状土坑がまとまる北部柱穴群 (第 203 図) の場合には、その大半が中世と推定された。中央部柱穴群の場合にも、中世柱穴の割合が高いことを想定できる。各遺構の詳細は下記の表にまとめた。

第 140 表 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の柱穴状土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	覆土
P-240	18.5-17.0	円形	重複なし	0.53	0.51	0.28	柱痕あり
遺物は土師器鉢 (?) の体部 1 片のみで、遺構の時期を示すものではない。							
P-244	18.0-17.0	円形	重複なし	0.45	0.41	0.65	
遺物なし。							
P-245	20.0-17.0	円形	SI-49 → SK-242 → P-246 → P-245	0.33	0.30	0.56	単層 (?)
古墳時代の SI-49 と時期不明の SK-242・P-246 を切る。遺物なし。							
P-246	20.0-17.0	円形	SI-49 → SK-242 → P-246 → P-245	1.10 以上	1.00 以上	0.56	自然埋没状 焼土・炭あり
古墳時代の SI-49 と時期不明の SK-242 を切る。時期不明の P-245 に切られる。SK-242 の覆土を切って掘り込んでいるので、上部の形状が不明確。SK-242 の遺物は P-246 に関わるとも見られるが、SI-49 から混入した可能性が高い。P-246 に確実に伴う遺物はない。							
P-247	20.0-17.5	円形	SK-233 より新	0.38	0.32	0.44	
古墳時代の SK-233 を切る。遺物なし。							
P-248	20.0-17.5	円形	SK-233 より新	0.42	0.33	0.42	単層
↓							
P-249	18.0-17.0	円形	重複なし	0.29	0.27	0.43	
遺物なし。							
P-255	19.5-17.5	円形?	SK-261b より新、P-256 と重複	0.52	0.41	0.57	
古墳時代の SK-261b を切る。P-256 と重複し、同時存在かもしれない。時期不明の P-255・256・268・334 はまとまっていて、中～近世の SD-263 に付随する道路状遺構の可能性もある。土師器 4 片があるが、SK-261b からの混入と見られる。							
P-256	19.5-17.5	円形?	P-268 より古、P-255 と重複	0.59	0.54	0.50	
P-268 に切られる。P-255 と重複し、同時存在かもしれない。時期不明の P-255・256・268・334 はまとまっていて、中～近世の SD-263 に付随する道路状遺構の可能性もある。遺物なし。							
P-257	20.0-17.0	円形	SI-49 より新?	0.58	0.26	0.38	
2 連ビット。土層断面図はない。古墳中期の SI-49 と重複し新田不明だが、時期不明の P-258 のように、おそらく SI-49 を切ると思われる。遺物なし。							
P-258	20.0-17.0	円形	SI-49 より新	0.58	0.32	0.47	
2 連ビット。古墳中期の SI-49 を切る。時期不明の P-257 に類似。遺物なし。							
P-259	20.0-17.0	円形	重複なし	0.64	0.40	0.22	単層
古墳中期の SI-49 に近接。遺物なし。							
P-260	20.0-17.0	円形	重複なし	0.50	0.44	0.23	単層
遺物なし。							
P-268	19.5-17.5		P-256 より新	0.54	0.30	0.40	
P-256 を切る。時期不明の P-255・256・268・334 はまとまっていて、中～近世の SD-263 に付随する道路状遺構の可能性もある。遺物なし。							

第29節 時期不明の柱穴状土坑



※P-296・309～313・332・333・356～358の平面図は中央部柱穴群の図を参照

- SG10区P-240
 - 1 暗褐色 ロームの混入なし、しまりなし、粘性なし。
 - 2 黒褐色 地山ロームと1層の混合土、しまりやや有、粘性なし。
- SG10区P-244
 - 1 暗褐色 ローム微粒混入、しまりやや有、粘性なし。
 - 2 暗黄褐色 おそらく地山、しまりやや有、粘性なし。
 - 3 黄褐色 ローム塊(径3～5cm)混入、しまりなし、粘性有。
- SG10区P-245・246 (4層はSK-242のため省略)
 - 1 茶褐色 白色粒多、粘土粒少、軟。
 - 2 暗褐色 炭化物少、軟。
 - 3 茶褐色 ソフトローム粒が特に低い部分に多、白色粒多、焼土粒・炭化物少、軟。
 - 5 暗褐色 下面にソフトローム塊(径1cm)少、しまりやや有。
- SG10区P-247 (SK-233の1・2層と区別が困難)
 - 1 暗褐色 白色粒多、ソフトローム塊(径1cm)少、しまり弱。
 - 2 暗黄褐色 ソフトローム塊(径1cm)粒多、軟、粘性有。
- SG10区P-248
 - 1 暗黄褐色 ソフトローム粒多、軟。
- SG10区P-249
 - 1 暗褐色 ローム微粒混入、しまりやや有、粘性なし。
 - 2 暗黄褐色 1層とロームの混合層、しまり弱、粘性やや有。
- SG10区P-255・256
 - A-A' (P-255)
 - 1 暗褐色 ローム小塊、粒やや多、やや硬。
 - 2 暗黄褐色 ローム小塊多、ローム粒やや多、やや硬。
 - 3 褐色 ローム小塊、粒やや多、やや硬。
 - 4 黄褐色 ローム塊・小塊、粒多、やや硬。
 - B-B' (P-256)
 - 1 暗褐色 ローム粒非常に多、やや硬。
 - 2 暗黄褐色 ローム小塊とローム粒主体、暗褐色土少、やや軟。
 - 3 褐色 ローム塊・小塊若干、やや軟。
- SG10区P-258
 - 1 暗褐色 ソフトローム粒多、軟。
- SG10区P-259・260
 - 1 暗褐色 ソフトローム塊少、軟。
- SG10区P-268
 - 1 黒褐色 ローム粒少、やや軟。
 - 2 黄褐色 ローム塊主体、黒褐色土少、軟。
- SG10区P-269
 - 1 暗褐色 若干火山灰が混入していると思われる、ロームはない、しまり・粘性なし。
 - 2 暗黄褐色 ローム塊(崩れたものか)、しまり弱、粘性やや有。
- SG10区P-270
 - 1 暗黄褐色 ローム粒多、やや硬。
 - 2 黒褐色 ローム粒やや多、やや硬。
- SG10区P-285
 - 1 黒褐色 白色粒(テフラ?)・ローム粒極少、やや硬、抜取痕または柱痕。
 - 2 暗黄褐色 ローム粒多、硬、柱掘方埋土。
- SG10区P-291
 - 1 暗褐色 ソフトローム粒、白色粒・今市軽石粒少、しまりなし。

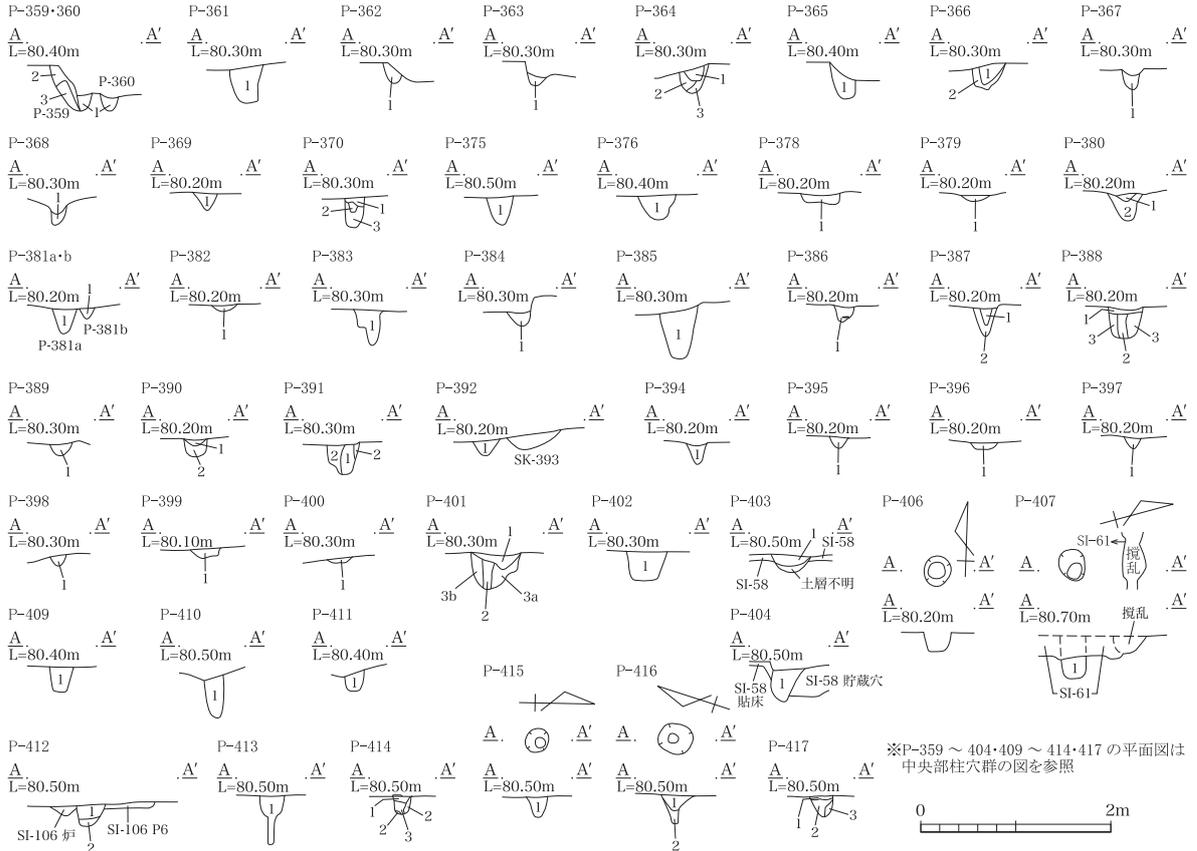
- SG10区P-296
 - 1 黒褐色 ソフトローム塊(径1～3cm)多、白色粒微量、軟、下は礫層、小砂利(径2～3cm)が下面に露出。
- SG10区P-302
 - 1 黒褐色 暗褐色土若干、やや軟。
 - 2 暗黄褐色 ローム小塊やや多、ローム塊少、やや軟。
- SG10区P-309
 - 1 暗褐色 ローム粒微量、しまり強。
 - 2 黄褐色 ローム塊・粒多、しまり強。
- SG10区P-310
 - 1 暗褐色 ローム粒微量、しまり弱。
 - 2 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しまり弱。
 - 3 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しまりやや強。
- SG10区P-311
 - 1 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しまりやや強。
 - 2 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しまりやや弱。
- SG10区P-312
 - 1 暗褐色 ローム小塊、粒微量、しまり強。
 - 2 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しまりやや強。
- SG10区P-313
 - 1 暗黄褐色 ローム塊・粒多、しまり強。
- SG10区P-320
 - 1 黒褐色 ローム小塊、粒やや少、硬、粘性強。
 - 2 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊やや多、やや軟、粘性強。
 - 3 暗褐色 ローム小塊、粒少、やや軟、粘性強。
- SG10区P-323
 - 1 暗黄褐色 ローム中・小塊やや多、ローム大塊少、軟。
 - 2 黄褐色 ローム中・小塊主体、暗褐色土少、やや硬。
 - 3 褐色 ローム粒・黄白色砂粒極少、硬。
- SG10区P-324
 - 1 暗褐色 しまりやや有。
 - 2 茶褐色 ローム塊を含む、やや軟。
- SG10区P-332
 - 1 暗黄褐色 ローム小塊・粒多、しまりやや強。
 - 2 暗黄褐色 ローム小塊・粒多、しまりやや弱。
 - 3 黄褐色 ハードローム小塊、粒多、しまり強。
- SG10区P-334
 - 1 暗黄褐色 ローム粒多、ローム中・小塊やや少、ローム大塊・灰黄色砂の小塊少、硬。
 - 2 暗褐色 ローム小塊、粒やや多、褐色土若干、やや軟。
 - 3 黒褐色 ローム粒・灰黄色砂小塊極少、軟。均質でやや粘性有。
- SG10区P-340
 - 1 黒色 記録不備のため詳細不明。
 - 2 土層不明
- SG10区P-356
 - 1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)少、しまり・粘性なし。
- SG10区P-357
 - 1 暗褐色 ソフトローム粒少、ソフトローム塊(径1cm)極少、しまり・粘性なし。
- SG10区P-358
 - 1 暗黄褐色 ソフトローム塊(径0.5cm)多、軟。
 - 2 黄褐色 ソフトローム塊(径0.5～5cm)多、硬、しまり有。裏込め土か。
 - 3 暗褐色 ソフトローム粒多、軟。

第226図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の柱穴状土坑(1) 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10区

P-269	18.5-17.5	円形	重複なし	0.29	0.28	0.34	テフラ(?)混入
古い遺構かと思われる。遺物なし。							
P-270	19.5-17.5		SK-92より古	0.30	0.28	0.38	
中世のSK-92内にあり。上面の遺物の状態から、SK-92より古い。古墳時代の可能性あり。古墳時代の土師器大形壺胴部上端1片あり。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-285	19.5-17.0	円形	重複なし	0.38	0.32	0.33	柱痕あり 白色粒あり
古墳時代のSI-37北側にあり。不明瞭な柱痕あり。遺物なし。							
P-291	19.5-17.0	円形	SD-263(?)・SI-35と重複	0.31	0.29	0.10	単層 白色粒あり
中～近世のSD-263内にあり。SD-263より古い可能性あり。古墳後期のSI-35と重複するはずだが、新旧不明。遺物なし。							
P-296	19.5-18.0	円形	SD-201と重複?	0.43	0.36	0.24	単層 白色粒あり
近世のSD-201底面で確認。新旧不明だが、SD-201に伴う可能性あり。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-302	20.0-17.5		SI-48より新	0.38	0.38	0.43	
古墳中期のSI-48を切る。土師器壺腹の胴部1片があるが、SI-48から混入した可能性が高い。							
P-309	20.0-18.5	円形	重複なし	0.22	0.20	0.16	柱痕あり
遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-310	20.0-18.5	円形	SK-77と重複	0.28	0.19	0.32	
時期不明のSK-77と重複するが新旧不明。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-311	20.0-19.0	円形	SD-204と重複	0.26	0.22	0.40	
近世のSD-204内にあり新旧不明。P-311・313・332・333の4本で掘立柱建物になるように見える。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-312	20.0-19.0	円形	SD-204と重複	0.34	0.30	0.30	
近世のSD-204内にあり新旧不明。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-313	20.0-19.0	円形	SD-204と重複	0.29	0.26	0.33	単層
近世のSD-204内にあり新旧不明。P-311・313・332・333の4本で掘立柱建物になるように見える。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-320	19.5-17.0	円形	SD-263より古?	0.34	0.30	0.40	
中～近世のSD-263内にある。調査時の所見から、SD-263に切られる可能性がある。遺物なし。							
P-323	19.5-17.0	円形	SI-37(?)→P-323→SD-283	0.40	0.30	0.30	
古墳後期のSI-37の床面で確認。SI-37と同時期かそれ以降で、位置から見てSI-37より新しい可能性がある。時期不明のSD-283に切られる。遺物なし。							
P-324	19.5-17.5	円形	SK-339→P-324→SD-263	0.30	0.26	0.40	
古墳時代のSK-339を切る。中～近世のSD-263を調査した後に確認したので、それよりも古いと見られる。古墳後期のSI-47とは新旧不明だがSI-47に伴う可能性もある。遺物なし。							
P-332	20.0-18.5	円形	SK-77と重複	0.38	0.28	0.38	柱痕あり
時期不明のSI-37内にあり、SK-77とは新旧不明。時期不明のP-311・313・332・333の4本で掘立柱建物になるように見える。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-333	20.0-18.5	円形	重複なし	0.51	0.42	0.53	不明
ポイントはあるが土層断面図はない。時期不明のP-311・313・332・333の4本で掘立柱建物になるように見える。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-334	19.5-17.5	円形	重複なし	0.58	0.57	0.66	
時期不明のP-255・256・268・334はままとまっていて、中～近世のSD-263に付随する道路状遺構の可能性もある。土師器杯体部が1片出土。							
P-340	19.5-17.5	円形	SK-92より古?	0.50	0.42	0.31	土層の詳細不明
中世のSK-92に切られる可能性あり。底面の低い場所が2箇所ある。土師器小片が5点あるが、混入の可能性もある。							
P-356	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.37	0.26	0.23	単層
近世のSD-201壁面で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-357	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.33	0.22	0.18	単層
近世のSD-201壁面で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-358	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.40	0.24	0.40	柱痕あり
近世のSD-201壁面で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-359	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.56	0.45	0.49	柱痕あり P-360と同質
近世のSD-201壁面で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-360	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.21	0.20	0.49	単層 P-359柱痕と同質
近世のSD-201底面で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。深さはSD-201の外から計測。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-361	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.49	0.32	0.44	単層 白色粒あり
近世のSD-201壁上で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-362	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.30	0.25	0.22	単層 白色粒あり
近世のSD-201壁面で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-363	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.37	0.30	0.26	単層 白色粒あり
近世のSD-201壁上で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-364	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.34	0.34	0.32	白色粒あり
近世のSD-201壁上で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-365	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.30	0.28	0.40	単層
近世のSD-201壁面で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-366	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.38	0.30	0.29	白色粒あり
近世のSD-201壁上で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-367	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.24	0.18	0.22	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)内。近世のSD-201の範囲内にあるが新旧は不明で、SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-368	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.23	0.20	0.30	単層
近世のSD-201底面で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-369	20.0-18.5	円形	SX-308北攪乱より古	0.37	0.28	0.19	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-370	20.5-18.5	円形	SD-201と重複?	0.23	0.20	0.34	
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)内。近世のSD-201の範囲内にあるがSD-201との新旧は不明で、SD-201に伴う可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-375	20.0-18.5	円形	SI-58より新	0.30	0.28	0.32	単層 炭あり
古墳後期のSI-58床面で確認。SI-58を切る。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-376	20.0-18.5	円形	SI-58より新	0.60	0.38	0.28	単層 白色粒あり
古墳後期のSI-58床面で確認。SI-58を切る。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-378	20.5-18.5	不整形	SX-308北攪乱より古	0.40	0.36	0.14	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。中世の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-379	20.5-18.5	円形	SX-308北攪乱より古	0.48	0.28	0.10	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。中世の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-380	20.5-18.5	円形	SX-308北攪乱より古	0.42	0.40	0.32	白色粒あり
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。中世の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-381a	20.0-18.5	不整形	SI-58と重複?	0.34	0.26	0.32	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。古墳後期のSI-58の範囲内にあるが新旧は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-381b	20.0-18.5	不整形	SI-58と重複?	0.24	0.18	0.16	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。古墳後期のSI-58の範囲内にあるが新旧は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-382	20.0-18.5	円形	SI-58と重複?	0.29	0.26	0.09	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。古墳後期のSI-58の範囲内にあるが新旧は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-383	20.0-18.5	円形	SI-58→P-383→SX-308北攪乱	0.39	0.31	0.38	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。古墳後期のSI-58を切ると思われる。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							

第 29 節 時期不明の柱穴状土坑



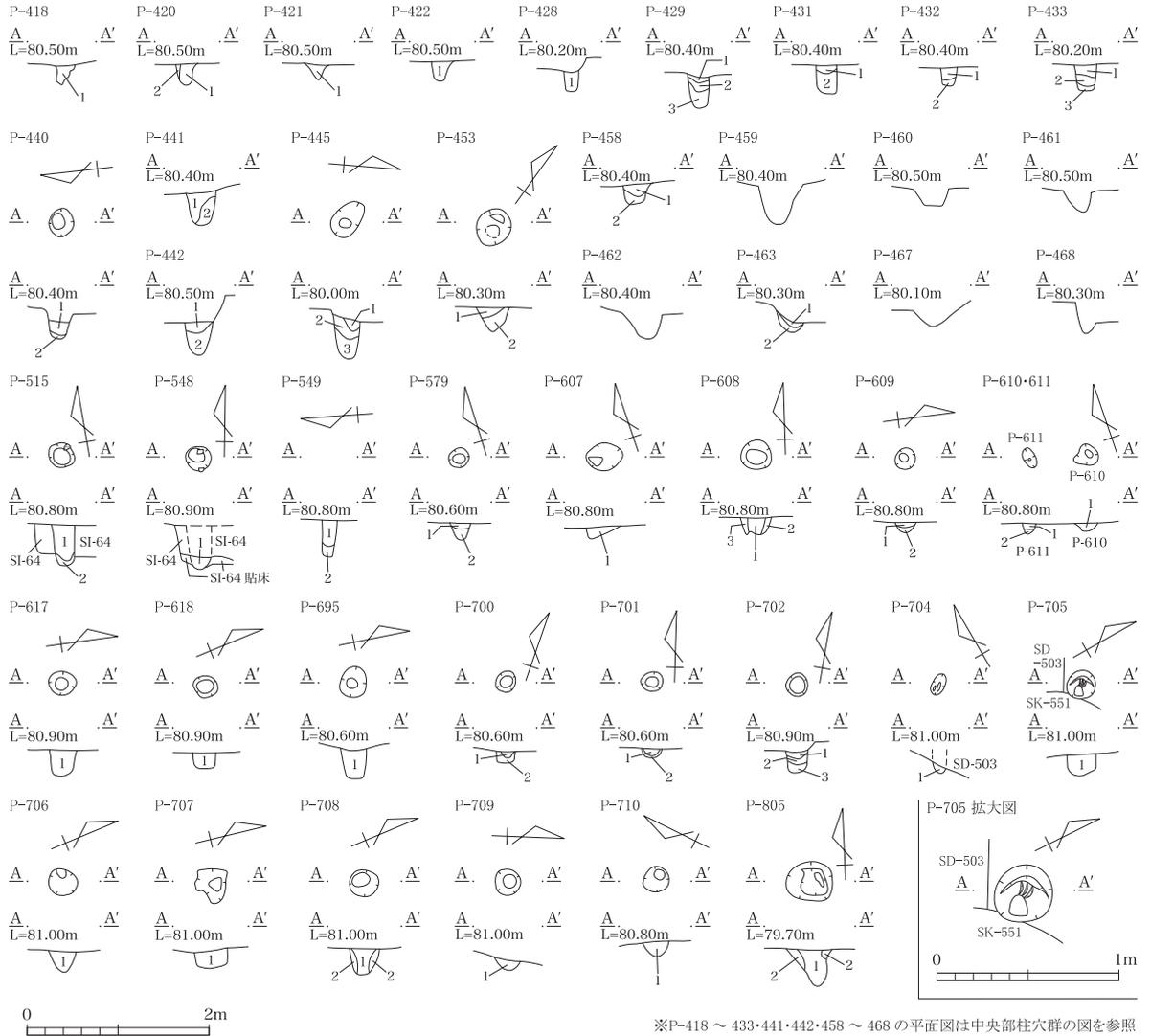
- | | | |
|--|---|---|
| <p>SG10区P-359
1 暗黄褐色 ソフトローム粒多。軟。
2 黄褐色 ソフトローム塊(径1~2cm)多。しまり有。
3 暗褐色 ソフトローム塊(径1~2cm)少。軟。</p> <p>SG10区P-361
1 暗褐色 ソフトローム粒・白色粒多。小礫(径2~3cm)・炭化物少。しまりなし。</p> <p>SG10区P-362
1 褐色 ソフトローム粒・白色粒多。炭化物粒少。しまりなし。</p> <p>SG10区P-363
1 暗褐色 ソフトローム粒・白色粒多。小礫(径2~3cm)・炭化物少。しまりなし。</p> <p>SG10区P-364
1 暗黄褐色 ソフトローム粒・白色粒多。しまり有。
2 暗黄褐色 ソフトローム粒・白色粒多。ソフトローム塊(径1cm)・炭化物少。しまり有。
3 黄褐色 ソフトローム塊(径1cm)で充填される。しまり有。</p> <p>SG10区P-365
1 暗褐色 ソフトローム粒少。しまりなし。</p> <p>SG10区P-366
1 暗褐色 ソフトローム粒・白色粒多。今市軽石粒・炭化物少。しまり有。
2 暗黄褐色 ソフトローム粒多。今市軽石粒少。ややしまり有。</p> <p>SG10区P-367
1 暗褐色 ソフトローム粒多。ややしまり有。</p> <p>SG10区P-368
1 暗褐色 ソフトローム粒多。ややしまり有。
2 暗褐色 ソフトローム主体。しまり有。
3 暗褐色 ローム粒・小塊少。しまり有。</p> <p>SG10区P-369
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)少。軟。</p> <p>SG10区P-375
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)少。軟。</p> <p>SG10区P-376
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)少。軟。</p> <p>SG10区P-377
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)少。軟。</p> <p>SG10区P-378
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)少。軟。</p> <p>SG10区P-379
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)少。軟。</p> <p>SG10区P-380
1 暗褐色 白色粒多。硬。
2 黄褐色 ハードローム塊(径1~10cm)多。硬。柱穴の裏込め土と思われる。</p> <p>SG10区P-381a
1 暗褐色 ソフトローム粒多。ソフトおよびハードローム塊(径1~2cm)少。しまりなし。</p> <p>SG10区P-381b
1 暗褐色 ハードローム塊(径1~2cm)少。しまりなし。</p> <p>SG10区P-382
1 褐色 ハードローム塊(径1cm)少。しまりなし。</p> <p>SG10区P-383
1 黄褐色 ハードローム塊(径2~3cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-384
1 暗褐色 ソフトローム塊(径0.5cm)少。硬。</p> <p>SG10区P-385
1 暗褐色 ソフトローム(径2cm)多。上面は硬、下面は軟。</p> <p>SG10区P-386
1 暗褐色 ハードローム粒多。ハードローム塊(径1cm)少。今市軽石粒・炭化物微量。硬。</p> <p>SG10区P-387
1 暗褐色 ソフトローム粒多。軟。
2 黄褐色 ソフトローム・ハードローム粒多。硬。裏込め土。</p> | <p>SG10区P-360
1 暗褐色 ソフトローム粒多。軟。</p> <p>SG10区P-389
1 暗褐色 白色粒多。硬。</p> <p>SG10区P-390
1 暗褐色 ハードローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-391
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-392
1 暗褐色 ソフトローム粒・白色粒多。硬。</p> <p>SG10区P-393
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-394
1 暗褐色 ソフトローム粒多。軟。</p> <p>SG10区P-395
1 暗褐色 ソフトローム粒多。硬。</p> <p>SG10区P-396
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-397
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-398
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-399
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-400
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-401
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-402
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-403
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-404
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-405
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-406
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-407
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-408
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-409
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-410
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-411
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-412
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-413
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-414
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-415
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-416
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-417
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> | <p>SG10区P-388
1 暗黄褐色 ソフトローム粒多。硬。
2 暗褐色 ソフトローム塊(径2cm)少。軟。
3 黄褐色 ソフトローム塊で充填されている。硬。</p> <p>SG10区P-389
1 暗褐色 白色粒多。硬。</p> <p>SG10区P-390
1 暗褐色 ハードローム塊(径1cm)多。硬。
2 暗褐色 ハードローム粒少。軟。</p> <p>SG10区P-391
1 暗褐色 ソフトローム粒少。軟。
2 暗褐色 ソフトローム塊少。ややしまり有。</p> <p>SG10区P-392
1 暗褐色 ソフトローム粒・白色粒多。硬。</p> <p>SG10区P-393
1 暗褐色 ソフトローム粒多。軟。</p> <p>SG10区P-394
1 暗褐色 ソフトローム粒多。軟。</p> <p>SG10区P-395
1 暗褐色 ソフトローム粒多。硬。</p> <p>SG10区P-396
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-397
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-398
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-399
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-400
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-401
1 暗黄褐色 ソフトローム粒少。しまり有。
2 暗黄褐色 ソフトローム塊少。軟。
3a 暗黄褐色 ソフトローム粒多。軟。
3b 暗黄褐色 ソフトローム塊少。軟。</p> <p>SG10区P-402
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-403
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-404
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-405
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-406
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-407
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-408
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-409
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-410
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-411
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-412
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-413
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-414
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-415
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-416
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> <p>SG10区P-417
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多。硬。</p> |
|--|---|---|

第 227 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の柱穴状土坑 (2) 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区

P-384	20.0-18.5	円形	SI-58 と重複?	0.28	0.26	0.32	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。古墳後期のSI-58の範囲内にあるが新旧は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-385	20.0-18.5	円形	SI-58 と重複?	0.52	0.32	0.61	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。古墳後期のSI-58の範囲内にあるが新旧は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-386	20.0-18.5	円形	SI-58 と重複?	0.29	0.27	0.19	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。古墳後期のSI-58の範囲内にあるが新旧は不明。SI-58の北西主柱穴あるいは中世柱穴の可能性もある。礫1点出土。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-387	20.0-18.5	円形	SI-58 と重複?	0.35	0.26	0.34	
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。古墳後期のSI-58の範囲内にあるが新旧は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-388	20.0-18.5	円形	SX-308 北掘乱より古	0.36	0.33	0.34	柱痕あり
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-389	20.0-18.5	円形	SD-201 と重複	0.23	0.23	0.18	単層 白色粒あり
近世のSD-201 壁上端で確認。SD-201 との新旧は不明。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-390	20.0-18.5	円形	SI-58 と重複?	0.24	0.24	0.22	
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。古墳後期のSI-58の範囲内にあるが新旧は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-391	20.0-18.5		SI-58 と重複?	0.38	0.36	0.35	柱痕あり
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。古墳後期のSI-58の範囲内にあるが新旧は不明。SI-58の南西主柱穴あるいは中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-392	20.0-18.5		SX-308 北掘乱より古	0.30	0.16	0.30	単層 白色粒あり
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)壁面で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。時期不明のSK-393 と近接する。							
P-394	20.0-18.5		SX-308 北掘乱より古	0.21	0.17	0.24	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-395	20.0-18.5		SX-308 北掘乱より古	0.22	0.20	0.14	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)壁上端で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-396	20.0-18.5		SX-308 北掘乱より古	0.29	0.28	0.11	単層 白色粒あり
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-397	20.0-18.5		SX-308 北掘乱より古	0.24	0.21	0.15	単層 白色粒あり
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-398	20.0-18.5		SX-308 北掘乱より古	0.19	0.50	0.14	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)壁面で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-399	20.0-18.5		SX-308 北掘乱より古	0.42	0.26	0.13	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-400	20.0-18.5		SX-308 北掘乱より古	0.30	0.25	0.08	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)壁面で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-401	20.0-18.5		SX-308 北掘乱より古	0.56	0.39	0.40	柱痕あり
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)壁面で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-402	20.0-18.5		SX-308 北掘乱より古	0.43	0.42	0.32	単層
SX-308(攪乱)の北側掘り込み(攪乱)底面で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-403	20.0-18.5		SI-58 より新	0.48	0.40	0.20	白色粒あり
古墳後期のSI-58 床面で確認、SI-58 を切る。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-404	20.0-18.5		SI-58 より新	0.36	0.34	0.35	単層
古墳後期のSI-58 貯蔵穴の埋土を切る。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-406	18.5-16.5		SI-105 → SI-22 → P-406(?)	0.32	0.28	0.20	土層の記録なし
古墳後期のSI-22 を切ると推定される。遺物なし。							
P-407	21.5-18.5		SI-61 → SD-304 b → P-407(?)	0.34	0.28	0.24	単層?
古墳中期のSI-61 を切る。古墳時代のSD-304 b を切ると推定される。遺物なし。							
P-409	20.5-17.5	円形	SI-106 より新?	0.26	0.23	0.28	単層
古墳中期のSI-106 床面で確認し、おそらくSI-106 を切る。遺物なし。東方のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。中央部柱穴群の北西方向に所在。							
P-410	20.5-17.5	円形	SI-106 より新?	0.27	0.19	0.53	単層
古墳中期のSI-106 床面で確認し、おそらくSI-106 を切る。遺物なし。東方のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。中央部柱穴群の北西方向に所在。							
P-411	20.5-18.0	円形	SI-106 より新?	0.20	0.20	0.29	単層
古墳中期のSI-106 床面で確認し、おそらくSI-106 を切る。遺物なし。東方のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-412	20.5-17.5	円形	SI-106 より新	0.38	0.32	0.28	
古墳中期のSI-106 床面で確認し、SI-106 を切る。遺物なし。東方のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。中央部柱穴群の北西方向に所在。							
P-413	20.5-18.0	円形	SI-106 より新	0.24	0.20	0.53	単層
古墳中期のSI-106 を切る。下部が細くなり、柱径8cm程と考えられる。土師器甕胴部小破片が4点あり、SI-106 と同一個体と見られる破片を含むので混入品である。東方のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-414	20.5-18.0	円形	SI-110 より新?	0.27	0.21	0.20	
古墳後期のSI-110 床面で確認。P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。礫1点出土。土師器甕胴部1片がSI-110 から混入と見られる。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-415	21.0-18.0	円形	SI-110 より新?	0.25	0.24	0.24	単層
古墳後期のSI-110 床面で確認。中世のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。土師器甕胴部1片があり、SI-110 から混入したと見られる。中央部柱穴群の北西に所在。							
P-416	21.0-18.0	円形	SI-110 より新?	0.37	0.32	0.32	
古墳後期のSI-110 床面で確認。中世のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。土師器杯体部1片があり、SI-110 から混入したと見られる。中央部柱穴群の北西に所在。							
P-417	20.5-18.0	円形	SI-110 より新?	0.28	0.23	0.23	
古墳後期のSI-110 床面で確認。中世のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-418	20.5-18.0	円形	SI-110 より新?	0.27	0.27	0.26	単層
古墳後期のSI-110 床面で確認。中世のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-420	20.5-18.0	円形	SI-110 より新?	0.23	0.23	0.24	柱痕あり
古墳後期のSI-110 サブトレンチの地山ルーム面で確認、新旧不明。中世のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-421	20.5-18.0	円形	SI-110 より新?	0.31	0.26	0.19	単層
古墳後期のSI-110 サブトレンチの地山ルーム面で確認、新旧不明。中世のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-422	20.5-18.0	円形	SI-110 より新?	0.26	0.23	0.23	単層
古墳後期のSI-110 サブトレンチの地山ルーム面で確認、新旧不明。中世のP-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-428	19.5-18.0	円形	SI-104(?) → P-428 → SX-308	0.30	0.24	0.38	単層
SX-308(攪乱)に切られる。古墳後期のSI-51a・b・c とは新旧不明で、SI-51a・b・c には伴わないと判断される。古墳中期のSI-104 を切ると推定する。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-429	19.5-18.0	円形	SI-104 → SI-51b → SI-51a(?) → P-429	0.26	0.22	0.40	
古墳後期のSI-51aの床面では気付かず、後期のSI-51b(調査時名称SI-109)の床面で確認。SI-51a も切る と推定。中期のSI-104 より新しい。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-431	19.5-18.0	円形	SI-51b → SI-51a → P-431(?)	0.26	0.24	0.32	
古墳後期のSI-51a 南壁際の床面では気付かず、後期のSI-51b(調査時名称SI-109)の床面を切る。SI-51a も切る と推定。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							

第 29 節 時期不明の柱穴状土坑



- | | | |
|---|---|--|
| <p>SG10区P-418
1 暗褐色 ロームが薄くシム状に入る。しまりやや弱。粘性有。</p> <p>SG10区P-420
1 暗褐色 ローム・黒色塊・暗褐色土塊の混合土。しまりやや弱。粘性有。
2 暗黄褐色 ロームと1層の混合土。しまり弱。粘性有。</p> <p>SG10区P-421
1 暗褐色 ロームと暗褐色の混合土。しまりやや強。粘性なし。</p> <p>SG10区P-422
1 暗褐色 ローム塊(径1cm)少。しまりやや弱。粘性有。</p> <p>SG10区P-428
1 暗褐色 ローム小塊・粒微量。しまり弱。</p> <p>SG10区P-429
1 暗褐色 ローム小塊・粒と炭化物極微量。しまりやや強。
2 褐色 ローム小塊・粒少。炭化物極微量。しまりやや弱。
3 暗黄褐色 ローム粒多。ローム小塊微量。しまりやや強。</p> <p>SG10区P-431
1 暗褐色 ローム粒微量。焼土粒・炭化物極微量。しまりやや強。
2 黒褐色 ローム粒微量。ローム小塊極微量。しまりやや強。</p> <p>SG10区P-432
1 暗褐色 ローム粒極微量。しまり弱。
2 暗黄褐色 ローム粒多。ローム小塊少。しまり弱。</p> <p>SG10区P-433
1 暗褐色 ローム小塊少。ローム粒微量。しまり強。
2 黒褐色 ローム小塊・粒微量。しまり強。
3 黒褐色 ローム小塊少。ローム粒微量。しまり強。</p> <p>SG10区P-440
1 暗褐色 ローム小塊・粒微量。焼土小塊・炭化物極微量。しまり強。
2 暗褐色 ローム小塊少。ローム粒微量。しまり強。</p> <p>SG10区P-441
1 暗褐色 ローム小塊・粒と焼土粒極微量。しまりやや強。
2 黒褐色 ローム粒微量。ローム小塊極微量。しまり強。</p> <p>SG10区P-442
1 暗褐色 ローム小塊・粒微量。焼土小塊極微量。しまりやや強。
2 黒褐色 ローム小塊・粒微量。しまり強。</p> <p>SG10区P-445
1 暗褐色 ローム小塊・粒微量。しまりやや強。
2 黒褐色 ローム粒微量。ローム中・小塊と焼土小塊極微量。しまりやや強。
3 暗褐色 ローム小塊・粒極微量。しまりやや弱。</p> | <p>SG10区P-453
1 黒褐色 ローム小塊・粒少。硬。
2 暗褐色 ローム塊・小塊・粒やや多。やや軟。</p> <p>SG10区P-458
1 暗褐色 ローム粒多。ローム小塊少。軟。
2 暗褐色 ローム塊・小塊やや多。やや軟。</p> <p>SG10区P-463
1 暗褐色 灰黄色砂質土(地山)塊・小塊やや多。やや軟。
2 灰黄色 砂質土(地山)主体。やや軟。崩れてたまったものだろう。</p> <p>SG10区P-515
1 暗褐色 ローム粒やや多。ローム小塊少。
2 黄褐色 ローム塊主体。小円礫(径2cm)と暗褐色土少。</p> <p>SG10区P-548
1 暗褐色 ローム粒多。ローム小塊やや多。やや硬。</p> <p>SG10区P-549
1 暗褐色 ローム粒少。やや硬。
2 暗黄褐色 ローム小塊・粒やや多。</p> <p>SG10区P-579
1 暗褐色 ローム粒極微量。しまりやや強。
2 暗黄褐色 ローム粒多。ローム小塊微量。しまりやや強。</p> <p>SG10区P-607
1 黒褐色 ローム塊・小塊やや多。硬。</p> <p>SG10区P-608
1 暗褐色 ローム小塊少。やや硬。
2 暗黄褐色 ローム小塊やや多。硬。
3 暗黄褐色 ローム塊・小塊やや多。硬。</p> <p>SG10区P-609
1 暗褐色 ローム小塊少。ローム粒若干。やや軟。
2 黄褐色 ソフトローム主体。非常に軟。</p> <p>SG10区P-610
1 暗褐色 ローム小塊やや多。軟。</p> <p>SG10区P-611
1 褐色 均質でしまり強。
2 黄褐色 ローム塊多。黒褐色土少。軟。</p> <p>SG10区P-617
1 黒褐色 ロームの混入なし。しまりやや強。粘性有。</p> <p>SG10区P-618
1 暗褐色 ロームの混入はあまり見られない。しまりやや弱。粘性有。</p> | <p>SG10区P-695
1 黒褐色 黒色土と褐色土が混在。ローム小粒多。しまりやや強。粘性有。</p> <p>SG10区P-700
1 暗褐色 ローム小塊・粒と炭化物極微量。しまりやや弱。
2 暗褐色 ローム小塊・粒微量。しまりやや強。</p> <p>SG10区P-701
1 暗褐色 ローム粒・炭化物極微量。しまりやや強。
2 暗褐色 ローム小塊・粒微量。しまり強。</p> <p>SG10区P-702
1 黒褐色 ローム小塊・粒と焼土粒・炭化物極微量。しまり強。
2 暗褐色 ローム小塊・粒微量。焼土小塊・炭化物極微量。しまり強。
3 黒褐色 ローム小塊・粒微量。焼土小塊極微量。しまりやや強。</p> <p>SG10区P-704
1 暗褐色 ソフトローム粒少。軟。</p> <p>SG10区P-705
1 暗褐色 ソフトローム塊(径2-3cm)多。軟。
2 暗黄褐色 ソフトローム粒多。軟。裏込土の残存。
3 暗褐色 ソフトローム粒多。軟。</p> <p>SG10区P-707
1 暗褐色 ソフトローム塊(径2-3cm)少。軟。</p> <p>SG10区P-708
1 暗褐色 ソフトローム粒少。しまり有。
2 暗黄褐色 ソフトローム粒多。軟。裏込土の残存。</p> <p>SG10区P-709
1 暗褐色 ソフトローム粒多。軟。</p> <p>SG10区P-710
1 暗褐色 下面にソフトローム塊(径1cm)多。しまり有。</p> <p>SG10区P-805
1 暗褐色 混入物なし。水分を含む。軟。
2 茶褐色 地山の茶褐色粒少。しまり有。</p> |
|---|---|--|

第 228 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の柱穴状土坑 (3) 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区

P-432	19.5-18.0	円形	SI-51b→SI-51a→P-432(?)	0.20	0.19	0.22	
古墳後期の SI-51a 南壁際の床面では気付かず、後期の SI-51b(調査時名称 SI-109)の床面を切る。SI-51a も切ると推定。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-433	19.5-18.0		SI-53→SI-51b→SI-51a →P-433(?)	0.27	0.22	0.33	焼土・炭化物あり
古墳後期の SI-51a 南壁際の床面では気付かず、後期の SI-51b(調査時名称 SI-109)の床面で確認。SI-51b と古墳中期の SI-53 を切る。SI-51a も切ると推定。古墳後期以降。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-440	19.5-16.5	円形	SI-38 と重複	0.32	0.28	0.36	
古墳中期の SI-38 の貼床除去後に確認したが、確実な新旧は不明。西半は削平される。位置から SI-38 には伴わないと見られる。遺物なし。							
P-441	19.5-18.5	円形	SI-53→SI-51a→P-441(?)	0.37	0.34	0.46	
古墳中期の SI-53 床面で確認し、SI-53 を切るらしい。古墳後期の SI-51a との新旧は不明だが、おそらく SI-51a より新しい。遺物なし。P-442・467・468 と同様な性格か。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-442	19.5-18.5	円形	SI-53 より新	0.32	0.28	0.66	
古墳中期の SI-53 床面で確認し、SI-53 を切るらしい。遺物なし。P-441・467・468 と同様な性格か。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-445	17.5-16.5	円形	SI-19 より新、SK-95 と重複	0.45	0.29	0.56	
古墳中期の SI-19 を切ると見られる。古墳時代の SK-95 と重複するが新旧不明。現地調査時には SK-95 が貯蔵穴で、P-445 が北東柱穴になる竪穴建物の可能性を考えた。遺物なし。							
P-453	17.0-18.0	円形	重複なし	0.44	0.38	0.68	
古墳時代の SK-449 に近接。土師器杯 2 片・壺蓋類 3 片と須恵器裏 1 片出土。							
P-458	20.0-18.5	円形	重複なし	0.34	0.31	0.27	
土師器小片 3 点がわずかに出土したが、他遺構からの混入と見られる。中世柱穴の可能性もあり。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-459	20.0-18.5	円形	重複なし	0.57	0.45	0.51	土層の記録なし
中世柱穴の可能性もあり。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-460	20.0-18.5	円形	重複なし	0.49	0.35	0.22	土層の記録なし
中世柱穴の可能性もあり。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-461	20.0-18.5	円形	重複なし	0.41	0.37	0.27	土層の記録なし
中世柱穴の可能性もあり。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-462	20.0-18.5	円形	重複なし	0.43	0.39	0.36	土層の記録なし
中世柱穴の可能性もあり。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-463	20.0-18.5	円形	SD-204 と重複	0.30	0.24	0.36	
近世の SD-204 底面で確認したが新旧不明。SD-204 に伴う可能性もあり。遺物なし。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-467	19.5-18.0		SK-443→SI-53→P-467	0.38	0.38	0.29	土層の記録なし
縄文時代の SK-443、古墳中期の SI-53 を切る。P-441・442・468 と同様な性格か。遺物は土師器杯 2 片があり、接合した。SI-53 からの混入と見られる。整理作業時に発番。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-468	19.5-18.0		SK-443→SI-53→P-468	0.22	0.20	0.36	土層の記録なし
縄文時代の SK-443、古墳中期の SI-53 を切る。P-441・442・467 と同様な性格か。遺物なし。整理作業時に発番。中央部柱穴群の分布域に所在。							
P-515	22.0-17.5	円形	SI-64a より新	0.31	0.28	0.47	
古墳中期の SI-64a を切る。自然礫が 1 点出土。北側にある P-548 と時期が近いのかもしれない。							
P-548	22.0-17.5	円形	SI-64a より新	0.28	0.27	0.50	単層
古墳中期の SI-64a 床面で確認し、SI-64a を切る。遺物あり。南側にある P-515 と時期が近いのかもしれない。							
P-549	22.0-18.0	円形	SI-64a と重複	0.24	0.14	0.42	
古墳中期の SI-64a 壁面で確認したが新旧不明。遺物なし。							
P-579	23.0-19.0	円形	SI-75 より新?	0.22	0.22	0.20	
古墳中期の SI-75 床面で確認。SI-75 を切るものと推定する。遺物なし。							
P-607	23.5-18.0	楕円形	重複なし	0.40	0.31	0.16	単層
時期不明の SB-603 に近接。遺物なし。							
P-608	23.5-18.5	円形	重複なし	0.34	0.32	0.20	柱痕あり
時期不明の SB-603 に近接。遺物なし。							
P-609	23.5-18.0	円形	重複なし	0.24	0.22	0.14	
時期不明の SB-603 に近接。遺物なし。							
P-610	23.5-18.0	円形	重複なし	0.28	0.24	0.12	単層
時期不明の SB-603 に近接。遺物なし。							
P-611	23.5-18.0	円形	重複なし	0.24	0.13	0.16	
調査時の所見では、木の根の疑いもある。時期不明の SB-603 に近接。遺物なし。							
P-617	22.5-18.5	円形	重複なし	0.30	0.26	0.30	単層
時期不明の SK-620 と覆土が同質。遺物なし。							
P-618	22.5-18.5	円形	重複なし	0.26	0.23	0.19	単層
時期不明の SK-619・620 や P-617 と近接する。遺物なし。							
P-695	22.0-19.5	円形	重複なし	0.34	0.30	0.40	単層
南東側の低地に向かう斜面に存在。遺物なし。							
P-700	23.0-19.0	円形	SI-113b より新?	0.24	0.22	0.17	炭化物あり
古墳中期の SI-113b(調査時名称 SI-116)の床面で確認。SI-113b に伴うか、それより新しい。ごく浅いので、SI-113b に伴う柱穴とは考えにくい。仮に SI-113b より新しければ、古墳中期の SI-113a と重複する可能性あり。遺物なし。							
P-701	23.0-19.0	円形	SI-113b より新?	0.24	0.22	0.12	炭化物あり
古墳中期の SI-113b(調査時名称 SI-116)の床面で確認。SI-113b に伴うか、それより新しい。ごく浅いので、SI-113b に伴う柱穴とは考えにくい。仮に SI-113b より新しければ、古墳中期の SI-113a と時期不明の SK-563 と重複する可能性あり。遺物なし。							
P-702	23.5-19.0	円形	SI-79 より新?	0.26	0.24	0.36	焼土・炭化物あり
古墳中期の SI-79 床面で確認。SI-79 を切ると思われるが不確実。遺物なし。							
P-704	23.5-19.5	円形	SD-503 より新	0.24	0.14	0.32	単層
近世の SD-503 を切る。SD-503 と重複する状況の土層断面図の上部では遺構の幅が広がっていたと見られる。遺物なし。							
P-705	24.0-19.5	円形	SK-551 より新	0.33	0.31	0.28	単層
古墳時代の円筒形土坑 SK-551 をわずかに切る。遺物なし。							
P-706	24.0-19.5	円形	重複なし	0.31	0.29	0.26	単層
遺物なし。							
P-707	24.0-19.5	円形	重複なし	0.38	0.34	0.24	単層
遺物なし。							
P-708	24.0-19.5	円形	重複なし	0.31	0.30	0.32	柱痕あり
遺物なし。							
P-709	24.0-19.5	円形	SD-503 より新	0.29	0.28	0.22	単層
調査時の所見では、平面での観察により近世の SD-503 を切ることが確認されている。遺物なし。							
P-710	24.0-18.5	円形	重複なし	0.30	0.28	0.18	単層
遺物なし。							
P-805	17.5-18.5	円形	重複なし	0.51	0.44	0.42	柱痕あり
東側低地にあるピット。遺物なし。							

第30節 時期不明の土坑 (第229～237図、写真図版160～166・174・214)

SG10区における時期不明の土坑として142基をここで報告する。SK-294・297・447・451は、白色土や白色粒が古墳時代のHr-FAテフラであれば、古墳時代土坑かもしれない。

第237図に遺物を示した。縄文土器は、SK-272で結節縄文を施す前期末～中期初めの1片(2片が接合)、SK-532で後期堀之内式土器が1片ある。縄文時代土坑かもしれないが、混入品の可能性もある。鉄関連遺物では、SK-77とSK-317で極小の椀形鍛冶滓が1点ずつ出土している(『東谷・中島地区遺跡群10』の第289図から再度掲載した)。古墳時代集落に伴う鉄関連遺物が混入したと考えられる。SK-77には鉄滓以外に古墳中期中葉ころの土師器杯片(1)もあるので古墳時代土坑かもしれないが、出土土師器の注記は「SK-77か253」なので出土遺構が不確実であり、時期不明土坑とした。

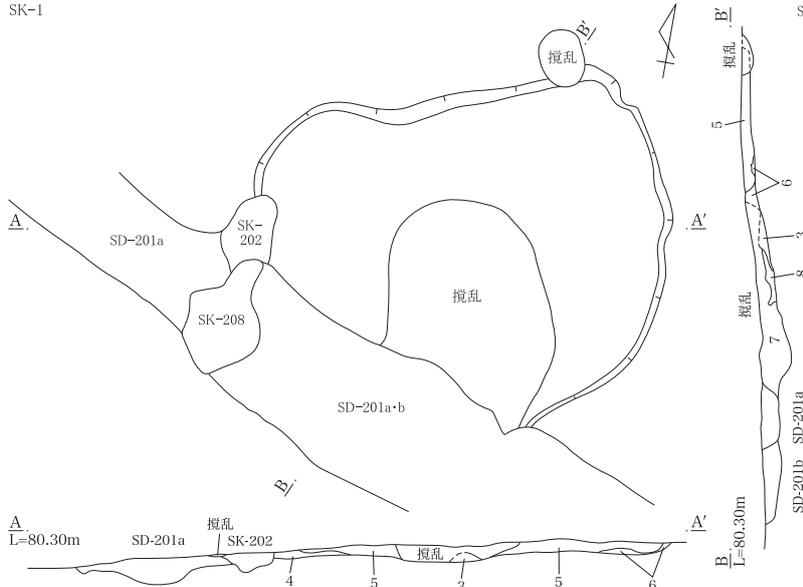
SK-226に混入している古墳中期の滑石製有孔円板は、SG10区SI-64aなどに出土例がある。SK-243の土師器大形壺底部片は、底面に生じた焼成前の亀裂をへらで補修した痕がある。亀裂は底面近くまで入り、液体を入れると少しずつ漏れたと考えられる。補修痕のある土師器はSG10区SI-6などにある。SK-243・264に同一個体の須恵器甕片を含む。SK-254の須恵器二重甕は古墳中期の稀少な遺物で、SG10区SI-50などに例がある。SK-264の土師質小皿(かわらけ)は、中世土坑SK-92から混入したことも考えられる。SK-264に混入した古墳時代の須恵器甕破片は古墳時代土坑SK-275と同一個体を含み、古墳時代溝SD-304bや中近世溝SD-263にも類似破片がある。SK-276の土師器は古墳後期のSK-47からの混入であろうか。SK-297の敲石も古墳時代竪穴に類例があり、古墳時代集落から混入した品であろう。SK-405には煤が多量に付着した被熱礫2点(1・2)と台石?1点(3)があり、時期がわかる土器はない。SK-614の須恵器器台破片は、南方へ108m離れたSI-111やSD-41・42、南西へ110m離れたSK-292・SD-201aなどに同一個体がある。

第141表 権現山遺跡SG10区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸	覆土
SK-1	17.0-17.5	不整形	SK-202・SD-201a・bより古	残4.48	3.23	0.15	N-80°E	
大形の土坑。時期不明のSK-202、近世のSD-201a・bに切られる。中央に木の根の攪乱あり。古墳中・後期の土師器小破片があるが、遺構に伴うものとは見られない。								
SK-5	18.0-18.0	楕円形	SK-222・SD-205より新	4.48	3.05	0.68	N-42°E	
古墳後期のSK-222を切る。時期不明のSD-205との間には攪乱が入るため図面上は重複しないが、調査時の所見ではSD-205を切る。大形不整形で底面は凸凹が激しい。古墳後期の土師器小破片が少量あるが、遺構に伴うものとは見られない。								
SK-68	23.0-18.0	隅丸方形	SI-69・SK-576・P-575・577と重複	3.36	2.68	0.18	N-49°W	単層
古墳後期のSI-69を切る。時期不明のSK-576、P-575に切られる。P-577との新旧不明だが、P-577に切られると推定する。少量の土師器片があり、SI-69などからの混入と見られる。								
SK-77	20.0-18.5	不整形	SK-278(?)→SK-77→SK-253	3.85	2.15	0.18	N-29°E	
時期不明のSK-253に切られる。時期不明のSK-278を切る可能性がある。時期不明のP-310・332と重複し、新旧不明。中央部が約10cmほど楕円形に低くなる。小形の椀形鉄鍛冶滓1点と、古墳中期を主体とする土師器片がある。遺物は少量で、図示した土師器杯はSK-77・253のどちらで出土したものが不明。土師器片がこの土坑に伴う確証はないが、古墳時代土坑の可能性もある。								
SK-202	16.5-17.0・17.0-17.0	不整形	SK-1・SK-208・SD-201aより新	0.87	0.52	0.22	N-33°E	単層
時期不明のSK-1、近世のSD-201aを切る。土層断面図はないが、古墳時代のSK-208を切ると見られる。混入と見られる土師器小破片が3点ある。								
SK-203	17.0-17.5	円形	SI-2より新	1.40	1.27	0.20		単層 白色粒あり
古墳中期のSI-2覆土中にあり、SI-2を切る。土師器小破片があり、ほとんどはSI-2から混入したものと見られる。								
SK-209	19.5-17.0	隅丸長方形	SI-39より新	2.32	1.00	0.16	N-10°E	単層 白色粒あり
古墳後期のSI-39を切る。古墳後期(?)を主体とする土師器片が少量あり、SI-39から混入したものと見られる。								
SK-212	18.0-17.5	円形	SI-30より新	1.06	1.00	0.18		単層 白色粒あり
古墳中期のSI-30覆土中にあり、SI-30を切る。土師器片が少量あるが、SI-30からの混入と見られる。								
SK-213	18.0-17.5	円形	重複なし	1.30	1.16	0.22		単層
古墳中期のSI-9に隣接する。古墳中期末の土師器杯があるので、その時期の土坑の可能性もある。								
SK-214	19.0-17.5	隅丸長方形	SI-101・SD-201・263より新	2.97	1.07	0.38	N-20°W	土層の特徴不明
調査時に南壁のSD-201を切る部分を掘りこぼしてしまった。古墳中期のSI-101、中～近世のSD-263と近世のSD-201を切る。土師器壺・甕・小形壺の破片があるが、SI-101からの混入と見られる。								
SK-215	18.5-18.0	円形	SI-32より新	0.72	0.63	0.16		単層
古墳後期のSI-32内にあり、SI-32の床面を切ったところを掘り下げたところが底面なので、SI-32より新しいと見られる。遺物なし。								
SK-223	16.5-18.0	楕円形	重複なし	1.18	0.80	0.08	N-5°E	単層 炭粒塊あり
炭粒を多く含む。遺物なし。								
SK-225	18.0-16.5	円形	重複なし	0.84	0.80	0.15		自然埋没状
遺物なし。								
SK-226	18.0-17.5	円形	SI-89→SI-30→SK-226	0.92	0.83	0.12	N-57°E	単層
古墳中期のSI-30覆土と床面の一部を切る。古墳中期のSI-89a・89bまでには達しない。石製模造品1点と土師器少量があるが、SI-30からの混入と見られる。								
SK-228	18.5-17.5	長方形	SI-12→SK-229→SK-228	1.22	0.70	0.11	N-15°E	単層
古墳後期のSI-12と時期不明のSK-229を切る。土師器壺・甕片が少量あるが、SI-12からの混入と見られる。								
SK-229	18.5-17.5	長方形	SI-12→SK-229→SK-228	1.40	0.64	0.16	N-15°E	単層
古墳後期のSI-12を切る。時期不明のSK-228に切られる。壺・甕片を主体とする土師器片があるが、SI-12と同一個体と思われる破片があり、混入と見られる。								

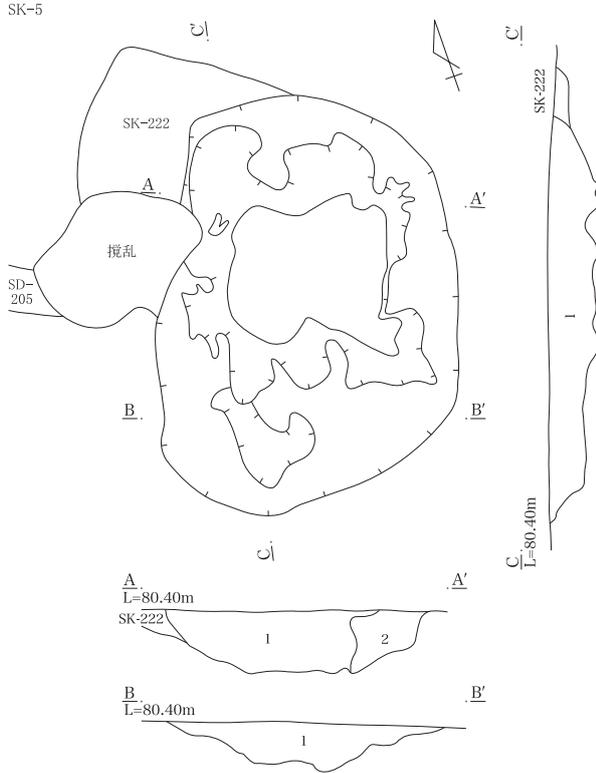
第5章 権現山遺跡 SG10 区

SK-1



SG10区SK-1 (1・2層は欠番、7・8層は攪乱)
 3 黄色 基盤層に由来するローム、しまりなし。粘性有。攪乱の可能性もある。
 4 明黄色 3層に類似するが若干暗い、しまりなし。粘性有。
 5 暗黄褐色 暗褐色ローム、黒色土の塊が混じり合う。しまり有。粘性なし。
 6 明黄褐色 5層に類似するが若干明るい、しまり有。粘性なし。
 7 黄色 径3~6cmのローム塊の固まり。バサバサしている。
 8 黒色 木根の腐植土か?

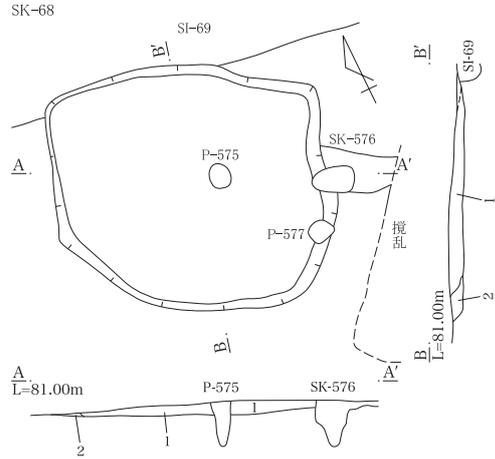
SK-5



SG10区SK-5

1 黒褐色 ロームは含まない、しまり・粘性やや有。
 2 黄褐色 灰色砂質土の上層、ローム塊と褐色土の混合土、黄色味が強い、しまりなし。粘性有。

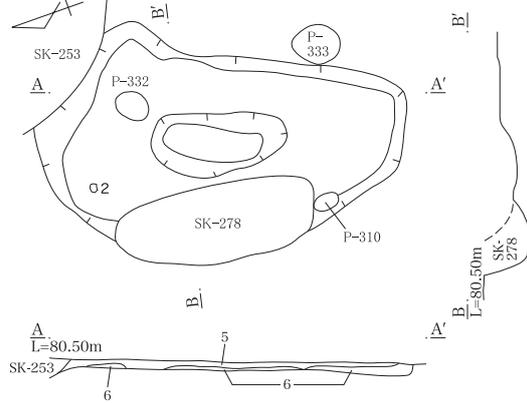
SK-68



SG10区SK-68

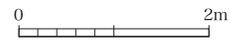
1 黒褐色 暗褐色土小塊やや多、ローム粒少。やや硬。
 2 暗黄褐色 ローム小塊・粒多、やや硬。

SK-77

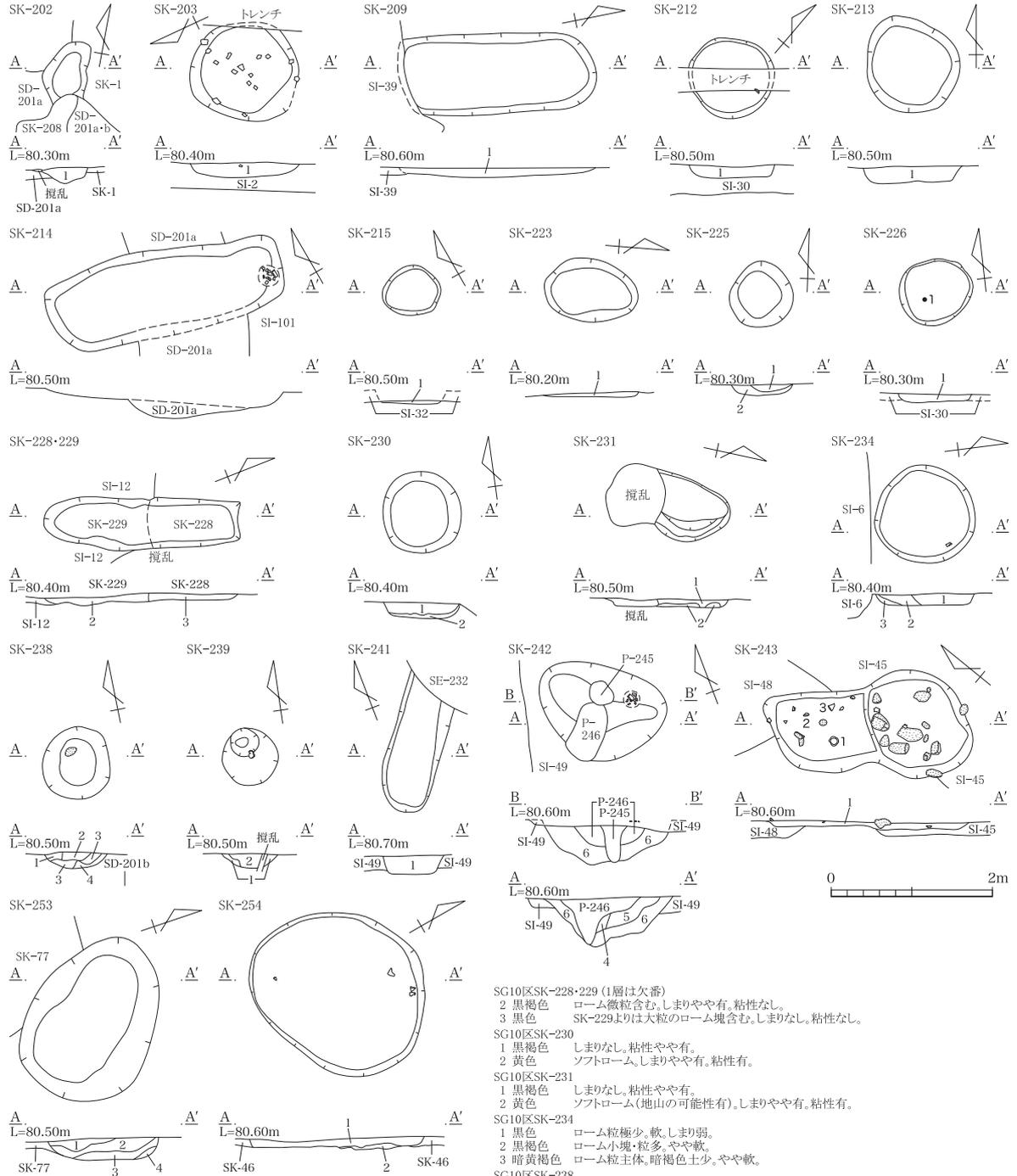


SG10区SK-77 (1~4層はSK-253のため省略)

5 暗褐色 ローム粒少、ローム小塊微量。しまり強。
 6 暗黄褐色 ローム塊・粒多、今市軽石細粒極微量。しまりやや強。



第 229 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (1) 遺構



SG10区SK-202

1 暗褐色 微細なローム塊多。しまりなし。粘性なし。

SG10区SK-203

1 黒褐色 暗褐色漸移層の不明瞭な塊やや少、白色粒極少。やや軟。

SG10区SK-209

1 暗褐色 白色粒多、ソフトローム塊(径1cm)少、今市軽石粒微量。

SG10区SK-212

1 黒褐色 ローム粒・焼土粒・白色粒少。硬。しまり強。

SG10区SK-213

1 暗褐色 粒の細かいローム含む。しまり有。粘性なし。

SG10区SK-215

1 暗褐色 ローム小塊・粒少。しまりやや強。

SG10区SK-223

1 黒褐色 炭化物小塊、炭粒多、ローム小塊・粒少。やや軟。

SG10区SK-225

1 暗褐色 ローム粒微量。しまり強。

2 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊微量。しまりやや弱。

SG10区SK-226

1 褐色 ローム粒やや多、ローム小塊少。やや軟。

SG10区SK-228-229 (1層は欠番)

2 黒褐色 ローム微粒含む。しまりやや有。粘性なし。

3 黒色 SK-229よりは大き目のローム塊含む。しまりなし。粘性なし。

SG10区SK-230

1 黒褐色 しまりなし。粘性やや有。

2 黄色 ソフトローム。しまりやや有。粘性有。

SG10区SK-231

1 黒褐色 しまりなし。粘性やや有。

2 黄色 ソフトローム(地山の可能性有)。しまりやや有。粘性有。

SG10区SK-234

1 黒色 ローム粒極少。軟。しまり弱。

2 黒褐色 ローム小塊・粒多。やや軟。

3 暗黄褐色 ローム粒主体。暗褐色土少。やや軟。

SG10区SK-238

1 暗黄褐色 微細なローム塊混入。しまりやや有。粘性有。

2 黒褐色 埋没土に3が若干混入。しまりやや有。粘性有。

3 暗褐色 しまり大きく4より大きなローム塊混入。しまりやや有。粘性有。

4 黄褐色 ローム塊(径3~5cm)混入。しまり有。粘性有。

SG10区SK-239

1 暗黄褐色 地山のソフトロームと2の混合土。しまりやや有。粘性有。

2 暗褐色 埋没土。ロームの混入なし。しまりなし。粘性なし。

SG10区SK-241

1 褐色 ソフトローム粒・白色粒多。炭化物少。軟。

SG10区SK-242 (1~3層はP-246のため省略)

4 暗褐色 ソフトローム粒多。軟。

5 暗褐色 下面にソフトローム塊(径1cm)少。しまりやや有。

6 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)・粒多、今市軽石粒(径0.5cm)少。やや軟。粘性有。

SG10区SK-243

1 黒褐色 ローム粒極少量。濃い暗褐色粘質土と鉄分をやや多く含む。しまりやや弱。粘性強。

SG10区SK-253

1 暗茶褐色 ローム小塊・粒微量。今市軽石細粒極微量。しまり強。

2 黒褐色 ローム小塊・粒少。炭化物微量。今市軽石細粒極微量。しまり強。

3 暗黄褐色 ローム粒多。ローム小塊少。ローム中塊微量。しまりやや強。

4 黄褐色 ローム塊・粒多。今市軽石細粒極微量。しまりやや強。

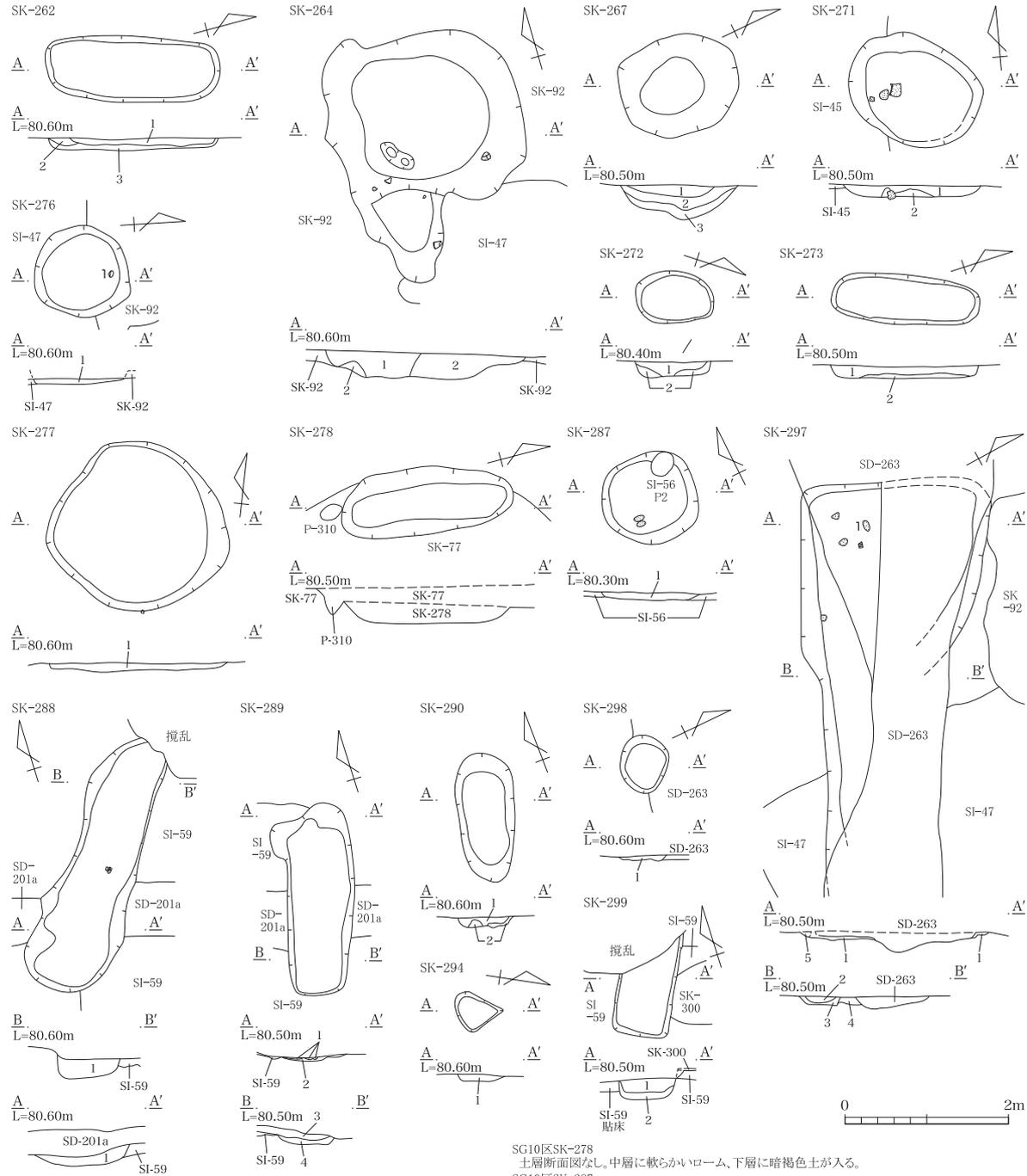
SG10区SK-254

1 黒褐色 ローム小塊・粒少。赤色焼土粒極少。やや軟。

2 褐色 ローム小塊・粒多。やや硬。

第230図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑(2) 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区



- SG10区SK-262
 1 暗褐色 ローム小塊・粒微量、しまり強。
 2 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、ローム中塊、今市軽石細粒極微量、しまりやや強。
 3 黄褐色 ローム塊・粒多、今市軽石細粒極微量、しまりやや強。
- SG10区SK-264
 1 黒褐色 ローム塊・小塊極少、やや軟。
 2 暗灰黄褐色 ローム大塊・塊・小塊多、ローム粒やや少、やや軟。
- SG10区SK-267
 1 暗褐色 ローム小塊・粒微量、今市軽石粒・炭化物極微量、しまりやや強。
 2 黒褐色 ローム粒少、ローム小塊・炭化物極微量、しまりやや強。
 3 暗黄褐色 ローム小塊・粒多、ローム中塊微量、しまり強。
- SG10区SK-271
 1 暗褐色 ローム粒少、やや硬くしまる。
 2 黒褐色 ローム塊・小塊やや少、粘性強、非常に硬くしまる。
- SG10区SK-272
 1 暗褐色 ローム粒微量、今市軽石細粒極微量、しまり強。
 2 黄褐色 ローム塊・粒多、しまりやや強。
- SG10区SK-273
 1 褐色 ローム小塊少、ローム粒微量、今市軽石細粒・炭化物極微量、しまり強。
 2 暗褐色 ローム小塊・粒少、しまりやや強。
- SG10区SK-276
 1 黒褐色 土層断面の詳細な記録なし、しまり強、粘性有。
- SG10区SK-277
 1 褐色 ローム小塊・粒やや多、しまりやや弱。

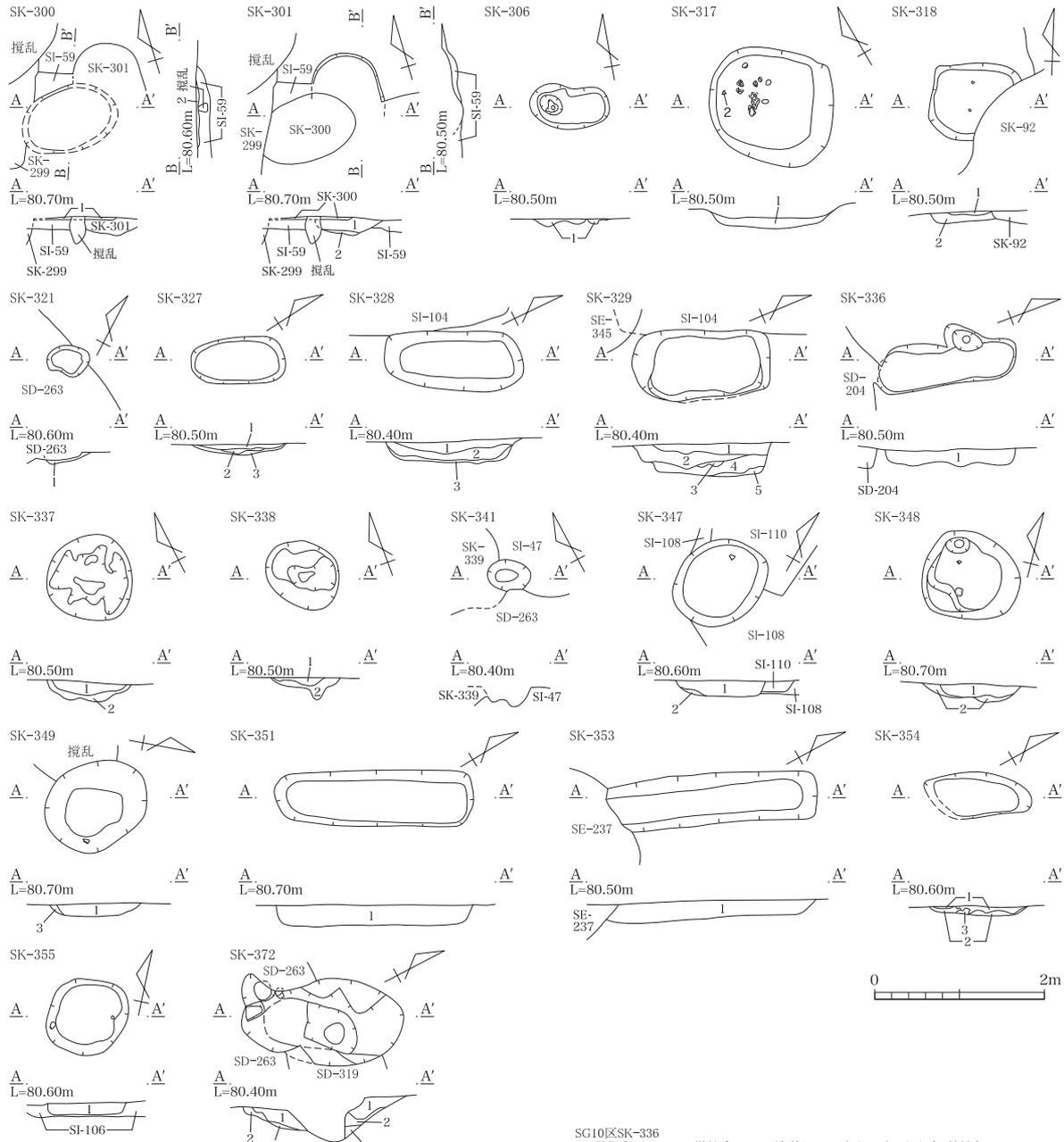
- SG10区SK-278
 土層断面図なし。中層に軟らかいローム、下層に暗褐色土が入る。
- SG10区SK-287
 1 褐色 ローム小塊・粒少、ローム中塊微量、しまり強。
- SG10区SK-288
 1 暗褐色 5cm程度のローム塊・ローム微粒・3cmほどの黒色土塊の混合土。しまりなし、粘性有。
- SG10区SK-289
 1 黒色 ロームと焼土粒が混じる、しまりなし、粘性有。
 2 暗黄褐色 地山と暗褐色土が混じる、しまりなし、粘性有。
 3 暗褐色 ローム塊少、ローム微粒を全体に含む、しまりやや有、粘性有。
 4 黒褐色 暗褐色土と黒色土の混合土、ローム微粒を含む。
- SG10区SK-290
 1 黒褐色 ローム微粒少、しまりやや強、粘性なし。
 2 暗黄褐色 ロームと1との混合層、しまりなし、粘性有。
- SG10区SK-294
 1 暗褐色 上面に焼土粒・炭化物少、ソフトローム粒・白色粒少、しまりなし。
- SG10区SK-297
 1 暗黄褐色 ソフトローム粒多、白色粒少、しまりなし。
 2 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm以下)少、硬。
 3 暗黄褐色 ソフトローム塊(径1~2cm)やや多、硬。
 4 黄褐色 ソフトローム、浸食により軟。
 5 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)、白色粒微量、しまりなし。
- SG10区SK-298
 1 暗褐色 ソフトローム粒・白色粒・今市軽石粒微量。
- SG10区SK-299
 1 暗褐色 ローム微粒混入、焼土粒若干、しまりなし、粘性有。
 2 黒褐色 ローム微粒と黒色土塊が混入、しまりやや有、粘性有。

第 231 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (3) 遺構

第 30 節 時期不明の土坑

SK-230	18.0-18.0	円形	重複なし	1.04	1.02	0.22		自然埋没状
古墳時代(中期?)の土師器2片と縄文時代の剥片1点があり、混入と見られる。								
SK-231	18.5-17.5	楕円形	重複なし	1.10	0.78	0.12	N-32°-E	
南半は抜根により攪乱される。古墳後期のSI-32に近接するが、重複はしない。土師器壺・甕・甔の小破片があるが、SK-231に伴うとは断定できない。								
SK-234	17.5-17.0	円形	重複なし	1.26	0.25	0.16		自然埋没状
覆土が軟らかいので、かなり新しい時期の可能性もある。古墳時代と平安時代の土師器小破片が少量あり、古墳中期のSI-30や平安時代のSK-235から混入した可能性がある。								
SK-238	18.5-17.0	円形	重複なし	0.94	0.88	0.22		自然埋没状?
遺物は太い棒状の安山岩(15.4×7.6×7.4cm、1.263g)が1点出土した。								
SK-239	18.5-17.0	円形	重複なし	0.73	0.70	0.19		自然埋没状?
小さな円形で北寄りにビット状に深くなる部分あり。縄文時代の礫器が1点混入。								
SK-241	20.0-17.0	隅丸長方形	SI-49より新、SE-232と重複	1.53	0.66	0.24	N-32°-E	単層 白色粒あり
古墳中期のSI-49を切る。中世のSE-232と重複するが、新旧不明。遺物なし。								
SK-242	20.0-17.0	不整形	SI-49→SK-242→P-245・246	1.62	1.20	0.62	N-54°-W	自然埋没状 白色粒あり
古墳中期のSI-49を切る。時期不明のP-245・246に切られる。底面が狭い形。土師器杯・鉢・壺破片が少量あるが、SI-49から混入した可能性が高い。遺物はP-246に流入したものかもしれない。								
SK-243	20.0-17.5	不整形	SI-48→SI-45→SK-243	2.65	1.13	0.13	N-47°-W	単層
古墳後期のSI-45、古墳中期のSI-48を切る。覆土が軟らかいので、かなり新しい時期の可能性もある。土師器少量と須恵器甕3片があり、SI-45・48から混入した可能性が高い。使用・加工・被熱痕のない自然の河原石17点出土。								
SK-253	20.0-18.5・20.0-19.0	楕円形	SK-278(?)→SK-77→SK-253	2.15	1.56	0.29	N-52°-W	自然埋没状
時期不明のSK-77を切る。遺物は少量の土師器片でSK-77・253のどちらから出土したのか不明。SK-77の遺物として土師器杯片を図示した。								
SK-254	20.0-17.0	円形	SK-46より新	2.32	1.88	0.16	N-60°-E	焼土粒少量あり
古墳中期のSK-46を切る。円形で平底だが、古墳時代の円筒形土坑と考えるには浅すぎる。古墳中期と見られる土師器杯・高杯・壺甕類がやや多く、須恵器二重区片も含む。平安時代のSK-235と同一個体の須恵器甕小破片1片や、中～近世の疑いがある土師質小皿(かわらけ)(?)も1片ある。								
SK-262	20.0-18.5・20.5-18.5	長方形	重複なし	2.13	0.82	0.18	N-20°-E	自然埋没状
浅い土坑。イモ穴(近代以降の農業関連土坑)のようにも見える。遺物なし。								
SK-264	19.5-17.5	不整形	SI-47・SK-92より新	3.16	2.28	0.37	N-40°-W	人為埋戻し状
古墳後期のSI-47、中世のSK-92を切る。調査時の所見では、ローム塊が多く入る不整形土坑で、攪乱の可能性もある。古墳中・後期の土師器・須恵器片と中世の土師質土器(かわらけ)片が少量あり、古墳後期のSI-47や中世のSK-92からの混入と見られる。								
SK-267	19.0-18.0	楕円形	重複なし	1.52	1.26	0.44	N-42°-W	自然埋没状 炭粒あり
古墳中期が主体と見られる土師器杯・壺・甕類の小破片と縄文時代の剥片があるが、この土坑に伴うものではないと見られる。								
SK-271	20.0-18.0	楕円形	SI-45より新	1.65	1.38	0.14	N-65°-W	
古墳後期のSI-45を切る。周辺にある時期不明のSK-317・276・277や、古墳時代のSK-275と類似する。古墳中～後期の土師器小片があり、SI-45から混入したと思われる。								
SK-272	19.5-18.0	楕円形	重複なし	1.00	0.68	0.21	N-12°-E	自然埋没状
縄文前期末～中期初頭(結節縄文)の深鉢胴部が1片あり、覆土のしまりが強い。縄文時代土坑の可能性もある。								
SK-273	19.5-18.5	楕円形	重複なし	1.83	0.62	0.15	N-30°-W	炭粒あり
中～近世のSD-204と平行するので同時期の可能性もある。土師器小片3点があり、混入と見られる。								
SK-276	19.5-17.5	円形	SI-47→SK-276→SK-92	1.23	1.10	0.18		単層
古墳後期以降、中世以前の土坑。中世のSK-92に切られる。調査時の所見では古墳後期のSI-47の貼床を切る。SK-271の項を参照。古墳後期の土師器が少量あり、SI-47からの混入が多いと見られる。								
SK-277	20.0-18.0	円形	重複なし	2.24	2.09	0.12		単層
SK-271の項を参照。古墳中～後期の土師器小片が少量あり、混入と見られる。								
SK-278	20.0-18.5	長方形	SK-278(?)→SK-77→SK-253	2.08	0.84	0.28	N-10°-E	
土層断面図はないが、中層に軟らかいローム、下層に暗褐色土が入る。時期不明のSK-77の底面で確認した遺構なので、SK-77に切られる可能性がある。遺物なし。								
SK-287	19.5-19.0	円形	SI-56より新	1.23	1.17	0.11		単層
古墳中期のSI-56を切る。煤の付着した自然礫2点と古墳中期の土師器が5片あり、SI-56から混入したと見られる。								
SK-288	20.5-18.5	楕円形	SI-59→SK-288→SD-201a	残3.29	0.82	0.40	N-46°-E	単層
古墳後期のSI-59を切る。近世のSD-201aに切られる。調査時の所見では、近代以降の農業関連土坑(イモ穴)かとされている。SI-59からの混入と見られる土師器小片が少量ある。								
SK-289	20.5-19.0	隅丸長方形	SI-59→SK-289→SD-201a	2.30	0.83	0.16	N-18°-E	自然埋没状 焼土粒あり
近世のSD-201aに切られる。古墳後期のSI-59と近接し、おそらくSI-59を切る。上部が西側へ続く(断面図の3層)。調査時の所見では、近代以降の農業関連土坑(イモ穴)ではないらしい。時期不明のSK-290と同時期かと推定される。古墳時代の土師器片少量・須恵器1片と平安時代の須恵器杯口縁部1片出土。								
SK-290	20.5-19.0	楕円形	重複なし	1.62	0.69	0.15	N-18°-E	人為埋戻し状
時期不明のSK-289と同時期かと推定される。調査時の所見によると、風倒木に切られる。土師器小片3点出土。								
SK-294	22.0-15.5	不整形三角形	重複なし	0.62	0.46	0.10		単層 白色粒と焼土・炭あり
覆土に焼土と炭を含む。遺物なし。								
SK-297	19.5-17.5	不整形長方形	SI-47(?)・SK-92→SK-297→SD-263	5.16	1.98	0.13	N-51°-W	白色粒あり
中～近世のSD-263より古い。SD-263の一部(掘り返す前の土層)ではないかとも見られる。古墳後期のSI-47と中世のSK-92を切ると見られるが、土層断面図がなく不明確。土師器小片少量と縄文時代の敲石・剥片が混入。								
SK-298	19.5-17.5	円形	SD-263より新	0.74	0.60	0.08		単層 白色粒あり
中～近世のSD-263を切る。遺物なし。								
SK-299	19.5-18.5	長方形	SI-59より新	0.94	0.70	0.39	N-28°-E	自然埋没状 焼土粒あり
古墳後期のSI-59を切る。SK-300との前後関係は不明。調査時の所見ではイモ穴(近代以降の農業関連土坑)と考えられている。遺物なし。								
SK-300	20.5-18.5・20.5-19.0	楕円形	SI-59→SK-301→SK-300	残1.17	残0.77	0.06	N-70°-E	単層
古墳後期のSI-59覆土中にあり、SI-59覆土を切る。時期不明のSK-301を切る。SK-299との前後関係は不明。土師器杯が1片あり、SI-59からの混入かと思われる。								
SK-301	20.5-19.0	推定円形	SI-59→SK-301→SK-300	残0.88	0.86	0.26		焼土粒あり
古墳後期のSI-59カマドを切る。時期不明のSK-300に切られる。土師器杯・甕片があり、SI-59からの混入かと思われる。								
SK-306	20.0-19.5	楕円形	重複なし	0.95	0.48	0.10	N-82°-W	単層
周辺に関連しそうな土坑が見られない。古墳中期のSD-304bと覆土が類似するが、覆土のしまりは弱い。遺物なし。								
SK-317	19.5-18.0	円形	重複なし	1.60	1.52	0.33		単層
古墳時代土坑の可能性あり。周辺にある時期不明のSK-271・276・277や古墳時代のSK-275と類似する。古墳中～後期の土師器・須恵器小片少量、椀形鍛冶滓片1点、自然礫11点出土。								
SK-318	20.0-17.5	不整形円形	SK-46・92より古	1.20	0.70	0.15		自然埋没状
古墳時代土坑の可能性あり。古墳中期のSK-46を掘ってから確認したので、古墳中期以前と考えられるが、土層断面図はない。中世のSK-92に切られる。土師器壺甕類小片少量あり。								
SK-321	19.5-17.5	楕円形	SD-263より古?	0.52	0.37	0.14	N-60°-E	単層
中～近世のSD-263内にあり、調査時の所見によるとSD-263に切られる可能性がある。遺物なし。								
SK-327	20.0-18.5	隅丸長方形	重複なし	1.00	0.56	0.15	N-33°-E	自然埋没状
調査時の所見では、SK-328・329とともに近代以降の農業関連土坑(イモ穴)の可能性もある。近世のSD-204と平行するので同時期の可能性もある。遺物なし。								
SK-328	19.5-18.5	隅丸長方形	SI-104より新	1.62	0.70	0.32	N-26°-E	自然埋没状 炭粒あり
土層断面図はないが、調査時の所見では古墳中期のSI-104を切る。近世のSD-204と平行するので同時期の可能性もある。SI-104などからの混入かと思われる土師器2片あり。SK-327の項も参照。								

第5章 権現山遺跡 SG10区



- SG10区SK-300
 1 黒褐色 微細な黒色土塊多、しまり有、粘性有。
 2 黒褐色 焼土粒・ローム微粒・微細な火山灰が混入、しまり有、粘性なし。
- SG10区SK-301
 1 黒褐色 ローム微粒、黒色土が混入、焼土粒若干。
 2 暗黄褐色 地山と1層との混合土、しまりなし、粘性有。
- SG10区SK-306
 1 暗褐色 SD-304bの1層と類似、ローム微粒多、しまりなし、粘性なし。
- SG10区SK-317
 1 暗褐色 ローム塊(径3cm)少、軟。
- SG10区SK-318
 1 黒褐色 ローム粒少、やや軟。
 2 暗黄褐色 黒褐色土多、ローム小塊、粒やや多、やや硬。
- SG10区SK-321
 1 黒褐色 ローム小塊、粒やや多、硬くしまる、粘性強。
- SG10区SK-327
 1 暗褐色 ローム小塊、粒微量、今市軽石細粒極微量、しまり強。
 2 褐色 ローム粒少、ローム小塊微量、今市軽石細粒極微量、しまり強。
 3 暗黄褐色 ローム小塊、粒多、ローム中塊微量、今市軽石細粒極微量、しまり強。
- SG10区SK-328
 1 暗褐色 ローム小塊、粒・今市軽石細粒微量、しまり強。
 2 褐色 ローム粒多、ローム小塊少、ローム中塊微量、今市軽石細粒・炭化物極微量、しまり強。
 3 暗黄褐色 ローム粒・炭化物微量、今市軽石細粒極微量、しまり強。
- SG10区SK-329
 1 暗褐色 ローム小塊、粒微量、今市軽石細粒・炭化物極微量、しまり強。
 2 褐色 ローム小塊、粒多、ローム中塊微量、今市軽石細粒・炭化物極微量、しまり強。
 3 暗褐色 ローム粒・炭化物微量、今市軽石細粒極微量、しまり強。
 4 暗黄褐色 ローム中塊少、ローム小塊・ローム粒多、炭化物・今市軽石細粒極微量、しまり強。
 5 褐色 ローム小塊・ローム粒少、しまり強。

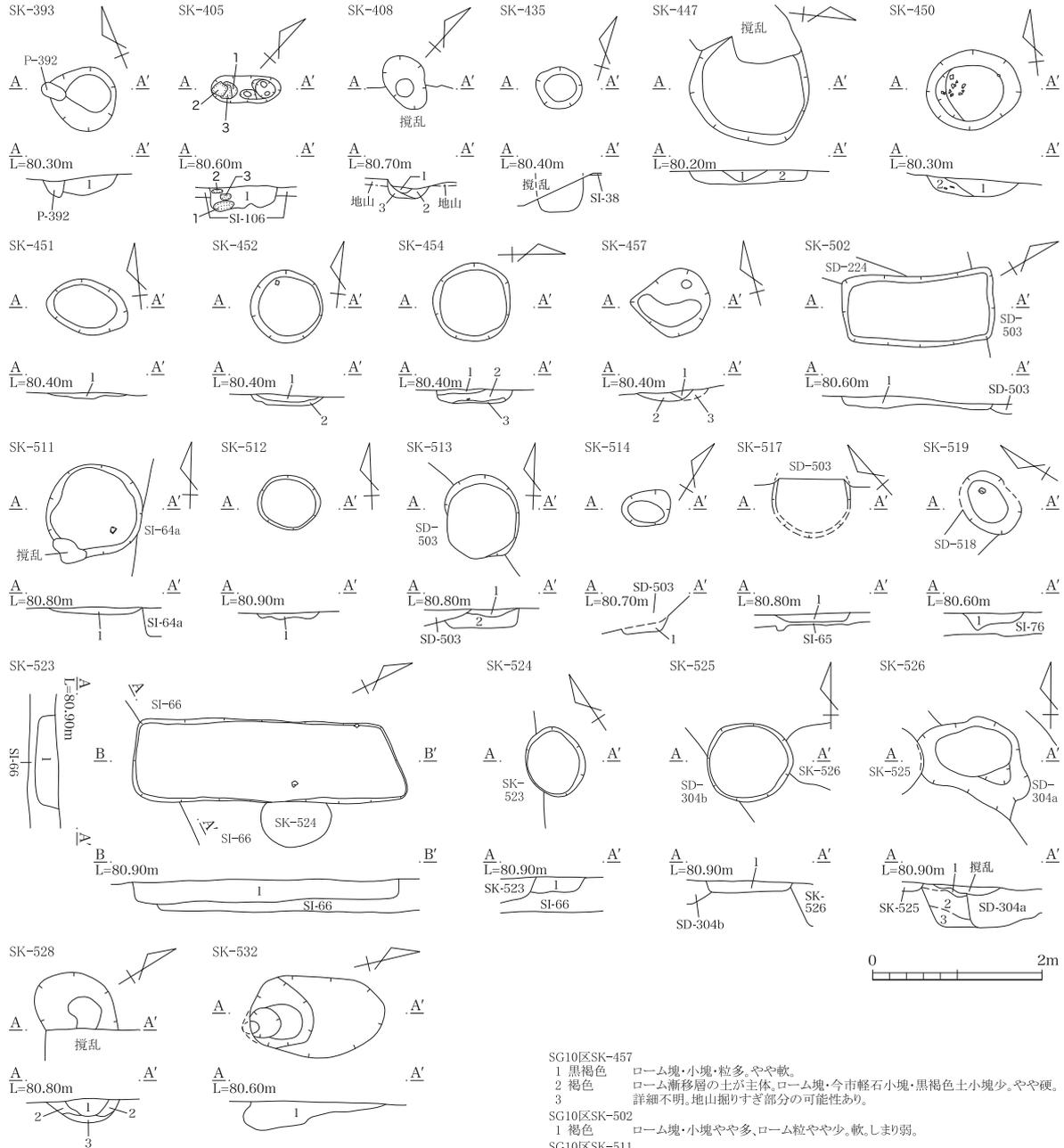
- SG10区SK-336
 1 黒褐色 ローム微粒多、ローム塊(径2~3cm)少、しまりやや有、粘性なし。
- SG10区SK-337
 1 暗褐色 ローム微粒多、しまりやや弱、粘性なし。
 2 暗黄褐色 ローム塊(径2~3cm)が混入、しまりやや弱、粘性有、掘りすぎの可能性あり。
- SG10区SK-338
 1 暗褐色 ローム微粒少、しまり弱、粘性有。
 2 暗黄褐色 1層とロームの混合層、しまり弱、粘性有。
- SG10区SK-347
 1 黒褐色 ロームと黒色土の微粒少、しまり強、粘性なし。
 2 黄暗褐色 ロームと1層との混合土、しまりやや強、粘性やや有。
- SG10区SK-348
 1 暗褐色 ローム微粒を含む、微細な黒色土少、しまりやや強、粘性なし。
 2 黄暗褐色 ロームが大部分だが、1が混じる、しまり弱、粘性なし。
- SG10区SK-349 (2層は欠番)
 1 暗褐色 ローム微粒少、しまりやや弱、粘性なし。
 3 黄褐色 1層とロームの混合土、しまり弱、粘性有。
- SG10区SK-351
 1 暗褐色 ロームと黒色土の微粒若干、しまりやや強、粘性なし。
- SG10区SK-353
 1 暗褐色 ローム微粒を含む、しまり強、粘性やや有。
- SG10区SK-354
 1 黒褐色 2層に黒色土が大量混入、しまりやや強、粘性なし。
 2 暗褐色 ロームが若干混じり、1も若干混じる、しまりやや強、粘性有。
 3 暗黄褐色 2層のロームが大量混入したもの、しまりやや強、粘性有。
- SG10区SK-355
 1 黒褐色 ローム微粒、黒色土が混入、しまりやや強、粘性有。
- SG10区SK-372
 1 暗褐色 ソフトローム塊(径2cm)やや多、軟、しまりなし。
 2 暗黄褐色 ソフトローム塊(径2cm)多、軟。
 3 暗褐色 ソフトローム粒少、軟、しまりなし。

第232図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑(4) 遺構

第 30 節 時期不明の土坑

SK-329	19.5-18.5	隅丸方形	SI-104 より新	1.62	0.83	0.42	N-28° -E	自然埋没状 炭粒あり
土層断面図はないが、SI-104 の覆土から炭・焼土混じり土と土師器片が流入したと見られるので、古墳中期の SI-104 を切ると考えられる。近世の SD-204 と平行するので同時期の可能性もある。SK-327 の項も参照。								
SK-336	20.5-19.5	円形	SD-204 と重複?	1.70	0.46	0.22	N-12° -E	単層
南端が近世の SD-204 と重複するかもしれないが不明確。調査時の所見では、近代以降の農業関連土坑 (イモ穴) と考えられている。古墳中期主体の土師器小破片少量出土。								
SK-337	20.5-19.5	円形	重複なし	1.06	1.03	0.26		下層は地山の可能性もある
底面に凹凸あり。遺物なし。								
SK-338	20.5-19.0	不整形	重複なし	0.92	0.77	0.27		自然埋没状
底面に凹凸あり。土師器壺類が 1 片あるが、伴うものとは見られない。								
SK-341	19.5-17.5	楕円形	SK-339 → SI-47 → SK-341 → SD-263	0.52	0.36	0.24	N-50° -W	土層断面の記録なし
古墳後期の SI-47 床面で確認したので、SI-47 より新しいと思われる。古墳時代の SK-339 を切る。中～近世の SD-263 に切られると見られる。縄文時代の安山岩剥片 1 点混入。								
SK-347	20.5-18.0	円形	SI-108 → SI-110 → SK-347	1.20	0.98	0.18		
古墳中期の SI-108 と古墳後期の SI-110 を切る。土師器片が少量あり、SI-108・110 などからの混入と見られる。								
SK-348	20.5-18.5・21.0-18.5	楕円形	重複なし	1.19	1.12	0.24	N-55° -W	自然埋没状
時期不明の SK-349 と近接し、近い時期の可能性もある。底面が北西部で約 15cm 低くピット状に凹む。土師器壺類の口縁部 1 片と自然礫 1 点出土。								
SK-349	20.5-18.5	楕円形	重複なし	1.26	1.02	0.18	N-50° -W	
時期不明の SK-348 と近接し、近い時期の可能性もある。土師器小破片が少量あるが、伴うものとは見られない。								
SK-351	21.0-18.5	長方形	重複なし	2.33	0.66	0.27	N-31° -E	単層 (人為埋戻し?)
近代以降の農業関連土坑 (イモ穴) に類似する。土師器壺類の底部 1 片が底面から出土。								
SK-353	18.5-17.0	長方形	SE-237 より古	2.50	0.60	0.28	N-22° -W	単層 (人為埋戻し?)
中世の SE-237 に切られるので、中世以前。時期不明の SK-354 と主軸を揃えて並ぶので、近い時期の土坑かと推測される。古墳中期主体の土師器小片が 30 片あり、周辺からの混入と見られる。								
SK-354	18.5-17.0・19.0-17.5	隅丸長方形	重複なし	1.20	0.55	0.12	N-28° -W	人為埋戻し状
時期不明の SK-353 と主軸を揃えて並ぶので、近い時期の土坑かと推測される。遺物なし。								
SK-355	20.5-17.5	円形	SI-106 より新	1.04	0.93	0.17		単層
古墳中期の SI-106 を切るので古墳中期より新しい。土師器杯・高杯・壺・甕の小破片が 22 片あり、大半は SI-106 からの混入と見られる。								
SK-372	19.0-18.0	楕円形	SD-263・319 と重複	1.95	1.04	0.55	N-50° -E	自然埋没状
古墳時代の SD-319 および中～近世の SD-263 と重複するが新旧不明で、覆土が軟らかい SK-372 が新しい可能性もある。古墳時代の SI-34 の北東隅にあるピットと続くようにも見える。遺物なし。								
SK-393	20.0-18.5	円形	P-392 より古	0.83	0.76	0.26		単層
攪乱 (SX-308 北側掘り込み) に上面が切られる。時期不明の P-392 に切られる。								
SK-405	20.5-18.0	楕円形	SI-106 より新	0.82	0.32	0.32	N-50° -E	
古墳中期の SI-106 の貼床を切るので、古墳中期より新しい。SG10 区中央部の柱穴状土坑群と関連する土坑かもしれない。煤や被熱痕のある礫が 3 点出土。								
SK-408	21.0-18.5	楕円形	重複なし	0.70	0.48	0.17	N-70° -W	
覆土が古そうに見えるので、古代以前の可能性がある。南東部の上半を攪乱坑に切られる。遺物なし。								
SK-435	19.5-16.5	円形	SI-38 と重複	0.55	0.50	0.45		土層断面の記録なし
古墳中期の SI-38 内にあるが、上面を削られているので新旧不明。土師器が 3 片あり、SI-38 や古墳時代の SK-439 からの混入かと推測される。調査時の所見では、SK-435 と 439 が SI-38 の貯蔵穴の可能性も考えられている。								
SK-447	16.5-18.0	不整形	重複なし	1.47	1.40	0.18		自然埋没状 テフラ (?) と焼土粒あり
西側が木の根などによる攪乱を受ける。上面に暗灰色土塊 (FA 火山灰?) があるので、古墳時代の土坑の可能性あり。古墳中期の土師器 5 片と縄文土器 1 片出土。								
SK-450	17.5-18.0	楕円形	重複なし	1.12	0.96	0.28	N-78° -E	自然埋没状 焼土粒あり
古墳時代の土坑の可能性あり。浅い土坑。西半部の中～下位に古墳時代中～後期の土師器が 11 片まとまっているが、混入の可能性もある。								
SK-451	17.5-17.5	楕円形	重複なし	0.98	0.64	0.08	N-80° -W	単層 白色粒あり
上面に白色粒 (FA 火山灰?) が極少量あるので、古墳時代の土坑の可能性あり。遺物なし。								
SK-452	17.5-17.5・17.5-18.0	円形	重複なし	0.88	0.85	0.15		自然埋没状 白色粒あり
白色粒 (テフラ?) を少量含み、古墳時代の土坑の可能性あり。古墳中期 (?) の土師器 4 片出土。								
SK-454	17.0-17.5	円形	重複なし	0.97	0.93	0.18		人為埋没?
古墳時代の SI-2 の北側に近接。浅い平底の土坑。土師器杯小片 1 点出土。								
SK-457	20.5-18.5	不整形	重複なし	0.95	0.80	0.20	N-74° -W	
底面の凹凸がやや多い。土師器壺類の胴部 1 片出土。								
SK-502	21.5-18.0	長方形	SD-224・503 より新	1.80	0.84	0.15	N-31° -W	単層
近代以降の農業関連土坑 (イモ穴)。時期不明の SD-224 と近世の SD-503 を切る。遺物なし。								
SK-511	22.0-17.5	円形	SI-64 より新	1.18	1.13	0.10		
古墳時代の SI-64a を切る。時期不明の SK-512・517・524 と覆土や形状が似る。時期不明の SK-536・537 と類似する。一部ピット状の攪乱あり。土師器壺胴部 1 片が混入。								
SK-512	22.0-17.5	円形	重複なし	0.75	0.67	0.09		単層
SK-511 の項を参照。遺物なし。								
SK-513	22.0-17.5	円筒形	SD-503 より古	1.03	0.93	0.24		
近世の SD-503 に切られる。覆土は SK-511 と似るが、それよりも少し軟らかいので同時期ではないと見られる。土師器小片 7 点があり、SI-64 などからの混入と見られる。								
SK-514	22.0-17.5	楕円形	SD-503 より古?	0.60	0.42	0.13	N-53° -E	単層
近世の SD-503 の底面で確認したので、それより古い可能性が高い。遺物なし。								
SK-517	22.0-17.5	円形	SI-65・SD-503(?) より新	0.93	残 0.76	0.10		単層
古墳後期の SI-65 を切る。近世の SD-503 を切るかもしれないが不明確。時期不明の SK-511・512・524・525 と覆土や形状が似るので、同時期の可能性もある。古墳後期の土師器があり、SI-65 からの混入と見られる。								
SK-519	21.5-19.0	楕円形	SI-76・SD-518 より新	0.83	0.58	0.22	N-21° -E	単層
古墳中期の SI-76 と時期不明の SD-518 を切る。安山岩の礫 1 点出土。								
SK-523	22.5-17.5	長方形	SI-66 → SK-524 → SK-523	3.14	0.98	0.30	N-25° -E	人為埋戻し単層 白色粒あり
古墳時代の SI-66 と時期不明の SK-524 を切る。底面が平坦。かなり新しい時代の土坑と見られ、攪乱の可能性もあるが埋土が硬いので遺構として扱う。SI-66 からの混入と見られる土師器少量あり。								
SK-524	22.5-17.5	円形	SI-66 → SK-524 → SK-523	0.84	0.70	0.20		単層
古墳中期の SI-66 を切る。時期不明の SK-523 に切られる。底面が平坦。SK-517 の項を参照。遺物なし。								
SK-525	22.0-17.5・22.5-17.5	円形	SD-304b・SK-526 より新	1.02	0.97	0.15		単層
時期不明の SK-526、古墳時代の SD-304b を切る。浅く底面が平坦。SK-517 の項を参照。遺物なし。								
SK-526	22.5-18.0	長円形	SD-304a・SK-525 より古	1.42	0.90	0.52	N-70° -W	自然埋没状 今市軽石粒あり
古墳中期以前の土坑だが、時期を限定できない。時期不明の SK-525 と古墳中期の SD-304a に切られる。やや深い。遺物なし。								
SK-528	22.5-19.5	楕円形?	楕円形?	残 1.08	0.70	0.29	N-68° -E	自然埋没状 焼土塊あり
旧番号 S-531 としていた近代以降の農業関連土坑 (イモ穴) に東半が切られる。土師器壺胴部 1 片があり、混入の可能性もある。								
SK-532	21.5-19.0	楕円形	重複なし	1.62	1.00	0.36	N-55° -W	単層
縄文後期土器 (堀之内 1 式) の小片が 1 片だけ出土した。縄文時代の土坑かもしれないが断定はできない。一端が極端に深い部分は埋土が黒く、浅い部分はロームに近い色調。								

第5章 権現山遺跡 SG10 区



- SG10区SK-393
1 褐色 ソフトローム粒・白色粒多、今市軽石粒微量。しまり有。
- SG10区SK-405
1 暗褐色 ローム(径3~5mm)・黒色土混入。しまりやや弱。粘性やや有。
- SG10区SK-408
1 暗黄褐色 ローム粒・斑状の暗褐色土塊やや多。やや軟。
2 黒褐色 ローム粒・今市軽石粒少。やや軟。
3 暗褐色 ローム小塊やや少。硬。
- SG10区SK-435
埋土の特徴は不明。
- SG10区SK-447
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粒少、暗灰色土小塊(テフラカ?)極少、焼土粒若干。やや硬。
2 黒褐色 ローム塊・小塊・粒少。やや硬。
- SG10区SK-450
1 黒褐色 ローム小塊・粒やや多、焼土粒極少。やや硬。
2 暗褐色 ローム小塊・粒多、ローム塊少。やや硬。
- SG10区SK-451
1 黒褐色 粘質土。地山暗褐色土塊やや多、ローム小塊・粒と白色粒(テフラ?)極少。硬。
- SG10区SK-452
1 黒褐色 ローム粒やや多、白色粒極少。硬。
2 黒褐色 ローム小塊・粒多。硬。
- SG10区SK-454
1 褐色 ローム粒多、ローム小塊やや多。やや硬。
2 黒褐色 ローム粒やや多、ローム小塊少。やや軟。
3 暗黄褐色 ソフトローム小塊主体で黒褐色土少量をはさむ。やや軟。

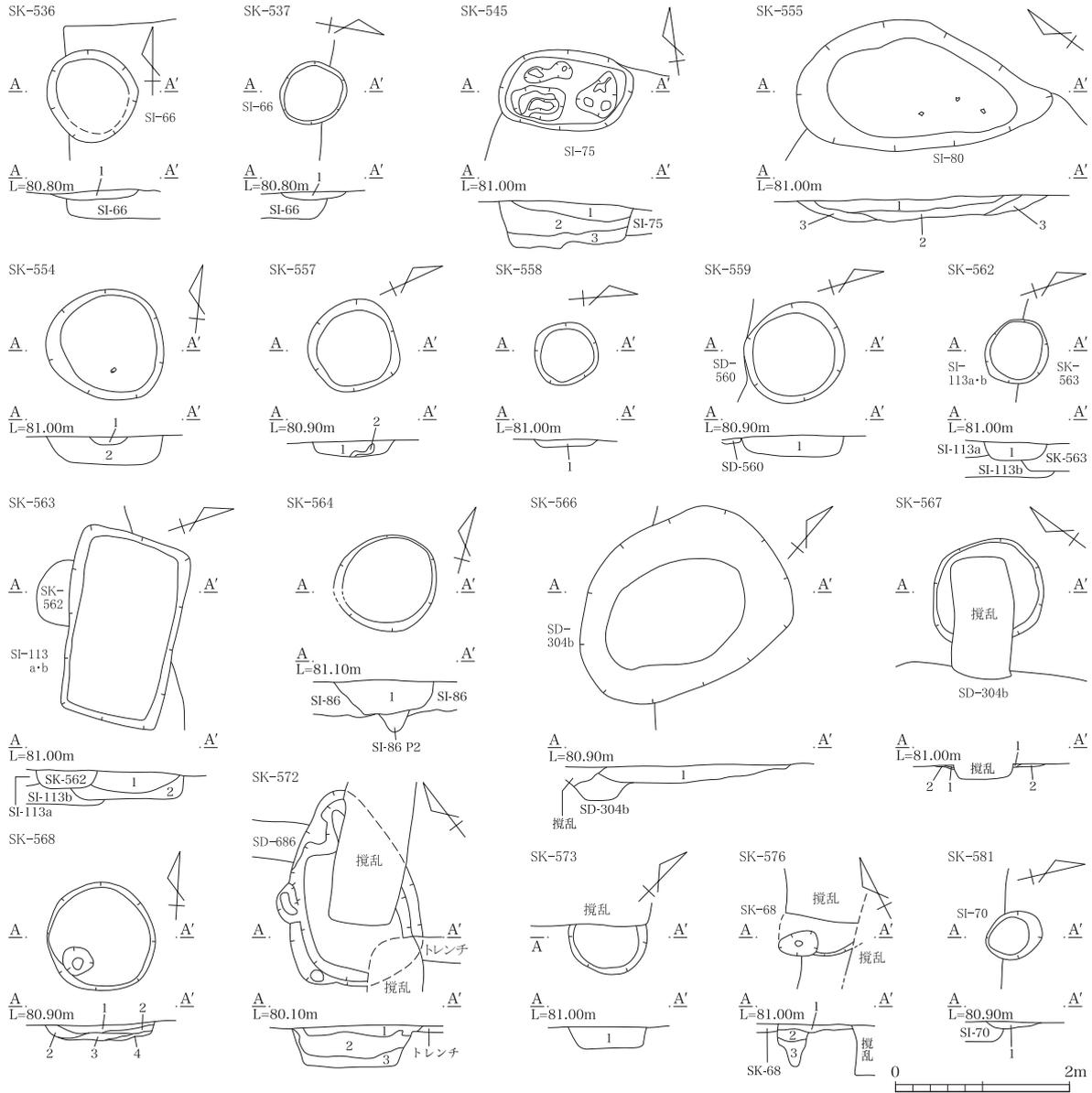
- SG10区SK-457
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粒多。やや軟。
2 褐色 ローム漸移層の土が主体。ローム塊・今市軽石小塊、黒褐色土小塊少。やや硬。
3 詳細不明。地山掘りすぎ部分の可能性あり。
- SG10区SK-502
1 褐色 ローム塊・小塊やや多、ローム粒やや少。軟。しまり弱。
- SG10区SK-511
1 黒褐色 暗褐色土塊多、ローム塊(1~3cm)少。しまり強。粘性やや強。
- SG10区SK-512
1 黒褐色 暗褐色土塊多。しまりやや強。粘性やや強。
- SG10区SK-513
1 黒褐色 ローム小塊・粒少。軟。
2 黒褐色 ローム塊・小塊やや多、ローム粒少。やや軟。
- SG10区SK-514
1 暗黄褐色 ローム小塊・粒多。やや硬。しまり強。
- SG10区SK-517
1 黒褐色 ローム粒やや多、ローム小塊少。軟。
- SG10区SK-519
1 黒色 ローム微粒少、火山灰粒極微量。暗褐色の塊も混入。しまりやや強、粘性有。
- SG10区SK-523
1 黒褐色 ローム小塊・粒やや少、白色粒(テフラ?)極少。やや軟。しまりやや弱。
- SG10区SK-524
1 暗褐色 褐色土塊やや多、ローム粒極少。やや硬。
- SG10区SK-525
1 黒褐色 ローム粒少、ローム小塊極少。やや軟。
- SG10区SK-526
1 褐色 ローム粒やや多。やや硬。
2 暗黄褐色 暗褐色土やや多、ローム粒少。今市軽石粒(径7mm)極少。やや硬。
3 明黄褐色 ローム塊主体。暗褐色土少。やや硬。
- SG10区SK-528
1 暗褐色 ローム粒微量、ローム小塊・焼土小塊極微量。しまり強。
2 褐色 ローム粒少、ローム小塊微量、焼土小塊極微量。しまりやや強。
3 暗黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少。しまりやや強。
- SG10区SK-532
1 暗褐色 暗褐色土とロームがシミのように混在。しまりやや強、粘性有。

第 233 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (5) 遺構

第 30 節 時期不明の土坑

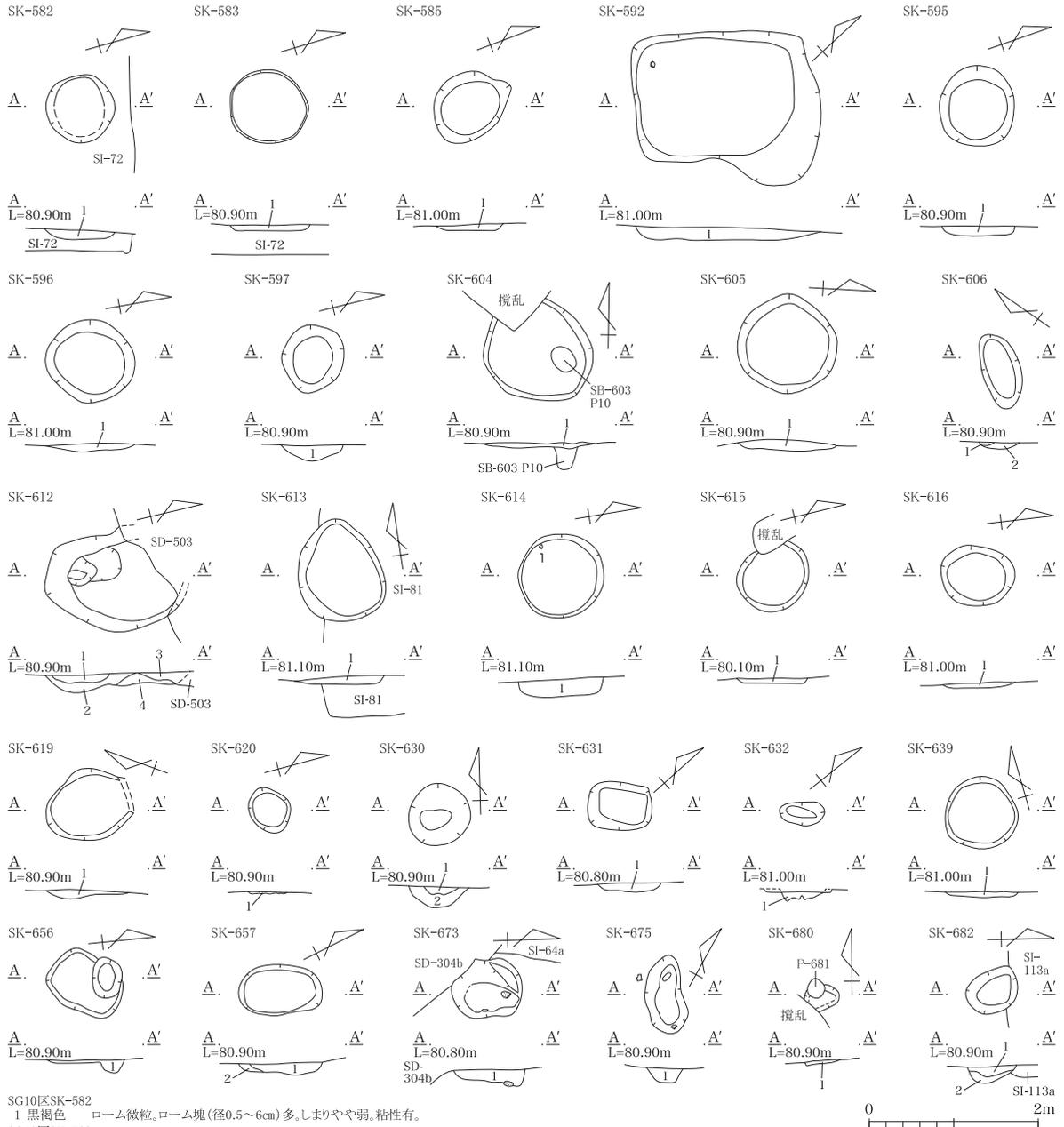
SK-536	22.5-17.0	円形	SI-66より新	1.08	1.04	0.14		単層
古墳中期のSI-66を切る。時期不明のSK-511などと似た土坑。古墳時代(中期?)の土師器が5片あり、SI-66からの混入と見られる。								
SK-537	22.5-17.5	円形	SI-66より新	0.80	0.72	0.13		単層
古墳中期のSI-66を切る。時期不明のSK-511などと似た土坑。遺物なし。								
SK-545	23.0-19.0	隅丸長方形	SI-75より新	1.52	0.93	0.56	N-82°-W	焼土・炭塊あり
古墳中期のSI-75を切る。底面に凹凸が多い。土師器10片が出土し、大半はSI-75から混入したと見られる。								
SK-554	24.0-19.0	円形	重複なし	1.40	1.28	0.35		自然埋没状 焼土・炭塊あり
調査時の所見では、時期不明のSK-564と類似。古墳時代の円筒形土坑集中地区にあり、古墳時代の可能性もあるが、根拠が薄い。古墳後期初めの土師器杯と縄文土器が各1片出土。								
SK-555	24.0-18.5・24.0-19.0	楕円形	SI-80より新	2.95	1.50	0.33	N-52°-W	自然埋没状 炭粒あり
古墳中期のSI-80を切る。土師器4片が出土し、SI-80からの混入と見られる。								
SK-557	22.5-18.5	円形	重複なし	1.10	1.06	0.20		大半が単層
時期不明のSK-558・559と覆土が似る。土師器4片が出土し、SK-559と同一個体と見られる1片を含む。遺物は混入と見られる。								
SK-558	22.5-18.5	円形	重複なし	0.68	0.76	0.10		単層
時期不明のSK-557・559と覆土が似る。土師器杯1片が出土し、混入と見られる。								
SK-559	22.5-18.5	円形	重複なし	1.23	1.12	0.25		単層
時期不明のSK-557・558と覆土が似る。時期不明のSD-560と接するが重複はしない。土師器杯3片が出土し、SK-557と同一個体と見られる1片を含む。遺物は混入と見られる。								
SK-562	22.5-19.0	楕円形	SI-113→SK-563→SK-562	0.81	0.70	0.23	N-54°-W	単層
古墳中期のSI-113a・bと時期不明のSK-563を切る。土師器甕3片が出土し、SI-113a・bが南に隣接するSI-74からの混入と見られる。								
SK-563	22.5-19.0・23.0-19.0	長方形	SI-113→SK-563→SK-562	2.18	1.26	0.35	N-60°-W	自然埋没状? 焼土・炭粒あり
古墳中期のSI-113a・113bを切る。時期不明のSK-562に切られる。P.701と重複する位置だが、土層が不明。P.701がSI-113bを切るならば重複し、P.701がSI-113bに切られるならば重複しないということになる。調査時の記録では石製模造品が出たとされるが確認できない。土師器小破片があり、SI-113a・bからの混入と見られる。								
SK-564	24.0-19.0	円形	SI-86より新	1.21	1.12	0.41		単層
古墳中期のSI-86覆土中にあり、SI-86を切る。調査時の所見では、時期不明のSK-554と似た土坑。古墳時代の円筒形土坑集中地区にあり、古墳時代の可能性もあるが、根拠が薄い。土師器小破片が6点あり、SI-86からの混入かと見られる。								
SK-566	22.5-17.5	楕円形	SD-304a→SD-304b→SK-566	2.60	2.03	0.23	N-15°-E	人為埋戻
古墳中期のSD-304bを切る。古墳中期(?)の土師器5片と縄文土器1片出土。土師器はSD-304bからの混入と見られる。								
SK-567	23.0-17.5	円形	重複なし	1.38	0.30	0.07		自然埋没状?
近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に中央を大きく切られる。土師器小破片が4点あるが、この土坑には伴わないと見られる。								
SK-568	22.5-17.5	円形	重複なし	1.32	1.25	0.24		人為埋戻
SI-66より古い風倒木を切る。遺物なし。								
SK-572	22.5-18.0	不整形	SD-686より新(?)	2.30	1.60	0.50	N-48°-E	
時期不明のSD-686を切る可能性が高い。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に切られる。調査時の記録では「蠟石」が出土したということから近代の可能性あり。その他の遺物はない。								
SK-573	22.5-18.0	円形	重複なし	0.90	0.56	0.28		単層 人為埋没(?)
近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に切られる。時期不明のSK-585・685に類似する。古墳中期(?)の土師器7片と粘土塊1点があるが、混入と見られる。								
SK-576	23.0-17.5	楕円形	SK-68より新	復1.02	0.41	0.50	N-70°-W	人為埋没
径45cm×28cmの柱状の凹みを持つ土坑。時期不明のSK-68を切る。東側を近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に切られる。遺物なし。覆土にロームが多いので埋め戻し可能性がある。								
SK-581	23.0-18.0	楕円形	SI-70より新	0.66	0.55	0.10	N-2°-E	単層
古墳後期のSI-70を切る。浅い楕円形土坑。遺物なし。								
SK-582	23.0-18.5	円形	SI-72より新	0.84	0.82	0.14		単層
古墳後期のSI-72覆土中にあり、SI-72を切る。遺物なし。								
SK-583	23.0-18.5	円形	SI-72より新	0.93	0.90	0.11		単層
古墳後期のSI-72覆土中にあり、SI-72を切る。遺物なし。								
SK-585	22.5-18.0・23.0-18.0	楕円形	重複なし	1.01	0.78	0.10	N-10°-E	単層 人為埋没(?)
時期不明のSK-573・685に類似する。遺物なし。								
SK-592	23.0-18.0・23.0-18.5	隅丸長方形	重複なし	2.22	1.52	0.19	N-44°-E	単層
大きさに対して非常に浅い。土師器甕胴部が1片あるが、混入と見られる。								
SK-595	22.5-19.0	円形	重複なし	0.98	0.92	0.13		単層 焼土粒あり
時期不明のSK-596・597と類似。土師器壺頸類が2片あるが、周囲の遺構などからの混入と見られる。								
SK-596	22.5-19.0	円形	重複なし	1.06	1.00	0.12		単層 焼土小塊あり
時期不明のSK-595・597と類似。遺物なし。								
SK-597	22.5-19.0	楕円形	重複なし	0.83	0.74	0.21	N-76°-W	単層 焼土小塊あり
時期不明のSK-595・596と類似。遺物なし。								
SK-604	23.5-18.5	楕円形	重複なし	1.36	1.20	0.08	N-73°-W	単層
時期不明のSB-603の南東隅柱穴を切る。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に切られる。時期不明のSK-605と類似する。浅い土坑。遺物なし。								
SK-605	23.5-18.5	円形	重複なし	1.20	1.18	0.15		単層
時期不明のSB-603と近接するので、SB-603とは時期が異なるものと見られる。時期不明のSK-604と類似する。遺物なし。								
SK-606	23.5-18.5	楕円形	重複なし	0.93	0.45	0.10	N-43°-E	
時期不明のSB-603内にある浅い土坑。古墳中期後半頃の土師器杯小破片が1点あるが、混入と見られる。								
SK-612	24.0-18.5	不整形半円形	SD-503より新	1.72	1.25	0.26	N-37°-E	自然埋没状 炭粒あり
近世のSD-503を切るので近世以降の土坑。攪乱の可能性もある。遺物なし。								
SK-613	23.5-19.0・23.5-19.5	楕円形	SI-81より新	1.24	0.99	0.12	N-31°-W	単層 人為埋没(?) テフラあり
古墳後期のSI-81を切る。覆土にローム塊を少量含む。時期不明のSK-614～616と類似し同時期か。古墳時代の土坑の可能性もある。遺物なし。								
SK-614	23.5-19.0	円形	重複なし	1.03	1.00	0.25		単層 人為埋没(?)
古墳時代の土坑の可能性もある。覆土にローム塊を多く含む。SK-613の項を参照。古墳中期(?)の土師器小破片10片と須恵器器台1片出土。器台はSI-111等と同一個体。								
SK-615	23.5-19.0	円形	重複なし	0.88	0.80	0.09		単層
一部攪乱あり。SK-613の項を参照。古墳時代の土坑の可能性もある。遺物なし。								
SK-616	23.0-19.5	楕円形	重複なし	0.90	0.70	0.09	N-10°-W	単層
覆土の残りはわずか。時期不明のSK-613～615と類似し同時期か。古墳時代の土坑の可能性もある。遺物なし。								
SK-619	22.5-18.5	楕円形	重複なし	1.04	0.86	0.12	N-50°-W	単層
古墳中期のSI-73に近いが重複はしない。遺物なし。								
SK-620	22.5-18.5	円形	重複なし	0.58	0.48	0.03		単層
径は小さいが、土坑周囲の地山に土坑覆土が部分的に見られるため、本来は浅くともっと大きいものだったと見られる。時期不明のP-617と覆土が同様。遺物なし。								
SK-630	22.0-18.0	円形	重複なし	0.76	0.73	0.26		自然埋没状
調査時の所見によると、覆土がやや硬いので、中世よりも古い土坑ではないかと考えられる。遺物なし。								
SK-631	22.5-18.0	長方形	重複なし	0.77	0.58	0.12	N-43°-E	単層
調査時の所見によると、覆土が軟らかいので、やや新しい時期かと考えられる。遺物なし。								
SK-632	22.5-18.0	楕円形	重複なし	0.54	0.28	0.16	N-32°-E	単層
覆土がやや硬い。遺物なし。								

第5章 権現山遺跡 SG10区



- SG10区SK-536
1 暗褐色 黒褐色土塊・ローム粒多、やや硬。
- SG10区SK-537
1 黒褐色 暗褐色土塊やや多、ローム粒少、やや軟。
- SG10区SK-545
1 黒色 ローム小塊・粒と焼土粒極微量、しまりやや強。
2 黒褐色 ローム小塊少、ローム中塊・粒微量、炭化物・焼土小塊極微量。
3 暗褐色 ローム小塊・粒少、ローム大・中塊微量、炭化物・焼土小塊極微量、しまりやや強。
- SG10区SK-554
1 暗褐色 ソフトローム粒・炭化物粒多、焼土粒微量、ややしまり有。
2 暗黄褐色 ソフトローム粒超多、ソフトローム塊(径1~3cm)少、ややしまり有、粘性やや有。
- SG10区SK-555
1 暗褐色 ソフトローム粒・今市軽石粒少、ソフトローム塊(径1~3cm)・炭化物粒微量、硬。
2 暗褐色 ソフトローム粒・炭化物粒微量、硬。
3 暗褐色 ソフトローム粒多、ソフトローム塊(径1~3cm)微量、硬。
- SG10区SK-557
1 黒褐色 ロームはあまり入らず暗褐色土と黒色土が混じり合った感じ、しまりやや弱、粘性有。
2 黄色 ロームは軟らかく、バサバサしている、しまり弱、粘性有。
- SG10区SK-558
1 黒褐色 SK-557の1層と同じ。
- SG10区SK-559
1 黒褐色 SK-557の1層と同じ、黒色土が少ない。
- SG10区SK-562
1 黒色 ローム小塊・粒極微量、しまり強。
- SG10区SK-563
1 黒色 ローム小塊・粒微量、焼土小塊、炭化物極微量、しまり強。
2 黒褐色 ローム小塊・粒微量、しまりやや強。
- SG10区SK-564
1 暗黄褐色 ソフトローム塊(径1~10cm)・粒多、今市軽石粒微量、かなり硬。
- SG10区SK-566
1 黒褐色 暗黄色土塊多、黒褐色と斑に混じる、やや硬、人為埋め戻し土か。
- SG10区SK-567
1 黒色 ローム粒多、ローム小塊やや多、硬。
2 暗黄褐色 ローム塊・小塊・粒多、黒褐色土少、硬。
- SG10区SK-568
1 暗黄褐色 ローム塊・小塊・粒多、褐色土少、軟。
2 黒褐色 ローム小塊・粒少、軟。
3 黄褐色 ローム小塊・粒主体、黒褐色土少、硬。
4 黒褐色 2層と同じ。
- SG10区SK-572
1 暗褐色 表土、耕作された土と思われる、しまりやや強、粘性有。
2 黒褐色 ロームの混入なし、しまりやや強、粘性有。
3 暗黄褐色 ローム塊・茶褐色土・黒色土などの攪乱土、しまりやや強、粘性有。
- SG10区SK-573
1 黒褐色 ローム微粒と小さめのローム塊少、しまりやや弱、粘性有。
- SG10区SK-576
1 暗褐色 暗褐色土塊やや多、ローム粒少、やや硬。
2 黒褐色 ローム小塊、粒少、やや硬。
3 黒褐色 ローム塊・小塊・粒やや多、やや硬。
- SG10区SK-581
1 黒褐色 ローム小塊、粒やや多、やや軟。

第234図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑(6) 遺構

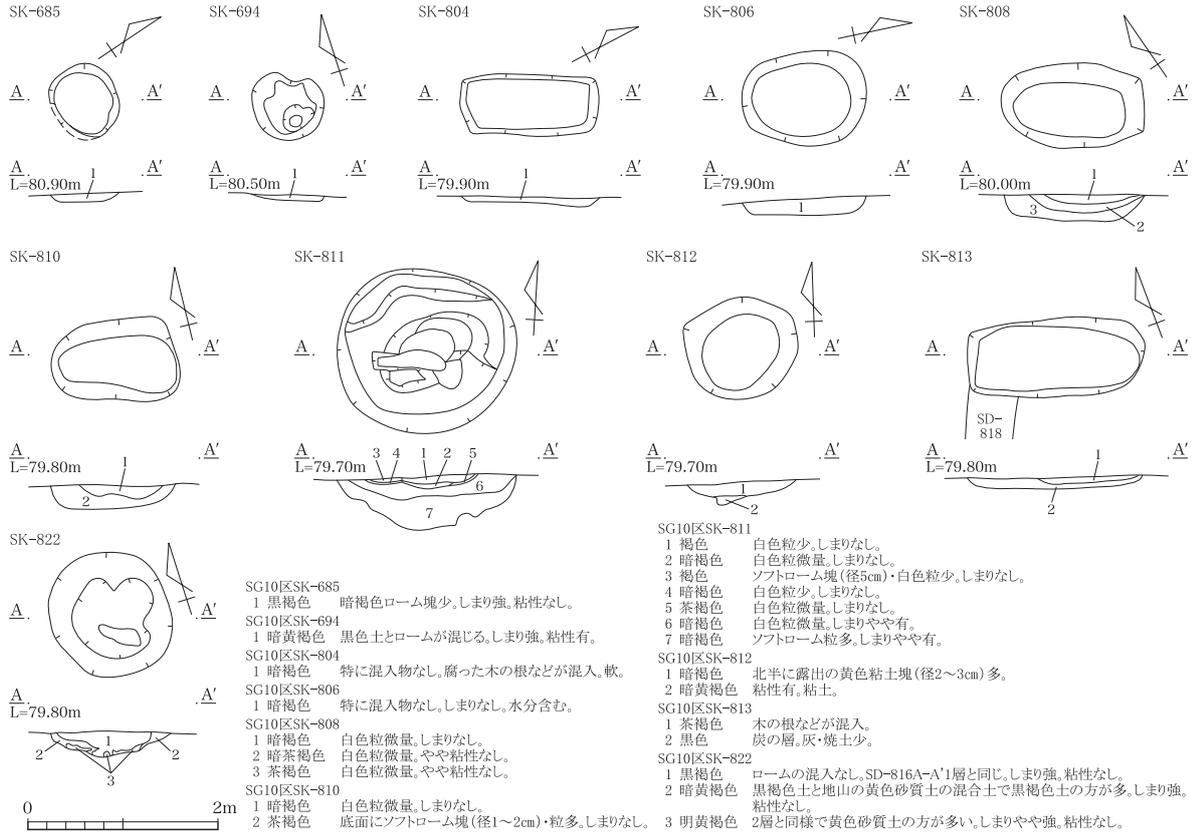


- SG10区SK-582
1 黒褐色 ローム微粒、ローム塊(径0.5~6cm)多。しまりやや弱。粘性有。
- SG10区SK-583
1 黒褐色 ローム微粒極少。しまりやや強。粘性有。
- SG10区SK-585
1 黒褐色 地山の茶褐色ロームが極少量。しまりやや強。粘性有。
- SG10区SK-592
1 暗褐色 ローム塊(径1cm)・暗褐色土・黒色土の埋土。しまりやや弱。粘性有。
- SG10区SK-595
1 黒色 ローム小塊・粒と焼土粒極微量。しまりやや強。
- SG10区SK-596
1 黒色 ローム粒・焼土小塊極微量。しまりやや強。
- SG10区SK-597
1 黒色 ローム粒・焼土小塊極微量。しまりやや強。
- SG10区SK-604
1 暗褐色 暗褐色漸移層の小塊若干。やや硬。
- SG10区SK-605
1 暗褐色 ローム小塊・粒少。暗黄褐色漸移層塊若干。やや軟。
- SG10区SK-606
1 黒褐色 ローム小塊少。ローム粒若干。やや硬。
2 黄褐色 ソフトローム主体。軟。
- SG10区SK-612
1 暗褐色 炭化物粒少。しまり有。
2 暗黄褐色 ソフトローム塊(径1~2cm)多。しまり有。粘性有。
3 褐色 ソフトローム粒多。ソフトローム塊(径1cm)少。しまり有。
4 黄褐色 ソフトローム塊(径1cm)・粒多。しまり有。粘性有。
- SG10区SK-613
1 黒褐色 若干のローム、火山灰などが塊で混じる。しまり強。粘性なし。
- SG10区SK-614
1 暗黒褐色 暗褐色土ローム塊多。黒色土塊・暗黒褐色土塊少。しまりやや弱。粘性有。
- SG10区SK-615
1 暗褐色 ローム微粒・暗黄褐色塊少。しまり強。粘性有。

- SG10区SK-616
1 暗褐色 ローム微粒少。しまりやや弱。粘性有。
- SG10区SK-619
1 暗褐色 ローム微粒少。しまり強。粘性有。
- SG10区SK-620
1 黒褐色 P-617の1層と同質。しまりやや弱。粘性有。
- SG10区SK-630
1 暗褐色 ローム粒少。硬くしまる。
2 暗黄褐色 ローム塊・小塊・暗褐色土(地山漸移層)塊多。硬くしまる。
- SG10区SK-631
1 暗褐色 ソフトローム塊・小塊やや多。しまり弱く、軟かいので新しい時期のもの。
- SG10区SK-632
1 黒褐色 ローム粒・暗褐色土(地山漸移層)塊やや多。今市軽石粒極少。やや硬。
- SG10区SK-639
1 黒褐色 粘質土。明瞭な黄色のソフトローム塊若干。とても硬。しまり強。
- SG10区SK-656
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粒非常に多。やや硬。人為埋戻土。
- SG10区SK-657
1 黒褐色 ローム小塊やや多。ローム粒・今市軽石粒少。やや硬。
2 暗褐色 1層と大差ないがローム塊(やや大)も若干含む。
- SG10区SK-673
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粒少。やや軟。
- SG10区SK-675
1 暗褐色 ソフトローム塊少。ローム粒極少。やや硬くしまる。
- SG10区SK-680
1 黒褐色 暗褐色土(地山漸移層)塊多。硬くしまる。
- SG10区SK-682
1 暗褐色 ローム小塊・粒極微量。しまりやや強。
2 暗黄褐色 ローム小塊・粒少。ローム中塊微量。しまりやや弱。

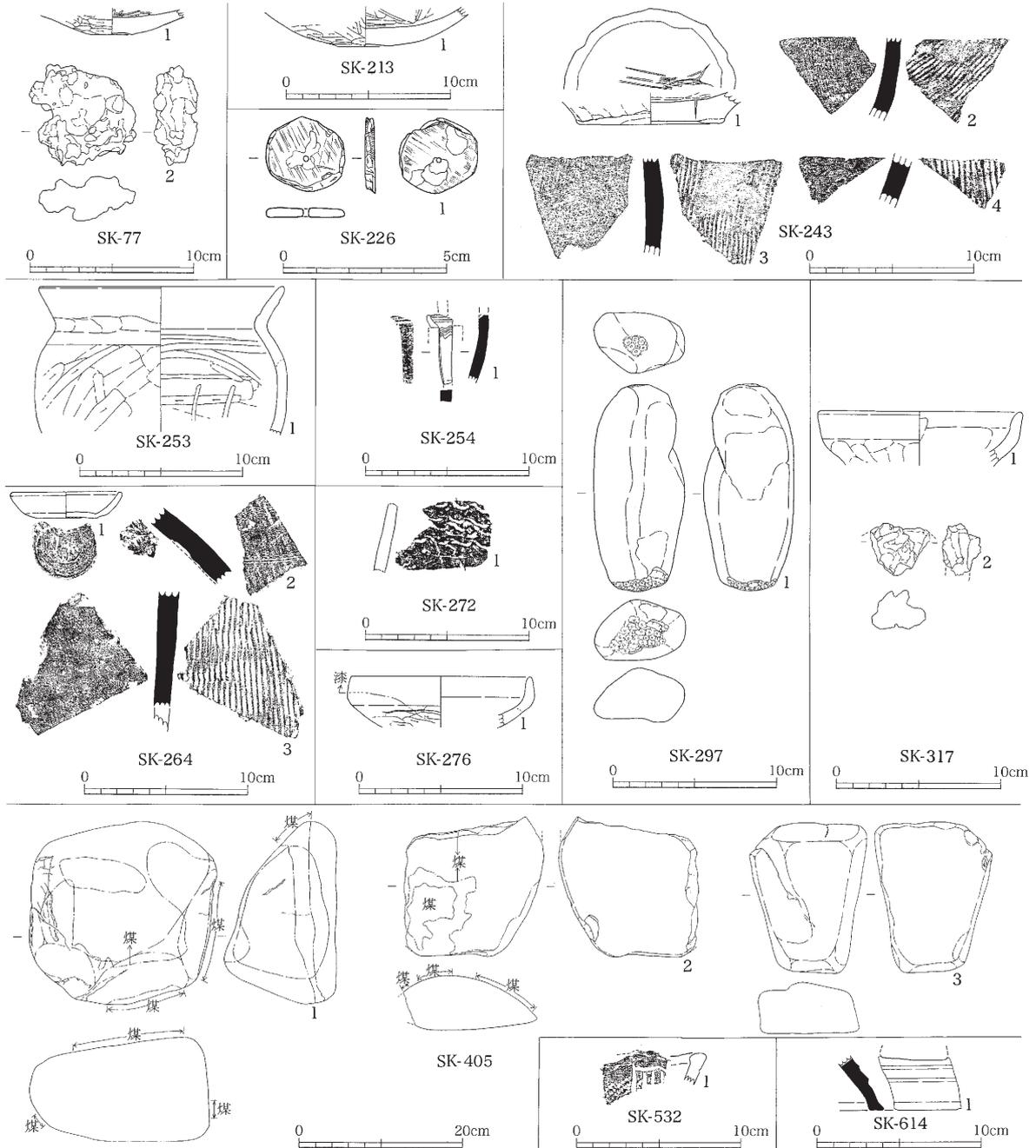
第235図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑(7) 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第236図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑(8) 遺構

SK-639	22.5-18.0	円形	重複なし	0.88	0.86	0.08		単層
浅い土坑。調査時の所見によると、周囲のピットとは土質が少し異なる。遺物なし。								
SK-656	22.5-17.5	楕円形	重複なし?	0.93	0.70	0.18	N-29° - E	単層 人為埋戻
同時存在のピット1つを伴うと観察されているが、本当に伴うかどうかは不明確。遺物なし。								
SK-657	22.5-17.5	楕円形	重複なし	0.10	0.60	0.21	N-40° - E	人為埋戻?
覆土にローム塊を含むので人為堆積の可能性もある。遺物なし。								
SK-673	21.5-18.0	不整形円形	SI-64・SD-304b と重複	0.84	0.66	0.23		単層
古墳中期のSI-64・SD-304a・304bを掘ってから確認したので、SI-64、SD-304bより古いと考えるならば、古墳中期以前の土坑の可能性はある。縄文土器と礫が各1点出土したが、覆土がやや軟らかいので縄文時代とは考えにくい。								
SK-675	22.0-18.0	楕円形	重複なし	0.95	0.45	0.22	N-47° - W	単層
溝の一部になる可能性もある。縄文土器1片と土師器高杯2片出土。								
SK-680	23.0-17.5	不整形円形	P-681より新	0.42	0.30	0.10	N-85° - E	単層
時期不明(または中世?)のP-681の上面を浅く切る。南西部が近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に切られる。浅い土坑。遺物なし。								
SK-682	22.5-19.0	不整形	SI-113aより新	残0.66	0.54	0.23	N-10° - E	自然埋没状
古墳中期のSI-113aを切るので古墳中期より新しい。遺物なし。								
SK-685	22.5-18.0・22.5-18.5	楕円形	重複なし	0.82	0.72	0.12	N-83° - W	単層
時期不明のSK-573・585と類似する。南東端部を掘乱坑に少し切られている。古墳中期(?)の土師器細片少量出土。								
SK-694	22.0-19.0	不整形円形	重複なし	0.80	0.70	0.10		単層
確認調査時のトレンチで上面が削られたと見られる。遺物なし。								
SK-804	17.5-19.0	長方形	重複なし	1.46	0.64	0.12	N-29° - E	単層
東側低地にある土坑。古墳中期を主体とする土師器小破片3片があるが、西側にある古墳時代のSK-801・803から流入したとも考えられ、この土坑に伴うとは断定できない。								
SK-806	17.5-19.0	楕円形	重複なし	1.33	1.03	0.22	N-30° - W	単層
東側低地にある土坑。古墳中期を主体とする土師器小破片が5点と縄文土器が1片あるが、この土坑に伴うとは断定できない。								
SK-808	17.5-19.5	楕円形	重複なし	1.55	0.94	0.30	N-60° - W	自然埋没状 白色粒あり
東側低地にある土坑。遺物なし。								
SK-810	17.5-19.5	楕円形	重複なし	1.38	0.86	0.28	N-77° - W	自然埋没状 白色粒あり
東側低地にある土坑。遺物なし。								
SK-811	18.0-19.5	円形	重複なし	1.92	1.81	0.60		自然埋没状 白色粒あり
東側低地にある深い土坑。古墳中期の土師器高杯2片と縄文土器1片がある。								
SK-812	18.0-19.0・18.0-19.5	円形	重複なし	1.24	1.10	0.28		
東側低地にある土坑。遺物なし。								
SK-813	17.5-19.5	長方形	SD-818より新	1.86	0.84	0.15	N-69° - W	焼土・炭・灰あり
東側低地にある土坑。平面観察により、時期不明のSD-818を切る。遺構内の下層に炭・灰・焼土がある。ごく新しいゴミ穴の可能性もある。遺物なし。								
SK-822	18.5-19.0	円形	重複なし	1.40	1.28	0.27		
東側低地にある土坑。東側にある時期不明のSD-816と覆土が共通する。遺物なし。								



第 237 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (9) 遺物

第 142 表 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG10 区 SK-77				
1 土師器 杯	高 残 1.5 底 1.6	外底面はナデで凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は多方向ヘラナデの後に多方向のやや疎らなヘラミガキ。	5YR4/6 赤褐 やや緻密 白・透明粗～細粒 やや多、灰色礫少 硬質	SK-77 または SK-253 出土底全周 SK-77・SK-253 一括
2 椀形鍛冶滓 (極小)	長 6.1 幅 6.4 厚 2.7 重 61.0	平面・正多角形をした極小の椀形鍛冶滓。完形品で左側部の一部から下面にかけてが木炭痕による凹凸を生じている。上面は中央部に向かいわずかに凹み、右側の肩部寄りが土手状に盛り上がっている。側部から下面は出入りが激しく、全体的には浅い椀形となる。点々と炉床土の痕跡を残す。上面左上手側がわずかに磁着が強め。鍛冶関連遺物構成№ 71。	表 明褐色 地 灰褐色 磁着度 3 メタル度 なし	底上 6cm 完形 1
SG10 区 SK-213				
1 土師器 杯	高 残 2.4 底 3.2	外底面は 1 方向ヘラケズリで浅い凹底状にした後に少しヘラミガキする。外面体部下半はヨコヘラケズリ後に疎らな多方向ヘラミガキ。内面は多方向ヘラナデ後に疎らなナメヘラミガキ。古墳中期の遺物が混入。	10YR7/4 明黄褐 やや粗い 白・赤細粒少 やや軟質	底全周

第5章 権現山遺跡 SG10 区

SG10 区 SK-226

1 石製模造品 有孔円板	長 幅 厚 重	2.88 2.37 0.30 2.85	両面ともに1方向へ研磨する。おそらく左図の面から穿孔し、初孔径1.55～1.60mm、終孔径1.40～1.55mm。両面ともに孔の周辺が薄く広く剥離している。側面の形削加工は刃部を持つ工具で切削した後、斜位の粗い研磨を行う。形削時の切削および剥離痕を側面にそのまま残す部分も多い。古墳中期の遺物が混入。	5GY4/1 暗オリーブ灰 節理の発達した緻密で軟質な 滑石片岩	中央底上 5cm 完形 1
--------------------	------------------	------------------------------	---	--	---------------------

SG10 区 SK-243

1 土師器 大形壺	高 底	残 1.9 8.8	厚く重い。外底面と外面胴部ナデ後、底外周に粘土を貼り付けて平坦にナデまたはヘラナデし凹底状にする。内面は丁寧なナデで、焼成前の乾燥時に入った亀裂部をヘラ先でナデで補修しようとした痕跡がある。古墳中～後期の遺物が混入。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 黒・透明粗～細粒 やや少、白・赤礫～細粒少 硬質	西部底直上 底全周 10
2・3 須恵器 甕			2と3は同一個体。木目平行の溝を彫った叩き板で外面縦～斜位平行叩き。内面は無文当具の緩くカーブする木目が薄く見える。3は破片の外面上部中央が焼成後に磨滅。古墳中期(?)の遺物が混入。	5B5/1 青灰 やや緻密 白粗～細粒やや多 硬質	北西部底上 3cmの2片 が同一個体 胴部片一部 5、6
4 須恵器 甕			外面は縦位の平行叩き。内面は当具痕を磨り消して無文。SK-264の甕胴部片と同一個体。古墳中期の遺物が混入。	10Y6/1 灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	北東部埋土中 胴部片 北東埋土

SG10 区 SK-253

1 土師器 甕	口 高 最大 復	復 14.8 8.9 15.4	外面は胴部に斜位のヘラナデと一部にヘラケズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ。内面は胴部に横位のヘラケズリとヘラナデ、肩部にヨコヘラミガキ。古墳中期の遺物が混入。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 黒粗粒と白・透明 粗～細粒多、白・赤礫少 やや硬質	口 1/6 周、頸 1/4 周 一括
---------------	----------------	-----------------------	---	---	-----------------------

SG10 区 SK-254

1 須恵器 二重甕	高	残 3.9	体部中に1mm幅の低い突線を1本持ち、その下側に5歯の工具で右から左へ向かって櫛描波状文を回転施文する。体部上半と下半に幅5mm以上の長方形透窓が並ぶ。SI-50・64aとSD-201a出土破片と同一個体の可能性あり。古墳中期の遺物が混入。	10Y4/1 灰 やや緻密 白細粒微量 やや硬質	SK-254 周辺の遺構確認 面 胴部片 SK-254 付近上面
-----------------	---	-------	--	--------------------------------	---

SG10 区 SK-264

1 土師質 小皿	口 高 底	復 6.6 1.6 3.6	調整・切り離し時ともクロク右回転(時計回り)。回転切り後、外底面中央に平行線状の2本の圧痕。糸切りで浅く凹面になった底面中央に着いた薄い粘土を広げて平底にした痕か、乾燥時に載せた台の痕と考えられる。中世土坑SK-92から混入した可能性あり。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 黒細粒やや多、白・ 赤細粒少 軟質	北半部、SI-47中央に同 一個体の小片1点 口 1/6周、底3/4周 SK- 264北半、SI-47Cトシ
2 須恵器 甕	高	残 4.5	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で、浅い平行叩きの後に8歯以上の工具で横位平行線を描くが、明瞭に見えるのは3本程。内面は同心円文当具痕。破面は灰色とにぶい橙色の互層状の色調。古墳時代土坑SK-275に同一個体の破片あり。古墳時代のSD-304bと中～近世のSD-263出土破片ともやや類似する。古墳後期の遺物が混入。	7.5YR5/3 にぶい褐 緻密 白・赤粗～細粒やや多、 灰色・透明粗粒と黒細粒少 硬質	南半部 胴部片1片 南半
3 須恵器 甕	高	残 8.7	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で、外面平行叩き。破片の中部に横方向の浅い段差があり、叩き板の端部を示すかもしれない。内面は横位のナデにより無文。SK-243の甕胴部片と同一個体。古墳中期の遺物が混入。	N7/1 灰白 緻密 白粗～細粒少 硬質	北半部 胴部片1片 北半

SG10 区 SK-272

1 縄文土器 深鉢	高	残 4.1	外面に横位の結節縄文が3段分そろって施文されるので、同じ原体に3箇所以上の結節を付け横位に施文したと見られる。軸線の縄文は破片の右上にわずかに見えるだけでほとんど器面に施文されないで、2段LRの可能性がありが不確実。内面は丁寧なタテナデ。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 白・赤・透明粗～ 細粒と金色雲母細片やや多、 繊維なし やや硬質	一括
-----------------	---	-------	---	--	----

SG10 区 SK-276

1 土師器 杯	口 高 最大 復	復 11.0 3.1 11.3	外面体部は上位を軽くナデで粗積み痕を残し、下位をヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面体部にヨコヘラナデ後ヨコナデ。外面上半と内面に漆仕上げ。古墳後期のSI-47から流入した可能性あり。	10YR4/2 灰黄褐 やや緻密 白細粒多、黒・透 明細粒少 硬質	北部底上 2cm 口 1/6 周 1
---------------	----------------	-----------------------	---	--	--------------------------

SG10 区 SK-297

1 石器 敲石	長 幅 厚	12.5 5.5 3.7	棒状で断面が隅丸三角形形状の自然礫をそのまま利用。両端に敲打痕があり、図下側のほうがよく利用されて剥離痕も見られる。被熱痕や付着物はない。重量299.7g。	2.5Y7/2 灰黄 1～2cm大の捕獲岩が目立つ緻 密で硬質な流紋岩	西部底上 2cm 完形 1
---------------	-------------	--------------------	--	---	---------------------

SG10 区 SK-317

1 土師器 杯	口 高	復 12.2 3.2	厚くてやや調整が雑なので、粗製の小形土器かもしれない。外面は体部にタテナデとナメナデ、口縁部ヨコナデ。内面は横位の強いナデまたはヘラナデによる段差を少し残したままで口縁部にヨコナデ。古墳時代後期または終末期の遺物が混入。	5YR5/8 橙 緻密 白・黒・赤・透明細粒 少 硬質	遺構確認面 口 1/8 周、体 1/6 周 上面
2 椀形鍛冶滓 (極小)	長 幅 厚 重	残 3.2 3.6 2.4 17.3	上下面と上手側側部が生きている極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。下手側の側部2面が破面となっている。左上半部は粘土質の滓主体で一部に被熱した小礫を含んでいる。右側部は下半が突出気味。下面は浅い皿状となる。鍛冶関連遺物構成No.72。	表 明褐色 地 青灰色 磁着度 3 メタル度 なし	破面 2 面

SG10 区 SK-405

1 礫	長 幅 厚 重	22.7 22.2 12.7 8650.0	自然礫の表面全体に広く煤が斑状に付着。ただし、図示した面の裏面には少なく、外周部だけに少し付く程度である。煤付着部に接する周囲は被熱してわずかに桃色気味。図の左上角が1箇所剥離しているのも被熱によるものと考えられる。加工・使用痕は見られない。	2.5Y6/1 黄灰 緻密で硬質な流紋岩	底上 1cm 完形 3
2 礫	長 幅 厚 重	17.0 16.9 6.6 2729.6	扁平で中央部が厚い自然礫で、外周の約半分程はおそらく被熱によって剥離破損。左図の面は全体に煤が厚く付着してタール状にも見える。図上辺の破面にもこの煤が及ぶが、図左辺の破面には煤が全くない。右図の面には煤がごくわずかにしか見えない。	2.5Y5/1 黄灰 緻密で硬質な安山岩	南西部床上 21cm 一部欠 1
3 礫 (台石?)	長 幅 厚	18.3 14.2 6.2	扁平な自然礫で、特に右図の面は平坦面が広い。硬質な石材であるため使用痕などは認められない。加工痕や付着物も見られない。重量2611.4g。	10Y6/2 オリーブ灰 石英の斑晶が目立つ緻密で硬 質な流紋岩	南西部床上 15cm 完形 2

SG10 区 SK-532

1 縄文土器 深鉢	高	2.0	ごく緩やかな波状口縁で、波頂部が推定2箇所の山形状。外面は横方向に器面を削ってから2段LRの縄で横位に縄文を施し、やや深い沈線縦線4本と横線1本を組み合わせた文様を描く。内面口縁直下に横位の凹線。縄文後期の堀之内式で、混入品の可能性がある。	7.5YR5/3 にぶい褐 緻密 透明粗～細粒と白・黒 細粒やや多 硬質	
-----------------	---	-----	--	---	--

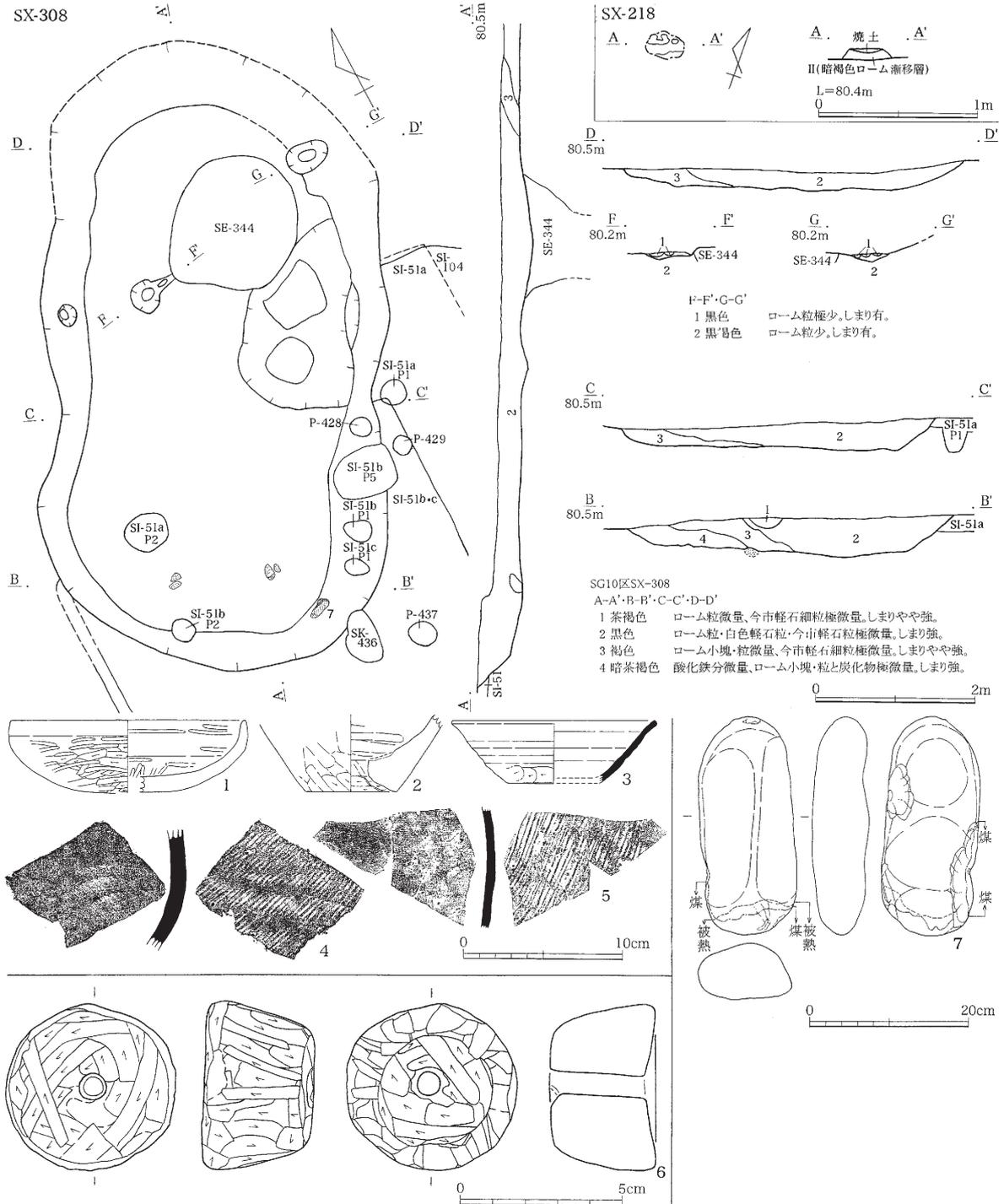
SG10 区 SK-614

1 須恵器 器台	高 脚裾 復	残 3.3 約 33	低い突線2条で区画した上側に、底辺幅約4cmの透窓を外側から切り込んで開けている。外面に暗緑色の自然釉が多い。SI-111等で出土した破片と同一個体。	5Y6/1 灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	南部底上 9cm 脚裾 1/24 周 1
----------------	-----------	---------------	---	----------------------------	----------------------------

第 31 節 時期・性格不明の遺構

SG10 区 SX-218 (第 238 図右上、写真図版 150)

SG10 区南部の 19-17 グリッドにある焼土遺構。重複する遺構はない。古墳時代竪穴建物 SI-28 と SI-40 の間で、北西には古墳時代の円筒形土坑 SK-217 がある。径 17 × 24cm、厚さ 2cm の範囲で遺構確認面に焼土がまとまっている。掘り込みの浅い遺構が耕作・攪乱で消滅し、その底面付近にある焼土が残ったものである。遺物はない。



第 238 図 権現山遺跡 SG10 区 SX-218 遺構 SX-308 遺構・遺物

SG10 区 SX-308 (第 238 図上段)

SG10 区中央部の 19-18 および 20-18 グリッドにある。攪乱の可能性が高い、時期不明の掘り込みである。覆土の締まりが強いので、調査開始当初は大形の竪穴状遺構の可能性も考えた。しかし、底面レベルや覆土層が北側の攪乱（幅約 3m × 長さ約 10m の南北に長い攪乱で、ビニールやプラスチックを含む）へ連続しているため、攪乱と判断した。古墳時代の SI-51・SI-104・SK-436、中世井戸 SE-344、時期不明の P-428 の上部を切る。長楕円形で底面が比較的平らな掘り込みで、東西 4.36 × 南北 7.94m、深さは 20 ~ 30cm 程度で、壁の残りが高い南側では約 50cm。底面に浅いくぼみが複数見られる (F-F' と G-G')。覆土は不自然な土層なので人為的に埋め戻したとも考えられる。黒色土 (2 層) と褐色土 (3 層) の違いが明瞭で、南西部・西部・北西部に分布する褐色土 (3 層) を切って掘り返した後に黒色土 (2 層) で東部が埋没した可能性もある。白色テフラ粒や地山から混入した今市軽石粒を含み、2 層中の白色粒は周辺の古墳時代遺構覆土に由来するのかもしれない。出土遺物は周囲の古墳時代集落から混入した小片 (1・2・4・6) で、重複する SI-51a ~ c や SI-104 から流入したのことが多いと見られる。また、9 世紀頃の須恵器破片もわずかに含む (3・5)。5 は南方へ離れた SK-235 などと同一個体の平安時代須恵器甕。土師質の紡錘車 (6) は古墳時代集落からの混入品と見られる。SG10 区 SI-59 などに石製紡錘車がある。図示以外の土師器合計 271 片・2,829g の内訳は、杯 85 片・411g、高杯 10 片・80g、鉢 23 片・231g、小形壺 6 片・91g、壺甕類 144 片・1,958g、甌 3 片・58g。

第 143 表 権現山遺跡 SG10 区 SX-308 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.6 高 残 4.5 最大 15.0	外面は底部に 1 方向と体部に横位ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ後に疎らなヨコヘラミガキ。体部は中位ヨコヘラミガキ、下位タテヘラミガキ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 灰色円礫と白・赤 粗粒やや多、白・黒・透明細 粒少 やや軟質	口 1/6 周 S-308 6
2 土師器 小形甌	底 復 5.8 最大 残 11.3 孔 推 1.5 ~ 2.0	底部が厚い。外面は体部ヘラナデ後に下端部ナナメヘラケズリ。外底面はヨコヘラケズリ。孔端面はナナメヘラナデ。内面はヨコヘラナデ。古墳中～後期の遺物が混入。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒や やや多、黒・透明細粒少 硬質	底 1/4 周 S-308 一括
3 須恵器 杯	口 復 12.8 高 3.9	回転ヨコナデ時のロクロは右回転 (時計回り)。外面の体部中位に強いロクロ目を意図的に残している。外面の体部下端に手持ちヨコヘラケズリ。外底面の調整技法は不詳。平安時代の三和窯製品が混入。	5Y5/1 灰 やや緻密 白粗～細粒やや多、 透明細粒少 やや硬質	B-B' と C-C' の間で A-A' より西 口 1/6 周 S-308 西中南
4 須恵器 甕		外面は斜位の平行叩き後に間隔を空けたヨコナデ。内面は木製の無文当具痕が少しだけ見られる。古墳時代 (?) の遺物が混入。	N5/0 灰 やや粗い 白粗～細粒多、白 礫と透明粗粒少 硬質	胴上半一部 S-308 1
5 須恵器 甕		外面は木目平行の溝を彫った叩き板で斜位の平行叩き。内面は無文当具痕の後に軽いタテナデ。SK-235 他と同一個体の平安時代遺物が混入。 [注記] S-308 西北、SD-226 2	5Y3/1 オリーブ黒 緻密 白粗粒と赤・黒色湧出 粒やや多 硬質	実在しない溝「SD-226」 と注記のある 1 片と接合 胴部片 注記は左欄
6 土師質 紡錘車	上面 5.2 ~ 5.3 下面 3.4 ~ 3.6 厚 3.5	円錐台形の粘土塊から丸棒を引き抜いて孔を作り、全周をヘラケズリ調整した後焼成している。孔径は上面側で 7.2 ~ 7.6mm、下面側で 6.7 ~ 7.2mm。重さ 82.2g。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒細粒多、赤 粗粒と透明細粒少 硬質	西半部の南部 完形 S-308 西南
7 礫	長 27.4 幅 11.6 厚 7.2 重 3513.4	断面形・平面形ともに楕円形の自然礫。2 箇所に大きな剥離面がある。この剥離以前に図の手前側が被熱して、煤も多く見られる。また、この剥離面にも煤が明瞭に付着している。	2.5Y5/2 暗灰黄 緻密で硬質な流紋岩	底上 4cm 完形 S-308 5

報告書抄録

ふりがな	とうや・なかじまちくいせきぐん 14 ごんげんやまいせきなんぶ・いそおかいせき
書名	東谷・中島地区遺跡群 14 権現山遺跡南部 (SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区)・磯岡遺跡 (SG9 区)
副書名	都市再生機構による東谷・中島土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	14
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第360集
編著者名	内山敏行 (編)、後藤信祐・塚原孝一・谷中隆・内山敏行・平井昭司・穴澤義功
編集機関	財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2013年3月28日 (平成25年3月28日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごんげんやま 権現山	とちぎけん うつのみやし どうやまち 栃木県 宇都宮市 東谷町 あざしもはら・あざすぎむら 字下原・字杉村、 すなまたあざはらだ 砂田町字原田、 かわうちぐん かみのかわまち 河内郡 上三川町 おおあざいそおかあざにしや 大字磯岡字西谷	09201	455	36度 28分 55秒 (SG5区) (世界測地系)	139度 54分 20秒 (SG5区) (世界測地系)	SG2区 19951204 ~ 19960318 SG5区 19980206 ~ 19990326 SG9区 19991214 ~ 20000324 SG10区 19990423 ~ 20000324 SG15区 20010208 ~ 20010323	7,000 7,000 4,800 13,400 900	東谷・中島 土地地区画整 理事業に伴 う事前調査
いそおか 磯岡	とちぎけん かかわうちぐん かみのかわまち 栃木県 河内郡 上三川町 おおあざいそおかあざにしや 大字磯岡字西谷	09301	4360 (県番号)	36度 28分 49秒 (SG9区) (世界測地系)	139度 54分 26秒 (SG9区) (世界測地系)	SG9区 19991224 ~ 20000324	600	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
権現山 (SG2・SG5・ SG9・SG10・ SG15区)	集落	縄文	竪穴建物1 (晩期)、土坑6 (早・前 ~中期)	縄文土器、スタンブ形石器、礫器、石鏃、磨製石 斧、スクレイパー、磨石、石皿、剥片、石核	早・前~中・後・晩期土器
		弥生	土坑1 (中期)	弥生土器・打製土掘具 (石鏃)	中期後半
	居館 集落	古墳	竪穴建物123 (鍛冶遺構1を含む)、 円筒形土坑12、土坑117、井戸1、 柱穴状土坑17、溝20、遺物集中地点 1、性格不明遺構1	土師器、須恵器、陶質土器、焼粘土塊、石製品 (模 造品・管玉・白玉・霰玉・紡錘車・粘板岩剥片)、 土玉 (丸玉・勾玉・霰玉)、耳環、鎌・鏃・刀子・ キサゲ、石皿、編物石、砥石、台石、金床石、敲石、 磨石、羽口、鉄滓、炉壁、カマド構築材	居館の周囲の集落
		中世	外郭溝3、柵列1 竪穴建物1、道路側溝2、土坑2 井戸6、土坑2、柱穴状土坑82	土師器、刀子 土師器、須恵器 土師質土器、青磁、陶器、常滑産陶器、銅銭、曲 物桶、滑石製品	方形柵列の南と北に区画溝 道路遺構は推定東山道 13~14世紀中心
		中~近世	土坑1、溝4	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器	
		近世	土坑1、溝4	中~近世土器、陶器、磁器、寛永通寶、煙管	
磯岡 (SG9区)	集落	古墳	竪穴建物2	土師器、須恵器	
		奈良		須恵器	
		時期不明	溝2、土坑5、焼土集中地点1		

要約	<p>田川の東岸で、開析谷をはさんだ西側に権現山遺跡、東側に磯岡遺跡が存在。権現山遺跡の縄文時代土坑6基は早期条痕文・撚糸文・前期末~中期中・阿玉台III~加曾利E式を出土するものを含む。大洞C2式期の竪穴建物1棟。弥生中期後半の土坑1基。古墳前期は少量の土器が低地部で出土。古墳中期後葉の居館は東辺長47.1mの方形柵列の東端部を調査し、南側と北側に区画溝を伴う。古墳中期~終末期の集落は、中期の鍛冶遺構2棟を含む207棟を調査し、今回は南半部の123棟 (鍛冶遺構1棟を含む) や中期後葉の低地土坑群、中期末葉の円筒形土坑、中~後期の溝などを報告した。加耶陶質土器、初期須恵器、二重甕等が出土。古代の竪穴建物は単独の1棟だけがあり、また推定東山道側溝の一部を調査。中世は13~14世紀頃の井戸6、土坑2、柱穴状土坑群があり、時期不明の井戸も中世の可能性を持つ。近世は方形区画溝がある。</p> <p>磯岡遺跡は、古墳時代中期竪穴2棟 (1棟を建て替えたもの) を調査し、古墳中期後葉~終末期の集落 (竪穴建物計160棟) の西端部にあたる。</p>
----	--

東谷・中島地区遺跡群埋蔵文化財調査報告書一覧

- | | | |
|---|-------------------|---------------|
| 1 「磯岡遺跡（I区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第229集 | 1999（平成11）年3月 |
| 2 「砂田遺跡（1区・2区・3区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第265集 | 2002（平成14）年3月 |
| 3 「推定東山道関連地区（権現山遺跡SG1区 杉村遺跡SG1区 磯岡北遺跡SG3区・SG4区・SG6区・SG7区・SG8区・SG11区・SG13区・SG14区 西刑部西原遺跡2区・6区・7区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第274集 | 2003（平成15）年3月 |
| 4 「琴平塚古墳群（西刑部西原遺跡1・2・6区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第283集 | 2004（平成16）年3月 |
| 5 「立野遺跡」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第290集 | 2005（平成17）年3月 |
| 6 「磯岡遺跡（2～7区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第292集 | 2005（平成17）年6月 |
| 7 「磯岡北古墳群（磯岡北遺跡SG12区・SG16～18区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第299集 | 2006（平成18）年9月 |
| 8 「砂田遺跡（4～6・18・19・23・24区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第305集 | 2007（平成19）年3月 |
| 9 「中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡（1～8区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第311集 | 2008（平成20）年3月 |
| 10 「権現山遺跡北部（2～4区・SG1区）・杉村遺跡（GN1区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第331集 | 2010（平成22）年3月 |
| 11 「砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第337集 | 2011（平成23）年3月 |
| 12 「西刑部西原遺跡（旧石器・縄文・弥生時代編）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第354集 | 2012（平成24）年3月 |
| 13 「砂田遺跡（10区・12区・13区・16区・27区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第355集 | 2012（平成24）年3月 |
| 14 「権現山遺跡南部（SG2・SG5・SG9・SG10・SG15区）・磯岡遺跡（SG9区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第360集 | 2013（平成25）年3月 |
| 15 「砂田遺跡（7・8・9・11・14・15・17・20～22・25・26・28～42区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第361集 | 2013（平成25）年3月 |
| 16 「西刑部西原遺跡（古墳・奈良・平安時代編）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第362集 | 2013（平成25）年3月 |

栃木県埋蔵文化財調査報告第360集

東谷・中島地区遺跡群14

権現山遺跡南部（SG2・SG5・SG9・SG10・SG15区）・
磯岡遺跡（SG9区）（第1分冊）

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市埜田1-1-20

TEL 028(623)3425

財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町1-8

TEL 028(643)1011

平成25年3月28日発行

編集 財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫474番地

TEL 0285(44)8441

印刷 株式会社 泰明グラフィクス
